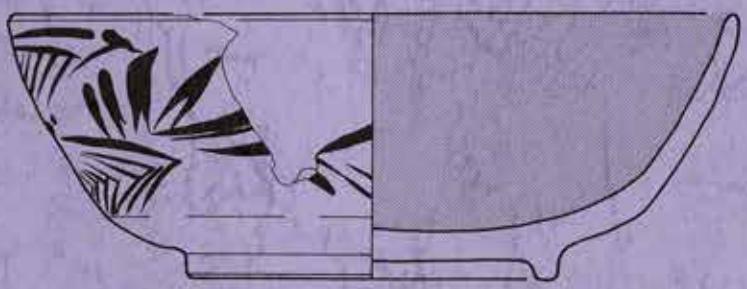
仙台市文化財調査報告書第182集

仙台市
中田南遺跡

—古代・中世の集落跡の調査—



1994年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第182集

仙台市
中田南遺跡

１９９４年３月

仙台市教育委員会

遺跡の遠景
（西から）

調査区南半部
（北から）

第５号竪穴住居跡出土土師器
（仙台市博物館撮影）

第24号竪穴住居跡出土土師器
（仙台市博物館撮影）

第８号井戸状遺構出土漆器（第131図６）

同左（第131図４）

同上（第131図２）

第１号堀跡出土漆器（第171図８）

各遺構出土灰釉陶器

各遺構出土磁器

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しましては、日頃から多大なご協力をいただき、誠に感謝にたえません。

本市の南東部に位置する中田地区は、以前は国道沿いに町並みがみられたものの、その周辺には豊かな田園風景が広がり、おもに近郊農業地帯として推移してまいりました。ところが、近年では市街化が急速に進み、仙台市のベッドタウンとして生まれ変わりつつあります。

中田南遺跡もこうした市街化の流れの中で計画された宅地造成に伴って、調査が実施されたわけです。調査では、予想を越える大きな成果をあげることができました。なかでも特記すべき成果の１つが奈良時代初めの大規模な集落跡の発見です。しかもこの集落跡は一般の集落とは異なり、当時の社会の中で政治的な役割を担った集落であることが明らかとなりました。このほかに中世の屋敷跡の発見も特筆され、今後の中世村落の実態の解明に大きな資料を提供したといえるでしょう。

本書はこのような調査成果を収録したものであります。その内容が今後の当地域の歴史を考える上で役立つところがあれば幸いです。

本市には重要な文化財が数多くあります。これらの文化遺産を市民の宝として永く後世に継承していくことは、私たちの重要な責務であります。今後とも多くの皆様のご理解と絶大なるご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、発掘調査や報告書の作成にあたり、多大のご指導・ご協力をいただきました多くの方々に対し、衷心よりお礼を申し上げる次第です。

1994年３月

仙台市教育委員会

教育長　東海林　恒英

例　　言

1．本書は宅地造成に伴う宮城県仙台市中田南遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

2．報告書の作成および編集は太田昭夫が行った。

3．第VI章の自然科学的分析については下記の方々に執筆をお願いした。記して感謝の意を表わす次第である。

1．中田南遺跡の地形学的背景……東北大学理学部　松本秀明

2．中田南遺跡の花粉分析……東北生活文化大学　守田益宗

3．仙台市中田南遺跡出土材の樹種……木工舎「ゆい」　高橋利彦

4．中田南遺跡出土の人骨と脊椎動物遺存体……

獨協医科大学第一解剖学教室　茂原信生・芹澤雅夫

5．中田南遺跡遺物資料分析結果……

国立歴史民俗博物館　田口　勇・斎藤　努

東京工業大学　高塚秀治

6．仙台市中田南遺跡より産した昆虫群集について……

三重大学生物資源学部昆虫学研究室　森　勇一

4．発掘調査および資料の整理に際し、次の方々から多くの指導・助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（順不同・敬称略）

入間田宣夫・氏家重男・高橋利彦・森　勇一・守田益宗・田口　勇・高塚秀治・斎藤　務
茂原信生・芹澤雅夫・松本秀明・石田明夫・井上喜久男・丹羽　茂・手塚　均・鈴木拓也
飯村　均・前川　要・新野一浩・村田晃一・大坪聖子・宮田　真・小林康幸・大河内　勉
継　実・汐見一夫・河野眞知郎・斉木秀雄・長谷川　厚・安田幸市・岩本正二・深澤芳樹
佐川正敏・臼杵　勲・巽　淳一郎・森本　徹・蟹澤聰史・西口寿生・工楽善通・穴沢義功
下津間康夫・寺島文隆・進藤秋輝・高野芳宏・斎藤　弘・高橋国弘・守　健一郎
釜石文化財処理センター・東北歴史資料館

5．石器・石製品の材質の鑑定は東北大学理学部の蟹澤聰史氏にお願いした。

6．巻頭カラーに使用した土器の集合写真は仙台市博物館で撮影したものである。

7．本遺跡の調査成果については、すでに現地説明会資料や年報14などにその内容の一部が紹介されているが、本書の記載内容がそれらに優先するものである。

8．調査・整理に関する諸記録および出土遺物は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．本報告書の土色については「新版標準土色帳」（小川・竹原：1973）を使用した。

2．建設省国土地理院発行の地形図・空中写真を使用したものは、図中に示した。

3．本文中使用の「灰白色火山灰」（庄子・山田：1982）の降下年代は、現在、10世紀前半頃と考えられている（白鳥：1980）。

4．図中および本文中使用の方位の北（N）は、すべて真北である。なお、グリッドの南北ラインは真北に対して15.5°東に偏している。

5．本書の遺構については検出順に番号を付し、次の略号をも必要に応じて使用した。
竪穴住居跡－ＳＩ、掘立柱建物跡－ＳＢ、ピット群－Ｇ、竪穴遺構－竪、井戸跡－ＳＥ、火葬墓－火、鍛冶遺構－鍛、土坑－ＳＫ、堀跡－堀、溝跡－ＳＤ、溝状遺構－溝状、小溝状遺構群－小溝、円形周溝－円、性格不明の遺構－ＳＸ

6．本書の出土遺物の登録に際しては、次の略号を使用した。
縄文土器－縄、弥生土器－弥、地文のみの縄文・弥生土器－地、土師器－Ｃ、須恵器－Ｅ、赤焼土器－赤、灰釉陶器－灰、陶器－Ｉ、磁器－Ｊ、石器・石製品－石、金属製品－Ｎ、土製品－土、とりベート、木製品－Ｌ

7．調査区および遺構のセクション図に関しては、原則として平面図の上が北になるようにしたために、セクション図を反転して示したものもある。

8．竪穴住居跡の床面積は、プラニメーター（タマヤデジタルプラニメーター）を用い、３回の計測の平均値を示した。

9．遺物観察表内の計測値では、土器に関しては残存範囲が1／4未満の場合についてその復元値をカッコで示した。そして復元値の不明な場合は－を付した。その他の遺物のカッコ内の値は残存値である。

10．遺構および遺物の実測図中に表現したスクリーントーンは以下の内容を示している。この他のスクリーントーンについては図中に内容を示した。

※表紙の図はSE 8出土漆器（第131図２）

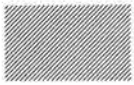
土師器の黒色処理

セクション図の酸化鉄斑紋帯
鍛冶炉・火葬墓の火熱の及ぶ範囲
石製品の磨面

とりべ・フイゴの羽口の溶解物
竪穴住居跡の焼け面

竪穴住居跡の炭化材
木製品の焦痕

漆器の茶褐色漆の文様



基本層のⅣ層

鹿角製品・曲物の黒色漆
鍛冶炉・火葬墓の焼け面

砂礫層

本 文 目 次

口絵カラー
序　文
例　言
凡　例
目　次

I　はじめに……1
1．調査に至る経過……1
2．調査概要……1

II　遺跡の位置と環境……3
1．遺跡の位置と地理的環境……3
2．遺跡の歴史的環境……8

III　調査の方法と概要……15
1．調査の方法……15
2．調査の概要……15
3．整理の方法……20

IV　基本層序……32
1．IV層上面までの基本層序……32
2．下層の層序……33

V　検出された遺構と出土遺物……37
1．竪穴住居跡……37
2．掘立柱建物跡……106
3．ピット群……138
4．竪穴遺構……154
5．井戸跡……159

6．火葬墓 ……177
7．鍛冶遺構 ……179
8．土　坑 ……179
9．堀　跡 ……233
10．溝　跡 ……250
11．溝状遺構 ……327
12．小溝状遺構群 ……346
13．円形周溝 ……355
14．性格不明の遺構 ……356
15．埋葬馬骨 ……362
16．河川跡 ……365
17．試掘トレンチと出土遺物 ……371
18．III層出土遺物 ……373
19．Ⅰ・II層出土遺物と表採遺物 ……373

VI　自然科学的分析 ……394
1．中田南遺跡の地形学的背景 ……394
2．中田南遺跡の花粉分析 ……402
3．仙台市中田南遺跡出土材の樹種 ……406
4．中田南遺跡出土の人骨と脊椎動物遺存体 ……423
5．中田南遺跡遺物資料分析結果 ……432
6．仙台市中田南遺跡より産した昆虫群集について ……438

VII　遺物の検討 ……445

VIII　遺構の特徴と年代 ……494

IX　まとめ－遺跡の構成 ……504

引用・参考文献 ……517
写真図版 ……521

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経過

中田南遺跡は仙台市南東部の沖積平野にあり、昭和48年に名取川水系の分布調査によって初めて発見され（宮教大考古研：1975)、奈良・平安時代の集落跡であろうと考えられてきた遺跡である。そして、長い間、3 haにも及ぶ遺跡は主に畑地・水田として利用され、現状がほとんど変わることなく今日までその姿をとどめてきた。しかしながら、近年の急速な宅地開発の波は中田地区の各地に押しよせてきており、特に交通の便のよい遺跡周辺ではその傾向は一層激しさを増しているのが現状である。こうした中で、中田南遺跡のほぼ全域を対象にした宅地造成計画が福仙興業株式会社によって立てられ、平成2年4月にその発掘届が提出された。仙台市教育委員会文化財課では遺跡の取扱いについて福仙興業と協議を重ねたが、道路にかかる区域については試掘調査を経て、記録保存のための事前調査が必要と判断した。そして、調査を平成4年4月から開始した。

2．調査概要

（1）遺　跡　名：中田南（なかだみなみ）遺跡（宮城県遺跡登録番号01272，仙台市文化財登録番号C-212）

（2）所　在　地：仙台市太白区中田七丁目8～10，17～23

（3）調査主体：仙台市教育委員会

（4）調査担当：仙台市教育委員会文化財課調査係

担当職員：太田昭夫・熊谷裕行・佐藤　淳

（5）調査期間：野外調査　平成4年4月14日～平成5年1月19日

室内整理　平成5年1月20日～平成5年3月26日

平成5年4月9日～平成6年3月25日

（6）調査対象面積：　29,467㎡

（7）調査面積：約 6,900㎡

Ⅰ区：726㎡　　Ⅱ区：834㎡　　Ⅲ区：592㎡　　Ⅳ区：504㎡

Ⅴ区：544㎡　　Ⅵ区：868㎡　　Ⅶ区：1222㎡　　Ⅷ区：1500㎡

Ⅸ区：105㎡

遺構確認の試掘トレンチ：約900㎡

（8）発掘調査参加者

〈野外整理〉

青木吉次	浅見禮子	阿部あき子	阿部みのる	阿部美代寿	砂金政男	石垣絹子
伊勢みつ	伊藤貞子	入間川きみ	遠藤いな子	太田兼也	大友節子	大友フミ子
小沼佳代子	小沼ちえ子	小野辰夫	小畑和子	加嶋みえ子	柏倉セツ子	加藤けい子
金沢沙知子	叶　誠	工藤きく子	熊沢とも	小池房子	昆野コトジ	桜井幸子
笹川光夫	佐々木直子	佐藤瑞男	佐藤よし江	佐野たみえ	沢木　茂	須賀栄子
菅井きみ子	菅井清子	菅井美枝子	鈴木いし	鈴木つや子	関根清蔵	高橋たづよ
高橋ヨシ子	竹森光子	田中さと子	丹治忠作	千田あや子	土田幸子	寺崎光子
冨永美輪子	早坂みつえ	福山幸子	洞口秋子	本郷　正	牧　かね子	松本和美
三浦つよの	村井二郎松	森　金三	森　ミヨノ	山田千代子	横田きくよ	渡辺節子

〈室内整理〉

平成４年度：	五十嵐幸子	植野幸子	太田君子	大槻明美	小沼ちえ子	斎藤由美子
	佐竹さく子	佐藤とき子	菅井清子	沼田綾子	森　みほ子	
平成５年度：	五十嵐幸子	大槻京子	大山由紀子	小佐野章子	小山つるよ	西條裕子
	佐々木瑞枝	菅井清子	菅井民子	森　みほ子	米倉節子	

発掘調査を担ったスタッフ（1993年１月18日ＰＭ3：00）

II．遺跡の位置と環境

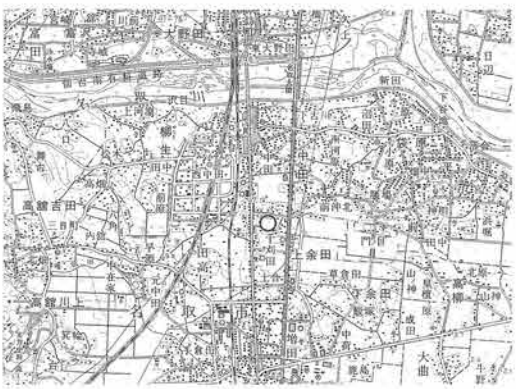
1．遺跡の位置と地理的環境

遺跡の位置：中田南遺跡は宮城県仙台市仙台市太白区中田七丁目に所在する。そこは仙台市の南東部にあり、その中でも最南端に位置し、遺跡のすぐ南には名取市が接している。県庁や仙台市役所のある中心部からは南に約９㎞の地点であり、国道四号線が遺跡内を横断している。今回の調査対象箇所は遺跡の東半部にあたり、中田七丁目８～10、17～23番地内にある。

地形の概要：中田南遺跡の位置する仙台市の南東部周辺の地形を概観すると、西から大きく丘

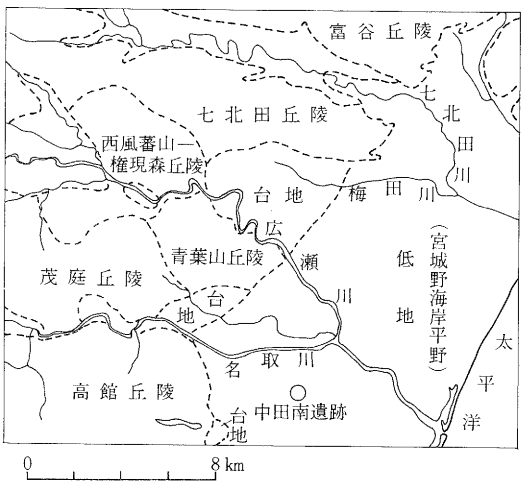
第１図　仙台市の位置

第２図　中田南遺跡の位置（１）



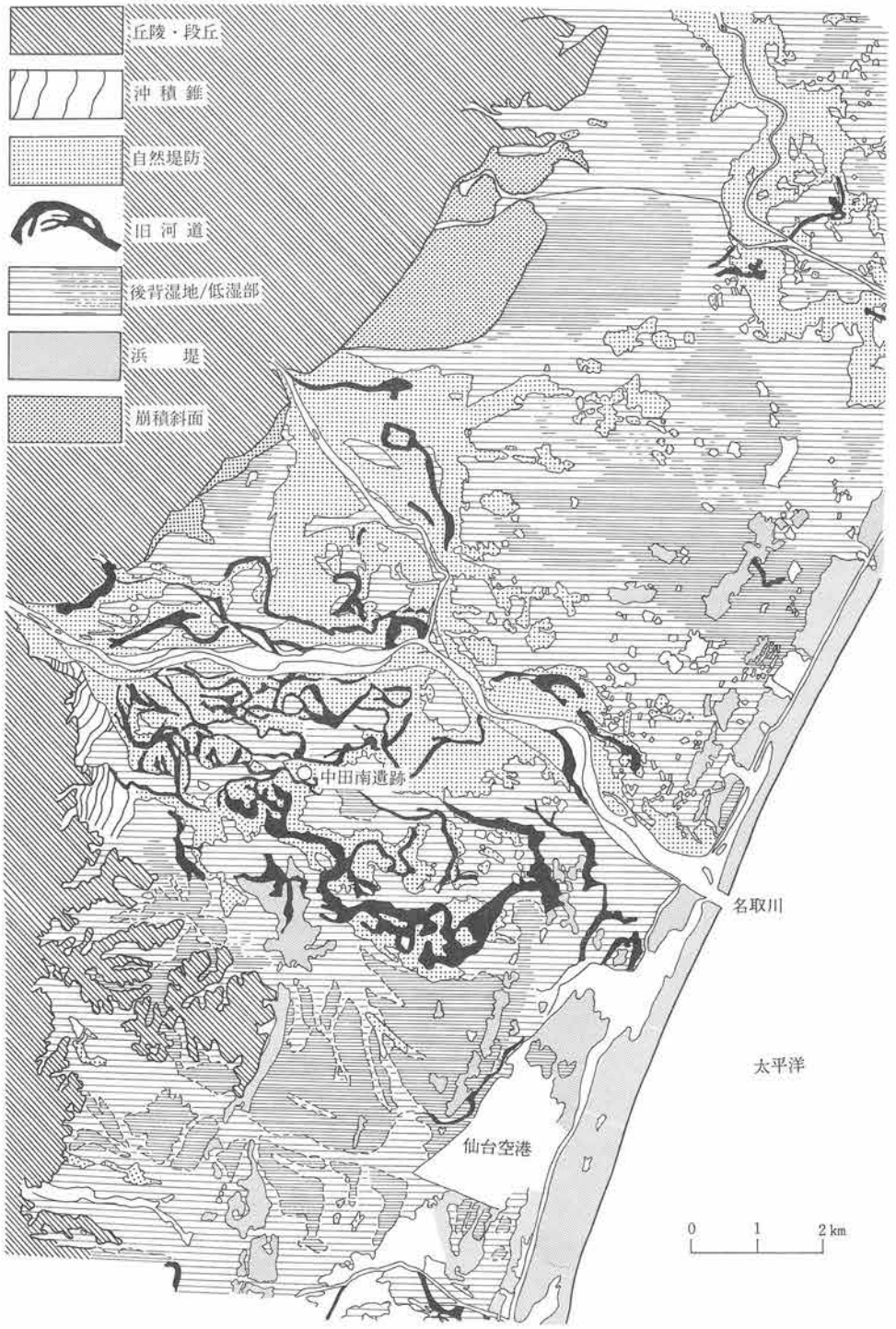
第３図　中田南遺跡の位置（２）（国土地理院１/50,000「仙台」を複製・縮小）

陵・台地、および低地に三分される（地質調査所：1986）。そして、これらの中を名取川、広瀬川などが南東方向に流下し、仙台湾に注いでいる（第4図）。丘陵は奥羽山脈から東方に連なる、標高100～500m前後の陸前丘陵と総称されている丘陵群の一部であり、青葉山丘陵・茂庭丘陵、高館丘陵などと称されている。その中の高館丘陵は名取川以南の地域を南北に続いており、起伏が比較的大きく、山地的な地形をなしている。台地は河川に沿う河岸段丘の分布域である。名取川流域では河川沿いと谷口の北岸一帯に段丘の発達がみられ、名取台地とも呼称されている（経済企画庁：1967）。また、前述の高館丘陵の東縁辺でもいくつかの小丘陵状の段丘の発達がみられる。これらは東方の低地に向かい細長く突き出している。低地は主に名取川・広瀬川などの下流域に広く分布しており、宮城野海岸平野と呼ばれている。標高は20m未満で、自然堤防をはじめ、旧河道・後背湿地などが複雑に分布し、また、海岸線付近では浜堤や砂浜海岸などが分布している。



第4図　仙台地域周辺の地形区分
（地質調査所：1986を加筆・修正）

地形の中でも低地の海岸平野についてはすでに松本秀明氏等によって詳細な地形分類図が作成されており、それを第5図に示した。ここでは中田南遺跡を含む名取川下流域でも南岸部を中心に微地形をながめてみたい。海岸平野は大きく比高が1 m前後で連続して分布する微高地と、それらに囲まれた後背湿地から成っている。前者の微高地は、自然堤防または浜堤列であり、主に砂質の堆積物から構成されている。そのため、周辺の土地に比較して排水条件がよく、古くから集落が立地したり、畑地として利用されてきた。それに対し、後者は主にシルト～粘土の堆積物からなり、排水が比較的悪く、古くから水田として利用されてきた。微高地の中でも自然堤防は名取川下流跡でも上流側の河川沿いに顕著に発達している。そして、その中には旧河道や後背湿地が複雑に入り組んでおり、度重なる河道のうつりかわりをうかがわせている。特に中田南遺跡周辺ではより南側を流下する増田川流域も含めて、至る所に旧河道が網ノ目状に確認される。こうした旧河道には確認される長さや幅など、規模に大小がみられ、規模の大きい流路はかつての本流で、規模の小さい流路はその支流、あるいは一時的な流路と推定される。このような名取川流域の自然堤防の顕著な発達については、安田喜憲氏により流域面積に比して起伏量が大きいこと、地質的に土砂礫を供給しやすい条件を備えていたことなどの要因が示されている（安田：1978）。



第5図　名取川下流域の地形分類図　松本(1981)を編集

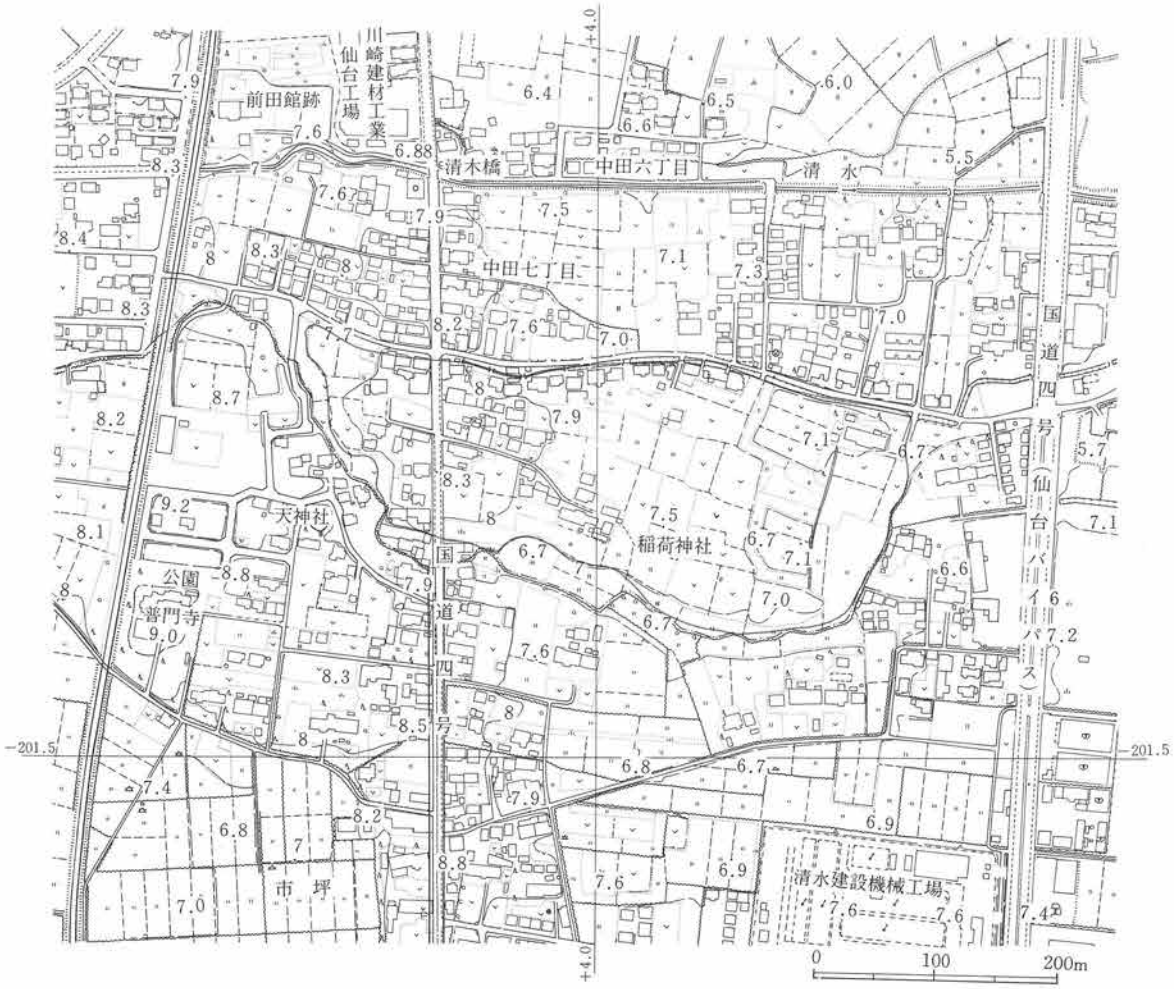
浜堤列は過去の海岸線の位置を示す地形といわれており、この付近では現海岸線に平行して大きく３列の浜堤が認められている。最奥の第Ⅰ浜堤列は現海岸線から約５kmの名取市の増田市街地からさらに南の館腰地区へと連なっており、現在の国道旧四号線沿いに分布がみられる。第Ⅱ浜堤列は現海岸線から約２kmの名取市下増田の杉ヶ袋地区などにその分布がみられ、また、第Ⅲ浜堤列は現在の海岸線に沿って分布している。しかしながら、浜堤列の中でもⅠとⅡについては自然堤防の発達する名取川や増田川の河道付近では認められない。これは早くから名取川流域の陸地化が進んだことを示しているのだろう。

中田南遺跡はこうした海岸平野と呼ばれる低地にあり、名取川下流域の南岸部に形成された自然堤防上に立地している。遺跡からは名取川の現河床まで約２km、高館丘陵の東麓縁辺まで約3.5km、現海岸線まで約6.5kmの距離である。

中田南遺跡の地形環境：前述のように中田南遺跡は名取川下流域の自然堤防上に立地している。中でも遺跡周辺は旧河道や自然堤防が濃密に分布しており、名取川を主とした河川の堆積作用が極めて大きかった地域といえる。遺跡の立地する自然堤防は東西が約800m、南北が約250ｍの規模をもち、東西に長い三角形を呈しており、さらにすぼまりながら東方に続く。第５図をみると、この自然堤防は西から曲流する２条の旧河道によって南と北が画されている。特に、遺跡の南側を走行する旧河道は現状でも幅20m程の帯状の凹地として観察される。そしてその旧河道を西側の上流にたどると名取川の谷口方向に続きそうである。この旧河道が名取川本流かあるいは派川や一時的な流路かは明らかではないが、規模からすると後者の可能性が強い。なお、この旧河道上には、俗に「境堀」と呼ばれている水路が走っており、この付近ではこの水路の中心線が現在、仙台市と名取市との市境となっている。

中田南遺跡はこの自然堤防の南半部を占めており、その面積は約76,000㎡にも及ぶ[註]。標高は西側で約８ｍ、東側で約７ｍあり、わずかに東方に高さを減じている。周囲の旧河道や後背湿地との比高差は約１ｍである。遺跡の西半部では国道四号線が南北に横断しており、その多くがすでに宅地となっている。それに比較して、今回の調査対象箇所である東半部は以前から水田・畑地・芹田など農地として利用され、その一角には稲荷神社が祀られており、周囲の喧噪に囲まれながら、静かな田園風景が残されている。調査前にはその畑地を中心に土器の散布が各所でみられ、遺構が広く存在することが予想された。また、一段低い芹田が畑地を方形に取り囲む状況がいくつか観察され、屋敷跡などの遺構の存在も推測されていた。特に後者の状況は遺跡の南側の名取市上余田地区内でもいくつか確認されている。

註：中田南遺跡の範囲は従来までは今回の対象箇所である東半部のみであったが、今回の調査の成果と国道四号線の東側沿いで工事中に遺物が発見されたこと、その西側でも踏査の結果、遺物の散布がみられたことなどにより、遺跡が西側に大きく広がることが判明した。そして、早急に今後の開発に対応するため、平成４年12月に遺跡の範囲を拡大することを決めた。



第６図　中田南遺跡の範囲（仙台都市計画図１/2,500をトレース・縮小）

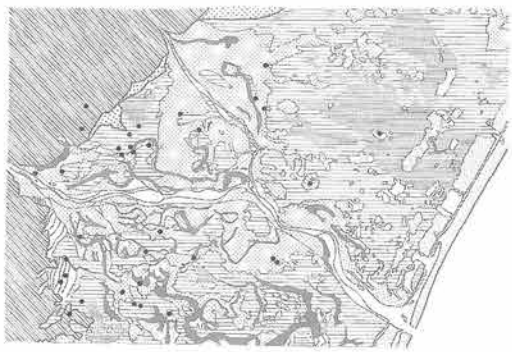
2．遺跡の歴史的環境

中田南遺跡の位置する名取川下流域は宮城県内でも最も遺跡の多いところとして知られており、これまでの調査により一帯には古くから人類の生活が営まれてきたことが明らかとなっている。ここではその下流域でも南岸部を中心として、地形環境の形成過程を絡ませながら歴史的環境を概観してみたい。

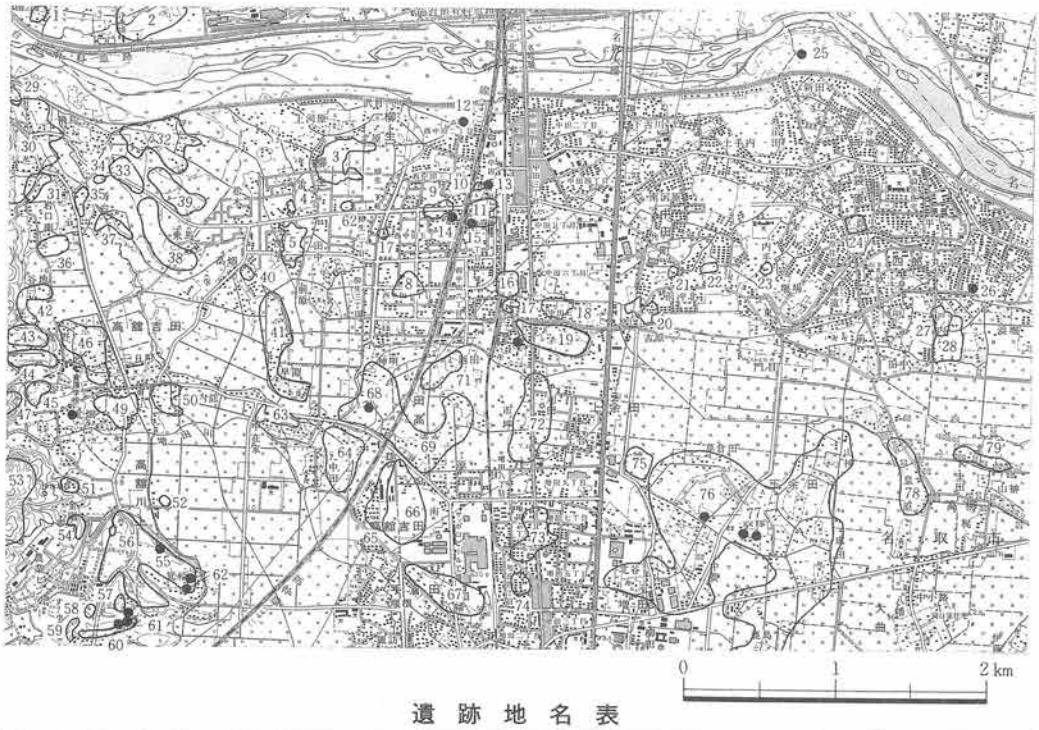
旧石器時代：名取川下流域の旧石器時代の遺跡としては山田上ノ台遺跡・青葉山遺跡・富沢遺跡などが知られている。これらはいずれも北岸部に位置しており、主に台地上に立地しているが、最近では富沢遺跡のように低地に立地する遺跡も知られるようになってきた。山田上ノ台遺跡・青葉山遺跡は主に前期旧石器時代の遺跡としてよく知られており、また、富沢遺跡は今から約２万年前の人類の生活跡とともに、当時の環境を示すさまざまな資料が発見されたことで注目を浴びた遺跡である。これに対し、南岸部では高館丘陵東縁の台地上に立地する西野田遺跡が知られているのみである。ここでは後期旧石器時代のナイフ形石器などが発見されており、台地を中心に人類の活動の痕跡が確認される。今後、南岸部でもさらにこの時代の遺跡の増加が期待できるだろう。

縄文時代：名取川下流域の縄文時代の遺跡の分布を示したのが第７図である。縄文時代になると名取川下流域では、名取川の特性により海岸平野が周辺の地域よりも早く形成されたと考えられている（松本：1981•1984）。こうした地形環境の変化が縄文時代の遺跡の分布のあり方にも反映されており、丘陵・台地だけでなく、低地でも居住可能な自然堤防を中心に遺跡分布の広がりが認められる。こうした現象は北岸部でより顕著であり、特に後期以降になると、現海岸線から約４㎞の自然堤防上に立地する今泉遺跡まで進出している。これに対し南岸部では低地に立地する遺跡は極めて少なく、縄文時代の遺跡の大半が高館丘陵東縁の台地上に立地している。これは、金剛寺貝塚のように淡鹹両水産の貝で構成される貝塚が存在する（小井川：1980）ことなどからも、北岸部に比較して沖積化が遅れていたことを示すものといえよう。南岸部の縄文時代の遺跡としては今熊野遺跡がよく知られている。ここでは前期の竪穴住居跡が71件も

第７図　縄文時代の遺跡分布



第８図　弥生時代の遺跡分布



遺跡地名表

№	遺跡名	立地	時代
1	富田南西	自然堤防	奈良～平安
2	六本松	自然堤防	奈良～平安
3	松本	自然堤防	奈良～平安・中世・近世
4	雷	自然堤防	平安
5	関場	自然堤防	古墳・奈良～平安
6	雷東	自然堤防	平安
7	谷地田	自然堤防	古墳・奈良～平安
8	栗	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
9	安久	自然堤防	奈良・平安
10	中田神社裏	自然堤防	古墳・平安
11	安久東	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
12	上古川	自然堤防	近世以降
13	伊豆野権現古墳	自然堤防	古墳
14	安久源防古墳	自然堤防	古墳
15	安久東古墳	自然堤防	古墳
16	前田館跡	自然堤防・後背湿地	中世
17	壇腰	自然堤防	奈良～平安
18	中田北	自然堤防	奈良～平安
19	中田南	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良～平安・中世
20	後河原	自然堤防	弥生・平安・中世・近世
21	前沖中	自然堤防	古墳・奈良～平安
22	前沖北	自然堤防	古墳・奈良～平安
23	内手	自然堤防	奈良～平安
24	中田畑中	自然堤防	古墳・奈良～平安
25	大塚山古墳	自然堤防	古墳
26	城丸古墳	自然堤防	古墳
27	戸ノ内Ⅰ	自然堤防	弥生・古墳・奈良～平安・中世
28	戸ノ内Ⅱ	自然堤防	中世
29	岩口上	段丘	古墳・奈良～平安
30	熊野新宮社宿坊跡	沖積錐	中世
31	岩口下	扇状地	古墳・奈良～平安
32	八ツ口	自然堤防	奈良～平安・中世
33	舞台上	自然堤防	奈良～平安
34	上手下	自然堤防	奈良～平安
35	岩口中	扇状地	古墳・奈良～平安
36	岩口南	扇状地	古墳・奈良～平安
37	舞台中	自然堤防	奈良～平安
38	高畑	自然堤防	弥生・古墳・奈良～平安
39	乗馬	自然堤防	奈良～平安
40	窪田	自然堤防	奈良末～平安
41	北宮神明	自然堤防	奈良～平安
42	鹿野	丘陵端	縄文
43	那智神社宿坊跡	丘陵	中世
44	東真坂	丘陵	縄文(中期)・奈良～平安
45	真坂	沖積錐	縄文(中期・後期)・弥生(中期)・古墳・奈良～平安
46	鹿野東	沖積錐	縄文・弥生・古墳・奈良～平安
47	川上大館跡	丘陵	中世
48	西北畑古墳	沖積錐	古墳(後期)
49	川上	沖積錐	縄文(後期)・弥生(中期)・奈良・平安・中世
50	内館	自然堤防	奈良～平安
51	来光開	丘陵	縄文(前期)・奈良～平安
52	八反田	後背湿地	弥生
53	桑島館跡	丘陵	中世
54	金剛寺貝塚	丘陵	縄文(前期・後期・晩期)
55	今熊野	丘陵	縄文(前期・後期・晩期)・弥生・古墳・奈良・平安
56	今熊野貝塚	丘陵	縄文(前期)
57	南台窯跡	丘陵斜面	奈良～平安
58	南台西	丘陵	奈良～平安
59	北野横穴墓跡	丘陵斜面	奈良～平安
60	北野窯跡	丘陵斜面	奈良～平安
61	箕輪B地区古墳群	丘陵	古墳(後期)
62	箕輪A地区古墳群	丘陵	古墳(中期)
63	東内館	自然堤防	古墳(後期)・奈良～平安
64	元中田	自然堤防	弥生・古墳・奈良～平安
65	野来	自然堤防	弥生・奈良～平安
66	原	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良～平安
67	八幡	自然堤防	古墳(後期)・奈良～平安
68	清水古墳	自然堤防	古墳
69	清水	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
70	天神塚古墳	自然堤防	古墳
71	西田	自然堤防	奈良～平安
72	上余田	自然堤防	奈良～平安
73	沢目	浜堤	弥生・古墳・奈良～平安
74	下田高南	自然堤防	奈良～平安
75	八王寺屋敷跡	自然堤防	中世
76	下余田	自然堤防	古墳(中期)・奈良～平安
77	飯塚古墳群	自然堤防	古墳(後期)
78	皇壇ケ原	自然堤防	奈良～平安
79	中北田	自然堤防	奈良～平安

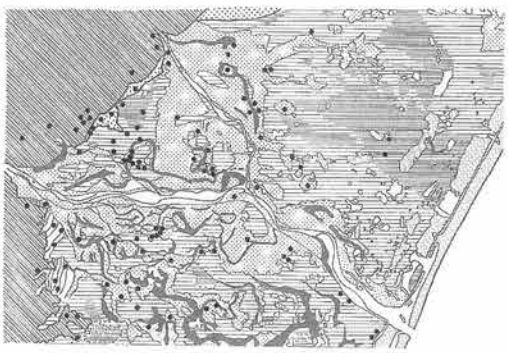
第９図　周辺の遺跡（中田南遺跡は19）

（国土地理院１/25,000「仙台西南部」「仙台東南部」を複製）

発見されており（小川他：1986)、大規模な集落が形成されていたことがわかる。

弥生時代：弥生時代になると、海岸平野はさらに拡大し、ほぼ現在の海岸線付近まで達している。そして第５図に示したように、自然堤防・浜堤列が各地に分布し、より広範な生活可能な立地条件を備えてくる。第８図は弥生時代の遺跡の分布を示したものである。これをみると、丘陵・台地だけでなく、低地に立地する遺跡が極めて多くなっている。特に縄文時代では遺跡の極めて少なかった南岸部の低地にも遺跡が点々と分布し、また北岸部では第Ｉ浜堤列まで遺跡が進出している。このことは地形的な安定とともに、水田の可耕地として低湿地が積極的に求められていった結果と考えられよう。中田南遺跡周辺では安久東遺跡・清水遺跡などが自然堤防上に立地する遺跡として知られている。安久東遺跡からは前期の遠賀川系土器に類似した特徴をもつ土器が出土しており(土岐山：1980)、この段階にはすでに農耕が開始されていたものと考えられる。また、清水遺跡からは後期の資料の他に北海道系の続縄文土器も発見されている(丹羽他：1981)。なお、後河原遺跡からは後期の水田跡の可能性のある遺構が確認されている（佐藤・青沼：1984)。

古墳時代：この時代になると遺跡数はさらに増加し(第10図)、弥生時代にみられた低地への進出がさらに促進される。特にこの傾向は名取川下流域でも南岸部に顕著であり、現海岸線に近い第II浜堤まで遺跡の分布がみられるようになる。このことは、この時代には自然堤防だけでなく、浜堤でも安定した土地条件ができてきたとともに、広範に開発できる技術的な進歩があったことを物語っている。南岸部では台地上の遺跡として、今熊野遺跡・西野田遺跡などが、低地では安久東遺跡・戸ノ内遺跡・栗遺跡・清水遺跡などが調査例としてあげられる。この中の今熊野遺跡・安久東遺跡・戸ノ内遺跡からは前期の竪穴住居跡と方形周溝墓がともに発見されており、天神塚古墳などの前期古墳の存在からもうかがえられるように、政治的な社会が形成されてきたことを示している。栗遺跡・清水遺跡では後期の遺構が多数発見されている。中でも栗遺跡ではこれまでの調査で40軒の竪穴住居跡が発見されており、大規模な集落が営まれていたことが判明している。



第10図　古墳時代の遺跡分布

第11図　奈良・平安時代の遺跡分布

後期でも後半になると、東北地方にも律令体制が波及し、この地域には陸奥国の設置と同時に名取郡が置かれたものと考えられている。このころに造営された官衙としての郡山遺跡は中田南遺跡から北に 3.5㎞の位置にある。ここでは大きく２時期の変遷が確かめられており、Ⅰ期官衙は７世紀後半、Ⅱ期官衙は７世紀末から８世紀初頭に位置付けられている。時期的には多賀城創建以前であり、性格としては、多賀城に先行する陸奥国府とする説、名取郡の郡家とする説などがある(今泉：1988)。いずれにせよ名取川下流域が律令体制の施行の上で極めて重要な地域であったことを示している。

中田南遺跡周辺の古墳としては、前述の天神塚古墳がある。これは中田南遺跡の南西約50mの位置にあり、調査の結果、一辺20m 程の方墳で前期に属することが判明している。また、約４㎞東方の浜堤上には中期古墳として知られている毘沙門堂・経ノ塚などの古墳が分布している。後期古墳としては安久諏訪古墳や安久東遺跡で発見された横穴式石室をもつ古墳がある。その他にも未調査で時期不明の小規模な古墳が各地に点在しており、集落跡とともに古墳でも古墳時代を通じて数多くの遺跡の存在が確認できる。なお、後期に盛行する横穴墓では西方の高館丘陵北東端に位置する熊野堂横穴群が知られており、丘陵斜面において60基以上の横穴墓が確認されている。

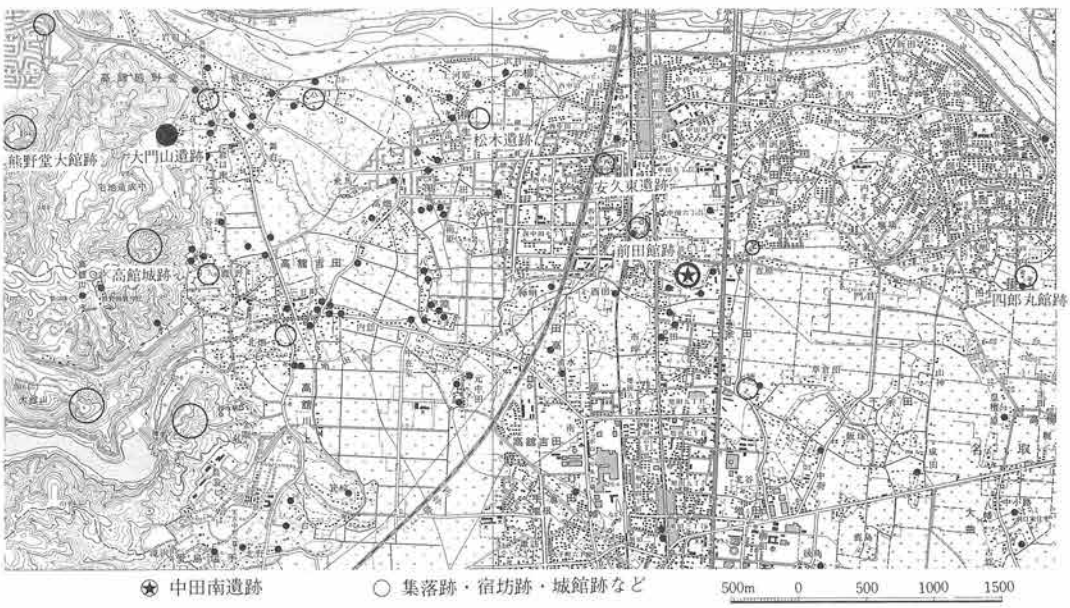
このように古墳時代に形成された政治的社会は、後半になると律令体制の導入とともに新しい展開をむかえ、官衙を中心とする統治機構の中に組み込まれていったようである。

奈良・平安時代：奈良時代から平安時代になると、第11図をみてもわかるように遺跡の分布が全般的に拡大し、その数も急増する。前の時代から継続する大規模な遺跡だけでなく、この時代に出現する新しい遺跡もその周辺に点在するようになる。南岸部では自然堤防に立地する安久東遺跡・清水遺跡・中田畑中遺跡などで数多くの住居跡が発見されている。中でも清水遺跡では奈良時代になると住居跡が急激に増加しており、集落の拡大・発展があったことがうかがわれる。また、中田畑中遺跡では平安時代の竪穴住居跡の他に、同時代の掘立柱建物跡が４棟発見されている。その掘立柱建物跡の掘り方は１辺が1.3m という大きいもので、一般集落とはやや異なった状況がうかがわれる。この時代になると鉄製農具や須恵器が一層普及し、人々の生活においてもこれまでより着実な向上がみられる。中でも鉄製農具の普及は耕地の拡大に大きな役割を果たしたものといえる。なお、中田南遺跡付近では上余田・下余田・一ノ坪などの地名が残されており、これらが条里制の存在を示すものとの説がある(名取市：1977)。清水遺跡では奈良時代から平安時代前半の住居跡の方向について真北方向に対する指向性が強くなる傾向がみられ、条里制との関連が考えられている。これらのことから中田南遺跡周辺でも奈良時代から平安時代ごろに条里型の土地割が存在した可能性が考えられよう。

中世：名取川下流域でも南岸部は中世の遺跡が数多く分布する地域である。城館跡としては高

館城跡・熊野大館跡・前田館跡・四郎丸館跡などが知られている。前二者は高館丘陵頂部の眺望のきく所に立地する天険の山城である。高館城跡については未調査で詳しいことはわからないが南北朝時代から存在したことは確実のようである。熊野大館跡は最近の調査により東西150m、南北600mにも及ぶ大規模な連郭式の山城であることが判明した。時期は鎌倉時代から室町時代頃で、熊野信仰布教にたずさわった熊野修験集団に関わる城館との性格付けもなされている(名取市：1992)。後二者は低地の自然堤防上に立地する平城である。前田館跡は中田南遺跡の北西400mの位置にあり、現在は1町四方の屋敷地の周囲に土塁や堀の痕跡が確認される。未調査のため詳しいことは不明である。四郎丸館跡は中田南遺跡から東に約2.5kmの位置にあり、現在の善徳寺の境内を中心とする地域に存在したものと考えられている(紫桃：1974)。戸ノ内Ⅰ遺跡の調査ではこの四郎丸館跡に関わるとみられる堀跡が発見されており、南北朝から室町時代前半頃の陶器、13～14世紀頃の青磁が出土している。紫桃正隆氏によると、古くは藤原秀衡の臣であった名取四郎の居城であり、その後、宝治合戦後に曽我氏の居館となり、室町末期には伊達家臣の菅井氏が移り住んだこととされている（紫桃：1974)。

その他の遺跡では集落跡の松木遺跡・安久東遺跡と、墓所および供養所としての大門山遺跡などがある。松木遺跡と安久東遺跡はともに自然堤防上に立地しており、掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡などが発見され、豊富な遺物が出土している。特に後者では大規模な溝の存在から前田館跡との関連が指摘され、前田氏の屋敷跡の可能性が考えられている。大門山遺跡は高館丘陵東縁の、沢合いの斜面を中心に立地しており、これまで250基ほどの板碑が確認されている。また、火葬墓の集石墓や石組郭などの埋葬施設も発見されている。板碑の年代は13世紀後半か



第12図　中世の遺跡分布

ら14世紀後半の約100年の中に収まっており、一帯に鎌倉時代の中頃から室町時代の中頃にかけて一大墓域が形成されていたことがわかる。この大門山遺跡の付近には平安時代末期に成立したとされている名取熊野三社があり、中世を通じて地方の信仰を集めていたところである。こうしたことから大門山遺跡は熊野三山信仰に関係した人々の墓所および供養所だったと考えられている(恵美他：1988)。近くにはまた熊野三社に関連する宿坊跡および祈願所跡なども知られている。大門山遺跡の板碑には主に安山岩系の自然石が使用されており、それが大きな特徴の1つとされている。そして多くは石の表面に1尊の種子と銘文を直接彫り込んだ簡単な作りのものである。こうした特徴の板碑はこの大門山遺跡の所在する熊野堂地区を中心に、仙台市では柳生地区から中田地区にかけて、名取市では高館吉田地区から愛島地区・増田地区にかけての名取川下流域の南岸部に広範に分布している。その分布は主に南岸部でも西側に集中しており、海岸部では数が少なくなる傾向がみられる。仙台市側では柳生地区で36基が現存しており(石黒：1986)、また、中田地区でも各所に点在している。名取市では大門山遺跡を含めて400基以上の板碑が確認されており(名取市教委：1988)、その数では宮城県下で最も多い地域とされている。年代では鎌倉時代中頃から室町時代中頃にそのほとんどが造立されており、板碑の造立の背景には熊野三山信仰との関わりが強く存在したものと考えられる。板碑は現在でも「住内明神」として屋敷内の北西隅に祀られている例が多い。中田南地区の付近でもこうした例をいくつか見ることができる。このような状況については中世の屋敷墓の存在を示すものとの説がある（入間田：1991)。

このように高館丘陵北東縁の熊野堂地区から柳生・中田地区にかけては中世の世界をほうふつさせるように遺跡や古碑が数多く残されている。

近世：近世になると、仙台城下町は広瀬川北岸の河岸段丘上を中心に建設されており、その頃の名取川下流域は大半が農村地帯であった。中田南遺跡付近は近世では前田村に含まれており、その近隣には柳生村・四郎丸村・袋原村などがあり、いずれも名取郡北方三十一ヵ村に属していた。そして、南方三十カ村に属する上余田村・下余田村などと南を接していた。その後、前田村の名取川岸には奥州街道の整備に伴い、中田の宿場町が開設される。仙台城下からは2番目の宿場であった。

享保9年（1724年）に作成された「名取郡前田村絵図」（中田の歴史編集委員会：1991）をみると、中田宿には検断屋敷を中心に、町屋敷が整然と並んでおり、町の両端は木戸で区切られている。そして、その宿場の周囲には田畑が広がっており、所々に屋敷が点在する状況がうかがわれる。この絵図では中田南遺跡の範囲は田と畑になっており、屋敷の存在は認められないようである。遺跡の南側には水路が東西に流れているが、これが隣村の上余田村との村境であるとともに、名取郡の北方と南方の村々を区画する重要な水路として認識されていたことがわかる。

第13図　調査対象地区の現況図

Ⅲ．調査の方法と概要

１．調査の方法

調査区の設定：今回の調査対象面積は約３万㎡と広く、この中に幅員６ｍと９ｍの道路が縦横に設定される計画であった。これらの道路方向は必ずしも一定せず、しかもいずれも真北方向からずれるため、基幹道路となる東端の南北道路（Ⅷ区）の中心線を仮の基準線とした。その道路とほぼ直角に交叉する６ｍ道路（Ⅴ区）の中心線との交点を東西方向の基準線Ｎ－０－Ｓとした。そして実際の南北方向の基準線は仮の基準線より100m西に移動し、Ｗ－０－Ｅとした。この２本の軸線を基準として調査区全体がかかるように10mメッシュのグリッドを組み、測量基準線を交点からの東西・南北方向の距離数で表すことにした。グリッド名は東西方向をアラビア数字、南北方向をアルファベットで表わし、両者の組合せで呼ぶことにした(第14図)。調査区は道路全体を９つに分け、西北部から順次、ローマ数字のⅠ～Ⅸ区を付した。

実測図の作成：検出された遺構は10m間隔に設けた基準杭を中心に全面に水糸で１ｍメッシュを組み、それらを基準線として作図した。実測図には基本図面として遺構平面図と遺構断面図があり、縮尺は1／20 を基準としたが、細部の表現が必要な場合には1／10 にした。遺構平面図は調査区全域の図面配置図(1／500)を作成し、それらをＢ３規格の方眼紙に５ｍ×10mのワクが入るように分割して用いた。また、この基本図面を補うものとして補足図面を作成した。これは遺物の出土状況を作図したものなどであり、縮尺は1／10 を基本とした。その他に各試掘トレンチの平面・断面図があり、平面図は1／50 で、断面図は1／20で作図している。

基本層の断面図については調査の最終時に遺構の掘り込み面や地形の傾斜を調べるために、全調査区を対象に10mごとに柱状図として1／20 で作図した。

２．調査の概要

調査計画は初めに遺構確認を目的とした調査を行い、その後にそのデータに基づいた本調査に移行し、12月末までに全調査を終了させるというものであった。調査は平成４年４月14日から、調査員２名、スタッフ30名の体制で開始した。重機によるⅠ・Ⅱ層の剝離とともに、併せて遺構確認作業を行った。Ⅰ・Ⅱ層の下には遺物を含む暗褐色および黒褐色土層（Ⅲ層）が部分的に確認され、当初はその上面での遺構確認に努めたが、その作業が極めて困難であることがわかった。そこで最終的にはその下の黄褐色土層（Ⅳ層）上面で遺構の確認を行うことにした。こうした遺構確認作業とその遺構分布略図の作成は５月の下旬まで続いた。その結果、遺構がⅨ区を除く調査区のほぼ全面に濃密に分布することがわかり、遺物も豊富に出土すること

が予想された。また、予想通り、芹田の下からは堀状の落ち込みが確認され、その付近からは多数のピットも確認された。このような遺構のあり方から期間内で調査を終了させるために、各遺構の調査方法を再検討した。

遺構確認の終了した調査区全域に正式な基準杭を設けた後に、Ⅰ区から精査を開始した。各調査区で検出された遺構は次の通りである。なお、Ⅸ区では遺構は確認されず、一部で河川跡とみられる落ち込みが検出された。

Ⅰ区：竪穴住居跡３軒・掘立柱建物跡２棟・ピット群１群・井戸跡１基・土坑８基・溝跡13条・溝状遺構５条・小溝状遺構群１群・河川跡１本

遺構確認状況（１）

遺構確認状況（２）

竪穴住居跡調査状況（ＳＩ16）

溝跡調査状況（ＳＤ11）

現地説明会（１）

現地説明会（２）

第14図　グリッド配置図と調査区

II区：竪穴住居跡７軒・掘立柱建物跡５棟・ピット群５群・火葬墓２基・土坑10基・溝跡６条・溝状遺構９条・小溝状遺構群１群・性格不明遺構１基

III区：竪穴住居跡６軒・掘立柱建物跡５棟・ピット群４群・竪穴遺構１基・井戸跡２基・土坑10基・溝跡９条・溝状遺構２条・小溝状遺構群１群・円形周溝１基・性格不明遺構２基

IV区：竪穴住居跡１軒・掘立柱建物跡５棟・ピット群２群・竪穴遺構１基・井戸跡２基・火葬墓１基・土坑８基・堀跡３条・溝跡11条・溝状遺構１条・小溝状遺構群２群

V区：竪穴住居跡７軒・ピット群３群・井戸跡１基・鍛冶遺構１基・土坑８基・溝跡６条・溝状遺構３条・小溝状遺構群１群・性格不明遺構２基

VI区：竪穴住居跡８軒・掘立柱建物跡２棟・ピット群３群・土坑40基・溝跡９条・溝状遺構４条・小溝状遺構群２群・性格不明遺構１基

VII区：掘立柱建物跡２棟・ピット群３群・竪穴遺構１基・井戸状遺構１基・土坑13基・溝跡10条・溝状遺構２条・性格不明遺構３基

VIII区：竪穴住居跡５軒・掘立柱建物跡10棟・ピット群３群・井戸跡１基・土坑８基・堀跡１条・溝跡14条・溝状遺構25条・小溝状遺構群２群・性格不明遺構１基

これらの中で、ピットと小溝状遺構についてはその平面的なまとまりを群としてとらえている。また、溝跡と堀跡についてはその規模とプランなどで区別したが、厳密なものではない。掘立柱建物跡については調査中に組み合うピットの検討を行い、その時点で確認されたものを

溝跡調査状況（SD18）

第２号堀跡調査状況

基本にしている。

道路部分のみとはいえ、おびただしい遺構の存在と、さらにそれらが複雑に重複していることから精査には多くの時間を費やさざるを得なかった。その結果、予定よりも調査に遅れが生じてきた。そのため９月の後半には調査員が１名加わり、スタッフも10名増加された。調査が大詰めになった11月21日にはこれまでの調査成果を一般に公開するために、現地説明会を開催した。晩秋の小寒い気候ではあったが、地元の方々をはじめとする約200名の市民が参加された。その後は精査と併行して、主に検出された溝跡や堀跡のプランを確認するための試掘トレンチ調査、Ⅳ層以下の遺構の存否を確認するための下層試掘トレンチ調査、調査区全域を対象とした断面図作成やサンプル採取などを行い、１月19日にそれらの一切の調査を終了した。

ピット調査状況（26G）

厳寒の中での調査（12月）

３．整理の方法

実測図整理：実測図には基本図面として285枚の遺構平面図と106枚の遺構断面図があり、前者はそれぞれ調査区ごとに北から南方向に、さらに西から東方向に番号を付した。後者は終了した図面から順次番号を付した。その他に13枚の補足図面、約20枚の試掘トレンチ関係の図面、10枚の調査区全域の断面図がある。そしてこれらをもとにグリッド配置図と調査区位置図（1/500）、各調査区の遺構配置図（約1/100）と全体の遺構配置図（1/200）を作成した。

遺構：遺構には、竪穴住居跡・土坑・溝跡などがあり、それらは、前半のⅠ～Ⅲ区までの調査では順次調査を行ったため、基本的には調査区順に番号が付いているが、後半のⅣ～Ⅷ区では調査区を越えて同時に調査が進行したため、アトランダムな番号になっている。また、精査中および整理中に遺構名を変更したものものあり、その場合は旧番号を欠番とした。それぞれの遺構数は次の通りである。また、各遺構の略称を（　）内に記した。

・竪穴住居跡（ＳＩ）…… 37軒（番号ではSI38まであるが、SI23が欠番）
・掘立柱建物跡（ＳＢ）…… 31棟
・ピット群（G）…… 27群

・竪穴遺構（竪）…… 3基
・井戸跡（ＳＥ）…… 8基（１基は井戸状遺構）
・火葬墓（火）…… 3基
・鍛冶遺構（鍛）…… 1基（調査時に別遺構としていた鍛冶炉と土坑を一緒にした）
・土坑（ＳＫ）……105基
・堀跡（堀）…… 4条
・溝跡（ＳＤ）…… 77条（番号ではSD78まであるが、SD67が欠番）
・溝状遺構（溝状）…… 51条
・小溝状遺構群（小溝）…… 10群
・円形周溝（円）…… 1基
・性格不明の遺構（ＳＸ）… 11基

遺構カード：遺構ごとに必要事項を書き込んだ遺構カードを作成し、原稿に備えた。遺構カードにはまた、仕上がりの縮尺にした遺構図面を貼付し、註記表をそえた。また、それぞれの遺構の平面図はトレース段階の縮尺にコピーして、トレース作業に備えた。

それぞれの遺構のトレース段階の縮尺と縮尺率、仕上がりの縮尺は次の通りである。

・竪穴住居跡……1／20×1／3＝1／60
・掘立柱建物跡……1／20×1／3＝1／60
・ピット群……1／40×1／3＝1／120
・竪穴遺構……1／20×1／3＝1／60
・井戸跡……1／20×1／3＝1／60
・火葬墓……1／10×1／2＝1／20
・鍛冶遺構……1／20×1／3＝1／60
・土坑……1／20×1／3＝1／60
・堀跡……1／40×1／3＝1／120
・溝跡……1／40×1／3＝1／120
・溝状遺構……1／40×1／3＝1／120
・小溝状遺構群……1／40×1／3＝1／120
・円形周溝……1／20×1／3＝1／60
・性格不明の遺構…1／20×1／3＝1／60

遺物の整理：出土した遺物は平箱で 120箱である。これには土器・陶器・磁器・土製品・瓦・鋳造土器・石器・石製品・金属製品・木製品などがある。

土器・陶器・磁器については洗浄・記名・接合の後に、図示可能な資料（登録資料）と破片資料に分けた。登録資料では原則として1／4以上残存しているものは全体の実測を、それよりも小さい資料は破片実測を行い、実測不可能なものは写真のみとした。縄文・弥生土器・陶器・磁器については表土出土のものを除いては原則として全て登録した。

土製品・瓦・鋳造土器については土器と同様の作業を行った後に、表土出土のものを除き、原則として全て登録し、実測の対象とした。

石器・石製品も土器と同様の作業を行い、分類を行った後にそのほとんどを登録し、実測の

対象とした。ただし、その中の磨面や敲打痕のある石製品では確実にその痕跡が認められるものに限った。

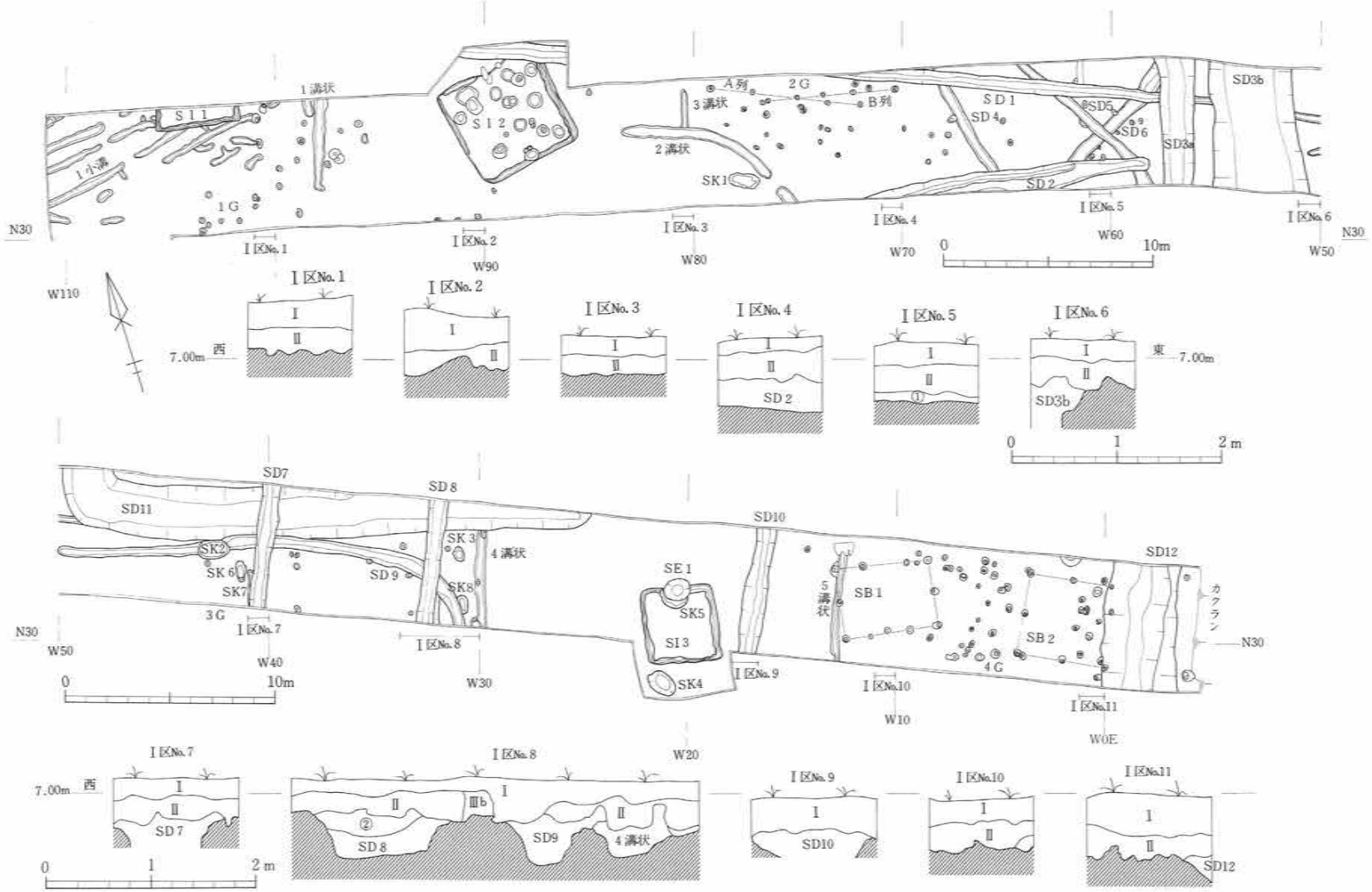
金属製品についてはいずれも錆化が著しかった。極力それを除去した後に、表土出土のものを除き、全て登録し、実測の対象とした。

木製品およびその他の加工木は水洗後にパウチ打ちによるネーミングを行った。そして保存の極めて悪い遺物は除いて、そのほとんどを登録し、実測の対象とした。なお、木簡については墨痕の残りが極めて悪く、その解読にあたっては東北歴史資料館の赤外線カメラを援用させていただいた。主な木製品の樹種については、木工舎「ゆい」にその同定を依頼した。

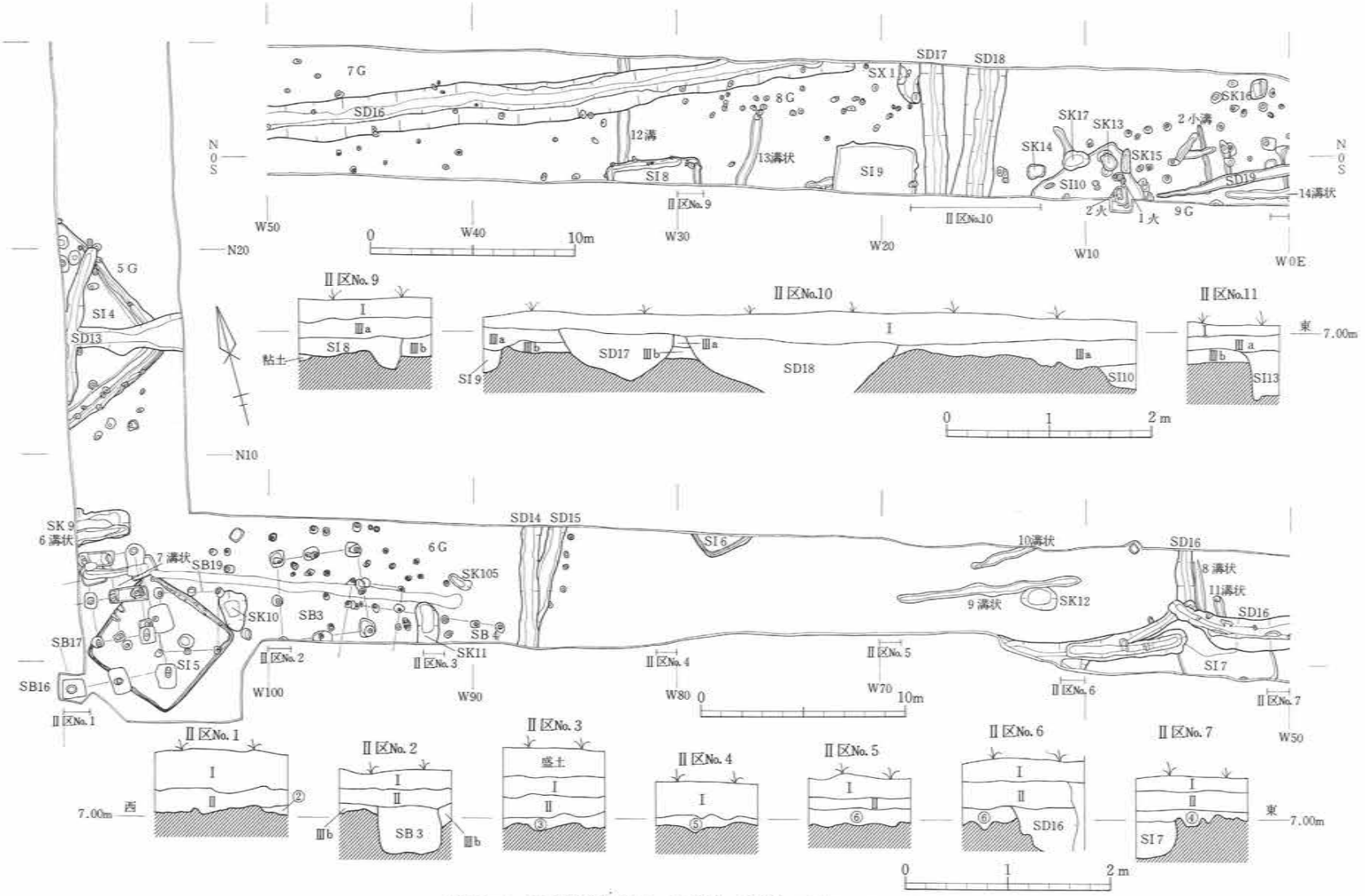
これらの遺物実測図の仕上がり縮尺は次の通りである。

・土師器・須恵器・赤焼土器・灰釉陶器……⅓
・陶器・磁器・土師質土器……⅓
・縄文土器……⅓（ただし拓影図は½）
・弥生土器……½
・とりべ・瓦……⅓
・フィゴの羽口……⅓
・土錘・土製品……½
・剝片石器……⅔
・石　核……⅓
・石製模造品・石帯……½
・砥石・石臼・使用痕をもつ礫……⅓
・鉄製品・銅製品……½（ただし古銭は原寸）
・木製品……⅓
・角製品……½

土壌の洗浄と各種遺物の摘出：微小な資料摘出のために、一部の井戸跡や溝跡・堀跡の堆積土、および下層試掘の堆積土から土壌サンプルを採取し、水洗選別を行った。その際に摘出された昆虫遺体は調査時に取り上げた資料と合わせて、その同定を三重大学生物資源学部昆虫学研究室の森　勇一氏に依頼した。

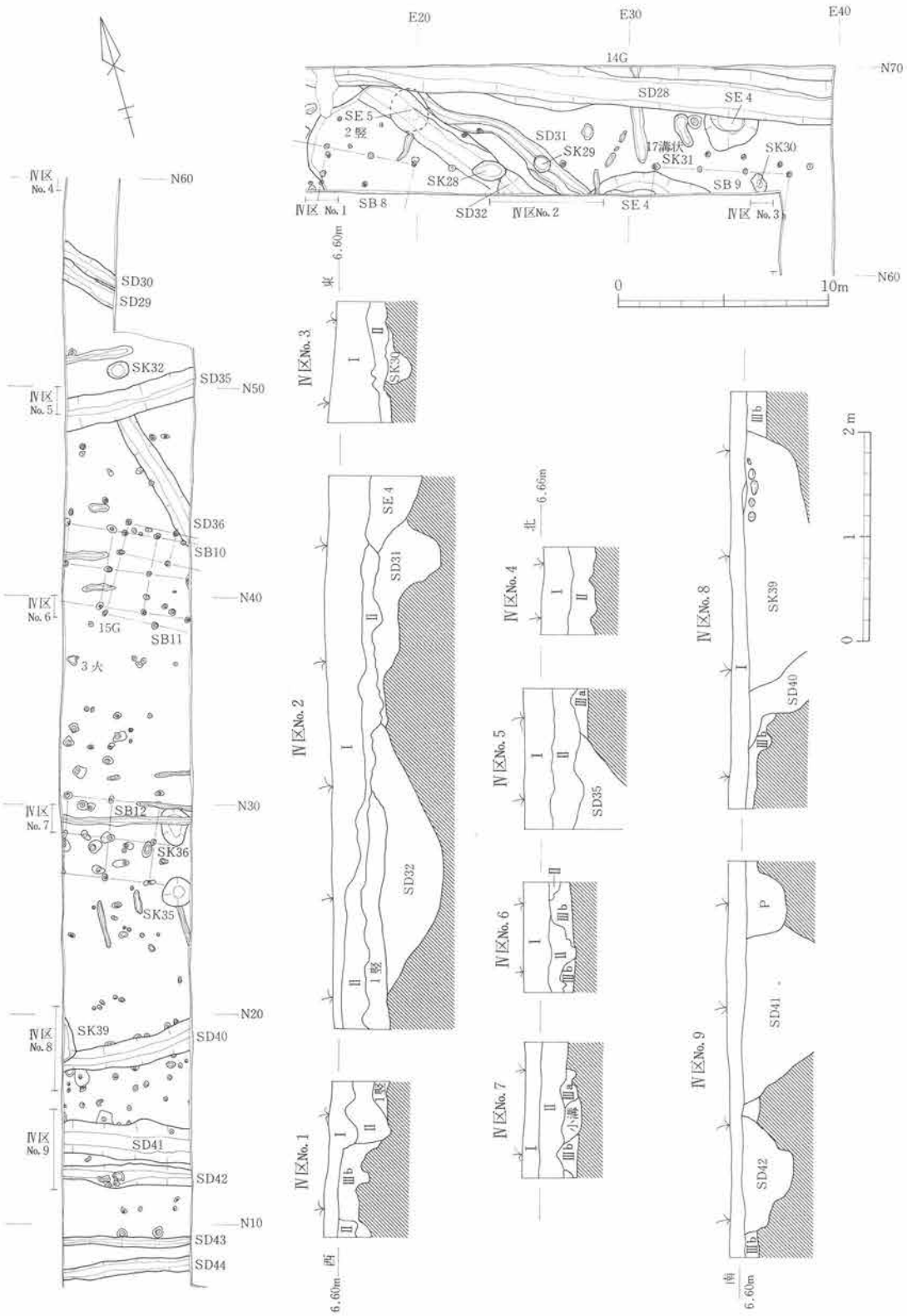


第15図　Ⅰ区遺構配置図・セクション図（南壁セクションを反転）

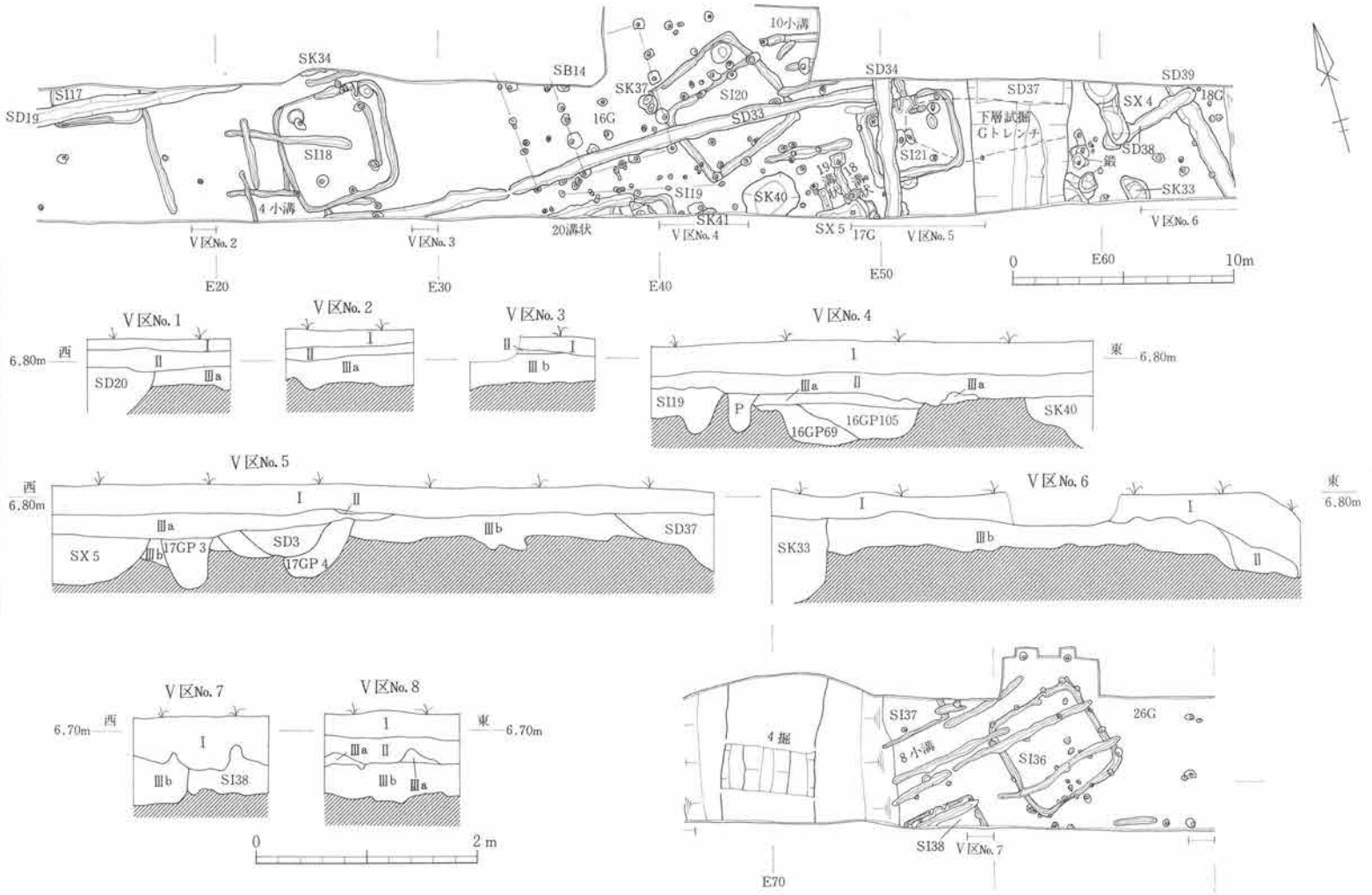


第16図　Ⅱ区遺構配置図・セクション図（南壁セクションを反転）

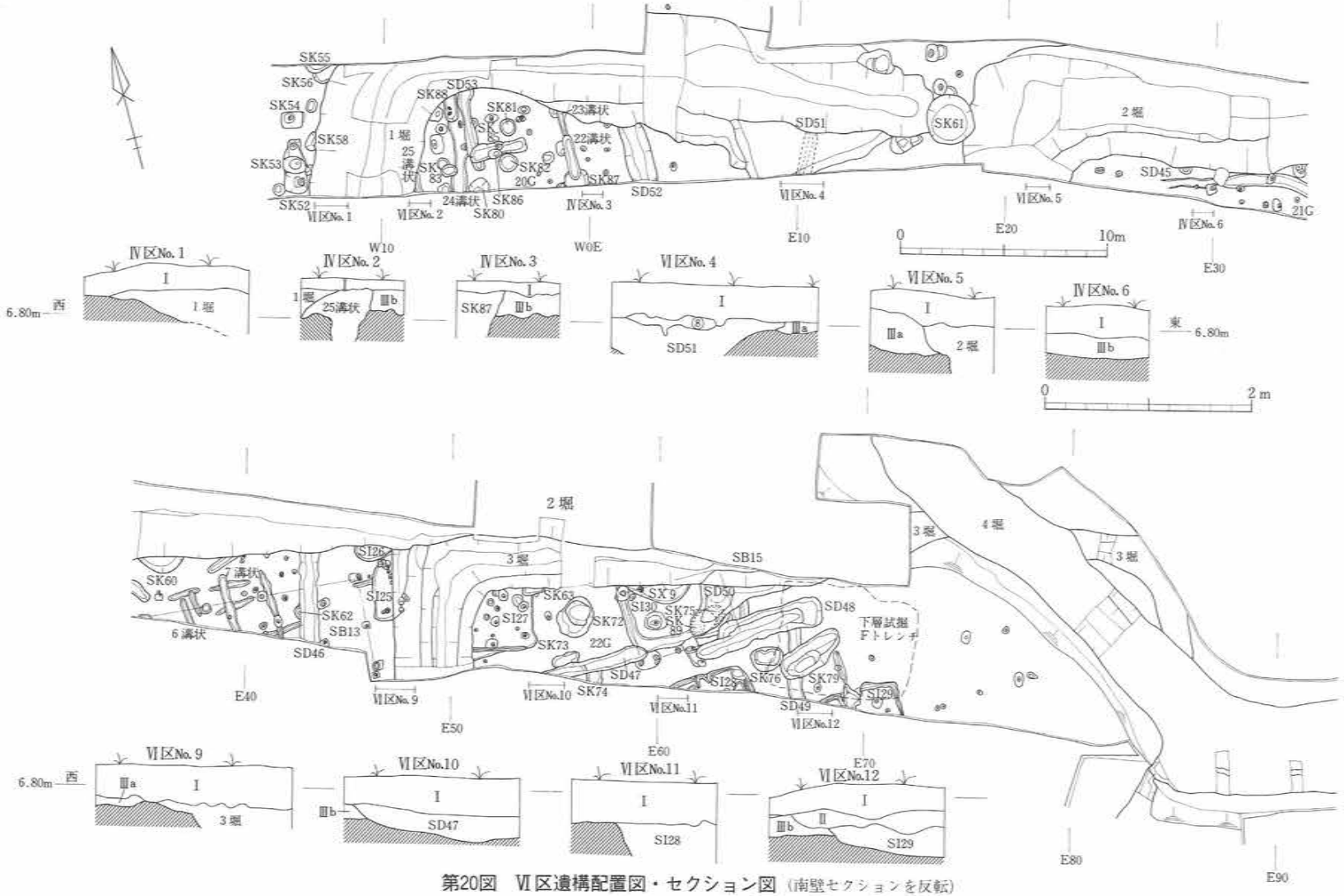
第17図　Ⅲ区遺構配置図・セクション図



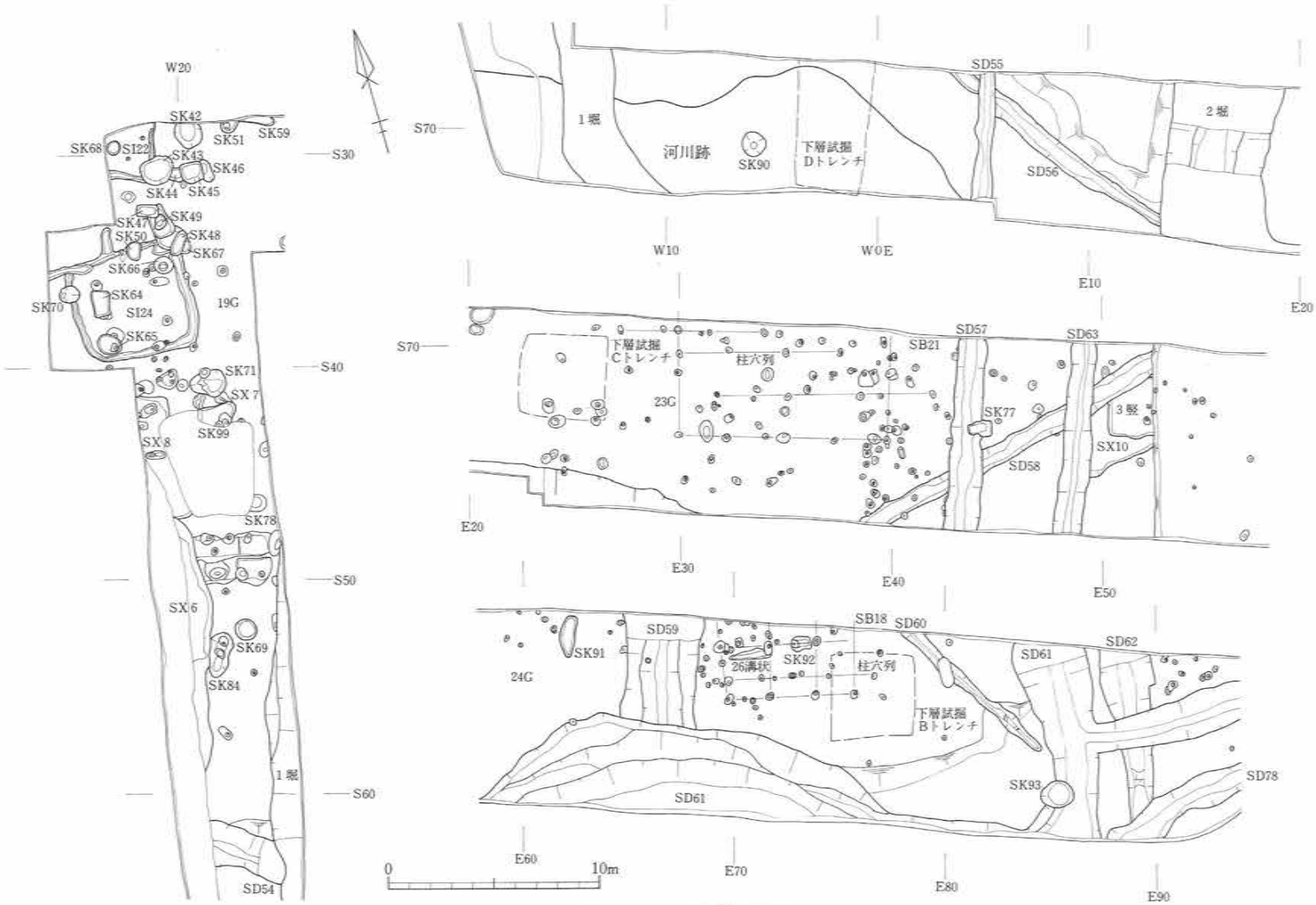
第18図　Ⅳ区遺構配置図・セクション図　(No.1～3は南壁セクションを反転)



第19図　V区遺構配置図・セクション図

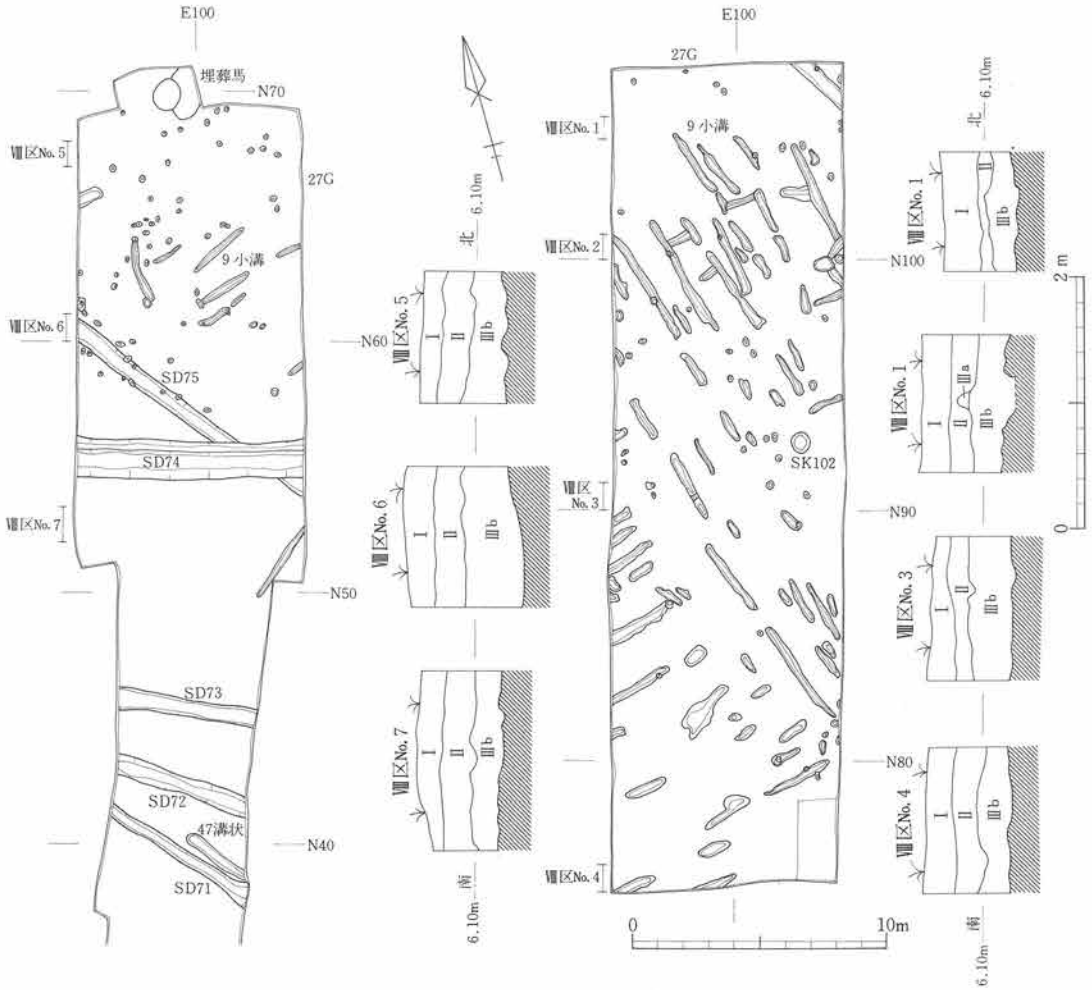


第20図　Ⅵ区遺構配置図・セクション図（南壁セクションを反転）



第21図　Ⅶ区遺構配置図

第22図　Ⅷ区遺構配置図・セクション図（1）



①…10YR½灰黄褐粘土質シルト、粘性ややあり、しまりややあり、マンガン斑多く含む。
Ⅳ層小ブロック、粒子少し含む。この層はこの付近にのみ分布。

②…黒褐色とⅣ層のブロック混在。

③…Ⅲa、Ⅲb、Ⅳ層が混在。

④…Ⅲa、Ⅲb、Ⅳ層の各ブロックが混在。

⑤…ⅢaとⅣ層が混在。

⑥…ⅢaとⅣ層ブロックが混在、Ⅳ層は下部に多い。

⑦…Ⅲbに近いがⅣ層ブロックを多く含む。

⑧…Ⅲb主体のブロックの混在層、人為堆積。

第23図　Ⅷ区遺構配置図・セクション図（2）

IV. 基本層序

1．IV層上面までの基本層序

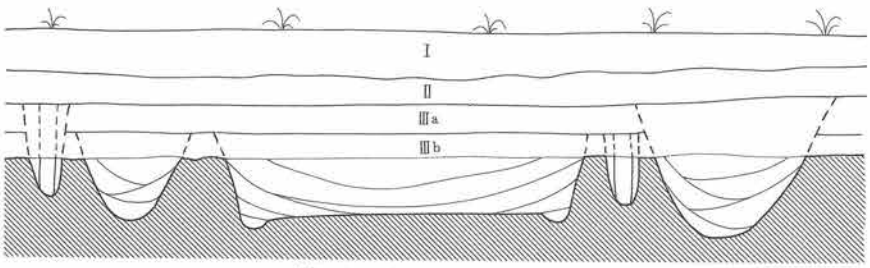
今回の調査対象面積は約３万㎡と広く、そのほとんどが自然堤防上に立地している。そしてその区域でほぼ共通した層序のあり方を示すことがわかった。また、遺跡の南側ではわずかに河川跡とみられる堆積状況が確認された。ここでは自然堤防上での遺構に関わる堆積層序を大きく４層に区分して基本層序とした。以下それぞれの層の特徴を述べたい。

Ⅰ層：第Ⅰ層は表土である。現在の耕作土であり、また各所の撹乱穴も含まれる。主に暗褐色（10YR3/3）のシルトおよび粘土で構成される層である。層厚は20～30㎝であり、層中からは各時代の遺物が出土している。

Ⅱ層：主に暗褐色（10YR3/3）のシルトおよび粘土で構成される層である。層厚は厚い所で20～30㎝で、ほぼ全域に分布している。層中からは近・現代の遺物も含まれており、Ⅰ層以前ではあるが、新しい時代に形成された層である。

Ⅲ層：暗褐色あるいは黒褐色などの黒みをもつ層で、シルトか砂質シルトで構成される層である。全体的には北側では主にシルト、南側では主に砂質シルトの土性を示す傾向がある。主に古代から中世の遺物を多く含み、一部ではこの層上面で確認された遺構も存在する。調査当初はⅢ層として単層としてとらえていたが、調査が進む中で、２層に分層されることがわかってきた。最終的には調査終了時の全域を対象とした基本断面図作成の際にいくつかの地点で分層されることが確認された。そして壁面にかかっている遺構の掘り込み面を検討したところ、おおまかではあるが、古代の遺構は下層のⅢｂ層の上面から、中世の遺構は上層のⅢａ層上面から掘り込まれている例が多く認められた。このⅢ層はⅠ・Ⅱ層の撹乱により失われているところが多く、特に西半部ではそれが顕著である。ただし、Ⅰ・Ⅱ層の下で、部分的にではあるが、黒褐色のブロックと後述のⅣ層ブロックが混在する層が確認された。これはどの段階で形成されたかは明確ではないが、その箇所でもⅢ層が本来あったことを示すものと考えられる。

Ⅲａ層：主に暗褐色（10YR3/3）のシルトか砂質シルトで構成される層である。粘性はなく、し



第24図　基本層序模式図

まりはややある。層中に1cm未満の礫を多く含み、また凝灰岩の細粒を多く含む。この層は全体としては部分的にしか確認されないが、東半部では比較的厚く残っているところもみられる。層の下面では凹凸が著しく認められる地点も見受けられた。前述したように中世に所属する遺構の中でこの層上面から掘り込まれている例が確認された。また、中世に属する遺構の堆積土中にはこのIII a層に類似する層を含む場合が多く認められた。さらに一部の層中からは中世の遺物も出土していることから、このIII a層はおおまかに中世頃に形成された層と考えることができよう。

III b層：主に暗褐色(10YR2/3)のシルトか砂質シルトで構成される層である。粘性はなく、しまりはややある。層中に1cm未満の礫をわずかに含んでいる。この層は調査区のほぼ全体に分布しており、中でも東半部では20cm前後の安定した層厚で堆積している。この層の下部ではIV層のブロックを多く含み、下面に著しく凹凸が認められる所も多く見受けられた。前述したように、古代に属する遺構の中にはこの層の上面から掘り込まれている例があり、また一部では遺構堆積土の上にIII a層の堆積する箇所もみられた。また、古代の遺構の堆積土ではIII b層によく類似する層が多いこと、この層中からは古代の遺物が多く出土することなどから、III b層についてはおおまかに古代に形成された層とみることができよう。

IV層：以上の基本層Ⅰ～III層の下面で確認された層は主に黄褐色土であり、土色からⅠ～III層とは歴然と区別できるものである。これをIV層とし、最終的な遺構確認はこの上面で行っている。このIV層上面で確認される層は地点によって土色・土性に変化が認められる。調査区の北西部ではにぶい黄色(2.5YR6/4)の粘土層で、粘性が極めて強く、しまりがあり、層中には酸化鉄の斑紋が多く含まれている。調査区の北東部では黄褐色(10YR5/6)の粘土質シルトで、粘性・しまりともややあり、層中には酸化鉄斑紋を含んでいる。中央部ではにぶい黄褐色(10YR5/4)のシルトで、粘性はややあり、しまりはない。調査区の南側では暗褐色(10YR3/4)の砂質シルトか砂で、粘性・しまりともない。このように平面的には南から北側に砂・シルト・粘土へと土性が変化する傾向がうかがわれる。

上述のⅠ～III区の層の傾斜はこのIV層上面の傾斜と同傾向を示している。それによると、IV層上面では北西部のⅠ区西端で標高7m前後、IV～Ⅴ区で6.40m前後、東部のVIII区南端では6.30m前後、同じくVIII区の北端では5.9m前後となり、全体的には南西部から北東部側へと傾斜していることがわかる。そして、その最大の比高差は約1m前後となっている。

2．下層の層序

IV層以下の下層に遺構・遺物が存在するかどうかを確認するために、調査区のⅤ～VIII区に計7つの試掘トレンチA～G(下層試掘A～Gトレンチ)を設定し、掘り下げを行った。その結果、

文化層は確認されなかったが、有機物を含む層をいくつか確認することができた。これらの下層の層序についてはIV層の細分層として把えた。そして下層試掘トレンチ全体のそれぞれの層との対応関係を検討したが、VII区からVIII区南端のA～E区ではほぼ対応関係が認められたものの、V・VII区のF・Gトレンチでは異なる状況が認められた。

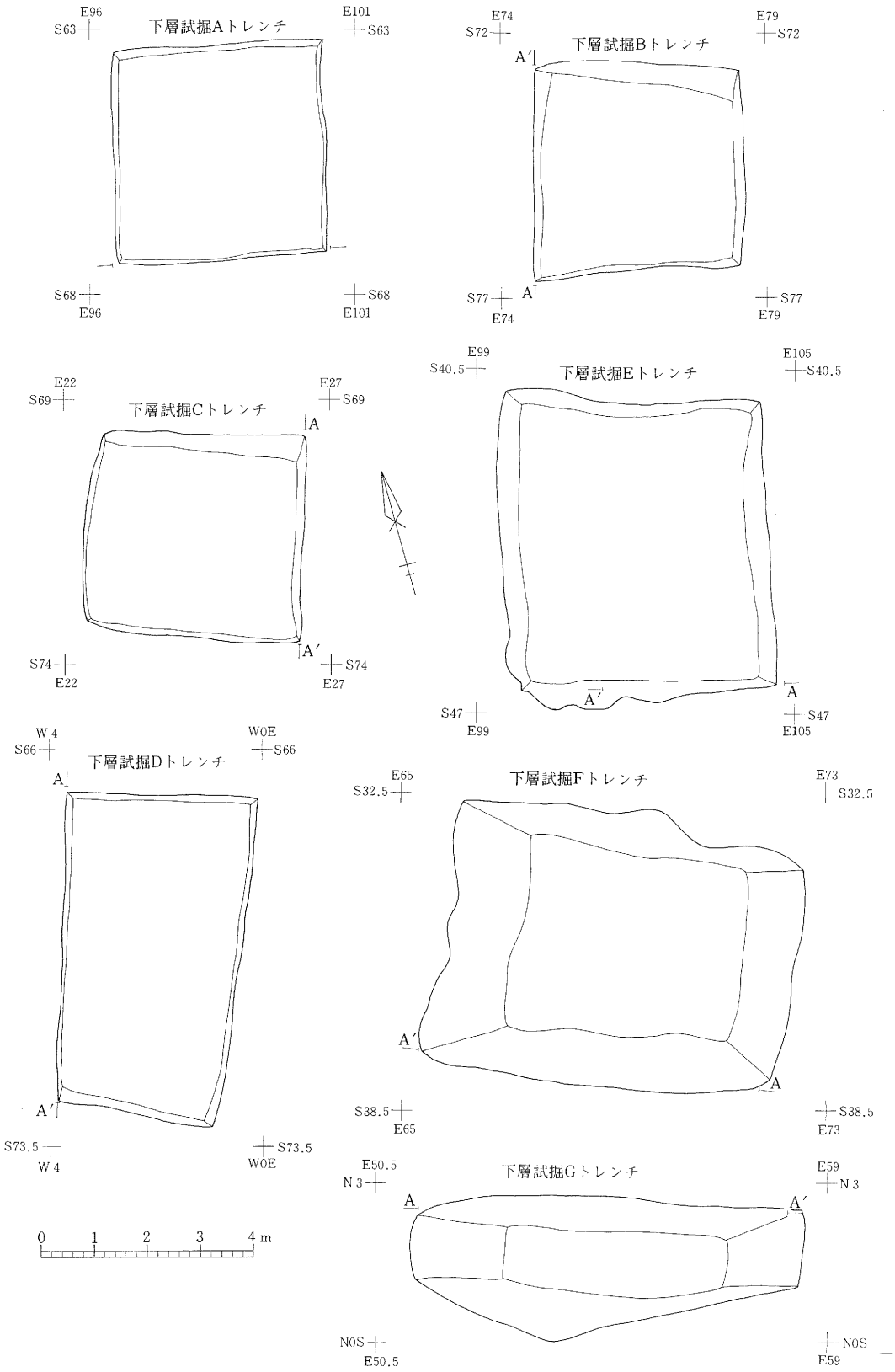
A～E区：これらのトレンチで最も多く層序が確認されたのがA区である。ここでは標高2.8mまで掘り下げ、aからmまでの14層を確認することができた。これらは層厚は異なるものの大きくは砂・シルト・粘土の互層となっており、その中に樹木などの有機物を含む層がいくつか認められた。その中のIVc層は層厚が10cm前後の薄い層で、暗灰黄色(2.5Y5/2)の粘土層であり、層中には炭化物粒を少量含んでいる。この層はさらにB・C・E区でも確認されている。IVe-1層は層厚が10～20cmで、黒色(10YR2/1)の粘土層である。層中に植物遺体を少量含んでおり、層の下面には起伏が認められる。この層はB・C・D・Eでも確認されている。IVJ層は層厚が50cm前後の厚い層で、砂とシルトの縞状の互層となっている。この層はB・E区でも確認されており、層中から樹木片が多数出土している。なお、第VI章にその同定結果を掲載しているが、これらの一部の樹木の樹種はツタウルシやヤナギ属の一種であった。IV1層は層厚が20cm前後の比較的安定した層である。標高3.4m前後に分布しており、黒褐色(2.5Y3/1)の粘土層である。層中には植物遺体をわずかに含んでいる。この層とIVc・IVe-1の3つの層では堆積時の植生環境を知る目的で花粉分析を行っており、その結果は第VI章に掲載されている。

F・G区：A区で確認された層はこのF・G区ではIVf層までは確認されるものの、それよりも下層では層序が異なり、中でも堆積層下部では小礫を含む層が多く存在している。そしてF区では標高4.2m前後で、G区では標高4.2～4.6mで砂礫層へと移行している。この砂礫層は粗砂を主体として、径5cm以内の礫を密に含んでいる。

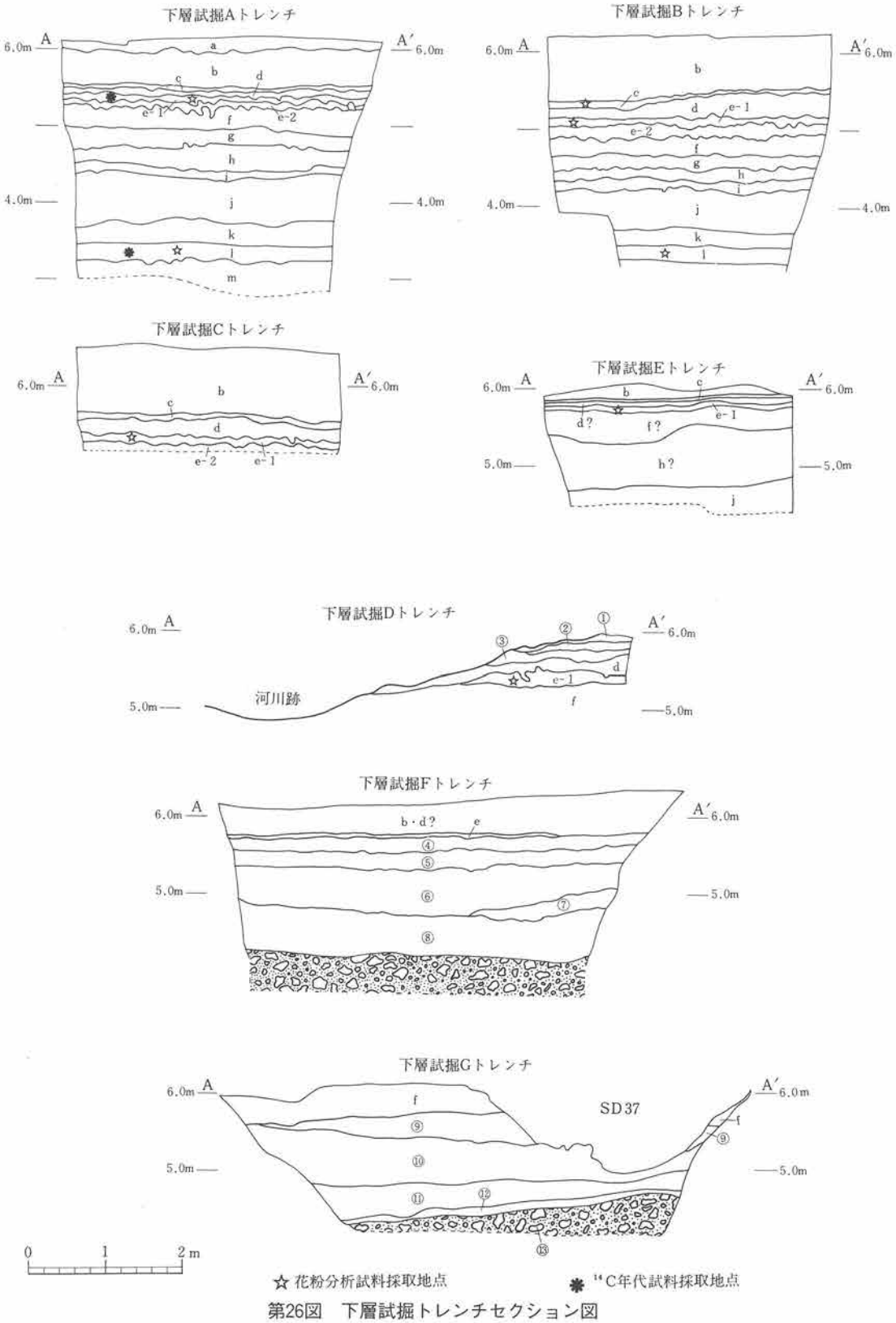
このように調査区の一部の下層調査ではあるが、南東部では標高3m以下まで、砂・シルト・粘土の互層が続いているのに対し、北西方向へ約50m離れた地点では標高4～5mで砂礫層に達している。これらの地形の形成過程については第VI章の松本秀明氏の報告を参照されたい。

下層試掘トレンチ註記表

層No.	土色	土性	備考	層No.	土色	土性	備考
a	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	全体にマンガン斑を含む。	①	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	部分的な堆積とみられ、他の下層トレンチ層序にはみられない。
b	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	酸化鉄の斑紋厚く、約40cm程の所もある。黄褐色砂質シルトの互層	②	暗灰黄色 (5YR5/2)	砂質シルト	
c	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	粘土	黒色土との幾重もの互層。樹木の炭化物を少量含む。	③	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	
d	オリーブ褐色 (2.5Y4/6)	砂質シルト	暗灰黄色のシルトを一部に含む。植物遺体を微量に含む。	④	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	層中に黒色シルト層が何層にも挟む。
e-1	黒色 (10YR2/1)	粘土	黄褐色粘土の粒子を少量含む。植物遺体を全体に少量含む。層下面起伏。	⑤	黄褐色 (2.5Y5/4)	砂質シルト	層下半がグライ化、部分的にごく薄い層、かつ互層をなす。層下半の一部に砂層が入り込む。
e-2	黄褐色 (2.5Y5/3)		炭化物粒を少量含む。層下面起伏。	⑥	鈍い黄褐色 (10YR5/3)	砂	砂層を主体として径2cm内の小礫が混在する。
f	黄褐色 (2.5Y5/4)	粘土質シルト	黄褐色の砂質シルト・黒色粘土を一部に含む。	⑦	鈍い黄色 (2.5Y6/4)	砂質シルト	粗砂・細砂が交互に入り込む。径5cm内の小礫が入り込む。
g	黄褐色 (2.5Y4/2)	粘土	黄褐色シルトとの幾重もの互層。黒色粘土層が部分的に加わる。	⑧	褐灰色 (10YR6/1)	砂質シルト	他にみられない層。
h	オリーブ褐色 (2.5Y4/4)	砂質シルト	植物遺体を微量に含む。	⑨	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	砂質シルト	部分的に、粗砂・細砂の互層となる。
i	オリーブ褐色 (2.5Y4/4)	砂質シルト	オリーブ色砂質シルトと幾重もの互層。	⑩	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	砂質シルト	部分的に、粗砂・細砂の互層となる。
j	灰オリーブ色 (5Y5/3)	砂質シルト	黒褐色シルトと幾重もの互層。上半は灰オリーブ色、下半は黒褐色層が厚みをみせる	⑪	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	砂礫	粗砂を主体に径3cm内の小礫を多く含む。
k	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	灰色粘土と幾重もの互層。植物遺体を少量含む。	⑫	オリーブ黒色 (5Y3/1)	粘土	植物遺体を含む。
l	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土	植物遺体をわずかに含む。	⑬	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	砂礫	粗砂を主体に径5cmの小礫を密に含む。
m	暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1)	砂質シルト					



第25図　下層試掘トレンチ平面図



第26図　下層試掘トレンチセクション図

V．検出された遺構と出土遺物

中田南遺跡からは前述の通り、遺構としては竪穴住居跡37軒・掘立柱建物跡31棟・ピット群27群・竪穴遺構３基・井戸跡８基・火葬墓３基・鍛冶遺構１基・土坑105基・堀跡４条・溝跡78条・溝状遺構51条・小溝状遺構群10群・円形周溝１基・性格不明の遺構10基が検出された。また、その他に埋葬馬骨・河川跡がある。以下、これらの順にそれぞれの遺構の事実記載を行う。また、これらの遺構から出土した図示対象の遺物については、明らかに時期の異なると思われる遺物も含めて各遺構のところですべて一括して図示および記載を行った。そして、その中で遺構に伴うと思われる遺物を明確にしようとした。また、その他の遺構以外から出土した遺物については後に一括して図示し、記載を行っている。

１．竪穴住居跡

第１号住居跡（SI１）

【位置】Ｉ区　N35.1～36.4　W101.7～105.7

【確認面】Ⅳ層上面で確認された。

【遺存状況】検出されたのは南側部分だけで、住居跡の大部分は調査区外に延びている。

【重複】第１号溝状遺構および第１号ピット群の一部に切られており、前者より新しく、後者より古い。

【平面形・方向】住居南側のプランから平面形はほぼ方形をなすものと考えられる。方向は真北方向から若干東に寄っており、Ｎ－7°－Ｅである。

【規模】東西が3.96m、南北が1.06m以上である。また、床面積は3.09㎡以上である。

【堆積土】６層が認められた。いずれも自然堆積層である。中央部に向かい将棋倒し状に堆積している。

【壁の状況】Ⅳ層を壁としている。壁の立ち上がりは概してゆるやかである。残存壁高は南壁で20～30cmである。

【床面の状況】中央付近の一部はⅣ層を、その他は住居掘り方埋土を床面としている。床面には多少の起伏があり、西側が最も高く、東へわずかに傾斜している。

【カマド・貯蔵穴・柱穴】いずれも検出されなかった。

【周溝】検出範囲では全周する。幅は12～28cm、深さは４～９cmで、断面形は「U」字状を呈する。堆積土は２層認められたが、その中の１層（層№7）は住居堆積土の層№6に近い層である。

【出土遺物】床面と堆積土から土師器が出土しているが、その量は極めて少なく、また、出土状況に規則性はみられない。図示できたのは床面出土の土師器の高坏１点と堆積土出土の甕１点のみである。その他に床面から土師器の高坏の破片が１点、甕の破片が４点出土しており、これらはいずれも非ロクロである。

第２号竪穴住居跡（SI２）

【位置】Ｉ区　N32.7～38.5　W85.5～92.5

【確認面】Ⅳ層上面で確認された。

【遺存状況】全体的に大きく削平を受けており、また、北東隅は第１号溝跡により失われている。

【重複】第１号溝跡と重複しており、これよりも古い。

【平面形・方向】平面形はほぼ隅丸方形をなしており、その南北方向は真北から西に寄っており、Ｎ－13.5°－Ｗである。

【規模】規模は東西は5.20m、南北は5.10mである。

また、床面積は 15.54㎡である。

【堆積土】暗褐色のシルトで、層中に炭化物・焼土を多量に含む堆積土が１層認められたのみである。

【壁の状況】わずかに残存する壁はⅣ層からなる。その壁高は最も高いところで６cm前後である。

【床面の状況】中央部分はⅣ層を、壁寄りの部分は住居掘り方埋土を床面としている。床面はやや起伏があるものの、概して平坦である。

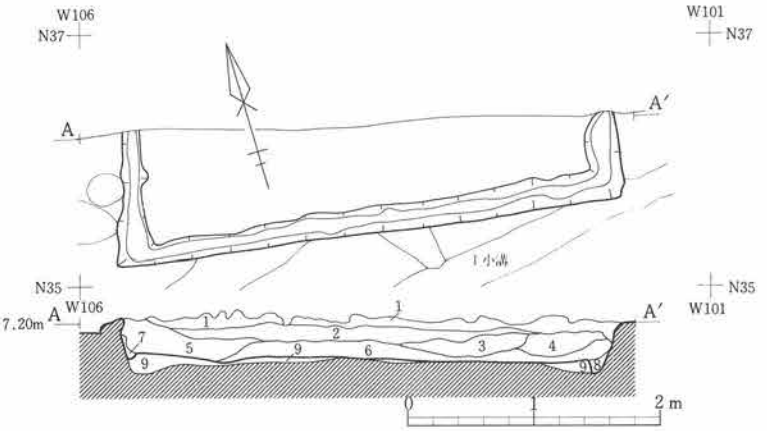
【カマド】北辺中央付近で、焼け面が認められたが、その付近がカマドの燃焼部と考えられる。

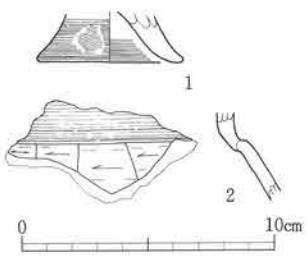
【貯蔵穴状ピット】明確にはできなかったが、カマドとの位置関係やピット内の堆積土の特徴などからP2とP18がその可能性が考えられる。

【柱穴】床面からは20個のピットが検出された。それらの中で柱痕跡の存在、ピットの規模・配置などから、P1・P7・P9・P14が主柱穴と考えられる。その他のピットでは堆積土中に焼土・炭化物・骨片を含むピットがいくつか認められた。柱穴とは考えにくいが、この住居に伴ったピットの可能性が高い。

【周溝】住居の南西隅と北西隅、北壁の東半部の３ヶ所を除いてめぐっている。ただし、東辺は壁の直下ではなく、やや内側を走行している。規模は、幅が20～38cm、深さ３～10cmで、断面は皿状をなす。

【特記事項】この住居に伴う可能性が考えられた貯

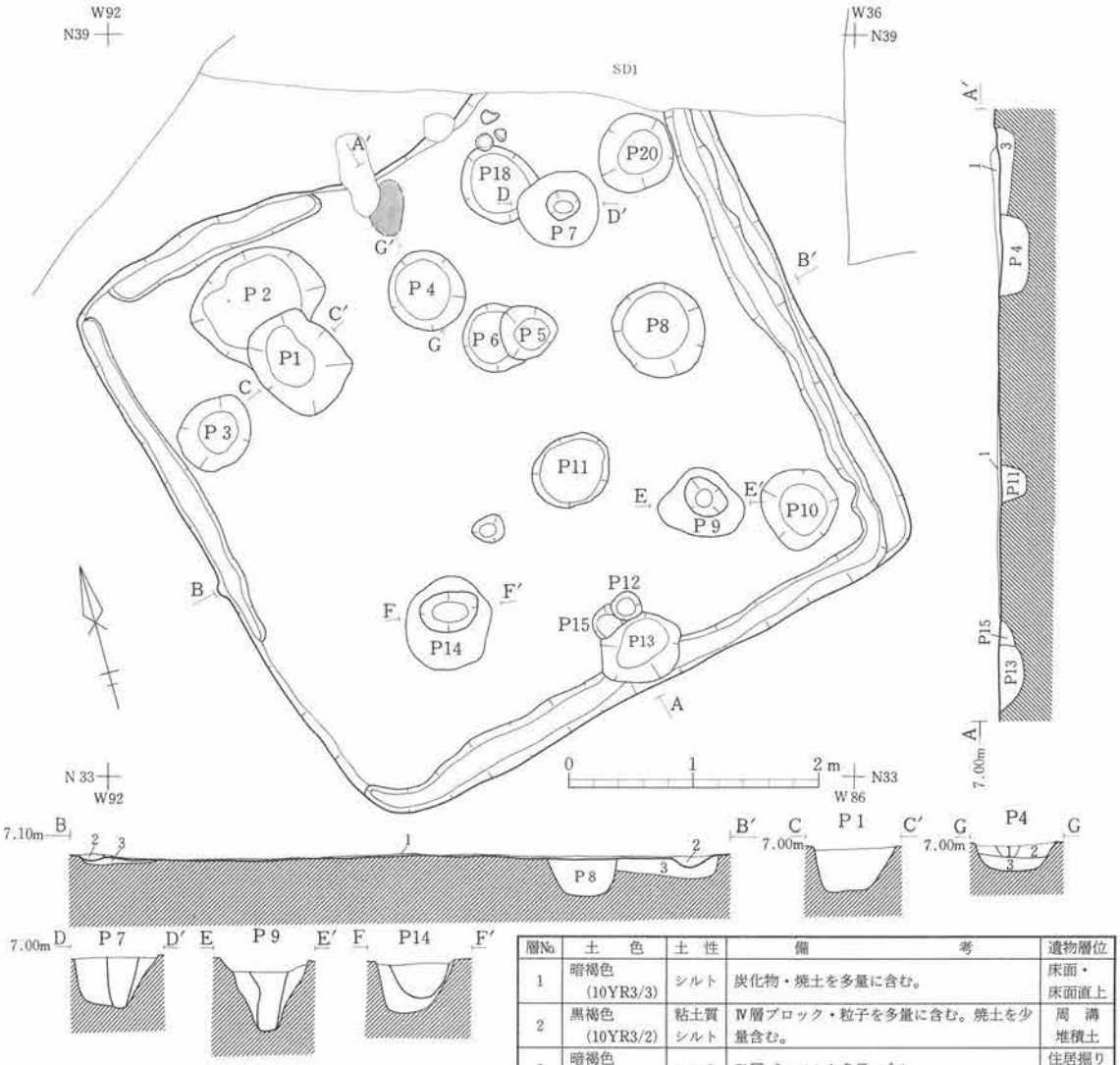




層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	基本層のⅢb層に近い。Ⅳ層ブロックをわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	１層に比べて黒み、粘性がわずかに強い。Ⅳ層ブロック・粒子を含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子が多量に混じる。	3
4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子が多量に混じる。３層に比べて混入するのはブロックより粒子が多い。	4
5	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を少量含む。	5
6	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を少量含む。南と東側方面からの流入土と考えられる。	6
7	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	黒みがもっとも強い。	周溝堆積土
8	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土	ややグライ化する。	
9	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	住居掘り方埋土

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 高坏	床面	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	脚部 1/4	－	(5.8)	－	－	C－1
2	土師器 甕	堆２層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラケズリ	破片	－	－	－	－	C－2

第27図　第１号竪穴住居跡と出土遺物



層No.	土　色	土　性	備　考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物・焼土を多量に含む。	床面・床面直上
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。焼土を少量含む。	周　溝堆積土
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	住居掘り方堆土

P4堆積土

層No.	土　色	土　性	備　考	遺物層位
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	粘性・しまり・混入土なし	堆積土
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	焼土・炭化物・Ⅳ層ブロックを多量に含む。粘性・しまりあり、骨片わずかに混じる。	
3	黒　色 (10YR1.7/1)	シルト	粘性・しまりなし、灰が黒化したと考えられる。	

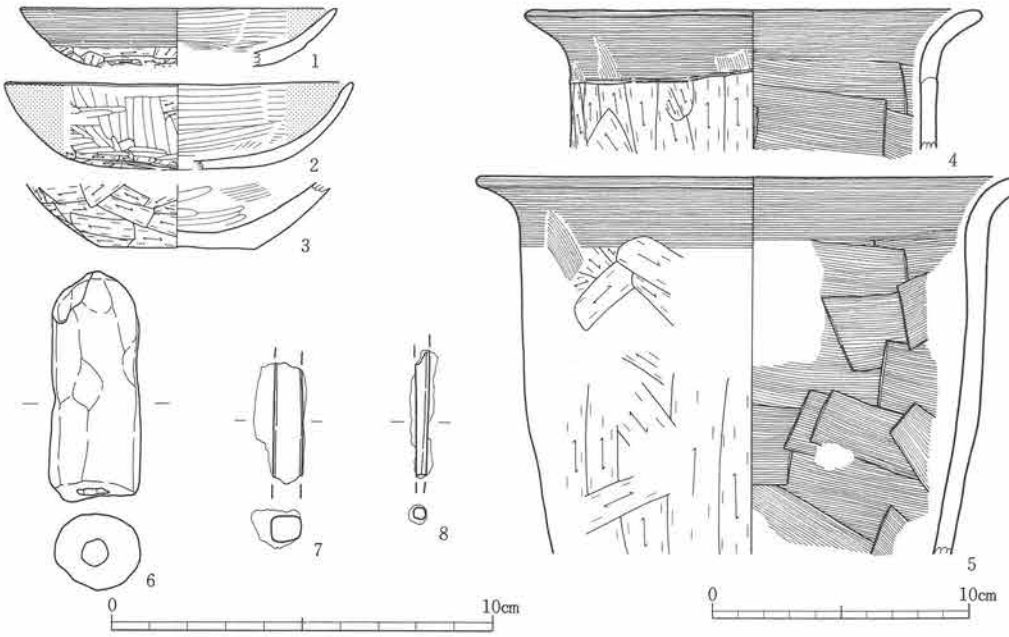
ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7		P8	P9		P10
項目							掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡	
形　状	隅丸長方形	楕円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	不整円形	楕円形	円形
大きさ	84 × 66cm	110×(60)cm	64 × 56cm	66 × 60cm	46 × 44cm	(30)× 56cm	66 × 62cm	27 × 23cm	76 × 72cm	69 × 56cm	37 × 28cm	66 × 62cm
深　さ	33.5cm	21.5cm	19.0cm	23.0cm	17.5cm	14.5cm	40.0cm	39.0cm	26.0cm	60.0cm	54.0cm	17.0cm
土色 土性 備考	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト 人為堆積	にぶい黄橙色 (10YR4/3) 粘土質シルト 焼土を含む。人為堆積	暗褐色 (7.5YR3/3) 粘土質シルト 焼土、炭化物、骨片を含む。人為堆積	断面図あり	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト 炭化物、焼土を含む。人為堆積	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト 焼土、骨片を含む。人為堆積	暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト	暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト 人為堆積	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト 焼土、骨片を含む。人為堆積	暗褐色 (10YR3/4) シルト	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト 焼土、炭化物を含む。

ピットNo.	P11	P12	P13	P14		P15	P16	P17	P18	P19	P20
項目				掘り方	柱痕跡						
形　状	円形	円形	楕円形	円形	楕円形	(円形)	円形	(楕円形)	円形	楕円形	円形
大きさ	68 × 58cm	25 × 23cm	70 × 55cm	75 × 70cm	48 × 34cm	(21)×(20)cm	32 × 29cm	(15)× 23cm	(53)× 48cm	26 × 21cm	66 × 61cm
深　さ	26.5cm	15.0cm	16.0cm	43.0cm	42.0cm	11.5cm	18.5cm	15.0cm	12.5cm	9.5cm	25.5cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト 焼土、骨片を含む。人為堆積	暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト 人為堆積	暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	褐色 (7.5YR4/3) 粘土質シルト 焼土、骨片を含む。人為堆積	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト	暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト 人為堆積

第28図　第２号竪穴住居跡

蔵穴状ピットのP2・P18が柱穴により切られていること、東辺の周溝が壁から内側に寄って巡っていることなどから、この住居は数時期の変遷があったものと推測される。

【出土遺物】住居内の出土遺物には土師器・須恵器・土製品・鉄製品がある。これらは床面および堆積土、ピット内堆積土から出土しており、いずれにおいても出土状況に規則性はみられなかった。図示できたのは土師器5点・土製品1点・鉄製品2点と数は少ない。土師器はいずれも製作時にロクロを使用していないものである。坏は底部が丸底状のもので、1は口縁部と体部との境に軽い段をもち、2はそれが認められない。甕は体部が長胴をなすもので、口縁部との境に軽い段をもつものと、もたないものがみられる。その他の図示できなかった土師器の破片資料も全て非ロクロであった。また、その他に堆積土ではあるが、須恵器甕の破片が数点出土している。土製品は土錘で、円筒状をなすものである。鉄製品はいずれも一部のみが残存しており、鉄鏃の可能性が考えられるものである。



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	床面・堆	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部 1/5	(12.4)	—	—	—	C－3
2	土師器 坏	堆	ヘラケズリ・ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部 3/4	13.6	—	(3.5)	73－7	C－4
3	土師器 甕	床面直上 堆上部	ヘラケズリ	ヘラナデ・ヘラミガキ	体部～底部 1/3	—	(6.0)	—	—	C－5
4	土師器 甕	堆	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部 1/4	(17.9)	—	—	75－4	C－6
5	土師器 甕	堆上部	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部 1/5	(21.8)	—	—	75－5	C－7

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
6	土錘	床面直上	完形。外面オサエ後、一部ミガキ。	6.0	2.3	2.0	30.4	0.7	93－13	土－1

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
7	鉄製品 鉄鏃？	堆上	両端欠損。身か茎？ 断面方形に近い。	(3.2)	0.8	0.7	(10.8)	—	N－1
8	鉄製品 鉄鏃？	堆上	両端欠損。茎？ 断面円形に近い。	(3.4)	0.3	0.3	(1.8)	100－21	N－2

第29図　第2号竪穴住居跡出土遺物

第3号竪穴住居跡（SI 3）

【位置】Ⅰ区　N28.9～32.7　W8.3～22.2

【確認面】Ⅳ層上面で確認された。

【遺存状況】ほぼ全体が検出されたが、全体的に大きく削平を受けている。

【重複】第1号井戸跡・第5号土坑と重複しており、いずれよりも古い。

【平面形・方向】隅丸方形をなし、南北方向は真北からわずかに東に寄っており、N－5.5°－Eである。

【規模】東西は3.58m、南北は3.52mである。また、床面積は11.6m²前後と推定される。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層で、将棋倒し状に堆積している。

【壁の状況】Ⅳ層を壁としている。壁の立ち上がりは比較的ゆるやかである。残存壁高は南壁で14cmである。

【床面の状況】中央部はⅣ層を、その他は住居掘り方埋土を床面としている。床面はほぼ平坦である。

【カマド】確認されなかった。しかし、北壁中央部分が他の遺構で大きく損なわれており、その部分にカマドが存在した可能性もある。

【貯蔵穴・柱穴】検出されなかった。

【周溝】壁際直下を全周する。幅は13～34cm、深さは15cm前後で、断面は「U」字状を呈する。

【出土遺物】出土遺物には土器と石製品がある。図示できたのは土師器3点と石製品4点のみである。土師器はいずれも坏で、全体が知りうるものはないが、底部が丸底状をなすものと推測される。2・3は口縁部と体部の境に稜をもつものである。その他の図示できなかった破片資料も全て非ロクロである。石製品は自然の円礫に磨面や敲打痕をもつものである。

第4号竪穴住居跡（SI 4）

【位置】Ⅱ区　N11.2～21.2　W105.1～110.3

【確認面】Ⅳ層上面で確認された。

【遺存状況】対角線の西側半分が調査区外へ延びている。部分的に溝跡に切られている。

【重複】第13号溝跡と重複しており、それよりも古い。

【平面形・方向】確認できるのは東辺と南辺のみであるが、平面形はほぼ隅丸方形を基調とするものと推定される。方向は東辺方向でN－24°－Wである。

【規模】規模は東辺が7.94m、南辺が確認できるのは6.16mで、さらに西側へ延びている。床面積は27.4m²以上である。

【堆積土】6層認められた。いずれも自然堆積層であり、住居中央部の方向に将棋倒し状に堆積している。

【壁の状況】全てⅣ層を壁としており、周溝底面よりやや急激に立ち上がる。残存壁高は約20cmである。

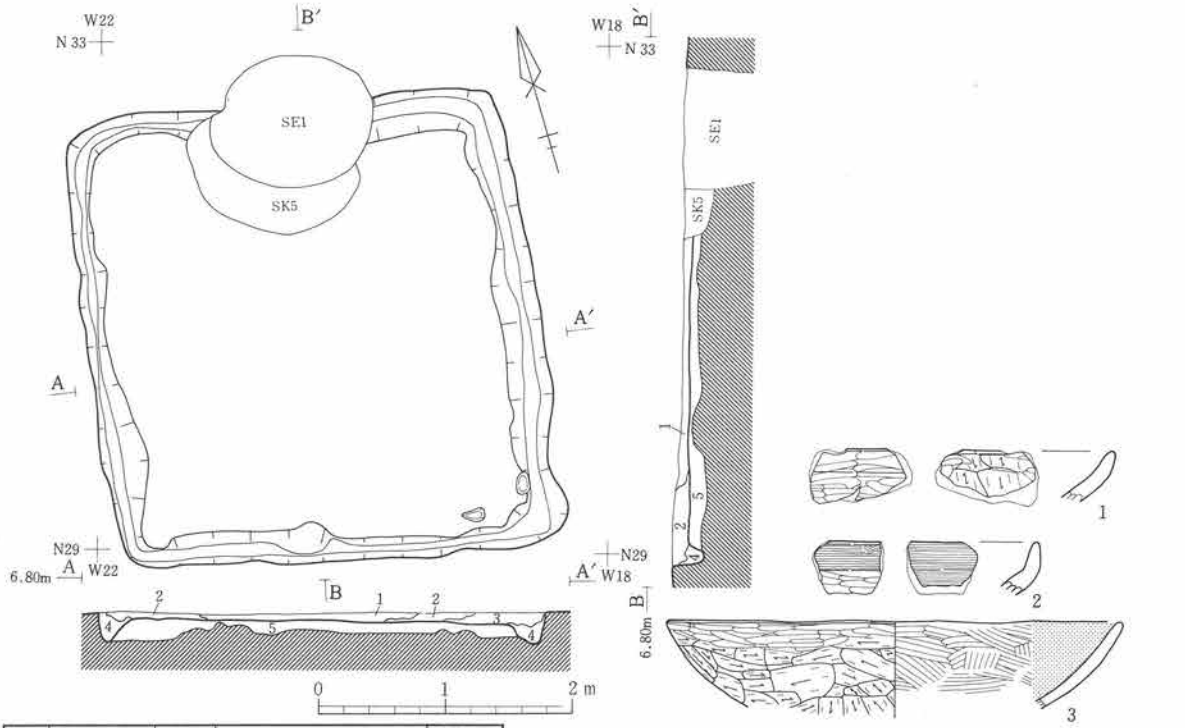
【床面の状況】第13号溝跡によって大きく損なわれているが、残存する部分ではほぼ平坦である。中央部はⅣ層を、その周辺は住居掘り方埋土を床面としている。住居周縁部の周溝からさらに内側には一部を除いて幅20～40cm、高さ約10cmのテラス状の高まりが巡っている。

【カマド・貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

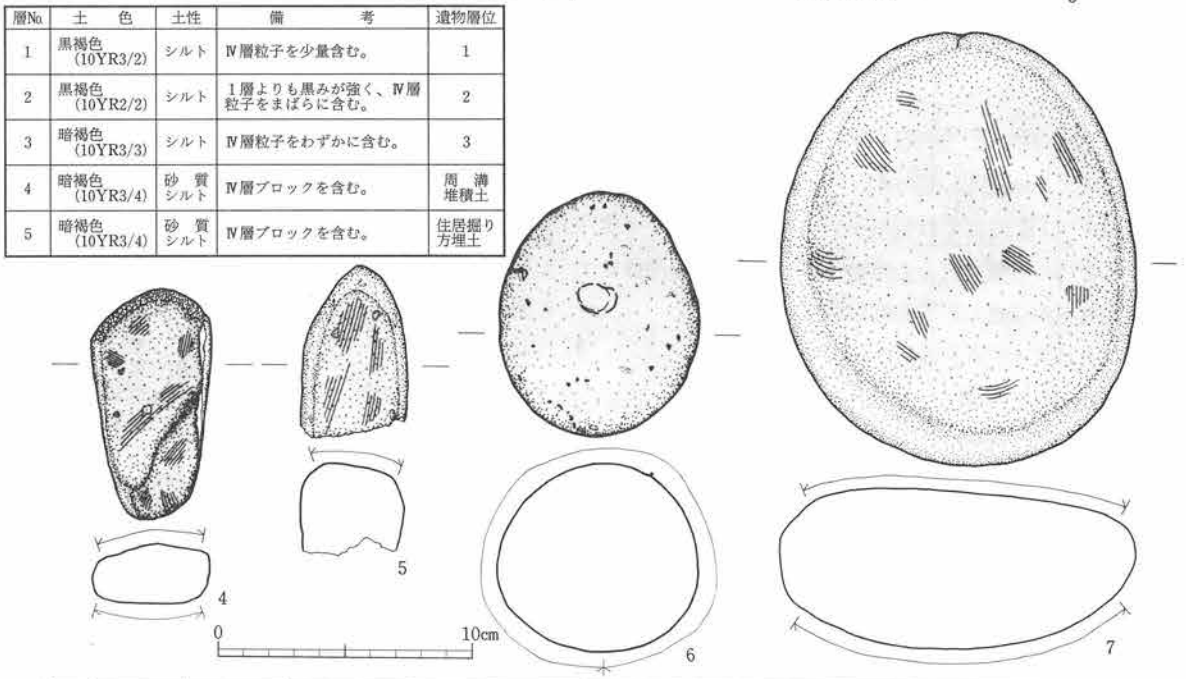
【柱穴】住居内からは21個のピットが検出された。その中で、配置・規模などから、P1・P11が主柱穴と考えられる。また、壁際のP6・7・10・14・15・16・17・18・19・20は壁柱穴の可能性が考えられる。

【周溝】北東隅を除く大部分において、壁際直下で確認された。幅は約40cm、深さは約10cmで、断面形はほぼ「U」字形をなしている。底面は起伏が大きく認められる。

【出土遺物】出土遺物には、土師器・須恵器・土製品・石製品・弥生土器・鉄滓があり、図示できたのは土師器10点・須恵器5点・土製品3点・石製品2点・弥生土器1点である。土師器には坏・高坏・甕



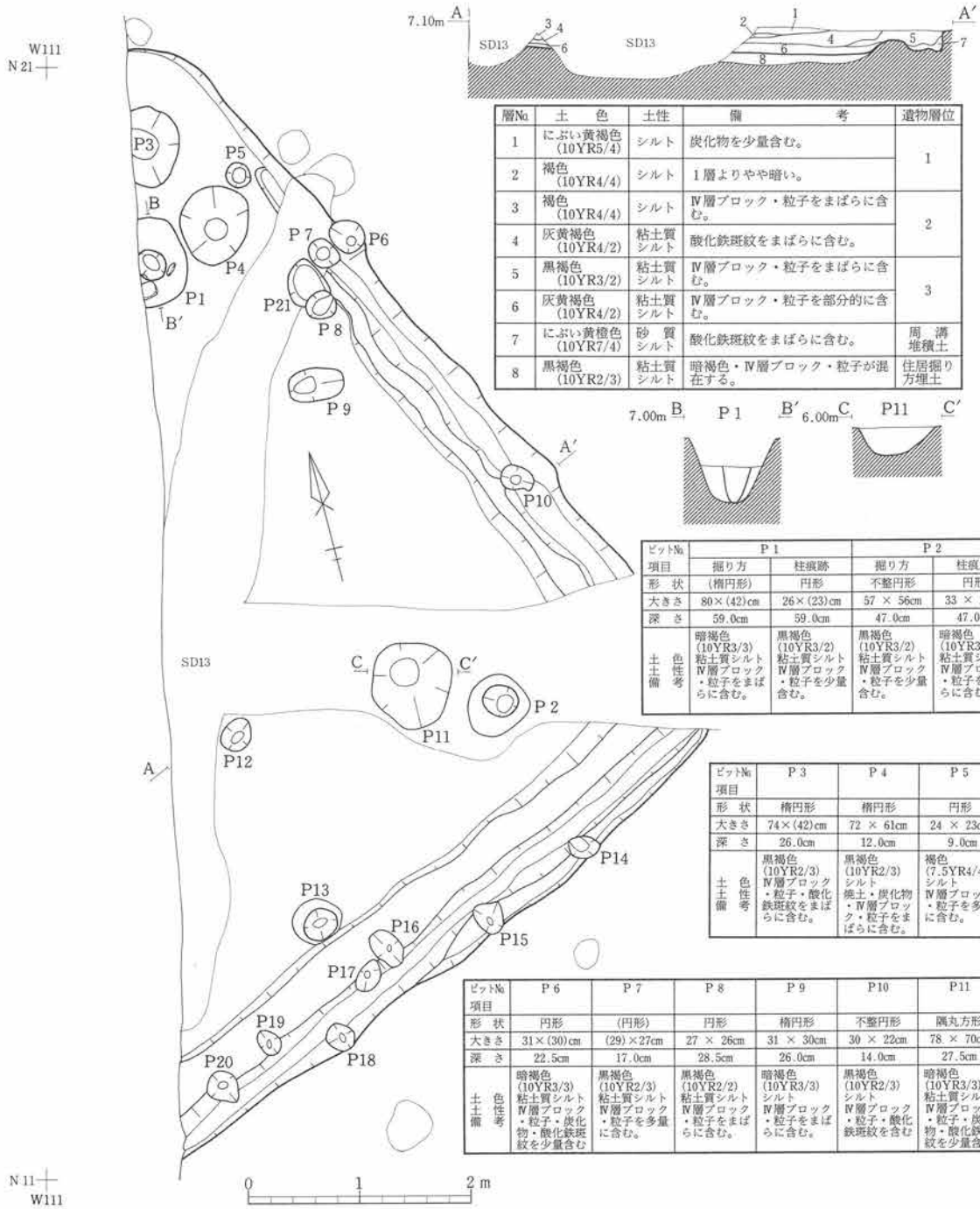
層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層粒子を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	1層よりも黒みが強く、Ⅳ層粒子をまばらに含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層粒子をわずかに含む。	3
4	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを含む。	周溝堆積土
5	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを含む。	住居掘り方埋土



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ヘラミガキ	ミガキ・ヘラケズリ	破片	−	−	−	−	C−8
2	土師器 坏	堆	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	ヨコナデ	破片	−	−	−	−	C−9
3	土師器 坏	周溝堆上面	ミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部〜体部 1/4	(18.0)	−	−	−	C−10

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
4	敲打痕をもつ礫	堆3層	円棒状の礫を利用。上下2面に磨面があり、上端縁に敲打痕が認められる。	9.0	4.75	2.8	165	安山岩	98−7	石−102
5	磨面をもつ礫	堆	下部欠損。円棒状の礫を利用。一面に磨面が認められる。	(7.0)	4.3	(3.6)	(150)	安山岩	−	石−99
6	磨面をもつ礫	堆3層	球に近い礫を利用。全体に磨面あり。	9.6	7.8	7.3	745	石英斑岩	−	石−97
7	磨面をもつ礫	堆2層	扁平な礫を利用。上下2面に磨面が認められる。	17.0	14.0	6.6	2460	砂岩	98−5	石−94

第30図　第3号竪穴住居跡と出土遺物



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	炭化物を少量含む。	1
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	1層よりやや暗い。	
3	褐色 (10YR4/4)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子をまばらに含む。	2
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	酸化鉄斑紋をまばらに含む。	
5	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子をまばらに含む。	3
6	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を部分的に含む。	
7	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	砂質シルト	酸化鉄斑紋をまばらに含む。	周溝堆積土
8	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	暗褐色・Ⅳ層ブロック・粒子が混在する。	住居掘り方埋土

7.00m B　P 1　B′　6.00m C　P11　C′

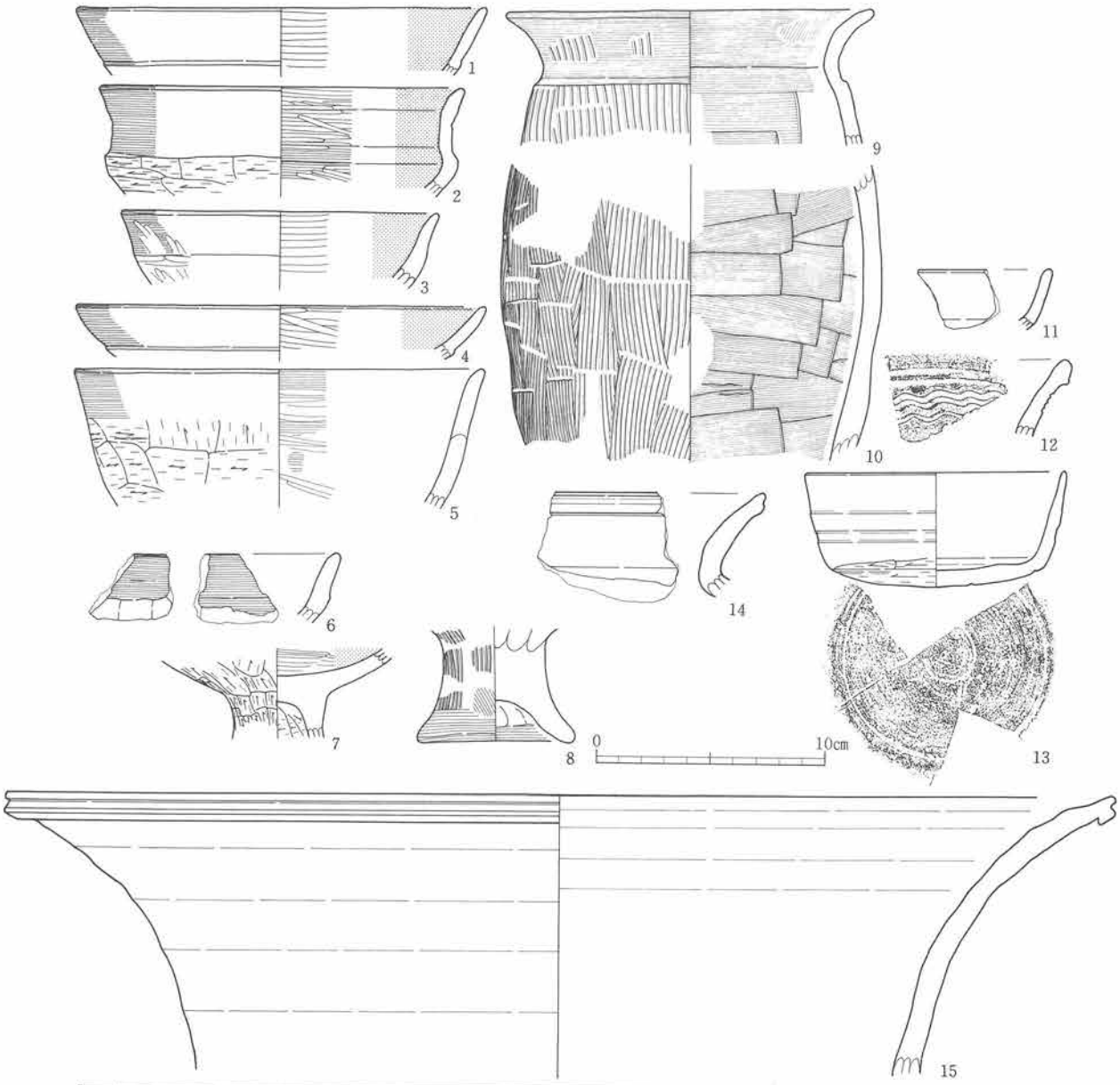
ピットNo.	P 1		P 2	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	(楕円形)	円形	不整円形	円形
大きさ	80×(42)cm	26×(23)cm	57 × 56cm	33 × 28cm
深さ	59.0cm	59.0cm	47.0cm	47.0cm
土色土性備考	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子を少量含む。	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子をまばらに含む。

ピットNo.	P 3	P 4	P 5
項目			
形状	楕円形	楕円形	円形
大きさ	74×(42)cm	72 × 61cm	24 × 23cm
深さ	26.0cm	12.0cm	9.0cm
土色土性備考	黒褐色 (10YR2/3) Ⅳ層ブロック・粒子・酸化鉄斑紋をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 焼土・炭化物・Ⅳ層ブロック・粒子をまばらに含む。	褐色 (7.5YR4/4) シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。

ピットNo.	P 6	P 7	P 8	P 9	P10	P11
項目						
形状	円形	(円形)	円形	楕円形	不整円形	隅丸方形
大きさ	31×(30)cm	(29)×27cm	27 × 26cm	31 × 30cm	30 × 22cm	78 × 70cm
深さ	22.5cm	17.0cm	28.5cm	26.0cm	14.0cm	27.5cm
土色土性備考	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物・酸化鉄斑紋を少量含む	黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子をまばらに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層ブロック・粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層ブロック・粒子・酸化鉄斑紋を含む	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物・酸化鉄斑紋を少量含む

ピットNo.	P12	P13		P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21
項目		掘り方	柱痕跡								
形状	略円形	(円形)	円形	略円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	不整円形	(楕円形)
大きさ	30 × 27cm	45×(40)cm	30 × 29cm	24 × 21cm	32 × 26cm	28 × 24cm	31 × 20cm	26 × 25cm	27 × 19cm	33 × 18cm	(44)×(36)cm
深さ	9.5cm	26.5cm	26.5cm	12.5cm	27.5cm	17.0cm	10.5cm	28.0cm	18.5cm	21.0cm	11.5cm
土色土性備考	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層ブロック・粒子・酸化鉄斑紋を含む	黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層ブロック・粒子・酸化鉄斑紋をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層ブロック・粒子・酸化鉄斑紋をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層ブロック・粒子・酸化鉄斑紋をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層ブロック・粒子・酸化鉄斑紋をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層ブロック・粒子・酸化鉄斑紋をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層ブロック・粒子・酸化鉄斑紋をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層ブロック・粒子・酸化鉄斑紋をまばらに含む。	褐色 (7.5YR4/4) シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。

第31図　第4号竪穴住居跡



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片 1/12	(18.0)	−	−	−	C−11
2	土師器 坏	堆2層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラミガキ・黒色処理	口縁部〜体部 1/8	(16.0)	−	−	−	C−12
3	土師器 坏	堆2層	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片 1/10	(14.0)	−	−	−	C−13
4	土師器 坏	堆2層	ヨコナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片 1/12	(18.0)	−	−	−	C−14
5	土師器 坏	堆2層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラミガキ(全面ではない)	口縁部〜体部破片 1/8	(18.0)	−	−	−	C−15
6	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ	ヨコナデ	破片実測	−	−	−	−	C−16
7	土師器 高坏	堆2層	ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理(坏部)ヘラケズリ	坏部下半〜脚部の一部	−	−	−	−	C−17
8	土師器 高坏	堆2層	ハケメ・ナデ・ヨコナデ	指頭によるオサエ・ヨコナデ	脚部 1/2	−	(7.0)	−	−	C−18
9	土師器 甕	床面直上	ハケメ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ・ヘラナデ	口縁部〜体部上半 1/4	(16.2)	−	−	75−6	C−19
10	土師器 甕	床面直上	ハケメ	ヘラナデ	体部 4/5	−	−	−	−	C−20
11	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	破片実測	−	−	−	−	E−1
12	須恵器 甕	堆1層	ロクロナデ・波状の櫛描文	ロクロナデ	口縁部破片	−	−	−	−	E−2
13	須恵器 坏	堆2層	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	1/2	11.5	9.4	5.1	78−7	E−3
14	須恵器 甕	堆3層	ロクロナデ	ロクロナデ	破片実測	−	−	−	−	E−4
15	須恵器 甕	堆3層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/4	(48.9)	−	−	−	E−5

第32図　第4号竪穴住居跡出土遺物（1）

があり、全て製作に際してロクロは使用されていない。坏は底部が丸底状をなすとみられ、口縁部と体部との境に段や稜をもつものともたないものの両者がある。甕は体部が長胴形をなし、口縁部との境には強い段がみられる。須恵器は坏・甕があり、坏は体部下方に稜がみられ、底部が丸底状をなすものである。鉄滓は19個を数えるが、全て堆積土からの出土である。

第5号竪穴住居跡（SI 5）

【位置】II区　N4.2～S2.4　W101.7～108.8

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】全般的に削平を受けており、また他の遺構によって部分的に失われている。

【重複】第16・17・19号掘立柱建物跡と重複しており、それらよりも古い。

【平面形・方向】平面形は方形を基調とする。その長軸方向はN－37°－Wである。

【規模】規模は北西から南西方向が5.34m、北東から南北方向が5.30mである。床面積は26.39㎡である。

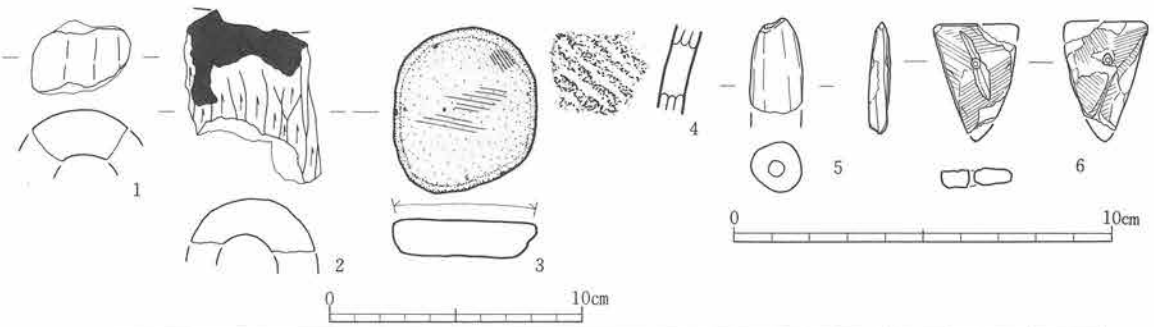
【堆積土】7層認められた。いずれも自然堆積層であり、住居の周縁部から中央部に向かい将棋倒し状に堆積している。その中のカマド内堆積土の7層には焼土・炭化物が多量に含まれていた。

【壁の状況】全てIV層を壁としており、周溝底面からほぼ直立ぎみに立ち上がる。壁高は平均すると約10cmである。

【床面の状況】中央部分はIV層を、住居周縁部は掘り方埋土を床面としている。床面はほぼ平坦で、それほどしまりはない。

【カマド】北西辺のほぼ中央でカマドが検出された。燃焼部は天井部が失われ、側壁部分が残存している。煙道部は削平により失われていた。燃焼部は幅が80cmで、奥行は焼け面の範囲から66cm前後とみられる。底面はやや凹凸がみられ、奥壁はゆるやかに立ち上がる。その中央よりやや西側で直立して据えられた棒状の河原石が検出されたが、表面が火熱により赤変しており、支脚に用いられたものと考えられる。側壁はIV層のシルトにより構築されている。

【貯蔵穴状ピット】カマドの右側において検出され



番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
1	フイゴの羽口	堆	破片。外面－ケズリ？　白針わずかに含む。	(2.9)	(3.9)	(2.9)	(21.4)	(1.7)	－	土－31
2	フイゴの羽口	堆1層	先端部破片。外面－ヘラケズリ。先端に溶解物付着。	(6.0)	(5.05)	(2.1)	(64.5)	(1.9)	94－5	土－32
5	土錘	堆2層	一端のみ。	(2.5)	1.4	1.3	(4.5)	0.4	93－19	土－25

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
3	磨面をもつ礫	堆1層	扁平な礫を利用。一面に磨面が認められる。	6.7	5.7	1.4	68	砂岩	98－6	石－98
6	石製模造品	堆2層	一部欠損。剣形である。二等辺三角形の形状で、鏑は作出されていない。孔径は2㎜である。	2.9	(2.2)	0.55	(3.7)	凝灰質頁岩	96－4	石－34

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	弥生土器甕？	堆1層	撚糸文　R。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	－	地－16

第33図　第4号竪穴住居跡出土遺物（2）

たが、新しい遺構により半分が失われている。平面形はほぼ円形で、規模は径約1 m、深さ18cmである。この貯蔵穴状ピット内およびその付近からは土器や河原石が多く検出されている。

【柱穴】住居の床面からは大きいピットが3個と、北東辺の周溝内からは小さいピットが10個検出された。前者はほぼ対角線上に位置することから、主柱穴と考えられ、後者は壁柱穴の可能性が考えられる。

【周溝】カマド付近を除く大部分において、壁際直下で確認された。断面形はほぼ「U」字形をなし、幅は約15cm、深さは約10cmである。

【出土遺物】住居内の出土遺物には、土器と土製品がある。これらは主にカマドや貯蔵穴状ピット付近の床面かその直上で出土している。図示できたのは土師器12点・縄文土器1点・弥生土器1点・土錘2点である。土師器には坏・手づくね土器・甕がある。坏はいずれも口縁部と体部との境に段をもち、体・底部は丸底状をなすもので、口縁部の立ち上がりには直立ぎみのものと外反するものの両者がみられる。甕には体部が長く、下部がふくらむものと、体部が球形に近いものがあり、後者には内面が黒色化されている例もみられる。

第6号竪穴住居跡（SI 6）

【位置】II区　N5.2～6.4　W76.3～79.3

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】住居の南西部のみが検出され、その他は調査区外に延びている。

【重複】ない。

【平面形・方向】検出された範囲から平面形は隅丸方形をなすものと考えられる。方向は南北方向で、真北方向よりわずかに西に寄り、N－10°－Wになりそうである。

【規模】規模は南北が1.40m以上、東西が2.40m以上である。確認された床面積は1.63m²である。

【堆積土】3層認められた。その中で3層はIV層ブロックを多量に混在しており、人為堆積と考えられる。

【壁の状況】IV層を壁としており、周溝底面からやや外傾して立ち上がっている。床面からの深さは19cmである。

【床面の状況】床面はほぼ平坦で、検出された範囲は全面住居掘り方埋土を床面としている。

【カマド・貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】主柱穴とみられるピットは確認されなかったが、周溝付近の床面から6～7cmの小ピットが5個検出された。堆積土は黒褐色の粘土質シルトである。その位置などから壁柱穴に関わるピットの可能性も考えられる。

【周溝】検出された範囲では全周している。底面はほぼ平坦で、幅は約20cm、床面からの深さは6cmである。

【出土遺物】出土遺物は極めて少なく、堆積土から図示した土師器甕1点と土師器甕の破片が1点出土したのみである。

第7号竪穴住居跡（SI 7）

【位置】II区　N 1～S0.6　W50.6～55.5

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】住居北側大半が他の遺構により切られている。また、南は調査区外に延びている。

【重複】第16号溝跡と重複しており、これより古い。

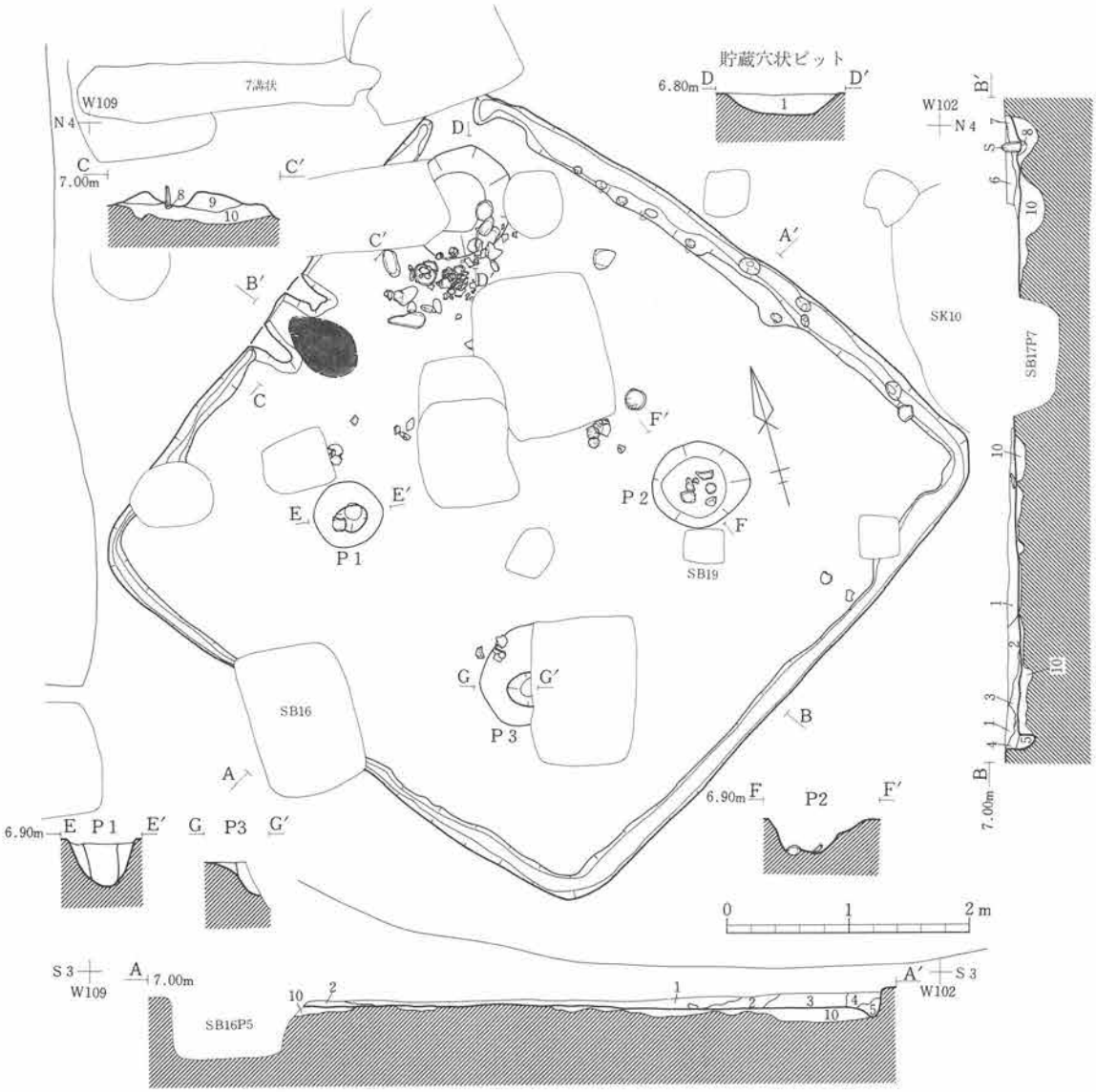
【平面形・方向】残存する部分から、隅丸方形をなすものと考えられる。南北方向は丁度真北方向（N－0°）を向いている。

【規模】東西方向は4.32m、南北方向は1.60m以上である。確認された床面積は5.88m²である。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層であり、南方向に将棋倒し状に堆積している。

【壁の状況】壁はIV層を壁としており、床面からややゆるやかに外傾する。残存壁高は14cmである。

【床面の状況】検出された範囲の床面は住居掘り方



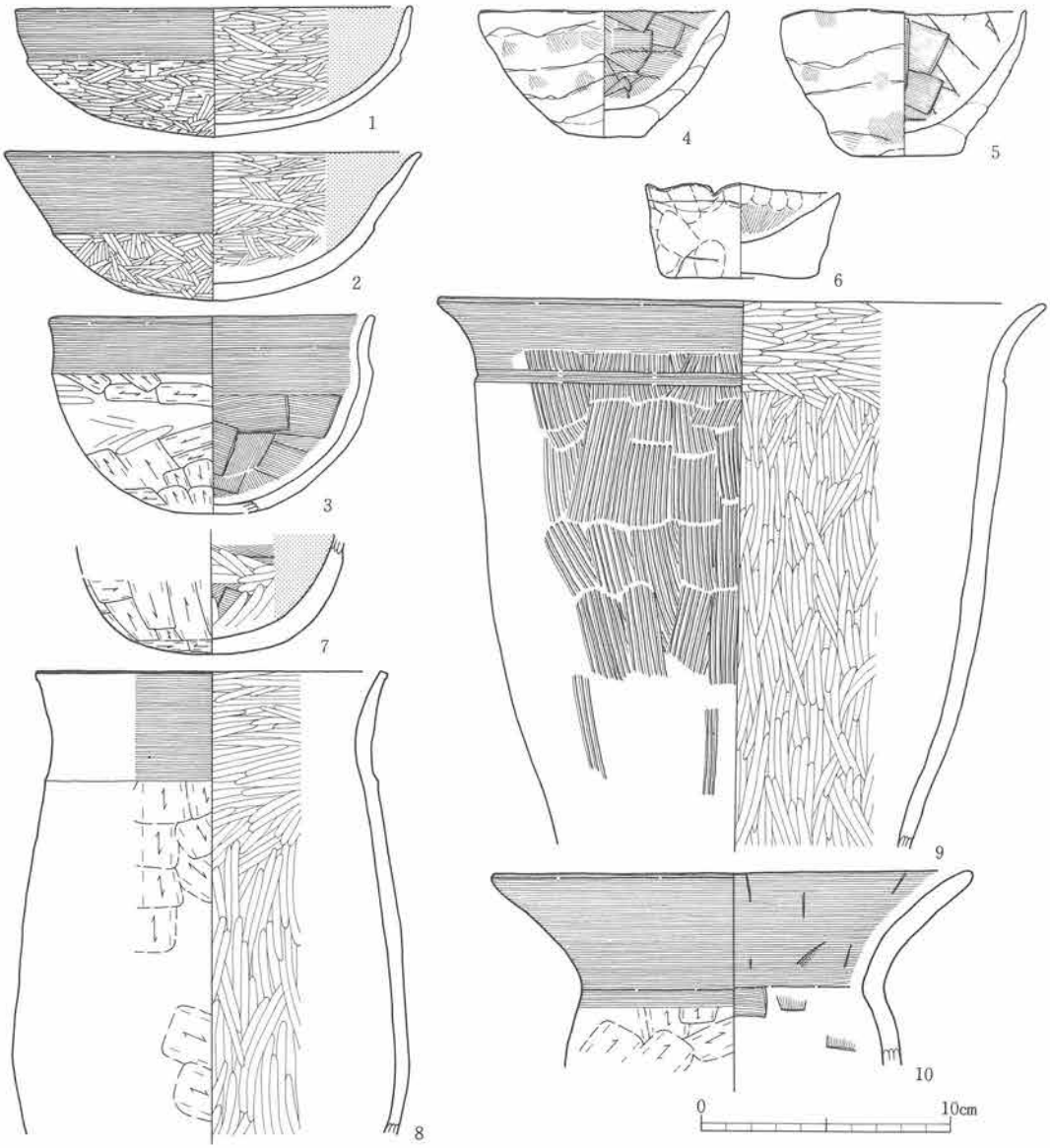
層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	Ⅳ層をブロック状に含む。土器片を少量含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	Ⅳ層粒子をまばらに含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	2層よりもⅣ層ブロック・粒子のまざりが少ない。	3
4	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	Ⅳ層粒子を少量含む。	4
5	暗褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	Ⅳ層をブロック状に含む。酸化鉄斑紋をまばらに含む。	5
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層粒子を少量含む。	6
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物・焼土を多量に含む。	7
8	暗褐色 (10YR3/3)	シルト		支柱掘り方
9	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	褐色・にぶい黄褐色・基本層Ⅳ層の小ブロックが混在する。	カマド構築土
10	褐色 (10YR4/4)	シルト	黒褐色・褐色・Ⅳ層ブロックが混在する。	住居掘り方埋土

ピットNo.	P 1		P 2	P 3
項目	掘り方	柱痕跡		
形状	円形	楕円形	円形	(楕円形)
大きさ	58 × 54cm	32 × 20cm	82 × 72cm	85×(41)cm
深さ	40.0cm	40.0cm	30.0cm	28.0cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロックを多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト 焼土・炭化物をわずかに含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロックを多く含む。

貯蔵穴状ピット堆積土

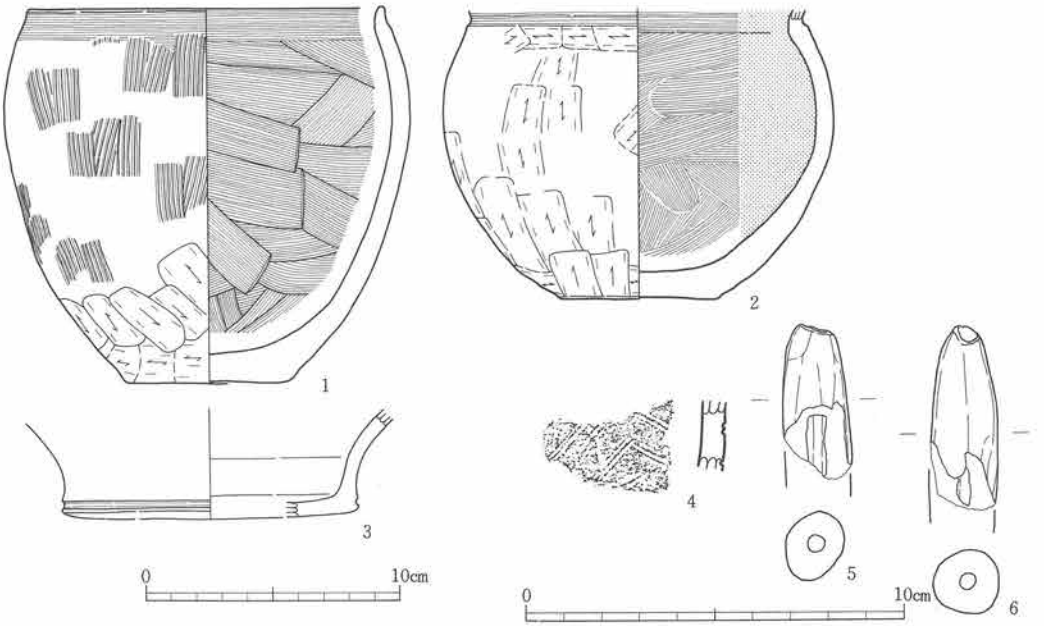
層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロックを多く含む。	1

第34図　第５号竪穴住居跡



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	床面直上	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	1/2	(15.8)	—	5.2	72－3	C－21
2	土師器 坏	周溝堆上から床面直上	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	2/3	(16.6)	—	6.0	72－5	C－22
3	土師器 坏	床面直上	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラナデ	7/8	12.8	—	7.9	72－4	C－23
4	土師器 手づくね土器	堆下部	指頭によるナデ	ヘラナデ	4/5	10.0	3.1	5.1	73－9	C－24
5	土師器 手づくね土器	P 2 底面	指頭によるナデ	ヘラナデ	完形	9.9	4.6	5.8	73－8	C－25
6	土師器 手づくね土器	堆・床面直上	指頭によるオサエ	指頭によるオサエ・ナデ	完形	7.75	6.2	3.8	73－10	C－26
7	土師器 甕	床面直上	ヘラケズリ	ヘラナデ・ヘラミガキ・黒色処理	底部	—	6.3	—	—	C－27
8	土師器 甕	床面直上	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	口縁部～体部 1/8	(14.0)	—	—	—	C－28
9	土師器 甕	床面	ヨコナデ・ハケメ	ヘラミガキ	1/6	(24.3)	—	—	—	C－29
10	土師器 甕	床面	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部 1/4	(19.2)	—	—	—	C－30

第35図　第５号竪穴住居跡出土遺物（１）



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	床面	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部 1/2欠損	(14.1)	6.5	14.8	75－7	C－31
2	土師器 甕	床面直上	ヨコナデ・ヘラケズリ	指頭によるナデ・ヨコナデ・黒色処理	1/2	－	6.2	－	75－8	C－32

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	縄文土器 鉢	床面	底部が丸底ぎみの鉢とみられ、体部は大きく外反する。体部下部に1条の沈線あり。内外面ともヘラミガキ。	体部～底部 1/8	－	(11.7)	－	86－2	縄－1
4	弥生土器 壺	堆上	二本平行沈線による山形文。内外面ともナデ。	体部破片	－	－	－	87－18	弥－1

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
5	土錘	掘り方	一端欠損。外面－オサエ。白針わずかに含む。	(3.95)	1.8	1.8	(10.6)	0.45	93－14	土－9
6	土錘	掘り方	一端欠損。外面－オサエ？白針わずかに含む。	(4.9)	1.75	1.7	(12.8)	0.45	93－12	土－8

第36図　第5号竪穴住居跡出土遺物（2）

埋土を床としている。やや凹凸が認められる。

【カマド・貯蔵穴状ピット】認められなかった。

【柱穴】床面からは6個のピットが検出されたが、いずれも浅く、柱穴と判断できるものはなかった。

【周溝】認められなかった。

【出土遺物】堆積土から図示不可能な土師器破片が12点出土したのみである。これらはいずれも製作時にロクロを使用していないものである。

第8号竪穴住居跡（SI 8）

【位置】II区　N－0－S～S1.3　W28.9～33.6

【確認面】IV層上面および河川跡堆積土上面で確認されたが、その後の断面観察の結果、III b 層上面、河川跡から掘り込まれていることが判明した。

【遺存状況】住居北側のみが検出され、南側は調査区外へ延びている。

【重複】第1号溝状遺構と重複しており、それよりも新しい。

【平面形・方向】平面形は検出された部分のプランから隅丸方形を基調とするものと考えられる。北辺と直交する方向はN－10.5°－Eであり、真北方向よりやや東に寄っている。

【規模】規模は東西方向が4.50m、南北方向が残存長で1.10mである。確認された床面積は4.55㎡であ

る。

【堆積土】３層確認された。いずれも自然堆積層であり、住居の中央部に向かって堆積している。住居の大半が河川跡堆積土を掘り込んでいることから堆積土は全体的に砂っぽい。

【壁の状況】IV層および河川跡堆積土を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は約10cmである。

【床面の状況】検出された範囲では、住居掘り方埋土を床面としている。その埋土は砂質シルトであるため、床面上面はしまりがなく、凹凸が著しい。

【カマド】調査区壁際で、焼土・炭化物を含む凹みが確認されたが、これらの施設に関わるものかどうかは不明である。

【貯蔵穴状ピット】ない。

【柱穴】北壁を中心に４個の径20cm前後のピットが検出された。配置関係や大きさなどから壁柱穴と考えられる。また、東壁の一部でも壁面がピット状に広がっており、そこも壁柱穴の痕跡の可能性が考えられる。

【周溝】北東隅除いて、ほぼ全周する。幅は35cm、床面からの深さは11cmである。

【出土遺物】全て堆積土からの出土で、図示できたのは須恵器１点のみである。その他に土師器破片が９点・赤焼土器片１点・須恵器破片が９点出土している。土師器はいずれも製作時にロクロは使用されていないものである。

第９号竪穴住居跡（SI 9）

【位置】II区　N0.7～S1.8　W18.2～22.4

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】北半部のみが検出され、南半部は調査区外に延びている。

【重複】一部が小溝跡と重複しており、それよりも新しい。

【平面形・方向】検出した部分から隅丸方形を基調にするものと思われる。その方向は南北で真北方向から少し東に寄っており、N－21°－Eである。

【規模】規模は東西方向で4.04mであり、南北方向は2.40m以上である。確認された床面積は8.02㎡である。

【堆積土】３層確認された。いずれも自然堆積層であり、住居周縁部から中央に向かって堆積ている。

【壁の状況】壁の崩落によるものか、全般的にゆるやかに外傾する。

【床面の状況】中央部はIV層を、その周囲は住居掘り方埋土を床面としている。住居掘り方は住居周縁部を断面「U」字状に巡っており、比較的規則性が認められる。床面はわずかに起伏はあるものの概して平坦である。

【カマド・貯蔵穴状ピット】検出された範囲からは認められなかった。

【柱穴】東壁に沿って柱痕跡をもつピットが１個認められたが、住居に伴うものかどうかは明確ではない。

【周溝】検出された範囲にはない。

【出土遺物】堆積土および掘り方埋土から少量の土器が出土した。図示できたのは土師器３点と弥生土器１点のみである。その他に19点の土師器破片が出土しているが、図示したものも含めて、土師器はいずれも製作時にロクロを使用していない。

第10号竪穴住居跡（SI 10）

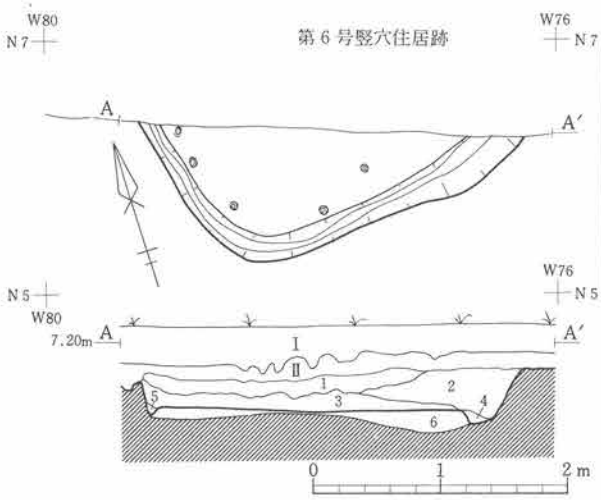
【位置】II区　N1.4～S2.1　W7.1～12.7

【確認面】IV層上面で検出された。

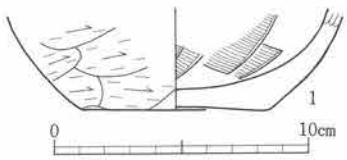
【遺存状況】北半部のみ検出されたが、他の遺構により部分的に切られている。また、南半部は調査区外に延びている。

【重複】第１・２号火葬墓、第13・15・17号土坑墓などと重複しており、いずれよりも古い。

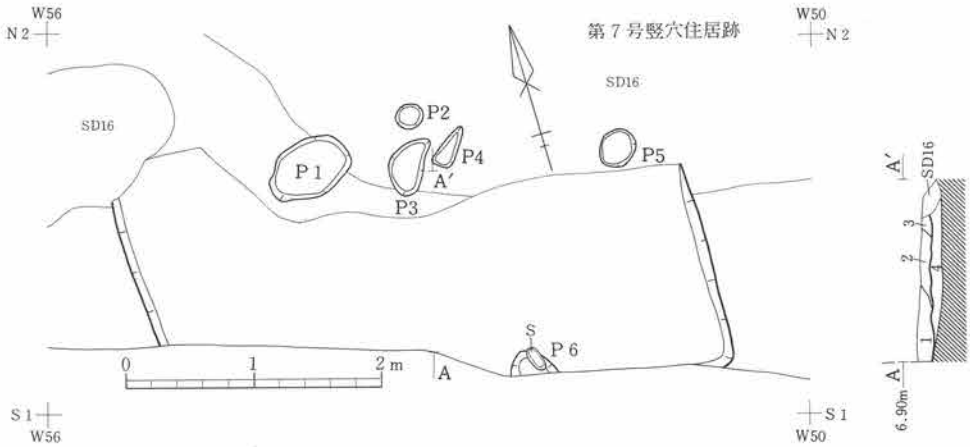
【平面形・方向】平面形は検出された範囲から隅丸方形をなすものと考えられる。その方向は南北方向



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を少量含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	Ⅳ層粒子をわずかに含む。	
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロックを多く含む。10YR2/2粘土質シルトのブロックが混入。人為堆積	
4	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	周溝堆積土
5	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	
6	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	住居掘り方埋土



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 底径	法量 (cm) 器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	堆	ヘラケズリ	ヘラナデ	体部下半～底部 1/2	—	(7.4)	—	—	C－33



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。	堆積土
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を少量含む。	
4	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	住居掘り方埋土

第37図　第6・7号竪穴住居跡と出土遺物

ピットNo. / 項目	P1	P2	P3	P4	P5	P6
形状	楕円形	円形	楕円形	三角形	円形	(円形)
大きさ	68 × 47cm	22 × 22cm	49 × 28cm	36 × 14cm	31 × 28cm	38×(21)cm
深さ	9.5cm	5.5cm	10.0cm	10.5cm	16.0cm	12.0cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロックを多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロックを多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロックを多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロックを多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロックを多く含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 焼土・炭化物を含む。焼土は特に多い。

で真北よりやや西に寄っており、N－11.5°－Wである。

【規模】規模は北辺で4.40mであり、東辺で3.16m以上である。確認された床面積は8.5㎡である。

【堆積土】6層確認された。その内、4～6層は煙道内堆積土である。住居内堆積土は住居中央に向かい将棋倒し状に堆積している。

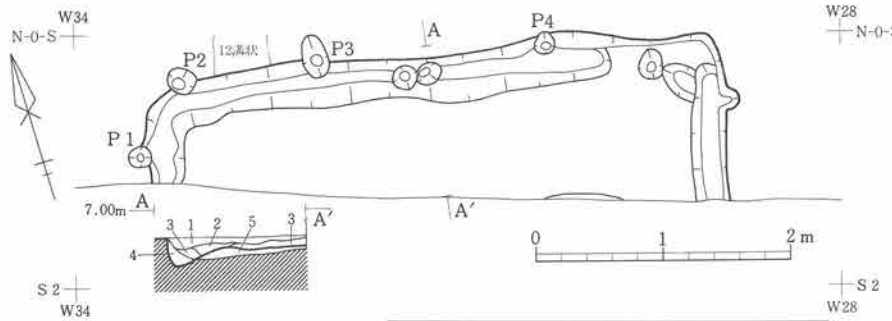
【壁の状況】全てⅣ層を壁としている。ほぼ垂直に

立ち上がり、残存壁高は約20cmであり、比較的遺存状態の良好な住居跡である。

【床面の状況】住居中央部はIV層を、それ以外は住居掘り方埋土を床としている。ほぼ平坦で、比較的堅くしまっている。

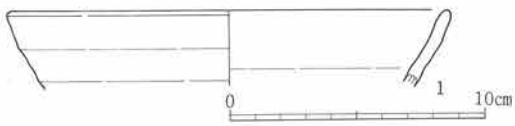
【カマド】北辺中央にカマドが存在したものと考えられ、その煙道部のみが検出された。煙道部は幅が約30cmで、深さは8cm前後であり、北辺から約2mの長さが確認された。

【出土遺物】床面直上および貯蔵穴状ピット内・堆積土・ピット内から土器が出土した。図示できたのは土師器8点あり、その他に土師器破片54点・須恵器破片2点がある。土師器は全て製作時にロクロを使用しないものである。坏・高坏・甕の器種がみられ、坏は体・底部が丸底状をなし、口縁部が内弯ぎみに立ち上がるものと、口縁部との境に段をもつものがある。



層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	砂粒・凝灰岩粒を含む。焼土ブロックを少量含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	砂粒・凝灰岩粒を含む。焼土ブロックを少量含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	砂	IV層ブロックをわずかに含む。	
4	暗褐色 (10YR3/4)	砂		周溝堆積土
5	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	砂粒を多量に含む。	住居掘り方堆土

ピットNo 項目	P1	P2	P3	P4
形状	円形	円形	楕円形	円形
大きさ	19 × 18cm	22 × 19cm	36 × 20cm	18 × 16cm
深さ	33.5cm	39.5cm	32.0cm	33.5cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) シルト IV層ブロック・粒子を少し含む。	黒褐色 (10YR3/2) シルト IV層ブロック・粒子を含む	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 砂粒を多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト 砂粒を多く含む。



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 坏	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/10	(17.4)	—	—	—	E−6

第38図　第8号竪穴住居跡と出土遺物

【貯蔵穴状ピット】北東隅から1個検出された。平面形はほぼ円形で、規模は長軸が82cm、短軸が72cm、深さが35cmである。堆積土は3層認められ、いずれもレンズ状に堆積している。

【柱穴】床面からは6個のピットが検出された。その内、配置関係などからP2・3・4の3個が柱穴と考えられる。ただし、P3とP4については深さが浅く、さらに検討を要する。

【周溝】検出された範囲からは確認されなかった。

第11号竪穴住居跡（SI 11）

【位置】III区　E3.4〜8.6　S21.5〜25

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】比較的遺存状況は良好で、住居のほぼ全体が検出された。

【重複】第12号竪穴住居跡と重複しており、これより古い。

【平面形・方向】平面形は東西方向が幾分長い長方形をなしており、その南北方向はほぼ真北を向き、

N−3° −Eである。

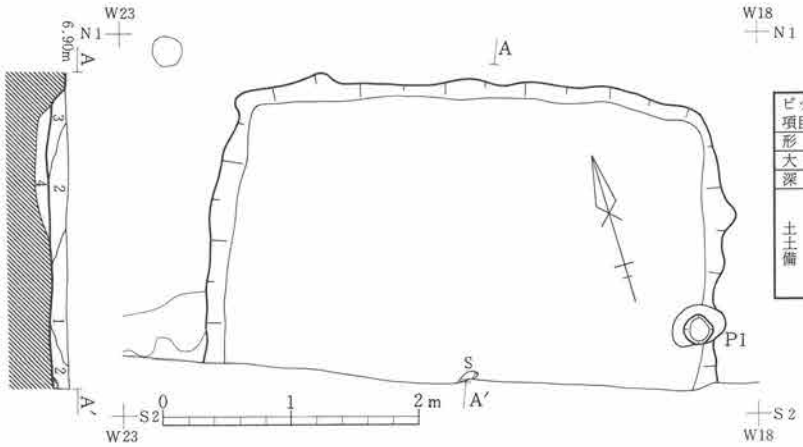
【規模】東西方向が3.30m、南北方向が2.90mである。床面積は7.96㎡である。

【堆積土】9層認められた。その内、5～9層はカマド堆積土である。いずれも自然堆積層で、住居中央部に向かい将棋倒し状に堆積している。

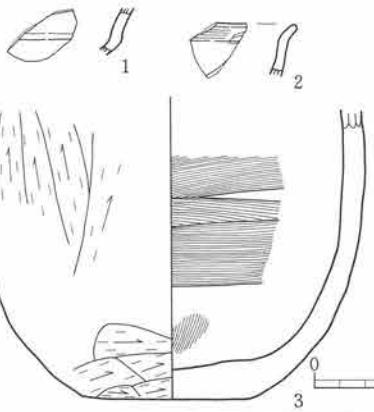
【壁の状況】Ⅳ層を壁としている。壁は周溝底面からほぼ直立ぎみに立ち上がっている。壁高は平均すると19cmである。

【床面の状況】ほぼ全体が住居掘り方埋土を床面としている。床面は比較的平坦である。

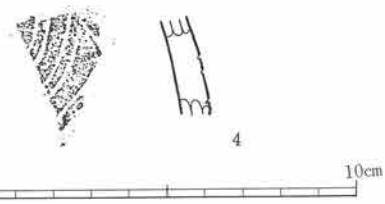
【カマド】カマドが北辺の幾分東寄りで検出された。燃煙部は天井部が失われ、側壁部分が残存している。煙道部は削平により失われていた。燃煙部は幅が35cmで、奥行は焼け面の範囲を含めると90cm前後と長い。底面はやや凹んでおり、奥壁はゆるやかに立ち上がる。奥面はⅣ層の砂質シルトにより構築されており、その上部には焼土のブロックが多く混在している。また、東壁のほぼ中央からはカマドの煙道部が検出された。この煙道部は幅が20～30cmで、東辺



ピットNo.	P1	
項目	掘り方	柱痕跡
形状	略円形	円形
大きさ	44 × 31cm	24 × 23cm
深さ	30.5cm	30.5cm
土色 土性 備考	暗褐色(10YR3/3)シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。	暗褐色(10YR3/2)シルト Ⅳ層ブロック・粒子を少し含む。



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	堆積土
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	Ⅳ層粒子を少量含む。	
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	Ⅳ層ブロックを少量含む。	
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	住居掘り方埋土



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆	ヨコナデと予測されるが、摩滅のため明確ではない。		体部破片	−	−	−	−	C−34
2	土師器 坏	掘り方埋土	ヨコナデ、一部ミガキ	ヨコナデ	口縁部破片	−	−	−	−	C−35
3	土師器 甕	堆	ヘラケズリ	ヘラナデ・ナデ	底部 1/1 体部 1/8	−	6.8	−	−	C−36

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	弥生土器 壷	堆	二本平行沈線による同心円文か渦巻文。	体部破片	−	−	−	87−20	弥−2

第39図　第9号竪穴住居跡と出土遺物

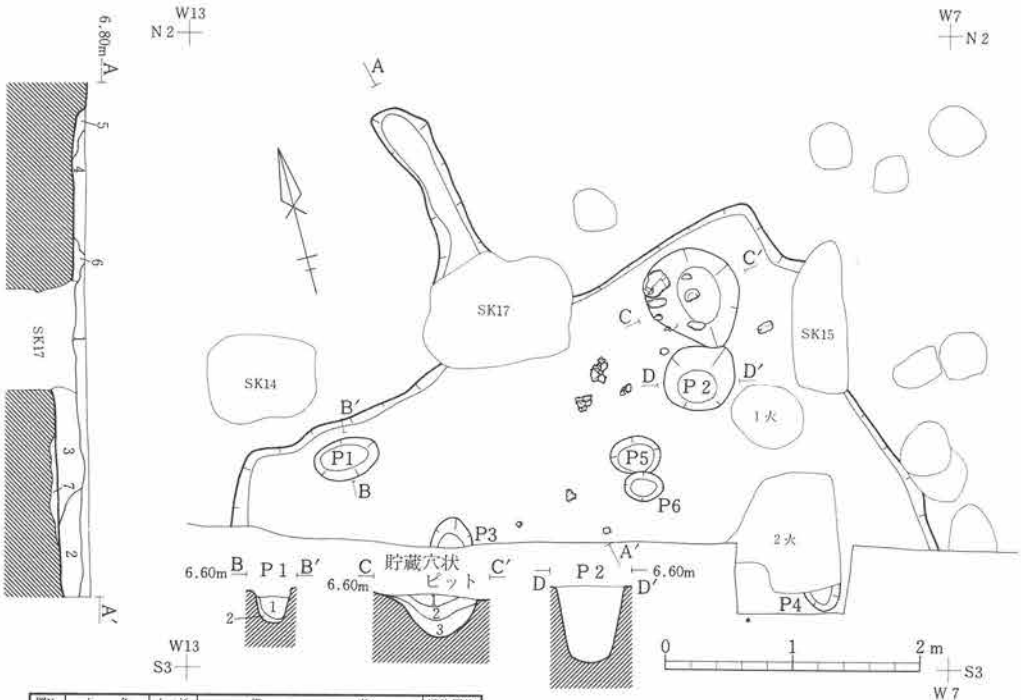
と直交して東方に延びており、長さは約1.8m確認され、さらに調査区外に続いている。底面は東の方向に大きく傾斜する特徴を示している。このカマドは燃煙部がすでに失われており、また周溝が壁際直下を走行していることから北辺のカマドよりも古い段階のカマドで住居廃絶時には機能していなかったものと考えられる。

【貯蔵穴状ピット】明確ではないが、P8が位置的に古い段階の東辺のカマドに伴う貯蔵穴状ピットであった可能性が考えられる。

【柱穴】住居の底面からは8個のピットが検出されたが、柱穴として考えられるものはない。

【周溝】壁際直下を全周している。断面形はほぼ「U」字形をなし、幅は22cm、深さは8cmである。

【出土遺物】数少ないが、床面・カマド袖・堆積土などから土器・土製品・鉄製品が出土している。その中で図示できたのは土師器3点・須恵器1点・とりべ1点・フイゴの羽口1点・刀子1点である。土師器の坏は、体・底部が丸底状をなし、口縁部との境に段や稜をもつものである。須恵器は高台付坏で、体・底部がわずかに丸味をもち、口縁部との境は強く屈曲し、その内側に高台が付く。この他に土師器



層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	凝灰岩粒子を多量に含む。炭化物を少量含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。	
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。10YR2/2シルトブロックを多く含む。	
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。	
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。焼土ブロックを多く含む。	
7	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	住居掘り方埋土

ピットNo 項目	P1	P2	P3	P4	P5	P6
形状	楕円形	円形	(円形)	(円形)	円形	円形
大きさ	52 × 32cm	56 × 51cm	33×(22)cm	29×(19)cm	40×(29)cm	31 × 22cm
深さ	28.0cm	59.0cm	10.5cm	16.5cm	11.0cm	13.5cm
土色 性考	断面図あり	褐色 (10YR4/4) シルト Ⅳ層ブロックが主体。柱穴掘り方	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト Ⅳ層ブロックを多く含む。	暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト	黒褐色 (10YR2/2) シルト 焼土・炭化物・Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト 焼土を多く含む。炭化物を少し含む。

P1堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層粒子を少量含む。	堆積土
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	

貯蔵穴状ピット堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層粒子を多量に含む。	貯蔵穴状ピット
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子をわずかに含む。	
3	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	基本層のⅣ層に近い。	

第40図　第10号竪穴住居跡

破片42点（非ロクロ）・須恵器破片３点・とりべ１点（写真89-4）が出土している。

第12号竪穴住居跡（SI 12）

【位置】Ⅲ区　E6.3～8.8　S16.7～22.5

【確認面】Ⅳ層上面で確認された。

【遺存状況】住居の東側は調査区外に延びている。

【重複】第22号溝跡・第15号溝状遺構と重複しており、前者より古く後者より新しい。また、第11号竪穴住居跡とも重複しており、それより新しい。

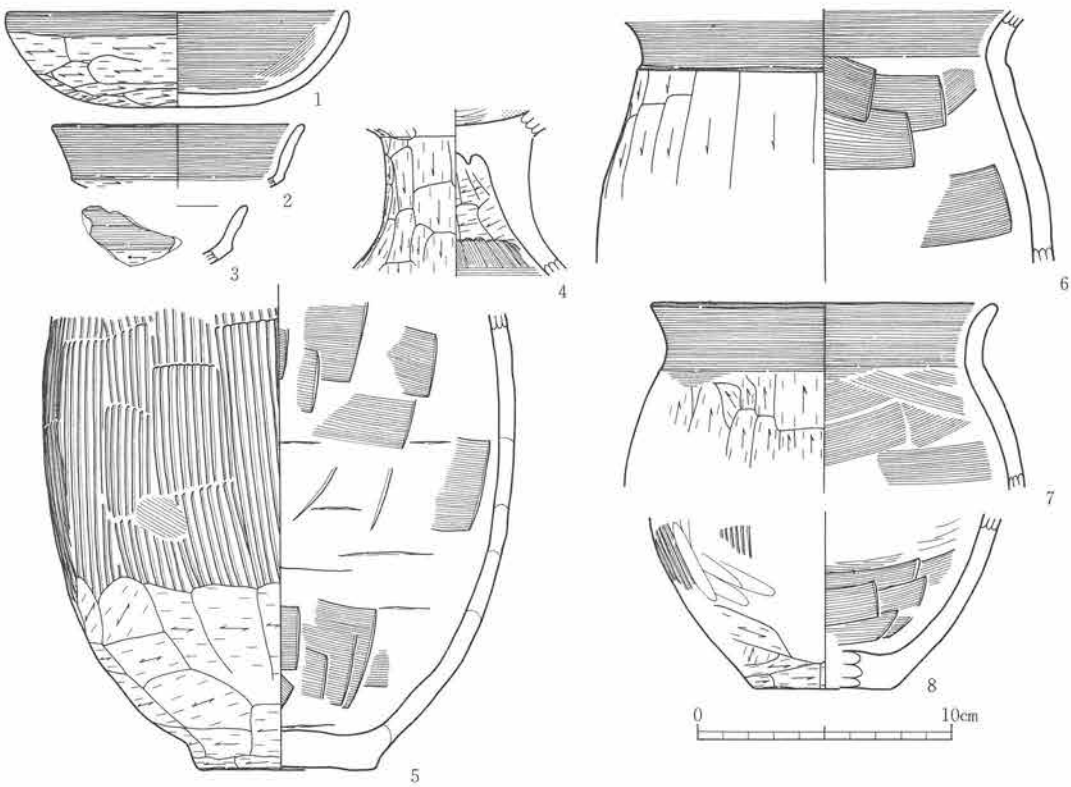
【平面形・方向】残存部分から方形をなすものと考えられ、その南北方向はN－36°－Eと北方向より大きく東に寄っている。

【規模】南北方向は5.3mで、東西方向は1.8m以上である。確認された床面積は8.45m²である。

【堆積土】５層認められた。いずれも自然堆積層であり、Ⅳ層のブロックや粒子をわずかに含んでいる。

【壁の状況】壁が崩落しているためか、周溝底面からやや開いて立ち上がる。その壁高は26cmである。

【床面の状況】中央部はⅣ層を、その周辺は住居掘



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量（cm） 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器　坏	貯蔵穴状ピット	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	全体の1/2以上	13.4	－	3.8	73－3	C－37
2	土師器　坏	堆積土	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	口縁部　1/8	(10.0)	－	－	－	C－38
3	土師器　坏	堆積土	ヨコナデ・ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	口縁部破片	－	－	－	－	C－39
4	土師器　高坏	床面直上	ヘラケズリ	坏部：ヘラミガキ・黒色処理 脚部：ヘラケズリ・ナデ（粘土のかき取り）・ヨコナデ	脚部のみ	－	－	－	75－1	C－40
5	土師器　甕	貯蔵穴状ピット	ハケメ・ヘラケズリ	ヘラナデ	体部　1/2 底部　1/1	－	7.0	－	75－9	C－41
6	土師器　甕	床面直上	ヨコナデ・ミガキ状のヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部上半　1/4	－	－	－	－	C－42
7	土師器　甕	床面直上	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	口縁部～体部　1/4	(17.6)	－	－	－	C－43
8	土師器　甕	床面直上	ハケメ・ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・ケラケズリ	体部下半～底部　1/3	－	(5.6)	－	－	C－44

第41図　第10号竪穴住居跡出土遺物

り方埋土を床面としている、床面はやや凹凸があり、締まりはあまりない。

【カマド・貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】住居の底面からは2個のピットが検出された。いずれも柱痕跡をもつが、この住居に伴う柱穴かどうか確認はできなかった。

【周溝】検出範囲では全周している。その幅は40cm前後と広く、深さは10cm前後である。

【出土遺物】堆積土とピット内から若干の土器などが出土している図示できたのは、土師器2点・須恵器1点・とりべ1点である。この他に、土師器破片が63点・須恵器破片が6点出土しているが、土師器は図示できたものも含めて、全て製作時にロクロを使用していない。ただし、堆積土上部から灰釉陶器の壷破片が1点出土している(写真81－20)が、これは撹乱により混在したものと考えられる。とりべは小形で、片口をなしており、底部は平坦である。

第13号竪穴住居跡（SI 13）

【位置】II～III区　W0.7～E4.9

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】溝跡・ピットによって住居の東半部は大きく失われているが、西半部は比較的遺存は良好である。

【重複】第21号溝跡・第20号掘立柱建物跡・第9号ピット群と重複しており、いずれよりも古い。

【平面形・方向】平面形は残存部分から東西方向が長い長方形をなすものと考えられ、南北方向は真北方向に近く、N－4°－Eである。

【規模】東西方向が約5 m、南北方向が3.34mである。確認された床面積は14m²である。

【堆積土】7層認められた。その内、4～7層はカマド堆積土である。いずれも自然堆積土であり、住居中央部に向かい堆積している。

【壁の状況】IV層を壁としている。壁は周溝底面からほぼ直立ぎみに立ち上がっている。壁高は遺存の良い西半部で約30cmである。

【床面の状況】全面IV層を床面としている。床面は極めて平坦であり、堅くしまっている。

【カマド】北辺のほぼ中央でカマドが確認された。煙燃部は天井部および左側壁が失われているが、左側壁、底面の焼け面の範囲から幅が50cm前後、奥行が60cm前後とみられる。煙道部は幅20cm、長さ60cmが確認された。左端はピット状をなすが、煙出しピットかどうかは不明である。

【貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】底面から4個のピットが検出されたが、その中の3個のピットについては調査時には確認できなかったが、後に住居跡よりも新しいピットと判断された。P1についても柱痕跡をもつが、位置などから住居に伴う柱穴かどうかは不明である。

【周溝】北東隅を除いて壁沿いをめぐっている。幅、深さとも一定していないが、平均すると幅が19cm、深さが6 cmである。

【出土遺物】底面および堆積土から若干の土器と鉄製品・石製品が出土しているが、図示できたのは土師器が2点・鉄製品1点・石製品1点である。土師器はその他に24点の破片があるが、いずれも製作時にロクロを使用していない。

第14号竪穴住居跡（SI 14）

【位置】IV区　E5.3～7.6　S9.2～11.9

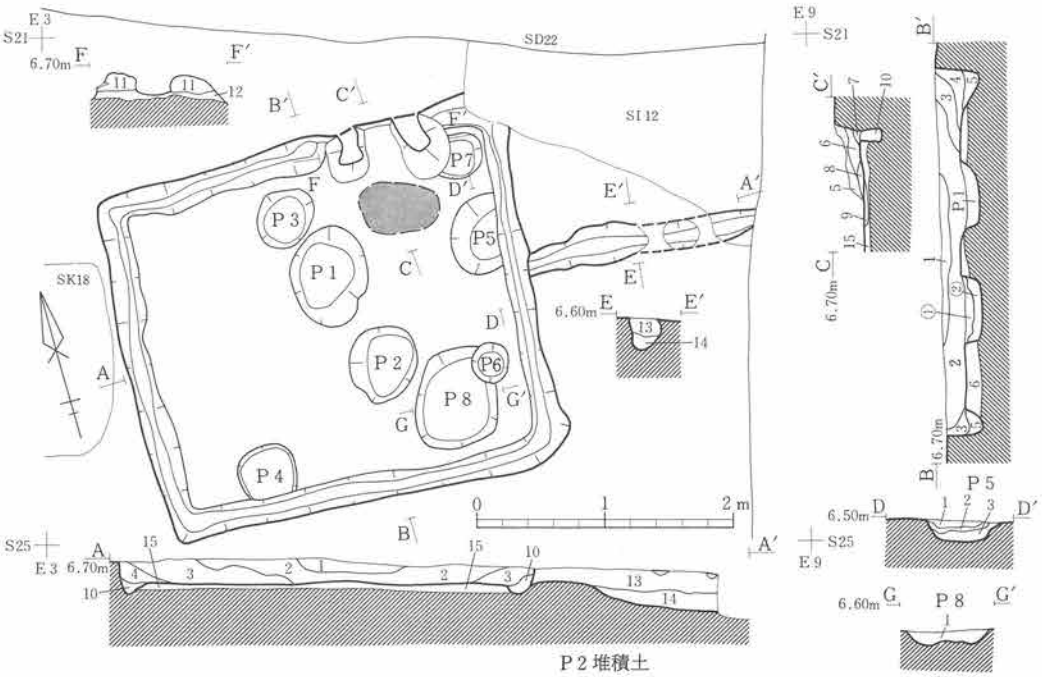
【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】溝跡、竪穴住居跡によって大きく失われており、住居の北面部のみが検出された。

【重複】第15号竪穴住居跡・第20号溝跡と重複し、これらより古い。また、第15号溝状遺構とも重複し、これより新しい。

【平面形・方向】残存部分から方形を基調とする平面形をなし、その南北方向はN－10°－E前後になるものと考えられる。

【規模】南北方向は2.3m以上、東西方向は1.9m以



P2 堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
①	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層粒子をまばらに含む。	堆積土
②	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	酸化鉄斑紋をまばらに含む。	

P5 堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物を少量含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物を1層よりも多く含む。	
3	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	酸化鉄斑紋をまばらに含む。	

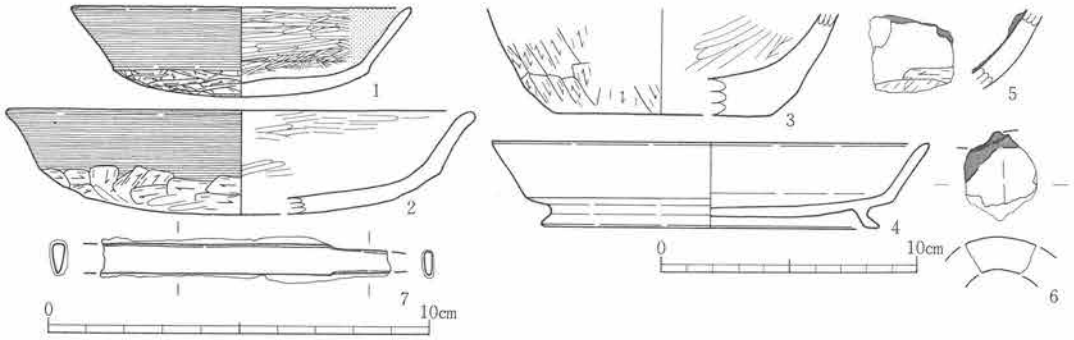
P8 堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	黒褐色のブロック、Ⅳ層ブロックが混在する。	堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層粒子をまばらに含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層ブロックを含む。	
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	2層よりもⅣ層ブロック・粒子が少なく、やや暗い。	
4	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを含む。焼土を少量含む。	
5	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	堆積土Ⅳ層に類似する。	カマド堆積土
6	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子をまばらに含む。	
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子、焼土を少量含む。	
8	暗赤褐色 (5YR3/2)	シルト	焼土粒をまばらに含む。	
9	極暗赤褐色 (2.5YR2/3)	粘土質シルト	焼土、炭化物を多量に含む。	
10	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	周溝堆積土
11	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	Ⅳ層ブロック、焼土ブロックを多く含む。	カマド構築土
12	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	
13	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト		煙道堆積土
14	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を主体とする。	
15	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックが主体となる。	住居掘り方埋土

ピットNo. / 項目	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
形状	楕円形	楕円形	円形	(円形)	(不整円形)	円形	(隅丸円形)	(隅丸円形)
大きさ	80 × 62cm	60 × 54cm	46 × 44cm	46×(40)cm	58×(46)cm	32 × 30cm	36×(28)cm	78 × 64cm
深さ	18.5cm	15.4cm	20.0cm	15.0cm	13.0cm	11.0cm	12.0cm	12.4cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。	断面図あり	暗褐色 (10YR3/4) 炭化物・焼土・Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	暗褐色 (10YR3/3) Ⅳ層粒子をまばらに含む。	断面図あり	暗褐色 (10YR3/4) 焼土、炭化物をまばらに含む。	暗褐色 (10YR3/3) 小Ⅳ層ブロックをわずかに含む。	断面図あり

第42図　第11号竪穴住居跡



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	カマド左袖部	ヨコナデ・ヘラケズリ・ミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部一部欠損	13.3	10.0	3.6	72－10	C－45
2	土師器 坏	P 7内	ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	1/3	(18.4)	－	4.1	72－14	C－46
3	土師器 甕	不明	ヘラケズリ	ヘラミガキ	底部～体部下半 1/4	－	(8.4)	－	－	C－47
4	須恵器 高台付坏	床面直上	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	1/3	17.1	13.2	3.4	78－8	E－7

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
5	とりべ	堆	底部は丸底になるものと推定される。外面はヨコナデ・ヘラケズリ、内面には溶解物付着。器厚－0.8cm	体部破片	－	－	－	89－5	ト－4

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
6	フイゴの羽口	堆	先端部破片。外面－オサエ。先端に溶解物付着。	(3.5)	(2.9)	(1.3)	(11.4)	(1.5)	－	土－36

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
7	鉄製品 刀子	堆	身と茎。身は、断面－三角形、両端欠損。茎は断面－長方形。	(7.6)	0.8	0.3	(7.3)	100－5	N－3

第43図　第11号竪穴住居跡出土遺物

上である。確認された床面積は4.08㎡である。

【堆積土】３層確認された。いずれも自然堆積層であり、IV層ブロックを含んでいる。

【壁の状況】IV層を壁としている。周溝底面から直立ぎみに立ち上がる。その壁高は23cmである。

【床面の状況】床面中央部に近い一部を除いて、住居掘り方埋土を床面としている。床面はほぼ平坦で、それほどしまりはない。

【カマド・貯蔵穴状ピット・柱穴】確認されなかった。

【周溝】北西隅の一部を除いて、その他は幅40cm、深さ４cmという浅く、幅広い周溝がめぐっている。

【出土遺物】堆積土から若干の土器が出土した。図示できたのは土師器が３点のみである。この他に土師器破片29点・須恵器破片４点がある。土師器はいずれも製作時にロクロを使用していないものである。

第15号竪穴住居跡（SI 15）

【位置】III区　E6.3～8.9　S5.7～10

【確認面】IV層上面で確認された。

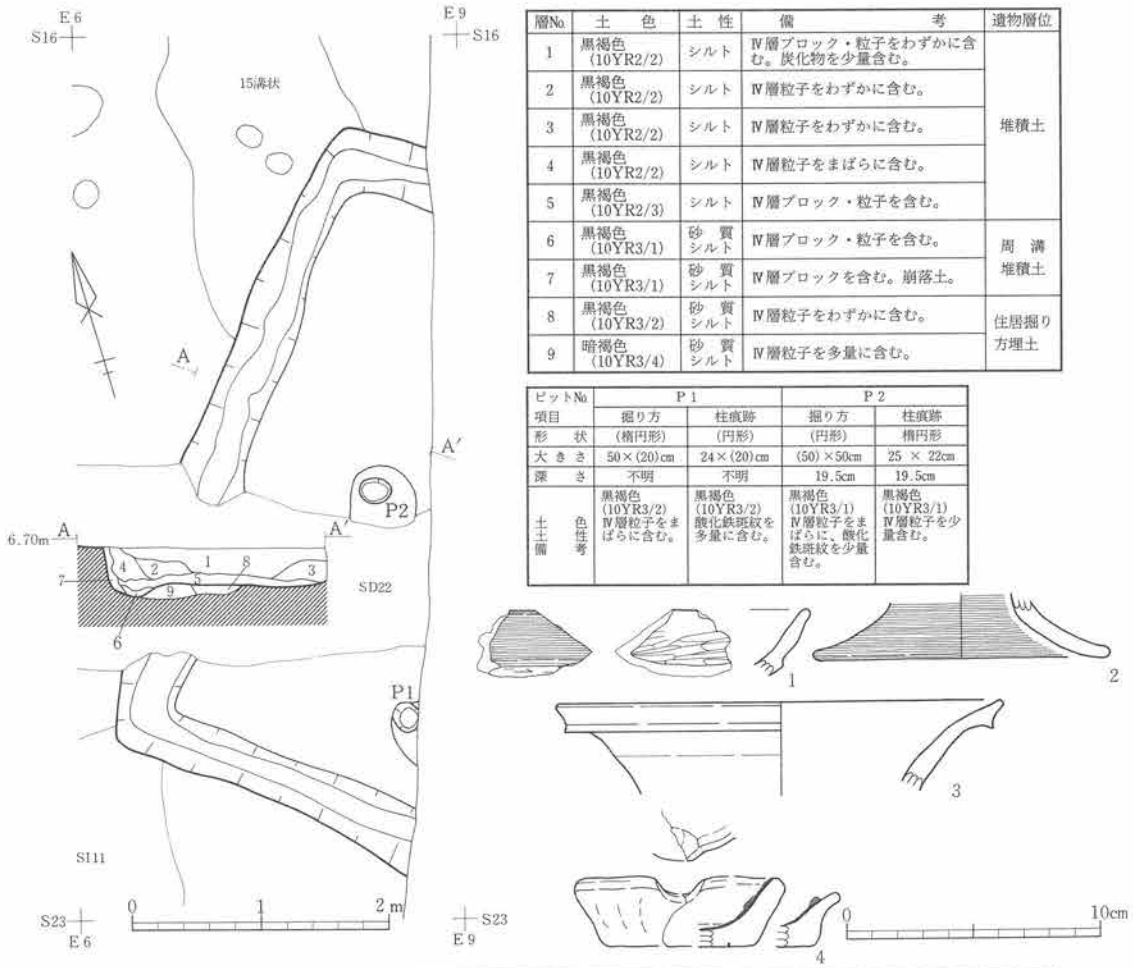
【遺存状況】溝跡によって大きく失われており、西半部のみが検出された。

【重複】第20・21号溝跡と重複しており、これらより古い。

【平面形・方向】平面形は隅丸方形をなすものと考えられる。その方向は南北方向で真北より幾分東に寄っており N－13.5°－E である。

【規模】南北方向は4.2m であり、東西方向は2.6m 以上である。確認された床面積は6.94㎡である。

【堆積土】周溝堆積土も含めて５層確認された。いずれも自然堆積層であるが、層の堆積状況は不規則



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子をわずかに含む。炭化物を少量含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層粒子をわずかに含む。	
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層粒子をわずかに含む。	
4	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層粒子をまばらに含む。	
5	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を含む。	
6	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を含む。	周溝堆積土
7	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを含む。崩落土。	
8	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	Ⅳ層粒子をわずかに含む。	住居掘り方埋土
9	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層粒子を多量に含む。	

ピットNo.	P1		P2	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	(楕円形)	(円形)	(円形)	楕円形
大きさ	50×(20)cm	24×(20)cm	(50)×50cm	25×22cm
深さ	不明	不明	19.5cm	19.5cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) Ⅳ層粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR3/2) 酸化鉄斑紋を多量に含む。	黒褐色 (10YR3/1) Ⅳ層粒子をまばらに、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR3/1) Ⅳ層粒子を少量含む。

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	P2内	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片	−	−	−	−	C−48
2	土師器 高坏	堆	ヨコナデ	ヨコナデ	脚部 1/8	−	(11.7)	−	−	C−49
3	須恵器 甕	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/10	(17.6)	−	−	−	E−8

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	とりべ	堆	片口。平底。外面の体部はオサエ。底部は木葉痕。内面は溶解物付着のため調整不明。白針わずかに含む。器厚−0.7〜0.9cm。	全体の 1/4	8.2	5.6	2.8	89−3	ト−3

第44図　第12号竪穴住居跡と出土遺物

である。

【壁の状況】Ⅳ層を壁としており、周溝底面から直立ぎみに立ち上がる。壁高は平均すると14cmである。

【床面の状況】中央部分はⅣ層を、その周囲は住居掘り方埋土を床面としている。床面にはやや起伏がみられ、それほどしまりはない。

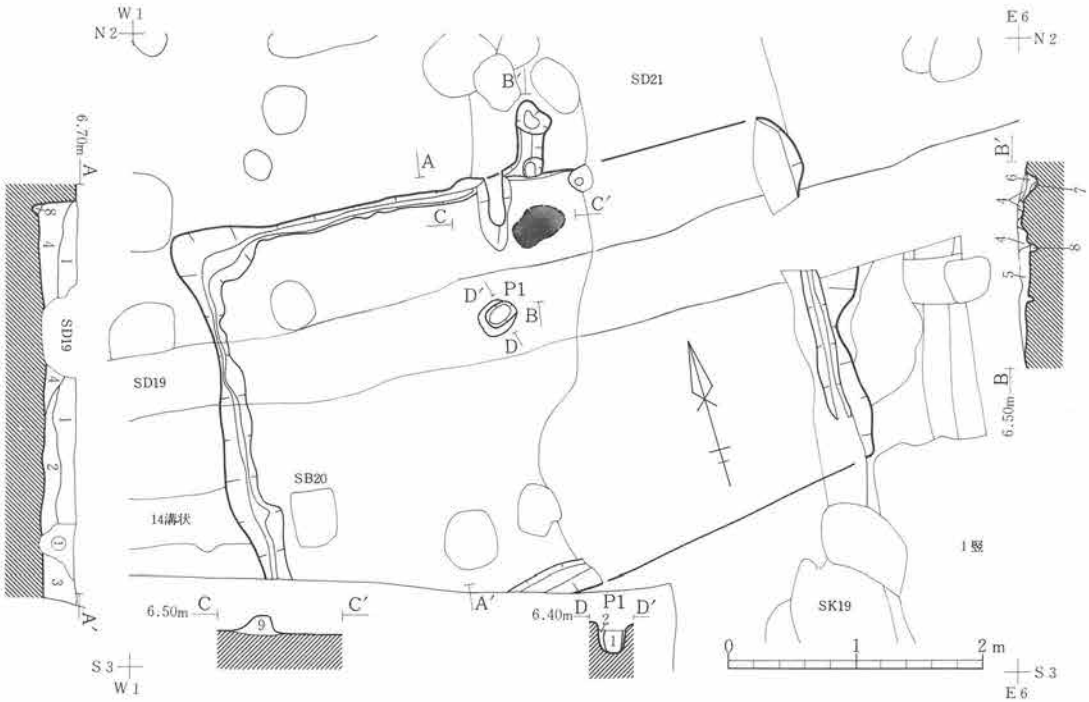
【カマド・貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】住居内からは5個のピットが検出された。その中で柱痕跡をもつP3・P4が位置や深さなどから主柱穴と考えられる。また、P1は床面で検出されたものの、住居の北壁を切っていることから住居廃絶時に掘り込まれたものと推測される。

【周溝】壁際直下を全周している。その規模は幅が平均して40cm、深さが平均して7cmであり全体的に

浅くて幅広いのが特徴である。

【出土遺物】床面・掘り方埋土・堆積土・ピットなどから土器・鉄製品・石製品が出土したが、図示できたの土師器7点・須恵器3点・鉄製品1点・石製品1点である。この他に土師器破片が 192点・須恵器破片が4点ある。土師器はいずれも製作時にロクロを使用していないものである。図示できたのは甕と甑のみで、甕は口縁部と体部との境に段や稜はほとんどなく、全体としてゆるやかに移行する例が多い。

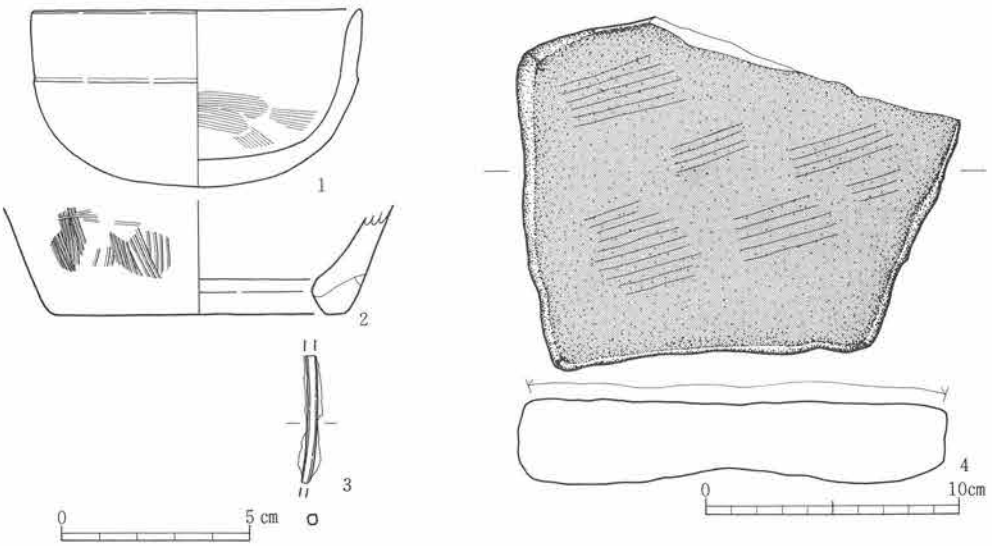


層No	土　色	土　性	備　考	遺物層位
①	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層粒子を少量含む。灰白色火山灰の粒子をわずかに含む。住居堆積土を切っている。	
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。2.5Y3/8 (浅黄色)の粒土ブロックを含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	3
4	暗褐色 (10YR4/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。焼土粒子を少し含む。	カマド堆積土
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子、焼土を多量に含む。骨片も含む。	
6	にぶい黄褐色 (10YR4/5)	シルト	Ⅳ層崩落土。	
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を少量含む。	
8	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子をわずかに含む。	周溝堆積土
9	褐　色 (10YR4/4)	砂　質シルト	黒褐色ブロックが上部に混じる。	カマド構築土

ピットNo	P1	
項目	掘り方	柱痕跡
形　状	楕円形	楕円形
大きさ	32 × 26cm	20 × 12cm
深　さ	26.0cm	18.5cm
土色	黒褐色 (10YR3/2)	黒褐色 (10YR3/2)
土性	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	Ⅳ層ブロック・粒子を少量含む。
備考		

第45図　第13号竪穴住居跡

第13号竪穴住居跡カマド付近



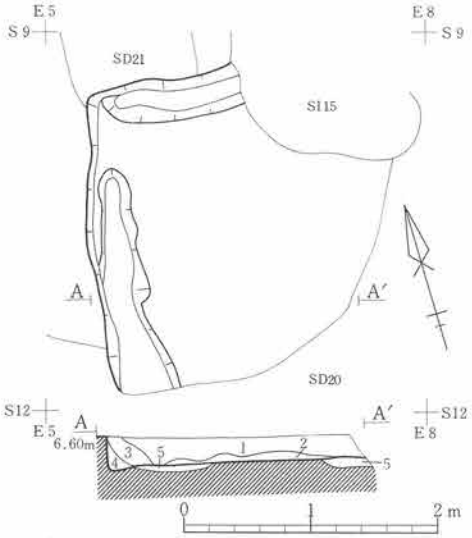
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	床面		指ナデ	4/5	13.1	−	7.0	72−7	C−50
2	土師器 甑	堆1層	ハケメ・ヘラミガキ		底部〜体部下部 1/4	−	(11.6)	−	−	C−51

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
3	鉄製品 釘か鉄鏃	床面	鉄鏃だとすれば茎の一部。断面方形。	(3.4)	0.2	0.2	(0.9)	−	N−4

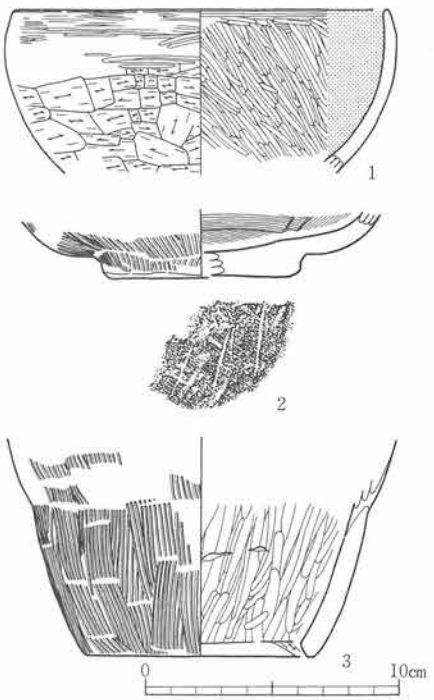
番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
4	磨面をもつ礫	床面	一部欠損。角張った礫を利用。一面に磨面が認められる。	13.9	17.55	3.4	(1235)	粗粒砂岩	−	石−110

第46図　第13号竪穴住居跡出土遺物

第14・15号竪穴住居跡
の確認状況



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子をわずかに含む。	堆積土
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	
4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	Ⅳ層崩落土。	周溝堆積土
5	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	住居掘り方埋土

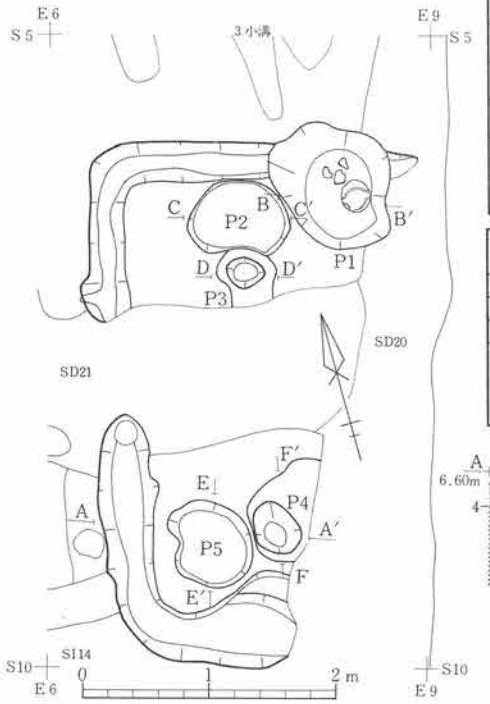


番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 底径	法量 (cm) 器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆	ミガキ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ミガキ・黒色処理	口縁部～体部 1/5	(14.8)	—	—	73－5	C－52
2	土師器 甕	堆	ハケメ・木葉痕	ヘラナデ	底部～体部下部 1/3	—	(7.0)	—	—	C－53
3	土師器 甑	堆	ハケメ	ヘラミガキ・ヘラケズリ	底部～体部下半 1/3	—	(9.0)	—	75－10	C－54

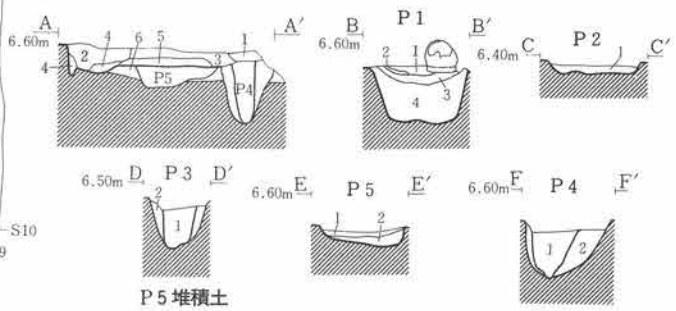
第47図　第14号竪穴住居跡と出土遺物

第14・15号竪穴住居跡

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト		堆積土
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を少量含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土ブロック・粒子を多量に含む。	
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・10YR3/2黒褐色ブロックが混在する。	住居掘り方埋土



ピットNo.	P 1	P 2	P 3		P 4		P 5
項目			掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	
形状	不整円形	(円形)	(楕円形)	不整円形	(不整円形)	不整円形	不整円形
大きさ	108 × 88cm	80×(56)cm	50×(48)cm	30 × 24cm	80×(52)cm	44 × 36cm	72 × 62cm
深さ	74.5cm	11.0cm	37.5cm	60.0cm	44.5cm	40.5cm	15.0cm
土色土性備考	断面図あり	暗褐色 (10YR3/3) 焼土・炭化物を多く含む。	暗褐色 (10YR3/3) Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	暗褐色 (10YR3/3) Ⅳ層粒子を多量に含む。	暗褐色 (10YR3/3) Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	暗褐色 (10YR3/3) Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	断面図あり



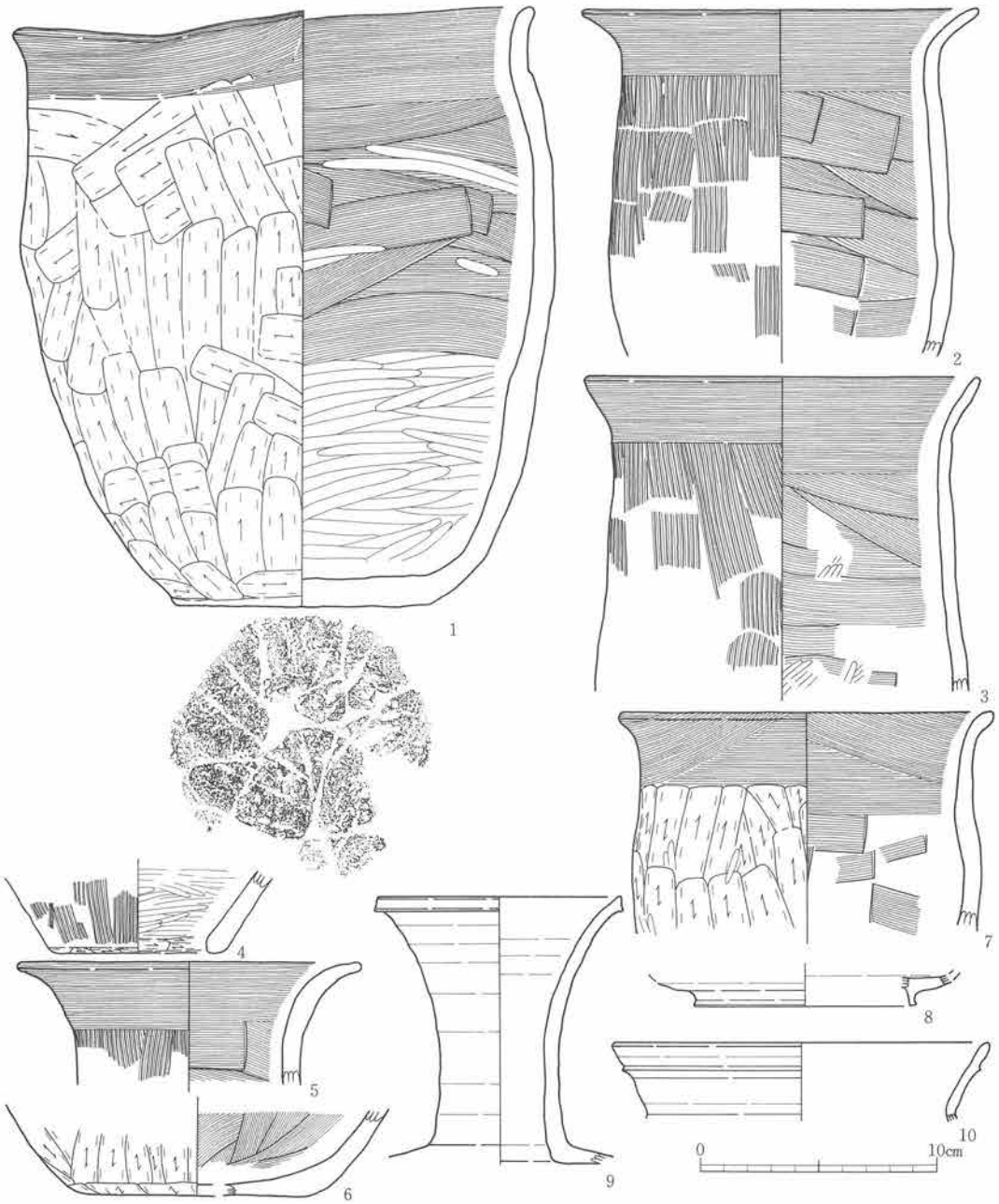
P 1 堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土・灰を多量に含む。	堆積土上部
2	明赤褐色 (2.5YR5/8)	シルト	焼土層	
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロックをわずかに含む。炭化物を少し含む。	4

P 5 堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物を多く含む。	1
2	黄褐色 (10YR4/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	

第48図　第15号竪穴住居跡



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	P1堆上面	ヨコナデ・ヘラナデ・底部木葉痕	ヨコナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ	ほぼ完形	22.1	11.0	25.4	75−11	C−55
2	土師器 甕	P5堆I層掘り方埋土	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部〜体部 1/2	16.8	−	−	76−1	C−56
3	土師器 甕	P5堆I層	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ	口縁部〜体部 2/5	(16.8)	−	−	76−2	C−57
4	土師器 甑	P1堆	ハケメ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・ヘラケズリ	底部〜体部 1/4	−	(5.8)	−	−	C−58
5	土師器 甕	堆	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラケズリ	口縁部 1/4	(14.6)	−	−	−	C−59
6	土師器 甕	P1堆上面	ヘラケズリ	ヘラナデ	底部 1/4	−	(11.0)	−	−	C−60
7	土師器 甕	P1堆上面	ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部〜体部 1/5 底部 1/4	(15.8)	−	−	−	C−61
8	須恵器 高台付坏	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	底部 1/8	−	(9.4)	−	−	E−9
9	須恵器 壺	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部〜頸部	(10.4)	−	−	−	E−10
10	須恵器 壺	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/8	(16.0)	−	−	−	E−11

第49図　第15号竪穴住居跡出土遺物（1）

第16号竪穴住居跡（SI 16）

【位置】Ⅲ区　E8.6～15　N63.1～69.4

【確認面】Ⅳ層上面で確認された。

【遺存状況】ピット群により部分的に失われているが、ほぼ全体が確認された。

【重複】第13号ピット群と重複しており、それらより古い。

【平面形・方向】平面形はほぼ方形をなし、その方向は真北方向から西に大きく寄っており、N－37°－W である。

【規模】南北方向は4.7m、東西方向は4.9m である。床面積は19.67㎡である。

【堆積土】18層確認されたが、いずれも自然堆積層である。住居の周辺から中心に向かって将棋倒し状に堆積している。

【壁の状況】Ⅳ層を壁としており、周溝底面からほぼ垂直に立ち上がっている。残存壁高は24cm前後である。

【床面の状況】中央部はⅣ層を、その周囲は住居掘り方埋土を床面としている。床面はしまりがあり、ほぼ平坦である。

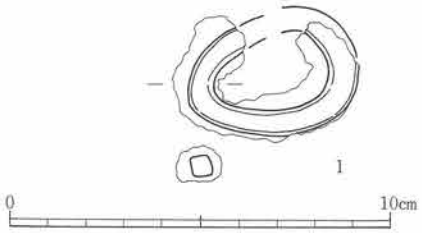
【カマド】北西辺の中央でカマドが検出された。燃焼部は天井部が失われ、側壁部分が残存しており、規模は幅が約50cm、奥行は底面の凹みの状況から80cm前後とみられる。側壁はⅣ層のシルトブロックを積み上げて構築されている。煙道部はほぼ水平にⅣ層を掘り抜いて造られており、長さは約1.3m、幅は30cm前後である。

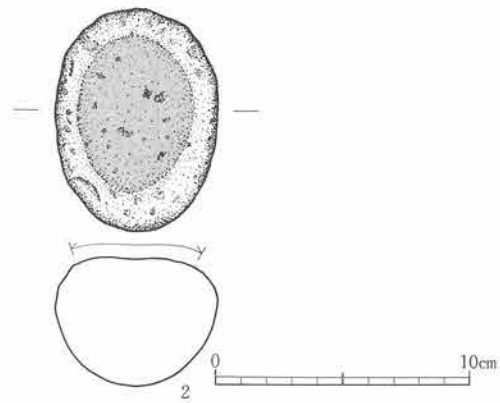
【貯蔵穴状ピット】カマド東側の北東隅で検出された。平面形は楕円形をなしており、規模は大きさが長軸が70cm、短軸が60cm、深さは26cmである。堆積土は３層認められ、いずれも自然堆積層である。

【柱穴】住居の床面からは６個のピットが検出された。その中で、位置や規模などから、P1・2・4 の３個が主柱穴と考えられる。

【周溝】カマド部分を除く大部分において、壁際直下で検出された。断面形はほぼ「U」字形をなし、規模は平均すると幅は18cm、深さは５cmである。

【出土遺物】床面・堆積土・ピット内から土師器が出土しており、その中で図示できたのは土師器が７点・弥生土器が１点である。この他に土師器破片80点と須恵器破片１点がある。土師器はいずれも製作時にロクロを使用していない。坏・甕・壷の器種がみられ、坏は体・底部が丸底状をなし、口縁部との

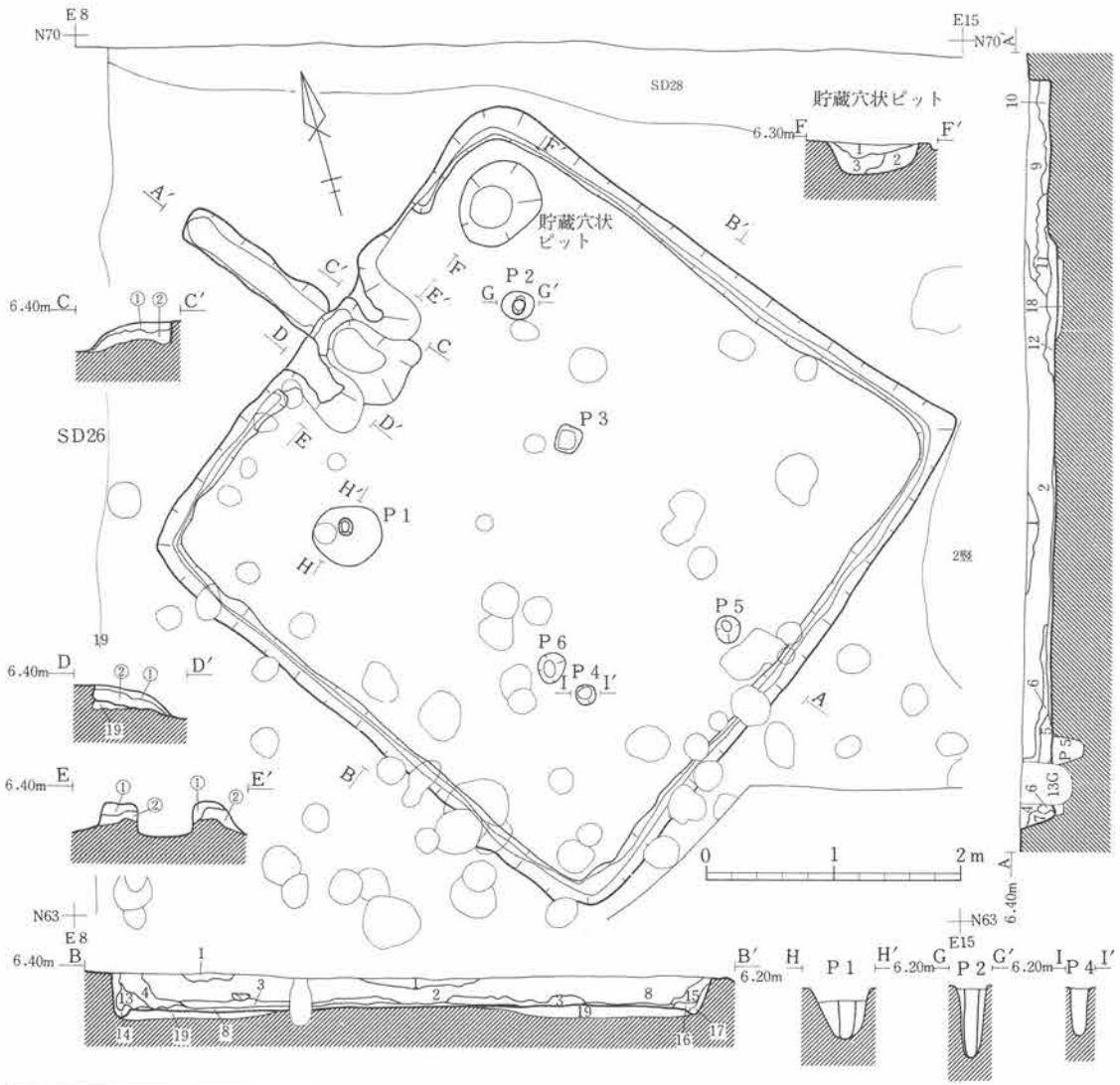




番号	種　別	層　位	特　徴	長　さ (cm)	幅 (cm)	厚　さ (cm)	重　量 (g)	写真図版	登録番号
1	鉄製品　金具	周溝	一部欠損。環状をなすものと考えられる。断面は方形に近い。	横径 4.4	0.6	0.6	17.6	101－8	N－5

番号	種　別	層　位	特　徴	長　さ (cm)	幅 (cm)	厚　さ (cm)	重　量 (g)	石　材	写真図版	登録番号
2	磨面をもつ礫	P１堆	円棒状の礫を利用。一面に磨面が認められる。	8.85	6.4	5.1	290	安山岩	－	石－108

第50図　第15号竪穴住居跡出土遺物（２）



層No.	土　色	土性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	酸化鉄の斑紋を粒状に含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	Ⅳ層をブロック状に含み、酸化鉄の斑紋をまばらに含む。	
3	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	2層よりもⅣ層ブロック・粒子を多く含む。	2
4	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	酸化鉄の斑紋をまばらに含み、土器片を少量含む。	
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物・焼土を少量含む。	
6	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	5層よりやや暗く、Ⅳ層ブロック・粒子を含まない。	
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。壁の崩落土。	
8	黒色 (10YR2/1)	シルト	酸化鉄の斑紋をまばらに含む。	
9	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含み、焼土をまばらに含む。	
10	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	9層よりもやや暗く、Ⅳ層ブロック・粒子をまばらに含む。	

層No.	土　色	土性	備　考	遺物層位
11	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土を部分的に含む。	2
12	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土・炭化物を多量に含む。	
13	黒色 (10YR2/1)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を粒状に含む。	
14	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。壁の崩落土。	周溝堆積土
15	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を粒状に含む。	
16	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物を少量含む。	
17	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。壁の崩落土。	
18	暗赤褐色 (5YR3/3)	シルト	焼土・炭化物を多量に含む。	住居掘り方埋土
19	にぶい黄橙色と黒褐色 (10YR6/4)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロックが混在。	

カマド構築土

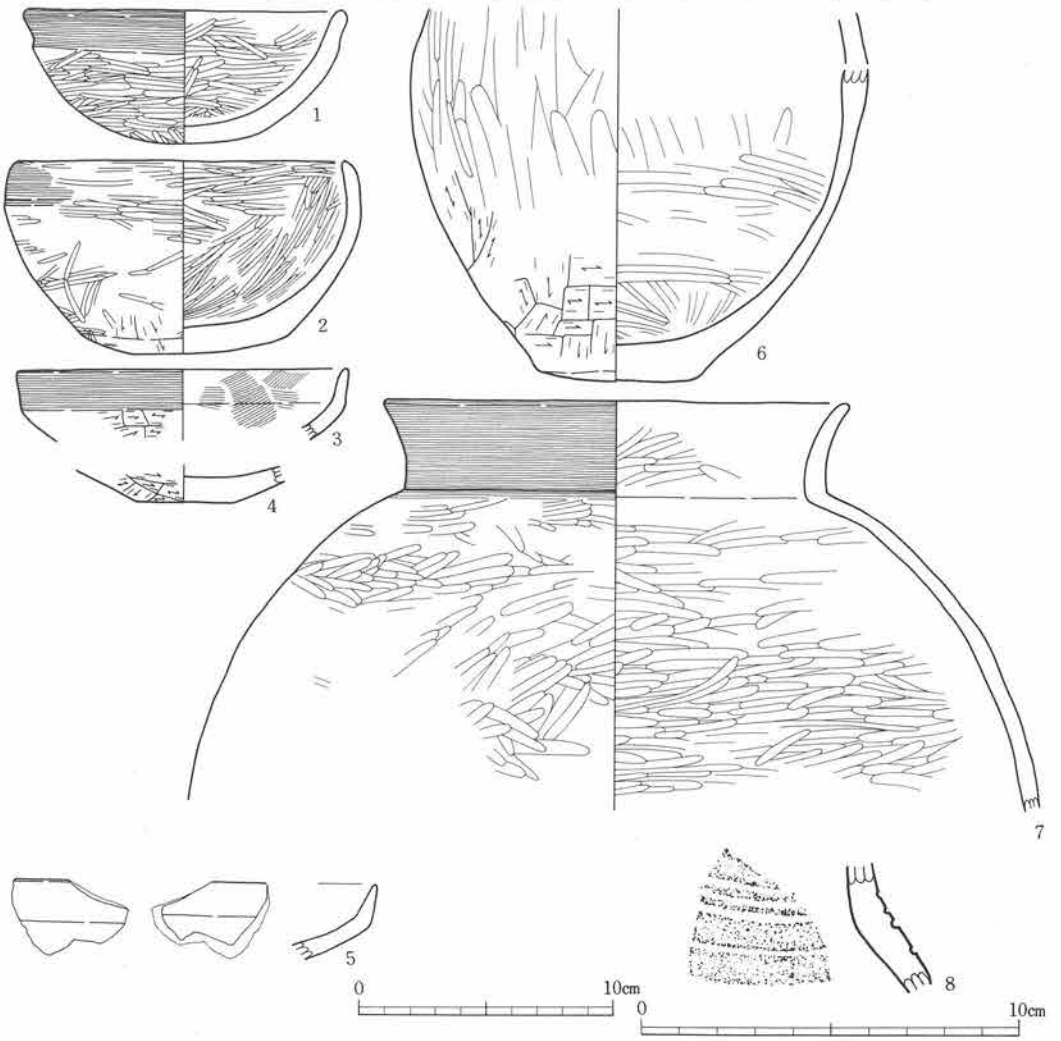
層No.	土　色	土性	備　考	遺物層位
①	黒褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	カマド構築土
②	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックが主体。	

貯蔵穴状ピット堆積土

層No.	土　色	土性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を粒状に含み、酸化鉄の斑紋をまばらに含む。	堆積土
2	黒色 (10YR2/1)	シルト	Ⅳ層をブロック状に含む。	
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を1層よりも多く含む。	

第51図　第16号竪穴住居跡

ピットNo.	P1		P2		P3	P4	P5	P6
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡				
形状	円形	円形	円形	円形	方形	円形	円形	円形
大きさ	54 × 46cm	14 × 10cm	25 × 22cm	12 × 12cm	22 × 20cm	17 × 16cm	21 × 20cm	22 × 23cm
深さ	2.5cm	32.5cm	58 cm	58 cm	16 cm	36 cm	27.5cm	14 cm
土色 土性 備考	にぶい黄褐色(10YR5/4) Ⅳ層ブロックからほとんどなる。	黒褐色(10YR3/2) Ⅳ層ブロック・粒子を少量含む。	黒褐色(10YR2/3) Ⅳ層ブロック・粒子をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/3) 酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色(10YR2/3) Ⅳ層ブロック炭化物を含む。	黒褐色(10YR2/3) Ⅳ層ブロック・粒子をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/3) Ⅳ層粒子をまばらに含む。	註記もれ



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	床面	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	9/10	12.8	−	5.8	72−9	C−62
2	土師器 坏	堆2層・床面直上	ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラケズリ	口縁部一部欠損	12.9	8.1	7.7	72−8	C−63
3	土師器 坏	堆2層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ナデ	口縁部 1/8	(13.0)	−	−	−	C−64
4	土師器 甕	堆	ヘラケズリ		底部〜体部下部	−	3.7	−	−	C−65
5	土師器 坏	堆			口縁部破片	−	−	−	−	C−66
6	土師器 甕	堆2層	ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	体部下半〜底部 4/5	−	6.4	−	76−3	C−67
7	土師器 壷	堆1層	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	口縁部〜体部上半 1/2	(18.3)	−	−	−	C−68

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
8	弥生土器 壷	堆	箆描きによる沈線文。内外面ともミガキ。	体部上半破片	−	−	−	87−9	弥−6

第52図　第16号竪穴住居跡出土遺物

境に段や稜をもつ。口縁部の立ち上がりは多様である。

第17号竪穴住居跡（SI 17）

【位置】V区　N1.8～3.4　E12.6～16.6

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】検出されたのは南側部分で、北側半部は調査区外に延びている。

【重複】第19号溝跡と重複しており、それよりも古い。

【平面形・方向】住居南側のブランから、平面形はほぼ隅丸方形をなすものと考えられる。方向はN－12°－Eである。

【規模】東西が4.00mで、南北は1.48m以上である。確認された床面積は5.72m²である。

【堆積土】6層確認された。いずれも自然堆積層で、住居周縁部から将棋倒し状に堆積している。

【壁の状況】IV層を壁としており、床面からやや開きぎみに立ち上がっている。残存壁高は平均すると18cmである。

【床面の状況】中央部はIV層を、その他は住居掘り方埋土を床面としている。底面はしまりがあり、ほぼ平坦である。

【カマド・貯蔵穴状ピット・柱穴】いずれも確認されなかった。

【周溝】南壁の西側でのみ検出された。断面形は「U」字形をなし、平均すると幅は20cm、深さは10cmである。

【出土遺物】床面直上および堆積土中から若干の土器と鉄製品が出土しており、その中で図示できたのは土師器坏2点と鉄製品1点である。その他に土師器破片15点がある。土師器は製作時にロクロを使用していないのが特徴で、図示した坏1点だけがロクロで製作され、底部切り離しは静止糸切りで、その後に手持ちのヘラケズリの再調整が施されているものである。

第18号竪穴住居跡（SI 18）

【位置】V区　N3.8～S2.1

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】削平が大きく及んでいるが、住居跡のほぼ全体が検出された。

【重複】第4号小溝状遺構群の数条と重複しており、それらとは新古両方の関係を持っている。

【平面形・方向】平面形は正方形に近い隅丸方形をなし、その南北方向は真北方向とほぼ一致し、N－2.5°－Wである。

【規模】南北方向は5.04m、東西方向は5.06mである。床面積は21.4m²である。

【堆積土】3層確認された。その中の3層はIV層ブロックを多量に含み、住居の南西部を中心に堆積している。

【壁の状況】IV層を壁としており、その残存壁高は平均すると7cmである。

【床面の状況】全体的に住居掘り方埋土を床面としている。床面はしまりがあり、ほぼ平坦である。【カマド】北辺の東寄りでカマドが検出された。残存状況が悪く、燃焼部の左側壁のみが残存している。燃焼部底面では支脚の痕跡と想定される小ピットが認められた。

【貯蔵穴状ピット】カマドの東側で検出された。平面形は楕円形をなしており、規模は大きさが長軸72cm、短軸54cmで、深さは19cmである。堆積土は2層認められ、その中の2層には焼土が多量に含まれていた。

【柱穴】住居の床面からは5個のピットが検出された。その中で、位置や規模などからP1・2・3・4の4個が主柱穴と考えられる。

【周溝】カマド部分と北辺の一部を除いて、壁際直下で検出された。断面形は「U」字形をなし、規模は平均すると幅が25cm、深さが6cmである。

【出土遺物】床面直上および堆積土中から若干の土器が出土しており、その中で図示できたのは土師器

坏2点のみである。その他に土師器破片13点・須恵器破片4点がある。土師器はいずれも製作時にロクロを使用していない。図示した坏は底部が平底ぎみで、口縁部と体部が明瞭な境をもつことなく、ゆるやかに移行して外傾する例と、体・底部が丸底状で、口縁部との境に段をもつ例がある。

第19号竪穴住居跡（SI 19）

【位置】V区　S0.1～2.3　E36.4～40.8

【確認面】Ⅳ層上面で確認された。

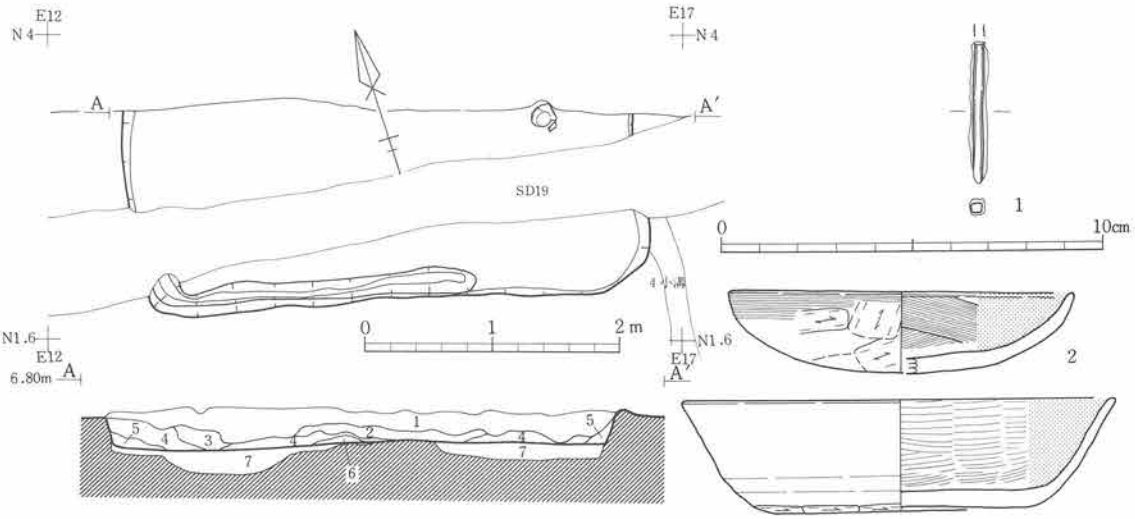
【遺存状況】住居の北辺部の一部が検出された。その他は調査区外に延びている。

【重複】第20号溝状遺構および第16号ピット群の一部と重複しており、それらより古い。

【平面形・方向】住居の一部のため明確ではないが、平面形は隅丸方形を基調とするものと推測される。方向はほぼ真北を向く。

【規模】規模は南北が1.02m以上、東西が3.94m以上である。確認された床面積は0.74㎡である。

【堆積土】住居内の堆積土については註記がもれてしなかった。ただし、カマド煙道部では1層確認され、焼土・炭化物を多量に含む層であった。

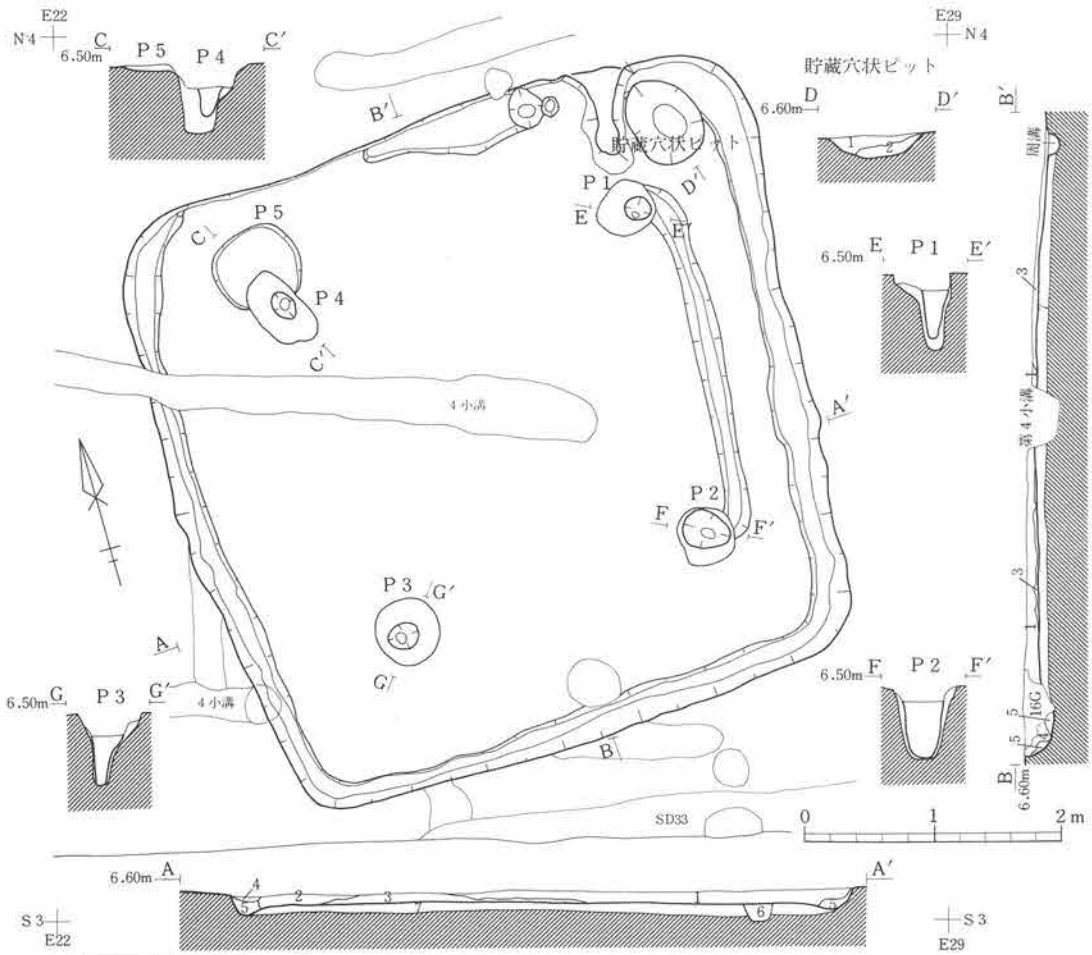


層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色（10YR2/3）	シルト	Ⅳ層粒子を少量含む。	1
2	黒褐色（10YR2/3）	シルト	Ⅳ層をブロック状に含む。炭化物を少量含む。	2
3	黒褐色（10YR3/2）	シルト	Ⅳ層をまばらに含む。酸化鉄斑紋を粒状に含む。	3
4	黒褐色（10YR3/2）	シルト	3層よりⅣ層の含みが少なく、壁面はⅣ層ブロックを含む。	4
5	黒色（10YR2/1）	シルト	4層よりも黒味が強く粘性がある。	5
6	黒褐色（10YR3/2）	シルト	Ⅳ層を多量に含む。酸化鉄斑紋を粒状に含む。	6
7	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	Ⅳ層ブロックが多量に混在する。	住居掘り方埋土

番号	種別	層位	特徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
1	鉄製品　釘か鉄鏃の茎	堆1層	断面は方形。	（3.7）	0.3	0.3	（1.0）	100－36	N－6

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量（cm） 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	土師器　坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデの後、黒色処理	1/6	（13.6）	－	3.2	－	C－69
3	土師器　坏	床面直上	ロクロナデ・ヘラケズリ・静止糸切り後、手持ちのヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	4/5	17.0	9.8	4.4	73－14	C－70

第53図　第17号竪穴住居跡と出土遺物



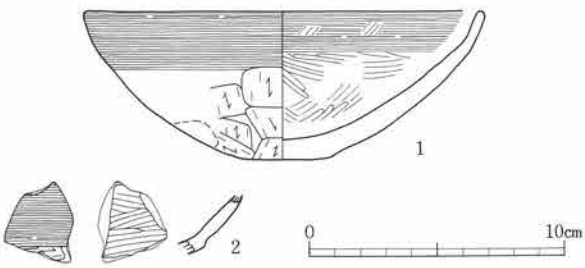
層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層を少量含む。酸化鉄斑紋を少量含む。	堆積土
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	1層よりⅣ層を多く含む。酸化鉄斑紋を粒状に含む。	
3	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	Ⅳ層をブロック状に多量に含む。	
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層をわずかに含み、1層と類似する。	周溝堆積土
5	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	Ⅳ層・酸化鉄斑紋・炭化物を粒状に含む。	
6	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	床面下の溝堆積土
7	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	Ⅳ層ブロックを主体とする。	住居掘り方埋土

貯蔵穴状ピット堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層・焼土をわずかに含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	焼土を多量に含み、10YR5/3 (にぶい黄褐色)ブロックを含む。	

ピットNo	P1		P2	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	略円形	略円形	略円形	不整円形
大きさ	45 × 44cm	32 × 30cm	48 × 46cm	38 × 30cm
深さ	56 cm	50 cm	54.5cm	54.5cm
土色土性備考	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層ブロックを多量に含む。	黒褐色 (10YR3/2) シルト Ⅳ層を少量含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層ブロックを多量に含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層を少量含む。

ピットNo	P3		P4		P5
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	
形状	円形	円形	楕円形	楕円形	(円形)
大きさ	53 × 50cm	24 × 20cm	64 × 35cm	24 × 16cm	68×(62)cm
深さ	57.5cm	57.5cm	51.5cm	40.5cm	5.5cm
土色土性備考	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層ブロックを多量に含む。	黒褐色 (10YR3/2) シルト Ⅳ層を少量、炭化物をわずかに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層ブロックを多量に含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層を少量、炭化物をわずかに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト 焼土・炭化物をわずかに含む。



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	図書番号
1	土師器 坏	床面直上	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラミガキ	4/5	15.8	—	5.9	73−6	C−71
2	土師器 坏	床面直上	ヨコナデ・ケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片	—	—	—	—	C−72

第54図　第18号竪穴住居跡と出土遺物

【壁の状況】IV層を壁としており、周溝底面からやや外傾して立ち上がっている。残存壁高は 8.3cmである。

【床面の状況】一部のため明らかではない。

【カマド】北辺のほぼ中央でカマドの側壁の一部とその北方約１ｍの地点で煙道部の一部が検出された。

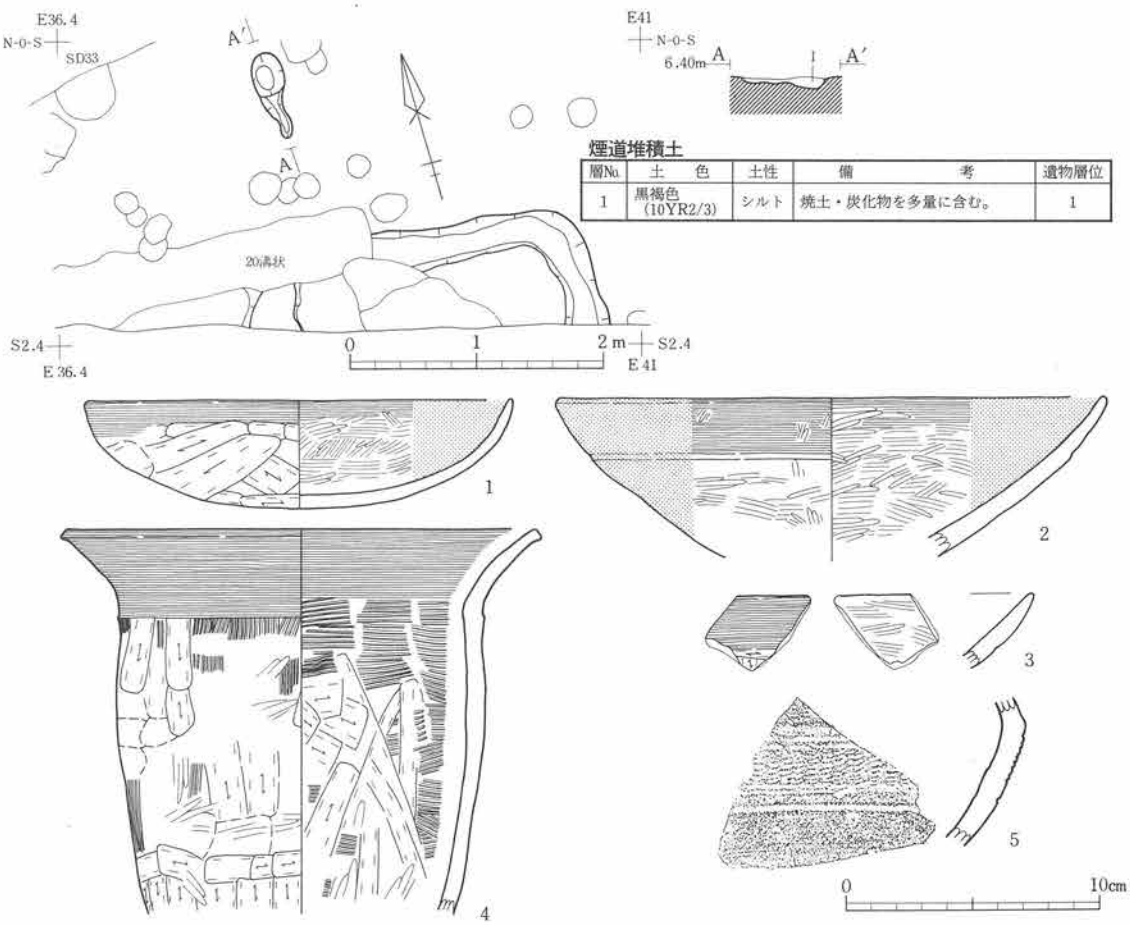
【貯蔵穴状ピット・柱穴】検出されなかった。

【周溝】壁の残存する地点では、その直下で平均すると幅が30cm、深さが13cmの周溝が検出された。

【出土遺物】床面直上・周溝および堆積土中から若干の土器が出土している。その中で図示できたのは土師器４点・須恵器１点である。この他に土師器破片が５点あり、図示したものも含め、いずれも製作時にロクロを使用していない。土師器坏には体・底部が丸底で口縁部へゆるやかに内弯して立ち上がるものと、口縁部との境に段をもつものがある。

第20号竪穴住居跡（SI 20）

【位置】IV・V区　N5.9～0.8　E39.5～46.4



煙道堆積土

層No.	土　色	土性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	焼土・炭化物を多量に含む。	1

番号	種　別	層　位	外　面	内　面	残　存	法　量（cm） 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器　坏	床面直上	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラミガキ・黒色処理	2/3	16.9	－	4.3	73－4	C－73
2	土師器　坏	床面直上	ヨコナデ・ヘラミガキ・黒色処理	ヨコナデ・ヘラミガキ・黒色処理	1/8	(21.8)	－	－	－	C－74
3	土師器　坏	床面直上	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片	－	－	－	－	C－75
4	土師器　甕	堆上	ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ・ハケメ	口縁部～体部 1/7	(19.0)	－	－	－	C－76
5	須恵器　壷	床面直上	沈線と刺突文の文様あり	ロクロナデ	体部破片	－	－	－	－	E－12

第55図　第19号竪穴住居跡と出土遺物

【確認面】IV層上面で検出された。

【遺存状況】削平が大きく及んでいるが、ほぼ全体が検出された。

【重複】第33号溝跡・第10号小溝状遺構群・第16号ピット群と重複しており、それらよりも古い。

【平面形・方向】平面形はほぼ隅丸方形をなしている。その南北方向は真北方向から大きく西に寄っており、N－21.5°－Wである。

【規模】規模は東西が5.20mで、南北が4.80mで、わずかに東西方向が長い。床面積は23.54㎡である。

【堆積土】1層のみ確認された。IV層ブロックを含む層である。

【壁の状況】IV層を壁としており、周溝底面から外傾ぎみに立ち上がっている。残存壁高は約10cmである。

【床面の状況】床面はほぼ平坦である。住居中央の一部はIV層を、その他は住居掘り方埋土を床面としている。

【カマド】確認されなかった。

【貯蔵穴状ピット】北東隅において、径が約90cmのほぼ円形をなす土坑状のピットが検出された。深さはやや浅いものの、位置などから貯蔵穴の可能性が考えられる。

【柱穴】住居の床面からは4個のピットが検出された。これらは柱痕跡をもつとともに住居の平面形の対角線上にあることから主柱穴と考えられる。

【周溝】北西隅の部分を除く壁際直下を周溝がめぐっている。その規模は幅が33cm、深さが18cmで、断面は「U」字形をなす。また、床面下の住居掘り方埋土中で、北辺から約1m内側において周溝状の小溝が確認された。そしてこの溝が東西辺の壁際の周溝と底面がつながることなどから、改築以前の周溝の痕跡と考えられる。

【特記事項】周溝および床面下で検出された小溝のあり方などから、この住居は北辺部が後に拡張されたものと考えられる。改築以前の住居は平面形が長方形で、規模は東西が5.2m、南北が3.6mとなる。

【出土遺物】底面・周溝および堆積土中から土器・石器・石製品が出土しており、その中で図示できたのは土師器8点・縄文土器2点・石器2点・石製品1点である。この他に土師器破片77点・須恵器破片6点がある。土師器は図示したものも含めて、いずれも製作時にロクロを使用していない。坏と甕があり、坏には底・体部と口縁部の境に段をもつものともたないものがある。縄文土器の2点は同一個体とみられるもので、羽状縄文が施されている。

第21号竪穴住居跡（SI 21）

【位置】V区　N3.7～S2.9　E49～53.8

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】遺存状況が比較的良く、ほぼ全体が検出された。

【重複】第34号溝跡・第38号土坑と重複しており、前者より古く、後者より新しい。

【平面形・方向】平面形は東西に長い長方形をなしており、その南北方向はほぼ真北方向を向き、N－1.5°－Wである。

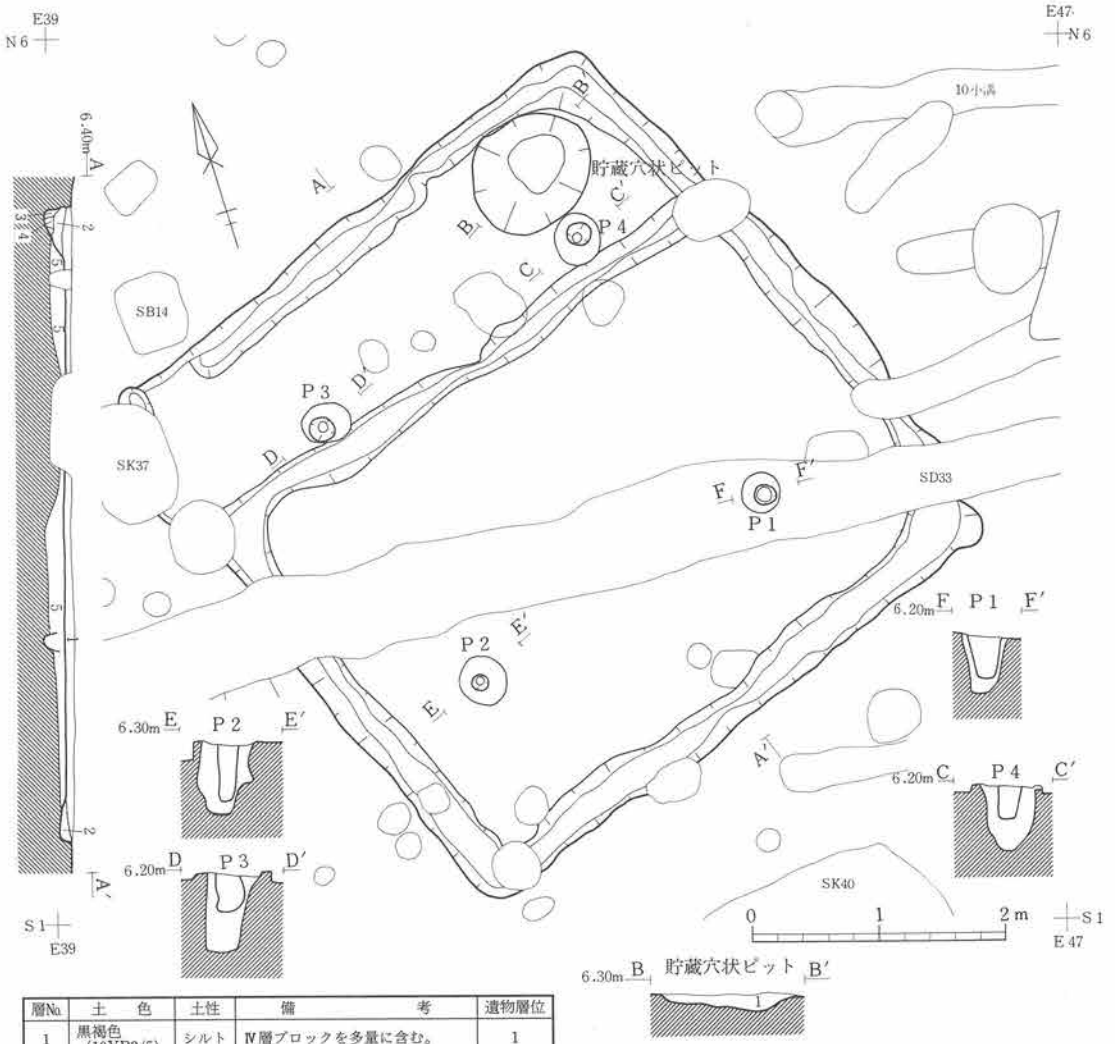
【規模】東西は4.30m、南北は3.68mである。また、床面積は13.2㎡である。

【堆積土】8層認められた。いずれも自然堆積土であり、住居中央部に向かい周辺から将棋倒し状に堆積している。

【壁の状況】IV層を壁としており、周溝底面からやや外傾して立ち上がっている。残存壁高は19cmである。

【床面の状況】床面にはやや起伏がみられる。中央部は主にIV層を、その他は住居掘り方埋土を床面としている。

【カマド】北辺のほぼ中央部でカマドが検出された。燃焼部は天井部が失われ、側壁部分が残存している。燃焼部の幅は40cm、奥行は50cm前後である。その燃焼部からは北方向に幅約30cmの煙道部が延びている



層No.	土　色	土性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/5)	シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	1
2	黒褐色 (7.5YR2/2)	シルト	1層よりやや暗く、Ⅳ層粒子をわずかに含む。	周溝堆積土
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層を粒状にまばらに含む。	
4	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	Ⅳ層を多量に含む。	
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層をブロック状に含む。	住居掘り方埋土

貯蔵穴状ピット堆積土

層No.	土　色	土性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・炭化物をまばらに含む。	堆積土

ピットNo.	P1		P2		P3		P4	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形
大きさ	32 × 31cm	19 × 15cm	38 × 38cm	14 × 13cm	39 × 32cm	20 × 19cm	41 × 36cm	20 × 16cm
深　さ	37.0cm	36.5cm	59.5cm	50.5cm	52 cm	34.5cm	50.0cm	30.0cm
土色・土性備考	黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト Ⅳ層・大ブロックを多量に含む。	暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト Ⅳ層・酸化鉄斑紋をわずかに含む。	黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト Ⅳ層・大ブロックを多量に含む。	暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト Ⅳ層・酸化鉄斑紋をわずかに含む。	黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト Ⅳ層・焼土・炭化物を含む。	暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト Ⅳ層・酸化鉄斑紋をわずかに含む。	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト Ⅳ層・小ブロックをまばらに含む。	暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト Ⅳ層・酸化鉄斑紋をわずかに含む。

第56図　第20号竪穴住居跡

が、確認された長さは約80cmで、先端は調査区外へと続く。カマド側壁は主にIV層のブロックで構築されていた。

【貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】住居の床面からは大小のピットが10個検出された。これらはいずれも柱穴とするにはやや浅いが、配置関係や柱痕跡をもつことなどから、P2・P3・P7が主柱穴と推定される。また、P5もその可能性が考えられる。

【周溝】カマド部分を除く全体で、壁直下をめぐる周溝が検出された。その規模は幅が34cm、深さが6cmで、断面は「U」字状をなしている。

【出土遺物】床面および堆積土・ピット中から土器・石製品が出土しており、その中で図示できたのは土師器8点・石製品1点である。この他に土師器破片109点・須恵器破片3点がある。土師器は坏・甕があり、4を除いては破片も含めて製作時にロクロを使用していないものであることから、4は撹乱により混じったものと考えられる。坏は体・底部が丸底状のものと平底に近いものがあり、前者では口縁部との境に段をもっている。

第22号竪穴住居跡（SI 22）

【位置】VI区　S28.5～31.2　E21.1～23.5

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】住居の南東部が検出され、その他は調査区外に延びている。

【重複】第43・68号土坑と重複しており、それらより古い。

【平面形・方向】検出された範囲から平面形は方形を基調とするものと推測される。また、方向は東辺の方向からみると、真北方向より東に寄っており、N－20°－Eである。

【規模】規模は南北が2.68m以上、東西が2.28m以上である。また、確認された床面積は4.87㎡である。

【堆積土】5層認められた。いずれも自然堆積層で、住居中央部に向かって将棋倒し状に堆積している。

【壁の状況】IV層を壁としており、周溝底面から外傾して立ち上がっている。残存壁高は19cmである。

【床面の状況】底面はほぼ平坦でしまっている。住居中央部はIV層を、その周辺は住居掘り方埋土を床面としている。

【カマド・貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】住居床面から2個のピットが検出された。その中のP1は深さや位置などから主柱穴の1つと考えられる。

【周溝】壁際直下をめぐっているが、東辺の北側で途切れる。規模は幅が27cm、深さが6cmで、断面は「U」字形をなしている。

【出土遺物】床面・周溝および堆積土中から土器・鉄製品が出土しており、その中で図示できたのは土師器4点・須恵器1点・弥生土器2点・鉄製品1点である。この他に土師器破片76点・須恵器破片17点がある。土師器はこの破片も含めていずれも製作時にロクロを使用していないものである。

第24号竪穴住居跡（SI 24）

【位置】VII区　S33.3～39.7　W19.1～25.4

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】所々が他の遺構に切られてはいるが、ほぼ全体が検出された。

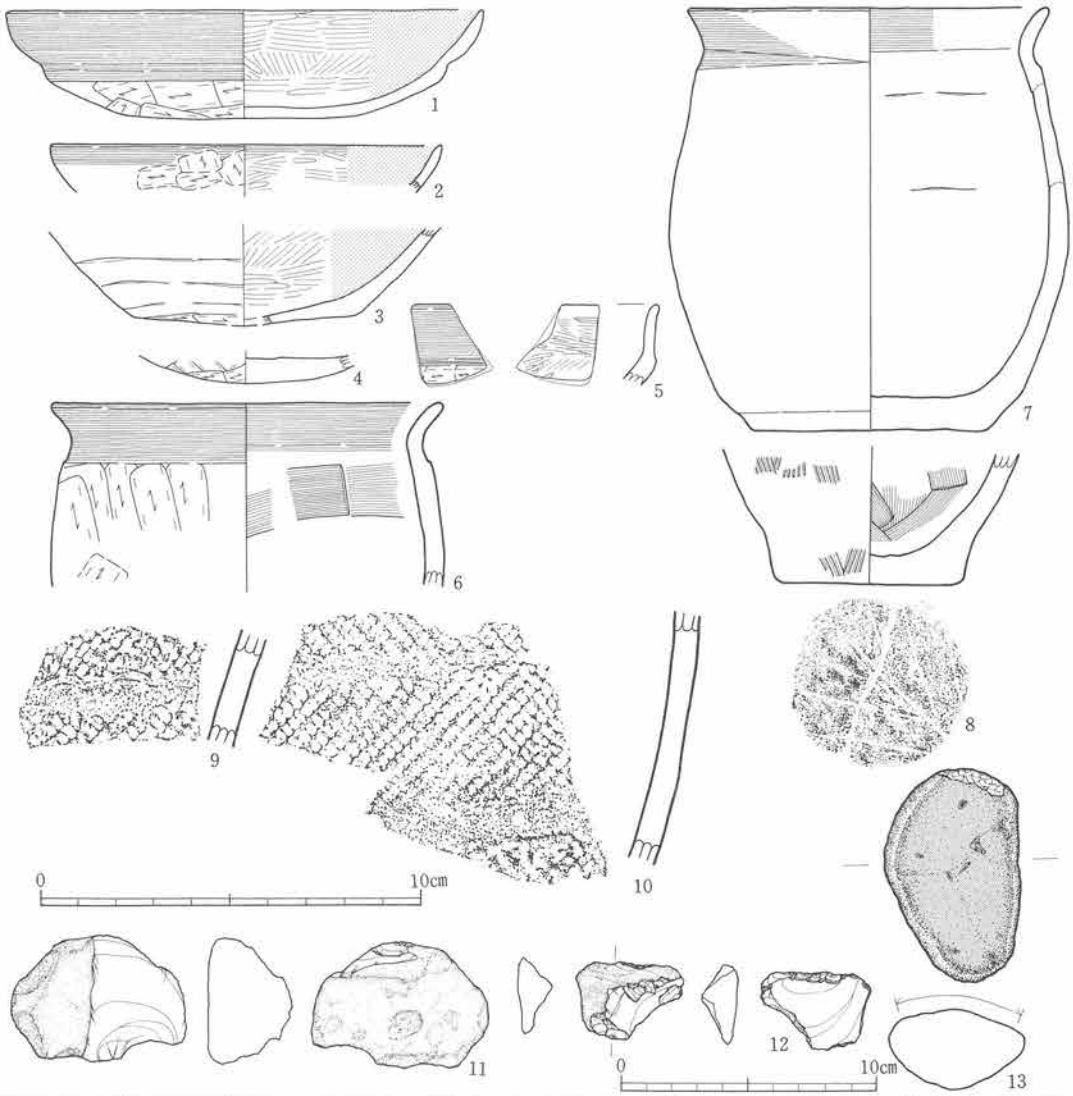
【重複】第48・50・64・65・67号土坑、第19号ピット群と重複しており、それらより古い。

【平面形・方向】平面形は隅丸で、東西がやや長い長方形をなしている。その南北方向は真北方向を向いており、N－0.5°－Eである。

【規模】規模は東西が5.72m、南北が5.14mである。また、床面積は24.78㎡になるものと思われる。

【堆積土】11層認められた。いずれも自然堆積層で、住居中央部に向かって将棋倒し状に堆積している。

【壁の状況】IV層を壁としており、周溝底面から直立ぎみに立ち上がっている。残存壁高は16cmである。

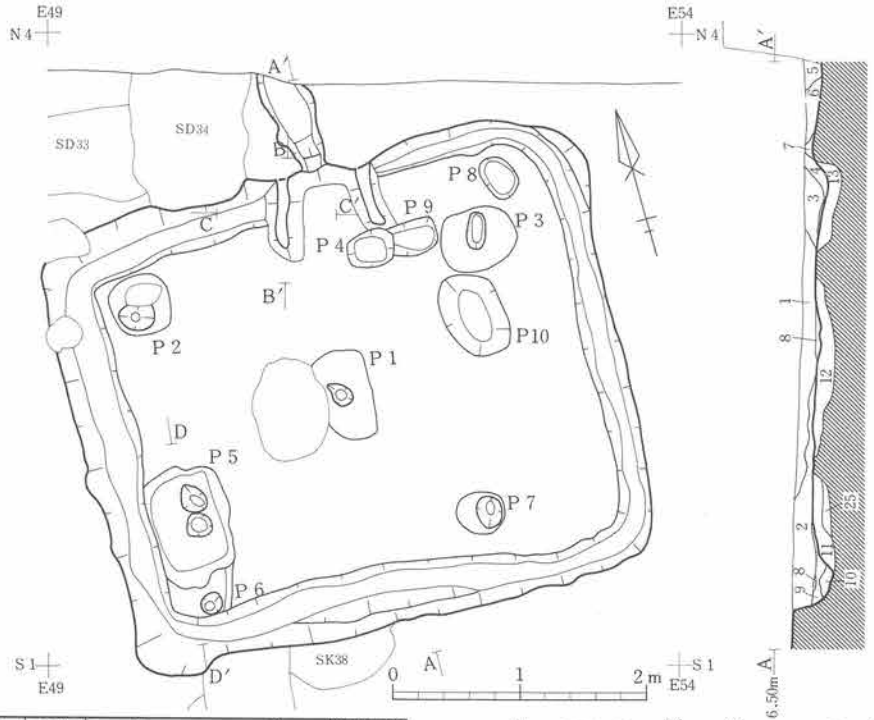


番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	床面直上	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	1/12	(18.8)	—	(4.3)	—	C－77
2	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ミガキ・黒色処理	口縁部 1/10	(15.4)	—	—	—	C－78
3	土師器 坏	堆上	外面調整不明・底部ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	体～底部 1/4	—	(8.6)	—	—	C－79
4	土師器 坏	層位不明	ヘラケズリ	詳細不明	底部のみ	—	—	—	—	C－80
5	土師器 坏	床面直上	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片	—	—	—	—	C－81
6	土師器 甕	層位不明	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部 1/5	(15.4)	—	—	—	C－82
7	土師器 甕	床面直上	ヨコナデ・調整不明	ヨコナデ・ナデ痕あり・調整不明	口縁部 1/2 体部 2/3	14.2	9.4	16.8	76－4	C－83
8	土師器 甕	床面直上	ハケメ・底部に木葉痕あり	ヘラナデ	底部	—	7.0	—	—	C－84

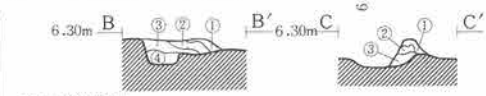
番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
9	縄文土器 深鉢	堆1	羽状縄文 LR・RL。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	86－15	地－36
10	縄文土器 深鉢	掘り方埋土	羽状縄文 LR・RL。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	86－14	地－37

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
11	石核	堆1層	不整の礫を素材とし、その縁辺の一部に二方向から打撃を加え、剝離している。	5.0	6.95	2.6	83.5	凝灰質頁岩	95－16	石－24
12	剝片石器	堆上	横長の剝片の縁辺の所々に二次加工が施されている。	2.25	3.2	1.9	6.2	珪化石英安山岩質凝灰岩	—	石－11
13	敲打痕をもつ礫	堆上	円棒状な礫を利用。磨面は一面および上面に敲打痕が認められる。	8.45	5.3	3.5	170	石英安山岩	—	石-124

第57図　第20号竪穴住居跡出土遺物

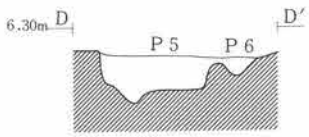


層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	Ⅳ層小ブロックを多く、全体に含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層小ブロック・焼土粒を少量含む。	
3	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	1cm内の焼土ブロックを全体に多く、炭化物を少量含む。	
4	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト		
5	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	焼土粒をまばらに含む。	
6	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	炭化物粒をわずかに含む。	
7	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト		
8	黒色 (10YR1.7/1)		炭化物を多く含む。	
9	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックをまばらに含む。	周溝堆積土
10	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを多く含む。	
11	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層小ブロック・酸化鉄斑紋を多く含む。	住居掘り方埋土
12	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	Ⅳ層を多量に含む。	
13	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	Ⅳ層ブロック・酸化鉄斑紋を多く含む。	



カマド構築土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
①	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	Ⅳ層をブロック状に含む。	カマド構築土
②	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	Ⅳ層を多量に含む。	
③	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層をまばらに含む。	
④	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層を多量に含む。	



ピットNo.	P1		P2		P3		P4	P5	P6	P7	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡				掘り方	柱痕跡
形状	長方形	不整円形	正方形	(円形)	円形	楕円形	円形	略長方形	(長方形)		
大きさ	72×(36)cm	18 × 16cm	48 × 46cm	28×(19)cm	60 × 51cm	30 × 14cm	36 × 29cm	96×(64)cm	48×(46)cm	38 × 33cm	24 × 21cm
深さ	22.5cm	22.5cm	25.5cm	25.5cm	17 cm	17 cm	20 cm	33 cm	4 cm	18.5cm	18.5cm
土色土性備考	黒褐色 (10YR3/1) シルト Ⅳ層ブロックを全体に少量含む。	黒色 (10YR2/1) シルト	黒色 (10YR2/1) 砂質シルト Ⅳ層ブロックを含む。	黒色 (10YR2/1) シルト	黒褐色 (10YR2/2) シルト 焼土粒・炭化物粒・Ⅳ層ブロックを多量に含む。	黒色 (10YR2/1) シルト 焼土粒・Ⅳ層ブロックを少量含む。	黒色 (10YR2/1) シルト Ⅳ層ブロックを少量含む。	黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト	黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト	黒褐色 (10YR2/2) シルト Ⅳ層ブロックを多量に含む。	黒褐色 (10YR2/2) シルト

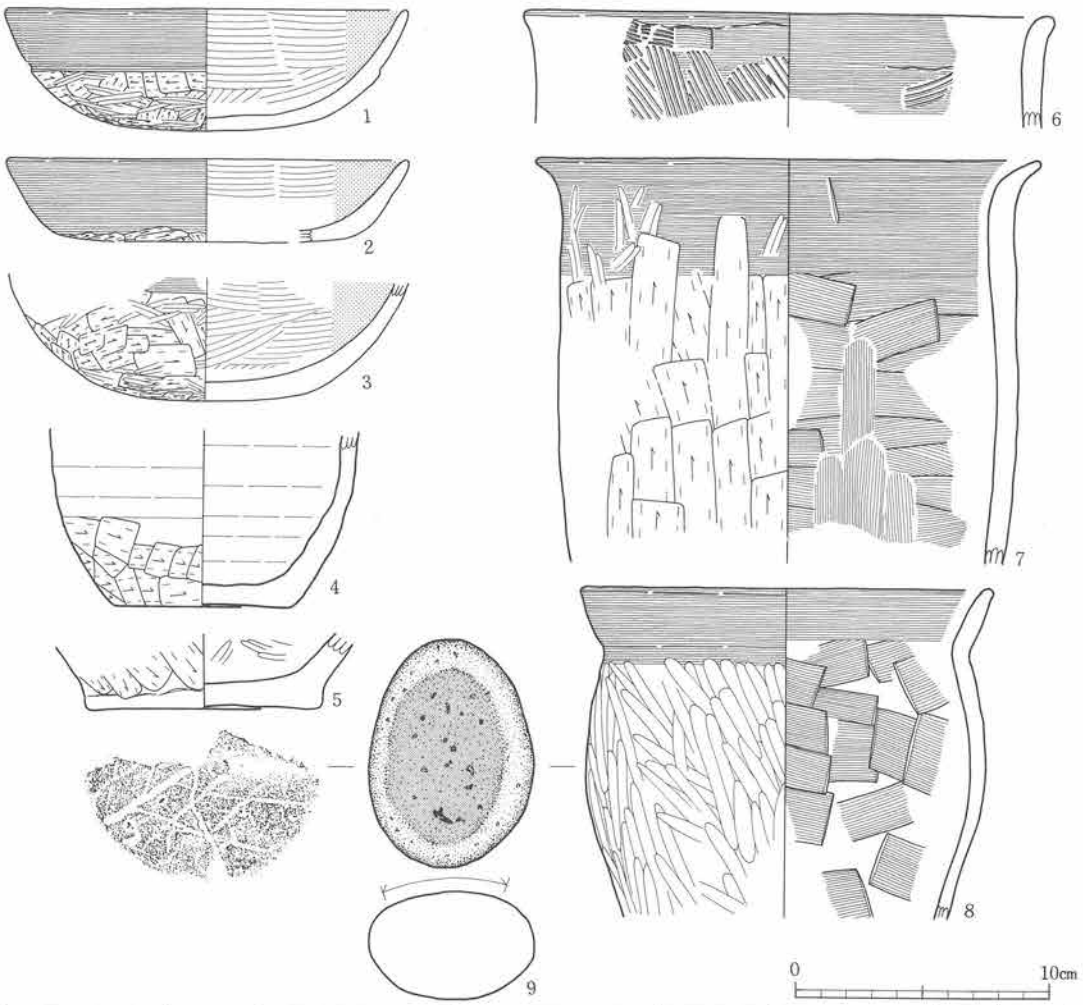
ピットNo.	P8	P9	P10
項目			
形状	楕円形	(楕円形)	隅丸方形
大きさ	34 × 26cm	(36)×26cm	68 × 48cm
深さ	cm	6 cm	7.5cm
土色土性備考	黒褐色 (10YR2/2) シルト 炭化物粒を少量含む。	黒褐色 (10YR2/2) シルト	黒褐色 (10YR2/2) シルト

第58図　第21号竪穴住居跡

【床面の状況】床面はほぼ平坦で、全体的にしまりがある。住居の中央部はIV層を、周縁部は住居の掘り方埋土を床面としている。

【カマド】北辺部のほぼ中央でカマドが検出された。燃焼部は右側壁のみが遺存しており、その構築土はIV層ブロックを主体としている。煙道部は幅約40cm、長さ約1.3mの規模で、先端に向かいやや下がりぎみに造られている。

【貯蔵穴状ピット】カマドの右側において径60cmの円形で土坑状のピットの一部が検出された。大きさ、



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	床面直上	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部一部欠損	16.0	—	4.9	72−11	C−85
2	土師器 坏	堆	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部〜体部 1/8	(15.9)	—	(3.3)	—	C−86
3	土師器 坏	床面直上	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	体部欠損 底部 1/1残存	—	—	—	—	C−87
4	土師器 甕	堆上	ロクロナデ・ヘラケズリ・ナデ	ロクロナデ	口縁部欠損	—	7.0	—	—	C−88
5	土師器 甕	床面直上	ヘラケズリ・底部一木葉痕	ヘラミガキ	底部 1/2	—	9.4	—	—	C−89
6	土師器 甕	床面直上	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ	口縁部 1/8	(21.0)	—	—	—	C−90
7	土師器 甕	堆	ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ・ナデ	口縁部 1/4	(20.0)	—	—	—	C−91
8	土師器 甕	堆	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部〜体部 1/2	(14.4)	—	—	76−5	C−92

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
9	磨面をもつ礫	堆	円棒状の礫を利用。磨面1面および線状痕が認められる。	9.0	6.5	4.2	300	石英安山岩	99−1	石-119

第59図　第21号竪穴住居跡出土遺物

位置などから貯蔵穴と推定される。

【柱穴】住居の床面からは4個のピットが検出された。深さや住居の対角線上に位置していることなどから、これらが主柱穴と考えられる。

【周溝】カマド部分を除く全域の壁際直下で検出された。規模は幅が36cm、深さが12cmで、断面は「U」字状をなしている。

【出土遺物】床面・堆積土中を中心に多量の土器と石製品が出土しており、その中で図示できたのは土師器22点・須恵器1点・弥生土器12点・石製品3点である。この他に土師器破片594点・須恵器破片8点がある。土師器は図示・破片を含めてほとんどが製作時にロクロを使用しておらず、その点からみると第62図7は撹乱により混じったものと考えられる。器種は坏・高坏・盤・鉢・甕・甑からなる。坏は体・底部が丸底状をなし、口縁部との境に段をもつ例が多い。甕は体部が長胴をなすものと球形をなすものとの二者があり、いずれも体部と口縁部との境の段はそれ程明瞭ではない。

第25号竪穴住居跡（SI 25）

【位置】V区　S31.5～34.7　E46.2～47.2

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】西側の一部のみが残存しており、東側は他の遺構により大きく失われている。

【重複】第26号竪穴住居跡と重複しており、これより新しい。また、第3号堀跡と重複しており、これより古い。

【平面形・方向】残存部分から平面形は不整の方形を基調とするものと推定される。方向は西辺の方向からみると、真北方向よりやや東に寄っており、N－13.5°－Eである。

【規模】規模は南北が3.20m前後、東西が1.13m以上である。また、確認された床面積は2.72m²である。

【堆積土】4層認められた。いずれも自然堆積層であり、住居中央部に向かって堆積している。

【壁の状況】IV層を壁としており、床面から外傾ぎみに立ち上がっている。残存壁高は16cmである。

【床面の状況】床面はわずかに東側へ傾斜している。残存する床面は全面住居掘り方埋土を床面としている。

【カマド】カマドは確認されなかったが、床面において焼け面が認められた。位置的には西に寄っており、炉かどうかは不明である。

【貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】床面からは3個のピットが検出された。その中のP2・P3は柱痕跡が確認されており、位置などから柱穴の可能性が考えられる。

【周溝】確認されなかった。

【出土遺物】堆積土からわずか土師器破片が1点出土したのみである。これは坏の体部で、製作時にロクロは使用されておらず、内面は黒色処理が施されている。

第26号竪穴住居跡（SI 26）

【位置】VI区　S31～31.9　E45.3～48.1

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】南側の一部のみが残存しており、北側は他の遺構により大きく失われている。

【重複】第25号竪穴住居跡および第2・3号堀跡と重複しており、それらより古い。

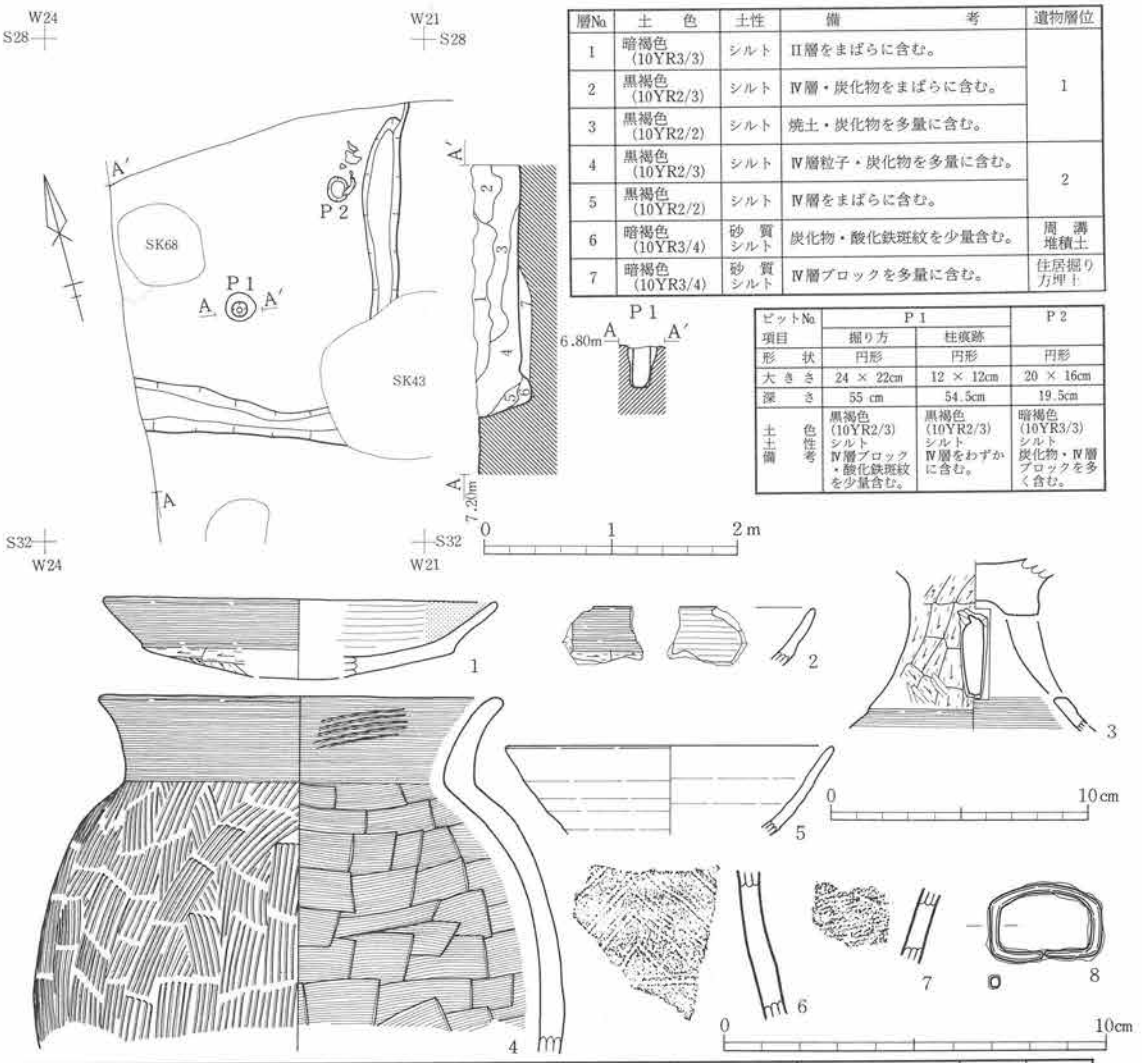
【平面形・方向】残存部分から平面形は隅丸方形を基調とするものと推定される。方向は南辺を基準とすると、南北方向は真北方向よりやや東に寄っている。

【規模】規模は東西が2.85m以上で、南北は0.9m以上である。また、確認された床面積は1.60m²である。

【堆積土】2層認められた。ともに自然堆積層で、ほぼ水平に堆積している。

【壁の状況】IV層を壁としており、床面からほぼ直立ぎみに立ち上がる。残存壁高は19cmである。

【床面の状況】残存する床面はわずかに北側に傾斜



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	II層をまばらに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層・炭化物をまばらに含む。	
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土・炭化物を多量に含む。	
4	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子・炭化物を多量に含む。	2
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層をまばらに含む。	
6	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	炭化物・酸化鉄斑紋を少量含む。	周溝堆積土
7	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	IV層ブロックを多量に含む。	住居掘り方埋土

ピットNo.	P1		P2
項目	掘り方	柱痕跡	
形状	円形	円形	円形
大きさ	24 × 22cm	12 × 12cm	20 × 16cm
深さ	55 cm	54.5cm	19.5cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/3) シルト IV層ブロック・酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト IV層をわずかに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト 炭化物・IV層ブロックを多く含む。

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～底部1/12	(15.5)	−	−	−	C−93
2	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	口縁部破片	−	−	−	−	C−94
3	土師器 高坏	床面	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・不明	脚部のみ	−	−	−	−	C−95
4	土師器 甕	床面	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ヘラナデ	口縁部～体部 1/2	(16.0)	−	−	76−6	C−96
5	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部 1/8	(14.0)	−	−	−	E−13

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	弥生土器 壺	堆1層	三本平行沈線による山形文など。内面ミガキ。	体部破片	−	−	−	87−34	弥−9
7	弥生土器 甕?	堆1層	撚糸文・R。内面ミガキ。	体部破片	−	−	−	−	地−40

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
8	鉄製品 紋金具	堆1層	完形。断面は方形に近い。	横径 2.9	0.2	0.2	3.0	101-8	N−7

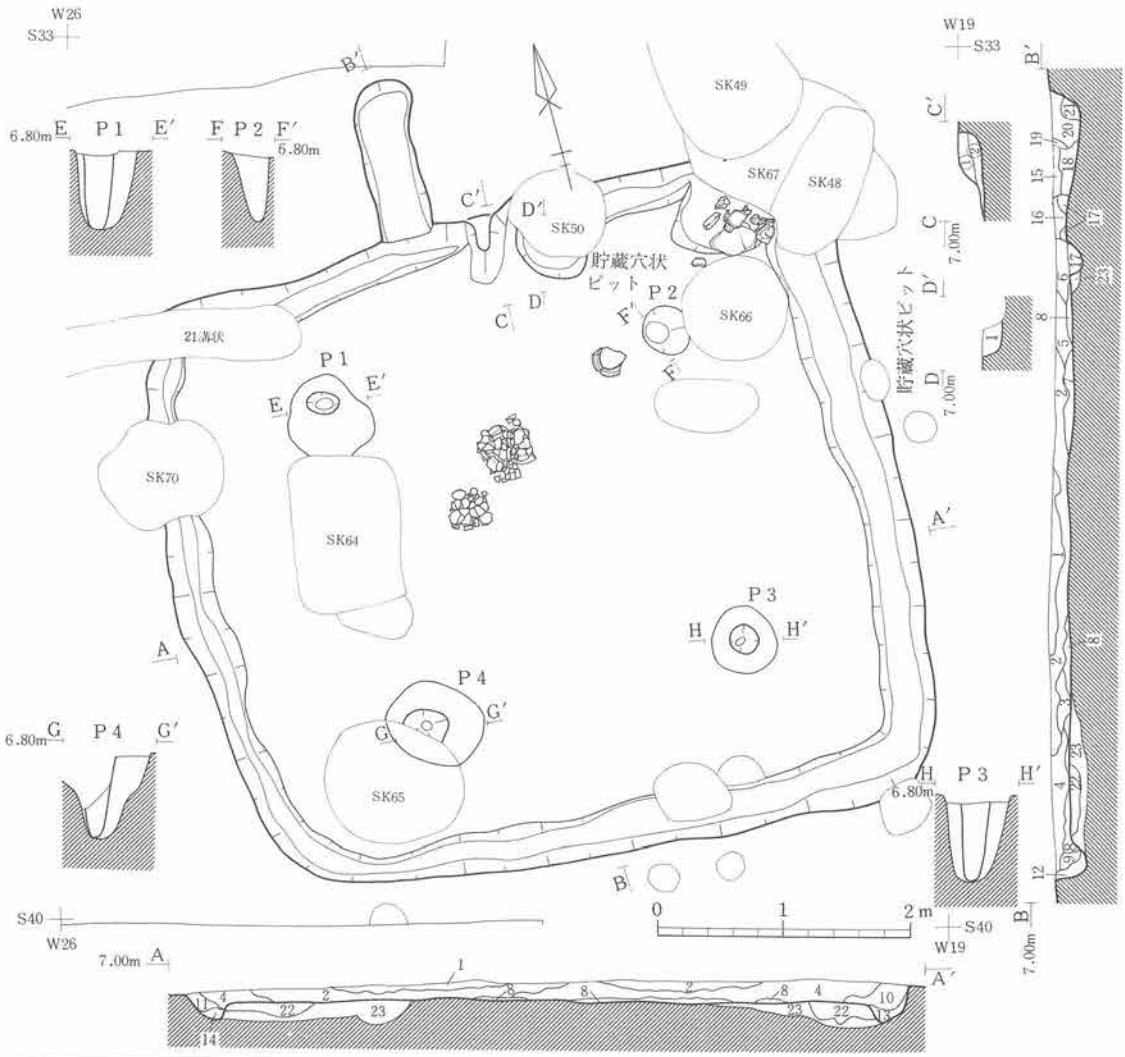
第60図　第22号竪穴住居跡と出土遺物

している。また、住居掘り方埋土を床面としている。

【カマド・貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】床面からは1個のピットが検出されたが、他のピットとの関係が不明で、柱穴かどうかはわからない。

【周溝】確認されなかった。



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	基本層II層をまばらに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	IV層粒子・酸化鉄斑紋を粒状に含む。	
3	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	IV層粒子・炭化物を少量含む。	
4	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	IV層粒子・酸化鉄斑紋を少量含む。	
5	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物をまばらに含む。	2
6	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	焼土・灰をまばらに含む。	
7	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	10YR2/1黒色ブロックを含む。	
8	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	IV層を多量に含む。炭化物をわずかに含む。	
9	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	炭化物をわずかに含む。	
10	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物をわずかに含む。	
11	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子・酸化鉄斑紋をまばらに含む。	

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
12	暗褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層粒子・酸化鉄斑紋をまばらに含む。	周溝堆積土
13	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	IV層粒子を多量に含む。	
14	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	IV層粒子・酸化鉄斑紋を多量に含む。	
15	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	10YR3/2黒褐色土をブロック状に含む。	煙道部堆積土
16	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層をわずかに含む。	
17	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	焼土粒・炭化物を多量に含む。	
18	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	焼土をブロック状に含む。	
19	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	IV層をブロック状に含む。	
20	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	焼土・炭化物を少量含む。	
21	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	10YR2/1黒色土をブロック状に含む。	
22	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層ブロックが混在する。	住居掘り方埋土
23	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	IV層ブロックを主体とする。	

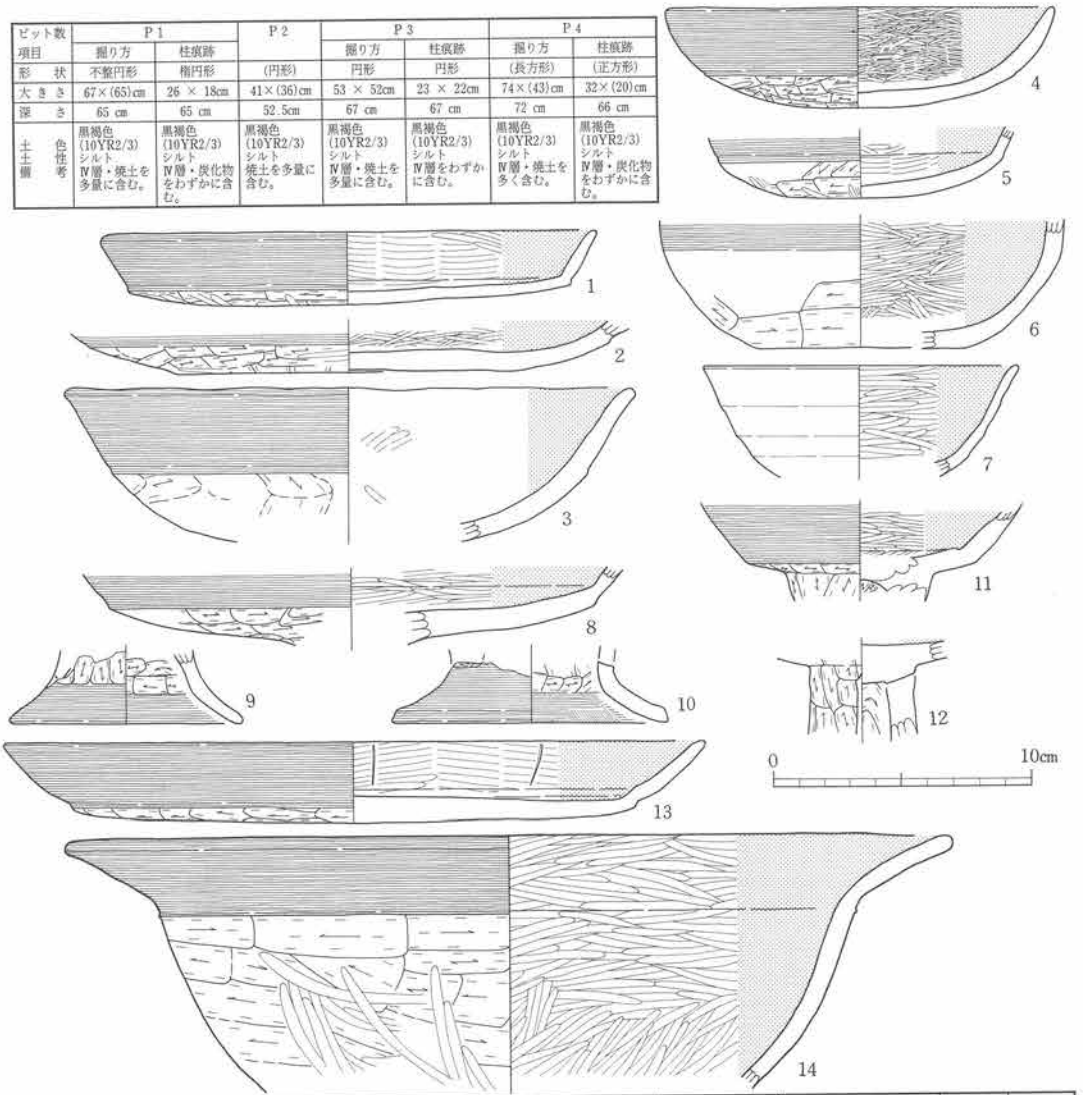
貯蔵穴状ピット堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	IV層ブロック・焼土を多く含む。	1

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
①	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	IV層を主体とする。	カマド構築土
②	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	IV層が主体、褐色砂質シルトブロックが混じる。	

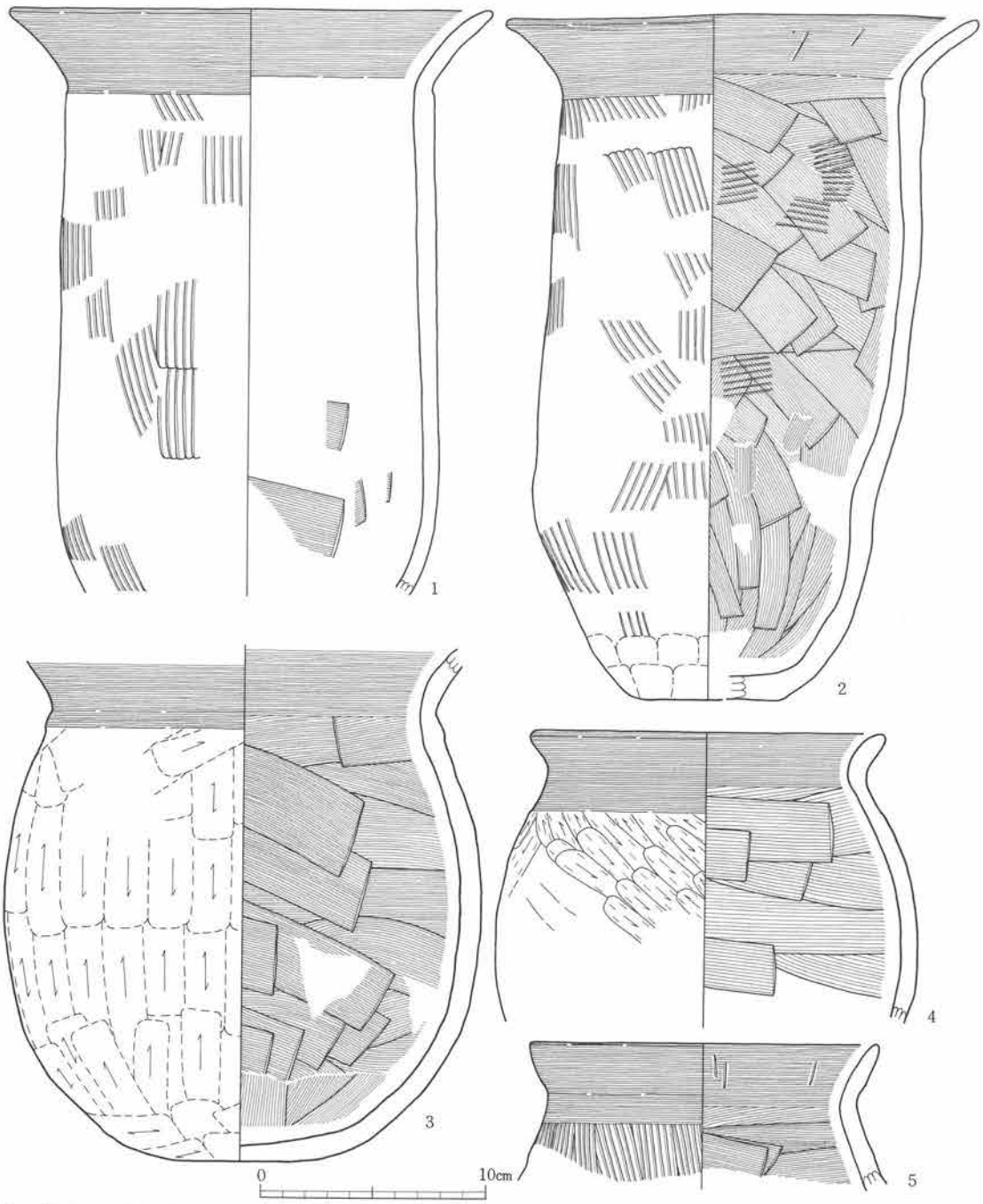
第61図　第24号竪穴住居跡

ピット数	P1		P2	P3		P4	
項目	掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	不整円形	楕円形	(円形)	円形	円形	(長方形)	(正方形)
大きさ	67×(65)cm	26 × 18cm	41×(36)cm	53 × 52cm	23 × 22cm	74×(43)cm	32×(20)cm
深さ	65 cm	65 cm	52.5cm	67 cm	67 cm	72 cm	66 cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層・焼土を多量に含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層・炭化物をわずかに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 焼土を多量に含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層・焼土を多量に含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層をわずかに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層・焼土を多く含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層・炭化物をわずかに含む。



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	床面・堆2層	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	3/4	17.5	−	2.9	72−13	C−97
2	土師器 坏	堆2層	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	底部 1/2	−	−	−	−	C−98
3	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部〜体部 1/5	(22.4)	−	−	−	C−99
4	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ハケメ・ヘラミガキ・黒色処理	1/3	(15.2)	−	4.0	72−12	C−100
5	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理とみられる	底部〜体部のみ	−	−	−	−	C−101
6	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	底部〜体部のみ	−	−	−	−	C−102
7	土師器 坏	周溝	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部〜体部 1/2	(12.4)	−	−	−	C−103
8	土師器 高坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	体部〜脚部 1/4	−	−	−	−	C−104
9	土師器 高坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラケズリ	脚部 1/3	−	(9.2)	−	−	C−105
10	土師器 高坏	堆1層	ヨコナデ・透かしあり	ヘラケズリ・ヘナラデ・ヨコナデ	脚部 1/4	−	(10.8)	−	−	C−106
11	土師器 高坏	堆2層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	1/2	−	−	−	75−2	C−107
12	土師器 高坏	堆1層	ヘラケズリ・透かしあり	ヘラミガキ・黒色処理・脚部内ヘラケズリ	脚部破片	−	−	−	−	C−108
13	土師器 盤	床面	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラナデ・ヘラミガキ・黒色処理	2/3	27.6	−	3.2	73−11	C−109
14	土師器 鉢	堆1・2層	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラナデ・ヘラミガキ・黒色処理	口縁部〜体部 1/3	(35.0)	−	−	73−13	C−110

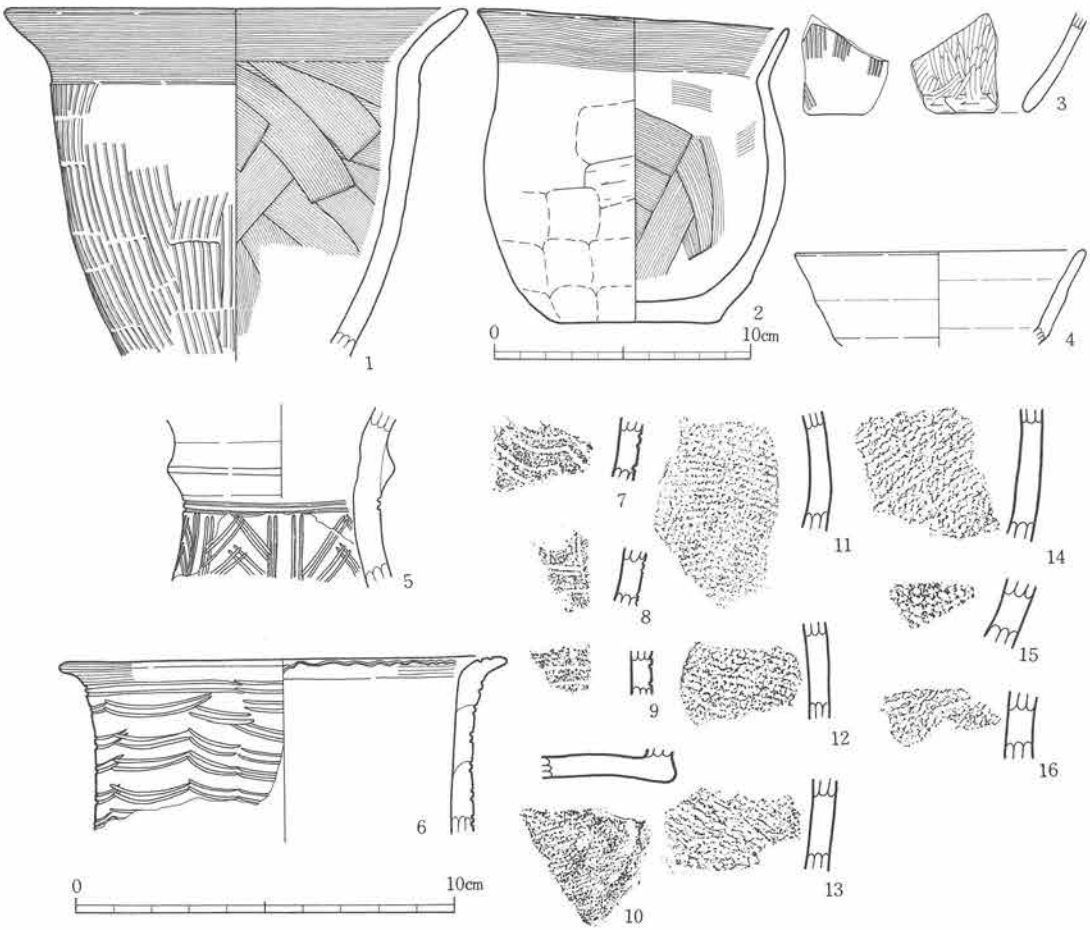
第62図　第24号竪穴住居跡出土遺物 (1)



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	床面	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ヘラナデ・指頭によるナデ	口縁部～体部あり 底部欠損	21.4	—	26.1	77－2	C-111
2	土師器 甕	床面	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケメ・ヘラナデ・指頭によるナデ	4/5	20.8	7.0	30.8	77－1	C-112
3	土師器 甕	床面	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～底部 1/2弱	—	—	—	76－7	C-113
4	土師器 甕	堆1層・堆上	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部	15.8	—	—	76－8	C-114
5	土師器 甕	堆1層	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部 口縁部 1/3	(15.6)	—	—	—	C-115

第63図　第24号竪穴住居跡出土遺物 (2)

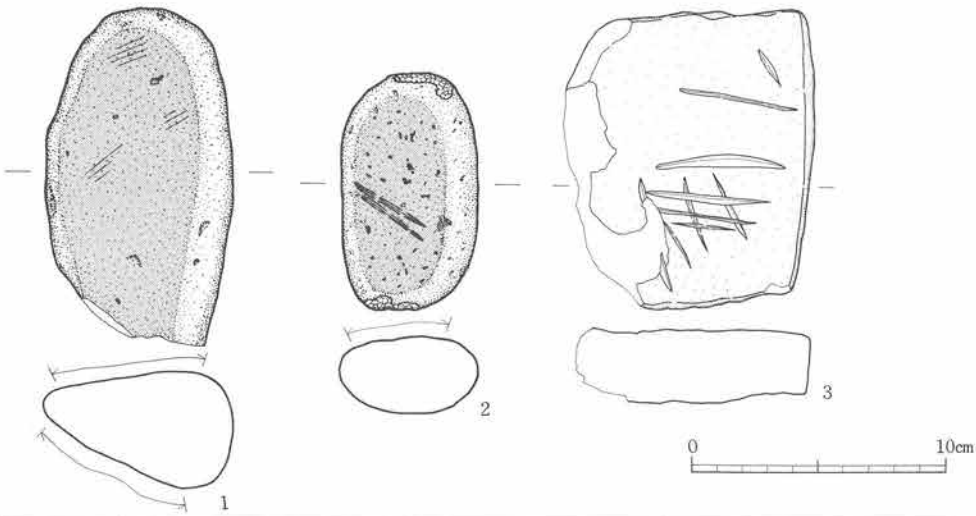
【出土遺物】堆積土中から若干の土器と砥石が出土したが、図示できたのは砥石１点のみである。土器は土師器破片が４点・須恵器破片が１点で、土師器は製作時にロクロ使用のものはみられない。



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	床面直上	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部 口縁部 1/2	18.2	－	－	77－3	C-116
2	土師器 甕	床面直上	ヨコナデ・ヘラケズリ・指頭によるオサエ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部 1/3 体部一部欠損	12.2	(6.4)	12.5	76－9	C-117
3	土師器 甑	堆２層	ハケメ	ヘラケズリ・ミガキ	体部破片	－	－	－	－	C-118
4	須恵器 坏	堆１層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/16	(11.4)	－	－	－	E－14

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
5	弥生土器 壺	堆１層	頸部外面に１条の突帯をもつ。その下方には二本平行沈線により、横位・縦位の文様で区画し、その中を山形文で埋めている	頸部破片	－	－	－	87－10・11	弥－10 12・20
6	弥生土器 壺	周溝	広口壺の口縁部。二本平行沈線による連弧文と波状文。内外面ともナデ。	口縁部 1/5	(11.8)	－	－	87－12	弥－24
7	弥生土器 壺	堆１層	二本平行沈線による連弧文。内面はミガキ。	体部破片	－	－	－	－	弥－21
8	弥生土器 壺	堆１層	二本平行沈線による文様。	体部破片	－	－	－	－	弥－22
9	弥生土器 壺	堆１層	二本平行沈線による文様。	体部破片	－	－	－	－	弥－23
10	弥生土器 鉢?	堆１層	底部外面に織物痕あり。内面はナデ。	底部破片	－	－	－	88－8	弥－35
11	弥生土器 甕?	堆１層	撚糸文R。内面ナデ。	体部破片	－	－	－	－	地－74
12	弥生土器 甕?	堆１層	撚糸文R。内面ナデ。	体部破片	－	－	－	－	地－75
13	弥生土器 甕?	堆２層	撚糸文R。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	－	地－76
14	弥生土器 甕?	堆２層	撚糸文R。内面ナデ。	体部破片	－	－	－	88－21	地－77
15	弥生土器 甕?	堆２層	縄文L R。内面ナデ。	体部破片	－	－	－	－	地－78
16	弥生土器 甕?	住居掘り方埋土	撚糸文R。	体部破片	－	－	－	－	地－79

第64図　第24号竪穴住居跡出土遺物（3）



番号	種　別	層　位	特　徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石　材	写真図版	登録番号
1	磨面をもつ礫	堆1層	下部欠損。円棒状の礫利用。磨面が上下2面認められる。	(13.5)	7.1	4.5	(660)	石英安山岩	99－8	石-144
2	敲打痕をもつ礫	堆1層	円棒状の礫使用。磨面が一面にあり、上下端に敲打痕がみられ、線状痕も認められる。	9.4	5.4	3.1	215	石英安山岩	99－7	石-147
3	不明石製品	堆2層	一部欠損。軟質の切石の一面に溝が数条認められる。	12	(9.9)	3.4	(192)	石英安山岩質凝灰岩	96－13	石－46

第65図　第24号竪穴住居跡出土遺物（4）

第27号竪穴住居跡（SI 27）

【位置】VI区　S33.1～36.6　E51～54.1

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】南東部のみが残存しており、その他は他の遺構により大きく失われている。

【重複】第3号堀跡と重複しており、これより古い。

【平面形・方向】残存部分から平面形は隅丸の方形を基調とするものと推定される。方向は東辺の方向をみると、真北方向より東に若干寄っており、N－12.5°－Eである。

【規模】規模は東西が3m以上、南北が2.74m以上である。また、確認された床面積は6.9㎡である。

【堆積土】2層認められた。ともに自然堆積層であり、住居中央部に向かって堆積している。

【壁の状況】IV層を壁としている。残存壁高は4cmと保存が悪く、壁の立ち上がりは不明である。

【床面の状況】床面はわずかに西側に傾斜している。また、残存する床面は全面住居掘り方埋土を床面としている。

【カマド・貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】床面からは6個のピットが検出された。いずれも浅く、また、配置関係が不規則であり、柱穴かどうかは不明である。

【周溝】南辺の東寄りの壁際直下から、西方へ走行する幅13cm、深さ7cmの小溝が検出された。途中から床面を走行していることから周溝かどうかは明確ではない。

【出土遺物】床面・掘り方埋土・堆積土などから土器・土製品が出土しており、その中で図示できたのは土師器4点・須恵器2点・弥生土器1点・とりべ1点・フイゴの羽口1点である。この他に土師器破片102点・須恵器破片2点・とりべ破片1点がある。土師器はいずれも製作時にロクロを使用していないものである。

第28号竪穴住居跡（SI 28）

【位置】VI区　S36.7～37.9　E60.6～64.7

【確認面】IV層上面で確認されたが、調査区壁面で掘り込み面を検討したところ、東側ではIII b 層から掘り込まれていることが判明した。。

【遺存状況】北東部の一部のみが検出され、他の部分は調査区外に延びている。

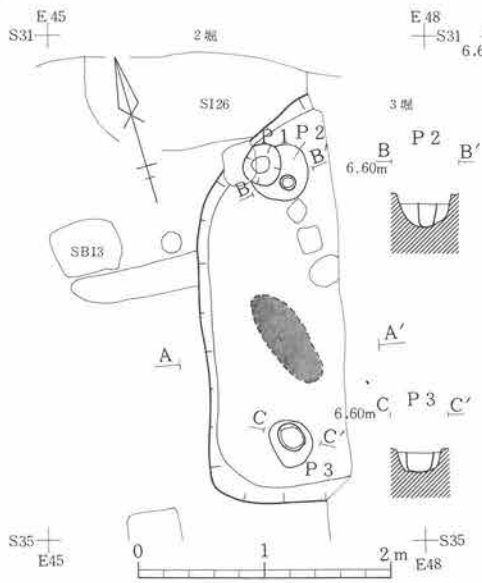
【重複】第22号ピット群の一部と重複しており、それより古い。

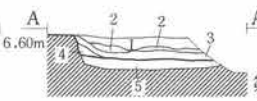
【平面形・方向】検出された部分から平面形は隅丸の方形を基調とするものと推定される。方向は北辺方向を基準とすると、真北方向からわずかに西に寄り、N－5.5°－W である。

【規模】規模は東西が3.52m 以上、南北が1.36m 以上である。また、確認される床面積は2.31㎡である。

【堆積土】9 層認められた。いずれも自然堆積層とみられ、住居周辺から将棋倒し状に堆積している。

【壁の状況】IV層および一部ではIII b 層を壁としており、周溝底面からはやや外傾して立ち上がっている。残存壁高は18cmである。

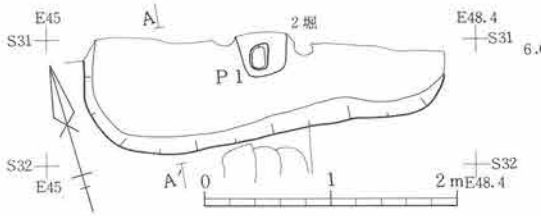


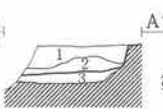


第25号竪穴住居跡

層No.	土　色	土性	備　考	遺物層位
1	黒褐色（10YR2/2）	砂質シルト		堆積土
2	黒褐色（10YR2/3）	砂質シルト		
3	黒褐色（10YR2/2）	砂質シルト	IV層ブロックを少量含む。	
4	黒褐色（10YR3/2）	砂質土		
5	註記もれ			住居掘り方埋土

ピット数	P 1	P 2		P 3	
項目		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	（円形）	（円形）	円形	略円形	楕円形
大きさ	32×（28）cm	44×（44）cm	12 × 12cm	37 × 33cm	24 × 19cm
深　さ	15.5cm	32 cm	27 cm	19 cm	8.5cm
土色・性・備考	黒褐色（10YR3/2）砂質シルトIV層小ブロックを全体に少量含む。	黒色（10YR2/1）砂質シルトIV層ブロックをわずかに含む。	黒色（10YR2/1）砂質シルト	にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質シルト	黒褐色（10YR2/2）砂質シルトIV層ブロックを全体に少量含む。





第26号竪穴住居跡

層No.	土　色	土性	備　考	遺物層位
1	黒褐色（10YR2/2）	砂質シルト	焼土粒をごくわずかに含む。	堆積土
2	黒褐色（10YR3/2）	砂質シルト	IV層小ブロックを全体に少量含む。	
3	註記もれ			住居掘り方埋土

ピットNo.	P 1	
項目	掘り方	柱痕跡
形　状	（正方形）	長方形
大きさ	36 × 36cm	24 × 14cm
深　さ	50 cm	36 cm
土色・性・備考	黒褐色（10YR3/2）砂質シルト	黒褐色（10YR3/2）砂質シルトIV層ブロックを全体に少量含む。

番号	種　別	層　位	特　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　材	写真図版	登録番号
1	砥石	堆	一端部欠損。柱状を基本とするが、面が多数ある。やや軟質で、シルト質状の石材。気泡を含む。主要砥面は4面であるが、端面も使われているようである。	4.6	3.1	3.0	（48）	石英安山岩質凝灰岩	97－28	石－85

第66図　第25・26号竪穴住居跡と出土遺物

【床面の状況】床面にはやや起伏が認められる。中央はIV層を、その他は住居掘り方埋土を床面としている。

【カマド】北辺のほぼ中央でカマドが検出された。燃焼部のみで、天井部はなく、両側壁が残存している。規模は幅が46cm、奥行が40cmである。側壁はIV層ブロックを主体として構築されており、その上面には補強として土師器甕が置かれている。

【貯蔵穴状ピット】北東隅において検出された。平面形は楕円形に近く、規模は長軸が80cm、短軸が60cmで、深さは12cmである。

【柱穴】床面からは1個のピットが検出されたが、極めて浅く、柱穴とは考えられない。

【周溝】カマド部分を除いて、壁際直下で検出された。幅は19cm、深さは5cmで、断面は「U」字状をなしている。

【出土遺物】床面・カマド・堆積土・掘り方埋土・ピットから若干の土器と石製品が出土しており、その中で図示できたのは土師器5点と石製品1点である。この他に土師器破片36点がある。土師器はいずれも製作時にロクロを使用していない。

第29号竪穴住居跡（SI 29）

【位置】VI区　S35.8～39　E67.7～71.9

【確認面】IV層上面で確認されたが、調査区壁面で掘り込み面を検討した結果、西側でIII b層から掘り込まれていることが判明した。

【遺存状況】北東隅のみが検出され、その他は調査区外に延びている。

【重複】第22号ピット群の一部と重複しており、それより古い。

【平面形・方向】検出された部分から、平面形は方形を基調とするものと推定される。方向は北辺を基準にすると、南北方向は真北方向を向く。

【規模】規模は東西が3.90m以上、南北が1.68m以上である。また、確認された床面積は3.08m²である。

【堆積土】9層認められた。いずれも自然堆積層とみられ、住居周辺から将棋倒し状に堆積している。

【壁の状況】IV層および一部はIII b層の一部を壁としており、周溝底面から外傾ぎみに立ち上っている。残存壁高は8cmである。

【床面の状況】床面には比較的起伏が認められる。カマド付近は住居掘り方埋土を、その他はIV層を床面としている。

【カマド】北辺のほぼ中央でカマドが検出された。燃焼部と煙道部からなっており、燃焼部は側壁部分が残存しており、これらはIV層ブロックで構築されている。その内容は幅60cm、奥行80cmの範囲にやや凹んでいる。煙道部は幅35cm、長さ2mを計り、ピット状をなす先端部に向かいやや下がり傾斜している。

【貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】床面からは1個のピットが検出された。深い柱痕跡が確認されたことと、その位置などから柱穴の1つと考えられる。

【周溝】カマド部分を除く壁際直下で検出された。幅は19cm、深さは7cmで、断面は「U」字状をなしている。

【出土遺物】住居掘り方埋土および堆積土中からわずかに土器が出土しているが、図示できたのは縄文土器2点のみである。この他に土師器破片が3点あり、これらはいずれも製作時にロクロを使用していないものである。

第30号竪穴住居跡（SI 30）

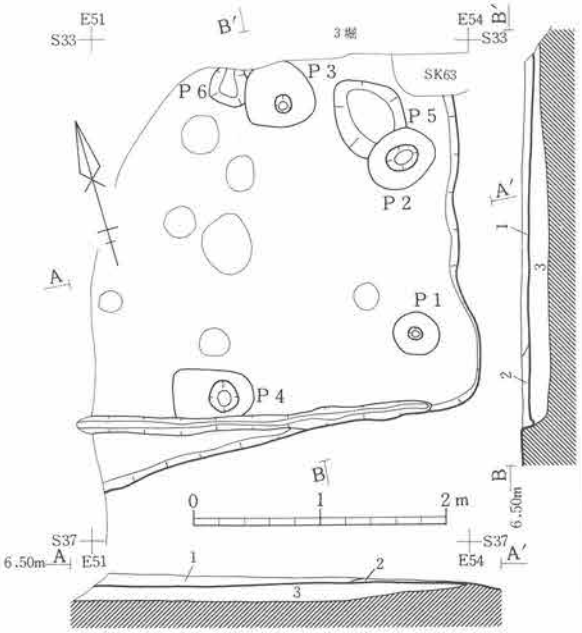
【位置】VI区　S32.4～38　E57.9～64.4

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】他の遺構により大きく失われており、残存するのは南側の一部のみである。

【重複】第47・48・50号溝跡、第3号堀跡などと重複しており、これらの全ての遺構より古い。

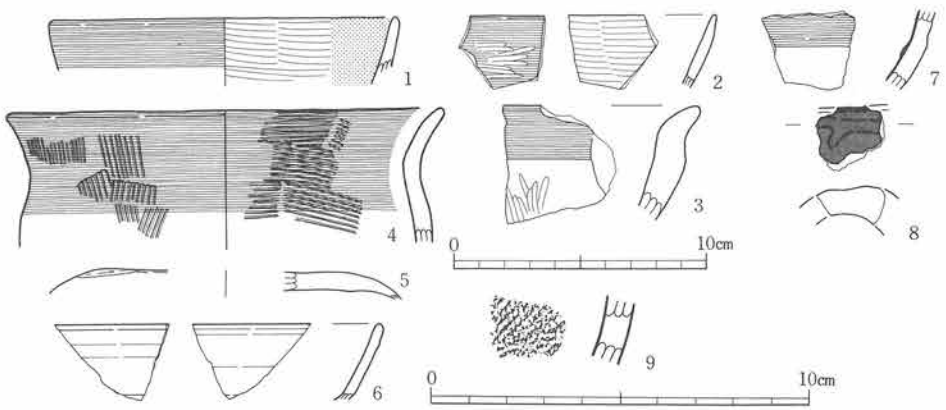
【平面形・方向】残存部分から、平面形は隅丸方形



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	炭化物・焼土粒・Ⅳ層小ブロックをわずかに含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	Ⅳ層小ブロックを全体に多く含む。	
3	註記もれ			住居掘り方埋土

ピット数	P 1		P 2	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	円形	円形	楕円形	楕円形
大きさ	36 × 34cm	11 × 10cm	55 × 44cm	33 × 20cm
深さ	10 cm	9 cm	17 cm	16.5cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/1) シルト Ⅳ層ブロックを少量含む。	黒褐色 (10YR3/4) 砂質シルト Ⅳ層ブロックを多量に含む。	黒褐色 (10YR3/1) シルト Ⅳ層ブロックを少量含む。	黒褐色 (10YR3/1) シルト

ピット数	P 3		P 4		P 5	P 6
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡		
形状	(円形)	円形	長方形	円形	(隅丸方形)	(方形)
大きさ	(54)×51cm	15 × 13cm	66 × 44cm	23 × 22cm	(60)×54cm	(33)×(30)cm
深さ	21 cm	13 cm	39 cm	14 cm	16.5cm	11.5cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/1) シルト	黒褐色 (10YR3/1) シルト Ⅳ層・焼土・炭化物・ブロックを多量に含む。	黒褐色 (10YR3/1) シルト	黒褐色 (10YR3/1) シルト Ⅳ層・焼土・炭化物・ブロックを多量に含む。	暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト Ⅳ層ブロックを多量に含む。	黒褐色 (10YR3/2) シルト



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆	ヨコナデ	ヘラミガキ	口縁部 1/8	(13.9)	−	−	−	C-119
2	土師器 坏	堆	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	口縁部破片	−	−	−	−	C-120
3	土師器 坏	住居掘り方	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラミガキ	口縁部破片	−	−	−	−	C-121
4	土師器 甕	床面直上	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ	口縁部 1/8	(17.4)	−	−	−	C-122
5	須恵器 蓋	堆	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	天井部破片	−	−	−	−	E-15
6	須恵器 坏	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部破片	−	−	−	−	E-16

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	とりべ	掘り方埋土	外面に段が付く。外面−ヨコナデ。内面−溶解物付着。白針わずかに含む。器厚−0.7cm。	口縁部〜体部破片	−	−	−	90−20	ト−22

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
8	フイゴの羽口	堆	先端破片。溶解物付着。	(2.5)	(2.7)	(1.5)	(8.4)	(1.7)	−	土−45

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
9	弥生土器 甕?	堆	撚糸文R。内面ナデ。	体部破片	−	−	−	−	地−41

第67図　第27号竪穴住居跡と出土遺物

を基調とするものと推定される。方向は西辺方向をみると、ほぼ真北方向を向いており、N－2.5°－Eである。

【規模】規模は東西が5.84m、南北が3.70mである。また、確認された床面積は15.26㎡である。

【堆積土】2層認められた。自然堆積層で、住居中央に向かって堆積している。

【壁の状況】IV層を壁としており、周溝底面からゆるやかに立ち上がっている。残存壁高は12cmである。

【床面の状況】床面はほぼ平坦である。中央部はIV層を、その周辺は掘り方埋土を床面としている。

【カマド・貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】南西部から1個検出された。住居の対角線上にあることから柱穴と考えられ、また堆積土がIV層ブロックを主体にしていることから、柱の抜き取り穴とも推定される。

【周溝】残存する部分では、全域で壁際直下で検出された。ただし、南東隅では壁際だけでなく、その約1m内側にも周溝がめぐるようである。周溝は幅が44cmと広く、深さは12cmで、断面は「U」字状をなしている。

【特記事項】南東隅の周溝のあり方からすると、この住居は改築され、東辺が拡張された可能性が高い。

【出土遺物】周溝および堆積土中から土器・石製品が出土しており、その中で図示できたのは土師器3点・須恵器1点・石製品4点である。この他に土師器破片75点・須恵器破片10点・とりべ破片1点がある。土師器には製作時にロクロを使用したものも破片でわずかにみられるが、大部分は非ロクロのものである。

第31号竪穴住居跡（SI 31）

【位置】Ⅷ区　S52.6～58.4　E96.7～103.2

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】他の遺構により大きく失われているが、全体形だけは確認できた。

【重複】第64号溝跡・第25号ピット群などと重複しており、いずれよりも古い。

【平面形・方向】平面形は隅丸の、東西方向に長い長方形をなすものと考えられる。南北方向は真北からいく分東に寄っており、N－9.5°－Eである。

【規模】規模は東西が5.98m、南北が4.80m以上である。また、確認された床面積は29.17㎡前後となりそうである。

【堆積土】2層認められた。自然堆積層で、ほぼ水平に堆積している。

【壁の状況】IV層を壁としており、床面からやや外傾して立ち上っている。残存壁高は10cmである。

【床面の状況】床面はほぼ平坦である。中央部はIV層を、周辺部は住居掘り方埋土を床面としている。

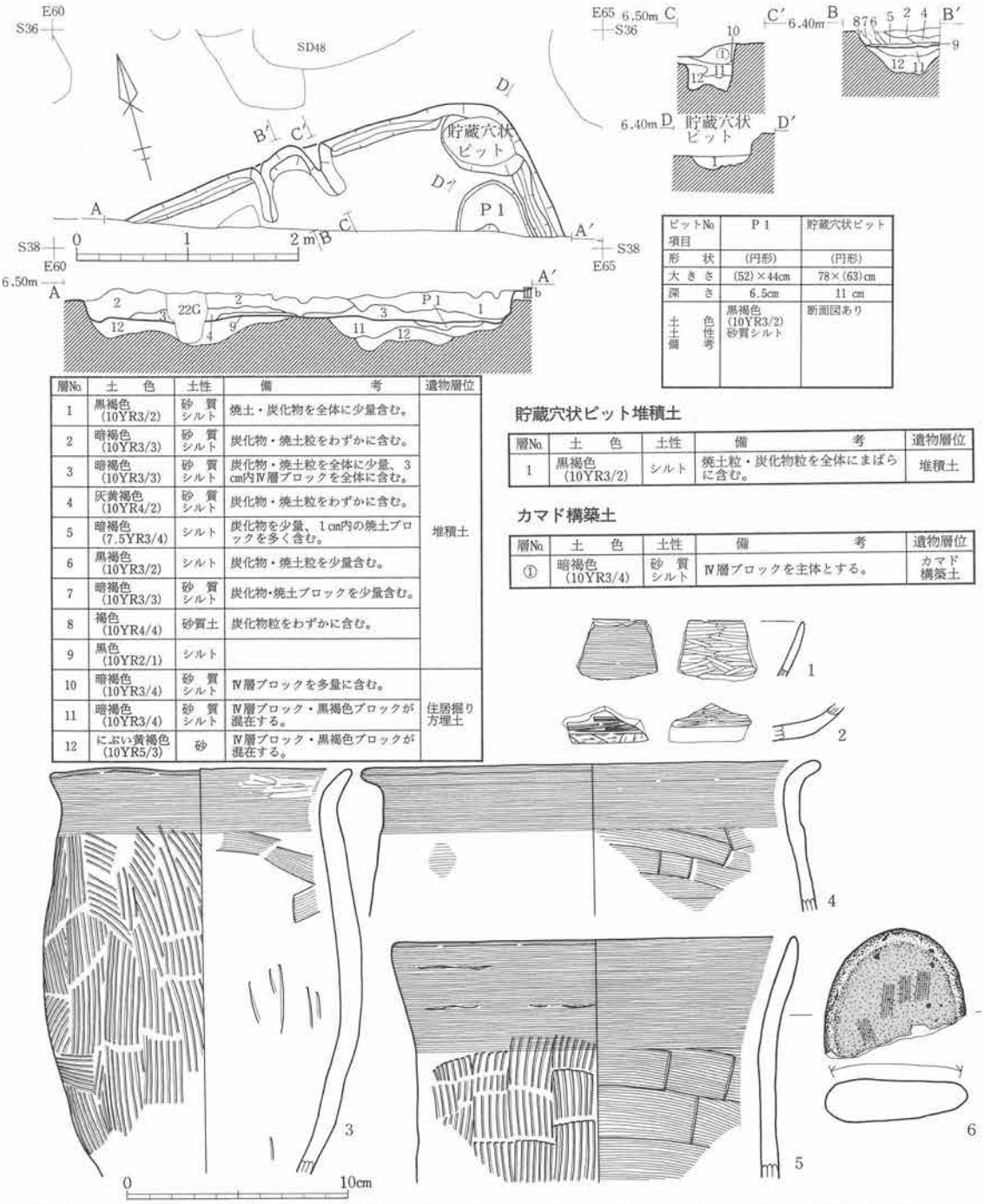
【カマド・貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】床面から6個のピットが検出された。その中で、P1・P5・P6が規模・配置関係などから柱穴と考えられる。

【周溝】東辺および西辺の一部で、壁から約40cm内側を壁と平行して走る溝が検出された。しかし、この住居に伴う周溝かどうかは明らかにできなかった。

【特記事項】壁の内側で検出された溝については、調査時において検討不足ではあったが、拡張以前の周溝の可能性が考えられる。

【出土遺物】掘り方埋土・ピット・堆積土中から土器・土製品・鉄製品・石製品が出土しており、その中で図示できたのは土師器9点・須恵器1点・土錘1点・鉄製品3点・石製品2点である。この他に土師器破片124点・須恵器破片7点がある。土師器は破片も含めて9を除く全てが製作時にロクロを使用していないものであることから、9は撹乱により混じったものと考えられる。坏は体・底部が丸底状をなし、口縁部との境に段や稜をもつものである。



ピットNo. 項目	P1	貯蔵穴状ピット
形状	(円形)	(円形)
大きさ	(52)×44cm	78×(63)cm
深さ	6.5cm	11 cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト	断面図あり

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	焼土・炭化物を全体に少量含む。	堆積土
2	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	炭化物・焼土粒をわずかに含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	炭化物・焼土粒を全体に少量、3cm内Ⅳ層ブロックを全体に含む。	
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	炭化物・焼土粒をわずかに含む。	
5	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	炭化物を少量、1cm内の焼土ブロックを多く含む。	
6	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物・焼土粒を少量含む。	
7	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	炭化物・焼土ブロックを少量含む。	
8	褐色 (10YR4/4)	砂質土	炭化物粒をわずかに含む。	
9	黒色 (10YR2/1)	シルト		
10	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	住居掘り方埋土
11	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層ブロック・黒褐色ブロックが混在する。	
12	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂	Ⅳ層ブロック・黒褐色ブロックが混在する。	

貯蔵穴状ピット堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土粒・炭化物粒を全体にまばらに含む。	堆積土

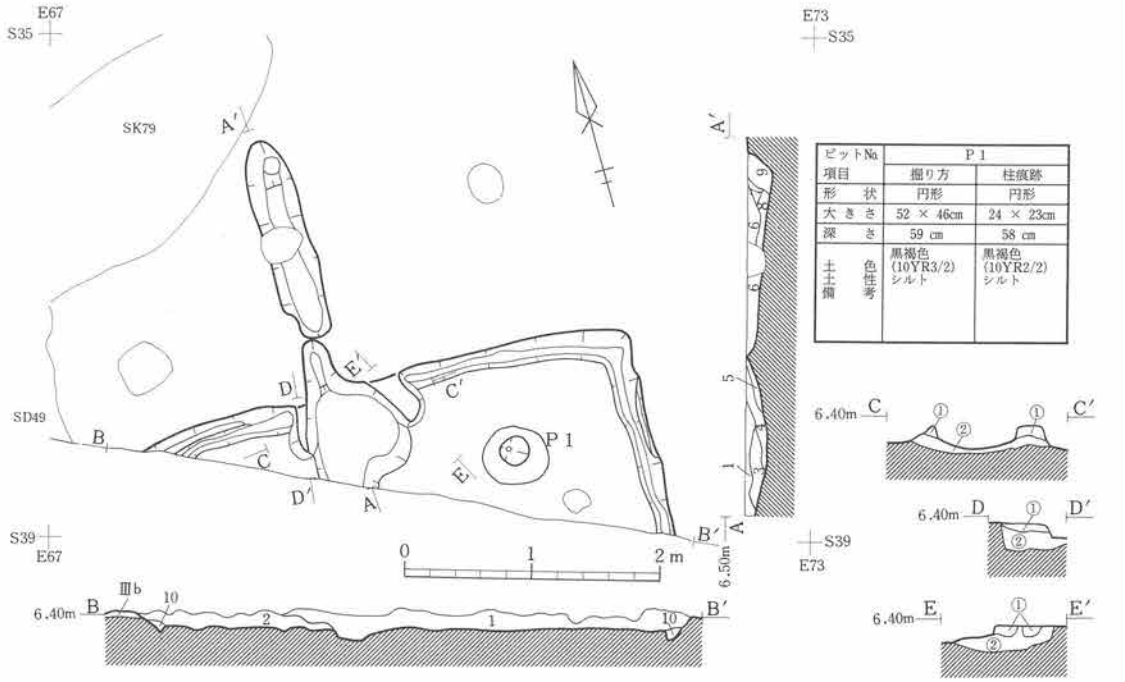
カマド構築土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
①	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを主体とする。	カマド構築土

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	カマド堆	ヨコナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片	–	–	–	–	C-123
2	土師器 坏	堆	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	体～底部破片	–	–	–	–	C-124
3	土師器 甕	カマド側壁上・堆	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部 1/8	(21.0)	–	–	77－4	C-125
4	土師器 甕	堆	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラナデ	口縁部～体部 1/2	(13.7)	–	–	–	C-126
5	土師器 甕	堆	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部 1/4	(18.2)	–	–	–	C-127

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
6	磨面をもつ礫	堆	下部欠損。扁平な礫を利用。磨面は一面認められる。	5.9	6.3	2.0	(50)	石英安山岩質凝灰岩	–	石-125

第68図　第28号竪穴住居跡と出土遺物

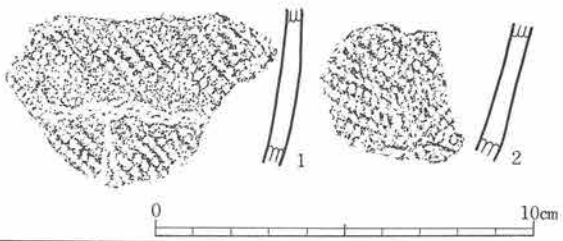


ピットNo.	P 1	
項目	掘り方	柱痕跡
形状	円形	円形
大きさ	52 × 46cm	24 × 23cm
深さ	59 cm	58 cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) シルト	黒褐色 (10YR2/2) シルト

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	炭化物粒・焼土ブロックをわずかに含む。	堆積土
2	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	炭化物・焼土粒を全体にわずかに含む。	
3	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	炭化物・焼土・ブロックを少量含む。	
4	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックをわずかに含む。	
5	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト		
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土ブロックを少量、Ⅳ層ブロックを多く含む。	
7	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト		
8	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	焼土ブロックをわずかに含む。	
9	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト		
10	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト		周溝堆積土

カマド構築土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
①	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	Ⅳ層ブロックを主体とする。	カマド構築土
②	黒褐色 (10YR3/2)	粘度質シルト	Ⅳ層ブロックと混在。住居掘り方埋土と同じ。	



番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	縄文土器 深鉢	住居掘り方埋土	縄文RL。内面ヘラナデ。	体部破片	−	−	−	87−1	地−42
2	縄文土器 深鉢	住居掘り方埋土	縄文RL。内面ナデ。	体部破片	−	−	−	87−2	地−43

第69図　第29号竪穴住居跡と出土遺物

第32号竪穴住居跡（SI 32）

【位置】Ⅷ区　S44.2～51.8　E98.2～104.4

【確認面】Ⅳ層上面で確認された。

【遺存状況】他の遺構により各所が失われている。また、東西隅は調査外に延びている。

【重複】第65号溝跡、第94・95号土坑、第25号ピット群の一部と重複しており、いずれよりも古い。

【平面形・方向】平面形はほぼ隅丸方形をなしている。その南北方向は真北から西に寄っており、N−15.5°−Wである。

【規模】規模は南北が5.94m、東西が5.7mである。また、確認された床面積は26.31m²である。

【堆積土】1層のみ認められた。わずかに焼土ブロックを含んでいる。

【壁の状況】Ⅳ層を壁としており、周溝底面からゆるやかに立ち上がっている。残存壁高は18cmである。

【床面の状況】床面はほぼ平坦である。全面が住居掘り方埋土を床面としている。その掘り方は中央部が浅く、周辺部が深い。

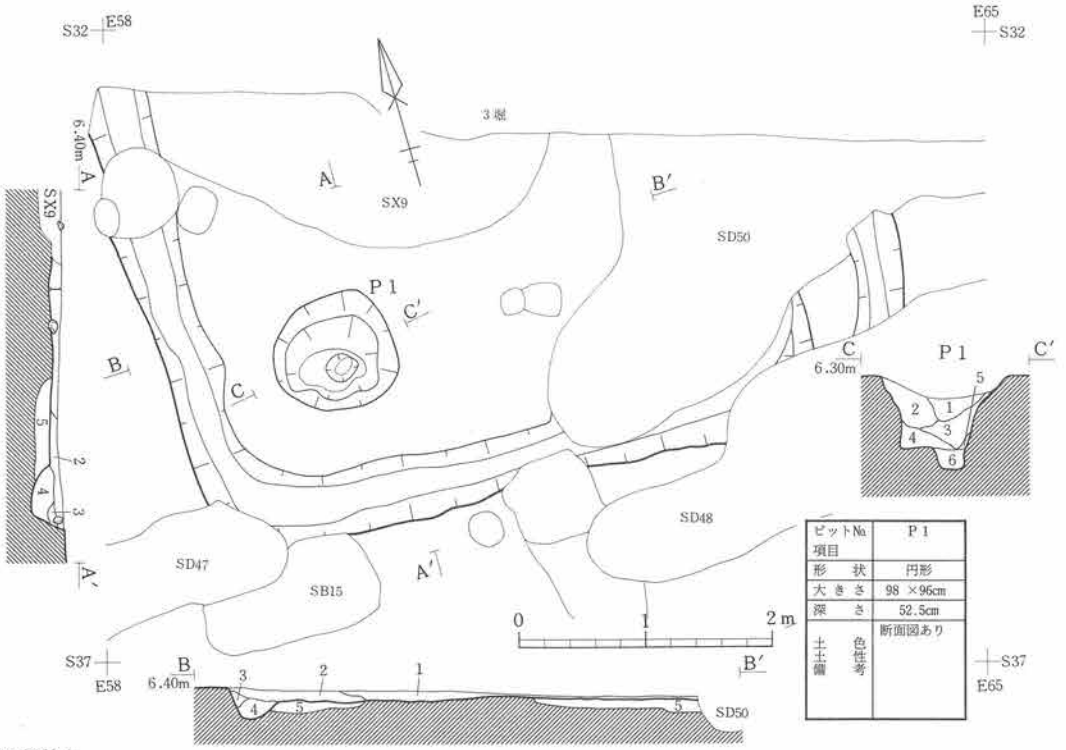
【カマド】北辺のやや西寄りでカマドが検出された。燃焼部の右側壁のみが残存し、左側壁は失われていた。その側壁はⅣ層ブロックを主体にして構築されている。燃焼部底面のやや奥壁寄りにおいて意図的に打ち欠いた土師器甕4が出土しているが、これは支脚に用いられたものと考えられる。

【貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】床面からは13個のピットが検出された。その中で形態・規模・配置などから柱穴と考えられるものはP1とP4である。また、P10もその可能性が考えられる。

【周溝】カマド部分を除くほぼ全域の壁際直下で検出された。幅は29cm、深さは8cmで、断面は「U」字状をなしている。

【出土遺物】床面・堆積土中・ピット内から土器・土製品・石製品が出土しており、その中で図示できたのは土師器5点・とりべ1点・フイゴの羽口1点・石製品1点である。この他に土師器破片188点・須恵器破片14点がある。土師器は破片の4点を除いて、



ピットNo. / 項目	P1
形状	円形
大きさ	98×96cm
深さ	52.5cm
土色・土性・備考	断面図あり

P1堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層小ブロックを少量含む。	堆積土
2	黒色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層のブロック層。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層のブロック層。	
4	褐色 (10YR4/4)	シルト	Ⅳ層のブロック層。	
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト		
6	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	Ⅳ層のブロック層。	

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	焼土・炭化物・Ⅳ層ブロックをわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	炭化物・焼土をわずかに、Ⅳ層ブロックを少量含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト		周溝堆積土
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロックを全体に含む。	
5	註記もれ			住居掘り方埋土

第70図　第30号竪穴住居跡

全て製作時にロクロを使用していないものである。甕は体部が長胴をなし、口縁部との境に明瞭な段をもたない例が多い。

第33号竪穴住居跡（SI 33）

【位置】Ⅷ区　S46.2～48.8　E95.4～96.9

【確認面】Ⅳ層上面で確認された。

【遺存状況】北東部の一部のみが検出された。その南側は他の遺構で失われ、西側は調査区外へ延びている。

【重複】第65号溝跡や第25号ピット群の一部と重複しており、いずれよりも古い。

【平面形・方向】検出された部分から、平面形は隅丸方形を基調とするものと推定される。方向は東辺方向をみると、ほぼ真北方向を向いており、N－5.5°－Eである。

【規模】規模は南北が2.66m以上、東西が1.5m以上である。また、確認された床面積は2.68㎡である。

【堆積土】１層のみ認められた。

【壁の状況】Ⅳ層を壁としており、周溝底面からやや外傾して立ち上っている。残存壁高は14cmである。

【床面の状況】床面にはやや起伏がみられる。検出部分では全面住居掘り方埋土を床面としている。

【カマド・貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】床面からは２個のピットが検出された。他のピットとの配置関係がわからず柱穴かどうかは不明である。

【周溝】東辺の壁際直下で検出されたが、北東隅では途切れている。幅は28cm、深さは８cmで、断面は「U」字状をなしている。

【出土遺物】堆積土中を中心にわずかの土器と鉄製品が出土したが、図示できたのは鉄製品１点のみである。土器は土師器破片６点で、いずれも製作時にロクロを使用していないものである。

第34号竪穴住居跡（SI 34）

【位置】Ⅷ区　S46.8～50.2　E102.6～104.4

【確認面】第32号竪穴住居跡の堆積土中で確認された。

【遺存状況】他の遺構によって大きく失われており、また、東半部は調査区外に延びているため、一部が検出されたにすぎない。

【重複】第65号溝跡・第32号竪穴住居跡と重複しており、前者より古く、後者より新しい。

【平面形・方向】検出部分から、平面形は隅丸方形を基調とするものと推定される。方向は西辺方向をみると真北より西にやや寄っており、N－10°－Wである。

【規模】規模は南北が3.02m、東西が1.88m以上である。また、確認された床面積は3.17㎡である。

【堆積土】３層認められた。いずれも自然堆積層とみられ、ほぼ水平に堆積している。

【壁の状況】検出部分では第32号竪穴住居跡の堆積土を壁としており、周溝底面から直立ぎみに立ち上がっている。残存壁高は20cmである。

【床面の状況】床面の状況は不明だが、検出部分では住居掘り方埋土を床面としている。

【カマド・貯蔵穴状ピット・柱穴】確認されなかった。

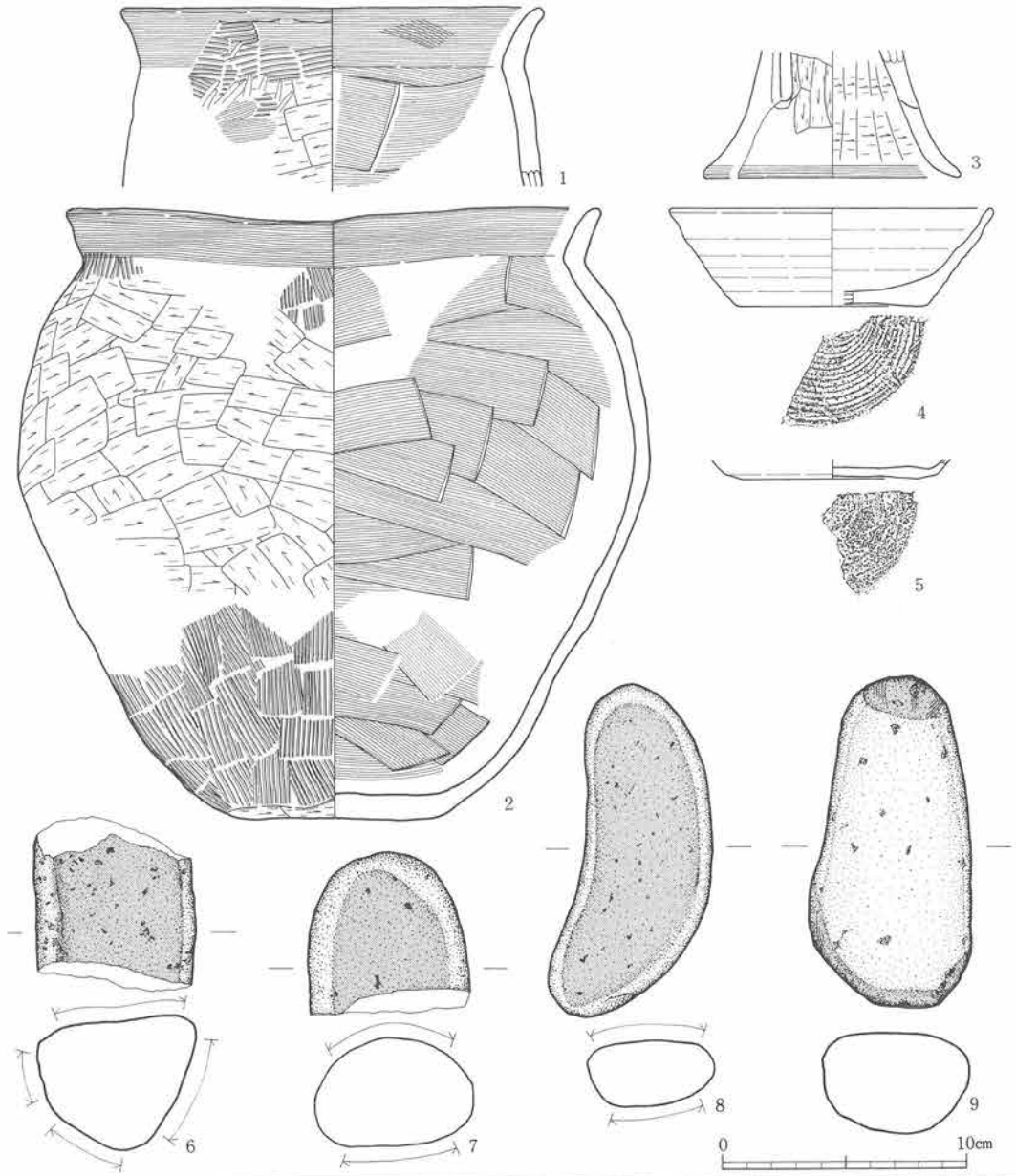
【周溝】検出部分ではほぼ全域で、壁際直下をめぐっている。幅は36cm、深さは６cmで、断面は「U」字状をなしている。

【出土遺物】堆積土中からわずか土師器破片が４点出土したが、図示はできなかった。土師器はいずれも製作時にロクロを使用していないもので、坏の体・底部破片には丸底状で、内面に黒色処理が施されているものがみられた。

第35号竪穴住居跡（SI 35）

【位置】Ⅷ区　S28.5～31.9　E95.4～97

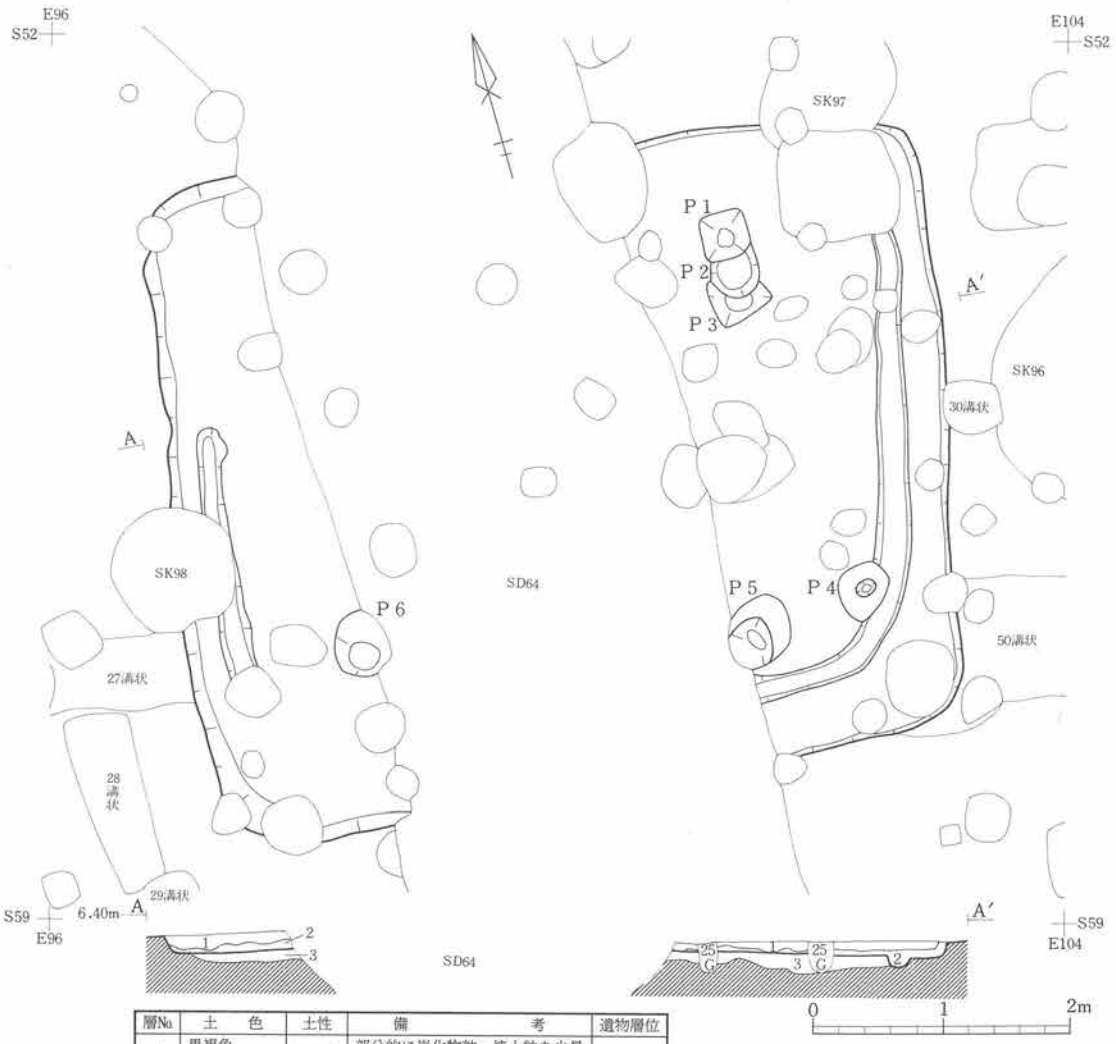
【確認面】Ⅳ層上面で確認された。



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	堆1層	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ・ナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ナデ・ヘラナデ	口縁部～体部 1/8	(17.4)	—	—	—	C-128
2	土師器 甕	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部 1/4破損	22.0	8.0	25.4	77－5	C-129
3	土師器 高坏	堆1層	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ケズリ	脚部の一部 1/4	—	(10.6)	—	—	C-130
4	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部回転糸切り切り離し	ロクロナデ	1/4	13.4	7.8	4.1	—	E－17
5	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り離し	ロクロナデ	底部 1/4	—	7.2	—	—	E－18

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
6	磨面をもつ礫	堆1層	上下端が欠損。円棒状の礫利用。磨面は側面を含めて4面認められる。	(7.25)	6.8	5.6	(390)	石英安山岩	—	石-130
7	磨面をもつ礫	周溝堆	円棒状の礫利用。磨面が上下2面に認められる。	(6.7)	6.6	4.5	(270)	安山岩	—	石-127
8	磨面をもつ礫	堆1層	円棒状の礫利用。磨面が上下2面認められる。	13.7	6.9	2.7	350	安山岩	—	石-129
9	敲打痕をもつ礫	堆2層	円棒状の礫利用。上下端に磨面が認められる。	13.8	6.7	4.2	590	安山岩	—	石-138

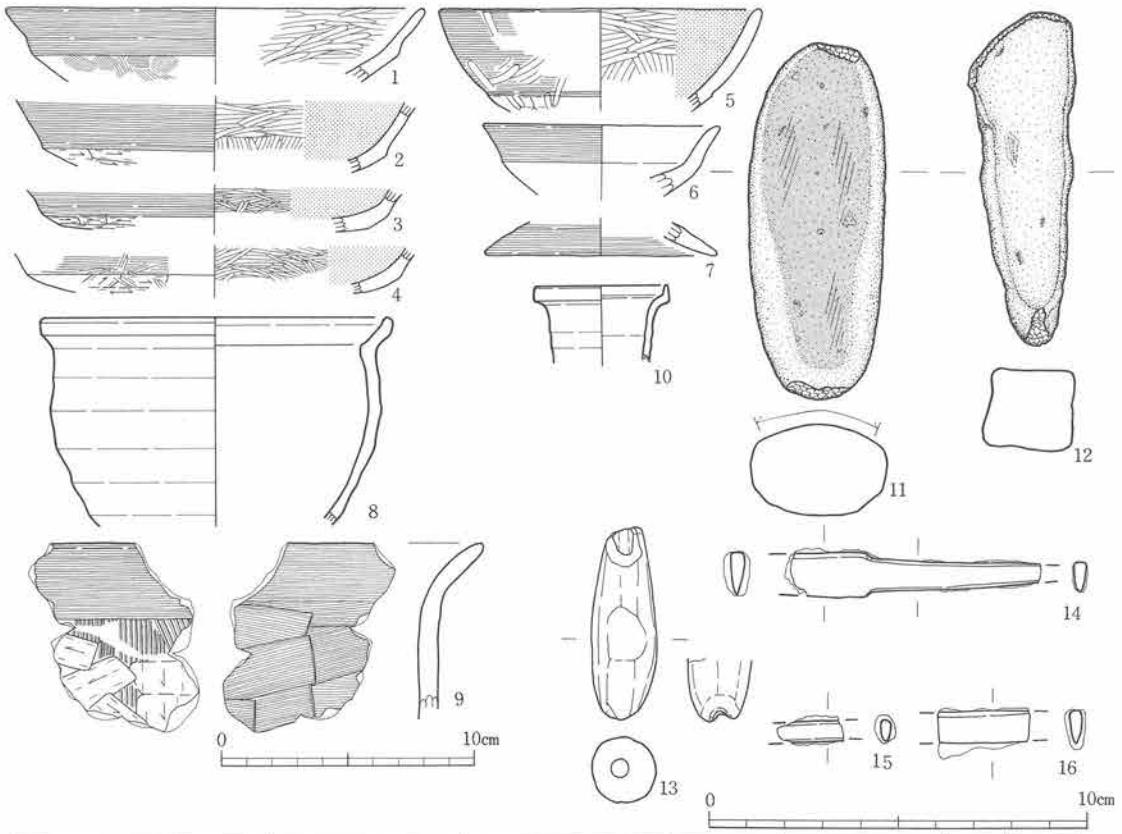
第71図　第30号竪穴住居跡出土遺物



層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	部分的に炭化物粒・焼土粒を少量含む。	堆積土
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層小ブロックを全体に少量、炭化物粒を少量含む。	
3	註記もれ			住居掘り方埋土

ピットNo.	P1	P2	P3	P4		P5		P6
項目				掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	
形状	正方形	(円形)	(正方形)	楕円形	円形	方形	(方形)	(円形)
大きさ	18 × 18cm	(32)×20cm	46 × 40cm	48 × 38cm	16 × 14cm	(56)×50cm	38×(34)cm	52×(42)cm
深さ	31.5cm	24 cm	—	26.5cm	12.5cm	73.5cm	35.5cm	68 cm
土色土性備考	黒褐色 (10YR2/2) シルト	黒褐色 (10YR3/2) シルト	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト	暗褐色 (10YR3/3) シルト 炭化物・焼土粒を多く含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト	黒褐色 (10YR3/2) シルト 焼土粒を多く含む。	灰褐色 (10YR4/1) 砂質シルト Ⅳ層を粒状にわずかに含む。

第72図　第31号竪穴住居跡



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	東半堆	ヨコナデ・指ナデ	ミガキ	口縁部～体部1/12	(16.6)	－	－	－	C-131
2	土師器 坏	東半堆	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	体部一部残存	－	－	－	－	C-132
3	土師器 坏	東半堆	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	体部～底部の一部	－	－	－	－	C-133
4	土師器 坏	西半堆	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	体部～底部の一部	－	－	－	－	C-134
5	土師器 坏	東半堆	ヨコナデ・ミガキ・ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/10	(12.8)	－	－	－	C-135
6	土師器 坏	西半堆	ヨコナデ・調整不明	調整不明	1/10	(9.4)	－	－	－	C-136
7	土師器 高坏	東半堆	ヨコナデ	ヨコナデ	脚部の 1/8	－	(9.2)	－	－	C-137
8	土師器 甕	西半堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部 1/6	14.0	－	－	－	C-138
9	土師器 甕	西半堆	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部	－	—	－	－	C-139
10	須恵器 壺	東半堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/8	(5.2)	－	－	－	E-19

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
11	敲打痕をもつ礫	西半堆	円棒状の礫使用。磨面が一面にあり、敲打痕が上下に認められる。	14.15	5.4	4.4	460	凝灰質砂岩	99－10	石-151
12	敲打痕をもつ礫	西半堆	棒状の礫使用。上端と下端に敲打痕が認められる。	13.2	4.2	4.0	250	安山岩	－	石-146

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
13	土錘	周溝	ほぼ完形。外面－ミガキ。	5.1	1.7	1.7	12.6	0.5	93－6	土-21

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
14	鉄製品 刀子	堆	身と茎の部分。両端欠損。身の断面は三角形。茎の断面は台形に近い。	(6.5)	1.2	0.4	(8.7)	100-2	N－8
15	鉄製品 刀子？	堆	刀子の茎？の一部。断面は楕円形に近い。	(1.4)	0.5	0.3	(0.8)	－	N－9
16	鉄製品 刀子	堆	身の一部。断面は三角形に近い。	(2.4)	0.9	0.3	(2.4)	100-3	N－10

第73図　第31号竪穴住居跡出土遺物

【遺存状況】東半部が検出され、西半部は調査区外に延びている。

【重複】第26号ピット群の一部と重複しており、それより古い。

【平面形・方向】検出部分から、平面形は隅丸方形を基調とするものと推定される。方向は東辺方向をみると、真北よりやや西に寄っており、N－8.5°－Wである。

【規模】規模は南北が2.94m、東西が1.8m以上である。また、確認された床面積は2.76㎡である。

【堆積土】5層認められた。いずれも自然堆積層とみられるが、上部に木炭様の細かな粒子の層も挟在している。

【壁の状況】IV層を壁としており、周溝底面から直立ぎみに立ち上がっている。残存壁高は22cmである。

【床面の状況】床面はほぼ平坦である。検出された部分では全域が住居掘り方埋土を床面としている。その掘り方は周辺部が深くなっている。

【カマド・貯蔵穴状ピット・柱穴】確認されなかった。

【周溝】南東隅を除くその他の壁際直下で検出された。幅は25cm、深さは4cmで、断面は「U」字状をなしている。

【出土遺物】全く出土しなかった。

第36号竪穴住居跡（SI 36）

【位置】V区　N4.8～1.6　E69.8～75.8

【確認面】IV層上面で確認された。

【遺存状況】床面まで大きく削平を受けており、また部分的に他の遺構に切られているが、ほぼ全体が検出された。

【重複】第8号小溝状遺構群・第25号ピット群の一部と重複しており、それらより古い。

【平面形・方向】平面形は隅丸方形をなしており、その南北方向は真北より西に寄っており、N－18°－Wである。

【規模】規模は南北が4.78m、東西が4.60mである。また、床面積は20.4㎡である。

【堆積土】住居床面には堆積土はほとんど遺存しておらず、堆積土の状況は不明である。

【壁の状況】IV層を壁としており、周溝底面から直立ぎみに立ち上がるものと思われる。残存壁高は5cmである。

【床面の状況】床面にはほぼ平坦であり、全体に堅くしまっている。床面の大部分はIV層を床面としており、周辺部でわずかに住居掘り方が認められた。

【カマド】明確な遺構としては検出されなかったが、北辺のやや東寄りの部分で周溝が途切れていること、その部分の北側住居外で焼土を含む層や礫が確認されたことから、この部分にカマドが存在した可能性が考えられる。

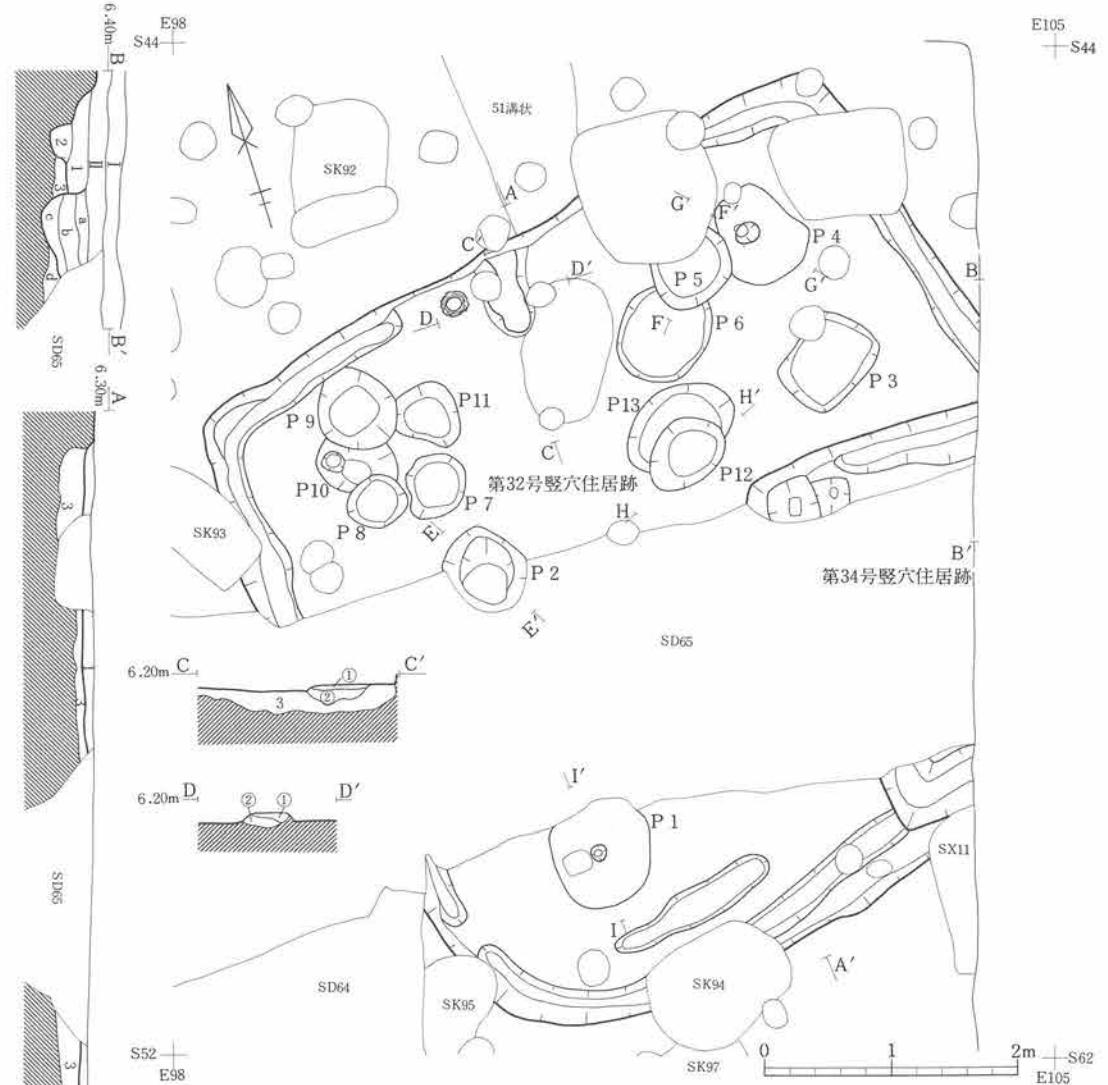
【貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

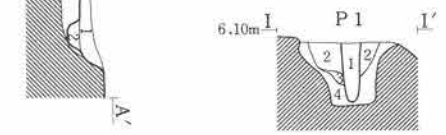
【柱穴】床面からは主に4個のピットが検出された。このピットは柱痕跡は確認されなかったものの、住居の対角線上に位置していることから、この住居の主柱穴と考えられる。また、住居縁辺の壁際から計16個のピットが検出された。これらのピットはほぼ等円隅で配置されていること、堆積土が共通していることなどから壁柱穴と考えられる。

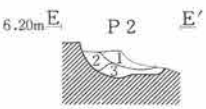
【周溝】ほぼ全域で、壁際直下から検出された。幅は24cm、深さは13cmで、断面は「U」字状をなしている。

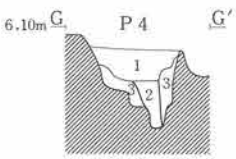
【特記事項】一部ではあるが、周溝内および壁際のピット内から炭化材が検出された。これらは主に柱材と考えられ、住居が火災に遭ったものと考えられる。

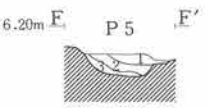
【出土遺物】床面・周溝および堆積土中から若干の土器と石製品が出土しており、その中で図示できたのは土師器3点・須恵器2点・石製品4点である。この他に土師器破片10点・須恵器破片2点がある。土師器は坏は製作時にロクロを使用しており、甕は使用していないものである。須恵器の坏は底部切り

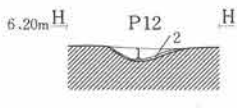












層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層小ブロック・焼土ブロックを少量含む。	堆積土
2	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層小ブロックをわずかに含む。	周溝堆積土
3	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	Ⅳ層ブロック・黒色シルトブロックを多量に含む。	住居掘り方埋土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
a	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物粒を少量含む。	堆積土
b	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロックを全体に、炭化物粒・焼土粒を少量含む。	
c	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・炭化物粒・焼土粒を少量含む。	
d	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・黒褐色ブロックを多く含む。	住居掘り方埋土

カマド構築土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
①	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト		カマド構築土
②	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	1cm以内の焼土ブロック・Ⅳ層ブロックを多く含む。	

第74図　第32・34号竪穴住居跡

P１堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物粒を少量含む。	柱痕跡
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒・Ⅳ層ブロックを少量含む。	掘り方
3	黒色 (10YR2/1)	粘土質シルト		
4	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	

P２堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	焼土粒・Ⅳ層小ブロックを少量含む。	堆積土
2	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト		
3	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	炭化物粒・Ⅳ層小ブロックをわずかに含む。	

P４堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト		1
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	柱痕跡
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	掘り方

P５堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗赤褐色 (5YR3/4)	砂質シルト	Ⅳ層小ブロックを少量、焼土ブロックを含む。	堆積土
2	暗赤褐色 (5YR3/3)	砂質シルト	2cm内の焼土ブロックを多く含む。	
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト		

P12堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物を少量、1cm内の焼土ブロックを多量に含む。	堆積土
2	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	壁、底面全体に均一の厚さ。人為的にはった可能性あり。	

ピットNo.	P１		P２	P３	P４		P５	P６	P７	P８
項目	掘り方	柱痕跡			掘り方	柱痕跡				
形状	(方形)	円形	(略円形)	長方形	長方形	円形	(円形)	(楕円形)	円形	円形
大きさ	80×(74)cm	14 × 12cm	(70)×59cm	78 × 56cm	76 ×66cm	19 × 18cm	66×(39)cm	68×(60)cm	49 × 46cm	50 × 44cm
深さ	52 cm	50 cm	28 cm	9.5cm	73 cm	73 cm	29.5cm	13 cm	13.5cm	14.5cm
土色 土性 備考	断面図あり	断面図あり	断面図あり	黒褐色 (10YR3/2) シルト Ⅳ層小ブロックをわずかに含む。	断面図あり	断面図あり	断面図あり	暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質シルト 焼土ブロック (1cm以内) を多量に、炭化物粒を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) シルト	黒褐色 (10YR3/2) シルト

ピットNo.	P９	P10	P11	P12	P13
項目					
形状	円形	円形	略円形	楕円形	(楕円形)
大きさ	69 × 62cm	64×(36)cm	(50)×44cm	68 × 50cm	92×(26)cm
深さ	20 cm	17 cm	21.5cm	12.5cm	9 cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/2) シルト	黒褐色 (10YR2/2) シルト Ⅳ層ブロックを少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) シルト 1cm以内焼土ブロックを含む。	断面図あり	黒褐色 (10YR3/1) シルト Ⅳ層ブロックを多量に含む。

離しが回転ヘラ切りによるものである。

第37号竪穴住居跡（SI 37）

【位置】Ⅴ区　N1.6～4　E75～78

【確認面】Ⅳ層上面で確認された。

【遺存状況】南東部のみが検出された。西側は耕作土により失われ、北側は調査区外に延びている。

【重複】第８号小溝状遺構群の一部と重複しており、それより古い。

【平面形・方向】検出部分から、平面形は方形を基調とするものと推定される。南辺方向を基準にすると、南北方向は真北よりわずかに西に寄っており、N－9°－Wである。

【規模】規模は東西が3.22m以上、南北が2.3m以上である。また、床面積は3.98㎡以上である。

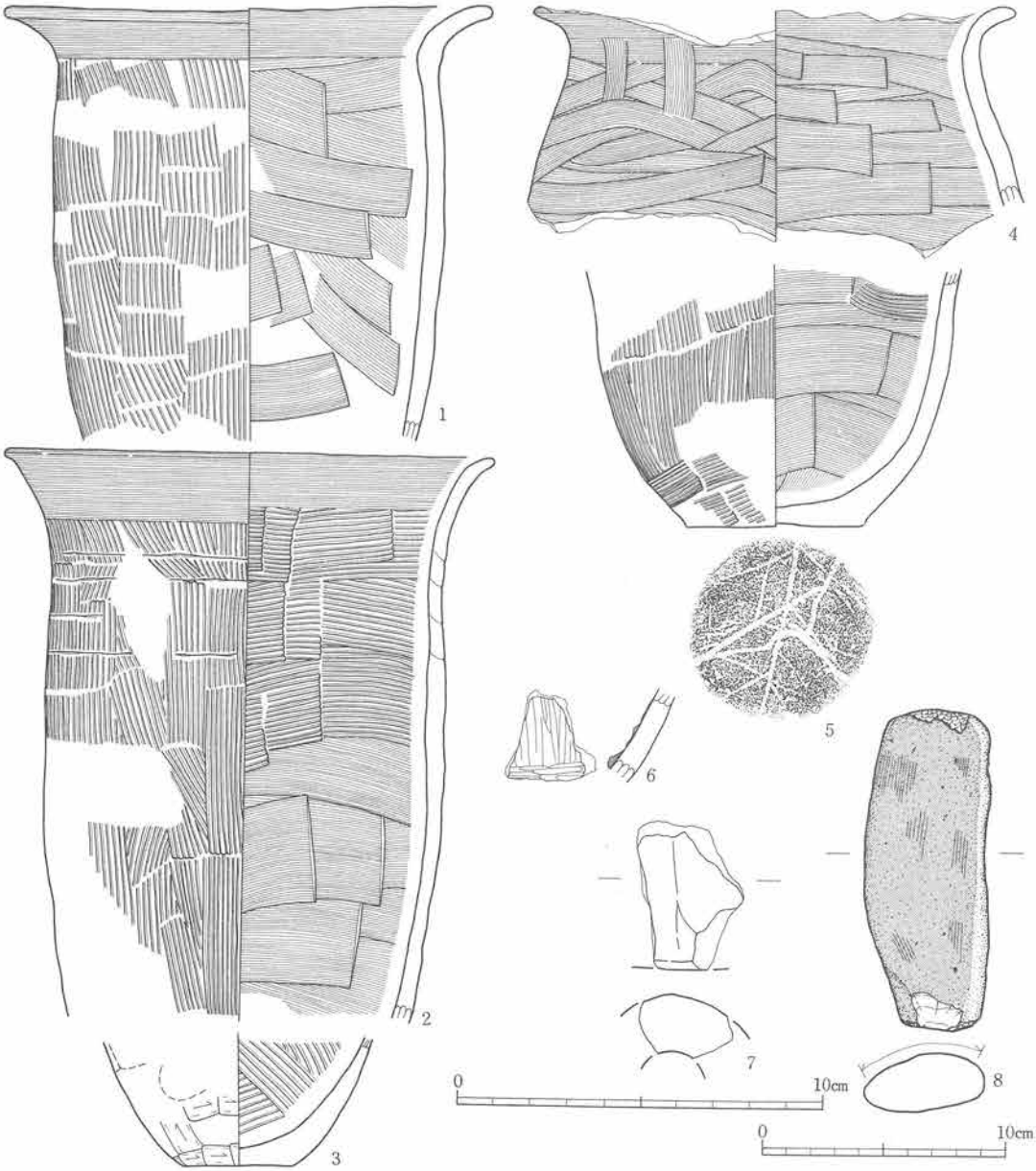
【堆積土】２層認められた。いずれも自然堆積層で、住居中央に向かって堆積している。

【壁の状況】Ⅳ層を壁としており、周溝底面からゆるやかに立ち上がり、その上方で大きく開いている。残存壁高は東辺で10cmである。

【床面の状況】床面の残存する範囲は東側部分のみである。そこではやや起伏がみられ、堅くしまっており、住居掘り方埋土を床面としている。この掘り方範囲はさらに西側へ広がっている。

【カマド・貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】床面からは１個のピットが検出された。規



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	北半堆1層・床面直上	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部 1/2	20.0	—	—	77－6	C-140
2	土師器 甕	北半堆・床面直上	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ヘラナデ	口縁部～体部 1/3	20.2	—	—	77－7	C-141
3	土師器 甕	北半床面直上	ヘラケズリ	ハケメ	体部～底部	—	(4.4)	—	—	C-142
4	土師器 甕	カマド底面	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部	19.8	—	—	78－1	C-143
5	土師器 甕	北半床面直上	ハケメ・木葉痕	ヘラナデ・ハケメ	体部～底部	—	7.2	—	—	C-144

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	とりべ	堆	外面－ヘラケズリ。内面－溶解物付着。器厚－0.9cm。	体部破片	—	—	—	90－23	ト－55

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
7	フイゴの羽口	堆	先端部破片。外面－ケズリ。	(4.1)	(2.8)	(1.6)	(17.0)	(0.9)	—	土－54

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
8	敲打痕をもつ礫	北半床面直上	円棒状の礫使用。剝離面が1面下部にあり、上部に敲打痕がある。磨面は一面認められる。	13.2	5.2	3.2	300	石英安山岩	99－13	石-152

第75図　第32号竪穴住居跡出土遺物

模や位置などから柱穴とは認められない。

【周溝】検出範囲の全域で、壁際直下から検出された。東辺の周溝は幅が25cm、深さが15cmで、断面は「U」字状をなしている。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片が3点出土したのみで、図示できるものはなかった。

第38号竪穴住居跡（SI 38）

【位置】V区　S0.6～3　E75.9～79.7

【確認面】Ⅳ層上面で確認された。

【遺存状況】北側部分が検出され、その南側は大きく調査区外に延びている。

【重複】第8号小溝状遺構群の一部と重複しており、それより古い。

【平面形・方向】検出部分から、平面形は隅丸方形を基調とするものと推定される。方向は東辺の方向をみると真北をほぼ向いており、N－4.5°－Wである。

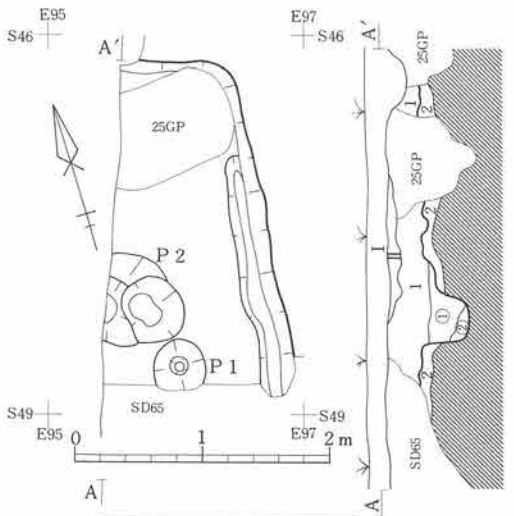
【規模】規模は東西が3.38m以上、南北が1.6m以上である。また、床面積は2.57m²以上である。

【堆積土】2層認められた。いずれも自然堆積層で、住居中央に向かって堆積している。

【壁の状況】Ⅳ層を壁としており、周溝底面からの立ち上がりは直立ぎみに立ち上がっている。残存壁高は11cmである。

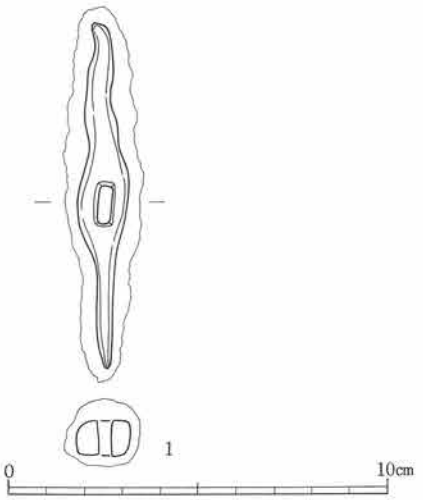
【床面の状況】検出範囲では床面はほぼ平坦で、堅くしまっている。そして住居掘り方埋土を床面としている。この掘り方は壁際付近で深くなっている。

【カマド】北辺の中央でカマドが検出された。燃焼部と煙道部からなり、燃焼部は両側壁が残存している。この側壁は白色のブロックで構築されている。燃焼部内部は幅が約40cm、奥行は30cm以上で、底面



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色（10YR2/2）	シルト	Ⅳ層小ブロックを少量含む。	堆積土
2	褐色（10YR4/4）	シルト	黒褐色ブロックを全体に含む。	住居掘り方埋土
①	黒褐色（10YR3/2）	シルト	Ⅳ層小ブロックを全体に多量に含む。（人為堆積の可能性あり）	P 2
②	褐色（7.5YR4/4）	砂質シルト	灰白色の粘性シルトブロックを含む。	堆積土

ピットNo. / 項目	P 1	P 2
形状	（円形）	（略円形）
大きさ	40×（40）cm	73×（60）cm
深さ	3.3cm	29.7cm
土色 土性 備考	註記もれ	註記もれ



番号	種別	層位	特徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
1	鉄製品　不明	堆	完形。中央部がややふくらみ、その部分に貫通孔あり	9.2	1.4	1.0	62.5	102-12	N－11

第76図　第33号竪穴住居跡と出土遺物

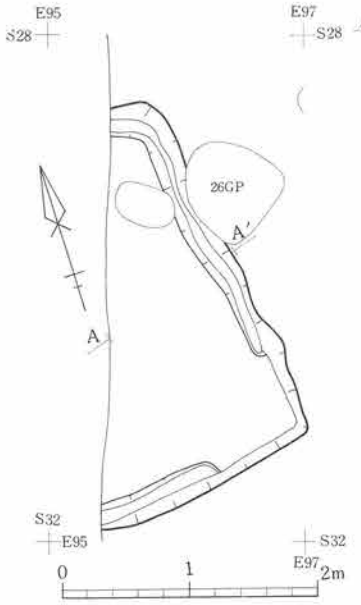
は火熱のため赤褐色に焼けて堅くなっている。

【貯蔵穴状ピット】確認されなかった。

【柱穴】底面からは2個のピットが検出された。いずれも浅く、位置から判断しても柱穴とは断定できない。

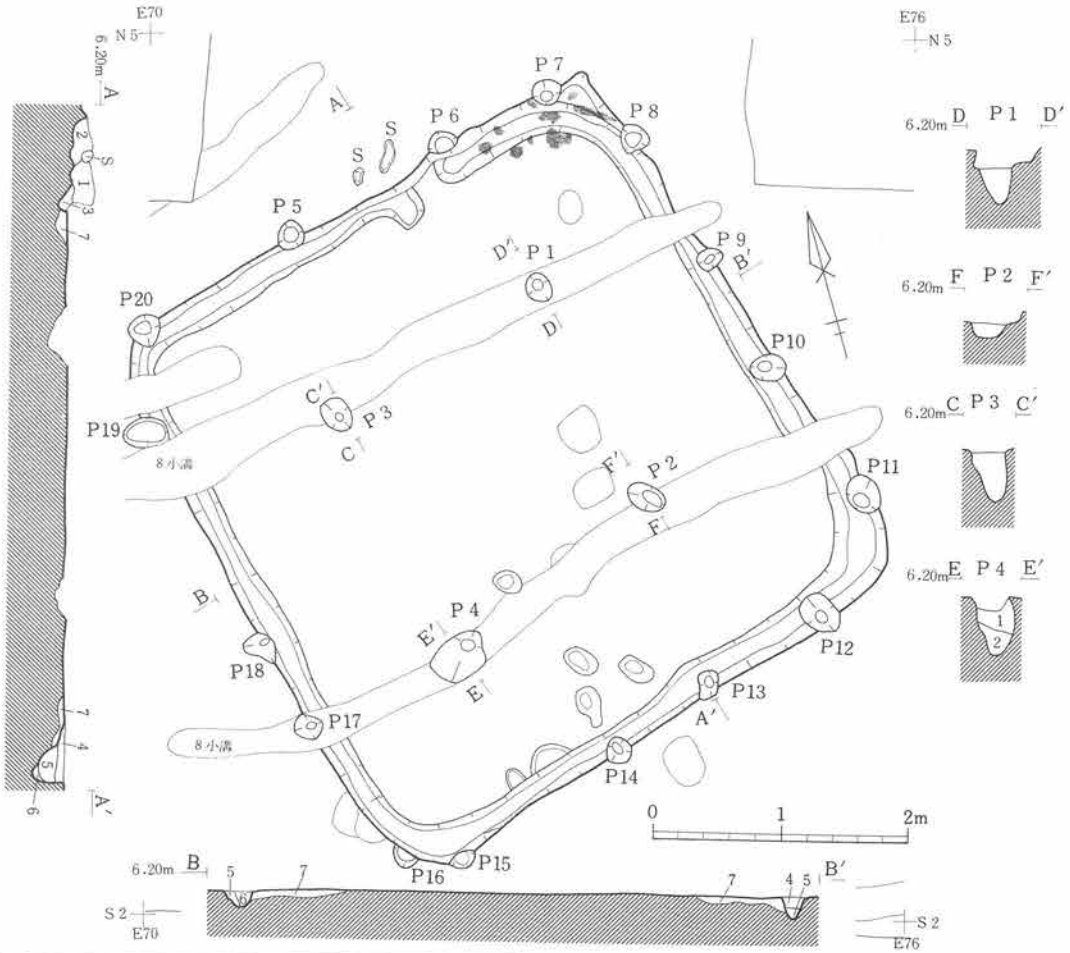
【周溝】検出範囲のカマド部分と北東隅を除いた所の壁際直下で検出された。幅は20cm、深さは4cmで、断面は皿状をなしている。

【出土遺物】床面付近および堆積土中から土器がわずかに出土しており、図示できたのは須恵器2点にすぎない。この他は土師器破片7点・須恵器破片2点である。須恵器坏は底部切り離しが回転ヘラ切りによるものである。



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	酸化鉄斑紋をまばらに含む。	堆積土
2	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	木炭？	
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層粒子をわずかに含む。	
4	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層粒子をまばらに、所々ブロック状に含む。	
5	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	Ⅳ層粒子を多量に含む。	
6	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	Ⅳ層粒子を多量に、酸化鉄斑紋を含む。	周溝堆積土
7	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	住居掘方埋土

第77図　第35号竪穴住居跡



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	焼土ブロックを多量に、炭化物を少量含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロックを多量に、焼土をわずかに含む。	
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層ブロックをわずかに含む。	周溝堆積土
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。	
5	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を少量含む。	
6	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	Ⅳ層崩落土。	
7	註記もれ			住居掘り方埋土

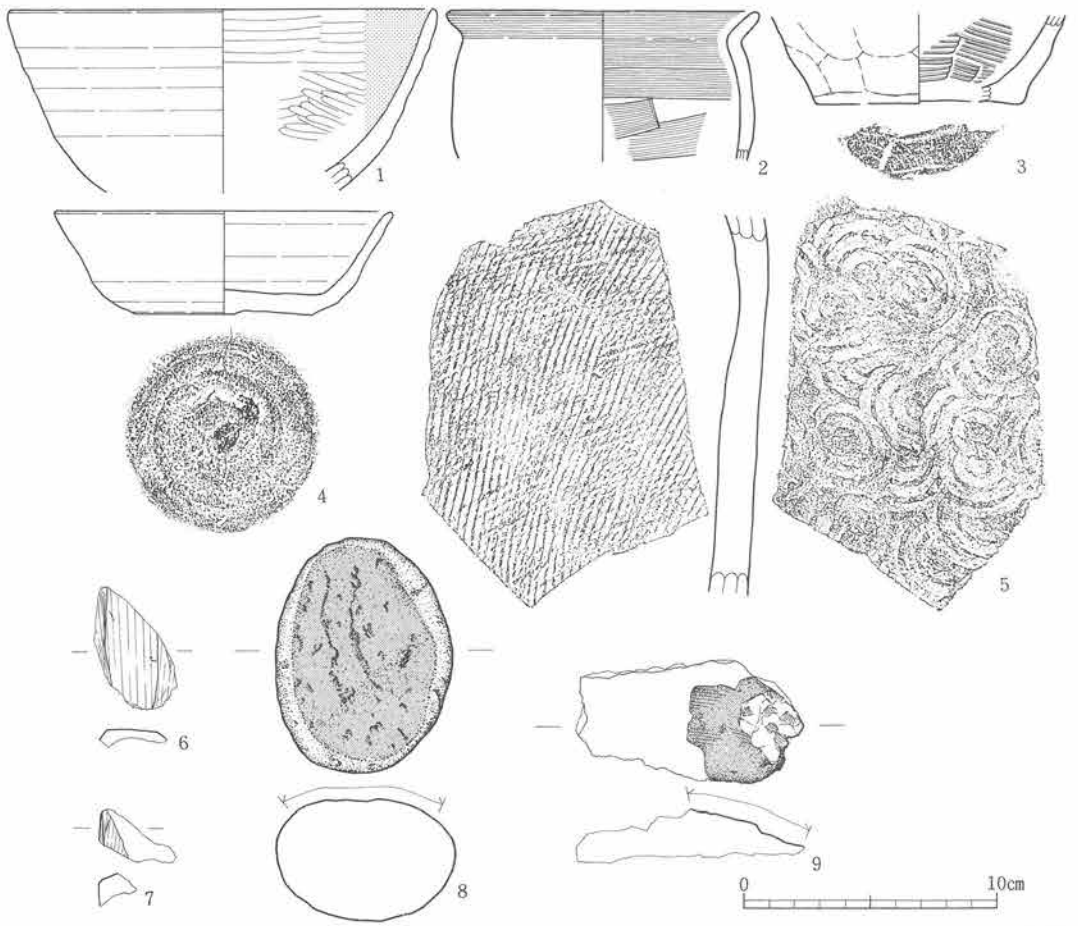
P4堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に、炭化物を含む。	堆積土
2	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	

ピットNo 項目	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
形状	円形	楕円形	楕円形	略方形	円形	(円形)	円形	円形	円形	楕円形	楕円形
大きさ	24 × 20cm	31 × 20cm	30 × 22cm	44 × 31cm	24 × 20cm	24×(17)cm	24 × 21cm	21 × 20cm	20 × 15cm	28 × 21cm	32 × 26cm
深さ	48 cm	21 cm	44 cm	46.5cm	21.5cm	13 cm	49.5cm	41.5cm	23 cm	34.5cm	34 cm
土色 土性 備考	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多量に、炭化物を少量含む。	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多量に、炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多量に、炭化物を含む。	断面図あり	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。

ピットNo 項目	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20
形状	楕円形	長方形	円形	(円形)	(円形)	円形	略円形	楕円形	円形
大きさ	34 × 25cm	22 × 15cm	22 × 19cm	22×(13)cm	22×(12)cm	22 × 18cm	28 × 20cm	38 × 23cm	26 × 24cm
深さ	27.5cm	22.5cm	33 cm	20.5cm	7.5cm	29 cm	20.5cm	32.5cm	17.5cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子・炭化物を少量含む。

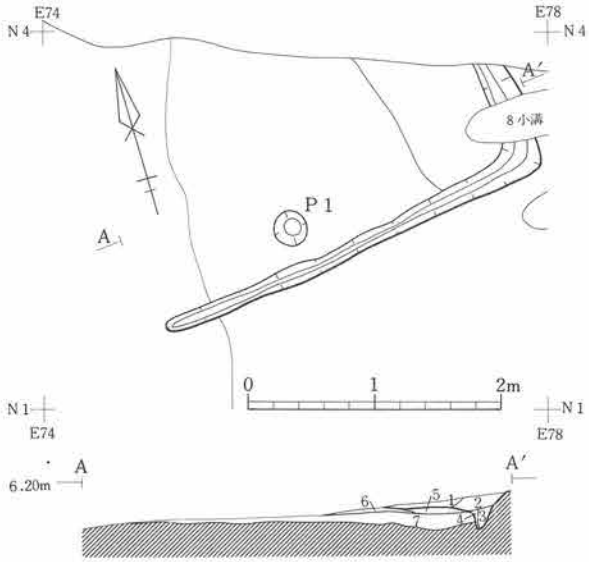
第78図　第36号竪穴住居跡



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	カマド堆	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部 1/4	(17.0)	－	－	－	C-145
2	土師器 甕	堆	ヨコナデ・不明	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部 1/8	(12.4)	－	－	－	C-146
3	土師器 甕	カマド堆	底部木葉痕・指オサエ	ハケメ	体部～底部 1/4	－	(8.2)	－	－	C-147
4	須恵器 坏	カマド堆	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	口縁部～体部 1/8 底部 1/1	(13.4)	7.2	4.1	78－9	E－20
5	須恵器 甕	床面直上	平行タタキ目	アテ目（青海波）	体部破片	－	－	－	－	E－21

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
6	砥石	床面直上	一部のみ。方柱状か。軟質で、シルト質状の石材。砥面は3面確認され、いずれも丁寧に使い込んでいる。	(5.1)	(3.4)	(0.7)	(9.1)	石英安山岩質凝灰岩	97－29	石－81
7	砥石	床面直上	一部のみ。方柱状か。軟質で、シルト質状の石材。砥面が2面確認されている。	(1.6)	(3.1)	(1.2)	(4.1)	石英安山岩質凝灰岩	－	石－82
8	磨面をもつ礫	カマド堆	円棒状の礫を利用。磨面が一面認められる。	9.4	7.1	4.7	405	安山岩	－	石-121
9	磨面をもつ礫	床面	一部のみ残存。磨面が1カ所認められる。	(4.9)	(9.0)	(2.0)	(80)	安山岩	－	石-120

第79図　第36号竪穴住居跡出土遺物



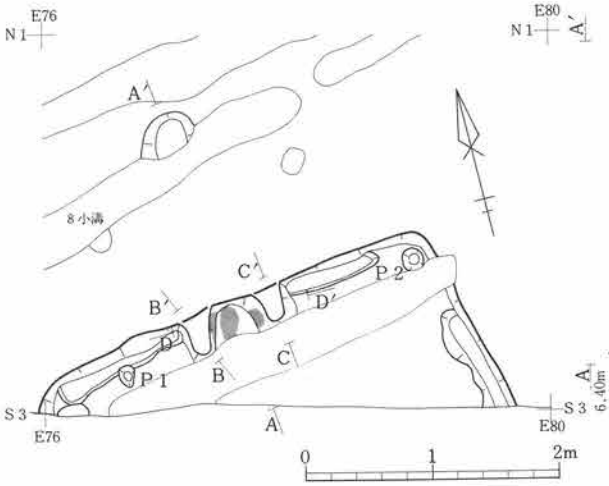
層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を少量含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	Ⅳ層粒子を多量に含む。	周溝堆積土
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト		住居掘り方埋土
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	暗褐色ブロック・Ⅳ層ブロックが混在する。	
7	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロックが主体。	

ピットNo.	P1
項目	
形状	円形
大きさ	28 × 27cm
深さ	10 cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。

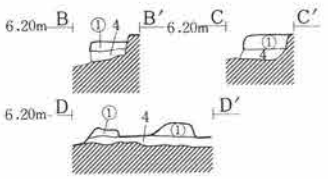
第80図　第37号竪穴住居跡

第36号竪穴住居跡壁際から検出された炭化材

第36号竪穴住居跡壁柱穴P17



ピットNo 項目	P1	P2
形　状	楕円形	円形
大きさ	18 × 13cm	18 × 18cm
深　さ	7 cm	6.5cm
土　色 土　性 備　考	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロックを多量に含む。	黒褐色 (10YR3/2) シルト Ⅳ層ブロックをわずかに含む。



カマド構築土

層No	土　色	土性	備　考	遺物層位
①	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	白色のブロック主体。	カマド 構築土

層No	土　色	土性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト		1
2	灰褐色 (7.5YR4/2)	シルト	焼土を多量に、炭化物をわずかに含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土をわずかに、Ⅳ層ブロックを多く含む。	煙道部 堆積土
4	褐色 (10YR4/4)	粘土質 シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	住居掘り 方埋土
5	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	焼土・灰を含む。	

0　10cm

番号	種　別	層　位	外　面	内　面	残　存	法　量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器　坏	床付近 堆1・2層	底部回転ヘラ切り切り離し・ロクロナデ	ロクロナデ	1/4	16.2	9.0	4.0	78−10	E−22
2	須恵器　甕	堆1層	ケズリ・底面ナデ	指ナデ	底部　1/2	−	13.2	−	−	E−23

第81図　第38号竪穴住居跡と出土遺物

2．掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（SB 1）

【位置】Ⅰ区　N29.9～34.1　W7.8～13.2

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。柱穴P1・2と第5号溝状遺構が重複しており、これより古い。

【方向・規模】桁行3間、梁行2間の建物である。北側柱列では総長4.68m（西から1.32m、2.28m、1.08m）、南側柱列では総長4.60m（西から1.24m、1.88m、1.48m）、西側柱列では総長3.44m（北から1.68m、1.76m）、東側柱列では総長3.20m（1.56m、1.64m）である。建物方向はほぼ真北を向いており、N－6°－Eである。

【柱穴】柱穴は掘り方が径30～40cmの円形、柱痕跡が径20～30cmの円形を基調としている。確認面からの深さは 8.5～46cmと幅がある。

【出土遺物】出土していない。

第2号掘立柱建物跡（SB 2）

【位置】Ⅰ区　N28.7～33.5　E 0.4～W 4.3

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。東半部は確認されなかった。柱穴P 6 ・ 7が第12号溝跡と重複しており、これよりも古い。

【方向・規模】桁行2間以上、梁行2間の建物である。北側柱列では総長3.98m（西から2.06m、1.92m）、南側柱列では総長4.24m（西から2.22m、2.02m）の長さが確認された。さらに東へ延びるものと考えられる。西側柱列は総長3.84m（北から1.94m、1.92m）である。建物方向は真北方向から大きく東に寄っており、N－2.5°－Eである。

【柱穴】柱穴は掘り方が径30～40cmの円形、柱痕跡が径15～25cmの円形を基調としている。確認面からの深さは20～30cmである。

【出土遺物】出土していない。

第3号A・B掘立柱建物跡（SB 3A・B）

【位置】Ⅱ区　N 1～ 5.9　W94.8～100

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認されたが、P3部分南壁の断面観察の結果、Ⅲb層上面から掘り込まれていることが確認された。一部がわずかに調査区外に延びるが、ほぼ全体が検出された。大部分の柱穴で重複が認められたことからこの建物跡は2時期あり、A建物からB建物へ立て替えが行われたものと考えられる。

【方向・規模】いずれも桁行2間、梁行2間の方形の建物である。B建物の東辺の南北方向はほぼ真北方向を向いており、N－5.5°－Eである。B建物の規模は東西柱列の北辺が総長3.80mで、柱間は西から1.80m、2.00mである。南辺が総長4.10mで、柱間は西から1.70m、2.40mである。また、南北柱列の東辺が総長4.08mで、柱間は北から2.08m、2.00mである。西辺が総長3.90mで、柱間は北から1.92m、1.98mである。A建物はこのB建物と規模はほぼ同じである。

【柱穴】B建物の柱穴掘り方はA建物よりもいずれも規模が小さく、径50cm前後の円形か楕円形をなし、深さは30～50cmである。

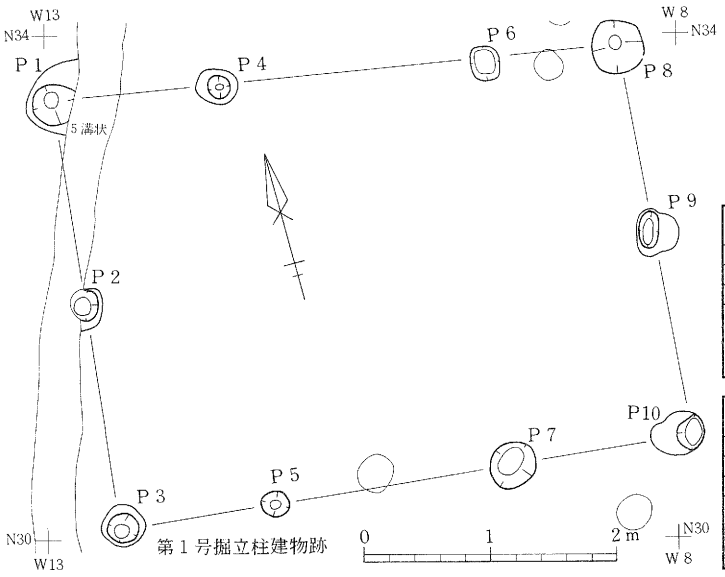
【出土遺物】柱穴の掘り方を中心に土師器破片が11点・須恵器破片が1点出土したが、図示できるものはない。土師器ではロクロで製作されたものとそうでないものがみられる。須恵器は坏底部で、回転糸切りで切り離され、その後手持ちヘラケズリの再調整が施されている。

第4号掘立柱建物跡（SB 4）

【位置】Ⅱ区　N1.5～4.1　W88.5～96.3

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。建物の北側のみで、南側は調査区外に延びている。重複はない。

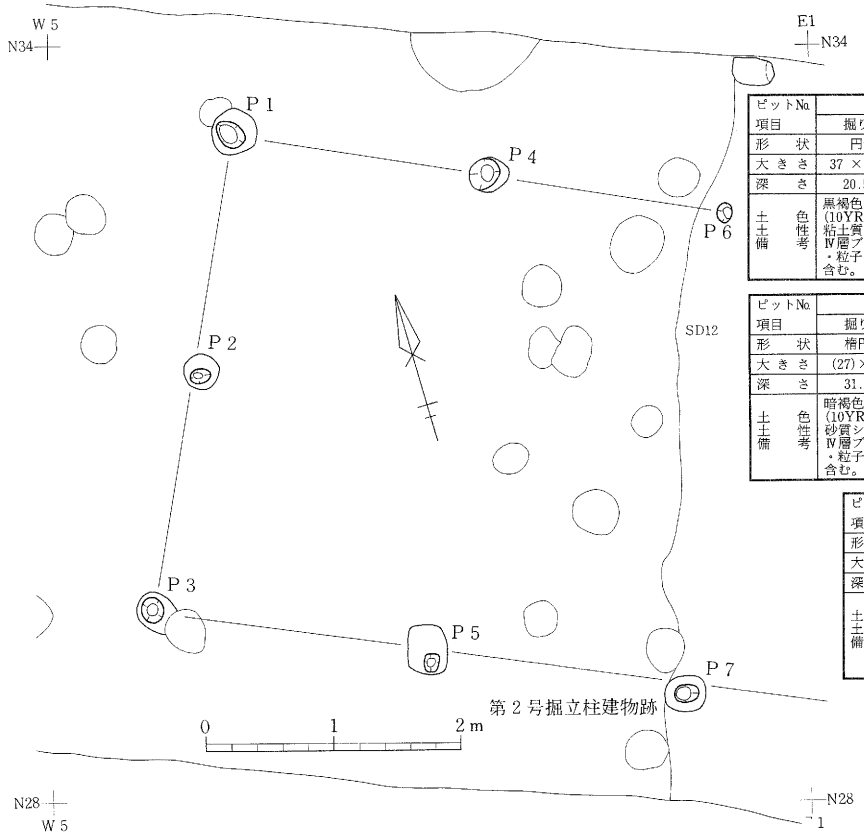
【方向・規模】桁行5間、梁行1間以上で、さらに北側に1間×1間の突出し部を持つ東西棟である。建物の方向は北辺でN－66.5°－Wである。桁行は総長が7.58mで、柱間は西から1.36m、1.20m、2.30m、



ピットNo.	P 1		P 2	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	略円形	円形	(円形)	円形
大きさ	60×(35)cm	34 × 32cm	33 × 28cm	24 × 22cm
深　さ	46.0cm	42.5cm	23.5cm	23.5cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子を若干含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子を若干含む。

ピットNo.	P 3		P 4	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	円形	円形	円形	円形
大きさ	35 × 35cm	22 × 22cm	33 × 28cm	18 × 18cm
深　さ	24.0cm	21.0cm	14.5cm	14.0cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子を若干含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をわずかに含む。

ピットNo.	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9		P10	
項目					掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	円形	楕円形	円形	円形	略円形	楕円形	楕円形	円形
大きさ	23 × 21cm	29 × 23cm	38 × 36cm	42 × 41cm	38 × 33cm	31 × 16cm	43 × 34cm	30 × 23cm
深　さ	26.0cm	8.5cm	26.0cm	28.0cm	23.0cm	23.0cm	28.5cm	24.0cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をわずかに含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をわずかに含む。



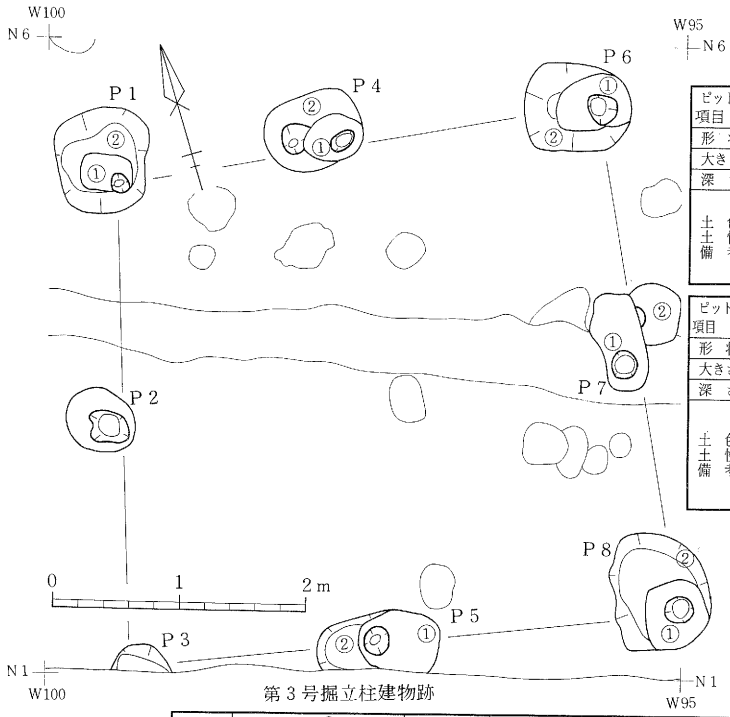
ピットNo.	P 1		P 2	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	円形	楕円形	円形	円形
大きさ	37 × 35cm	26 × 20cm	28 × 28cm	17 × 13cm
深　さ	20.5cm	19.5cm	22.5cm	18.5cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子を少量含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト 酸化鉄斑を少量含む。

ピットNo.	P 3		P 4	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	楕円形	円形	円形	円形
大きさ	(27)×28cm	19 × 18cm	31 × 28cm	27 × 23cm
深　さ	31.0cm	27.5cm	22.0cm	21.5cm
土色 土性 備考	暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子を少量含む。

ピットNo.	P 5		P 6
項目	掘り方	柱痕跡	
形　状	隅丸方形	隅丸方形	円形
大きさ	39 × 31cm	14 × 13cm	17 × 13cm
深　さ	28.5cm	26.0cm	14.5cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト Ⅳ層粒子を少量含む。	黒褐色 (10YR2/2) シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。

ピットNo.	P 7	
項目	掘り方	柱痕跡
形　状	楕円形	楕円形
大きさ	34 × 28cm	19 × 14cm
深　さ	25.0cm	23.0cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト Ⅳ層粒子をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/2) シルト 酸化鉄斑をわずかに含む。

第82図　第１・２号掘立柱建物跡



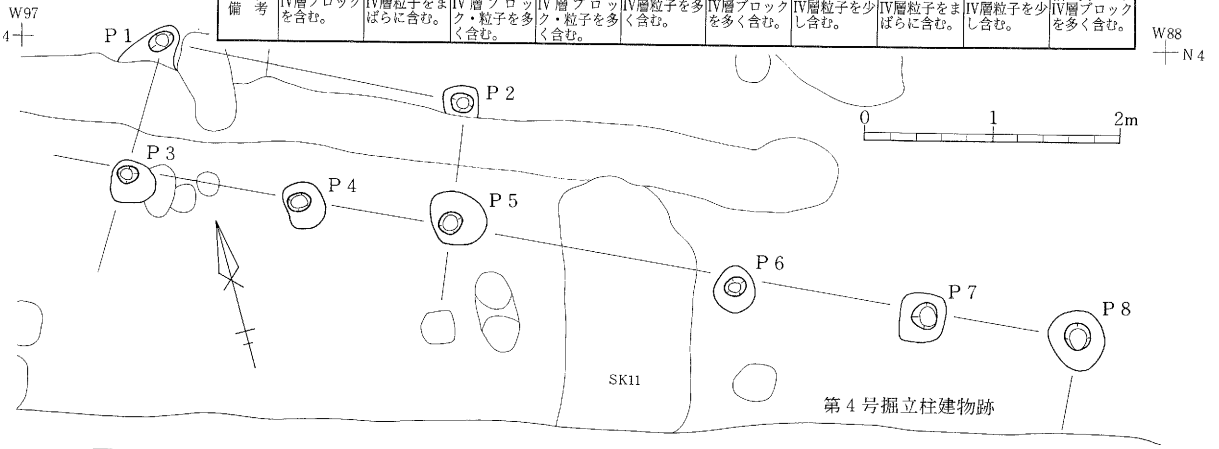
第３号掘立柱建物跡

ピットNo. / 項目	P1①		P1②	P2	
	掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡
形　状	隅丸方形	円形	略円形	円形	不整円形
大きさ	42×29 cm	16×14 cm	85×70 cm	55×51 cm	36×29 cm
深　さ	51.0 cm	51.0 cm	(33.5)cm	47.0 cm	47.0 cm
土色土性備考	灰黄褐色(10YR5/2)シルトIV層ブロックを均一に含む。人為堆積	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトI層より暗い。IV層ブロックを少し含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロックを多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層粒子を少し含む。

ピットNo. / 項目	P3	P4①		P4②	
		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	(半円形)	円形	楕円形	隅丸方形	(円形)
大きさ	48×(22)cm	48×38 cm	28×14 cm	78×60 cm	24×(18)cm
深　さ		33.5 cm	33.5 cm	42.5 cm	42.5 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトIV層粒子をまばらに、酸化鉄斑紋を少し含む。	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトIV層ブロックを多く含む。	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子をまばらに含む。

ピットNo. / 項目	P5①		P5②
	掘り方	柱痕跡	
形　状	(略円形)	円形	(半円形)
大きさ	63×(48)cm	23×20 cm	(39)×33 cm
深　さ	38.5 cm	38.5 cm	(29.5)cm
土色土性備考	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子を少し含む。	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層ブロックを含む。

ピットNo. / 項目	P6①		P6②(6G P47)	P7①		P7②		P8①		P8②
	掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	
形　状	楕円形	略円形	(隅丸方形)	隅丸方形	丸形	(略円形)	円形	正方形	円形	略円形
大きさ	60×44 cm	24×24 cm	(84)×69 cm	79×42 cm	23×22 cm	49×(36)cm	18×17 cm	52×49 cm	23×20 cm	(92)×73 cm
深　さ	53.0 cm	53.0 cm	(19.0)cm	10.5 cm	10.5 cm	46.5 cm	46.5 cm	44.0 cm	44.0 cm	(21.0)cm
土色土性備考	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒色(10YR2/1)粘土質シルトIV層粒子を多く含む。	灰黄褐色(10YR4/2)シルトIV層ブロックを多く含む。	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトIV層粒子を少し含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子を少し含む。	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトIV層ブロックを多く含む。



第４号掘立柱建物跡

ピットNo. / 項目	P1		P2		P3		P4		P5	
	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	(不整円形)	楕円形	(正方形)	隅丸正方形	円形	楕円形	楕円形	円形	円形	円形
大きさ	(32)×30 cm	22×17 cm	28×(25)cm	18×16 cm	36×33 cm	18×13 cm	39×30 cm	18×15 cm	50×42 cm	18×17 cm
深　さ	13.5 cm	13.5 cm	20.5 cm	20.5 cm	30.0 cm	30.0 cm	15.0 cm	15.0 cm	25.0 cm	25.0 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルトIV層ブロック・粒子を少し含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子を含む。		暗褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層粒子をまばらに含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層粒子を多く含む。		黒褐色(10YR3/2)シルト4層柱痕跡より多い。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子を少し含む。

ピットNo. / 項目	P6		P7		P8	
	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	円形	円形	隅丸方形	円形	円形	円形
大きさ	38×33 cm	17×16 cm	39×36 cm	21×20 cm	49×42 cm	23×20 cm
深　さ	35.0 cm	35.0 cm	33.5 cm	33.5 cm	39.0 cm	39.0 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層粒子をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層を少し含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子をまばらに含む。

第83図　第３・４号掘立柱建物跡

1.52m、1.20mである。北側への突出し部は約1mの柱間である。

【柱穴】柱穴はいずれも柱痕跡があり、掘り方は40～50cmの円形が多く、柱痕跡は径20cm前後の円形が大半である。また、深さは15～40cmである。なお周辺に散在するこれらSB4の第6号ピット群では柱穴とほぼ同じ規模のものが多い。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、土師器破片6点・須恵器破片が1点出土している。土師器はいずれも非ロクロである。須恵器は坏の底部で、手持ちヘラケズリの再調整が認められる。

第5号掘立柱建物跡（SB5）

【位置】 III区　E9.5～10.9　N45.1～49.8

【確認面・重複】IV層上面で確認された。東側はさらに調査区外に延びる。柱穴P1・2が他のピットと重複している。

【方向・規模】桁行1間以上、梁行3間の建物である。建物の方向は西辺柱列でN－6.5°－Eであり、真北方向に近い。桁行は総長が1.4m以上で、柱間は1.22mである。梁行は総長が5.54mで、柱間は北から1.22m、1.40m、1.54m、1.38mである。

【柱穴】柱穴は掘り方が径20～40cmの円形か楕円形、柱痕跡が20cm前後の円形を基調としている。柱穴の深さは確認面から11.5～37.5cmであり、幅が大きい。

【出土遺物】製作時にロクロを使用していない土師器破片1点が出土しているが、図示できなかった。

第6号掘立柱建物跡（SB6）

【位置】 III区　E5.3～10.2　N55.5～59.9

【確認面・重複】IV層上面で確認された。柱穴の一部は調査区の西側へ延びている。柱穴の一部が第26・27号溝跡と重複しているが、これらとの新旧関係は不明である。

【方向・規模】桁行2間、梁行2間の総柱の建物跡である。しかし、西・南・東の方向にはさらに延びる可能性も考えられる。桁行は、北側柱列では総長4.10mで、柱間は西から2.04m、2.06mである。南側柱列では総長4.30mで、柱間は西から2.20m、2.10mである。梁行は、西側柱列では総長3.64mで、柱間は北から2.32m、1.32mである。東側柱列では総長3.36mで、柱間は北から1.96m、1.40mである。建物の方向は東側柱列でN－21.5°－Eであり、東に寄っている。

【柱穴】柱穴は掘り方が径が40cmの円形を基調としている。そのほとんどに径20cm前後で、円形の柱痕跡が認められた。確認面からの深さは20～40cmと幅がある。第8号掘立柱建物跡および第28号溝跡と東西方向の方向性がほぼ一致しており、これらの遺構との関連が考えられる。

【出土遺物】土師器破片が1点出土しているが、詳細は不明である。

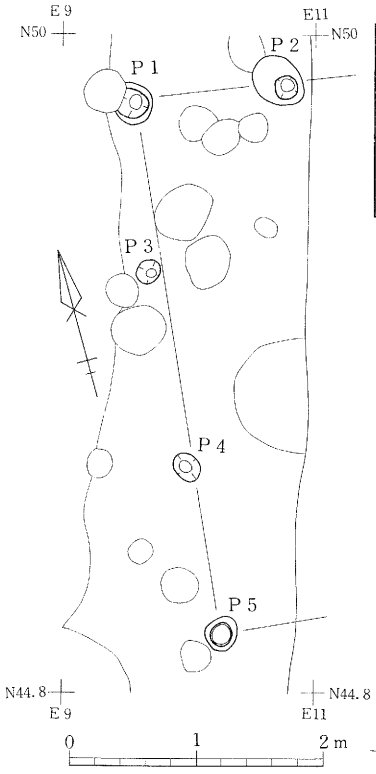
第7号掘立柱建物跡（SB7）

【位置】 III区　E5.6～9.8　N60.7～66.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。西側は調査区外に延びている。柱穴の一部が第26号溝跡と重複しているが、これらとの新旧関係は不明である。

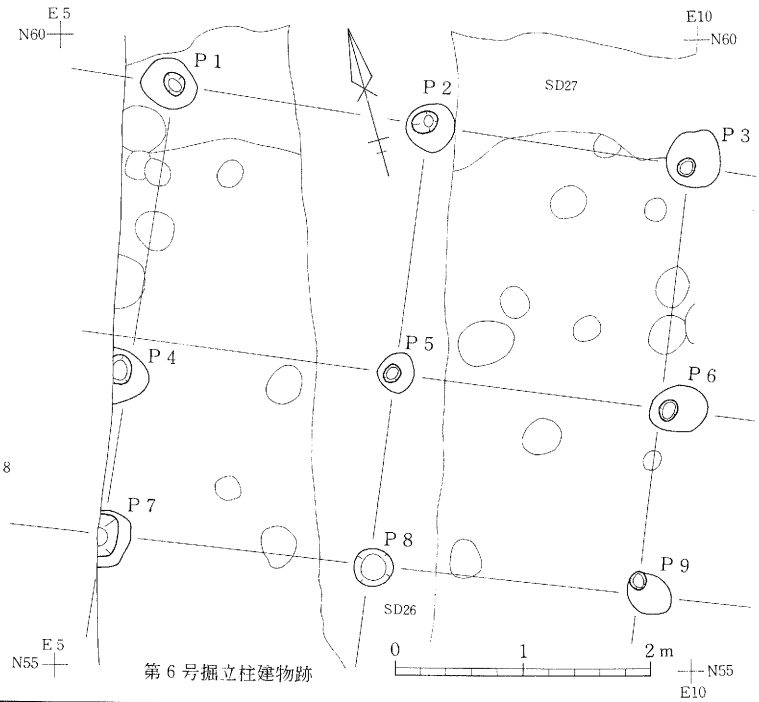
【方向・規模】桁行2間かそれ以上、梁行2間の総柱の建物と考えられる。桁行は北側柱列では総長が2.76m以上で、計測できる柱間は2.12mである。南側柱列では総長が4.30mかそれ以上で、柱間は西から2.0m、2.30mである。梁行は東側柱列では総長が4.20mで、柱間は北から2.06m、2.14mである。建物の方向は東側柱列でN－2°－Eであり、ほぼ真北方向を向いている。

【柱穴】柱穴は掘り方が30cm前後の円形や隅丸方形である。柱痕跡は不明なものが多いが、検出された例は径が10～20cmの円形を基調としている。深さは確認面から15～33cmであり、柱穴によって幅がみられる。



第５号掘立柱建物跡

ピットNo.	P1		P2		P3	P4	P5	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡			掘り方	柱痕跡
形　状	(円形)	(円形)	楕円形	円形	円形	楕円形	円形	円形
大きさ	32×(26)cm	22×(22)cm	46×35 cm	19×18 cm	21×19 cm	24×20 cm	28×28 cm	18×17 cm
深　さ	37.5 cm	36.5 cm	30 cm	29.5 cm	14.5 cm	11.5 cm	33 cm	33 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを含む。	黒褐色(10YR3/2)シルト炭化物をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層粒子をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層粒子をわずかに含む。



第６号掘立柱建物跡

ピットNo.	P1		P2		P3		P4		P5	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	略円形	楕円形	円形	楕円形	正方形	円形			円形	円形
大きさ	43×36 cm	20×16 cm	38×38 cm	20×16 cm	43×43 cm	14×14 cm	45×(30)cm	24×14 cm	32×30 cm	15×14 cm
深　さ	34 cm	28 cm	32 cm	27 cm	34 cm	34 cm	39 cm	28.5 cm	20 cm	10 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層をわずかに、焼土をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をまばらに、焼土・炭化物を少量含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をまばらに、焼土・炭化物を少量含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層をわずかに含む。

ピットNo.	P6		P7		P8	P9	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡
形　状	楕円形	楕円形			円形	楕円形	円形
大きさ	44×37 cm	18×14 cm	46×(22)cm	34×(16)cm	30×30 cm	40×32 cm	16×16 cm
深　さ	34.5 cm	33 cm	28 cm	17.5 cm	6.5 cm	17 cm	12 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層・炭化物を少量含む。

第84図　第５・６号掘立柱建物跡

【出土遺物】出土していない。

第8号掘立柱建物跡（SB 8）

【位置】 Ⅳ区　E13.2～20.0　N64.3～66.7

【確認面・重複】Ⅳ層上面および第2号竪穴遺構堆積土中で確認された。第16号竪穴住居跡・第2号竪穴遺構と重複しており、これらより新しい。

【方向・規模】桁行が3間で、梁行が1間以上の建物であり、西側には仕切りが認められる。桁行は北側柱列では総長6.34mで、柱間は西から2.08m、2.10m、2.16mである。梁行は西側柱列で総長が2.70m以上と計測できる。柱間は1.86mである。建物の東西方向はN－64°－Wで、真北方向から大きくずれている。

【柱穴】柱穴は掘り方が径30cm前後の円形を基調としている。柱痕跡は3個の柱穴から検出されたが、径が20cm弱の円形である。深さは確認面から9～35cmで、柱穴によって幅がみられる。第28号溝跡と東西方向の方向性がほぼ一緒になり、第6号掘立柱建物跡およびこれらの遺構との関連が考えられる。

【出土遺物】出土していない。

第9号掘立柱建物跡（SB 9）

【位置】 Ⅳ区　N62.7～65.4　E31.1～37.8

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。重複関係はない。南側はさらに調査区外に延びている。

【方向・規模】桁行3間、梁行1間かそれ以上の建物である。桁行は北側柱列では総長6.38mで、柱間は西から2.14m、2.20m、2.04mである。梁行は1間のみが確認され、その柱間は2.04mである。建物の東西方向はN－71.5°－Wであり、その直交方向は真北から東に大きく寄っている。

【柱穴】柱穴は掘り方が径30cm前後の円形を基調としている。柱痕跡は1個を除いて確認されており、概して径が15～20cmの円形である。深さは確認面から11～33cmで、柱穴によって幅がみられる。

【出土遺物】出土していない。

第10号掘立柱建物跡（SB 10）

【位置】 Ⅳ区　N38.8～43.7　E37.4～43.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。第11号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

【方向・規模】桁行が3間かそれ以上、梁行が2間の総柱の東西棟の建物と考えられる。桁行は北側柱列で総長が5.7m以上で、柱間は西から2.08m、2.06mである。また、南側柱列では総長が5.9mで、柱間は西から2.06m、2.08mである。梁行は途中のP2・P5・P8ラインで、総長が3.64mで、柱間は北から1.86m、1.78mである。建物の方向はN－35°－Eであり、真北から大きく東に寄っている。

【柱穴】柱穴は掘り方が径が30cm前後の円形が多い。柱痕跡は全てに認められ、径が20～25cmの円形を基調としており、深さは確認面から30～40cmのものが多い。

【出土遺物】出土していない。

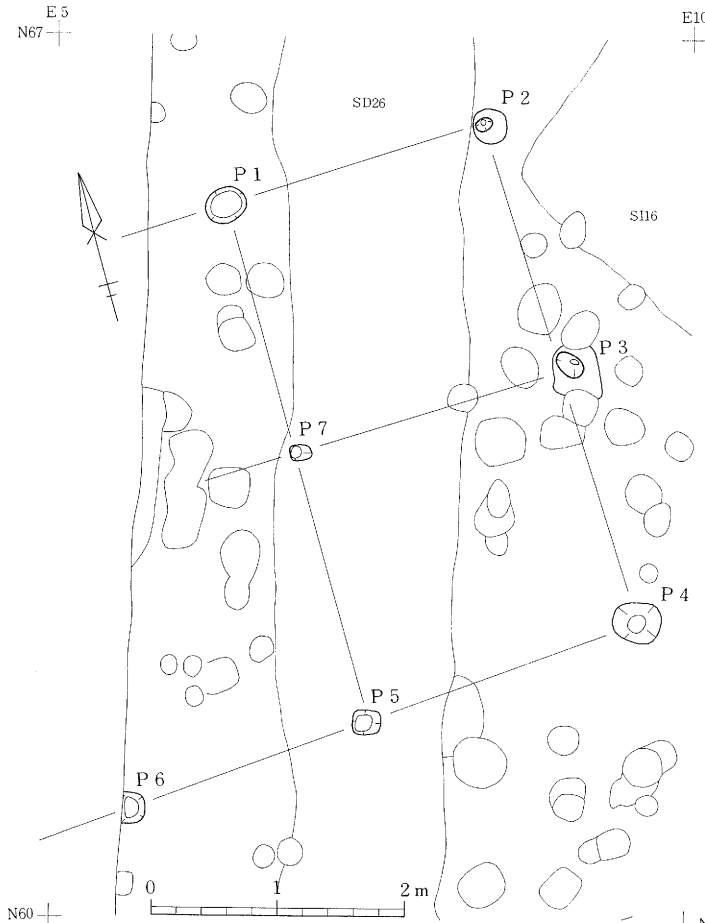
第11号掘立柱建物跡（SB 11）

【位置】 Ⅳ区　N38.5～43.6　E39～42.8

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。第10号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

【方向・規模】桁行が1間以上、梁行が1間の東西棟の建物の可能性が考えられ、さらに北側に1間の庇かあるいは突出し部が付く。桁行はP3～P4の柱間が2.24m、P5～P6の柱間が2.40mである。また、梁行はP3～P5が3.00mである。建物の方向は真北から大きく東に寄っており、N－28°－Eである。

【柱穴】柱穴では掘り方は径が30cm前後の円形か楕円形が多い。柱痕跡は全てに確認されており、径が15～25cmの円形が多い。深さは確認面から30～50cmのものが多い。

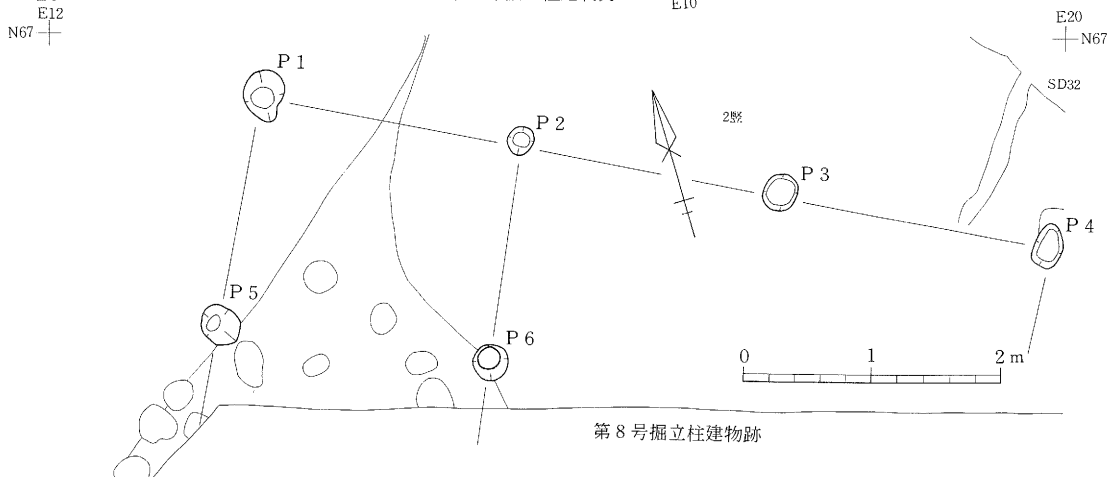


ピットNo. / 項目	P1	P2	
		掘り方	柱痕跡
形状	円形	円形	円形
大きさ	34×34 cm	28×26 cm	12×11 cm
深さ	20.5 cm	22 cm	20 cm
土色 土性 備考	黒褐色(10YR2/3)シルト IV層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト IV層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルト IV層をわずかに含む。

ピットNo. / 項目	P3		P4
	掘り方	柱痕跡	
形状	正方形	楕円形	隅丸方形
大きさ	36×(32)cm	24×16 cm	38×32 cm
深さ	15.5 cm	15.5 cm	33 cm
土色 土性 備考	黒褐色(10YR2/2)シルト 10YR6/3 にぶい黄橙色のブロックを含む。	黒褐色(10YR2/2)シルト IV層・炭化物を少量含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト IV層をまばらに、焼土・炭化物を少量含む。

ピットNo. / 項目	P5	P6	P7
形状	隅丸方形		楕円形
大きさ	24×19 cm	24×(20)cm	18×13 cm
深さ	18.5 cm	20.5 cm	15 cm
土色 土性 備考	黒褐色(10YR2/3)シルト IV層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト IV層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト IV層ブロックを多量に含む。

第7号掘立柱建物跡



第8号掘立柱建物跡

ピットNo. / 項目	P1		P2		P3	P4	P5	P6	
	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡				掘り方	柱痕跡
形状	不整円形	円形	円形	円形	円形	不整方形	円形	円形	円形
大きさ	39×32 cm	18×17 cm	23×22 cm	22×18 cm	30×27 cm	35×23 cm	34×28 cm	29×28 cm	18×18 cm
深さ	30 cm	30 cm	21 cm	21 cm	10 cm	9 cm	35 cm	20.5 cm	20.5 cm
土色 土性 備考	黒褐色(10YR2/3)シルト IV層をまばらに、焼土・炭化物を少量含む。	黒褐色(10YR2/2)シルト IV層・炭化物を少量含む。	黒褐色(10YR3/2)シルト IV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルト IV層粒子を多く、焼土をわずかに含む。	黒褐色(10YR3/1)シルト IV層粒子を多く、炭化物をわずかに含む。	黒褐色(10YR3/2)シルト IV層ブロック・粒子が多い。	黒褐色(10YR3/2)シルト IV層をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト IV層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト 炭化物・焼土をまばらに含む。

第85図　第7・8号掘立柱建物跡

【出土遺物】出土していない。

第12号掘立柱建物跡（SB 12）

【位置】 IV区　N26.1～30.7　E37.5～42.2

【確認面・重複】IV層上面で検出された。第５号小溝状遺構群および第15号ピット群の一部と重複しており、前者より新しく、後者より古い。

【方向・規模】桁行２間かそれ以上、梁行２間の総柱の建物と考えられる。桁行は北側柱列では総長が4.18mかそれ以上で、柱間は西から2.10m、2.18mである。また南側柱列で総長が4.12mかそれ以上で、柱間は西から2.04m、2.08mである。建物の方向は真北から大きく東に寄っており、N－23°－Eである。

【柱穴】柱穴は掘り方が径30～40cmの円形か楕円形、柱痕跡は径20～30cmの円形を基調としている。深さは確認面から12～32cmと幅があり、20～30cmが多い。

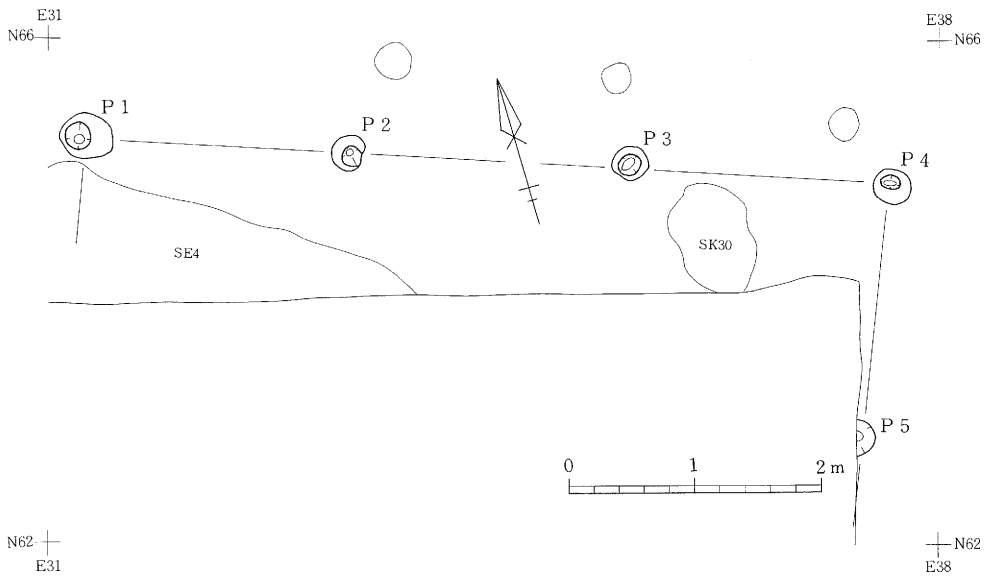
【出土遺物】柱穴の掘り方から土師器破片が３点出土しているが、図示できるものはなかった。その中の坏はロクロで製作されており、内面には黒色処理が施されている。

第13号掘立柱建物跡（SB 13）

【位置】 VI区　S32.4～37.5　E35～47.6

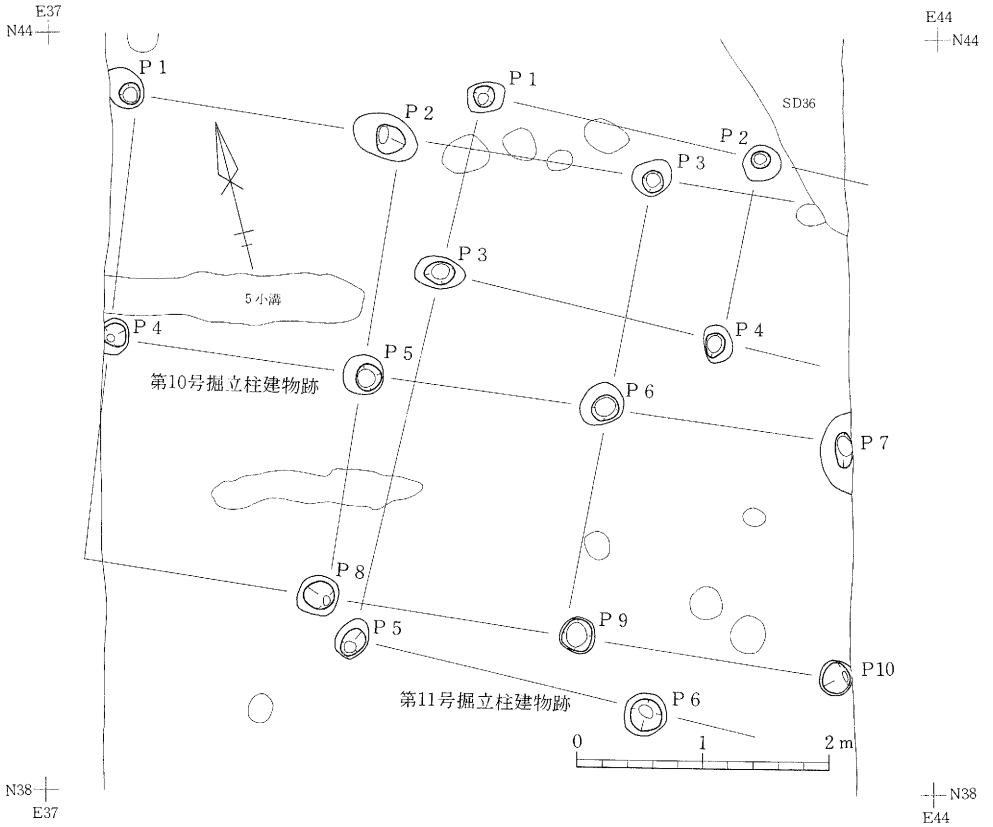
【確認面・重複】IV層上面で確認された。建物の一部と考えられ、南側は調査区外に延びている。第６号小溝状遺構群の一部と重複しており、それより新しい。

【方向・規模】東西が４間かそれ以上、南北が２間かそれ以上の建物であり、その北側と東側の柱列が検出された。北側柱列は総長10.28mかそれ以上で、柱間は西から2.84m、2.72mであり、P3～P4は4.72mとなるが、その間に柱が存在したものと考えられる。東側柱列は総長が4.74mかそれ以上で、柱間は



ピットNo.	P1		P2		P3		P4		P5
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	
形状	円形	円形	不整円形	不整円形	円形	円形	円形	楕円形	(円形)
大きさ	42×38 cm	22×20 cm	26×24 cm	14×12 cm	30×28 cm	18×18 cm	30×28 cm	16×12 cm	30×(14) cm
深さ	47.5 cm	33.5 cm	20 cm	16 cm	23.5 cm	19 cm	20 cm	11.5 cm	17 cm
土色・土性・備考	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を霜降状に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を少し含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を霜降状に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を少し含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を霜降状に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を少し含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を霜降状に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を少し含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を霜降状に含む。

第86図　第９号掘立柱建物跡



ピットNo.	P1		P2		P3		P4		P5	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	楕円形	円形	楕円形	略円形	略円形	円形	(円形)	(円形)	円形	円形
大きさ	(30)×(26)cm	18×17 cm	54×34 cm	24×23 cm	31×28 cm	17×16 cm	27×(20)cm	18×(18)cm	32×32 cm	22×20 cm
深さ	35 cm	31 cm	28.5 cm	28.5 cm	12.5 cm	11.5 cm	28 cm	28 cm	38.5 cm	33.5 cm
土色備考	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子を少量含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子を少量含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子を少量含む。

ピットNo.	P6		P7		P8		P9		P10	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	円形	円形	(円形)	(楕円形)	円形	円形	円形	円形	円形	円形
大きさ	34×34 cm	22×18 cm	66×(25)cm	30×(12)cm	32×32 cm	25×22 cm	30×24 cm	26×24 cm	28×24 cm	25×24 cm
深さ	41.5 cm	37.5 cm	44 cm	42.5 cm	35 cm	35 cm	40.5 cm	34.5 cm	29.5 cm	24 cm
土色備考	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子を少量含む。	黒褐色(10YR3/2)シルト焼土・炭化物少量、IV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルト焼土・炭化物をわずかに含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子を少量含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。

ピットNo.	P1		P2		P3		P4		P5	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	長方形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	楕円形
大きさ	29×24 cm	18×17 cm	30×29 cm	16×14 cm	39×24 cm	24×18 cm	30×23 cm	20×18 cm	33×27 cm	24×19 cm
深さ	55 cm	53.5 cm	41.5 cm	40 cm	28.5 cm	28.5 cm	36.5 cm	35.5 cm	53 cm	52 cm
土色備考	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。

ピットNo.	P6	
項目	掘り方	柱痕跡
形状	円形	円形
大きさ	29×28 cm	26×26 cm
深さ	30 cm	16 cm
土色備考	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。

第87図　第10・11号掘立柱建物跡

北から2.34m、2.40mである。建物方向は東側柱列で、N－2.5°－Eであり、ほぼ真北方向を向いている。

【柱穴】柱穴は掘り方が40～50cmの円形か隅丸方形が特徴である。また、柱痕跡は径が20cm前後の円形を基調としている。深さは確認面から15～44cmと幅がみられる。

【出土遺物】P2の柱痕跡から土師器ととりべが出土している。土師器は坏で、体・底部が丸底で、口縁部との境に段をもつものである。図示できたとりべは2点あり、1点は片口で底部が平坦なものである。他の1点は内面が黒色処理されていることから、坏の転用と考えられる。ともに内面には溶解物が付着している。他にも1点のとりべ（写真90－9）が出土している。

第14号掘立柱建物跡（SB 14）

【位置】 Ⅳ・Ⅴ区　N6.5～S1.3　E32.7～40.8

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。一部は調査区外に延びている。第20号竪穴住居跡と第33号溝跡と重複しており、前者より新しく、後者より古い。

【方向・規模】桁行が3間、梁行2間の南北棟の建物と考えられ、その西側に1間の庇が付いている。建物の東側柱列は総長が5.66mで、柱間は北から2.43m、1.81m、1.40mとそれぞれ異なる。また、南側柱列は総長4.17mで、柱間は西から2.45m、1.72mである。建物方向はN－88.5°－Eであり、真北とほぼ直交している。

【柱穴】柱穴は身舎部分では掘り方が30～60cmの円形か方形が多く、柱痕跡は径が20cm前後の円形が多い。また、庇部分の柱穴はそれよりも小形で、径が20cm未満の円形を基調としている。深さは確認面から11～43cmと幅がみられる。

【出土遺物】柱穴内から土師器破片が5点出土しているが、図示はできなかった。その中の1点は内外面とも黒色処理が施された坏である。

第15号掘立柱建物跡（SB 15）

【位置】 Ⅵ区　S31.8～36.9　E58～64.3

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。他の遺構と複雑に重複しているが、ほぼ全体が確認された。重複する第30号竪穴住居跡より新しく、第47・48・50号溝跡より古い。

【方向・規模】桁行2間、梁行1間の東西棟の建物と考えられる。桁行の北側柱列は総長が4.74mで、柱間は西から2.45m、2.29mである。また、南側柱列では総長が4.98mで、柱間は西から2.70m、2.28mである。梁行の西側柱列は総長が3.33m、東側柱列が3.48mである。建物方向はN－4.5°－Wとわずかに西に寄っているものの、ほぼ真北方向を向いている。

【柱穴】柱穴は他の遺構に大きく切られている例が多く明確ではないが、掘り方にはP2・P4のように長辺が1mを越す長方形の例があり、柱穴は径が30cm前後の円形が多い。深さは確認面から34～72cmであり、全般的に深い例が多い。

【出土遺物】柱痕跡および掘り方から土師器・須恵器・縄文土器が出土している。土師器・須恵器は図示できたのはそれぞれ1点ずつで、その他に土師器破片24点・須恵器破片2点である。土師器ではロクロで製作された例が多く、坏底部資料では手持ちヘラケズリの再調整が施されているものもあった。

第16号掘立柱建物跡（SB 16）

【位置】 Ⅱ区　N5.2～S1.8　W104.5～110.1

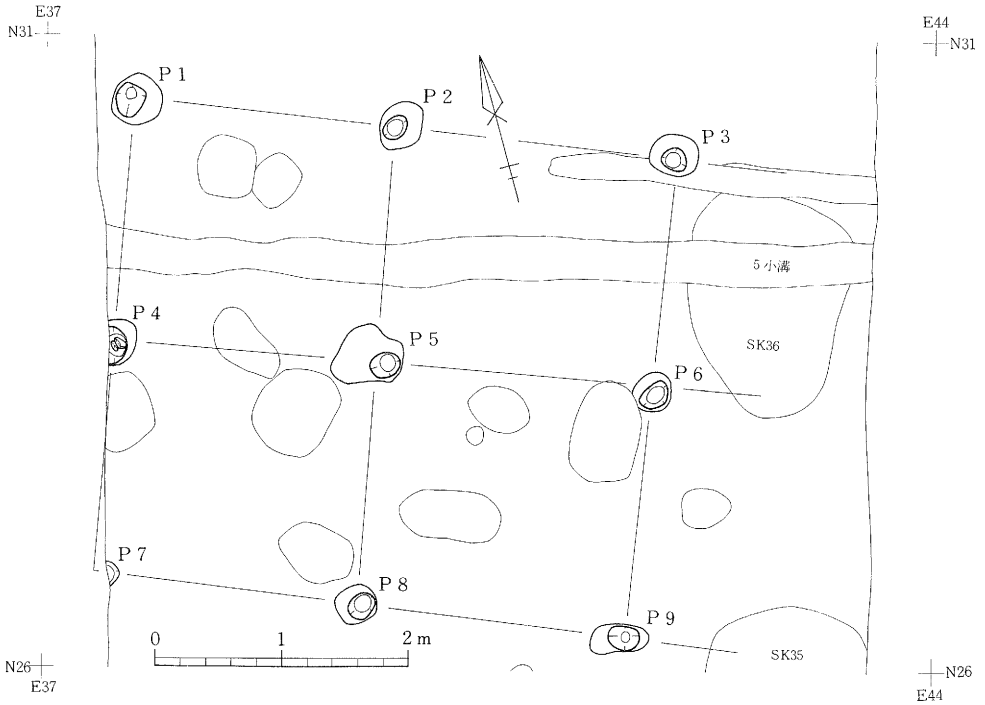
【確認面・重複】Ⅳ層上面および第5号竪穴住居跡堆積土上面で確認された。建物の東側が検出され、西側はさらに調査区外に延びている。第7号溝状遺構・第5号土坑・第17号掘立柱建物跡と重複しており、これらより古い。また、第5号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。

【方向・規模】南北は2間である。東西は2間かそれ以上とみられるが、南側柱列の最も西寄りの掘り

方が他の2個と方向を変えていることから、東西も2間で終わるものと推定される。したがってここでは2間×2間のほぼ方形の建物と考えておく。南北方向は東側柱列でほぼ真北方向を向いている。建物の規模は北側柱列は総長約3m以上、柱間は2.04m、南側柱列は総長約5.6mで、柱間は西から2.38m、2.50mである。東側柱列は総長5.16mで、柱間は北から2.60m、2.56mである。

【柱穴】柱穴は掘り方が長軸1.0～1.3m、短軸が0.9～1.1mの長方形を基調としている。柱痕跡は全てに認められ、円形で径30～40cmである。確認面からの深さは40～50cmである。

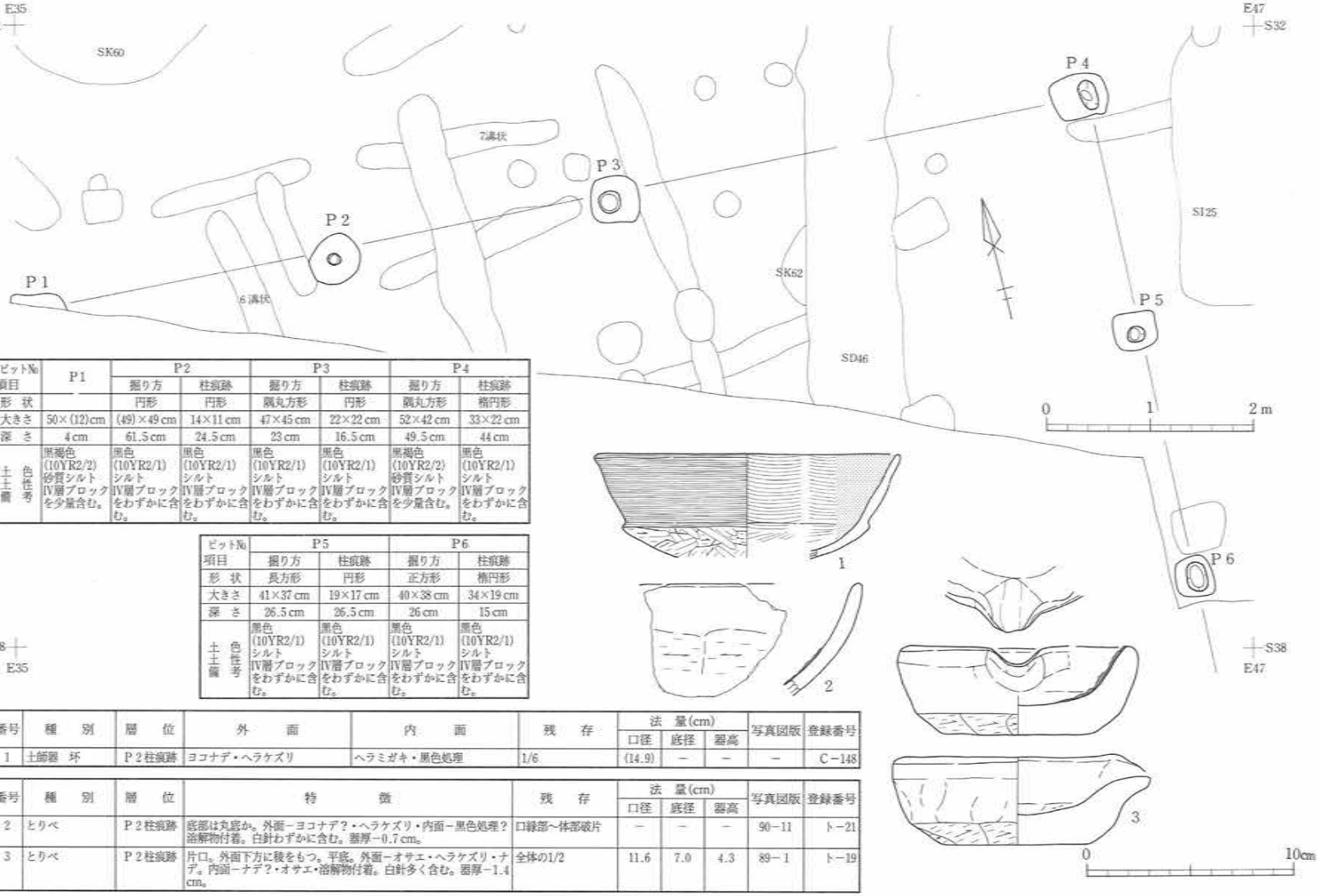
【出土遺物】柱穴の掘り方・柱痕跡から土師器・須恵器・土製品が出土した。図示した土師器はいずれも製作時にロクロを使用していないものである。その他に土師器破片57点・須恵器破片4点があり、土師器は製作時にロクロを使用していない例が大部分である。土製品の1点は瓦塔の一部の可能性が考えられるものである。胎土は極めて堅緻で、両側に型押しによるものとみられる棒状の隆起がみられる。



ピットNo. / 項目	P1		P2		P3		P4		P5	
	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	円形	略円形	正方形	円形	(円形)	(円形)	(円形)	(円形)	不整円形	円形
大きさ	41×40cm	26×22cm	36×33cm	20×18cm	38×(23)cm	20×(12)cm	36×(22)cm	30×(13)cm	52×46cm	25×20cm
深さ	36.5cm	22.5cm	39cm	23cm	12cm	12cm	30cm	30cm	34.5cm	32.5cm
土色・土性・備考	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子をわずかに含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルト焼土・炭化物をわずかに含む。

ピットNo. / 項目	P6		P7	P8		P9	
	掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	略円形	楕円形	(円形)	円形	楕円形	楕円形	楕円形
大きさ	32×32cm	26×19cm	20×(10)cm	34×31cm	23×18cm	47×22cm	25×18cm
深さ	28cm	23cm	23cm	29.5cm	24.5cm	31.5cm	27.5cm
土色・土性・備考	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子をわずかに含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトIV層ブロック・粒子をわずかに含む。

第88図　第12号掘立柱建物跡



ピット№ / 項目	P1	P2		P3		P4	
		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状		円形	円形	隅丸方形	円形	隅丸方形	楕円形
大きさ	50×(12)cm	(49)×49cm	14×11cm	47×45cm	22×22cm	52×42cm	33×22cm
深さ	4cm	61.5cm	24.5cm	23cm	16.5cm	49.5cm	44cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト IV層ブロックを少量含む。	黒色 (10YR2/1) シルト IV層ブロックをわずかに含む。	黒色 (10YR2/1) シルト IV層ブロックをわずかに含む。	黒色 (10YR2/1) シルト IV層ブロックをわずかに含む。	黒色 (10YR2/1) シルト IV層ブロックをわずかに含む。	黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト IV層ブロックを少量含む。	黒色 (10YR2/1) シルト IV層ブロックをわずかに含む。

ピット№ / 項目	P5		P6	
	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	長方形	円形	正方形	楕円形
大きさ	41×37cm	19×17cm	40×38cm	34×19cm
深さ	26.5cm	26.5cm	26cm	15cm
土色 土性 備考	黒色 (10YR2/1) シルト IV層ブロックをわずかに含む。	黒色 (10YR2/1) シルト IV層ブロックをわずかに含む。	黒色 (10YR2/1) シルト IV層ブロックをわずかに含む。	黒色 (10YR2/1) シルト IV層ブロックをわずかに含む。

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	P2柱痕跡	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	1/6	(14.9)	−	−	−	C−148

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	とりべ	P2柱痕跡	底部は丸底か。外面−ヨコナデ？・ヘラケズリ・内面−黒色処理？溶解物付着。白針わずかに含む。器厚−0.7cm。	口縁部〜体部破片	−	−	−	90−11	ト−21
3	とりべ	P2柱痕跡	片口。外面下方に稜をもつ。平底。外面−オサエ・ヘラケズリ・ナデ。内面−ナデ？・オサエ・溶解物付着。白針多く含む。器厚−1.4cm。	全体の1/2	11.6	7.0	4.3	89−1	ト−19

第89図　第13号掘立柱建物跡と出土遺物

ピットNo. / 項目	P1		P2		P3	P4		P5		P6	
	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	円形	円形	正方形	円形	円形	(円形)	円形	長方形	楕円形	楕円形	楕円形
大きさ	24×18 cm	14×11 cm	44×42 cm	16×15 cm	34×30 cm	(28)×27 cm	14×14 cm	60×50 cm	18×15 cm	35×24 cm	20×16 cm
深さ	21 cm	11.5 cm	23 cm	23 cm	18 cm	25.5 cm	25.5 cm	38 cm	28 cm	29 cm	20.5 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR2/2)砂質シルトIV層ブロックを含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/2)砂質シルトIV層ブロックを含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/2)砂質シルトIV層ブロックを含む。	黒褐色(10YR2/2)砂質シルトIV層ブロックを含む。	黒褐色(10YR2/3)砂質シルト焼土・炭化物を少量含む。	黒褐色(10YR2/3)砂質シルトIV層をまばらに含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/2)砂質シルトIV層ブロックを含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトIV層をわずかに含む。

ピットNo. / 項目	P7		P8		P9		P10		P11		P12	
	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	略方形	円形	円形	円形	正方形	楕円形	(正方形)	円形	(正方形)	円形	正方形	円形
大きさ	70×66 cm	20×19 cm	57×50 cm	24×24 cm	29×27 cm	19×12 cm	44×(36) cm	20×20 cm	46×(33) cm	18×18 cm	42×(35) cm	18×18 cm
深さ	35 cm	35 cm	54 cm	43 cm	38 cm	36 cm	35 cm	27.5 cm	37.5 cm	21.5 cm	23 cm	21.5 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR2/3)砂質シルトIV層をわずかに、焼土・炭化物を含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/3)砂質シルトIV層をまばらに含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/3)砂質シルトIV層をまばらに含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/2)砂質シルトIV層ブロックを含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/2)砂質シルトIV層ブロックを含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/3)砂質シルトIV層をまばらに含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトIV層をわずかに含む。

第90図　第14号掘立柱建物跡

第17号掘立柱建物跡（SB 17）

【位置】II区　N0.6～5.8　W105.5～109.3

【確認面・重複】IV層上面で確認された。検出された範囲は遺存状況は良好である。さらに西側の調査区外に延びるものと予想されるが明確ではない。第16号掘立柱建物跡・第5号竪穴住居跡と重複しており、それらよりも新しい。

【方向・規模】南北2間、東西2間かそれ以上の総柱建物跡で、東辺の南北柱列の方向は真北よりもわずかに東に寄っており、N－7°－Eである。建物規模は東西方向で北辺が総長2.5mかそれ以上で、柱間は西から1.30m、1.20mである。中辺が総長2.32mかそれ以上で、柱間は西から1.20m、1.12mである。南辺が総長2.44mかそれ以上で、柱間は西から1.12m、1.32mである。また、南北方向では東辺が総長4.12mで、柱間は北から2.10m、2.02m、中辺が総長3.85mで、柱間は北から1.92m、1.93m、西辺が総長4.10mで、柱間は北から1.96m、2.14mである。柱間では東西方向が平均1.21m、南北方向が平均2.01mであり、南北方向が約80cm程長くなっている。

【柱穴】柱穴は多様なあり方を示している。P1とP4は布掘り状の掘り方を持つもので、平面形が長辺1.7～1.9m、短辺66cmの長方形で、その両端に2本の柱が配されている。深さは一様ではなく、また、堆積状況からいずれも柱の抜き取られた痕跡を示すものと考えられる。その他のP2とP7はやや不整形ではあるが、長方形の規模の大きい掘り方をもつもので、また、P3・P5・P6は、長軸が約60cmの円形か方形の掘り方をもつものである。

【出土遺物】図示した土師器と須恵器が掘り方を中心に出土している。その他に土師器破片が85点・須恵器破片が4点ある。土師器は製作時にロクロを使用していないものと、しているものの両者がみられる。後者の底部切り離しは回転糸切りによる。前者は第5号竪穴住居跡の出土土器の中に同特徴をもつ例があり、その遺構から混入したものと考えられる。

第18号掘立柱建物跡（SB 18）

【位置】VII区　S71.8～75.1　E69～75.9

【確認面・重複】IV層上面で確認された。建物の一部とみられ、北側は調査区外に延びるものと考えられる。第26号溝状遺構や第24号ピット群の一部と重複しており、前者より新しく、後者より古い。

【方向・規模】東西が3間、南北が1間かそれ以上の建物である。東西方向の南側柱列は総長6.02mで、柱間は西から2.06m、2.10m、1.86mである。南北方向の西側柱列は柱間が2.52mである。建物の方向は南北方向でN－10°－Eを計り、真北よりやや東に寄っている。

【柱穴】柱穴は掘り方が40～60cmの円形・楕円形・方形をなしており、柱痕跡は径20cm前後の円形が多い。深さは確認面から12～38cmと幅がある。

【出土遺物】図示できるものはないが、掘り方・柱痕跡から土師器破片68点・赤焼土器破片2点・須恵器破片2点が出土している。土師器はロクロで製作されているものが多い。

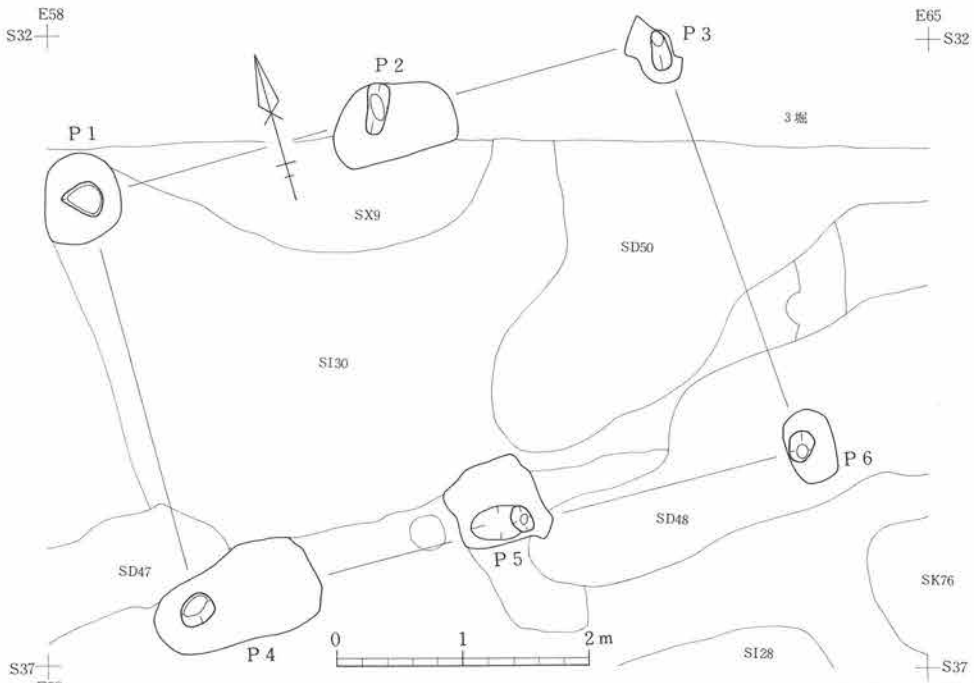
第19号掘立柱建物跡（SB 19）

【位置】II区　N0.2～S3.6　W102.2～105.1

【確認面・重複】IV層上面および第5号竪穴住居跡の堆積土上面で確認された。全体が検出された。第5号竪穴住居跡・第10号土坑と重複しており、これらより新しい。

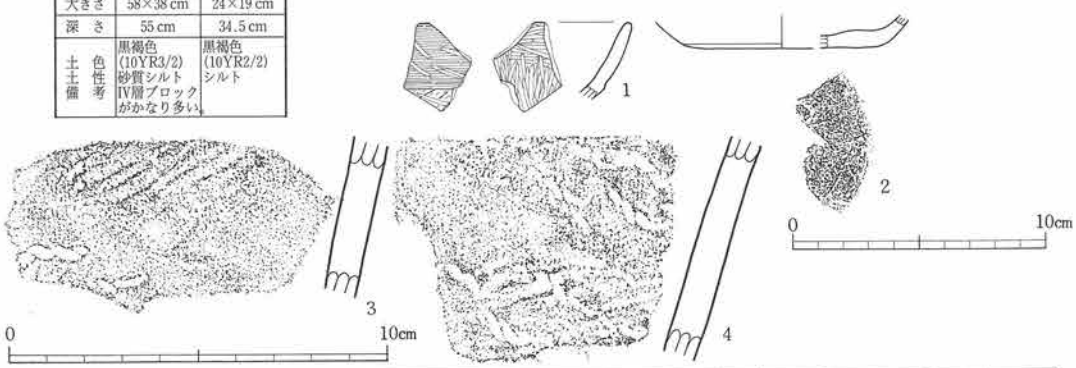
【方向・規模】桁行2間、梁行1間であるが、平面形はほぼ方形を示す。東辺の南北方向は真北よりいくらか東に寄っており、N－17°－Eである。建物の規模は桁行の北辺が総長2.90mで、柱間は西から1.50m、1.40m、南辺が総長2.90mで、柱間は西から1.38m、1.52mである。また、梁行は東辺が総長2.80m、西辺が2.84mである。

【柱穴】柱穴はほとんどにおいて柱痕跡が確認され



ピットNo.	P1		P2		P3		P4		P5	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	方形	三角形	長方形	楕円形		楕円形	長方形	円形	略正方形	楕円形
大きさ	72×62 cm	34×26 cm	100×60 cm	40×15 cm	(44)×(36)cm	32×14 cm	135×71 cm	28×27 cm	35×24 cm	20×16 cm
深さ	57.5 cm	57.5 cm	42 cm	42 cm	51.5 cm	51.5 cm	76.5 cm	72.5 cm	29 cm	20.5 cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト Ⅳ層ブロック がかなり多い。	黒褐色 (10YR2/2) シルト	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト Ⅳ層ブロック がかなり多い。	黒褐色 (10YR2/2) シルト	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト Ⅳ層ブロック がかなり多い。	黒褐色 (10YR2/2) シルト	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト Ⅳ層ブロック がかなり多い。	黒褐色 (10YR2/2) シルト	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト Ⅳ層ブロック がかなり多い。	黒褐色 (10YR2/2) シルト

ピットNo.	P6	
項目	掘り方	柱痕跡
形状	長方形	円形
大きさ	58×38 cm	24×19 cm
深さ	55 cm	34.5 cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト Ⅳ層ブロック がかなり多い。	黒褐色 (10YR2/2) シルト



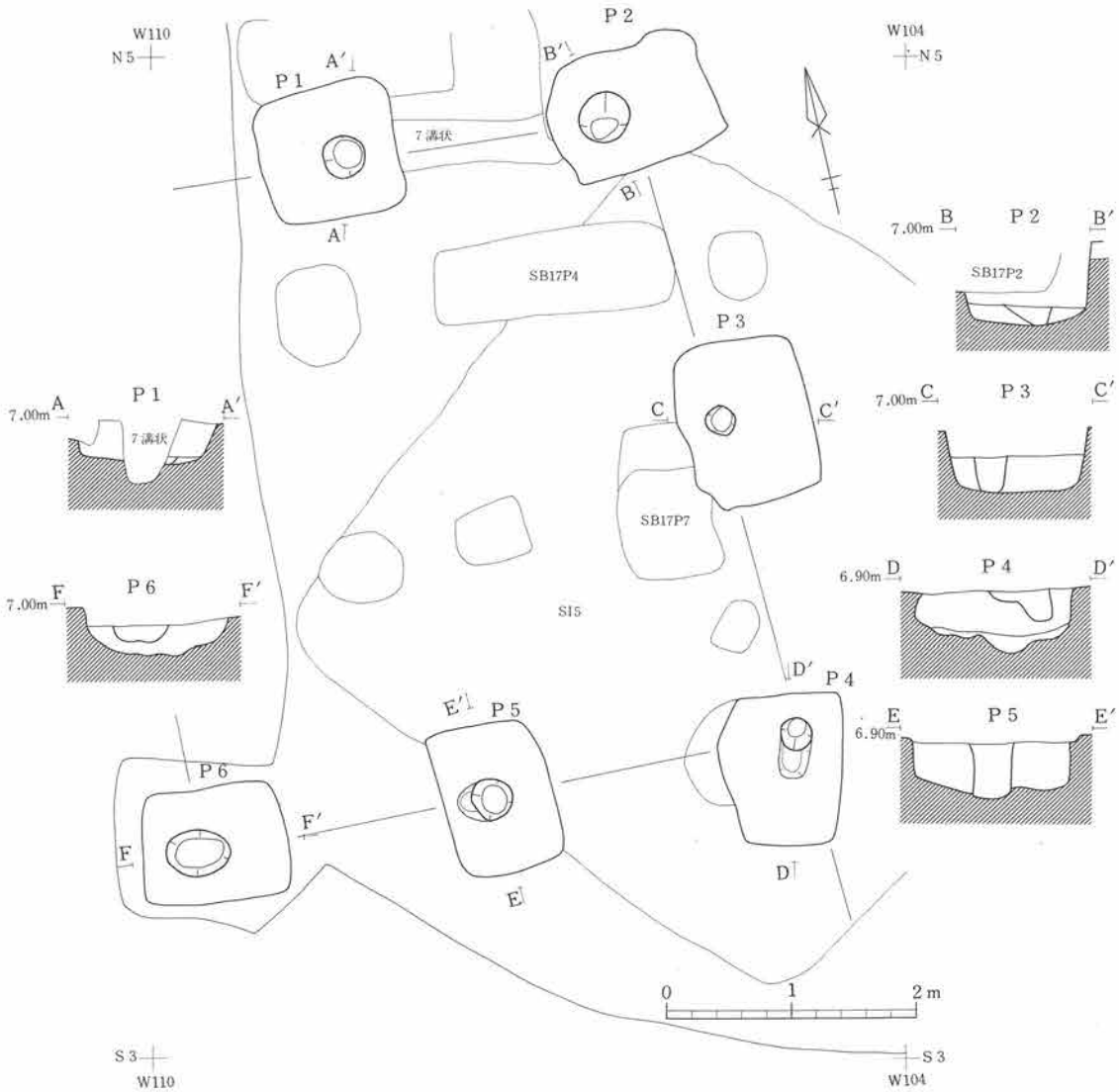
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	柱痕跡	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片	−	−	−	−	C−149
2	須恵器 坏	P1掘り方	ロクロナデ・回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	底部 1/3	−	7.8	−	−	E−24

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	縄文土器 深鉢	掘り方	縄文L。内面ミガキ。	体部破片	−	−	−	86−19	地−44①
4	縄文土器 深鉢	掘り方	縄文L。内面ミガキ。	体部破片	−	−	−	86−20	地−44②

第91図　第15号掘立柱建物跡と出土遺物

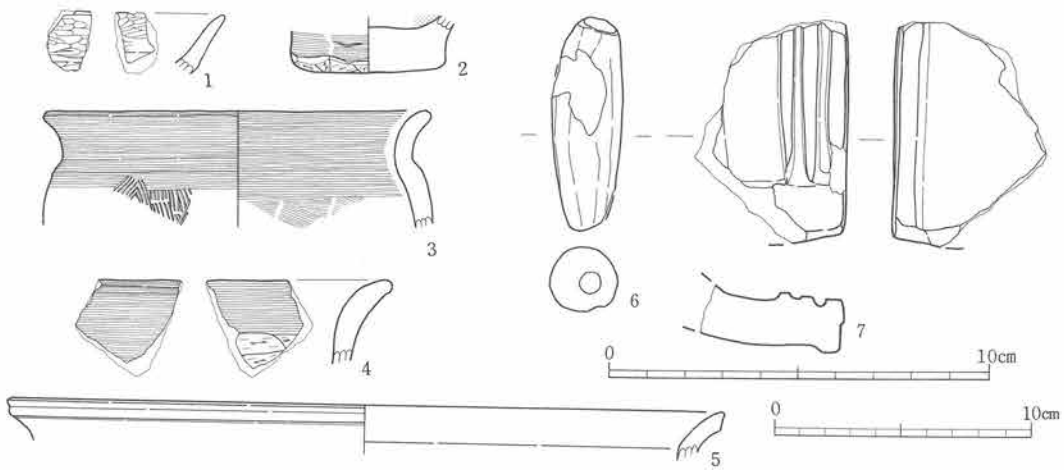
た。掘り方は1辺が30～40cmの方形をなすものが多く、柱痕跡は径20cm前後の円形が多い。深さは30～50cmである。

【出土遺物】P1の掘り方から土師器破片が1点出土しているのみである。



ピットNo.	P1		P2		P3		P4		P5		P6	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	隅丸正方形	円形	長方形	円形	長方形	円形	長方形	円形	長方形	円形	長方形	円形
大きさ	110×110 cm	34×34 cm	132×(100)cm	41×41 cm	134×107 cm	25×24 cm	122×102 cm	26×26 cm	124×87 cm	34×33 cm	116×92 cm	52×37 cm
深さ	50.0 cm	50.0 cm	70.5 cm	70.5 cm	50.0 cm	50.0 cm	43.5 cm	43.5 cm	49.0 cm	52.5 cm	40.0 cm	40.0 cm
土色 土性 備考	暗褐色(10YR3/4)粘土質シルトIV層ブロックを多く含む。	黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトIV層粒子を多く含む。	暗褐色(10YR3/4)粘土質シルトIV層ブロックを多く含む。	黒褐色(10YR2/2)粘土質シルトIV層粒子を粒状に含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層ブロックを多く含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層粒子をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトIV層ブロック・粒子をわずかに含む。	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトIV層ブロック・粒子をわずかに含む。	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトIV層ブロック・粒子をわずかに含む。	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルトIV層ブロック・粒子を多く含む。

第92図　第16号掘立柱建物跡



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	P5掘り方	ミガキ	ミガキ	口縁部破片	−	−	−	−	C−150
2	土師器 甕	P4掘り方	ナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	底部	−	6.1	−	−	C−151
3	土師器 甕	P3掘り方	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	口縁部 1/8	(15.2)	−	−	−	C−152
4	土師器 甕	P2掘り方	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	口縁部破片	−	−	−	−	C−153
5	須恵器 甕	P3掘り方	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/10	(28.2)	−	−	−	E− 25

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
6	土錘	P3掘り方	一部欠損。外面オサエ？白針多量に含む。	5.6	1.9	1.7	15.6	0.55	93−9	土−4
7	瓦塔片？	P6掘り方	橙色を呈し、堅緻である。型押しによるとみられる隆起帯が一面に3条、一面に1条認められる。その後に両面はナデ、側面はケズリ調整が行われている。	(5.9)	(4.1)	1.2	−	−	94−15	土−66

第93図　第16号掘立柱建物跡出土遺物

第20号掘立柱建物跡（SB 20）

【位置】 III区　W−0−E〜E6.0　N2〜S2.1

【確認面・重複】主にIV層上面で確認された。第21号溝跡と重複しており、それより古い。また、第13号竪穴住居跡・円形周溝と重複しており、それらより新しい。

【方向・規模】桁行が3間、梁行が2間の東西棟の建物跡である。桁行は北側柱列では総長が5.26mで、柱間は西から1.70m、1.80m、1.76mである。南側柱列では総長が5.48mで、柱間は西から1.88m、1.80m、1.80mである。梁行は西側柱列では総長が3.20mで、柱間は北から1.56m、1.64mである。東側柱列では総長が3.52mで、柱間は北から1.82m、1.70mである。建物の方向は北側柱列でN−81°−W、東側柱列でN−9.5°−Eであり、真北方向にほぼ近い。

【柱穴】柱穴では掘り方は径30〜50cmの円形が多いが、中には方形をなす柱穴もみられる。柱痕跡は多くの柱穴で検出され、それでは径が20〜30cmの円形をなす例が多い。深さは確認面から20〜50cmのものが多い。

【出土遺物】堆積土から土師器破片が1点出土したのみである。

第21号掘立柱建物跡（SB 21）

【位置】 VII区　S69.1〜74.8　E29.7〜40.1

【確認面・重複】IV層上面で確認された。北側はさらに調査区外に延びることも予想される。第23号ピット群の一部と重複しており、それらより新しい。

【方向・規模】東西が4間、南北が2間かそれ以上の建物である。南側柱列は総長が9.76mで、柱間は西から2.20m、2.72m、2.40m、2.44mである。南北方向の西側柱列は総長が4.92mかそれ以上で、柱間は北から1.98m、2.94mである。建物方向は、西側

柱列でN－17°－Eを計り、真北から東に寄っている。

【柱穴】柱穴は掘り方が径30～60cmの円形か楕円形が多く、柱痕跡は径が20cm前後の円形が多い。深さは確認面から20～55cmと幅がみられる。

【出土遺物】柱穴の掘り方および柱痕跡から土師器破片3点・須恵器破片1点出土しているのみである。

第22号掘立柱建物跡（SB 22）

【位置】Ⅷ区　S64.3～71.1　E95.5～101

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。建物の一部とみられ、さらに西側は調査区外に延びている。第31号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。また、東側は第64号溝跡と重複しているが、その新旧関係は明確にはできなかった。

【方向・規模】東西が2間かそれ以上、南北が3間の総柱の建物跡である。東西方向の北側柱列は柱間が1.80m、南側柱列は総長が4.43mかそれ以上で、柱間は西から2.35m、2.08mである。南北方向はP1・4・6・8ラインで、総長が5.58mで、柱間は1.64m、1.72m、2.22mである。そのラインの方向はN－1.5°－Wであり、ほぼ真北方向を向いている。

【柱穴】柱穴は掘り方が30～50cmの円形が多く、柱痕跡は20～30cmの円形を基調としている。深さは確認面から10～46cmと幅がみられる。

【出土遺物】出土していない。

第23号掘立柱建物跡（SB 23）

【位置】Ⅷ区　S43.5～47.2　E95.5～98.1

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。建物の一部とみられ、さらに西側は調査区外に延び、北側は第4号堀跡により失われているものと考えられる。第33号竪穴住居跡と重複しており、それより新しい。また、第25号ピット群の一部と重複しており、これらより古い。

【方向・規模】東西・南北とも1間かそれ以上の建物である。南側柱列は柱間が1.92m、東側柱列は柱間が2.20mである。また、東側柱列の方向はN－0.5°－Eであり、真北方向を向いている。

【柱穴】柱穴は掘り方が長軸が1m前後、短軸が60～70cmのほぼ長方形をなしており、柱痕跡は20～30cmの円形か方形である。深さは確認面から40～50cmである。

【出土遺物】掘り方から土器と土製品が出土したが、図示できたのは土錘のみである。土器は土師器破片6点あり、ロクロで製作されたものとそうでないものがある。

第24号掘立柱建物跡（SB 24）

【位置】Ⅷ区　S22.9～29.4　E101～103.3

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。建物の西側部分とみられ、東側はさらに調査区外に延びている。第35・39・44号溝状遺構と重複しており、第35号よりは古く、第39・44号よりは新しい。また、第26号ピット群の一部と重複しており、それらとは新旧両方の関係を持つ。

【方向・規模】東西が1間かそれ以上、南北が3間の建物で、内部に東西方向の間仕切りが想定される。北側柱列は柱間が1.96m、南側柱列は柱間が1.80mである。また、西側柱列は総長が5.98mで、柱間は北から2.34m、2.36m、1.28mである。その方向はN－13°－Eであり、真北から東に寄っている。

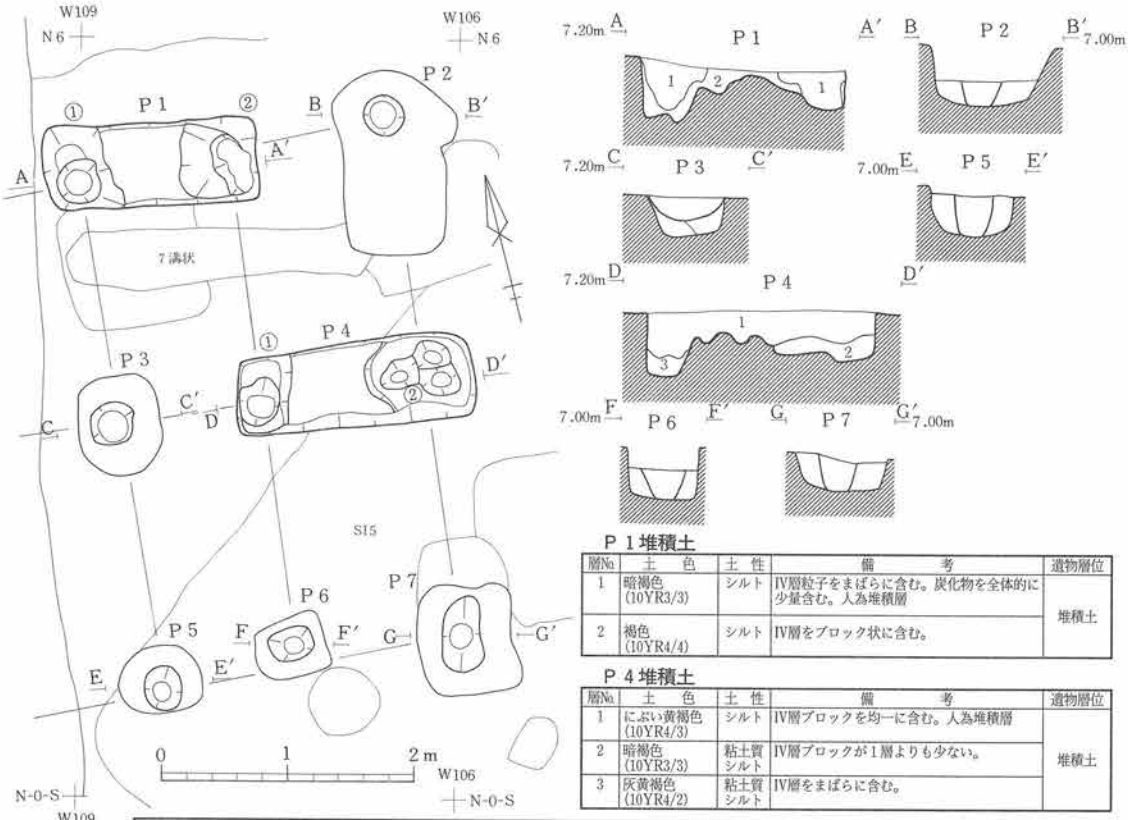
【柱穴】柱穴は掘り方が径30～40cmの円形を、柱痕跡は20cm前後の円形を基調としている。深さは確認面から30～50cmである。

【出土遺物】掘り方・柱痕跡から土師器破片6点・須恵器破片2点が出土しているのみである。

第25号掘立柱建物跡（SB 25）

【位置】Ⅷ区　S9.2～15.9　E97.2～104.2

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。東側はさらに調査区外に延びることも想定される。第27・28



P 1 堆積土

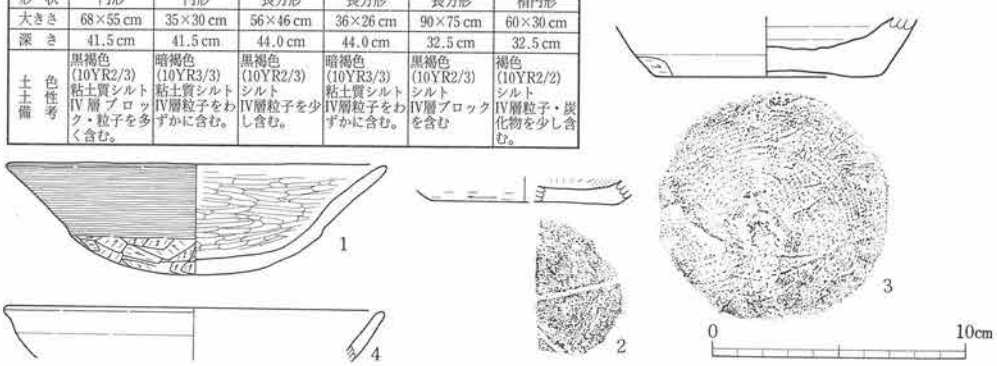
層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層粒子をまばらに含む。炭化物を全体的に少量含む。人為堆積層	堆積土
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	IV層をブロック状に含む。	

P 4 堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	IV層ブロックを均一に含む。人為堆積層	堆積土
2	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層ブロックが1層よりも少ない。	
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	IV層をまばらに含む。	

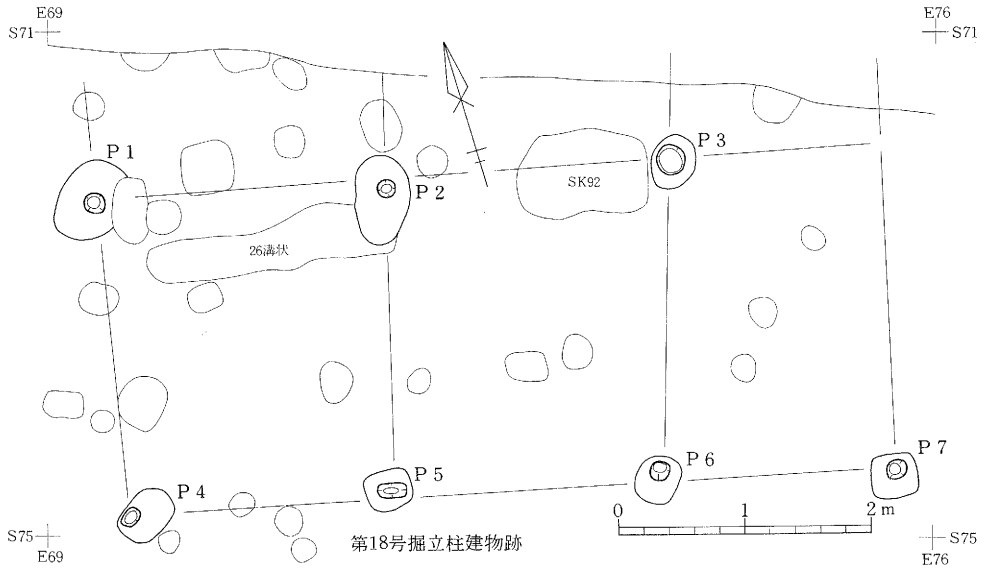
ピットNo. / 項目	P1	P1①	P1②	P2 掘り方	P2 柱痕跡	P3 掘り方	P3 柱痕跡	P4	P4①	P4②
形状	長方形	長方形	正方形	略方形	円形	円形	円形	長方形	長方形	長方形
大きさ	171×66 cm	68×52 cm	68×60 cm	146×83 cm	33×32 cm	79×64 cm	34×33 cm	190×66 cm	60×40 cm	90×70 cm
深さ		56.5 cm	32.5 cm	50.0 cm	50.0 cm	38.0 cm	38.0 cm		52.0 cm	39.5 cm
土色 土性 備考		断面図あり	断面図あり	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト IV層ブロックを多く含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト IV層・炭化物をわずかに含む。	暗褐色 (10YR3/4) シルト IV層ブロックを含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト IV層粒子・炭化物・酸化鉄斑紋をまばらに含む。		断面図あり	断面図あり

ピットNo. / 項目	P5 掘り方	P5 柱痕跡	P6 掘り方	P6 柱痕跡	P7 掘り方	P7 柱痕跡
形状	円形	円形	長方形	長方形	長方形	楕円形
大きさ	68×55 cm	35×30 cm	56×46 cm	36×26 cm	90×75 cm	60×30 cm
深さ	41.5 cm	41.5 cm	44.0 cm	44.0 cm	32.5 cm	32.5 cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト IV層ブロック・粒子を多く含む。	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト IV層粒子をわずかに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト IV層粒子を少し含む。	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト IV層粒子をわずかに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト IV層ブロックを含む	褐色 (10YR2/2) シルト IV層粒子・炭化物を少し含む。



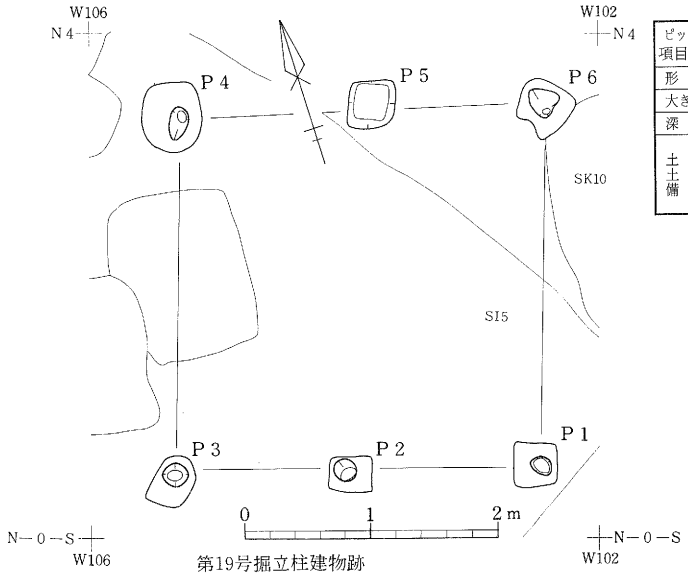
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	P4堆	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	1/2	15.0	10.0	4.4	72－6	C－154
2	土師器 坏	P3堆	ロクロナデ・回転糸切り後回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	底部 1/3	－	7.4	－	－	C－155
3	土師器 甕	P2掘り方	ロクロナデ後ヘラケズリ・回転糸切り	ロクロナデ	底部 1/1	－	9.0	－	－	C－156
4	須恵器 坏	P2掘り方	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/12	(15.1)	－	－	－	E－26

第94図　第17号掘立柱建物跡と出土遺物



第18号掘立柱建物跡

ピットNo.	P1		P2		P3		P4		P5	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	(楕円形)	円形	楕円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	正方形	長方形
大きさ	68×(51)cm	17×15cm	70×42cm	14×14cm	44×34cm	23×21cm	47×33cm	16×12cm	37×32cm	23×12cm
深さ	38.5cm	38.5cm	−	−	12.5cm	12.5cm	39.5cm	14.5cm	21cm	21cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト IV層を多量に含む。	黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト	黒色 (10YR2/1) 砂質シルト IV層を多量に含む。	黒色 (10YR2/1) シルト IV層をわずかに含む。	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト IV層をわずかに含む。	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト	黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト IV層を少量含む。	黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト IV層をわずかに含む。	黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト IV層を多量に含む。	褐色 (10YR4/4) 砂質シルト



第19号掘立柱建物跡

ピットNo.	P6		P7	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	隅丸方形	円形	正方形	円形
大きさ	39×34cm	18×15cm	37×36cm	16×14cm
深さ	31.5cm	31.5cm	23cm	23cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト IV層を多量に含む。	黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト IV層をわずかに含む。	黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト	黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト

ピットNo.	P1		P2		P3		P4		P5	P6	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡
形状	正方形	楕円形	長方形	円形	長方形	円形	長方形	楕円形	正方形	略正方形	三角形
大きさ	35×35cm	18×14cm	34×28cm	19×18cm	42×31cm	21×18cm	56×48cm	27×15cm	18×16cm	43×42cm	24×22cm
深さ	31.0cm	31.0cm	31.0cm	31.0cm	38.0cm	38.0cm	44.0cm	44.0cm	41.5cm	55.0cm	55.0cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) 粘土	黒褐色 (10YR3/2) 粘土 IV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土	黒褐色 (10YR3/2) 粘土 IV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) 粘土	黒褐色 (10YR3/2) 粘土 IV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) シルト IV層を多く含む。	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト 炭化物をわずかに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト IV層を少し、炭化物をわずかに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト IV層柱痕跡より多い。	暗褐色 (10YR3/3) シルト IV層をわずかに含む。

第95図　第18・19号掘立柱建物跡

号掘立柱建物跡と重複しており、前者より古い。後者との新旧関係は不明である。また、第40・41・42号溝状遺構と第26号ピット群の一部と重複しており、いずれよりも新しい。

【方向・規模】桁行が3間かそれ以上、梁行が2間の総柱の建物である。さらに北側に1間の庇が付いている。桁行は北側柱列で総長が6.0mかそれ以上で、柱間は西から2.20m、2.04m、1.76mである。また、南側柱列で総長が6.18mかそれ以上で、柱間は西から2.06m、2.10m、2.02mである。梁行は西側柱列で総長が4.86mで、柱間は北から2.20m、2.66mである。この方向はN－10.5°－Eであり、真北より東に寄っている。

【柱穴】柱穴は身舎部分では掘り方が径30～40cmの円形を、柱痕跡は径10～25cmの円形を基調としている。深さは確認面から30～60cmである。また、庇部分の柱穴は掘り方が20～30cmの円形である。

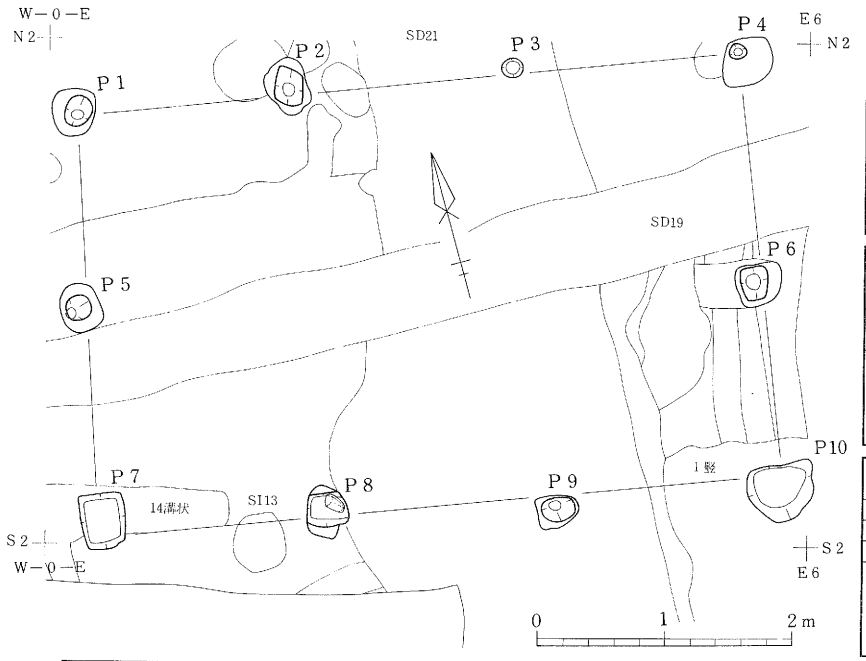
【出土遺物】掘り方・柱痕跡から土師器破片が3点出土しているのみである。

第26号掘立柱建物跡（SB 26）

【位置】Ⅷ区　N4.4～S3.3　E98.3～103.5

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。建物の東側はさらに調査区外に延びることも予想される。第29・30号掘立柱建物跡と重複しているが、これらとの新旧関係は不明である。また、第76号溝跡・第48号溝状遺構と重複しており、これらより新しい。さらに、第26号ピット群のいくつかと重複しており、これらよりも新しい。

【方向・規模】東西は2間かそれ以上、南北は3間の総柱の建物である。東西方向は北側柱列が総長4.64mかそれ以上で、柱間は西から2.64m、2.00m



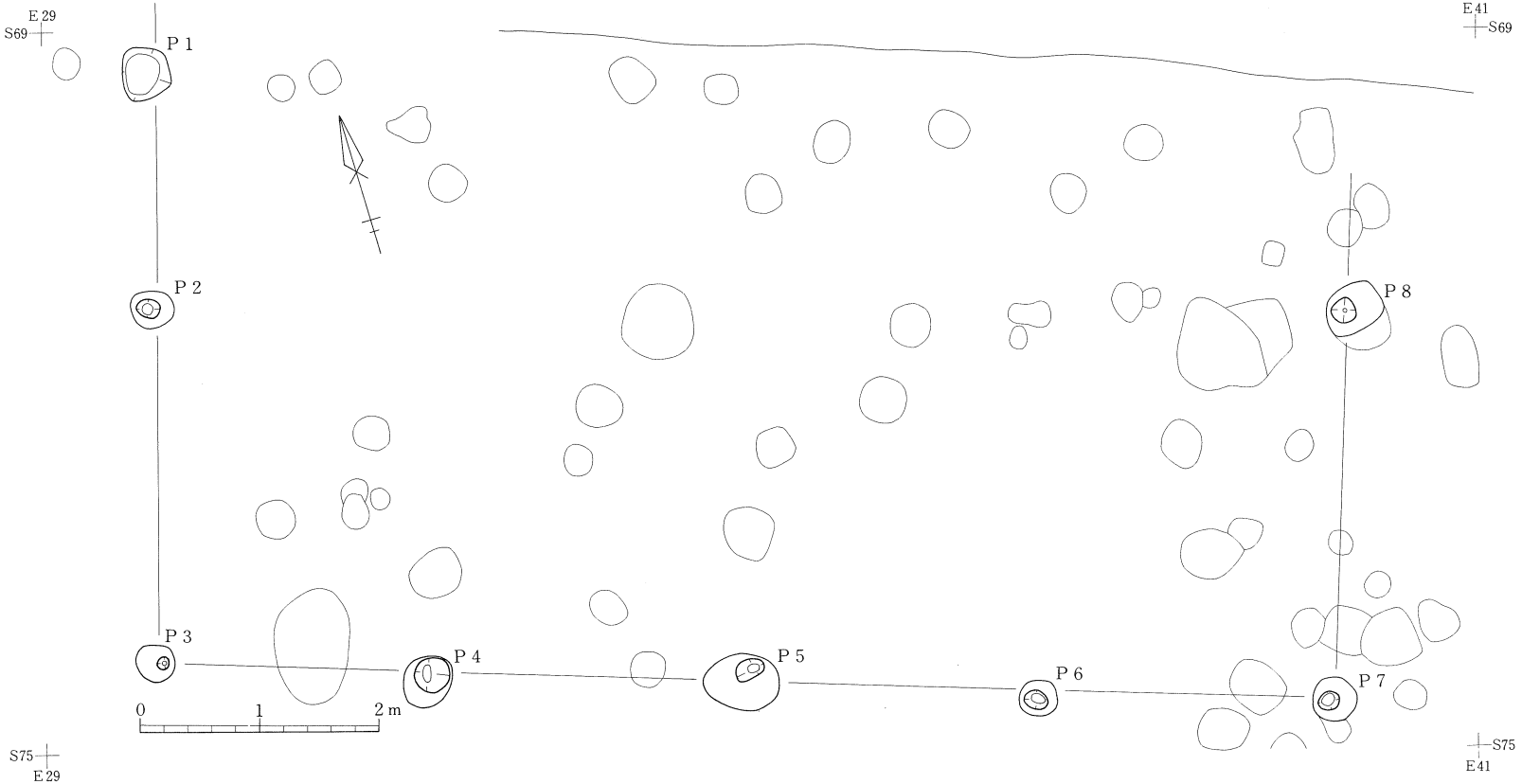
ピットNo.	P1	
項目	掘り方	柱痕跡
形状	円形	楕円形
大きさ	38×37cm	21×15cm
深さ	54 cm	54 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR3/2)シルトⅣ層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトⅣ層ブロック・粒子を少量含む。

ピットNo.	P2	
項目	掘り方	柱痕跡
形状	不整方形	長方形
大きさ	44×32cm	28×23cm
深さ	55.5 cm	50 cm
土色土性備考	暗褐色(10YR3/3)シルトⅣ層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトⅣ層ブロック・粒子を多く含む。

ピットNo.	P3
項目	
形状	円形
大きさ	17×16cm
深さ	7 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR3/2)シルトⅣ層ブロック・粒子を多く含む。

ピットNo.	P4		P5		P6		P7	P8		P9		P10
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	
形状	略円形	円形	円形	円形	正方形	長方形	長方形	不整方形	長方形	略円形	楕円形	略円形
大きさ	40×39cm	15×13cm	39×32cm	21×20cm	34×34cm	28×21cm	44×37cm	40×37cm	37×26cm	33×26cm	26×20cm	52×46cm
深さ	48.5 cm	47 cm	19.5 cm	19.5 cm	19.5 cm	19.5 cm	23 cm	26 cm	25 cm	18 cm	18 cm	27 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR3/2)シルトⅣ層ブロック・粒子を多く含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトⅣ層粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトⅣ層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトⅣ層ブロック・粒子を少し含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトⅣ層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトⅣ層ブロック・粒子を少し含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトⅣ層ブロック・粒子を多量に含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトⅣ層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトⅣ層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトⅣ層ブロック・粒子を多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)シルトⅣ層ブロック・粒子を少量含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトⅣ層ブロック・粒子が混在する。

第96図　第20号掘立柱建物跡



ピット№	P1	P2		P3		P4		P5		P6		P7		P8	
項目		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	正方形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	長方形	円形
大きさ	42×40cm	37×30cm	21×18cm	32×32cm	12×10cm	43×40cm	30×30cm	63×48cm	24×17cm	33×30cm	19×14cm	39×37cm	18×16cm	50×39cm	21×21cm
深　さ	7.5 cm	20.5 cm	20.5 cm	22.5 cm	22.5 cm	43.5 cm	43.5 cm	55.5 cm	55.5 cm	38.5 cm	38.5 cm	32 cm	32 cm	33 cm	33 cm
土色・土性・備考	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトⅣ層ブロックを多量に含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトⅣ層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)砂質シルトⅣ層をわずかに、炭化物を少量含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトⅣ層ブロックを多量に含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトⅣ層をわずかに含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトⅣ層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)砂質シルトⅣ層をわずかに、炭化物を少量含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトⅣ層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)砂質シルトⅣ層をわずかに、炭化物を少量含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトⅣ層ブロックを多量に含む。	黒褐色(10YR3/2)砂質シルトⅣ層をわずかに、炭化物を少量含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトⅣ層を多く、炭化物を少量含む。	黒褐色(10YR3/2)砂質シルト焼土・炭化物を少量含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトⅣ層ブロックを多量に含む。	暗褐色(10YR3/4)砂質シルトⅣ層をわずかに含む。

第97図　第21号掘立柱建物跡

である。また、南側柱列が総長4.68mで、柱間は2.36m、2.32mである。南北方向は西側柱列で総長が7.18mで、柱間は北から2.58m、2.28m、2.32mである。そしてその方向は、N－13°－Eであり、真北から東に寄っている。

【柱穴】柱穴は掘り方が径30～50cmの円形を、柱痕跡が確認された例では径15～20cmの円形を基調としている。深さは確認面から30～50cmの例が多い。

【出土遺物】掘り方から土師器破片1点・須恵器破片1点が出土しているのみである。

第27号掘立柱建物跡（SB 27）

【位置】　Ⅷ区　S10.4～18.6　E98.1～104.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認されている。建物の東側はさらに調査区外に延びることも予想される。第25・28号掘立柱建物跡と重複しており、これらより古い。また、第150号土坑・第40号溝状遺構と重複しており、これらより新しい。さらに、第26号ピット群のいくつかと重複しており、これらとは新旧両方の関係をもつ。

【方向・規模】東西が2間かそれ以上、南北が3間の建物で、東西方向に1間の間仕切りが認められる。

ピットNo	P1		P2	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	円形	円形	円形	円形
大きさ	42×36cm	34×29cm	28×24cm	18×18cm
深　さ	34　cm	28　cm	32.5　cm	28　cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/2) シルト Ⅳ層ブロックをわずかに含む。	灰褐色 (10YR4/1) シルト Ⅳ層小ブロックを少量含む。	黒褐色 (10YR2/2) シルト Ⅳ層ブロックをわずかに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを少量含む。

ピットNo	P3	P4	
項目		掘り方	柱痕跡
形　状	円形	円形	円形
大きさ	24×(18)cm	34×31cm	17×15cm
深　さ	24.5　cm	28.5　cm	29.5　cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/2) シルト Ⅳ層小ブロックをわずかに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層ブロックを少量含む。	黒褐色 (10YR2/2) シルト Ⅳ層小ブロックをわずかに含む。

ピットNo	P5	P6	
項目		掘り方	柱痕跡
形　状	円形	略方形	円形
大きさ	48×42cm	30×23cm	20×18cm
深　さ	16.5　cm	13　cm	9.5　cm
土色 土性 備考	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを少量含む。	褐色 (10YR4/4) 砂質シルト Ⅳ層ブロックを多量に含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを少量含む。

ピットNo	P7	P8		P9	
項目		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	円形	楕円形	円形	略方形	円形
大きさ	26×24cm	36×30cm	23×22cm	55×42cm	40×40cm
深　さ	24　cm	21　cm	22.5　cm	46.5　cm	46.5　cm
土色 土性 備考	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを少量含む。	灰褐色 (10YR4/1) 砂質シルト Ⅳ層ブロックを多量に含む。	灰褐色 (10YR4/1) 砂質シルト Ⅳ層を粒状にわずかに含む。	灰褐色 (10YR4/4) 砂質シルト Ⅳ層ブロックを多量に含む。	灰褐色 (10YR4/1) 砂質シルト Ⅳ層を粒状にわずかに含む。

第98図　第22号掘立柱建物跡

東西方向は北側柱列で総長が5.29mかそれ以上で、柱間は西から1.86m、2.03m、1.40mである。また、南側柱列で総長が5.26mかそれ以上で、柱間は西から2.16m、3.10mである。南北方向は西側柱列で総長が7.56mで、柱間は北から2.58m、2.40m、2.58mである。その方向はN－10.5°－Eで、真北方向より若干東に寄っている。

【柱穴】柱穴は掘り方が径が30～60cmの円形を、柱痕跡が確認された例では径が13～35cmの円形を基調としている。深さは確認面から20～50cmが多い。

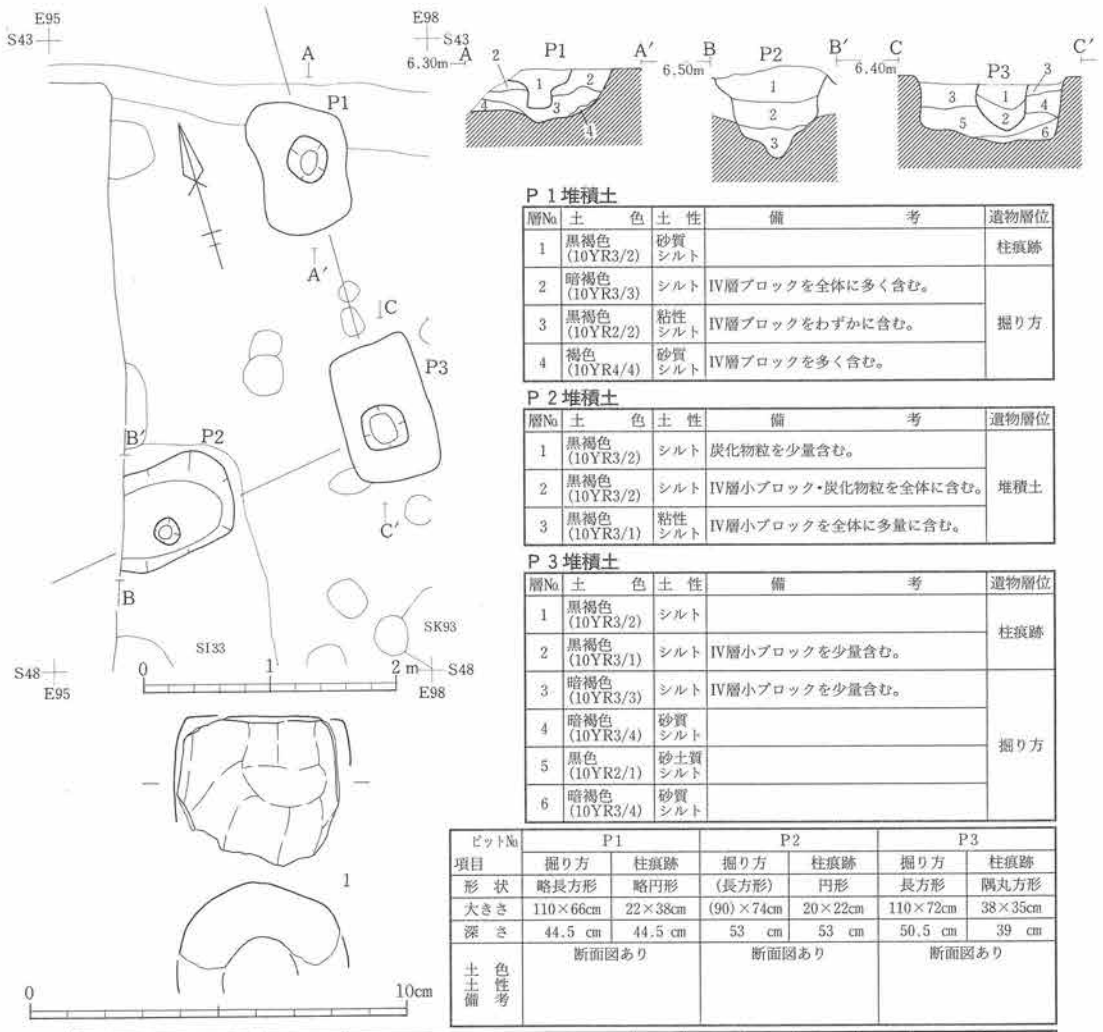
【出土遺物】掘り方・柱痕跡から土師器破片が3点出土したにすぎない。

第28号掘立柱建物跡（SB 28）

【位置】　Ⅷ区　S11.5～18.4　E98.9～102.3

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは建物の西側部分とみられ、東側はさらに調査区外に延びることが予想される。第25・27号掘立柱建物跡と重複しており、後者より新しいが、前者との関係は不明である。また、第100号土坑・第42号溝状遺構と重複しており、これらより新しい。

【方向・規模】東西1間か1間以上、南北2間の建



P 1 堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト		柱痕跡
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロックを全体に多く含む。	掘り方
3	黒褐色 (10YR2/2)	粘性シルト	Ⅳ層ブロックをわずかに含む。	
4	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを多く含む。	

P 2 堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒を少量含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層小ブロック・炭化物粒を全体に含む。	
3	黒褐色 (10YR3/1)	粘性シルト	Ⅳ層小ブロックを全体に多量に含む。	

P 3 堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト		柱痕跡
2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	Ⅳ層小ブロックを少量含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層小ブロックを少量含む。	掘り方
4	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト		
5	黒色 (10YR2/1)	砂土質シルト		
6	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト		

ピットNo	P1		P2		P3	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	略長方形	略円形	(長方形)	円形	長方形	隅丸方形
大きさ	110×66cm	22×38cm	(90)×74cm	20×22cm	110×72cm	38×35cm
深さ	44.5 cm	44.5 cm	53 cm	53 cm	50.5 cm	39 cm
土色土性備考	断面図あり		断面図あり		断面図あり	

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
1	土錘	掘り方	外面オサエ。一部のみ。	－	－	－	(26.6)	－	93-23	土－23

第99図　第23号掘立柱建物跡と出土遺物

物で、北側に１間の庇が付いている。身舎部分の東西方向は柱間が北側柱間で2.90m、東側柱間で2.96mである。南北方向は西側柱列で総長が4.84mで、柱間は北から2.66m、2.18mである。その方向はN－15°－Eで、真北より東に寄っている。

【柱穴】柱穴は掘り方が径30～50cmの円形を、柱痕跡は径20cm前後の円形を基調としている。深さは確認面から18～48cmと幅がみられる。

【出土遺物】柱痕跡から須恵器破片が１点出土したのみである。

第29号掘立柱建物跡（SB 29）

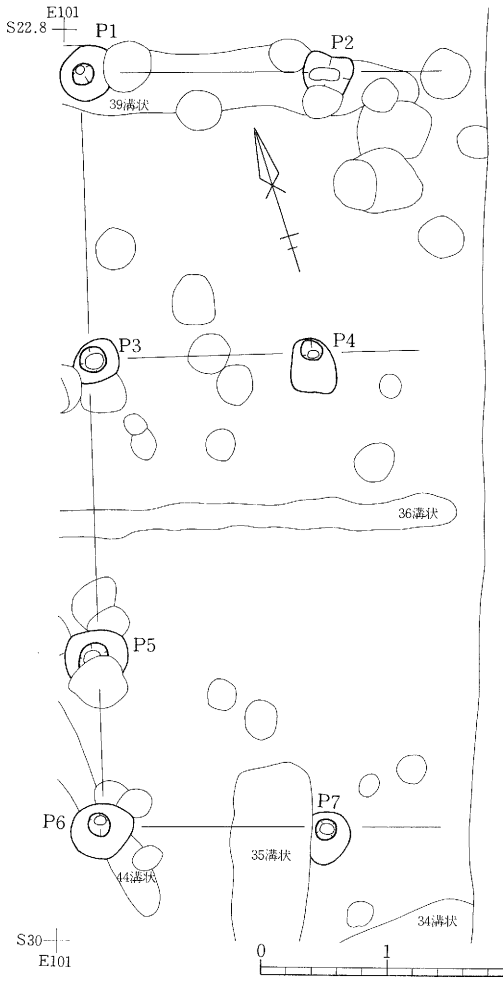
【位置】　Ⅷ区　S0.5～6.9　E104.3～104.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは建物の西側部分で、東側はさらに調査区外に延びている。第26掘立柱建物跡と北側で重複しているが、新旧関係は不明である。また、第26号ピット群の一部と重複しており、それより古い。

【方向・規模】東西１間かそれ以上、南北３間の建物で、西側に１間の庇が付いている。身舎部分の北側柱列は柱間が1.74mで、西側柱列は総長が5.88mで、柱間は北から2.32m、1.94m、1.62mである。その西側柱列の方向はN－11.5°－Eで、真北より東に寄っている。

【柱穴】柱穴は掘り方が径30～50cmの円形を、また確認されている柱痕跡は径が15～20cmの円形を基調としている。深さは確認面から20～50cmである。

【出土遺物】出土していない。



ピットNo.	P1		P2	P3	
項目	掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡
形　状	(円形)	円形	(略方形)	略方形	円形
大きさ	44×(34)cm	16×16cm	36×(24)cm	34×34cm	21×20cm
深　さ	53　cm	18.5 cm	39　cm	37　cm	37　cm
土色 土性 備考	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物・焼土を多く含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物をまばらに含む。

ピットNo.	P4		P5	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	略方形	円形	(円形)	(円形)
大きさ	42×36cm	18×16cm	50×(26)cm	23×(22)cm
深　さ	26.5 cm	26.5 cm	27.5 cm	27.5 cm
土色 土性 備考	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層をわずかに含む。

ピットNo.	P6		P7	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	円形	円形	(円形)	円形
大きさ	47×44cm	18×18cm	42×(32)cm	16×16cm
深　さ	53　cm	50.5 cm	37　cm	37　cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層をまばらに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物をまばらに含む。

第100図　第24号掘立柱建物跡

第30号掘立柱建物跡（SB 30）

【位置】　Ⅷ区　N6.1～S0.3　E101.5～103.8

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは建物の西側部分とみられ、東側はさらに調査区外に続くようである。第26号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。また、第48号溝状遺構と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】東西が１間かそれ以上、南北が３間の建物である。その北側柱列では柱間は1.88m で、西側柱列では総長が5.74m で、柱間は北から1.90m、1.94m、1.90m と規則性がうかがえる。その方向はN－11°－E で、真北より若干東に寄っている。

【柱穴】柱穴は掘り方が径が30～50cmの円形を、柱痕跡は径が15～20cmの円形を基調としている。深さは確認面から20～40cmである。

【出土遺物】出土していない。

第26号ピット群

第31号掘立柱建物跡（SB 31）

【位置】　Ⅷ区　N60～71.3　E95.4～97.9

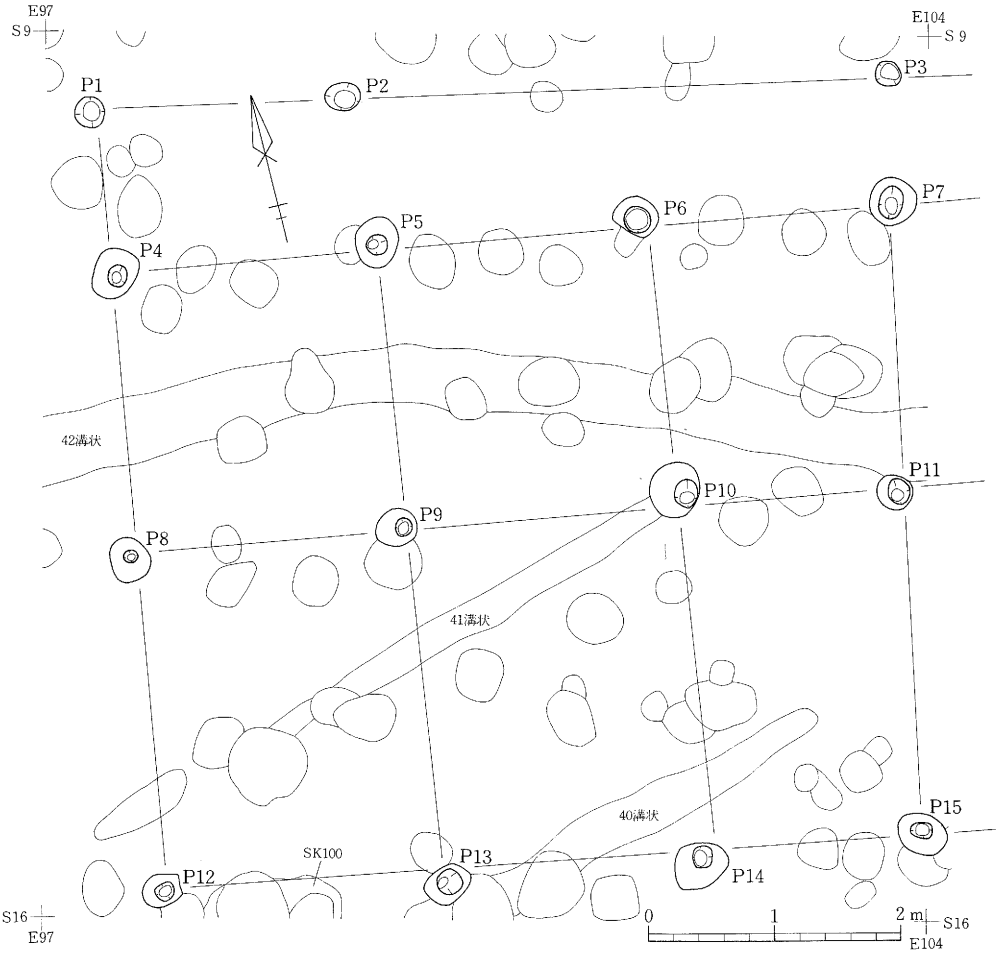
【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。建物の一部とみられ、西側はさらに調査区外へ延びるものと考えられる。第22号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。また、第25号ピット群の一部と重複している。

【方向・規模】東西が１間かそれ以上、南北が５間かそれ以上の建物である。南側柱列は柱間が1.98m、東側柱列は総長が10.54m かそれ以上で、柱間は北から2.22m、2.00m、2.24m、2.04m、2.04m である。その方向はN－3°－E で、ほぼ真北方向を向いている。

【柱穴】柱穴は掘り方が径30～40cmの円形を、確認された柱痕跡は径12～18cmの円形を基調としている。深さは確認面から20～60cmである。

【出土遺物】柱穴内から須恵器破片が１点出土しているのみである。

第26号ピット群と掘立柱建物跡

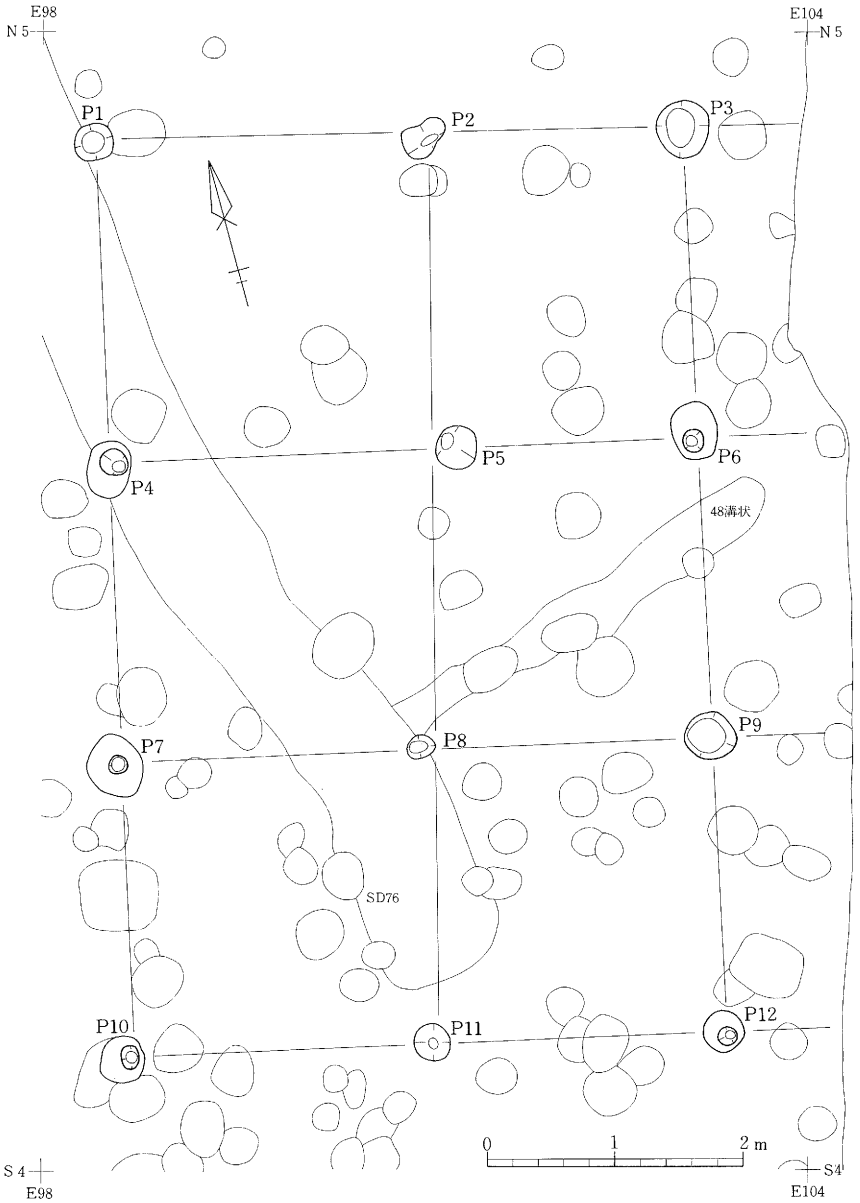


ピットNo. / 項目	P1	P2	P3	P4		P5		P6		P7	
				掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	円形	楕円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	楕円形
大きさ	26×23cm	28×22cm	21×20cm	39×36cm	16×15cm	40×35cm	17×15cm	34×30cm	22×20cm	38×37cm	25×18cm
深さ	8.5 cm	31 cm	10 cm	55 cm	53 cm	61 cm	59 cm	38.5 cm	38.5 cm	41 cm	41 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をまばらに含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物・焼土を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物をまばらに含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物・焼土を含む。

ピットNo. / 項目	P8		P9		P10		P11		P12	
	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形
大きさ	36×32cm	11× 9cm	32×30cm	15×12cm	44×40cm	20×20cm	28×28cm	20×16cm	30×23cm	18×14cm
深さ	18.5 cm	17.5 cm	68 cm	45 cm	38 cm	29.5 cm	43.5 cm	40 cm	42.5 cm	42.5 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をわずかに含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をわずかに含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物・焼土を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をわずかに含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物をまばらに含む。

ピットNo. / 項目	P13		P14		P15	
	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	方形	円形	略方形	円形	円形	楕円形
大きさ	36×28cm	20×20cm	42×36cm	17×16cm	40×34cm	16×12cm
深さ	57.5 cm	57.5 cm	53 cm	53 cm	52 cm	52 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物・焼土を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物・焼土を多く含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物・焼土を多く含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物・焼土を含む。

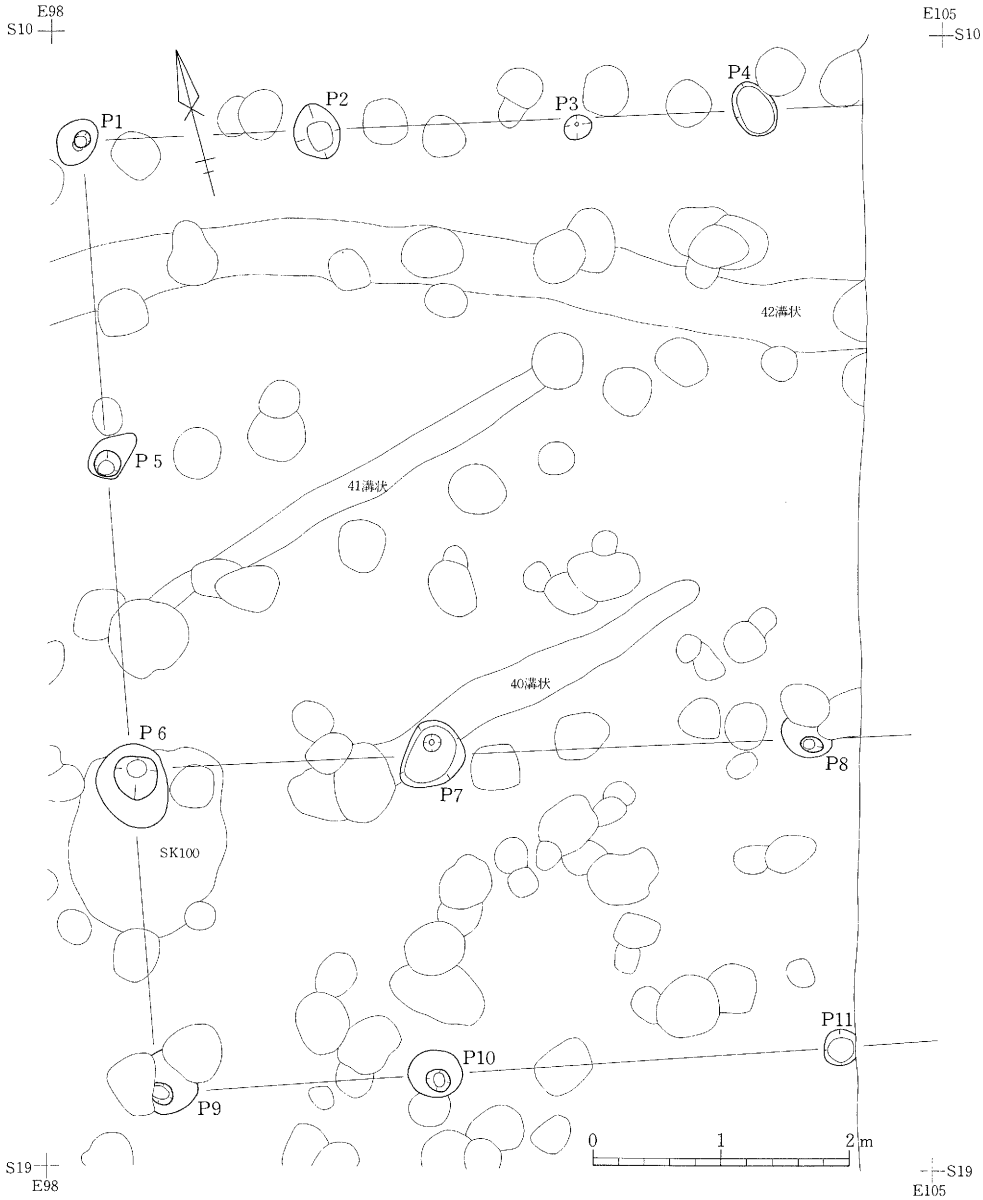
第101図　第25号掘立柱建物跡



ピットNo. / 項目	P1	P2	P3	P4		P5	P6		P7	
				掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	円形	不整円形	円形	楕円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形
大きさ	32×29cm	37×22cm	45×40cm	44×34cm	21×20cm	34×32cm	44×36cm	18×18cm	48×44cm	15×15cm
深　さ	24.5 cm	28 cm	45.5 cm	57 cm	57 cm	29 cm	46 cm	46 cm	50 cm	46 cm
土色土性 備考	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層をまばらに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物をまばらに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層をわずかに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物をまばらに含む。

ピットNo. / 項目	P8	P9	P10		P11	P12	
			掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡
形　状	円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形
大きさ	24×19cm	40×38cm	36×32cm	19×14cm	30×29cm	33×32cm	16×13cm
深　さ	13 cm	46 cm	61.5 cm	61.5 cm	23.5 cm	32.5 cm	31.5 cm
土色土性 備考	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層をまばらに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物・焼土を多く含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物をまばらに含む。

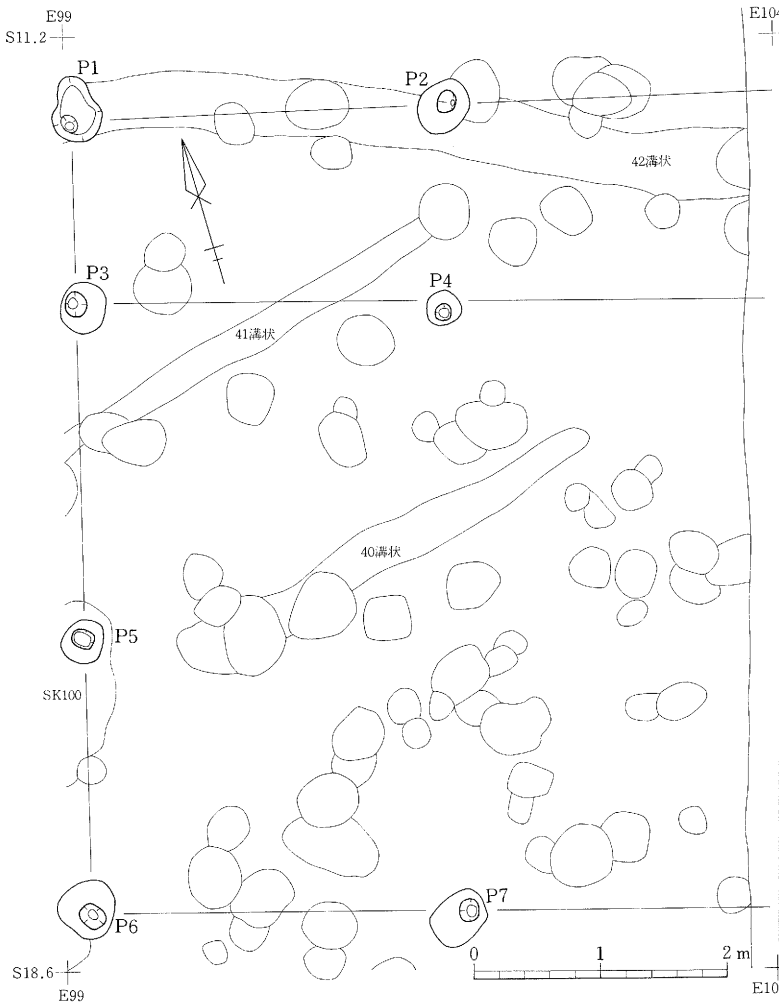
第102図　第26号掘立柱建物跡



ピットNo.	P1		P2	P3	P4	P5		P6	
項目	掘り方	柱痕跡				掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形　状	円形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形
大きさ	40×30cm	13×13cm	45×37cm	22×20cm	44×31cm	44×28cm	21×21cm	68×55cm	35×33cm
深　さ	29.3 cm	25.5 cm	36 cm	29 cm	20 cm	13 cm	12 cm	36 cm	36 cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物・焼土を含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物をまばらに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物・焼土を含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層をわずかに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層粒子をわずかに含む。	黒褐色 (10YR3/1) シルト Ⅳ層ブロックを含む。

ピットNo.	P7	P8		P9		P10		P11
項目		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	
形　状	楕円形	(円形)	円形	(円形)	(円形)	円形	円形	円形
大きさ	58×48cm	42×(23)cm	17×13cm	49×(25)cm	17×(13)cm	44×38cm	18×18cm	29×(22)cm
深　さ	36 cm	56.5 cm	56.5 cm	31.5 cm	31.5 cm	28.5 cm	28.5 cm	50 cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト Ⅳ層をわずかに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物・焼土を含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物をまばらに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物をまばらに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物・焼土を含む。

第103図　第27号掘立柱建物跡



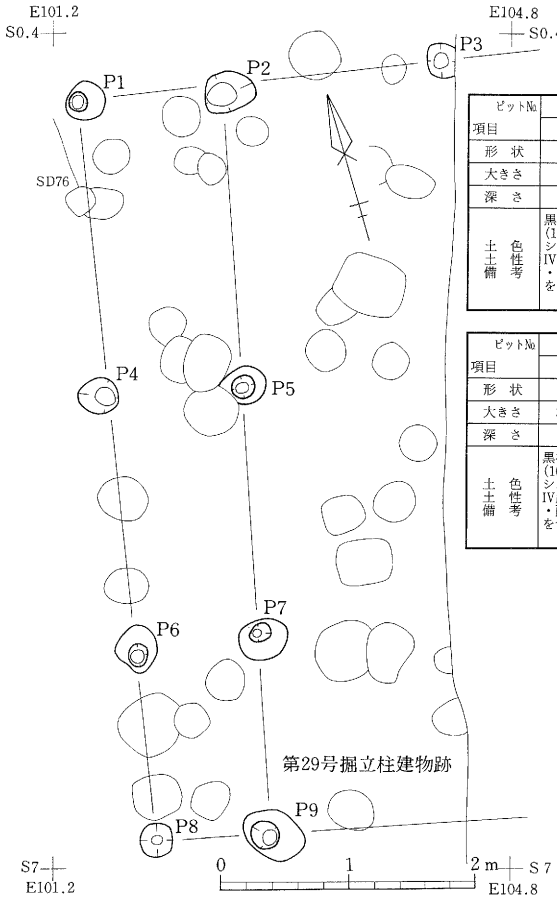
ピットNo.	P1	P2	
項目		掘り方	柱痕跡
形状	不整円形	円形	円形
大きさ	52×35cm	45×38cm	16×15cm
深さ	18 cm	48 cm	48 cm
土色 土性 備考	暗褐色 (10YR3/3) シルト IV層ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト IV層ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト IV層をわずかに含む。

ピットNo.	P3		P4	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	円形	円形	円形	円形
大きさ	40×35cm	18×17cm	28×26cm	13×13cm
深さ	40 cm	35.5 cm	38.5 cm	33 cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR2/3) シルト IV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト IV層をわずかに含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト IV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト IV層をわずかに含む。

ピットNo.	P5		P6	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	円形	楕円形	略方形	円形
大きさ	34×34cm	18×16cm	48×44cm	22×18cm
深さ	34 cm	34 cm	25 cm	25 cm
土色 土性 備考	暗褐色 (10YR3/3) シルト IV層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物をまばらに含む。	暗褐色 (10YR3/3) シルト IV層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色 (10YR2/3) シルト 炭化物をまばらに含む。

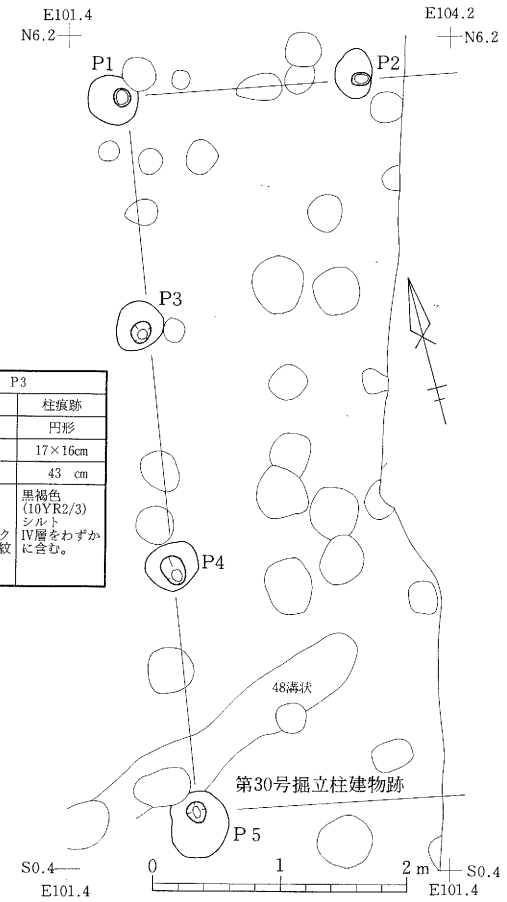
ピットNo.	P7	
項目	掘り方	柱痕跡
形状	長方形	円形
大きさ	47×34cm	16×15cm
深さ	58 cm	58 cm
土色 土性 備考	暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト IV層をわずかに、酸化鉄斑紋を含む。	暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト IV層をわずかに含む。

第104図　第28号掘立柱建物跡



ピットNo	P1		P2	P3	P4	P5	
項目	掘り方	柱痕跡				掘り方	柱痕跡
形状	円形	円形	略円形	(円形)	円形	(円形)	円形
大きさ	30×30cm	16×14cm	40×30cm	29×(22)cm	32×28cm	34×30cm	20×18cm
深さ	20 cm	20 cm	26 cm	21 cm	34.5 cm	35.5 cm	35.5 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をまばらに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をまばらに含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物をまばらに含む。

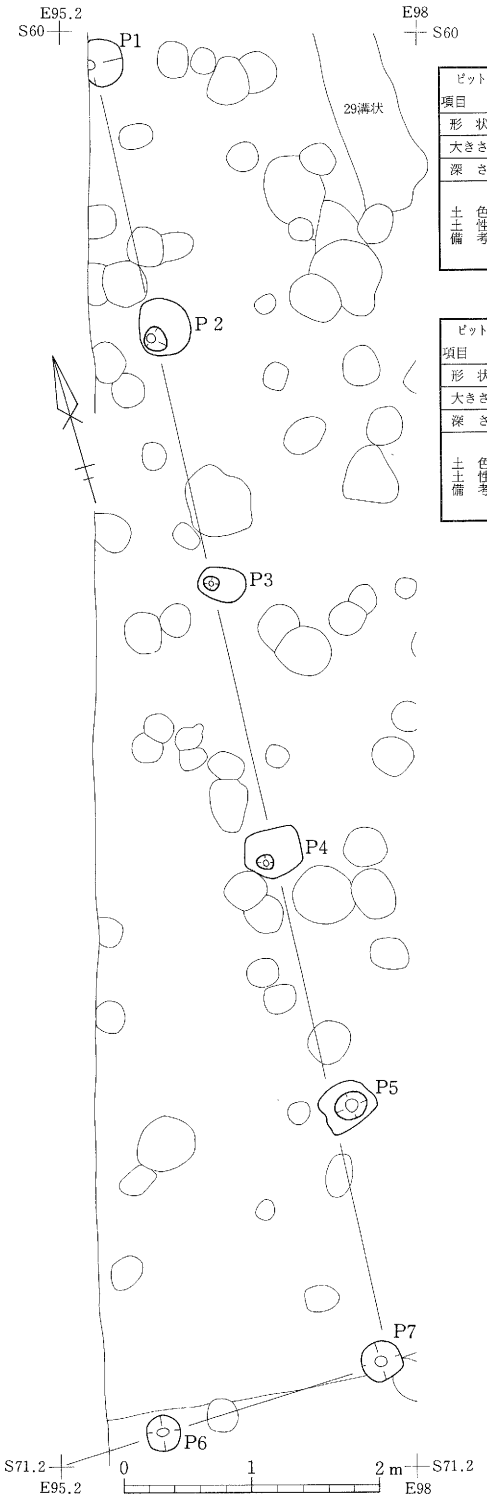
ピットNo	P6		P7		P8	P9	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡		掘り方	柱痕跡
形状	略円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形
大きさ	38×34cm	19×16cm	38×32cm	16×14cm	29×25cm	50×36cm	22×21cm
深さ	21 cm	21 cm	49.5 cm	49.5 cm	31.5 cm	43.5 cm	43.5 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物をまばらに含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物をまばらに含む。



ピットNo	P1		P2		P3	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	円形	円形	楕円形	楕円形	円形	円形
大きさ	42×(36)cm	14×14cm	40×31cm	17×10cm	39×36cm	17×16cm
深さ	25 cm	23 cm	32 cm	26 cm	43 cm	43 cm
土色土性備考	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をわずかに含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をわずかに含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層ブロック・酸化鉄斑紋を含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をわずかに含む。

ピットNo	P4		P5	
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	円形	楕円形	円形	円形
大きさ	40×36cm	24×18cm	52×44cm	17×16cm
深さ	26 cm	17 cm	65.5 cm	35.5 cm
土色土性備考	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色(10YR2/3)シルト炭化物をまばらに含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層小ブロックを多量に、酸化鉄斑紋を少量含む。	黒褐色(10YR2/3)シルトIV層をわずかに含む。

第105図　第29・30号掘立柱建物跡



ピットNo. / 項目	P1	P2		P3		P4	
		掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	(円形)	円形	円形	楕円形	円形	方形	円形
大きさ	38×(27)cm	44×40cm	18×18cm	36×26cm	12×12cm	43×38cm	13×12cm
深さ	46.5 cm	42 cm	22 cm	48.5 cm	32.5 cm	38 cm	39 cm
土色・性質・備考	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層小ブロックを少量含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層ブロックをわずかに含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層小ブロックをわずかに含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層ブロックをわずかに含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層小ブロックを少量含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層ブロックをわずかに含む。	灰褐色(10YR4/1)砂質シルトIV層を粒状にわずかに含む。

ピットNo. / 項目	P5		P6	P7
	掘り方	柱痕跡		
形状	略方形	円形	円形	円形
大きさ	42×36cm	24×22cm	28×26cm	32×31cm
深さ	40 cm	40 cm	61.9 cm	37 cm
土色・性質・備考	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層ブロックをわずかに含む。	黒褐色(10YR2/2)シルトIV層小ブロックをわずかに含む。	暗褐色(10YR3/3)シルトIV層小ブロックを少量含む。	灰褐色(10YR4/1)砂質シルトIV層を粒状にわずかに含む。

第106図　第31号掘立柱建物跡

3．ピット群

第1号ピット群（1G）

いずれもⅠ区西端部のⅣ層上面で確認された。第1号竪穴住居跡・第1号小溝状遺構群と重複し、これらよりも新しい。全部で28個のピットが検出された。その中で柱痕跡が確認されたのは4個であるが、その他のピットも含めて、配置状況に規則性は認められなかった。ピットは全体的に規模が小さく径が23～30cm、深さも浅く10～20cmである。柱痕跡は円形が多く、径は20cm前後である。

出土遺物で図示できたのは土師器1点のみである。この他に土師器破片4点（非ロクロ）・須恵器破片1点が出土している。

第2号ピット群（2G）

Ⅰ区西側のⅣ層上面で確認された。第1・4・5・6号溝跡と重複しており、それらより古いピットと新しいピットがあり、一定していない。ピットは44個検出された。その中で柱痕跡が確認されたのは13個である。ピットは円形が多く、全体的に規模が小さく、ほとんどが20～30cmで、深さは10～20cmが多い。また、柱痕跡は円形で径が10～20cmである。建物跡は確認されなかったが、ピットの中で列状に規則性がみられるピットがある。これらに全て柱痕跡が認められたわけではないが、配置から一連のものと考え、柱穴列と呼ぶことにする。柱穴列は2条認められるが、その中の1個の柱穴は重複している。A列はN－68°－Wの方向で、長さ7.2mの間に5個の柱穴が一直線に並ぶ。B列はN－79°－Wの方向で、長さ約6 mの間に5個の柱穴が一直線に並ぶ。

出土遺物はなかった。

第3号ピット群（3G）

Ⅰ区中央のⅣ層上面で確認された。第9号溝跡・第4号溝状遺構・第6号土坑などと重複するが、新旧関係はピットによって異なる。ピットは14個検出された。その中で柱痕跡が認められたのは1個だけである。ピットは全体的に規模が小さく、円形で径がほとんどが20～30cmで、深さは16～28.5cmである。建物跡は確認されなかった。ピットは散在しており、特に規則性が認められなかった。

出土遺物で図示できたものはなく、破片で土師器が3点（非ロクロ）出土したのみである。

第4号ピット群（4G）

Ⅰ区東端部のⅣ層上面で確認された。一部は第12号溝跡に切られており、それより古い。第1・2号掘立柱建物跡に関わるピットを除いて、その付近から46個の組み合わないピットが検出された。その中で柱痕跡が検出されたのが25個もあり、また規模などからこれらのピットの大半は柱穴と考えられる。したがって周辺の調査によって掘立柱建物跡として組み合うピットが検出される可能性が考えられる。柱痕跡をもつピットは概して径30～40cmの円形の掘り方をもち、柱痕跡は径20cm前後である。ピットの中には、底面あるいはその上位に礎石として河原石が置かれている例が5ヶ所で確認された。

出土遺物で図示できたものは土師器1点のみで、他に土師器破片7点（非ロクロ）・鉱滓2点が出土している。図示した土師器はピットの堆積土中から出土したもので、内面黒色処理の埦である。

第5号ピット群（5G）

Ⅱ区西端の第4号竪穴住居跡周辺から6個のピットが検出された。どのピットからも柱痕跡は確認されず、また相互に規則性は認められない。

出土遺物で図示できたものはなく、破片で土師器6点（非ロクロ）・須恵器1点出土したのみである。

第6号ピット群（6G）

第3・4・16・17・19号掘立柱建物跡に関わるピッ

トを除いて、その付近から35個のピットが検出された。いずれもII区西端のIV層上面で確認された。一部は第15号溝跡に切られており、それより古い。その中で柱痕跡が確認されたのは25個もあり、また、規模などからこれらの多くは柱穴と考えられる。柱痕跡をもつピットは概して径30cm前後の掘り方をもち、柱痕跡は径15～20cmである。

出土遺物で図示できたものは須恵器1点・土錘1点・磨面をもつ礫1点で、この他に土師器破片7点（非ロクロ）・須恵器破片1点・鉱滓2点が出土している。

第7号ピット群（7G）

II区中央部で28個のピットが検出された。第16号溝跡とは新旧両方の関係をもつ。柱痕跡が確認されたのは5個のみである。ピットは全体的に規模が小さく、径は20～30cmの円形を、柱痕跡は15～20cmの円形をなすものが多い。配置においてピット相互の規則性は認められなかった。

出土遺物で図示できたものは土師器7点・赤焼土器1点である。この他に破片では土師器が38点（ロクロ・非ロクロ）出土している。図示した土器のほとんどがP20の堆積土からまとまって出土しており、中でも土師器坏は2点が正位に重なって出土している。

第8号ピット群（8G）

II区中央の東寄りで、34個のピットが検出された。その一部は第9号竪穴住居跡・第13号溝状遺構を切っており、これらより新しい。ピットは全体的に規模が小さく、径が20～30cmの円形をなすものが多い。その中で柱痕跡が確認されたのは11個あり、それらは径が15～20cmの円形をなしている。配置においてピット相互の規則性は認められなかった。

出土遺物で図示できるものはなく、土師器破片が3点（非ロクロ）出土したのみである。

第9号ピット群（9G）

II区東端部で33個のピットが検出された。第10号竪穴住居跡やその他の遺構よりも新しいピットが多い。ピットは概して規模が大きく、中でも径が40cm前後の円形のピットが多い。柱痕跡が確認されたのはその中の21個で、それは大半が20cm前後の円形をなしている。柱痕跡が確認されたピットで注目されるのはP1で、長軸が約1m、短軸が60cmの長方形の掘り方規模をもち、柱痕跡は円形で径が20cmである。しかし、このピットも含めて全体的な配置に規則性は認められなかった。

出土遺物で図示できるものはなく、土師器破片が10点（非ロクロ）・須恵器破片が1点出土している。

第10号ピット群（10G）

III区の南端部のIV層上面から21個のピットが検出された。これらは大半が径20cm前後の円形のピットであり、深さは10～20cmの浅いものである。柱痕跡が認められたのは7個であるが、その他のピットも含めて、全体の配置状況に規則性は認められない。

出土遺物は図示した須恵器1点のみで、この他に遺物はない。

第11号ピット群（11G）

III区中央部のIV層上面から確認された。第20号掘立柱建物跡に関連するピットを除いて、その付近から37個のピットが検出された。柱痕跡の確認されたピットもあるが、これらのピットは規模がまちまちで、また配置状況などにも規則性は認められなかった。

出土遺物で図示できたものは磨面をもつ礫1点のみで、この他に土師器破片7点（非ロクロ）出土している。

第12号ピット群（12G）

III区中央の北側のIV層上面で確認された。第5号

掘立柱建物跡に関わるピットを除いて、その付近から57個のピットが検出された。その中で柱痕跡が確認されたのは25個である。規模には大小まちまちであるが、概して小規模なピットは径が20～30cmの円形のピットが多い。また、柱痕跡は径20cm前後の円形である。配置状況には規則性は認められなかった。

出土遺物で図示できるものはなく、土師器破片が13点（非ロクロ）出土している。

第13号ピット群（13G）

III区西端からIV区にかけて、IV層上面で確認された。いずれのピットも第16号竪穴住居跡より新しく、また、第26号溝跡とは新旧両方の関係をもつ。第6・7・8号掘立柱建物跡に関わるピットを除く、約180個のピットが南北15m、東西15mの範囲から密集して検出された。これらのピット群はさらに西と東の調査区外に延びている。柱痕跡が確認されたのはその中の1／3強である。規模はまちまちで一定しておらず、径が20～40cmで、円形をなす例が多い。また、柱痕跡は概して15～20cmの円形である。ピット群の配置状況からは規則性を把握するとはできなかった。しかし、柱痕跡をもつピットが多いことから大半は柱穴であり、その多くは建物に関わるものと考えられる。

出土遺物で図示できたものは土師質土器・土錘・鉄製の釘・石製の硯がそれぞれ1点ずつである。この他に土師器破片が7点・土師質土器破片1点・鉱滓が1点出土している。土師質土器は手づくね成形の皿である。

第14号ピット群（14G）

IV区の北端部のIV層上面で確認された。第9号掘立柱建物跡に関わるピットを除く、9個のピットが検出された。そのほとんどから柱痕跡が確認されている。ピットは掘り方が径が30cm前後で、円形を、柱痕跡は20cm前後の円形をなしている。いずれも散在しており、配置状況に規則性は認められなかった。

出土遺物はなかった。

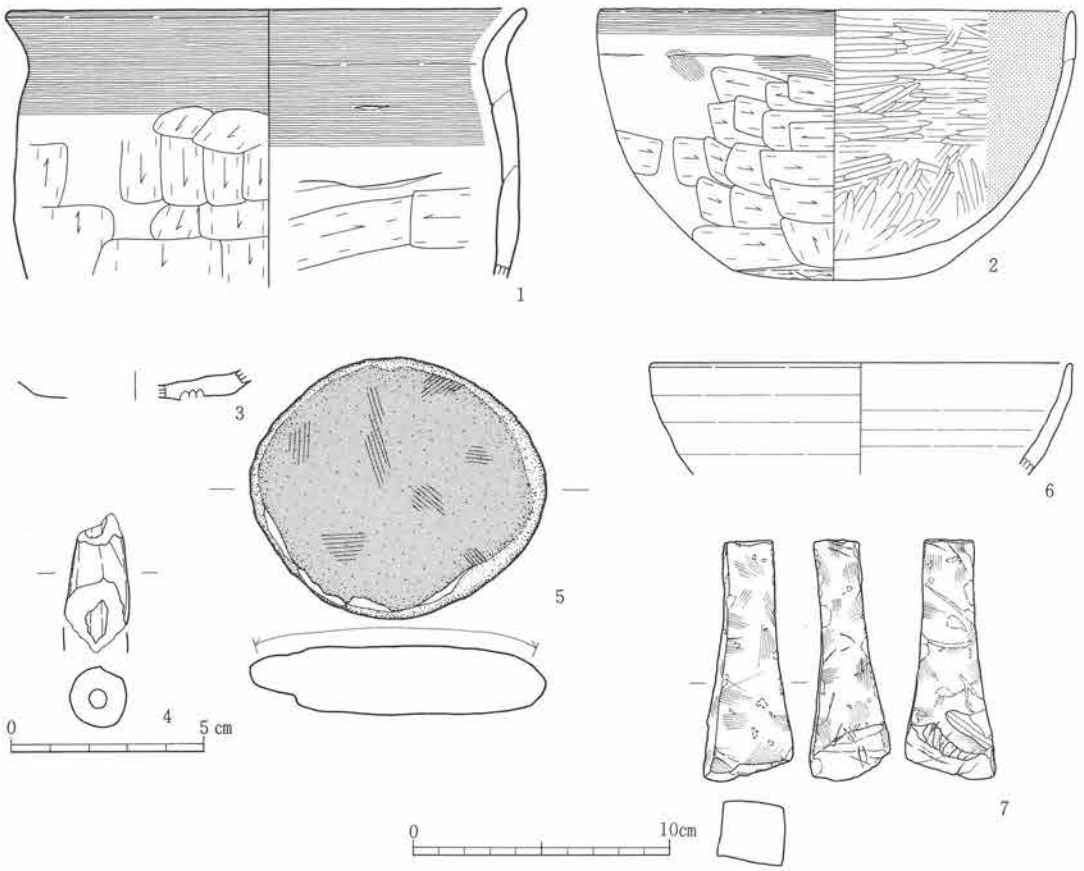
第15号ピット群（15G）

IV区の南北方向の調査区のIV層上面から確認された中から第10・11・12号掘立柱建物跡と関わるピットを除いて、他のピットを一括した。約100個のピットが検出されている。そしてその中の42個のピットで柱痕跡が確認された。規模は大小まちまちだが、径20～30cmの円形をなす小規模なピットが多い。柱痕跡は15～20cmで円形である。その他に平面形が方形を基調とし、一辺70cmの大規模な掘り方をもつピットも検出されている。ピットはいずれも配置状況に規則性は認められなかった。しかし、柱痕跡をもつピットが多いことから、大半は柱穴と考えられる。

出土遺物で図示できたのは砥石1点のみで、この他に土師器破片が10点（ロクロ）・須恵器破片1点・肥前産とみられる白磁破片1点が出土している。

第16号ピット群（16G）

V区西半部のIV層上面で確認され、その中で第14号掘立柱建物跡に関わるピットを除いたその他を一括した。ピットの総数は95個である。重複するピットは主に第18～20号竪穴住居跡より新しく、第33号溝跡より古い。柱痕跡が確認されたのはほぼ半数である。ピットは規模は大小まちまちだが、径が40～50cmの比較的大きいピットが目立つ。平面形は円形か方形である。柱痕跡は径が20cm前後の円形である。ピットの中で列状に規則的な配置状況を示す箇所が認められた。これらは一連のものと考え、柱穴列と呼ぶことにする。柱穴列の方向はN－71°－Wで、径が20～30cmの円形柱穴が5個並んでいる。それぞれの柱間は2.4m前後である。その他のピットにはあまり規則性は認められなかったが、柱痕跡が多くのピットで確認されていることから、大半は柱穴と



第１号ピット群

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	P4 堆	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ケズリ	口縁部～体部1/5	(20.4)	－	－	－	C-157

第４号ピット群

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	土師器 壺	P2 堆	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	全体の2/3	18.6	7.0	10.7	73-12	C-158

第６号ピット群

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	須恵器 坏	P61 堆	ロクロナデ	ロクロナデ	底部1/5	－	－	－	－	E-27

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
4	土錘	P3 堆	両端欠損。外面ケズリ、オサエ後一部ミガキ。白針わずかに含む。	(3.3)	1.7	1.6	(6.8)	0.5	93-15	土-3

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
5	磨面をもつ礫	P3 堆	偏平な礫を利用。一面に磨面認められる。	10.4	11.7	3.0	485	安山岩	－	石-101

第10号ピット群

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	須恵器 坏	P1 柱痕跡	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部1/8	(16.6)	－	－	－	E-28

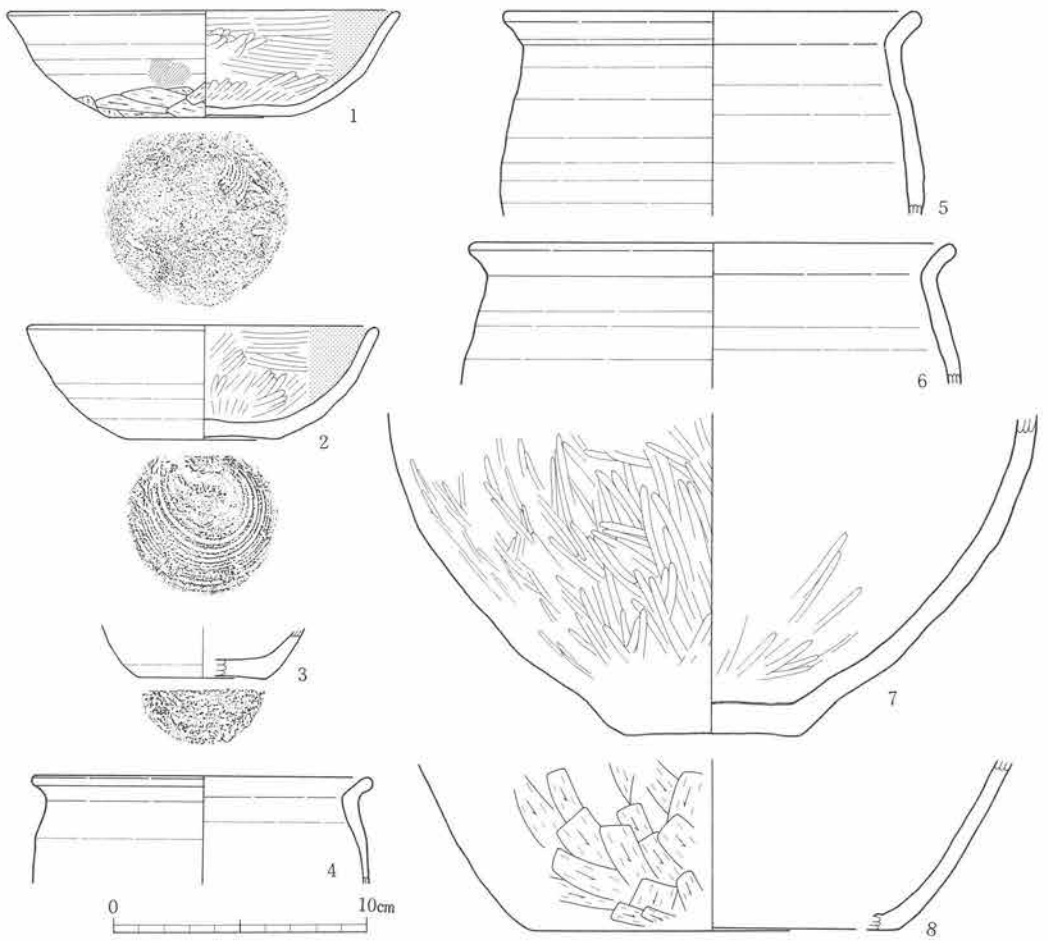
第15号ピット群

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
7	砥石	P75 堆1層	完形。方柱状。一方に細くなっており、その端面は折損した可能性もある。硬質でシルト質状の石材。気孔を所々に含む。砥面は4面。	9.7	3.6	3.3	112	石英安山岩質凝灰岩	97-4	石-51

第107図　第１・４・６・10・15号ピット群出土遺物

考えられる。

出土遺物で図示できたものは土師器２点で、この他に土師器破片が27点（非ロクロ）・須恵器破片３点が出土している。



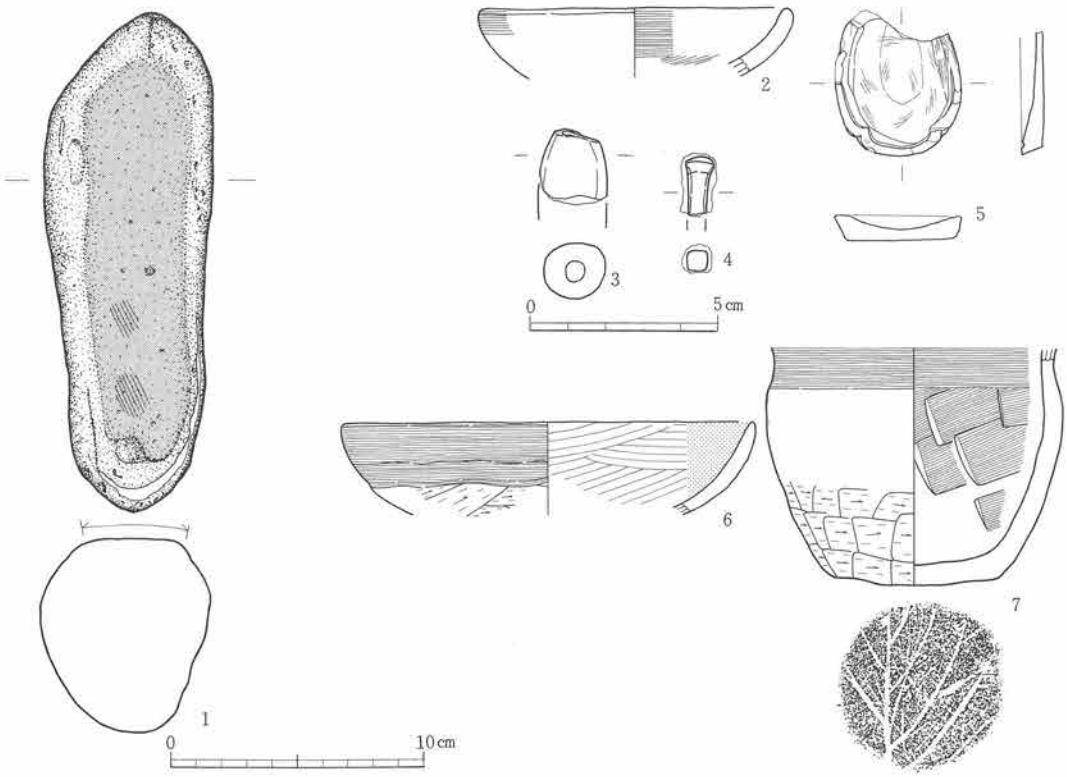
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	P20 堆	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り後手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	一部欠損	15.4	7.3	4.2	73-16	C-159
2	土師器 坏	P20 堆上面	ロクロナデ・底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	一部欠損	13.9	6.0	4.5	73-15	C-160
3	赤焼土器 坏	P20 堆上面	ロクロナデ・底部回転糸切り	ロクロナデ	体部～底部1/3	－	(5.2)	－	－	赤-1
4	土師器 甕	P20 堆上面	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/4	(13.4)	－	－	－	C-161
5	土師器 甕	P20 堆上面	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部	(16.2)	－	－	－	C-162
6	土師器 甕	P20 4層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/3	(18.8)	－	－	－	C-163
7	土師器 甕	P1 堆	ヘラミガキ	ヘラミガキ	体部～底部1/2	－	(6.8)	－	－	C-164
8	土師器 甕	P20 堆上面	ヘラケズリ	ロクロナデ	体部～底部1/5	－	(14.6)	－	－	C-165

第108図　第７号ピット群出土遺物

第17号ピット群（17G）

V区中央部のIV層上面で確認された。重複するピットは第21号竪穴住居跡よりは新しく、第34号溝跡より古い。10個のピットが検出され、その中で柱痕跡が確認されたのは3個である。規模は大小まちまちであり、中には一辺が50cmを越える、方形基調のピットも認められる。

出土遺物で図示できたものはなく、非ロクロの土師器破片が2点出土したのみである。



第11号ピット群

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
1	磨面をもつ礫	P16 堆	円棒状な礫を利用。一面に磨面が認められる。	19.8	6.8	7.7	1,090	石英安山岩	−	石-109

第13号ピット群

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	土師質土器 皿	P62 堆	外面ヨコナデ。内面はヨコナデ。ナデ。白針わずかに含む。手づくね成形。	−	−	口縁部1/12	(12.5)	−	−	−	I-1

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
3	土錘	P58 堆	一端のみ。	(2.0)	1.8	1.5	(3.7)	0.55	−	土-10

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
4	鉄製品 釘	P151 堆	頭部。断面は方形に近い角釘。	(1.5)	0.4	0.55	(2.0)	−	N-12

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
5	石硯	P44 堆	一部欠損。四葉硯のタイプ。裏面は平坦である。内面は良く使い込まれている。	(5.9)	5.0	0.9	(26.8)	粘板岩	96-2	石-28

第16号ピット群

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	土師器 坏	P103 堆	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部〜体部1/8	(16.4)	−	−	−	C-166
7	土師器 甕	P77 堆	ヨコナデ・ヘラケズリ。底部木葉痕。	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部のみ欠損	−	6.5	−	75-3	C-167

第109図　第11・13・16号ピット群出土遺物

第18号ピット群（18G）

Ⅴ区中央の東側のⅣ層上面で確認されたピットを一括した。総数20個あり、その中の４個から柱痕跡が確認された。規模は概して小さく、径20～30cmの円形をなすものが多い。配置状況などに規則性は認められなかった。

出土遺物で図示できたものはなく、土師器破片12点（ロクロ・非ロクロ）・須恵器破片１点が出土している。

第19号ピット群（19G）

Ⅵ区西端からⅦ区西側の調査区にかけて、Ⅳ層上面から確認されたピットを一括した。総数39個あり、その中の13個から柱痕跡が確認された。重複するピットは第24号竪穴住居跡より新しく、第１号掘立柱建物跡より古い。ピットは比較的規模が大きく、径が60cm前後の円形をなすものが目立つ。また、柱痕跡は径が20～30cmの円形である。これらのピットでは配置などから規則性を把握することはできなかったが、規模や柱痕跡をもつ例があることから多くは柱穴と考えられる。

出土遺物で図示できたものは土師器10点・須恵器６点・陶器１点・弥生土器４点・土錘１点・鉄製の刀子２点・砥石１点である。この他に土師器破片317点（ロクロで製作されたものが多い）・赤焼土器破片３点・須恵器破片50点・鉱滓２点が出土している。図示した土師器の坏には製作に際しロクロを使用していないものと使用しているものとの両者があり、後者は回転糸切りによって底部が切り離され、その後に手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリの再調整が施されている。また、須恵器には双耳坏も含まれている。

第20号ピット群（20G）

Ⅵ区の西半部の、Ⅳ層上面で確認されたピットを一括した。これらの一部は第１号堀跡と重複しており、これより古い。ピットの総数は43個で、その中の17個のピットで柱痕跡が確認された。ピットは比較的規模が大きく、径が60cm以上の円形をなすものが目立つ。中には径が１ｍを越すピットが含まれている。これらのピットでは配置などから規則性を把握することができなかったが、大半は柱穴と考えられる。

出土遺物で図示できたものは土師器１点・須恵器３点・弥生土器３点・とりべ１点・円面硯１点・磨面をもつ礫１点である。この他に土師器破片161点（大半がロクロ）・赤焼土器破片２点・須恵器破片30点・とりべ破片２点（写真89－14、90－7）・鉱滓19点が出土している。円面硯は脚部の一部で、方形の透かしをもち、外面に２本の線刻が加えられるものである。

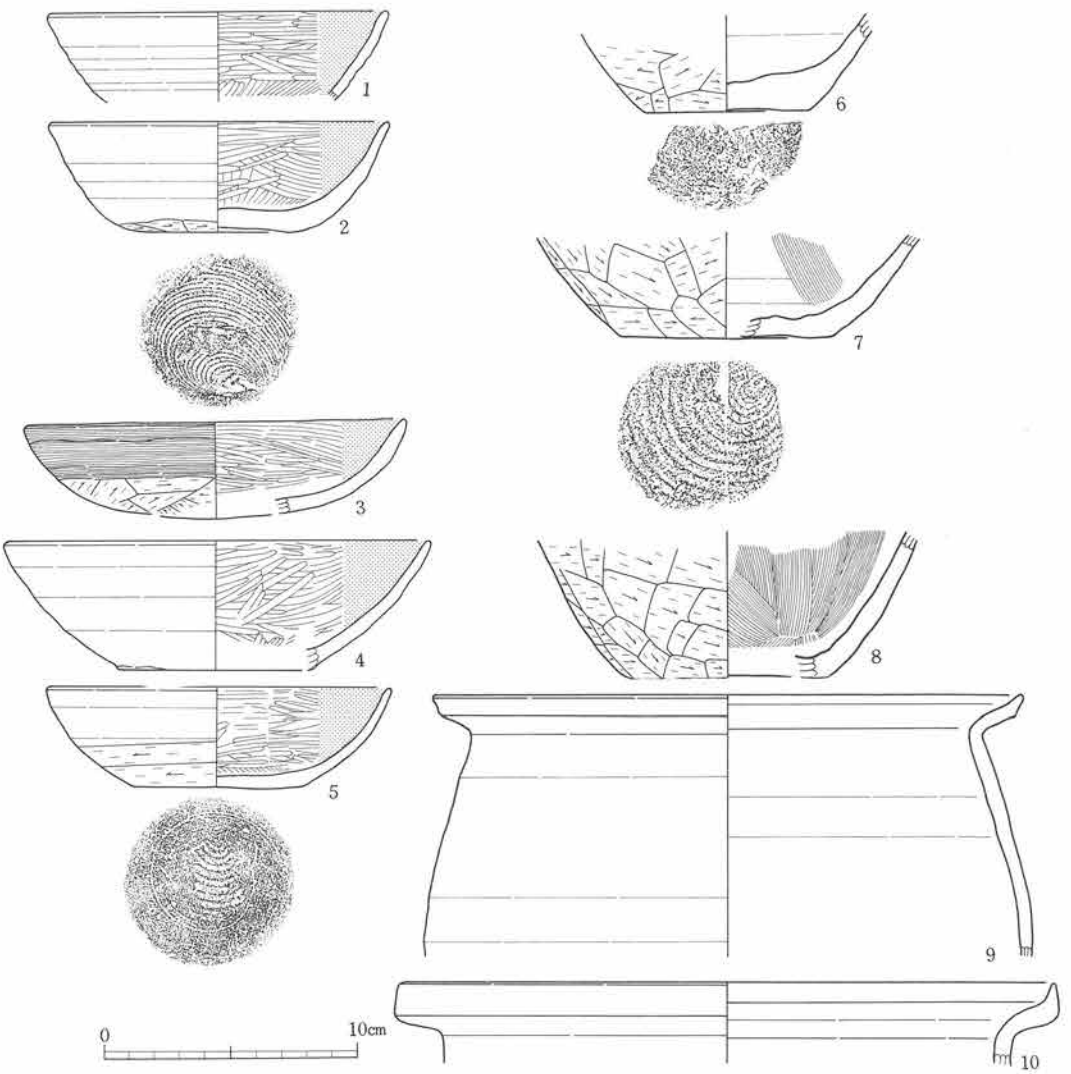
第21号ピット群（21G）

Ⅵ区中央の、Ⅳ層上面で確認されたピットの中で、第13号掘立柱建物跡に関わるものを除いたその他を一括した。一部は第２・３号堀跡と重複しており、これらより古い。検出されたピットの総数は40個あり、その中の10個に柱痕跡が認められた。ピットは径が20～30cmの円形をなす小さいものと、一辺が50cm前後の円形か方形をなす比較的大きいものがある。柱痕跡は径が15～20cmで、円形である。これらのピットでは配置などから規則性を見い出すことはできなかったが、規模などから大半が柱穴と考えられる。

出土遺物で図示できたものは土師器１点と鉄製品１点で、この他に土師器破片21点・須恵器破片３点が出土している。

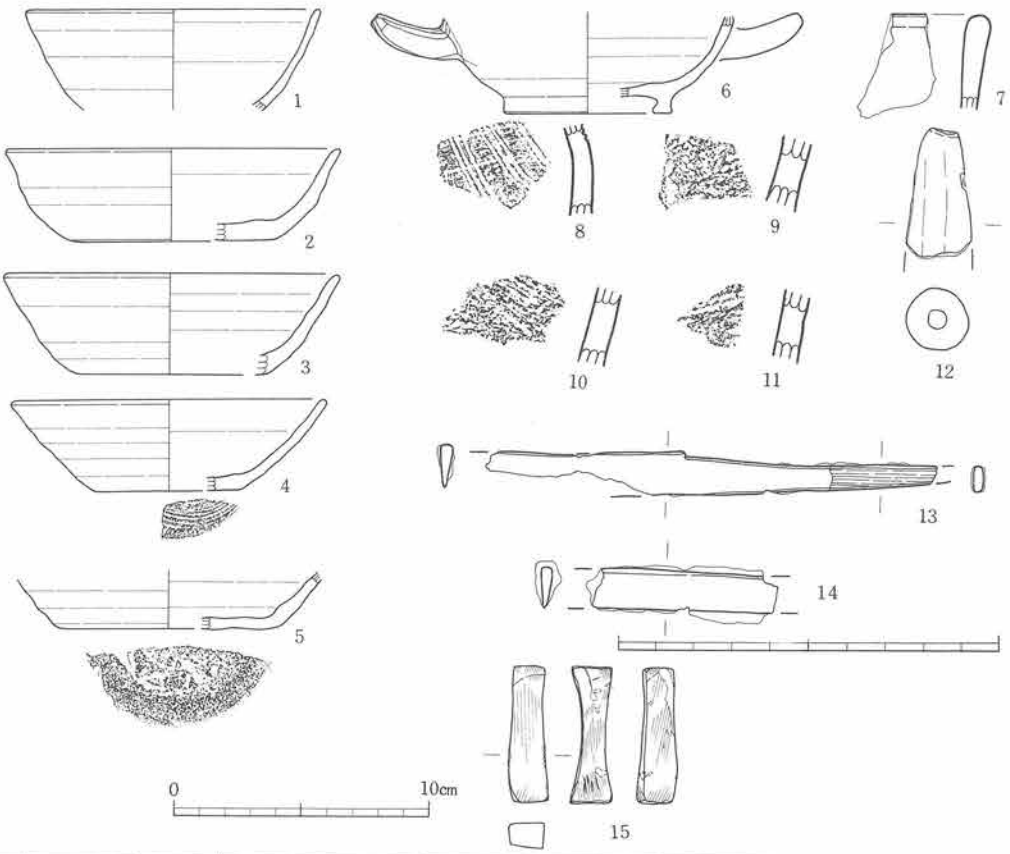
第22号ピット群（22G）

Ⅵ区の中央の東寄りのⅣ層上面で確認されピットの中で、第15号掘立柱建物跡に関わるピットを除いたものを一括した。重複するピットはいずれも第３



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	P15 堆	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部1/4	(13.4)	—	—	—	C-168
2	土師器 坏	P1 堆1層	ロクロナデ。底部回転糸切り・手持ちヘラケズリ再調整	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～底部1/2	13.4	6.4	4.3	74-1	C-169
3	土師器 坏	P17 堆	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部1/8	(15.0)	—	—	—	C-170
4	土師器 坏	P19 堆	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部1/4	(16.8)	—	—	—	C-171
5	土師器 坏	P15 堆	ロクロナデ。底部回転糸切り・体部下半・底部中心を除く全体に回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～底部1/2	13.6	6.8	3.9	74-2	C-172
6	土師器 甕	P8 掘り方	ヘラケズリ。底部回転糸切り	ロクロナデ	体部～底部1/4	—	(6.4)	—	—	C-173
7	土師器 甕	P18 堆2層	ヘラケズリ。底部回転糸切り	指ナデ・ロクロナデ	体部～底部1/4	—	(8.4)	—	—	C-174
8	土師器 甕	P15 堆	ヘラケズリ。底部切り離し不明	指ナデ	体部 1/4	—	(8.0)	—	—	C-175
9	土師器 甕	P20 堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部1/4	(23.2)	—	—	—	C-176
10	土師器 甕	P26 堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁 1/8	(25.8)	—	—	—	C-177

第110図　第19号ピット群出土遺物 (1)



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 坏	P27 掘り方	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部1/4	(11.6)	—	—	—	E-29
2	須恵器 坏	P13 堆	ロクロナデ。底部切り離し不明。	ロクロナデ	口縁～底部	(13.2)	(8.2)	3.7	—	E-30
3	須恵器 坏	P27 堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部1/4	(13.3)	(7.6)	4.0	—	E-31
4	須恵器 坏	P25 堆	ロクロナデ。底部回転糸切り。	ロクロナデ	口縁～体部1/4	(13.4)	(5.6)	3.6	—	E-32
5	須恵器 坏	P15 堆	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	ロクロナデ	体部～底部1/2	—	8.2	—	—	E-33
6	須恵器 双耳坏	P27 堆上面	ロクロナデ	ロクロナデ	体部～底部	—	6.7	—	—	E-34

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	陶器 鉢	P26 堆	内外面ともロクロナデ。	—	—	口縁部破片	—	—	—	—	I-2

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm)		口径	写真図版 底径	登録番号 器高
8	弥生土器 壺	P27 堆	三本平行沈線による文様。内面はナデ。	体部破片	—	—	—	88-1	弥-29
9	弥生土器 甕？	P15 堆	撚糸文R。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	—	地-91
10	弥生土器 甕？	P18 堆2層	撚糸文R。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	—	地-92
11	弥生土器 甕？	P20 堆	撚糸文R。	体部破片	—	—	—	—	地-93

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
12	土錘	P7 堆	一端のみ。外面ミガキ。白針わずかに含む。	(3.5)	1.7	1.65	(7.1)	0.5	93-16	土-20

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
13	鉄製品 刀子	P15 堆	両端欠損。身は断面三角形に、茎は断面長方形に近い。茎の一部に木質部が残存。	(11.6)	0.7	0.3	(7.1)	100-4	N-13
14	鉄製品 刀子	P20 堆	身の部分。断面は三角形に近い。	(4.7)	1.1	0.3	(5.2)	100-12	N-14

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
15	砥石	P27 掘り方	完形。方柱状。硬質でシルト質状の石材。砥面は4面。その中の2面は中央部がへこんでいる。	5.4	1.5	1.6	17.4	石英安山岩質凝灰岩	97-17	石-67

第111図　第19号ピット群出土遺物 (2)

号堀跡より古く、第27・30号竪穴住居跡より新しい。ピットの総数は24個あり、その中で柱痕跡が確認されたのは4個のみである。ピットは径が30～40cmの円形をなすものが多く、柱痕跡は20cm前後の円形である。これらのピットは配置状況などに規則性は認められなかった。

出土遺物で図示できたものはなく、土師器破片4点・須恵器破片2点が出土したのみである。

第23号ピット群（23G）

Ⅶ区中央部の、Ⅳ層上面で確認されたピットの内、第21号掘立柱建物跡に関わるピットを除いたものを一括した。ピットの総数は110個前後で、その半数のピットから柱痕跡が確認された。ピットは比較的大きさが均一で、径が30～40cmの円形をなしている。柱痕跡は径が20cm前後の円形である。これらのピットの中で配置から一連のピットと考えられる柱穴列が3列認められた。いずれも方向がほぼ一致しており、4個のピットが直線状にほぼ等間隔に並んでいる。建物跡の一部か、区画のための柱列と推定される。

出土遺物で図示できたものは土師器1点と弥生土器7点・鉄製品4点である。鉄製品は刀子の一部と、釘か鉄鏃の一部とみられるものである。これらの他に土師器破片36点（ロクロ・非ロクロ）・赤焼土器破片2点・須恵器破片8点・鉱滓2点が出土している。

第24号ピット群（24G）

Ⅶ区中央部東寄りの、Ⅳ層上面で確認されたピットの中で、第18掘立柱建物跡に関わるピットを除くものを一括した。ピットの総数は59個で、その中の37個に柱痕跡が確認された。規模は径が20～30cmの小さいものが大半で、円形をなしている。これらのピットの中で配置から一連のものと考えられる柱穴列が1列認められた。東西方向に4個のピットが直線状にほぼ等間隔に並んでいる。

出土遺物で図示できたのは土師器1点・須恵器1点・灰釉陶器1点である。この他に土師器破片28点（ロクロが大半）・赤焼土器破片1点・須恵器破片13点・鉱滓1点が出土している。

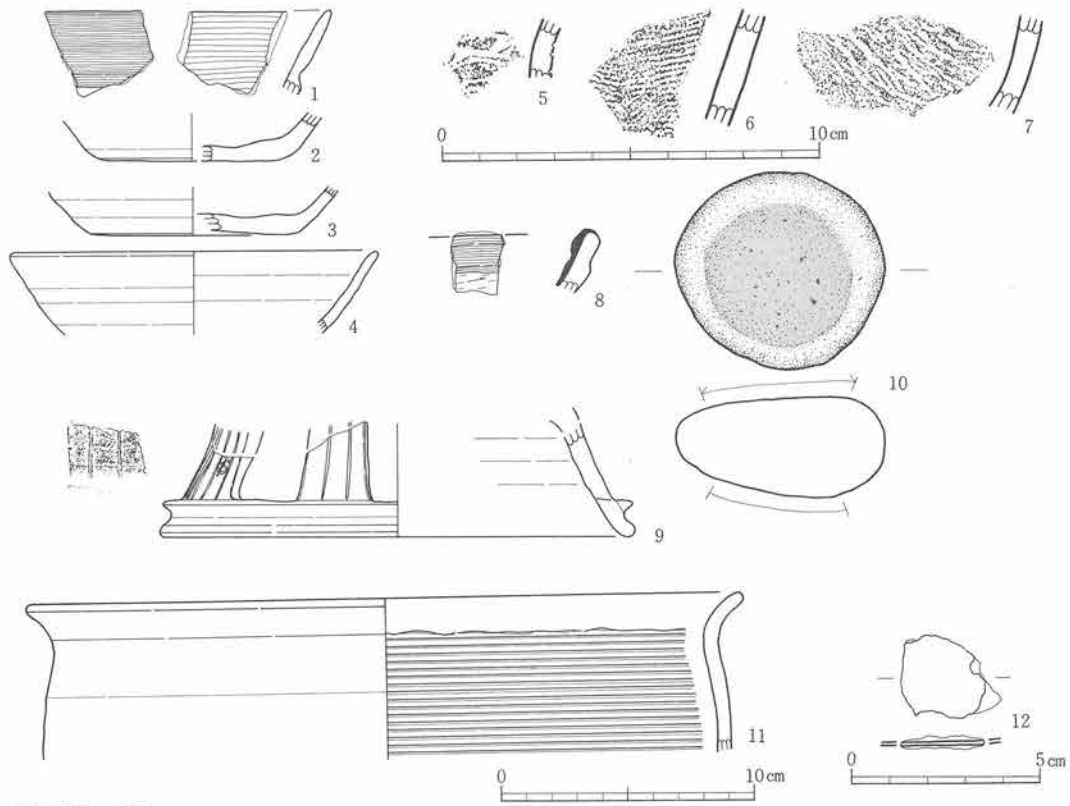
第25号ピット群（25G）

Ⅷ区南端部のⅣ層上面で確認されたピットの内、第22・31号掘立柱建物跡に関わるピットを除いたものを一括した。南北28m、東西9 mの範囲から総数300個前後のピットが密集して検出された。そしてさらに東と西の調査区外に広がるようである。柱痕跡は半数近いピットから確認された。ピットは円形をなすものが大部分で、規模は径が20～30cm、50cm前後、1 m前後のものがあり、平面的には規模の小さなピットは南半部に、規模の大きいピットは北半部に多く分布する傾向がうかがわれる。ピットの中で配置から一連のものと考えられる柱穴列が南北方向に2列認められた。A列は5個が、B列は4個が直線状にそれぞれ等間隔に並んでいる。建物の一部か区画のための柱列と考えられる。ピットの中で柱痕が認められたのが1つあり、それは径が13.5cmの丸太材であった。

出土遺物で図示できたのは土師器3点・須恵器1点・灰釉陶器1点・砥石1点・柱根1点である。灰釉陶器は口縁部破片だが、口縁端部がわずかに外反する変形のものである。これらの他に土師器破片125点（ロクロ・非ロクロ）・赤焼土器破片2点・須恵器破片19点・とりべ破片1点（写真92－6）・鉱滓2点出土している。

第26号ピット群（26G）

Ⅷ区中央部の、Ⅳ層上面から多数のピットが確認され、その中の第24～30号掘立柱建物跡に関わるピットを除いたものを一括した。ピットの総数は600個前後で、その半数近くのピットから柱痕跡が確認された。ピット群は南北約45m、東西約9 mの中に



第20号ピット群

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	P7 堆	ヨコナデ	ハラミガキ・黒色処理	破片	−	−	−	−	C-178
2	須恵器 坏	P6 柱痕跡	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	ロクロナデ	底部 1/4	−	(7.3)	−	−	E-35
3	須恵器 坏	P6 柱痕跡	ロクロナデ	ロクロナデ	体部〜底部1/4	−	(8.2)	−	−	E-36
4	須恵器 坏	P36 堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁〜体部1/6	(14.6)	−	−	−	E-37

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
5	弥生土器 壷	P35 堆	二本平行沈線による文様。	体部破片	−	−	−	87-27	弥-14
6	弥生土器 甕?	P5 堆	撚糸文R。内面ミガキ。	体部破片	−	−	−	88-32	地-58
7	弥生土器 甕?	P36 堆	撚糸文R。内面ミガキ。	体部破片	−	−	−	88-35	地-59
8	とりべ	P7 堆3層	外面上半に段をもつ。外面ヨコナデ・ヘラケズリ。内面溶解物付着。器厚-0.8cm	口縁部破片	−	−	−	89-15	ト-17

番号	種別	層位	特徴	現部径(cm)	脚部径(cm)	厚さ(cm)	器高(cm)	透かし孔	写真図版	登録番号
9	円面硯	P9 堆 P12 3層	全体の½程度残存。長方形の透かしが配される。二本の線刻、および一部にヘラ書きの文字あり。	−	(18.8)	0.7	−	−	93-26	土-28

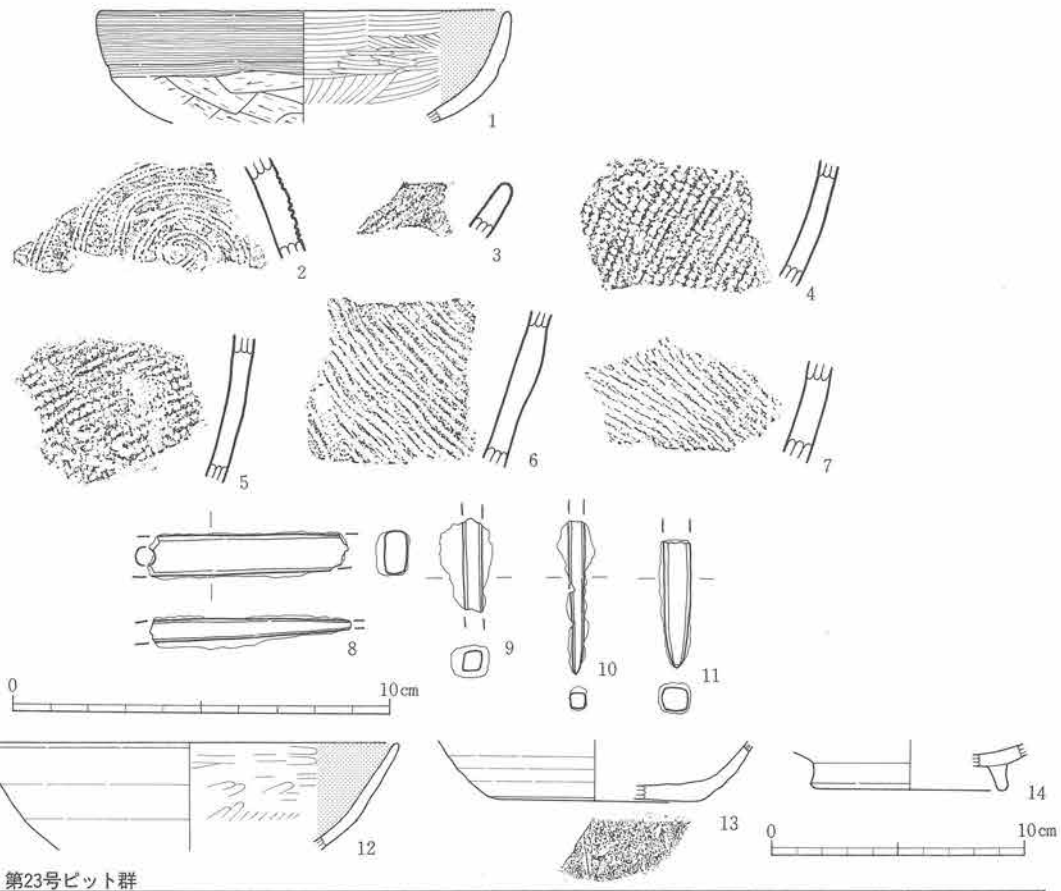
番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
10	磨面をもつ礫	P6 柱痕跡	偏平な礫を利用。上下2面に磨面が認められる。	7.8	8.4	4.0	300	安山岩	99-3	石-134

第21号ピット群

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
11	土師器 甕	P44 柱痕跡	ロクロナデ	ロクロナデ・カキ目	口縁部¼	(28.4)	−	−	−	C-179

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
12	鉄製品 不明	P10 掘り方	一部のみ、板状をなす。	(2.1)	(2.2)	0.1	(2.7)	−	N-15

第112図　第20・21号ピット群出土遺物



第23号ピット群

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	P54 掘り方	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部1/8	(16.4)	—	—	—	C-180

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	弥生土器 壷	P97 掘り方埋土	三本平行沈線による渦巻文。内面はナデ。	体部破片	—	—	—	87-28	弥-30
3	弥生土器 鉢？	P55 掘り方	口唇部は撚糸文R。外面ミガキ。内面ナデ。	口縁部破片	—	—	—	—	弥-36
4	弥生土器 甕？	P2 堆	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	88-28	地-94
5	弥生土器 甕？	P8 堆	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	88-29	地-95
6	弥生土器 甕？	P50 掘り方	撚糸文R。	体部破片	—	—	—	88-19	地-96
7	弥生土器 甕	P51 掘り方	撚糸文R。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	88-18	地-97

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
8	鉄製品 刀子	P28 柱痕跡	茎の部分、両側欠損。目釘穴あり。比較的大振りの刀子。	(4.8)	1.1	0.6	(15.8)	100-7	N-16
9	鉄製品 釘か鉄鏃の茎	P71 柱痕跡	一部のみ。断面は方形をなす。	(2.2)	0.5	0.5	(1.5)	—	N-17
10	鉄製品 釘	P126 掘り方	頭部欠損。断面が方形の角釘である。	(4.1)	0.4	0.4	(1.2)	100-32	N-18
11	鉄製品 釘か鉄鏃の茎	P126 掘り方	一端欠損。断面は方形をなす。	(3.3)	0.7	0.6	(2.8)	—	N-19

第24号ピット群

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
12	土師器 坏	P59 掘り方	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部	(16.6)	—	—	—	C-181
13	須恵器 坏	P33 堆	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	体部～底部1/4	—	(8.5)	—	—	E-38
14	灰釉陶器 皿	P46 柱痕跡	部分的に釉が残る。	部分的に釉が残る。	高台の一部	—	(7.6)	—	—	灰-1

第113図　第23・24号ピット群出土遺物

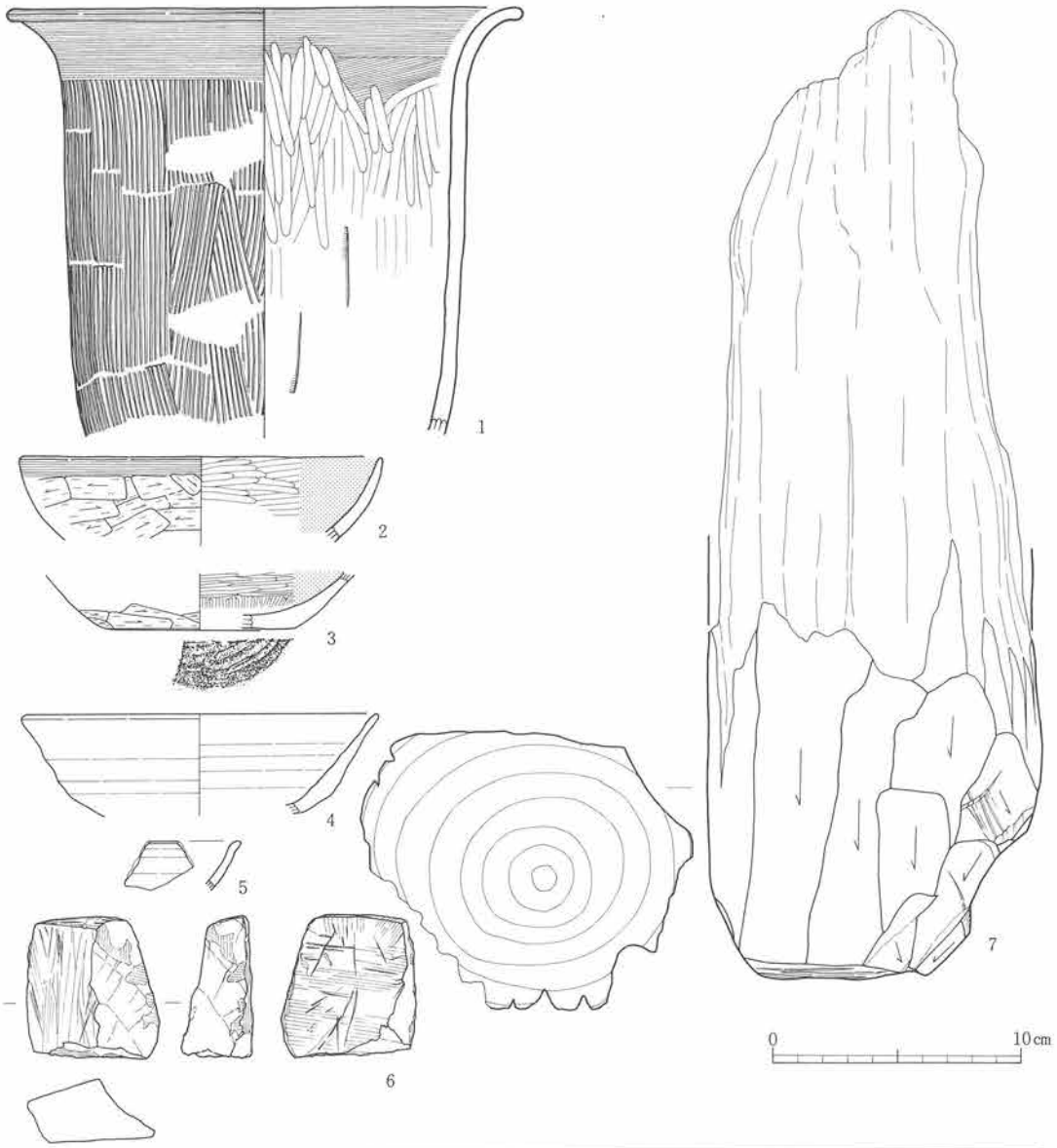
密集しており、さらに東と西の調査区外に広がっている。しかし、Ⅷ区の西側や南と北の第4号堀跡付近になるとその密度が薄れる傾向がうかがわれる。ピットは概して円形をなしており、径が30～40cmの比較的均一の規模をもつ。また、柱痕跡は径が20cm前後の円形が多い。ピットの中で柱痕が確認された例があり、その径が12.5cmの丸太材であった。配置から一連のものと考えられる柱穴列が8列認められた。いずれも直線状に等間隔に並んでいる。これらの柱穴列は近くで検出されている掘立柱建物跡と方向性などが近似しており、それらの建物跡と関連する建物の一部か、区画のための柱列と考えられる。また、その他のピットも配置などに規則性を見い出すことはできなかったが、それらの大半が柱穴と考えられる。

出土遺物で図示できたのは土師器2点・土器1点・陶器4点・土師質土器1点・磁器1点・鉄製品4点・砥石1点・柱根とみられるもの2点である。土器は小形の壷で、口縁部が短い形状のものである。青磁は碗の口縁部で、内面に片切彫りで劃花文が描かれている。これらの遺物の他に土師器破片137点（ロクロ・非ロクロ）・赤焼土器11点・須恵器破片31点・灰釉陶器破片1点（写真81－17）・鉱滓1点が出土している。

第27号ピット群（27G）

Ⅷ区北端部の、Ⅳ層上面で確認されたピットを一括した。第9号小溝状遺構群の周辺に散在しており、総数110個のピットが検出された。これらは平面形が円形をなすものが大部分で、規模は比較的均一で、径が20～30cmの小さいピットである。柱痕跡が確認されたピットはほとんどなく、また、配置状況に規則性は認められないことから、これらのピットは柱穴の可能性は低いと考えられる。

出土遺物はなかった。

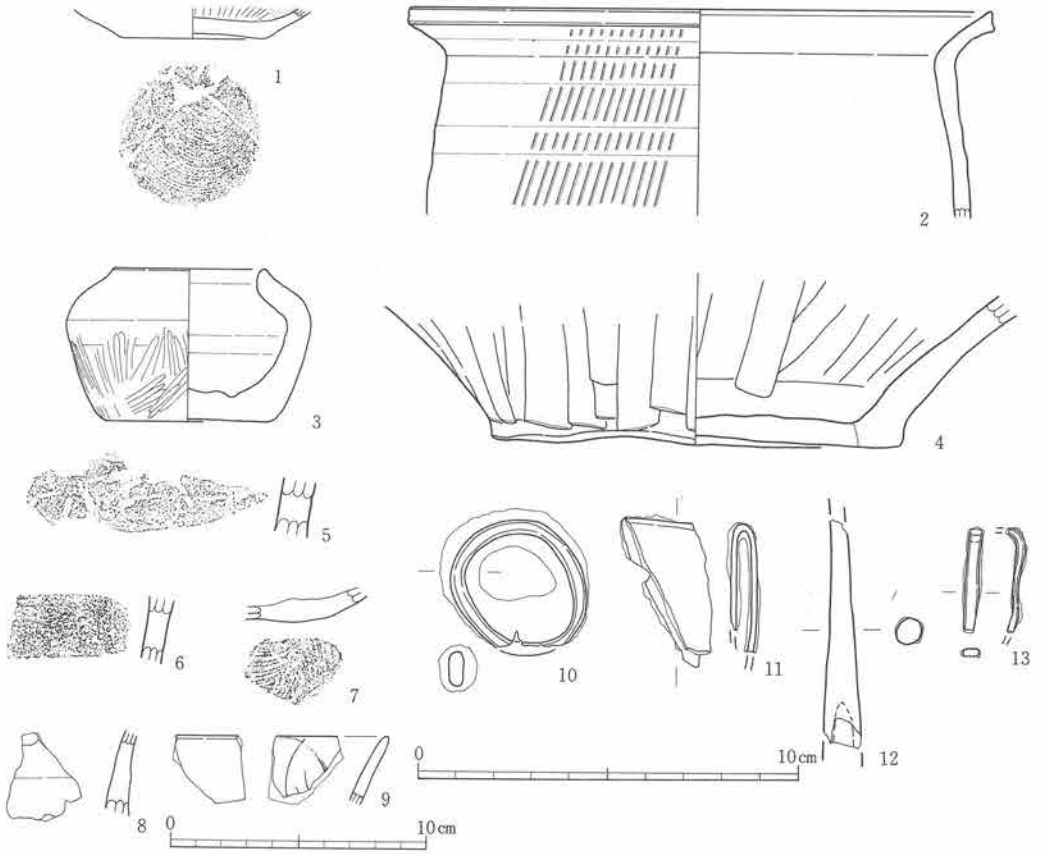


番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	P237 掘り方・堆	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ	口縁～体部1/2	(20.8)	—	—	78-2	C-182
2	土師器 坏	P159 掘り方・堆	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部 1/4	(14.4)	—	—	—	C-183
3	土師器 坏	P189 堆	ロクロナデ。底部回転糸切り。体部下端手持ちヘラケズリ再調整	ヘラミガキ・黒色処理	体部～底部	—	(7.4)	—	—	C-184
4	須恵器 坏	P159 掘り方・堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部1/4	(14.4)	—	—	—	E-39
5	灰釉陶器 皿	P246 堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部破片	—	—	—	81-11	灰-2

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
6	砥石	P251 堆	完形。不整な形状をしており、破損した砥石の再利用か。硬質で、シルト質状の石材。主要砥面は2面。	6.15	5.4	2.85	100	頁岩	97-26	石-79

番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
7	柱痕	P25 堆	第25号ピット群の柱穴と考えられる。丸太材を使用。先端を鈍く周辺から加工している。	クリ (No.56)	(39.3)	(13.5)	(12.5)	—	L-1

第114図　第25号ピット群出土遺物

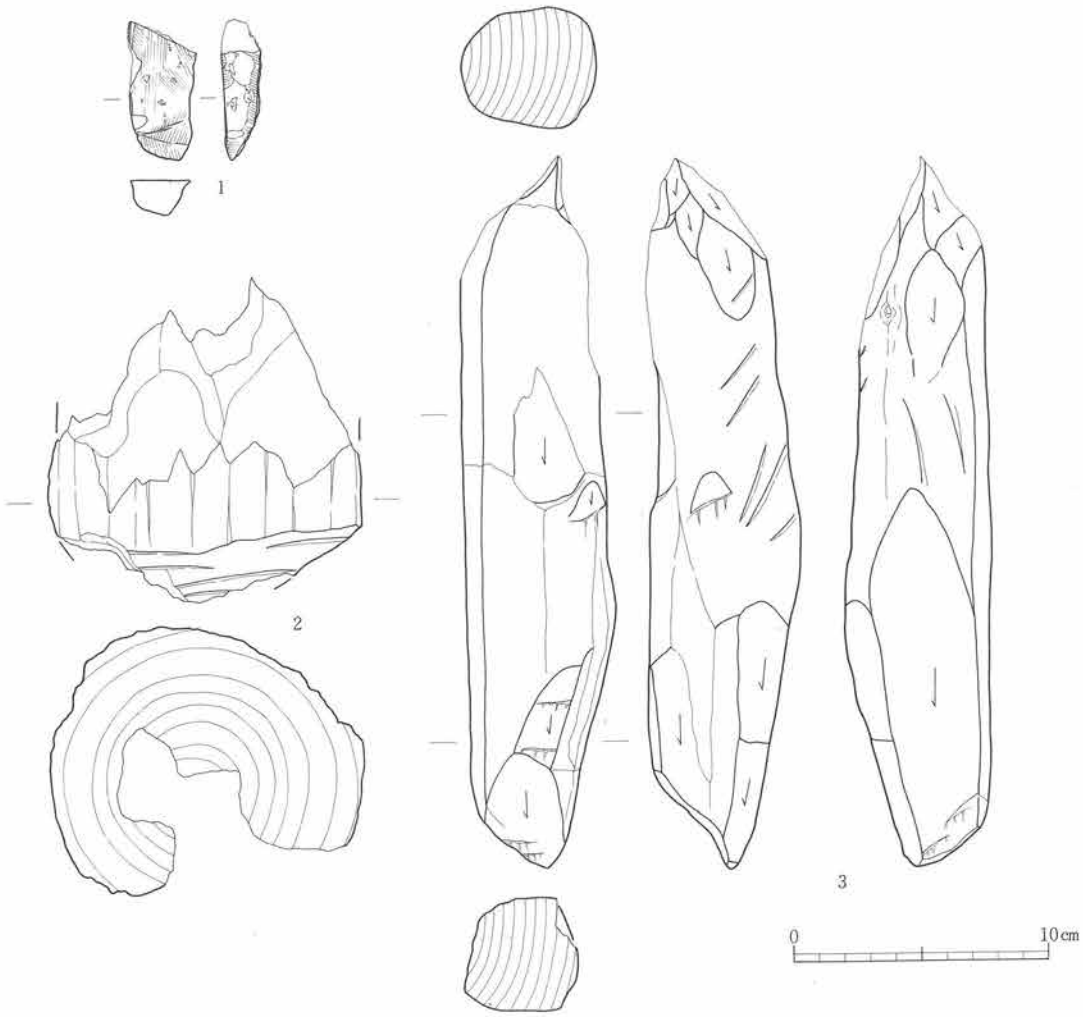


番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	P275 掘り方	ロクロナデ。底部回転糸切り再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	底部のみ	—	5.6	—	—	C-185
2	土師器 甕	P119 柱痕跡	ロクロナデ・平行タタキ目	ロクロナデ	口縁～体部1/4	23.6	—	—	—	C-186

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	土器 壺	P487 堆上面	短頸の小壺。外面はロクロナデ、ヘラミガキ。内面はロクロナデ	在地	中世 鎌倉～南北朝	口縁～体部1/2欠損	10.0	6.5	6.1	82-83	I-3
4	陶器 壺か甕	P164・172 柱痕跡	内外面ともヘラナデ。	常滑	—	体部下半～底部1/3	—	16.2	—	83-1	I-4
5	陶器 甕	P539 掘り方	外面はヘラナデ。内外面に黒い付着物あり。	在地	13～14C	体部破片	—	—	—	—	I-5
6	陶器 鉢？	P144 柱痕跡	内外面ともヘラナデ。	在地	13～14C	体部破片	—	—	—	—	I-6
7	土師質土器 皿	P401 堆	外面はロクロナデ。底部回転糸切り。	—	中世前半？	底部破片	—	—	—	—	I-7
8	陶器 壺？	P117 柱痕跡	内外面ともロクロナデ。外面のみ灰釉。	古瀬戸	—	頸部破片	—	—	—	—	I-8
9	青磁 碗	P170 柱痕跡	内面に片切彫りで、劃花文が描かれている。	中国 龍泉窯系	13～14C	口縁部破片	—	—	—	85-7	J-1

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
10	鉄製品 金具	P143 柱痕跡	ほぼ完形。環状をなす。	径 3.6	0.4	0.9	21.8	102-3	N-20
11	鉄製品 不明	P187 柱痕跡	板状鉄製品が二枚折りになっている。	(3.4)	(1.9)	(0.7)	(5.8)	102-13	N-21
12	鉄製品 鉄鏃？	P398 堆	身の部分か。途中まで中空になっている。先端の断面は円形。	(5.6)	0.7	0.7	(4.6)	100-17	N-22
13	鉄製品 不明	P482 堆	両端欠損。断面は長方形。	(2.8)	0.4	0.2	(0.5)	102-10	N-23

第115図　第26号ピット群出土遺物（1）



番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
1	砥石	P334 柱痕跡	一部欠損。不整な形状をしており、破損した砥石を再利用したものか。軟質でシルト質状の石材。砥面は一面。	(5.1)	2.0	1.8	(31.4)	石英安山岩質凝灰岩	97-21	石-74

番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真図版	登録番号
2	柱根	P213 堆	丸太材を使用。加工の痕跡がわずかに残っている。	クリ(No.54)	(13.0)	(12.5)	(10.2)	－	L-2
3	柱根？	P285 堆	分割材を使用。全体に加工痕がみられる。	クリ(No.55)	(28.2)	6.0	6.0	－	L-3

第116図　第26号ピット群出土遺物 (2)

4．竪穴遺構

第1号竪穴遺構

【位置】Ⅲ区　E4.8～7.1　S1.1～2.9

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。一部が他の遺構により切られているが、ほぼ全体が確認された。円形周溝・第3号小溝状遺構群と重複しており、これらより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ長方形をしており、長軸方向は、東西方向に近く、N－81°－Wである。規模は長軸が約2 m、短軸が1.74mである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層で、周縁部から中央部に向かって堆積している。

【壁・底面の状況】壁はⅣ層からなり、その壁高は最大で22cmである。底面からの立ち上がりは直立ではなく、やや開きぎみである。周縁部はⅣ層を、中央部は掘り方埋土を底面としている。底面は概して平坦である。

【柱穴】床面からはピットが1個検出された。しかし、柱痕跡はなく、深さも余りないことから柱穴とは考えにくい。

【出土遺物】図示できるものはないが、堆積土中およびピット内から土師器破片5点・須恵器破片2点が出土している。須恵器の1点は坏の底部で、回転ヘラケズリの再調整が施されているものである。

第2号竪穴遺構

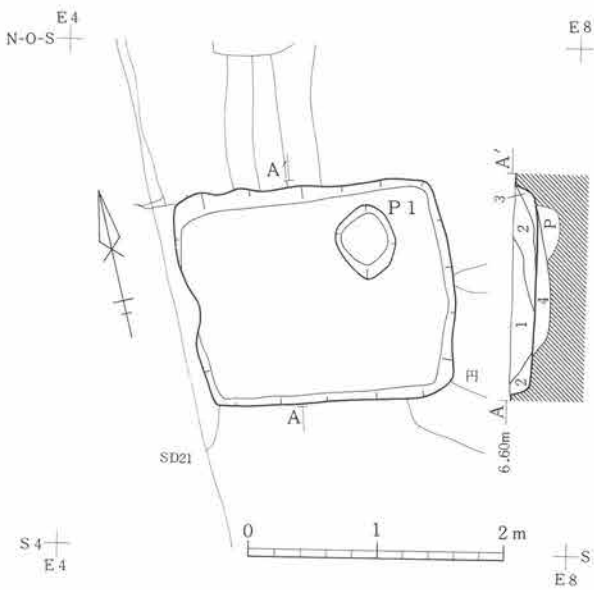
【位置】Ⅳ区

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。南側はさらに調査区外に延びている。第5号井戸跡、第31・32号溝跡と重複しており、これらより新しい。また、第28号土坑・第14号ピット群のいくつかとも重複しており、それらより古い。

【平面形・方向・規模】全体の形態は明確ではなく、また、北西辺のように不整な部分もみられるが、方形を基調とするものと推定される。その長軸方向はN－32.5°－Wであり、真北から大きく西に寄っている。検出部分の長軸は6.66m、短軸は4.40mであり、規模はそれ以上となる。

【堆積土】5層認められた。いずれも自然堆積層とみられる。

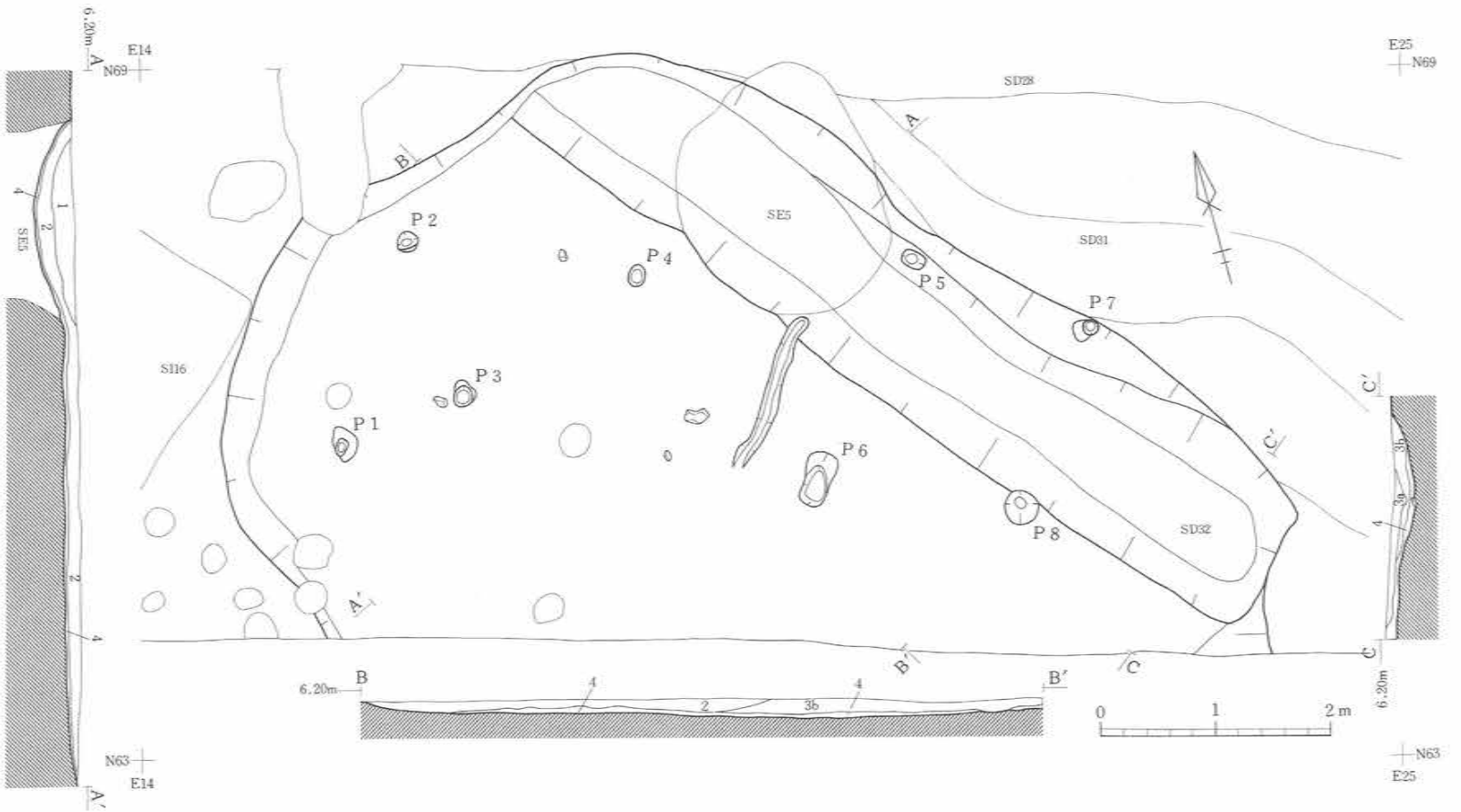
【壁・底面の状況】壁はⅣ層からなり、その残存壁高は9cm前後である。底面からきわめてゆるやかに立ち上がる。底面は大部分がⅣ層からなり、その部分では堅くしまっており、ほぼ平坦である。しかし、



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を少し含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を少し含む。	3
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	掘り方埋土

ピットNo. / 項目	P1
形状	楕円形
大きさ	59×48cm
深さ	15 cm
土色 土性 備考	暗褐色 (10YR3/3) シルト Ⅳ層ブロック・粒子を混在する。

第117図　第1号竪穴遺構



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	註記もれ			1
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	マンガン粒を多く含む。	2
3a	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂土 (細砂)		3a
3b	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	IV層ブロックを少量含む。	3b
4	黒色 (10YR2/1)	シルト	IV層ブロック・粒子を部分的に含む。	4

ピットNo.	P1		P2		P3		P4	P5	P6	P7		P8
項目	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡				掘り方	柱痕跡	
形状	不整円形	円形	円形	円形	不整円形	円形	円形	楕円形	長方形	略円形	円形	円形
大きさ	32×22cm	16×10cm	18×18cm	18×14cm	23×19cm	18×17cm	20×15cm	24×15cm	50×26cm	24×18cm	14×13cm	30×29cm
深さ	20 cm	5.5 cm	18 cm	18 cm	31 cm	18 cm	16.5 cm	13 cm	1.5 cm	13 cm	12 cm	18.5 cm
土色 土性 備考	黒褐色 (10YR3/2) シルト IV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) シルト IV層粒子を多く、焼土をわずかに含む。	黒褐色 (10YR3/1) シルト IV層粒子を多く、炭化物をわずかに含む	黒褐色 (10YR3/1) シルト	黒褐色 (10YR3/1) シルト IV層粒子を多く、炭化物をわずかに含む	黒褐色 (10YR2/2) シルト IV層粒子をわずかに含む。	黒褐色 (10YR3/1) シルト IV層粒子を多く、炭化物をわずかに含む	黒褐色 (10YR2/2) シルト IV層粒子・炭化物をわずかに含む。	黒褐色 (10YR3/2) シルト IV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) シルト IV層ブロック・粒子を多く含む。	黒褐色 (10YR3/2) シルト IV層粒子を多く、焼土をわずかに含む。	黒褐色 (10YR3/1) シルト IV層粒子を多く、炭化物をわずかに含む

第118図　第2号竪穴遺構

北東辺付近の他遺構と重複する部分では北東辺に沿って溝状に底面が下がっていた。これについては人為的に掘り込まれたのか、自然に落ち込んだのかは明確にはできなかった。

【柱穴】底面および壁面からは8個のピットが検出された。いずれも規模が小さく、規則性がみられないことなどから柱穴かどうかは不明である。

【特記事項】その他に底面中央から幅15cm前後で、深さ2cmの浅く小さい溝が検出されている。

【出土遺物】堆積土中から多くの遺物が出土した。図示できたものは土師器1点・土師質土器3点・陶器8点・石製品3点・鉄製品11点・古銭2点である。この他に土師器破片29点・須恵器破片6点・陶器の壷破片1点（写真83-10）が出土している。土師質土器は小形の皿で、いずれもロクロで製作されたものである。陶器は鉢と壷か甕の器種がみられ、鉢の1点は片口である。写真で示した陶器の壷破片は中国産とみられ、外面は露胎で、内面には褐灰色釉がかけられている。鉄製品は刀子・釘か鉄鏃・鎌などの種類が認められた。

第3号竪穴遺構

【位置】Ⅶ区　S71.7～74.5　E50.3～52.5

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。北西部は他の遺構に切られ、東側は撹乱を受けている。第10号性格不明遺構・第58号溝跡と重複しており、前者より新しく、後者より古い。

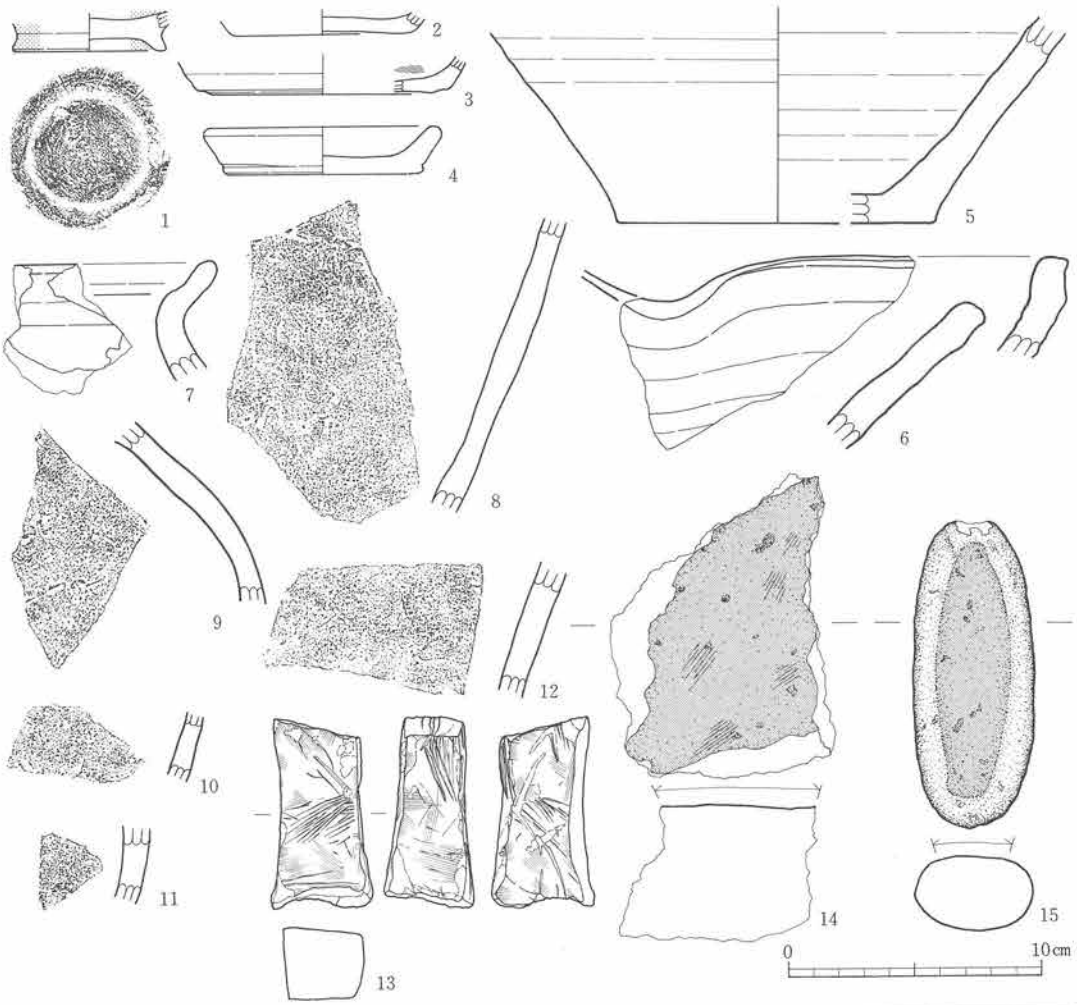
【平面形・方向・規模】残存部分から平面形は方形を基調とするものと推定される。南北方向はN－15.5°－Eであり、真北から東に寄っている。規模は南北は2.74m、東西は2.08m以上である。

【堆積土】5層確認された。これらは周縁部から中央に向かって堆積している。

【壁・底面の状況】Ⅳ層を壁としており、その立ち上がりはゆるやかである。残存壁高は16cmである。全面Ⅳ層を底面としており、ほぼ平坦である。

【柱穴】確認されなかった。

【出土遺物】図示できたのは弥生土器1点と釘1点のみである。この他に土師器破片40点・須恵器破片7点が堆積土中から出土している。

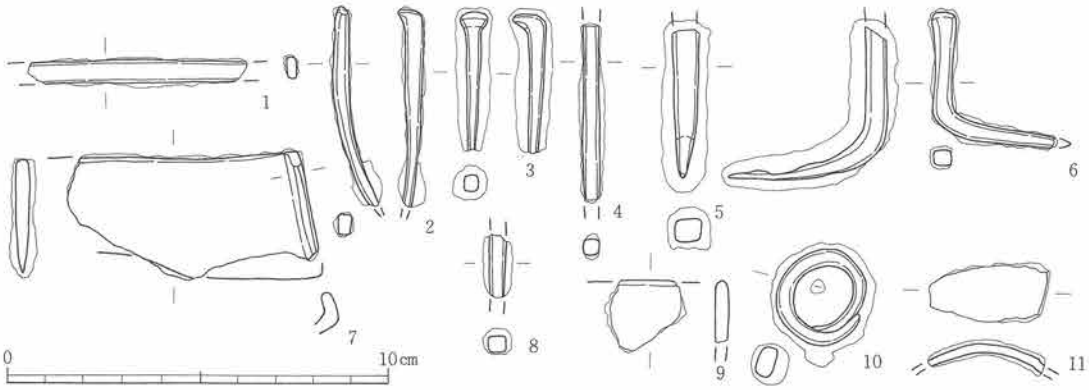


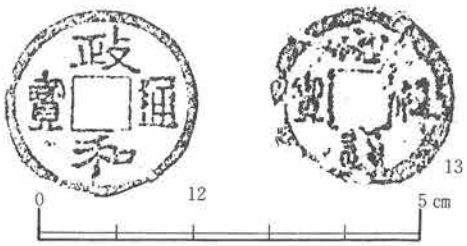
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆4層	ロクロナデ・ヘラミガキ・黒色処理、底部回転糸切り・切り離し後ロクロ調整	放射状ヘラミガキ・黒色処理	底部 1/1	—	6.0	—	—	C-187

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	土師質土器 皿	堆2層	保存が悪くはっきりしないが、外面ともロクロナデ調整、底部は回転糸切りと推定される。	—	—	底部 1/3	—	7.0	—	—	I-9
3	土師質土器 皿	堆2層	内外面ともロクロナデ。内面見込み部分に一部指ナデ。外面底部に板状圧痕が認められる。	—	—	底部 1/16	—	(8.8)	—	—	I-10
4	土師質土器 皿	堆2層	内外面ともロクロナデ。外面底部に板状圧痕？白針わずかに含む。	—	—	全体の 1/4	9.4	7.9	1.9	82-1	I-11
5	陶器 鉢	堆4層	体部内外面はロクロナデ。底部外面はナデ。	在地白石窯	13～14C	体部～底部 1/4	—	12.5	—	83-4	I-12
6	陶器 鉢	堆4層	片口の鉢。内外面ともロクロナデ。白針多く含む。	在地	13～14C	口縁部破片	—	—	—	83-3	I-13
7	陶器 壺か甕	堆2層	内外面ともロクロナデ。内外および外面口縁部は施釉。	渥美	12～13C	口縁部破片	—	—	—	83-2	I-14
8	陶器 壺か甕	堆2層	外面はナデ。内面はヨコナデ。	常滑	中世	体部破片	—	—	—	83-7	I-15
9	陶器 壺？	堆2層	内外面ともヨコナデ。	常滑	中世	体部破片(肩部)	—	—	—	83-8	I-16
10	陶器 壺か甕	堆2層	内外面ともナデ。	常滑	中世	体部破片	—	—	—	83-5	I-17
11	陶器 壺か甕	堆2層	内外面ともヨコナデ。	常滑	中世	体部破片	—	—	—	83-6	I-18
12	陶器 壺か甕	堆4層	外面はナデ。内面はヨコナデ。	—	—	体部破片	—	—	—	83-9	I-19

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
13	砥石	堆4層	完形。上下両面、両側面に4面砥面があり。側面1面に研磨溝が1条、線状痕が上下両面、側面1面合わせて、4面認められる。	7.5	4.0	3.4	120	細粒石英安山岩質凝灰岩	97-5	石-52
14	磨面をもつ礫	堆4層	上端欠損。円棒状の礫を利用。一面に磨面が認められる。	12.2	4.8	3.0	210	安山岩	98-12	石-116
15	磨面と敲打痕をもつ礫	堆4層	一面のみ残存。一面に磨面が認められる。	(12.3)	(8.7)	(5.2)	(670)	安山岩	—	石-114

第119図　第2号竪穴遺構出土遺物（1）

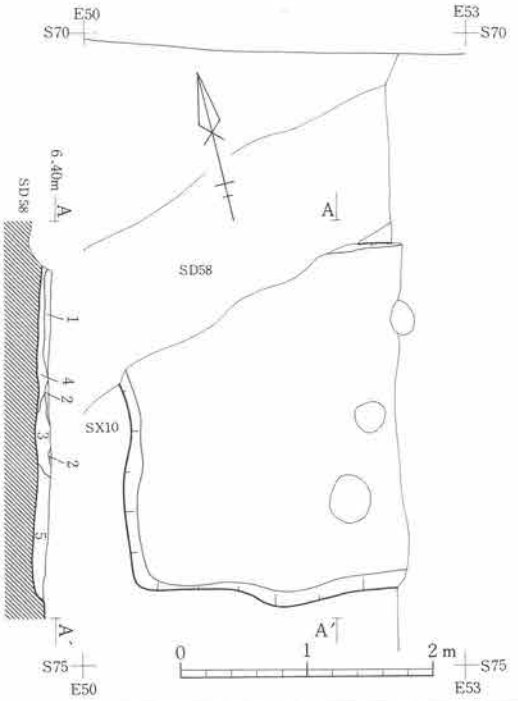




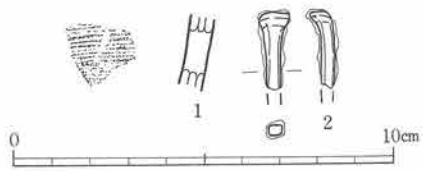
番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
1	鉄製品　刀子の茎	堆2層	両端欠損。断面長方形。	(5.1)	0.6	0.3	4.2	100-11	N-24
2	鉄製品　釘	堆2層	先端欠損。断面が長方形をなす角釘である。	(5.2)	0.4	0.6	3.6	100-25	N-25
3	鉄製品　釘	堆2層	先端欠損。断面方形の角釘。	(3.7)	0.4	0.5	5.5	100-31	N-26
4	鉄製品　釘か鉄鏃の茎	堆2層	断面は方形に近い。	(4.2)	0.4	0.4	2.8	100-35	N-27
5	鉄製品　釘か鉄鏃の茎	堆2層	一端欠損。断面は方形に近い。	(3.9)	0.7	0.6	17.0	100-34	N-28
6	鉄製品　釘	堆4層	先端欠損。断面方形の角釘。折れ曲がっている。	(3.6)	0.5	0.4	3.2	100-30	N-29
7	鉄製品　鎌	堆2層	基端部を斜めに折り曲げている。刃部は弧状に曲がっている。刃部先端欠損。	(5.8)	3.0	0.4	22.6	101-2	N-30
8	鉄製品　釘か鉄鏃の茎	堆2層	断面は方形に近い。	(1.5)	0.5	0.5	1.0	—	N-31
9	鉄製品	堆2層	板状をなす。	(1.9)	(1.8)	0.4	2.9	—	N-32
10	鉄製品　金具	堆2層	完形。環状をなす。	径 2.6	0.5	0.8	19.4	102-4	N-33
11	鉄製品　不明	堆2層	一部のみ板状をなす。	(1.5)	(3.0)	0.2	3.6	—	N-34

番号	種別	層位	特徴	径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
12	銅製品　古銭	堆2層	政和通宝(北宋)。初鋳年政和元年(1111年)。	2.5	—	0.14	2.1	102-19	N-35
13	銅製品　古銭	堆2層	元祐通宝(北宋)。初鋳年元祐元年(1086年)。	2.5	—	0.11	(2.0)	102-20	N-36

第120図　第2号竪穴遺構出土遺物(2)



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子・炭化物粒をまばらに含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物・焼土・灰を多く含む。	
3	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層粒子・酸化鉄斑紋を少量含む。	
4	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層を多量に、炭化物を少量含む。	
5	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	焼土粒・炭化物粒を少量含む。	



番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	弥生土器 甕？	堆	撚糸文R。内面ナデ。	体部破片	－	－	－	－	地-80

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
2	鉄製品 釘	堆	先端欠損。断面が長方形に近い角釘。	(2.0)	0.4	0.3	(1.1)	－	N-37

第121図　第３号竪穴遺構と出土遺物

５．井戸跡

第１号井戸跡（SE１）

【位置】Ⅰ区　N31.8～32.9　W19.8～21.2

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。全体が検出された。壁の中位部分は浸食により大きく剝落している。第３号竪穴住居跡と第５号土坑と重複しており、いずれよりも新しい。

【平面形・規模】素掘りの井戸である。平面形は東西がわずかに長いが、ほぼ円形をなす。規模は長軸約1.30m、短軸1.05m、深さは1.26mである。

【堆積土】４層確認され、その中の３層は人為堆積の可能性をもち、その他は自然堆積層である。

【壁・底面】全体的にほぼ円筒形をなしており、壁は底面からほぼ直角に立ち上がる。底面には若干起伏が認められる。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片が１点出土しただけで、図示できるものはなかった。

第２号井戸跡（SE２）

【位置】Ⅲ区　E6.9～7.6　N7.1～8

【確認面・重複】第３号性格不明遺構の堆積土中で確認され、それよりも新しい。また、第３号小溝状遺構群とも重複し、それよりも新しい。

【平面形・規模】素掘りの井戸である。平面形は楕円形をなしており、その長軸方向はN－23°－Eである。規模は長軸96cm、短軸68cm、深さ1.23mを計る。

【堆積土】５層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、水平に近い堆積状況を示す。

【壁・底面】全体的に円筒形に近く、壁は底面から

ほぼ直角に上方に立ち上がっている。

【出土遺物】出土していない。

第3号井戸跡（SE 3）

【位置】IV区　N66～68.9　E33.6～36.2

【確認面・重複】IV層上面で確認された。全体が検出された。第28号溝跡と重複しており、それよりも古い。

【平面形・規模】素掘りの井戸である。平面形は不整の円形をなすが、本来は円形だったものと考えられる。規模は長軸2.86m、短軸2.58m、深さ1.90m を計る。

【堆積土】調査中に断面観察用の壁が崩れてしまい、記録できたのは上部のみである。11層確認された。おおよそ自然堆積層と考えられるが、中には木炭を主体とする層も存在する。

【壁・底面】上半部は外に向かって大きく開いている。下半部は円筒形を呈しており、壁は底面からほぼ直角に立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

【出土遺物】土師質土器が2点・杭材が1点出土しており、いずれも図示できた。土師質土器は2点とも皿であり、ロクロで製作されており、底部切り離しは回転糸切りによるものである。

第4号井戸跡（SE 4）

【位置】VI区　N63.9～65　E28.1～33.9

【確認面・重複】IV層上面で確認された。一部が検出されたのみで、他は調査区外に延びている。第31号溝跡と重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】一部のため素掘りかどうか不明である。大形の井戸で、規模は東西は5.76m 以上、南北は1.1m 以上、深さは76cm以上である。

【堆積土】3層確認された。いずれもIV層ブロックを多く含んでいる。

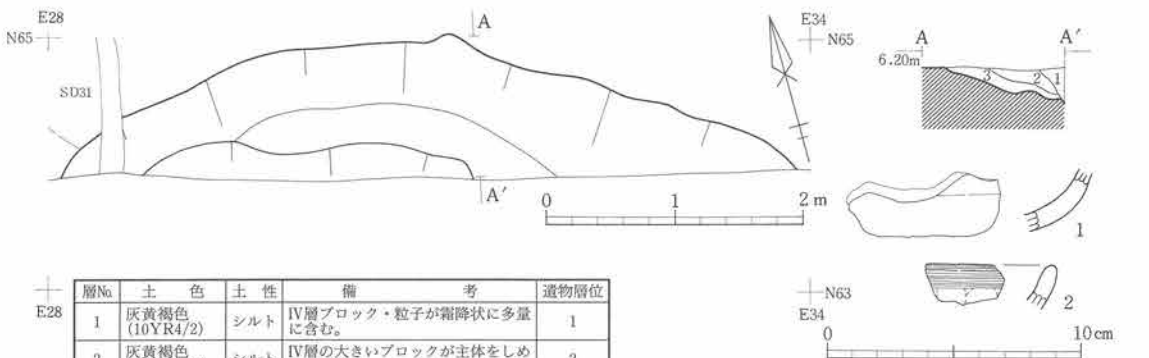
【壁・底面】検出部分では外に向かって大きく開いている。

【出土遺物】土師器破片1点・須恵器破片1点・土師質土器2点が出土している。図示できた土師質土器はともに皿で、手づくね成形のものである。

第5号井戸跡（SE 5）

【位置】VI区　N66.9～69　E18.7～20.6

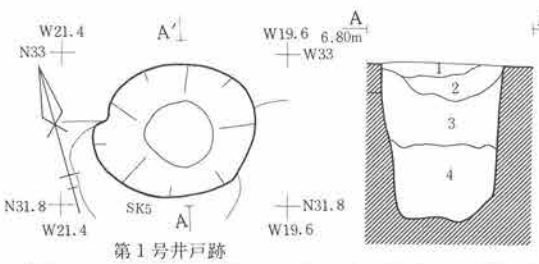
【確認面・重複】大半は第2号竪穴遺構床面で確認された。全体が検出された。第2号竪穴遺構より古



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	IV層ブロック・粒子が霜降状に多量に含む。	1
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	IV層の大きいブロックが主体をしめる。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を含むが、1・2層に比べて少ない。	3

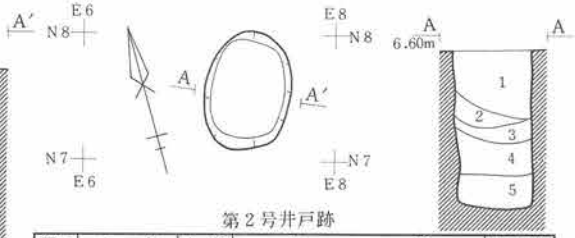
番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師質土器　皿	堆1～3	外面はヨコナデ？	－	－	体部破片	－	－	－	82-29	I-20
2	土師質土器　皿	堆1～3	外面はヨコナデ・オサエ。内面はヨコナデ。白針わずかに含む。	－	－	口縁部破片	－	－	－	82-24	I-21

第122図　第4号井戸跡と出土遺物



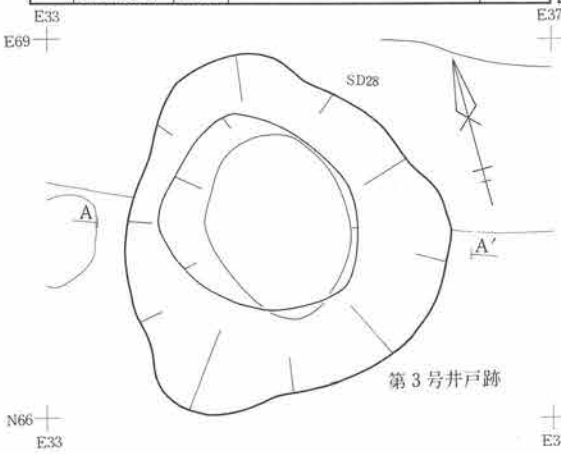
第1号井戸跡

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子をまばらに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	混入物はなく、1層より黒みが強い。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	やや大きめのIV層ブロックを全体的に含む。人為堆積の可能性あり。	3
4	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト		4

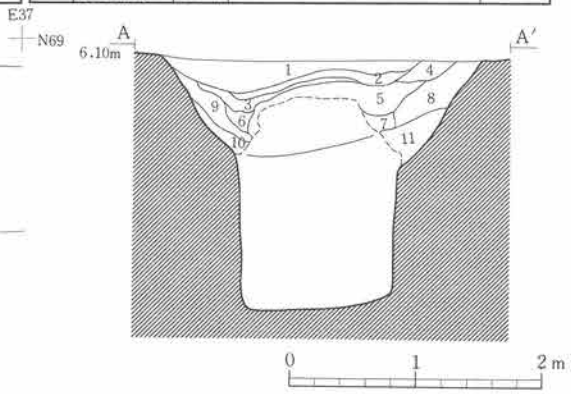


第2号井戸跡

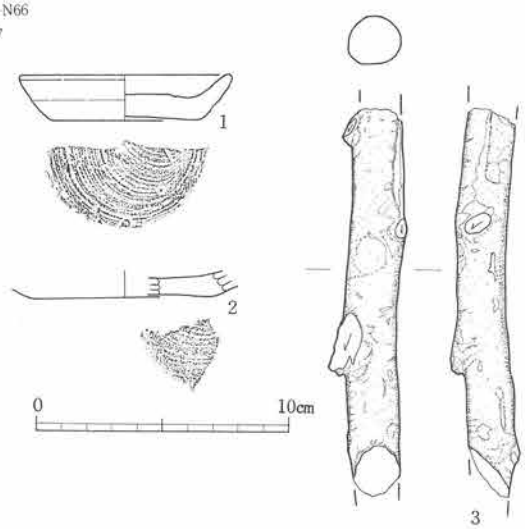
層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト		3
4	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	4
5	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	IV層ブロックを少量含む。	5



第3号井戸跡



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含み、焼土・炭化物を少量含む。	1
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト		2
3	黒色 (10YR1.7/1)	シルト	木炭が主体。その中に焼土が混じる。	3
4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	4
5	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂土 (細砂)	粘土層が薄く挟在し、ラミナ状をなす。	5
6	黒褐色 (10YR3/1)	粘土		6
7	オリーブ褐色 (2.5Y4/3)	シルト	粘土と砂が挟在し、ラミナ状をなす。	7
8	灰黄褐色 (10YR3/1)	粘土	IV層粒子が霜降状に混じる。	8
9	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	IV層粒子を多量に、焼土・炭化物も少量含む。	9
10	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土	炭化物を少量含む。	10
11	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂	IV層ブロック・粒子が混在する。	11



第3号井戸跡

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師質土器 皿	堆1層	内外面ともロクロナデ。底面は回転糸切り。白針わずかに含む。	—	—	全体の 1/2	8.5	6.0	1.8	82-2	I-22
2	土師質土器 皿	堆1層	内外面ともロクロナデ。底面は回転糸切り。	—	—	底部 1/6	—	(7.2)	—	82-30	I-23

番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真図版	登録番号
3	杭材	堆最下層	丸太材。先端加工あり。枝払い加工4面。胴体部に樹皮あり。	—	(15.4)	2.0	1.9	—	L-4

第123図　第1・2・3号井戸跡と出土遺物

く、第31・32号溝跡より新しい。

【平面形・規模】素掘りの井戸である。平面形はほぼ円形に近く、規模は長軸2.20m、短軸1.78m、深さ1.89mである。

【堆積土】9層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。下半部には泥炭質の層が多く、層中からは植物遺体が多く出土している。

【壁・底面】全体的にほぼ円筒形をなしており、壁は底面から直角に立ち上がる。底面は平坦に近い。

【出土遺物】堆積土中から土器・木製品などの多量の遺物が出土している。その中で図示できたのは土師器1点・土師質土器14点・石製品1点・木製品40点・縄2点である。この他に土師質土器破片が5点ある(写真82－14など)。土師質土器は全て皿で、図示したのは製作時にロクロを使用しているものである。底部切り離しは回転糸切りによるもので、その後の再調整はみられない。破片の中には2点、手づくね成形のものも含まれていた。木製品は曲物・箸・串・杭材・木材片である。この中で量的に多いのが箸で、26点を数える。その中で完存するものは5本にすぎず、ほかは破損品である。いずれも白木の箸で、両端が細くなる形状のものである。縄は同一個体のものと考えられ、一部に結び目が認められる。この他に植物遺体としてモモの種子が出土しており、また土壌サンプルの水洗選別により植物の微小な種子が多量に検出されている。

第6号井戸跡（SE 6）

【位置】V区　S1.6～2.4　E93～94.4

【確認面・重複】IV層上面で確認されたが、断面観察の結果III b層上面から掘り込まれていることが確認された。半分が検出され、他は調査区外に延びており、底面までは検出できなかった。第26号ピット群の1つと重複しており、それより新しい。

【平面形・規模】素掘りの井戸かどうか明確ではない。平面形は円形と考えられ、径は1.35mである。確認された深さは1.05mである。

【堆積土】9層まで確認された。自然堆積層と人為堆積層が認められる。灰白色火山灰ブロックを含む層も確認された。

【壁・底面】検出部分は台形状を呈しており、壁は外に向かって開きながら立ち上がっている。

【出土遺物】出土していない。

第7号井戸跡（SE 7）

【位置】VIII区　N5.8～7　E98.4～99.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。全体が検出された。重複関係は認められない。

【平面形・規模】素掘りの井戸である。平面形は円形で、規模は径が1.16m、深さが1.84mである。

【堆積土】5層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。

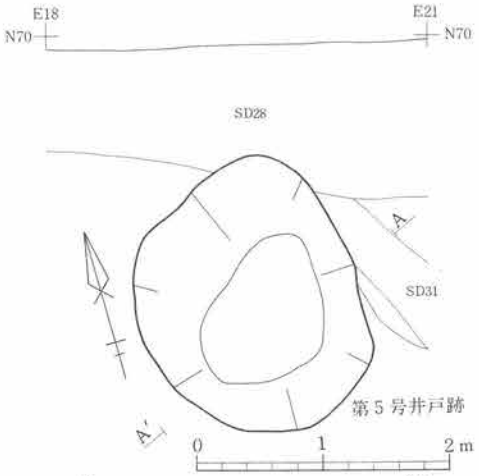
【壁・底面】全体的にほぼ円筒状を呈しており、壁は底面から直角ぎみに立ち上がっている。底面は平坦に近い。

【出土遺物】堆積土中から土器・石製品が出土しており、図示できたのは土師器1点・土師質土器1点・砥石1点である。この他に須恵器破片1点と陶器破片1点がある。土師質土器は埦で、体部から底部にかけては直線ぎみに外傾する。陶器は甕の体部破片(写真82－12)で、在地産とみられ、13～14世紀ごろのものと考えられる。この他に堆積土中よりアカニシの貝殻（写真109－3)が1点出土している。

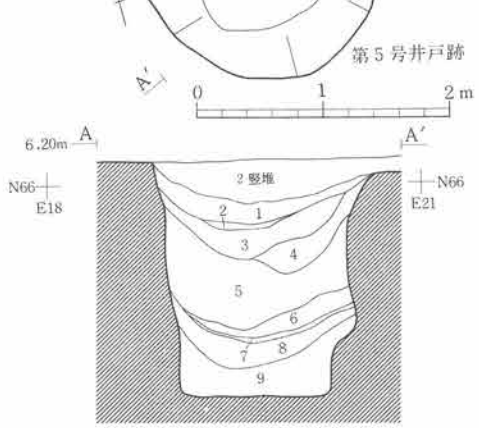
第8号井戸状遺構（SE 8）

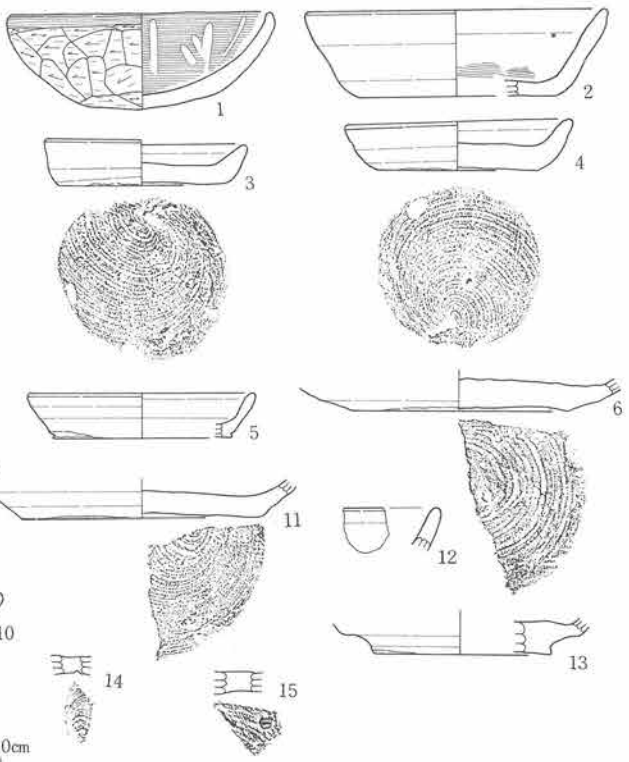
【位置】VII区　S74.9～78.3　E95.4～99

【確認面・重複】IV層上面で確認された。一部は調査区外に延びている。第77・78号溝跡と重複しており、これらより古い。この遺構には調査当初、平面形・規模などから井戸跡と考えて調査を進めたが、最終的には井戸跡と断定することができないため、井戸状遺構とした。



層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層粒子を少量、マンガン粒を多量に含む。	1
2	黒色 (10YR7/1)	粘土質シルト	炭化物が主体をなす。	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層粒子・酸化鉄斑紋を少量含む。	3
4	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	IV層ブロックを多量に含む。	4
5	黒色 (5Y2/1)	粘土	IV層ブロック・粒子が霜降状に混在する。植物遺体を含む。	5
6	黒色 (10YR1.7/1)	泥炭質粘土	植物遺体を多量に含む。	6
7	黒色 (10YR1.7/1)	泥炭	植物遺体からなる。	7
8	黒色 (5Y2/1)	泥炭質粘土	植物遺体を多量に含む。	8
9	暗緑灰色 (10GY4/1)	砂(細砂)	間に7.5Y3/1オリーブ黒色の粘土層をはさむ。	9

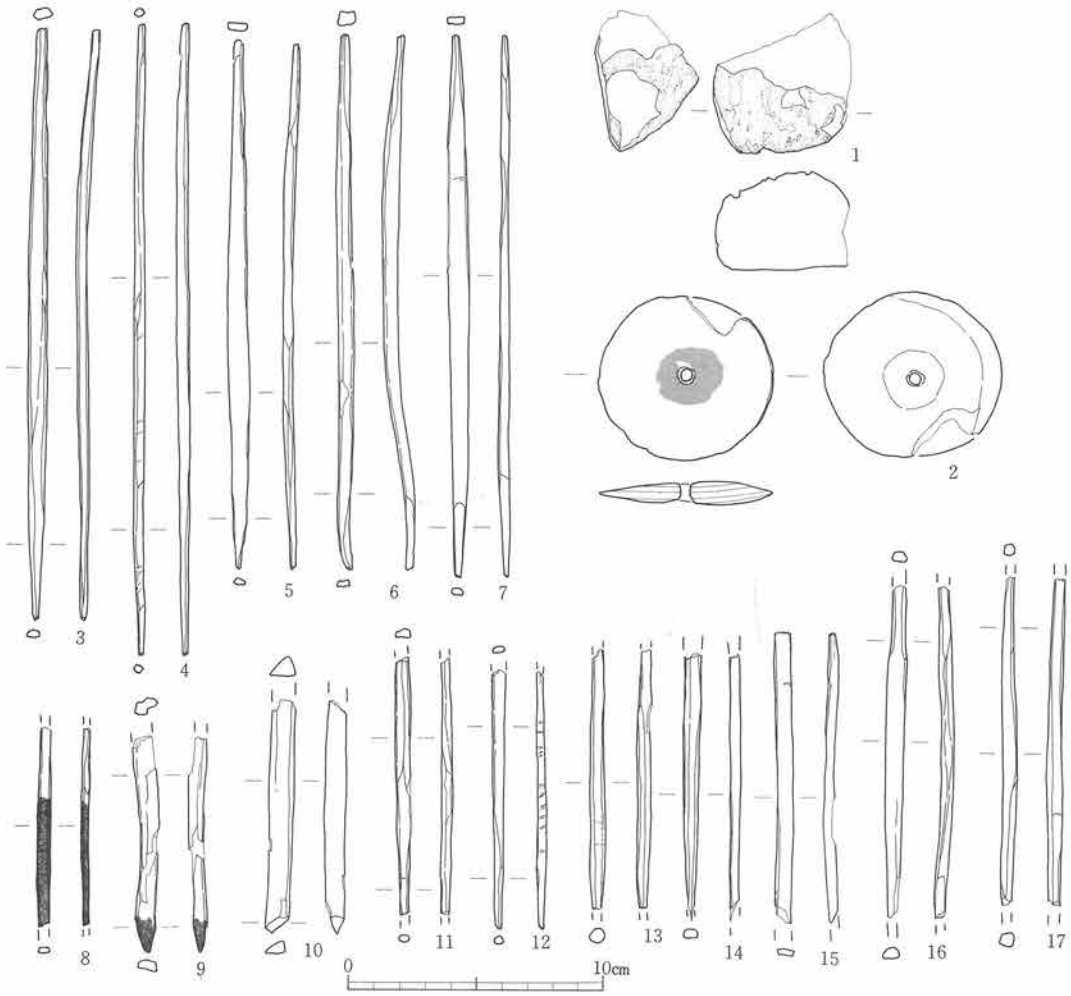




番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラミガキ。油煙が付着。	完形	10.4	—	3.8	73-1	C-188

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	土師質土器 皿	堆1層	内外面ともロクロナデ。内面見込み部分に指ナデ。底部外面に板状圧痕が認められる。	—	—	全体の 1/3	11.9	7.7	3.5	82-3	I-24
3	土師質土器 皿	堆9層	内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。白針わずかに含む。	—	—	完形	8.0	6.5	1.8	82-4	I-25
4	土師質土器 皿	堆9層	内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。白針わずかに含む。	—	—	完形	9.0	6.4	2.0	82-5	I-26
5	土師質土器 皿	堆6層	内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。白針わずかに含む。	—	—	全体の 1/8	(9.0)	(7.0)	1.8	82-16	I-27
6	土師質土器 皿	堆3層	内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。白針わずかに含む。	—	—	底部 1/3	—	8.7	—	82-19	I-28
7	土師質土器 皿	堆6層	底部は回転糸切り。	—	—	底部 1/3	—	(5.7)	—	82-11	I-29
8	土師質土器 皿	堆6層	内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。	—	—	底部 2/3	—	5.6	—	82-18	I-30
9	土師質土器 皿	堆6層	内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。白針わずかに含む。	—	—	底部 1/2	—	6.5	—	82-12	I-31
10	土師質土器 皿	堆6層	内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。白針わずかに含む。	—	—	全体の 1/4	9.5	7.6	1.7	82-17	I-32
11	土師質土器 皿	堆6層	内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。	—	—	底部 1/4	—	9.5	—	82-20	I-33
12	土師質土器 皿	堆1～3層	内外面ともロクロナデ。	—	—	口縁部破片	—	—	—	—	I-34
13	土師質土器 皿	堆6層	内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。白針わずかに含む。	—	—	底部 1/6	—	(7.0)	—	82-10	I-35
14	土師質土器 皿	堆1～3層	底部は回転糸切り。白針わずかに含む。	—	—	底部破片	—	—	—	82-13	I-36
15	土師質土器 皿	堆6層	底部は回転糸切り。白針わずかに含む。	—	—	底部破片	—	—	—	82-15	I-37

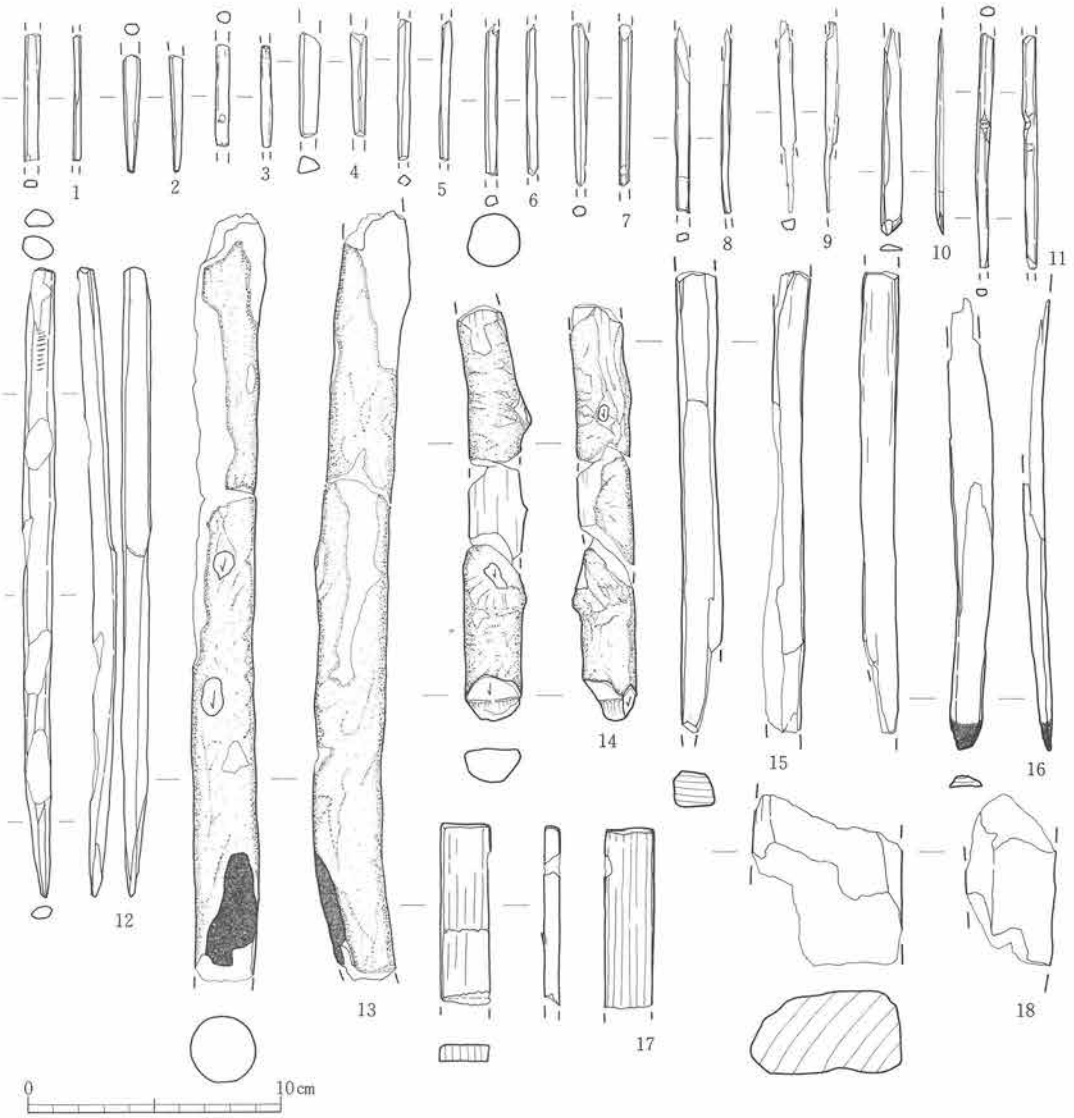
第124図　第5号井戸跡と出土遺物 (1)



番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
1	石製品	堆6層	大きく欠損。軽石製。1面が平滑に研磨されている。浮子の可能性も考えられる。	(5.3)	(5.35)	(4.3)	(27.6)	石英安山岩(軽石浮石)	—	石-38

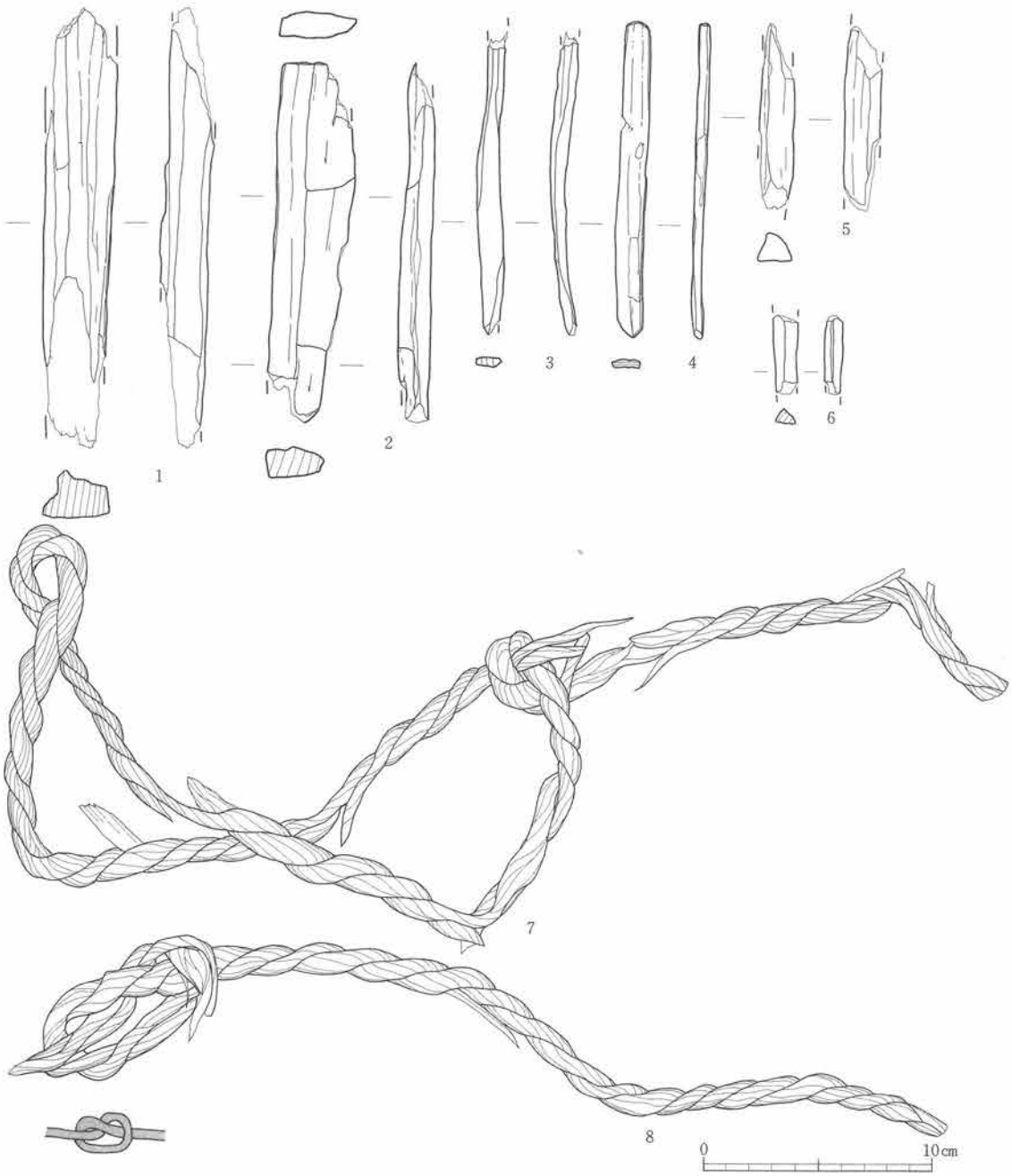
番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真図版	登録番号
2	曲物 蓋板	堆4層	円板状。中央部に孔あり(0.5cm)。黒漆が塗ってある。	ケヤキ(No.35)	6.9	6.9	0.9	105-5	L-5
3	木製品 箸	堆6層	完形。両端が細く、中央部が太い。断面は楕円形	モミ属の一種(No.66)	23.5	0.8	0.4	105-7	L-6
4	木製品 箸	堆6層	完形。両端が細く、中央部が太い。断面は円形	モミ属の一種(No.65)	25.1	0.4	0.3	105-11	L-7
5	木製品 箸	堆6層	完形。両端が細く、中央部が太い。断面は楕円形	モミ属の一種(No.67)	21.0	0.8	0.3	105-9	L-8
6	木製品 箸	堆6層	完形。両端が細く、中央部が太い。断面は長方形	モミ属の一種(No.60)	21.3	0.6	0.6	105-10	L-9
7	木製品 箸	堆6層	完形。両端が細く、中央部が太い。断面は長方形	モミ属の一種(No.64)	21.6	0.8	0.3	105-8	L-10
8	木製品 箸	堆6層	両端欠損。焦痕あり。断面は楕円形。	—	(7.8)	0.5	0.2	—	L-11
9	木製品 箸	堆6層	一端欠損。焦痕あり。断面は楕円形。	—	(8.5)	0.8	0.5	—	L-12
10	木製品 箸	堆6層	一端欠損。断面は三角形。	—	(9.2)	1.0	0.7	—	L-13
11	木製品 箸	堆6層	両端欠損。断面は楕円形。	—	(10.2)	0.6	0.4	105-16	L-14
12	木製品 箸	堆6層	両端欠損。断面は楕円形。	—	(10.2)	0.6	0.3	105-15	L-15
13	木製品 箸	堆6層	両端欠損。断面は円形に近い。	—	(10.3)	0.6	0.5	105-14	L-16
14	木製品 箸	堆6層	両端欠損。断面は楕円形。	モミ属の一種(No.63)	(10.6)	0.6	0.4	105-17	L-17
15	木製品 箸	堆6層	一端欠損。断面は長方形。	—	(11.6)	0.6	0.4	—	L-18
16	木製品 箸	堆6層	両端欠損。断面は半円形。	モミ属の一種(No.62)	(13.2)	0.7	0.4	105-13	L-19
17	木製品 箸	堆6層	両端欠損。断面は方形に近い。	モミ属の一種(No.61)	(13.0)	0.6	0.6	105-12	L-20

第125図　第5号井戸跡出土遺物 (2)



番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
1	木製品 箸	堆6層	両端欠損。断面は長方形。	—	(6.1)	0.6	0.3	—	L-21
2	木製品 箸	堆6層	一端のみ。断面は円形。	—	(4.7)	0.6	0.5	—	L-22
3	木製品 箸	堆6層	両端欠損。断面は円形。	—	(4.1)	0.6	0.5	—	L-23
4	木製品 箸	堆6層	両端欠損。断面は三角形。	—	(4.2)	0.8	0.7	—	L-24
5	木製品 箸	堆9層	両端欠損。断面は正方形。	—	(5.6)	0.4	0.4	—	L-25
6	木製品 箸	堆6層	両端欠損。断面は円形。	—	(6.0)	0.5	0.4	—	L-26
7	木製品 箸	堆4層	両端欠損。断面は楕円形。	—	(6.4)	0.7	0.6	—	L-27
8	木製品 箸	堆6層	両端欠損。断面は長方形。	—	(7.4)	0.6	0.3	—	L-28
9	木製品 箸	堆6層	両端欠損。断面は正方形。	—	(7.6)	0.6	0.4	—	L-29
10	木製品 箸	堆6層	一端欠損。断面は楕円形。	—	(8.2)	0.8	0.2	—	L-30
11	木製品 箸	堆6層	両端欠損。断面は楕円形。	—	(9.3)	0.5	0.4	—	L-31
12	木製品 串	堆6層	ほぼ完形。一端が細くなっている。断面は楕円形に近い。串が菜箸と考えられる。	ヤマウコギ(No53)	25.0	1.2	0.8	—	L-32
13	杭材	堆9層	丸太材。先端に焦痕あり。胴体部に樹皮あり。	—	(30.5)	2.5	2.7	—	L-33
14	杭材	堆6層	丸太材。先端加工。枝払い加工あり。胴体部に樹皮あり。	—	(16.5)	2.1	2.1	—	L-34
15	木材片	堆6層	分割材。両端とも欠損。加工は雑。	—	18.2	1.6	1.4	—	L-35
16	木材片	堆9層	分割材の一部。先端部に焦痕あり。	—	(17.9)	(1.7)	(0.7)	—	L-36
17	木材片	堆6層	板状の木材片。先端が欠損。柾目材。	—	7.2	1.9	0.6	—	L-37
18	木材片	堆9層	分割材の一部。	—	6.8	5.9	3.5	—	L-38

第126図　第5号井戸跡出土遺物 (3)



番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
1	木材片	堆6層	分割材。両端欠損。加工は雑。	—	(19.5)	3.0	2.1	—	L-39
2	木材片	堆6層	分割材。一端欠損。加工は雑。	—	16.0	3.3	1.5	—	L-40
3	木材片	堆9層	分割材。	—	(13.5)	1.1	(0.7)	—	L-41
4	木材片	堆9層	分割材。	—	14.0	1.2	0.5	—	L-42
5	木材片	堆9層	分割材の一部。	—	8.2	1.5	1.5	—	L-43
6	木材片	堆9層	分割材の一部。	—	(3.5)	(1.2)	(0.8)	—	L-44

番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	太さ(cm)	写真図版	登録番号
7	縄	堆9層上面	完結はしていない。2本撚り(L{z})	モミ属類以種(No49)	(119.5)	1.6	108-2	L-45
8	縄	堆9層上面	結び目(片結)あり。2本撚り(L{z})	モミ属類以種(No49)	(66.0)	1.5	108-3	L-46

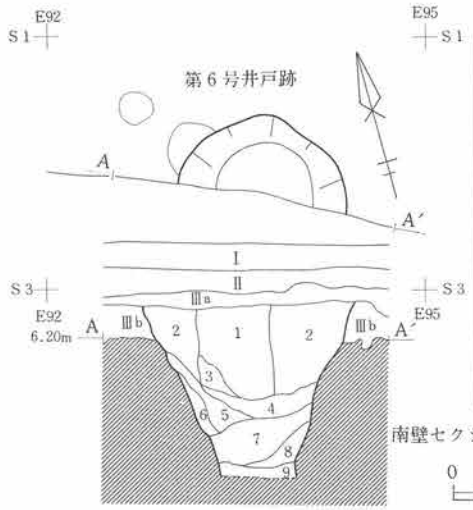
第127図　第5号井戸跡出土遺物(4)

【平面形・規模】平面形は略円形をなしており、規模は径が3.64m、深さが1.38mである。

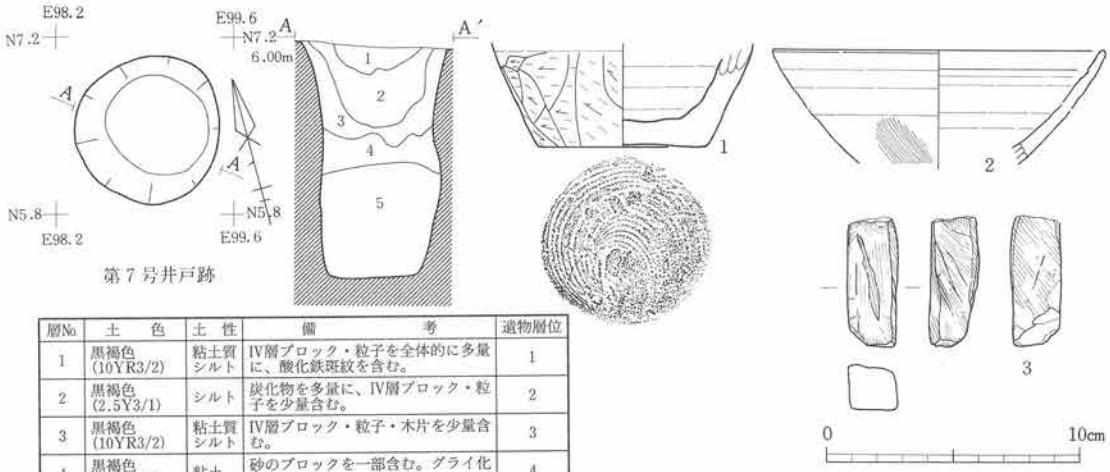
【堆積土】9層確認された。大半が自然堆積層と考えられる。上部には炭化物が、下部には植物遺体が多く含まれている。

【壁・底面】下半部は断面「U」字状をなし、底面からゆるやかに立ち上がっている。そして、上半部では外に向かってさらに大きく開いている。

【出土遺物】堆積土中から木製品を中心として多量の遺物が出土した。その中で図示できたのは土師器



層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を全体的にまばらに含む。人為堆積と考えられる。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	一部に灰白色火山灰ブロックを含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト		3
4	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	Ⅳ層ブロックをわずかに含む。	4
5	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	5
6	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	Ⅳ層を多量に含む。	6
7	オリーブ黒色 (5Y3/1)	粘土	Ⅳブロックをわずかに含む。グライ化している。	7
8	暗オリーブ灰色 (5GY3/1)	粘土	グライ化している。Ⅳ層崩落土。	8
9	黒色 (5Y2/1)	粘土	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。人為堆積と考えられる。	9



層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を全体的に多量に、酸化鉄斑紋を含む。	1
2	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	炭化物を多量に、Ⅳ層ブロック・粒子を少量含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子・木片を少量含む。	3
4	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土	砂のブロックを一部含む。グライ化している。	4
5	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土	植物遺体をわずかに含む。グライ化している。	5

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	堆2層	ロクロナデ・体部下半ヘラケズリ・回転糸切り・再調整なし。	ロクロナデ	底部～体部	—	6.6	—	—	C-189

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	土師質土器 埦	堆2層	外面はロクロナデ・ナデ。内面はロクロナデ。白針わずかに含む。	—	—	口縁部と体部破片	(13.2)	—	—	82-9	I-38

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
3	砥石	堆2層	一端部欠損。方柱状。砥面は4面。一面に研磨溝もあり。	(5.1)	2.0	1.8	(31.4)	石英安山岩質凝灰岩	97-22	石-75

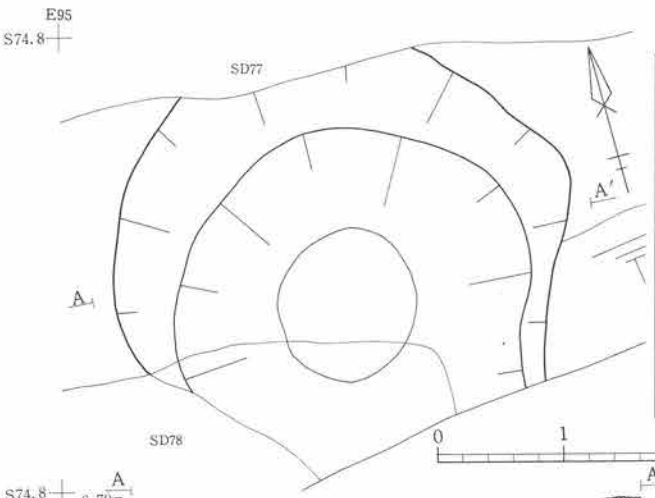
第128図　第6・7号井戸跡と出土遺物

1点・須恵器2点・灰釉陶器1点・陶器2点・古銭1点・石製品7点・木製品35点である。陶器には古瀬戸の天目茶垸と折縁の鉢があり、15世紀前後の年代のものとの鑑定を得ている。この他に図示できなかったが、常滑の甕の破片も2点出土している。石製品には石臼が1点含まれている。これは茶臼の下臼の一部と考えられる。木製品には漆器・曲物・木錘・下駄・舟形・木簡などがあり、中でも漆器が15点と多量に出土している。漆器は樹種は全てブナ属の一種で、内面は茶褐色の漆仕上げ、外面は黒色漆の上に赤色漆で草花文などの文様が描かれる例が多い。また、底部外面には「大」「一」「二」「三」などの陰刻が施されている例もみられる。木錘は3点出土しており、いずれも丸太材を切断し、その上端近くに溝をめぐらすものである。舟形は1点あり、粗い作りのものである。下駄は2点あり、ともに連歯下駄である。形状は台部が小判型で、歯部はそこから垂直におりるもので、1点は鼻緒穴がなく、未製品と考えられる。木簡は2点あり、1点は表面に「妙全禅尼」という戒名の一部を読み取ることができ、さらに下端が「位」で終わることなどから、女性の位牌と考えられる。他の1点は一面に複数の種字や「薬師」「如来」などの名が見えることから、呪符と考えられる。層中からはクルミ・モモなどの植物遺体が出土している。特にモモの種子は46点と量的に極めて多い(写真109－5)。また、土壌サンプルの水洗選別により、炭化米や微小の植物種子も多量に検出された。この他にシジミ・ヌマガイ(写真109－4)・ハマグリの貝殻が若干検出された。

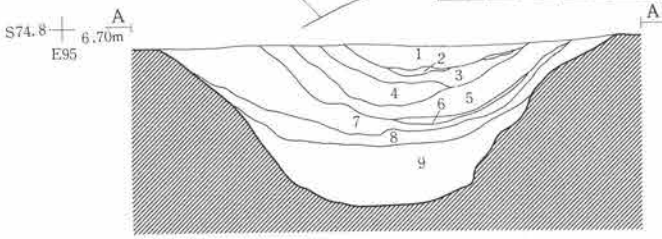
第8号井戸状遺構

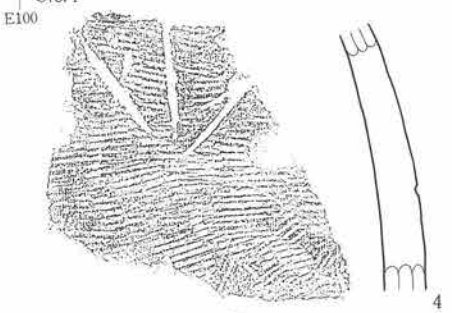
第8号井戸状遺構セクション

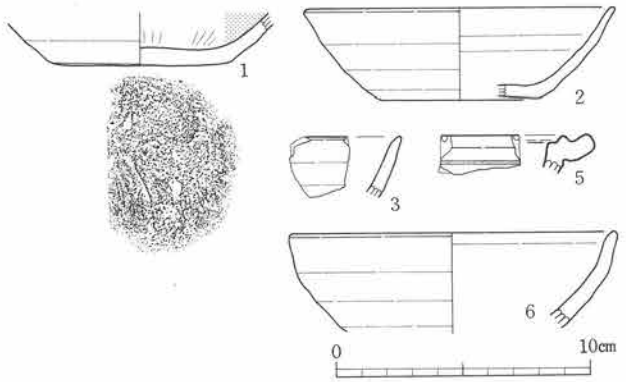
第8号井戸状遺構遺物の出土状況



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	炭化物を少量、マンガンを含む。	1
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土		
3	黒色 (10YR2/1)	粘土質シルト	炭化物を多く、木片を含む。	2
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	暗褐色ブロック・黒褐色ブロックが混在する。人為堆積土。	
5	黒色 (10YR2/1)	粘土質シルト	木片を多量に含む。	
6	オリーブ黒色 (5Y3/2)	粘土質シルト	層中に植物の細片を多く含む。	
7	黒色 (10YR2/1)	粘土質シルト	黒褐色と黒色の互層。木片を多量に含む。	3
8	オリーブ黒色 (5Y3/2)	粘土質シルト	植物遺体(木片)等を多量に含む。	
9	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土質シルト	植物遺体(木片)等を少量をIV層ブロック壁付近に多く含む。	4





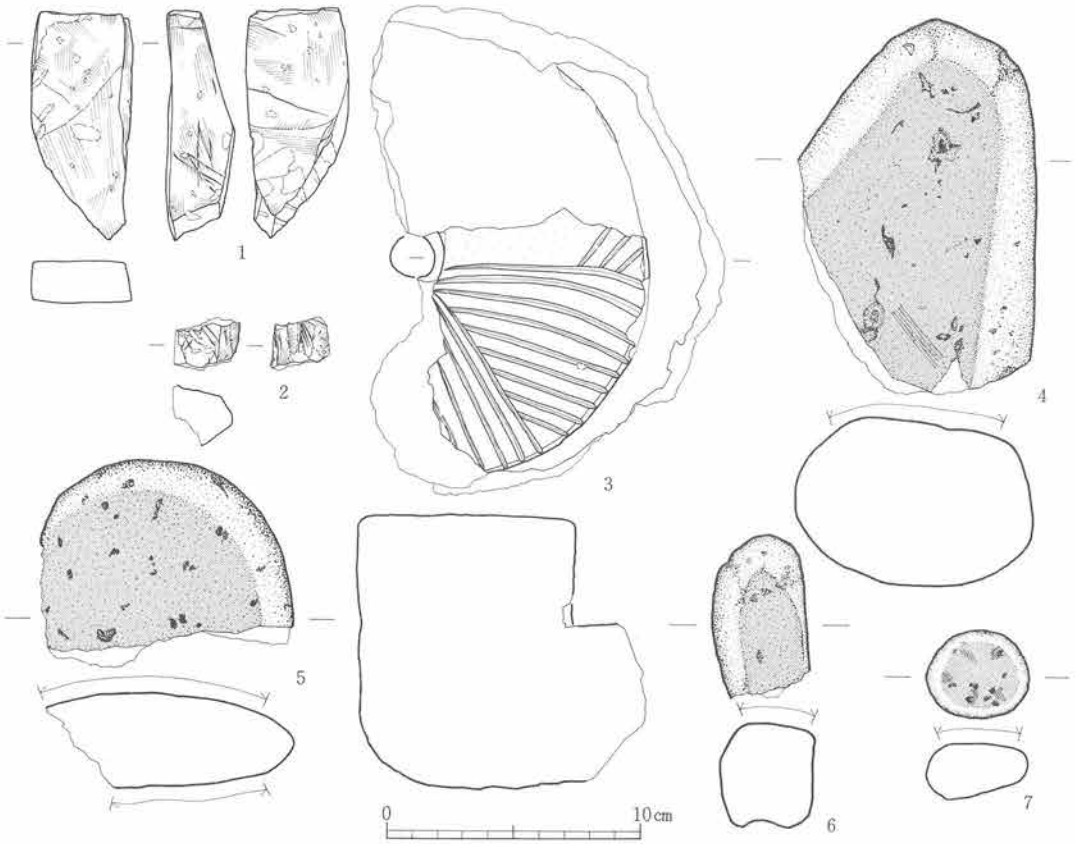


番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆2層	ロクロナデ・切り離し不明・再調整不明	ヘラミガキ・黒色処理	底部～体部	−	7.0	(2.1)	−	C-190
2	須恵器 坏	堆2層	ロクロナデ・底部切り離し不明・手持ちヘラケズリ再調整	ロクロナデ	1/3	12.3	6.2	3.6	−	E-40
3	灰釉陶器 埦	堆2層	ロクロナデ・施釉	ロクロナデ・施釉	口縁部破片	−	−	−	81-6	灰-3
4	須恵器 甕	堆2層	平行タタキ目・ヘラ描きの記号あり	ハケメ	体部破片	−	−	−	−	E-41

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
5	陶器 鉢	堆1層	折縁の鉢。内外面ともロクロナデ。灰釉。	古瀬戸	15～16C	口縁部破片	−	−	−	83-13	I-39
6	陶器 天目茶埦	堆4層	内外面ともロクロナデ。鉄釉。	古瀬戸	14C末～15C初	口縁部 1/8	(13.0)	−	−	83-11	I-40

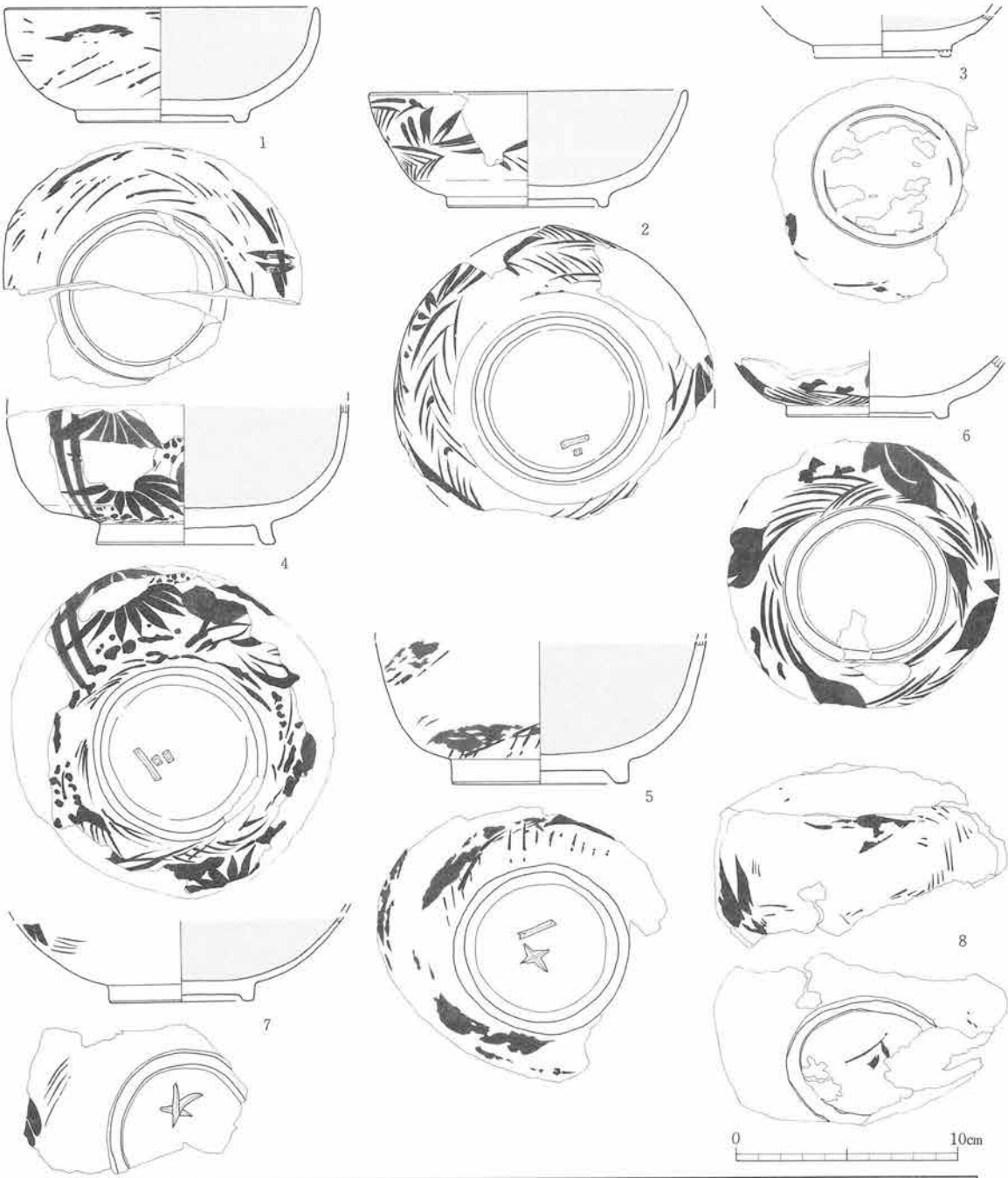
番号	種別	層位	特徴	径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
7	銅製品 古銭	堆1層	元祐通宝(北宋)。初鋳年元祐元年(1086年)。	2.4	−	0.12	−	102-28	N-38

第129図　第8号井戸状遺構と出土遺物（1）



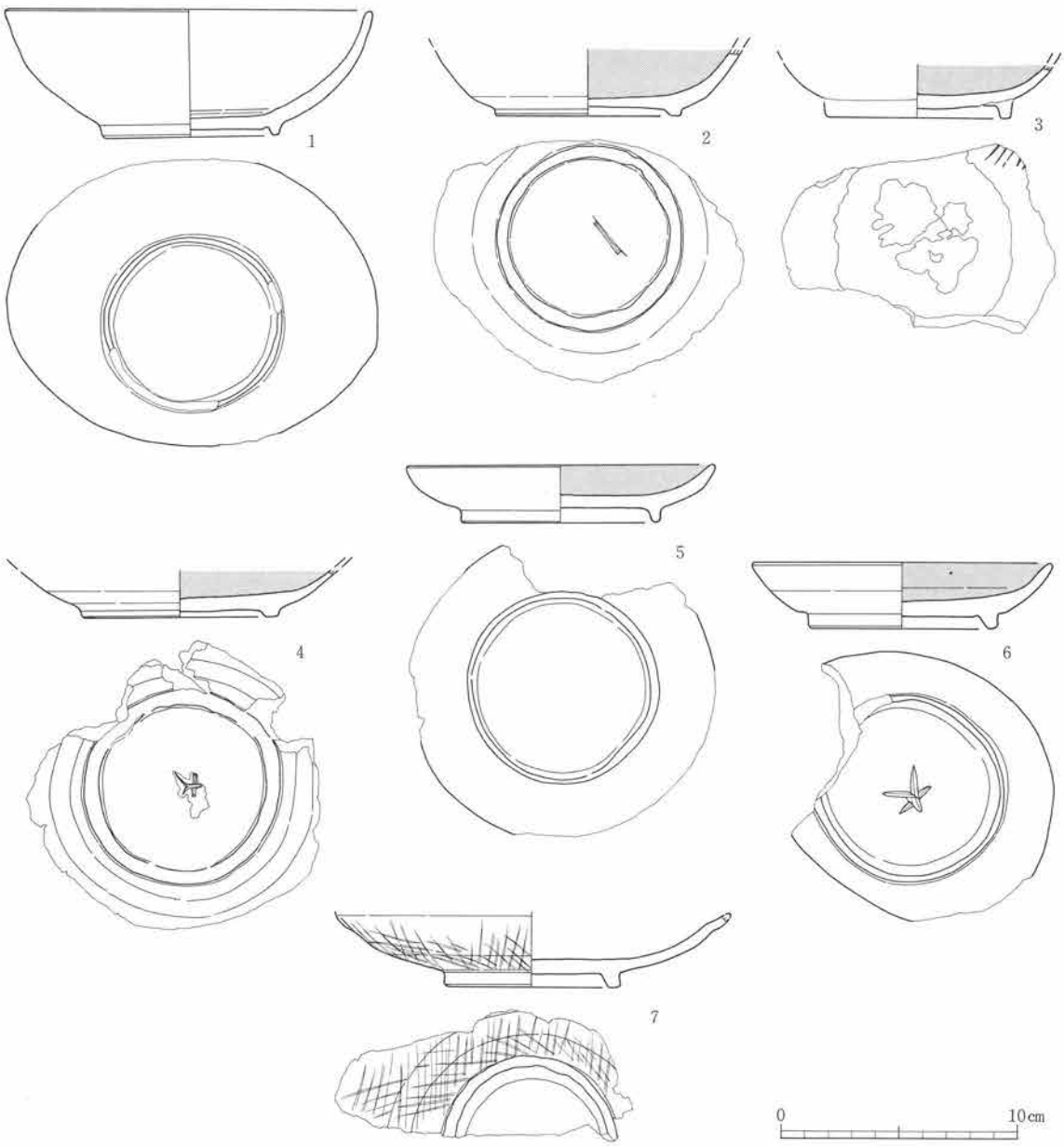
番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
1	砥石	堆2層	完形。偏平。一端部は折損した痕跡がある。軟質でシルト質の石材。砥面は4面とみられる。	9.4	3.4	2.4	120	石英安山岩質凝灰岩	97-12	石-61
2	砥石	堆2層	一部のみ。火熱を受けている。硬質のシルト質状の石材。	(2.1)	(2.5)	(2.5)	(5.1)	石英安山岩質凝灰岩	—	石-65
3	石臼	堆2層	茶臼の下臼の一部。上面には、ふくみがわずかに認められ、摩滅しているものの、臼目の溝が周縁まで達している。おそらく臼目は8分割で1分割の溝数は8つとみられる。下面中央にはえぐりが認められる。中央の孔径は1.6cm以上である。	(19.4)	(15.6)	(10.8)	(2965)	安山岩	96-9	石-33
4	磨面をもつ礫	堆2層	下部が欠損。厚みのある礫利用。磨面が一面に認められる。	(14.9)	(9.4)	(6.5)	(1060)	石英安山岩質凝灰岩	99-14	石-156
5	磨面をもつ礫	堆4層	全体の半分ほど欠損。偏平な礫利用。磨面は上下2面に認められる。	(8.3)	(9.9)	(3.8)	(320)	安山岩	—	石-142
6	磨面をもつ礫	堆3層	下部欠損。円棒状の礫利用。磨面が一面に認められる。	(6.4)	3.8	4.1	(130)	石英安山岩	—	石-153
7	磨面をもつ礫	堆3層	小さい礫利用。磨面は一面に認められる。	3.5	4.1	2.4	19.0	石英安山岩質凝灰岩	96-15	石-140

第130図　第8号井戸状遺構出土遺物（2）



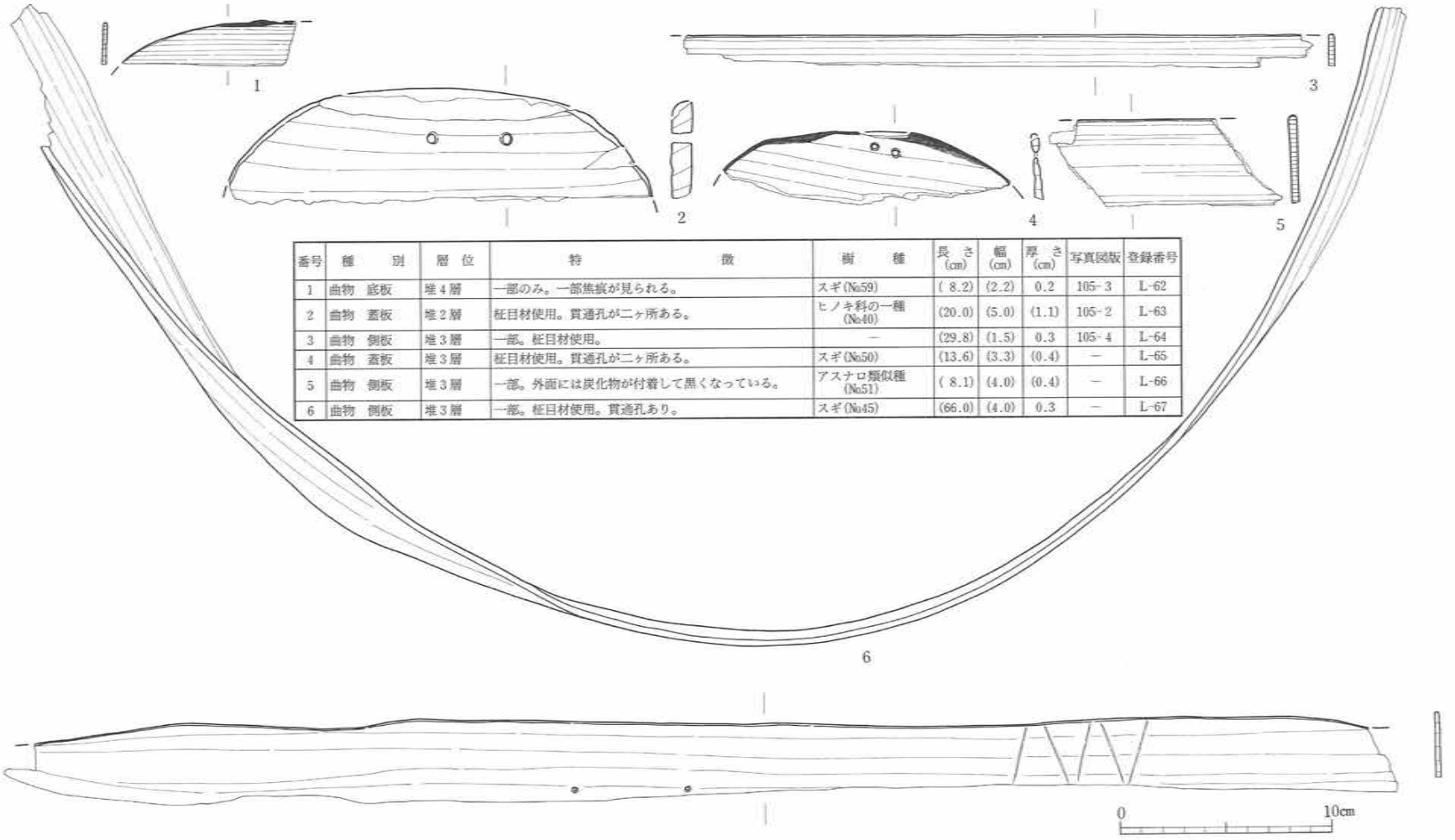
番号	種別	層位	特徴	樹種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	写真図版	登録番号
1	漆器 椀	堆2層	外面は黒色漆の上に赤色漆の文様(草花文?)。内面は茶褐色漆塗仕上げ。	ブナ属の一種(No.2)	(14.1)	7.6	5.2	103-2	L-47
2	漆器 椀	堆2層	外面は黒色漆の上に赤色漆の文様(草花文)。内面は茶褐色漆塗仕上げ。底部外面に漆塗付け後「二」の線刻あり。	ブナ属の一種(No.8)	14.4	8.2	5.3	103-8	L-48
3	漆器 椀	堆2層	外面は黒色漆の上に赤色漆の文様。内面は茶褐色漆塗。ほとんど剝落している。	ブナ属の一種(No.5)	(10.0)	(6.2)	—	103-6	L-49
4	漆器 椀	堆2層	外面は黒色漆の上に赤色漆の文様(草花文)。内面は茶褐色漆塗仕上げ。底部外面は黒色漆のみ。製作後に「三」の線刻あり。	ブナ属の一種(No.9)	(15.3)	8.0	—	104-1	L-50
5	漆器 椀	堆2層	外面は黒色漆の上に赤色漆と茶褐色漆文様。内面は茶褐色漆塗仕上げ。底部外面に「一」「×」の線刻あり。	ブナ属の一種(No.6)	(14.8)	7.9	—	103-5	L-51
6	漆器 椀	堆3層	外面は黒色漆の上に赤色漆と茶褐色漆で文様(草花文)。内面は黒色漆塗仕上げ。(底部内面に製作後についた数本のキズあり。)底部外面は黒色漆塗のみ。	ブナ属の一種(No15)	(12.2)	7.2	—	104-3	L-52
7	漆器 椀	堆2層	外面は黒色漆の上に赤色漆の文様。内面は茶褐色漆塗仕上げ。底部の外面に「大」の線刻あり。	ブナ属の一種(No.3)	(14.6)	(6.4)	—	103-3	L-53
8	漆器 椀	堆2層	ゆがみが大きく、計測不可。外面は黒色漆の上に赤色漆の文様。内面は茶褐色漆塗仕上げ。	ブナ属の一種(No.4)	—	(4.8)	—	103-4	L-54

第131図　第8号井戸状遺構出土遺物（3）



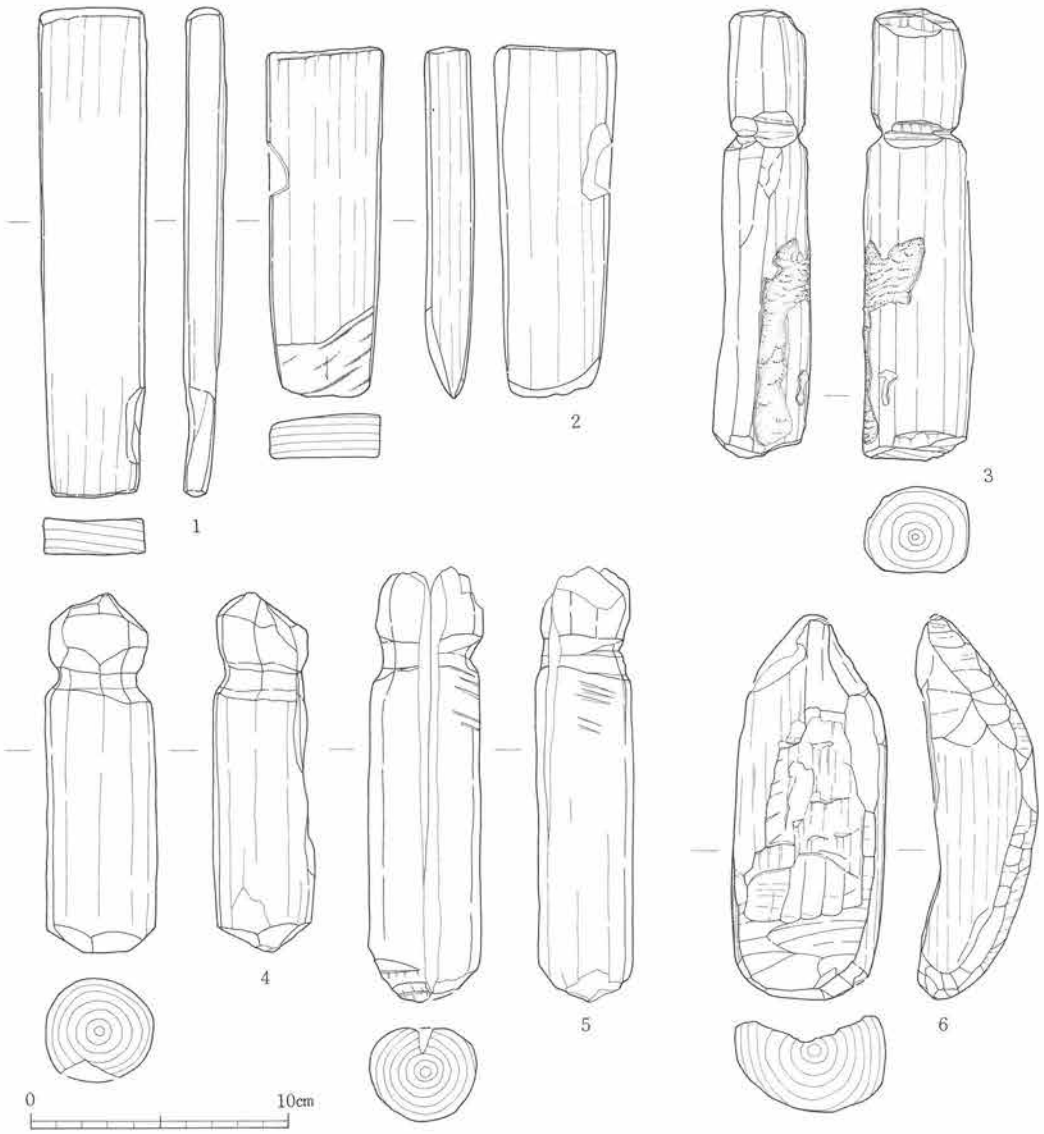
番号	種別	層位	特徴	樹種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	写真図版	登録番号
1	漆器 椀	堆2層	両面とも黒色漆塗仕上げ。文様は認められない。	ブナ属の一種(No.7)	15.4	7.4	5.6	103-7	L-55
2	漆器 椀	堆2層	外面は黒色漆塗仕上げ。内面は茶褐色漆塗仕上げ。底部外面に漆塗付以前に「一」の線刻あり。	ブナ属の一種(No10)	(13.0)	7.8	—	104-4	L-56
3	漆器 皿?	堆4層	外面は黒色漆の上に赤色漆の文様。内面は茶褐色漆塗仕上げ。	ブナ属の一種(No16)	(11.4)	(7.8)	—	—	L-57
4	漆器 皿?	堆2層	外面は黒色漆塗仕上げ。内面は茶褐色漆塗仕上げ。底部外面に漆塗付後に「大」の線刻あり。	ブナ属の一種(No11)	(13.3)	7.2	—	—	L-58
5	漆器 皿	堆3層	外面は黒色漆塗仕上げ。内面は茶褐色漆塗仕上げ。文様は認められない。	ブナ属の一種(No14)	(13.0)	8.4	2.5	104-5	L-59
6	漆器 皿	堆3層	外面は黒色漆塗仕上げ。内面は茶褐色漆塗仕上げ。底部外面中央に「大」という製作後の線刻あり。	ブナ属の一種(No13)	(12.7)	8.0	(2.8)	104-2	L-60
7	漆器 皿?	堆3層	製作時にできたとみられる細かいキズあり。漆膜が全面に剝落している。	ブナ属の一種(No12)	(16.6)	(7.4)	—	103-9	L-61

第132図　第8号井戸状遺構出土遺物（4）



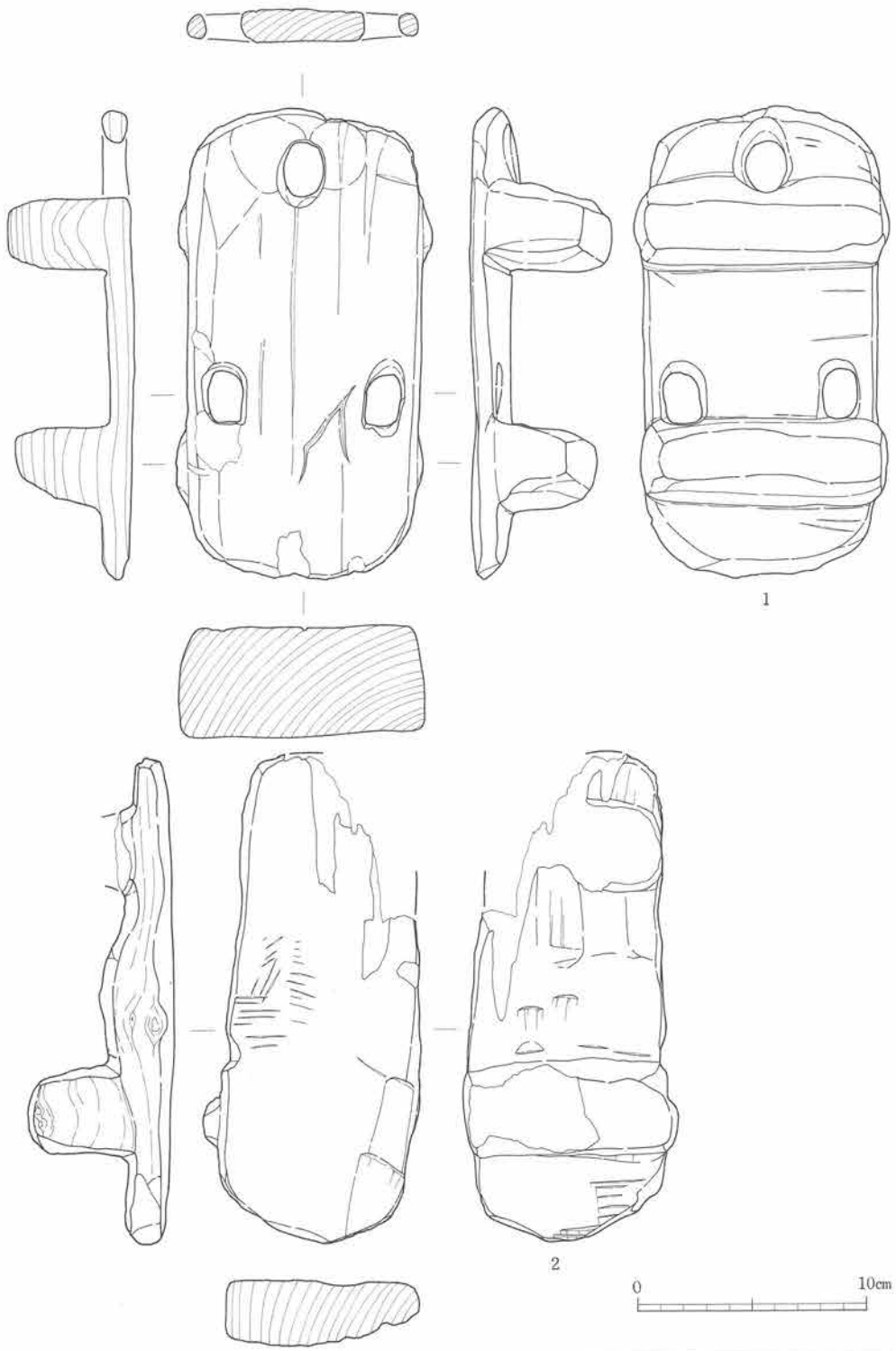
番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
1	曲物 底板	堆4層	一部のみ。一部焦痕が見られる。	スギ(No.59)	(8.2)	(2.2)	0.2	105-3	L-62
2	曲物 蓋板	堆2層	柾目材使用。貫通孔が二ヶ所ある。	ヒノキ科の一種(No.40)	(20.0)	(5.0)	(1.1)	105-2	L-63
3	曲物 側板	堆3層	一部。柾目材使用。	—	(29.8)	(1.5)	0.3	105-4	L-64
4	曲物 蓋板	堆3層	柾目材使用。貫通孔が二ヶ所ある。	スギ(No.50)	(13.6)	(3.3)	(0.4)	—	L-65
5	曲物 側板	堆3層	一部。外面には炭化物が付着して黒くなっている。	アスナロ類似種(No.51)	(8.1)	(4.0)	(0.4)	—	L-66
6	曲物 側板	堆3層	一部。柾目材使用。貫通孔あり。	スギ(No.45)	(66.0)	(4.0)	0.3	—	L-67

第133図　第8号井戸状遺構出土遺物（5）



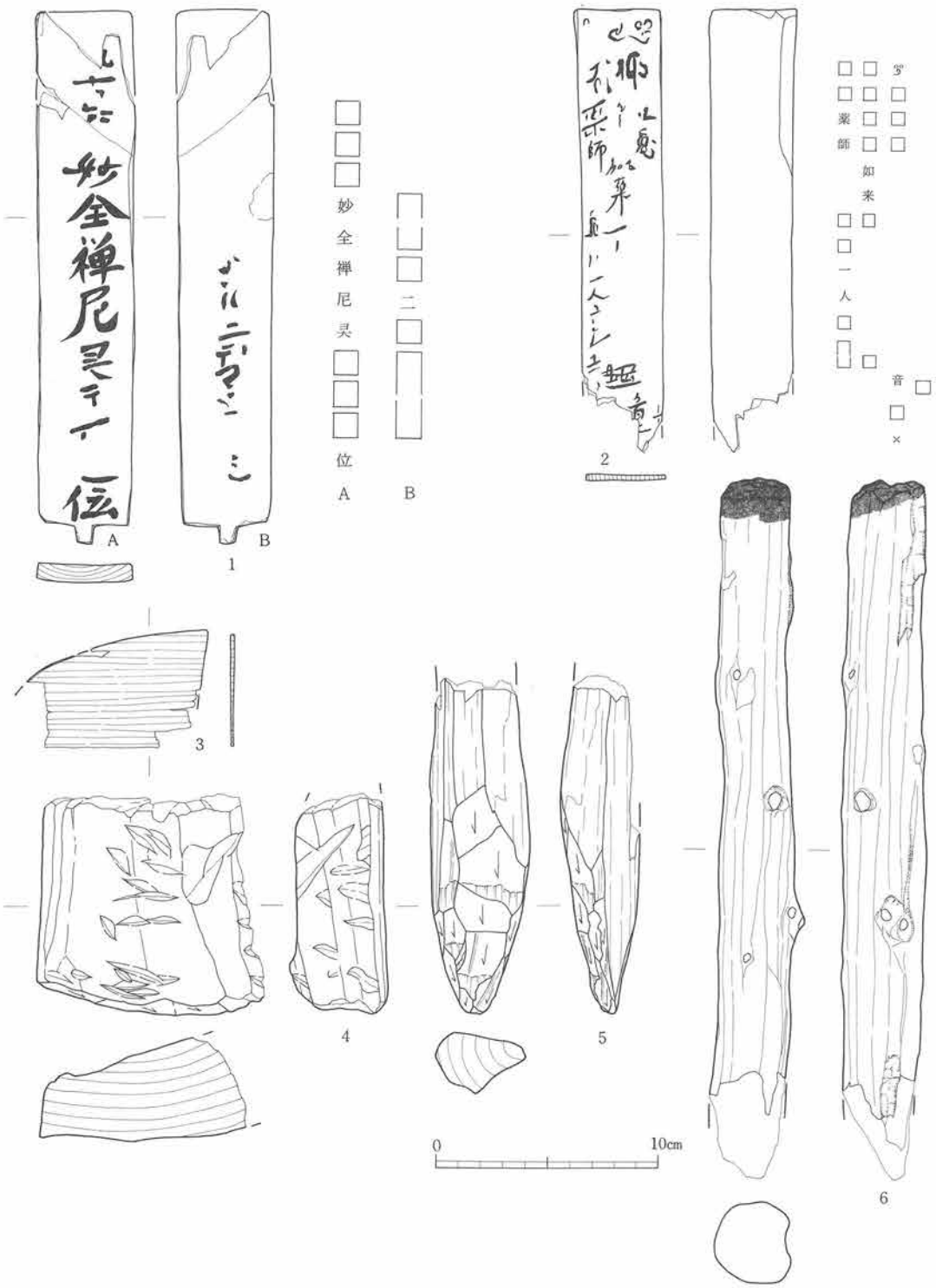
番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真図版	登録番号
1	曲物 容器の側板？	堆2層	板目材使用。中央部と両端の色調が異なる。	スギ(No.41)	19.4	4.0	1.3	105-1	L-68
2	木製品	堆1層	一部欠損。板目材。先端が薄く加工されている。先端部に焦痕がみられる。	コナラ属コナラ亜属 コナラ節の一種 (No.42)	13.9	4.6	1.6	107-2	L-69
3	木錘	堆2層	一部欠損。丸太材使用。半面に樹皮・樹肌を残す。上端近くに溝がめぐる。	リョウブ(No.48)	17.9	4.3	3.7	106-11	L-70
4	木錘	堆2層	一部欠損。丸太材使用。その上端近くに溝がめぐる。	ブナ属の一種(No.49)	14.2	4.2	4.3	106-9	L-71
5	木錘	堆3層	一部欠損。丸太材使用。表面樹肌。上端近くに溝がめぐる。	アワブキ(No.38)	17.3	4.4	4.4	106-10	L-72
6	木製品　舟形	堆3層	芯持材を素材とし、舷は素材の樹肌を大きく残す。船首は三角状。舟槽は粗く刳りぬかれている。	エゴノキ属の一種 (No.47)	(15.2)	6.0	3.05	107-1	L-73

第134図　第8号井戸状遺構出土遺物（6）



番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真図版	登録番号
1	連歯下駄	堆2層	完形。板目材。台部は小判型をなす。歯部は台部からほぼ垂直におりる。鼻緒穴は楕円形に近い。	クリ(No22)	20.8	10.9	1.4	105-19	L-74
2	連歯下駄	堆3層	一部欠損。作りが雑で、鼻緒穴がないことから、製作途中のものと考えられる。柾目材。	クリ(No24)	(21.2)	8.6	2.9	—	L-75

第135図　第8号井戸状遺構出土遺物（7）



番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
1	木簡 位牌	堆2層	一部欠損。板目材。長方形をなす。下端には差し込むための突起がつく。両面に文字が書いてある。	モミ属の一種(No36)	24.5	4.3	0.8	107-7	L-124
2	木簡 呪符	堆2層	一端欠損。柾目材。長方形と考えられる。文字は一面にのみ書かれている。	スギ(No37)	(20.2)	3.8	0.3	108-1	L-125
3	木製品	堆3層	薄い柾目材使用。曲物底板の再利用か。	−	(7.8)	(5.2)	(0.1)	−	L-76
4	木材片	堆3層	先端・胴体部に加工痕はあるが、用途不明である。	−	(10.1)	(10.2)	(4.0)	−	L-77
5	杭材	堆2層	分割材。全面加工。	−	(15.4)	4.5	3.5	−	L-78
6	杭材	堆3層	丸太材。先端部欠損。枝払い加工あり。頭部に焦痕あり。	−	(31.9)	3.4	3.8	−	L-79A

第136図　第8号井戸状遺構出土遺物（8）

6．火葬墓

第1号火葬墓

【位置】II区　S1～1.4　W8～8.35

【確認面・重複】第10号竪穴住居跡の堆積土上面で確認された。付近の断面観察からはIII a 層上面から掘り込まれた可能性が考えられる。火葬人骨およびその下部の土坑が検出された。第10号竪穴住居跡と重複しており、それより新しい。

【平面形・方向・規模】土坑は平面形がほぼ楕円形をなし、その長軸方向は真北より大きく東に寄っており、N－35.5°－Eである。火葬人骨はこの土坑内のやや東寄りに、約50cmの範囲に分布していた。歯骨を含む顎骨部分がややまとまりをもつほかは各種の部位が散在する状況を示している。土坑の長軸は41cm、短軸が32cm、深さは22cmである。

【堆積土】火葬人骨の下部に1層認められた。炭化物・焼土をわずかに含む黒褐色土である。

【壁・底面】土坑の断面は皿状をなしており、壁は底面からゆるやかに立ち上がる。壁面および底面には火熱を受けた痕跡は認められなかった。

【特記事項】25cm南に第2号火葬墓があり、時期的に関連するものと考えられる。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片が4点出土したのみである。

第2号火葬墓

【位置】II区　S1.5～2.1　W8.15～8.5

【確認面・重複】第10号竪穴住居跡の堆積土上面で確認された。火葬人骨の一部と下部の土坑が検出された。第10号竪穴住居跡と重複しており、それより新しい。

【平面形・方向・規模】土坑は不整の楕円形をなしており、その長軸方向は真北よりやや東に寄っており、N－10°－Eである。火葬人骨はこの土坑内の南東壁部分に一部のみが検出された。大きく削平されて失われた可能性が高い。土坑は長軸が52cm、短軸が29cm、深さが19cmである。

【堆積土】1層認められた。種々のブロックが混在する層である。

【壁・底面】土坑の断面は逆台形に近く、壁は底面からやや急に立ち上がり、外傾する。壁面および底面には火熱を受けた痕跡は認められなかった。

【特記事項】25cm北に第1号火葬墓があり、時期的に関連するものと考えられる。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片が4点出土したのみである。

第3号火葬墓

【位置】IV区　N36.7～37.2　E37.6～38.2

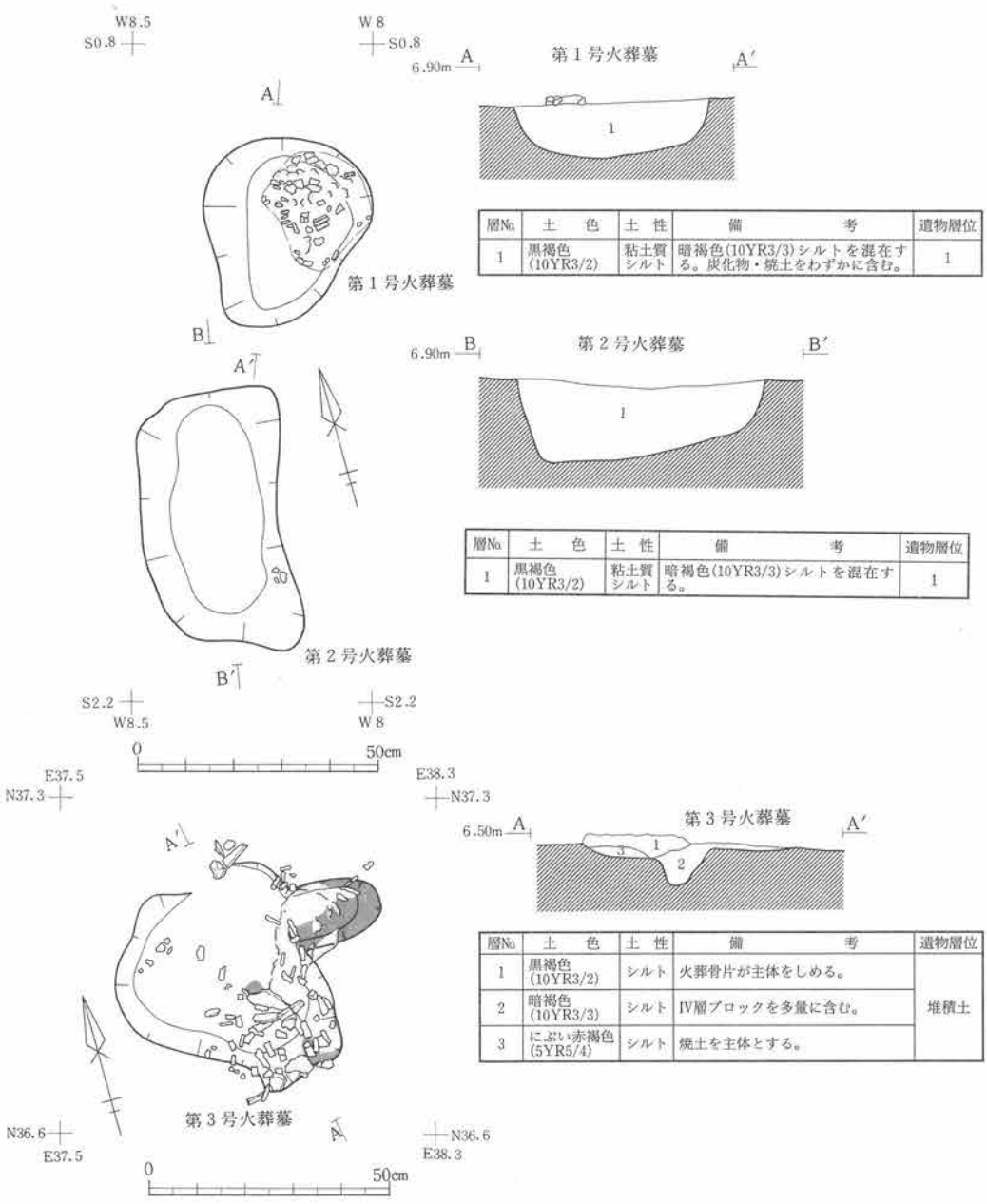
【確認面・重複】III層中で確認された。火葬人骨および土坑が検出された。削平が大きく及んでおり、土坑は底面付近がわずかに残っている。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】土坑は不規則な形状をしているが、本来は隅丸方形を呈していた可能性が考えられる。その規模は南北が48cm、東西が40cmで、深さは2～3cmである。また、東辺には凸字形の張り出しがあり、その長さは18cmである。火葬人骨はこの土坑の南半部を中心に散在していた。土坑外の人骨は削平により移動したものと考えられる。

【堆積土】3層確認された。人骨は底面からやや浮いており、1層中からほとんど検出された。底面直上の層は、焼土を主体としている。

【壁・底面】土坑の壁はほとんど残存しておらず、その立ち上がりは不明である。底面は凹凸があり、特に中央部にはピット状の落ち込みもみられる。また、底面から壁面にかけては凸字形の張り出し部分を中心に焼け面が所々に認められた。したがって検出された火葬人骨はこの土坑内で火葬にされたものと考えられる。

【出土遺物】出土していない。



層No.	土　色	土　性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	暗褐色(10YR3/3)シルトを混在する。炭化物・焼土をわずかに含む。	1

層No.	土　色	土　性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	暗褐色(10YR3/3)シルトを混在する。	1

層No.	土　色	土　性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	火葬骨片が主体をしめる。	堆積土
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロックを多量に含む。	
3	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	シルト	焼土を主体とする。	

第137図　第１・２・３号火葬墓

7．鍛冶遺構

【位置】V区　N0.4～S1.9　E58～59.8

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。この鍛冶遺構は鍛冶炉とそれに付属する作業場とみられる土坑からなっている。これらは位置的に隣接していること、いずれからも鉄滓が出土することなどから同一遺構とみなした。第37号溝跡・第18号ピット群の一部と重複しており、前者より古く、後者よりは新しい。

【平面形・方向・規模】鍛冶炉は大きく削平を受けており、残存部分は径15cmのほぼ円形をなしている。その炉底は径10cmを計り、残存する深さは2cmである。その周囲は径約60cm、深さ約20cmの掘り方になっている。土坑は断面観察の結果、新旧2つの土坑（A・B）に分かれる可能性が考えられるようになった。土坑Aは径が約80cmの不整円形をなしており、深さは24cmである。土坑Bは一部の検出であり、さらに西と南に広がるようである。検出部分では不整形をなし、東西・南北とも1.3mを計り、深さは32cmである。

【堆積土】鍛冶炉では1層確認された。焼土・炭化物粒を含む層である。土坑Aは2層確認された。層中からは鉄滓が多く出土している。土坑Bは6層確認された。いくつかの層からは鉄滓が検出しており、また、下半の層は人為堆積層である。

【壁・底面】鍛冶炉は断面が皿状をなし、壁は底面からゆるやかに大きく開く。壁・底面とも火熱により堅くしまっている。また、その周辺にも火熱が及んでおり、それにより、環元層・酸化層になっている。土坑Aは断面が逆台形状をなし、底面はほぼ平坦である。土坑Bはゆるやかに底面へと移行しているが、壁面が一定していない。

【出土遺物】図示できたのは土坑の堆積土から出土した土師器1点・須恵器3点・フイゴの羽口1点である。この他に、土師器破片が40点・赤焼土器破片1点・須恵器破片18点出土している。また、土坑A・Bからは前述したように鉄滓が個数で112個、重量で1.2kgの量が出土しており（写真109－2）、また、土壌中からは鍛造剝片も検出されている。

8．土　坑

第1号土坑（SK 1）

【位置】I区　N32.4～33.2　W76.8～78.3

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。全体が検出された。重複はない。

【平面形・方向・規模】平面形は不整楕円形をなす。方向は東西方向にやや近く、N－63.5°－Wである。規模は長軸が1.54m、短軸が70cm、深さが18cmである。

【堆積土】1層のみで、人為堆積層と考えられる。

【壁・底面】底面は皿状を呈し、壁面とも起伏が著しい。壁の立ち上がりは極めてゆるやかである。

【出土遺物】出土していない。

第2号土坑（SK 2）

【位置】I区　N33.8～34.7　W41.9～43.3

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。全体が検出された。第9号溝跡、第11号溝跡と重複しており、いずれよりも新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形をなす。方向は東西方向に近く、N－70°－Wである。規模は長軸が1.46m、短軸が91cm、深さが44cmである。

【堆積土】1層のみで、人為堆積層と考えられる。

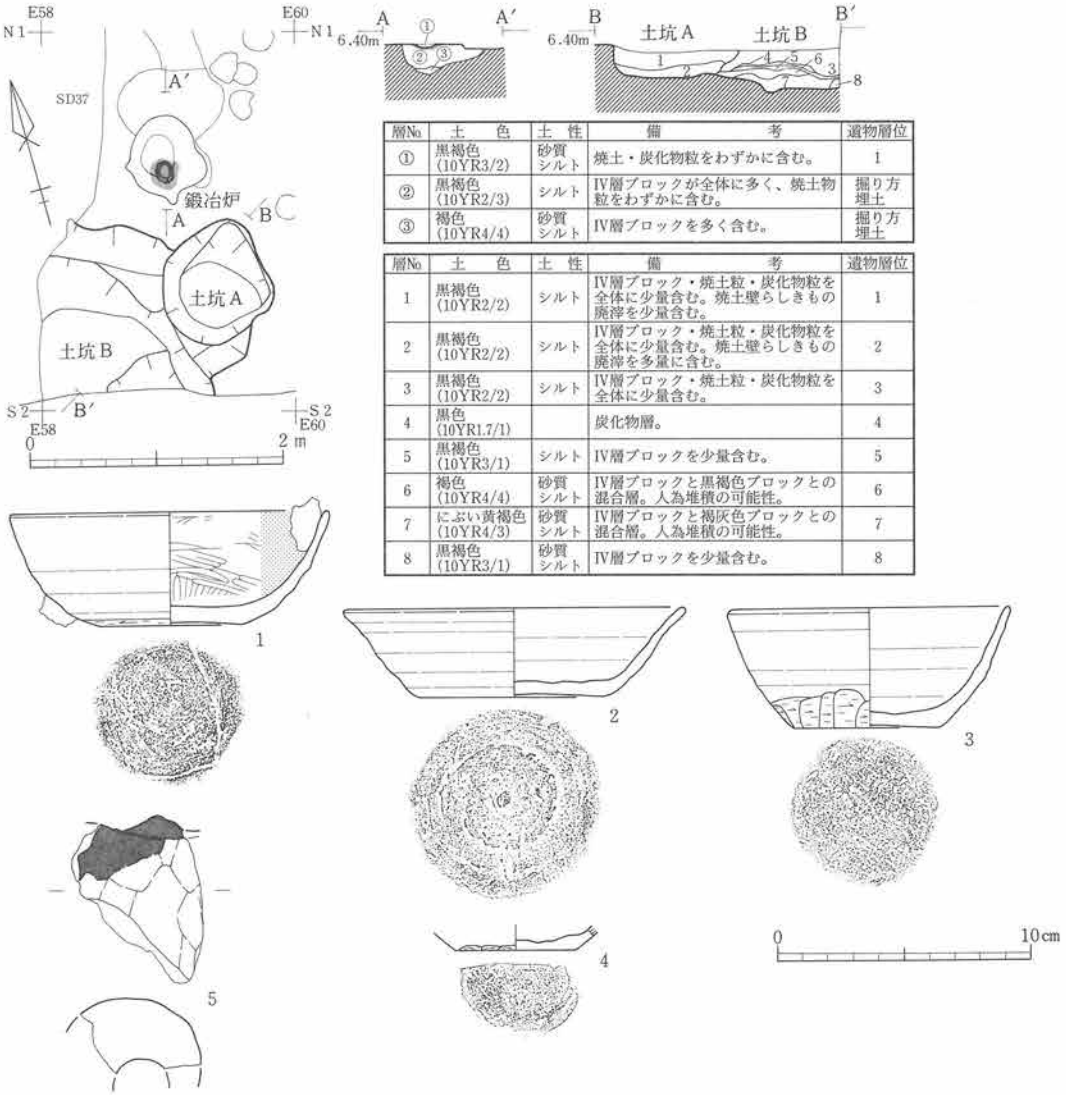
【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁はそこから急角度にほぼ直立ぎみに立ち上がる。断面は「U」字形に近い。

【出土遺物】堆積土中から縄文土器の破片が2点出土したのみである。

第3号土坑（SK 3）

【位置】I区　N33.7～34.3　W30.7～31.3

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。全体が検



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
①	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	焼土・炭化物粒をわずかに含む。	1
②	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロックが全体に多く、焼土物粒をわずかに含む。	掘り方埋土
③	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	IV層ブロックを多く含む。	掘り方埋土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック・焼土粒・炭化物粒を全体に少量含む。焼土壁らしきもの廃滓を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック・焼土粒・炭化物粒を全体に少量含む。焼土壁らしきもの廃滓を多量に含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック・焼土粒・炭化物粒を全体に少量含む。	3
4	黒色 (10YR1.7/1)		炭化物層。	4
5	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	IV層ブロックを少量含む。	5
6	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	IV層ブロックと黒褐色ブロックとの混合層。人為堆積の可能性。	6
7	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	IV層ブロックと褐灰色ブロックとの混合層。人為堆積の可能性。	7
8	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	IV層ブロックを少量含む。	8

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	土坑 堆2層	ロクロナデ。底部回転糸切り。底部周辺および体部下半に回転ヘラケズリ。	ヘラミガキ・黒色処理。溶解物付着	体～底部全体あり 口縁部1/5	(12.7)	5.6	4.5	—	C-191
2	須恵器 坏	土坑 堆3層	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。再調整なし。火だすきあり。	ロクロナデ。火だすきあり。	底部全体あり 口縁部一部	(13.6)	7.5	3.5	—	E-42
3	須恵器 坏	土坑 堆3層	ロクロナデ。底部全面、体部下方にかけて手持ちヘラケズリ。	ロクロナデ	完形	11.2	5.9	4.8	78-11	E-43
4	須恵器 坏	土坑 堆6・7層	ロクロナデ。底部～体部にかけて手持ちヘラケズリ。	ロクロナデ	底部のみ	—	4.8	—	—	E-44

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
5	フイゴの羽口	堆	先端部破片。外面オサエ。先端に溶解物付着。	(6.7)	(4.9)	(3.0)	65.5	1.9	94-7	土-38

第138図　鍛冶遺構と出土遺物

出された。重複はない。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形をなす。方向は真北方向よりやや東に寄っており、N－16°－Eである。規模は長軸が70cm、短軸が57cm、深さが24

cmである。

【堆積土】2層認められ、自然堆積層である。

【壁・底面】断面が「U」字形をなしており、底面からゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】底面からわずかに浮いた状態で、堆積土中から土器が出土した。いずれも壁面や堆積土の傾斜に沿っている。図示できたのは土師器3点で、その他に8点の土師器破片がある。土師器はいずれも製作時にロクロを使用していない。坏は体・底部が丸底で、口縁部との境で内側に屈曲するものと外側に屈曲するものとがある。

第4号土坑（SK 4）

【位置】I区　N27.4～28.5　W20.5～21.9

【確認面・重複】IV層上面で確認された。全体が検出された。重複はない。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形をなす。方向は真北方向より大きく西に寄っており、N－34.5°－Wである。規模は長軸が1.42m、短軸が96cm、深さが19cmである。

【堆積土】2層認められ、いずれも自然堆積層である。

【壁・底面】底面は皿状を呈し、壁面とも起伏が著しい。壁の立ち上がりは極めてゆるやかである。

【出土遺物】図示できるものはないが、堆積土中から非ロクロの土師器破片が1点出土している。

第5号土坑（SK 5）

【位置】I区　N31.5～32.4　W19.9～21.3

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第1号井戸跡により大きく損なわれている。第1号井戸跡、第3号竪穴住居跡と重複しており、前者よりは古く、後者よりは新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形をなすものと考えられる。径は約1.40mである。

【堆積土】1層のみ確認され、自然堆積層である。

【壁・底面】断面は「U」字形をなすものと考えられ、壁は底面からゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】図示できるものはないが、堆積土中から非ロクロの土師器破片が2点出土している。

第6号土坑（SK 6）

【位置】I区　N32.8～33.7　W41.1～41.6

【確認面・重複】IV層上面で確認された。一部が別の遺構で失なわれている。第2号ピット群、P2と重複しており、それよりも古い。

【平面形・方向・規模】平面形は隅丸長方形に近い。方向は真北方向よりやや東に寄り、N－11.5°－Eである。規模は長軸が79cm、短軸が49cm、深さが23cmである。

【堆積土】2層認められ、自然堆積層である。

【壁・底面】断面は逆台形に近い形状をなし、底面にはやや起伏がみられ、そこから壁はゆるやかに立ち上がり、その上部は外傾している。

【出土遺物】出土していない。

第7号土坑（SK 7）

【位置】I区　N31.6～33.3　W40.7～41.1

【確認面・重複】IV層上面で確認された。溝跡に大きく切られており、一部が検出された。第7号溝跡と重複しており、これより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は長方形をなすものと推定される。方向は真北方向よりやや東に寄る。N－17.5°－Eである。規模は長軸が1.8m、短軸が30cm、深さが12.5cmである。

【堆積土】1層認められた。

【壁・底面】断面は「U」字形をなすものと考えられ、壁は底面からゆるやかに立ち上がる。

【特記事項】この遺構については土坑として把えたが、さらに南側に延びるとすれば溝跡になる可能性もある。

【出土遺物】出土していない。

第8号土坑（SK 8）

【位置】Ⅰ区　N31.1～32.1　W30.5～31

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。西側が溝跡に切られ、失われている。第9号溝跡と重複しており、これよりも古い。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形をなしている。方向はほぼ真北方向で、N－2.5°－Eである。規模は長軸方向は90cm、短軸方向は45cm、深さは36cmである。

【堆積土】4層認められ、全て自然堆積層である。堆積状況は水平状である。

【壁・底面】断面は「U」字形をなし、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、その上部では直立する。

【出土遺物】図示できるものはないが、堆積土中から土師器破片22点・赤焼土器破片1点・須恵器破片2点が出土している。

第9号土坑（SK 9）

【位置】Ⅱ区　N5.6～7.4　W106.8～109.5

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。西側は調査区外へ延びている。第6号溝状遺構と重複しており、それよりも古い。

【平面形・方向・規模】下端プランからすると西側はあとわずかで完結するものと考えられ、平面形は隅丸長方形をなすものと考えられる。長軸方向は真北方向とほぼ直交し、N－82°－Wである。規模は、残存する長軸が2.72m、短軸が1.32m、深さは68cmである。

【堆積土】10層認められた。いずれも自然堆積層で、土坑の中央部に向かい西側から将棋倒し状に堆積している。

【壁・底面】断面形は長軸が舟底状に、短軸は「U」字形に近い。壁は底面からゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】図示できたのは堆積土中から出土した土師器1点・須恵器1点・鉄製品1点である。この他に土師器破片41点・須恵器破片16点などが出土している。土師器には非ロクロとロクロの両者がみられる。

第10号土坑（SK 10）

【位置】Ⅱ区　N1.4～3.5　W101.1～102.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。ほぼ全体が検出された。第6号ピット群P13と重複しており、それよりも古い。

【平面形・方向・規模】平面形は不整楕円形をなし、方向は長軸方向でほぼ真北方向を向き、N－2.5°－Eである。規模は長軸が2.1m、短軸が1.28m、深さは44cmである。

【堆積土】5層確認された。いずれも自然堆積層で、将棋倒し状およびレンズ状に堆積している。これらの中の1層には灰白色火山灰とみられる粒子が含まれている。

【壁・底面】断面形は皿状をなしており、壁は底面との境が不明瞭で、極めてゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】図示できたのは堆積土中から出土した須恵器1点のみである。この他に土師器破片36点・須恵器破片5点が出土している。土師器には非ロクロとロクロの両者がみられる。

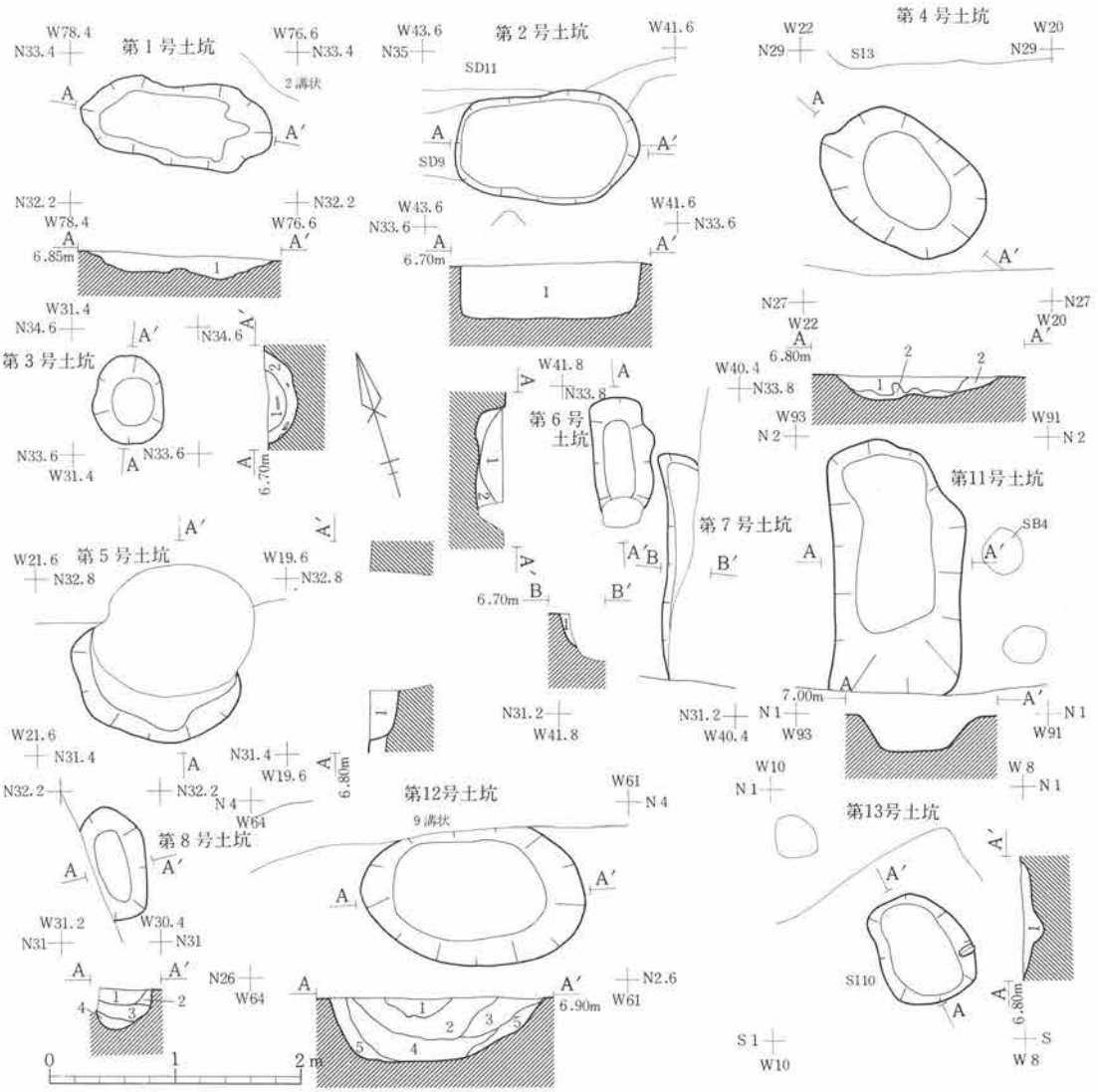
第11号土坑（SK 11）

【位置】Ⅱ区　N1.1～2　W91.7～92.8

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。南側の一部は調査区外に延びている。重複はない。

【平面形・方向・規模】平面形は不整の隅丸長方形をなすものと思われる。長軸の方向は真北方向より若干東に寄っており、N－15.5°－Eである。規模は残存する長軸が2.02mで、短軸が1.02m、深さは37cmである。

【堆積土】いずれも自然堆積層であったが、そのセクション図が調査中に紛失してしまったため、その詳細は不明である。



第1号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化材・粒子・焼土ブロック・IV層ブロック粒子を多量に含む。人為堆積

第2号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロックを多量に混在する。人為堆積。	堆

第3号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物をわずかに含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	2

第4号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層粒子をまばらに含み、中央部に炭化物をブロック状に含む。	堆
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロックを含む。	

第5号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層粒子をまばらに含む。	堆

第6号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。

第7号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。

第8号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物をわずかに含む。	堆積土
2	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	
4	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	

第12号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	3
4	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	4
5	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	5

第13号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	IV層ブロックを主体的に、その中に10YR3/3 シルトがブロックに混る。	1

第139図　第1～8・11～13号土坑

【壁・底面】断面形は短軸でほぼ逆台形をなし、壁は底面から大きく外傾する。しかし、南壁は底面からの立ち上がりがゆるやかである。

【出土遺物】図示できたのは堆積土中から出土した須恵器坏3点である。この他に土師器破片8点・須恵器破片3点が出土している。須恵器坏には底部切り離しが回転ヘラ切りと回転糸切りによるものの両者がみられる。

第12号土坑（SK 12）

【位置】II区　N2.7～3.8　W61.3～63.1

【確認面・重複】IV層上面で確認された。西側の一部が第9号溝状遺構によって切られているので、それよりも古い。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ楕円形をなし、その長軸方向は、N－73°－Wである。規模は長軸で1.80m、短軸でほぼ1.10mで、深さは59cmである。

【堆積土】5層確認された。いずれも自然堆積層であり、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面形はほぼ「U」字形をなしており、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、外傾している。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土中から土師器破片が9点出土している。

第13号土坑（SK 13）

【位置】II区　N0.2～S0.7　W8.4～9.2

【確認面・重複】第10号竪穴住居跡の堆積土上面で確認された。全体が検出された。第10号竪穴住居跡と重複しており、それよりも新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形をなし、その長軸方向は真北方向よりやや西に寄り、N－8.5°－Wである。規模は、長軸が90cm、短軸が74cm、深さが15cmである。

【堆積土】1層のみで、IV層ブロックなどが多量に混在しており、人為堆積と考えられる。

【壁・底面】断面形は皿状をなしており、周囲の壁は底面からゆるやかに立ち上がる。底面には凹凸がみられる。

【出土遺物】図示できたのは堆積土中から出土した須恵器坏2点と弥生土器1点であり、この他に土師器破片12点・赤焼土器破片2点・須恵器破片2点が出土している。

第14号土坑（SK 14）

【位置】II区　S0.4～1.1　W12～12.9

【確認面・重複】IV層上面で確認された。全体が検出された。重複はない。

【平面形・方向・規模】平面形は隅丸長方形で、その長軸方向は東西方向に近く、N－78°－Wである。規模は長軸が84cm、短軸が68cmで、深さは29cmである。

【堆積土】1層のみで、IV層のブロック・粒子が多量に混在する層で、人為堆積と考えられる。

【壁・底面】断面形は長方形に近く、壁は底面との境が明瞭であり、そこから垂直ぎみに立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

【出土遺物】出土していない。

第15号土坑（SK 15）

【位置】II区　N1.6～S0.8　W7.8～8.3

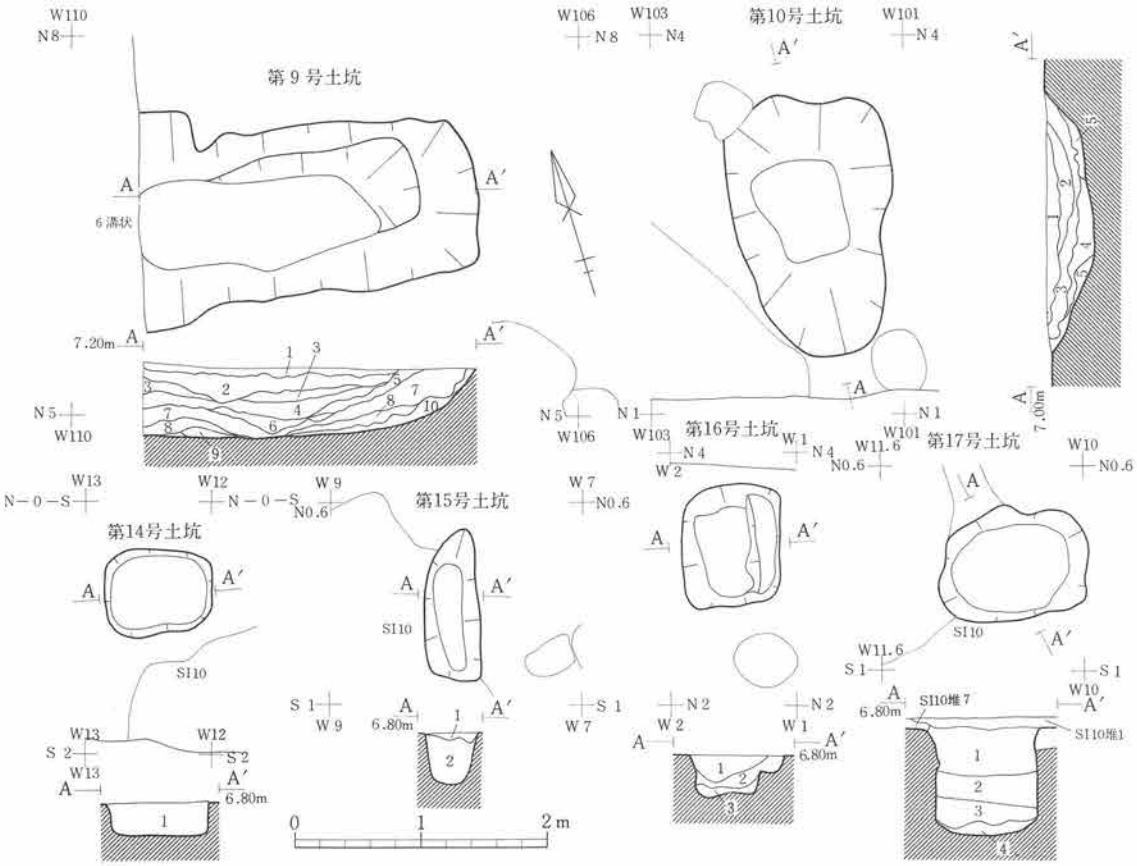
【確認面・重複】IV層上面および、第10号竪穴住居跡堆積土上面で確認された。全体が検出された。第10号竪穴住居跡と重複しており、それよりも古い。

【平面形・方向・規模】平面形は不整楕円形をなしている。その長軸方向は真北方向よりやや東に寄っており、N－11°－Eである。規模は長軸で1.20mで、短軸で45cm、深さは62cmである。

【堆積土】2層確認され、ともに自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形はほぼ「U」字形をなしており、壁は底面から直線的に開く。底面はほぼ平坦である。

【出土遺物】図示できたのは堆積土中から出土した



第9号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	IV層粒子をまばらに含む	堆積土
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物を少量含む。	
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	2層よりも、やや明るく炭化物を含まない。	
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	IV層粒子をまばらに含む。	
5	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	酸化鉄の斑紋をまばらに含む。	
6	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物を少量含む。	
7	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子を筋状に含む。	
8	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層粒子を全体的に含む。	
9	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	IV層を含まない。	
10	浅黄橙色 (10YR8/4)	粘土質シルト	壁の崩落土 酸化鉄の斑紋を部分的に含む。	

第10号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	灰白色火山灰とみられる粒子を多量に含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物を少量含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層粒子を少量含む。	
4	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層粒子をまばらに含む。	
5	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層ブロック状に含む。壁の崩落土	

第14号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロックを多量に含む。人為堆積

第15号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ほとんど含まない。	2

第16号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。
3	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。

第17号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。人為堆積	堆積土
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。人為堆積	
3	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。人為堆積	
4	褐色 (10YR4/4)	砂	黒褐色ブロックをわずかに含む。	

第140図　第9・10・14～17号土坑

縄文土器2点と弥生土器1点である。この他に土師器破片1点・須恵器破片2点が出土している。

第16号土坑（SK 16）

【位置】II区　N2.8～3.7　W1.1～1.9

【確認面・重複】IV層上面で確認された。全体が検出された。重複はない。

【平面形・方向・規模】平面形は隅丸方形に近い。その長軸方向は、真北方向よりやや東に寄っており、N－11.5°－Eである。規模は長軸で98cm、短軸で76cm、深さは36cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面形は逆台形に近く、壁は底面か直線的に開く。長軸方向の東側は壁の中位に幅20cm前後の平坦な段をもつ。底面にはいくらか起伏が認められる。

【出土遺物】出土していない。

第17号土坑（SK 17）

【位置】II区　N0.3～S0.6　W10～11.2

【確認面・重複】IV層上面および第10号竪穴住居跡の堆積土中で確認された。第10号竪穴住居跡の堆積土中から掘り込まれたものと考えられる。全体が検出された。第10号住居跡と重複しており、それより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ楕円形をなしており、その長軸方向は東西方向に近く、N－86.5°－Eである。規模は長軸が1.26m、短軸が88cmであり、深さは1.03mと比較的深い。

【堆積土】4層認められた。層の下部は自然堆積層と考えられるが、上部は水平堆積の状況を示していること、層中にIV層ブロックを多量に混在していることから人為堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなす。底面はゆるやかに弯曲しており、壁はそこから直線的に立ち上がる。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土中から土師器破片が2点出土している。

第18号土坑（SK 18）

【位置】III区　E2.7～3.5　S22.8～24.3

【確認面・重複】IV層上面で確認され、全体が検出された。重複はない。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ楕円形をなし、その長軸方向は南北方向に寄っており、N－19°－Eである。規模は長軸が1.52m、短軸が86cm、深さが16cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層で、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面は皿状を呈する。底面はほぼ水平であり、壁はそこからゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土中から土師器・須恵器の破片がそれぞれ1点ずつ出土している。

第19号土坑（SK 19）

【位置】III区　E4.2～5.2　S2.1～3.3

【確認面・重複】第21号溝跡の壁面で確認されており、それよりも古い。また、第1号竪穴遺構と重複しており、それよりも古い。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ楕円形をなし、その長軸方向は真北方向に近く、N－7°－Wである。規模は長軸が1.34m、短軸が80cm、深さが42cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層で、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面は不規則ながら「U」字形に近い。壁は底面から所々に段を形成しながらゆるやかに外方に開く。

【出土遺物】図示できたのは堆積土中から出土した須恵器1点のみである。この他に土師器破片9点・

須恵器破片が2点出土している。

第20号土坑（SK 20）

【位置】III区　E8.5～9.1　S0.2～1.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。東側半分は第20号溝跡に切られている。また、第3号小溝状遺構群と重複しており、それより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ楕円形の平面形をなすものと考えられ、その長軸方向は真北方向より東に寄り、N－11°－Eである。規模は長軸が1.1m、短軸が5cm以上、深さが16cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層かどうか不明である。

【壁・底面】断面形は逆台形をなすものと推定される。壁は平坦な底面から急角度で立ち上がっている。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土中から土師器破片が4点出土している。

第21号土坑（SK 21）

【位置】III区　E9.7～10.5　N31.7～32.9

【確認面・重複】IV層上面で確認された。東側半分は調査区外に延びている。第12号ピット群P26と重複しており、それより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形をなすものと考えられる。規模は径が1.08m、深さが38cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。焼土・炭化物を多量に含んでおり、人為堆積の可能性が考えられる。

【壁・底面】断面は長方形に近く、壁は平坦な底面からほぼ直角に立ち上がっている。

【出土遺物】出土していない。

第22号土坑（SK 22）

【位置】III区　E4.7～6.8　N4.2～5.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第23・24・27号土坑と重複しており、第24号土坑より新しく、第23・27号土坑より古い。

【平面形・方向・規模】平面形は全体としては不整楕円形をしており、当初は1つの遺構として判断していたが、調査の結果2つの土坑（A・B）に分割される可能性が高いことが判明した。Aは不整楕円形をなし、長軸方向はN－44°－Wで、規模は長軸が1.1m以上、短軸が76cm、深さが65cmである。Bはほぼ円形をなすものとみられ、規模は径が1.1m前後、深さが49cmである。

【堆積土】A・B合わせて4層確認された。水平の堆積状況や層中にIV層ブロックが多量に含まれることなどから人為堆積と考えられる。

【壁・底面】いずれも断面は逆台形に近く、壁は平坦な底面から急角度で立ち上がっている。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土中から土師器破片が6点・須恵器破片が1点出土している。

第23号土坑（SK 23）

【位置】III区　E6.5～7.3　N4.6～5.5

【確認面・重複】IV層上面で確認され、全体が検出された。第22号土坑と重複しており、それよりも新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形で、規模は径が98cm、深さが10cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層かどうかは不明である。

【壁・底面】断面は逆台形をなしており、壁は平坦な底面から急角度で立ち上がっている。

【出土遺物】出土していない。

第24号土坑（SK 24）

【位置】III区　E3.8～5.2　N3.6～5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第21号溝跡と重複しており、これより新しい。また、第22・27号土坑と重複しており、前者より新しく、後者よ

り古い。

【平面形・方向・規模】平面形は不整円形をなし、規模は径が1.3m前後で、深さは最大で59cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積土かどうかは不明である。

【壁・底面】断面は逆台形に近く、壁は底面から急角度で立ち上がる。底面は起伏が大きく、大きな凹みもみられる。

【出土遺物】図示できる遺物はないが、堆積土中から土師器破片が2点出土している。

第25号土坑（SK 25）

【位置】III区　E5.8～6.7　N6.5～7.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第3号性格不明遺構と重複しており、それよりも新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形に近く、長軸方向はN－9°－Wで、規模は長軸1.02m、短軸82cm、深さ18cmを計る。

【堆積土】1層のみ確認された。IV層ブロックが多量に含まれており、人為堆積の可能性が考えられる。

【壁・底面】断面は皿状をなしており、壁は底面からゆるやかに大きく外方に開いている。

【出土遺物】堆積土上面からノミ形石斧が1点出土したのみで、他の遺物はない。

第26土坑（SK 26）

【位置】III区　E7.8～9　N41.7～42.5

【確認面・重複】IV層上面および撹乱溝の壁面で確認された。重複は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形は不整の長方形をしており、長軸方向はN－72°－Wである。規模は長軸が1.16m、短軸が70cm、深さが76cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。IV層ブロックを多量に含んでおり、人為堆積と考えられる。

【壁・底面】断面は逆台形をしており、壁は平坦な底面から直角に近い急角度で立ち上がっている。

【出土遺物】出土していない。

第27号土坑（SK 27）

【位置】III区　E5.1～6.4　N3.6～4.6

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第22・24号土坑と重複しており、これらより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は不整楕円形をなし、その長軸方向はN－56°－Wである。規模は長軸が1.36m、短軸が70cm、深さが61cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。IV層ブロックを主体としており、人為堆積と考えられる。

【壁・底面】断面は「U」字形に近く、壁は底面からゆるやかに立ち上がる。底面・壁面とも起伏が大きい。

【出土遺物】出土していない。

第28号土坑（SK 28）

【位置】IV区　N64.6～65.5　E22.5～24.3

【確認面・重複】第2号竪穴遺構および第32号溝跡の堆積土上面で全体が確認された。したがってそれらの遺構よりも新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ楕円形をなす。方向は長軸方向で、真北から大きく西に寄っており、N－76°－Wである。規模は長軸が1.72m、短軸が90cm、深さが10cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面は皿状を呈する。底面はほぼ水平であり、壁はそこからゆるやかに立ち上がる。

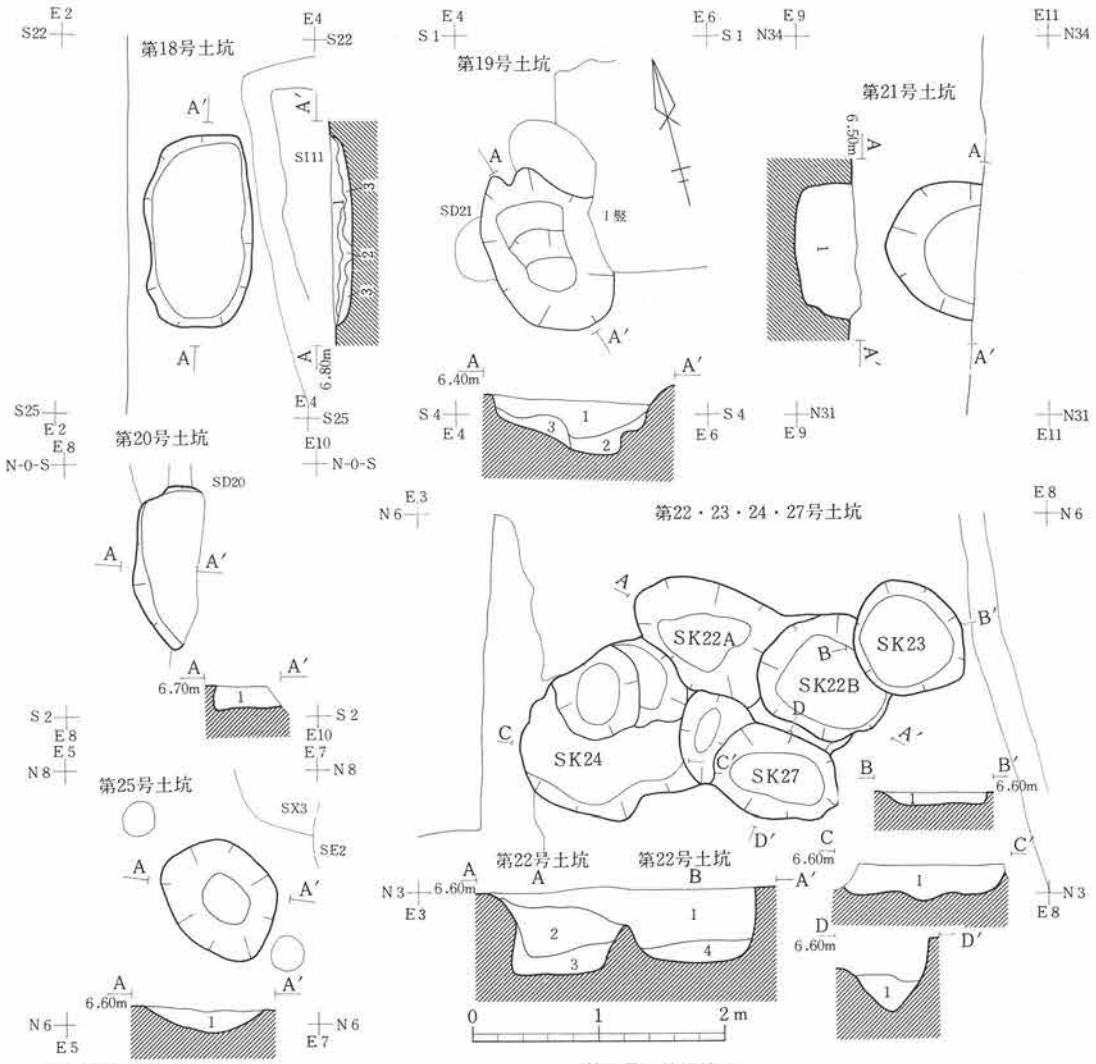
【出土遺物】出土していない。

第29号土坑（SK 29）

【位置】IV区　N64.9～65.7　E25.5～26.3

【確認面・重複】第31号溝跡の堆積土上面で全体が確認された。したがってそれよりも新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形で、規模



第18号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子を少量含む。炭化物を少量含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	IV層粒子をまばらに含む。	
3	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	IV層を多量に含む。	

第19号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	2
3	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	IV層崩落土	3

第20号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	1

第21号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	壁面でIV層粒子をブロック状に含む。焼土・炭化物を粒状に多量に含む。	

第22号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	2
3	にぶい黄橙 (10YR6/4)	粘土質シルト	10YR3/2ブロックもわずかに含む。IV層ブロックを主体とする。	3
4	にぶい黄橙 (10YR5/4)	シルト	10YR3/2ブロックもわずかに含む。IV層ブロックを主体とする。	4

第23号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。

第24号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	1

第25号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	1

第27号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	IV層ブロックを主体とする。10YR3/2のブロックわずかに含む。

第141図　第18～25・27号土坑

は径が76cm、深さが18cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面は皿状をなす。底面はやや起伏があり、壁はほぼ直角か、またはゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】出土していない。

第30号土坑（SK 30）

【位置】IV区　N64～64.9　E35.9～36.6

【確認面・重複】IV層上面でほぼ全体が確認された。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形は不整楕円形をなす。その長軸方向は真北から若干西に寄っており、N－10.5°－Wである。規模は長軸が96cm、短軸が64cm、深さが35.4cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形はほぼ「U」字形をなす。壁は底面からゆるやかに立ち上がり、外に開いている。

【出土遺物】図示できたのは堆積土中から出土した土師質土器7点であり、この他の遺物はない。これらは全て皿で、ロクロで製作されたものと手づくね成形のものがあり、前者が多い。ロクロで製作されたものは口径が7～8cm、器高が1.4～2.1cmの小形のものである。

第31号土坑（SK 31）

【位置】IV区　N65.2～67.8　E32.1～33

【確認面・重複】IV層上面でほぼ全体が確認された。第14号ピット群の1つと重複しており、それより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は細長い不整の楕円形をなす。その長軸方向は真北に近く、N－6°－Wである。規模は長軸が1.68m、短軸が60cm、深さが13cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面は皿状をなす。底面はほぼ平坦で、壁は底面との境が明瞭で、そこからやや急角度で立ち上がる。

【出土遺物】出土していない。

第32号土坑（SK 32）

【位置】IV区　N50.4～51.3　E39.3～40.3

【確認面・重複】IV層上面で全体が確認された。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形で、規模は径が88～98cm、深さは約20cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。底面付近にはIV層ブロック・粒子が多くみられ、自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は底面からゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】出土していない。

第33号土坑（SK 33）

【位置】V区　S0.7～1.8　E60.9～62.2

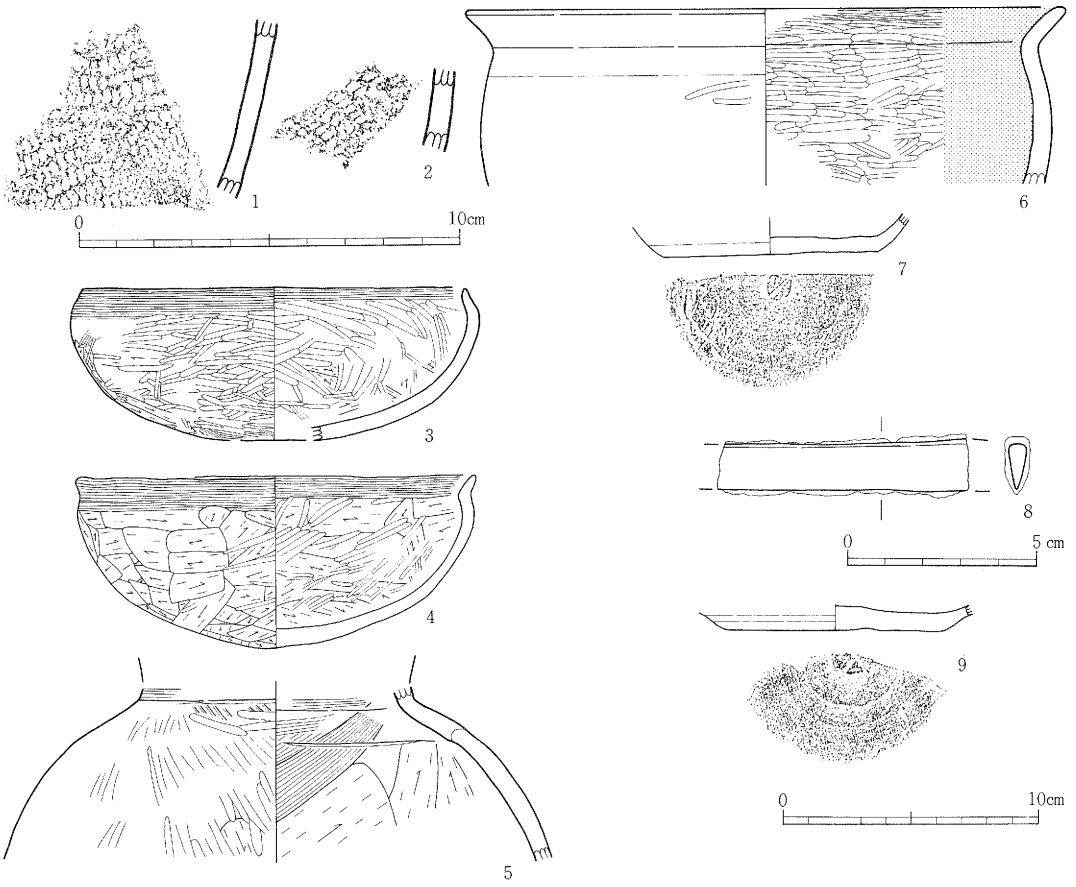
【確認面・重複】IV層上面で一部が確認された。南側はさらに調査区外に延びる。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形は不整の楕円形をなすものと推定される。その長軸方向は真北から西に若干寄っており、N－17°－Wである。規模は長軸が1.14m以上、短軸が約1mで、深さは最深で51cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層で、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、外に大きく開いている。

【出土遺物】図示したものは堆積土中の土師器4点・須恵器1点・縄文土器1点であり、この他に土



第2号土坑

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	縄文土器 深鉢	堆	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	86-7	地-10
2	縄文土器 深鉢	堆	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	—	地-11

第3号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	土師器 坏	堆2層	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	口縁部～体部の一部欠損	15.2	—	6.8	72-2	C-192
4	土師器 坏	堆2層	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	口縁部～体部1/2	15.0	—	6.0	72-1	C-193
5	土師器 甕	堆2層	ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラナデ・ナデ	体部上半破片	—	—	—	—	C-194

第9号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	土師器 甕	堆	ロクロナデ・一部ミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部上部1/8	(23.6)	—	—	—	C-195
7	須恵器 坏	堆	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	底部～体部下半1/2	—	(8.4)	—	—	E-45

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
8	鉄製品 刀子	堆	身の部分。断面は三角形。	(6.6)	1.2	0.5	(9.9)	—	N-39

第10号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
9	須恵器 坏	堆	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	底部 1/2	—	(8.4)	(1.0)	—	E-46

第142図　第2・3・9・10号土坑出土遺物

師器破片が58点・赤焼土器破片が１点・須恵器破片が12点・鉱滓が１点出土している。須恵器坏は底部の切り離しが回転ヘラ切りによるもので、その後に底部から体部下方にかけて手持ちヘラケズリの再調整が加えられている。

第34号土坑（SK 34）

【位置】Ⅴ区　N3.4～4.3　E23.8～25.1

【確認面・重複】Ⅳ層上面で一部が確認された。北側の大部分は調査区外に延びている。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形は不明である。規模は東西1.34m以上、南北が18cm以上で、深さは29cm以上である。

【堆積土】３層確認された。いずれも自然堆積層である。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなすものと推定され、壁は底面からゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】図示できたのは堆積土中から出土した須恵器１点とフイゴの羽口１点であり、この他に土師器破片が３点出土している。

第35号土坑（SK 35）

【位置】Ⅳ区　N25.1～26.5　E42.2～43.5

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。一部は南側の調査区外に延びている。第９号小溝状遺構群の一部と重複しており、それらより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形をなす。規模は径が1.4mで、深さは1.07mである。

【堆積土】７層確認された。いずれも自然堆積層で、レンズ状か将棋倒し状に堆積している。

【壁・底面】断面形は逆台形に近く、壁はほぼ平坦な底面からやや急角度で立ち上がっている。

【出土遺物】図示できたものは堆積土中から出土した須恵器坏１点のみである。この他に土師器破片が22点・須恵器破片が２点出土している。

第36号土坑（SK 36）

【位置】Ⅳ区　N28～29.8　E42.1～43.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面でほぼ全体が確認された。第９号小溝状遺構群の一部と重複しており、それらより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は不整楕円形をなし、その長軸方向は真北から若干東に寄っており、N－11.5°－Eである。規模は長軸が1.76m以上、短軸が1.28m、深さが18cmある。

【堆積土】１層のみ確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面は浅い皿状をなす。壁は底面からややゆるやかに立ち上がり、外に大きく開いている。

【出土遺物】図示できたものは赤焼土器１点のみである。この他に土師器破片が３点・須恵器破片が４点出土している。

第37号土坑（SK 37）

【位置】Ⅴ区　S6.9～7.8　E39.1～40

【確認面・重複】Ⅳ層上面で全体が確認された。第16号ピット群の１つと重複しており、それより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は不整楕円形をなし、その長軸方向はN－15.5°－Wである。規模は長軸が98cm、短軸が76cm、深さが35cmある。

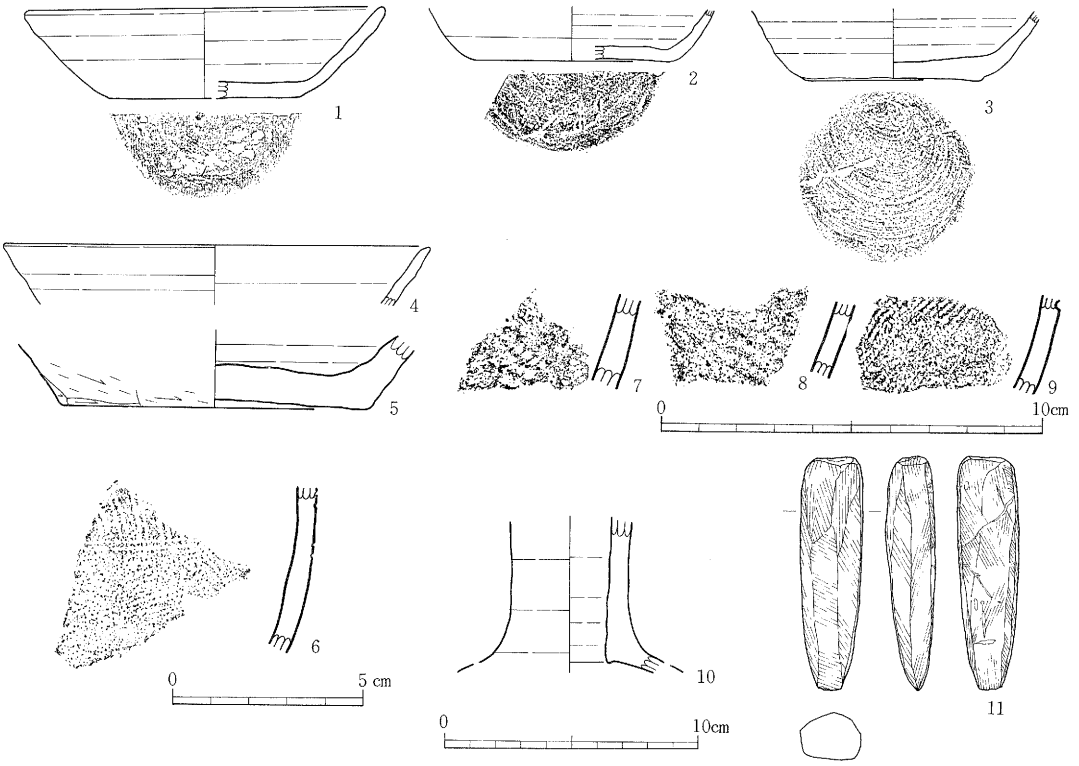
【堆積土】３層確認された。いずれも水平状の堆積状況を示している。その中の２層は人為堆積の可能性が考えられる。

【壁・底面】断面形は逆台形をなすが、底面は凹凸がみられる。壁は底面から直線的に外傾する。

【出土遺物】図示できるものとしては堆積土中から出土した土師器甕１点・須恵器坏１点があり、この他に土師器破片が５点出土している。

第38号土坑（SK 38）

【位置】Ⅴ区　S0.7～1.2　E50.9～51.7



第11号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 坏	堆	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	1/3	14.2	7.6	3.6	78-12	E-47
2	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	体部下半～底部 1/3	—	7.8	—	—	E-48
3	須恵器 坏	堆	ロクロナデ。底部回転糸切り・底部周縁部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	体部下半～底部 全体	—	7.0	—	—	E-49

第13号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	1/12	(16.8)	—	—	—	E-50
5	須恵器 甕	堆1層	ヘラケズリ・ヘラナデ後、一部ヘラケズリ	ロクロナデ	底部破片	—	(12.2)	—	—	E-51

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	弥生土器 壷	堆1層	二本平行沈線による文様。体部下半には撚糸文R。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	87-13	弥-8

第15号土坑

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	縄文土器 深鉢	堆1層	縄文LR。	体部破片	—	—	—	—	地-21
8	縄文土器 深鉢	堆1層	縄文LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	—	地-22
9	弥生土器 甕?	堆1層	撚糸文R。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	88-16	地-35

第19号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
10	須恵器 長頸壷	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	頸部破片	—	—	—	—	E-52

第25号土坑

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
11	ノミ形石斧	堆1層上面	細長い長方形状をなし、先端部ですぼまる。刃部は両刃である。全面に研磨時の擦痕が認められる。	9.3	2.5	1.7	72	凝灰質頁岩	96-5	石-27

第143図　第11・13・15・19・25号土坑出土遺物

【確認面・重複】IV層上面で一部が確認された。北と西側はそれぞれ、第21号竪穴住居跡、第34号溝跡に切られており、それらより古い。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形をなすものと推定される。規模は残存径が98cmで、深さは15cmある。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近いものと推定され、壁は底面からゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】出土していない。

第39号土坑（SK 39）

【位置】IV区　N17.7～20　E37.6～38.1

【確認面・重複】主にIV層上面で確認された。一部のみの検出で、他は調査区外へ延びている。第40号溝跡と重複しており、それよりも新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は明確ではないが、方形を基調とする可能性が考えられる。東辺の方向はほぼ真北方向を向く。規模は南北が2.26m以上、東西が54cm以上で、深さは53cmまで計れる。

【堆積土】1層のみ確認された。IV層ブロックを多量に含み、人為堆積と考えられる。

【壁・底面】壁は比較的急角度で立ち上がっている。

【特記事項】形状や規模、堆積土が人為堆積と考えられることなどから、井戸の掘り方の可能性も考えられる。

【出土遺物】図示できるものはなく、堆積土中から須恵器破片1点が出土したのみである。

第40号土坑（SK 40）

【位置】V区　S0.4～2.4　E43.8～46.3

【確認面・重複】IV層上面で確認された。南側の一部は調査区外に延びている。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形は不整の円形をなす。その規模は径が2.46m、深さは71cmある。

【堆積土】5層確認された。いずれも自然堆積層であり、周辺から将棋倒し状に堆積している。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は皿状の底面から明瞭な境をもたずにゆるやかに立ち上がり、外方に大きく開いている。

【出土遺物】底面および堆積土中から土器・土製品・鉄製品などが多量に出土した。その中で図示できたのは土師器6点・須恵器13点・灰釉陶器1点・土錘1点・鉄製の鋤鍬先1点である。この他に土師器破片が509点・須恵器破片が167点出土している。破片を含めてみると、土師器は坏・甕があり、いずれもほとんどがロクロで製作されている。須恵器は坏・蓋・甕・壷があり、坏の底部切り離しは回転ヘラ切りと回転糸切りがあり、前者が多いようである。また、その後に回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリの再調整が加えられる例が半数認められる。灰釉陶器は長頸壷とみられ、胎土は極めて緻密で内外面ともに光沢をもっている。

第41号土坑（SK 41）

【位置】V区　S2～2.3　E41.8～42.6

【確認面・重複】IV層上面で確認された。一部の検出で、他は調査区外に延びている。第16号ピット群の1つと重複しており、それより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は不明である。規模は東西が84cm以上、南北が15cm以上、深さは19cmである。

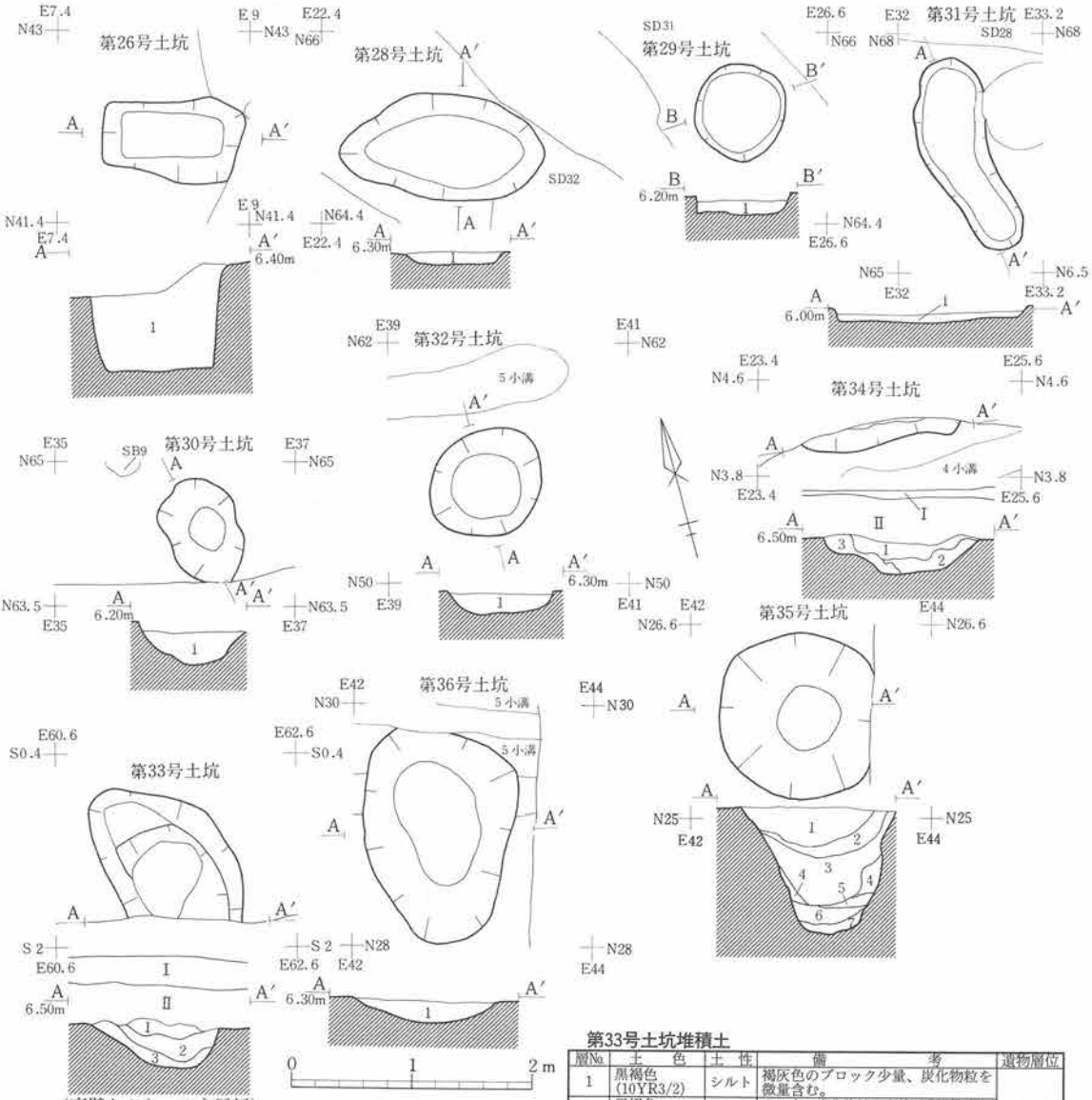
【堆積土】2層確認された。自然堆積層と考えられ、水平状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面は逆台形に近く、壁は底面から明瞭な境をもって立ち上がっている。

【出土遺物】出土していない。

第42号土坑（SK 42）

【位置】VI区　S28.5～29.7　W18.9～20.3



第26号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	IV層ブロックを多量に含む。

第28号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	マンガン粒を多く含む。IV層ブロック粒子をわずかに含む。

第29号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物をわずかに含む。

第30号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子霜降り状に混在する。	1

第31号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。

第32号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。底面付近に多い。

第33号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	褐灰色のブロック少量、炭化物粒を微量含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	5㎜内の炭化物粒を全体に多く含む。焼土粒をまばらに含む。	
3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	炭化物粒を全体に少量含む。	

第34号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層をまばらに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	I層よりもやや暗くIV層を含まない。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層を多量に含む。	3

第35号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子が全体的に多く含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物と焼土をわずかに含む。	
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック・粒子が全体的に多量に含む。	
4	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	IV層の崩落土	
5	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト		
6	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂(細砂)	所々に縞状に黒褐色の薄い粘土層を挟む。	
7	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	

第36号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	1

第144図　第26・28～36号土坑

【確認面・重複】IV層上面で確認された。一部は調査区外に延びている。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形をなしており、その規模は径が1.32m、深さが34cmである。

【堆積土】2層確認された。いずれも自然堆積層で、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】底面は一定してなく、東側が深く、西側は浅い。壁は底面からゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】図示できたのは堆積土中から出土した土師器1点と弥生土器1点・鉄製品1点である。その他に土師器破片が22点・須恵器破片が3点出土しており、土師器にはロクロで製作されたものとそうでないものとがみられる。

第43号土坑（SK 43）

【位置】VI区　S30～31.4　W20.3～21.8

【確認面・重複】IV層上面および第22号竪穴住居跡の堆積土上面で確認された。したがって、第22号竪穴住居跡より新しく、また、東側の第44号土坑よりも新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は円形に近く、規模は径が1.40m前後で、深さは31cmである。

【堆積土】4層確認された。いずれも水平状の堆積状況を示す。その最下層は木炭のようなものであった。

【壁・底面】底面は皿状で、壁はゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】堆積土中から土器が若干出土した。図示できたのは土師器1点と弥生土器1点にすぎず、他に土師器破片が48点・須恵器破片が9点などがある。図示した土師器坏は底部が回転糸切りによるものである。

第44号土坑（SK 44）

【位置】VI区　S30.6～31.2　W19.8～20.5

【確認面・重複】主にIV層上面で確認された。東と西はそれぞれ第43・45号溝跡に切られており、それらより古い。

【平面形・方向・規模】一部の検出のため平面形は明確ではないが、楕円形に近いものと推定される。規模は東西が70cm以上、南北が64cmで、深さは20cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近い。壁は平坦な底面からゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】堆積土中からわずかに土師器破片が5点・須恵器破片が1点出土したのみで、図示できるものはなかった。

第45号土坑（SK 45）

【位置】VI区　S30.2～31.3　W18.8～19.9

【確認面・重複】主にIV層上面で確認された。東と西はそれぞれ第44・46号溝跡と重複しており、これらより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は隅丸方形に近く、その南北方向はN－5°－Eで、真北からわずかに東に寄っている。規模は東西が1.07m、南北が1.07mで、深さは23.5cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は逆台形に近い。底面は一定しておらず、中央が盛りあがっている。壁は底面との境が明瞭で、直線的に外傾する。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の弥生土器1点のみである。この他に土師器破片が13点・須恵器破片が8点出土している。

第46号土坑（SK 46）

【位置】VI区　S30.2～31.3　W18.3～19

【確認面・重複】IV層上面で確認された。西側は第45号土坑に切られており、これより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は不整楕円形をなすものと考えられる。その長軸方向はN－15.5°－Wで、真北より西に寄っている。規模は長軸が1.08m、短軸が58cm以上で、深さは17cmある。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、わずかに平坦な底面からゆるやかに立ち上がる。

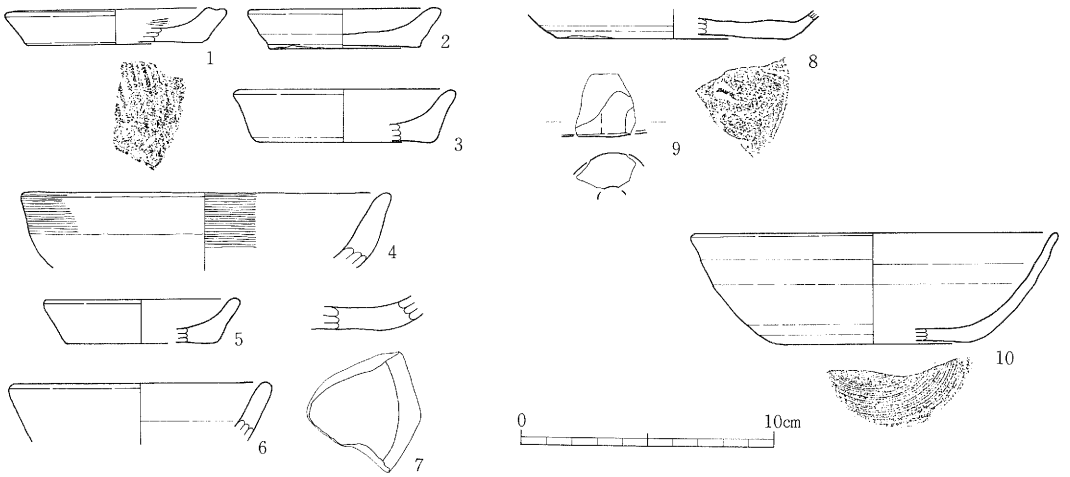
【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたのは土師器2点・赤焼土器1点・須恵器1点で、その他に土師器破片が16点・赤焼土器破片が2点・須恵器破片が1点ある。

第47号土坑（SK 47）

【位置】VI区　S32.2～32.9　W21～22

【確認面・重複】主にIV層上面で確認され、全体が検出された。第49号土坑と重複しており、それより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は長方形をなし、その長軸方向はN－78°－Wである。規模は長軸が



第30号土坑

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師質土器 皿	堆1層	内外面ともロクロナデ。内面見込部分に指ナデ。底部外面に枝状圧痕あり。	－	－	全体の1/6	(8.7)	(7.0)	(1.4)	82-6	I-41
2	土師質土器 皿	堆1層	内外面ともロクロナデ。白針わずかに含む。底部外面の中央付近に格子目状に色調の違いが認められる。	－	－	全体の1/2	7.6	6.0	1.6	82-7	I-42
3	土師質土器 皿	堆1層	内外面ともロクロナデ。白針わずかに含む。	－	－	全体の1/4	8.7	7.0	2.1	82-8	I-43
4	土師質土器 皿	堆1層	手づくね、内外面ともヨコナデ。白針わずかに含む。	－	－	口縁部～体部1/5	(14.6)	－	－	82-21	I-44
5	土師質土器 皿	堆1層	内外面ともロクロナデ。白針わずかに含む。	－	－	全体の1/6	(7.8)	(6.0)	(1.8)	82-22	I－45
6	土師質土器 皿	堆1層	内外面ともロクロナデ。白針わずかに含む。体部外面に格子目状に色調の違いが認められる。	－	－	口縁部1/4	(10.4)	－	－	82-25～28・31	I-46
7	土師質土器 皿	堆1層	調整不明。白針わずかに含む。底部外面に格子目状に色調の違いが認められる。	－	－	底部破片	－	－	－	82-23	I-47

第34号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
8	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	底部1/6	－	(9.2)	－	－	E-53

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
9	フイゴの羽口	堆	先端部破片。	(2.5)	(2.35)	(1.3)	(8.1)	(0.55)	－	土-39

第35号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
10	須恵器 坏	堆	ロクロナデ・底部回転糸切り	ロクロナデ	口縁～底部1/4	14.4	7.4	4.4	－	E-54

第145図　第30・34・35号土坑出土遺物

1.03m、短軸が62cm、深さが21cmある。

【堆積土】2層認められた。いずれも自然堆積層と考えられ、水平状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面形は逆台形に近いが、底面からの立ち上がりはゆるやかである。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片が9点・須恵器破片が1点出土したのみで、図示できるものはなかった。土師器にはロクロで製作されたものも含まれている。

第48号土坑（SK 48）

【位置】VI区　S33.5～34.7　W19.6～20.5

【確認面・重複】IV層上面および他の遺構の堆積土上面で確認された。全体が検出された。第24号竪穴住居跡・第67号土坑と重複しており、これらより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は細長い楕円形をなし、その長軸方向はN－40°－Wである。規模は長軸が1.26m、短軸が57cm、深さが27cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなす。底面はほぼ水平で、壁はそこからゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片が11点・須恵器破片が6点出土しているが、図示できるものはなかった。土師器にはロクロで製作されたものが多く含まれている。

第49号土坑（SK 49）

【位置】VI区　S32.2～33.9　W20.2～21.5

【確認面・重複】IV層上面および他の遺構の堆積土上面で確認された。一部は第47号土坑に切られており、それより古い。また、第67号土坑を切っており、これより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は不整ではあるが、長方形を基調とするものと推定される。その長軸方向はN－18°－Wで、真北より西に寄っている。規模は長軸が1.62m前後、短軸が98cm、深さが最深で45cmである。

【堆積土】堆積土の註記を行わないでしまった。

【壁・底面】断面形は逆台形に近い。底面は一定しておらず、中央にはピット状の落ち込みがある。壁は底面からやや急角度で立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたのは土師器1点と弥生土器1点で、その他に土師器破片が32点・須恵器破片が1点ある。土師器破片にはロクロで製作されたものも含まれている。

第50号土坑（SK 50）

【位置】VI区　S34～34.9　W21.8～22.5

【確認面・重複】IV層上面および第24号竪穴住居跡の堆積土上面で確認された。したがって第24号竪穴住居跡より新しい。全体が検出された。

【平面形・方向・規模】平面形は南北にわずかに長い楕円形をしており、その長軸方向はN－14°－Eで、真北より東に寄っている。規模は長軸が90cm、短軸が76cm、深さが36cmである。

【堆積土】5層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は逆台形をなし、壁は平坦な底面から急角度で立ち上がっている。

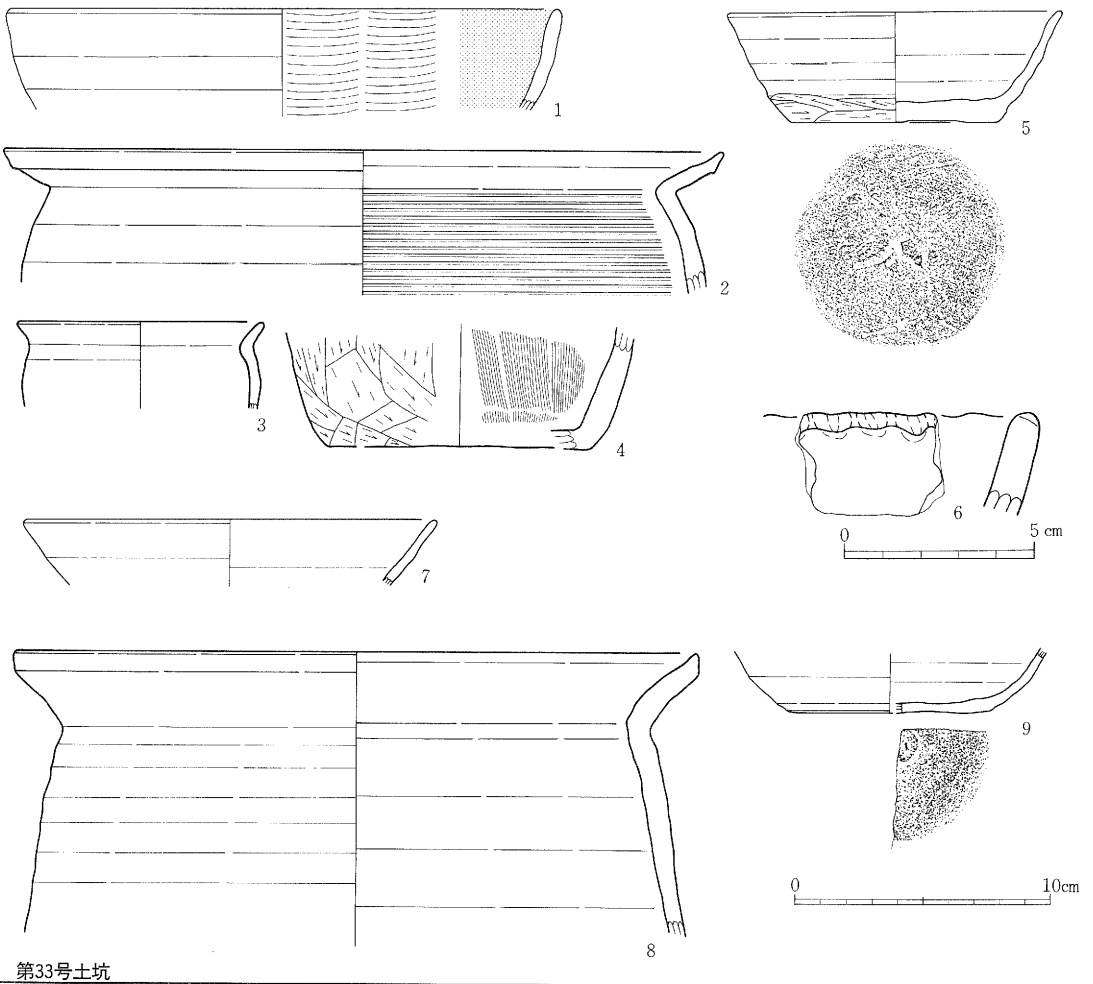
【出土遺物】堆積土中から土師器破片が26点と須恵器破片4点出土したが、図示できるものはなかった。

第51号土坑（SK 51）

【位置】VI区　S28.4～29　W17.1～18

【確認面・重複】IV層上面で確認された。一部が検出され、他は調査区外に延びている。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形は検出部分から楕円形に近いものと推定される。規模は長軸が82cm以上、短軸が58cm以上である。また、深さは14cmで、最深



第33号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部 1/16	(21.4)	—	—	—	C-196
2	土師器 甕	堆	ロクロナデ	ロクロナデ・カキ目	口縁部 1/12	(28.4)	—	—	—	C-197
3	土師器 甕	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/8	(9.6)	—	—	—	C-198
4	土師器 甕	堆	ヘラケズリ・底部ナデ	ナデ	体部 1/4	—	(10.4)	—	—	C-199
5	須恵器 坏	堆	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口縁部 1/8 体部より底部完存	(13.2)	8.3	4.4	—	E-55

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	縄文土器 深鉢	堆	口唇部に刻目が加えられ、小波状をなしている。内外面ともナデ調整	口縁部破片	—	—	—	86-3	縄-2

第36号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	赤焼土器 坏	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/9	(16.1)	—	—	—	赤-2

第37号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
8	土師器 甕	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/4	(27.0)	—	—	—	C-200
9	須恵器 坏	堆	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	底部 1/4	—	(8.0)	—	—	E-56

第146図　第33・36・37号土坑出土遺物

では51cmである。

【堆積土】堆積土の註記は行わないでしまった。

【壁・底面】底面は一定せず、ピット状の深い落ち込みもみられる。壁は底面からゆるやかに立ち上がる。

【特記事項】土坑としたが、形状や規模から柱穴の一部である可能性も考えられる。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片が1点出土したのみで、図示できるものはなかった。

第52号土坑（SK 52）

【位置】VI区　S53.2～54.3　W13.6～14.7

【確認面・重複】主にIV層上面で確認された。第53・57号溝跡と重複しており、前者より古く、後者より新しい。また、第19号ピット群の1つと重複しており、それより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ方形をなす。その南北方向はN－15°－Eで、真北より東に寄っている。規模は一辺が1.08mで、深さは84cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、ほぼ水平状に堆積している。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなしている。底面は一定しておらず、落ち込みが認められる。壁は底面からわずかに内側にカーブしながらゆるやかに立ち上がる。

【特記事項】この土坑に関しては東・西辺がほぼ第57号土坑の東・西辺と一致すること、また、底面中央の落ち込みの状況や後述する第57号土坑の状況などから、この土坑と一連の遺構で、柱穴の布掘り状の掘り方の一部とも考えられ、この第52号土坑の特徴などから柱穴の抜き取り穴だった可能性が高い。

【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたものは土師器1点のみで、この他に土師器破片が12点ある。

第53号土坑（SK 53）

【位置】VI区　S32.5～33.3　W13.7～14.8

【確認面・重複】第53・57号土坑の堆積土上面で確認された。したがって、これらより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は隅丸の長方形に近く、その長軸方向はN－75°－Wである。規模は長軸が1.09m、短軸が77cm、深さが44cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなす。底面は一定しておらず、凹凸がみられ、壁はそこからゆるやかに内側にカーブしながら立ち上がる。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片88点・須恵器破片4点出土したが、図示できるものはなかった。土師器ではロクロで製作されたものも含まれている。

第54号土坑（SK 54）

【位置】VI区　S50.4～51.3　W13.8～14.9

【確認面・重複】IV層上面で確認され、全体が検出された。第19号ピット群の1つと重複しており、これより新しい。

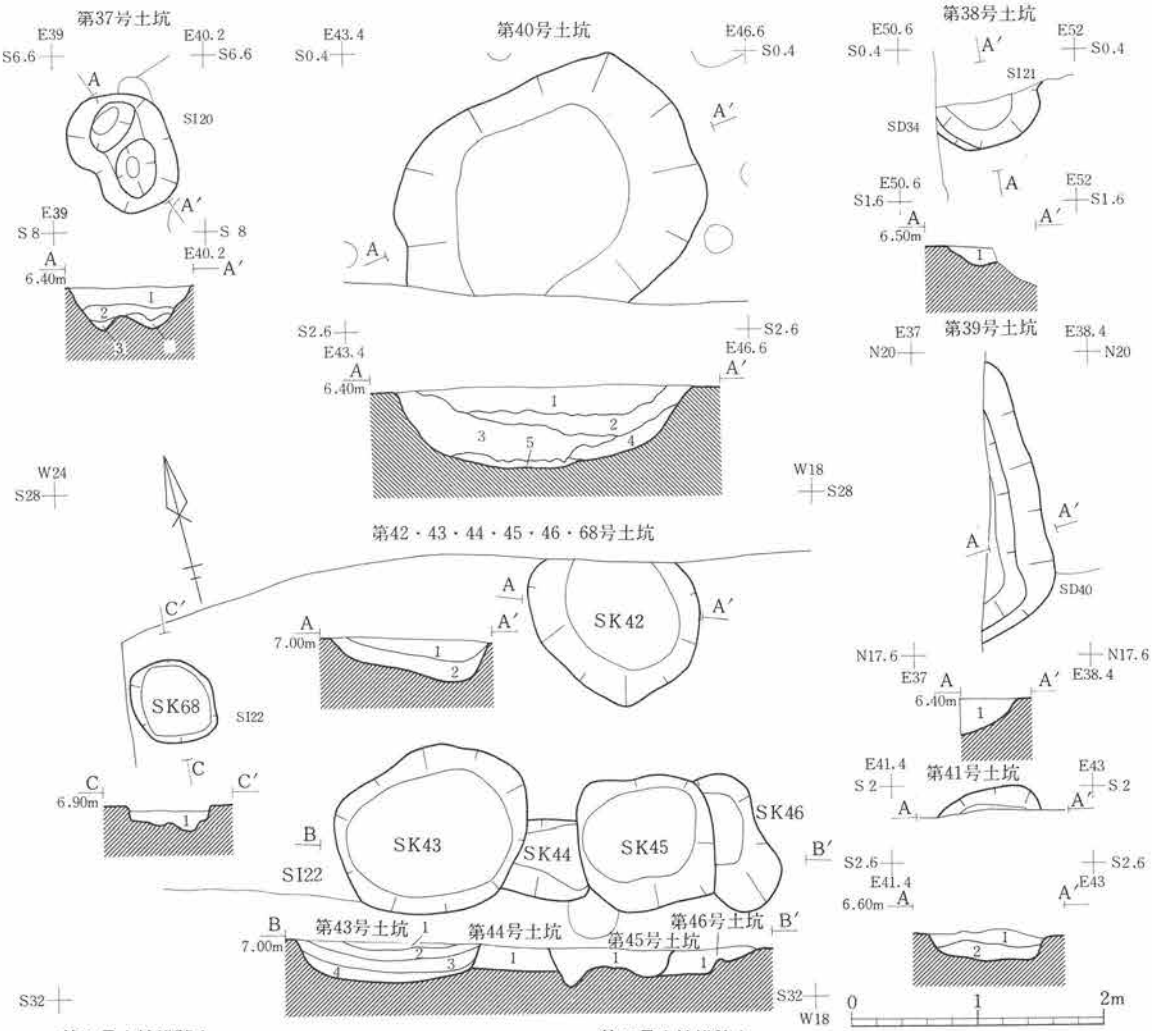
【平面形・方向・規模】平面形はほぼ長方形をしており、その長軸方向はN－81°－Wである。規模は長軸が1.02m、短軸が83cm、深さが65cmである。

【堆積土】2層確認された。1層は自然堆積層、2層は人為堆積層の特徴を示している。そして1層が2層中にピット状に入り込んでいることなどから、これは柱痕跡と掘り方の関係を示すものではないかと考えられる。

【壁・底面】断面は逆台形をなす。底面は平坦で、壁は底面から直角に近い角度で立ち上がっている。

【特記事項】この土坑に関しては前述のように断面観察により、柱穴の掘り方ではないかと考えられるようになった。

【出土遺物】堆積土中から土器と鉄製品が出土した。



第37号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層ブロック状に多量に含む。人為堆積の可能性あり	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	酸化鉄斑紋を少量含む。	3

第38号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	IV層ブロックを全体的にわずかに含む。	1

第39号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子をを全体的に多量に含む。	1

第40号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物をわずかに含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土・炭化物灰・多量に含む。	
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロックを多量に含む。炭化物をわずかに含む。	2
4	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	10YR4/2 灰黄褐色ブロックを部分的に含む。	3
5	黒色 (10YR2/1)	シルト	IV層粒子をまばらに含む。	

第41号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層をまばらに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層よりもやや暗くIV層をわずかに含む。	2

第42号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	全体的に炭化物を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子を多く含み、炭化物をわずかに含む。	

第43号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物をわずかに含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層粒子が全体に多量含む。炭化物をわずかに含む。	
4	灰褐色 (7.5YR4/2)	シルト	木灰の可能性あり。	

第44号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層をまばらに含む。	1

第45号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子・炭化物をわずかに含む。	1

第46号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物・焼土・IV層粒子をまばらに含む。	1

第68号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック・炭化物をまばらに含む。	1

第147図　第37～46・68号土坑

図示できたのは弥生土器１点と鉄製の馬具１点であるが、この他に土師器破片７点・須恵器破片２点が出土している。土師器の中にはロクロで製作されたものも含まれている。馬具は壷鐙の金属製品であり、実際に足を掛ける部分は木製のためか、残存していない。この金属部分は大きく、鉸具と兵庫鎖、および鐙金具であるＵ字形金具から成っている。鉸具は一部は欠けるが刺金が付く。兵庫鎖はその鉸具と筒状の金具で連結されており、６段の鎖を連ねている。その下方では環状の金具でＵ字形金具と連結しており、このＵ字形金具には２本の鋲が打ち込まれている。

第55号土坑（SK 55）

【位置】VI区　S28.2～28.5　W12.6～13.8

【確認面・重複】IV層上面および第56号土坑の堆積土上面で確認された。したがって、第56号土坑より新しい。一部のみの検出で、他は調査区外に延びている。

【平面形・方向・規模】平面形は円形か楕円形をなすものと推定される。規模は東西が1.28m 以上、南北が32cm以上で、深さは19cmである。

【堆積土】１層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなすものと推定される。壁は底面からゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から土器と石製品が出土した。図示できたのは石製品１点で、土器は土師器破片２点が出土したのみである。

第56号土坑（SK 56）

【位置】VI区　S28.2～29.2　W11.9～13.8

【確認面・重複】IV層上面で確認された。検出されたのは南側で、北側は調査区外に延びている。第55号土坑および第２号堀跡と重複しており、これらより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は円形か楕円形をなすものと推定される。規模は東西が1.54m 以上、南北が88cm以上で、深さは26cmある。

【堆積土】１層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面は皿状をなす。底面は一定しておらず、凹凸がみられる。壁はゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片10点・須恵器破片１点が出土しているが、図示できるものはなかった。

第57号土坑（SK 57）

【位置】VI区　S51.7～53.3　W13.6～14.8

【確認面・重複】主にIV層上面で確認された。南側は第52号土坑に切られている。また、第53号土坑と重複しており、これより古い。また、第19号ピット群の１つと重複しており、これより新しい。

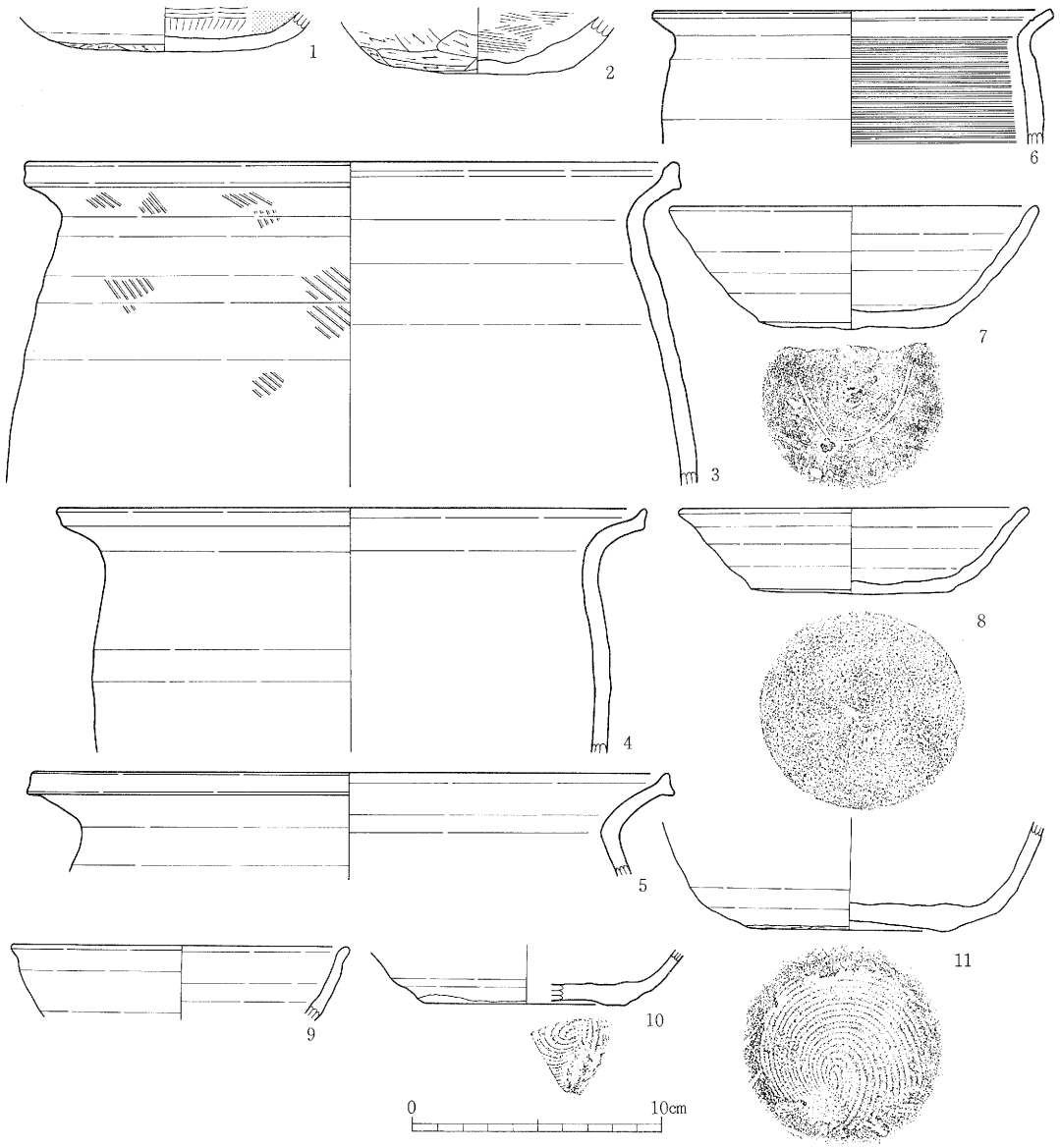
【平面形・方向・規模】平面形は長方形を基調とするものと考えられる。長軸方向はN－13.5°－Eで、真北より東に寄っている。規模は長軸が1.54m 以上、短軸は1.2m、深さは最深で74cmある。

【堆積土】７層確認された。特に２～７層はIV層ブロック・粒子を多く含んでおり、人為堆積層と考えられる。その中の３～７層は水平状に堆積している。

【壁・底面】断面形は逆台形を示す。底面はほぼ平坦で、壁はその底面から明瞭な境をもって直立ぎみに立ち上がる。

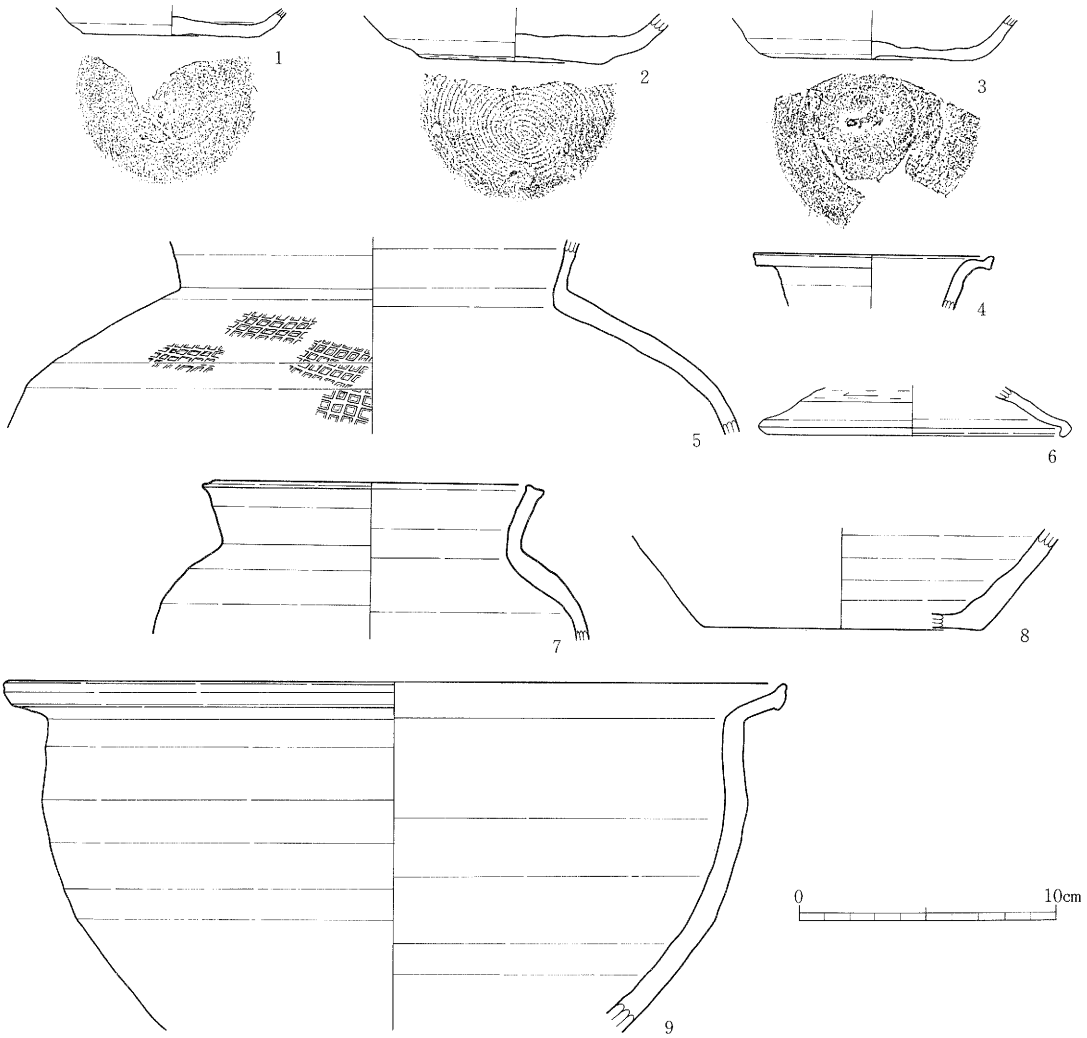
【特記事項】この土坑に関しては調査中には確認できなかったが、最終的な断面観察により、堆積土の１層が柱痕跡で、その他は柱穴掘り方ではないかと考えられ、そして、前述したように第52号土坑と一連の遺構であり、布掘り状の掘り方ではないかと考えられるようになった。

【出土遺物】出土していない。



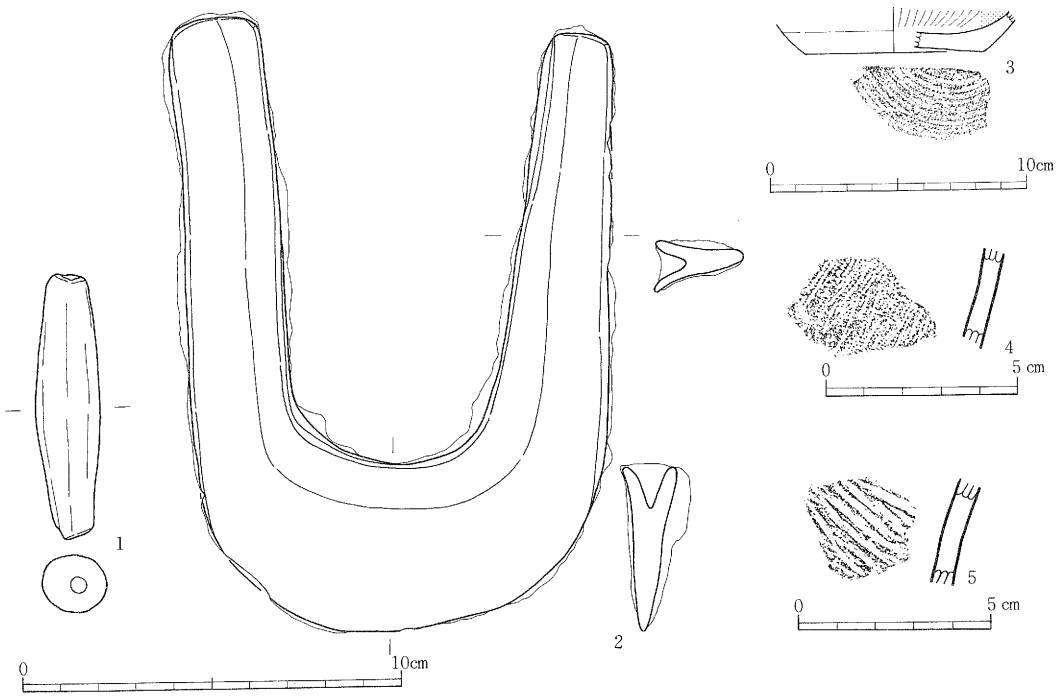
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	底面	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	底部 1/2	—	8.6	—	—	C-201
2	土師器 甕	堆1層	ヘラケズリ	指ナデ	底部 2/3	—	7.8	—	—	C-202
3	土師器 甕	堆1層	ロクロナデ・平行タタキ目の痕跡	ロクロナデ	口縁～体部 1/5	(25.8)	—	—	—	C-203
4	土師器 甕	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部 1/6	(23.6)	—	—	—	C-204
5	土師器 甕	堆1・2層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁 1/8	(25.6)	—	—	—	C-205
6	土師器 甕	堆1層・底面	ロクロナデ	ロクロナデ・カキ目	口縁～体部 1/4	(16.0)	—	—	—	C-206
7	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	口縁部 1/3 底部 2/3	14.8	7.4	4.9	—	E-57
8	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	口縁部～底部3/4	14.0	7.9	3.6	78-13	E-58
9	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/8	(13.6)	—	—	—	E-59
10	須恵器 坏	堆1層・底面	ロクロナデ・底部回転糸切り	ロクロナデ	体部～底部 1/6	(8.0)	—	—	—	E-60
11	須恵器 坏	底面	ロクロナデ・底部回転糸切り・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	底部全体	—	8.4	—	—	E-61

第148図　第40号土坑出土遺物 (1)



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 坏	堆1・2層	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	底部 4/5	—	7.0	—	—	E-62
2	須恵器 坏	堆2層	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ・底部回転糸切り	ロクロナデ	底部 1/2	—	7.6	—	—	E-63
3	須恵器 坏	堆3層	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	底部 1/2	—	8.0	—	—	E-64
4	灰釉陶器 長頸瓶	堆2層	ロクロナデ・灰釉	ロクロナデ、灰釉	口縁部 1/4	9.4	—	—	81-16	E-65
5	須恵器 甕	堆1層	ロクロナデ・格子タタキ目	ロクロナデ	口縁部～体部1/8	—	—	—	—	E-66
7	須恵器 甕	堆1・2層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部 1/4	13.4	—	—	—	E-67
6	須恵器 蓋	堆1層	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	口縁部 1/8	(11.6)	—	—	—	E-68
8	須恵器 甕	堆2層	ロクロナデ	ロクロナデ	体部～底部 1/2	—	10.9	—	—	E-69
9	須恵器 鉢	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部 1/6	(30.8)	—	—	—	E-70

第149図　第40号土坑出土遺物（2）



第40号土坑

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
1	土錘	1層底面	完形	7.05	1.7	1.5	15.6	0.45	93-4	土-13

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
2	鉄製品 鋤 鍬先	堆1層底面	ほぼ完形・側縁はほぼ平行。	16.3	10.7	0.9	260.0	101-5	N-40

第43号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	底部 1/3	—	(7.0)	—	—	C-207

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	弥生土器 甕?	堆1層	縄文(付加条)LR+R。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	—	地-52

第45号土坑

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
5	弥生土器 甕?	堆1層	撚糸文R。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	88-34	地-53

第150図　第40・43・45号土坑出土遺物

第58号土坑（SK 58）

【位置】VI区　S31.3～32.2　W12.9～13.7

【確認面・重複】IV層上面で確認された。東側の上部は第1号堀跡に切られており、したがってそれより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は隅が丸味を帯びるが、方形を基調とするものと考えられる。その長軸方向はN－41.5°－Eである。規模は長軸が89cm、短軸が70cm、深さが25cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は逆台形に近い。壁は平坦な底面からほぼ直立ぎみに立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたのは土師器1点・須恵器1点・弥生土器1点で、その他に土師器破片が7点ある。

第59号土坑（SK 59）

【位置】VI区　S28.2～28.7　W15.4～17

【確認面・重複】IV層上面で確認された。検出されたのは一部で、他は調査区外に延びている。

【平面形・方向・規模】平面形は検出部分から方形を基調とするものと推定される。その長軸方向はN－67.5°－Wである。規模は長軸が1.60m以上、短軸が40cm以上、深さが35cmである。

【堆積土】2層確認された。いずれも自然堆積層で、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】壁は底面からゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から多量の土器が出土した。図示できたのは土師器5点・須恵器1点で、この他に土師器破片が133点・赤焼土器破片が2点・須恵器破片が9点ある。ロクロで製作された土師器坏は底部切り離しが回転糸切りにより、その後に再調整が施されない例が多い。なお、土器の他にモモの種子が1点検出されている。

第60号土坑（SK 60）

【位置】VI区　S31.4～32.6　E34.8～37

【確認面・重複】IV層上面で確認された。北側は第2号堀跡により失われており、したがってそれより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は円形か楕円形を基調とするものと推定される。規模は東西2.28m以上、短軸1.06m以上で、深さは30cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近いと考えられ、壁はほぼ平坦な底面からゆるやかに立ち上がり、外に開いている。

【出土遺物】図示できたものは底面から出土したフイゴの羽口1点である。その他に堆積土中から、土師器破片9点が出土したが、図示はできなかった。フイゴの羽口はわずかに一部が欠けるもののほぼ全体が残存している。先端部には溶解物が付着している。なお、層中から鉱滓が1点検出されている。

第61号土坑（SK 61）

【位置】VI区　S29.1～31.4　E16.1～18.5

【確認面・重複】IV層上面および第1・2号堀跡の堆積土上面で確認された。したがって第1・2号堀跡よりも新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形をなし、その径は2.36mである。また、深さは73cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。IV層の大小ブロックが多量に混在する人為堆積層である。

【壁・底面】断面形は逆台形をなす。底面はやや凹凸がある。壁は底面との境が明瞭で、ほぼ直線的に外傾して立ち上がっている。

【出土遺物】図示できたものは底面出土の木製品および竹材である。木製品は楕円形の板状をなしている。竹材は幅が2cm前後、厚さが5mm前後に加工されたものである。この他の遺物はなかった。

第62号土坑（SK 62）

【位置】VI区　S33.9～34.7　E42.4～42.8

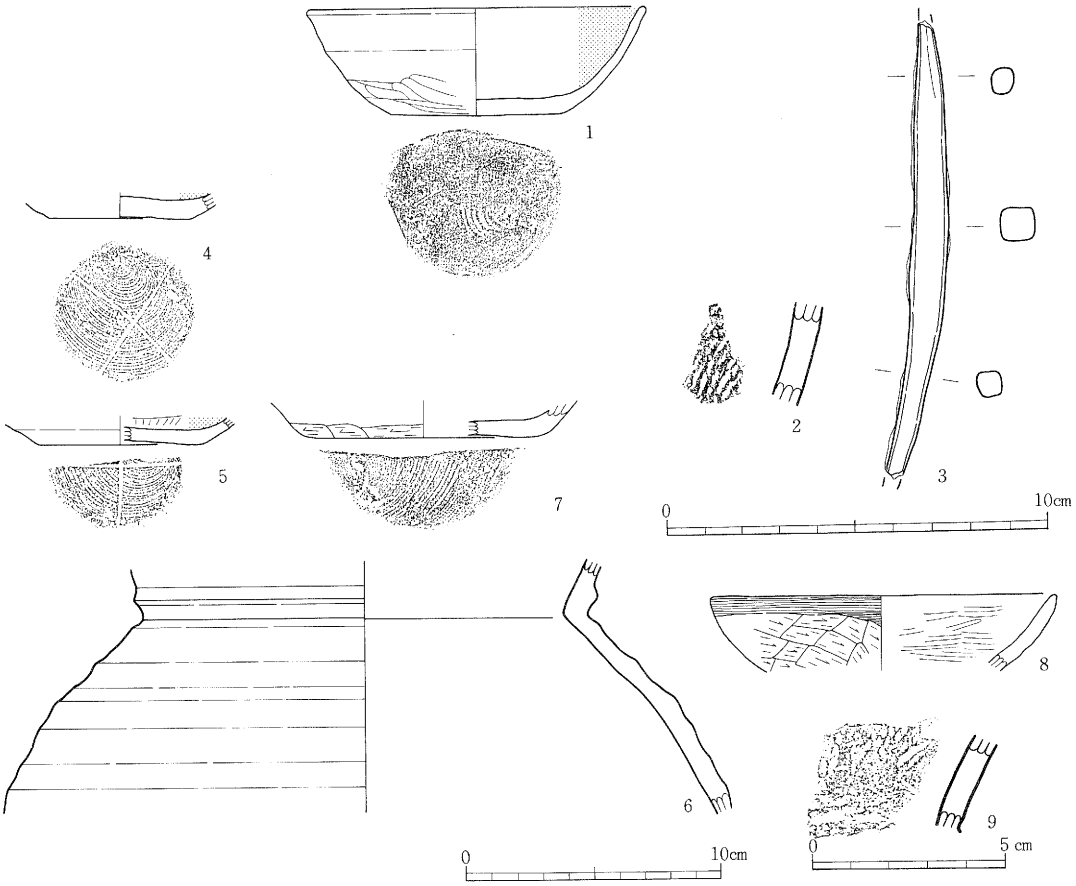
【確認面・重複】IV層上面で確認された。東側は第46号溝跡に切られており、したがってそれよりも古い。

【平面形・方向・規模】平面形は円形か楕円形を基調とするものと推定される。規模は南北が78cm以上、東西が34cm以上で、深さは28cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層で、中央に向かい将棋倒し状に堆積している。

【壁・底面】断面形は逆台形をなし、壁は底面から明瞭な境をもち、直線的に立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から須恵器破片1点出土したのみで、図示できなかった。



第42号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ。底部回転糸切り・ヘラミガキの再調整	ヘラミガキ？・黒色処理？	口縁・底部 4/5	13.4	6.6	4.2	—	C-208

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	弥生土器 壺？	堆1層	撚糸文 R。内面ミガキ	体部破片	—	—	—	—	地-51

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
3	鉄製品 工具？	堆1層	断面形はほぼ正方形で、先端は、やや丸味をもつ。	(12.1)	0.9	0.9	(34.0)	102-6	N-41

第46号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部回転糸切り・再調整なし	放射状ヘラミガキ・黒色処理	底部完形	—	5.5	—	—	C-209
5	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部に窯印あり。底部回転糸切り・手持ヘラケズリ再調整	ヘラミガキ・黒色処理	底部 1/2	—	6.4	—	—	C-210
6	須恵器 甕	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部1/4	—	—	—	—	E-71
7	赤焼土器 坏	堆1層	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ。底部回転糸切り	ロクロナデ	体部～底部1/3	—	9.0	—	—	赤-3

第49号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
8	土師器 坏	堆1・2層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	口縁～体部1/8	(13.5)	—	—	—	C-211

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
9	弥生土器 壷？	堆1・2層	撚糸文 R。内面はナデ。	体部破片	—	—	—	—	地-54

第151図　第42・46・49号土坑出土遺物

第63号土坑（SK 63）

【位置】VI区　S32.9～33.5　E63.4～64.5

【確認面・重複】IV層上面および第27号竪穴住居跡の堆積土中で確認されたが、削平が大きく及んでいる。第27号竪穴住居跡・第３号堀跡と重複しており、前者よりは新しく、後者よりは古い。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形に近いものと考えられる。その長軸方向はＮ－84°－Ｗである。規模は長軸が1.09m、短軸が34cm以上、深さは10cmである。

【堆積土】１層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は皿状をなし、底面からゆるやかに立ち上がる。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片が１点出土したのみで、図示できなかった。

第64号土坑（SK 64）

【位置】VII区　S36.3～37.6　W23.3～24.2

【確認面・重複】第24号竪穴住居跡の堆積土中で確認された。したがって第24号竪穴住居跡よりは新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は隅丸方形をなし、その長軸方向は真北よりやや東に寄っており、Ｎ－12.5°－Ｅである。規模は長軸が1.24m、短軸が84cm、深さが41cmである。

【堆積土】１層のみ確認された。IV層ブロックを多く混在しており、人為堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は長方形に近く、壁は底面との境が明瞭で、そこから直立して立ち上がっている。底面には凹凸がみられる。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片24点・須恵器破片３点が出土したが、図示できるものはなかった。

第65号土坑（SK 65）

【位置】VII区　S38.4～39.4　W22.8～23.9

【確認面・重複】第24号竪穴住居跡の堆積土中で確認された。したがって第24号竪穴住居跡よりは新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形をなす。規模は径が1.08m、深さが30cmである。

【堆積土】３層確認された。いずれもIV層を多量に含んでおり、人為堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は逆台形に近いが、規則性はあまりない。壁面・底面も一定せず、起伏が認められる。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片52点・須恵器破片９点が出土したが、図示はできなかった。土師器にはロクロで製作されたものとそうでないものがある。

第66号土坑（SK 66）

【位置】VI区　S34.7～35.5　W20.3～21.2

【確認面・重複】第24号竪穴住居跡の堆積土中で確認され、全体が検出された。したがって第24号竪穴住居跡より新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形で規模は径が84cm、深さが最深で37cmある。

【堆積土】３層確認された。いずれも自然堆積層で、層中には焼土・炭化物が含まれている。

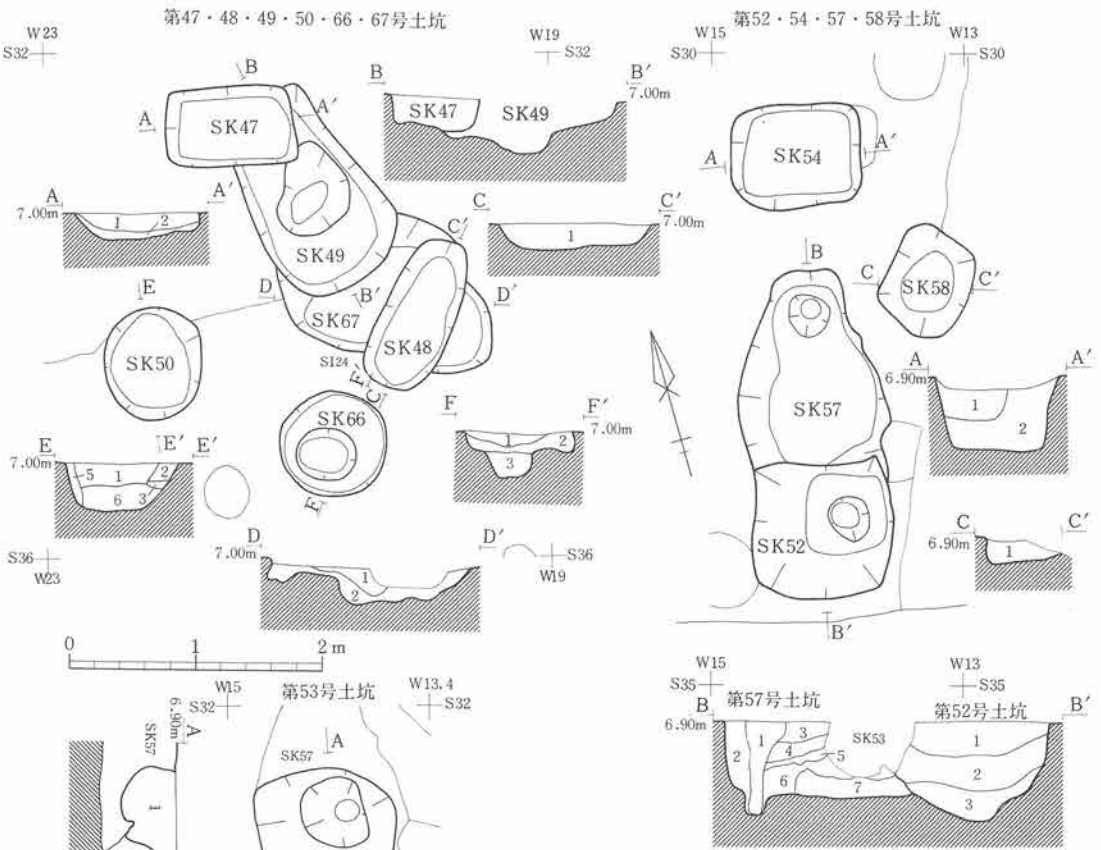
【壁・底面】基本的には断面形は逆台形をなすが、底面は平坦ではなく、中央にはピット状の落ち込みがある。壁は底面から急角度で立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたものは土師器１点のみで、この他に土師器破片17点がある。図示した土師器は坏で、体・底部が丸底状をなし、口縁部との境に段をもつものである。

第67号土坑（SK 67）

【位置】VI区　S33.3～34.6　W19.5～21.2

【確認面・重複】主にIV層上面で確認された。重複する第24号竪穴住居跡よりは新しく、第49・67号土



第152図　第47～50・52～54・57・58・66・67号土坑

第47号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層細ブロックを全体に散ばる。炭化物をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物を多く含む。炭化物は下の遺構の影響	

第48号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を含む。炭化物をわずかに含む。	1

第50号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物を少量含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層粒子・焼土・炭化物をわずかに含む。	
3	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	焼土・IV層ブロック・粒子を主体とする。	
4	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。炭化物をわずかに含む。	
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	

第52号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロックをわずかに含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを多量に含む。	3

第53号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子を全体に含む。	1

第54号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子を全体的に、炭化物をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロックを多量に、炭化物をわずかに含む。人為堆積と考えられる。	2

第57号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子を全体的に含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子を全体的に多く含む。	3
4	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	IV層を主体とする。	4
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層粒子をわずかに含む。	5
6	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	IV層を主体とする。	6
7	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを多く含む。	7

第58号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	炭化物・焼土をわずかに含む。	1

第66号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物を多量に含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	焼土・炭化物をまばらに含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	焼土を多量に含む。炭化物を少量含む。	3

第67号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層をまばらに含む。	1
2	暗褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック・炭化物をまばらに含む。	2

坑よりは古い。

【平面形・方向・規模】平面形は残存部分から楕円形を基調とするものと推定される。その長軸方向はN－41°－Wである。規模は長軸が1.8m以上、短軸が1.16m以上、深さが27cmである。

【堆積土】2層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】全体的に壁・底面とも一定した面を示しておらず、凸凹が著しい。また、壁の立ち上がりも一様ではない。

【出土遺物】堆積土中から若干の土器が出土したが、図示できたのは弥生土器1点である。この他に土師器破片12点がある。

第68号土坑（SK 68）

【位置】VI区　S29.3～30　W22.7～23.4

【確認面・重複】第22号竪穴住居跡の堆積土中で確認された。したがって、これより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形をなしており、その規模は径が66cmで、深さは14cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は逆台形に近い。底面は一定しておらず、凹凸がみられる。壁は底面との境が明瞭で、直立ぎみに立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片9点が出土したが、図示はできなかった。

第69号土坑（SK 69）

【位置】VII区　S51.8～52.8　W16.5～17.6

【確認面・重複】IV層上面で確認された。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形は円形をなす。規模は径が1.06m、深さが28cmである。

【堆積土】3層確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は逆台形に近い。底面はほぼ平坦で、壁は底面からやや急角度で立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片3点・須恵器破片3点が出土したのみで、図示はできなかった。

第70号土坑（SK 70）

【位置】VII区　S36～36.9　W24.7～25.7

【確認面・重複】IV層上面および第24号竪穴住居跡で確認された。したがって、第24号竪穴住居跡より新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形をなす。規模は径が98cm、深さが53cmである。

【堆積土】4層が確認された。いずれも自然堆積層とみられ、レンズ状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近いが、一定していない。壁は底面からゆるやかに立ち上がり、外に開いている。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片22点・須恵器破片9点が出土したが、図示はできなかった。

第71号土坑（SK 71）

【位置】VII区　S40.1～41.4　E17.9～19.6

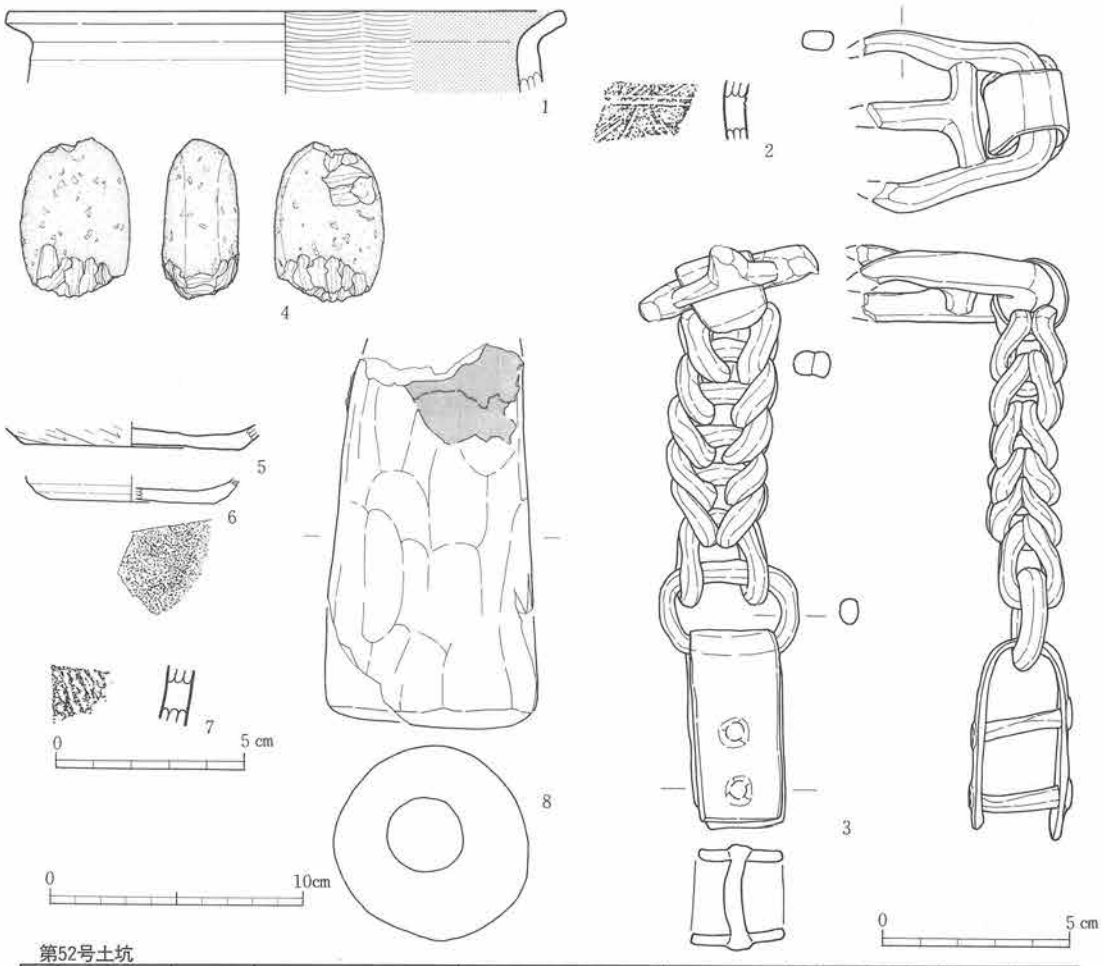
【確認面・重複】IV層上面で確認された。第19号ピット群のいくつかと新旧両方の関係をもつ。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形に近く、その長軸方向はN－76°－Wである。規模は長軸が1.70m、短軸が1.32m、深さが29cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。層の上部には炭化物・灰・焼土が含まれている。

【壁・底面】壁面・底面とも一定せず、起伏が認められる。壁は底面から明瞭な境をもって立ち上がり、外に大きく開いている。

【出土遺物】堆積土中から土器・土製品が出土している。図示できたのは土師器3点・須恵器1点・フイゴの羽口1点である。この他に土師器破片が58



第52号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	堆1層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部 1/12	(22.0)	−	−	−	C-212

第54号土坑

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	弥生土器 壺	堆	三本平行沈線による文様。内面はナデ。	体部破片	−	−	−	−	弥-11

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
3	鉄製品 馬具(壷鐙)	堆1層上部	壷鐙の金属部分・鈴具・兵庫鎖・U字形金具から成る。	(9.8)	4.8	0.8	(140.0)	101-1	N-42

第55号土坑

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
4	石製品	堆1層	軟質の円礫の両端に研磨溝のような溝がある	6.4	4.3	3.1	46.6	石英安山岩質凝灰岩	96-11	石-39

第58号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
5	土師器 甕	堆	ヘラケズリ・ナデ	ロクロナデ	底部 1/3	−	(8.5)	−	−	C-213
6	須恵器 坏	堆	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	底部 1/3	−	(6.6)	−	−	E-72

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	弥生土器 甕?	堆	撚糸文 R。内面ナデ。	体部破片	−	−	−	−	地-55

第60号土坑

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
8	フイゴの羽口	底面	先端部欠損。外面オサエ後、ミガキ。 白針多く含む。先端に溶解物付着。	(15.3)	8.2	7.7	(630.0)	2.9	94-1	土-47

第153図　第52・54・55・58・60号土坑出土遺物

点・須恵器破片８点がある。土師器はいずれも坏で、ロクロで製作されており、底部切り離しは回転糸切りのものがみられる。

第72号土坑（SK 72）

【位置】VI区　S33.5～35.4　E65.1～66.9

【確認面・重複】IV層上面で確認された。全体が検出された。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形は不整の楕円形をなし、その長軸方向はN－41.5°－Eで、真北より大きく東に寄っている。規模は長軸が2.10m、短軸が1.58mで、深さが55cmである。

【堆積土】10層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、将棋倒し状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面形は逆台形に近い。底面は一定せず、落ち込みがみられる。壁は底面からやや急角度で立ち上がる。

【出土遺物】堆積土中から多量の土器が出土した。図示できたのは土師器５点・須恵器10点・砥石１点であり、この他に土師器破片が124点・須恵器破片26点がある。図示した須恵器坏は底部切り離し技法には回転ヘラ切りと回転糸切りの両者があり、その後の再調整は施されない例が多い。なお、この他に層中から鉱滓が１点検出されている。

第73号土坑（SK 73）

【位置】VI区　S36～37　E63.9～66.2

【確認面・重複】主にIV層上面で確認された。第47号溝跡と重複しており、それより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は不整の楕円形をなし、その長軸方向は真北とほぼ直交し、N－85°－Eである。規模は長軸が1.40m、短軸が80cm、深さが37.5cmである。

【堆積土】２層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、水平状に堆積している。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近い。底面には凹凸がみられ、壁はそこからゆるやかに外方に開いている。

【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたのは須恵器１点と縄文土器１点で、この他に土師器破片が26点・須恵器破片が３点ある。土師器にはロクロで製作されたものとそうでないものとがある。

第74号土坑（SK 74）

【位置】VI区　S36.8～37.7　E66.6～67.4

【確認面・重複】主にIV層上面で確認された。一部は調査区外に延びている。第47号溝跡と重複しており、それより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は円形か楕円形をなすものと推定される。規模は南北が68cm以上、東西が72cmで、深さが41cmである。

【堆積土】２層確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は逆台形に近い。底面はほぼ平坦で、壁は底面とは明瞭な境をもって立ち上がるが、壁面は一定していない。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片５点・須恵器破片２点が出土しが、図示できなかった。土師器にはロクロで製作されたものも含まれている。

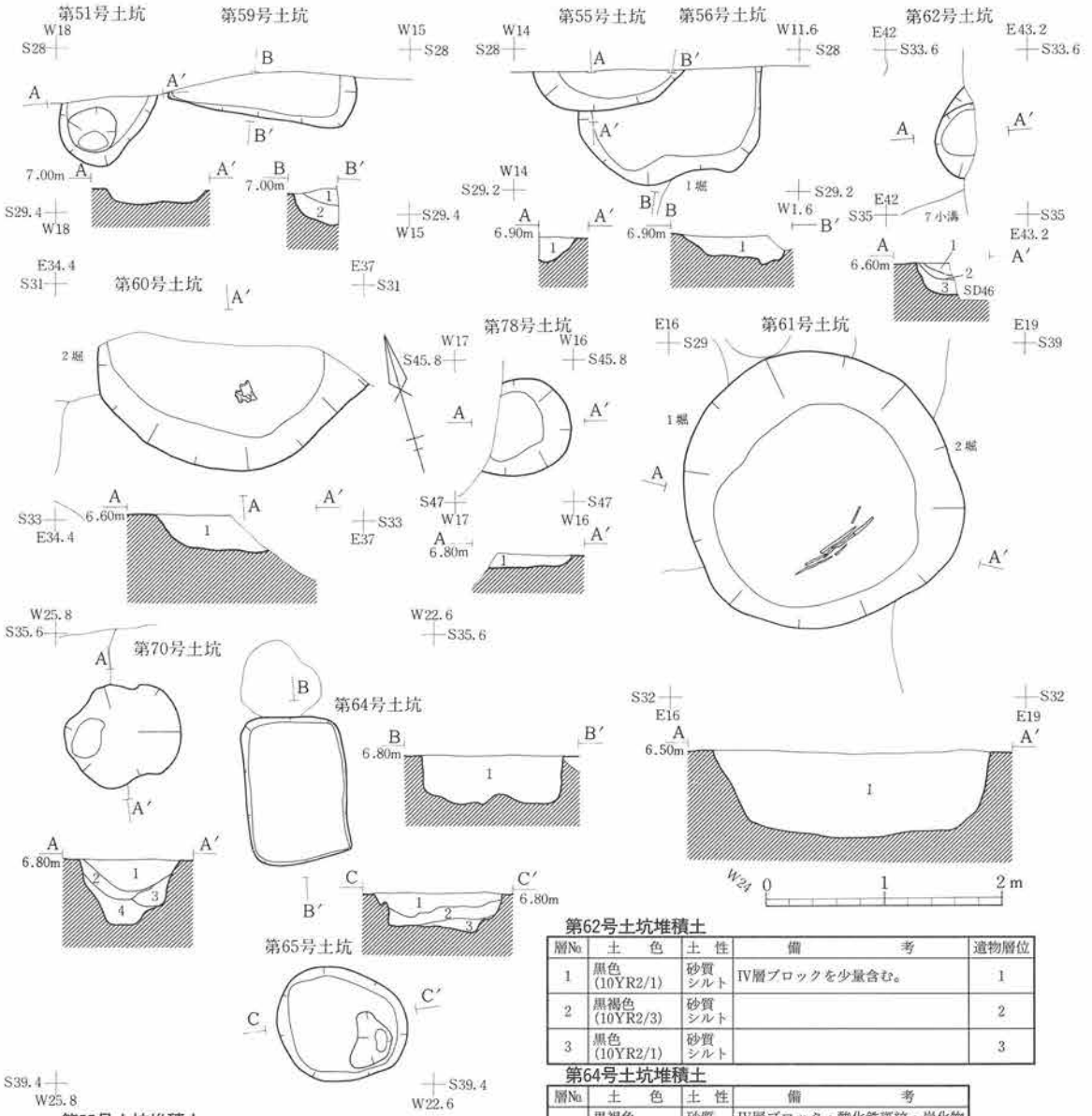
第75号土坑（SK 75）

【位置】VI区　S33.7～34.7　E62.3～63.3

【確認面・重複】第50号溝跡の底面で確認された。したがってこの遺構より古い。また、同じく第50号溝跡底面で確認された第89号土坑に切られており、それより古い。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形をなすものと考えられる。規模は径が96cm、深さが14cmである。

【堆積土】２層確認された。自然堆積層と考えられる。



第154図　第51・55・56・59・60～62・64・65・70・78号土坑

第55号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層の大きいブロック・全体的に含む。	1

第56号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子・炭化物・焼土をまばらに含む。	1

第59号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	焼土・土器片を多量に含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	1層よりも暗く、IV層をまばらに含む。	2

第60号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒色 (10YR2/1)	シルト	下層にIV層ブロックを少量含む。	1

第61号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層の大小ブロック・粒子を多量に含む。人為堆積	1

第62号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒色 (10YR2/1)	砂質シルト	IV層ブロックを少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト		2
3	黒色 (10YR2/1)	砂質シルト		3

第64号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層ブロック・酸化鉄斑紋・炭化物粒を多量に含む。	

第65号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子・炭化物を多量に含む。人為堆積の可能性あり。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層粒子・炭化物を多量に含む。人為堆積の可能性あり。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層を多量に含む。	3

第70号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	酸化鉄斑紋・炭化物・IV層粒子まばらに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層をまばらに含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/3)	砂	IV層をブロック状に含む。	3
4	褐色 (10YR4/4)	砂	酸化鉄の斑紋を粒状に含む。	4

第78号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	焼土・炭化物を多量に含む。灰をブロック状に部分的に含む。	1

【壁・底面】断面形は皿状をなし、壁は底面からゆるやかに立ち上がる。底面には凹凸がみられる。
【出土遺物】堆積土中から土師器破片が3点出土したが、図示できるものはなかった。

第76号土坑（SK 76）
【位置】VI区　S35.7～36.9　E64.5～66.1
【確認面・重複】IV層上面で検出された。第79号土坑と重複しており、それより新しい。
【平面形・方向・規模】平面形は不整の円形をなしており、その長軸方向は真北と直交し、N－90°－Eである。規模は長軸が1.54m、短軸が1.16m、深さが33cmである。
【堆積土】4層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、レンズ状の堆積状況を示している。
【壁・底面】断面形は「U」字形に近いが、壁面・底面とも一定しておらず、起伏が認められる。
【出土遺物】堆積土中から土師器破片が8点出土したが、図示できるものはなかった。

第77号土坑（SK 77）
【位置】VII区　S73.6～74.5　E43.6～44.8
【確認面・重複】主にIV層上面で確認された。西側上部は撹乱により失われている。重複関係は認められない。
【平面形・方向・規模】平面形は長方形をなすものと考えられる。その長軸方向はN－82°－Wである。規模は長軸が1.16m、短軸が76cm、深さが91cmである。
【堆積土】5層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、多くは水平状に堆積している。
【壁・底面】断面形はおおよそ逆台形をなす。壁はほぼ平坦な底面から急角度で立ち上がり、上方で外方に開いている。
【出土遺物】堆積土中から土師器破片が37点・須恵器破片が1点出土しているが、図示できるものはなかった。

第78号土坑（SK 78）
【位置】VII区　S45.9～46.8　W16～16.8
【確認面・重複】IV層上面で確認された。西側は撹乱により失われている。重複関係は認められない。
【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形で、規模は径が82cm、深さが12cmである。
【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。焼土・炭化物・灰を含む層である。
【壁・底面】断面は皿状をなし、壁は平坦な底面からゆるやかに立ち上がっている。
【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたのは土師器1点で、この他に土師器破片19点が出土している。

第79号土坑（SK 79）
【位置】VI区　S34.8～37.4　E66～68.7
【確認面・重複】IV層上面で確認された。第76号土坑・第49号溝跡と重複しており、前者より古く、後者より新しい。
【平面形・方向・規模】平面形は長い不整の楕円形をなす。その長軸方向はN－68°－Eである。規模は長軸が3.24m、短軸が1.38m、深さが28cmである。
【堆積土】5層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、将棋倒し状の堆積状況をなす層が多い。
【壁・底面】断面形は長軸方向は皿状をなし、短軸方向は逆台形に近い。底面には落ち込みや凹凸がみられる。
【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたのは土師器1点・須恵器1点・縄文土器1点で、この他に土師器破片が41点・須恵器破片が15点ある。

第80号土坑（SK 80）
【位置】VI区　S33.4～34　W4.9～5.8
【確認面・重複】IV層上面で確認された。南側の一

部は調査区外に延びている。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形は円形か楕円形をなすものと考えられる。規模は東西が90cm、南北が52cm以上、深さが23cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなし、壁は底面からゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたのは土師器1点と須恵器1点で、この他に土師器破片27点・赤焼土器破片が1点・須恵器破片が3点ある。

第81号土坑（SK 81）

【位置】VI区　S30.6～31.5　W3.6～4.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形は円形をなしており、規模は径が80cm、深さが21cmである。

【堆積土】2層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は皿状をなす底面からゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片が39点・須恵器破片が4点出土したが、図示はできなかった。土師器はロクロで製作されたものが多く含まれている。

第82号土坑（SK 82）

【位置】VI区　S32.3～33.1　W3.5～4.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形は円形をなし、規模は径が82cmで、深さが25cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は逆台形に近く、壁は平坦な底面からやや急角度で外傾する。

【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたのは土師器5点で、その他に土師器破片が25点・須恵器破片が4点出土している。図示した土師器坏はロクロで製作されたもので、底部は回転糸切りによって切り離され、その後の調整は加えられていない。

第83号土坑（SK 83）

【位置】VI区　S32.8～33.4　W6.4～7.2

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第24号溝状遺構・第20号ピット群の1つと重複しており、これらより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形をなし、その長軸方向はN－84°－Eである。規模は長軸が78cm、短軸が62cm、深さが23cmである。

【堆積土】3層確認された。1層はピット状の堆積状況を示し、他の層はIV層を多く含む層である。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなし、壁は底面からゆるやかに立ち上がっている。

【特記事項】土坑としたが、規模や堆積土の状況などからすると柱穴である可能性が考えられる。

【出土遺物】堆積土中から若干の土器が出土した。図示できたのは土師器1点のみで、この他に土師器破片は4点・赤焼土器破片が1点・須恵器破片が2点出土している。

第84号土坑（SK 84）

【位置】VII区　S52.5～54.5　W17.6～19

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第6号性格不明遺構・第19号ピット群の1つと重複しており、いずれよりも古い。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形に近く、その長軸方向はN－27°－Eである。規模は長軸が

2.1m、短軸が1.18mで、深さは最深で95cmである。

【堆積土】8層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、水平状の堆積状況を示す層が多い。

【壁・底面】断面形は逆台形に近いが一定していない。底面中央にはピット状の深い落ち込みがある。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片1点・須恵器破片1点出土したのみで、図示できるものはない。

第85号土坑（SK 85）

【位置】VI区　S31.5～32.3　W3.1～4.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第86号土坑と第20号ピット群のいくつかと重複しており、前者より新しく、後者より古い。

【平面形・方向・規模】平面形は隅丸の長方形をなし、その長軸方向は真北と直交し、N－90°－Eである。規模は長軸が1.26m、短軸が67cmで、深さが62cmである。

【堆積土】7層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、将棋倒し状の堆積状況を示している。なお、3層には灰白色火山灰ブロックが含まれていた。

【壁・底面】断面形は逆台形をなしており、壁は底面からほぼ直角ぎみに立ち上がる。底面は一定せず、起伏が認められる。

【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたのは土師器1点と弥生土器1点のみで、この他に土師器破片が35点・須恵器破片が12点出土している。土師器にはロクロで製作されたものが多く含まれている。

第86号土坑（SK 86）

【位置】VI区　S31.6～32.7　W4.2～5.8

【確認面・重複】主にIV層上面で確認された。第85号土坑・第20号ピット群のいくつかと重複しており、これらより古い。また、第53号溝跡とも重複しており、これより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は長方形を基調とするものと考えられる。その長軸方向は真北と直交し、N－90°－Eである。規模は長軸が1.49m、短軸が80cm、深さが40cmである。

【堆積土】4層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、ほぼ水平状に堆積している。

【壁・底面】断面形は逆台形に近く、壁は平坦な底面から急角度で立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたのは土師器1点・須恵器1点で、この他に土師器破片が45点・赤焼土器破片2点・須恵器破片5点が出土している。

第87号土坑（SK 87）

【位置】VI区　S32.9～33.8　W0.1～1.6

【確認面・重複】IV層上面で確認された。南半部は調査区外に延びている。第22号溝状遺構と重複しており、それより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は不整の円形を基調とするものと推定される。規模は東西が1.52m、南北が72cm以上、深さが50cmである。

【堆積土】10層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、下部は水平状に、上部は将棋倒し状に堆積している。

【壁・底面】壁面は一定せず、規則性はみられない。一部では内側に入り込んでいる。底面はほぼ平坦である。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片が32点・赤焼土器破片が1点出土したが、図示できるものはなかった。

第88号土坑（SK 88）

【位置】VI区　S29.2～30.8　W6.3～7.2

【確認面・重複】IV層上面および第24号溝状遺構の堆積土上面で確認された。その遺構よりは新しい。また、第1号堀跡に北側の部分が切られており、これより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は長い楕円形をなすものと推定される。その長軸方向は真北よりやや東に寄っており、N－5.5°－Eである。規模は長軸が1.40m以上、短軸が70cm、深さが27cmである。

【堆積土】2層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。1層には灰白色火山灰が含まれていた。

【壁・底面】底面は凹凸が著しく、ピット状の落ち込みも認められる。壁は底面からやや急角度で立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片17点・須恵器破片1点出土しているが、図示できるものはなかった。土師器はロクロで製作されたものも含まれている。

第89号土坑（SK 89）

【位置】VI区　S34～35.2　E61.5～62.8

【確認面・重複】第50号溝跡の底面から検出された。したがってこの遺構より古い。また、同じく第50号溝跡底面で検出された第75号土坑と重複しており、これより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は円形に近い。規模は径が約1.20m、深さは最深で47cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】壁は西側が急傾斜で立ち上がり、東側は途中までは急であるが、そこからは大きく外に開いている。

【出土遺物】堆積土中からわずかに土師器破片が3点・須恵器破片が2点出土したが、図示はできなかった。

第90号土坑（SK 90）

【位置】VII区　S70.2～71.4　W5.2～6.4

【確認面・重複】河川跡の堆積土上面で確認された。他の遺構との重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形で、規模は径が1.18m、深さが1.39mである。

【堆積土】2層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、水平状の堆積状況を示す。

【壁・底面】断面形は逆台形をなしており、壁は平坦な底面から急角度で立ち上がり、直線的に外傾している。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片8点・須恵器破片2点が出土したが、図示できるものはなかった。

第91号土坑（SK 91）

【位置】VII区　S70.9～72.9　E61.8～62.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。上部は大きく削平されている。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形をなしており、その長軸方向はN－24°－Eである。規模は長軸が1.93m、短軸が66cmで、深さが17cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面は皿状をなし、壁は底面からきわめてゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から土器などが出土した。図示できたのは土製品1点と石器1点で、この他に土師器破片8点・赤焼土器破片5点・須恵器破片1点がある。

第92号土坑（SK 92）

【位置】VII区　S71.8～72.5　E72.7～73.7

【確認面・重複】IV層上面で確認された。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形は不整の長方形をなし、その長軸方向はN－76°－Wである。規模は長軸が1.03m、短軸が65cmで、深さが14cmである。

【堆積土】3層確認された。1層はIV層ブロックを多く含む層である。

【壁・底面】壁面・底面とも一定しておらず、起伏やピット状の落ち込みも認められる。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片5点・須恵器破片1点が出土したが、図示はできなかった。

第93号土坑（SK 93）

【位置】Ⅶ区　S78.6～79.9　E84.6～86.1

【確認面・重複】Ⅳ層上面および第61号溝跡堆積土上面で確認された。したがってこの遺構より新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形をなし、規模は径が約1.45m、深さが89cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、水平状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面形は逆台形をなしており、壁は底面から急角度で立ち上がる。底面には凹凸がみられる。

【出土遺物】出土していない。

第94号土坑（SK 94）

【位置】Ⅷ区　S50.9～52　E101.8～102.9

【確認面・重複】Ⅳ層上面および第32号竪穴住居跡の堆積土中で確認された。したがってこの遺構よりは新しい。また、第97号土坑と重複しており、これより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は隅丸長方形に近い。その長軸方向はN－68°－Eである。規模は長軸が1.16m、短軸が84cmで、深さは23cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。炭化物・焼土を少し含む層である。

【壁・底面】底面は水平ではなく、凹凸もみられる。壁の立ち上がりは一定せず、東では急角度で、西ではゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたのは土師器4点・須恵器1点で、この他に土師器破片25点・赤焼土器破片1点・須恵器破片が7点出土している。

第95号土坑（SK 95）

【位置】Ⅷ区　S51.2～52.2　E99.9～100.6

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。西側は第64号溝跡に切られている。また、第32号竪穴住居跡と重複しており、これより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は円形を基調とするものと推定される。規模は径が約90cm、深さが17cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。Ⅳ層のブロックを多く含む層である。

【壁・底面】底面は水平ではなく、また凹凸もみられる。壁はそこからゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中からわずかに土師器破片が2点出土したのみで、図示できるものはなかった。

第96号土坑（SK 96）

【位置】Ⅷ区　S53.6～55.8　E103.4～104.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。東側は調査区外に延びている。重複する第30号溝状遺構より新しく、第25号ピット群のいくつかよりは古い。

【平面形・方向・規模】平面形は円形を基調とするものと推定される。規模は径が2.14m、深さが81cmである。

【堆積土】4層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。

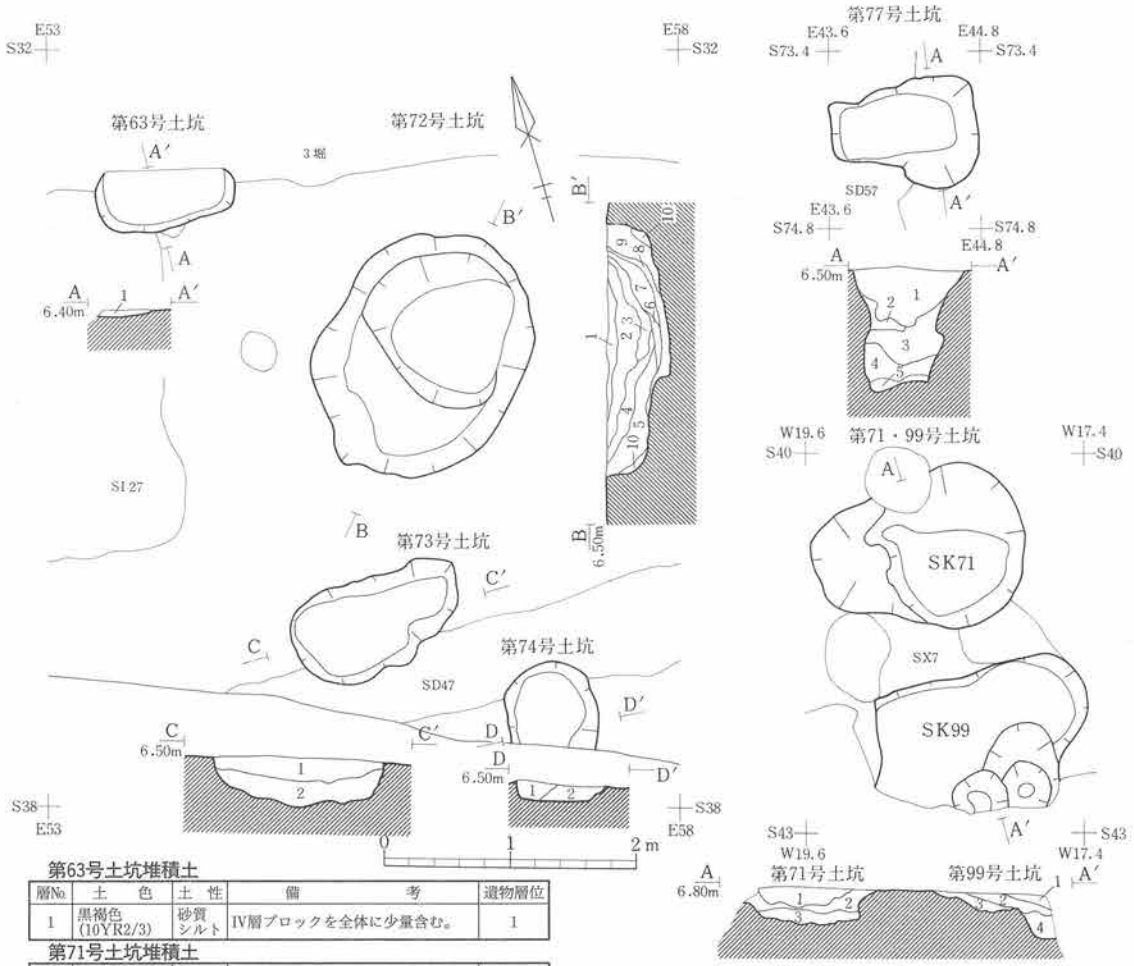
【壁・底面】断面形は不整形で、底面は水平ではなく、南側が深くなっている。壁は底面から比較的急角度で立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中からわずかに土師器破片3点・赤焼土器破片1点出土したのみで、図示できるものはなかった。

第97号土坑（SK 97）

【位置】Ⅷ区　S51.9～52.7　E101.6～102.7

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。南側は第31号竪穴住居跡に、北側は第94号土坑に切られてい



第63号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層ブロックを全体に少量含む。	1

第71号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物・灰を多量に含む。	堆積土
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂	炭化物・焼土を少量含む。	
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂	10YR7/6明黄褐色土粒子を多量に含む。	

第72号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	炭化物粒をまばらに含む。	堆上部
2	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	炭化物粒をまばらに含む。	
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	炭化物粒をまばらに含む。	
4	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	炭化物粒をまばらに含む。IV層ブロックを全体に含む。	
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物粒をまばらに含む。	
6	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	炭化物粒をまばらに含む。	堆下部
7	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	炭化物粒をまばらに含む。	
8	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	炭化物粒を密に含む。	
9	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	炭化物粒をまばらに含む。	
10	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	炭化物粒をまばらに含む。	

第74号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト		1
2	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層ブロックを全体に含む。	2

第73号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒色 (10YR2/1)	砂質シルト	IV層ブロックをまばらに含む。炭化物粒をわずかに含む。	1
2	黒色 (10YR2/1)	砂質シルト	IV層ブロックを全体に多く含む。炭化物粒をわずかに含む。	2

第77号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	炭化物粒をわずかに含む。
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	粗砂を縞状に含む。
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	IV層（白色粘土）ブロックを多量に含む。
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	粗砂をブロック状に含む。
5	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	細砂	酸化鉄斑紋を含む。

第99号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物を少量含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	焼土・炭化物をまばらに含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	焼土・炭化物を多量に含む。	
4	黒色 (10YR2/1)	砂質シルト	焼土・炭化物・灰を多量に含む。	

第155図　第63・71～74・77・99号土坑

る。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形をなすものと考えられ、その長軸方向はN－52.5°－Eである。規模は長軸が90cm以上、短軸は94cm、深さが23cmである。

【堆積土】2層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、水平状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面形は逆台形をなしている。底面は平坦で、壁はそこから急角度で曲がり、直線的に外傾している。

【出土遺物】堆積土中から土器が出土した。図示できたのは土師器1点で、この他に土師器破片が11点・須恵器破片が5点ある。

第98号土坑（SK 98）

【位置】Ⅷ区　S55.8～56.7　E96.5～97.5

【確認面・重複】Ⅳ層上面および第31号竪穴住居跡の堆積土中で確認された。したがって第31号竪穴住居跡より新しい。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形で、規模は径が約1.0m、深さが32cmである。

【堆積土】2層確認された。自然堆積層と考えられ、レンズ状の堆積状況を示す。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなし、壁は底面からゆるやかに立ち上がっている。底面には凹凸がみられる。

【出土遺物】堆積土中から土師器破片18点・須恵器破片1点出土したが、図示できるものはなかった。土師器坏底部では回転糸切り痕をもつものがみられた。また、この他に鉱滓が1点検出されている。

第99号土坑（SK 99）

【位置】Ⅶ区　S41.6～42.8　W17.4～19.1

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。南側は撹乱によって失われている。第19号ピット群のいくつかと重複しており、それらより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は不整形をしており、明確ではない。規模は東西が1.80m、南北が1.20m以上で、深さは最深で50cmである。

【堆積土】4層確認された。いずれも自然堆積土で将棋倒し状の堆積状況を示す。層中には炭化物・焼土が含まれている。

【壁・底面】底面は一定せず、ピット状の落ち込みがいくつか認められる。壁は底面からゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土中から図示した土師器3点が出土している。

第100号土坑（SK 100）

【位置】Ⅷ区　S15.6～17.2　E98.2～99.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。第26号ピット群のいくつかと重複しており、いずれよりも古い。

【平面形・方向・規模】平面形は不整の楕円形をなし、その長軸方向は真北より東に寄り、N－21°－Eである。規模は長軸が1.49m、短軸が1.24m、深さが18cmである。

【堆積土】2層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、レンズ状の堆積状況を示す。

【壁・底面】断面形は逆台形をなす。底面は平坦で、壁はそこから外に直線的に開いて立ち上がっている。

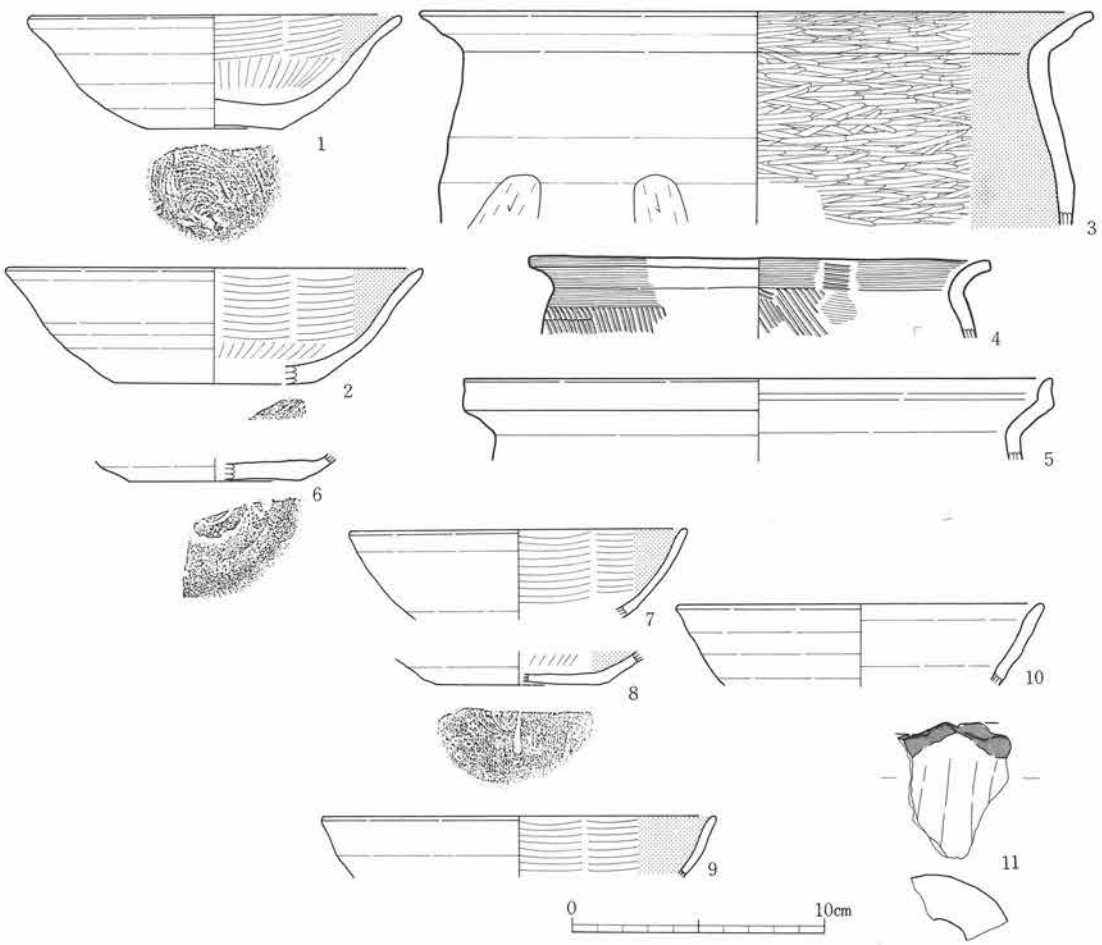
【出土遺物】堆積土中から図示した須恵器2点が出土している。また、この他に土師器破片が17点・須恵器破片が1点出土している。

第101号土坑（SK 101）

【位置】Ⅷ区　N17.3～18.2　E95.4～96.5

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。一部は調査区外に延びている。第26号ピット群の1つと重複しており、それより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形に近いものと推定される。その長軸方向はN－83.5°－Wであ



第59号土坑

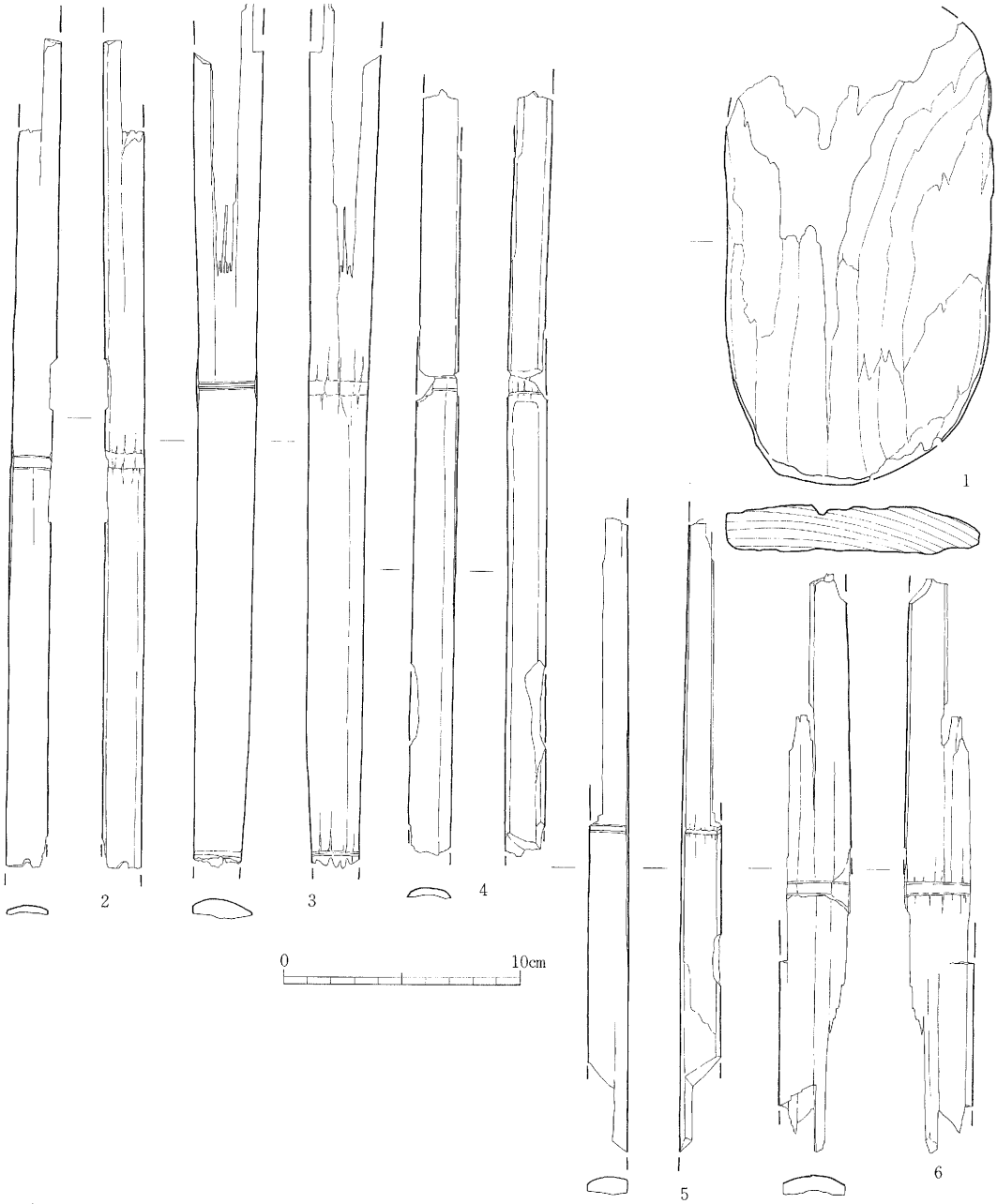
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ。底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～底部1/2	14.8	5.4	4.6	74-3	C-214
2	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ。底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部1/12 底部わずか	(16.4)	(7.8)	(4.6)	—	C-215
3	土師器 甕	堆1層	ロクロナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部1/4	(26.8)	—	—	—	C-216
4	土師器 甕	堆	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	口縁部1/4	(18.2)	—	—	—	C-217
5	土師器 甕	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/12	(23.2)	—	—	—	C-218
6	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ 回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	底部1/4	—	(6.8)	—	—	E-73

第71号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	土師器 坏	堆	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部1/4	(13.2)	—	—	—	C-219
8	土師器 坏	堆	ロクロナデ・回転糸切り・手持ちヘラケズリの再調整	ヘラミガキ・黒色処理	底部1/3	—	6.4	—	—	C-220
9	土師器 坏	堆	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部1/10	(15.4)	—	—	—	C-221
10	須恵器 坏	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/8	(14.4)	—	—	—	E-74

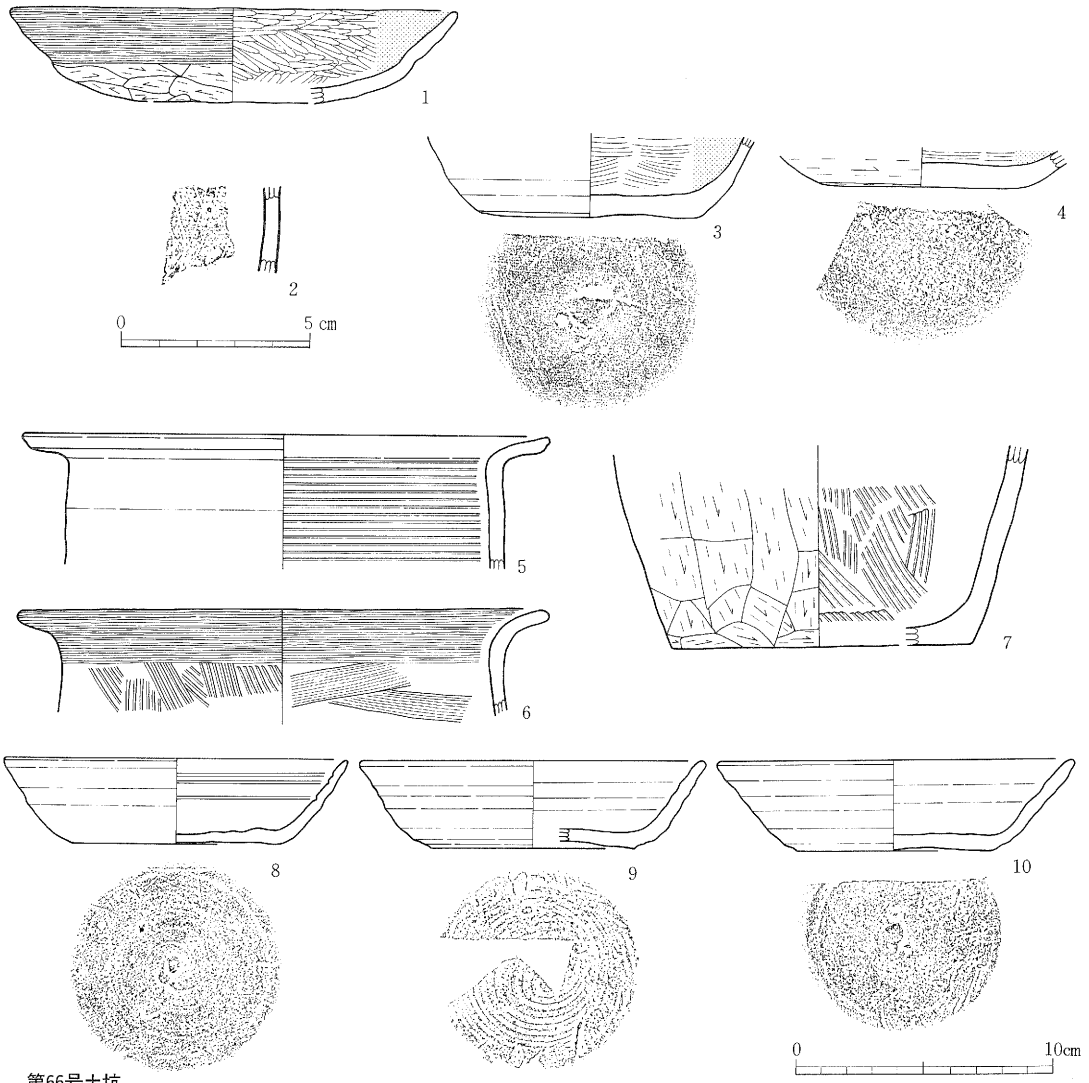
番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
11	フイゴの羽口	堆	先端部破片。溶解物付着。外面ケズリ。	(5.3)	(4.5)	(1.8)	(35.0)	(1.5)	94-4	土-52

第156図　第59・71号土坑出土遺物



番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真図版	登録番号
1	木製品	底面	劣化が著しい。板目材を使用。	−	(19.6)	11.2	1.3	−	L-79B
2	竹材	底面	上部・下部とも破損している。	−	(35.0)	1.8	0.3	−	L-80
3	竹材	底面	上部・下部とも破損している。	−	(37.0)	2.5	0.5	−	L-81
4	竹材	底面	上部・下部とも破損している。	−	(32.4)	1.8	0.4	−	L-82
5	竹材	底面	上部・下部とも破損している。	−	(26.7)	1.7	0.7	−	L-83
6	竹材	底面	上部・下部とも破損している。	−	(24.5)	2.7	0.7	−	L-84

第157図　第61号土坑出土遺物



第66号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～底部1/6	(17.4)	—	(3.6)	—	C-222

第67号土坑

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	弥生土器 壷	堆1層	二本平行沈線による文様。内面はナデ。	体部破片	—	—	—	87-26	弥-13

第72号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	土師器 坏	堆下部	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り・底部周辺のみ手持ちヘラケズリ再調整	ヘラミガキ・黒色処理	体部～底部1/6	—	9.0	—	—	C-223
4	土師器 坏	堆下部	底部切り離し不明・回転ヘラケズリ再調整	ヘラミガキ・黒色処理	底部1/4	—	(8.3)	—	—	C-224
5	土師器 甕	堆下部	ロクロナデ	ロクロナデ・カキ目	口縁部1/8	(20.6)	—	5.2	—	C-225
6	土師器 甕	堆上部	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部1/8	(21.1)	—	—	—	C-226
7	土師器 甕	堆上部	ヘラケズリ・ナデ調整	ハケメ	体部1/8	(11.8)	—	—	—	C-227
8	須恵器 坏	堆下部	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	口縁部～体部1/2 底部全体	13.4	8.2	3.4	79-1	E-75
9	須恵器 坏	堆下部	ロクロナデ・底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	口縁～底部3/4	13.4	8.0	3.5	79-2	E-76
10	須恵器 坏	堆下部	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	口縁～底部1/2	13.6	7.6	3.6	79-3	E-77

第158図　第66・67・72号土坑出土遺物

る。規模は長軸が1.04m以上、短軸80cm、深さは23cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。IV層粒子を多量に含む層である。

【壁・底面】断面は皿状に近く、壁は底面からきわめてゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】出土していない。

第102号土坑（SK 102）

【位置】Ⅷ区　N92.2～93.1　E102.2～103

【確認面・重複】IV層上面で確認された。重複関係は認められない。

【平面形・方向・規模】平面形はほぼ円形で、規模は径が84cm、深さが28cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。IV層ブロックが混在し、人為堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近い。壁は皿状の底面からゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】出土していない。

第103号土坑（SK 103）

【位置】V区　N2～3.1　E93～94.1

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第26号ピット群の1つと重複しており、これより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は細長い楕円形をなす。その長軸方向はN－31°－Wである。規模は長軸が1.33m、短軸が46cm、深さは19cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は底面からゆるやかに立ち上がる。底面には凹凸がみられる。

【出土遺物】出土していない。

第104号土坑（SK 104）

【位置】V区　N0.5～S0.5　E93.1～94

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第26号ピット群の1つと重複しており、それより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は楕円形をなし、その長軸方向はN－25°－Wである。規模は長軸が1.07m、短軸が48cm、深さが17cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は底面からゆるやかに立ち上がっている。底面には凹凸がみられる。

【出土遺物】出土していない。

第105号土坑（SK 105）

【位置】II区　N3.6～4.3　W90.1～91.2

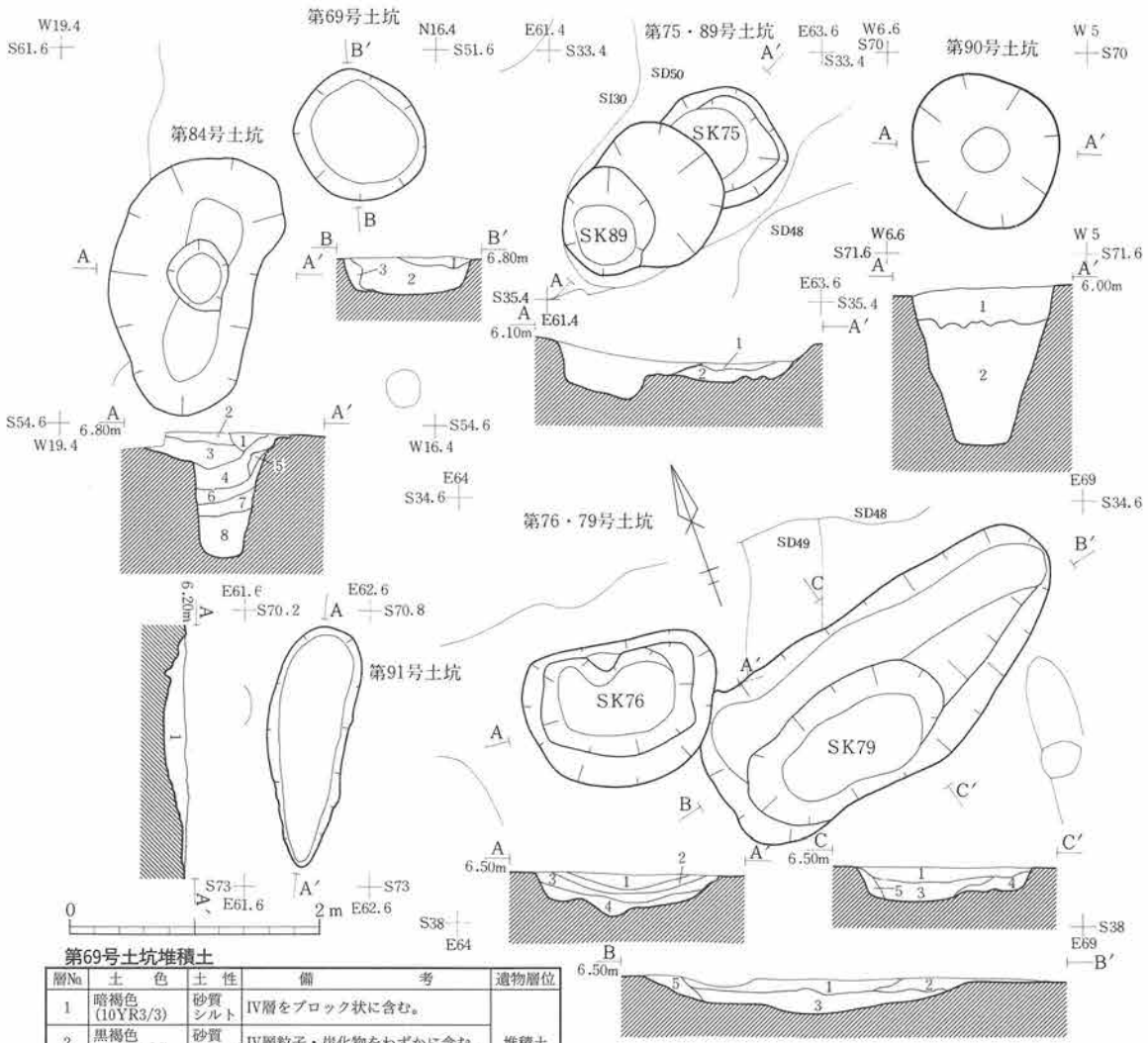
【確認面・重複】IV層上面で確認された。全体が検出された。重複はない。

【平面形・方向・規模】平面形は不整の楕円形をなし、その長軸方向は真北方向から大きく西に寄っており、N－47°－Wである。規模は長軸が1.24m、短軸が52cmであり、深さは14cmと浅い。

【堆積土】2層確認された。いずれも自然堆積層であり、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面形は逆台形に近く、壁はほぼ平坦な底面から外傾ぎみに立ち上がる。

【出土遺物】出土していない。



第69号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	IV層をブロック状に含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層粒子・炭化物をわずかに含む。	
3	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	IV層を多量に含む。	

第84号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	酸化鉄斑紋を少量含む。	堆積土
2	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	IV層粒子・酸化鉄斑紋を少量含む。	
3	褐色 (10YR4/4)	砂	マンガン粒を少量含む。	
4	褐色 (10YR4/4)	砂	III層よりやや暗く、マンガン粒をまばらに含む。	
5	暗褐色 (10YR3/4)	砂	焼土をわずかに含む。	
6	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層をブロック状に含む。	
7	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	10YR2/2 黒褐色土をつぶ状に含む。	
8	褐色 (10YR4/4)	砂	10YR2/2 黒褐色土をまばらに含む。	

第75号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	IV層小ブロックを多量に含む。	1
2	黒色 (10YR2/2)	粘土質シルト	こぶし大のIV層ブロックをわずかに含む。	2

第89号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	IV層小ブロックを少量含む。	1

第76号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	炭化物をわずかに含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層ブロックを多く含む。	
3	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	炭化物粒・IV層ブロックをまばらに含む。	
4	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	炭化物粒をまばらに含む。 IV層ブロックを少量含む。	

第79号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物粒・焼土粒をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物粒・焼土粒をわずかに含む。 IV層小ブロックをまばらに含む。	
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	炭化物粒・焼土粒をまばらに含む。	2
4	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層ブロックをまばらに含む。	
5	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト		

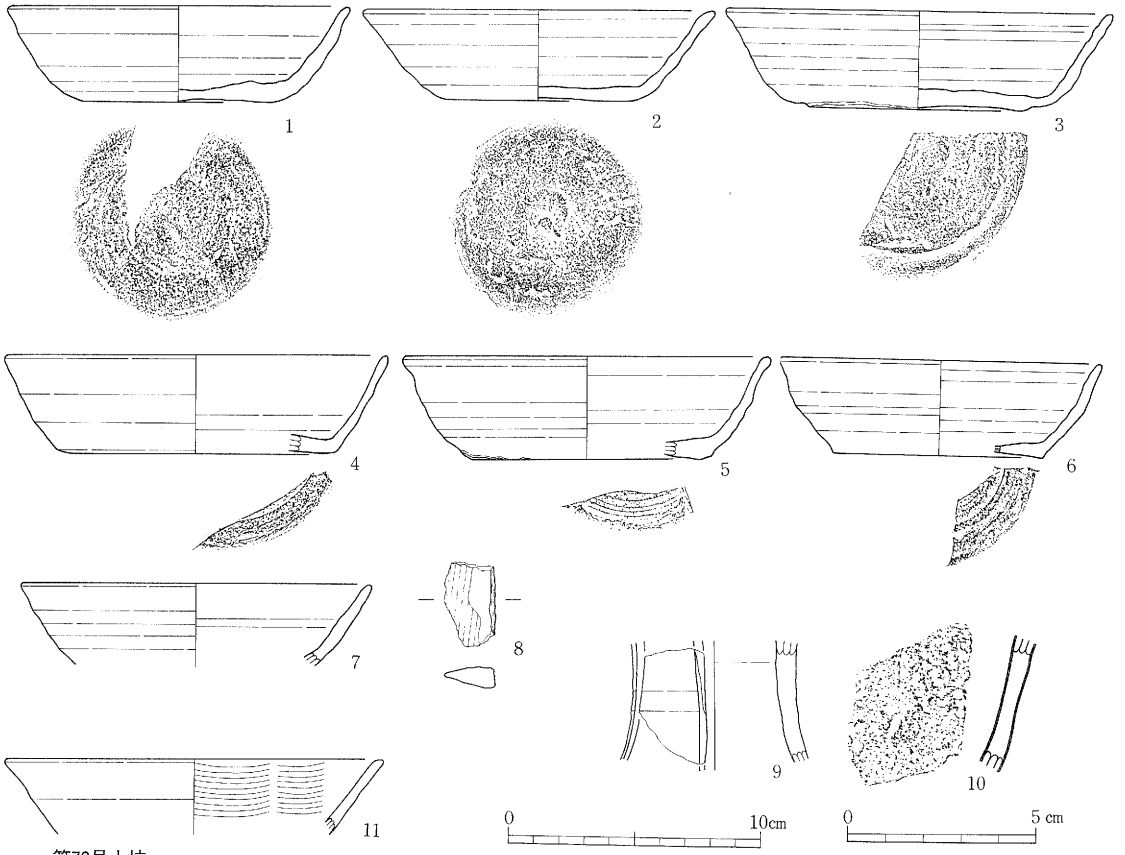
第90号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	褐灰色 (10YR4/1)	粗砂	炭化物粒・IV層粒子・酸化鉄斑紋を多量に含む。	1

第91号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	IV層小ブロックをわずかに含む。	1

第159図　第69・75・76・79・84・89～91号土坑



第72号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 坏	堆下部	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り・調整によるかるいナデ	ロクロナデ	体部～底部2/3	13.4	7.6	3.8	79-4	E-78
2	須恵器 坏	堆下部	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	底部全体 口縁～体部1/12	13.8	7.2	3.6	79-5	E-79
3	須恵器 坏	堆上部	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	口縁～底部1/4	15.2	10.0	3.9	79-6	E-80
4	須恵器 坏	堆上部	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	口縁～体部1/5	(15.0)	(10.0)	3.9	—	E-81
5	須恵器 坏	堆下部	ロクロナデ。底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	口縁～体部1/12	(14.4)	(9.2)	4.1	—	E-82
6	須恵器 坏	堆下部	ロクロナデ。底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	口縁～体部1/12	(13.6)	(8.4)	3.8	—	E-83
7	須恵器 坏	堆下部	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/8	(13.8)	—	—	—	E-84

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
8	砥石	堆下部	一部のみ。軟質でシルト質状の石材。	(3.4)	(2.0)	(0.8)	(5.5)	石英安山岩質凝灰岩	—	石-80

第73号土坑

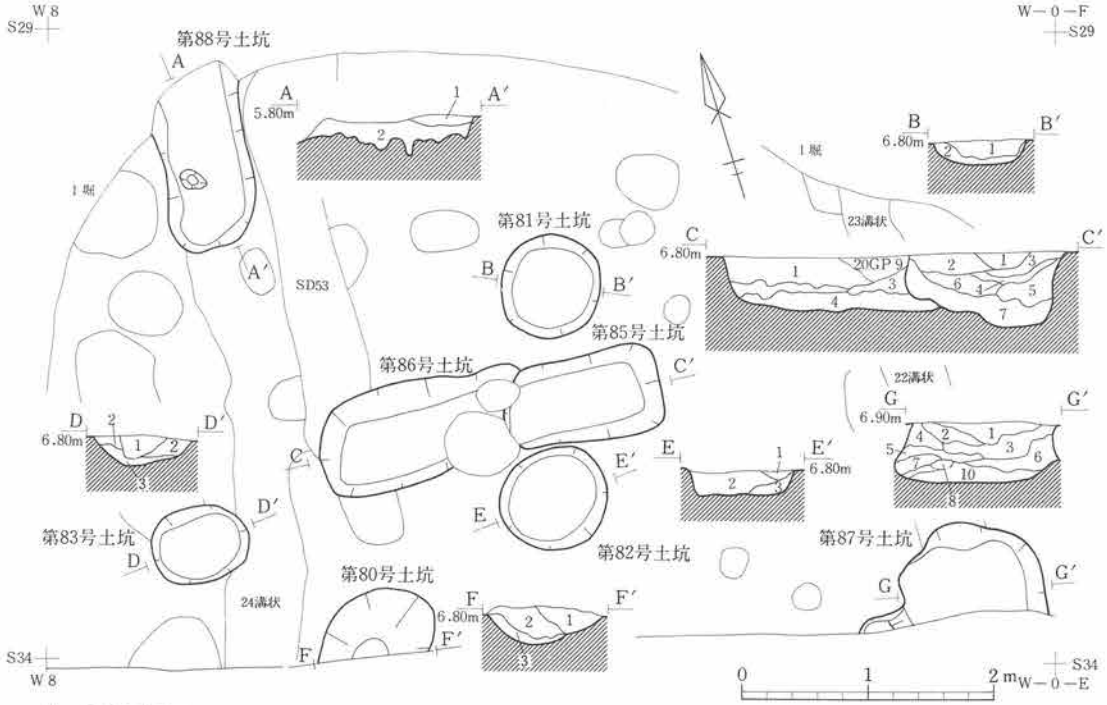
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
9	須恵器 高坏	堆1層	ロクロナデ。長方形の透かしをもつ。	ロクロナデ	脚部破片	—	—	—	—	E-85

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
10	縄文土器 深鉢	堆2層	縄文 LR。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	—	地-56

第78号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
11	土師器 坏	堆	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理？	口縁部1/8	(14.8)	—	—	—	C-228

第160図　第72・73・78号土坑出土遺物



第80号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土・炭化物をわずかに含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	Ⅳ層粒子・炭化物をまばらに含む。	
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層粒子を多量に含む。	

第81号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・焼土・炭化物を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	2

第82号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/4)	砂	焼土・炭化物・Ⅳ層をまばらに含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	焼土・炭化物を多量に含む。	
3	黒褐色 (10YR2/3)	砂	Ⅳ層を多量に含む。	

第83号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	炭化物を粒状に含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	Ⅳ層をブロック状に含む。	
3	褐色 (10YR4/4)	砂	Ⅳ層を多量に含む。	

第85号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト		1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	焼土粒を多量に含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物・灰白色火山灰ブロックを含む。	3
4	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物を少量含む。	4
5	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。	5
6	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層をまばらに含む。	6
7	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物・焼土・Ⅳ層をまばらに含む。	7

第86号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物・Ⅳ層粒子をまばらに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層をブロック状に含む。	
3	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	灰白色火山灰を少量含む。	2
4	褐色 (10YR4/4)	砂	黒褐色土ブロックを少量含む。	

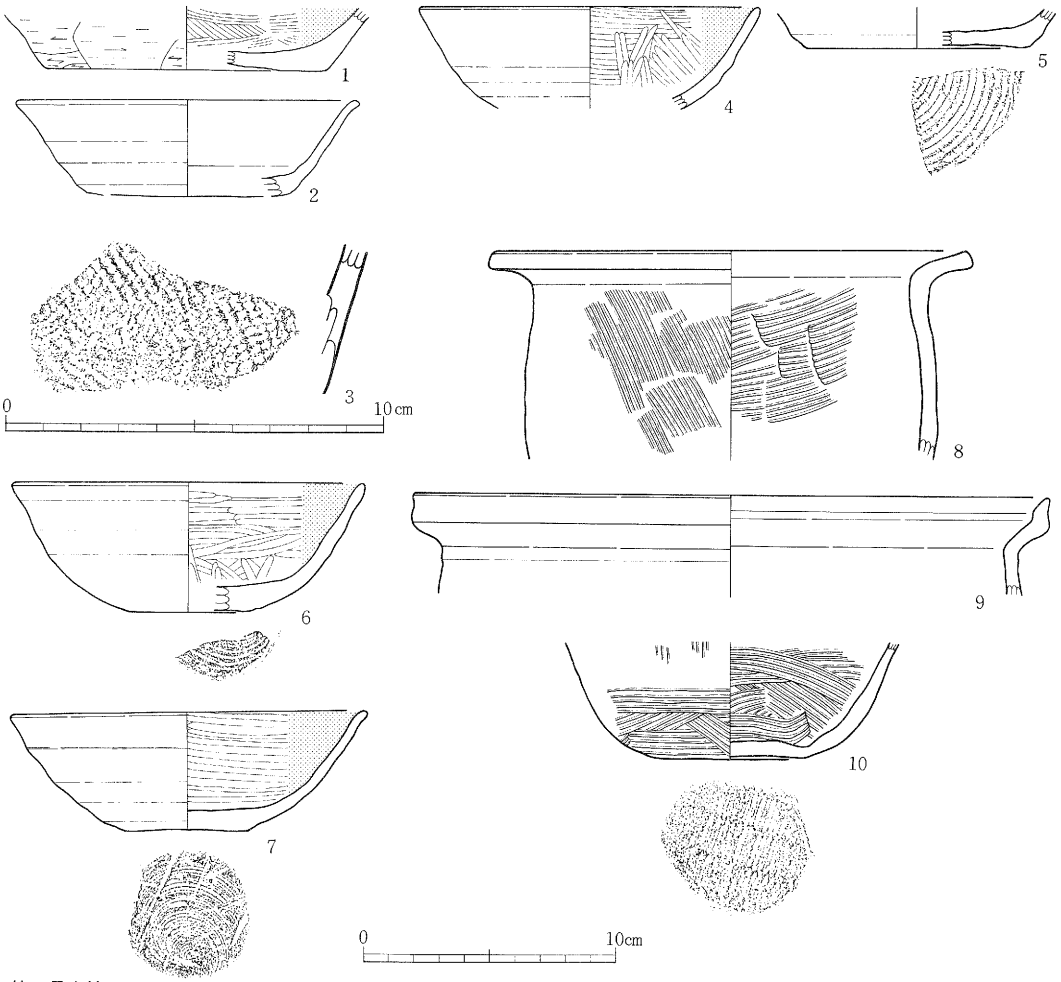
第87号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	焼土・炭化物を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土・炭化物を少量含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	炭化物を少量含む。	3
4	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・炭化物を少量含む。	4
5	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	Ⅳ層粒子をまばらに含む。	5
6	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土・・炭化物を少量含む。	6
7	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層をまばらに含む。	7
8	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層をわずかに含む。	8
9	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	Ⅳ層を多量に含む。	9
10	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	Ⅳ層ブロック・炭化物をまばらに含む。	10

第88号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	灰白色火山灰・炭化物をまばらに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・炭化物をまばらに含む。	2

第161図　第80～83・85～88号土坑



第79号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆	手持ちヘラケズリ・切り離し不明	ヘラミガキ・黒色処理	底部1/3	—	(11.0)	—	—	C-229
2	須恵器 坏	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部1/8	(13.4)	(8.0)	3.8	—	E-86

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	縄文土器 深鉢	堆	縄文 RL。	体部破片	—	—	—	87-7	地-57

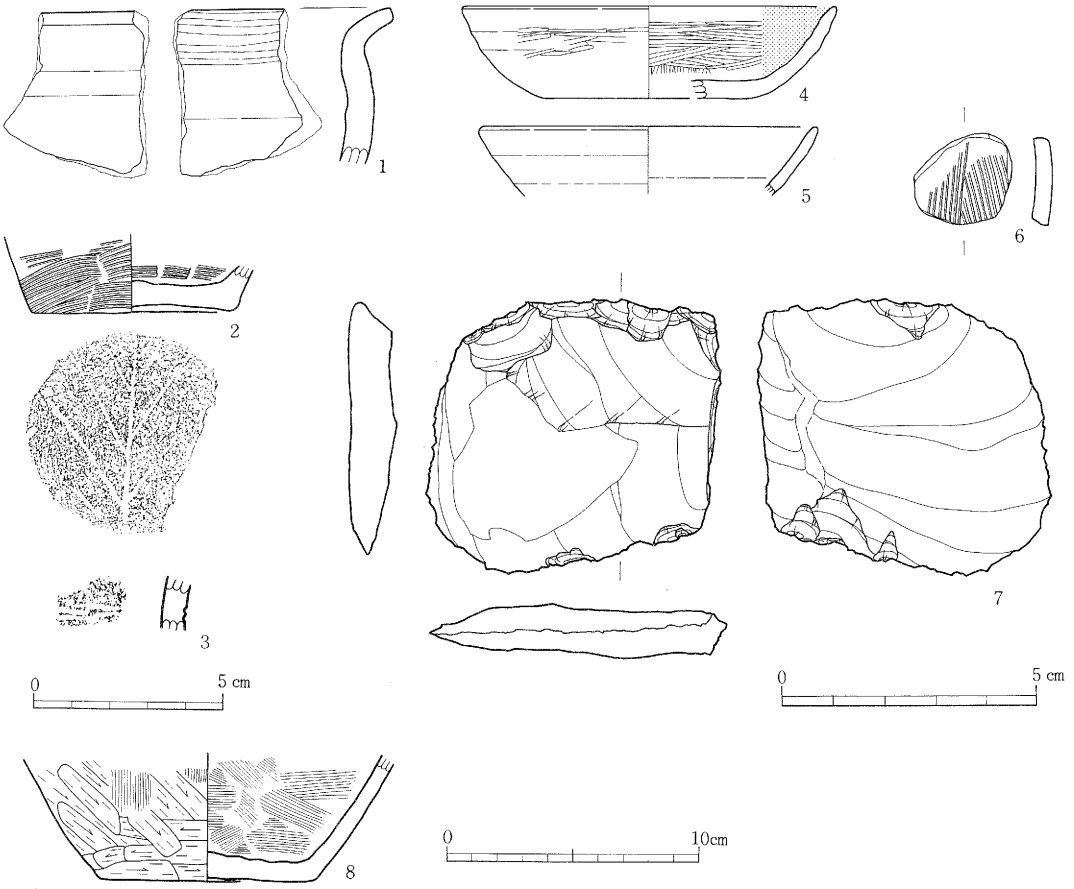
第80号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	土師器 坏	堆	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部1/12	13.6	—	—	—	C-230
5	須恵器 坏	堆	ロクロナデ。底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	体部～底部1/4	—	(8.9)	—	—	E-87

第82号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	土師器 坏	堆	ロクロナデ。底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	全体の1/5	(14.0)	(5.0)	5.1	—	C-231
7	土師器 坏	堆	ロクロナデ。底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	ほぼ完形	14.2	5.0	4.7	74-4	C-232
8	土師器 甕	堆	ロクロナデ・ハケメ	ロクロナデ・ハケメ	口縁部1/8	(18.8)	—	—	—	C-233
9	土師器 甕	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/8	(25.2)	—	—	—	C-234
10	土師器 甕	堆	ハケメ・底部蔣状圧痕	ハケメ	体部～底部3/5	—	6.0	—	—	C-235

第162図　第79・80・82号土坑出土遺物



第83号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	堆	ロクロナデ	ロクロナデ・黒色処理・ヘラミガキ	破片	—	—	—	—	C-236

第85号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	土師器 甕	堆	ハケメ・底部木葉痕	ハケメ	体部～底部4/5	—	8.0	—	—	C-237

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	弥生土器 甕	堆6層	外面に綾絡文。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	—	弥-40

第86号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	土師器 坏	堆2層	ロクロナデ・ヘラミガキ・底部切り離し不明	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～底部1/5	(14.9)	(8.4)	3.7	—	C-238
5	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/6	(13.6)	—	—	—	E-88

第91号土坑

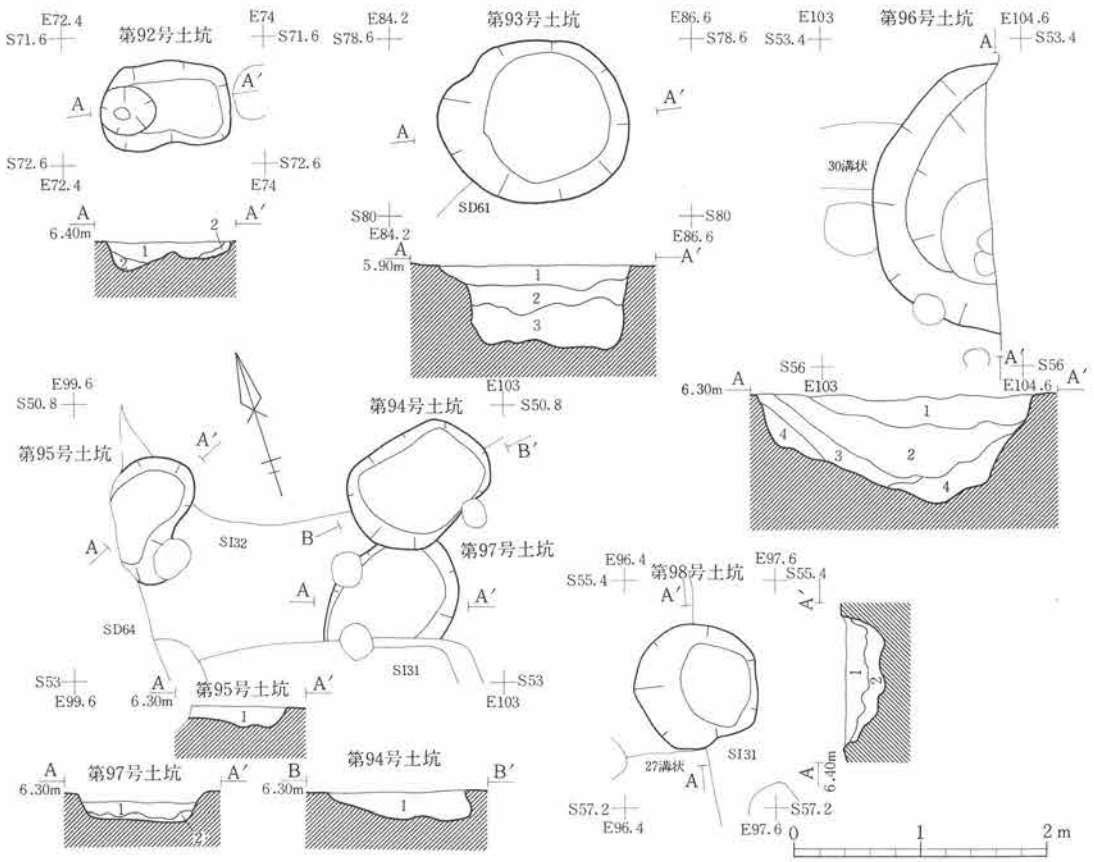
番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
6	打ち欠き痕のある土師器片	堆	甕の体部破片の周辺を打ち欠いている。外面ハケメ。内面ヘラナデ。白針わずかに含む。	3.9	3.6	0.65	11.8	—	94-11	土-62

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
7	剥片石器	堆	一部に焼けはじけあり。方形に近い剥片の上下縁辺に二次加工が加えられている。	5.6	5.4	0.95	37.4	石英安山岩	95-10	石-13

第97号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
8	土師器 甕	堆	ヘラケズリ・底部切り離し不明・ナデで調整	ナデ	体部～底部	—	8.4	—	—	C-239

第163図　第83・85・86・91・97号土坑出土遺物



第92号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	IV層ブロックを含む。	1
2	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト		2
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト		3

第93号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	全体的にマンガン斑を含む。
2	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	全体的に酸化鉄マンガン斑を含む。
3	灰色 (7.5Y4/1)	シルト	IV層ブロックを全体に少量含む。

第94号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物・焼土を少量含む。	1

第95号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを全体に多く含む。	1

第96号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層ブロックを多く含む。炭化物粒をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物粒をわずかに含む。	2
3	黒色 (10YR2/1)	シルト	IV層小ブロックを全体に少量含む。	3
4	黒色 (10YR2/1)	シルト	やや大きめのIV層ブロックを全体に含む。	4

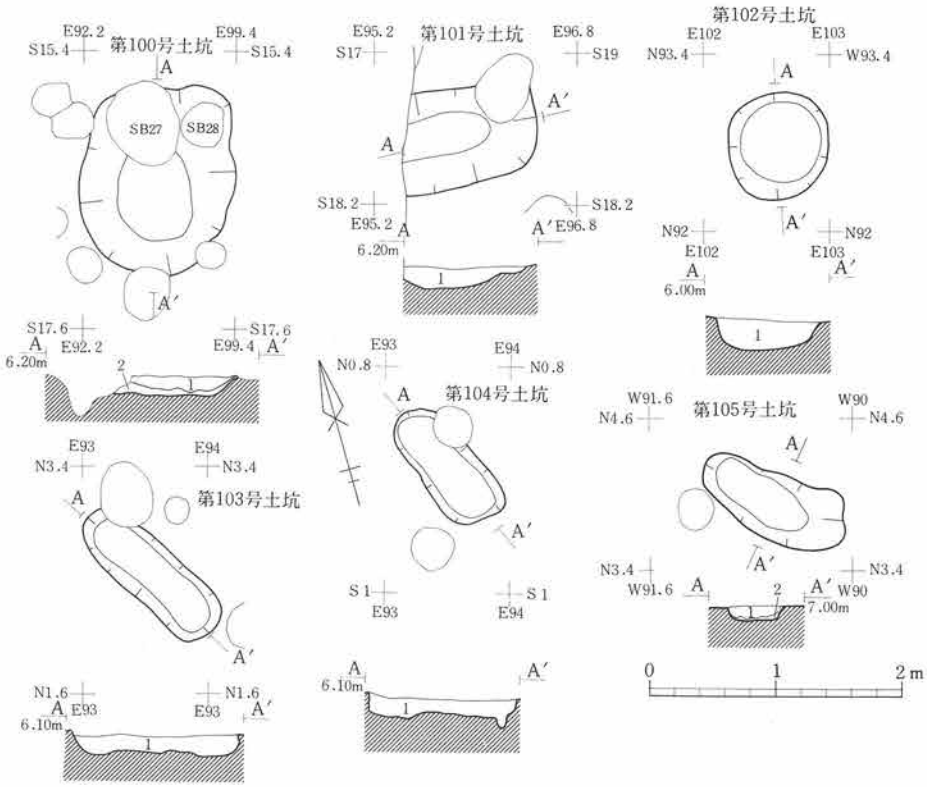
第97号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒色 (10YR2/2)	シルト	IV層小ブロック・炭化物粒・焼土粒を少量含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト		2

第98号土坑堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物粒を少量含む。	1
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	IV層を多量に含む。	2

第164図　第92～98号土坑



第100号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒色 (10YR2/1)	シルト	IV層をわずかに含む。	堆積土
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層粒子を多量に含む。	

第101号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子・酸化鉄斑紋を多量に含む。

第102号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を全体的に混じる。人為堆積

第103号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層小ブロックがまばらに含む。

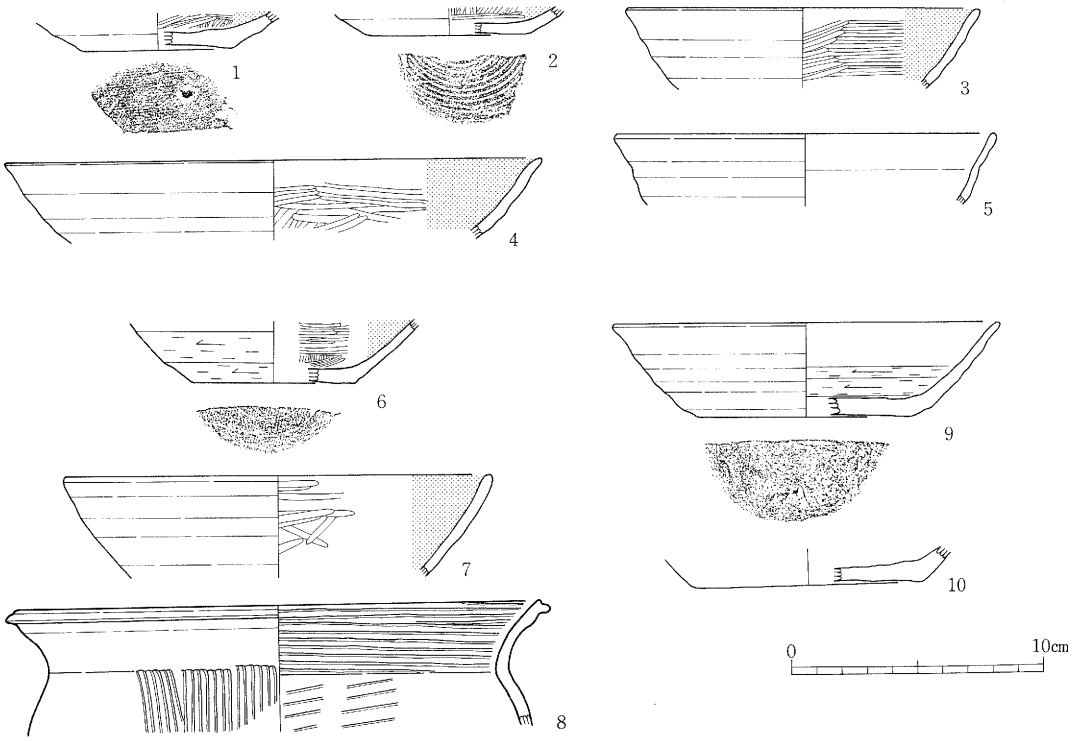
第104号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層小ブロック・酸化鉄斑紋をまばらに含む。

第105号土坑堆積土

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層粒子を少量含む。炭化物をわずかに含む。

第165図　第100～105号土坑



第94号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ。底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	体部～底部1/4	—	(6.2)	—	—	C-240
2	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ。底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	体部～底部1/4	—	(6.6)	—	—	C-241
3	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部1/8	(14.0)	—	—	—	C-242
4	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部1/10	(21.4)	—	—	—	C-243
5	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/10	15.2	—	—	—	E-89

第99号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	土師器 坏	堆	底部回転ヘラ切り。底部及び体部回転ヘラケズリの再調整	ヘラミガキ・黒色処理	体部～底部1/8	—	(6.4)	—	—	C-244
7	土師器 坏	堆	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部1/10	(16.8)	—	—	—	C-245
8	土師器 甕	堆	ロクロナデ・ハケメ	ハケメ・アテ目（平行）	口縁部1/9	(20.8)	—	—	—	C-246

第100号土坑

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
9	須恵器 坏	堆	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	ロクロナデ。体部下半回転ヘラケズリ・ロクロナデ	口縁～底部1/3	15.4	8.5	3.7	—	E-90
10	須恵器 坏	堆	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ再調整	ロクロナデ	体部～底部1/4	—	9.2	—	—	E-91

第166図　第94・99・100号土坑出土遺物

9．堀　跡

第1号堀跡

【位置】VI～VII区　S25.4～73　W16.2～E16.5

【確認面・重複】IV層上面および河川跡堆積土上面で確認された。部分的に調査区外に広がり、VII区において東はさらに調査区外に延びる。他の遺構とも3箇所で重複しており、第61号土坑より古いが、その他のいずれよりは新しい。

【平面形・方向・規模】主に北辺と西辺からなり、「L」字形に検出されている。また、西辺からさらに東に屈曲しており、東辺が存在することが推定される。北辺は長さが約24.5mで、両側が検出された地点での上端幅は約5.5m、下端幅は約1 m、深さは約1.7mである。南岸には確認面から30～50cm低いテラス状の平坦面が南側に広がっており、また、北辺の東端は幾分丸みをもって終結している。西辺は長さが約43mで、北西隅付近での上端幅が約5 m、下端幅が約1 m、深さが約1.6mである。しかし、南西隅で確認された上端幅は約3 mであり、幅が小さくなっている。方向は北辺がN－64°－Wで、西辺がN－21°－Eであり、直交する。

【堆積土】堆積土は16層確認され、4層に大別される。層No. 1は自然堆積層である。層No. 2～6は人為堆積層と考えられ、各種土層ブロックが混在する。層No. 7～14は自然堆積層であり、粘土と砂の互層となっている。層中に植物遺体を含む層が多い。層No. 15・16は砂主体の層であり、底面に20cm前後の厚さで堆積している。水成堆積物の可能性が考えられる。

【壁・底面】断面形は逆台形をなしており、南壁は底面から約50°の急角度で立ち上がり、直線的に開いている。それに対して北壁は底面から比較的ゆるやかに立ち上がっている。また、北辺東端部の東壁の立ち上がりも比較的急激である。底面は概して平坦であるが、全体的には北辺の中央部が最も低く、そこに西方から傾斜している。

【特記事項】全体的な方向性が後述する第2号堀跡と一致すること、また、北辺の東端が第2号堀跡と約1.5m離れて近接していることなど、相方の配置に規則性がみられることなどから、これらの堀跡は同時に存在していた可能性が考えられる。

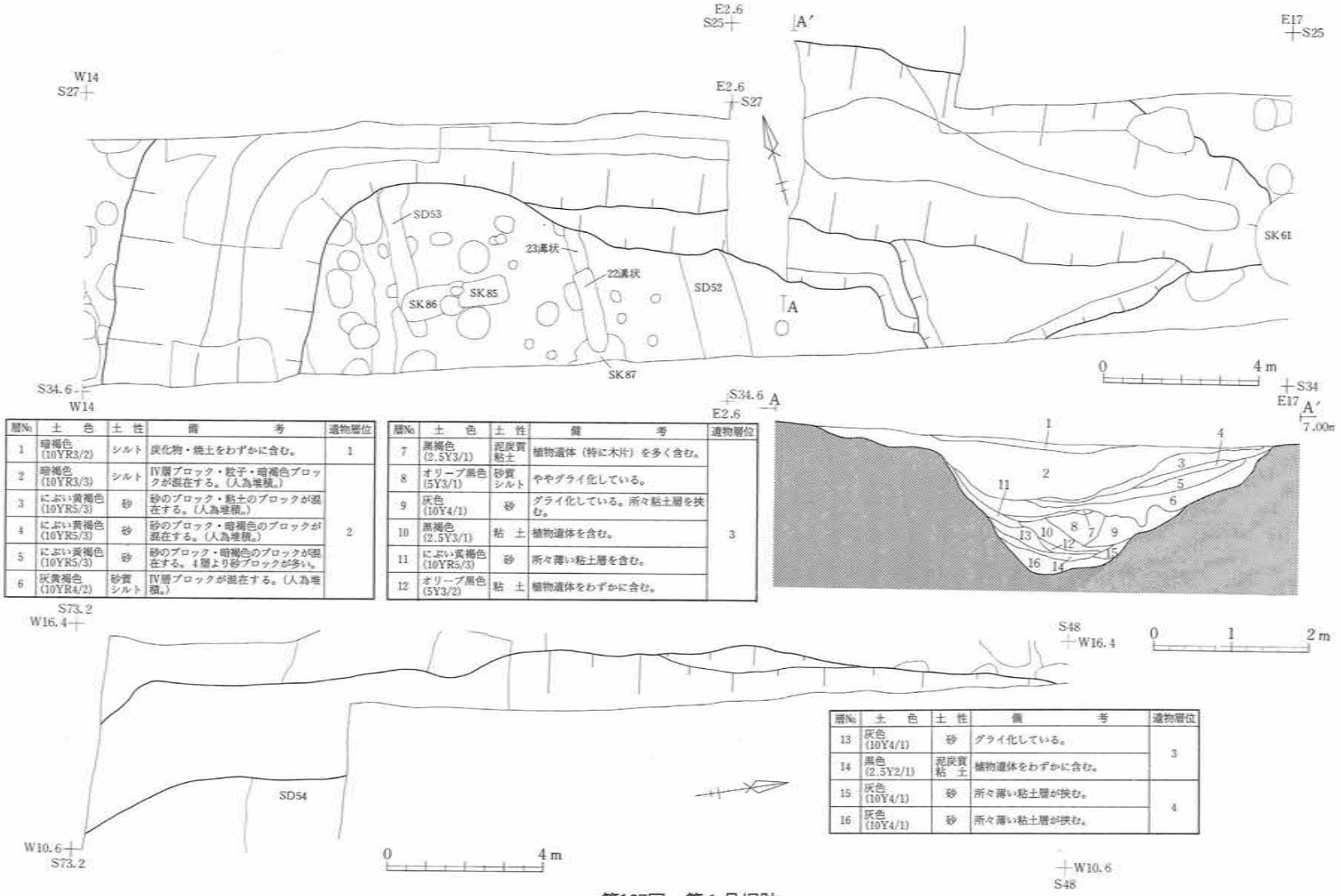
【出土遺物】堆積土から多量の遺物が出土した。図示できた遺物として、土師器12点・須恵器9点・陶器2点・磁器1点・弥生土器4点・とりべ7点・土錘4点・フイゴの羽口1点・石鏃1点・砥石1点・敲打痕や磨面をもつ礫8点・鉄製品2点・漆器1点がある。陶器は無釉の壷か甕の一部とみられ、在地産で中世前半頃のものと考えられる。磁器は中国産の白磁碗で、16世紀頃に位置付けられるものである。漆器は椀で、高台が高く器壁が厚みをもつタイプのものである。これらの遺物の他に、土師器破片487点・須恵器破片125点・陶器破片1点・白磁破片1点（写真85－16）・とりべ破片1点（写真89－13）・鉱滓7点・クルミの堅果14点などが出土している。

第2号堀跡

【位置】VI～VII区　S22.5～78　E13.5～59.7

【確認面・重複】IV層上面で確認された。初めにVI区中央部で検出され、さらにVI区拡張区・試掘B・Cトレンチなどでその続きが確認され、VII区の調査区内でもその一部が検出された。そしてVI区ではさらに北と東の調査区外に、VII区では南の調査区外に延びている。調査の都合上、VI・VII区とも一部の検出しかできなかった。いろいろな遺構と重複しているが、第61号土坑に切られている他はほとんどの遺構を切っている。

【平面形・方向・規模】主に「コ」字形に検出された。それぞれ直線的に走行しており、そしてほぼ直角に屈曲している。北辺は長さが約38m確認され、さらに北と東に延びる。方向はN－78°－Wである。北西隅での規模は上端幅が約5 m、下端幅が約1 m、深さが最深で約1.9mである。西辺は試掘トレンチを介してVII区の第2号堀跡に続いており、その

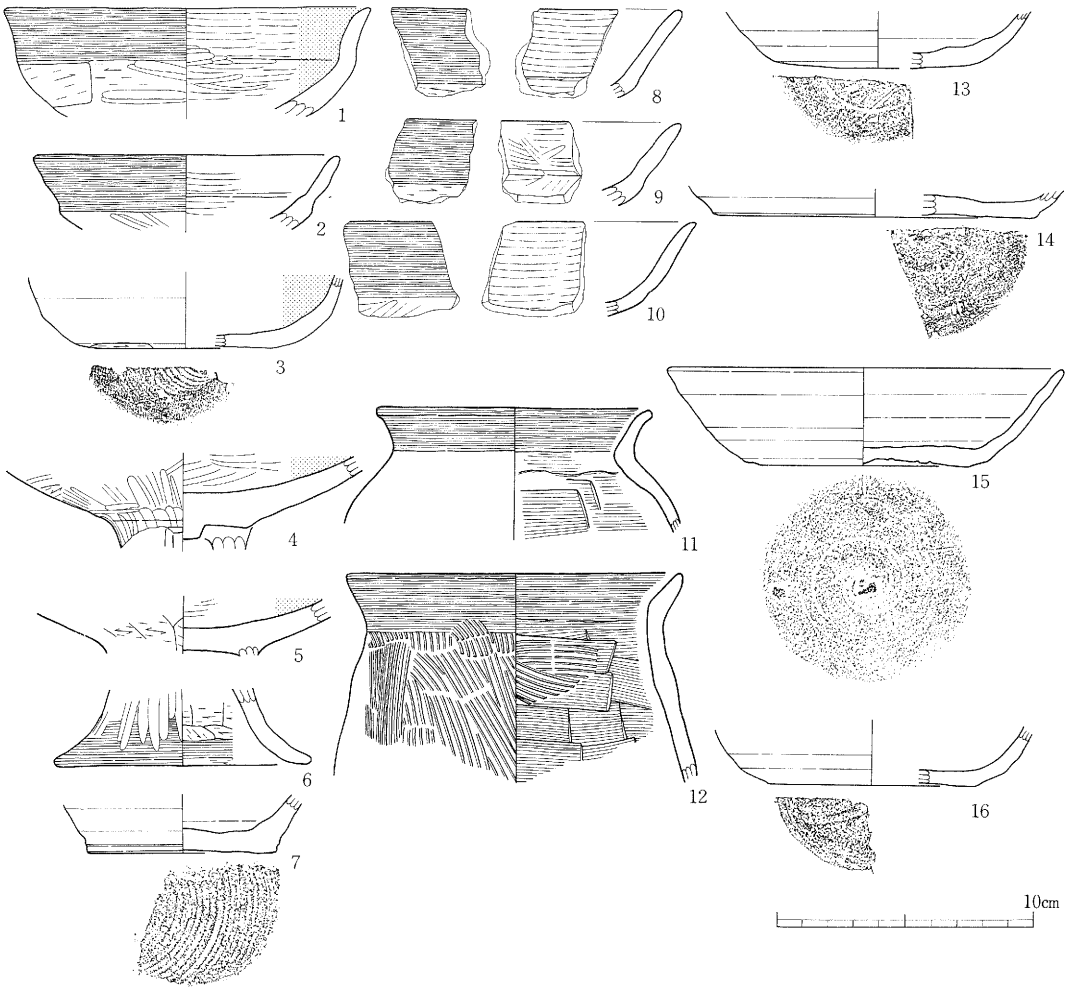


層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物・焼土をわずかに含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子・暗褐色ブロックが混在する。(人為堆積。)	2
3	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂	砂のブロック・粘土のブロックが混在する。(人為堆積。)	
4	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂	砂のブロック・暗褐色のブロックが混在する。(人為堆積。)	
5	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂	砂のブロック・暗褐色のブロックが混在する。4層より砂ブロックが多い。	
6	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	Ⅳ層ブロックが混在する。(人為堆積。)	

層No	土色	土性	備考	遺物層位
7	黒褐色 (2.5Y3/1)	泥炭質粘土	植物遺体 (特に木片) を多く含む。	3
8	オリーブ黒色 (5Y3/1)	砂質シルト	ややグライ化している。	
9	灰色 (10Y4/1)	砂	グライ化している。所々粘土層を挟む。	
10	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土	植物遺体を含む。	
11	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	砂	所々薄い粘土層を含む。	
12	オリーブ黒色 (5Y3/2)	粘土	植物遺体をわずかに含む。	

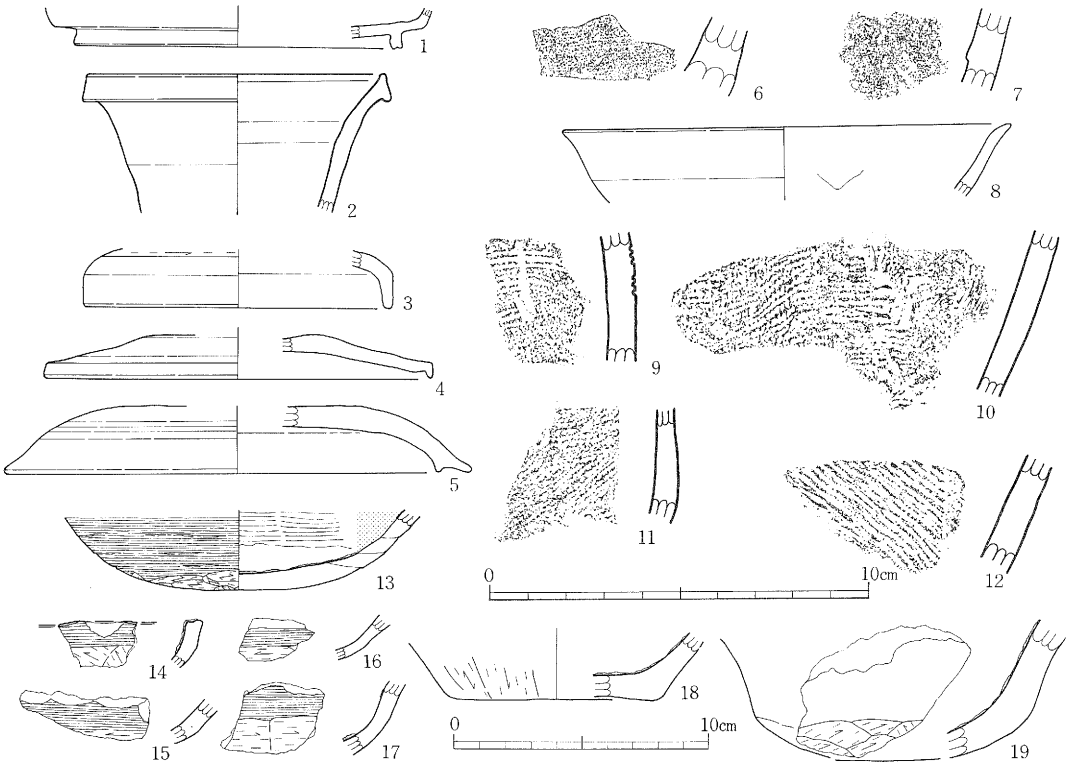
層No	土色	土性	備考	遺物層位
13	灰色 (10Y4/1)	砂	グライ化している。	3
14	黒色 (2.5Y2/1)	泥炭質粘土	植物遺体をわずかに含む。	
15	灰色 (10Y4/1)	砂	所々薄い粘土層が挟む。	4
16	灰色 (10Y4/1)	砂	所々薄い粘土層が挟む。	

第167図　第1号堀跡



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆2層	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部1/8	(14.4)	—	—	—	C-247
2	土師器 坏	堆3・4層	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理か？	口縁～体部1/12	(12.0)	—	—	—	C-248
3	土師器 坏	堆2層	ロクロナデ底部回転糸切り・手持ちヘラケズリの再調整	ヘラミガキ・黒色処理	体～底部1/4	—	6.6	—	—	C-249
4	土師器 高坏	堆3・4層	ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	坏部下方1/4	—	—	—	—	C-250
5	土師器 高坏	堆1層	ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	坏部下方1/2	—	—	—	—	C-251
6	土師器 高坏	堆2層	ヘラミガキ・ヨコナデ	ヘラケズリ・ヨコナデ	脚部1/8	—	(10.0)	—	—	C-252
7	土師器 甕	堆2層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	底部1/4	—	7.4	—	—	C-253
8	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	破片実測	—	—	—	—	C-254
9	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	破片実測	—	—	—	—	C-255
10	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	破片実測	—	—	—	—	C-256
11	土師器 甕	堆1層	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁～体部上半1/8	(10.6)	—	—	—	C-257
12	土師器 甕	堆3・4層	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ・ヘラナデ	口縁～体部上半1/4	13.2	—	—	—	C-258
13	須恵器 坏	堆3層	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	体～底部1/4	—	8.0	—	—	E-92
14	須恵器 坏	堆3・4層	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	底部1/4	—	12.8	—	—	E-93
15	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	全体の2/3	15.6	8.1	3.9	—	E-94
16	須恵器 坏	堆2層	ロクロナデ 底部回転糸切り・ナデ	ロクロナデ	体～底部1/12	—	(8.4)	—	—	E-95

第168図　第1号堀跡出土遺物（1）



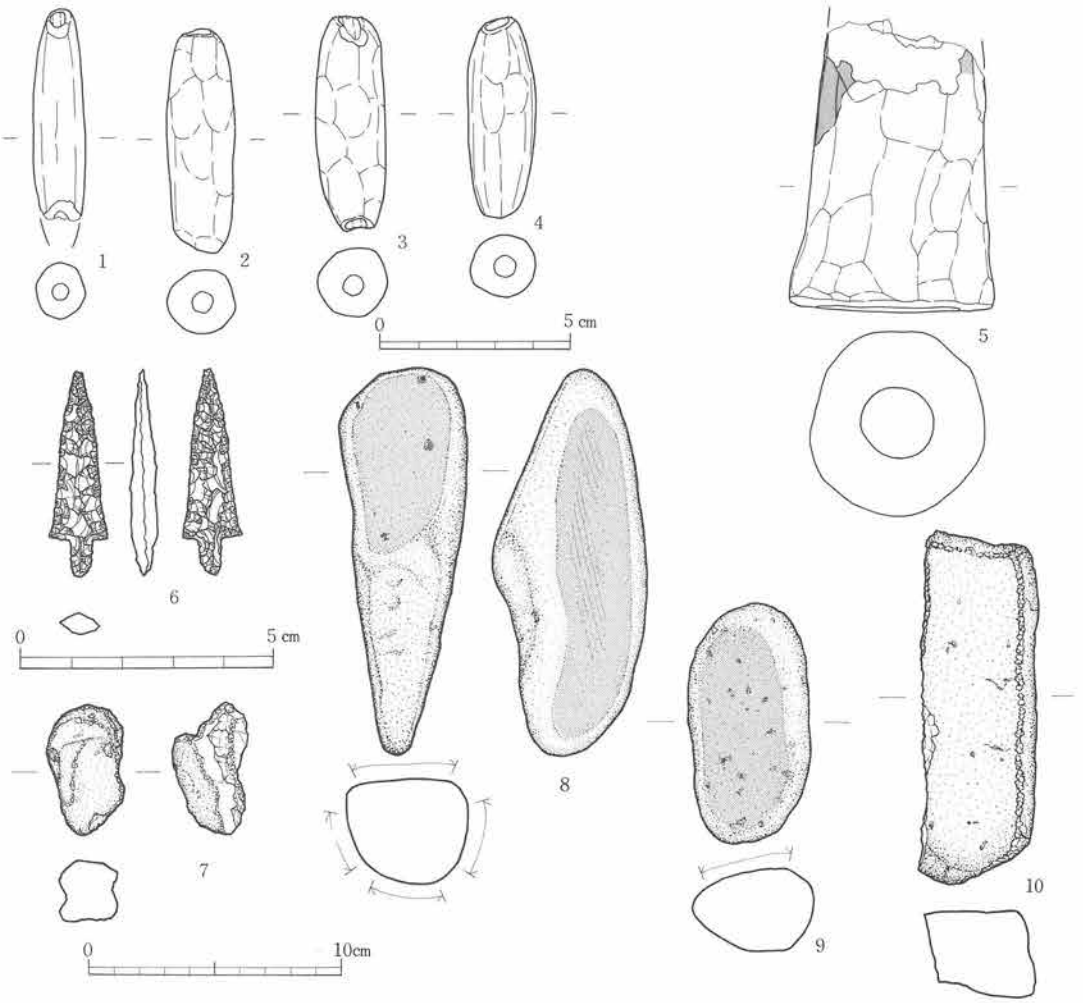
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 高台付坏	堆2層	ロクロナデ	ロクロナデ	底部1/8	—	13.0	—	—	E-96
2	須恵器 長頸壺	堆2層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部上半1/8	(11.8)	—	—	—	E-97
3	須恵器 蓋	堆2層	ヘラケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/4	(12.2)	—	—	—	E-98
4	須恵器 蓋	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/7	(15.4)	—	—	—	E-99
5	須恵器 蓋	堆3・4層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/4	18.4	—	—	—	E-100

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	陶器 甕？	堆2層	内外面ともヘラナデ。	在地	中世	体部破片	—	—	—	83-14	I-48
7	陶器 壺か甕	堆2層	外面はヨコナデ。内面はナデ。	在地白石窯	13C後半～14C	体部破片	—	—	—	—	I-49
8	白磁 碗	堆3層	端反りの口縁。内面に文様あり。	中国	16C頃	口縁部1/16	(17.6)	—	—	85-14	J-2

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
9	弥生土器 壺	堆2層	三本平行沈線による同心円文か渦巻文。	体部破片	—	—	—	88-3	弥-28
10	弥生土器 甕？	堆2層	撚糸文R。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	88-12	地-45
11	弥生土器 甕？	堆3・4層	撚糸文R。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	88-17	地-46
12	弥生土器 甕？	堆2層	撚糸文R。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	88-22	地-88

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
13	とりべ	堆3・4層	底部は丸底をなす。外面はヨコナデ・ヘラケズリ。内面はヘラミガキ・黒色処理。土師器坏の転用か。器厚－0.7cm	体～底部破片	—	—	—	90-10	ト-14
14	とりべ	堆2層	外面に稜があり、底部は丸底になるものと想定される。外面はヨコナデ・ヘラケズリ。内面は溶解物付着。器厚－0.6cm	口縁～体部破片	—	—	—	89-10	ト-9
15	とりべ	堆1層	外面に稜があり、底部は丸底になるものと推定される。外面はヨコナデ・ヘラケズリ。内面は溶解物付着。器厚－0.7cm	体～底部破片	—	—	—	89-8	ト-10
16	とりべ	堆1層	外面下方にかすかに稜がみられ、底部は丸底になるものと推定される。外面はヨコナデ・ヘラケズリ。内面にはわずかに溶解物付着。白斜わずかに含む。器厚－0.6cm	体～底部破片	—	—	—	89-9	ト-7
17	とりべ	堆1層	外面に軽い稜があり、底部は丸底になるものと推定される。外面はヨコナデ・ヘラケズリ。内面は溶解物付着。器厚－0.6cm	体～底部破片	—	—	—	89-11	ト-11
18	とりべ	堆1層	底部は平底。外面は体部、底部ともヘラケズリ。内面は溶解物付着。器厚－0.9cm	体～底部破片	—	(8.0)	—	90-6	ト-13
19	とりべ	堆2層	外面下方に稜があり、底部は丸底に近い。体部はヨコナデ？底部はヘラケズリ。内面には溶解物付着。器厚－1.2cm	体～底部破片	—	—	—	90-5	ト-8

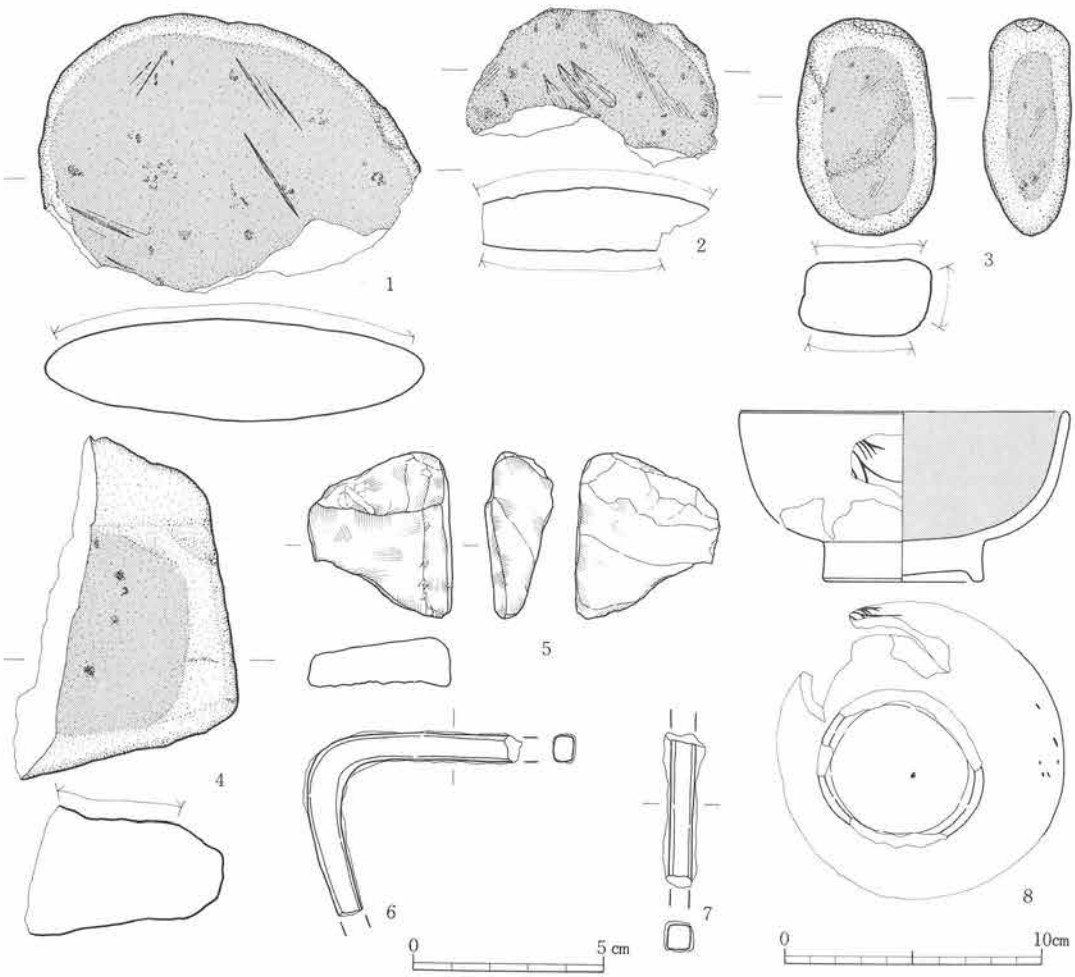
第169図　第1号堀跡出土遺物（2）



番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
1	土錘	堆2層	一端欠損。	(5.6)	1.35	1.5	(11.6)	0.45	93-11	土-14
2	土錘	堆2層	完形。外面はオサエ後、ミガキ。白針多く含む。	5.95	1.8	1.7	16.8	0.55	93-1	土-17
3	土錘	堆1層	ほぼ完形。外面はオサエ後、一部ミガキ。 白針多く含む。	5.7	1.85	1.85	18.2	0.55	93-5	土-15
4	土錘	堆1層	完形。外面はオサエ後、ミガキ。白針わずかに含む。	5.3	1.75	1.65	(14.6)	0.55	93-3	土-16
5	フイゴの羽口	堆3・4層	先端部欠損。外面はオサエ、ヘラナデ。 内面は先端付近はナデ。	(11.6)	6.8	7.35	(540)	2.8	94-2	土-41

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
6	石鏃	堆3層	有茎。細身の二等辺三角形。全体に入念な調整剝離が施されている。	4.1	1.2	0.5	1.5	珪質頁石 (鉄石英)	95-1	石-1
7	敲打痕をもつ礫	堆1層	小さな礫を利用。角ばった部分に敲打痕が認められる。	5.1	3.2	3.0	50	脈状石英	—	石-137
8	磨面をもつ礫	堆3・4層	円棒状の礫を利用。磨面は側面を含めて4面認められる。	15.5	5.0	4.1	5.2	砂岩	—	石-131
9	磨面をもつ礫	堆3・4層	円棒状の礫を利用。1面に磨面が認められる。	9.5	4.8	3.3	185	石英安山岩	99-2	石-133
10	敲打痕をもつ礫	堆1層	角ばった棒状の礫を利用。敲打痕が下部と角ばった部分に認められる。	14	4.5	3.6	390	安山岩	—	石-126

第170図　第1号堀跡出土遺物（3）

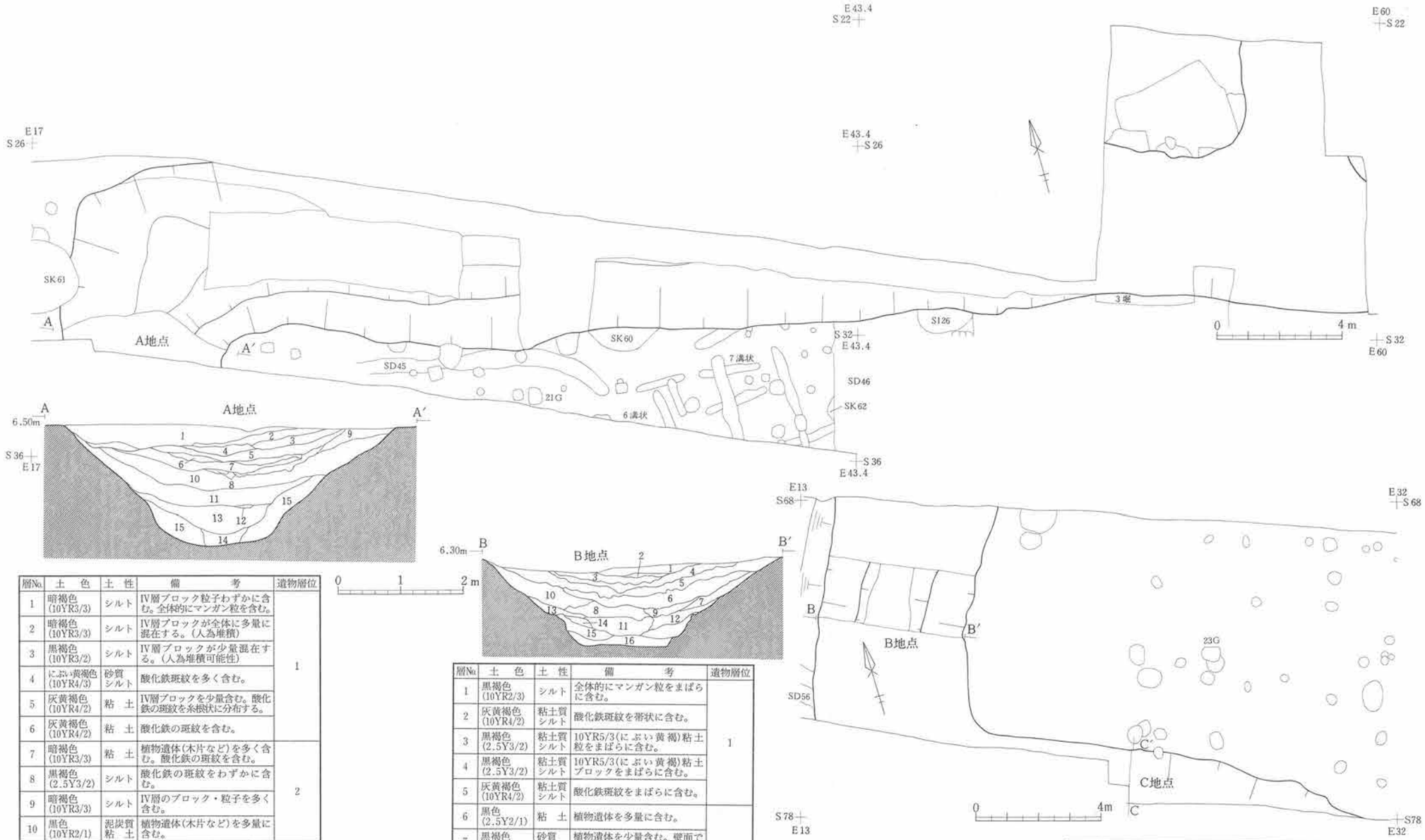


番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
1	磨面をもつ礫	堆2層	下部全体の半分程欠損。磨面は1面、および線状痕が認められる。	(11.2)	(15.0)	(4.0)	(830)	安山岩	99-5	石-135
2	磨面をもつ礫	堆3層	側面の一部のみ残存。扁平な礫を利用。磨面が上下2面及び研磨溝が認められる。	(6.4)	(9.9)	(3.1)	(200)	安山岩	—	石-128
3	磨面をもつ礫	堆3・4層	円棒状の礫を利用。磨面が3面にあり、上端に敲打痕が認められる。	8.7	5.4	3.4	250	安山岩	—	石-132
4	磨面をもつ礫	堆3層	全体の半分程欠損。扁平な礫を利用。磨面は1面認められる。全体に黒い付着物あり。	(13.8)	(8.8)	(5.1)	(740)	安山岩	—	石-136
5	砥石	堆3・4層	完形。方柱状の砥石の破損した一部を再利用。軟質で砂質状の石材。主要砥面は一面か。	6.6	5.7	2.6	88	砂岩	97-7	石-54

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
6	鉄製品 不明	堆2層	両端欠損。断面は長方形をなす	(4.9)	0.6	0.7	(20)	102-9	N-43
7	鉄製品 釘か鉄鏃の茎	堆2層	両端とも欠損。断面は方形	(3.6)	0.6	0.7	(7.1)	100-40	N-44

番号	種別	層位	特徴	樹種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	写真図版	登録番号
8	漆器 椀	堆3層上面	外面は黒色漆の上に赤色漆の文様（草花文？） 内面は茶褐色漆塗仕上げ。	ブナ属の一種(No. 1)	13.0	6.2	6.8	103-1	L-85

第171図　第1号堀跡出土遺物 (4)



層No.	土　色	土　性	備　考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック粒子わずかに含む。全体的にマンガン粒を含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロックが全体に多量に混在する。(人為堆積)	
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロックが少量混在する。(人為堆積可能性)	
4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	酸化鉄斑紋を多く含む。	
5	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘　土	IV層ブロックを少量含む。酸化鉄の斑紋を糸根状に分布する。	
6	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘　土	酸化鉄の斑紋を含む。	
7	暗褐色 (10YR3/3)	粘　土	植物遺体(木片など)を多く含む。酸化鉄の斑紋を含む。	2
8	黒褐色 (2.5Y3/2)	シルト	酸化鉄の斑紋をわずかに含む。	
9	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層のブロック・粒子を多く含む。	
10	黒色 (10YR2/1)	泥炭質粘　土	植物遺体(木片など)を多量に含む。	
11	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘　土	植物遺体を多量に含む。特に自然木片。	3
12	暗緑灰色 (7.5GY4/1)	砂 (細砂)	ブロック状に挟在する。	
13	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘　土	植物遺体を含む。11層よりも多くない。	
14	オリーブ黒色 (5Y3/1)	粘　土	植物遺体をわずかに含む。	
15	オリーブ黒色 (7.5Y3/1)	砂・粘土の互層	底面に植物遺体・黒褐色の粘土層を含む。	

層No.	土　色	土　性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	全体的にマンガン粒をまばらに含む。	1
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	酸化鉄斑紋を帯状に含む。	
3	黒褐色 (2.5Y3/2)	粘土質シルト	10YR5/3(にぶい黄褐)粘土粒をまばらに含む。	
4	黒褐色 (2.5Y3/2)	粘土質シルト	10YR5/3(にぶい黄褐)粘土ブロックをまばらに含む。	
5	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	酸化鉄斑紋をまばらに含む。	
6	黒色 (2.5Y2/1)	粘　土	植物遺体を多量に含む。	2
7	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	植物遺体を少量含む。壁面でIV層ブロック状に含む。	
8	黒色 (10YR1.7/1)	泥炭質粘　土	植物遺体を多量に含む。酸化鉄斑紋をまばらに含む。	
9	黒色 (7.5Y2/1)	シルト質粘土	植物遺体を多量に含む。	
10	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	植物遺体を多量に含む。壁面でIV層ブロック状に含む。	
11	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	植物遺体を少量含む。粗砂をブロック状に含む。	3
12	黄灰色 (2.5Y4/1)	細　砂	酸化鉄斑紋を帯状に含む。10YR4/4(褐色)砂と互層。	
13	黄灰色 (2.5Y4/1)	細　砂	酸化鉄斑紋を帯状に含む。10YR4/4(褐色)砂と互層。	
14	黄灰色 (2.5Y4/1)	細　砂	酸化鉄斑紋を多量に含む。	
15	黄灰色 (10YR5/6)	粗　砂	10YR4/1(褐灰)シルト層と互層。	
16	オリーブ黒色 (7.5Y3/2)	細　砂	酸化鉄斑紋を粒状に含む。	

層No.	土　色	土　性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	炭化物をわずかに含む。	1
2	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	酸化鉄斑紋をまばらに含む。	
3	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	炭化物をわずかに含む。酸化鉄斑紋をまばらに含む。	
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロックを含む。	

第172図　第２号堀跡

長さは北西隅から南西隅まで約51mになるものと推定される。方向はN－22°－Eである。Ⅶ区で検出された地点の規模は、上端幅が約4.7m、下端幅が約1.3m、深さが約1.4mである。東辺は西辺から直角に屈曲して続いており、そして調査区外に延びている。

【堆積土】堆積土の断面観察は2地点(A・B)で行った。A地点では15層の堆積土が、B地点では16層の堆積土が確認された。A地点の上部で人為堆積層とみられる層が認められた他は2地点とも基本的には共通した層のあり方を示しており、全て自然堆積層で、両岸から将棋倒し状に堆積している。両地点とも層の中～下部にかけては黒みの強い泥炭質粘土や粘土の層が厚く堆積しており、層中には植物遺体が多量に含まれている。また、底面付近の層は砂・シルト・粘土の互層となっており、水成堆積層の可能性が考えられる。

【壁・底面】断面形は下部では逆台形に近く、壁は平坦かやや皿状の底面から急角度で立ち上がり、途中屈曲して上部で大きく外に開いている。Ⅵ区における底面は部分的な確認ではあるが、北辺中央部から北西隅の方向に下がっている。

【特記事項】第1号堀跡で前述したように、方向性や配置状況などから両者は同時に存在したものと考えられる。また、第2号堀跡はⅥ区からさらに北に延び、試掘Bトレンチ、Ⅴ区の第37号溝跡、試掘Fトレンチへと続き、そこで東方向に屈曲しており、Ⅷ区の第69号溝跡へとつながる可能性が考えられる。その北および東方向のラインは後述する第4号堀跡の西・北辺とほぼ平行していることなどから、第2号堀跡と第4号堀跡が関連しあうことも推定される。また、Ⅶ区で確認された東辺は東方から西に走行する第61号溝跡とつながることが予想される。

【出土遺物】堆積土中から若干の遺物が出土した。図示できたものは、須恵器1点・陶器2点・とりべ2点・瓦1点・磨面をもつ礫4点・木製品1点である。陶器の1点は古瀬戸の梅瓶の体部破片で、14～15世紀の時期のものとみられる。これらの遺物の他に、土師器破片72点・須恵器破片24点・とりべ破片1点(写真90－1)・鉱滓5点・クルミの堅果・クリ・ヒシの種子(写真109－6)などが出土している。

第3号堀跡

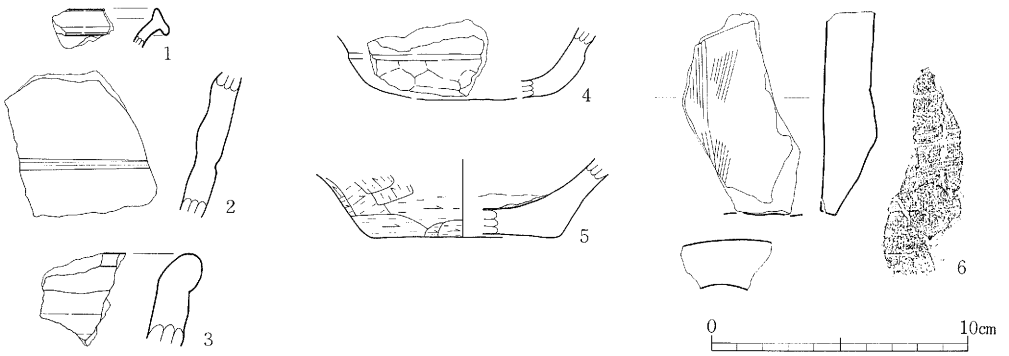
【位置】Ⅵ区　S30～37.5　E47.1～85.9

【確認面・重複】堀跡の北辺を中心に、Ⅳ層上面で確認された。しかし、調査の都合上、部分的にしか検出できなかった。南側はさらに調査区外に延び、東側は第4号堀跡に切られている。第2号堀跡にも切られており、したがってこれらより古い。また、第25・26・27・30号竪穴住居跡などと重複しており、これらより新しい。

【平面形・方向・規模】検出部分から「凵」字形にめぐるものと考えられる。その北辺はほぼ直線的に走行しており、方向はN－79°－Wである。長さは約34mである。その西端からほぼ直角に東辺に続いており、さらに試掘Dトレンチで確認された溝跡につながるものと考えられる。この溝跡は第2号堀跡の北西隅から約35m南に走行したところで東に屈曲し、そこから約14mで途切れる。北西隅における両側が検出された地点での規模は上端幅が約3.8m、下端幅が約40cm、深さが約1.2mである。北辺の東側は次第に堀の規模が小さくなり、その北西隅では削平が及んでいることも考えられるが、上端幅約1.3m、下端幅が50cm、深さが45cmとなる。北東隅はわずかに丸みをもって屈曲し、東辺に続くが、その東辺は第4号堀跡の南側には延びておらず、途中で途切れるものと考えられる。

【堆積土】北西隅付近で8層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、両岸からの将棋倒し状の堆積状況を示す。下部の層№7・8には植物遺体が少量含まれている。

【壁・底面】断面形は底面が狭く、「U」字形に近く、



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 長頸壺	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部破片	−	−	−	−	E-101

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	陶器 梅瓶	堆2層	内外面ともロクロナデ。外面のみ灰釉。外面に凹線が1条あり。	古瀬戸	14〜15C	体部破片	−	−	−	83-16	I-50
3	陶器 鉢	堆2層	内外面ともロクロナデ。	−	中世後半？	口縁部破片	−	−	−	83-15	I-51

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	とりべ	堆1層	外面調整不明。内面は溶解物付着 白針わずかに含む。器厚−0.9cm	体部破片	−	−	−	90-8	ト-28
5	とりべ	堆2層	外面はヘラケズリ。内面は底面に溶解物付着。土師器甕の転用か。白針わずかに含む。器厚−0.8cm	体〜底部1/5	−	(7.5)	−	90-15	ト-29

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
6	丸瓦	堆1層	燻し瓦。凸面−縦方向のナデ。凹面−布目痕。 広端縁の凸面側はヘラケズリ・ナデで面取りされている。	(8.1)	(3.6)	(1.8)	−	−	92-14	瓦-6

第173図　第2号堀跡出土遺物（1）

壁は底面からゆるやかに、そして外方に大きく外傾している。底面は概して平坦である。

【特記事項】第3号堀跡の西辺から続くと考えられる試掘Dトレンチの溝跡が第59号溝跡と約1.5m近接して途切れること、東辺の南側の同一方向に第62号溝跡が存在することなどの、主に平面プランの規則性からこれらの遺構は相互に関連するものと推定される。

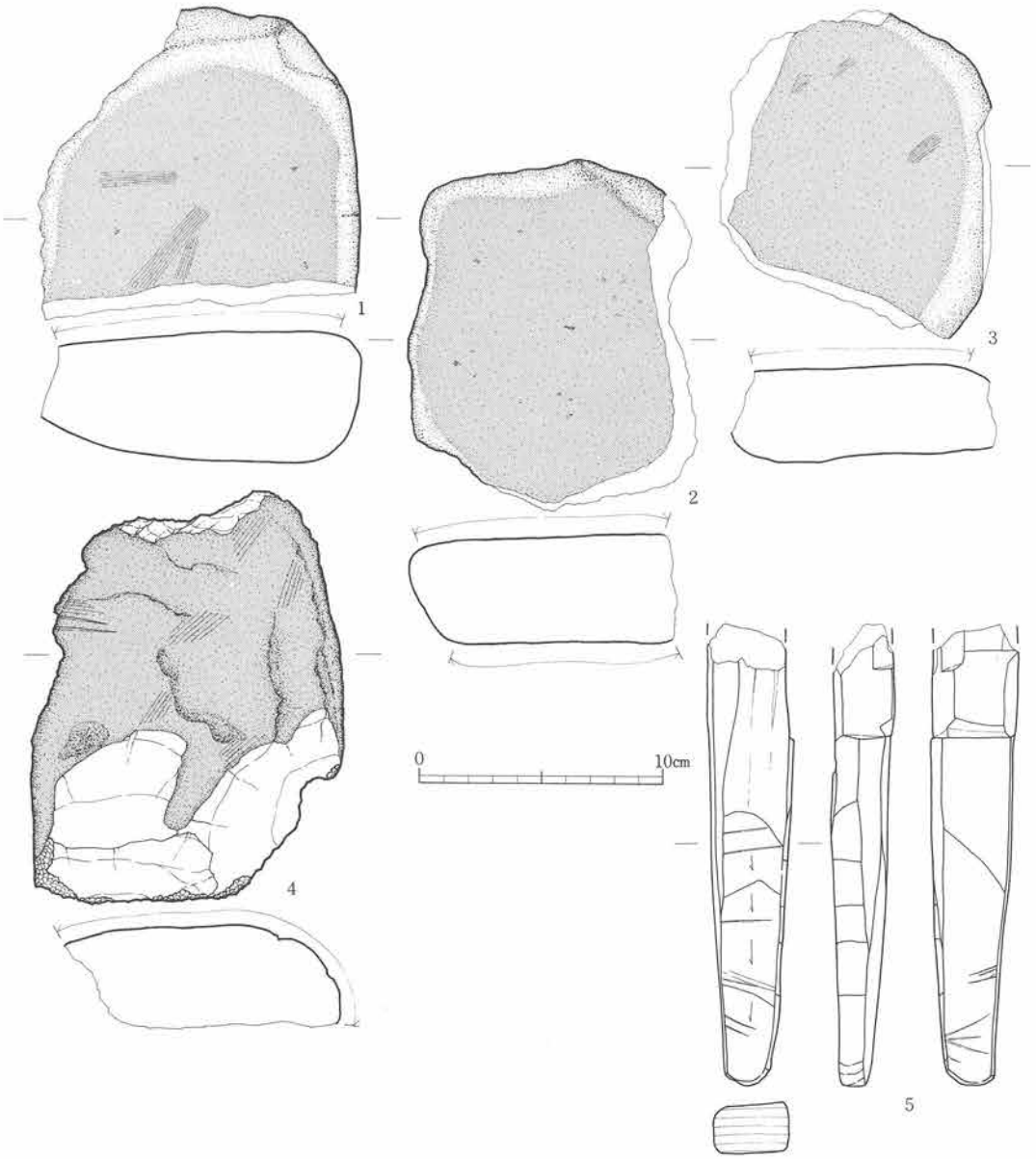
【出土遺物】堆積土中から若干の遺物が出土した。図示できたものは少ないが、土師器1点・須恵器1点・陶器1点がある。陶器は常滑産の鉢の底部付近の破片で、13世紀後半に位置付けられるものと考えられる。これらの遺物の他に土師器破片104点・須恵器破片32点・在地産の陶器破片1点などが出土している。

第4号堀跡

【位置】Ⅵ・Ⅷ区　N19.3〜S42.5　E67.6〜104

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認されたが、調査の都合上、部分的な検出しかできなかった。また、試掘Gトレンチで堀跡の続きが確認された。この第4号堀跡が確認された付近は、調査前まで芹田として利用されており、その耕作土によりⅣ層上部が削平を受け、そのため旧地形同様Ⅳ層上面も周囲より一段低くなっている。その芹田のほぼ中央から堀跡が検出された。第3号堀跡、第68・70号溝跡と重複しており、これらより新しい。

【平面形・方向・規模】確認および検出部分では堀跡は大まかに「匚」形にめぐるものと考えられるが、その南西隅は直角ではなく、角が斜めに切られた形状をなしている（南西辺）。南辺・北辺ともさらに東側の調査区外に延びている。旧地形では調査区の東

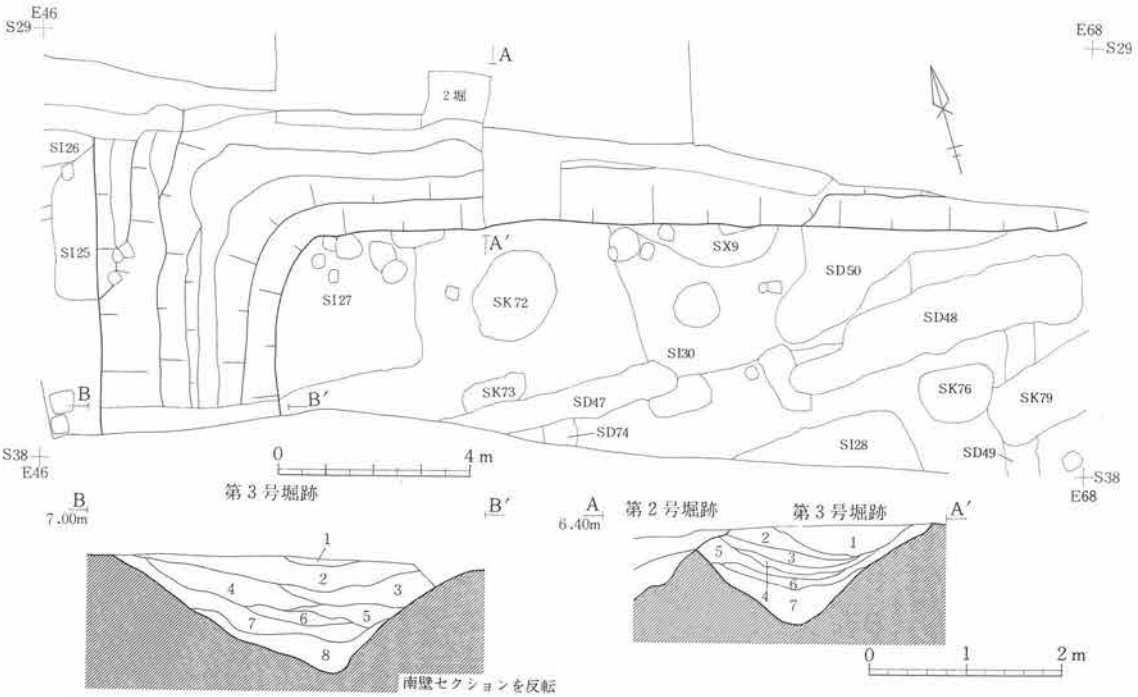


番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
1	磨面をもつ礫	堆1層	全体の半分程欠損。扁平な礫使用。 磨面が一面認められる。	(12.9)	(13.1)	(5.5)	(1,460)	安山岩	99-15	石-157
2	磨面をもつ礫	堆1層	側面全体の半分欠損。扁平な礫使用。 磨面は一面あり。全体にスス状付着物あり。	(14.5)	(11.9)	(4.7)	(1,350)	安山岩	—	石-158
3	磨面をもつ礫	堆1層	側面の大部分が欠損。扁平な礫を使用。 磨面は一面認められる。	(13.6)	(11.2)	(3.9)	(840)	安山岩	—	石－159
4	磨面をもつ礫	堆1層	全体の半分程欠損。角ばった礫を使用。 剥離面が両端にあり。磨面が一面認められる。	(16.8)	(12.7)	(4.6)	(1,210)	安山岩	—	石-160

番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真図版	登録番号
5	木製品	堆2層	一端欠損。先端が薄く加工されている。	クリ (No.43)	(19.0)	3.4	2.3	—	L-86

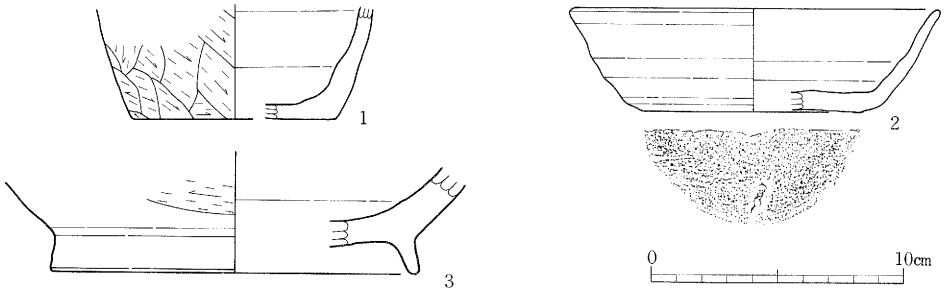
第174図　第2号堀跡出土遺物 (2)

約15mから芹田と同じように、周辺より一段低くなっており、その付近に東辺が存在することも予想される。南辺は確認された長さは約17.5mで、直線的に走行しており、その方向はN－76°－Wである。規模は上端幅が約4 m、下端幅が約1 mで、深さは約1.3mである。南辺の南側では、南辺に平行する溝跡が確認された。溝跡は規模は上端幅が80cm～1.0m、下端幅が30～50cm、深さが50cm前後である。この溝跡は一部途切れるが、さらに東に延び、また西側では南辺と南西辺の変換点付近で南へ屈曲し、一段浅くなって、西側の試掘Mトレンチで確認された第61号溝跡へと続いている。南西辺は南辺から鈍角に屈曲し、N－30°－Wの方向に直線的に走行する。確認された長さは約20mで、規模は上端幅が約3 m、下端幅が92cm、深さが1.15mである。西辺は南西辺から鈍角に屈曲し、南辺とほぼ直交する方向に走行するものと推定される。試掘Gトレンチで北西隅が確認されており、長さは40m前後になるものと推定される。規模は上端幅が約4.2m、下端幅が約52cm、深さが94cmである。北辺は北西隅からの確認される長さは約30mで、さらに東に延びる。その方向はN－71°－Wであり、南辺とほぼ平行する。規模は、上端幅が約4.3m、下端幅が1.6m、深さが約1.2mである。この北辺の南側には南辺と同じように細い溝跡が平行して走行している。規模は上端幅が80cm、下端幅が28cm、深さが54cmである。しかし、一部の検出のため、東と西にどのように続くのかは不明である。



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層ブロックをまばらに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	炭化物粒をわずかに含む。	
3	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	IV層ブロックを微量に含む。全体にマンガン斑を含む。	
4	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	全体にマンガン斑を含む。	
5	黒褐色 (10YR3/1)	粘性シルト		2
6	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	黒色ブロックが全体に見られる。	
7	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	植物遺体を少量含む。幾重もの細層からなる。	
8	オリーブ黒色 (5Y2/2)	粘土質シルト	IV層ブロックを含む。植物遺体を少量含む。グライ化。	3

第175図　第3号堀跡



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	堆1層	ヘラケズリ。底部と切り離し不明。ナデ調整	ロクロナデ	体～底部1/3	－	(8.2)	－	－	C-259
2	須恵器 坏	堆2層	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	体～底部1/2	14.6	8.4	4.1	－	E-102

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	陶器 鉢	堆1層	片口か。内外面ともロクロナデ。外面はその後一部ヘラケズリ。高台付	常滑	13C後半	体～底部1/6	－	(14.6)	－	83-17	I-52

第176図　第3号堀跡出土遺物

【堆積土】堀跡の堆積土は全域に共通して8層が確認された。いずれも自然堆積層とみられ、レンズ状の堆積状況を示す層が多い。層は3つに大別される。その中の中層は黒褐色の泥炭質粘土か粘土層で、層中には植物遺体が多量に含まれている。そして、層理面には植物の根の痕跡とみられる凹みが無数に認められた。南辺と北辺において平行して検出された溝跡の堆積土は、IV層ブロックが混在する人為堆積層を主体としている。

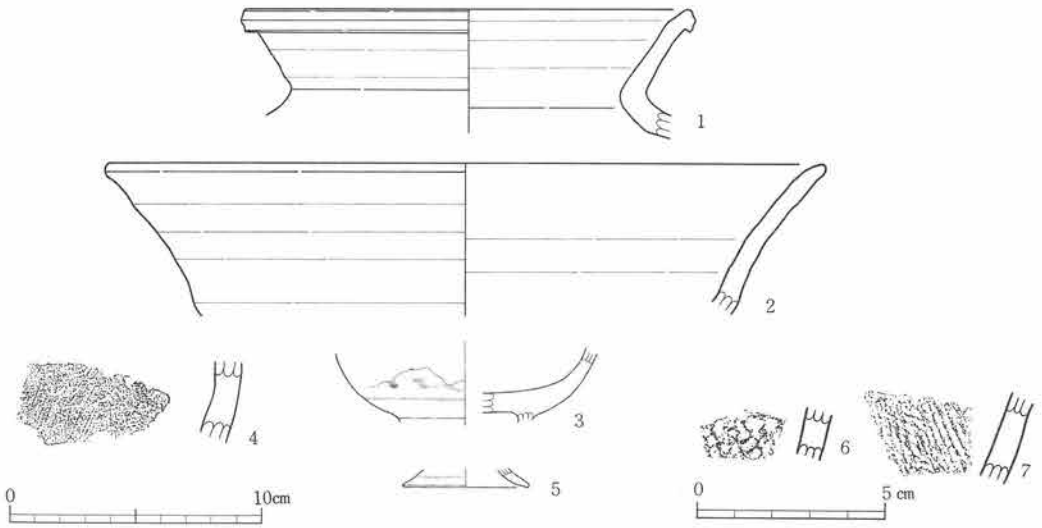
【壁・底面】断面は南西辺では下部が「U」字形をなし、上部はゆるやかに外方に開いている。南辺では下部が逆台形をなし、上部は外方にゆるやかに開いている。また、西と北辺では底面からゆるやかに立ち上がり、途中に段をもちながら外方に大きく開いている。南・北辺の溝跡はともに断面形が逆台形をなしており、壁は平坦な底面から急角度で上方に立ち上がっている。堀跡に近い壁は途中で堀跡の壁面に続いている。溝跡でも、特に南辺の溝跡はその西端で第61号溝跡へと続くが、その接続地点では溝幅が約50cmと狭くなり、底面は約50cmの段差をもって高くなっている。堀跡の底面の標高は南辺で約4.3m、南西辺で約4.6m、西辺で約4.8m、北辺で約4.9mを計り、南辺から西辺、そして北辺へと上がっている。

【特記事項】南辺と北辺で確認された溝跡については方向性や断面の状況などから堀跡と同時に構築されたものと考えられ、また、堆積土のあり方から溝跡については堀跡に先行して人為的に埋められた状況がうかがわれる。西辺から9m西側の第2号堀跡から続くと考えられた溝跡が西辺と平行して走行しており、これはさらに第4号堀跡の北辺に平行して、第69号溝跡につながることが予想される。このような方向性のあり方から、第2号堀跡と第4号堀跡は相互に関連する遺構と考えられる。このことは南側において第61号溝跡に続き、この溝跡がさらに西方向に延び、第2号堀跡とつながることが予想されることからも言える。

【出土遺物】堆積土中から各種の遺物が出土した。その中で図示できたのは須恵器1点・陶器3点・磁器1点・縄文・弥生土器2点・研磨痕のある須恵器破片1点・石錐1点・砥石1点・石臼1点・杭材1点である。陶器・磁器の多くは近世の時期のものである。これらの遺物の他に土師器破片 204点・須恵器破片58点・鉱滓1点・貝のアカニシ1点(写真109－3)・86点のクルミの堅果（写真109－7・8)の他に多量の植物の種子などが出土している。

第４号堀跡西辺確認状況

第４号堀跡石臼出土状況

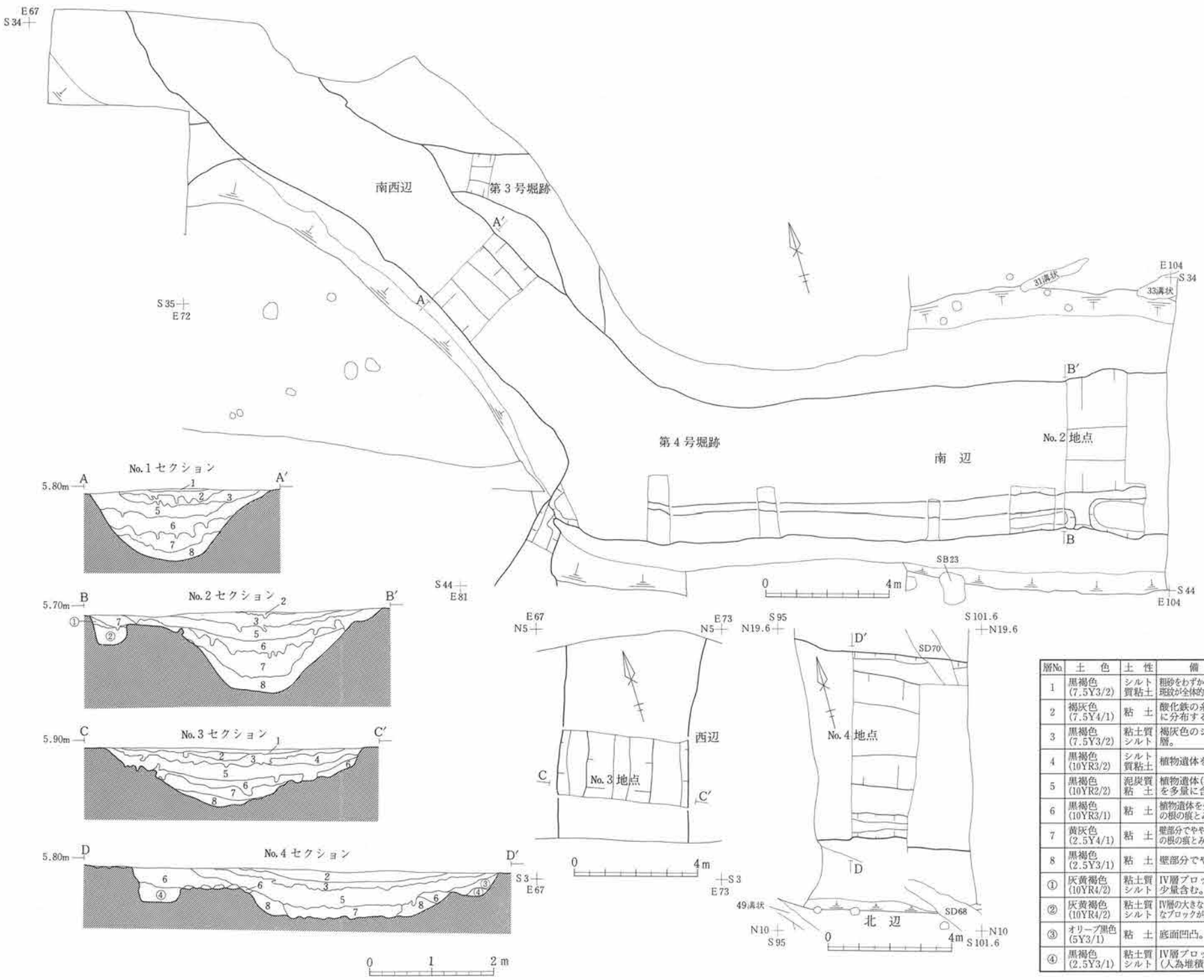


番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 甕	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/8	(17.8)	－	－	－	E-103

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	陶器 鉢	堆１層	内外面ともロクロナデ。鉄釉	－	17C	口縁部1/12	(28.6)	－	－	83-18	I-53
3	陶胎染付 椀	堆１層	外面－界線で区切られた唐草文？の文様あり。	肥前	17C後半？	体～底部1/3	－	－	－	83-19	I-54
4	陶器 壺か甕	堆２層	外面はヘラナデ。内面はナデ。	常滑	中世	体部破片	－	－	－	－	I-55
5	磁器 色絵 仏飯具	堆１層	外面に赤の色絵(上絵付)。内面は釉なし。	－	18～19C	脚部1/8	－	(5.0)	－	85-17	J-3

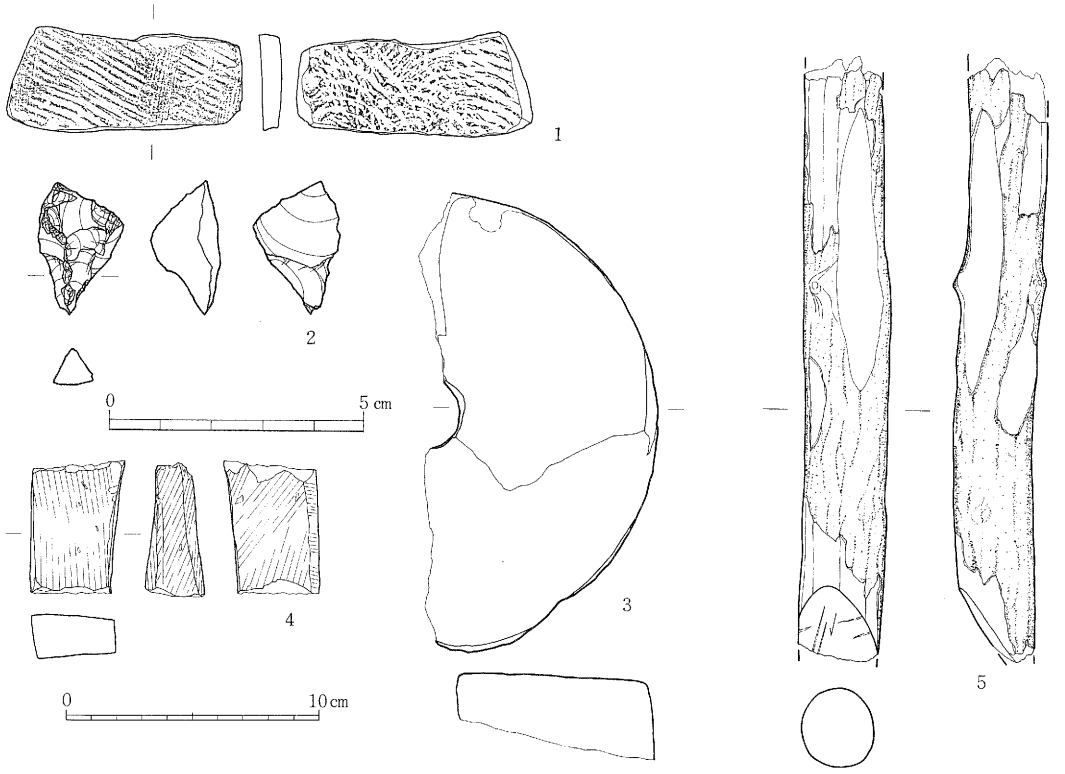
番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	縄文土器 深鉢	堆２層	縄文 LR。内面ナデ。	体部破片	－	－	－	－	地-105
7	弥生土器 甕？	堆２層	撚糸文 R。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	－	地-106

第178図　第４号堀跡出土遺物（1）



層No.	土　色	土　性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (7.5Y3/2)	シルト質粘土	粗砂をわずかに含む。酸化鉄の糸根状斑紋が全体的に分布する。畠田の床土。	1
2	褐灰色 (7.5Y4/1)	粘　土	酸化鉄の糸根状斑紋が全体的に分布する。	
3	黒褐色 (7.5Y3/2)	粘土質シルト	褐灰色のシルト質粘土との互層。	
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト質粘土	植物遺体を少量含む。	
5	黒褐色 (10YR2/2)	泥炭質粘　土	植物遺体(樹木片・竹の茎片)を多量に含む。	2
6	黒褐色 (10YR3/1)	粘　土	植物遺体を少量含む。所々に植物の根の痕とみられる凹みがある。	
7	黄灰色 (2.5Y4/1)	粘　土	壁部分でやや砂質化する。所々に植物の根の痕とみられる凹みがある。	3
8	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘　土	壁部分でやや砂質化する。	
①	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を縞状に少量含む。	
②	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	Ⅳ層の大きなブロック・灰黄褐の大きなブロックが混在する。(人為堆積)	
③	オリーブ黒色 (5Y3/1)	粘　土	底面凹凸。(グライ化)	
④	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロックを多量に含む。(人為堆積)	

第177図　第3・4号堀跡



番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
2	石鏃	堆3・4層	剝片の角部を鏃部にしている。しかし鏃部の加工は丁寧ではない。わずかに磨痕が認められる。	2.6	1.7	1.3	4	鉄石英	95-4	石-6
3	石臼	堆2層上面	粉挽き臼か茶臼か不明。上臼の下面か下臼の上面。著しく磨かれている。中央の孔径は2.7cm以上。	(18.2)	(9.2)	(3.2)	(560)	砂岩	96-7	石-31
4	砥石	堆	両端部欠損。やや扁平な方柱状。やや硬質でシルト質状の石材。砥面は4面である。	(5.3)	3.6	2.4	(65)	石英安山岩質凝灰岩	97-27	石-84

番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真図版	登録番号
5	杭材	2層	丸太材。先端加工あり。胴体部に樹皮が残る。	—	(24.0)	3.2	3.3	—	L-87

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
1	研磨痕のある須恵器	2層	甕の体部破片の周辺部を軽く研磨している。	3.8	9.3	0.8	55	—	94-12	土-60

第179図　第4号堀跡出土遺物 (2)

10. 溝　跡

第1号溝跡（SD 1）

【位置】Ⅰ区　N35.4～39.3　W49～91.3

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。所々が別の遺構で切られている。第2号竪穴住居跡、第3a・3b・4・5・6・11号溝跡と重複しており、第2竪穴住居跡、第4・5・6号溝跡より新しく、第3a・3b・11号溝跡より古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、さらに西は調査区外へ延びており、東は第11号溝跡によって切られている。方向は東西方向に近く、N－70°－Wである。確認された長さは約42.3mで、その中の上端の最大幅は90cmで、深さは42cmであり、東に行くにしたがい、その規模が小さくなる。

【堆積土】5層認められ、いずれも自然堆積層で、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面は「U」字形をなしており、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、その上方は外傾する。底面はほぼ平坦で、全体的には東の方向にゆるやかに下がっている。

【出土遺物】図示できたのは堆積土から出土した縄文土器と石核1点・石庖丁1点・砥石1点・磨面や敲打痕をもつ礫4点である。これらの他に土師器破片30点・須恵器破片8点が出土している。土師器破片には非ロクロとロクロの両方がみられる。

第2号溝跡（SD 2）

【位置】Ⅰ区　N32～34　W58.2～71.8

【確認面・重複】Ⅳ層上面であるが、断面観察の結果、基本層のⅢA層上面から掘り込まれた可能性が考えられた。第4・5・6号溝跡と重複しており、それらよりも新しい。

【方向・規模】東方向にほぼ直線的に走行し、しだいにすぼまりながら途切れる。西は調査区外へさらに延びる。方向はほぼ東西方向に走行し、N－82.5°－Wである。確認された長さは約13.6m、上端幅の最大は1.2m、下端幅は60cm、深さは37cmで、しだいに東の方向にその規模が小さくなる。

【堆積土】3層認められ、いずれも自然堆積層である。堆積土の層相は基本層のⅢA層に近い。

【壁・底面】基本的には断面は「U」字形をなすが、北側の底面はさらに細い溝状を呈する。壁は底面からゆるやかに立ち上がり、その上方で大きく開いている。底面はほぼ平坦で、東の方向にわずかに下がっている。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の須恵器1点と縄文土器1点である。この他に土師器破片7点と赤焼土器破片1点・須恵器破片1点が出土している。

第3a号溝跡（SD 3a）

【位置】Ⅰ区　N32.6～38.7　W56～58

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。南と北は調査区外へさらに延びる。第1・6号溝跡と重複しており、これらよりも新しい。

【方向・規模】直線的に南北方向に走行する。方向は真北方向よりやや東に寄り、N－14.5°－Eである。確認された長さは4.84mであり、最大上端幅は1.68m、下端幅は76cm、深さは38cmである。

【堆積土】5層認められ、いずれも自然堆積層である。概して水平な堆積状況を示している。

【壁・底面】断面は皿状をなしており、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、上方に大きく開いている。壁・底面とも砂層（粗砂）を掘り込んでいるため、安定していない。

【特記事項】東側を走行している第3b号溝跡は方向性などからこの溝跡と関連するものと考えられる。第3b号溝跡については調査段階では河川跡と判断し、この第3a号溝跡を第3号溝跡と呼称した。その後の検討で、両方とも関連した溝跡と考えられたことから、第3a号と第3b号溝跡と呼ぶことにした。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の土師質

土器１点と縄文土器１点である。この他に土師器破片１点・須恵器破片２点出土している。

第3b号溝跡（SD 3b）

【位置】Ｉ区　N32.2～38.5　W50.5～55.3

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。南と北は調査区外へさらに延びる。第１号溝跡と重複しており、それより新しい。

【方向・規模】南北にほぼ直線的に走行するようである。方向は真北方向よりやや東に寄り、N－10.5°－Eである。確認された長さは約６ｍで、最大上端幅は南壁で4.64mとなり、平均すると約４mである。下端幅は2.5m、深さは約１ｍである。

【堆積土】13層認められ、大別すると３層になる。全て自然堆積層である。酸化鉄の集積が底面から20～30cm上位にみられ、そこから下の堆積土は、ややグライ化している。

【壁・底面】断面は皿状をなす。底面は起伏が著しくみられ、壁はそこからゆるやかに立ち上がり、大きく開いている。底面から壁面の西側の大部分は砂層になっており、安定していない。

【特記事項】西側を走行する第3a号溝跡が方向性などからこの溝跡と関連するものと考えられる。南壁近くの底面付近から、樹木の根株が１本検出された。この遺構は調査段階では河川跡と判断したが、その後の検討で溝跡に含めた。そして、第3a号溝跡との関連が考えられることから、第3b号溝跡と称することにした。なお、堆積土中にⅣ層ブロックなどを多く含む層が東壁付近に多く認められた。これについては溝跡の東側に土塁状のものが存在し、そこからの崩落土の可能性も考えられる。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の陶器１点と磁器１点である。磁器は中国産の染付の皿で、年代は明末の16世紀代と考えられる。これらの他に土師器破片８点・須恵器破片５点が出土している。

第４号溝跡（SD 4）

【位置】Ｉ区　N32.3～38.2　W64.5～69

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。調査区の両側へさらに延びる。調査区内は他の遺構に部分的に切られている。第１・２号溝跡と重複しており、それらより古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行する。方向は真北方向よりやや西に寄っており、N－18°－Wである。確認された長さは約７ｍで、上端幅は50cm、下端幅は28cm、深さは30cmである。

【堆積土】４層認められ、いずれも自然堆積層である。将棋倒し状の堆積状況を示す。

【壁・底面】断面は逆台形に近く、壁は底面から急に立ち上がり、外傾する。底面はほぼ平坦で、南東方向にわずかに下がる。

【出土遺物】出土していない。

第５号溝跡（SD 5）

【位置】Ｉ区　N32.7～38.3　W58～64.5

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。調査区外の南と北へさらに延びる。調査区内は他遺構により部分的に切られている。第１・２・3a・６号溝跡と重複しており、第１・２・3a号溝跡より古く、第６号溝跡より新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行するが、調査区の南側でわずかに西寄りに曲がる。方向は真北方向から大きく西に寄っており、N－33.5°－Wである。確認された長さは約８ｍで、上端幅は46cm、下端幅は28cm、深さは18cmである。

【堆積土】３層認められ、いずれも自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面は逆台形に近い。壁は底面からやや急に立ち上がり、外傾する。底面はほぼ平坦で、南東の方向に下がっている。

【出土遺物】出土していない。

第6号溝跡（SD 6）

【位置】Ⅰ区　N33.7～37.6　W57.6～62.1

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。部分的に他遺構に切られているが、さらに調査区外の南と北に延びるものと考えられる。第1・2・3a・5号溝跡と重複しており、いずれよりも古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行する。方向は真北方向より大きく東に寄っており、N－60.5°－Eである。確認された長さは5.3mで、上端幅は64cm、下端幅は48cm、深さは15cmである。

【堆積土】1層のみで、人為堆積と考えられる。

【壁・底面】断面は逆台形に近い。底面はほぼ平坦で、壁はそこからやや急に立ち上がり外傾する。

【出土遺物】出土したのは図示した縄文土器1点のみである。

第7号溝跡（SD 7）

【位置】Ⅰ区　N31.4～37.3　W39.4～41

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。調査区内は全体が検出された。さらに調査区外の南と北へ延びる。第7号土坑、第9・11号溝跡と重複しており、いずれの遺構よりも新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行する。方向は真北方向より少し東に寄っており、N－22.5°－Eである。確認された長さは5.72mで、上端幅は80cm、下端幅は40cm、深さは35cmである。

【堆積土】3層認められたが、その中の3層は人為堆積の可能性がある。

【壁・底面】断面は逆台形に近く、壁はほぼ平坦な底面からやや急に立ち上がりながら外傾する。

【特記事項】約8m東側を走行する第8号溝跡と方向性や規模などから関連するものと考えられる。

【出土遺物】図示できた遺物は青磁1点と縄文土器1点である。青磁は外面に鎬蓮弁文が配されているもので、産地は中国の龍泉窯系と考えられる。この他に土師器破片14点が出土している。

第8号溝跡（SD 8）

【位置】Ⅰ区　N30.7～36.6　W31.4～33

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。調査区内は全体が検出された。さらに調査区外の南と北へ延びる。第9・11号溝跡と重複しており、いずれよりも新しい。

【方向・規模】直線的に走行する。方向は真北方向より少し東に寄っており、N－22.5°－Eである。確認された長さは5.8mで、上端幅は80cm、下端幅は40cm、深さは38cmである。

【堆積土】5層認められ、その中の5層は人為堆積の可能性があり、他は自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面は逆台形に近く、壁はほぼ平坦な底面からやや急に立ち上がりながら外傾する。

【特記事項】溝跡の方向性・規模などから、第7号溝跡との関連が考えられる。

【出土遺物】図示できるものはないが、土師器破片34点が出土している。

第9号溝跡（SD 9）

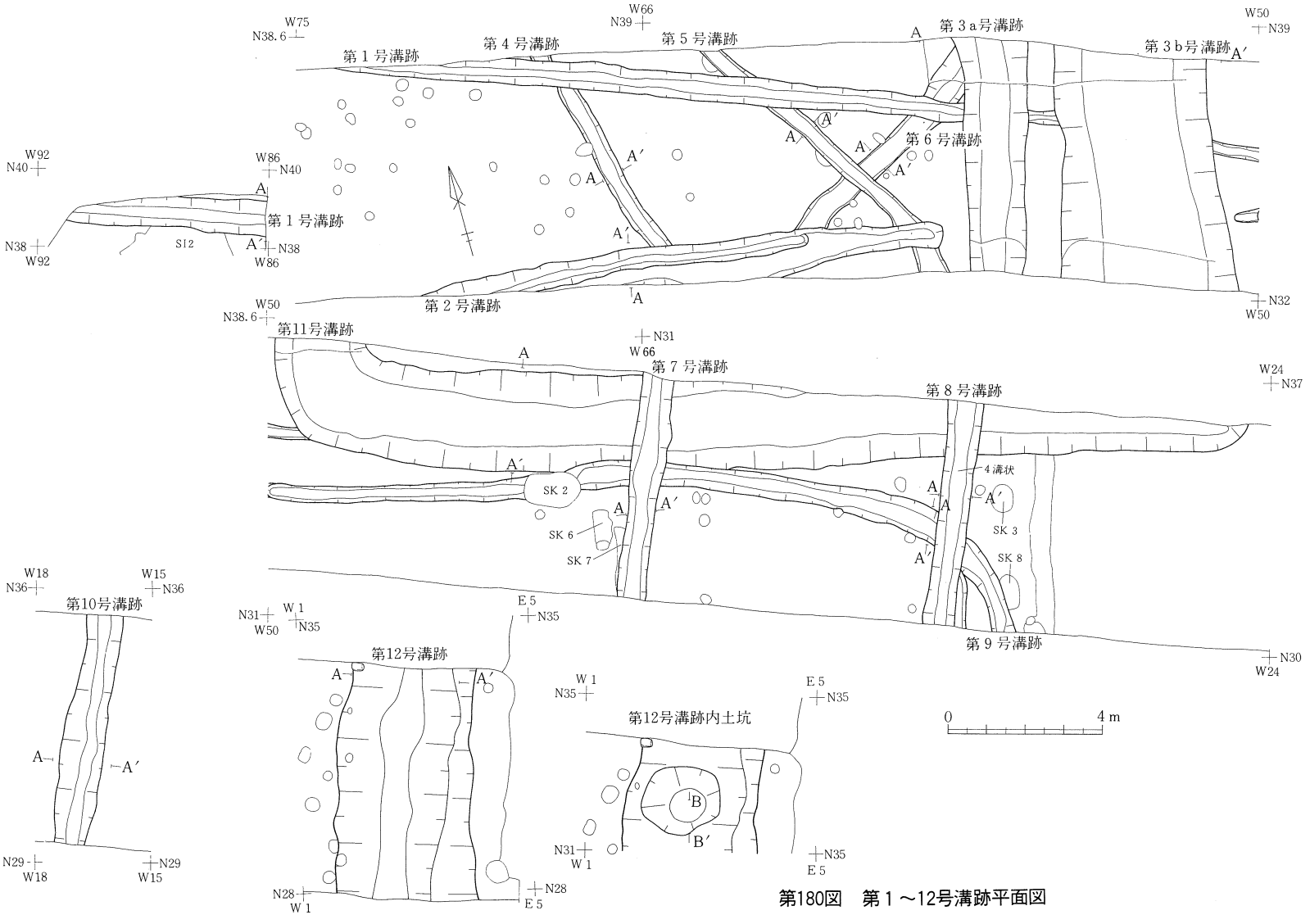
【位置】Ⅰ区　N30.6～35　W30.6～50.6

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。調査区内は他遺構に所々切られており、南側はさらに調査区の外へ延びている。第2・8号土坑、第7・8・11号溝跡と重複しており、第2号土坑、第7・8号溝跡より古く、第8号土坑、第11号溝跡より新しい。

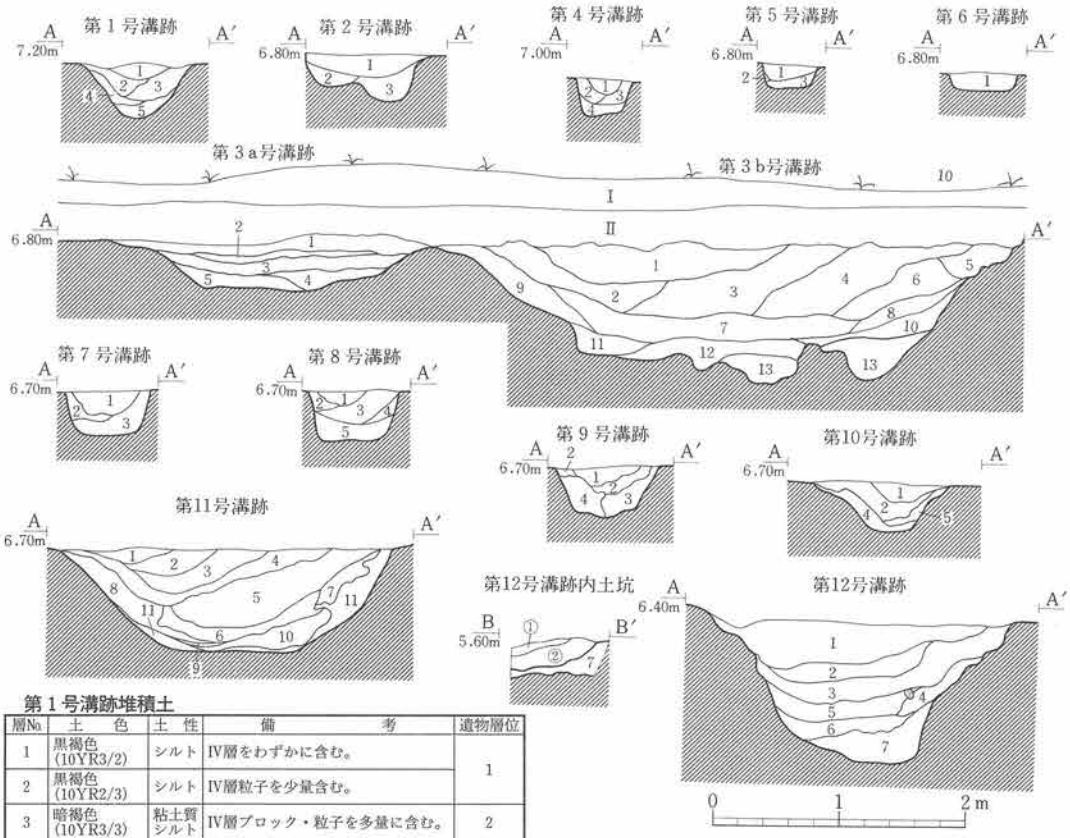
【方向・規模】西側はW90付近から東方へ直線的に延び、その途中で南側にゆるやかにカーブする。その途中で南方向に分岐しているが、他の遺構に切られており、明確ではない。その直線部分の方向は南北方向に近く、N－76.5°－Wである。確認された長さは21.3mで、上端幅は86cm、下端幅は40cm、深さは40cmである。

【堆積土】4層認められ、いずれも自然堆積層である。将棋倒し状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面は逆台形に近く、壁は底面からや



第180図　第１～12号溝跡平面図



第1号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子を少量含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	2
4	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層粒子を多量に含む。	3
5	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	

第2号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	マンガン粒を多量に含む。	1
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	マンガン粒を多量に含む。	2
3	暗褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を含む。	3

第3a号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	マンガン粒を含む。	堆積土
2	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	シルト	マンガン粒を含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	マンガン粒を含む。	
4	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	粗砂を含む。	
5	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	粗砂を含む。所々に酸化鉄の斑紋あり。	

第4号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	IV層粒子をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層粒子を多く含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	2層よりIV層粒子を多く含む。	3
4	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	粘土質シルト	IV層ブロックが主体である。	1

第5号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層粒子をわずかに含む。	堆積土
2	暗褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	
3	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	IV層ブロックが主体となっている。	

第3b号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	凝灰岩粒子をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト		
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	粗砂を含む	
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト		
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。	
6	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロックを多く含む。	
7	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	粗砂を含む。IV層ブロックをわずかに含む。	2
8	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	粗砂を含む。IV層ブロックをわずかに含む。	
9	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	粗砂を多く含む。	
10	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子・黒褐色ブロックを多く含む。	
11	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	粗砂を多く含む。	3
12	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト質粘土	砂粒・IV層ブロックを所々に含む。	
13	オリーブ黒色 (5Y3/1)	シルト質粘土	砂粒を含む。	

第6号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層のブロック・粒子を多量に含む。人為堆積と考えられる。	1

第7号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子・焼土・炭化物をわずかに含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	2

第181図　第1～12号溝跡セクション図

第8号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。炭化物をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	1層に比べてIV層ブロック・粒子が少ない。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	IV層小ブロックをわずかに含む。	
4	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	3層に比べて、IV層ブロック・粒子を多く含む。	
5	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層の大・小ブロック・粒子を多量に含む。	2

第11号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層粒子をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。人為堆積	
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層粒子・炭化物を少量含む。	2
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	IV層粒子を多量に含む。	
5	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロックなどと混在する。人為堆積	3
	灰黄褐色 (10YR4/2)			
6	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	わずかにグライ化している。	4
7	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層粒子を少量含む。	
8	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	IV層ブロック粒子を多量に含む。	
9	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土	グライ化している。	
10	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	縞状に堆積する。	
	灰白色 (10YR7/1)	シルト		
11	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	シルト	IV層の崩落土	

第9号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。	
3	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	2
4	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	

第10号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	壁ぎわに炭化物を多量に含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子を多く含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	IV層の崩落土。	
4	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子をまばらに含む。	

第12号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層粒子を少量含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	壁ぎわにIV層ブロックを多量に含む。	3
4	黒色 (10YR2/1)	シルト質粘土	壁ぎわにIV層粒子をまばらに含む。	4
5	黒褐色 (10YR3/1)	シルト質粘土	砂をまばらに含む。	5
6	黒褐色 (10YR3/1)	粘土		6
7	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	グライ化している。植物化石を若干含む。	7
①	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	砂粒を多く含む。植物遺体(木片)を多量に含む。	土坑
②	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土質シルト	砂粒・IV層小ブロック・粒子を多量に含む。	堆積土

や急に立ち上がりながら外傾する。底面は部分的にやや起伏がみられるものの、概して平坦である。

【出土遺物】図示できるものはないが、土師器破片15点・須恵器破片2点が出土している。

第10号溝跡（SD 10）

【位置】Ⅰ区　N29.4～35.4　W15.7～17.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。調査区内は全体が検出され、さらに南と北の調査区外へ延びる。重複はない。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行する。方向は真北方向より東に寄り、N－24.5°－Eである。確認された長さは約6mで、上端幅は最大で94cm、下端幅は28cm、深さは40cmである。

【堆積土】4層認められ、いずれも自然堆積層で、将棋倒し状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面は皿状をなし、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、途中で不規則な段をもち、その上方で大きく外傾する。底面は全体的にほぼ平坦である。

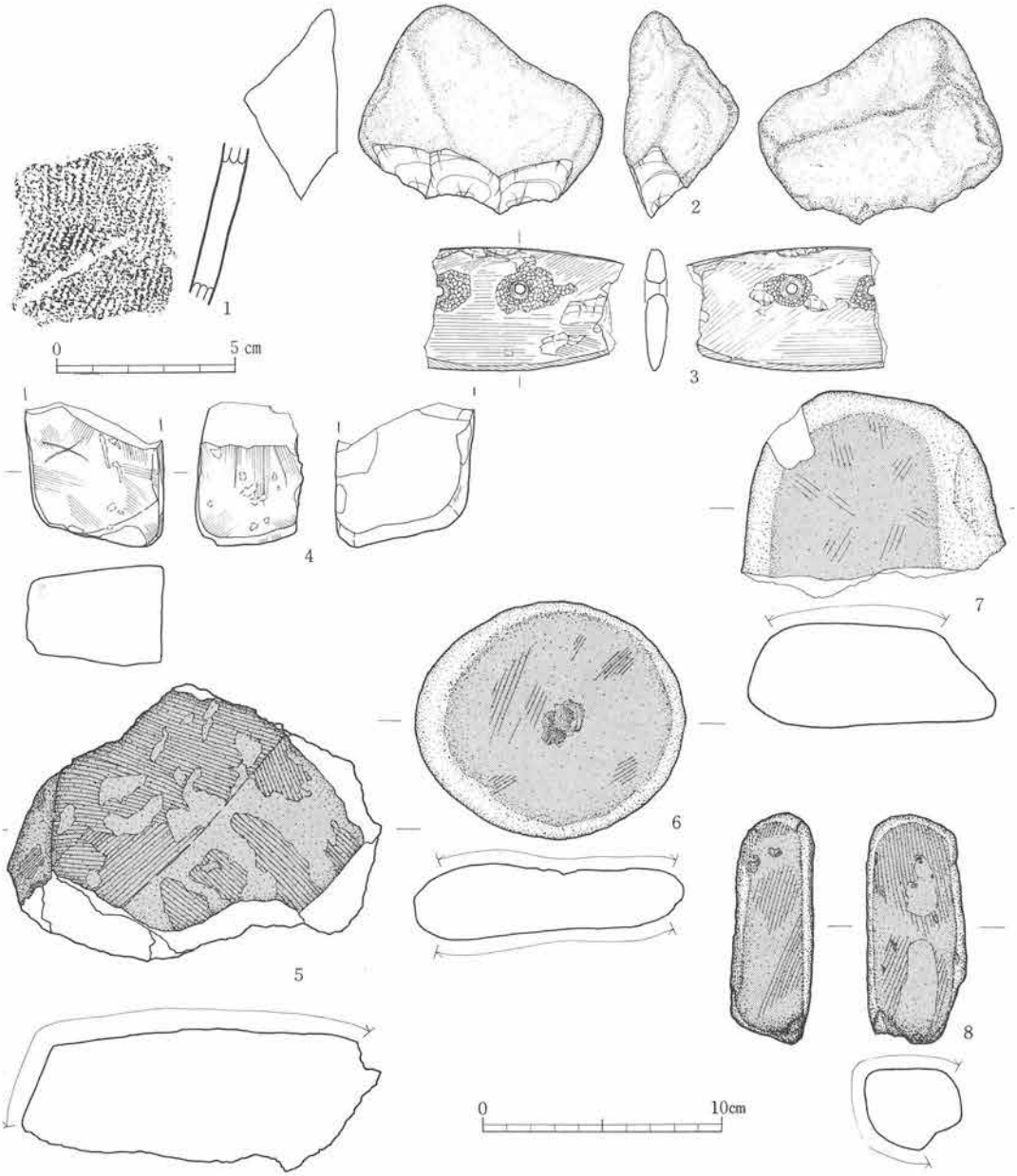
【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の須恵器1点のみである。この他に土師器破片3点・須恵器破片1点が出土している。

第11号溝跡（SD 11）

【位置】Ⅰ区　N34.7～38.1　W24.6～49.8

【確認面・重複】IV層上面で確認された。調査区内では南辺部が検出された。両端はさらに北の方へ延びている。第1・7・8・9号溝跡、第4号溝状遺構と重複しており、第7・8・9号溝跡より古く、その他より新しい。

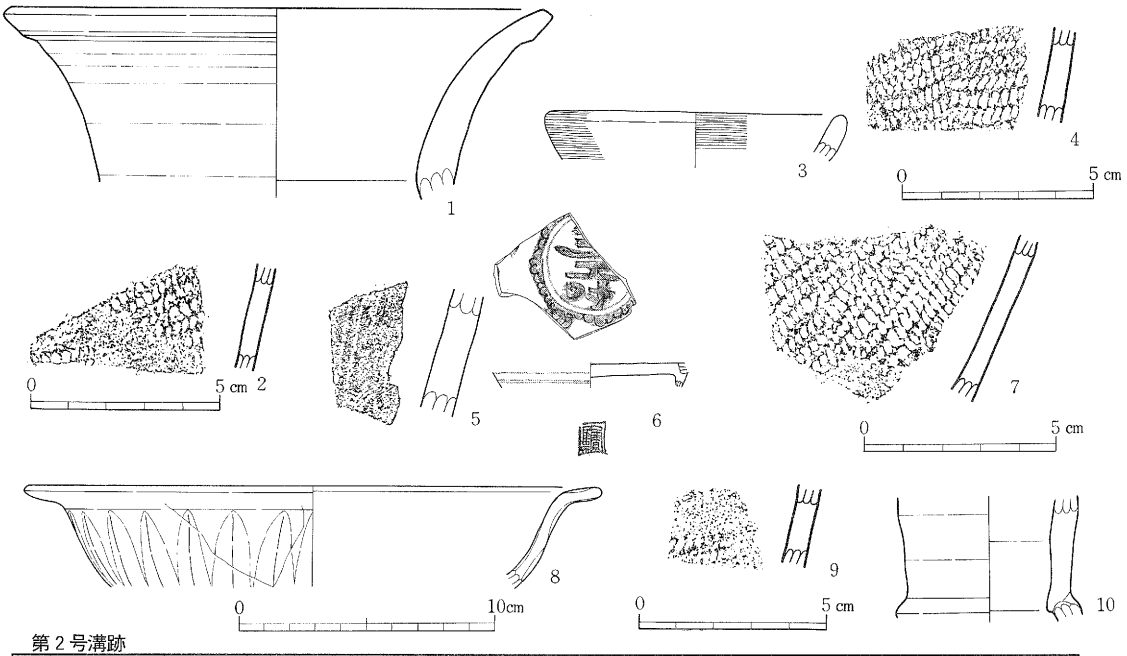
【方向・規模】両端が北側に延びることから⌴形に



番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	縄文土器 深鉢	堆3層	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	86-4	地-1

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
2	石核	堆1・2層	角ばった礫を素材としている。一縁辺に一方から打撃を加え、横長の剥片を剥離している。	9.0	12.0	4.4	328.5	石英安山岩質凝灰岩	95-17	石-22
3	石庖丁	堆3層	両端が欠損。形態は紡錘形に近い。両面とも成形時の面が所々に残る。刃部は両刃である。孔は敲打および回転穿孔によってあけられている。孔径-4.5mm。	(8.0)	5.2	1.0	(60)	凝灰質頁岩	95-18	石-25
4	砥石	堆	一部。方柱状。軟質でシルト質状の石材。主要砥面は一面。	(5.6)	5.9	4.3	(220)	石英安山岩質凝灰岩	97-2	石-48
5	磨面をもつ礫	堆1・2層	側面を打ち欠いている。角ばった礫を利用。2面磨面が認められる。	11.7	15.6	5.8	1,290	石英安山岩	—	石-88
6	磨面をもつ礫	堆	扁平な礫を利用。上下2面に磨面があり、上の一面に凹みが認められる。	9.9	11.3	3.2	385	安山岩	98-13	石-104
7	磨面をもつ礫	堆4層上面	下部欠損。厚みのある礫を利用。一面に磨面が認められる。	(8.2)	11.0	4.4	(540)	砂岩	—	石-105
8	磨面をもつ礫	堆2層	円棒状の礫を利用。側面を含めて磨面が3面認められる。	9.6	4.2	3.3	195	安山岩	98-3	石-91

第182図　第1号溝跡出土遺物



第２号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 甕	堆１層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/6	(21.6)	－	－	－	E-104

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	縄文土器 深鉢	堆１層	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	86-9	地-2

第３ａ号溝跡

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	土師質土器 皿	堆	手づくね。内外面ともヨコナデ。白針わずかに含む	－	－	口縁部 1/12	(12.0)	－	－	－	I-56

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	縄文土器 深鉢	堆	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	86-6	地-3

第３ｂ号溝跡

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
5	陶器 壺か甕	堆１層	外面はハケメ・ナデ。内面はナデ。	在地 白石窯？	13～14C？	体部破片	－	－	－	－	I-57
6	染付 皿	堆１層	内面には「寿」の文字文が、高台内中央には銘款が施されている。	中国	明末16C	底部 1/3	－	(7.2)	－	85-20	J-4A

第６号溝跡

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	縄文土器 深鉢	堆１層	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	86-5	地-4

第７号溝跡

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
8	青磁 盤	堆１層	折縁。外面に鎬蓮弁文。内面は無文。	中国 龍泉窯系	鎌倉後半～南北朝	口縁部～体部1/8	(22.7)	－	－	85-1	J-4B

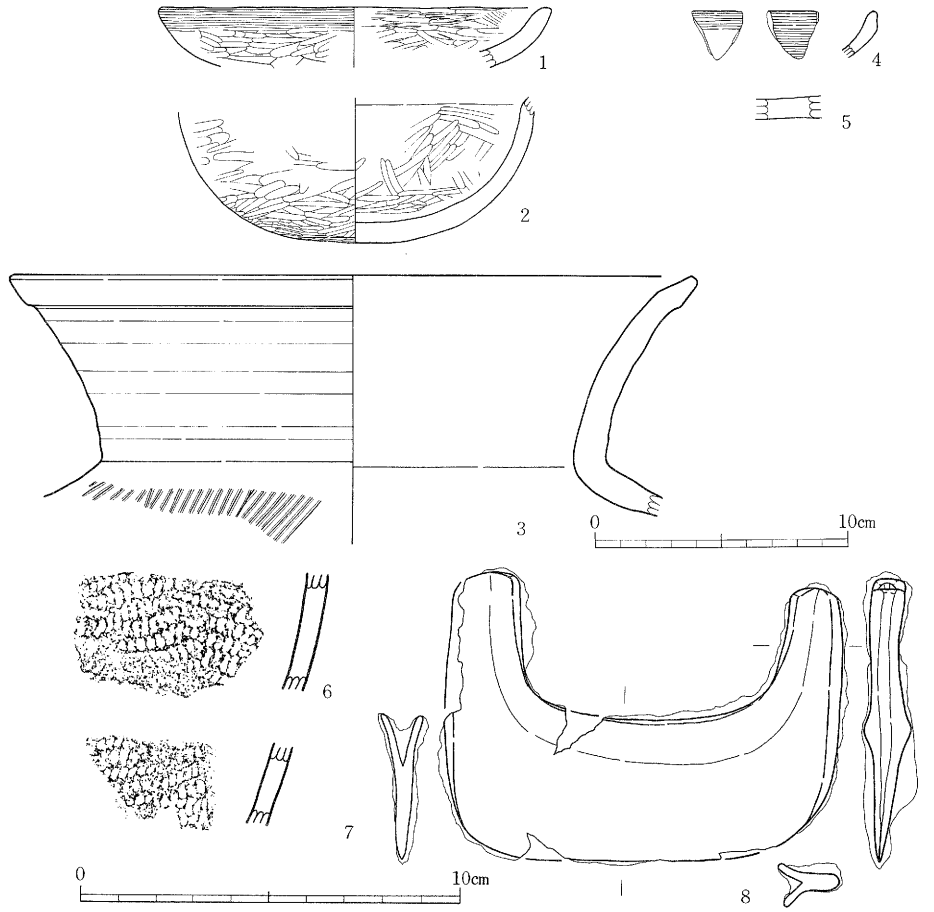
番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
9	縄文 深鉢	堆３層	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	86-11	地-5

第10号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
10	須恵器 壺	堆２層	ロクロナデ	ロクロナデ	頸部 2/3	(7.2)	－	－	80-6	E-105

第183図　第２・３a・３b・６・７・10号溝跡出土遺物

西・南・東の三辺が存在するものと考えられ、さらに北辺が存在すれば方形状に溝が巡ることも想定される。南辺は東西方向からやや東に寄り、N－74.5°－Wである。確認された長さは約26mで、南辺は外側上端で24.2mを計る。上端幅は2.50m、下端幅で1.40m、深さは81cmである。



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆4層	ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・ナデ	口縁部1/8	(15.4)	－	－	－	C-260
2	土師器 坏	堆4層	ヘラミガキ	ヘラミガキ	体部1/3	－	4.7	－	－	C-261
3	須恵器 甕	堆4層	ロクロナデ・平行タタキ目	ロクロナデ	口縁部1/4	(27.0)	－	－	－	E-106

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	土師質土器 皿	堆1層	手づくね。内外面ともヨコナデ。白針わずかに含む。	－	－	口縁部破片	－	－	－	－	I-58
5	土師質土器 皿	堆1層	ロクロで製作。底部は回転糸切り。白針わずかに含む。	－	－	底部破片	－	－	－	－	I-59

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	縄文土器 深鉢	堆1層	縄文LR。	体部破片	－	－	－	86-6	地-6
7	縄文土器 深鉢	堆3層	縄文LR。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	86-10	地-7

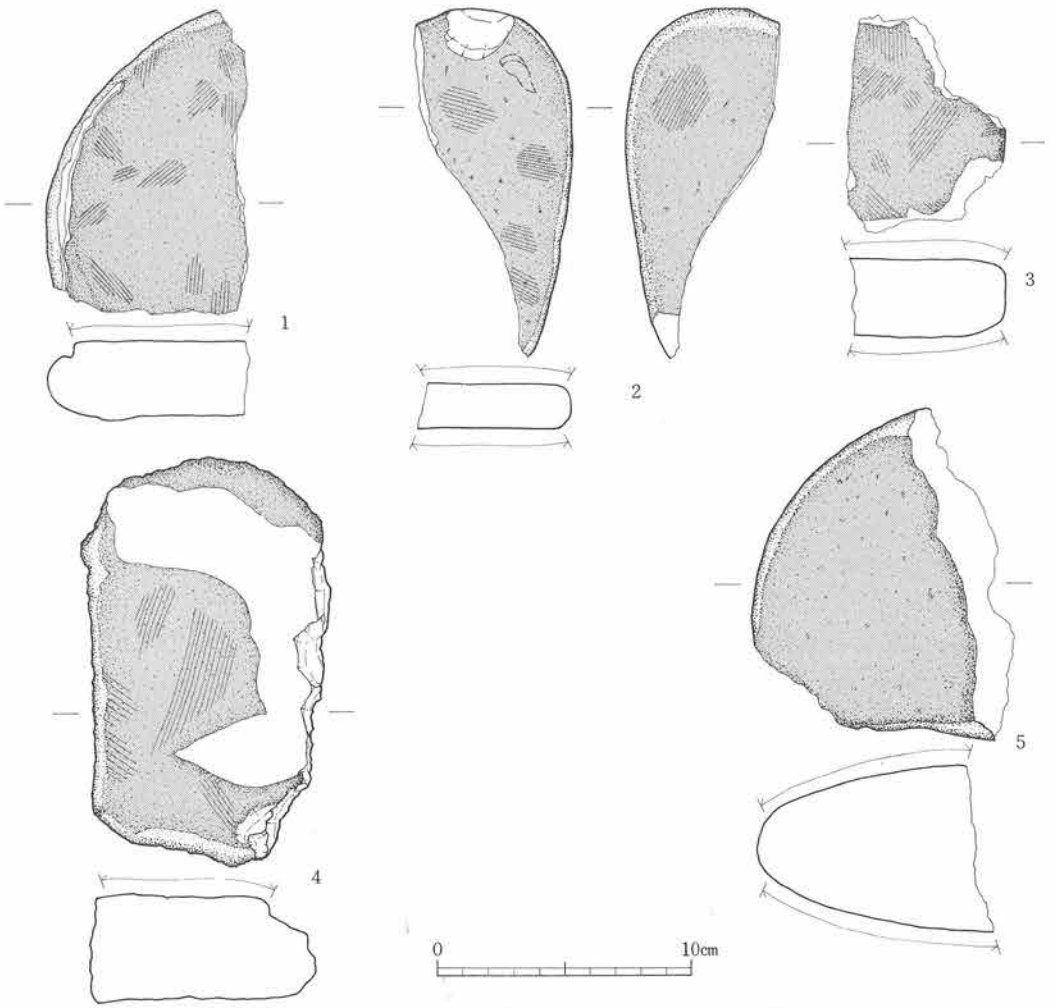
番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
8	鉄製品 鋤鍬先	堆2層	ほぼ完形。	7.6	10.4	1.2	70.5	101-6	N-45

第184図　第11号溝跡出土遺物（1）

【堆積土】11層認められ、4層に大別される。その中の5層は人為堆積層と考えられ、他は自然堆積層である。底面から約20cm上位で酸化鉄の集積が認められた。堆積土の特徴からは底面付近に水が滞水していたことは考えられるが、水が流れていた形跡は認められなかった。将棋倒し状の堆積状況を示す。

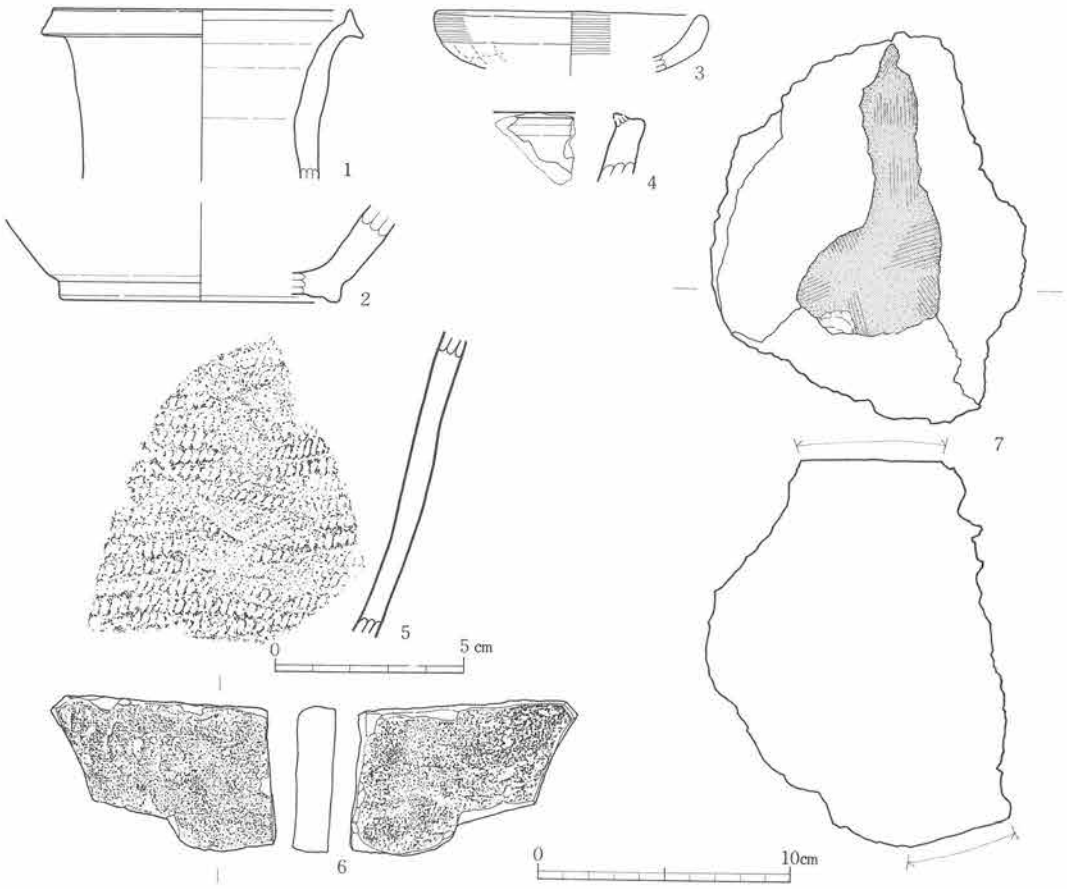
【壁・底面】断面は大きく開く「U」字形をなし、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、その上方で大きく外傾する。底面はわずかに起伏はあるが、概して平坦で、傾斜はしていない。

【出土遺物】堆積土中から多くの遺物が出土した。図示できたものは土師器2点・須恵器1点・土師質土器2点・縄文土器2点・鉄製の鋤鍬先1点・磨面をもつ礫5点である。土師質土器は1点は手づくね



番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
1	磨面をもつ礫	堆3層	全体の半分程欠損。扁平な礫を利用。一面に磨面が認められる。	(12.1)	(8.1)	(3.2)	(355)	石英安山岩	98-1	石-86
2	磨面をもつ礫	堆4層上面	全体の半分程欠損。扁平な礫を利用上下2面に磨面が認められる。	(13.8)	(6.3)	(1.7)	(150)	石英安山岩	98-2	石-89
3	磨面をもつ礫	堆2層	一部残存。角ばった礫を利用。上下2面に磨面が認められる。	(8.7)	(6.0)	(3.0)	(225)	石英安山岩	—	石-90
4	磨面をもつ礫	堆4層	一部欠損。角ばった礫を利用。一面磨面あり、剥離が認められる。	16.2	10.0	4.5	580	石英安山岩	98-8	石-92
5	磨面をもつ礫	堆4層	全体の半分程欠損。厚みのある扁平な礫を利用。上下2面に磨面が認められる。	(13.2)	(10.2)	(6.6)	(1,010)	安山岩	—	石-93

第185図　第11号溝跡出土遺物（2）



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 長頸壺	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部1/6	(11.8)	—	—	81-1	E-107
2	須恵器 長頸壺	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	体部下半～底部破片	—	(11.1)	—	—	E-108

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	土師質土器 皿	堆1層	手づくね。外面はヨコナデ・オサエ。内面はオサエ。白針わずかに含む。	—	—	口縁部～底部 1/12	(10.8)	—	—	—	I-60
4	陶器 鉢	堆1層	片口の鉢と考えられる。内外面ともロクロナデ。	在地 白石窯？	13～14C前半	口縁部破片	—	—	—	—	I-61

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
5	縄文土器 深鉢	堆1	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	86-12	地-8

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
6	研磨痕のある陶器片	堆1層	裏の体部破片の一辺を中心に研磨している。外面はヘラケズリ、内面はナデ。	5.8	8.6	1.5	100	—	94-13	土-65

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
7	磨面をもつ礫	堆1層	側面を打ち欠いている。厚みのある礫を利用。上下2面に磨面が認められる。	15.6	12.4	15.3	3,230	石英安山岩	—	石-87

第186図　第12号溝跡出土遺物

成形で、他の1点はロクロで製作されたものである。これらの遺物の他に土師器破片108点・須恵器破片5点・青磁破片1点（写真85－3）が出土している。青磁は中国の龍泉窯系の製品と考えられる碗である。

第12号溝跡（SD 12）

【位置】Ⅰ区　N27.7～33.9　E3.7～W0.2

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。調査区内は全体が検出され、さらに南と北の調査区外へ延びている。第2号掘立柱建物跡と第4号ピット群の一部と重複しており、それらより新しい。

【方向・規模】ほぼ直線状に走行するようである。方向は真北方向よりいく分東に寄り、N－18°－Eである。確認された長さは約6mで、上端幅は3.6m、下端幅は80cm、深さは南壁で70cm、北壁で1.2mである。

【堆積土】7層認められ、すべて自然堆積層である。底面から約70cm上位で酸化鉄の集積が認められた。

【壁・底面】断面はほぼ「U」字形をなしており、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、その上方は大きく外傾している。底面は南側と北側では比高差があり、北側が大きく下がっている。

【特記事項】溝跡のほぼ中央から、下部の堆積土を掘り込んで造られた土坑が検出された。溝跡の堆積土除去中に確認されたことから全容は明確ではないが、平面形は円形で、規模は径が約2.0mあり、底面は溝跡底面までは達していない。この土坑の位置などから溝跡に伴うものと考えられ、下部の堆積土を掘り込んでいることから、溝が埋没する過程で造られた水溜の可能性が考えられる。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の須恵器2点・土師質土器1点・陶器1点・縄文土器1点・研磨痕のある陶器片1点・磨面をもつ礫1点である。これらの他に土師器破片14点・赤焼土器破片1点・須恵器破片5点・鉄滓1点・モモの種子3点などが出土している。

第13号溝跡（SD 13）

【位置】Ⅱ区　N12.3～20　W104.2～109.9

【確認面・重複】大部分は第4号竪穴住居跡の堆積土下部で、一部はⅣ層上面で確認された。断面観察の結果、第4号竪穴住居跡堆積土の6層上面から掘り込まれていることが判明した。東と西側が調査区外に延びている。第4号竪穴住居跡と重複しており、それより新しい。

【方向・規模】南北と東西両方向のほぼ直線状の溝が交叉する形状をしており、南北方向の溝に関しては、交叉部分からそれぞれ3～4m延びたところで終結している。この溝跡に関しては別々の溝跡が重複している可能性も考えられたが、切り合い関係が認められなかったこと、相互の底面が平坦に移行していることなどから、同一の遺構と判断した。南北方向の溝は真北から若干東に寄っており、N－19°－Eであり、その北側はわずかに東に弯曲している。また、東西方向の溝はこれとほぼ直交し、N－76°－Wである。規模は南北方向が長さ7.84m、上端幅73cm、下端幅25cm、深さ23cmである。東西方向は長さ5.76m以上で、上端幅1.35m、下端幅77cm、深さは14cmである。

【堆積土】3層認められた。いずれも自然堆積層で、将棋倒し状に堆積している。

【壁・底面】断面は皿状をなしており、壁はゆるやかに立ち上がり、その上方は外傾する。底面は交叉部分が26cmと最も深く、そこから北・南・東の3方向にゆるやかに上がっている。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の土師器1点・土錘1点・フイゴの羽口1点・円板状石製品1点・磨面をもつ礫1点である。これらの他に鉄滓が3点出土している。

第14号溝跡（SD 14）

【位置】Ⅱ区　N0.7～6.6　W86.6～87.9

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。調査区内

は全体が検出された。北と南側は調査区外に延びている。第15号溝跡と重複しており、それよりも新しい。

【方向・規模】直線的に走行している。その方向は真北より東に大きく寄っており、N－17.5°－Eである。確認された長さは5.92mで、上端幅82cm、下端幅は42cm、深さが27cmである。

【堆積土】4層認められた。いずれも自然堆積層であり、レンズ状に堆積している。1層には灰白色火山灰とみられる粒子が含まれている。

【壁・底面】断面はほぼ直方形をなしており、壁は底面から直立ぎみに立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北方向にわずかに傾斜している。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の須恵器2点・弥生土器1点のみである。須恵器2点とも坏で、底部は回転ヘラ切りにより切り離され、その後の再調整は行われていない。これらの遺物の他に土師器破片52点・須恵器破片18点が出土している。

第15号溝跡（SD 15）

【位置】II区　N0.7～6.7　W85.4～86.8

【確認面・重複】IV層上面で確認された。北側は調査区外へ延びている。南側は第14号溝跡と重複し、それに切られている。

【方向・規模】直線的に走行している。その方向は真北より大きく東に寄っており、N－30°－Eである。確認された長さは3.76mで、上端幅80cm、下端幅53cm、深さは29cmである。

【堆積土】5層認められた。いずれも自然堆積層であり、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面は「U」字形に近く、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、上方で外傾している。底面はほぼ平坦で、北方向にわずかに傾斜している。

【出土遺物】図示できるものはなく、土師器破片が1点出土したにすぎない。

第16号溝跡（SD 16）

【位置】II区　N5.6～S0.2　W21.3～64.2

【確認面・重複】IV層上面で確認された。東・西・北側はさらに調査区外に延びている。第7号竪穴住居跡、第8・11号溝状遺構などと重複しており、これらより新しい。

【方向・規模】この遺構は、平面的なあり方や堆積土の共通などから一連の遺構と判断した。ここでは、溝跡の特徴などからA・B・Cの3つの部分に分けて記述する。Aの溝は真北方向とほぼ直交する方向（N－81°－W）で直線的に走行しており、右側は端部付近でやや北に屈曲しながら、B・Cの溝と連結している。また、東側は上端プランから判断すると東端部付近で北方向に直角に曲がるものと推測される。Bの溝はAとほぼ同方向に西へ直線的に走行しており、そのまま延びるか、あるいは平面プランから推すと途中で南側に屈曲することも考えられる。Bの東端部では小規模な溝を北寄りに分岐させてAと連結しており、本来のBの溝はAの溝と約50cm離れたところで途切れている。Cの溝はA・Bの溝の方向とはほぼ直交して（N－10°－E）北方向に直線的に走行している。確認された長さはAの溝が約32m、Bの溝が7.4m、Cの溝が2.7mである。溝の規模はAが上端幅が最大で約2 m、下端幅が40cm、深さが50～70cmである。Bは上端幅が約1.2m、下端幅が40cm、深さが50～60cmである。Cは上端幅が88cm、下端幅が23cm、深さが19cmであり、A・Bの溝と比較すると極めて浅いのが特徴である。また、Bから分岐した溝は上端幅が約40cm、下端幅が20cm、深さが20cm前後であり、B溝よりは極めて浅くなっている。

【堆積土】4層認められた。いずれも自然堆積層であり、溝の中央に向かって堆積している。

【壁・底面】断面はA・Bの溝が逆台形に近く、壁は底面から比較的急激に立ち上がり、その上方でわずかな段を持ちながら大きく外へ広がる。また、Cの

溝は断面が皿状をなし、壁の立ち上がりはゆるやかである。A溝の底面はゆるやかな起伏や段をもっており、その西端では最も深く急角度で立ち上がっている。B溝の底面でも同様に起伏や段・土手状の高まりなどが認められ、東端が最も深くなっており、そこから急角度で立ち上がっている。A・Bの溝底面からは計5個のピットが検出されたが、溝に伴うものと考えられる。

【出土遺物】堆積土から多くの遺物が出土した。その中で図示できたのは土師器2点・須恵器4点・弥生土器3点・土錘1点・土製の紡錘車1点・剝片石器1点・磨面や敲打痕をもつ礫5点である。これらの他に土師器破片151点・赤焼土器破片1点・須恵器破片31点が出土している。

第17号溝跡（SD 17）

【位置】II区　S2.2～N4.4　W16.8～18.2

【確認面・重複】IV層上面で検出したが、断面観察によりIII a層上面から掘り込まれていることが確認された。調査区内は全体が検出され、さらに南と北側の調査区外へ延びている。第1号性格不明遺構と重複しており、それよりも古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行している。方向はやや東に寄っており、N－13°－Eである。確認された長さは6.20mで、上端幅は1.13m、下端幅は24cm、深さはIII a上面から約40cmである。

【堆積土】2層認められ、いずれも自然堆積層である。レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面はほぼ「V」字形をなしており、底面からゆるやかに立ち上がり、上方は大きく外傾している。底面はほぼ平坦で、わずかに北の方向に傾斜している。

【出土遺物】図示できるものはないが、土師器破片13点・須恵器破片2点が出土している。

第18号溝跡（SD 18）

【位置】II区　S2～N4.2　W13.8～16.6

【確認面・重複】IV層上面で検出したが、断面観察によりIII a層上面から掘り込まれていることが確認された。調査区内は全体が検出され、さらに南と北側の調査区外へ延びている。重複はない。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行している。方向は真北方向から大きく東に寄っており、N－23°－Eである。確認された長さは約6 mで、規模はIII b層上面で上端幅は2.10m、下端幅は40cm、深さは1.1mである。

【堆積土】5層認められた。いずれも自然堆積層であり、レンズ状に堆積している。下部の3・5層にはIV層のブロック・粒子が多量に含まれており、いずれも西側から流入した状況を示している。

【壁・底面】断面は下部は「V」字形に近く、幅狭い底面から急激に立ち上がる。そして、壁中位で屈曲し、その上方は大きく外側に開いている。底面はほぼ平坦で、わずかに南の方向に傾斜している。

【特記事項】試掘Aトレンチで確認された溝跡を介して、第20号溝跡とつながるものと考えられる。

【出土遺物】堆積土中から若干の遺物が出土した。図示できたのは須恵器1点・陶器4点・鉄鏃1点・鉄製の鎌1点である。陶器には常滑産の三筋壷とみられる破片も含まれており、他の陶器を含めて鎌倉時代頃に属するものが多いようである。図示した遺物の他に、土師器破片25点・赤焼土器破片3点・須恵器破片13点・灰釉陶器破片1点（写真89－19）が出土している。

第19号溝跡（SD 19）

【位置】II・III・V区　N3.6～S2　W6.5～E21.2

【確認面・重複】IV層上面および各遺構堆積土上面で確認された。西端は完結しているが、東側はさらに調査区外に延びている。第20号溝跡と重複しており、それより古い。また、13・17号竪穴住居跡、円

形周溝などと重複しており、それらより新しい。

【方向・規模】直線的に走行している。その方向は真北とほぼ直交しており、N－86°－Wである。確認された長さは28mである。また、平均すると上端幅は65cm、下端幅は37cm、深さは26cmである。

【堆積土】4層認められた。2つに大別され、上層は自然堆積層で、下層はIV層ブロックを多量に混在しているところから人為堆積層とみられる。

【壁・底面】断面はほぼ逆台形をなし、壁は底面から急角度で立ち上がり、大きく外傾している。底面は西側が高く、東の方向へわずかずつ傾斜している。西端部と検出された東端の底面の比高差は約50cmである。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の土師器1点・弥生土器1点・鉄製品1点・磨面をもつ礫2点である。この他に土師器破片72点・須恵器破片8点が出土している。

第20号溝跡（SD 20）

【位置】III区　S3～N11.2　W3.5～13.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第14・15号竪穴住居跡、第19・21号溝跡などと重複しており、いずれの遺構よりも新しい。

【方向・規模】南北方向にほぼ直線的に走行し（N－22°－E）、その南端で西方向にほぼ直角に（N－69°－W）屈曲する溝である。確認された長さは約21mで、さらに北と西方向に延びている。溝の上端幅は1.82m、下端幅は33cm、深さは87cmである。

【堆積土】4層確認された。いずれも自然堆積層で、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面は「V」字形に近く、壁は幅の狭い底面から大きく開きながら立ち上がる。底面はほぼ平坦であり、ゆるやかに北方向に下がっている。

【特記事項】試掘AトレンチとEトレンチの確認調査により、この溝跡は西方へはさらに18m延びた地点でほぼ直角に北方向に屈曲した後に、II区で検出された第18号溝跡へ続き、北方へはさらに12m延びた地点でほぼ直角に両方向に屈曲した後に、III区で検出された第23号溝跡に続くことが考えられた。

【出土遺物】堆積土から多量の遺物が出土した。その中で図示できたのは土師器1点・須恵器4点・土師質土器1点・陶器3点・青磁1点・弥生土器3点・鉄鏃1点である。陶器は渥美か常滑産の壷か甕の一部とみられ、その中の1点は鎌倉時代前半に位置付けられるものである。青磁は中国の龍泉窯系とみられる碗で、外面には鏑蓮弁文が配されている。13世紀後半頃のものと考えられる。図示した遺物の他に土師器破片253点・赤焼土器破片2点・須恵器破片102点・鉱滓1点が出土している。

第21号溝跡（SD 21）

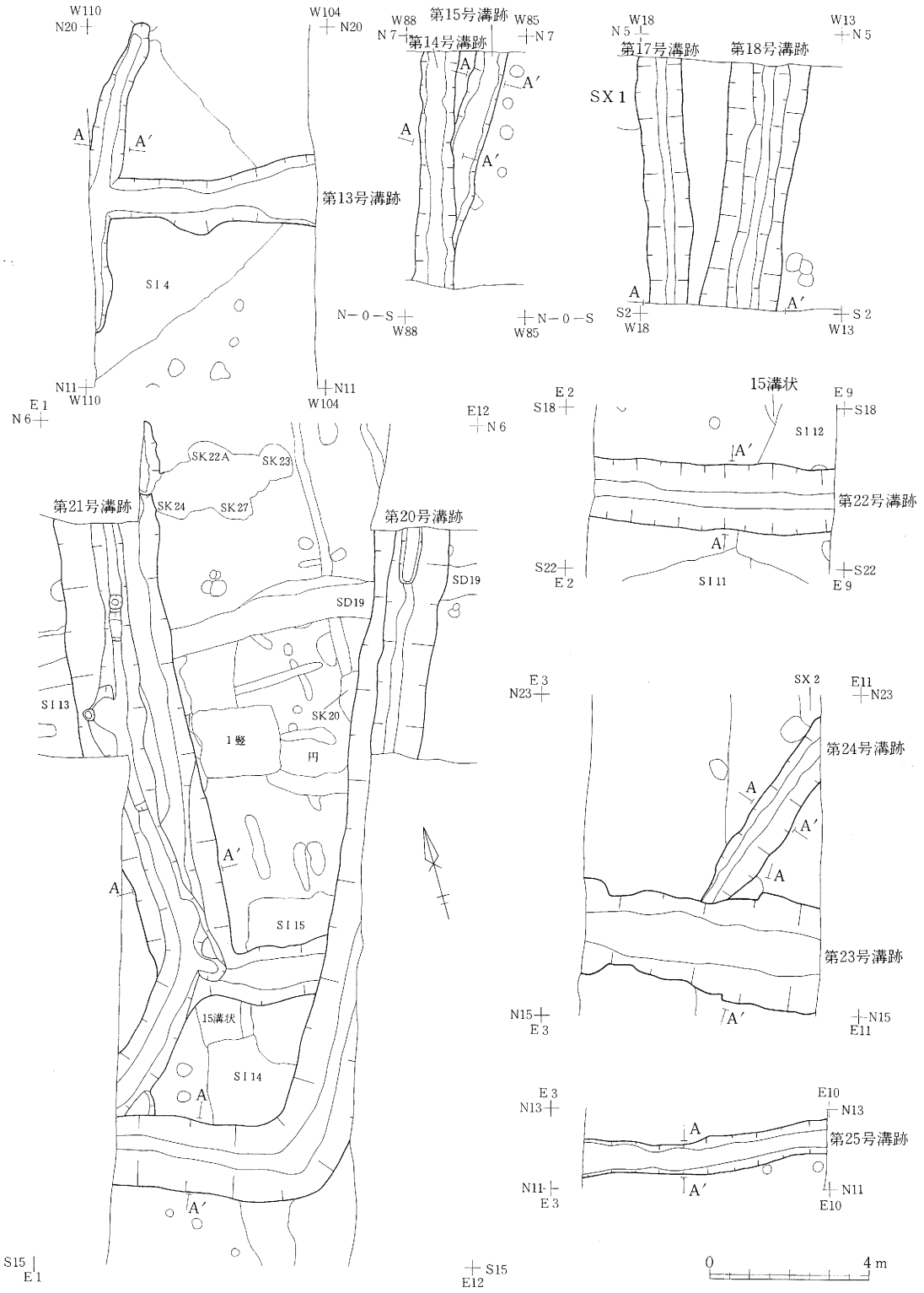
【位置】III区　S1.4～N8.2　W6～11.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第13・14・15竪穴号住居跡と重複しており、これらより新しい。また、第19・20号溝跡と重複しており、これらより古い。

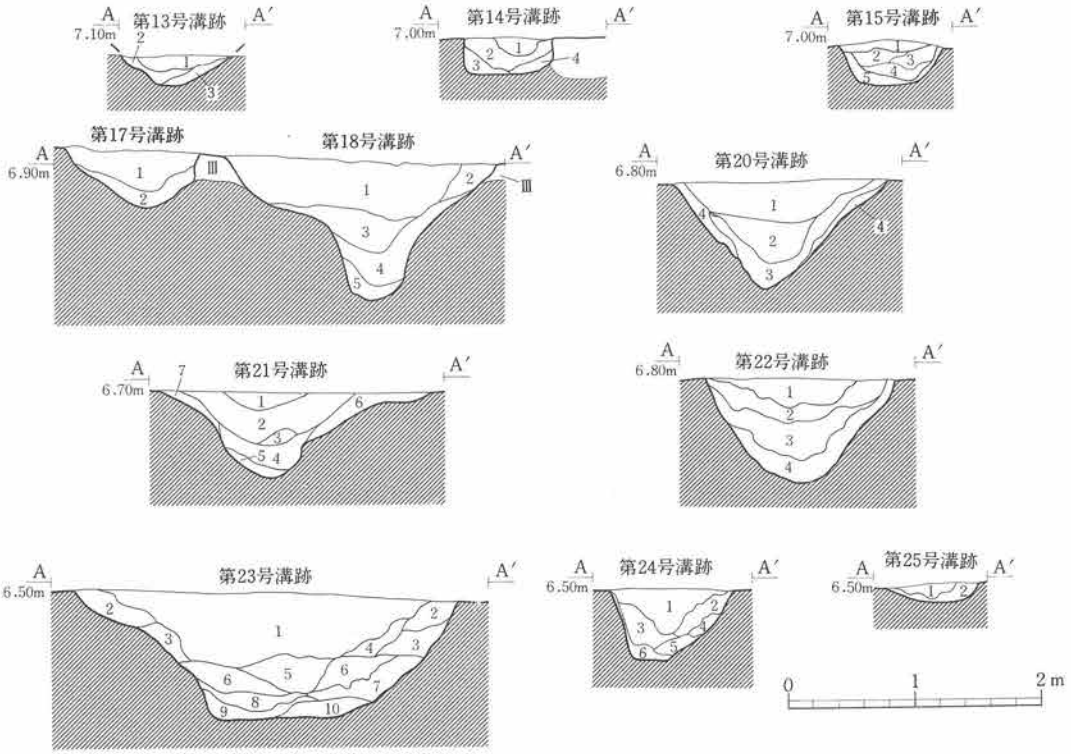
【方向・規模】ほぼ南北方向に（N－10.5°－E）走行し、その途中で規模を縮小して2方向に分岐する。1つは東方向にほぼ直角に曲がり、1つは南西方向にゆるやかに曲がっている。南北方向は長さは11.5m確認されており、さらに北へ延びている。上端幅は2.4m、下端幅は40cm、深さは75cmである。南西方向に走行する溝は、上端幅が約1mで、深さは約50cmである。また東方向に延びる溝は上端幅は約1.3m、深さは約30cmである。溝全体としては長さは14.7m以上となり、さらに調査区外へ延びている。

【堆積土】7層確認された。いずれも自然堆積層であり、レンズ状に堆積している。1層中には灰白色火山灰のブロックが多量に含まれていた。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、その上方で大きく開いている。底面は南北方向は比較的起伏があり、大きく



第187図　第13～15・17・18・20～25号溝跡平面図



第13号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物をまばらに含む。	1
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	IV層を粒状に含む。	2
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	IV層のブロック土を多く含む。	3

第14号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	酸化鉄の斑紋・灰白色火山灰粒子・炭化物をまばらに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子を少量含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層粒子をまだらに含む。	3
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	IV層ブロックを多量に含む。	4

第15号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	酸化鉄の斑紋を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	細かい砂をまばらに含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子をまばらに含む。	3
4	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	IV層粒子を粒状に含む。	4
5	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層をブロック状に含む。壁の崩落土	5

第17号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物・焼土をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層小ブロックを霜降り状に含む。	2

第18号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物・焼土をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	1層に比べてマンガン粒を多く含む。	
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	IV層ブロックを多量に含む。	
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。	2
5	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	

第20号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子をわずかに含む。上面に炭化物。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	3
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を主体とする。	

第21号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	灰白色火山灰のブロック・粒子を多量に含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層の粒子を若干含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物片・焼土を多量に含む。	
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	わずかにIV層の粒子を含む。	2
5	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	IV層のブロック・粒子を多量に含む。	
6	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層の粒子を霜降り状に多量に含む。	3
7	褐色 (10YR4/4)	シルト	IV層のブロック・粒子を多量に含む。崩落土	

第188図　第13～15・17・18・20～25号溝跡セクション図

第22号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層の粒子・酸化鉄斑紋をブロック状に含む。(人為堆積層)	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層を含まない。	
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層をブロック状に含み、壁面でより多く含む。	2
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	10YR2/3と混在する。壁面の崩落土。	

第24号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	酸化鉄の斑紋をまばらに含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層をブロック状に含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層の粒子をまばらに含む。	3
4	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層を多量に含む。壁面の崩落土。	4
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層をブロック状に含む。酸化鉄の斑紋を粒状に含む。	5
6	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	5層よりも多量にIV層を含む。	6

第23号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	酸化鉄の斑紋の粒子をまばらに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層の粒子をまばらに含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	酸化鉄の斑紋の粒子・IV層を粒状に含む。壁面でブロック状にIV層を含む。	
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層の粒子をまばらに含む。	
5	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	1層よりもやや暗く、粒性が強い。	2
6	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	IV層をブロック状に含む。	
7	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	IV層を多量に含む。壁面の崩落土。	
8	黒色 (10YR1.7/1)	粘土質シルト	IV層の粒子を粒状に含む。	
9	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	IV層の粒子をまばらに含む。	3
10	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	IV層の粒子をまばらに含む。グライ層	

第25号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロックをわずかに含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	

は北方向にゆるやかに下がっている。東方向の溝は、そこから底面が段を形成して立ち上がり、浅くなっている。

【出土遺物】堆積土から多くの遺物が出土した。その中で図示できたのは土師器5点・須恵器5点・磁器1点・弥生土器1点・とりべ1点・瓦塔とみられる土製品1点・土錘1点・磨面および敲打痕をもつ礫2点・釘1点である。なお、この中の磁器は撹乱により混入したものと考えられる。これらの他に土師器破片 211点・赤焼土器破片1点・須恵器破片62点・鉄滓1点が出土している。

第22号溝跡（SD 22）

【位置】III区　N2.6～8.8　S19.2～21.2

【確認面・重複】4層上面で確認された。東と西はさらに調査区外に延びている。第12号竪穴住居跡と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向はN－70.5°－Wである。確認された長さは約6mで、上端幅は1.63m、下端幅は38cm、深さは81cmである。

【堆積土】4層確認された。1層は人為堆積層と考えられ、他は自然堆積層である。いずれもレンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面は「U」字形をなしており、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、大きく外傾している。底面はほぼ平坦で、わずかながら東の方向に下がっている。

【出土遺物】堆積土から若干の遺物が出土した。図示できたのは陶器2点と弥生土器3点のみである。陶器は鎌倉時代頃のものとみられ、1点は常滑産の壷である。この他に土師器破片65点・須恵器破片24点が出土している。

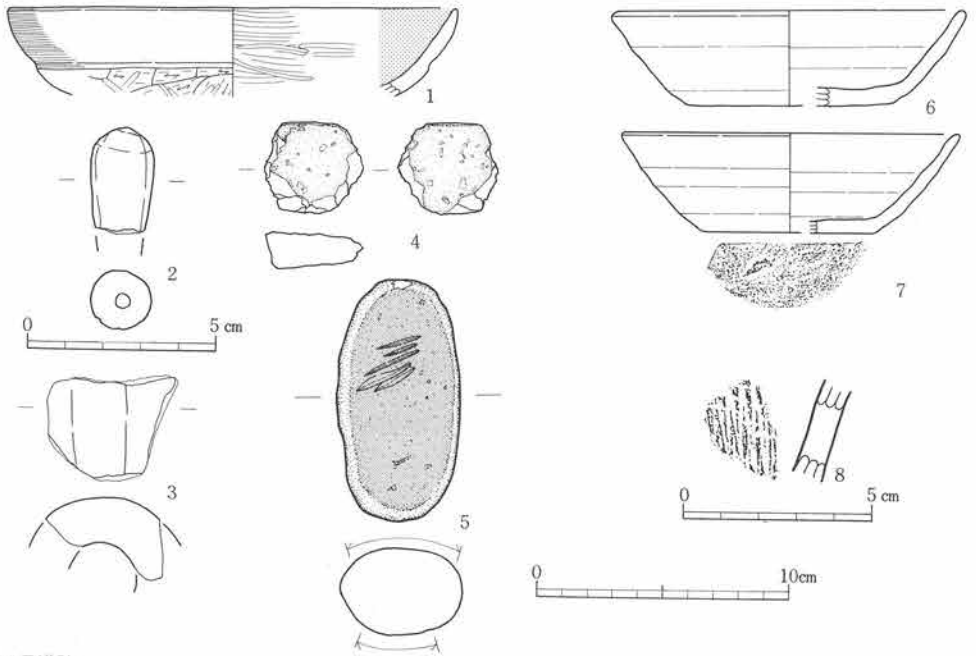
第23号溝跡（SD 23）

【位置】III区　E4～10　K15～18.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。東と西はさらに調査区外に延びている。西平部は撹乱により上方が削平されている。第24号溝跡と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向はN－68°－Wである。確認された長さは6mで、上端幅は2.35m、下端幅は1.01m、深さは最大で約1mである。

【堆積土】10層確認された。いずれも自然堆積層で、両側から中央に向かい、将棋倒し状に堆積している。



第13号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部1/12	(17.8)	－	－	－	C-262

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
2	土錘	堆	一端欠損	(2.7)	1.6	1.55	(7.6)	0.4	93-17	土-2
3	フイゴの羽口	堆	破片、外面はケズリ？	(4.0)	(5.0)	(2.8)	(41.8)	(2.1)	94-3	土-33

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
4	円板状石製品	堆	扁平な礫の縁辺を打ち欠いて円形に仕上げている。	3.6	4.0	1.4	19.6	石英安山岩	96-10	石-37
5	磨面をもつ礫	堆	円棒状の礫を利用。上下２面に磨面および上一面に研磨溝が認められる。	9.6	4.8	3.4	240	安山岩	－	石-100

第14号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	須恵器 坏	堆１層	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	口縁～底部1/2	14.0	8.2	3.8	79-8	E-109
7	須恵器 坏	堆１層	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り・火だすきあり	ロクロナデ・火だすきあり	口縁～底部1/4	13.4	7.0	4.0	79-7	E-110

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
8	弥生土器 甕？	堆２層	撚糸文 R。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	88-33	地-17

第189図　第13・14号溝跡出土遺物

【壁・底面】断面は逆台形に近く、壁は幅広い底面からゆるやかに立ち上がりながら、大きく外傾している。底面はほぼ平坦で、わずかに西方向に下がっている。

【特記事項】試掘トレンチの確認調査により、第20号溝跡と一連の溝と考えられる。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の陶器１点のみである。この他に土師器破片15点・須恵器破片４点・クルミの堅果２点が出土している。

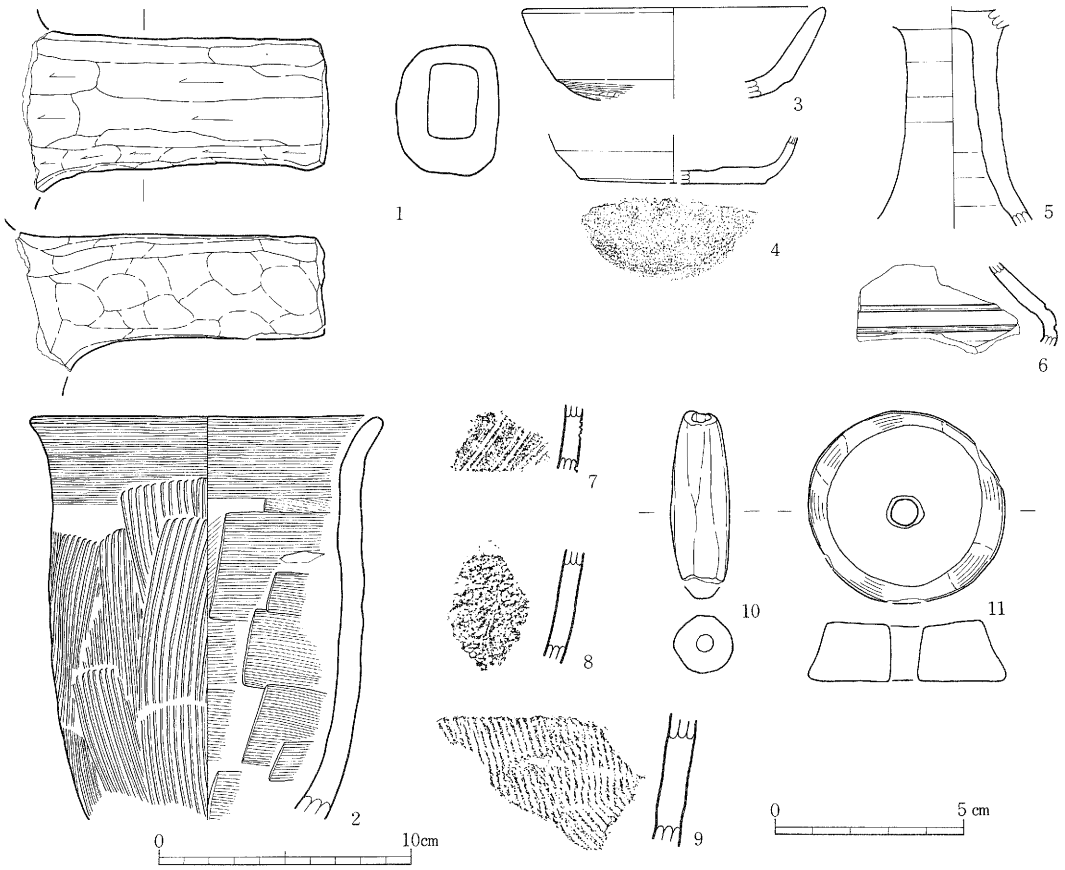
第24号溝跡（SD 24）

【位置】Ⅲ区　E7～10　N17.7～22.5

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。北東はさらに調査区外に延びる。南東は第23号遺構に切られている。また、第２号性格不明遺構とも重複しており、これより新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向はN－51°－Eである。確認された長さは4.80mで、上端幅は99cm、下端幅は27cm、深さは最大で65cmである。

【堆積土】6層確認された。いずれも自然堆積層で、両側から将棋倒し状に堆積している。



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕の把手？	底面P1上	ヘラケズリ・オサエ	芯棒の抜き取り痕あり	把手部分のみ	－	－	－	－	C-263
2	土師器 甕	堆2層上面	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部1/2	13.9	－	－	78-3	C-264
3	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ・ナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	口縁部～体部1/8	(12.0)	－	－	－	E-111
4	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ。底部手持ちヘラケズリ・切り離し不明	ロクロナデ	体部～底部1/2	－	7.3	－	－	E-112
5	須恵器 高坏	堆1層	ロクロナデ	坏部 ロクロナデ 脚部 ロクロナデ	脚部のみ	－	－	－	－	E-113
6	須恵器 甕	堆1層 堆2層	ロクロナデ	ロクロナデ	体部上半破片	－	－	－	－	E-114

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	弥生土器 壺	堆2層	三本平行沈線による山形文か。内面はナデ。	体部破片	－	－	－	87-22	弥-3
8	弥生土器 甕？	堆1層	撚糸文R。内面ナデ。	体部破片	－	－	－	－	地-19
9	弥生土器 甕？	堆1層	撚糸文R。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	88-9	地-18

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
10	土錘	堆2層	一端欠損。外面はケズリ・オサエ。	(4.45)	1.55	1.5	(10.2)	0.45	93-10	土-5
11	紡錘車	堆1層	ほぼ完形。円錐台形。上・下面はミガキ。側面はナデ。白針わずかに含む。	上面 4.1	下面 5.2	1.6	47	0.7	93-25	土-26

第190図　第16号溝跡出土遺物（1）

【壁・底面】断面は逆台形に近く、壁は底面からやや急角度で立ち上がり、外傾する。底面は起伏はあまりみられず、ゆるやかに北東方向に下がっている。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の土師器1点のみである。この他に土師器破片6点・須恵器破片3点が出土している。

第25号溝跡（SD 25）

【位置】Ⅲ区　E3.8～10　N11.2～12.8

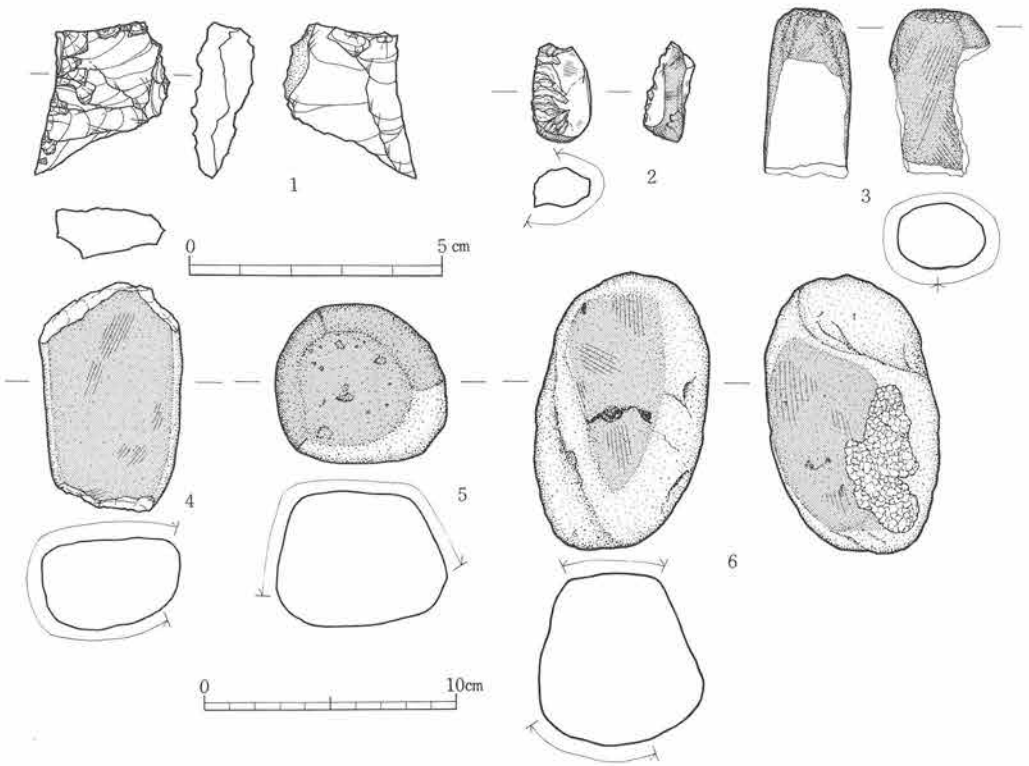
【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。東と西はさらに調査区外に延びている。重複は認められない。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向はN－80°－Wである。確認された長さは6mで、上端幅は1.20m、下端幅は45cm、深さは最大で18cmである。

【堆積土】2層確認された。いずれも自然堆積層で、レンズ状に堆積している。

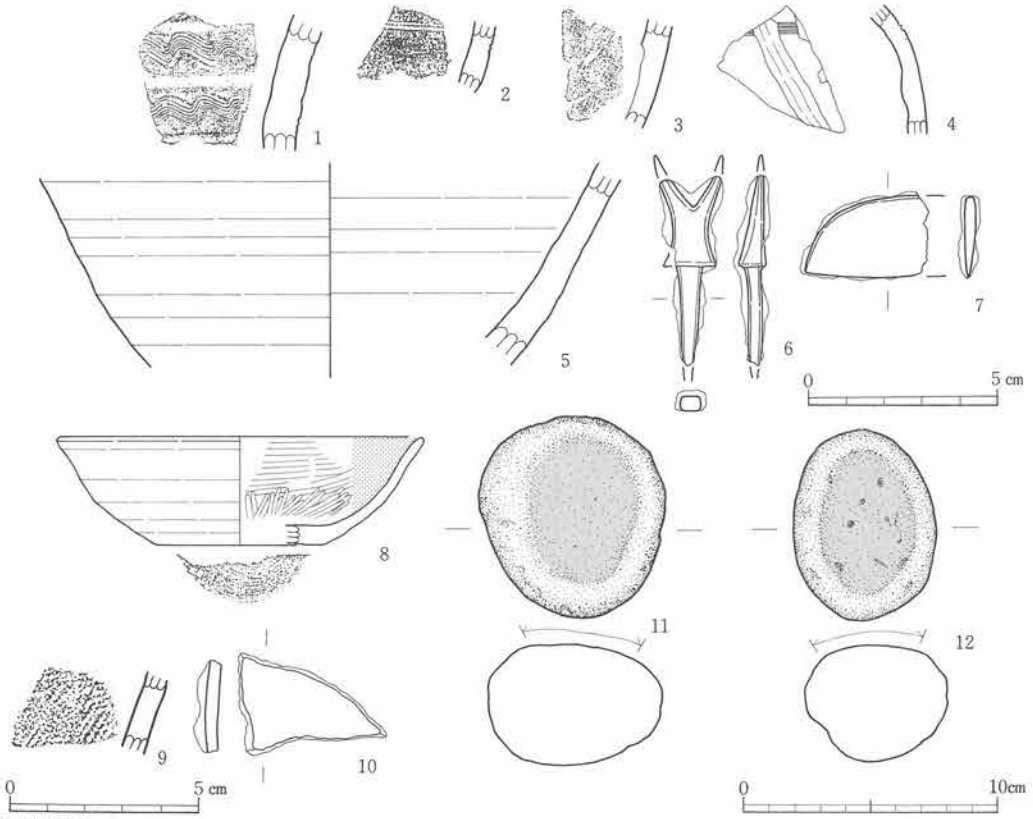
【壁・底面】断面は皿状を呈し、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、上方に大きく開いている。底面はやや起伏があり、ゆるやかに東の方向に下がっている。

【出土遺物】図示できる遺物はなく、土師器破片10点が出土したにすぎない。



番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
1	剝片石器	堆1層	相対する縁辺に両極剝離痕が認められる。楔形石器（ピエス・エスキーユ）と考えられる。	2.9	2.4	1.0	7.0	流紋岩	95-5	石-7
2	磨面をもつ礫	堆1層	小さな礫を使用。磨面及び研磨溝が認められる。	4.0	2.4	1.5	8.6	石英安山岩質凝灰岩	—	石-161
3	磨面をもつ礫	堆1層	側面及び下部が欠損。円棒状の礫を利用。全体に磨面があり、上端に敲打痕が認められる。	(6.5)	(3.9)	(3.5)	(120)	安山岩	—	石-95
4	磨面をもつ礫	堆2層	円棒状の礫を利用。上下端に剝離があり、側面含めて3面に磨面が認められる。	9.2	5.7	3.8	310	安山岩	—	石-103
5	磨面をもつ礫	堆	球に近い礫を利用。側面も含めて3面に磨面が認められる。	6.3	6.8	5.4	550	安山岩	—	石-106
6	磨面をもつ礫	堆1層	厚みのある礫を使用。磨面が上下に2面あり。敲打痕が一部認められる。	11.1	6.7	7.0	690	石英安山岩	99-12	石-162

第191図　第16号溝跡出土遺物（2）



第18号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 甕	堆1層	ロクロナデ 波状の櫛描文が2段あり	ロクロナデ	口縁部破片	−	−	−	−	E-115

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	陶器 鉢	堆1層	外面に2条の細沈線。外面はロクロナデかヨコナデか不明。内面は自然釉。	−	−	体部破片	−	−	−	−	I-62
3	陶器 壺か甕	堆1層	外面はナデか。	渥美？	中世	体部破片	−	−	−	−	I-63
4	陶器 壺	堆2層	肩部外面に3条の沈線があり、三筋壺と考えられる。釉が流下。内面はナデ。	常滑	12～13C	体部破片	−	−	−	84-1	I-64
5	陶器 鉢	堆1層	内外面ともロクロナデ。	在地	13～14C前半	体部破片	−	−	−	83-20	I-65

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
6	鉄製品 鉄鏃	堆1層	雁股式の鉄鏃。両端欠端、茎の断面は長方形に近い。	(5.1)	1.4	0.4	(64)	100-18	N-46
7	鉄製品 鎌	堆2層	鎌の刃部先端と考えられる	(3.3)	2.2	0.3	7.6	101-3	N-47

第19号溝跡

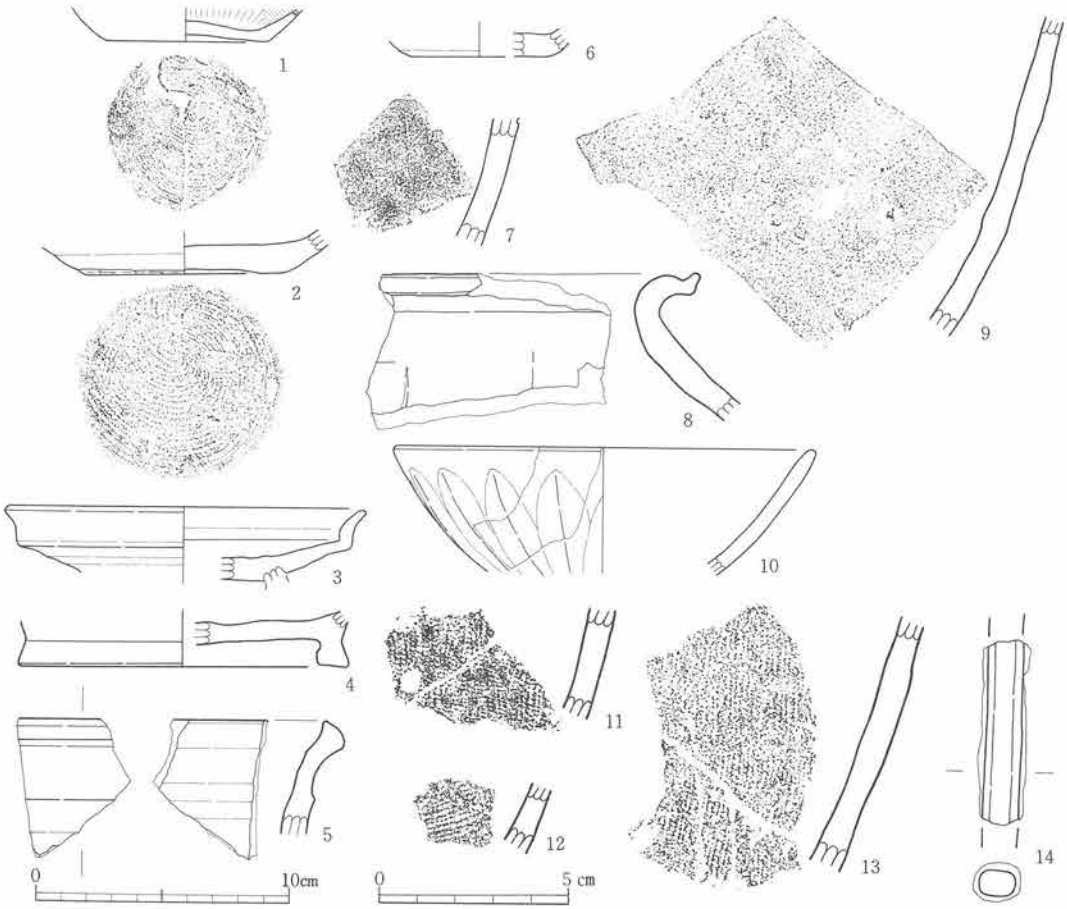
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
8	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ。底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～底部 ¼	14.4	6.4	4.3	−	C-265

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
9	弥生土器 甕？	堆1層	縄文 LR。内部ナデ。	体部破片	−	−	−	−	地-20

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
10	鉄製品 鍋？	堆1層	鋳造品とみられる。	(2.5)	(3.8)	0.3	(10.8)	102-14	N-48

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
11	磨面をもつ礫	堆1層	球に近い礫を利用。一面に磨面が認められる。	8.1	7.4	4.8	395	安山岩	−	石-117
12	磨面をもつ礫	堆1層	円棒状の礫を利用。磨面は一面に認められる。	7.6	5.6	4.6	250	安山岩	−	石-118

第192図　第18・19溝跡出土遺物



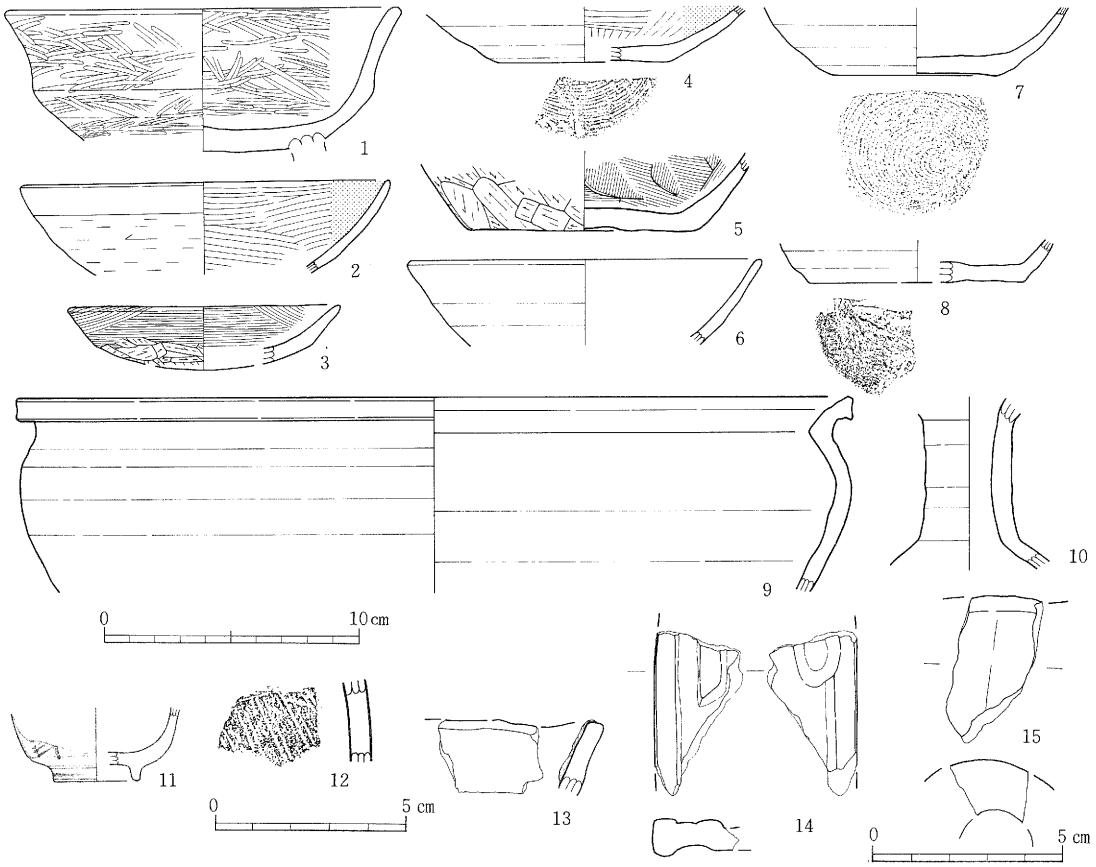
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆3層	ロクロナデ・底部回転糸切り	放射状ヘラミガキ・黒色処理	体～底部	－	6.4	－	－	C-266
2	須恵器 坏	堆3層	ロクロナデ。底部回転糸切り・手持ヘラケズリ	ロクロナデ	体～底部	－	7.6	－	－	E-116
3	須恵器 盤	堆2層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～底部	14.2	－	－	80-7	E-117
4	須恵器 壺	堆1・2層	ロクロナデ	ロクロナデ	底部1/4	－	13.0	－	－	E-118
5	須恵器 壺	堆1・2層	ロクロナデ	ロクロナデ	破片	－	－	－	－	E-119

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	土師質土器 皿	堆1層	ロクロで製作・底部は回転糸切り。白針わずかに含む。	－	－	底部1/8	－	(5.4)	－	－	I-66
7	陶器 壺?	堆1層	外面に沈線が認められる。内外面ともナデか。	渥美?	中世	体部破片	－	－	－	－	I-67
8	陶器 壺か甕	堆3層	外面はヨコナデ・ヘラナデ 内部はヨコナデ	常滑	13C初め～前葉	口縁部～体部破片	－	－	－	84-2	I-68
9	陶器 甕	堆3層	内外面ともナデ。	常滑	中世	体部破片	－	－	－	84-3	I-69
10	青磁 碗	堆2層	外面は鎬蓮弁文。内面は無文。	中国龍泉窯系	13C後半	口縁部～体部1/12	(16.6)	－	－	85-2	J-5

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
11	弥生土器 甕?	堆1層	縄文 LR。	体部破片	－	－	－	－	地-31
12	弥生土器 甕?	堆2層	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	－	地-32
13	弥生土器 甕?	堆3層	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	88-11	地-33

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
14	鉄製品 鉄鏃	堆2層	茎の部分。両端欠損。断面一隅丸方形	(4.9)	0.9	0.7	(10.4)	100-22	N-49

第193図　第20号溝跡出土遺物



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 稜埦	堆1層 堆3層上面	ロクロナデ後ヘラミガキ	ロクロナデ後ヘラミガキ、黒色処理？	口縁～体部1/1	15.6	—	—	74-5	C-267
2	土師器 坏	堆1・2層	ロクロナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部1/4	(14.6)	—	—	—	C-268
3	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	口縁～体部1/4	10.8	—	—	—	C-269
4	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・底部放射状ヘラミガキ・黒色処理	体～底部1/12	—	(6.4)	—	—	C-270
5	土師器 甕	堆1層 堆2層	ロクロナデ後 ヘラケズリ・ナデ	ロクロナデ後 ヘラナデ	体～底部1/2	—	9.0	—	—	C-271
6	須恵器 坏	堆1・2層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部1/8	(14.0)	—	—	—	E-120
7	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	体・底部	—	6.4	—	—	E-121
8	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	体～底部1/3	—	(8.4)	—	—	E-122
9	須恵器 鉢	堆1層 堆3層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部1/8	(33.0)	—	—	—	E-123
10	須恵器 壺	堆1層	ロクロナデ	しぼり目	頸部	—	—	—	—	E-124

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
11	染付 小形碗	堆1層	外面に文様。	—	幕末～明治	体～底部1/2	—	3.4	—	85-23	J-6

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
12	弥生土器 壺	堆1層	二本平行沈線による文様。内面はナデ。	体部破片	—	—	—	87-24	弥-42

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
13	とりべ	堆1層	外面は調整不明。内面は溶解物付着。器厚0.7cm	口縁部破片	—	—	—	89-6	ト-6

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
14	瓦塔片？	堆1層	赤褐色を量し、堅緻である。型押しによるとみられる。隆起帯が一面に2条、一面に1条認められる。側面はケズリの調整が行われている。	(6.5)	(3.5)	1.5	—	—	94-16	土-67
15	土錘	堆1・2層	一部。白針わずかに含む。	(3.9)	(2.0)	(1.5)	(12.2)	(1.2)	93-20	土-11

第194図　第21号溝跡出土遺物

第26号溝跡（SD 26）

【位置】III区　E6.6～8.3　N54.8～70

【確認面・重複】IV層上面で確認された。北はさらに調査区外に延び、南は撹乱により切れている。第13号ピット群と重複しており、それらとは新古両方の関係をもつ。また、第27・28号溝跡とも重複し、それらより新しい。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はN－16°－Eである。確認された長さは約15mで、上端幅は1.30m、下端幅は47cm、深さは最大で29cmである。

【堆積土】2層確認された。その中の1層は人為堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面は皿状を呈し、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、上方に大きく開いている。底面・壁とも起伏が大きく、底面は全体的にほぼ平坦である。

【出土遺物】図示できる遺物はなく、土師器破片が4点出土したにすぎない。

第27号溝跡（SD 27）

【位置】III区　E5.5～11.3　N59～60

【確認面・重複】IV層上面で確認された。東と西側はさらに調査区外に延びる。第13号ピット群と重複しており、それらとは、新古両方の関係をもつ。また、第26号溝跡と重複しており、それより古い。

【方向・規模】不規則ながらも、ほぼ直線的に走行し、その方向はN－75°－Wである。確認された長さは6mで、上端幅は83cm、下端幅は36cm、深さは最大で12cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面は皿状を呈し、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、上方に大きく開いている。底面は起伏があるが、ほぼ平型である。

【出土遺物】出土していない。

第28号溝跡（SD 28）

【位置】III・IV区　N67.1～70　E8.1～39.8

【確認面・重複】IV層上面で確認された。さらに調査区外の東と西に延びる。第31・32号溝跡、第3・5号井戸跡などと重複しており、これらより新しい。また、第26号溝跡より古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向はN－68.5°－Eである。確認された長は約31.6mで、その上端幅は2.23m、下端幅は1.04m、深さは20cm前後である。

【堆積土】4層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、水平状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面は皿状をなし、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、外に大きく開く。北側には段が認められる。底面はほぼ平坦で、わずかに東の方向に下がっている。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の土師器1点・須恵器1点・陶器4点・白磁1点・釘1点である。陶器には鎌倉時代の在地産とみられるものも含まれている。白磁は碗であり、底部が丸く打ち欠かれている。これらの他に土師器破片5点・須恵器破片6点・鉄滓1点が出土している。

第29号溝跡（SD 29）

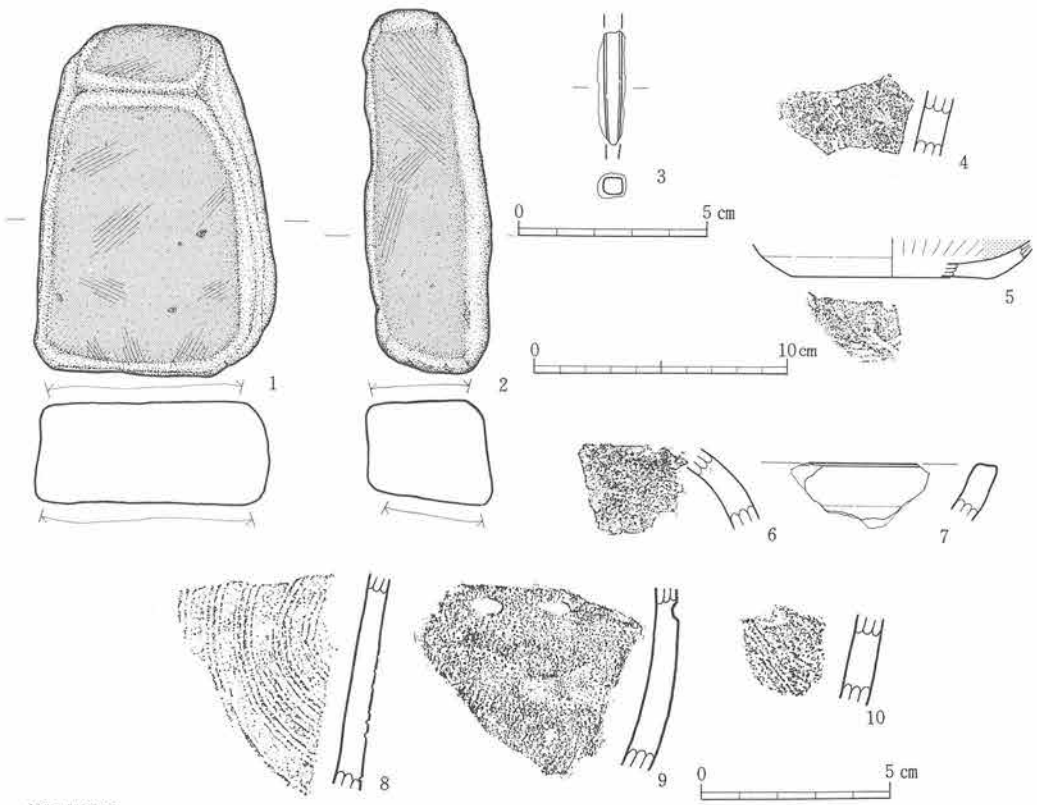
【位置】IV区　N53.7～56.2　E37.2～39.6

【確認面・重複】IV層上面で確認された。溝の一部が検出されたのみで両端とも調査区外に延びる。第30号溝跡と重複しており、それより新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行するものとみられ、その方向はN－41°－Wである。確認された長さは約2.8mで、上端幅は89cm、下端幅は40cm、深さは平均18cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、レンズ状の堆積状況を示す。1層には灰白色火山灰のブロックを含んでいる。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は底面か



第21号溝跡

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
1	磨面をもつ礫	堆1層	角ばった厚みのある礫を利用。 上下2面に磨面認められる。	14.1	9.8	6.6	1,240	安山岩	98-11	石-111
2	磨面をもつ礫	堆1層	角ばった棒状の礫を利用。上下2面に磨面が認められる。	14.5	5.1	4.2	525	安山岩	—	石-112

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
3	鉄製品 釘	堆3層	先端欠損 断面が方形の角釘	(2.3)	0.5	0.4	(1.6)	100-33	N-50

第23号溝跡

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	陶器 甕	堆1層	内外面ともナデ。	常滑	中世	体部破片	—	—	—	—	I-70

第24号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
5	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	体～底部1/8	—	(8.0)	—	—	C-272

第22号溝跡

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	陶器 壺	堆1層	外面はナデ。内面はヨコナデ・ナデ。	常滑	鎌倉時代	体部(肩部)破片	—	—	—	—	I-71
7	陶器 鉢	堆2層	内外面ともロクロナデ。	—	鎌倉時代	口縁部破片	—	—	—	—	I-72

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
8	弥生土器 壺	堆2層	三本平行沈線による同心円文が渦巻文。 内面はナデ。	体部破片	—	—	—	87-31	弥-7
9	弥生土器 甕	堆2層	外面に突刺突文。縄文 LR。	体部破片	—	—	—	88-5	弥-39
10	弥生土器 甕？	堆3層	撚糸文 R。	体部破片	—	—	—	—	地-34

第195図　第21・22・23・24号溝跡出土遺物

らゆるやかに立ち上がる。

【特記事項】北西方で検出された第31号溝跡とは方向性、位置、堆積土中に灰白色火山灰が含まれることなどから、同一の溝跡の可能性が高い。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の陶器1点のみで、他に土師器破片1点・須恵器破片1点が出土している。

第30号溝跡（SD 30）

【位置】IV区　N54.9～57　E37.2～39.6

【確認面・重複】IV層上面で確認された。溝の一部が検出されたのみで、他は調査区外に延びる。第29号溝跡と重複し、それより古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行するものとみられ、その方向はN－44°－W前後である。確認された長さは2.88mで、上端幅は66cm、下端幅は36cm、深さは平均41cmである。

【堆積土】4層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、レンズ状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は皿状の底面から比較的急な角度で立ち上がっている。

【特記事項】北西方で検出された第32号溝跡とは方向性、位置などから、同一の溝跡の可能性が考えられる。

【出土遺物】出土していない。

第31号溝跡（SD 31）

【位置】IV区　N63.9～68.7　E20.4～28.2

【確認面・重複】IV層上面で確認された。溝の一部が検出された。南はさらに調査区外に延び、北は第28号溝跡に切られている。また、第2号竪穴遺構、第4・5号井戸跡と重複しており、これらより古い。

【方向・規模】幾分曲がりくねるが、全体的には直線状に走行する。その方向はN－41°－Wである。確認された長さは約9mで、上端幅は最大で1.08m、下端幅は24cm、深さは最大で52cmである。

【堆積土】8層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、ほぼ将棋倒し状の堆積状況を示す。1層には灰白色火山灰のブロックが含まれている。

【壁・底面】断面形は「U」字形を基調としているが、西壁は部分的に階段状をなす。底面はほぼ平坦である。

【特記事項】溝跡の方向性や堆積土中に灰白色火山灰が含まれることなどから、第29号溝跡と同一の溝跡の可能性が高い。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の土師器1点と須恵器1点であり、この他に土師器破片3点・須恵器破片5点が出土している。

第32号溝跡（SD 32）

【位置】IV区　N63.9～69.1　E17.2～26.2

【確認面・重複】IV層上面および第2号竪穴遺構の床・壁面で確認された。また、第5号井戸跡・第28号溝跡とも重複しており、いずれの遺構よりも古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向はN－39°－Wである。確認された長さは約9mで、上端幅は1.02m、下端幅は34cm、深さは平均36cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、レンズ状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、その上方で大きく開いている。

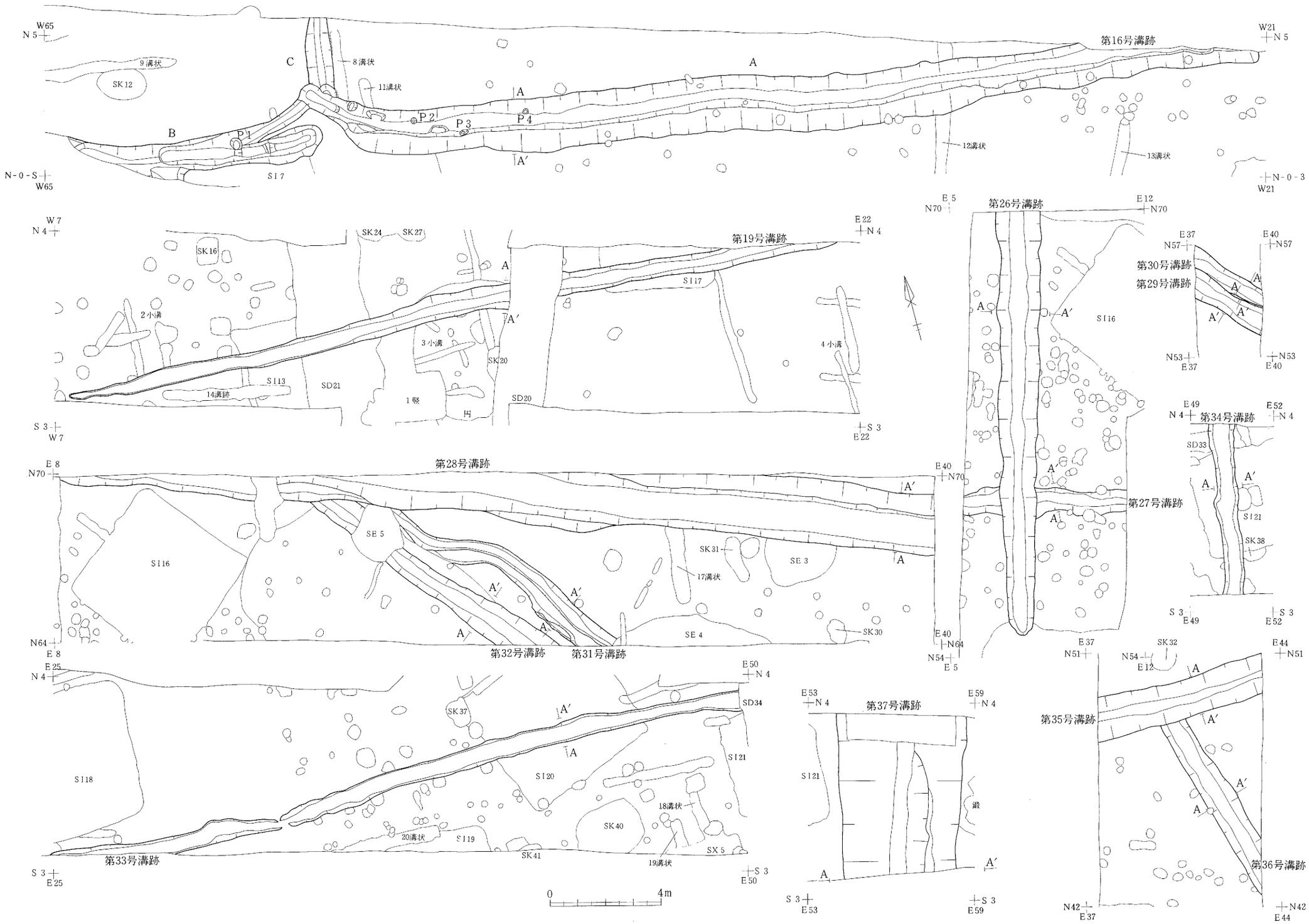
【特記事項】方向性などから、第30号溝跡と同一の可能性が考えられる。

【出土遺物】出土していない。

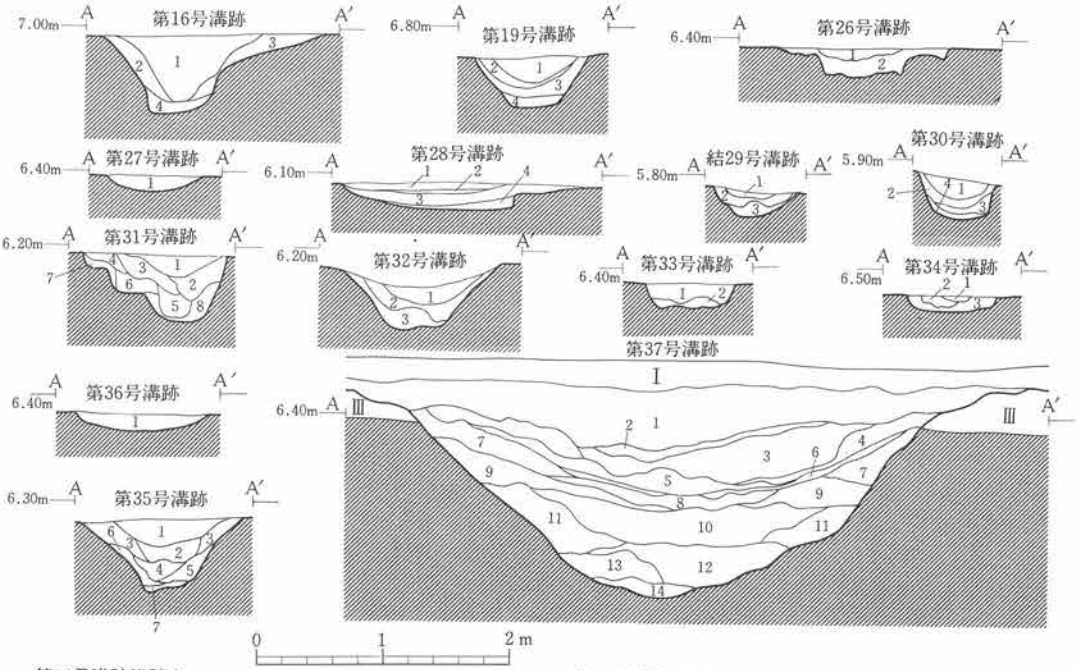
第33号溝跡（SD 33）

【位置】V区　N3.4～S2.4　E24.8～49.8

【確認面・重複】主にIV層上面で確認された。西側はさらに調査区外に延びている。東側は第34号溝跡に切られており、これより古い。また、第20号竪穴



第196図　第16・19・26～37号溝跡平面図



第16号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	IV層粒子を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を比較的多く含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	3
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト質粘土	IV層ブロック・粒子を含む。わずかにグライ化している。	4

第19号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト		1
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロックを少し含む。	
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。人為堆積土	2
4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	IV層ブロックで構成される。人為堆積土	

第26号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	IV層をブロック状に含む。人為堆積土	1
2	黒褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層・酸化鉄斑紋をまばらに含む。	2

第27号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層を粒状に含み、底面でブロック状に含む。	1

第28号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。	堆積土1
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。	
3	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。	
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	3層に比べ、黒みがやや弱い。IV層ブロック・粒子を多量に含む。	

第29号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒色 (10YR1.7/1)	シルト	IV層粒子を多量に含む。灰白色火山灰を少量含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	IV層粒子を多量に含む。	2
3	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト	IV層の崩落土	3

第30号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	酸化鉄の斑紋・粒子を含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子・酸化鉄の斑紋・粒子・マンガン粒を少量含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	3
4	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト	IV層の崩落土	4

第31号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	IV層ブロック・灰白色灰ブロックをわずかに含む。	1
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	IV層の崩落土を主体とする。	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。	3
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	4
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト		5
6	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを多く混在する。	6
7	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	IV層の崩落土	7
8	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	IV層の崩落土	8

第32号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層の粒子を少量含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを多量に含む。	3

第33号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を所々混在する。	堆積土1
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	IV層のブロックが主体をしめる。	

第34号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト		1
2	黄褐色 (2.5Y 5/3)	粘土質シルト	暗褐色ブロックを全体に含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	黄褐色ブロックを全体に含む。	3

第197図　第16・19・26～37号溝跡セクション図

第35号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	3
4	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	4
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	5
6	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	IV層の崩落土	6
7	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	7

第36号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	1

第37号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	5cm以内のIV層ブロックを多量に含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	I・III層の間層	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	5cm以内のIV層ブロックを多量に含む。	3
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	IV層小ブロックを少量含む。	4
5	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト		5
6	灰オリーブ色 (5Y5/2)	粘土質シルト		6
7	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト		7
8	黄灰色 (2.5Y4/1)	粘土質シルト	植物遺体を全体に少量含む。	8
9	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	植物遺体を全体に少量含む。	9
10	黒色 (10YR2/1)	シルト	植物遺体が全体に割りと多く含む。	10
11	オリーブ黒色 (5Y3/1)	砂質シルト	細砂の互層となっている。	11
12	黒色 (7.5Y2/1)	粘土	IV層砂ブロックを一部に含む。炭化物粒を微量に含む。	12
13	オリーブ黒色 (5GY2/1)	砂質シルト	IV層の砂質ブロックを全体に多量に含む。	13
14	黒色 (5Y2/1)	シルト	IV層ブロック・炭化物粒を少量含む。	14

住居跡・第14号掘立柱建物跡と重複しており、これらより新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向は真北と直交しており、N－89.5°－Eである。確認された長さは25.28mで、上端幅は72cm、下端幅は48cm、深さは平均15cmである。

【堆積土】2層確認された。自然堆積層とみられる。水平状の堆積状況を示す。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、底面からゆるやかに立ち上がっている。底面には凹凸がみられ、いく分東の方向に下がっている。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の土師器2点・須恵器1点・縄文土器1点・釘とみられる鉄製品1点・敲打痕をもつ礫1点である。この他に土師器破片58点・須恵器破片58点が出土している。

第34号溝跡（SD 34）

【位置】V区　N3.7～S2.4　E49.6～51

【確認面・重複】IV層上面および第21号竪穴住居跡堆積土上面などで確認された。南と北は調査区外に延びている。第21号竪穴住居跡と第33号溝跡と重複しており、これらより新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向は真北よりわずかに東に寄り、N－11°－Eである。確認された長さは6.12mで、上端幅は74cm、下端幅は50cm、深さは平均14cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は皿状の底面からゆるやかに立ち上がっている。

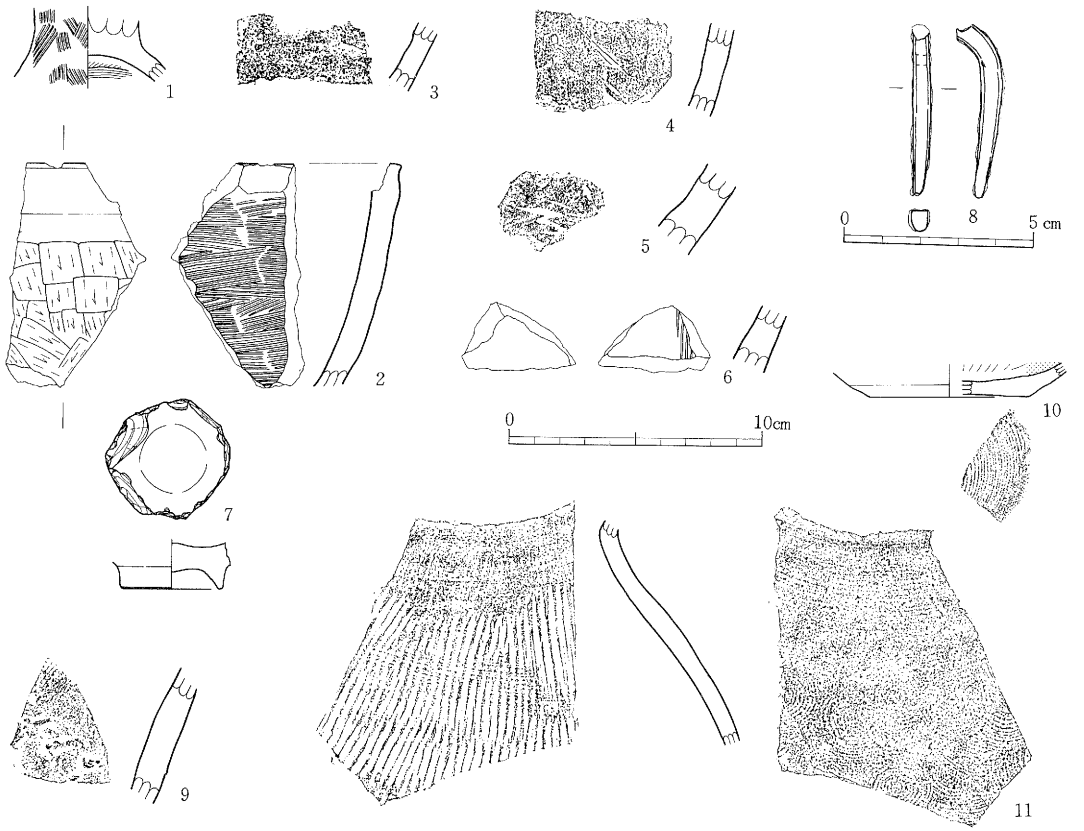
【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の土師器1点のみである。この他に土師器破片9点・須恵器破片5点が出土している。

第35号溝跡（SD 35）

【位置】IV区　N47.8～51　E37.4～43.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。東と西はさらに調査区外に延びている。第36号溝跡と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は



第28号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 高坏	堆1層	ハケメ	ヘラナデ	脚部(上部)	−	−	−	−	C-273
2	須恵器 鉢	堆1層	ロクロナデ・ヘラケズリ	ハケメ	破片	−	−	−	−	E-125

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	陶器 器種不明	堆1層	内外面ともナデ。	−	−	体部破片	−	−	−	−	I-73
4	陶器 壺か甕	堆1層	内外面ともナデ。	常滑	中世	体部破片	−	−	−	−	I-74
5	陶器 鉢	堆1層	内外面ともロクロナデ。	在地	13〜14C	体部破片	−	−	−	−	I-75
6	陶器 擂鉢	堆1層	内外面ともロクロナデ。内面に4本以上の筋目あり。	在地	13〜14C	体部破片	−	−	−	−	I-76
7	白磁 碗	堆1層	高台内は露胎。底部を円形に打ち欠いており、転用品と考えられる。	肥前	17C代	底部のみ	−	4.0	−	85-15	J-7

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
8	鉄製品 釘	堆1層	頭部欠損。頭が折れ曲る 断面・台形に近い角釘	(4.1)	0.5	0.6	(4.9)	100-29	N-51

第29号溝跡

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
9	陶器 甕	堆1層	内外面ともハケメ・ナデ。	常滑	中世	体部破片	−	−	−	−	I-77

第31号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
10	土師器 坏	堆1	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	放射状ヘラミガキ・黒色処理	体〜底部 1/4	−	6.2	−	−	C-274
11	須恵器 甕	堆1	ロクロナデ・平行タタキ目	ロクロナデ・アテ目(同心円文)	体部破片	−	−	−	−	E-126

第198図　第28・29・31号溝跡出土遺物

N－89.5°－Wであり、真北と直交している。確認された長さは6.12mで、上端幅は1.14m、下端幅は32cm、深さは平均57cmである。

【堆積土】7層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、西側から将棋倒し状に堆積している。

【壁・底面】断面形は逆台形に近く、壁は底面から急角度で立ち上がり、その上方で外に開いている。底面はほぼ平坦で、傾斜していない。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の磨面をもつ礫1点のみで、他に土師器破片1点・須恵器破片1点が出土している。

第36号溝跡（SD 36）

【位置】IV区　N42.4～41.7　E39.7～43.3

【確認面・重複】IV層上面で確認された。南側はさらに調査区外に延びている。北側は第35号溝跡に切られており、これより古い。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北より若干西に寄り、N－15.5°－Wである。確認された長さは7.08mで、上端幅は1.08m、下端幅は51cm、深さは平均13cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。IV層のブロック・粒子を多く含むが、人為堆積かどうかは明確ではない。

【壁・底面】断面は皿状をなしており、壁は底面からゆるやかに外方に開いている。底面はほぼ平坦で、わずかに北方向に下がっている。

【出土遺物】出土したのは堆積土出土の弥生土器1点のみである。

第37号溝跡（SD 37）

【位置】V区　N3.6～S2.3　E54～58.7

【確認面・重複】IV層上面で確認されたが、壁面観察によりIII層上面から掘り込まれていることが確認された。溝の一部が検出された。北と南は調査区外に延びている。鍛冶遺構と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行するものと推定され、その方向は真北から東に寄り、N－16°－Eである。確認された長さは5.92mで、上端幅は4.68m、下端幅は60cm、深さは平均1.60mである。

【堆積土】14層確認された。№1層は人為堆積層の可能性が高いが、他は全て自然堆積層と考えられ、いずれも両側から将棋倒し状に堆積している。その中位の層には植物遺体を含む層が認められた。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は皿状の底面からゆるやかに立ち上がり、外方に大きく開いている。

【特記事項】この溝跡はその後の調査で、南側では試掘Bトレンチを介して第2号堀跡と続くことが考えられ、また試掘Fトレンチを介して第69号溝跡に続くことが想定される。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の土師器1点と須恵器4点・剝片石器1点である。その他に土師器破片45点・須恵器破片23点・鉱滓7点・クルミの堅果7点・昆虫遺体多数が出土している。

第38号溝跡（SD 38）

【位置】V区　N0.5～3.2　E60.1～64.3

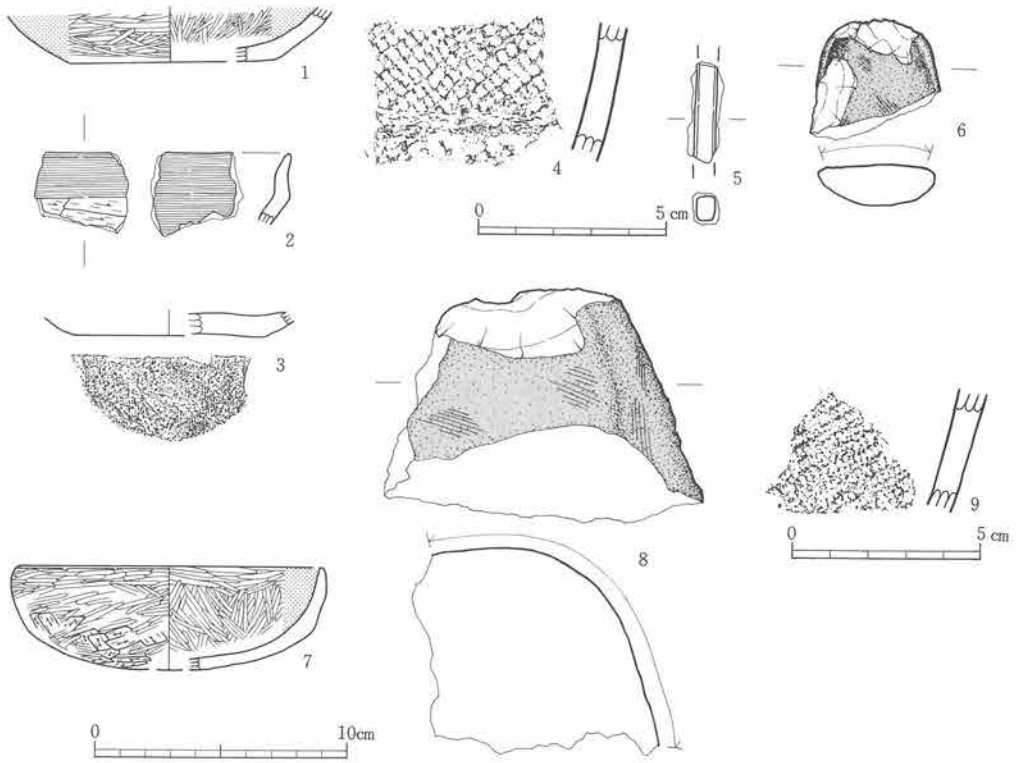
【確認面・重複】IV層上面で確認された。一部は他の遺構によって切られているが、ほぼ全体が検出された。第4号性格不明遺構と重複しており、これより古い。また、第39号溝跡とも重複しており、これより新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向はN－74°－Eである。全長で4.7mで、上端幅は70cm、下端幅は41cm、深さは平均10cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。IV層の小ブロックを含む層である。

【壁・底面】断面は浅い逆台形状をなし、壁は底面からやや急な立ち上がりをしている。

【出土遺物】出土していない。



第33号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ後ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ後ヘラミガキ 黒色処理	体～底部 1/4	－	8.0	－	－	C-275
2	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	口縁部破片	－	－	－	－	C-276a
3	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	底部 1/2	－	－	－	－	C-276b

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	縄文土器 深鉢	堆1層	羽状縄文 LR・RL。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	86-16	地-38

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
5	鉄製品 釘？	堆1層	破片、断面方形の角釘	(2.5)	0.5	0.7	(3.5)	－	N-52

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
6	敲打痕をもつ礫	堆1層	下部欠損。扁平な礫を利用。剝離が上部にあり、磨面が一面に認められる。	(5.0)	4.8	1.8	(50)	安山岩	－	石-122

第34号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	土師器 坏	堆？	ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部 1/2	12.2	－	4.1	73-2	C-277

第35号溝跡

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
8	磨面をもつ礫	堆1層	全体の半分以上が欠損。厚みのある礫を利用。2面に磨面が認められる。	(9.3)	(12.2)	11.8	1,210	安山岩	－	石-115

第36号溝跡

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
9	弥生土器 甕？	堆	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	－	－	－	－	地-9

第199図　第33・34・35・36号溝跡出土遺物

第39号溝跡（SD 39）

【位置】V区　N3.2～S1.7　E63～66

【確認面・重複】IV層上面で確認された。北と南はさらに調査区外に延びている。第38号溝跡・第18号ピット群のいくつかと重複しており、これらより古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向は真北からやや西に寄り、N－11°－Wである。確認された長さは5.60mで、上端幅は86cm、下端幅は63cm、深さは平均15cmである。

【堆積土】2層確認された。自然堆積層とみられるが、水平状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面は浅い逆台形状をなし、壁は平坦な底面からやや急な角度で立ち上がっている。

【出土遺物】出土していない。

第40号溝跡（SD 40）

【位置】IV区　N17.3～19.9　E37.6～43.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。西と東はさらに調査区外に延びている。第39号土坑・第15号ピット群のいくつかと重複しており、前者より古く、後者より新しい。

【方向・規模】検出部分では直線に近いが、わずかに北側にカーブを描く。その方向は真北とほぼ直交し、N－89°－W前後である。確認された長さは6mで、上端幅は1.24m、下端幅は36cm、深さは平均64cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、レンズ状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面形は下方は「U」字形に近く、上方は外に大きく開いている。底面は東方向に下がっている。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の土師器8点・赤焼土器1点・須恵器1点・石核1点である。土師器の坏は底部が回転糸切りで切り離され、その後に再調整が加えられない例が多い。これらの図示資料の他に土師器破片70点・須恵器破片9点が出土している。

第41号溝跡（SD 41）

【位置】IV区　N12.9～15　E37.6～43.5

【確認面・重複】IV層上面で確認されたが、壁面観察により、IIIb層から掘り込まれていることが確認された。溝跡の一部のみが検出され、西端はさらに調査区外に延びている。第15号ピット群のいくつかと重複しており、それらとは新旧両方の関係をもつ。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行するものと考えられ、その方向はN－69°－Wである。確認された長さは5.88mで、上端幅は1.76m、下端幅は64cm、深さは平均71cmである。

【堆積土】7層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、レンズ状の堆積状況を示す層が多い。

【壁・底面】断面形は下方では「U」字形をなすが、上方では外に大きく開いている。底面はほぼ平坦である。

【特記事項】南側の第42号溝跡とほぼ平行して走行しており、両者の関連が想定される。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の土師質土器1点と磨面をもつ礫1点のみで、他に土師器破片34点・須恵器破片7点が出土している。

第42号溝跡（SD 42）

【位置】IV区　N11.8～12.9　E37.6～43.5

【確認面・重複】IV層上面で確認されたが、壁面観察によりIIIb層から掘り込まれていることが確認された。西と東側は調査区外に延びている。重複関係はみられない。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行すると考えられ、その方向はN－72°－Wである。確認された長さは6.04mで、上端幅は84cm、下端幅は32cm、深さは平均31cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層と

考えられ、レンズ状の堆積状況を示す。

【壁・底面】断面形は下方は「U」字形をなし、上方は外方に大きく開いている。底面はほぼ平坦である。

【特記事項】北側の第41号溝跡とほぼ平行して走行しており、両者の関連が想定される。

【出土遺物】図示できるものはないが、堆積土より土師器破片10点・須恵器破片２点が出土している。

第43号溝跡（SD 43）

【位置】Ⅳ区　N8.9～9.4　E37.5～43.5

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。溝の一部が検出され、両側はさらに調査区外に延びている。第15号ピット群の１つと重複しており、それより新しい。すぐ南側には第44号溝跡が走行しているが、調査区内では重複しない。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はN－75°－Wである。確認された長さは約６ｍで、上端幅は40cm、下端幅は14cm、深さは平均８cmである。

【堆積土】２層確認された。ともに自然堆積層とみられ、レンズ状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面は丸底状をなし、壁は底面から明瞭な境をもたずにゆるやかに立ち上がっている。底面は全体的にほぼ平坦である。

【出土遺物】出土していない。

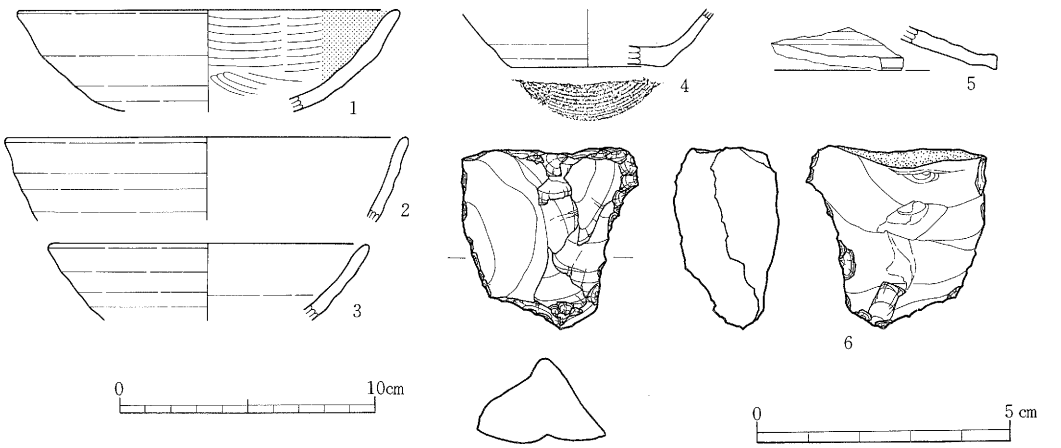
第44号溝跡（SD 44）

【位置】Ⅳ区　N7.3～8.5　E37.6～43.5

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。溝の一部が検出され、両側はさらに調査区外に延びている。重複関係は認められない。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向は真北と直交する方向に近く、N－80.5°－Wである。確認された長さは5.92mで、上端幅は66cm、下端幅は31cm、深さは平均21cmである。

【堆積土】２層確認された。ともに自然堆積層とみ



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量（cm） 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器　坏	堆１層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部　1/6	(15.0)	－	－	－	C-278
2	須恵器　坏	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁　1/8	(15.8)	－	－	－	E-127
3	須恵器　坏	堆３層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁　1/8	(12.6)	－	－	－	E-128
4	須恵器　坏	堆	ロクロナデ・底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	体部下半～底部 1/3	－	6.0	－	－	E-129
5	須恵器　蓋	堆１層	ロクロナデ	ロクロナデ	破片	－	－	－	－	E-130

番号	種別	層位	特徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	写真図版	登録番号
6	剝片石器	堆４層	全体的に摩耗している。縦長の剝片の縁辺に粗雑な二次加工が施されている。	3.7	3.5	1.95	23.4	珪質頁岩	－	石-10

第200図　第37号溝跡出土遺物

られ、レンズ状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は底面からゆるやかに立ち上がりながら、外に開いている。底面はあまり起伏はなく、わずかに東の方向に下がっている。

【出土遺物】出土していない。

第45号溝跡（SD 45）

【位置】VI区　S32.5～34　E27.4～35.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。西側は削平により途中から失われている。第２号堀跡・第21号ピット群のいくつかと重複しており、いずれよりも古い。

【方向・規模】西がN－78°－Wの方向で直線的に走行し、東端ではゆるやかに南側に曲がっている。確認された長さは8.20mで、上端幅は51cm、下端幅は34cm、深さは平均６cmである。

【堆積土】１層のみ確認された。IV層ブロックを多く含む層である。

【壁・底面】削平が大きく及んでいるため明確ではないが、断面形は「U」字形に近いものと推定される。底面は全体的に平坦である。

【出土遺物】図示できるものはなく、わずかに土師器破片が１点出土している。

第46号溝跡（SD 46）

【位置】VI区　S31.4～35.8　E42.6～43.6

【確認面・重複】IV層上面で確認された。溝の一部が検出されたのみで、南側は調査区外に延び、北側は第２号堀跡に切られている。重複する第２号堀跡よりは古く、第62号土坑よりは新しい。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北より若干東に寄り、N－13.5°－Eである。確認された長さは4.20mで、上端幅は88cm、下端幅は44cm、深さは平均27cmである。

【堆積土】４層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、水平状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は皿状の底面からゆるやかに屈曲し、上方に立ち上がっている。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の須恵器１点のみで、他に土師器破片が６点出土しているにすぎない。

第47号溝跡（SD 47）

【位置】VI区　S35.7～37.4　E54.4～59.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。西側はさらに調査区外に延びている。第30号竪穴住居跡、第73・74号土坑などと重複しており、これらより新しい。

【方向・規模】西から直線的に走行し、東方で途切れる。その方向は真北と直交し、N－89°－Eである。確認された長さは5.08mで、上端幅は67cm、下端幅は48cm、深さは平均12cmである。

【堆積土】１層のみ確認された。註記がもれてしまい、層の詳細は不明である。

【壁・底面】断面は浅い逆台形状をなし、壁は平坦な底面からやや明瞭な角度で立ち上がっている。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の土師器１点と須恵器１点で、他に土師器破片35点・須恵器破片17点が出土している。

第48号溝跡（SD 48）

【位置】VI区　S33.3～36.4　E61.8～67.9

【確認面・重複】主にIV層上面で確認された。全体が検出されている。第30号竪穴住居跡・第15号掘立柱建物跡・第49号溝跡と重複しており、これらより新しい。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北と直交する方向に近く、N－84°－Eである。長さは6.52mで、上端幅は1.21m、下端幅は33cm、深さは平均32cmである。この遺構は溝跡としたが、

長さが短いことから土坑に含めるべきだったかもしれない。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、層中には焼土粒が含まれている。

【壁・底面】断面は丸底状を示すが、壁・底面とも一定せず、段や起伏がみられる。

【出土遺物】堆積土から多くの遺物が出土した。図示できたのは土師器4点・赤焼土器1点・須恵器8点である。須恵器の坏では底部切り離しが回転糸切りと回転ヘラ切りがあり、再調整もあるものとないものとがある。これらの図示資料の他に土師器破片78点・須恵器破片31点・とりべ1点（写真89－16）などが出土している。

第49号溝跡（SD 49）

【位置】VI区　S34.8～38.2　E66.3～67.2

【確認面・重複】IV層上面で確認された。削平が大きく及んでいるが、南側はさらに調査区外に延びる。第79号土坑と第48号溝跡と重複しており、これらより古い。

【方向・規模】検出部分では直線状に走行しており、その方向はN－12°－Eである。確認された長さは3.50mで、上端幅は64cm、下端幅は44cm、深さは平均7cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。IV層ブロックを多く含む層である。

【壁・底面】断面は皿状をなし、壁は底面からゆるやかに立ち上がる。壁・底面とも一定せず、起伏がみられる。

【出土遺物】出土していない。

第50号溝跡（SD 50）

【位置】VI区　S32.3～35.3　E61.5～66.4

【確認面・重複】IV層上面および第30号竪穴住居跡の堆積土上面で確認された。したがって第30号竪穴住居跡より新しく、また重複する第3号堀跡より古く、第75・89号土坑より新しい。

【方向・規模】北側は調査区外に延びており、溝跡になるものと想定したが、あるいは土坑に含められるべき遺構かもしれない。不整な形状をしており、確認された長さは5.6m、同じく幅は2.12mで、深さは最深で48cmである。

【堆積土】4層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、北側の方に向かって水平状に堆積している。

【壁・底面】断面形はおおむね逆台形をなし、壁は平坦な底面からやや急な立ち上がりをして外に開いている。

【出土遺物】堆積土から比較的多くの遺物が出土した。その中で図示できたのは土師器1点・須恵器6点・鉄鏃1点である。この他に土師器破片133点・須恵器破片35点・とりべ1点（写真89－18）が出土している。

第51号溝跡（SD 51）

【位置】VI区　S30.7～33　E9.9～10.9

【確認面・重複】第1号堀跡の南壁の平坦面で溝の一部が確認された。南はさらに調査区外に延び、北は第1号堀跡に切られている。

【方向・規模】直線状に走る溝跡と推定され、その方向はN－29°－Eである。確認された長さは2.32mで、上端幅は57cm、下端幅は27cm、深さは平均25cmである。

【堆積土】2層確認された。ともに自然堆積層と考えられ、レンズ状の堆積状況を示す。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は皿状をなす底面からゆるやかに屈曲し、外に開いている。

【出土遺物】図示できるものはないが、土師器破片21点・須恵器破片2点が出土している。

第52号溝跡（SD 52）

【位置】VI区　S29.5～33.5　E1.3～3.2

【確認面・重複】IV層上面で確認された。一部が検

出されたのみで、南は調査区外に延び、北は第2号堀跡に切られている。

【方向・規模】検出部分では直線的に走行しており、その方向はちょうど真北方向を向き、N－0.5°－Eである。確認された長さは4.12mで、上端幅は1.20m、下端幅は31cm、深さは平均62cmである。

【堆積土】7層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、西側から将棋倒し状に堆積している。

【壁・底面】断面形は下方は「U」字形に近く、上方は外に大きく開いて立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

【出土遺物】堆積土から多くの遺物が出土した。その中で図示できたのは土師器10点・須恵器9点・弥生土器4点である。土師器の坏の中でロクロで製作されたものは底部切り離しが回転糸切りによるものである。須恵器の坏は底部切り離しが回転糸切りによるものと、回転ヘラ切りによるものがあり、その後の再調整が加えられるものと加えられないものとがみられる。これらの図示資料の他に土師器破片178点・須恵器破片28点が出土している。

第53号溝跡（SD 53）

【位置】VI区　S29.1～33.1　W5.2～6.5

【確認面・重複】IV層上面で確認されたが、断面の観察でIII層上面から掘り込まれていることがわかった。北は第2号堀跡に切られており、それより古い。また、第86号土坑と第24号溝状遺構などとも重複しており、前者より古く、後者より新しい。

【方向・規模】検出部分では北からほぼ直線的に走行し、南方で途切れる。その方向は真北方向とほぼ一致し、N－1.5°－Eである。確認された長さは4.12mで、上端幅は49cm、下端幅は24cm、深さは平均22cmである。

【堆積土】2層確認された。ともに自然堆積層とみられ、レンズ状の堆積状況を示す。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなし、壁は皿状の底面から明瞭な境をもたずにゆるやかに立ち上がっている。底面は平坦で、わずかに北方向に下がっている。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の土師器1点・赤焼土器1点である。この他に土師器破片19点・須恵器破片6点が出土している。

第54号溝跡（SD 54）

【位置】VII区　S61.3～64.3　W16.4～18.8

【確認面・重複】IV層上面で確認された。この付近はIV層上面が南側に下がる緩斜面となっている。検出されたのは溝の一部で、東と西はさらに調査区外に延びている。第1号堀跡と重複しており、それより古い。

【方向・規模】検出部分では緩斜面の方向とほぼ直交して走行しており、その方向はN－54°－Wである。確認された長さは3.66mで、上端幅は1.83m、下端幅は40cm、深さは平均56cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、土性はこの付近のIV層と同じく粗砂である。

【壁・底面】断面は下方が皿状をなし、北壁ではその途中からさらに大きく開いて立ち上がっている。

【出土遺物】出土していない。

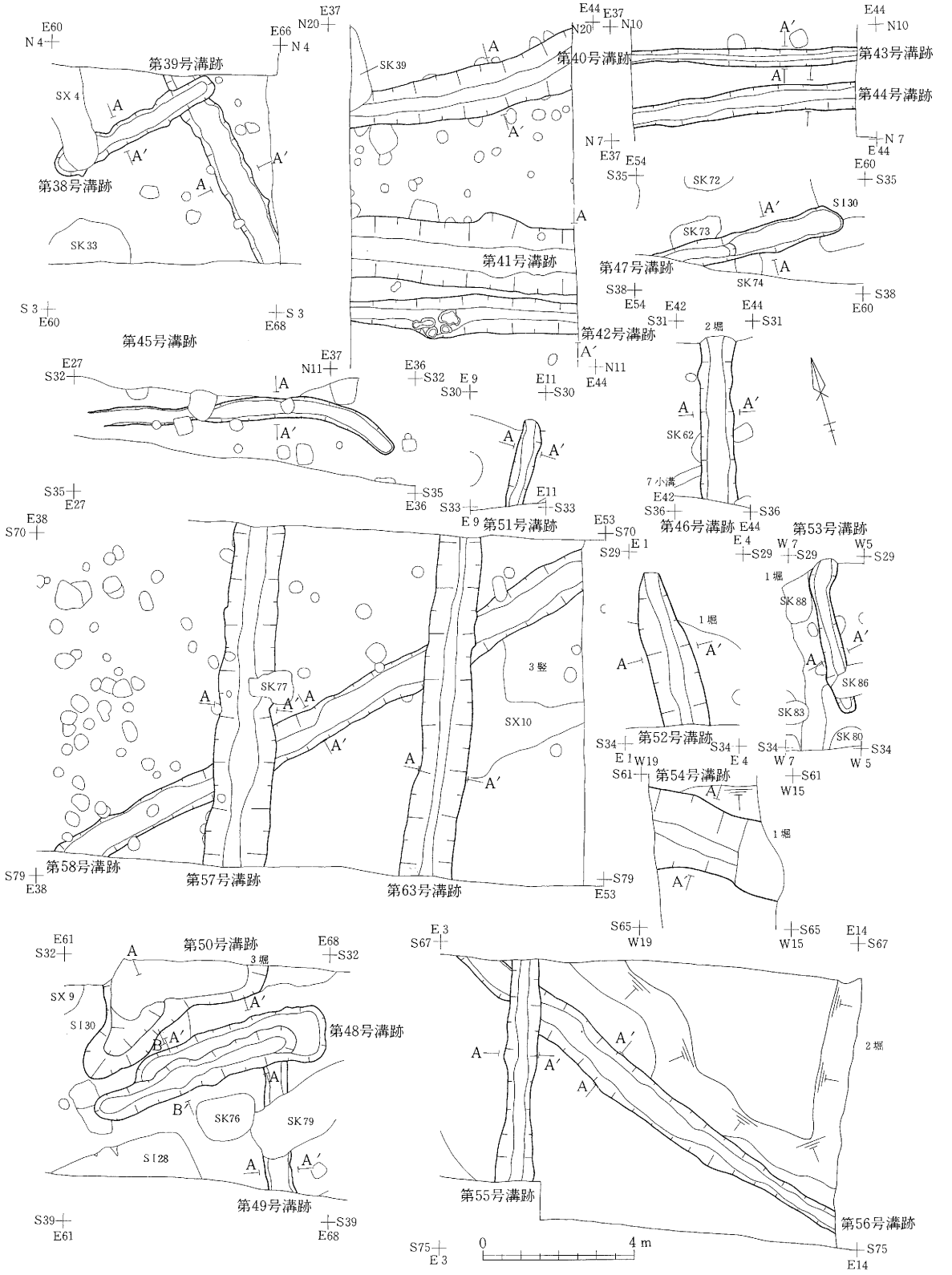
第55号溝跡（SD 55）

【位置】VII区　S67.4～73.3　E4.4～5.6

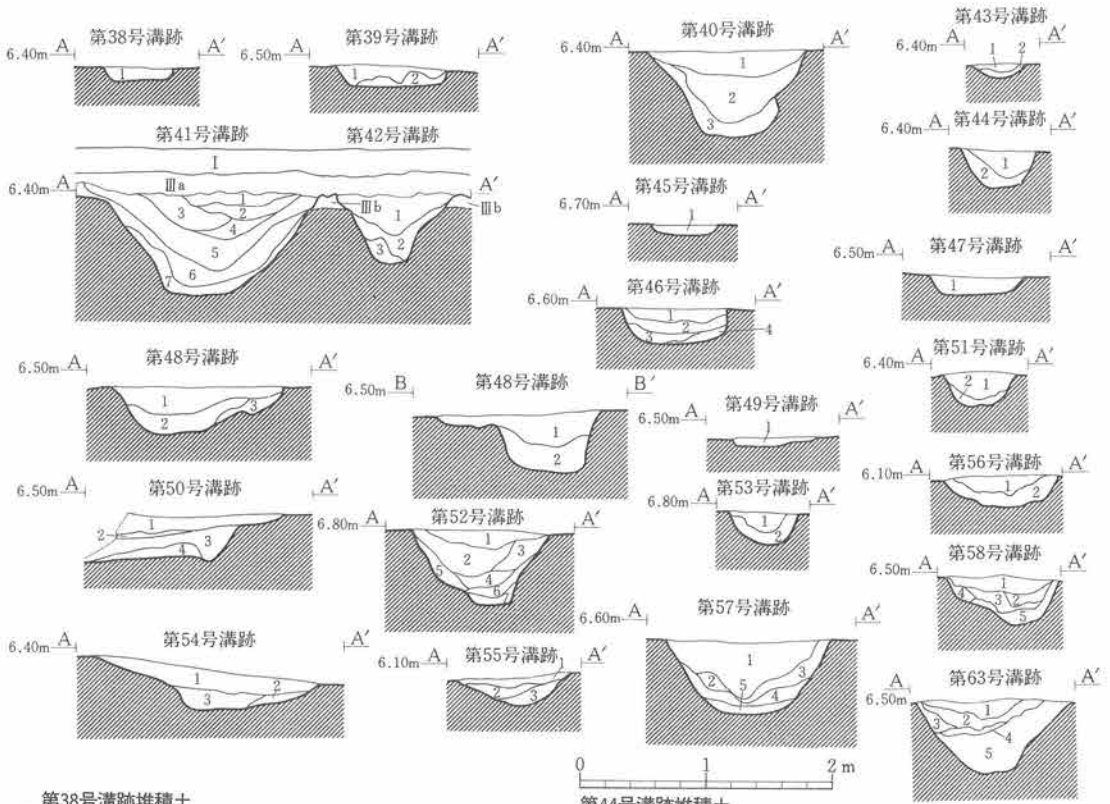
【確認面・重複】IV層上面で確認された。両側はさらに調査区外に延びる。この付近のIV層上面は緩斜面を経て一段下がっている。また、河川跡に極めて近い地点である。第56号溝跡と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北より東に寄り、N－17.5°－Eである。確認された長さは5.80mで、上端幅は84cm、下端幅は32cm、深さは平均29cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層で、



第201図　第38～58・63号溝跡平面図



第38号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層小ブロックを全体に含む。	1

第39号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層小ブロックを少量含む。	1
2	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	IV層小ブロックを少量含む。	2

第40号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	3

第41号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層粒子をわずかに含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	IV層粒子を全体に多量に含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層粒子をわずかに含む。	3
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層粒子を多く含む。	4
5	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子をわずかに含む。	5
6	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子を全体的に多く含む。	6
7	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	7

第42号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子・酸化鉄の斑紋をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子を全体に多く含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層のブロック・粒子を多量に含む。	3

第43号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	層中にまばらにIV層ブロック・粒子が混じる。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	層中にまばらにIV層ブロックが多量に混じる。	2

第44号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	層中にまばらにIV層ブロック・粒子が混じる。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	層中にまばらにIV層ブロック・粒子が混じる。	2

第45号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒色 (10YR2/1)	砂質シルト	IV層ブロックを全体に含む。	1

第46号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト		1
2	黒褐色 (10YR2/1)	砂質シルト	炭化物粒をわずかに含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層小ブロックを全体に含む。	3
4	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト		4

第48号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒・焼土粒をわずかに含む。	1
2	褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒・焼土粒をわずかに含む。IV層小ブロックを全体に含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	酸化鉄の斑紋を全体に含む。	3

第49号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層ブロックを全体に多量に含む。	1

第50号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒・焼土粒をわずかに含む。	1
2	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	砂質シルト	炭化物粒をわずかに含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物粒・焼土粒をわずかに含む。	3
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	IV層ブロックを少量含む。	4

第202図　第38～58・63号溝跡セクション図

第51号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	にぶい黄褐色粒子を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/5)	シルト	にぶい黄褐色土・酸化鉄の斑紋をまばらに含む。	2

第52号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	1層より暗く、炭化物を少量含む。	
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層をまばらに含む。	
4	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物をわずかに含む。	2
5	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロックを含む。	
6	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを含む。	
7	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロックを含む。	

第53号堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	焼土・炭化物を少量含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	IV層ブロックを含む。	2

第54号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	粗砂	酸化鉄斑紋を多量に含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/4)	粗砂	IV層ブロックを含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/4)	粗砂	IV層粒子をまばらに含む。	3

第55号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	細砂	酸化鉄斑紋を帯状に含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	細砂	酸化鉄斑紋を粒状に含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	IV層ブロックを含む。	3

第56号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	粗砂	酸化鉄斑紋を粒状に多量に含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	粗砂	IV層ブロックを含む。	2

第57号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (7.5Y3/2)	シルト	IV層粒子・炭化物をまばらに含む。	1
2	黒褐色 (7.5Y3/2)	砂質シルト	IV層ブロック(細砂)を含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層粒子、1層よりも多く含む。	3
4	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	IV層ブロック・酸化鉄斑紋を多量に含む。	4
5	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	5

第58号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	炭化物・焼土をわずかに含む。	1
2	褐色 (10YR4/4)	細砂	酸化鉄の斑紋をわずかに含む。	2
3	黒褐色 (7.5Y3/2)	砂質シルト	焼土粒をわずかに含む。	3
4	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	IV層ブロックを含む。	4
5	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層粒子・酸化鉄斑紋をまばらに含む。	5

第63号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	IV層を多量に含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層粒子・炭化物をわずかに含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	IV層ブロックを含む。	3
4	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層を多量に含む。	4
5	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層ブロックを多く含む。酸化鉄斑紋をまばらに含む。	5

将棋倒し状の堆積状況を示す。

【壁・底面】断面は皿状をなし、壁は底面から明瞭な境をもたずにゆるやかに立ち、大きく外に開いている。

【出土遺物】図示できるものはなく、土師器破片6点・赤焼土器破片1点・須恵器破片2点が出土している。

第56号溝跡（SD 56）

【位置】Ⅶ区　S67.4～74.6　E3.4～13.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。この地点はIV層上面が南側に下がる緩斜面に近い。北西はさらに調査区外に延び、南東は第2号堀跡に切られている。第55号溝跡とも重複しており、これより古い。

【方向・規模】緩斜面に沿ってほぼ直線的に走行しており、その方向はN－38°－Wである。確認された長さは12.40mで、上端幅は96cm、下端幅は46cm、深さは平均25cmである。

【堆積土】2層確認された。ともに自然堆積層とみられ、レンズ状の堆積状況を示す。

【壁・底面】断面は丸底状をなし、壁は底面から明瞭な境をもたずに移行し、外に大きく開いて立ち上がっている。底面は平坦ではなく、起伏がみられる。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の打ち欠き痕のある土師器片1点である。この他に土師器破片2点・須恵器破片1点・クルミの堅果3点が出土

している。

第57号溝跡（SD 57）

【位置】Ⅶ区　S69.7～78.8　E42.4～44.5

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。南側はさらに調査区外に延びるが、北は試掘Dトレンチにおける確認調査で、さらに約5 mほど延びて途切れることがわかった。第58号溝跡と重複しており、これより新しい。また、第77号土坑・第23号ピット群のいくつかとも重複しており、前者より古く、後者とは新旧両方の関係をもつ。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北から東により、N－20°－Eである。確認された長さは試掘トレンチの分も含めて約14mで、上端幅は1.47m、下端幅は45cm、深さは平均54cmである。

【堆積土】5層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、土性はこの付近のⅣ層と同じく砂質シルトである。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近いが、壁は外方にやや開きぎみに立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、全体的にはわずかに南の方向に下がっている。

【出土遺物】堆積土中から若干の遺物が出土した。その中で図示できたのは須恵器1点・陶器1点・青磁1点・縄文土器5点・弥生土器2点・打ち欠き痕のある土師器片1点・剝片石器1点である。陶器は唐津産の埦と考えられる。青磁は中国龍泉窯系の製品とみられ、内面に飛雲文が認められる。これらの図示資料の他に土師器破片80点・須恵器破片13点・鉱滓1点が出土している。

第58号溝跡（SD 58）

【位置】Ⅶ区　S70.4～78.5　E38.5～52.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。西はさらに調査区外に延びており、東は撹乱により失われている。第57・63号溝跡と重複しており、これらよりは古い。また、第23号ピット群のいくつかと重複しており、それらとは新旧両方の関係をもつ。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はN－76°－Eである。確認された長さは約16mで、上端幅は95cm、下端幅は57cm、深さは平均20cmである。

【堆積土】5層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、西側から流入している。

【壁・底面】壁・底面とも一定しておらず、起伏がみられるが、全体的にはほぼ平坦である。壁は皿状の底面からゆるやかに立ち上がり、外に大きく開いている。

【出土遺物】図示できた遺物は堆積土出土の土師器1点・弥生土器3点・縄文土器1点などである。その他に土師器破片 125点・須恵器破片17点・鉱滓1点が出土している。

第59号溝跡（SD 59）

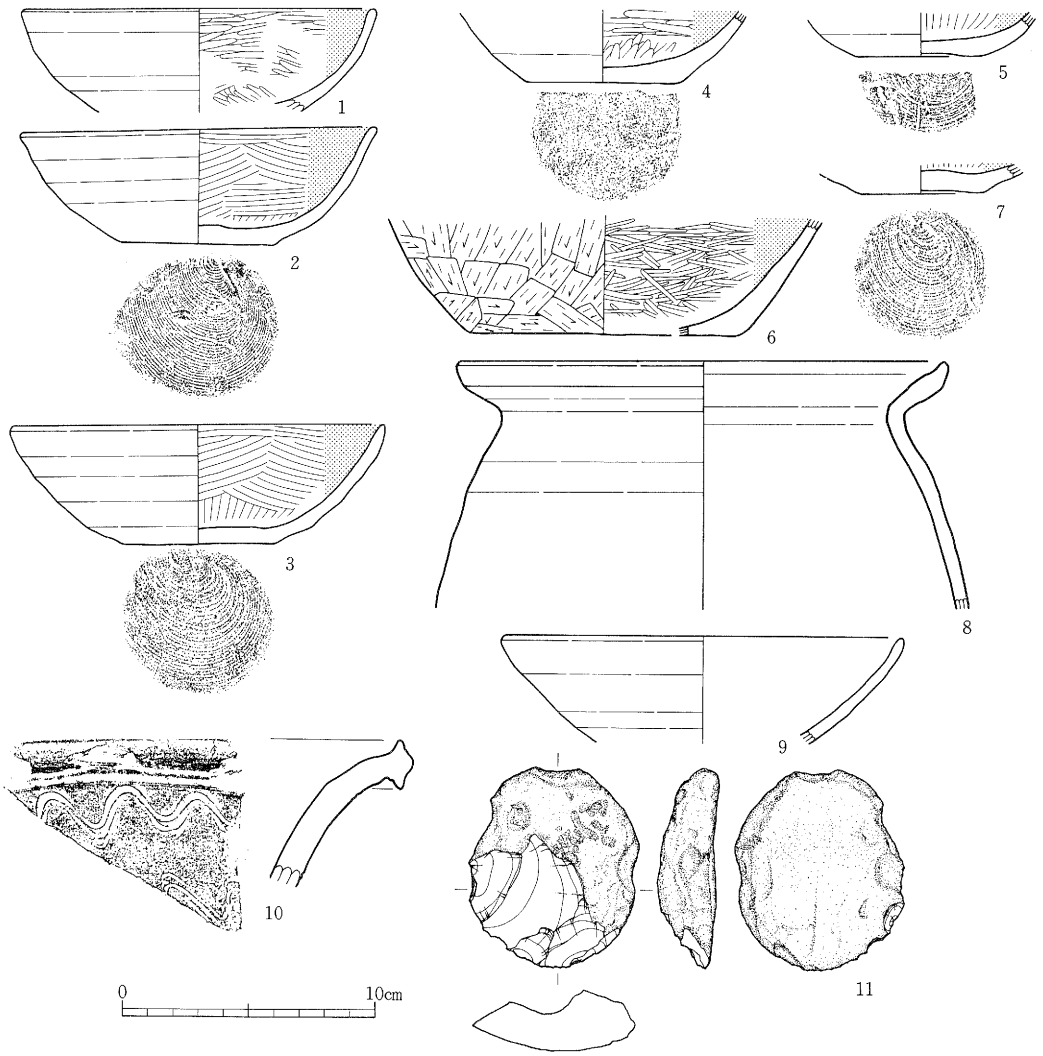
【位置】Ⅶ区　S70.8～76.2　E64.8～68.6

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。北はさらに調査区外に延び、試掘Kトレンチで確認したところ、北へ5.6m続いた地点で途切れるようである。南は第61号溝跡に切られており、したがってそれより古い。また、第24号ピット群のいくつかと新旧両方の関係をもつ。

【方向・規模】南からほぼ直線的に走行し、北方で途切れる。その方向は真北から若干東に寄り、N－16.5°－Eである。確認された長さは5.12mであるが、試掘Kトレンチまで延びることから、10m以上の長さをもつものといえる。上端幅は約3.60m、下端幅は47cm、深さは平均1.15mである。

【堆積土】11層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、両側から将棋倒し状に堆積している。中位の層には植物遺体が含まれ、下位の層はグライ化している。

【壁・底面】断面形は下方が角がやや丸味をもつ逆台形をなし、壁は平坦な底面から屈曲し、直線的に



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部 1/4	14.0	—	—	—	C-279
2	土師器 坏	堆3層 堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部 1/2 体～底部 1/1	14.2	6.0	4.5	74-6	C-280
3	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部 1/2 体～底部 1/1	14.8	6.0	4.7	74-7	C-281
4	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	体～底部 1/4	—	6.0	—	—	C-282
5	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	体～底部一部	—	(5.0)	—	—	C-283
6	土師器 坏	堆1層	ヘラケズリ 底部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	体～底部一部	—	(10.6)	—	—	C-284
7	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	底部全体	—	5.0	—	—	C-285
8	土師器 甕	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部 1/4	19.5	—	—	—	C-286
9	赤焼土器 坏	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部 1/8	(14.4)	—	—	—	赤-4
10	須恵器 甕	堆1層	ロクロナデ。波状の櫛描文	ロクロナデ	口縁部破片	—	—	—	—	E-131

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
11	石核	堆2層	扁平な礫を素材としている。 その縁辺の一部に多方向から打撃を加え剝離している。	8.0	6.8	2.4	137	珪質頁岩	95-15	石-23

第203図　第40号溝跡出土遺物

外傾し、その上方ではさらに外方に大きく開いている。

【特記事項】試掘Dトレンチで確認したところ、この溝跡の約80cm西側で、第3号堀跡から続くとみられる堀跡が完結している。その位置関係や方向性などから相方は関連する遺構であることが考えられる。

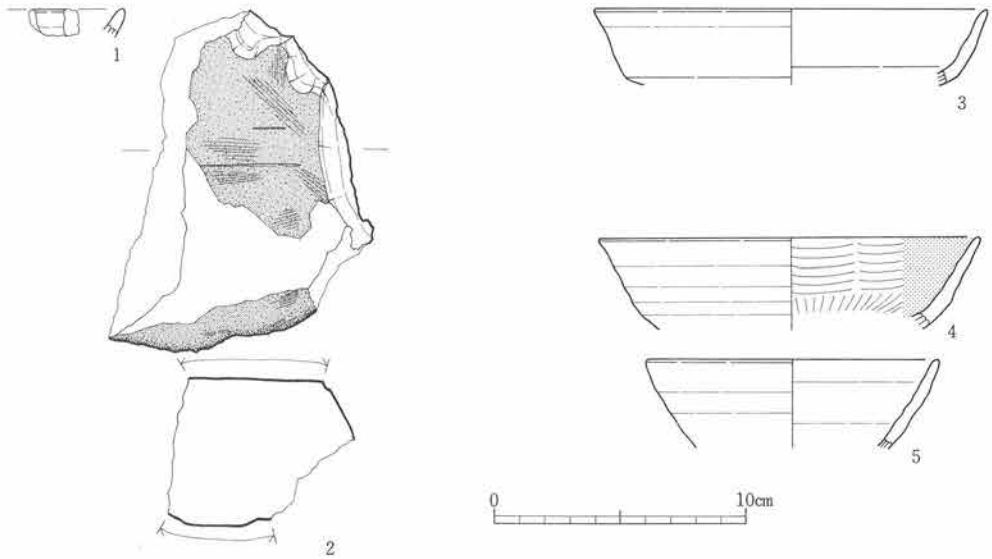
【出土遺物】堆積土から若干の遺物が出土した。図示できたのは土師器1点・須恵器1点・陶器2点・石匙1点・石臼1点・磨面をもつ礫3点である。陶器は常滑と渥美の製品で鎌倉時代のものと考えられる。この他に土師器破片85点・須恵器破片18点・鉱滓12点が出土している。

第60号溝跡（SD 60）

【位置】Ⅶ区　S71.7～77.2　E78～84.6

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。一部は撹乱によって失われている。北はさらに調査区外に延び、東は緩斜面からさらに下がった地点で途切れている。重複関係は認められない。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はN－31.5°－Wである。確認された長さは8.20mで、上端幅は62cm、下端幅は20cm、深さは平均22cmである。



第41号溝跡

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師質土器 皿	堆1層	内外面もロクロナデ。白針わずかに含む。	－	－	口縁部破片	－	－	－	－	I-78

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
2	磨面をもつ礫	堆1層	側面の大部分が欠損。上部に剥離があり。上下2面に磨面認められる。	(13.6)	(9.6)	(5.9)	(950)	安山岩	－	石-113

第46号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	須恵器 坏	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部 1/8	(15.5)	－	－	－	E-132

第47号溝跡

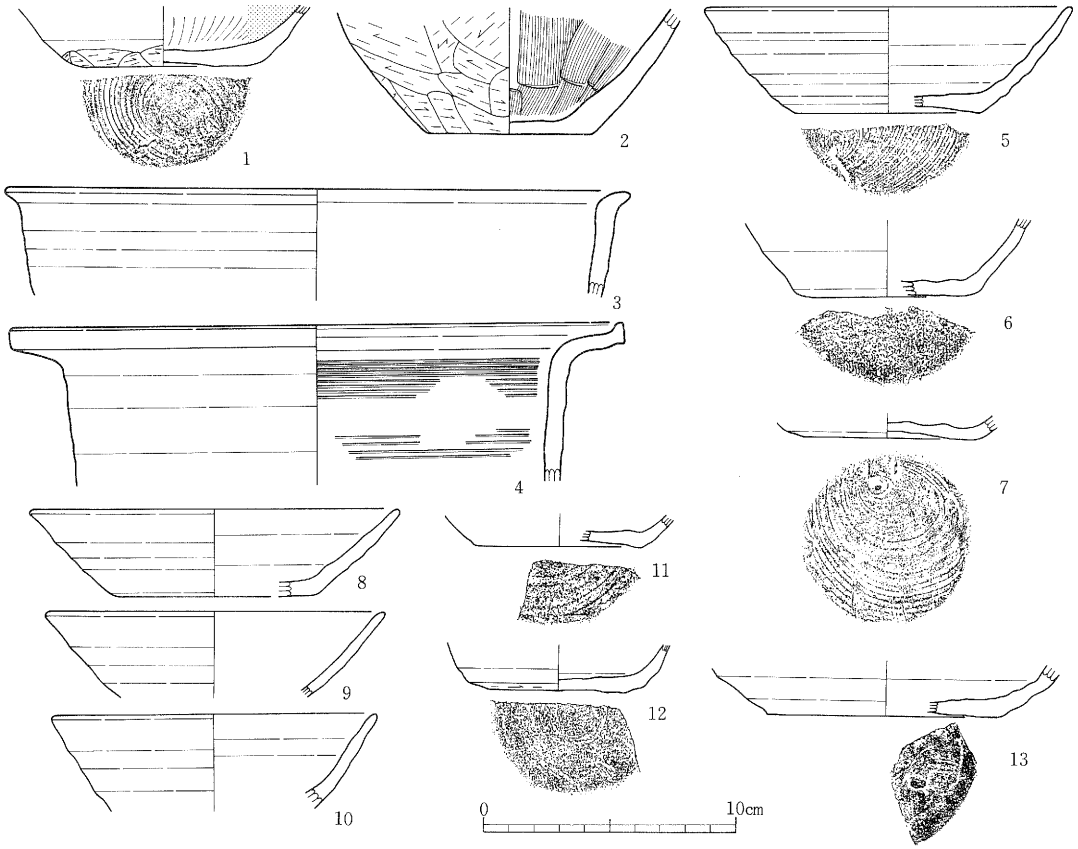
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	土師器 甕	堆	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部 1/8	(15.2)	－	－	－	C-287A
5	須恵器 坏	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部 1/4	11.6	－	－	－	E-133

第204図　第41・46・47号溝跡出土遺物

【堆積土】2層確認された。ともに自然堆積層とみられ、水平状に堆積している。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は底面からゆるやかに立ちながら、外方に開いている。

【出土遺物】堆積土から若干の遺物が出土した。図示できたのは土師器2点・須恵器1点・石臼2点・古銭6点である。石臼の2点は同一個体と考えられる。古銭は6枚が付いたまま出土しており、本来は紐によりまとめられた刺銭の一部であった可能性も考えられる。これらの図示資料の他に、土師器破片



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部回転糸切り・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	底部 1/2	—	6.4	—	—	C-287B
2	土師器 甕	堆	ヘラケズリ・底部ナデ	ヘラナデ	体～底部	—	6.6	—	—	C-288
3	土師器 鉢	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/8	(24.6)	—	—	—	C-289
4	土師器 甕	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ・カキ目	口縁部 1/8	(24.2)	—	—	—	C-290
5	赤焼土器 坏	堆	ロクロナデ・底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	口縁～底部 1/3	14.4	7.2	4.2	—	赤-5
6	須恵器 坏	堆	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	体～底部 1/2	—	6.3	—	—	E-134
7	須恵器 坏	堆	ロクロナデ・底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	底部全体	—	6.6	—	—	E-135
8	須恵器 坏	堆	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	口縁～底部 1/8	(14.5)	(8.2)	3.4	—	E-136
9	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部	(13.4)	—	—	—	E-137
10	須恵器 坏	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部 1/6	(12.8)	—	—	—	E-138
11	須恵器 坏	堆	ロクロナデ・底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	底部 ¼	—	7.0	—	—	E-139
12	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・再調整回転ヘラケズリ	ロクロナデ	底部 ½	—	5.5	—	—	E-140
13	須恵器 坏	堆	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・再調整わずかな手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	底部 ⅙	—	(9.2)	—	—	E-141

第205図　第48号溝跡出土遺物

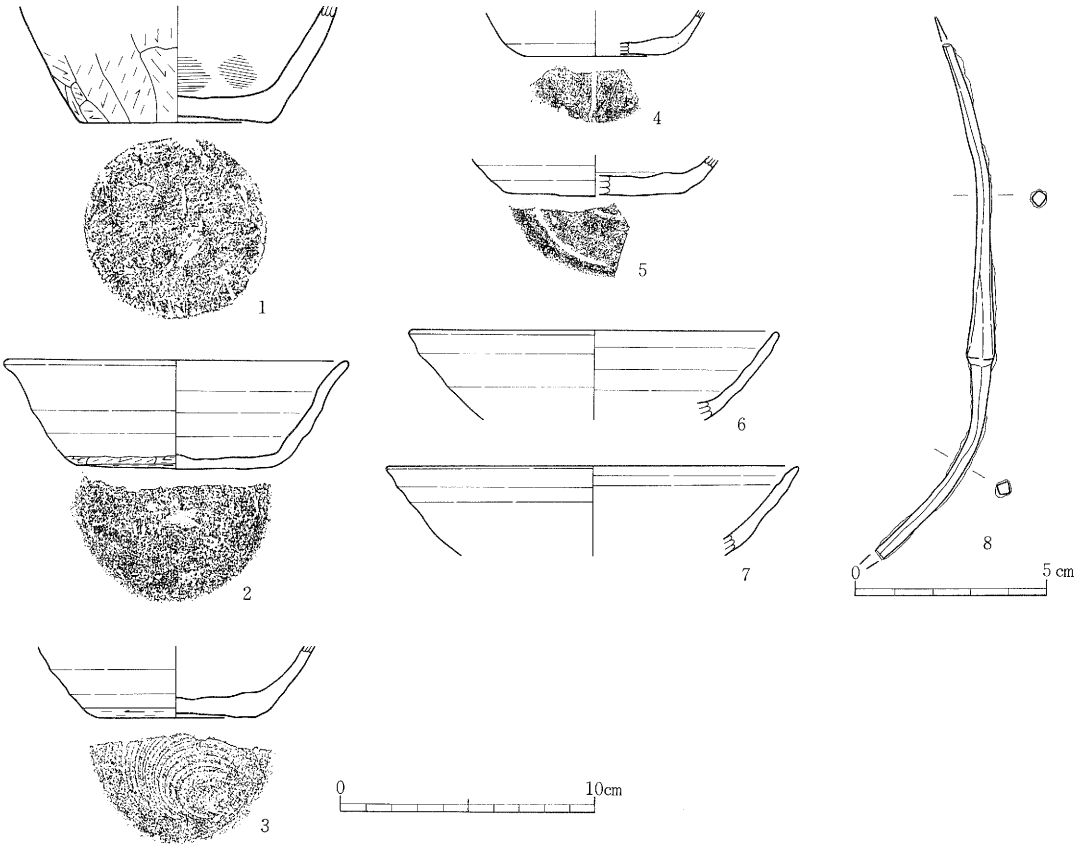
67点・須恵器破片17点・鉱滓１点が出土している。

第61号溝跡（SD 61）

【位置】Ⅶ区　S72.1～81.3　E58～87.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。この付近のⅣ層上面は緩斜面を経て南に高さを減じている。南はさらに調査区外に延び、北は試掘Ｍトレンチまで長く続くことが確認された。また、東は最終的には第77号溝跡とつながることが判明した。第59号溝跡・第93号土坑と重複しており、前者より新しく、後者より古い。

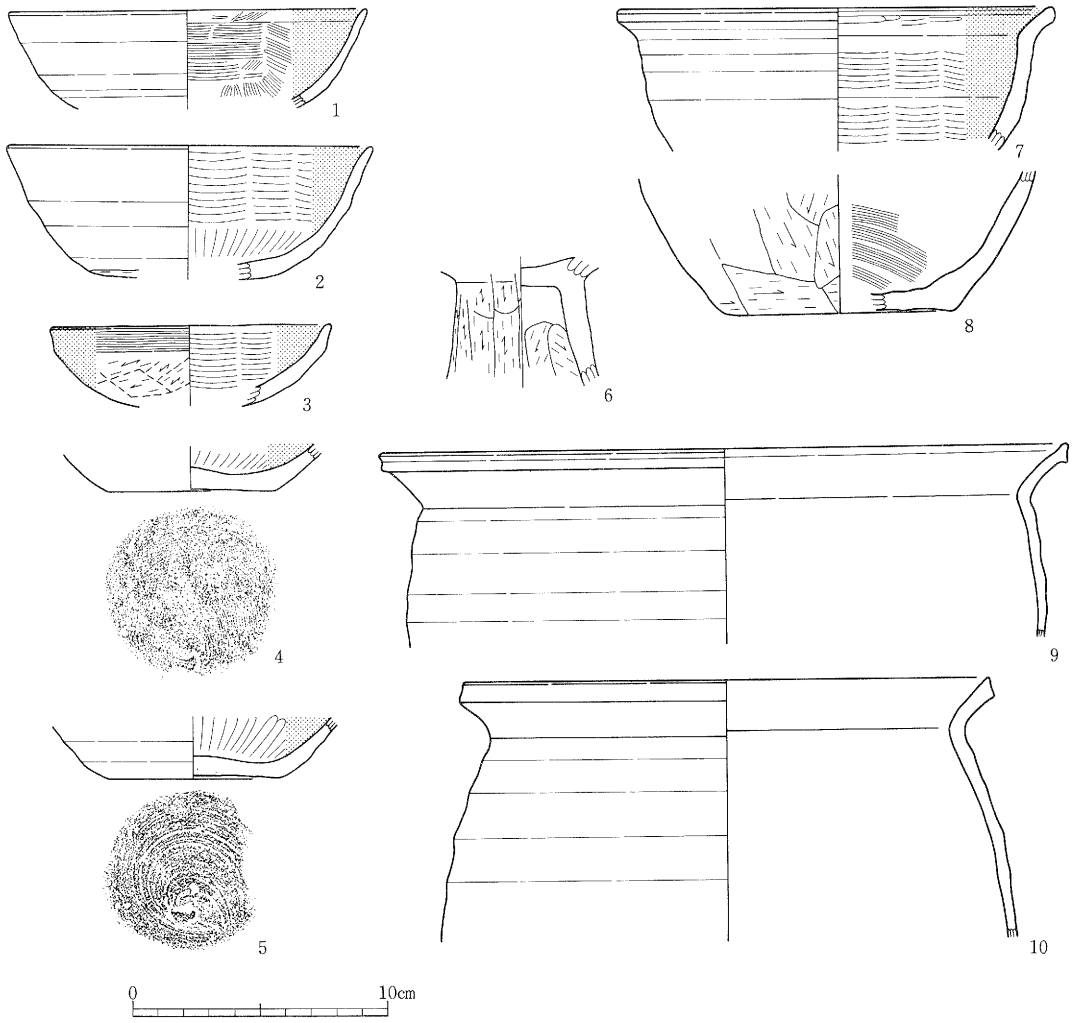
【方向・規模】南側は不明だが、検出部分では南東部で屈曲し、東西方向は北側に大きく入り込み、ゆるやかなカーブを描いている。南北方向は直線的に



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量（cm） 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器　甕	堆	ロクロナデ・ヘラケズリ・底部静止糸切り・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ・ナデの再調整	体～底部	－	7.5	－	－	C-291
2	須恵器　坏	堆	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ再調整	ロクロナデ	口縁～底部　1/4	13.6	8.0	4.2	79-9	E-142
3	須恵器　坏	堆	ロクロナデ・底部回転糸切り・回転ヘラケズリ再調整	ロクロナデ	体～底部　1/2	－	6.2	－	－	E-143
4	須恵器　坏	堆	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	底部　1/6	－	(5.6)	－	－	E-144
5	須恵器　坏	堆	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	底部	－	(7.3)	－	－	E-145
6	須恵器　坏	堆3層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部　1/6	(14.6)	－	－	－	E-146
7	須恵器　坏	堆3層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部　1/8	(16.4)	－	－	－	E-147

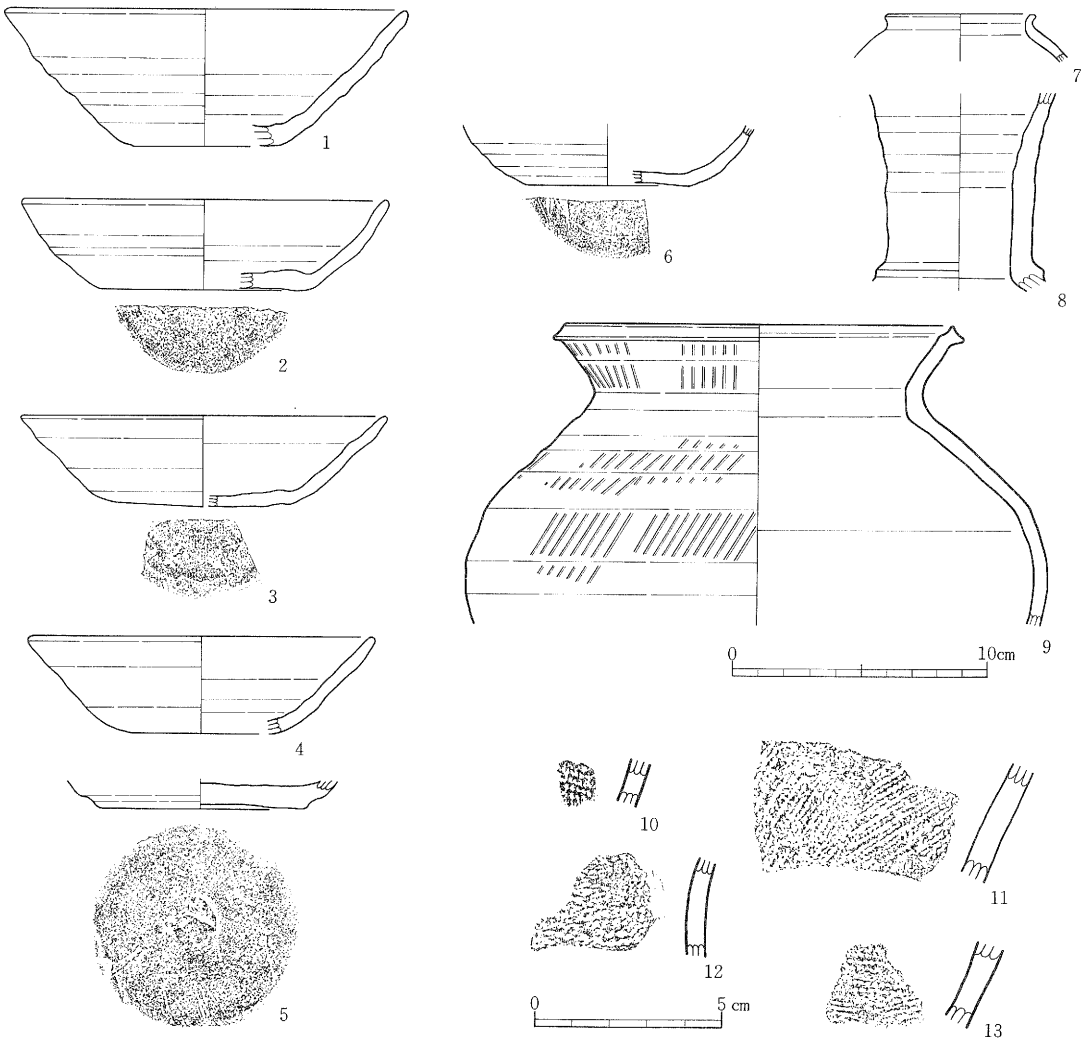
番号	種別	層位	特徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	写真図版	登録番号
8	鉄製品　鉄鏃	堆	鏃身と茎の先が欠損。先細形である。身の先端と茎の断面は方形に近い。	(14.3)	0.3	0.3	(10.8)	100-14	N-53

第206図　第50号溝跡出土遺物



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部 1/2	14.0	—	—	—	C-292
2	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部 1/6	(14.4)	—	—	—	C-293
3	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部 1/6	(11.0)	—	—	—	C-294
4	土師器 坏	堆1層	底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	底部 1/1	—	6.9	—	—	C-295
5	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	底部 1/1	—	6.6	—	—	C-296
6	土師器 高坏	堆1層	ヘラケズリ	ヘラケズリ	脚部上半	—	—	—	—	C-297
7	土師器 甕	堆2層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部 1/6	(17.2)	—	—	—	C-298
8	土師器 甕	堆1層	ヘラケズリ・底部切り離し不明	指頭によるナデ	体～底部 1/5	—	9.0	—	—	C-299
9	土師器 甕	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部 1/8	(27.2)	—	—	—	C-300
10	土師器 甕	堆2層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部 1/4	20.8	—	—	—	C-301

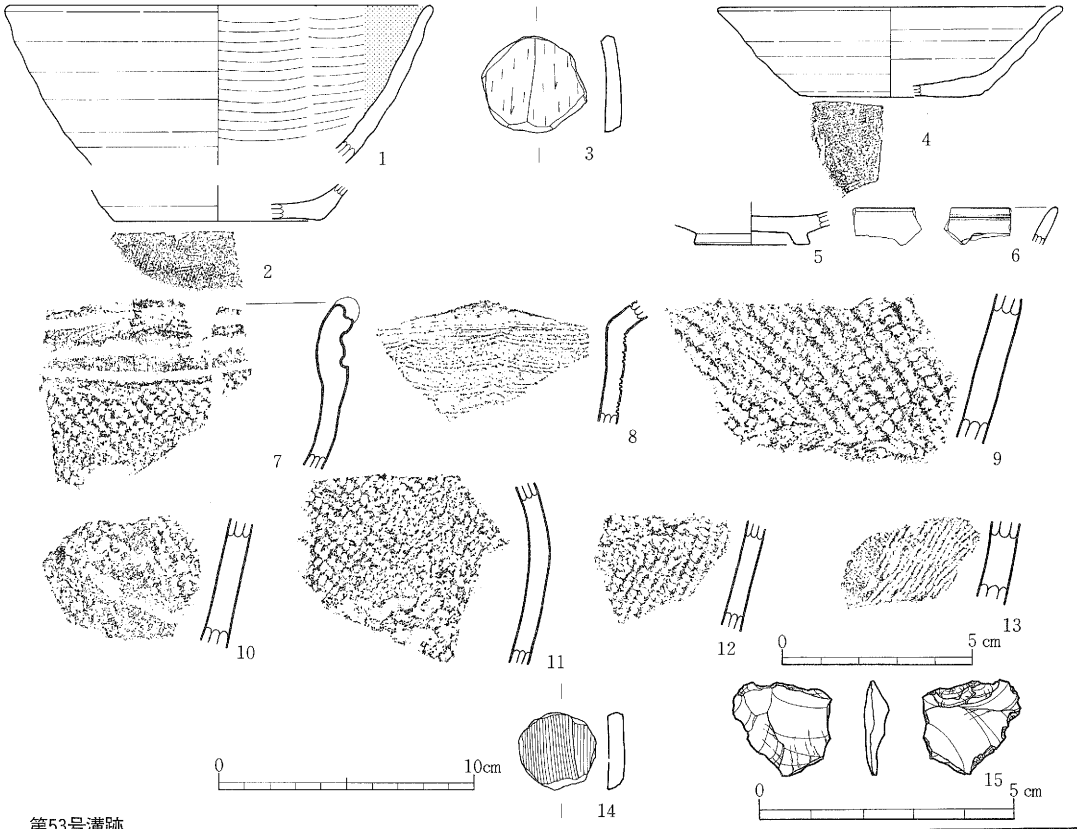
第207図　第52号溝跡出土遺物（1）



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整不明	ロクロナデ	口縁～底部 1/4	15.8	5.8	5.4	—	E-148
2	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・再調整手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口縁～底部 1/4	14.5	8.7	3.5	—	E-149
3	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	口縁～底部 1/10	(14.4)	(7.5)	(3.6)	—	E-150
4	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～底部 1/8	(13.7)	—	—	—	E-151
5	須恵器 坏	堆2層	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・再調整手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	底部のみ	—	8.2	—	—	E-152
6	須恵器 坏	堆2層	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	体～底部 1/6	—	(6.6)	—	—	E-153
7	須恵器 壺	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/6	(6.0)	—	—	—	E-154
8	須恵器 壺	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	頸部のみ	—	—	—	—	E-155
9	須恵器 甕	堆1層	ロクロナデ・平行タタキ目	ロクロナデ	口縁～底部 1/2	15.2	—	—	80-5	E-156

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
10	弥生土器 甕？	堆1層	撚糸文 L。	体部破片	—	—	—	—	地-47
11	弥生土器 甕？	堆2層	撚糸文 R。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	88-24	地-48
12	弥生土器 甕？	堆2層	撚糸文 R。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	—	地-49
13	弥生土器 甕？	堆2層	撚糸文 R。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	—	地-50

第208図　第52号溝跡出土遺物（2）



第53号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部 1/4	16.8	—	—	—	C-302A
2	赤焼土器 坏	堆	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	底部 1/6	—	(8.2)	—	—	赤-6

第56号溝跡

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
3	打ち欠き痕のある土師器片	堆1層	甕の体部破片の周辺を打ち欠いている。外面はヘラケズリ・内面はヘラナデ。白針含む。	3.8	4.0	0.6	11.4	—	94-9	土-61

第57号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・再調整手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	口縁～底部 1/6	(13.6)	(7.2)	(3.6)	—	E-157

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
5	陶器 塊	堆1層	施釉(灰釉系)。内面に目跡あり。削り出し高台。底部内面に胎土目痕	唐津	16C末～17C初頭	底部 ½	—	4.5	—	—	I-79
6	青磁 碗	堆1層	外面無文。内面に飛雲文。	中国龍泉窯系	12C後半～13C	口縁部破片	—	—	—	85-4	J-8

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	縄文土器 深鉢	堆1層	口縁部に小突起が付き、横方向の沈線が施される。体部には RL 縄文。	口縁部破片	—	—	—	86-1	縄-3
8	弥生土器 壺	堆1層	三本平行沈線による連孤文。	体部破片	—	—	—	87-29	弥-25
9	縄文土器 深鉢	堆1層	縄文 RL。内面ヘラケズリ	体部破片	—	—	—	86-21	地-81
10	縄文土器 深鉢	堆1層	縄文 RL。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	86-23	地-83
11	縄文土器 深鉢	堆1層	縄文 RL。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	86-25	地-82
12	縄文土器 深鉢	堆1層	縄文 LR。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	86-24	地-84
13	弥生土器 甕?	堆1層	撚糸文 R。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	—	地-85

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
14	打ち欠き痕のある土師器片	堆1層	甕の体部破片の周辺を打ち欠いている。内外面ともヘラナデ。白針わずかに含む。	3.1	3.1	0.65	8.3	—	94-10	土-63

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
15	剥片石器	堆1層	小形の剥片の所々に二次加工が施されている。	1.95	1.9	0.44	1.2	珪質頁岩の一種(鉄石英)	—	石-20

第209図　第53・56・57号溝跡出土遺物

走行しており、その方向は真北に近く、N－5.5°－Eである。確認された長さは検出部分で南北が約9m、東西が約29.5mである。南北方向の上端幅は最大で3.40m、下端幅は70cm、深さは約1mである。また、東西方向では、上端幅は最大で4m以上あり、深さは1.80mである。

【堆積土】堆積土を2地点で検討したが、A地点で9層、B地点で11層確認された。いずれも自然堆積層であり、将棋倒し状の堆積状況を示している。層の大まかな特徴として上層はシルトを主体とした層で、層中には礫が含まれている。中層は粘土主体の層で、植物遺体を層中に含んでいる。下層は砂質シルト主体の層で、壁からの崩落土とみられる層である。

【壁・底面】断面形は逆台形をなし、壁は底面から明瞭な境をもって屈曲し、直線的に外傾して立ち上がる。ただし、東西方向の北壁面では途中にいくつかの段が認められる。底面はほぼ平坦であるが、全体的には南側が下がっている。

【特記事項】この溝跡は試掘Mトレンチにおいて北側に延び、さらに北の第4号堀跡につながることが確認された。また、東西方向の西側はⅦ区の第2号堀跡の東辺とつながることが予想される。

【出土遺物】堆積土から多量の遺物が出土した。図示できたのは土師器1点・須恵器2点・陶器2点・瓦質土器1点・砥石3点・磨面や敲打痕をもつ礫4点・漆器3点・下駄3点・木製品4点・竹製品1点・木材片1点・杭材12点である。漆器は小皿と椀であり、前者は内外面とも赤色漆で仕上げられている。椀の1点は高台が高く、器壁が厚みをもつタイプのものである。下駄は差歯が1点・連歯が2点である。連歯下駄は台部が小判型をなし、連歯は台部からほぼ垂直におりるものである。これらの図示資料の他に土師器破片202点・赤焼土器破片4点・須恵器破片79点・鉱滓1点・クルミの堅果5点・モモの種子4点・クリの種子1点・アカニシ2点などが出土している。

第62号溝跡（SD 62）

【位置】Ⅶ区　S72.4～80.6　E87.3～90

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。一部のみが検出され、北はさらに調査区外に延び、試掘Mトレンチの北壁付近で途切れることがわかった。南は第78号溝跡に切られており、それよりも古い。また、第77号溝跡と重複しており、同じくこれより古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向は真北からわずかに東に寄り、N－7.5°－Eである。確認された長さは検出部分で7.70mで、試掘Mトレンチの分を含めると約18mになる。上端幅は2.60m、下端幅は70cm、深さは最深で92cmである。

【堆積土】11層確認された。層№2・11はⅣ層ブロックを多量に混在し、人為堆積層とみられる。その他は自然堆積層で、両側から将棋倒し状に流入している。

【壁・底面】断面形は角がやや丸味をもつ逆台形をなしている。壁は底面からゆるやかに立ち上がり、その途中で、外に大きく開いている。底面は全体的にほぼ平坦であるが、一部に盛り上がりがみられる。

【特記事項】試掘Mトレンチで確認された北側部分では、これとほぼ直交して走行する第65号溝跡の西端がこの溝跡の東ラインに接している。こうした位置や方向性と、溝跡の形状や堆積土の類似性などから、両者は一連の遺構であることが考えられる。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の石臼1点と不明石製品1点のみで、他に土師器破片26点・須恵器破片19点・鉱滓1点が出土している。

第63号溝跡（SD 63）

【位置】Ⅶ区　S70～79　E47.6～49.7

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。南は調査区外に延びている。また、北は試掘Dトレンチで確認したところ、さらに1.5m延びた地点で、第2号堀

跡から続くとみられる堀跡によって切られている。第58号溝跡・第10号性格不明遺構と重複しており、これらより新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向は真北から若干東に寄り、N－12.5°－Eである。確認された長さは約10.5mで、上端幅は1.27m、下端幅は23cm、深さは平均52cmである。

【堆積土】5層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、主に東側から流入している。

【壁・底面】断面形は角が丸味をもつ逆台形をなしており、壁はほぼ平坦な底面から直線的に外傾して立ち上がる。底面は全体的にはわずかに南の方向に下がっている。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の刀子1点と砥石1点・磨面をもつ礫1点・石帯1点であり、その他に土師器破片105点・赤焼土器破片5点・須恵器破片10点・鉱滓4点が出土している。

第64号溝跡（SD 64）

【位置】Ⅶ～Ⅷ区　S50.7～75.8　E96.7～104.5

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。南は調査区外に延びている。北は第65号溝跡によって切られており、これより古い。また、第31・32号竪穴住居跡、第25号ピット群の多数と重複しており、竪穴住居跡よりは新しく、ピットとは新旧両方の関係をもつ。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はちょうど真北方向と一致する。確認された長さは24.50mで、上端幅は3.30m、下端幅は約1 m、深さは最深で1.23mである。

【堆積土】9層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、両側から将棋倒し状に堆積している。3つの層に大別され、上・下層（1～4、7～9）はシルト主体の層で、中層（5・6）は粘土質シルト主体で植物遺体を層中に含む。下層はグライ化している。

【壁・底面】断面形は逆台形をなし、壁は底面から明瞭な境をもって屈曲し、外方に直線的に開いている。底面はほぼ平坦で、一方への傾斜はみられない。また、一部に溝状にわずかに深くなっている部分が認められる。

【特記事項】この溝跡は第65号溝跡の北側には延びていない。また、検出部分の北端が左右に開くこと、方向が第65号溝跡とほぼ直交することなどから、第64号溝跡は北側で左右に屈曲し、第65号溝跡の同位置を走行していた可能性が考えられる。

【出土遺物】堆積土から多量の遺物が出土した。図示できたのは土師器3点・須恵器2点・灰釉陶器2点・陶器7点・青磁1点・とりべ2点・剝片石器1点・砥石3点・古銭1点・櫛1点である。陶器は多くは常滑産の甕の一部である。青磁は中国龍泉窯系の製品とみられ、外面に蓮弁文が認められる。櫛は横櫛の一部で、櫛目以外の部分に黒色漆が塗布されている。これらの図示資料の他に、土師器破片700点前後・赤焼土器破片5点・須恵器破片200点前後・灰釉陶器破片2点（写真81－8）・青磁破片1点（写真85－6）・とりべ7点（写真91－14～16・19・20・25）・鉱滓6点・モモの種子1点などが出土している。

第65号溝跡（SD 65）

【位置】Ⅷ区　S47.2～52.1　E95.5～104.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面および他の遺構の堆積土上面で確認された。一部の検出であり、東はさらに調査区外に延びる。また、西は試掘Mトレンチまで延び、第62号溝跡から続くとみられる溝跡に接して途切れている。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向は真北からわずかに西に寄り、N－84°－Wである。確認された長さは検出部分で9 m、試掘トレンチ分を含めると17.4mである。上端幅は最大で3.44m、下端幅は64cm、深さは平均1 m前後である。

【堆積土】7層確認された。層№1は人為堆積層と

みられ、他は自然堆積層である。これらの層の大半は北側から流入している。

【壁・底面】断面形は逆台形をなしており、壁は幅の狭い底面から明瞭な境をもって屈曲し、直線的に大きく外傾している。底面はほぼ平坦で、全体的にはわずかに西の方向に下がっている。

【特記事項】第62号溝跡の項でも述べたように、試掘Mトレンチにおいて位置や方向性などに密接な関係がうかがわれたこと、堆積土の類似性などから、これらは一連の遺構であることが考えられる。

【出土遺物】堆積土から多くの遺物が出土した。図示できたのは土師器2点・須恵器2点・灰釉陶器2点・陶器3点・とりべ2点・石製品1点である。陶器はすべて常滑産のものである。これらの他に土師器破片301点・須恵器破片80点・とりべ5点(写真91－18・23・26・27) 鉱滓5点・アカニシ1点が出土している。

第66号溝跡 (SD 66)

【位置】Ⅷ区　N8.9～S9.3　E95.1～96.7

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。全体が検出された。第76号溝跡・第26号ピット群のいくつかと重複しており、前者より新しく、後者とは新旧両方の関係をもつ。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行し、その方向は真北から若干東に寄り、N－13°－Eである。南端はわずかに東に曲がっている。長さは18.30mで、上端幅は53cm、下端幅は25cm、深さは平均16cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。Ⅳ層粒子と炭化物をまばらに含む層である。

【壁・底面】底面付近では残存しないが、断面形は「U」字形に近いものと考えられる。底面は全体的にほぼ平坦である。

【特記事項】溝跡の方向は第4号堀跡の南北方向とほぼ一致していること、また、この溝跡を境にピットの密度が大きく異なることなどから、第4号溝跡および掘立柱建物跡を含めた第26号ピット群と関連する遺構と考えられる。

【出土遺物】図示できたものはないが、堆積土中から土師器破片35点・須恵器破片15点・とりべ1点（写真91－24）・鉱滓1点が出土している。

第68号溝跡 (SD 68)

【位置】Ⅷ区　N7.9～12.9　E96.3～104.1

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。一部の検出で、東は調査区外に延びおり、北は削平により一部が失われているが、さらに調査区外に延びることがわかった。一部で第4号堀跡と重複しており、それより古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行するものとみられ、検出部分の方向はN－40°－Wである。確認された長さは9.30mで、保存の良い部分の上端幅は80cm、下端幅は40cm、深さは27cmである。

【堆積土】4層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、両側から流入している。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近い。底面は皿状をなし、壁はそこからゆるやかに屈曲して立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

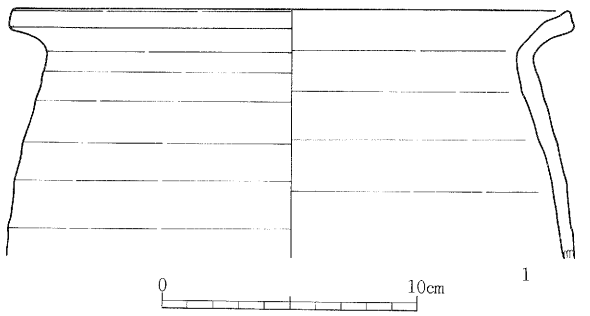
【出土遺物】図示できるものはなく、堆積土からわずかに須恵器破片3点が出土したにすぎない。

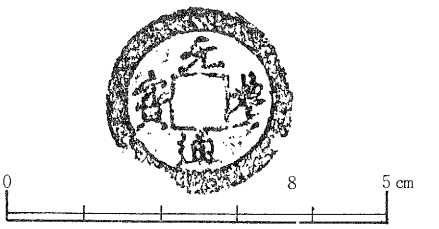
第69号溝跡 (SD 69)

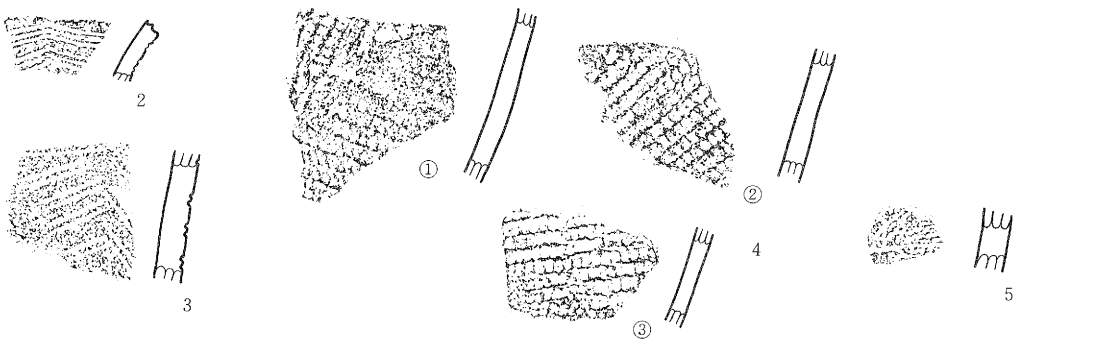
【位置】Ⅷ区　N23.1～25.5　E96.1～103.7

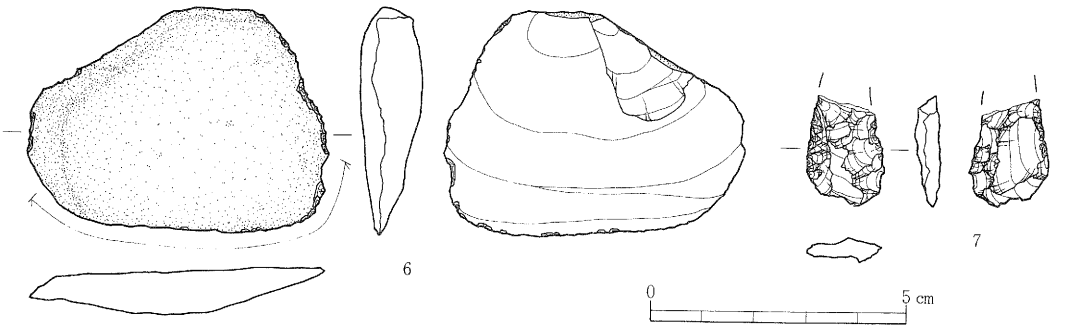
【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認されたが、壁面観察によってⅢa層上面から掘り込まれていることがわかった。調査の都合上、一部の検出しかできなかった。東と西はさらに調査区外に延びている。第70号溝跡と重複し、これより新しい。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はN－72.5°－Wである。確認された長さは7.44mで、上端幅は2.16mで、下端幅は52cm、深さは掘り込み面から1.42mである。









番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部 1/2	22.9	—	—	78-5	C-302B

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	弥生土器 鉢	堆1層	三本平行沈線による連孤文。 内面はミガキ。	体部破片	—	—	—	88-2	弥-26
3	弥生土器 壺	堆1層	二本平行沈線による重層山形文。	体部破片	—	—	—	87-16	弥-27
4	縄文土器 深鉢	堆1層	3点とも同一個体。 羽状縄文 LR、RL。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	86-17・18	地-86
5	弥生土器 甕？	堆1層	撚糸文 R。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	—	地-87

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
6	微細剥離痕のある剥片	堆1層	横長の剥片の側縁および下縁辺を中心に微細剥離痕と摩耗痕(矢印)が認められる。	4.5	5.9	1.15	27.8	流紋岩	95-13	石-18
7	石鏃	堆1層	先端欠損。無茎で茎部に粗い加工面を残す。 全体的に加工が粗雑。	(2.3)	1.5	0.4	(1.3)	黒曜石	95-3	石-3

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
8	銅製品 古銭	堆1層	元豊通宝(北宋)。初鋳年元豊元年(1078年)	径 2.5	—	0.13	2.8	102-25	N-54

第210図　第58号溝跡出土遺物

【堆積土】6層確認された。層のNo.1は人為堆積であり、他は自然堆積層である。下層は粘土主体の層で、植物遺体を多く含んでいる。

【壁・底面】下方は断面形が「U」字形をなし、皿状の底面からゆるやかに屈曲し、上方に立ち上がる。その上方では外方に大きく開いている。

【特記事項】この溝跡は方向が第4号堀跡の方向と一致しており、相互の関連が考えられる。また、第2号堀跡と一連のものと考えられた第37号溝跡や試掘Fトレンチで確認された溝跡とつながることも想定される。

【出土遺物】堆積土から多量の植物種子が検出されたが、人工遺物は出土していない。

第70号溝跡（SD 70）

【位置】Ⅷ区　N18.6～26.7　E96.1～100.6

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは一部で北は調査区外に延び、南は第4号堀跡に切られているが、その壁面に辛うじて残存している。第69号溝跡と重複しており、これより古い。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北から若干西に寄り、N－14.5°－Wである。確認された長さは10.12mで、上端幅は保存の良い地点で1.20m、下端幅は52cm、深さは50cm前後である。

【堆積土】8層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、両側から流入している。その中のNo.8は砂を主体にラミナ状の堆積状況を示しており、水成堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は角が丸味をもつが、逆台形に近い。底面は平坦で、壁は外傾しながら立ち上がり、その途中で外に大きく開いている。

【出土遺物】出土していない。

第71号溝跡（SD 71）

【位置】Ⅷ区　N37.4～41.6　E96.6～102.1

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは溝の一部で、両側は調査区外に延びている。重複関係は認められない。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向はN－41.5°－Wである。確認された長さは6.36mで、上端幅は48cm、下端幅は32cm、深さは最深で39cmである。

【堆積土】4層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、水平状かレンズ状の堆積状況を示す。

【壁・底面】断面形は逆台形をなし、壁は底面と境が明瞭で直線的に立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の土師器1点のみである。他に鉱滓1点が出土している。

第72号溝跡（SD 72）

【位置】Ⅷ区　N41～43.6　E97～102

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは一部で両側は調査区外に延びている。重複関係は認められない。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はN－55.5°－Wである。確認された長さは5.24mで、上端幅は76cm、下端幅は47cm、深さは最深で21cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。Ⅳ層ブロック・粒子をわずかに含む自然堆積層である。

【壁・底面】壁は外方に大きく開く。底面は不規則で、起伏が各所に認められるが、一方への傾斜はみられない。

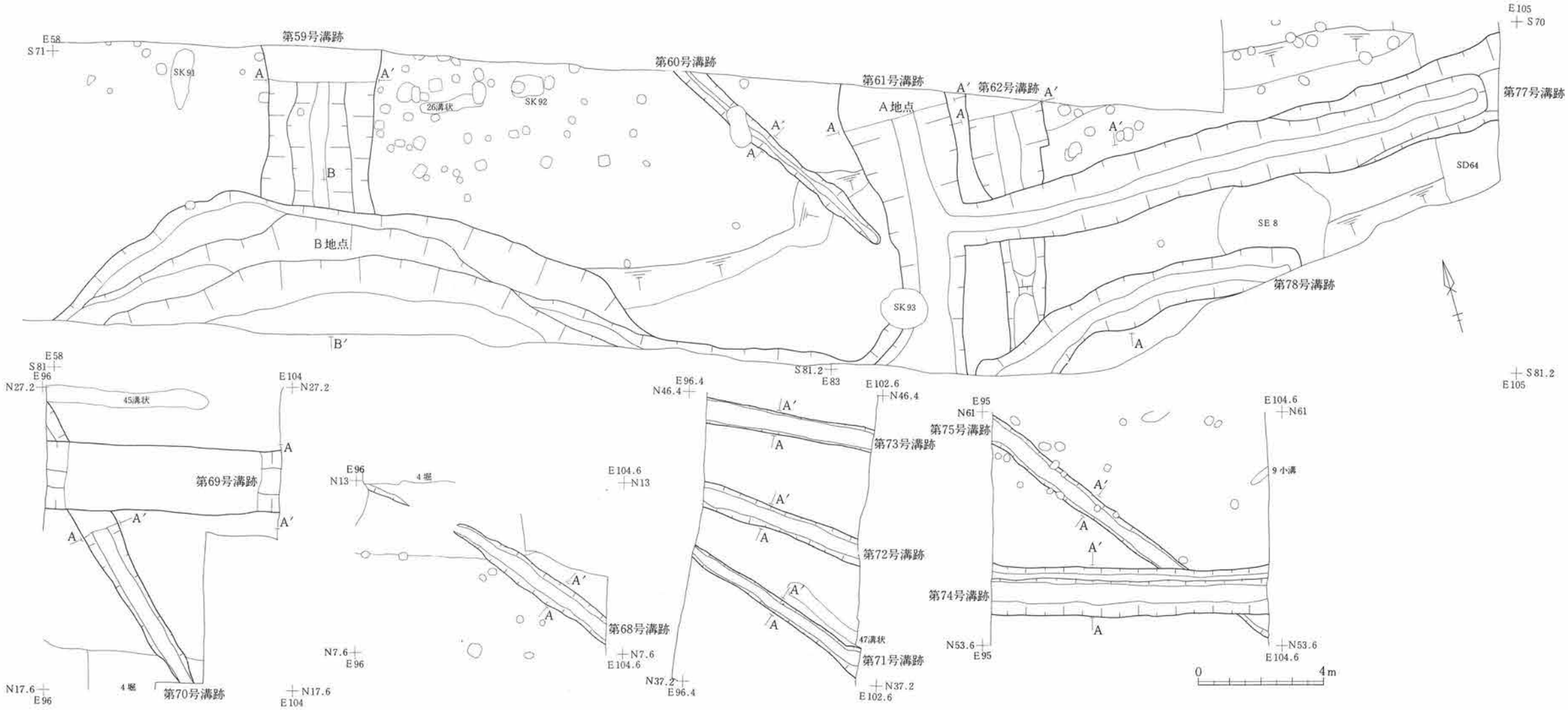
【出土遺物】出土していない。

第73号溝跡（SD 73）

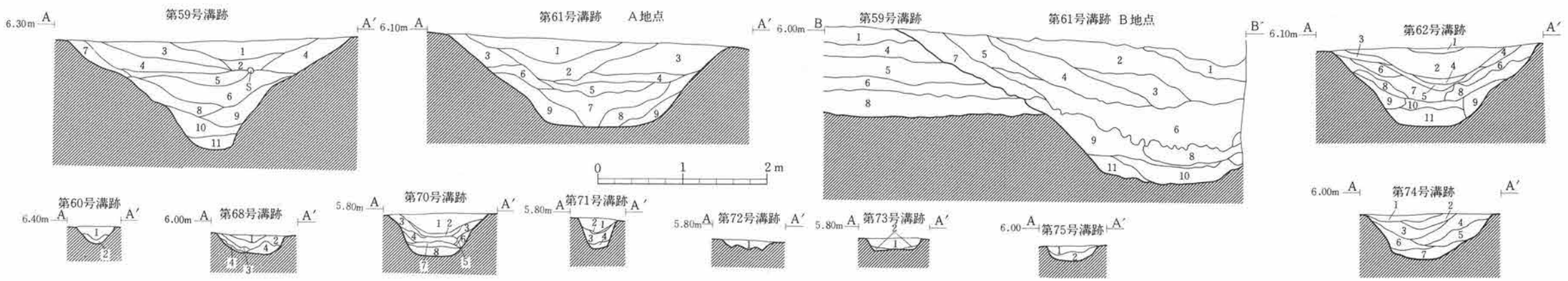
【位置】Ⅷ区　N44.6～46.2　E96.9～102.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは一部で、両側は調査区外に延びている。重複関係は認められない。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は



第211図　第59～62・68～75・77・78溝跡平面図



第212図　第59～62・68・70～75号溝跡セクション図

N－64°　－Wである。確認された長さは5.36mで、上端幅は71cm、下端幅は59cm、深さは平均15cmである。

【堆積土】2層確認された。ともに自然堆積層とみられる。

【壁・底面】断面形は逆台形に近く、壁は底面との境が明瞭で、そこから直線的に立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

【出土遺物】出土していない。

第74号溝跡（SD 74）

【位置】Ⅷ区　N54.5～56.2　E95.3～104.2

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは一部で、両側は調査区外に延びている。第75号溝跡と重複しており、それより新しい。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はN－74.5°　－Wである。確認された長さは8.80mで、上端幅は1.48m、下端幅は57cm、深さは平均で57cmである。

【堆積土】7層確認された。いずれも自然堆積層で、将棋倒し状の堆積状況を示している。

【壁・底面】底面は皿状をなす。壁は底面からゆるやかに立ち上がりながら、外に開く。北側では途中に段がみられる。底面はほぼ平坦である。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の弥生土器2点のみである。この他に土師器破片3点・赤焼土器破片1点・須恵器破片1点が出土している。

第75号溝跡（SD 75）

【位置】Ⅷ区　N53.8～59.9　E95.3～104.2

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは一部で、両側は調査区外に延びている。第74号溝跡と重複しており、それより古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向はN－36°　－Wである。確認された長さは10.84mで、上端幅は68cm、下端幅は44cm、深さは平均18cmである。

【堆積土】2層確認された。ともに自然堆積層とみられ、レンズ状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなし、壁は皿状の底面からゆるやかに上方に立ち上がっている。底面は各所に起伏がみられるが、全体的にはほぼ平坦である。

【出土遺物】出土していない。

第76号溝跡（SD 76）

【位置】Ⅷ区　N10.6～S2.6　E94.9～101.6

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。北はさらに調査区外に延びており、南は途切れている。重複する第66号溝跡・第49号溝状遺構よりは古く、第48号溝状遺構より新しい。また、第26号ピット群の多数のピットとは新旧両方の関係をもつ。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行する。その方向は真北より西に若干寄っており、N－10°　－Wである。確認された長さは14.60mで、上端幅は78cm、下端幅は64cm、深さは平均26cmである。

【堆積土】2層確認された。ともに自然堆積層とみられ、水平状に近い堆積状況を示す。

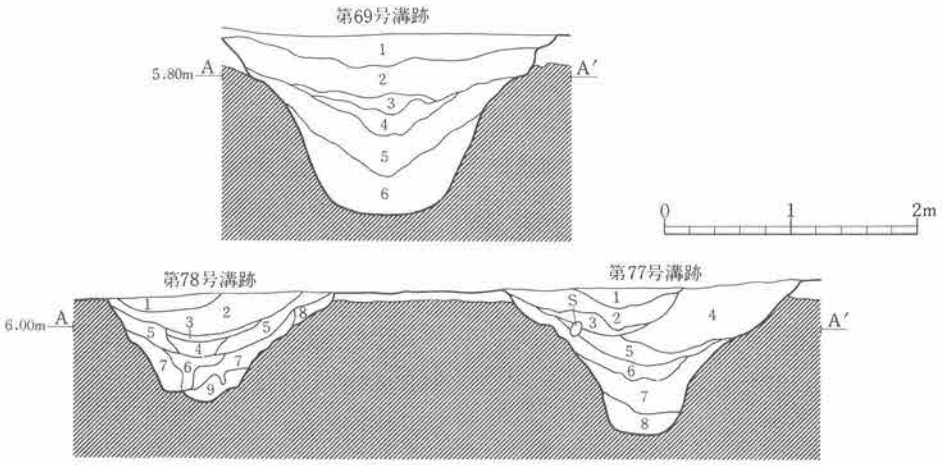
【壁・底面】断面形は「U」字形をなし、壁は皿状の底面からゆるやかに屈曲し、上方に立ち上がっている。底面は全体的には南の方向に下がっているが、起伏が大きくみられ、一部では段を形成する地点もある。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の須恵器1点のみであり、他に須恵器破片1点が出土している。

第77号溝跡（SD 77）

【位置】Ⅶ区　S70.3～77.3　E87.2～104.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認されたが、断面観察ではⅣ層上に灰褐色のシルト層がのっており、その上から掘り込まれていることがわかった。この層はこの付近だけに分布しているようである。この付



第59号溝跡堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒色 (10YR2/1)	砂質シルト		1層
2	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	全体にマンガン斑を含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	全体にマンガン斑・炭化物粒をわずかに含む。	
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	全体にマンガン斑を含む。	
5	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト		2層
6	黒色 (10YR2/1)	粘土	IV層ブロック少量・炭化物粒をわずかに含む。全体に植物遺体を少量含む。	
7	黒色 (10YR3/1)	砂質シルト		
8	黒色 (10YR2/1)	シルト	IV層ブロックを全体に含む。	
9	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	黒色シルト層と地山層との互層。	
10	黒色 (N2/1)	シルト	グライ化している。	
11	灰色 (10YR4/1)	粘土質シルト	グライ化している。	

第60号溝跡堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層小ブロックをわずかに含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	IV層小ブロックを多量に含む。	2

第61号溝跡・A地点堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	全体にマンガン斑を含む。	1層
2	褐灰色 (10YR4/1)	粘土質シルト	2.5Y5/2のシルトブロックを全体に含む。上半でマンガン粒の斑紋が見られる。	
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	層の下部に酸化鉄層が見られる。	
4	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	IV層ブロックをやや含む。	2層
5	黒褐色 (10YR2/2)	粘土	全体に植物遺体を少量含む。	
6	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	炭化物粒をわずかに含む。	
7	オリーブ黒色 (5Y3/1)	粘土	全体に植物遺体少量・炭化物粒を少量含む。砂層との互層	
8	オリーブ黒色 (7.5Y3/1)	砂質シルト	炭化物粒をわずかに含む。	
9	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	IV層の崩落土	

第68号溝跡堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	IV層粒をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	IV層粒子をほとんど含まない。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層粒子を多く含む。	3
4	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層粒子が混在する。	4

第61号溝跡・B地点堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	マンガン斑を含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層の小ブロックをわずかに含む。礫・炭化物を含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層の粒子を霜降り状に含む。	3
4	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	全体的に砂のブロックを多量に含む。木片を含む。	4
5	黒褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト	炭化物粒を少量含む。	5
6	黒色 (2.5Y2/1)	粘土	植物遺体(木片など)を多量に含む。	6
7	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	部分的に砂を含む。	7
8	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土	炭化物粒・植物遺体を少量含む。	8
9	黄灰色 (2.5Y4/1)	砂質シルト	主に砂からなる。	9
10	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土	植物遺体を含む。黒い薄い層が挟在する。	10
11	オリーブ黒色 (5Y3/1)	砂質シルト	砂とシルトの互層となっている。	11

第62号溝跡堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト		1層
2	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層小ブロックが多量に混在する。人為堆積とみられる。	
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト		
4	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	IV層小ブロックをわずかに含む。	2層
5	灰黄色 (10YR4/2)	砂質シルト		
6	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層ブロックを少量含む。	
7	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	こぶし大のIV層ブロックを含む。	
8	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト		
9	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	褐灰色シルト層との互層	
10	褐灰色 (10YR4/1)	粘土	褐色砂質シルト層との互層	
11	灰色 (7.5Y4/1)	砂質シルト	径5cm内外のIV層ブロックが混在する。人為堆積とみられる。	

第69号溝跡堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	IV層ブロック・暗褐色ブロックが混在する。人為堆積	1
2	にぶい黄橙色 (10YR5/4)	シルト	マンガン粒を多く含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	植物遺体をわずかに含む。	3
4	黒褐色 (10YR2/2)	泥炭質粘土	植物遺体を多量に含む。	4
5	黒色 (10YR2/1)	粘土	植物遺体を含む。細かなラミナ状を示す。さらに細分可能。	5
6	オリーブ黒色 (5Y3/1)	粘土	植物遺体を多量に含む。IV層の崩落土。薄く挟みラミナ状をなす。	6

第213図　第69・77・78号溝跡セクション図

第70号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロックを少量含む。凝灰岩粒子・マンガン粒を含む。	1
2	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト		2
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロックをわずかに含む。	3
4	暗褐色 (10YR3/3)	砂	水成堆積層か。	4
5	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト		5
6	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	IV層崩落土	6
7	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト		7
8	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	細砂	細かなラミナ状を示す。水成堆積層か。	8

第71号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層ブロック粒子をわずかに含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト		2
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	3
4	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	細砂	IV層の崩落土	4

第74号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロックをわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子を霜降り状に全体的に含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	マンガン粒を含む。	3
4	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を霜降り状に多く含む。マンガン粒を含む。	4
5	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を霜降り状に多く含む。マンガン粒を含む。	5
6	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を縞状に混在する。	6
7	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロックが混在する。	7

第75号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層粒子をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	2

第72号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	1

第73号溝跡堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	酸化鉄の斑紋を含む。	1
2	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	砂	IV層の崩落土。	2

第77号溝跡堆積土

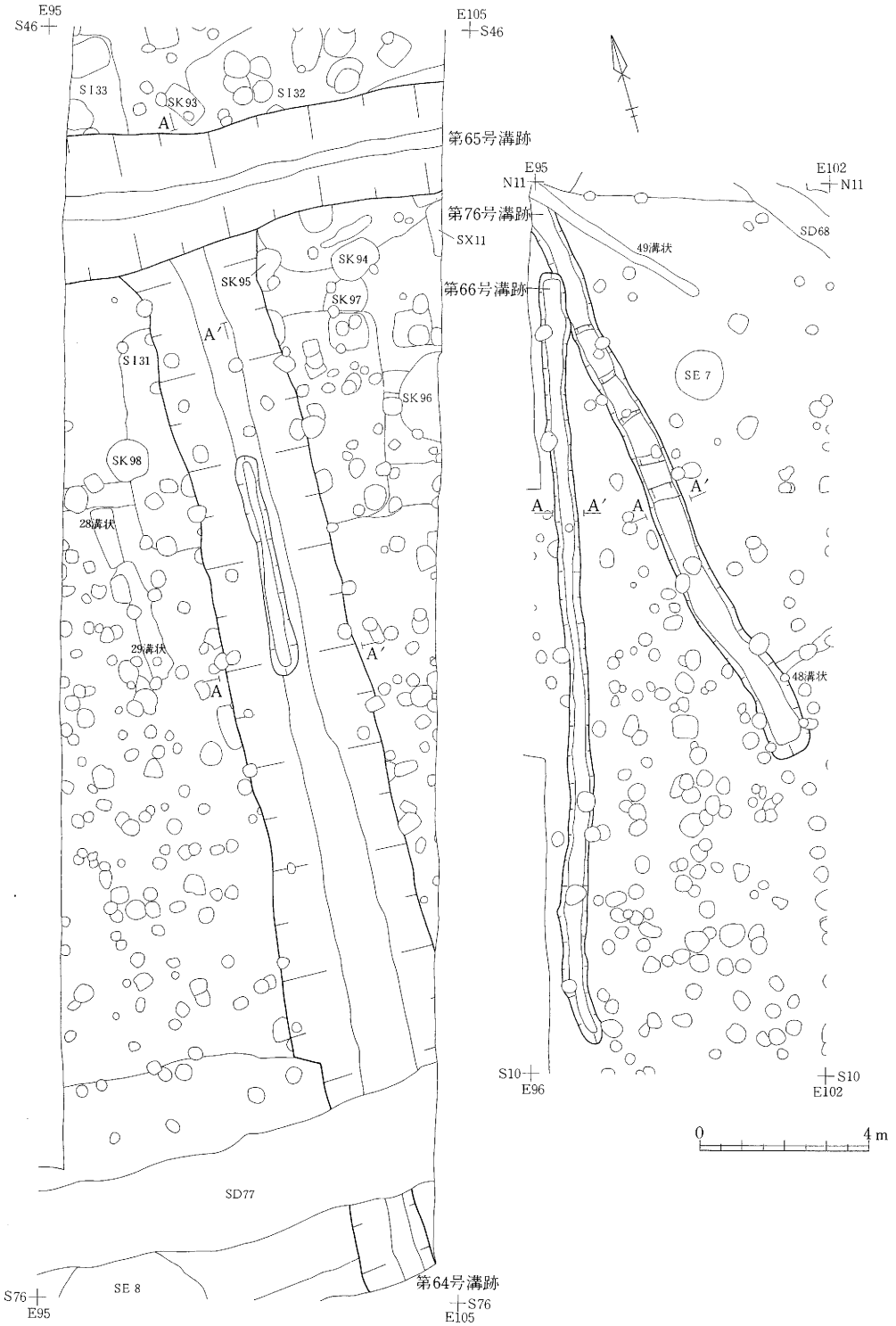
層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層のブロック・粒子を多量に含む。人為堆積	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層の小さなブロックを少量含む。	2
3	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	大部分がIV層のブロックからなる。	3
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	マンガン・酸化鉄斑紋を多く含む。	4
5	黒褐色 (10YR2/2)	粘土	植物遺体(木片など)を含む。	5
6	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	壁ぎわで砂の層挟む。	6
7	黒色 (10YR2/1)	粘土	砂の層と互層なす。	7
8	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層のブロックを多量に含む。	8

第78号溝跡堆積土

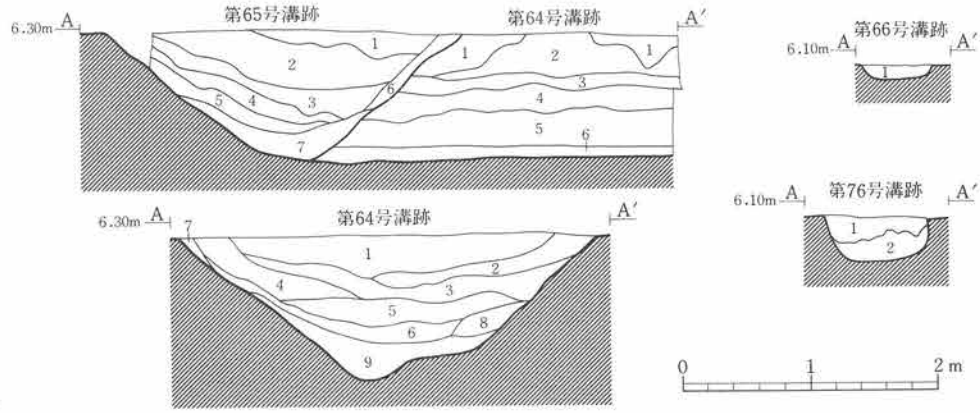
層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	黒色のブロック・IV層ブロックを含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層の小ブロックを全体的に多量に含む。	2
3	黒色 (10YR2/1)	粘土	植物遺体(木片など)を含む。	3
4	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	炭化物をわずかに含む。	4
5	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層の小ブロック・砂のブロックを含む。	5
6	黒褐色 (10YR2/2)	粘土	植物遺体(木片など)を含む。	6
7	黒褐色 (10YR3/2)	砂シルト	砂・黒褐色シルトの互層。	7
8	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層の小ブロックを含む。	8
9	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	IV層のブロックが混在する。	9

第61号溝跡（西から）

第61号溝跡出土漆器



第214図　第64～66・76号溝跡平面図



第64号溝跡堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	IV層小ブロック・炭化物粒をわずかに含む。	1層
2	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	IV層小ブロック・炭化物粒をわずかに含む。	
3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	IV層小ブロックを多く含む。	
4	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	IV層小ブロックを多く含む。炭化物粒をわずかに含む。	
5	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	IV層小ブロック・炭化物粒・植物遺体を少量含む。	2層
6	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	IV層小ブロックをわずかに含む。植物遺体を少量含む。	
7	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト		
8	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	IV層ブロックを多く含む。	
9	オリーブ黒色 (10YR3/1)	砂質シルト	グライ化している。	

第65号溝跡堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	径5cm内外のIV層ブロックを多く含む。人為堆積とみられる。	1層
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物粒をわずかに含む。層下端に酸化鉄斑紋の集積層。	
3	黒色 (10YR2/1)	粘土質シルト		2層
4	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト	灰白色粒を全体的に密に含む。	
5	黒色 (2.5Y2/1)	粘土質シルト		
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト		
7	黒色 (2.5Y2/1)	粘土質シルト	2.5Y 3/1 黒褐色・砂質シルトとの互層	

第66号溝跡堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層粒子・炭化物粒をまばらに含む。	1

第76号溝跡堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	IV層ブロックを多量に含む。	2

第215図　第64～66・76号溝跡セクション図

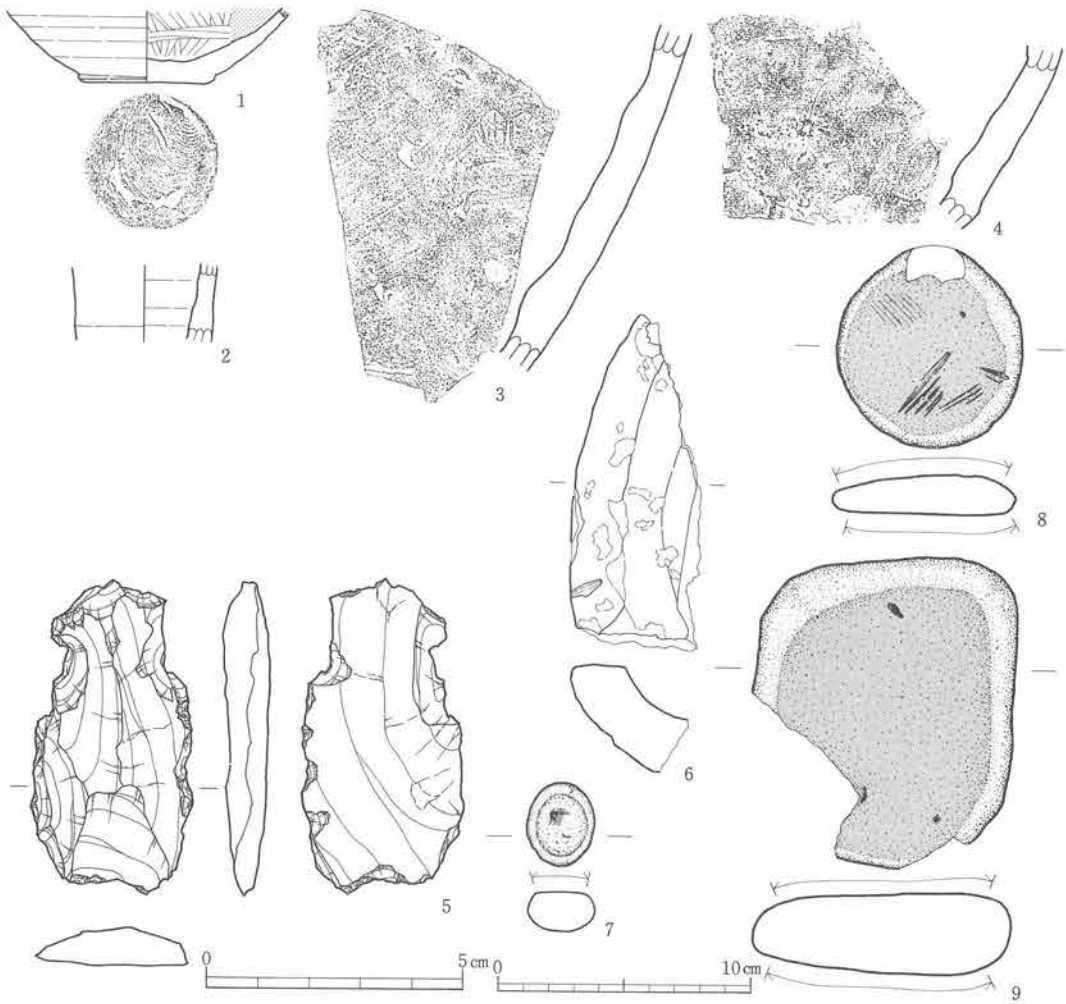
近のIV層上面は緩斜面を経て一段下がっている。東はさらに調査区外に延び、西は最終的には第61号溝跡と同一の溝であることが判明した。重複する第78号溝跡より古く、また、第62・64号溝跡、第8号井戸状遺構より新しい。

【方向・規模】緩斜面に沿って、その下を直線的に走行している。その方向は真北方向に直交している。確認された長さは17.80mで、上端幅は2.40m、下端幅は60cmである。深さは最深で1.16mであり、調査区の東壁付近の一段浅くなった地点では60cmである。

【堆積土】8層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、両側から将棋倒し状に堆積している。堆積土の中位の層には植物遺体が含まれており、下位の層には砂を薄く挟む層も認められる。

【壁・底面】断面形は下方は「U」字形をなしている。壁はゆるやかに立ち上がり、その上方で大きく開く。底面は平坦であり、全体的には西から東方向にいく分下がっている。そして調査区の東壁付近では56cm程急角度で上がり、一段浅くなっている。

【出土遺物】堆積土から多くの遺物が出土した。図示できたのは須恵器1点・灰釉陶器1点・陶器6点・瓦質土器1点・フイゴの羽口1点・鉄製品1点・古銭2点・下駄2点・曲物1点・杭材1点・角製品1点である。陶器には古瀬戸産の天目茶垸・常滑産の甕が含まれている。下駄は連歯下駄と差歯下駄である。角製品は一部は欠けるが、楕円形の形をなし、所々に黒色漆の塗布がみられる。形状から鞘尻の可

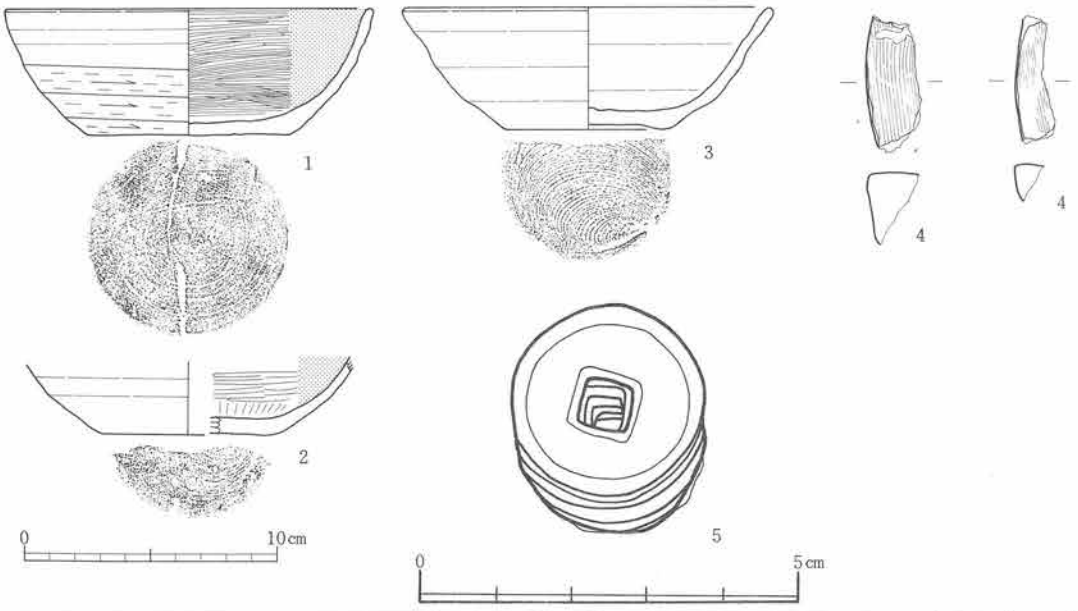


番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆5層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	体～底部 1/1	－	5.4	－	－	C-303
2	須恵器 長頸壺	堆6層	ロクロナデ	ロクロナデ	頸部破片	－	－	－	80-10	E-158

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	陶器 甕	堆2層	外面はヘラナデ。押印が1箇所にあり。内面はナデ。	常滑	13C代？	体部破片	－	－	－	84-4	I-80
4	陶器 甕	堆5層	内外面ともヘラナデ。	渥美	13 C	体部破片	－	－	－	84-5	I-81

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
5	石匙	堆5層	縦長。つまみ部のえぐりは浅い。 刃部の縁辺には粗雑な調整が加えられている。	6.25	3.2	0.85	19.8	石英安山岩	95-9	石-4
6	石臼	堆2層	茶臼の下臼で受皿の一部。 縁と内面にスス状の付着物が認められる。	(13.5)	(5.2)	(2.6)	(238)	安山岩	96-8	石-32
7	磨面をもつ礫	堆8層	小さい礫を利用。磨面は一面認められる。	3.3	2.7	1.6	7.1	石英安山岩質凝灰岩	96-16	石-141
8	磨面をもつ礫	堆2層	一部欠損あり。扁平な礫を利用。磨面が上下2面にあり、線状痕が認められる。	8.1	7.4	1.6	57	石英安山岩質凝灰岩	－	石-154
9	磨面をもつ礫	堆2層	下部の一部欠損。扁平な礫を利用。 磨面が上下2面に認められる。	(12.2)	(10.6)	(3.2)	555	石英安山岩質凝灰岩	99-11	石-155

第216図　第59号溝跡出土遺物



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ・回転ヘラケズリ 底部全面回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	全体の 4/5	14.5	8.0	5.1	74-8	C-304
2	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	体～底部の 1/3	—	7.0	—	—	C-305
3	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	口縁～底部 1/2	14.6	6.4	4.9	79-10	E-159

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
4	石臼	堆1層	粉挽臼か茶臼の縁の一部と考えられる。同一個体と思われる。上面の磨滅が著しいことから茶臼の縁部の可能性が高い。	a (5.4) b (5.1)	(2.2) (1.5)	(2.8) (1.9)	(31.6) (11.8)	安山岩	—	石-44

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
5	銅製品 古銭	堆1層	6枚が付いたまま出土。名称不明。	径 2.4	—	一枚 0.15	19.8	102-18	N-55

第217図　第60号溝跡出土遺物

能性が考えられる。これらの図示資料の他に、土師器破片 127点・須恵器破片34点・灰釉陶器破片１点・モモの種子18点が出土している。

第78号溝跡（SD 78）

【位置】Ⅶ区　S77.1～81.4　E87.7～98.8

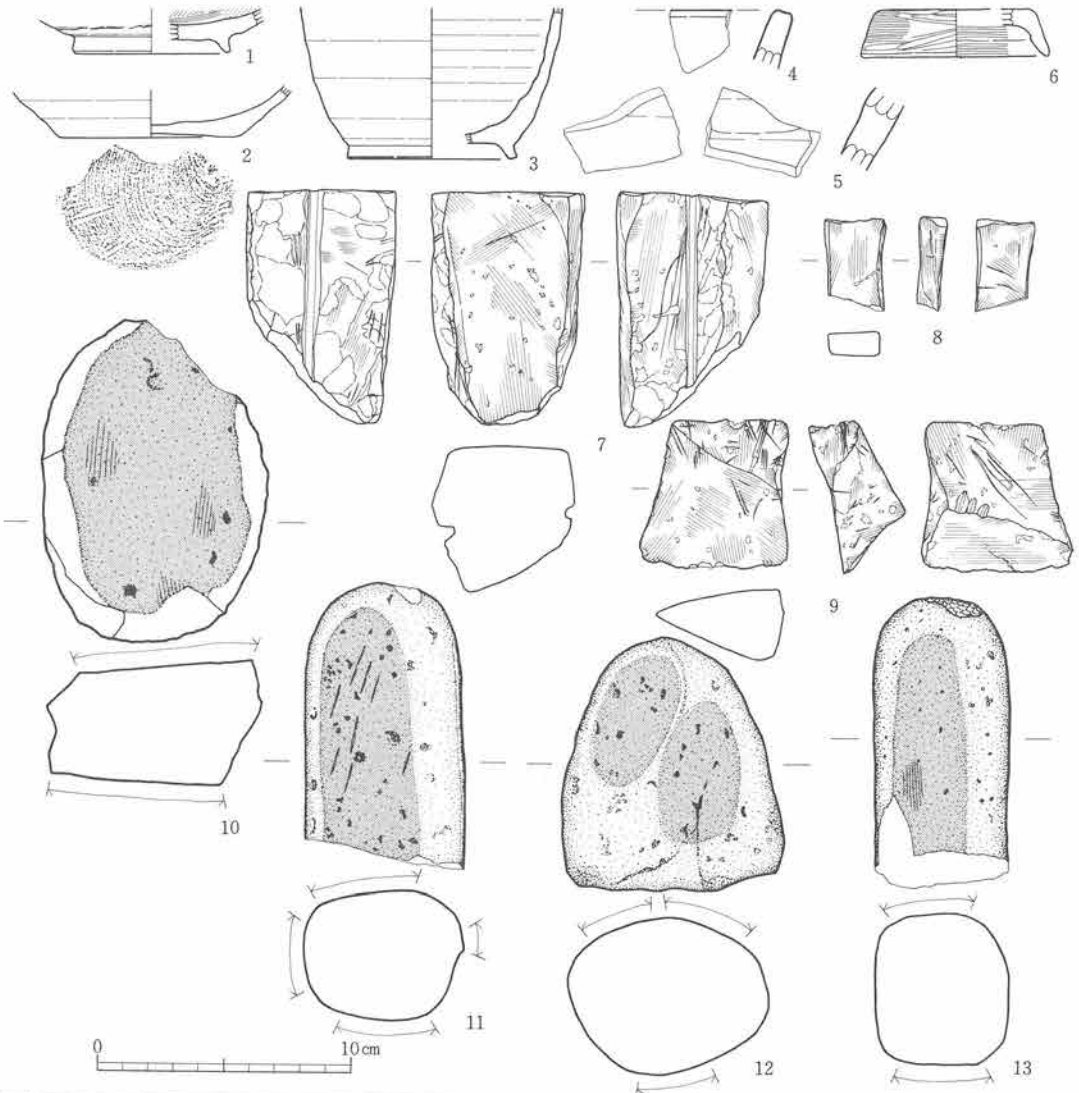
【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認されたが、断面観察により、その上の灰褐色のシルト層から掘り込まれていることがわかった。この層はこの付近にのみ分布している。検出されたのは一部で、両側は調査区外に延びる。第８号井戸状遺構・第62号溝跡と重複しており、これらより新しい。

【方向・規模】おおむね真北方向に直交する方向に走行しており、いく分南にカーブを描く。確認された長さは11m で、上端幅は1.42m、下端幅は49cm、深さは平均54cmである。

【堆積土】９層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、両側から将棋倒し状に堆積している。中位には植物遺体を含む層がいくつかみられる。

【壁・底面】断面形は逆台形に近く、壁は底面から急激に立ち上がり、外傾する。底面には起伏がみられるが、全体的には西から東の方向にわずかに下がっている。

【出土遺物】堆積土から若干の遺物が出土した。図示できたのは土製品１点・砥石３点・漆器１点・下駄３点・曲物１点である。下駄はいずれも差歯下駄の歯の部分である。これらの他に土師器破片44点・須恵器破片10点・灰釉陶器１点・アカニシ１点が出

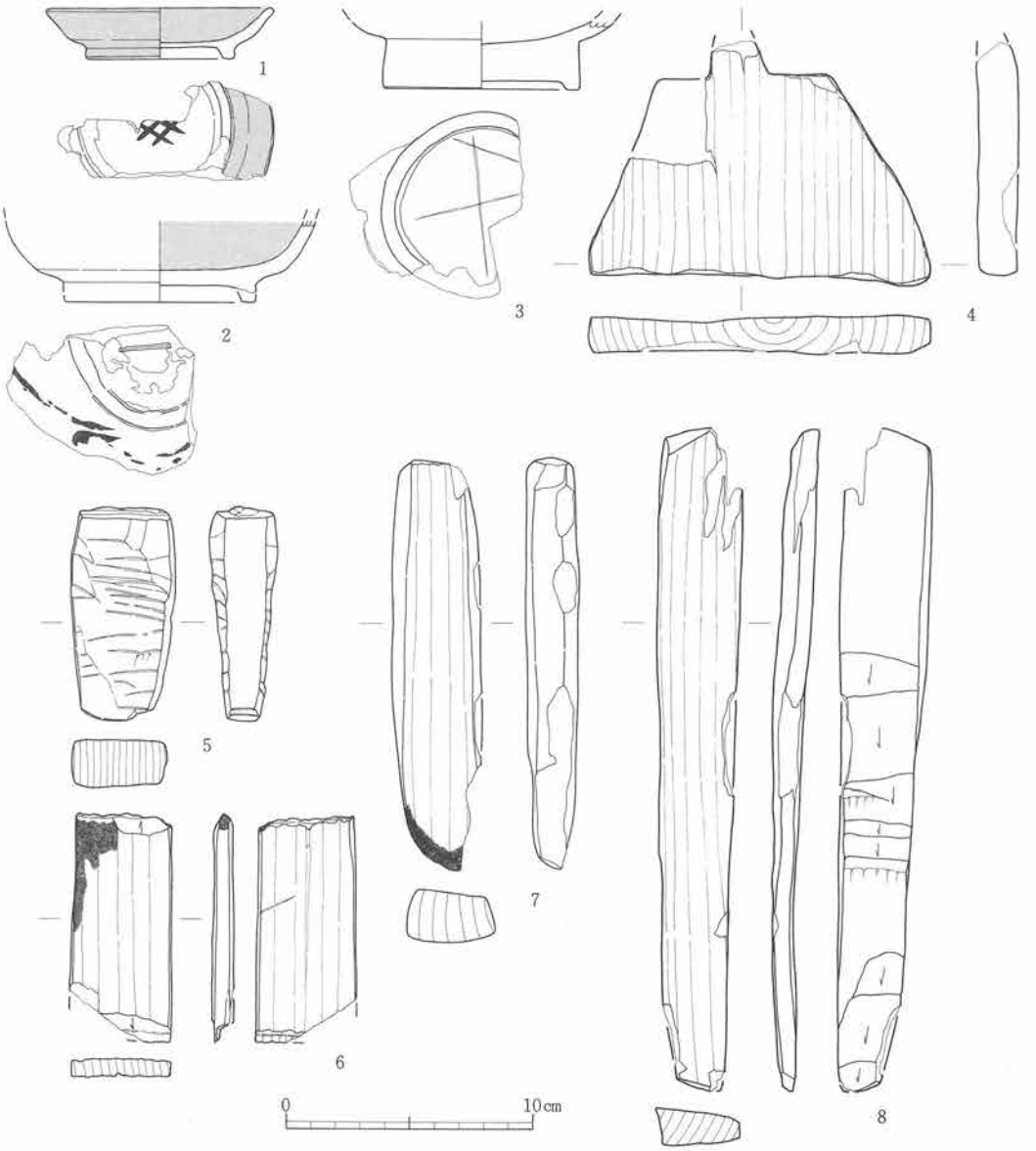


番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 高台付坏	B堆6層	ロクロナデ・底部切り離し不明・高台を接着後ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	体部下半～底部 1/8	－	(6.2)	－	－	C-306
2	須恵器 坏	B堆6層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	体部下半～底部 1/3	－	7.2	－	－	E-160
3	須恵器 壺	B堆6層	ロクロナデ・高台付	ロクロナデ	体～底部 ½	－	6.6	－	－	E-161

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	陶器 鉢	B堆3層	内外面ともナデ。	在地	13～14C	口縁部破片	－	－	－	－	I-82
5	陶器 鉢？	B堆4層	内外面ともロクロナデ。施釉(灰釉系)。内面は途中から下は露胎。	－	－	体部破片	－	－	－	－	I-83
6	瓦質土器 蓋	B堆	外面はヨコナデ、ヘラミガキ。内面はヨコナデ。	－	中世？	全体の½	7.4	6.0	1.9	82-32	I-84

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
7	砥石	B堆10層	完形。断面は台形状で、一端部は不整形である。硬く、シルト質状の石材。主要砥面は上1面で、両側面には研磨溝がある。	9.3	6.0	5.9	460	石英安山岩質凝灰岩	97-10	石-60
8	砥石	B堆6層	一部欠損。扁平で軟質シルト質状。砥面は上下2面。	(3.7)	2.9	1.1	(14.2)	石英安山岩質凝灰岩	－	石-63
9	砥石	A堆2層	完形。不整な形状をしており、破損した砥石の一部を再利用したものか。硬質でシルト質状の石材。主要砥面は2面。	6	5.9	2.7	85	石英安山岩質凝灰岩	97-13	石-64
10	磨面をもつ礫	B堆10層	上部の一部が欠損。側面全体を打ち欠いている。磨面は上下2面に認められる。片面の中央にスス状の黒い付着物あり。	12.9	9.0	5.0	(725)	安山岩	99-4	石-139
11	磨面をもつ礫	B堆6層	下部欠損。円棒状の礫を利用。磨面4か所あり。線状痕が認められる。	(11.3)	6.2	5.3	(615)	石英安山岩	－	石-148
12	磨面をもつ礫	B堆10層	球に近い礫を利用。磨面が3か所に認められる。	10.1	8.9	6.3	795	石英斑岩	99-6	石-149
13	敲打痕と磨面をもつ礫	B堆6層	下部欠損。円棒状の礫を利用。磨面上下に2面あり。上端に敲打痕が認められる。	(11.6)	5.3	6.1	(630)	石英安山岩	99-9	石-143

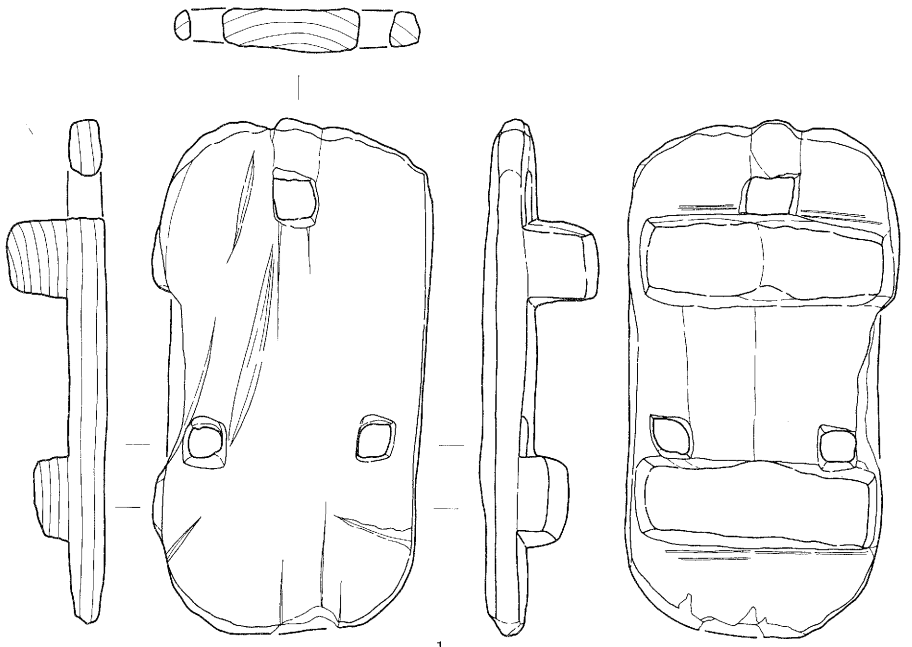
第218図　第61号溝跡出土遺物（1）

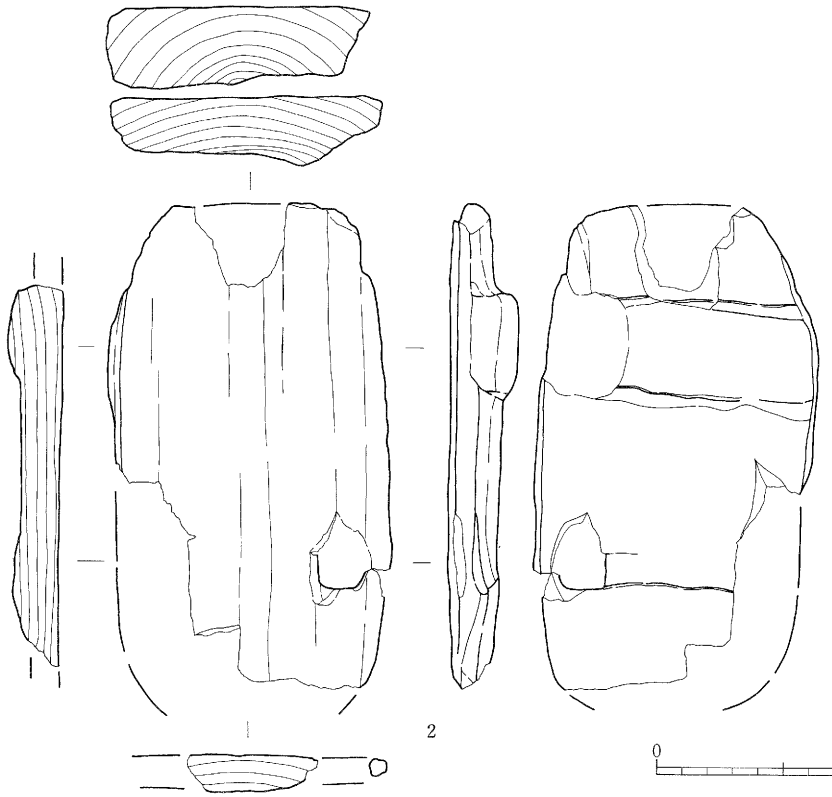


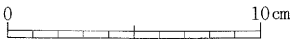
番号	種別	層位	特徴	樹種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	写真図版	登録番号
1	漆器 小皿	B堆6層	外面は黒色漆塗付後、赤色漆を塗付。内面は黒色漆塗付後、赤色漆を塗付。底部外面は黒色漆のみ、底部中央に菱形の文様が赤色漆で描かれている。	ブナ属の一種(No.17)	(9.2)	6.0	2.1	104-7	L-88
2	漆器 椀	B堆6層	外面は黒色漆の上に赤色漆の文様。内面は茶褐色漆塗仕上げ。底部外面に漆塗付以前の「一」の線刻あり。	ブナ属の一種(No.18)	(12.5)	(7.8)	—	—	L-89
3	漆器 椀	B堆6層	外面は黒色漆塗仕上げ。内面は黒色塗仕上げ。底部外面に製作後にキズあり。	ブナ属の一種(No.19)	—	(8.0)	—	104-6	L-90

番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
4	差歯下駄	B堆6層	歯の部分。芯持材。台形状をなし、枘が作り出されている。	ケンポナシ(No.32)	9.9	3.9	1.6	105-18	L-91
5	木製品	B堆6層	ほぼ完形。柾目材を使用。先端がやや薄く仕上げられている。	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種(No.44)	8.7	4.3	2.4	107-4	L-92
6	木製品	B堆6層	柾目材使用。一部に焦痕あり。	—	9.3	4.1	0.9	107-5	L-93
7	木製品	B堆6層	柾目材使用。先端部一部に焦痕あり。	クリ(No.33)	16.7	3.5	2.1	107-3	L-94
8	木製品	B堆6層	先端部、胴体部にかけて加工痕あり。	クリ(No.52)	27.0	3.4	1.5	—	L-95

第219図　第61号溝跡出土遺物（2）

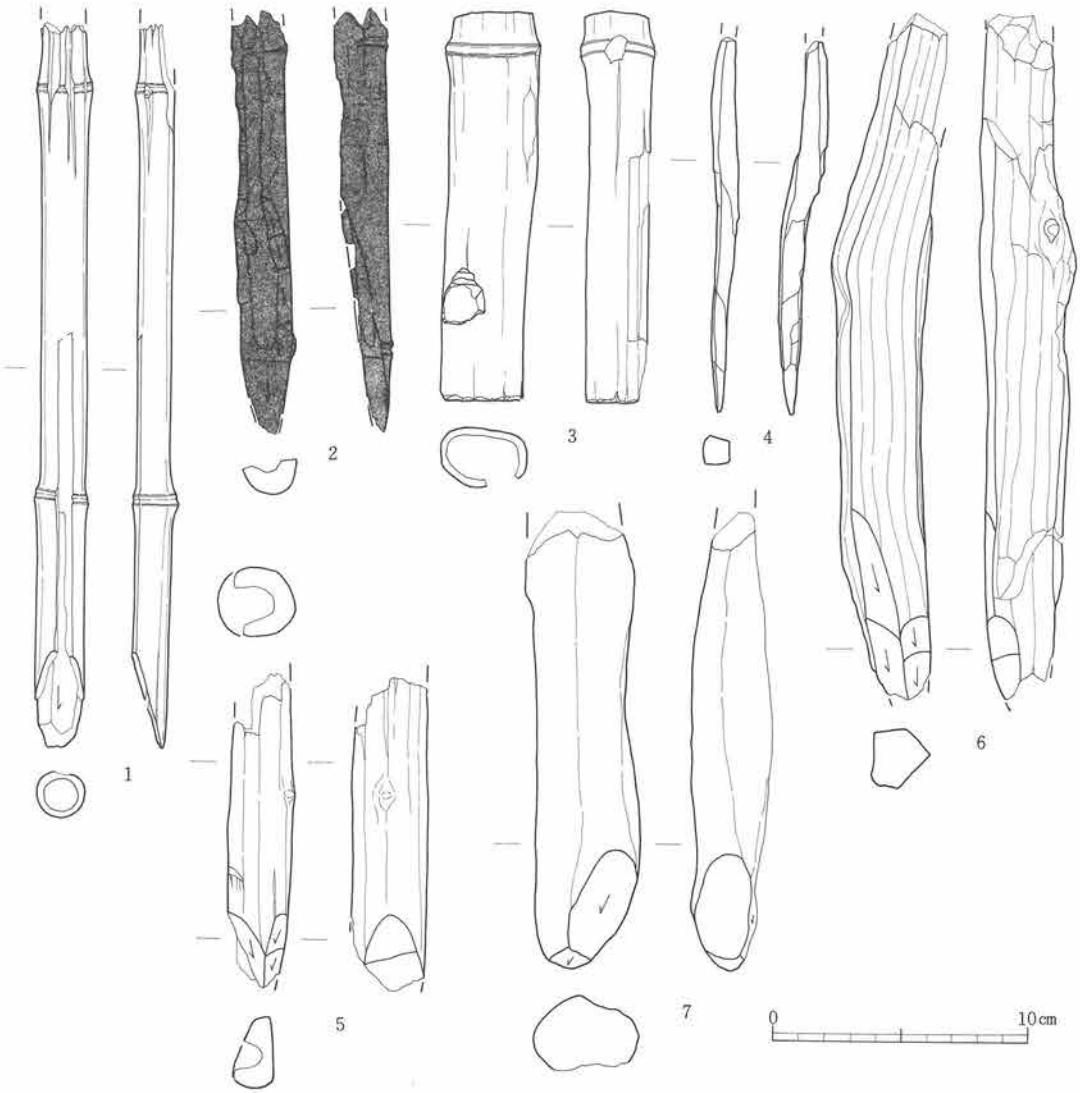






番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
1	連歯下駄	B堆6層	完形。板目材。台部は小判型をなす。歯部は台部からほぼ垂直におりる。鼻緒穴は方形に近い。	クリ(№25)	20.5	11.0	1.5	106-1	L-96
2	連歯下駄	B堆6層	欠損。板目材。台部は小判型をなす。歯部は摩耗が顕著である。	クリ(№23)	(19.2)	11.0	1.5	106-2	L-97

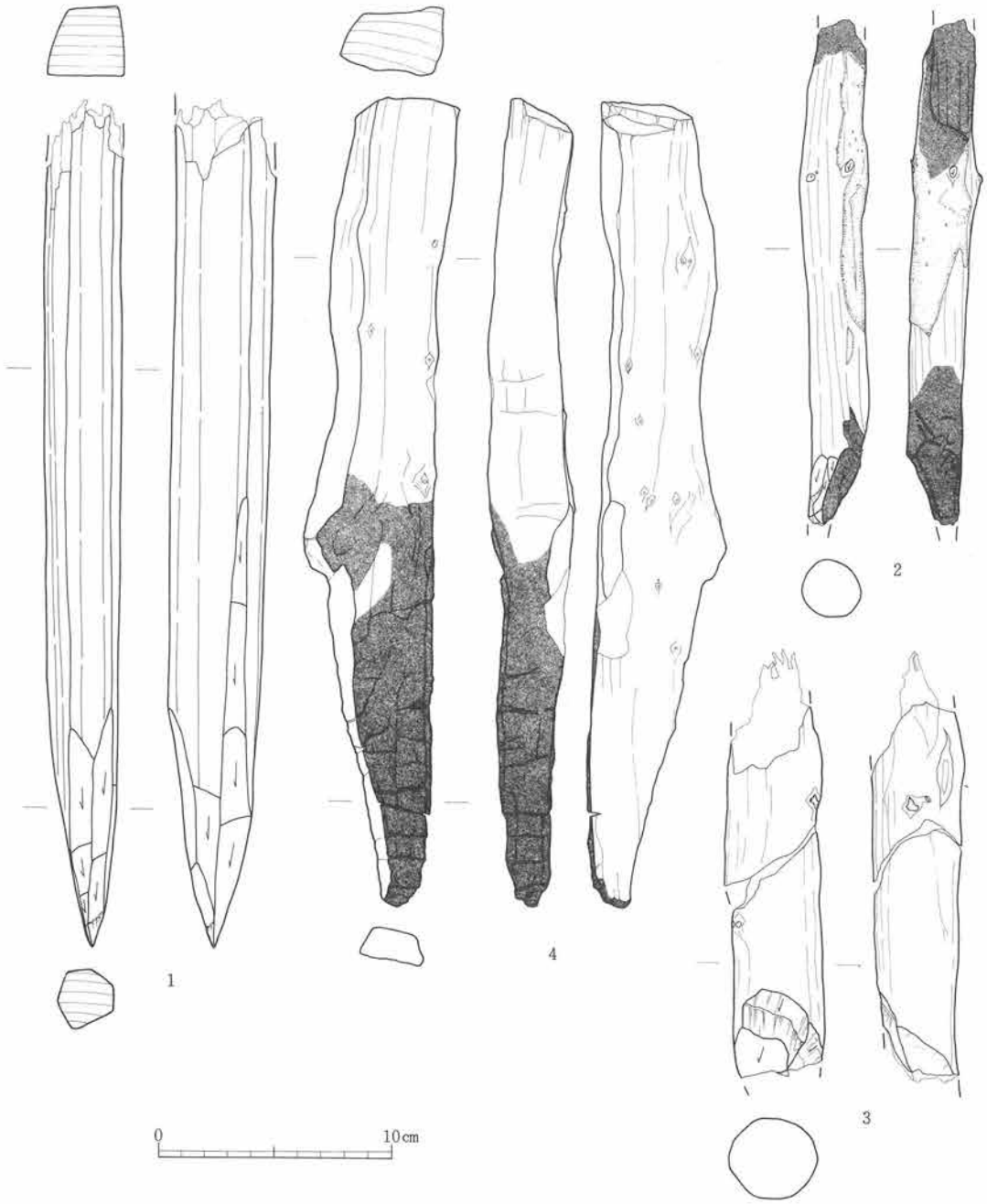
第220図　第61号溝跡出土遺物（3）



番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
1	抗材	B堆6層	先端部に加工痕あり。	竹	(28.8)	2.2	2.2	−	L-98
2	抗材	B堆6層	全体に焦痕あり。先端に加工痕あり。	竹	(16.9)	2.1	2.1	−	L-99
3	竹製品	B堆6層	両端加工。一部に盲孔あり。	竹	15.5	3.5	2.3	107-6	L-100
4	木材片	B堆6層	加工痕は見られるが用途不明。	−	(14.9)	1.0	1.1	−	L-101
5	抗材	B堆6層	丸太材 先端部に加工あり。	−	(12.5)	3.0	3.0	−	L-102
6	抗材	B堆10層	分割材 先端部に加工あり。	−	(27.2)	3.8	3.1	−	L-103
7	抗材	B堆10層	丸太材 先端部に加工あり。		(18.2)	4.1	2.3	−	L-104

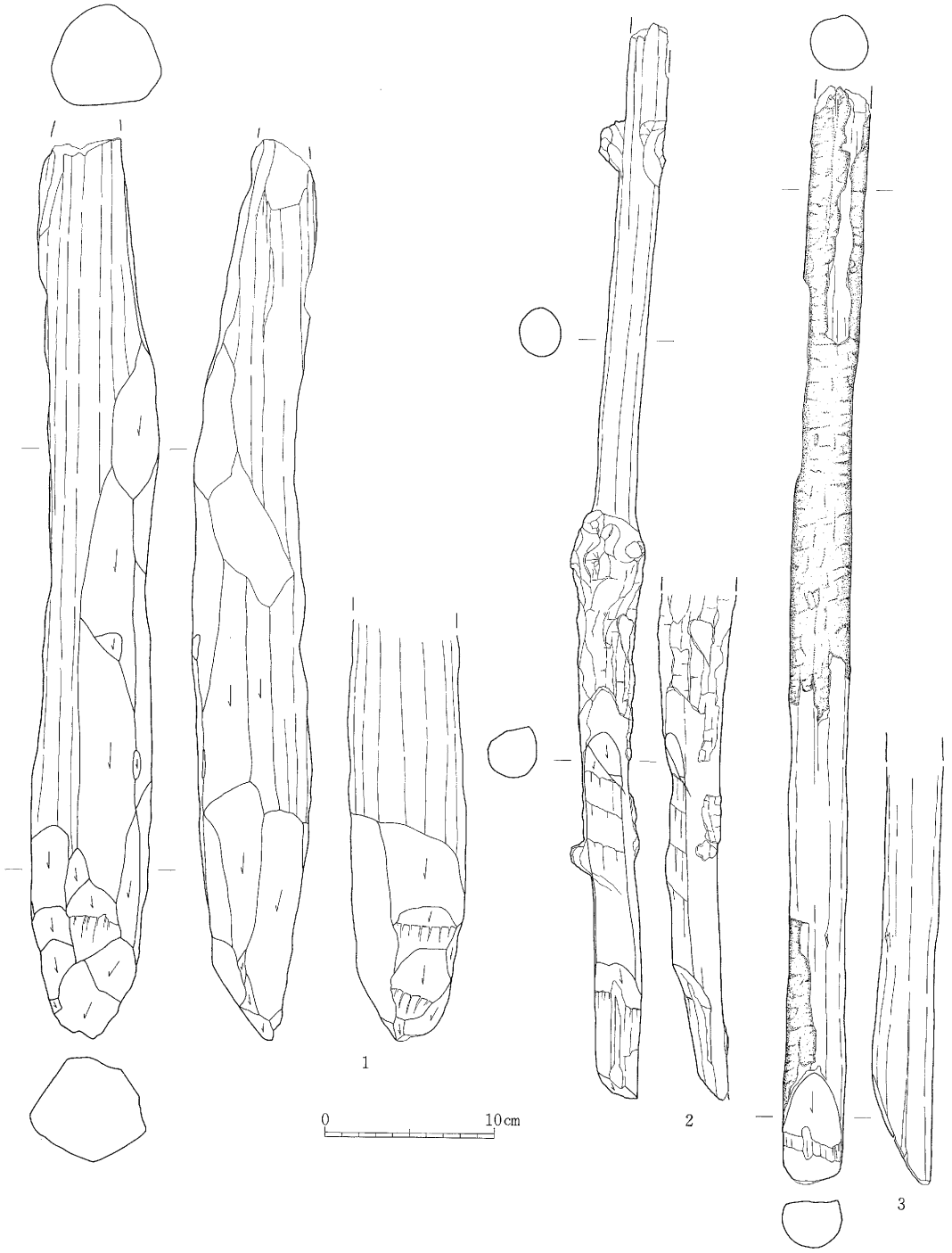
第221図　第61号溝跡出土遺物（4）

土している。



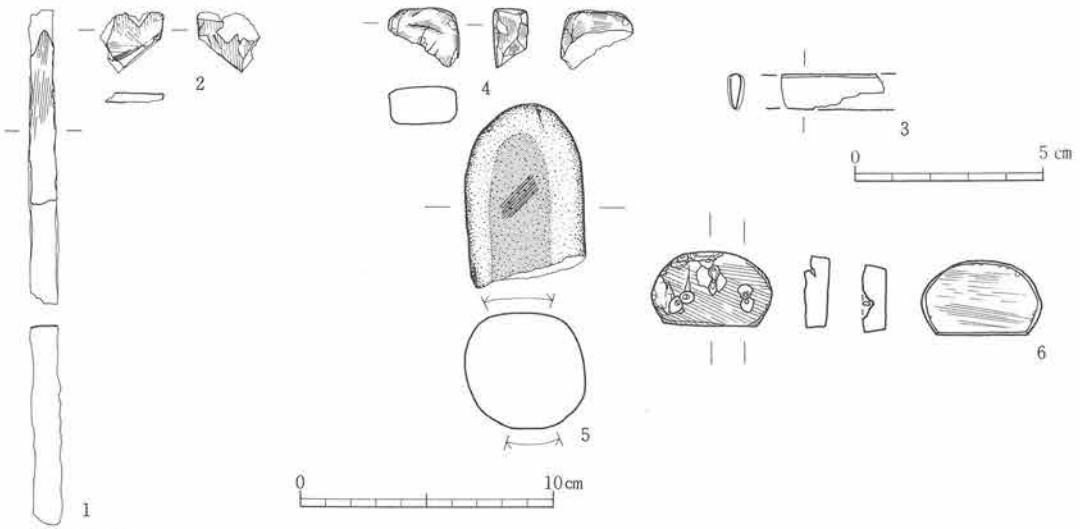
番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真図版	登録番号
1	杭材	A堆2層	分割材。 全面に加工あり。先端部仕上げが丁寧。	−	(36.7)	3.3	3.1	−	L-105
2	杭材	B堆6層	丸太材。 先端に枝払い加工あり。頭部と先端部に焦痕あり。	−	(22.0)	2.5	2.5	−	L-106
3	杭材	B堆6層	丸太材。 先端加工部に刃こぼれ痕あり。	−	(18.7)	3.7	3.8	−	L-107
4	杭材	B堆6層	分割材。 全面加工あり。胴体部より先端部にかけて焦痕あり。	−	35.0	5.5	3.0	−	L-108

第222図　第61号溝跡出土遺物（5）



番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	写真図版	登録番号
1	杭材	B堆6層	丸太材。 胴体部より先端部にかけて加工あり。	—	(53.5)	6.8	6.7	—	L-109
2	杭材	B堆6層	丸太材。 先端部にかけて加工あり。胴体部に樹皮あり。	—	(63.8)	4.4	4.5	—	L-110
3	杭材	B堆10層	丸太材。 先端加工時の刃こぼれ痕あり。胴体部に焦痕あり。	—	(65.2)	3.5	3.6	—	L-111

第223図　第61号溝跡出土遺物（6）



第62号溝跡

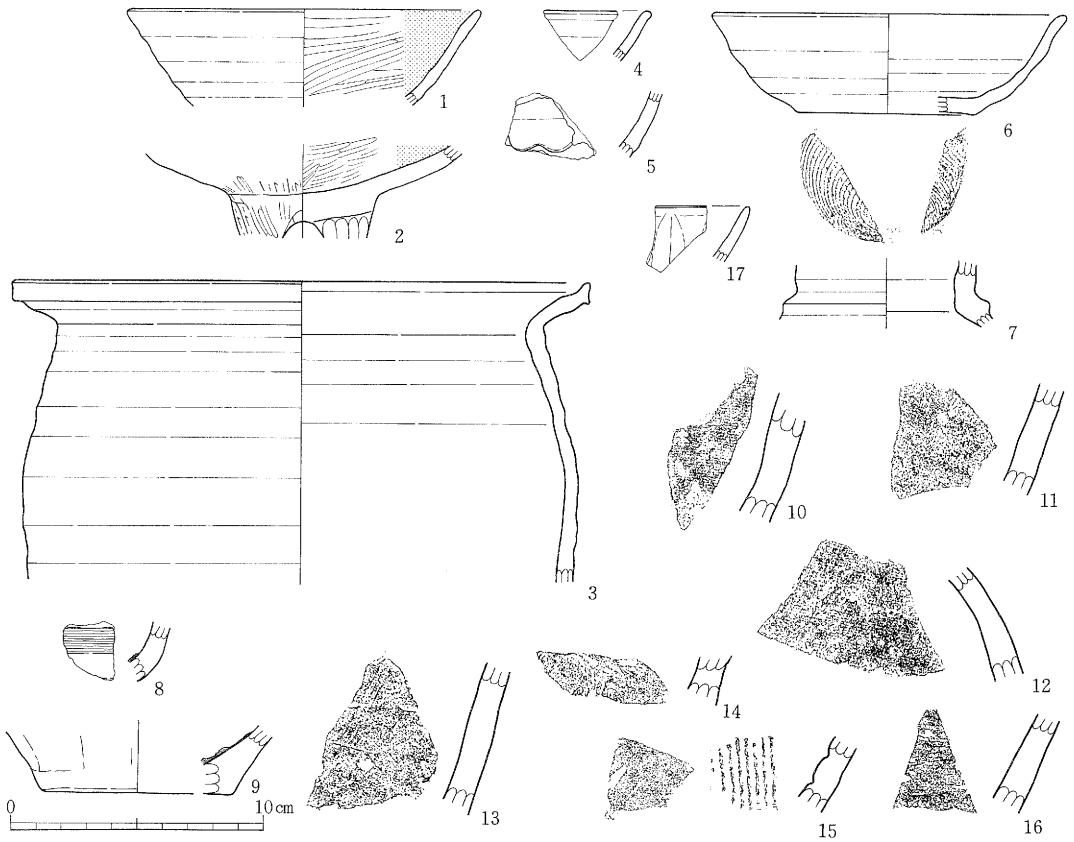
番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
1	石臼	堆1層	一部。磨滅が著しい。 粉挽き臼か茶臼か不明。茶臼であれば上臼の下面か。	(11.7)	(1.1)	(7.7)	(139)	砂岩	—	石-45
2	石製品	堆1層	両面を研磨して、薄い板状に仕上げている。 石製模造品の可能性も考えられる。	(2.4)	(2.4)	(3.5)	(2.2)	頁岩	—	石-40

第63号溝跡

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
3	鉄製品 刀子	堆2層	身の部分	(2.5)	0.9	0.3	(2.0)	—	N-56

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
4	砥石	堆1層	一部。やや扁平。軟質で砂質シルト状の石材。 砥面は上下2面か。	(2.4)	(2.8)	(1.3)	(7.2)	石英安山岩質凝灰岩	—	石-57
5	磨面をもつ礫	堆1層	下部欠損。円棒状の礫利用。 磨面上下2面に認められる。	(7.3)	4.7	4.6	(250)	安山岩	—	石-145
6	石帯	堆2層	丸鞆。黒色を呈する。表面は良く研磨され光沢を帯びる。 裏面は擦痕を残しており、3ケ所に糸穴が穿孔されている。	3.15	1.95	0.65	7.8	黒曜石	96-6	石-30

第224図　第62・63号溝跡出土遺物

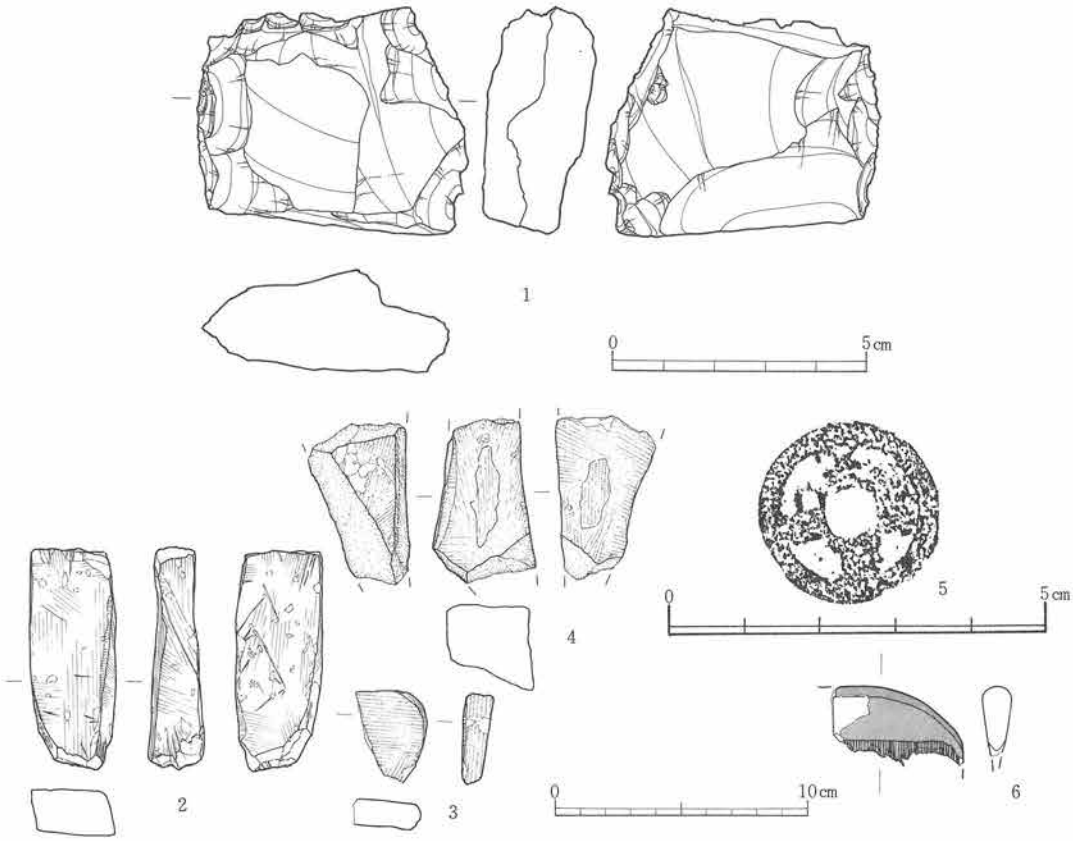


番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/6	(14.0)	—	(3.8)	—	C-307
2	土師器 高坏	堆1層	ヘラミガキ(部分的)・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	坏部下半～脚部上半	—	—	—	—	C-308
3	土師器 甕	堆3層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部上半 1/3	23.0	—	—	—	C-309
4	灰釉陶器 皿	堆1・2層	ロクロナデ・施釉	ロクロナデ・施釉	口縁部破片	—	—	—	81-10	灰-4
5	灰釉陶器 皿	堆1・2層	ロクロナデ・施釉	ロクロナデ・施釉	口縁部破片	—	—	—	81-9	灰-5
6	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	口縁部～体部1/3	14.0	7.0	4.0	79-11	E-162
7	須恵器 長頸壺	堆1・2層	ロクロナデ	ロクロナデ	頸部破片	—	—	—	—	E-163

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
8	とりべ	堆1層	外面に稜をもつ。外面はヨコナデ。内面はヨコナデ、溶解物付着。器厚は、0.8cm	口縁部～体部破片	—	—	—	91-17	ト-62
9	とりべ	堆2層	外面はオサエ。内面は溶解物付着。白針わずかに含む。器厚は、0.8cm	体部～底部 1/5	—	(7.6)	—	90-17	ト-64

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
10	陶器 甕?	堆1層	外面は調整不明、自然釉あり。 内面はヘラナデ。	常滑	中世	体部破片	—	—	—	84-9	I-85
11	陶器 甕?	堆1層	外面はナデ。 内面はヘラナデ。	常滑	中世	体部破片	—	—	—	84-10	I-86
12	陶器 甕?	堆1層	外面は調整不明。 内面はヘラナデ。	常滑	中世	体部破片	—	—	—	84-6	I-87
13	陶器 甕?	堆1層	外面はヘラナデ、ナデ。 内面はヘラナデ。	常滑	中世	体部破片	—	—	—	84-8	I-88
14	陶器 甕?	堆1層	外面はヘラナデ。 内面はナデか。白針を多く含む。	在地	13～14C	体部破片	—	—	—	—	I-89
15	陶器 擂鉢	堆1層	外面はロクロナデ。 内面には、7本以上の節目あり。	在地?	中世後半	体部破片	—	—	—	—	I-90
16	陶器 鉢	堆1・2層	外面はヘラナデ。 内面はナデ。	在地?	中世	体部破片	—	—	—	84-7	I-91
17	青磁 碗	堆1層	外面に連弁文あり。	中国 龍泉窯系	13C後半～14C前半	口縁部破片	—	—	—	85-5	J-9

第225図　第64号溝跡出土遺物（1）

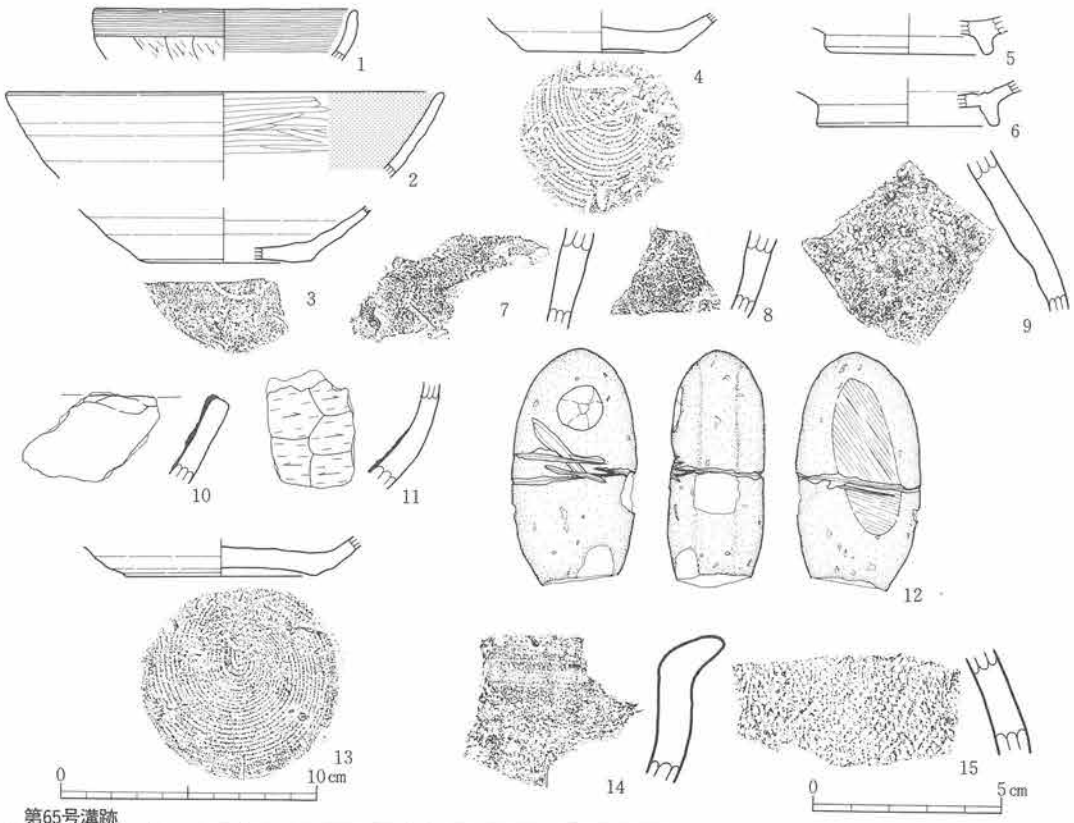


番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
1	剥片石器	堆1層	部厚い剥片の二辺には切断面が、他の二辺には2次加工が認められる。楔形石器の可能性も考えられる。	4.6	5.5	1.95	66	石英安山岩	—	石-15
2	砥石	堆1・2層	完形。やや扁平で長方形。硬質でシルト質状の石材。気孔をわずかに含む。主要砥面は上下2面で、一方向にへこんでいる。	8.75	3.4	2.2	90	石英安山岩質凝灰岩	97-15	石-73
3	砥石	堆5・6層	一部のみ。扁平。硬質で砂質状の石材。主要砥面は、上下2面とみられる。	(3.6)	(1.1)	(1.1)	(14.6)	砂岩	97-24	石-77
4	砥石	堆5・6層	両端部欠損。断面は台形状。硬質で砂質状の石材。砥面は3面。	(6.5)	(4.15)	3.7	(80)	砂岩	97-23	石-76

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
5	銅製品(古銭)	堆12層	咸平元宝(北宋)。初鋳年、咸平元年(998年)	2.4	—	0.12	2.7	102-27	N-57

番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
6	木製品 櫛	堆2層	横櫛の一部。棟が丸味をもち、両端は直線的。櫛目は細目。櫛目以外の部分に黒色漆塗付。	イスノキ(№21)	(5.3)	(2.6)	1.1	106-8	L-112

第226図　第64号溝跡出土遺物（2）



第65号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ	口縁～体部 1/8	(10.3)	−	−	−	C-310
2	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部 1/8	(17.2)	−	−	−	C311A
3	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	体～底部 1/4	−	6.8	−	−	E-164
4	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	体～底部 1/1	−	6.0	−	−	E-165
5	灰釉陶器 皿	堆1層	ロクロナデ・施釉 高台内は露胎	ロクロナデ・施釉	底部破片	−	(6.6)	−	−	灰-6
6	灰釉陶器 皿	堆1層	ロクロナデ・施釉 高台内は露胎	ロクロナデ・施釉	底部 ¼	−	7.1	−	81-14	灰-7

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	陶器 甕	堆1層	外面はヘラナデ、内面はハケメ。	常滑	中世	体部破片	−	−	−	84-12	I-92
8	陶器 壺か甕	堆2層	外面はヘラナデ、内面はハケメ。	常滑	中世	体部破片	−	−	−	84-11	I-93
9	陶器 壺か甕	堆7層	外面は自然釉、内面はナデ。	常滑	中世	体部破片	−	−	−	84-13	I-94

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
10	とりべ	堆1層	外面は調整不明。内面は溶解物付着。 白針わずかに含む。器厚−0.8cm	口縁部破片	−	−	−	91-21	ト-68
11	とりべ	堆1層	外面はヘラケズリ。内面は溶解物付着。 器厚−0.9cm	体部破片	−	−	−	91-22	ト-65

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
12	石製品	堆1層	楕円形の軟質礫の中央に1周する溝が彫り込まれている。 また、一面には凹みが、他面には磨痕が認められる。	(9.5)	4.9	3.7	(120)	石英安山岩	96-12	石-41

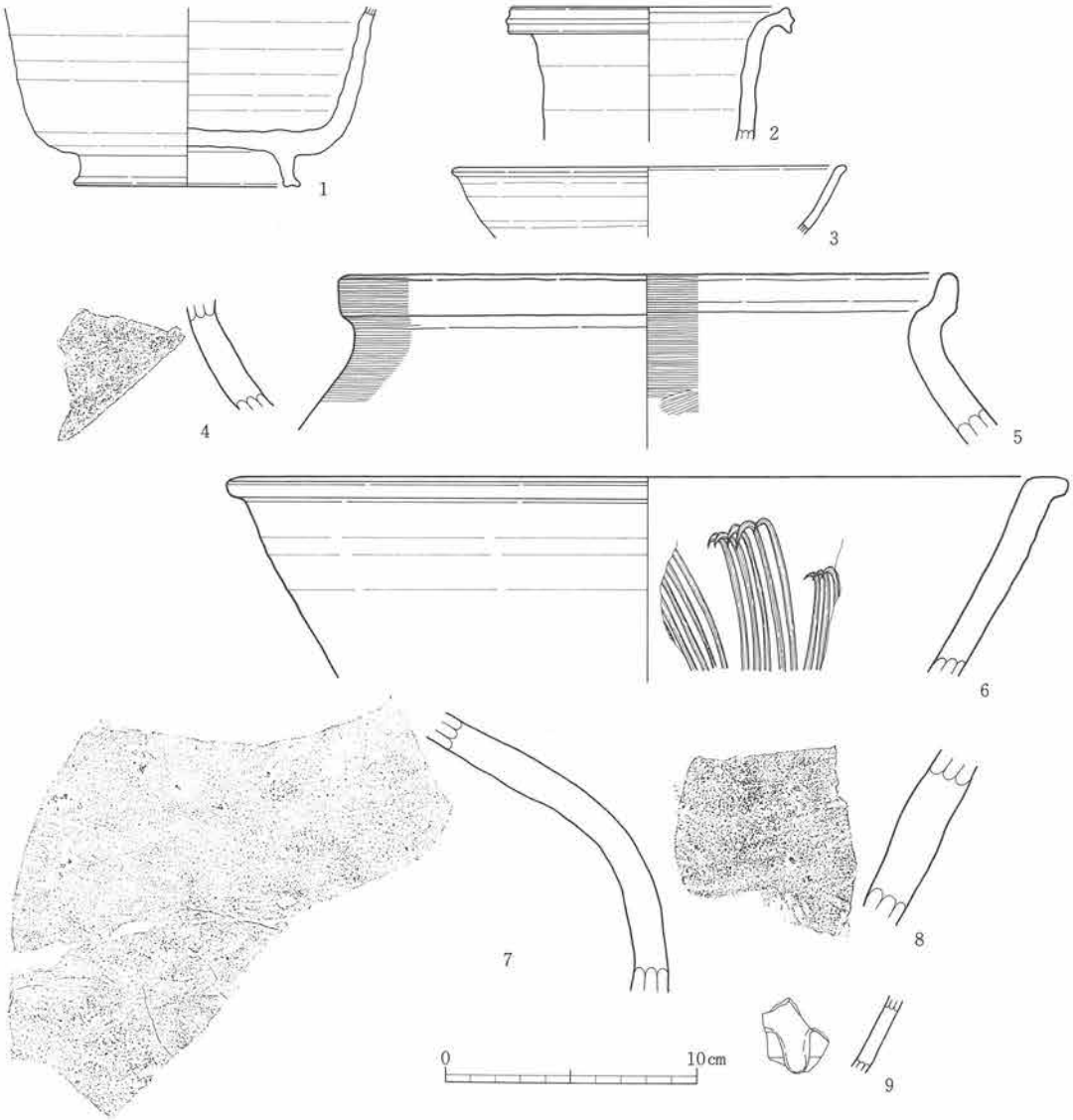
第71号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
13	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ・底部回転糸切り・手持ちヘラケズリ再調整	ロクロナデ	体部下半～底部 1/1	−	7.5	−	−	E-166

第74号溝跡

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
14	弥生土器 甕	堆1層	体部外面に撚糸文R。外面はナデ、内面はミガキ。	口縁部破片	−	−	−	88-4	弥-37
15	弥生土器 甕?	堆1層	縄文LR。内面ミガキ。	体部破片	−	−	−	−	地-103

第227図　第65・71・74号溝跡出土遺物



第76号溝跡

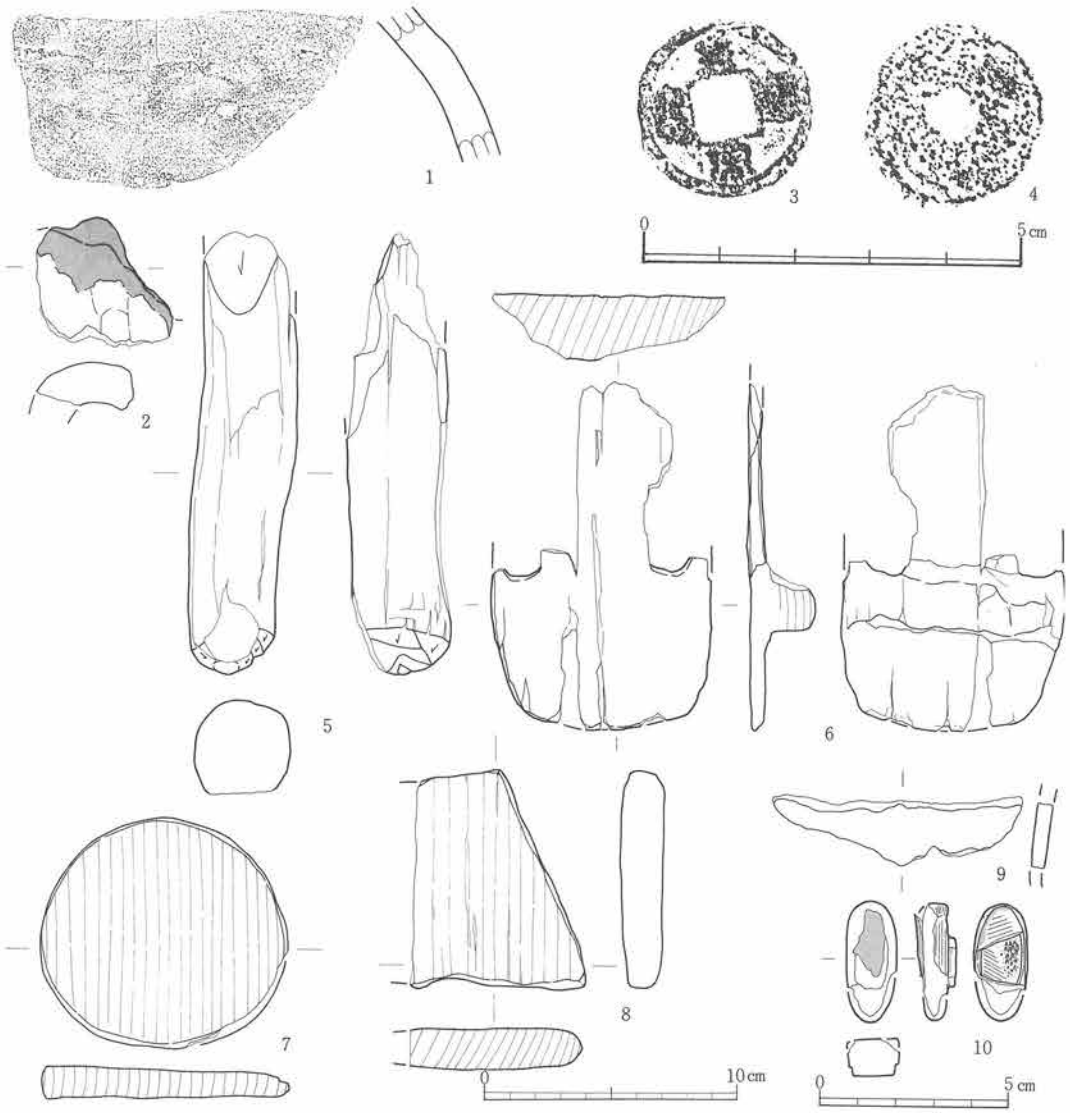
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器高台付埦	堆1層	底部回転ヘラ切り、切り離し後高台をつけロクロナデ再調整	ロクロナデ	体部下半～底部	－	9.0	7.1	－	E-167

第77号溝跡

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	灰釉陶器長頸瓶	堆1～4層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/12	(11.3)	－	－	81-15	E-168
3	灰釉陶器 埦	堆1層	刷毛塗り 端反りの口縁・ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/12	(15.6)	－	－	81-5	灰-8

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	陶器 壷か甕	堆1層	外面は調整不明 内面はヨコナデ	常滑	中世	体部(肩部)破片	－	－	－	84-14	I-95
5	陶器 甕	堆1～4層	外面はヨコナデ 内面はヨコナデ・ナデ・ヘラナデ	在地 白石窯	13C後半 ～14C	口縁部 1/8	(24.5)	－	－	84-16	I-96
6	瓦質土器 摺鉢	堆1層	内外面ともロクロナデ 内面には5本単位の筋目あり。	在地	15C～16C	口縁部～体部 1/15	(33.5)	－	－	84-19	I-97
7	陶器 壷か甕	堆1～4層	内外面ともヘラナデ。	在地？	中世	体部(肩部)破片	－	－	－	84-17	I-98
8	陶器 壷か甕	堆5～8層	外面はヘラナデ 内面はナデ	在地？	中世	体部破片	－	－	－	84-15	I-99
9	陶器 天目茶埦	堆5～8層	施釉(鉄釉) 外面の下方は露胎	古瀬戸	14C末～ 15C初	体部破片	－	－	－	－	I-100

第228図　第76・77号溝跡出土遺物（1）



番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	陶器 甕	堆5～8層	内外面ともヘラナデ。	在地 白石窯	13~14C	体部(肩部)破片	−	−	−	84-18	I-101

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
2	フイゴの羽口	堆1～4層	先端部破片。溶解物付着。外面はオサエ。	(4.8)	(5.3)	(1.6)	(51)	(1.6)	94-6	土-51

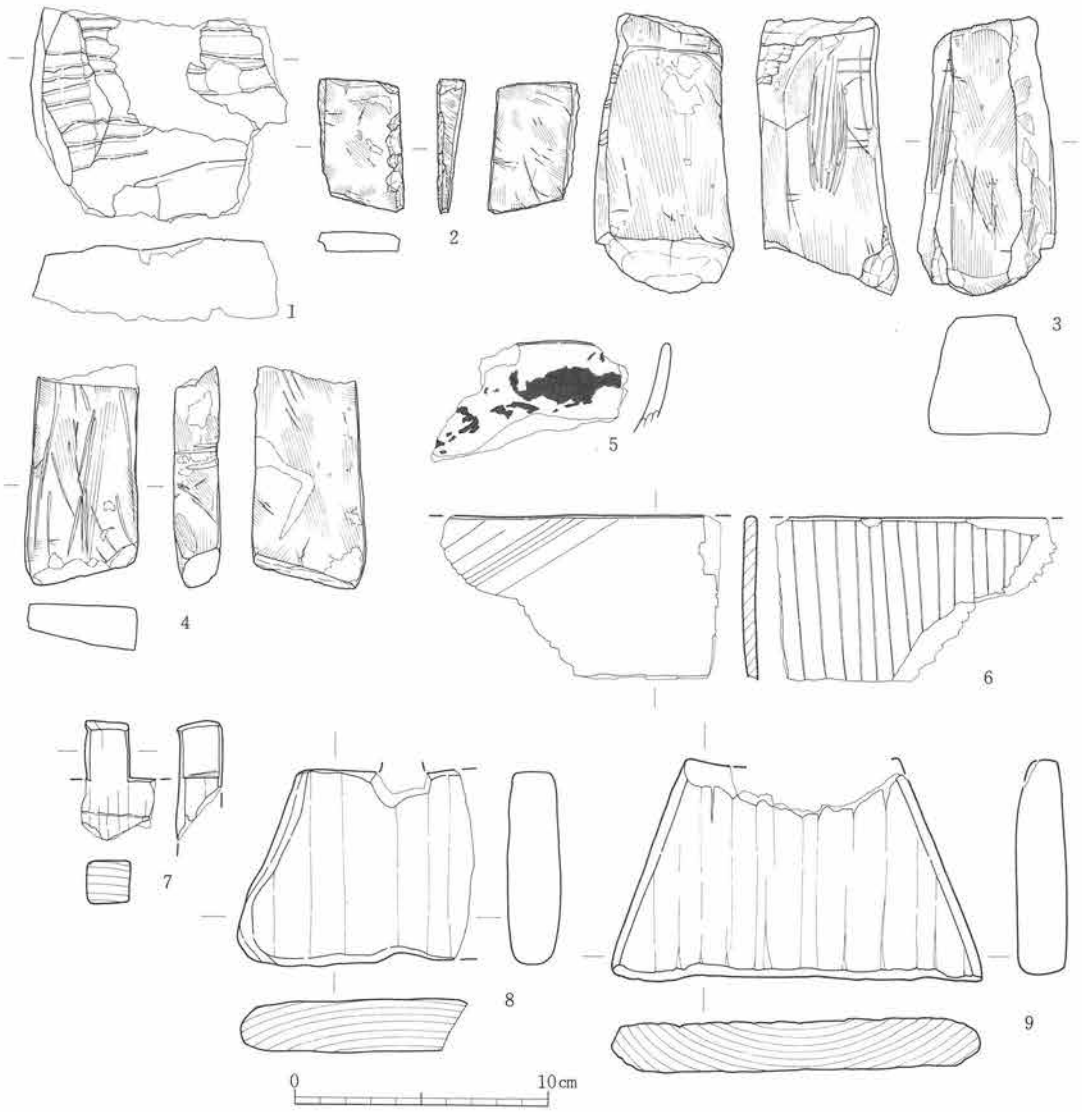
番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
3	銅製品 古銭	堆5～8層	皇宋通宝(北宋)、初鋳年宝元2年(1039年)	2.4	−	0.16	2.5	102-23	N-58A
4	銅製品 古銭	堆5～8層	名称不明	2.4	−	0.15	2.3	102-26	N58B

番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
5	杭材	堆5～8層	丸太材、先端加工あり	−	(17.5)	3.8	3.8	−	L-113
6	木製品 連歯下駄	堆5～8層	半分欠損。柾目材。台部は小判型に近い。歯部は台部から垂直におりる。	クリ(№27)	(13.8)	(8.7)	(2.6)	106-3	L-114
7	木製品 曲物底板	堆6層	一部欠損。柾目材	アスナロ(№34)	9.3	9.3	1.3	105-6	L-115
8	木製品 差歯下駄	堆5～8層	歯の部分。柾目材。台形状をなす。	ヤマグワ(№28)	(8.7)	(7.0)	1.6	106-7	L-116

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
9	鉄製品 鍋?	堆2層	鋳造品	(1.7)	(6.5)	0.4	(8.0)	102-15	N-59

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
10	鹿角製品	堆5～8層	一部欠損。楕円形状のものか。鞘尻か柄頭と考えられる。所々に黒色漆を塗った痕跡あり。	(3.05)	1.4	0.9	109-1	Q-1

第229図　第77号溝跡出土遺物（2）



番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
1	土製品	堆4・5層	一部のみ。一面に竹の管の子様の圧痕がみられる。全体的に、火熱を受けている。	(8.3)	(10.1)	(3.3)	215	—	94-14	土-68

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
2	砥石	堆4・5層	完形。扁平で長方形。一端部は折損の痕跡あり。硬質で粘土質状の石材。砥面は上下2面、1側面には擦り切りの痕跡を残す。	5.3	3.2	1.0	24.2	凝灰質頁岩	97-11	石-58
3	砥石	堆4・5層	完形。方柱状。両端部は折損した痕跡がある。軟質でシルト質状の石材。砥面は4面とみられ、その一部には線状痕が認められる。	11.2	5.5	5	290	石英安山岩質凝灰岩	97-18	石-62
4	砥石	堆9層	一部欠損。扁平で長方形。軟質でシルト質状の石材。4面とも砥面に使用されている。	(8.3)	4.5	1.9	(100)	石英安山岩質凝灰岩	97-16	石-66

番号	種別	層位	特徴	樹種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	写真図版	登録番号
5	漆器 椀	堆9層	口縁の一部。全体に欠損している。外面は、黒色漆の上に赤色漆・茶褐色漆の文様。内面は、茶褐色漆塗仕上げ。	ブナ属の一種(№20)	—	—	—	—	L-117

番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
6	曲物 側板	堆9層	内面部に掛引きあり。 外面部にキズあり。	ヒノキ科の一種(№46)	(6.5)	(11.0)	0.5	—	L-118
7	差歯下駄	堆4・5層	歯の一部。板目材。柄の部分。	ケヤキ(№31)	(4.7)	(2.8)	1.7	—	L-119
8	差歯下駄	堆6層	歯の部分。板目材。台形状をなし、柄の部分は欠けている。	ケヤキ(№26)	7.8	9.0	2.0	106-5	L-120
9	差歯下駄	堆4・5層	歯の部分。板目材。台形状をなし柄の部分は欠けている。	ケヤキ(№30)	8.8	14.6	2.0	106-6	L-121

第230図　第78号溝跡出土遺物（1）

11. 溝状遺構

第1号溝状遺構

【位置】I区　N32.3～36.6　W97.5～98.2

【確認面・重複】IV層上面で確認された。北側は調査区外に延びている。重複は認められない。

【方向・規模】直線的に延び、その南端部で東の方向に屈曲する。方向は、N－18°－Eである。確認された長さは4.26m、溝幅は最大で上端幅66cm、下端幅30cm、深さは最深で17.5cmである。

【堆積土】1層認められ、黒褐色の粘土質シルトである。

【壁・底面】断面は逆台形に近い。壁の立ち上がりはゆるやかである。壁面は一定しておらず起伏が認められる。多少の凹凸があり、全体的には北方向に傾斜している。

【出土遺物】出土していない。

第2号溝状遺構

【位置】I区　N31.7～35.5　W75～83.4

【確認面】IV層上面で確認された。南側は調査区外に延びている。

【方向・規模】ゆるやかな弧状をなす。途中途切れる。東から南方向にゆるやかなカーブを描く。確認された長さは9.2mで、上端幅は52cm、下端幅は36cm、深さは10cmである。

【堆積土】1層のみ認められ、自然堆積層である。

【壁・底面】断面は逆台形に近く、壁は底面からやや急に立ち上がりながら外傾する。底面は凹凸が著しく、全体的にわずかではあるが、東の方に下がっている。

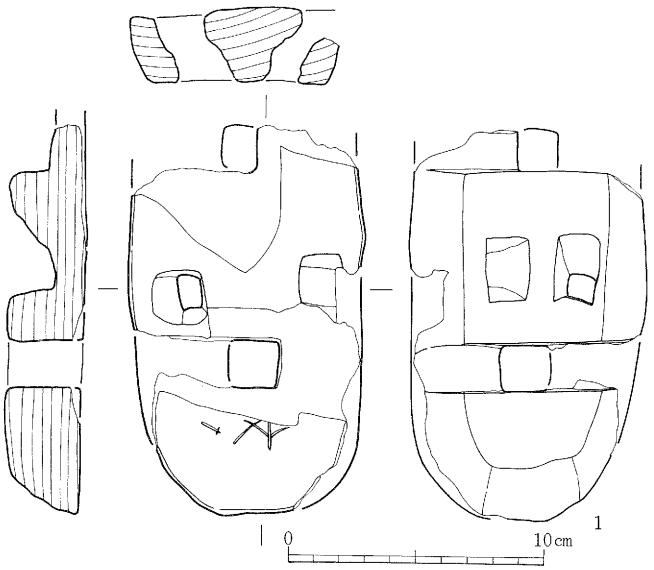
【特記事項】第3号溝状遺構とほぼ直角に交わること、特徴が共通していることから一連の遺構の可能性が考えられる。

【出土遺物】出土していない。

第3号溝状遺構

【位置】I区　N35.3～37.2　W80.2～80.6

【確認面】IV層上面で確認された。



番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
1	差歯下駄	堆4・5層	台部の一部。歯部は欠損。板目材。露卯差歯下駄。長円形の台部。台裏には、溝と枘穴(2孔)あり。	モクレン属の一種(No.29)	(15.5)	9.3	3.0	106-4	L-122

第231図　第78号溝跡出土遺物（2）

【方向・規模】ほぼ直線的に走行する。真北方向よりやや東に寄り、N－14.5°－Eである。確認された長さは1.84mで、上端幅は26cm、下端幅は16cm、深さは8cmである。

【堆積土】1層のみ認められ、自然堆積層である。

【壁・底面】断面は逆台形に近く、壁は底面からやや急に立ち上がりながら外傾する。底面は凹凸が著い。

【特記事項】ほぼ直角に交わる第2号溝状遺構とは特徴も共通しており、一連の遺構と考えられる。

【出土遺物】出土していない。

第4号溝状遺構

【位置】I区　N30.5～35.2　W29.6～30.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。北側は他遺構で切られており、南側はさらに調査区外へ延びている。第11号溝跡・第3号ピット群の一部と重複しており、いずれよりも古い。

【方向・規模】いく分屈曲はするが、ほぼ直線的に走行する。真北方向よりやや東に寄っており、N－15°－Eである。確認された長さは4.60m、上端幅は48cm、下端幅は28cm、深さは16cmである。

【堆積土】1層のみ認められ、自然堆積層である。

【壁・底面】断面はほぼ「U」字形をなし、壁は底面からゆるやかに立ち上がりながら外傾する。底面は部分的にやや起伏があるが、概して平坦である。

【出土遺物】出土していない。

第5号溝状遺構

【位置】I区　N29.1～34.3　W15.7～17.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。北側は撹乱により失われている。南側はさらに調査区外へ延びる。第1号掘立柱建物跡と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】わずかに弯曲するものの、全体的には直線状に走行する。真北方向よりいく分東に寄り、N－18°－Eである。確認された長さは5.32m、上端幅は34cm、下端幅は16cm、深さは7cmである。

【堆積土】1層のみ認められ、自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面は皿状をなし、壁は底面からゆるやかに立ち上がる。底面はやや起伏があり、南から北へわずかに傾斜している。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の使用痕のある剝片1点のみで、他に土師器破片1点出土している。

第6号溝状遺構

【位置】II区　N5.6～6.6　W106.8～109.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。西側は調査区外に延びている。第9号土坑と重複しており、それより新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行する。その方向は真北とほぼ直交し、N－82.5°－Wである。確認された長さは2.60m、上端幅は52cm、下端幅は29cm、深さは22cmである。

【堆積土】1層のみ認められ、自然堆積層である。

【壁・底面】断面は不整な四角形状をなし、底面の北側がやや深くなっている。壁は北側が急角度で、南側は比較的ゆるやかに立ち上がる。底面は東端に向かい、傾斜している。

【出土遺物】図示できるものはないが、堆積土から土師器破片12点・赤焼土器破片1点が出土している。

第7号溝状遺構

【位置】II区　N4～4.6　W106.6～109.1

【確認面・重複】IV層上面および第16号掘立柱建物跡の堆積土上面で確認された。東側は撹乱溝により失われている。第16号掘立柱建物跡と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行する。その方向は東方向に近く、N－76.5°－Wである。確認された

長さは2.50mで、上端幅は40cm、下端幅は18cm、深さは51cmであり、幅に比して深いのが特徴である。

【堆積土】4層認められた。いずれも自然堆積層であり、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面は「U」字形をなし、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

【出土遺物】図示できるものはなく、わずかに堆積土から土師器破片1点が出土したにすぎない。

第8号溝状遺構

【位置】II区　N2.6～5.2　W54.1～54.7

【確認面・重複】IV層上面で確認された。南側は第16号溝跡により、北側は削平により失われている。第16号溝跡と重複しており、それより古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行している。その方向は、真北方向よりわずかに東に寄っており、N－9°－Eである。確認された長さは2.60mで、上端幅は40cm、下端幅は21cm、深さは12cmである。

【堆積土】1層認められ、自然堆積層である。

【壁・底面】断面はほぼ逆台形をなすが、底面は起伏が大きく断面形状も一定していない。壁は底面からやや急に立ち上がり外傾する。

【特記事項】すぐ東側にある第11号溝状遺構と方向や規模が類似しており、相互の関連性が考えられる。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の磨面をもつ礫1点のみで、他に土師器破片1点・赤焼土器破片1点が出土している。

第9号溝状遺構

【位置】II区　N3～4.2　W60.2～69.2

【確認面・重複】IV層上面で確認された。全体が確認された。第12号土坑と重複しており、それより新しい。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行し、その両端はわずかに丸みをもって終結している。その方向は東西方向より若干北に寄っており、N－80°－Wである。長さは8.94m、上端幅は37cm、下端幅は21cm、深さは16cmである。

【堆積土】2層認められた。ともに自然堆積層であり、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面はほぼ「U」字形をなしており、壁は底面からゆるやかに立ち上がり外傾する。底面は西側より東側の方が幾分低くなっている。

【出土遺物】図示できるものはなく、堆積土から土師器破片1点が出土したにすぎない。

第10号溝状遺構

【位置】II区　N4.7～5.6　W62.4～65.6

【確認面・重複】IV層上面で確認された。北側は調査時の排水溝によって失われているが、さらに調査区外に延びるものと考えられる。重複はない。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行しており、その方向は真北と丁度直交する。確認された長さは2.92mで、上端幅は34cm、下端幅は20cm、深さは16cmである。

【堆積土】2層認められた。ともに自然堆積層で、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面は「U」字形をなす。壁は底面から明瞭な境を持たずにゆるやかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。

【出土遺物】図示できるものはなく、堆積土から土師器破片2点が出土したにすぎない。

第11号溝状遺構

【位置】II区　N2.3～3.4　W53.1～53.7

【確認面・重複】IV層上面で確認された。南側は第16号溝跡と重複しており、それに切られている。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行する。その方向はほぼ真北方向で、N－1.5°－Eである。北端は丸みをもって終結している。この部分にピット状の落ち込みがあるが、これは第7ピット群のピットの可能性も考えられる。確認された長さは1.08mで、上端

幅は34cm、下端幅は22cm、深さは9cmである。

【堆積土】1層認められ、自然堆積層である。

【壁・底面】底面は起伏が大きく、断面形状は一定していない。壁は底面からやや急に立ち上がり、外傾する。

【特記事項】西側を走行する第8号溝状遺構と方向・規模が類似しており、相互の関連性が考えられる。

【出土遺物】出土していない。

第12号溝状遺構

【位置】II区　N4.7～S0.3　W32.3～32.9

【確認面・重複】IV層上面および河川跡堆積土上面で確認された。途中他の遺構に切られており、また、北は調査区外へ延びている。第8号竪穴住居跡・第16号溝跡と重複しており、それらより古い。

【方向・規模】ほぼ直線的に走行している。その方向は真北より若干東に寄っており、N－16°－Eである。確認された長さは5.04mで、上端幅は46cm、下端幅は32cm、深さは13cmである。

【堆積土】1層認められ、自然堆積層である。

【壁・底面】底面は起伏が大きく、断面形状は一定していない。壁の底面からややゆるやかに立ち上がり、外傾する。底面は南から北へわずかに傾斜している。

【出土遺物】出土していない。

第13号溝状遺構

【位置】II区　N1.9～S1.4　W25.9～27.1

【確認面・重複】IV層上面で確認された。南側はさらに調査区外へ延びている。第8号ピット群のピットと重複しており、それより古い。

【方向・規模】ほぼ直線状に走行する。その方向は、真北より大きく東に寄っており、N－30°－Eである。確認された長さは3.30mで、上端幅は44cm、下端幅は29cm、深さは14cmである。

【堆積土】2層認められた。ともに自然堆積層で、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面は逆台形に近い。壁はほぼ平坦な底面からやや急角度で立ち上がる。底面は南から北へわずかに傾斜している。

【出土遺物】図示できるものはなく、堆積土から土師器破片2点が出土したにすぎない。

第14号溝状遺構

【位置】II区　S1.5～2.1　W3.2～E1.4

【確認面・重複】IV層上面および第13号竪穴住居跡堆積土上面で確認された。全体が検出された。第13号竪穴住居跡と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】直線的に走行する。その方向は東西方向より若干北に寄っており、N－76°－Wである。両端にいくらか丸みをもって終結する。長さは4.60mで、上端幅は40cm、下端幅は27cm、深さは20cmである。

【堆積土】1層認められた。自然堆積層であり、底面付近ではIV層ブロックを多量に含んでいる。

【壁・底面】断面は逆台形に近い。壁はほぼ平坦な底面から直立ぎみに立ち上がる。底面は遺構中央部がやや深く、そこから両端に向かい上がっている。

【出土遺物】図示できるものはなく、堆積土から土師器破片5点が出土したにすぎない。

第15号溝状遺構

【位置】III区　E5～8.3　S8.3～18.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。他の遺構により大きく切られており、遺存状況は悪い。第12・15号竪穴住居跡、第20・21号溝跡と重複しており、これらよりも古い。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はN－1°－Wの、ほぼ真北方向を示す。検出された長さは9.4mで、溝幅は上端が1.30m、下端が63cmで、深さは最大で20cmである。

【堆積土】２層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】断面は皿状をなしており、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、大きく開く。底面はほぼ平坦である。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の須恵器１点と磨面をもつ礫１点で、この他に土師器破片11点が出土している。

第16号溝状遺構

【位置】Ⅲ区　E7.2～9.8　N6.2～7.2

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。西側は撹乱により失われている。重複関係は認められない。

【方向・規模】直線状に東西方向に走行しており、その方向はＮ－70°－Ｗである。東側は途切れるが、西側はさらに延びており、確認された長さは2.16ｍである。幅は、上端は87cm、下端32cmで、深さは40cm前後である。

【堆積層】１層のみ認められ、Ⅳ層ブロックを多く含む層であり、人為堆積の可能性が考えられる。

【壁・底面】断面は「U」字形をなしており、壁は底面からゆるやかに立ち上がり、外方に大きく開いている。東端の立ち上がりもほぼ同様である。底面はほぼ平坦で、その近くからは小さなピットが多数検出された。ピットの位置や方向には規則性はみられない。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の土師器１点のみである。この他に土師器破片１点・赤焼土器破片１点が出土している。

第17号溝状遺構

【位置】Ⅳ区　N65.4～70　E30～30.9

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。途中が他の遺構によって失われているが、北はさらに調査区外に延びている。第28号溝跡と重複しており、それより古い。

【方向・規模】直線状に走行するものと推定される。その方向は真北より若干東に寄り、Ｎ－11.5°－Ｅである。確認された長さは4.68ｍで、上端幅は57cm、下端幅は45cm、深さは８cmである。

【堆積土】１層のみ確認された。Ⅳ層のブロックを多く含む層である。

【壁・底面】断面は皿状に近い。壁面・底面とも一定しておらず、起伏が認められる。底面はわずかに北方向に下がっている。

【出土遺物】出土していない。

第18号溝状遺構

【位置】Ⅴ区　S0.2～1.8　E47.9～48.6

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは一部で、両側は他の遺構により失われている。第５号性格不明遺構・第17号ピット群のいくつかと重複しており、これらより古い。

【方向・規模】直線状に走行するものとみられ、その方向はほぼ真北方向を向き、Ｎ－5°－Ｗである。確認された長さは1.76ｍで、上端幅は37cm、下端幅は20cm、深さは９cmである。

【堆積層】１層のみ確認された。層の下部にはⅣ層ブロックが含まれる。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近い。壁の立ち上がりはゆるやかである。底面には起伏がみられるが、全体的には平坦である。

【出土遺物】出土していない。

第19号溝状遺構

【位置】Ⅴ区　S1.2～2.2　E47.2～47.9

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。南は第５号性格不明遺構に切られており、したがってそれよりも古い。

【方向・規模】直線的に走行するものと推定される。その方向は真北とほぼ一致し、Ｎ－3.5°－Ｗである。確認された長さは96cmで、上端幅は40cm、下端

幅は16cm、深さは平均34cmである。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層で、レンズ状の堆積状況を示している。層No.1・2には焼土粒が含まれている。

【壁・底面】断面形は「U」字形に近い。壁の立ち上がりはゆるやかである。底面は起伏があり、北方向に下がっている。

【特記事項】堆積土中に焼土が含まれていること、北端部が最も低くなっていることから、竪穴住居跡のカマドの煙道の可能性も考えられる。

【出土遺物】出土していない。

第20号溝状遺構

【位置】V区　S1.3～2.3　E34.9～38.9

【確認面・重複】IV層上面および第19号竪穴住居跡の堆積土中で確認された。したがって、第19号竪穴住居跡より新しく、また、重複する第16号ピット群のいくつかより古い。西は調査区外に延びている。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北とほぼ直交し、N－88°－Wである。確認された長さは約4mで、上端幅は49cm、下端幅は26cm、深さは平均30cmである。

【堆積層】4層確認された。いずれも自然堆積層とみられ、両側から流入している。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなし、壁は皿状の底面からゆるやかに立ち上がり、上方に開いている。底面は平坦で、全体的にわずかに東に向かって下がっている。

【出土遺物】図示できるものはないが、堆積土中から土師器破片21点・須恵器破片1点が出土している。

第21号溝状遺構

【位置】VII区　S35.1～35.8　E24.1～27.8

【確認面・重複】IV層上面および第24号竪穴住居跡の堆積土中で確認された。したがって、この住居跡よりも新しい。西はさらに調査区外に延びている。

【方向・規模】ほぼ直線状に走行するものと推定され、その方向は真北と直交しており、N－88°－Wである。確認された長さは2.04mで、上端幅は40cm、下端幅は23cm、深さは平均20cmである。

【堆積層】2層確認された。自然堆積層とみられ、水平状の堆積状況を示している。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなし、壁は皿状の底面から直立ぎみに立ち上がっている。底面は概して平坦である。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の土師器1点・弥生土器1点・鉄製品1点である。この他に土師器破片15点・須恵器破片3点が出土している。

第22号溝状遺構

【位置】VI区　S31.3～33.4　W0.5～1.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。全体が検出された。第87号土坑・第23号溝状遺構などと重複しており、いずれよりも新しい。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はほぼ真北と一致しており、N－1°－Eである。長さは2.16mで、上端幅は51cm、下端幅は32cm、深さは20cmである。

【堆積層】1層のみ確認された。層中には焼土・炭化物が含まれている。

【壁・底面】壁は底面から直角ぎみに立ち上がり、上方に開いている。底面は平坦ではなく、東側が下がっている。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の須恵器1点で、この他に土師器破片36点・鉱滓2点が出土している。

第23号溝状遺構

【位置】VI区　S29.9～31.4　W1.1～1.7

【確認面・重複】IV層上面で確認された。北は第1号堀跡に切られ、南は第22号溝状遺構に切られており、したがってこれらより古い。また、第20号ピッ

ト群の１つを切っており、これより新しい。

【方向・規模】直線状に走行するものとみられ、その方向は真北とほぼ一致し、N－1°－Eである。確認された長さは1.48mで、上端幅は48cm、下端幅は22cm、深さは８cmである。

【堆積層】１層のみ確認された。IV層ブロックを含む層である。

【壁・底面】断面形は逆台形に近く、壁は直線的に開いている。底面は概して平坦である。

【出土遺物】図示できるものはなく、堆積土から土師器破片３点・須恵器破片１点が出土している。

第24号溝状遺構

【位置】VI区　S29.3～34.1　W5.9～6.9

【確認面・重複】IV層上面で確認された。検出されたのは一部で、南は調査区外に延び、北は第１号堀跡に切られている。第83・88号土坑、第53号溝跡などと重複しており、いずれよりも古い。

【方向・規模】検出部分では直線的に走行し、その方向は真北より東に寄り、N－14.5°－Eである。確認された長さは4.76mで、上端幅は60cm、下端幅は44cm、深さは18cmである。

【堆積層】１層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面は丸底状をなし、壁は底部から明瞭な境をもたずにゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の土師器１点のみで、他に土師器破片11点・須恵器破片２点が出土している。

第25号溝状遺構

【位置】VI区　S33.2～34.1　W8～8.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。検出されたのは一部で、南は調査区外に延び、北は第１号堀跡に切られている。

【方向・規模】直線状に走行するものと推定され、その方向は真北に近い。確認された長さは96cmで、上端幅は32cm、下端幅は22cm、深さは４cmである。

【堆積層】１層のみ確認された。IV層粒子をまばらに含んでいる。

【壁・底面】断面形は逆台形に近いが、西壁は途中から外に大きく開いている。

【出土遺物】図示できるものはなく、堆積土から土師器破片８点・須恵器破片１点が出土している。

第26号溝状遺構

【位置】VII区　S72.4～73　E69.8～71.8

【確認面・重複】IV層上面で確認され、ほぼ全体が検出された。第18号掘立柱建物跡のP2と重複しており、それより古い。

【方向・規模】直線的に走行し、その方向は真北と直交する方向に近く、N－83°－Wである。長さは約２mで、上端幅は38cm、下端幅は20cm、深さは平均12cmである。

【堆積層】２層確認された。層No.１はIV層ブロックを多く含む層である。

【壁・底面】断面形は丸底状をなし、壁は底面から明瞭な境をもたずにゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】図示できるものはなく、堆積土から土師器破片６点・須恵器破片２点が出土している。

第27号溝状遺構

【位置】VIII区　S56.7～57.5　E95.5～97.2

【確認面・重複】IV層上面で確認された。検出されたのは一部で、西は調査区外に延びる。東は第31号竪穴住居跡に切られ、また、部分的に第25号ピット群のピットに切られている。

【方向・規模】検出部分では直線状をなしており、その方向はN－81°－Wである。確認された長さは1.68mで、上端幅は58cm、下端幅は39cm、深さは最深で10cmである。

【堆積層】２層確認された。ともに自然堆積層とみ

られ、水平状に堆積している。

【壁・底面】断面形は角が丸味をもつ逆台形をなしている。底面は平坦である。

【出土遺物】出土していない。

第28号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S57.4～58.8　E96.1～96.9

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認され、ほぼ全体が検出された。第29号溝状遺構と重複しており、それより古い。

【方向・規模】細長い長方形の土坑状をなす。その方向はほぼ真北と一致し、N－3°－Wである。長さは1.48m、上端幅は48cm、下端幅は30cm、深さは平均21cmである。

【堆積層】2層確認された。ともに自然堆積層とみられる。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなし、壁は皿状の底面からゆるやかに上方に立ち上がっている。

【出土遺物】図示できるものはないが、堆積土から土師器破片が7点・とりべが1点（写真92－5）出土している。

第29号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S58.6～61.4　E96.6～98.1

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認され、ほぼ全体が検出された。重複する第25号ピット群のいくつかよりも古く、また、第28号溝状遺構よりは新しい。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はほぼ真北と一致し、N－3°－Wである。長さは2.96mで、上端幅は48cm、下端幅は31cm、深さは15cmである。

【堆積層】2層確認された。自然堆積層とみられ、層No.1には炭化物と焼土を含んでいる。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなし、壁は皿状の底面からゆるやかに上方に立ち上がっている。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の土師器3点である。この他に土師器破片18点・須恵器破片6点が出土している。

第30号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S54.1～54.6　E103～103.7

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは一部で、両側は第31号竪穴住居跡と第96号土坑に切られている。したがってそれらよりは古い。

【方向・規模】方向性は不明である。確認された長さは64cmで、上端幅は52cm、下端幅は40cm、深さは24cmである。

【堆積層】2層確認された。ともに自然堆積層とみられ、レンズ状に堆積している。

【壁・底面】壁は大きく開いて立ち上がる。壁・底面とも一定せず、起伏が認められる。

【出土遺物】図示できるものはなく、堆積土から土師器破片11点・須恵器破片1点が出土している。

第31号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S33.4～34.5　E99.1～101.3

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認され、全体が検出されたが、削平が著しい。重複関係は認められない。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北と直交する方向に近く、N－80.5°－Eである。長さは2.36mで、上端幅は36cm、下端幅は21cm、深さは4cmである。

【堆積層】1層のみ確認された。Ⅳ層ブロック・粒子を多く含んでいる。

【壁・底面】断面は皿状をなしており、壁は底面からゆるやかに開く。

【出土遺物】出土していない。

第32号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S31.6～33.9　E102.6～103.7

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。南は完結するが、北は第35号溝状遺構に切られている。第26

号ピット群の１つと重複しており、それよりも古い。

【方向・規模】直線状に走行しており、その方向は真北に近く、N－7.5°－Wである。確認された長さは2.32mで、上端幅は32cm、下端幅は22cm、深さは８cmである。

【堆積層】１層のみ確認された。IV層ブロック・粒子を多く含む層である。

【壁・底面】断面は丸底状をなし、壁は底面からゆるやかに開く。

【出土遺物】出土していない。

第33号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S33.8～34.7　E102.9～104.3

【確認面・重複】IV層上面で確認された。検出されたのは一部で、東は調査区外に延び、西は撹乱により失われている。重複関係は認められない。

【方向・規模】検出部分は直線状に走行しており、その方向は真北と直交する方向に近く、N－80.5°－Eである。確認された長さは1.56ｍで、上端幅は72cm、下端幅は40cm、深さは11cmである。

【堆積層】１層のみ確認された。IV層ブロック・粒子をわずかに含む層である。

【壁・底面】底面には起伏がみられ、壁はそこから大きく開いて立ち上がっている。

【出土遺物】出土していない。

第34号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S29.6～32.7　E98.6～104.3

【確認面・重複】IV層上面で確認された。東はさらに調査区外に延び、西は途中で途切れる。第35号溝状遺構・第26号ピット群の１つと重複しており、これらより古い。

【方向・規模】直線的に走行し、その方向は真北と直交する方向に近く、N－75.5°－Eである。確認された長さは6.40mで、上端幅は52cmで、次第に西方にその幅を減じている。下端幅は36cmで、深さは10cmである。

【堆積層】１層のみ確認された。IV層ブロックを多く含む層である。

【壁・底面】断面形は逆台形に近く、壁は平坦な底面から急な立ち上がりで外に開いている。底面はわずかに東の方向に下がっている。

【出土遺物】出土していない。

第35号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S28.6～31.9　E102.3～103

【確認面・重複】IV層上面で確認され、全体が検出された。第32・34号溝状遺構、第24号掘立柱建物跡のP7と重複しており、これらより新しい。また、第26号ピット群のいくつかとは新旧両方の関係をもつ。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北から大きく東に寄り、N－18°－Eである。長さは3.32mで、上端幅は64cm、下端幅は40cmで、南にその幅を減じている。深さは最深で25cmである。

【堆積層】３層確認された。いずれも自然堆積層であり、レンズ状の堆積状況を示す。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなし、壁は皿状の底面からゆるやかに上方に立ち上がっている。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の土師質土器１点である。これは擂鉢の一部で、内面には５本単位の筋目が施されている。この他に土師器破片17点・須恵器破片６点などが出土している。

第36号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S26.4～27.1　E99.6～104.2

【確認面・重複】IV層上面で確認され、全体が検出された。第44号溝状遺構と重複しており、それより新しい。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北と直交する方向に近く、N－78°－Wである。長さは4.52mで、上端幅は22cm、下端幅は16cm、深

さは5cmである。

【堆積層】1層のみ確認された。IV層粒子を少し含む層である。

【壁・底面】壁・底面とも一定せず、全体的に起伏が著しい。

【特記事項】西側でほぼ同一方向で走行する第37号溝状遺構はこの遺構と関連するものと考えられる。

【出土遺物】図示できるものはないが、堆積土から土師器破片が2点出土している。

第37号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S26.9～27.6　E95.5～99.3

【確認面・重複】IV層上面で確認された。西はさらに調査区外に延びている。重複関係は認められない。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北と直交する方向に近く、N－78.5°－Wである。確認された長さは3.76mで、上端幅は24cm、下端幅は14cm、深さは6cmである。

【堆積層】1層のみ確認された。IV層粒子を少し含む層である。

【壁・底面】断面は皿状をなすが、壁・底面とも一定せず、起伏が認められる。

【特記事項】東側の第36号溝状遺構と方向性が一致しており、関連する遺構と考えられる。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の須恵器1点のみで、他に土師器破片2点・須恵器破片2点が出土している。

第38号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S23.6～24.3　E95.6～98.8

【確認面・重複】IV層上面で確認され、全体が検出された。第26号ピット群のいくつかと重複しており、それらより古い。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北と直交する方向に近く、N－80.5°－Wである。長さは3.24mで、上端幅は35cm、下端幅は26cm、深さは7cmである。

【堆積層】1層のみ確認された。IV層のブロック・粒子を多く含む層である。

【壁・底面】壁・底面とも一定せず、起伏が認められる。

【特記事項】東側の第39号溝状遺構と方向性が一致しており、関連する遺構と考えられる。

【出土遺物】出土していない。

第39号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S22.9～23.8　E98.6～103.8

【確認面・重複】IV層上面で確認され、全体が検出された。第24号掘立柱建物跡のP1・2と第26号ピット群のいくつかと重複しており、いずれよりも古い。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北と直交する方向に近く、N－78.5°－Wである。長さは5.20mで、上端幅は48cm、下端幅は25cmで、両端では細くなっている。深さは22cmである。

【堆積層】3層確認された。いずれも自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】断面形は角が丸味をもつ逆台形をなし、壁は底面からいく分急に立ち上がっている。

【特記事項】西側の第38号溝状遺構と方向性が一致しており、関連する遺構と考えられる。

【出土遺物】出土していない。

第40号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S14.3～16.3　E99.9～103.2

【確認面・重複】IV層上面で確認され、全体が検出された。第25号掘立柱建物跡のP13・第27号掘立柱建物跡のP7・第26号ピット群の1つと重複しており、いずれよりも新しい。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北と直交する方向に近く、N－74.5°－Eである。長さは3.64mで、上端幅は34cm、下端幅は21cm、深さは12cmである。

【堆積層】１層のみ確認された。Ⅳ層粒子を多く含む層である。
【壁・底面】断面形は逆台形をなし、壁は底面から急角度で立ち上がる。底面は平坦ぎみである。
【出土遺物】出土していない。

第41号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S12.7～16.3　E95.8～101.9
【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。部分的に途切れるが一連の遺構と考えられる。第25号掘立柱建物跡のP10・第26号ピット群のいくつかと重複しており、いずれよりも古い。
【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北と直交する方向に近く、N－76°－Eである。確認された長さは約７ｍで、上端幅は28cm、下端幅は16cm、深さは10cmである。
【堆積層】１層のみ確認された。Ⅳ層の粒子を多く含む層である。
【壁・底面】断面形は「U」字形をなし、壁は皿状の底面からゆるやかに立ち上がる。
【出土遺物】図示できるものはなく、堆積土から土師器破片が１点出土したのみである。

第42号溝状遺構

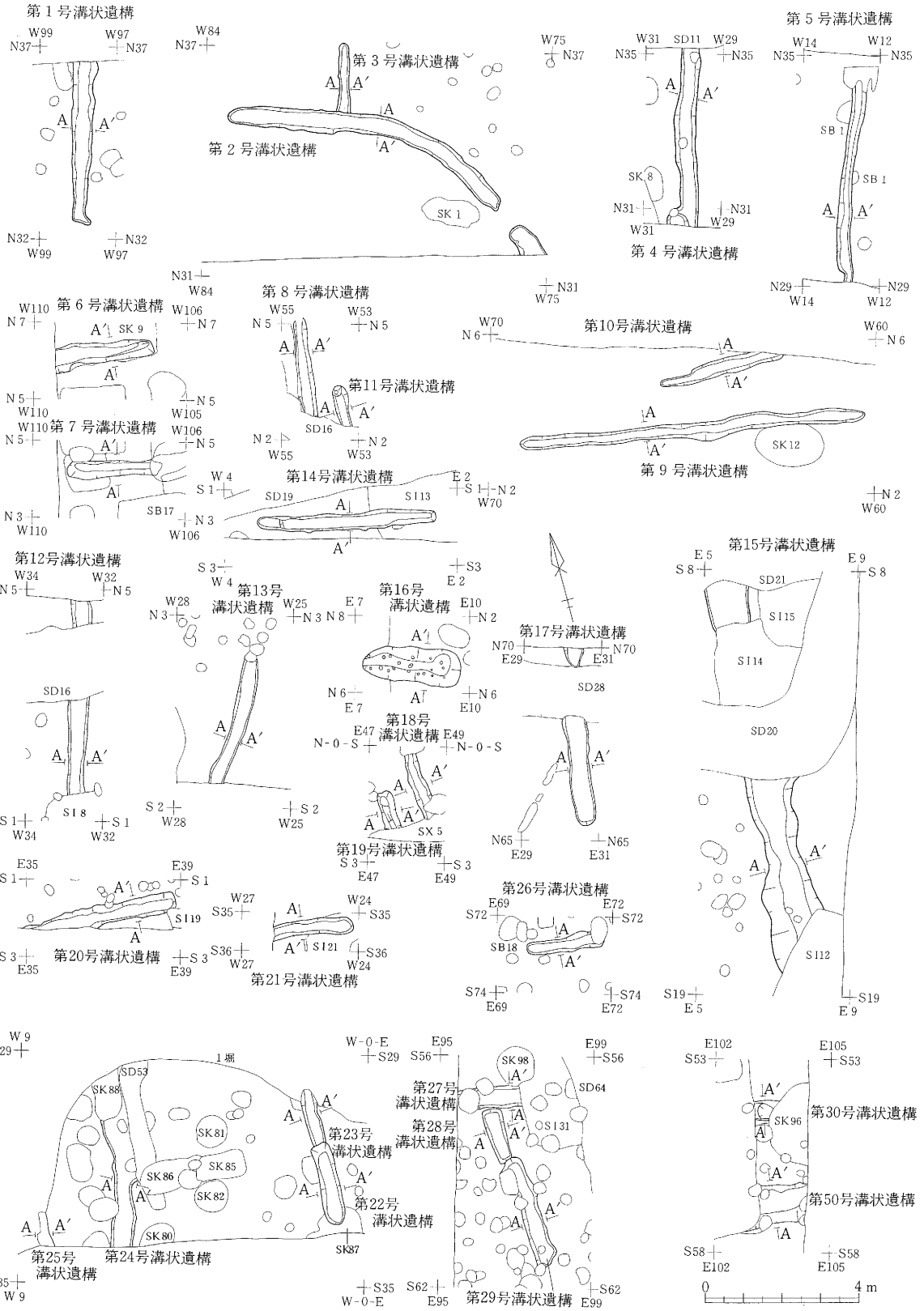
【位置】Ⅷ区　S11.5～13.2　E95.5～104.4
【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。西と東はさらに調査区外に延びている。第25号掘立柱建物跡のP11、第28号掘立柱建物跡のP1・2、第26号ピット群のいくつかと重複しており、いずれよりも古い。
【方向・規模】東西方向に弧状にカーブして走行している。確認された長さは9.08mで、上端幅は47cm、下端幅は30cm、深さは最深で23cmである。
【堆積層】１層のみ確認された。Ⅳ層のブロックを層中に含んでいる。
【壁・底面】断面形は逆台形に近く、壁は底面からやや急に立ち上がっている。
【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の須恵器１点で、他に土師器破片１点・須恵器破片１点が出土している。

第43号溝状遺構

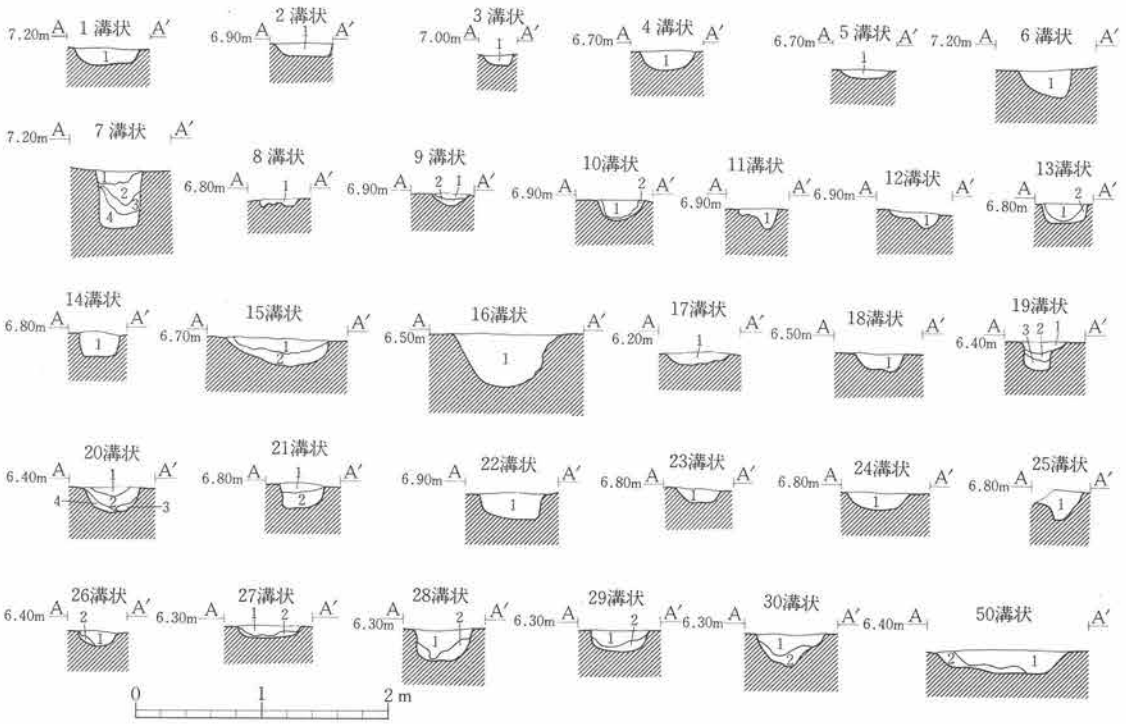
【位置】Ⅷ区　S11.1～12　E95.4～97
【確認面・重複】Ⅳ層上面で検出された。西はさらに調査区外に延びている。第26号ピット群の１つと重複しており、それより古い。
【方向・規模】直線的に走行するものと推定され、その方向はN－60°－Wである。確認された長さは1.64mで、上端幅は40cm、下端幅は16cm、深さは22cmである。
【堆積層】１層のみ確認された。Ⅳ層粒子が壁付近に多く含まれている。
【壁・底面】断面形は「U」字形に近く、壁は皿状の底面からゆるやかに立ち上がる。
【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の磨面をもつ礫１点で、他に土師器破片３点・赤焼土器破片１点が出土している。

第44号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S24～29.8　E98.6～101.8
【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認され、全体が検出された。第24号掘立柱建物跡P6・第26号ピット群のいくつかと重複しており、いずれよりも古い。
【方向・規模】直線的に走行しており、その方向は真北からやや西に寄り、N－12.5°－Wである。長さは6.60mで、上端幅は36cm、下端幅は26cm、深さは平均16cmである。
【堆積層】１層のみ確認された。Ⅳ層粒子をまばらに含んでいる。
【壁・底面】断面形は浅い逆台形をなし、底面から急な立ち上がりを示している。底面にはかなりの起伏がみられる。
【出土遺物】出土していない。



第232図　第１～30・50号溝状遺構平面図



第1号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロックを多く含む。	1

第2号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	1

第3号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	1

第4号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。(特に下部に多い。)	1

第5号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロックを多量に含む。(特に層下部に多い。)	1

第6号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	褐灰色・粒子を全体的に均一に含む。	1

第7号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	浅黄褐色 (10YR8/3)	シルト	酸化鉄の斑紋・黒褐色土をブロック状に含む。	1
2	灰白色 (2.5Y8/2)	シルト	酸化鉄の斑紋をスジ状に含む。	2
3	灰黄色 (2.5Y6/2)	シルト質粘土	IV層をブロック状に含む。	3
4	黄灰色 (2.5Y5/1)	シルト質粘土	3層よりやや暗い灰色。酸化鉄の斑紋を少量含む。	4

第8号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	1

第9号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	1
2	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	粘土質シルト	IV層崩落土。	2

第10号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	1
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	IV層の崩落土。	2

第11号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	1

第12号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	1

第13号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	2

第14号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。底面付近に多い。	1

第15号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子をまばらに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層を多量に含む。	2

第233図　第1～30・50号溝状遺構セクション図

第16号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック状に含み、酸化鉄の斑紋を粒状に含む。	1

第17号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	IV層ブロック粒子を多量に含む。	1

第18号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	層下部にはIV層ブロックを含む。	1

第19号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層ブロックを全体にまばらに含む。焼土粒を多量含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	焼土粒をわずかに含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを少量含む。	3

第20号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト		2
3	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	IV層粒子をまばらに含む。	3
4	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	炭化物をわずかに含む。	4

第21号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子わずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを含む。	2

第22号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを含む。	1

第23号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	焼土・炭化物を少量含む。	1

第24号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層粒子・炭化物をまばらに含む。	1

第25号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層粒子をまばらに含む。	1

第26号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	IV層ブロックを多く含む。	1
2	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト		2

第27号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを全体に含む。	1
2	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	2

第28号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	炭化物・焼土粒・IV層ブロックを少量含む。	1
2	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	暗褐色土を少量含む。	2

第29号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物粒・焼土粒を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロックを多く含む。	2

第30号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土粒をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを全体に含む。	2

第50号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層小ブロック粒子を少量含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	黒褐色土をわずかに含む。	2

第45号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　N26.5～27.3　E96.1～101.3

【確認面・重複】IV層上面で確認された。大きく削平を受けており、西はさらに調査区外に延びている。重複関係は認められない。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はN－71°－Wである。確認された長さは5.20mで、上端幅は53cm、下端幅は29cm、深さは8cmである。

【堆積層】1層のみ確認された。IV層ブロック・粒子を多く含む層である。

【壁・底面】底面は皿状をなし、起伏が著しい。

【出土遺物】出土していない。

第46号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　N28.6～29.5　E96.1～101.2

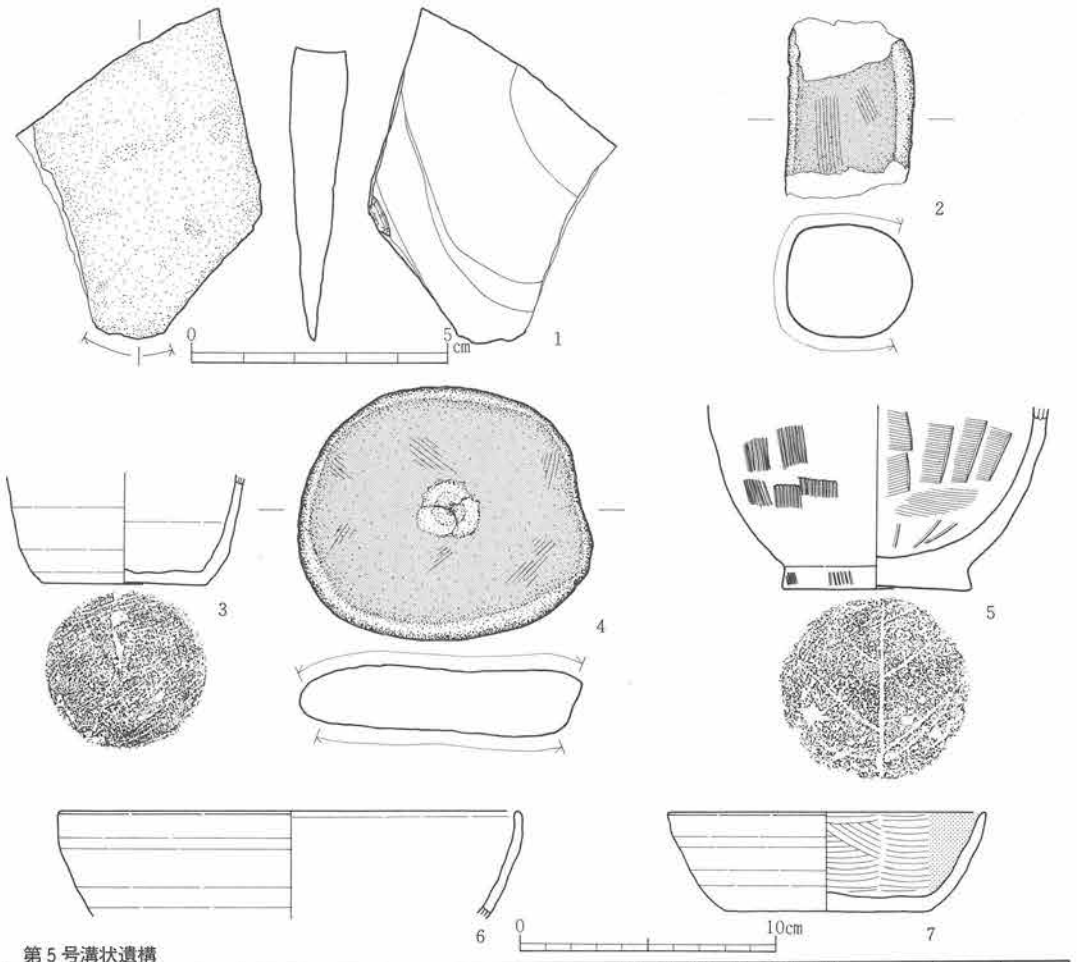
【確認面・重複】IV層上面で確認された。大きく削平を受けており、西はさらに調査区外に延びる。一部途切れるが同一遺構とみられる。重複関係は認められない。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はN－71°－Wである。確認された長さは約5mで、上端幅は80cm、下端幅は44cm、深さは8cmである。

【堆積層】1層のみ確認された。IV層ブロック・粒子を多く含む層である。

【壁・底面】底面は皿状をなし、起伏が顕著である。

【出土遺物】出土していない。



第5号溝状遺構

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
1	使用痕のある剥片	堆1層	一辺が欠損。大形の板状剥片の一部を利用している。縁辺の一部に使用痕とみられる摩耗痕(矢印)あり。	6.7	(5.7)	1.1	35.2	安山岩	95-11	石-17

第8号溝状遺構

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
2	磨面をもつ礫	堆	上下部分が欠損。円棒状の礫を利用。側面を含めて3面の磨面が認められる。	(7.1)	5.1	4.5	(220)	安山岩	—	石-96

第15号溝状遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	須恵器 坏	底面	ロクロナデ・底部切り離し不明・全面手持ちヘラケズリ再調整	ロクロナデ	体～底部 1/3	—	6.4	—	—	E-169

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
4	磨面をもつ礫	堆	扁平な礫を利用。上下2面に磨面があり。上方一面に凹みが認められる。	10.0	11.6	2.8	520	石英安山岩	98-9	石-107

第16号溝状遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
5	土師器 甕	堆1層	ハケメ・木葉痕	ヘラナデ	体～底部 1/2	—	7.4	—	—	C311B

第22号溝状遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
6	須恵器 坏	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁～体部 1/12	(18.0)	—	—	—	E-170

第24号溝状遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	土師器 坏	堆	ロクロナデ・底部切り離し不明・手持ちヘラケズリの再調整	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～底部 1/2	12.4	8.1	3.9	74-9	C312A

第234図　第5・8・15・16・22・24号溝状遺構出土遺物

第47号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　N38.5～40.4　E99.7～102

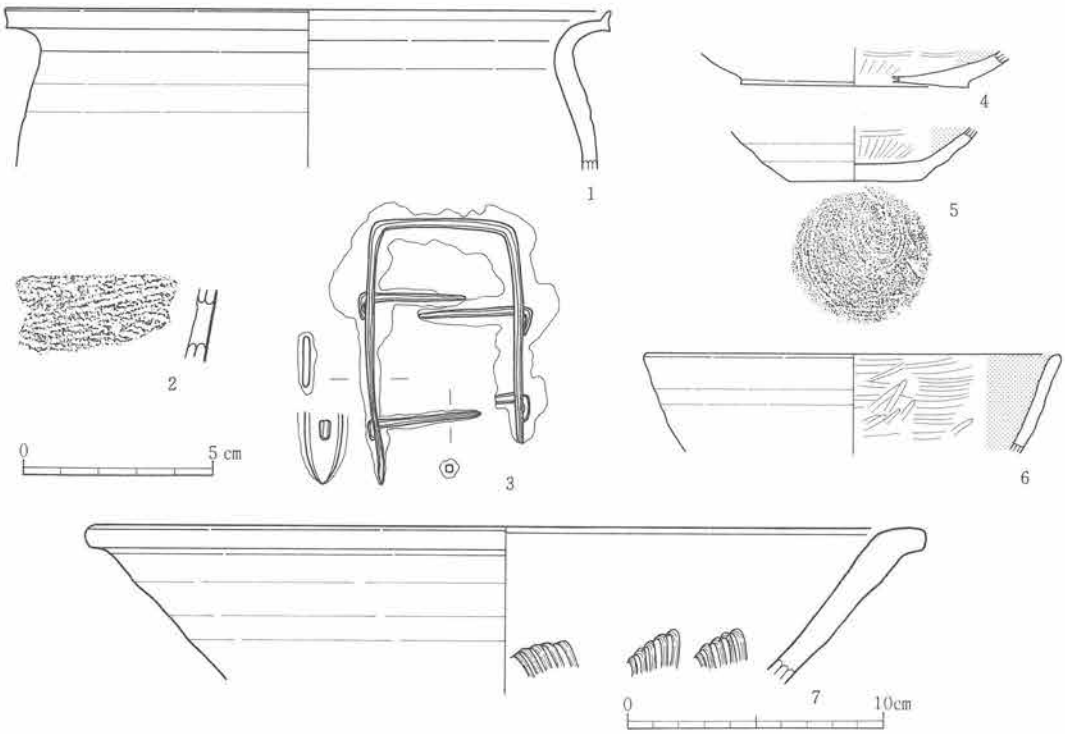
【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。大きく削平を受けており、また、東はさらに調査区外に延びる。重複関係は認められない。

【方向・規模】直線状に走行しており、その方向はN－37°－Wである。確認された長さは2.80mで、上端幅は40cm、下端幅は28cm、深さは6cmである。

【堆積層】1層のみ確認された。Ⅳ層ブロック・粒子を少量含んでいる。

【壁・底面】底面は皿状をなし、起伏が顕著である。

【出土遺物】出土していない。



第21号溝状遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/8	(23.8)	－	－	－	C312B

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	弥生土器 甕？	堆	撚糸文 L。	体部破片	－	－	－	88-26	地-89

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
3	鉄製品 金具	堆	一部欠損。 鋲が4カ所に打ち込まれている。	7.0	4.2	2.0	48.4	102-1	N-60

第29号溝状遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	底部 1/4	－	9.0	－	－	C-313
5	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	底部 1/1	－	5.2	－	－	C-314
6	土師器 坏	堆1層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁～体部 1/10	(16.2)	－	－	－	C-315

第35号溝状遺構

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	土師質土器 擂鉢	堆	内外ともロクロナデ。内面に5本単位の筋目あり。	在地	中世後半～近世	口縁部 1/4	33.2	－	－	84-20	I-102

第235図　第21・29・35号溝状遺構出土遺物

第48号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　N1.5～S0.6　E100.7～103.7

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。大きく削平を受けており、西は第76号溝跡に切られている。また、第30号掘立柱建物跡P5・第26号ピット群のいくつかと重複しており、それらより古い。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はN－72°－Eである。確認された長さは3.38mで、上端幅は39cm、下端幅は17cm、深さは6cmである。

【堆積層】1層のみ確認された。層中にはⅣ層粒子をまばらに含んでいる。

【壁・底面】底面は皿状をなし、起伏が多く認められる。

【出土遺物】出土していない。

第49号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　N8.3～11　E94.9～98.9

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。北はさらに調査区外に延びる。第76号溝跡と重複しており、それより新しい。

【方向・規模】直線的に走行しており、その方向はN－43°－Wである。確認された長さは4.70mで、上端幅は26cm、下端幅は13cm、深さは12cmである。

【堆積層】1層のみ確認された。層中にはⅣ層粒子をまばらに含んでいる。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなし、壁からゆるやかに上方に立ち上がっている。底面は概して平坦である。

【出土遺物】出土していない。

第50号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S56.2～57.5　E102.8～104.4

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは一部で、東は調査区外に延びており、西は第31号竪穴住居跡に切られている。同じく重複する第25号ピット群のいくつかとは新旧両方の関係をもつ。

【方向・規模】検出部分では直線状をなし、その方向は東西方向に近い。確認された長さは1.60mで、上端幅は約1 m、下端幅は40cm、深さは23cmである。

【堆積層】2層確認された。ともに自然堆積層とみられ、将棋倒し状に堆積している。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁はそこからゆるやかに立ち上がりながら外に開く。

【出土遺物】出土していない。

第51号溝状遺構

【位置】Ⅷ区　S44～45.5　E100.1～101.2

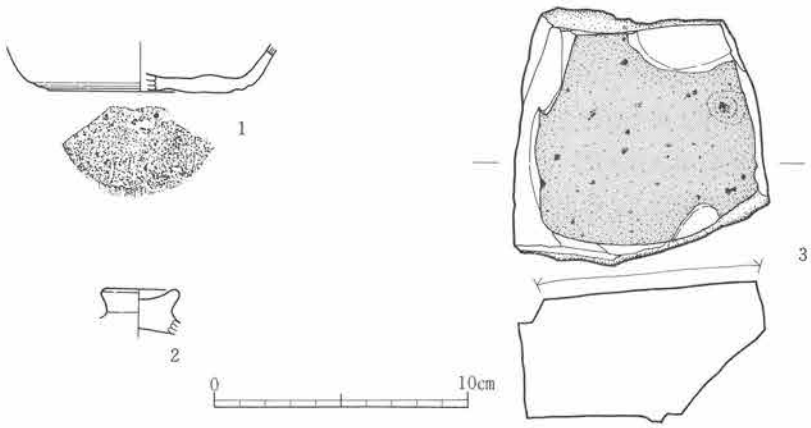
【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは一部で、北は撹乱により、南は第32号竪穴住居跡により失われている。また、第25号ピット群の一部と重複しており、いずれよりも古い。

【方向・規模】検出部分では直線状をなし、その方向はおおむね真北方向を向く。確認された長さは1.56mで、上端幅は88cm、下端幅は64cm、深さは11cmである。

【堆積層】2層確認された。ともに自然堆積層とみられる。

【壁・底面】底面は皿状をなし、壁は底面からやや急に立ち上がり、外に開いている。

【出土遺物】出土していない。



第37号溝状遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 坏	堆	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ再調整	ロクロナデ	底部 1/4	−	7.2	−	−	E-171

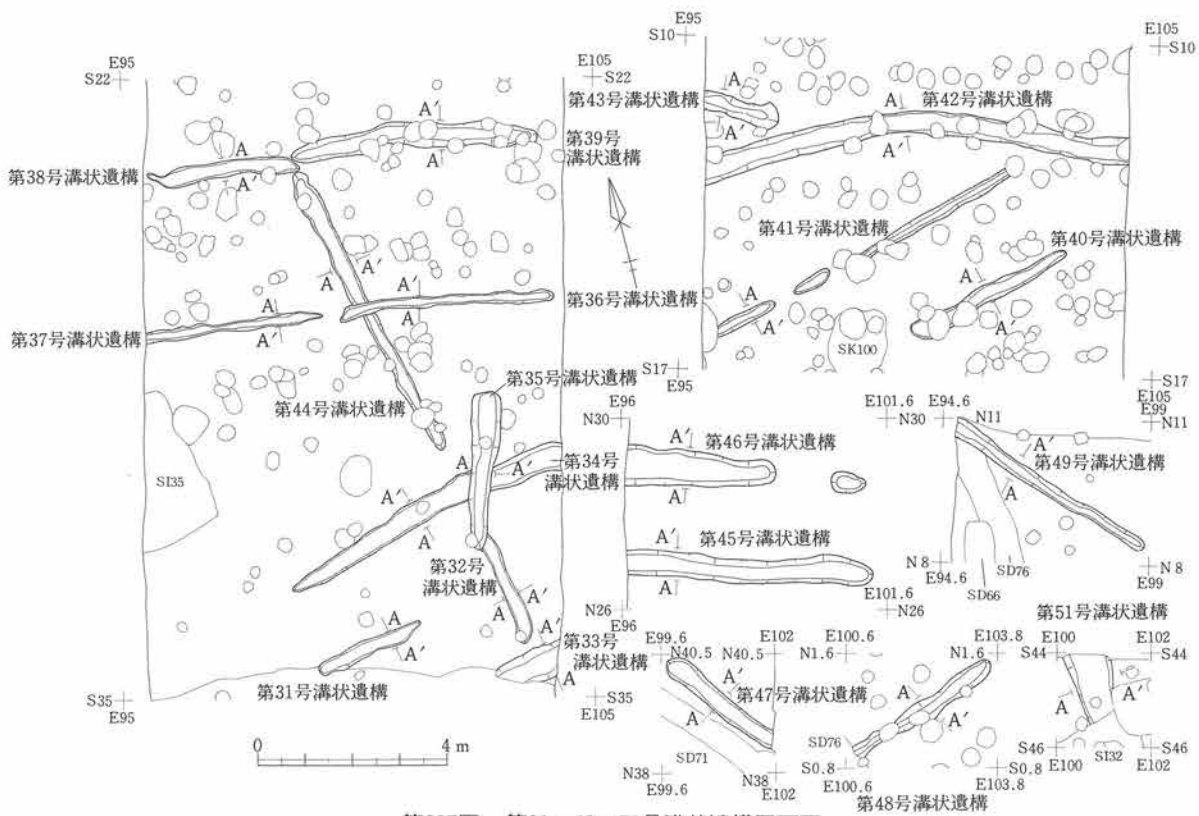
第42号溝状遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	須恵器 蓋	堆	ロクロナデ	ロクロナデ	蓋のツマミ部分	3.0	−	−	−	E-172

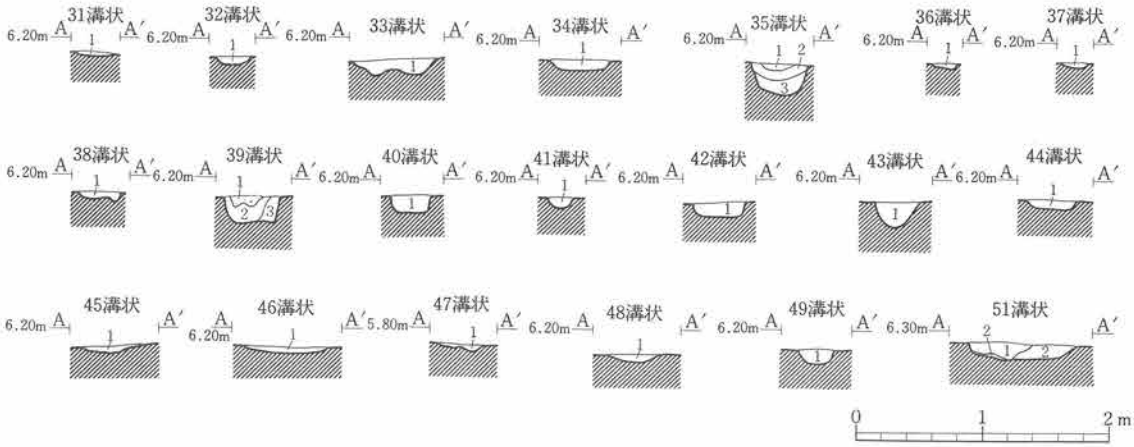
第43号溝状遺構

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	写真図版	登録番号
3	磨面をもつ礫	堆	側面2面を打ち欠いている。角ばった礫を使用。磨面1面認められる。	10.3	10.2	5.5	850	石英安山岩	−	石-150

第236図　第37・42・43号溝状遺構出土遺物



第237図　第31～49・51号溝状遺構平面図



第31号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	1

第32号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	1

第33号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロック・粒子をわずかに含む。	1

第34号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを多く含む。	1

第35号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト		1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロックをわずかに含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	3

第36号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子を少量含む。	1

第37号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子を少量含む。	1

第38号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	1

第39号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロックわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	2
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	3

第40号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子を多量に含む。	1

第41号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	IV層粒子を多量に含む。	1

第42号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを含む。	1

第43号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層粒子、壁付近で多く含む。	1

第44号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)		IV層粒子をまばらに含む。	1

第45号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	1

第46号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を多く含む。	1

第47号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	1

第48号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子をまばらに含む。	1

第49号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子をまばらに含む。	1

第51号溝状遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロックを少量含む。	1
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	壁の崩落土。	2

第238図　第31～49・51号溝状遺構セクション図

12. 小溝状遺構群

第1号小溝状遺構群

【位置】Ⅰ区　N30.8～36.1　W101～111

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。小溝状遺構群の一部の検出とみられ、さらに西・北側へ続くようである。第1号竪穴住居跡・第1号ピット群と一部重複しており、いずれよりも古い。

【方向・規模】細長い溝が18条検出された。12条は東西方向（N－70～80°－E）、6条はほぼそれらに直交する方向性や特徴などから、これらの小溝は一連のものと考えられる。長さは多様で、ほぼ全長の明らかな例で4.96mである。東西方向の溝が長く、南北方向は極めて短い。溝幅は30～40cmが多い。

【堆積土】全て1層認められ、共通する。

【壁・底面】逆台形、「U」字形などさまざまである。壁・底面とも起伏があり、底面には小穴状の落ち込みが多数認められる。

【出土遺物】堆積土から土師器破片が5点（非ロクロ）出土している。図示はできなかった。

第2号小溝状遺構群

【位置】Ⅱ区　N1.6～S1.8　W2.8～5.6

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。4条検出されたが、各遺構に部分的に切られている。第19号溝跡・第9号ピット群のピットと重複しており、それらより古い。また、小溝状同士でも切り合い関係がある。

【方向・規模】いずれも直線状に走行するが、その長さ、方向はまちまちである。3条はほぼ真北方向を向き、1条はそれと直交する。また、1条は北東方向を向く。最も全長の長い溝は3.4mであり、上端幅は26cm、下端幅は20cm、深さは4cmである。

【堆積土】全て1層のみで、Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む層である。

【壁・底面】断面は逆台形・「U」字形・皿状とさまざまであり、壁の立ち上がりも含めて規則性はみられない。底面は起伏があり、平坦ではない。

【出土遺物】堆積土から土師器破片が1点（非ロクロ）出土しているが、図示はできなかった。

第3号小溝状遺構群

【位置】Ⅲ区　E4.7～9.7　N7.1～5.7

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。さまざまな遺構と重複しておりそのいずれよりも古い。

【方向・規模】直線状に走る細長い溝が13条検出された。その内、南北方向に走行するのが、9条あり、これらはほぼ真北方向を示している。その中の最も長い例は長さが7ｍ以上あり、上端幅は23cm、下端幅は14cmで、深さは10cm前後である。また、東西方向に走行するのが4条あり、その多くは真北とほぼ直交して走行している。その中の最も長い例は長さが2.30mあり、上端幅は23cm、下端幅は12cm、深さは7cmである。

【堆積土】全ての溝に共通して、1層のみ認められた。Ⅳ層ブロック・粒子を含む層である。

【壁・底面】断面は「U」字形に近く、壁は底面からゆるやかに立ち上がる。底面、壁面とも起伏があり、平坦ではない。

【特記事項】南北および東西方向のこれらの溝は、方向性や堆積土から関連し合うものと考えられるものの、一部で重複しており、そこでは新旧両方の関係が認められ、また、溝同士の間隔がまちまちであることなどから、全ての溝が同時に形成され機能していたとは考えられない。

【出土遺物】図示できたのは堆積土から出土した須恵器1点のみで、他に土師器破片16点（非ロクロ）が出土している。

第4号小溝状遺構群

【位置】Ⅴ区　E4.2～S2.3　E16.7～29.2

【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。検出されたのは小溝状遺構の一部とみられ、さらに調査区外

に続いている。重複する第17号竪穴住居跡と第19号溝跡よりは古く、第18号竪穴住居跡とは新旧両方の関係をもつ。

【方向・規模】細長い小溝が9条検出されたが、2条は同一の遺構の可能性が高い。4条は南北方向（N－0～15°－E）に、4条は東西方向（N－72～89°－W）に直線的に走行するが、その方向には幅があり、溝同士の間隔も含めて厳密な規則性は認められない。全長の明らかな例は長さが3.16m、幅が30cm前後、深さが10cmである。また、1条は長さが5.86m、幅が28cm、深さは12cmである。この他の遺構は幅が20～30cm、深さが10cm前後である。

【堆積土】全て1層のみ確認され、共通する層である。IV層粒子をまばらに含み、底面付近ではそれが顕著である。

【壁・底面】断面形が「U」字形をなす例が多い。壁・底面とも起伏が認められる。

【特記事項】これらの遺構を1群として一括したが、方向性や位置関係にあまり規則性がみられないこと、重複関係を示す例もみられることなどから全てが関連する遺構群とは考えられない。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の土師器1点のみで、他に土師器破片が5点（非ロクロ・ロクロ）出土している。

第5号小溝状遺構群

【位置】IV区　N23.1～52　E37.4～31.6

【確認面・重複】IV層上面で確認された。これらにはさらに調査区外に延びる例が多い。重複する遺構とは新旧両方の関係をもつ。

【方向・規模】細長い小溝が10条検出された。いずれも直線的に走行しており、その方向は大きく8条の東西方向（N－71～83°－W）を向くものと、3条の真北方向（N－0～5°－E）を向くものに分けられる。それぞれの長さはまちまちであり、幅は20～30cm、深さは3～9cmと幅がみられる。

【堆積土】全て1層確認され、暗褐色か黒褐色のシルト層である。層中にはIV層ブロックが多く含まれる。

【壁・底面】断面は皿状か「U」字形を示す例が多く、底面には起伏が顕著に認められる。

【特記事項】IV区の中央部で検出された小溝状遺構を1群として一括したが、全てが関連する遺構かどうかは明確ではない。ただしその中の6条はそれぞれ方向性が一致することから、一連の遺構群の可能性が考えられる。

【出土遺物】出土していない。

第6号小溝状遺構群

【位置】VI区　S32.4～35.6　E36.8～41.9

【確認面・重複】IV層上面で確認された。南はさらに調査区外に延びている。第7号小溝状遺構群と重複しており、それより新しい。また、第13号掘立柱建物跡P2・3と重複しており、それよりも古い。

【方向・規模】細長い小溝が4条検出された。いずれも直線的に走行しており、その方向は真北に極めて近く、N－0～7.5°－Wである。長さは1例が1.28m、1例が3.36m以上で、幅は24～40cmで、深さは5～8cmである。

【堆積土】全て同じく共通する2層が確認された。

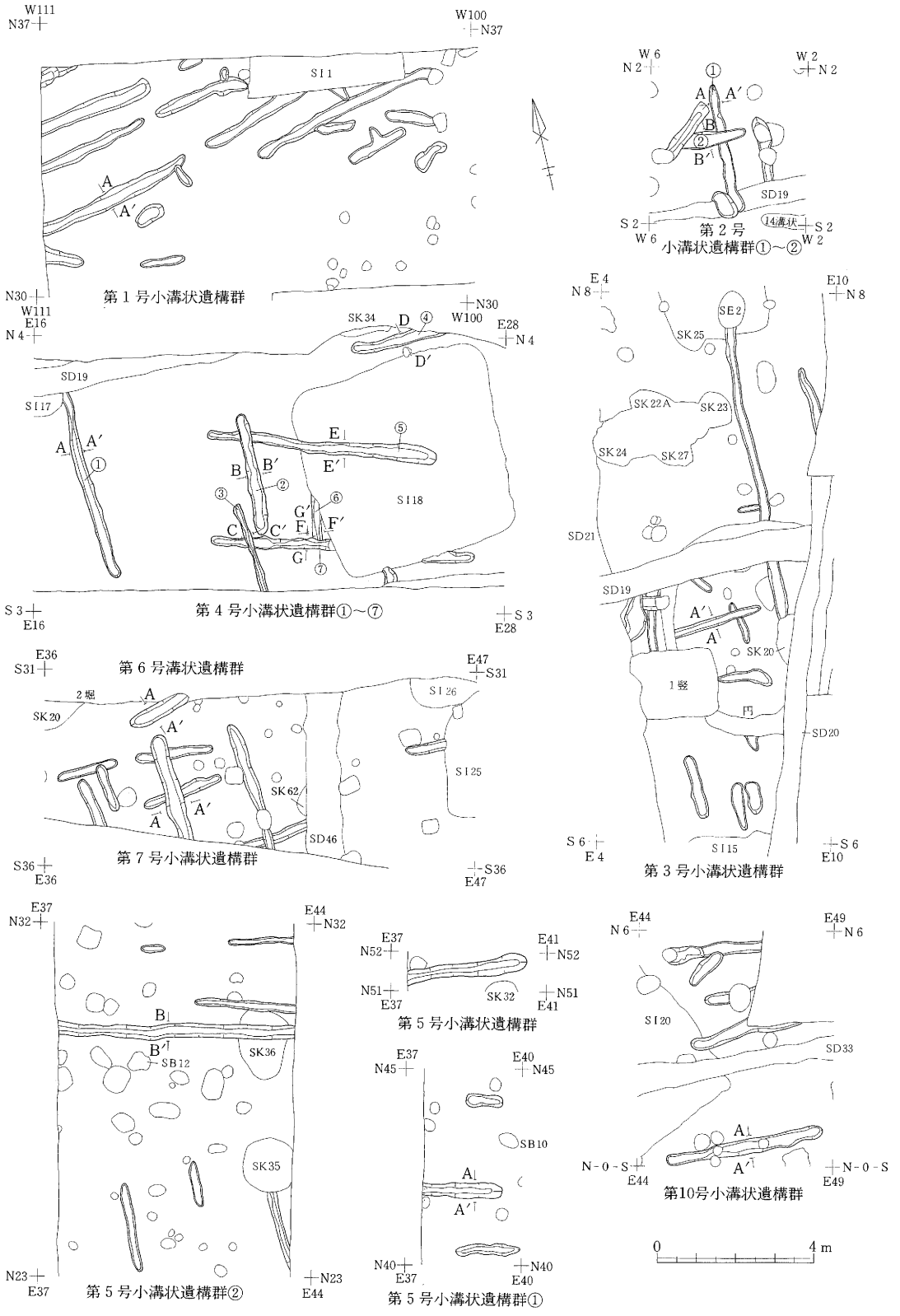
【壁・底面】断面は浅い「U」字形をなす。底面には起伏が認められる。

【特記事項】これらの遺構群は方向が一致していること、北端がほぼ同位置で完結していることなどから関連する遺構群であることが考えられる。特に3条は溝間がそれぞれ約2mと等間隔に走行しており、同時に機能していたことが考えられる。

【出土遺物】堆積土から土師器破片が6点（非ロクロ・ロクロ）出土しているが、図示はできなかった。

第7号小溝状遺構群

【位置】VI区　S31.6～35.5　E36.3～46.2



第239図　第１～７・10号小溝状遺構平面図

【確認面・重複】IV層上面で確認された。第25号竪穴住居跡・第46号溝跡・第2号堀跡などと重複しており、それらよりも古い。また、第6号小溝状遺構群よりも古い。

【方向・規模】細長い小溝が6条検出された。いずれも直線的に走行しており、それらの方向は真北と直交する方向に近く、N－74.5～89°－E、N－82～87.5°－Wである。長さはまちまちであるが、短い例が多く、その中の4条は1.6～2mである。幅は24～37cmで、深さは5～14cmと若干幅がみられる。

【堆積土】全て同じく共通する2層が確認された。ともに砂質シルトの層である。

【壁・底面】断面形は「U」字形をなす例が多い。底面には起伏がみられる

【特記事項】これらの遺構は方向性がほぼ一致しており、また形状や堆積土がほぼ共通することから関連する遺構群と考えられる。

【出土遺物】堆積土から土師器破片が2点（ロクロ）出土しているが、図示はできなかった。

第8号小溝状遺構群

【位置】V区　N4.8～S2　E75.4～87.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。一部は調査区外に延びている。第36・37・38号竪穴住居跡と重複しており、それらより新しい。また、同じく重複する第26号ピット群のいくつかとは新旧両方の関係をもつ。

【方向・規模】細長い小溝が7条検出された。いずれも直線的に走行しており、それらの方向は真北と直交する方向に近く、N－76～81°－W、N－80～83°－Wである。長さはまちまちで、最も短い例は1.48mである。また、1例は途中切れるが、同一の遺構とみられ、その全長は約10mである。これらの溝幅は27～38cmで、深さは5～14cmでそれぞれに幅がみられる。

【堆積土】全て同じく共通する1層が確認された。IV層ブロックを多く含む層である。

【壁・底面】断面が皿状あるいは「U」字形をなすものが多く、底面には起伏が顕著に認められる。

【特記事項】特に5条は方向性が一致しており、形状や堆積土の共通性などから関連する遺構群と考えられる。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の須恵器1点・敲打痕をもつ礫1点・釘1点で、他に土師器破片5点（非ロクロ・ロクロ）・須恵器破片5点が出土している。

第9号小溝状遺構群

【位置】VIII区　N49.8～107.8　E95.2～104.2

【確認面・重複】IV層上面で確認された。小溝状遺構群の一部の検出とみられ、主に東と西の調査区外にさらに続くようである。第27号ピット群のいくつかと重複しており、いずれのピットよりも古い。

【方向・規模】南北60m、東西9m近い範囲から細長い小溝が84条検出された。これらの小溝は長さが大小さまざまであり、また、形状でも一定しない小溝もみられる。削平が大きく及んでいることも関係しているが、同方向の遺構については本来一連の小溝であった可能性が高い。いずれの小溝も直線的に走行している。幅は20～30cmが多く、深さは5～10cmが大半である。これらは平面分布や方向性などから大きく3群に分けることができる。a群は48条あり、最も北側に位置する。方向は真北から10～20°西に偏る方向性を示す例が極めて多く、また溝同士の間隔が60cm前後を示す例も多く、全体的には比較的整然とした配置状況がうかがわれる。このa群は調査区北端部で途切れるようであり、さらに東の方向に展開するものと考えられる。このa群とはわずかに空白をもってその西側にb群が展開する。このb群は28条を数える。b群は主に真北から東に70～80°偏る方向性をもつ例が多く、a群とは方向が直交するというように対照的な方向性を示してい

る。a・b群ともそれぞれの小溝の配置状況には共通性が認められる。このb群はさらに西側に展開するものと考えられる。c群はb群から約10m南から展開する。しかし遺存状況が悪く、検出されたのは9条のみである。方向としては主に真北から東に70°前後偏る例が大半で、その点ではb群と類似している。

【堆積土】全て堆積土は1層のみが確認され、いずれも共通している。黒褐色の粘土質シルトで、層中にはIV層ブロック・粒子を含み、特にそれは層下部に多く認められる。

【壁・底面】断面は概して皿状あるいは「U」字形をなしており、底面には起伏が顕著に認められる。

【特記事項】この遺構群は方向性や形状・堆積土の共通性などから、同時に機能していた可能性が高いと考えられ、また、a・b・cの3群はそれぞれ異なるまとまりの一部を示している可能性が考えられる。

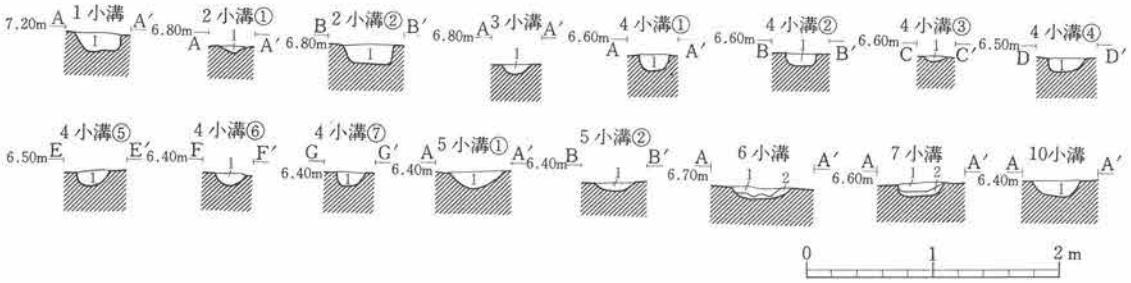
【出土遺物】出土していない。

第10号小溝状遺構群

【位置】IV～V区　0～N5.8　E44.8～48.8

【確認面・重複】IV層上面で確認された。東はさらに調査区外に延びる例が多い。重複する第20号竪穴住居跡より新しく、第16号ピット群のいくつかよりは古い。

【方向・規模】細長い小溝が5条検出された。いずれも直線的に走行しており、それらの方向は4条が真北と直交する方向に近く、N－82～ 86° －W、N－87° －Eである。1条はそれらとは方向を異にし、N－60° －Eである。長さは1例で4.04mを計



第1号小溝状遺構群堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	IV層ブロックを多量に含む。特に堆積土下部に多い。	1

第2号小溝状遺構群堆積土①

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	1

第3号小溝状遺構群堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を含む。	1

第2号小溝状遺構群堆積土②

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	1

第4号小溝状遺構群堆積土①～⑦

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層粒子をまばらに含む。	1

第5号小溝状遺構群堆積土①

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	1

第5号小溝状遺構群堆積土②

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロックを多量に含む。底面付近に多い。	1

第6号小溝状遺構群堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	IV層ブロックを全体にまばらに含む。	1
2	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	黒褐色ブロックをわずかに含む。	

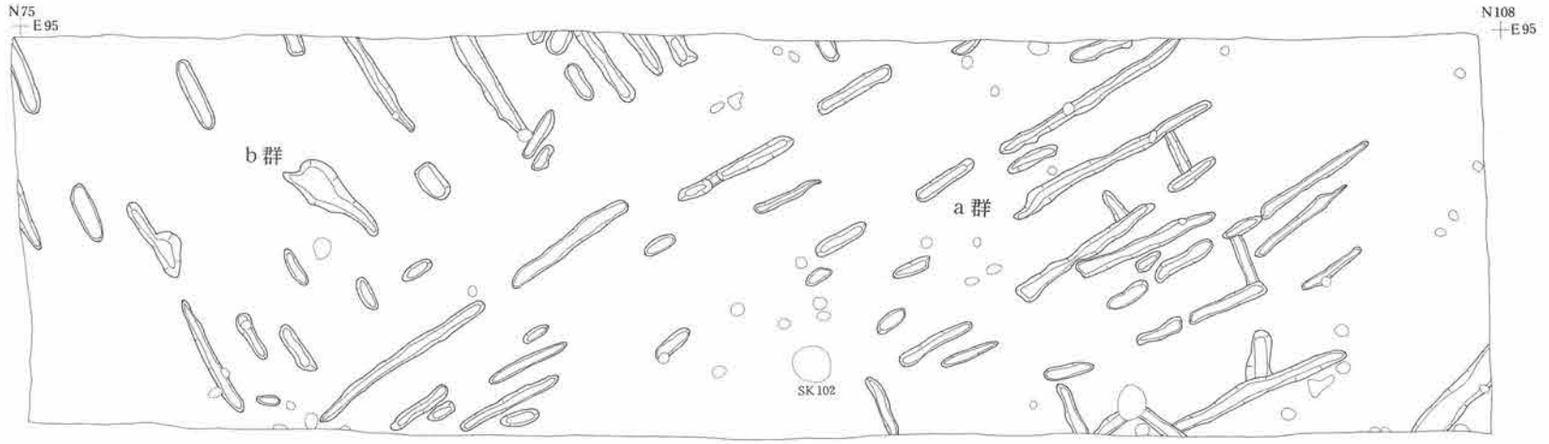
第7号小溝状遺構群堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト		1
2	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト		

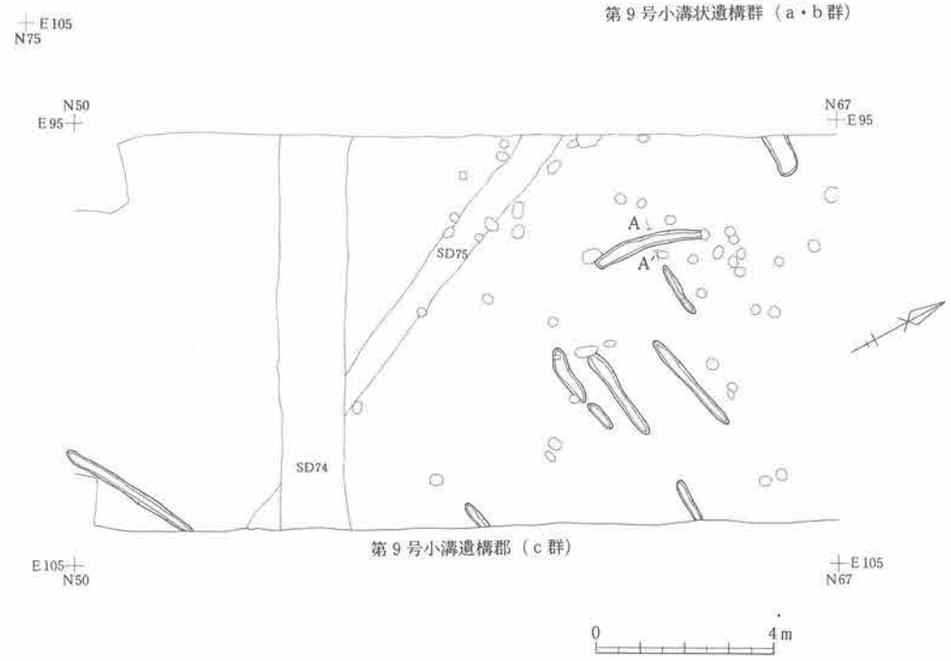
第10号小溝状遺構群堆積土

層No	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層粒子・炭化物をまばらに含む。	1

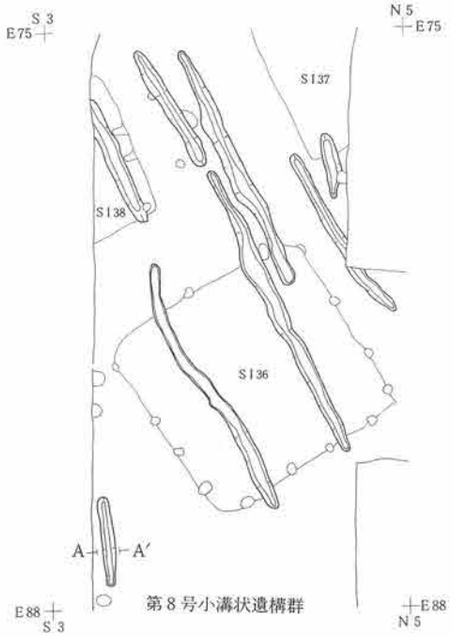
第240図　第1～7・10号小溝状遺構セクション図



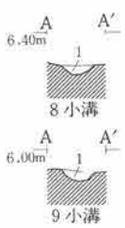
第９号小溝状遺構群（ａ・ｂ群）



第９号小溝遺構郡（ｃ群）



第８号小溝状遺構群

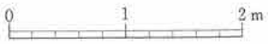


第８号小溝状遺構群堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	Ⅳ層ブロックを多く含む。	1

第９号小溝状遺構群堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多く含む。特に下部に多い。	1



第241図　第８・９（ａ・ｂ・ｃ群）号小溝状遺構群

る。幅は31～36cm、深さは５～16cmであり、幅は比較的そろっている。

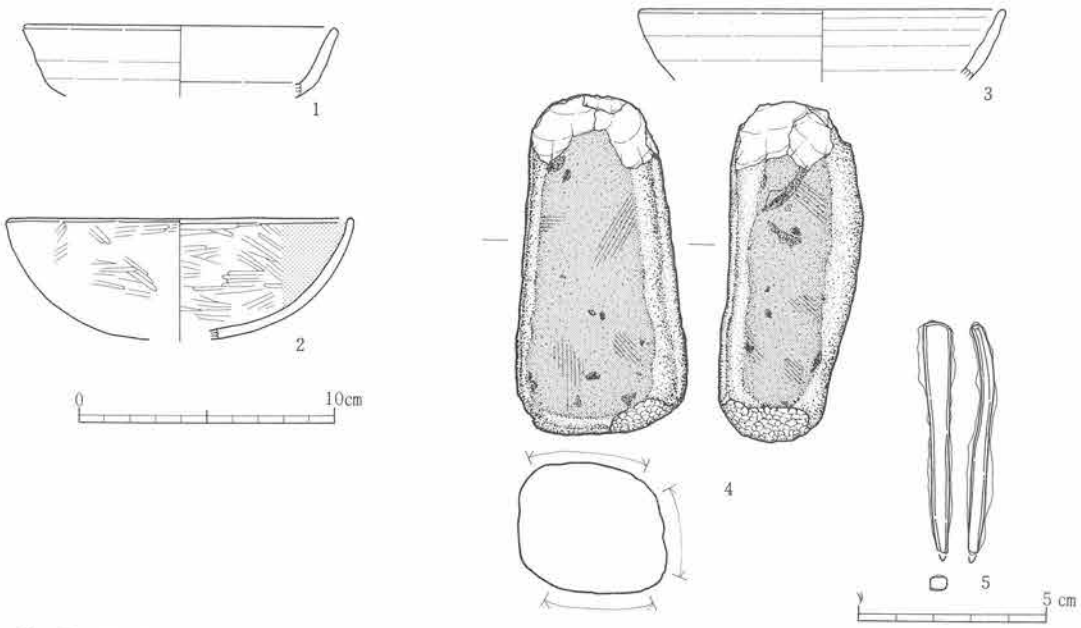
【堆積土】全て共通する１層が確認された。

【壁・底面】断面形は「U」字形が多く、底面には起伏が多く認められる。

【特記事項】特に方向性が一致する４条は関連する遺構群と考えられる。

【出土遺物】出土していない。

第９号小溝状遺構



第３号小溝状遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 坏	堆１層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/6	(12.3)	－	－	－	E-173

第４号小溝状遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	土師器 坏	堆２層	ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/4	13.7	－	4.8	－	C-316

第８号小溝状遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	須恵器 坏	堆１層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/4	14.4	－	－	－	E-174

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
4	敲打痕と磨面をもつ礫	堆１層	円棒状な礫を利用。上部に剝離があり、下部に敲打痕が認められる。磨面は、側面含めて、３面認められる。	13.6	6.7	5.3	650	石英安山岩	98-10	石-123

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
5	鉄製品 釘	底面付近	先端欠損。断面長方形の角釘	(6.1)	0.5	0.4	3.1	100-26	N-61

第242図　第３・４・８号小溝状遺構出土遺物

13. 円形周溝

【位置】Ⅲ区　E5.6～9.2　N2.2～3.3

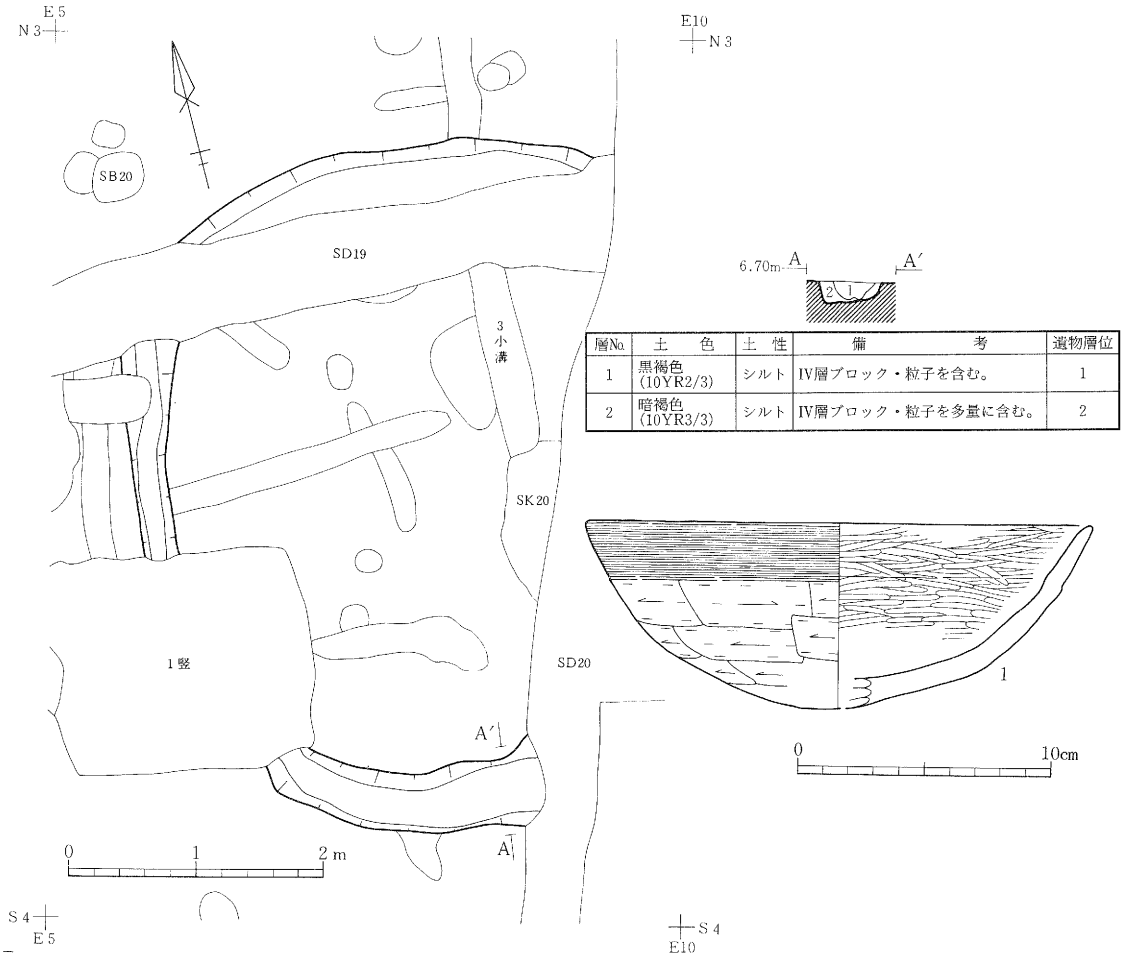
【確認面・重複】Ⅳ層上面で確認された。東側は他の遺構により失われている。第19・20号溝跡、第1号竪穴遺構と重複しており、それより古い。また、第3号小溝状遺構群のいくつかとも重複しており、それより新しい。

【平面形・方向・規模】さまざまな遺構により、各所が切られているが、上端幅が40～50cm、深さが15cm前後の溝がほぼ円形にめぐるようである。その規模は、溝の外側で南北方向が5.5mである。

【堆積土】2層確認された。自然堆積層とみられ、レンズ状に堆積している。

【溝の壁・底面】断面は「U」字形に近く、壁は比較的平坦な底面からやや急に立ち上がる。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の土師器坏1点のみである。この他に土師器破片3点が出土している。坏は体・底部が丸底状をなし、口縁部との境に軽い段をもち、外傾して立ち上がるものである。



層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	Ⅳ層ブロック・粒子を多量に含む。	2

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器　坏	堆2層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	全体の2/3	20.0	—	7.3	—	C-317

第243図　円形周溝と出土遺物

14. 性格不明遺構

第1号性格不明遺構（SX 1）

【位置】II区　N2.6～4.5　W17.7～19.2

【確認面・重複】IV層上面および第17号溝跡堆積土中で確認された。第17号溝跡と重複しており、それより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は、東側が失われているため明らかではないが、楕円形に近いものと推測される。規模は南北1.86m以上、東西1.34m以上で、深さは40cm前後である。

【堆積土】6層確認された。ほとんどがIV層ブロックを多く含む層であるが、いずれの層も東側方向から将棋倒し状に堆積しており、自然堆積の可能性が強い。

【壁・底面】壁・底面とも凹凸が大きくみられ、断面形は不規則な形状をなす。特に西壁では内側に入り込んでいる部分もみられる。

【出土遺物】出土していない。

第2号性格不明遺構（SX 2）

【位置】III区　N22.2～24.2　E9.5～10.1

【確認面・重複】IV層上面で確認された。東半部は調査区外に延びている。第24号溝跡と重複しており、それより古い。

【平面形・方向・規模】平面形は東側が未調査のため明らかではないが、楕円形に近い形状をなすものと推測される。規模は南北1.92m、東西0.62m以上で、深さは58cmである。

【堆積土】5層確認された。いずれも自然堆積層と考えられ、ほぼ将棋倒し状に堆積している。

【壁・底面】壁面・底面とも凹凸があり、断面形は不規則な形状をなしている。西壁では内側に大きくピット状に入り込んでいる部分もみられる。

【出土遺物】出土していない。

第3号性格不明遺構（SX 3）

【位置】III区　N6.8～9.8　E5.1～8.3

【確認面・重複】IV層上面で確認された。削平が著しく及んでいる。第25号土坑・第2号井戸跡と重複しており、これらよりも古い。

【平面形・方向・規模】遺構の遺存状況が悪く、平面形については堆積土がわずかに分布する範囲から隅丸方形をなすものと推測される。南北方向は真北に近く、N－4.5°－Eである。規模は東西が2.68mで、南北は不明である。深さは遺存状況の良い地点で6.8cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。IV層ブロックを多く含んでおり、中央の落ち込み付近では焼土も認められた。

【壁・底面】底面は凹凸が大きくみられ、中央および、北東隅、北西隅では大きな落ち込みになっている。底面からの立ち上がりはゆるやかである。

【出土遺物】堆積土からわずかの遺物が出土した。図示できたのは須恵器1点で、他に土師器破片3点・須恵器破片2点出土している。

第4号性格不明遺構（SX 4）

【位置】V区　N0.6～3.5　E59.2～61.3

【確認面・重複】IV層上面で確認された。北はさらに調査区外に延びている。第38号溝跡と重複しており、それより新しい。

【平面形・方向・規模】直線的な溝状をなすが、形状は不整である。長軸方向は真北とほぼ一致し、N－3°－Wである。確認された長さは2.94mで、上端幅の最大は1.40m、深さは最深で80cm前後である。

【堆積土】13層確認された。全て自然堆積層の可能性が高く、レンズ状の堆積状況を示す例が多い。

【壁・底面】横断面は逆台形をなしており、壁は平坦な底面から直角ぎみに立ち上がっている。底面は途中に段があり、その北と南では約30cmの段差がみられる。

【出土遺物】堆積土から多くの遺物が出土した。図示できたのは土師器3点・赤焼土器1点・須恵器2点で、他に土師器破片79点・須恵器破片21点が出土している。

第5号性格不明遺構（SX 5）

【位置】V区　S1.6～2.4　E47～49.8

【確認面・重複】IV層上面で確認された。検出されたのは一部で、南は調査区外に延びている。第18・19号溝状遺構と重複しており、これらより新しい。また、第17号ピット群のいくつかと重複しており、これらより古い。

【平面形・方向・規模】検出部分からは方形を基調とするものと推定される。その北辺は真北とほぼ直交する方向を示す。規模は東西が2.42m前後で、南北が80cm以上、深さは30cm前後である。

【堆積土】3層確認された。全て自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】底面は概して平坦であり、壁はそこから明瞭な境をもって立ち上がり、外に開いている。東辺には壁沿いに一段高いテラス状の平坦面がみられる。

【出土遺物】出土していない。

第6号性格不明遺構（SX 6）

【位置】VII区　S47～59　W18.6～20.4

【確認面・重複】IV層上面で確認された。検出されたのは一部で、西側は撹乱によって失われており、遺構のほとんどはさらに調査区外に延びるものと考えられる。第84号土坑・第9号性格不明遺構と重複しており、これらより新しい。

【平面形・方向・規模】不整な形状をしており、全体のプランについては不明である。規模は長軸が11.94m以上、短軸が1.14m以上、深さは20cm前後である。

【堆積土】2層確認された。ともに自然堆積層とみられ、西方に将棋倒し状に堆積している。

【壁・底面】壁・底面とも一定せず、起伏が各所に認められる。壁の立ち上がりは比較的ゆるやかである。

【出土遺物】図示できたのは堆積土出土の染付1点と刀子1点である。染付は肥前産の瓶類とみられ、内面には釉はかかっていない。この他に土師器破片43点・須恵器破片14点が出土している。

第7号性格不明遺構（SX 7）

【位置】VII区　S41.3～41.9　W18～19.1

【確認面・重複】主に第71・99号土坑の堆積土中で確認された。その2つの土坑と第19号ピット群の一部により切られており、一部がわずかに残存したにすぎない。

【平面形・方向・規模】平面形・方向はいずれも不明である。規模は東西が1 m以上、南北が70cm以上、深さは10cm前後である。

【堆積土】1層のみ認められた。

【壁・底面】底面は起伏があり、凹凸している。

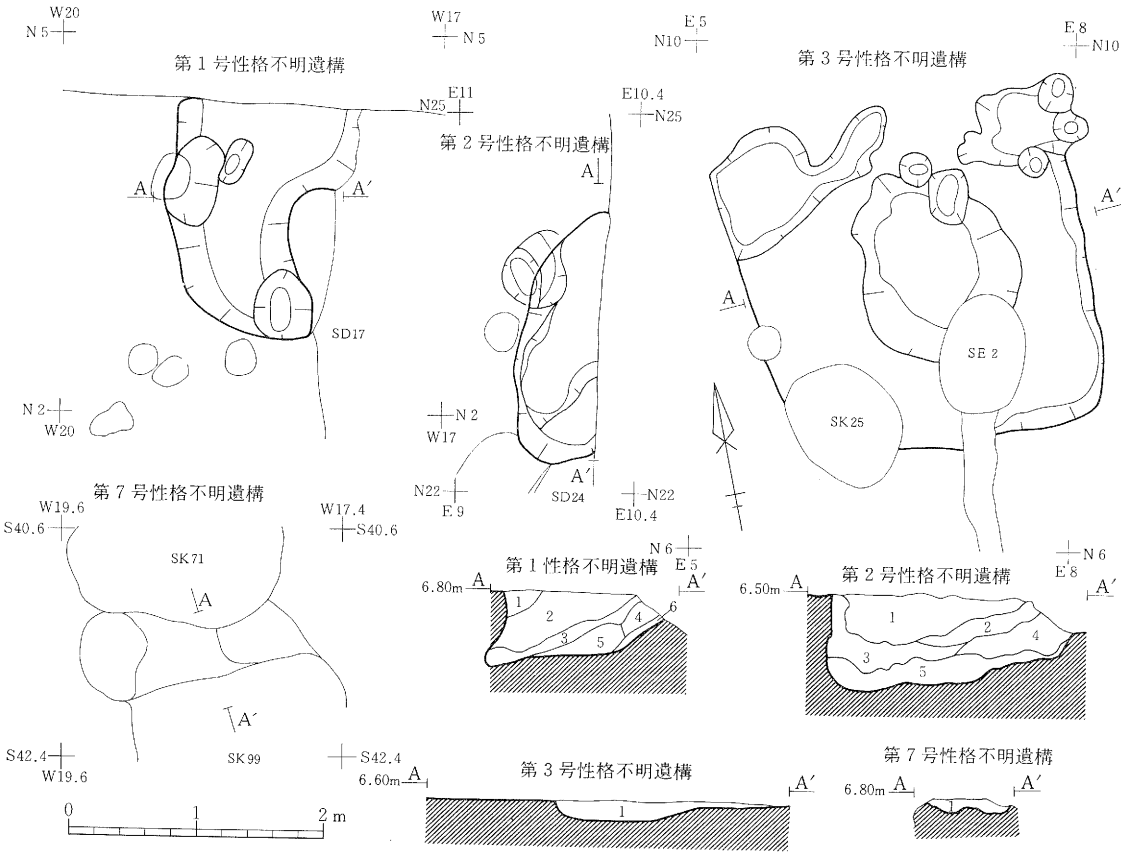
【出土遺物】堆積土から多くの遺物が出土した。図示できたのは土師器4点・須恵器2点である。土師器の坏では底部切り離しが回転ヘラ切りによるものと、回転糸切りによるものとがみられ、前者はその後に回転ヘラケズリの再調整が加えられている。この他に土師器破片45点・須恵器破片6点・鉱滓1点が出土している。

第8号性格不明遺構（SX 8）

【位置】VII区　S41.2～47.1　W19.5～22.1

【確認面・重複】IV層上面で確認された。検出されたのは一部で、東と西は撹乱により大きく失われており、また西ではさらに調査区外に延びている。第6号性格不明遺構・第19号ピット群のいくつかと重複しており、前者より古く、後者より新しい。

【平面形・方向・規模】一部の検出のため、全体の



第1号性格不明遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロック・粒子を少量含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト		
5			IV層ブロック	
6	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。	

第2号性格不明遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	酸化鉄斑紋をわずかに含む。	1
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層をまばらに含む。酸化鉄斑紋を粒状に含む。	2
3	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層を粒状に含む。壁面でブロック状に含む。	3
4	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層を多量に含む。(壁の崩落土。)	4
5	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	酸化鉄斑紋を多量に含む。	5

第3号性格不明遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	IV層ブロック・粒子を多量に含む。一部焼土を含む。	1

第7号性格不明遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/4)	砂	IV層を多量に含む。	1

第244図　第1・2・3・7号性格不明遺構平面図・セクション図

形は不明である。規模は南北方向が約6 m、東西方向が1.40m以上、深さが10～20cmである。

【堆積土】1層のみ確認された。層中に炭化物・焼土を若干含んでいる。

【壁・底面】底面は概して平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】堆積土や掘り方から若干の遺物が出土した。図示できたのは須恵器3点・縄文土器1点・弥生土器1点である。須恵器はいずれも坏で、その中の1点は回転ヘラ切りによって底部が切り離され、再調整がないものである。この他に土師器破片100点・須恵器破片11点が出土している。

第9号性格不明遺構（SX 9）

【位置】VI区　S32.4～33.7　E57.9～61.5

【確認面・重複】第30号竪穴住居跡の堆積土中で確認された。したがってこの遺構より新しい。北側は第3号堀跡に大きく切られている。

【平面形・方向・規模】検出されたのは一部であり、全体形は不明であるが、丸みをもつプランである。規模は東西が3.60m以上、南北が1.20m以上、深さが15cm前後である。

【堆積土】3層確認された。いずれも自然堆積層とみられる。

【壁・底面】底面には起伏がみられ、平坦ではない。壁はゆるやかに立ち上がっている。底面からピットが2個検出された。1つは柱痕跡をもっている。しかし、それらの配置状況には規則性は認められない。

【出土遺物】堆積土から土師器破片25点・須恵器破片4点・とりべ1点（写真89－17）が出土したが、図示できるものはなかった。

第10号性格不明遺構（SX 10）

【位置】VII区　S72.7～76.4　W49.2～52.5

【確認面・重複】IV層上面で確認された。検出されたのは一部で、その他は第3号竪穴遺構、第58・63号溝跡などに切られており、したがってこれらの遺構より古い。

【平面形・方向・規模】把握できたのは南辺のみで、直線に近い方向性を示している。その方向は真北と直交する方向に近く、N－81°－Eである。規模は南北が2.90m、東西が3.60mで、深さは10cm前後である。

【堆積土】1層のみ確認された。自然堆積層と考えられる。

【壁・底面】底面は平坦である。壁の立ち上がりはあまり一定していないが、概してゆるやかである。

【出土遺物】堆積土から土師器破片が12点出土したが、図示できるものはなかった。

第11号性格不明遺構（SX 11）

【位置】VIII区　S50～51.4　E104～104.4

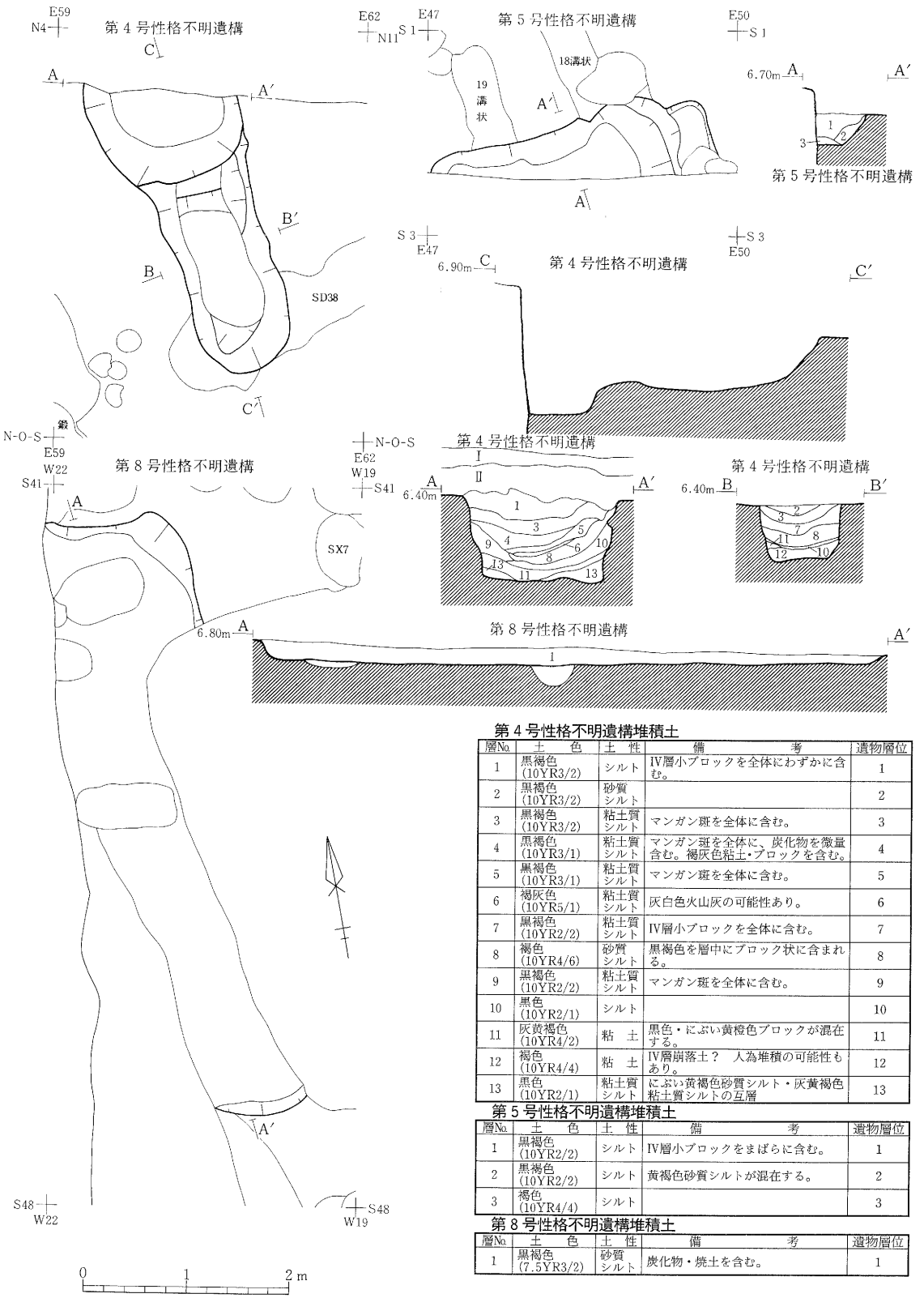
【確認面・重複】IV層上面で確認された。東は調査区外に延びている。第34・35号竪穴住居跡と重複しており、それらより新しい。

【平面形・方向・規模】平面形は方形を基調とするものと推定される。その南北方向は真北方向に近い。規模は南北が1.30m、東西が38cm以上、深さは35cmである。

【堆積土】5層確認された。いずれも自然堆積層とみられる。

【壁・底面】底面は段があり、平坦ではない。壁は底面からゆるやかに立ち上がっている。

【出土遺物】出土していない。



第245図　第 4 ・ 5 ・ 8 号性格不明遺構平面図・セクション図

第 4 号性格不明遺構堆積土

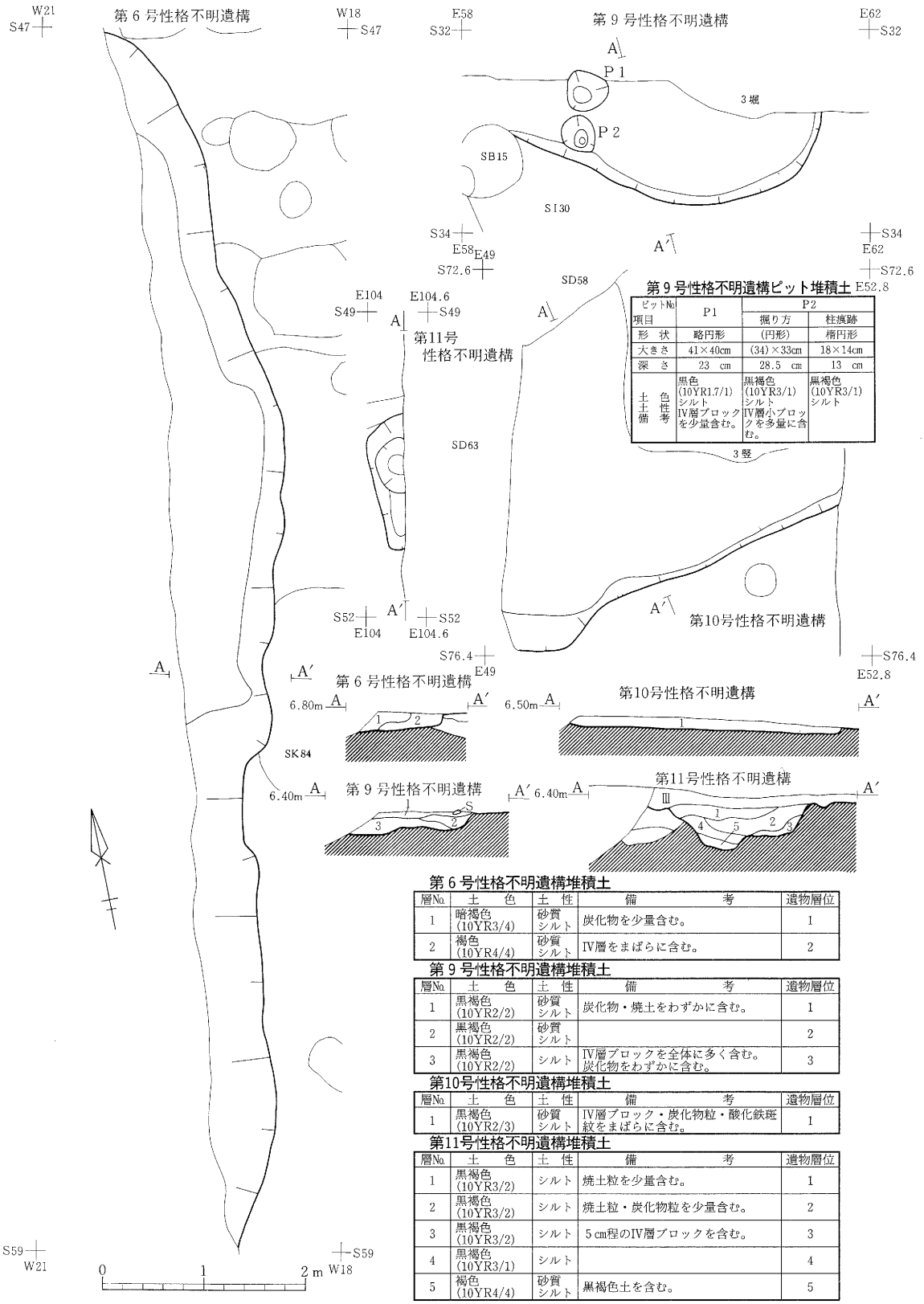
層No.	土　色	土　性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層小ブロックを全体にわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト		2
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	マンガン斑を全体に含む。	3
4	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	マンガン斑を全体に、炭化物を微量含む。褐灰色粘土・ブロックを含む。	4
5	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	マンガン斑を全体に含む。	5
6	褐灰色 (10YR5/1)	粘土質シルト	灰白色火山灰の可能性あり。	6
7	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	IV層小ブロックを全体に含む。	7
8	褐色 (10YR4/6)	砂質シルト	黒褐色を層中にブロック状に含まれる。	8
9	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	マンガン斑を全体に含む。	9
10	黒色 (10YR2/1)	シルト		10
11	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘　土	黒色・にぶい黄橙色ブロックが混在する。	11
12	褐色 (10YR4/4)	粘　土	IV層崩落土？　人為堆積の可能性もあり。	12
13	黒色 (10YR2/1)	粘土質シルト	にぶい黄褐色砂質シルト・灰黄褐色粘土質シルトの互層	13

第 5 号性格不明遺構堆積土

層No.	土　色	土　性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層小ブロックをまばらに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	黄褐色砂質シルトが混在する。	2
3	褐色 (10YR4/4)	シルト		3

第 8 号性格不明遺構堆積土

層No.	土　色	土　性	備　考	遺物層位
1	黒褐色 (7.5YR3/2)	砂質シルト	炭化物・焼土を含む。	1



第９号性格不明遺構ピット堆積土

ピットNo.	P1	P2	
項目		掘り方	柱痕跡
形状	略円形	(円形)	楕円形
大きさ	41×40cm	(34)×33cm	18×14cm
深さ	23 cm	28.5 cm	13 cm
土色土性備考	黒色 (10YR1.7/1) シルト IV層ブロックを少量含む。	黒褐色 (10YR3/1) シルト IV層小ブロックを多量に含む。	黒褐色 (10YR3/1) シルト

第６号性格不明遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	炭化物を少量含む。	1
2	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	IV層をまばらに含む。	2

第９号性格不明遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト	炭化物・焼土をわずかに含む。	1
2	黒褐色 (10YR2/2)	砂質シルト		2
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	IV層ブロックを全体に多く含む。炭化物をわずかに含む。	3

第10号性格不明遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	IV層ブロック・炭化物粒・酸化鉄斑紋をまばらに含む。	1

第11号性格不明遺構堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物層位
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土粒を少量含む。	1
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土粒・炭化物粒を少量含む。	2
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	5cm程のIV層ブロックを含む。	3
4	黒褐色 (10YR3/1)	シルト		4
5	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	黒褐色土を含む。	5

第246図　第６・９・10・11号性格不明遺構平面図・セクション図

15. 埋葬馬骨

【位置】Ⅷ区　N68.8～71　E98.3～100.1

【確認面・重複】Ⅲ層上面で土坑が２基（A・B）確認された。堆積土上面で馬骨の一部が認められたことと、この地点の土地所有者である守　健一郎氏から以前ここに馬頭観音の石碑が建立されていたことを知り、そして今回の馬骨がそれに該当することが確実なことから、調査は確認のみにとどめた。土坑Aが土坑Bを切っており、それより新しい。

【方向・規模】土坑Aは長軸1.38m、短軸1.02mの楕円形をなす。土坑Bは一部は未確認であるが、長軸が2.18m以上、短軸が1.10m以上の、Aと同じく楕円形をなすものと考えられる。

【堆積土】いずれも人為堆積層で、層中にⅣ層ブロックを多量に含んでいる。また、Ⅱ層のブロックも含まれている。馬骨はA・B土坑とも主に顎骨の一部が南壁部分で確認された。

【特記事項】以前この地点に存在した石碑は現在、東側の守氏の敷地北西隅に移されている。この石碑は安山岩の自然石とみられ、その一面に

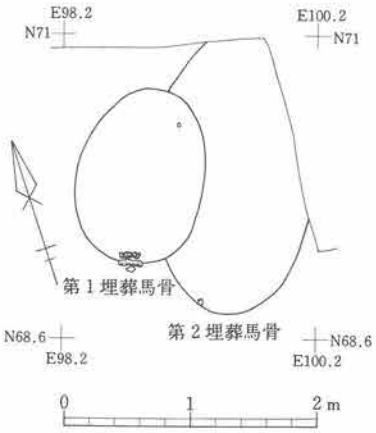
施主　今朝吉

明治二巳年

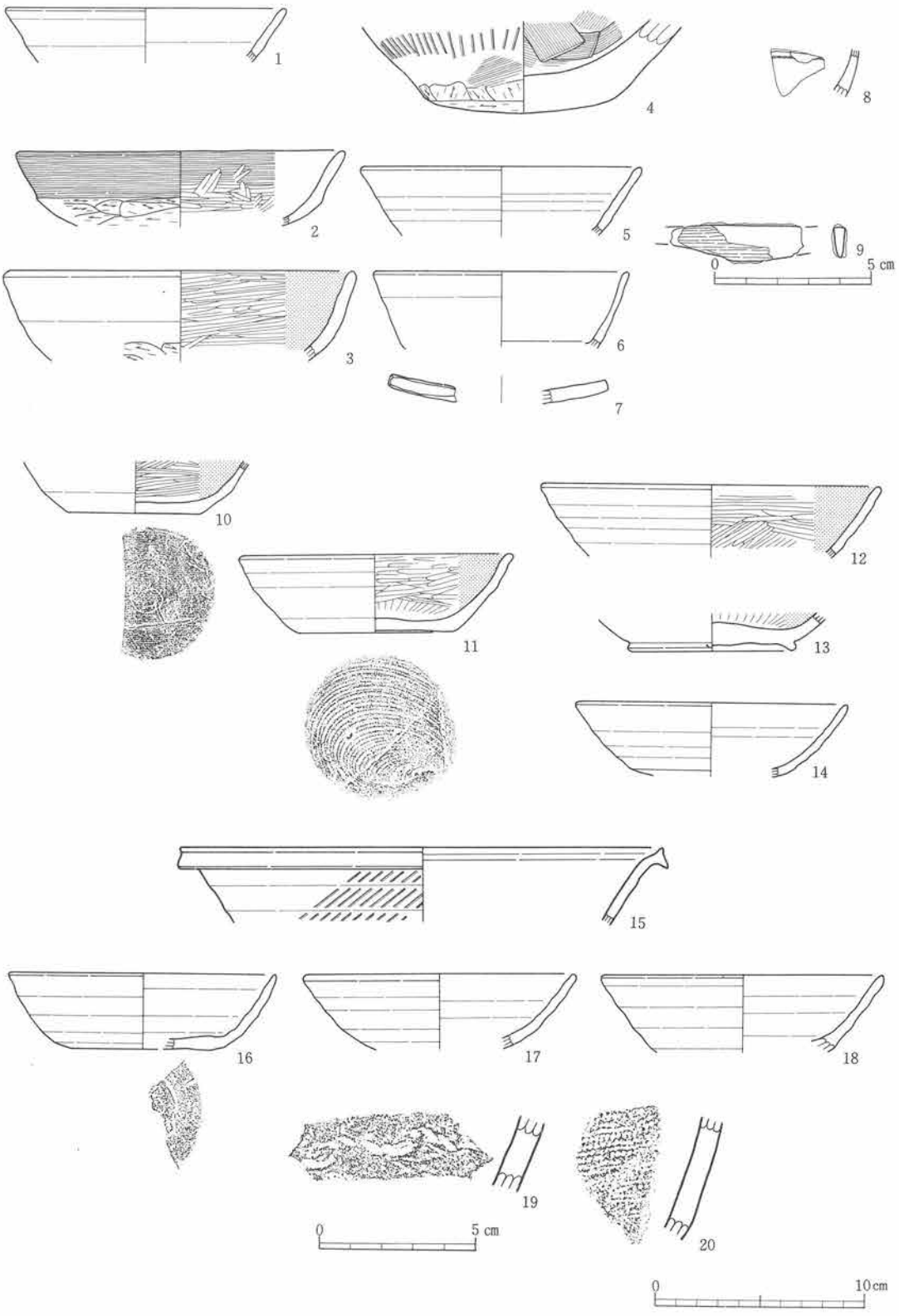
馬頭観世音

六月廿八日

と銘が刻まれている。したがって、この埋葬馬骨は明治二年（1869）かそれ以前の時期のものと考えられる。また、施主の今朝吉は守氏の先祖にあたるとのことである。



第247図　埋葬馬骨



第248図　第３・４・６・７・８・９号性格不明遺構出土遺物

第3号性格不明遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 坏	堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/6	(13.4)	—	—	—	E-175

第4号性格不明遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	土師器 坏	堆1層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理？	口縁部～体部1/4	15.8	—	—	—	C-318
3	土師器 坏	堆1～7層	ロクロナデ 体部下半手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/8	(16.8)	—	—	—	C-319
4	土師器 甕	堆1・2層	ハケメ・ナデ・ヘラケズリ	ヘラナデ	底部のみ	—	8.5	—	—	C-320
5	赤焼土器 坏	堆12層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/8	(13.4)	—	—	—	赤-7
6	須恵器 坏	堆7層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/8	(12.2)	—	—	—	E-176
7	須恵器 坏(双耳坏)	堆1～7層	ナデ・側面ケズリ	ナデ	双耳の部分片方のみ	—	—	—	—	E-177

第6号性格不明遺構

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
8	染付 瓶類	堆1層	外面に1条の界線あり。内面は釉なし	肥前	近世	体部破片	—	—	—	—	J-10

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
9	鉄製品 刀子	堆1層	茎の部分 木質部残存	(4.1)	1.0	0.4	6.0	100-10	N-62

第7号性格不明遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
10	土師器 坏	西半 堆1層	ロクロナデ・底部回転ヘラ切り、切離し回転ヘラケズリ再調整	ヘラミガキ・黒色処理	体部～底部 1/2	—	6.4	—	—	C-321
11	土師器 坏	西半 堆1層	ロクロナデ・底部回転糸切り、切離し再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	ほぼ完形	13.1	7.5	3.7	74-10	C-322
12	土師器 坏	西半 堆1層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/8	(16.3)	—	—	—	C-323
13	土師器 高台付坏	西半 堆1層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	底部のみ	—	8.0	—	—	C-324
14	須恵器 坏	西半 堆1層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/8	(13.0)	—	—	—	E-178
15	須恵器 甕	西半 堆1層	ロクロナデ・平行タタキ目	ロクロナデ	口縁部～体部1/8	(23.0)	—	—	—	E-179

第8号性格不明遺構

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
16	須恵器 坏	堆	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り再調整なし	ロクロナデ	口縁部～底部1/6	(12.8)	(6.8)	3.6	—	E-180
17	須恵器 坏	北半堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/4	13.0	—	—	—	E-181
18	須恵器 坏	北半堆	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/6	(13.5)	—	—	—	E-182

第9号性格不明遺構

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
19	縄文土器 深鉢	掘り方	縄文L。内面ヘラミガキ	体部破片	—	—	—	86-22	地44③
20	弥生土器 甕？	堆	縄文(付加条)LR+R	体部破片	—	—	—	—	地-90

16. 河 川 跡

Ⅶ区西端部とⅨ区C・D・Eトレンチにおいて、河川跡とみられる落ち込みおよび堆積土が確認された。

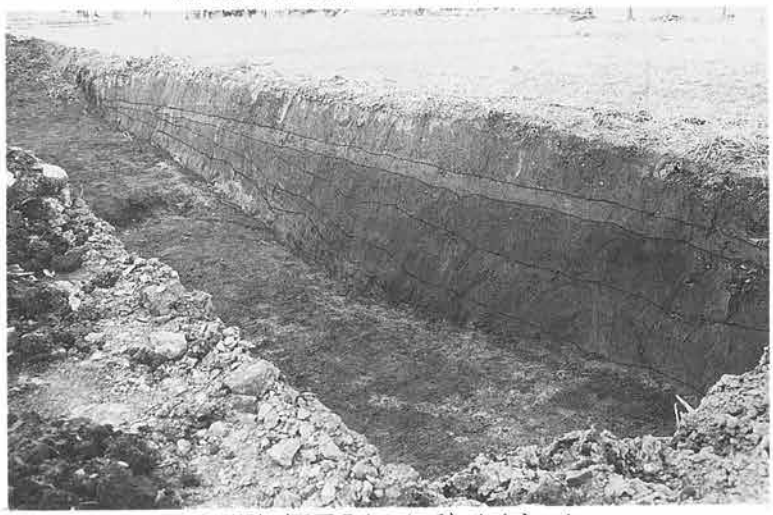
〈Ⅶ区西端部〉Ⅳ層上面が南方向に傾斜し始めて約6mの所から、南側に急角度で落ち込むラインが確認された。方向はⅣ層上面の緩斜面の方向と一致し、曲線を描いている。下層試掘Dトレンチでの断面観察では堆積土は8層確認され、いずれも南側に将棋倒し状に堆積している。底面には純粋な粗砂層が20cm前後の厚さで堆積しており、その上部の層は植物遺体を含む粘土主体の層である。また、堆積土の最上層は黒色粘土と灰白色火山灰とみられる白色シルトの混在する層で、水流により撹拌された可能性が考えられる。この部分の底面は皿状をなし、壁はゆるやかに立ち上がっている。堆積土中からは土師器が出土し、また、底面からは杭が打ち込まれた状態で検出されている。

〈Ⅸ区C・D・Eトレンチ〉Cトレンチは河川跡の北壁の一部にあたるとみられ、Ⅳ層上面は南西方向に次第に傾斜している。堆積土は4層確認され、下半の層はグライ化する。いずれも粘土主体の層であり、層中からはわずかに土師器片などが出土している。

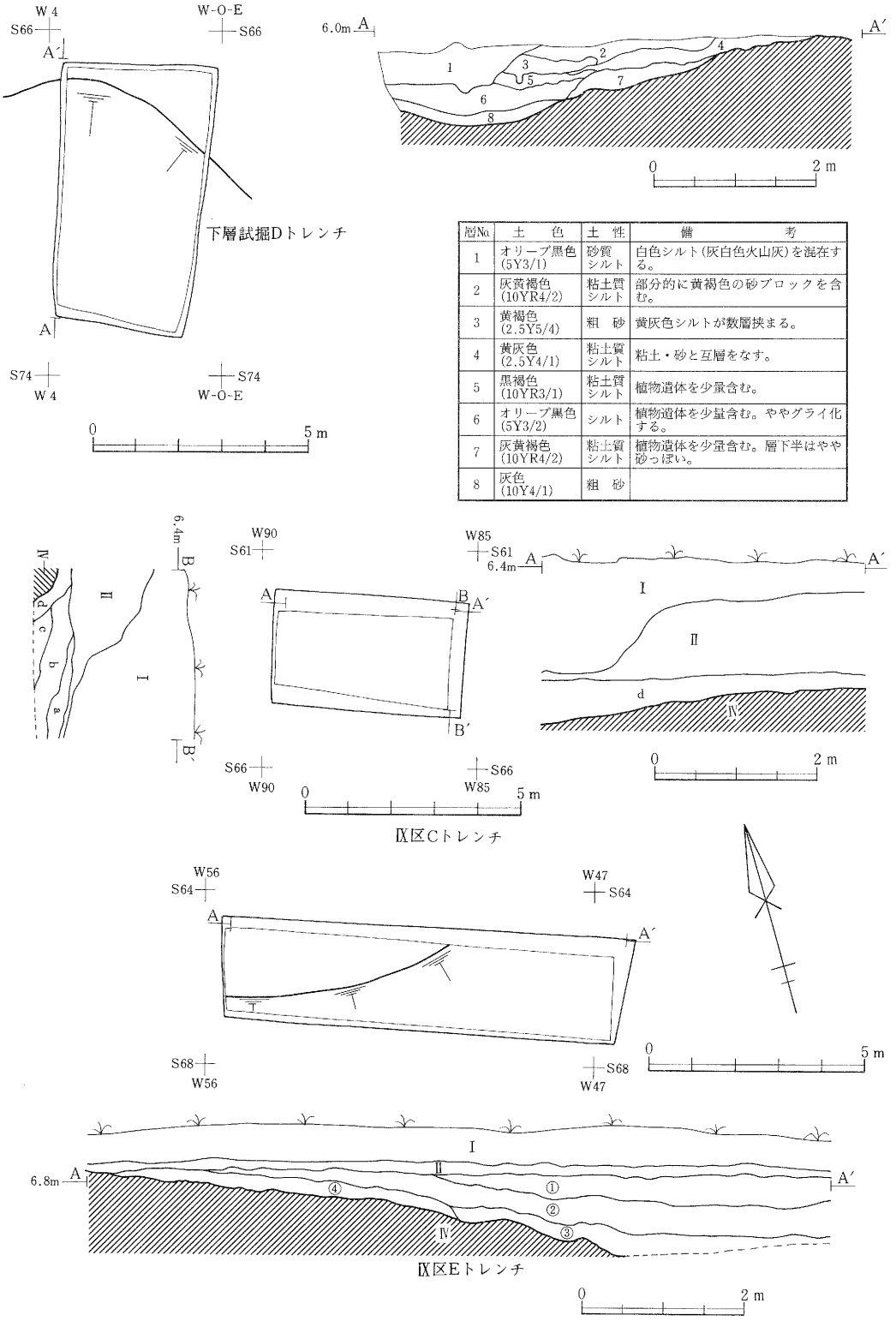
D・Eトレンチでは自然堤防から河川跡に至る縁部が確認された。Dトレンチでは南西方向に、Eトレンチでは南東方向にゆるやかに傾斜して下がる。堆積土は両トレンチに共通する4層が確認された。いずれもシルト主体の層であり、層中からは土師器片などが若干出土している。

以上のように確認された部分は河川跡の北岸付近にあたる。Ⅶ区からⅨ区にかけて約100mほどの長さが確認されたが、東西方向に曲流しながら走行している。この河川跡は遺跡全体の南端に位置し、その端部を画するように走るようである。なお、遺跡

河川跡（下層試掘Dトレンチ）セクション

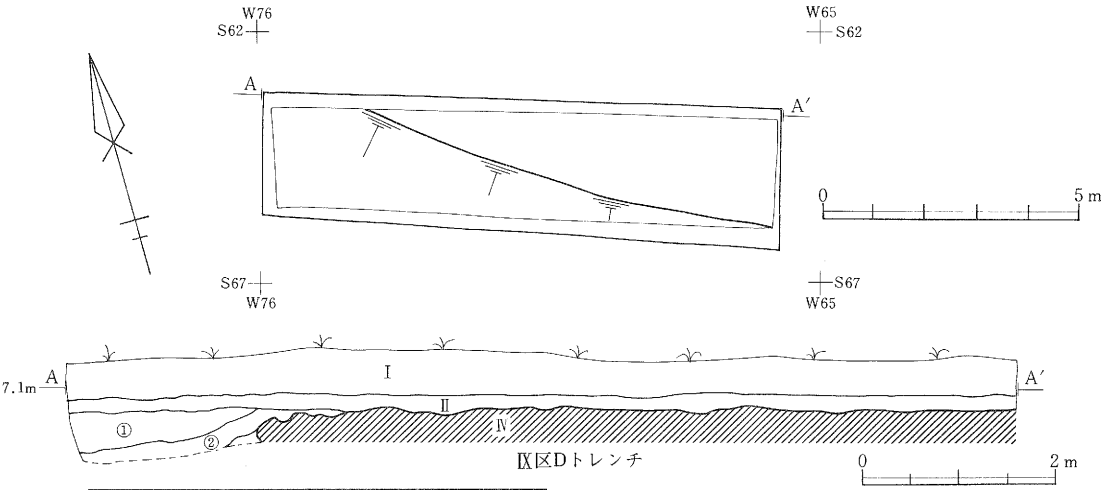


河川跡（Ⅸ区Eトレンチ）セクション

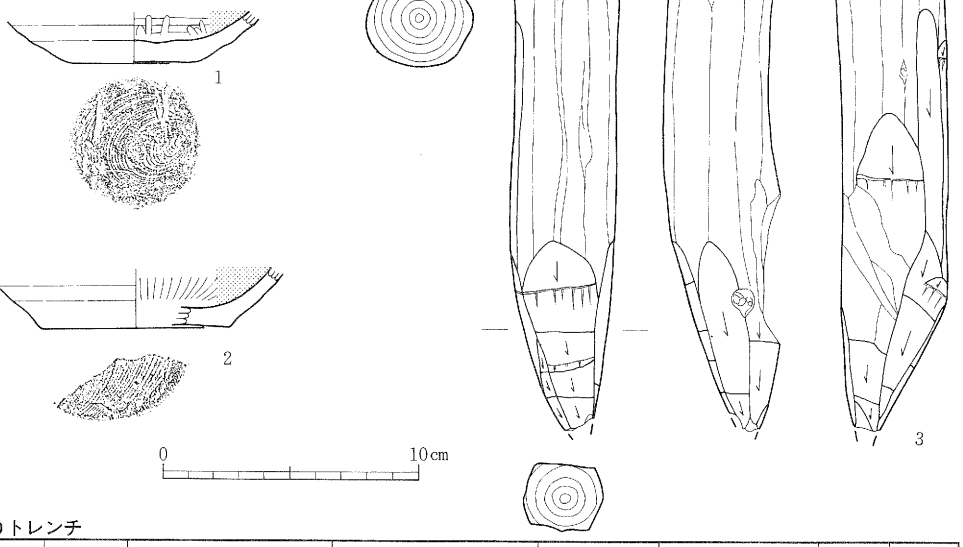


層No.	土　色	土　性	備　　考
1	オリーブ黒色 (5Y3/1)	砂質シルト	白色シルト(灰白色火山灰)を混在する。
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	部分的に黄褐色の砂ブロックを含む。
3	黄褐色 (2.5Y5/4)	粗　砂	黄灰色シルトが数層挟まる。
4	黄灰色 (2.5Y4/1)	粘土質シルト	粘土・砂と互層をなす。
5	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	植物遺体を少量含む。
6	オリーブ黒色 (5Y3/2)	シルト	植物遺体を少量含む。ややグライ化する。
7	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	植物遺体を少量含む。層下半はやや砂っぽい。
8	灰色 (10Y4/1)	粗　砂	

第249図　河　川　跡（1）



層No.	土色	土性	備考
①	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	遺物わずかに含む。基本層のIII a に近い。
②	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	遺物をわずかに含む。
③	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	IV層ブロックを全体に多く含む。
④	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	IV層のブロックを少量含む。
a	黒色 (10YR1.7/1)	粘土	
b	褐灰色 (10YR5/1)	粘土	酸化鉄の斑紋(糸根状)を多く含む。
c	灰色 (7.5Y4/1)	粘土	酸化鉄の斑紋(糸根状)を多く含む。グライ化
d	黒褐色 (10YR3/1)	粘土	IV層の細かなブロック多量・炭化物を少量含む。酸化鉄斑紋(糸根状)を多く遺物をわずかに含む。

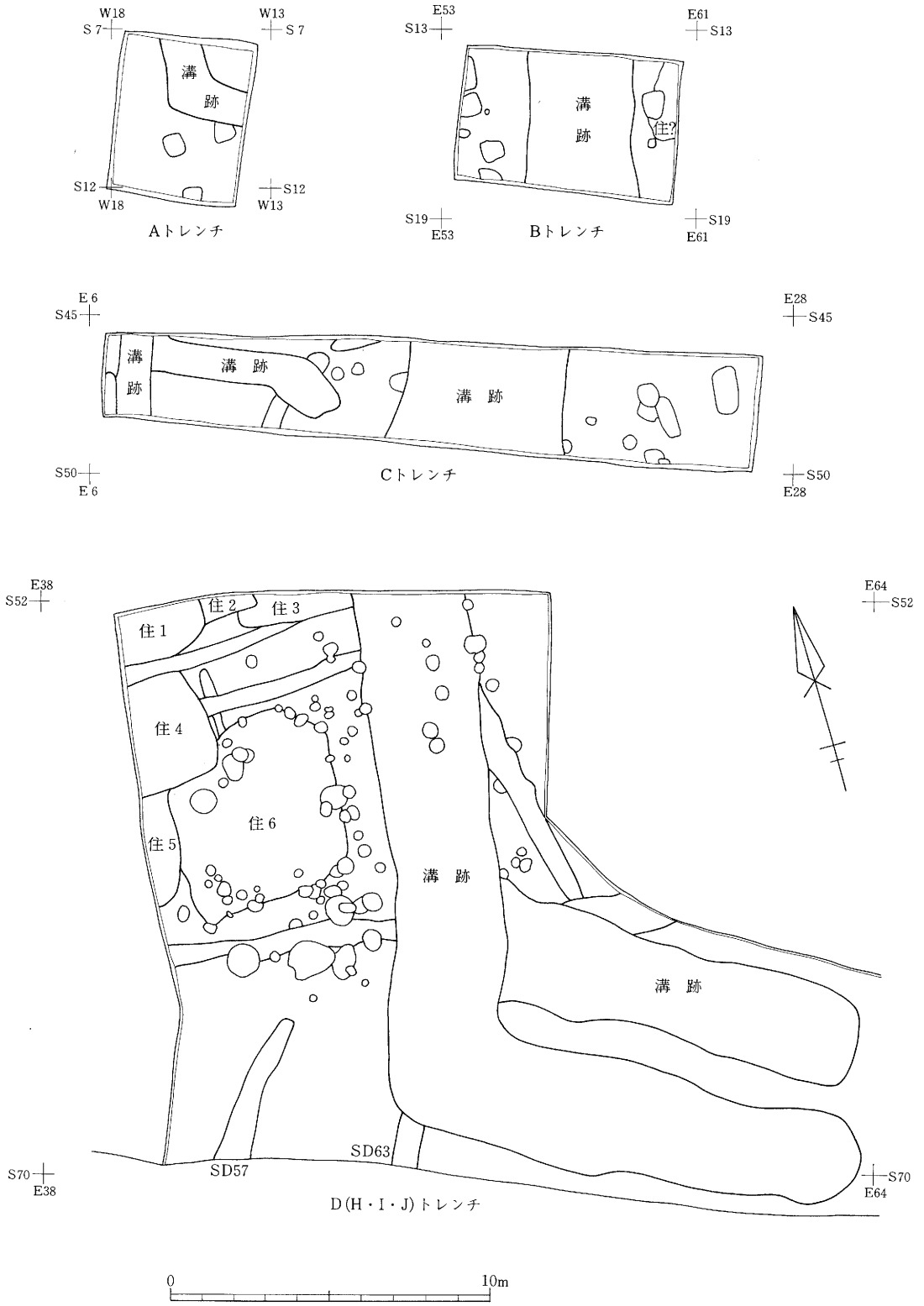


下層試掘Dトレンチ

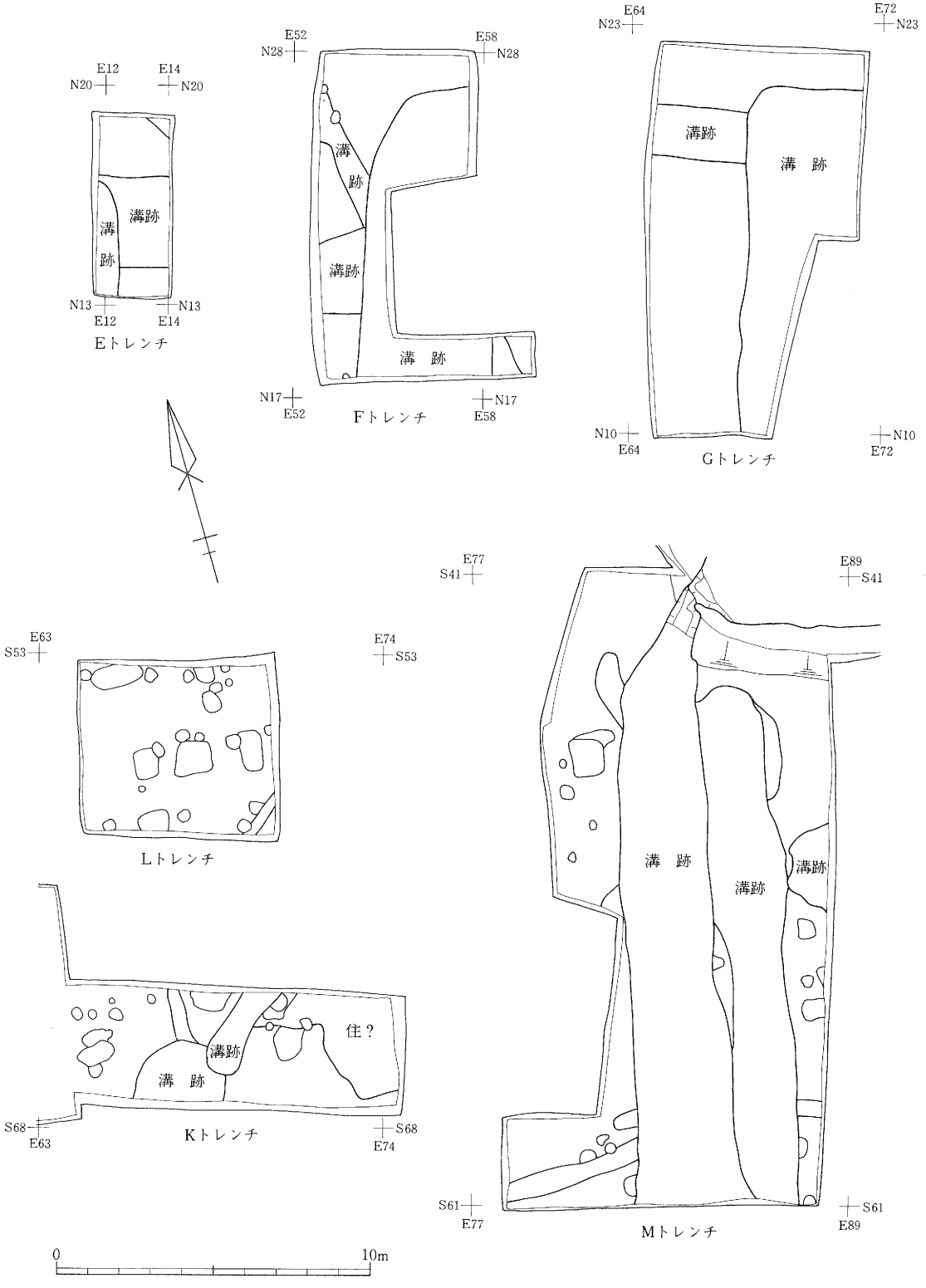
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	堆7層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	体～底部 1/1	−	5.0	−	−	C-325
2	土師器 坏	堆7層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	体～底部 1/4	−	7.4	−	−	C-326

番号	種別	層位	特徴	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	写真図版	登録番号
3	杭材	底面	丸太材。完形 先端全体が加工されている。胴体部は樹肌のみ。	−	32.6	4.1	4.2	−	L-123

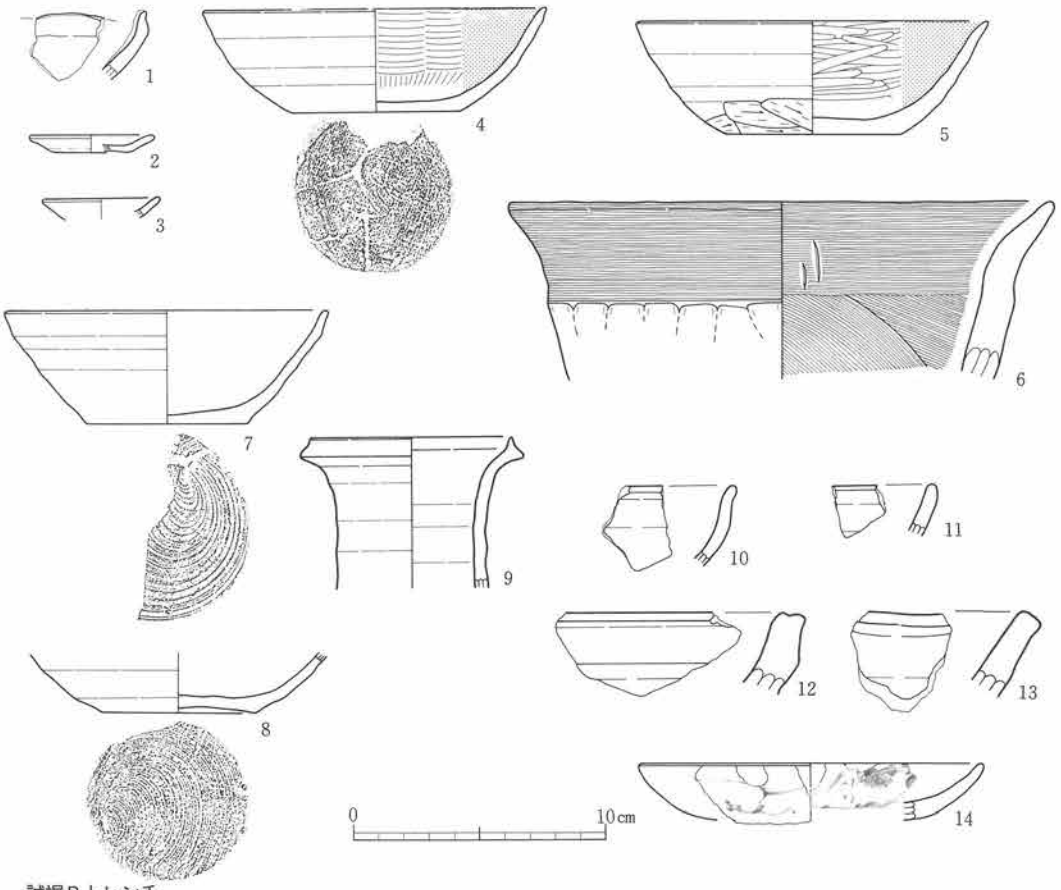
第250図　河川跡(2)と出土遺物



第251図　試掘トレンチ（1）



第252図　試掘トレンチ（2）



試掘Bトレンチ

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	とりべ	I・II層	片口。外面に稜をもつ。外面は調整不明。内面に溶解物付着。白針わずかに含む。器厚 0.5cm	口縁部～体部破片	－	－	－	92-4	ト-86

試掘Cトレンチ

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	土師質土器 皿	I・II層	内外面ともロクロナデ 底部は回転糸切り・再調整なし	－	近世	全体の1/5	5.0	2.8	0.7	－	I-103
3	土師質土器 皿	I・II層	内外面ともロクロナデ	－	近世	口縁部 1/8	(4.7)	－	－	－	I-104

試験掘Dトレンチ(H・I・Jを含む)

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	土師器 坏	I・II層	ロクロナデ・底部回転糸切り。中心部を除き手持ちヘラケズリ再調整	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～底部1/3	13.6	6.5	4.1	－	C-327
5	土師器 坏	I・II層	ロクロナデ・底部切り離し不明。底部～体部にかけて手持ちヘラケズリの再調整あり	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～底部4/5	13.9	6.8	4.5	74-14	C-328
6	土師器 甕	I・II層	ヨコナデ・ヘラケズリ？	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～底部1/4	21.6	－	－	－	C-329
7	須恵器 坏	I・II層	ロクロナデ 底部回転糸切り。再調整なし	ロクロナデ	口縁部～体部1/3	12.8	6.3	4.5	－	E-183
8	須恵器 坏	I・II層	ロクロナデ 底部回転糸切り。再調整なし	ロクロナデ	体部～底部	－	6.2	－	－	E-184
9	須恵器 壺	I・II層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/2	8.0	－	－	－	E-185

試掘Dトレンチ(H・I・Jを含む)

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
10	陶器 天目茶垸	I・II層	内外面ともロクロナデ(鉄釉)	古瀬戸	16 C	口縁部破片	－	－	－	－	I-105
11	陶器 垸	I・II層	内外面ともロクロナデ(灰釉)	古瀬戸	15 C	口縁部破片	－	－	－	－	I-106
12	陶器 鉢	I・II層	片口の鉢。内外面ともロクロナデ。白針わずかに含む。	在地	13C～14C	口縁部破片	－	－	－	－	I-107
13	陶器 鉢	I・II層	片口の鉢。内外面ともロクロナデ	在地	13C～14C	片口部分のみ	－	－	－	－	I-108
14	染付 皿	I・II層	内外面に文様あり。内面は草花文	肥前	18 C	口縁部 1/8	(13.6)	－	－	85-22	J-11

第253図　試掘トレンチ出土遺物（1）

の南側には空中写真や現地形などから幅20m前後の帯状の凹地が観察され、旧河道として知られているが、河川跡はその旧河道の一部であり、北側のプランを示すものと考えられる。

出土遺物で図示できたのは下層試掘Dトレンチで出土した土師器2点と杭材1点である。土師器は2点とも坏で、ロクロで製作されており、底部は回転糸切りにより切り離され、その後の再調整はみられない。このトレンチからはこれらの他にロクロで製作された土師器破片が10点・須恵器破片が7点出土している。

17. 試掘トレンチと出土遺物

主に堀跡や溝跡のプランを確認するために、調査区以外にA～Mの試掘トレンチを設定し、遺構確認を行った。その中のH・I・Jの各試掘トレンチは最終的にはDトレンチと一緒にしたため、ここではDトレンチに一括している。

〈Aトレンチ〉このトレンチでは急角度で屈曲する溝跡とピットが数個確認された。この中の溝跡は幅は約1.3mであり、方向性などから北ではII区の第18号溝跡と、東ではIII区の第20号溝跡とつながるものと考えられる。

〈Bトレンチ〉このトレンチでは直線的に走る溝跡とその付近から竪穴住居跡とみられる遺構やピットが確認されている。この中の溝跡は幅が約3.3mあり、規模や方向性などから南ではVI区の第2号堀跡につながり、北ではV区の第37号溝跡につながるものと考えられる。

〈Cトレンチ〉このトレンチでは溝跡が数条と土坑・ピットなどが確認されている。この中の南北方向に走行し、幅が約5mある規模の大きい溝跡はVI・VII区の第2号堀跡につながるものと考えられる。溝跡部分のI・II層からは土師質土器が2点出土している。

〈Dトレンチ（H・I・Jも含む）〉このトレンチでは溝跡が数条と竪穴住居跡が6軒、ピット多数が確認された。この中の北方向から走行し、南側で急角度で東に屈曲する溝跡は幅が約3.5mと規模が大きく、方向性・位置関係などからVI区の第3号堀跡につながり、さらにVII区の第59号溝跡と関連するものと考えられる。また、この溝跡と東西方向で平行する溝跡も規模がほぼ等しく、同位置で途切れることなどから、これらは北側から南側へ移設されたものと推測される。なお、確認された住居跡（№6）付近からは土師器・須恵器・瓦が出土している。また、溝跡付近のI・II層からは陶器・磁器などが出土している。

〈Eトレンチ〉このトレンチでは溝跡が3条確認された。この中の南西隅で確認された溝跡は西では第23号溝跡に、南では第20号溝跡につながるものとみられ、そのコーナー部分と考えられる。

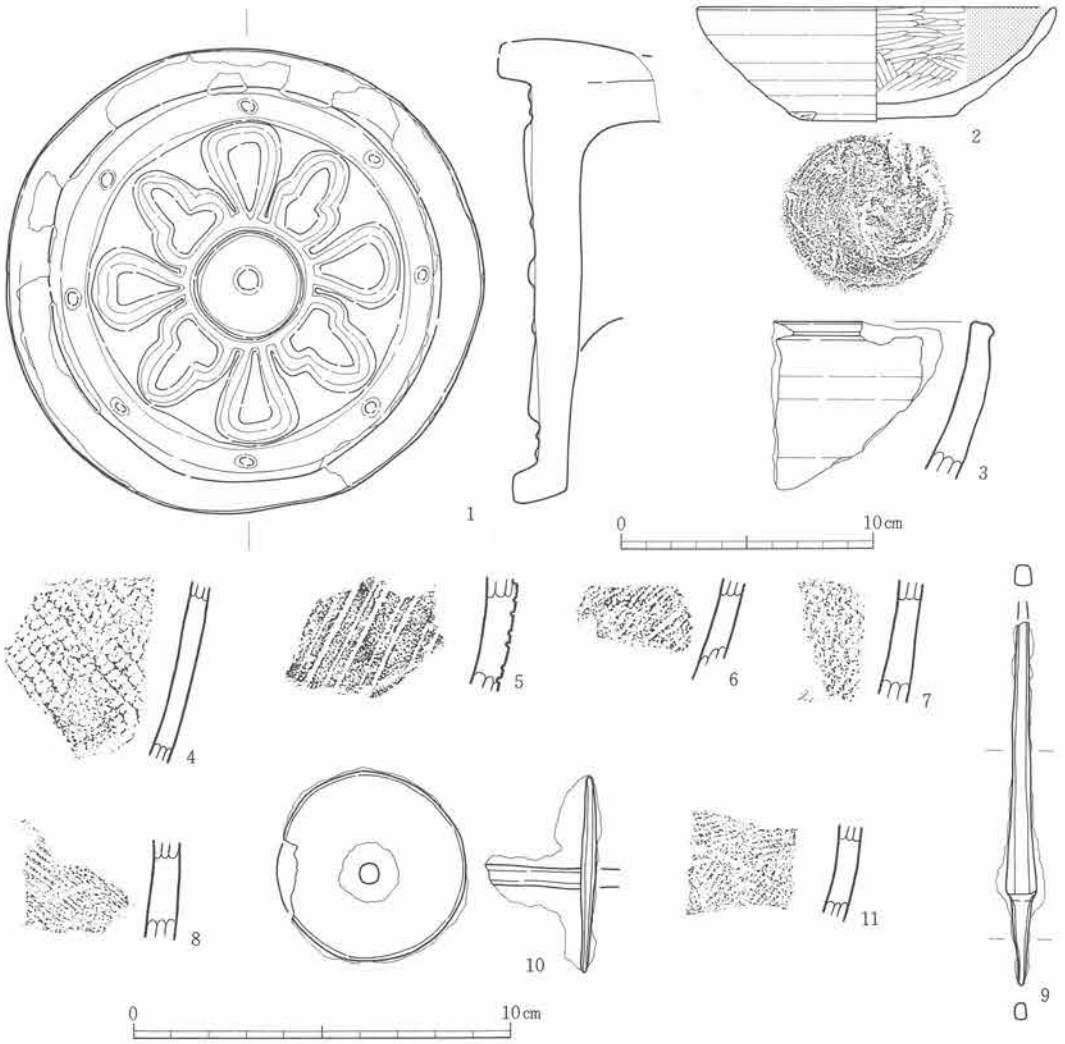
〈Fトレンチ〉このトレンチでは溝跡が4条とピットが確認された。この中の幅約4mの規模の大きい溝跡は方向性や位置関係などから南はV区の第37号溝跡とつながることが考えられ、北はほぼ直角に屈曲し、東に走行してVIII区の第69号溝跡に続くものと推測される。

〈Gトレンチ〉このトレンチでは2条の溝跡が確認された。この中の幅が3m以上もある規模の大きい溝跡は方向性や位置関係などから第4号堀跡の北西コーナーの部分と考えられる。

〈Kトレンチ〉このトレンチでは溝跡が数条と竪穴住居跡・ピットなどが確認された。この中の幅約3mの溝跡はこのトレンチ中央で途切れており、規模や方向性などから南のVII区第59号溝跡とつながるものと考えられる。I・II層から鉄製の紡錘車が出土している。

〈Lトレンチ〉このトレンチではピットが多数確認されたのみで、堀跡や溝跡と関連するものはなかった。ピットの1つから土師器が1点出土している。

〈Mトレンチ〉このトレンチでは溝跡が数条と多数



試掘Dトレンチ

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(cm)	写真図版	登録番号
1	軒丸瓦(文様瓦)	I・II層	瓦当文様は8葉の宝相花文で、中房部・花弁および、その周囲に配された8個の珠文からなる。	18.5	18.9	2.1	—	—	92-12	瓦-7

試掘Lトレンチ

番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
2	土師器 坏	I・II層	ロクロナデ・底部回転糸切り・わずかに手持ちヘラケズリ再調整あり	ヘラミガキ・黒色処理	全体の2/3	14.2	6.2	4.5	74-13	C-330

試掘Mトレンチ

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	陶器 鉢	I・II層	内外面ともロクロナデ	在地	13C～14C	口縁部破片	—	—	—	—	I-109

試掘Dトレンチ(H・I・Jを含む)

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	縄文土器 深鉢	I・II層	縄文。LR。内面ナデ	体部破片	—	—	—	87-6	地-109
5	弥生土器 壺	I・II層	二本平行沈線による重層山形文。内面はナデ	体部破片	—	—	—	87-17	弥-33
6	弥生土器 甕?	I・II層	撚糸文。R。内面はヘラミガキ	体部破片	—	—	—	—	地-107
7	弥生土器 甕?	I・II層	撚糸文。R。内面はナデ	体部破片	—	—	—	—	地-110
8	弥生土器 甕?	I・II層	撚糸文。R。内面はヘラミガキ	体部破片	—	—	—	88-10	地-108

第254図　試掘トレンチ出土遺物（2）

試掘Dトレンチ（H・I・Jを含む）

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
9	鉄製品 錐か鉄鏃	I・II層	先端わずかに欠損。断面長方形に近い。	(9.6)	0.4	0.6	(11.4)	100-15	N-63

試掘Kトレンチ

番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
10	鉄製品 紡錘車	I・II層	鉄製円盤に細い鉄の棒を指し込んでいる。円盤は直径5cm。棒の断面は円形である。	5.1	5.0	0.4	(34.2)	101-4	N-64

試掘Mトレンチ

番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
11	弥生土器 甕？	I・II層	撚糸文。R。内面ヘラミガキ	体部破片	—	—	—	88-14	地-111

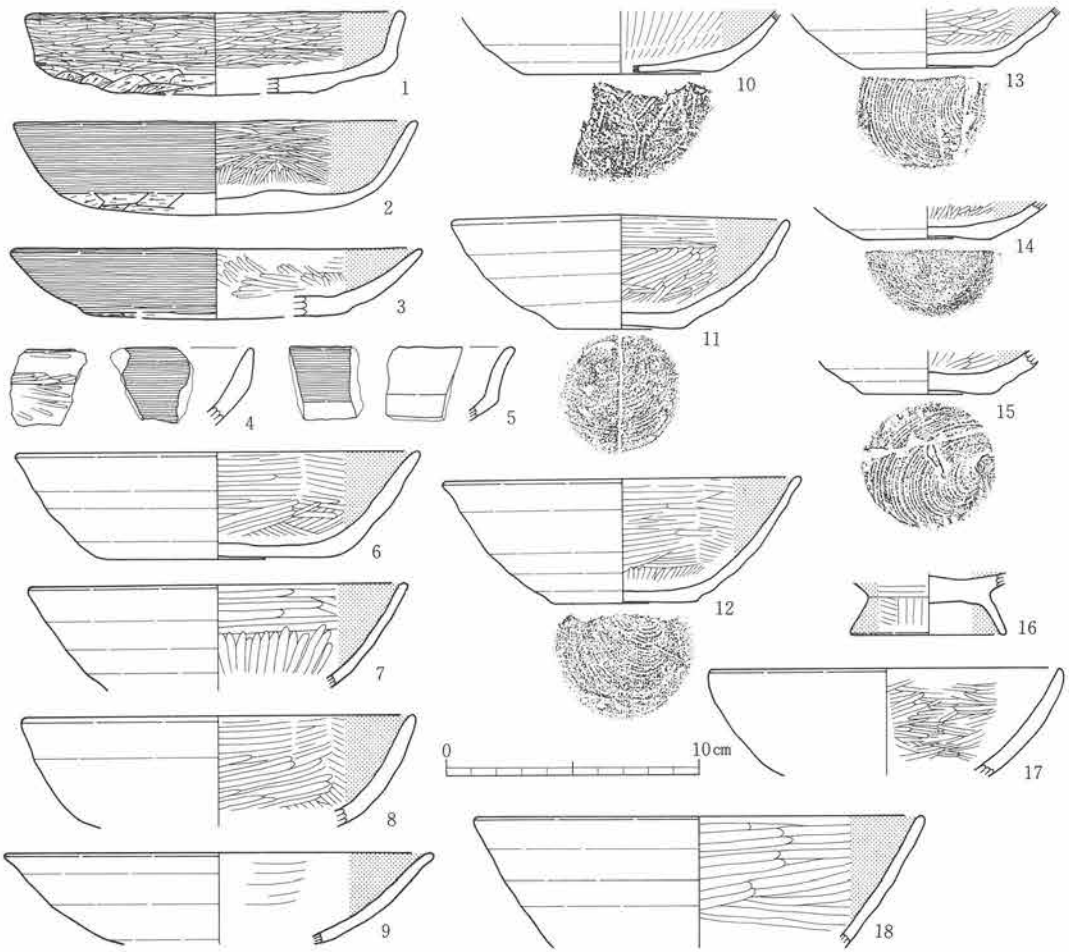
のピットが確認された。この中の溝跡1は幅が約3mで南北方向に直線的に走行しており、北は幅をせばめて第4号堀跡と接続している。また、南はVII区の第61号溝跡につながるものと考えられる。溝跡2はこの溝跡1に切られており、これより古い。幅は2m以上で、南北方向に直線的に走行するが、北側で途切れる。方向性や位置関係などから南はVII区の第62号溝跡につながるものと考えられる。また、北方の第3号堀跡とも関連することが推定される。これと溝跡3は東側でほぼ直角方向に接しており、両者は関連する遺構と考えられる。溝跡3は幅が3m前後で、東側に延びており、VIII区の第65号溝跡につながるものと考えられる。このトレンチのI・II層からは陶器などが出土している。

18. III層出土遺物

基本層のIII層からは各種にわたる遺物が多量に出土した。III層はIII a・III bの二層に細分されるが、前述したように遺物に関してはほとんど細分層で取り上げることができなかった。これらの中で図示できたものは土師器29点・赤焼土器4点・須恵器32点・灰釉陶器3点・土師質土器3点・陶器1点・白磁1点・青磁1点・染付1点・弥生土器18点・とりべ5点・土錘4点・瓦1点・石鏃1点・石錐1点・剝片石器1点・石庖丁1点・石製品4点・砥石7点・鉄製品22点・古銭1点である。この他に土師器破片4378点・赤焼土器破片63点・須恵器破片807点・灰釉陶器1点（写真81－12）・土師質土器2点・とりべ5点（写真91－29、92－1・2・9・10）・鉱滓19点などが出土している。

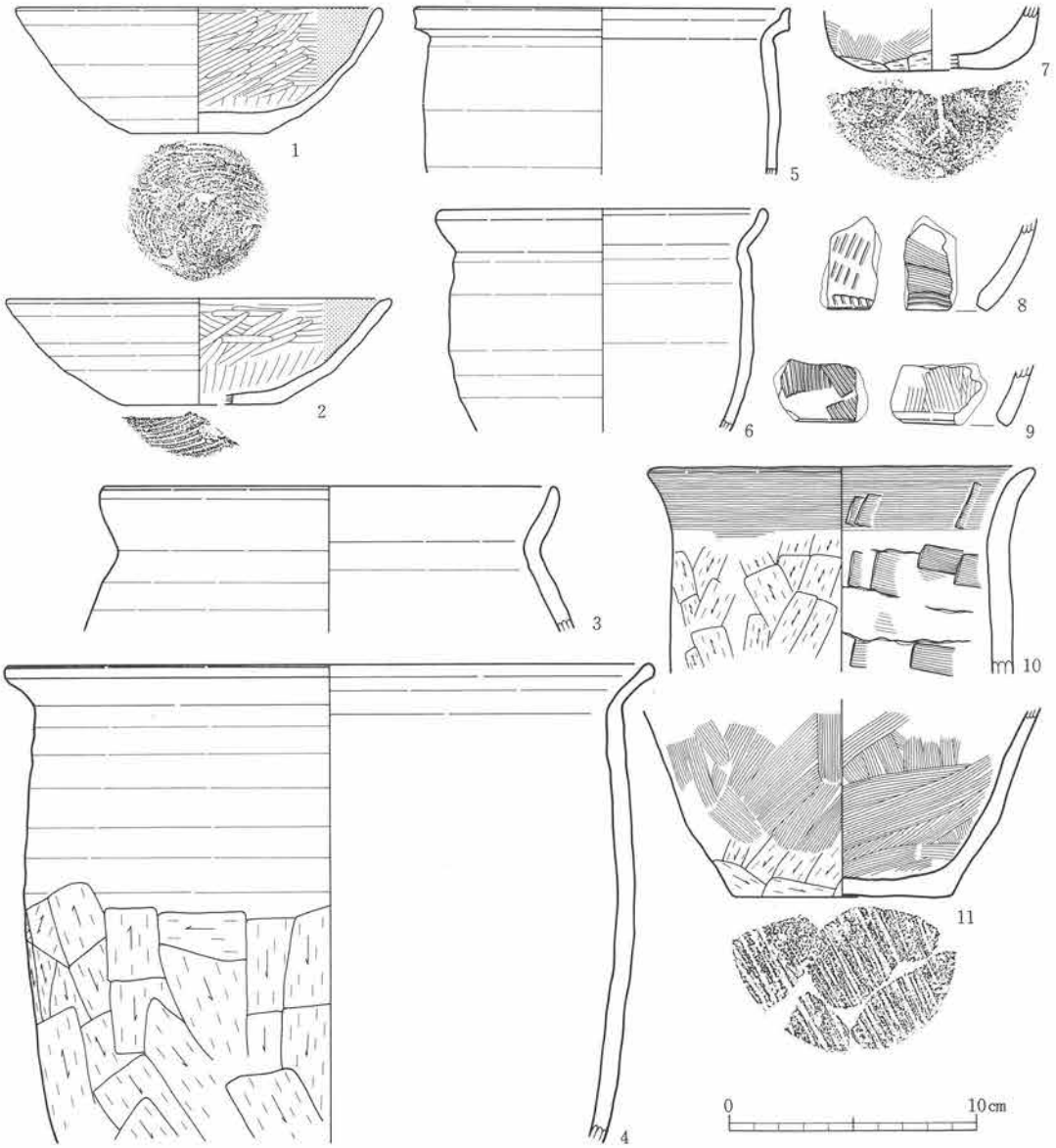
19. I・II層出土遺物および表採資料

I・II層からは全域にわたって各種の遺物が出土している。その中で図示できたのは土師器13点・赤焼土器1点・須恵器11点・灰釉陶器2点・土師質土器9点・陶器19点・瓦質土器1点・青磁2点・白磁1点・染付7点・縄文土器9点・弥生土器20点・とりべ9点・円面硯1点・瓦2点・土錘3点・土人形1点・剝片石器など6点・石硯1点・砥石7点・鉄製品11点・銅鏡1点・古銭2点である。この他に土師器破片5154点・赤焼土器破片57点・須恵器破片1185点・灰釉陶器破片2点（写真81－18など）・中世陶器破片20点・土師質土器破片1点・とりべ19点（写真87－7、写真90－2・4・12・13・19、写真91－2・3・5・7・8・10～13・28、写真92－3・7など）・鉱滓7点などが出土している。



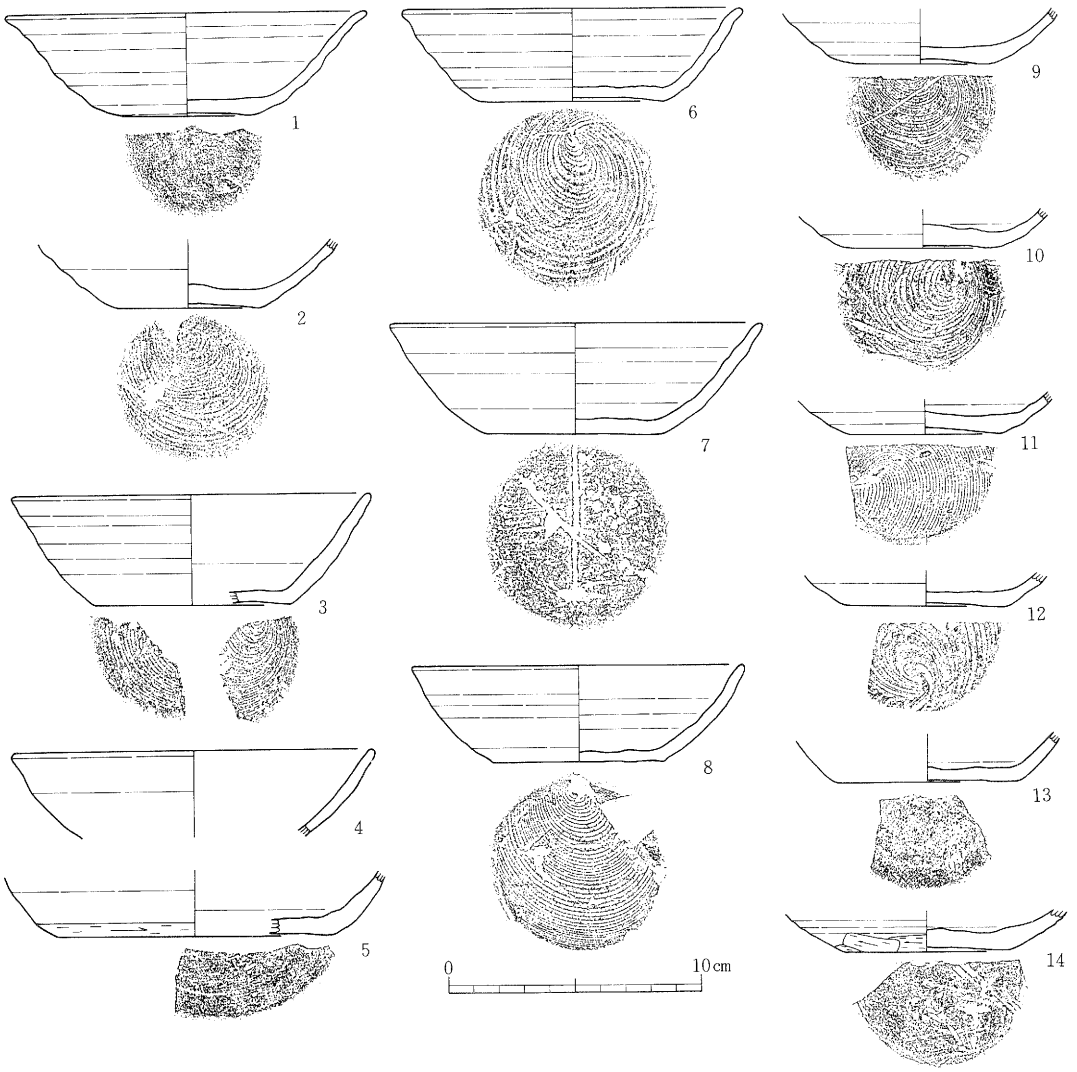
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	III区 III層	ヨコナデ・ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～底部1/4	15.0	－	3.3	－	C-331
2	土師器 坏	III区 III層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～底部2/5	16.0	－	3.7	－	C-332
3	土師器 坏	II区 III層	ヨコナデ・底部ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/4	16.4	10.2	2.6	－	C-333
4	土師器 坏	II区 III層	ヘラミガキ	ヨコナデ	体部破片	－	－	－	－	C-334
5	土師器 坏	II区 III層	ヨコナデ	？	体部破片	－	－	－	－	C-335
6	土師器 坏	V区 III層	ロクロナデ・底部回転糸切り底部周辺手持ちヘラケズリ再調整	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/3	16.0	8.8	4.2	74-15	C-336
7	土師器 坏	VIII区 III層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/6	(15.0)	－	－	－	C-337
8	土師器 坏	V区 III層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/4	15.6	－	－	－	C-338
9	土師器 坏	II区 III層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/8	(17.0)	－	－	－	C-339
10	土師器 坏	II区 III層	ロクロナデ 底部切り離し不明・手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	体部下半～底部 1/4	－	7.6	－	－	C-340
11	土師器 坏	IV区土器集中地点III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ・ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～底部1/2	13.4	5.0	4.5	74-11	C-341
12	土師器 坏	IV区土器集中地点III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～底部1/2	14.2	5.8	4.9	74-12	C-342
13	土師器 坏	VI区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	体部～底部 1/2	－	5.4	－	－	C-343
14	土師器 坏	IV区 SD40 周辺 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	体部下半～底部	－	5.1	－	－	C-344
15	土師器 坏	II区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	体部下半～底部	－	5.2	－	－	C-345
16	土師器 高台付坏	IV区 III層	ロクロナデ ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	底部のみ	－	6.2	－	－	C-346
17	土師器 坏	II区 III層	ロクロナデ	ヘラミガキ	口縁部～体部1/5	(14.0)	－	－	－	C-347
18	土師器 坏	VIII区 III層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/8	(17.8)	－	－	－	C-348

第255図　III層出土遺物（1）



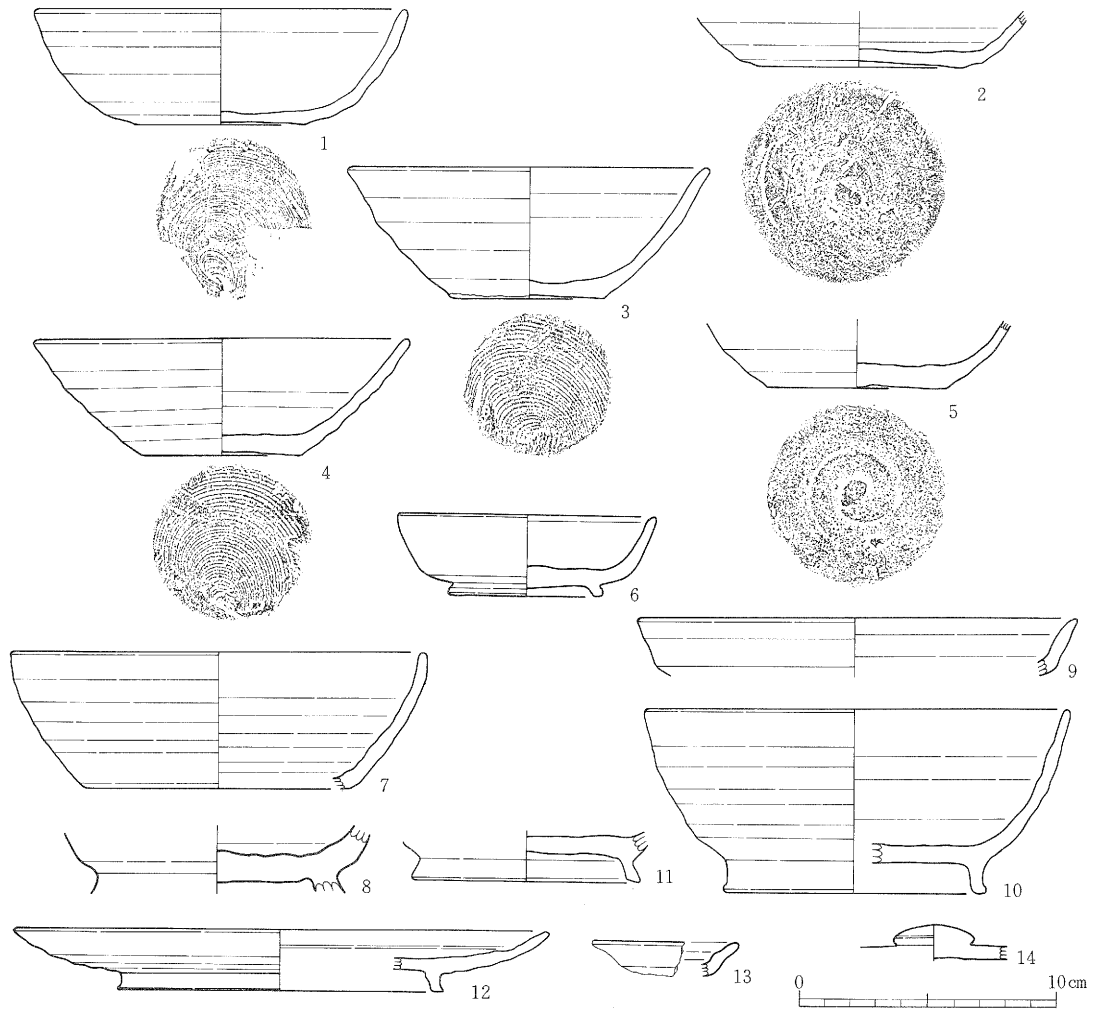
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	VI区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～底部1/2	14.6	5.6	5.1	74-16	C-349
2	土師器 坏	VI区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～底部1/6	(15.4)	(6.4)	(4.3)	—	C-350
3	土師器 甕	VI区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/6	(18.4)	—	—	—	C-351
4	土師器 甕	IV区土器集中地点III層	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	口縁部～体部1/4	26.4	—	—	—	C-352
5	土師器 甕	VI区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部上半 1/8	(15.0)	—	—	—	C-353
6	土師器 甕	IV区土器集中地点III層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/3	13.4	—	—	—	C-354
7	土師器 甕	II区 III層	ナデ・木葉痕・ヘラケズリ	ナデ	体部下半～底部 1/2	—	5.6	—	—	C-355
8	土師器 甑	III区 III層	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	体部破片	—	—	—	—	C-356
9	土師器 甑	III区 III層	ハケメ	ヘラミガキ	体部破片	—	—	—	—	C-357
10	土師器 甕	II区 III層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁部～体部1/2	15.6	—	—	—	C-358
11	土師器 甕	VIII区 III層	ナデ・体部下半ヘラケズリ 底部籠状圧痕	ナデ	体部～底部 1/2	—	9.0	—	—	C-359

第256図　III層出土遺物（2）



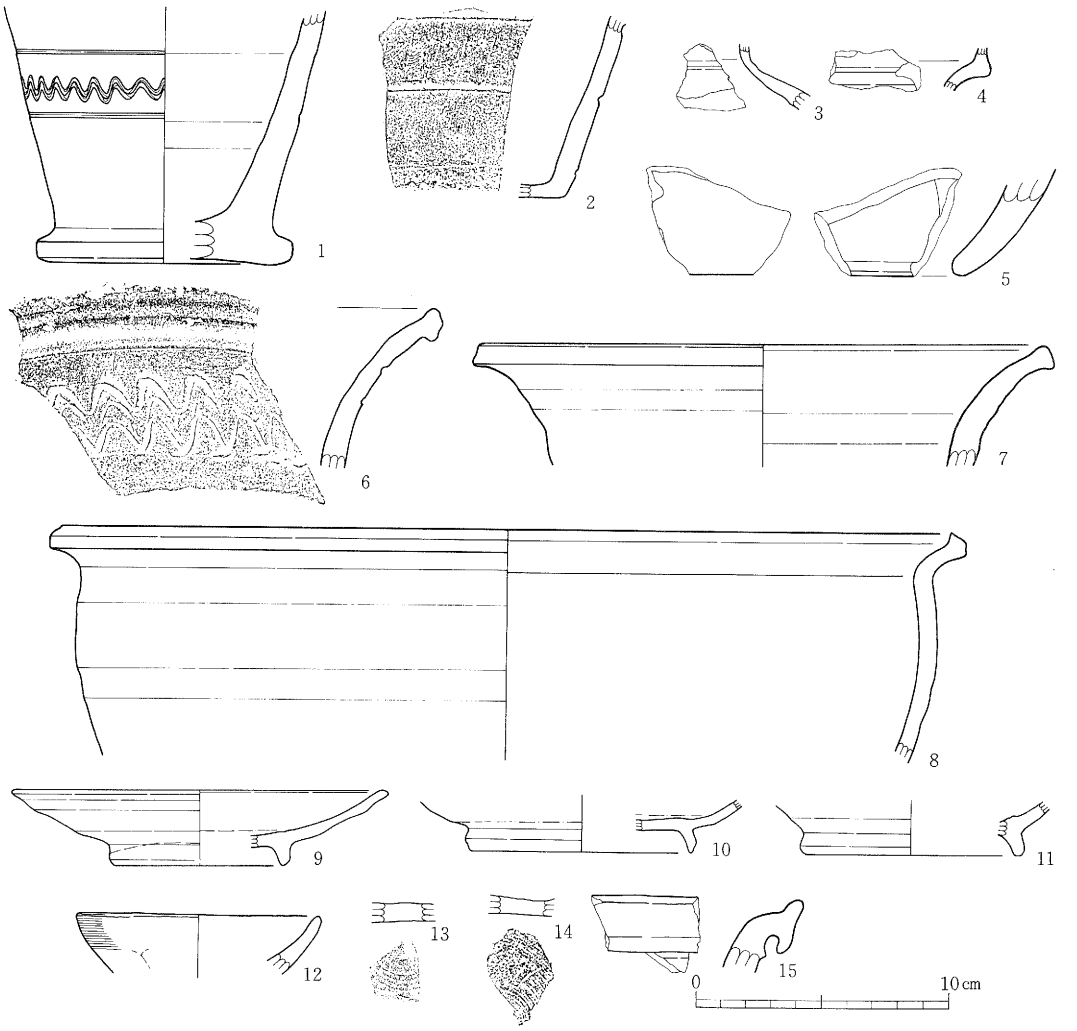
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	赤焼土器 坏	IV区土器集中地点III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	口縁部～底部1/2	14.3	5.6	4.1	78-6	赤-8
2	赤焼土器 坏	VIII区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	体部下半～底部 1/1	—	6.0	—	—	赤-9
3	赤焼土器 坏	VI区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	口縁部～底部1/2	14.3	5.6	4.1	—	赤-10
4	赤焼土器 坏	IV区 SD40 周辺 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/8	(14.4)	—	—	—	赤-11
5	須恵器 坏	II区 III層	ロクロナデ・ヘラケズリ。底部回転ヘラ切り・回転ヘラケズリ再調整	ロクロナデ	体部下半～底部 1/5	—	(10.8)	—	—	E-186
6	須恵器 坏	VIII区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	ほぼ完形	13.4	7.0	3.7	80-3	E-187
7	須恵器 坏	V区 III層	ロクロナデ。底部切り離し不明。底部全面に手持ちヘラケズリ再調整	ロクロナデ	口縁部～底部1/2	14.6	7.0	4.4	79-13	E-188
8	須恵器 坏	V区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	口縁部～底部 ほぼ完形に近い	13.0	6.8	3.8	79-12	E-189
9	須恵器 坏	VIII区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	体部下半～底部 2/3	—	5.8	—	—	E-190
10	須恵器 坏	VIII区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	体部下半～底部 1/2	—	6.0	—	—	E-191
11	須恵器 坏	VIII区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	体部下半～底部 1/3	—	6.4	—	—	E-192
12	須恵器 坏	VIII区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	体部下半～底部 1/3	—	6.4	—	—	E-193
13	須恵器 坏	II区 III層	ロクロナデ 底部ヘラ切り再調整なし	ロクロナデ	体部下半～底部 1/4	—	6.2	—	—	E-194
14	須恵器 坏	VIII区 III層	ロクロナデ。底部切り離し痕不明。体部下半～底部手持ちヘラケズリ再調整	ロクロナデ	体部下半～底部 1/2	—	6.4	—	—	E-195

第257図 III層出土遺物（3）



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 坏	IV区 SD40 周辺 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	口縁部～底部1/4	14.8	6.8	4.6	80-4	E-196
2	須恵器 坏	III区 III層	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り再調整なし	ロクロナデ	底部のみ	—	8.0	—	—	E-197
3	須恵器 坏	III区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	口縁部～体部1/2	14.2	5.7	5.2	80-2	E-198
4	須恵器 坏	III区 III層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	口縁部～体部1/3	14.8	6.2	4.7	80-1	E-199
5	須恵器 坏	V区 III層	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り再調整なし	ロクロナデ	体部下半～底部	—	7.0	—	—	E-200
6	須恵器 高台付坏	VIII区 III層	ロクロナデ。底部切り離し不明。ロクロナデ再調整	ロクロナデ	口縁部一部～底部	10.1	5.7	3.2	—	E-201
7	須恵器 坏	VI区 III層	ロクロナデ。底部切り離し不明。回転ヘラケズリ再調整	ロクロナデ	口縁部～体部1/8	(16.4)	—	—	—	E-202
8	須恵器 壺	VIII区 III層	ロクロナデ。底部回転ヘラケズリ。ロクロナデ再調整	ロクロナデ	体部下半～底部	—	9.4	—	—	E-203
9	須恵器 坏	III区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部 1/10	(17.2)	—	—	—	E-204
10	須恵器 瓶	V区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～底部 1/3	16.4	10.0	7.3	79-14	E-205
11	須恵器 高台付坏	VIII区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	底部のみ	—	9.0	—	—	E-206
12	須恵器 皿	VI区 III層	ロクロナデ 底部切り離し不明	ロクロナデ	口縁部～底部 1/12	(10.9)	(12.0)	(2.4)	—	E-207
13	須恵器 盤	VI区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部破片	—	—	—	—	E-208
14	須恵器 蓋	V区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	ツマミ部分 少々欠損	—	—	1.4	—	E-209

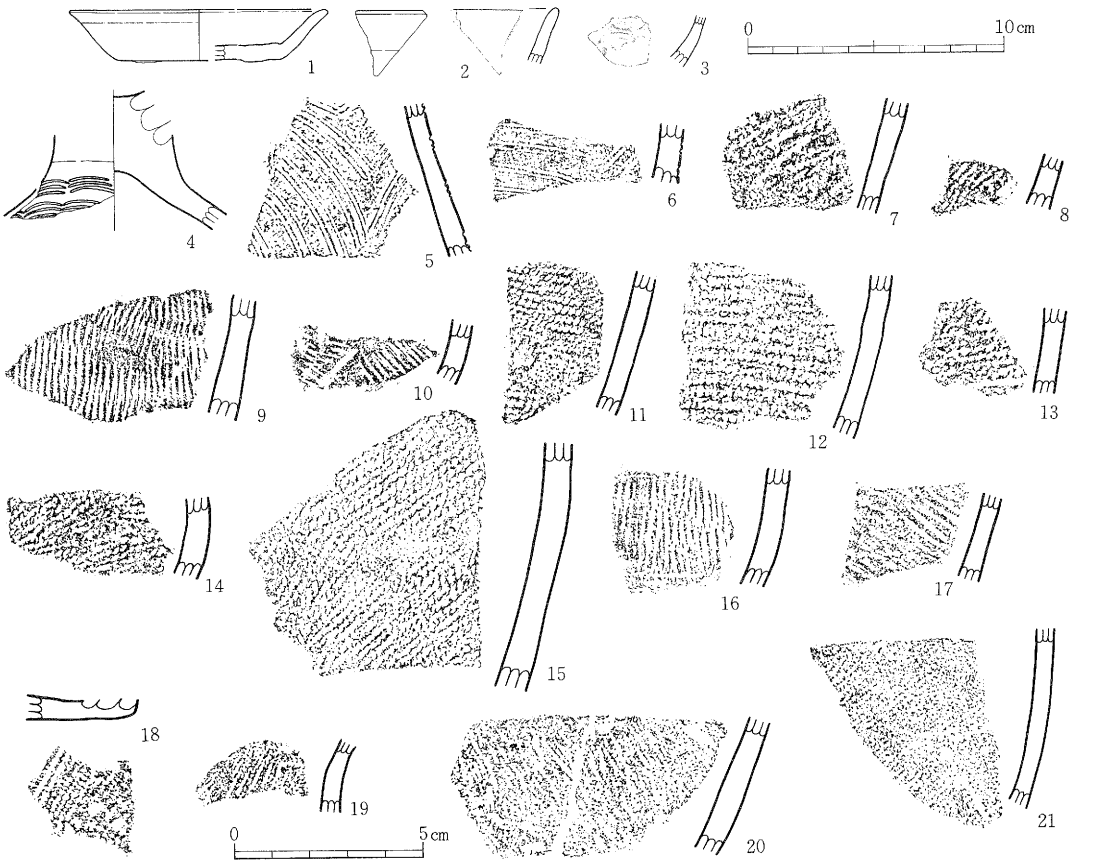
第258図　III層出土遺物（4）



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	須恵器 鉢	VI区 III層	波状の櫛描文と沈線が描かれている。	ロクロナデ	体部～底部	—	(8.6)	—	—	E-210
2	須恵器 鉢	III区 III層	波状の櫛描文が描かれている。	ロクロナデ	体部破片	—	—	—	—	E-211
3	須恵器 長頸壺	VIII区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	頸部破片	—	—	—	—	E-212
4	須恵器 長頸壺	VIII区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部破片	—	—	—	—	E-213
5	須恵器 甕	VI区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	体部破片	—	—	—	—	E-214
6	須恵器 甕	III区 III層	波状の櫛描文が描かれている。	ロクロナデ	体部破片	—	—	—	—	E-215
7	須恵器 甕	II区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/8	(22.2)	—	—	—	E-216
8	須恵器 甕	III区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～体部1/8	(36.0)	—	—	—	E-217
9	灰釉陶器 皿	VI区 III層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部～底部1/5	(14.8)	(6.6)	(3.0)	81-4	灰-9
10	灰釉陶器 皿か埦	VIII区 III層	ロクロナデ。底部切り離し不明。高台接着後ロクロナデ再調整	ロクロナデ	体部下半～底部 1/5	—	(8.8)	—	81-13	灰-10
11	灰釉陶器 皿	VIII区 III層	ロクロナデ 部分的に釉が白濁。重ね焼き	ロクロナデ	底部 1/8	—	(8.4)	—	—	灰-11

番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
12	土師質土器 皿	II区 III層	外面はヨコナデ・オサエ？ 内面は調整不明。白針わずかに含む。	—	—	口縁部 1/8	(9.7)	—	—	—	I-110
13	土師質土器 皿	IV区 III層	底部回転糸切り。 白針わずかに含む。	—	—	底部破片	—	—	—	—	I-111
14	土師質土器 皿	VIII区 III層	内面ロクロナデ。見込み部分に指ナデあり。底部は回転糸切り。板状圧痕あり。	—	—	底部破片	—	—	—	—	I-112
15	陶器 甕	VIII区 III層	内外面ともヨコナデ。 口縁部N字口縁。	常滑	13C後半～14C前半	口縁部破片	—	—	—	—	I-113

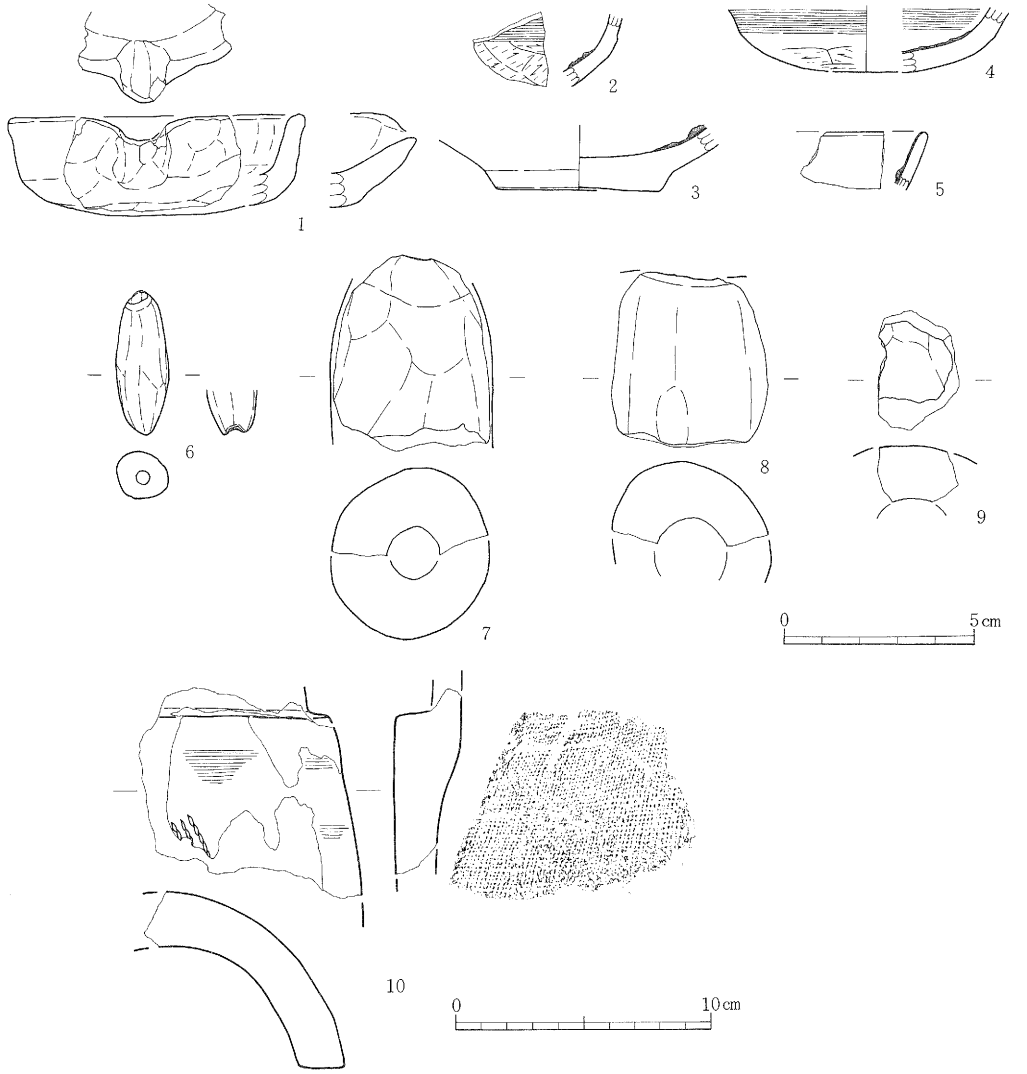
第259図　III層出土遺物（5）



番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	白磁 皿	III区 III層	口冗のみ露胎で、赤い顔料が付着	中国	13C後半	全体の1/4	10.2	6.4	2.0	85-18	J-12
2	青磁 碗	III区 III層	内面に文様あり。	中国 龍泉窯系	12C後半～14C代	口縁部破片	—	—	—	85-8	J-13
3	染付 碗	III区 III層	外面に文様あり。	肥前	近世	体部破片	—	—	—	—	J-14

番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
4	弥生土器 蓋	II区 III層	三本平行沈線による連弧文。内外面ともナデ。	つまみ部～体部破片	—	—	—	87-30	弥-4
5	弥生土器 壺	VI区 III層	三本平行沈線による同心円文。内面はナデ。	体部破片	—	—	—	87-35	弥-15
6	弥生土器 壺	VI区 III層	二本平行沈線による文様。	体部破片	—	—	—	87-14	弥-16
7	弥生土器 甕？	II区 III層	撚糸文 R。	体部破片	—	—	—	—	地-23
8	弥生土器 甕？	II区 III層	撚糸文 R。	体部破片	—	—	—	—	地-24
9	弥生土器 甕？	II区 III層	撚糸文 R。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	88-13	地-25
10	弥生土器 甕？	II区 III層	撚糸文 R。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	—	地-26
11	弥生土器 甕？	II区 III層	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	88-31	地-27
12	弥生土器 甕？	II区 III層	縄文 LR。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	—	地-28
13	弥生土器 甕？	VI区 III層	撚糸文 R。	体部破片	—	—	—	—	地-63
14	弥生土器 甕？	II区 III層	撚糸文 R。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	—	地-29
15	弥生土器 甕？	VI区 III層	撚糸文 R。内面ヘラナデ？	体部破片	—	—	—	88-20	地-60
16	弥生土器 甕？	VI区 III層	撚糸文 R。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	88-23	地-61
17	弥生土器 甕？	VI区 III層	撚糸文 R。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	—	地-62
18	弥生土器 甕？	VI区 III層	縄文 RL。蓋の可能性もあり。	底部破片	—	—	—	—	地-65
19	弥生土器 甕？	VI区 III層	撚糸文 R。	体部破片	—	—	—	—	地-66
20	弥生土器 甕？	VI区 III層	撚糸文 L。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	—	地-64
21	弥生土器 甕？	VIII区 III層	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	88-30	地-104

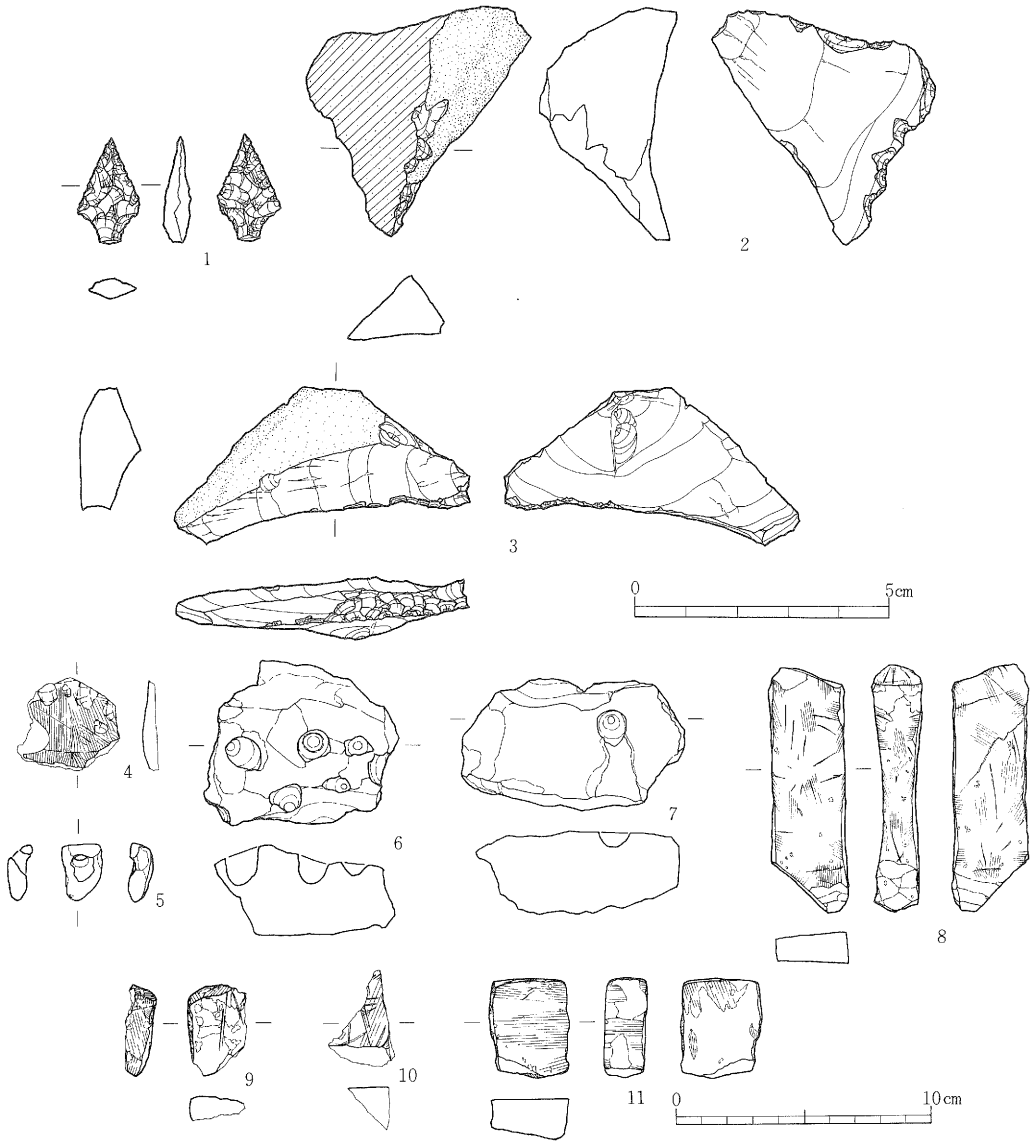
第260図　III層出土遺物（6）



番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	とりべ	III区 III層	片口。外面下方に稜をもち、底部は丸底になるものと推測される。内外面ともオサエ。器厚 0.7~1.3cm	口縁部~体部 1/6	(11.7)	—	—	89-2	ト-1
2	とりべ	VI区 III層	外面下方に段をもつ。底部は丸底になるものと推測される。外面はヨコナデ・ヘラケズリ。内面に溶解物付着。白針わずかに含む。器厚 0.6cm	体部~底部破片	—	—	—	91-4	ト-43
3	とりべ	VIII区 III層	外面はナデ。底部には木葉痕。内面に溶解物付着。白針わずかに含む。器厚 0.8cm	底部 1/2	—	6.4	—	92-11	ト-75
4	とりべ	VIII区 III層	外面下方に鋭い段が付く。底部は丸底。外面はヨコナデ・ヘラケズリ。内面はヨコナデ・溶解物付着。白針わずかに含む。器厚 0.8cm	体部~底部破片	—	—	—	92-8	ト-76
5	とりべ	VIII区 III層	内外面ともロクロナデ。内面に溶解物付着。須恵器坏の転用か。器厚 0.45cm	口縁部破片	—	—	—	91-30	ト-78

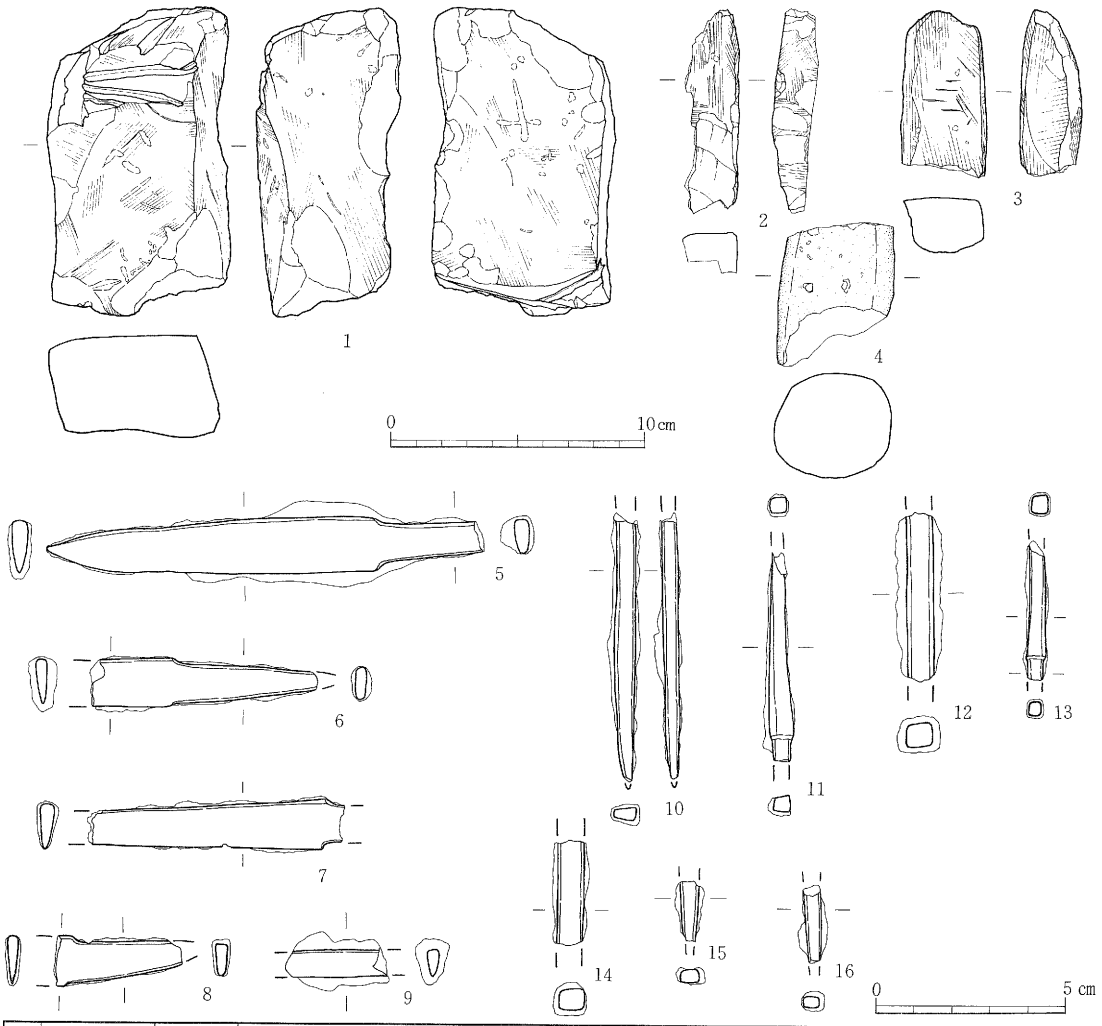
番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
6	土錘	VIII区 III層	完形。外面はヘラミガキ	3.8	1.4	1.25	5.7	0.4	93-7	土-22
7	土錘	II区 III層	1/4程度残存。外面はオサエ。白針含む。	(5.2)	(4.1)	(2.3)	(40.8)	1.4	93-22	土-7
8	土錘	III区 III層	一部。	(4.5)	(4.1)	(2.1)	(36.0)	(1.85)	93-24	土-12
9	土錘	VI区 III層	一部。外面はオサエ。白針わずかに含む。	(3.15)	(2.1)	(1.5)	(10.4)	(1.0)	93-21	土-19
10	丸瓦	IV区 III層	玉縁付きの有断丸瓦。凸面は縄タタキ目・ロクロナデ。凹面は布目痕。	(7.8)	(8.4)	2.2	—	—	92-15	瓦-5

第261図　III層出土遺物（7）



番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
1	石鏃	V区 IV層上面	有茎。身部が短かく二等辺三角形。	2.1	1.2	0.53	0.9	玉髄	95-2	石-2
2	石錐	VI区 III層	縦長の剝辺の角部を錐部にしている。その加工は粗雑。錐部の磨滅は認められない。	4.8	4.5	2.3	27.4	石英安山岩	—	石-5
3	剝片石器	II区 III層	横長の剝片の一部を切断し、その面に二次加工が施されている。	2.5	5.8	1.25	15.4	凝灰質頁岩	95-7	石-8
4	石庖丁	II区 III層	一部。刃部に近い部分である。所々に成形時の面が残っている。	(4.1)	(3.7)	(0.45)	(7.6)	頁岩	96-1	石-26
5	有孔石製品	VIII区 III層	軟質の石を素材とし縦方向に孔が1つ穿たれている。孔径は5mmである。	2.2	1.6	1.0	1.4	石英安山岩質凝灰岩	—	石-35
6	不明石製品	V区 III層	一部か。軟質の切石の表面に径が1～1.5cmの円形の小孔が数個穿たれている。全体的に火熱を受けている。	(6.6)	(7.2)	(3.7)	(77.5)	石英安山岩質凝灰岩	96-14	石-42
7	不明石製品	V区 III層	一部か。軟質の切石の一面に径1.2cmの円形の小孔が1個穿たれている。全体的に火熱を受けている。	(5.3)	(8.8)	(3.1)	(82.0)	石英安山岩質凝灰岩	—	石-43
8	砥石	V区 III層	完形。偏平で長方形。硬質シルト状の石材。気咆をやや含む。主要砥面は上下2面で中央部がへこんでいる。	9.9	3.0	2.0	70	石英安山岩	97-6	石-53
9	砥石	VIII区 III層	一部欠損。小形の砥石火熱を受けている。軟質でシルト質状の石材。	(3.6)	(2.3)	(0.9)	(9.2)	石英安山岩凝灰岩	—	石-72
10	砥石	V区 IIIb層	一部のみ。方柱状か。やや軟質でシルト質状の石材。砥面は2面確認される。	(3.8)	(2.6)	(1.6)	(8.3)	凝灰岩頁岩	—	石-83
11	砥石	VIII区 III層	完形。偏平。破損した砥石の一部を再利用したものか。硬質でシルト質状。主要砥面は1面。	3.9	3.2	1.6	36.8	石英安山岩凝灰岩	97-14	石-69

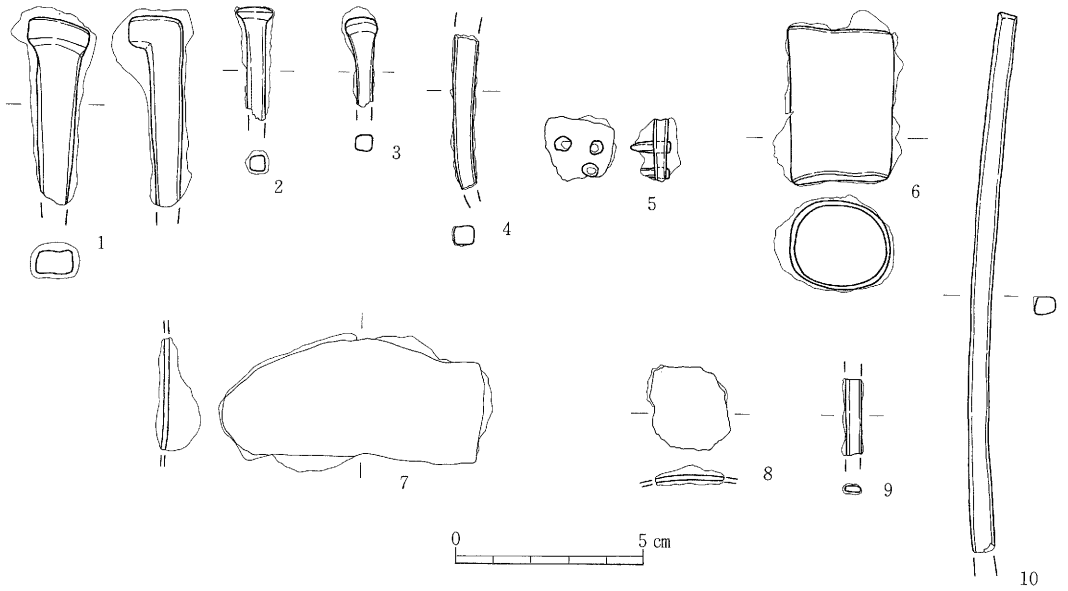
第262図　III層出土遺物（8）

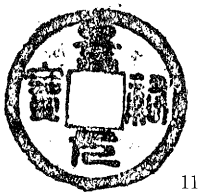


番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
1	砥石	III区 III層	完形。やや偏平な長方形。軟質で砂質シルト状の石材。4面とも砥面。上下端には研磨溝あり。	12.6	7.3	4.8	490	凝灰岩 シルト岩	97-1	石-49
2	砥石	VIII区 III層	一部。方柱状か。硬質で粘土質の石材。全体的に調整が雑で、砥面も部分的である。	(8.1)	(2.1)	1.6	(36.8)	頁岩	—	石-70
3	砥石	VIII区 III層	一部欠損。方柱状をなす。やや軟質でシルト質状の石材。砥面は4面認められるが平坦な面を示すのは2面である。	(6.7)	3.4	2.4	(76)	石英安山岩質凝灰岩	97-25	石-78
4	不明石製品	II区 III層	両端欠損。円棒状の礫の表面が磨かれているようである。全体的に焼けており、支脚の可能性も考えられる。	5.4	4.5	4.3	(87.5)	石英安山岩質凝灰岩	—	石-36

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
5	鉄製品 刀子	V区 III層	茎の部分が一部欠損	(11.5)	1.5	0.4	(24.8)	100-1	N-65
6	鉄製品 刀子	VI区 III層	身と茎。両端は欠損。断面は身が三角形、茎が長方形に近い。	(5.8)	1.2	0.3	(8.7)	100-8	N-66
7	鉄製品 刀子	II区 III層	身の部分。両端欠損	(6.5)	0.7	0.4	(9.3)	100-9	N-67
8	鉄製品 刀子	VII区 III層	身と茎。断面は身は三角形、茎は長方形に近い。	(3.3)	1.3	0.3	(3.6)	100-6	N-68
9	鉄製品 小刀子	IV区 III層	刀身の破片	(2.5)	0.7	0.3	(3.8)	—	N-69
10	鉄製品 鉄鏃?	VI区 III層	両端欠損。鉄鏃の茎と考えられる。断面はほぼ長方形。	(6.9)	0.6	0.3	(5.3)	100-19	N-70
11	鉄製品 鉄鏃	VI区 III層	茎と身の部分。両端は欠損。断面は方形に近い。	(5.5)	0.5	0.4	(6.9)	100-16	N-71
12	鉄製品 釘か鉄鏃の茎	VII区 III層	両端の欠損。断面方形をなす。	(4.3)	0.7	0.6	(10.2)	—	N-72
13	鉄製品 鉄鏃	II区 III層	身と茎の部分 両端欠損。身・茎とも断面は方形をなす。	(3.6)	0.5	0.5	(3.1)	100-20	N-73
14	鉄製品 釘か鉄鏃の茎	III区 III層	一部。断面は長方形に近い。	(2.2)	0.7	0.6	(5.1)	100-42	N-74
15	鉄製品 釘か鉄鏃の茎の一部	VIII区 III層	断面は長方形をなす。	(1.6)	0.5	0.3	(0.7)	—	N-75
16	鉄製品 鉄鏃?	VI区 III層	両端欠損。鉄鏃の茎と考えられる。断面は方形に近い。	(1.9)	0.4	0.3	(1.2)	—	N-76

第263図 III層出土遺物（9）

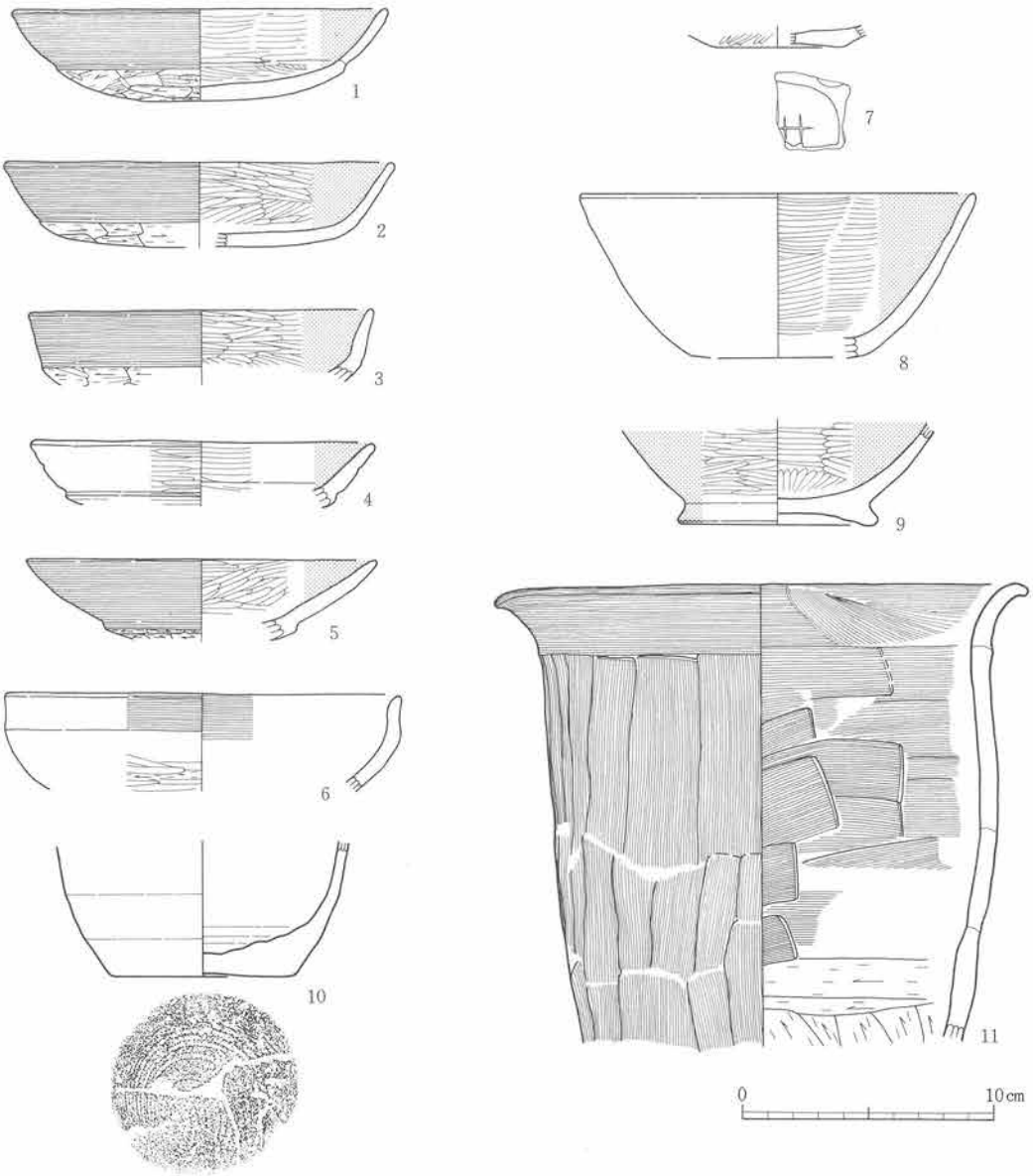




0 5 cm

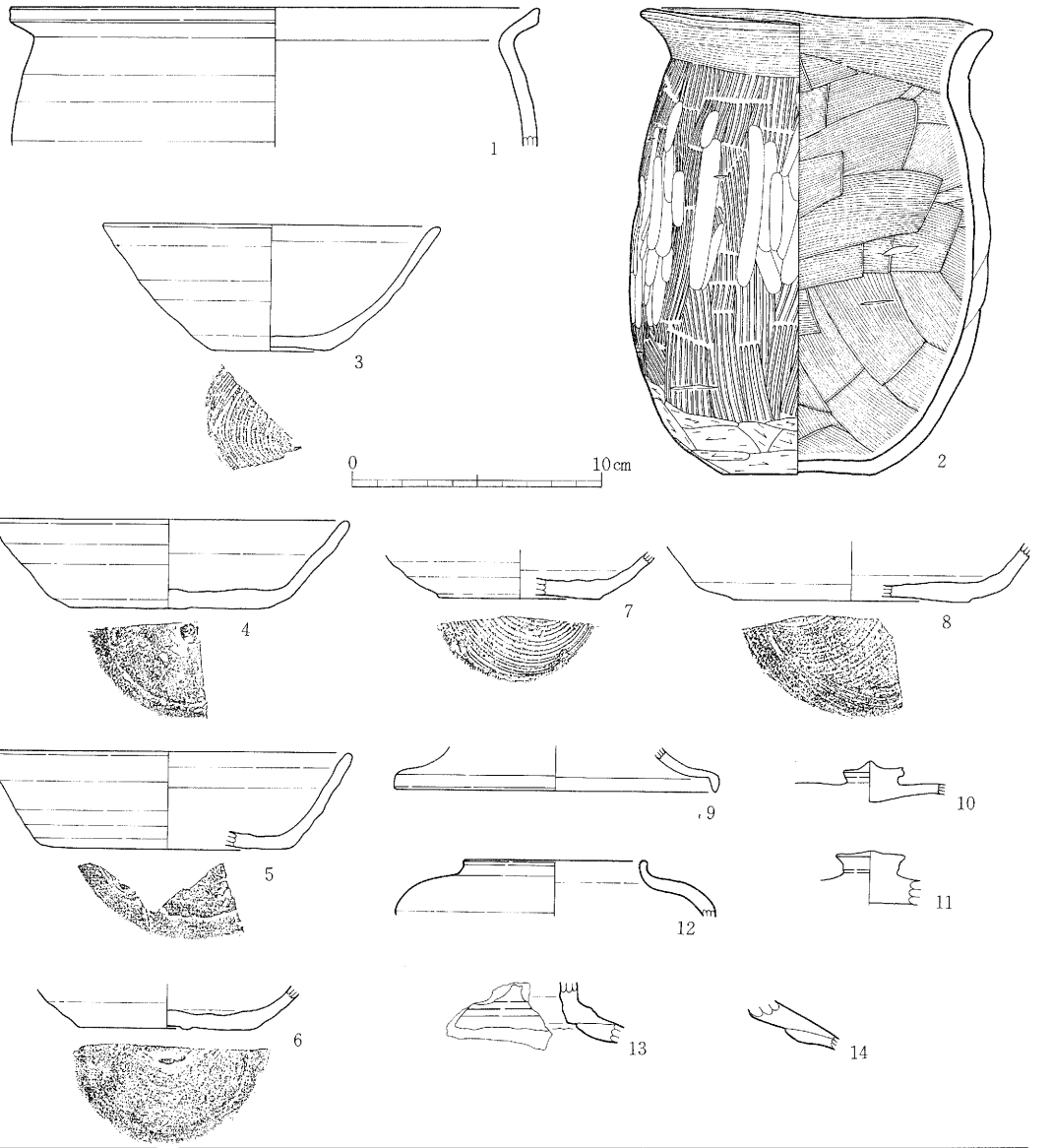
番号	種別	層位	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	写真図版	登録番号
1	鉄製品 釘	VIII区 III層	先端欠損。 断面は長方形をなす角釘。	(5.0)	1.0	0.6	(26.4)	100-28	N-77
2	鉄製品 釘	III区 III層	先端欠損。 断面は方形に近い。	(3.0)	0.4	0.4	(2.4)	—	N-78
3	鉄製品 釘	II区 III層	先端欠損。 断面が方形をなす角釘。	(2.3)	0.5	0.4	(1.6)	100-38	N-79
4	鉄製品 釘?	II区 III層	両端欠損。 断面が方形をなす角釘と見られる。	(4.2)	0.5	0.5	(3.6)	—	N-80
5	鉄製品 鋲	III区 III層	一部3カ所あり。	(1.5)	1.1	0.4	(4.7)	—	N-81
6	鉄製品 仏具?	II区 III層	筒状の鉄製品	(4.2)	2.7	0.1	(28.6)	102-5	N-82
7	鉄製品 不明	IV区 III層	板状	(2.9)	(7.0)	1.0	(29.6)	102-16	N-83
8	鉄製品 不明	VIII区 III層	一部のみ。板状をなす。	(2.2)	(1.8)	0.1	(2.7)	102-8	N-84
9	鉄製品 不明	III区 III層	両端欠損 棒状で断面は楕円形に近い。	(2.0)	0.4	0.2	(0.7)	—	N-85
10	鉄製品 不明	VI区 III層	一端欠損 断面は長方形。	(14.3)	0.6	0.4	(18.4)	—	N-86
11	銅製品 古銭	VIII区 III層	景祐元宝(北宋)。初鋳年景祐元年(1034年)	径 2.5	—	0.11	3.3	102-22	N-87

第264図 III層出土遺物 (10)



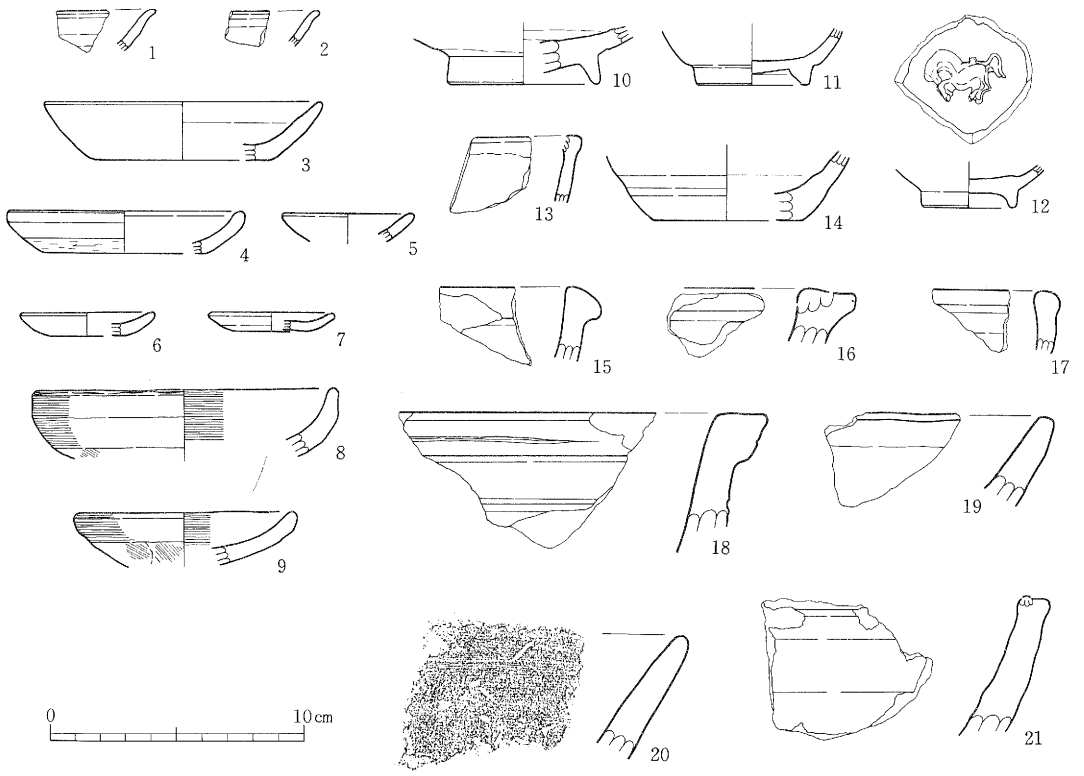
番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 坏	表採	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/4	15.0	—	3.7	—	C-360
2	土師器 坏	Ⅶ区 Ⅰ・Ⅱ層	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/4	15.6	—	3.4	—	C-361
3	土師器 坏	Ⅷ区 Ⅰ・Ⅱ層	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/8	(13.8)	—	—	—	C-362
4	土師器 坏	Ⅴ区 Ⅰ・Ⅱ層	ヘラミガキ	ヘラミガキ	口縁部 1/8	(13.8)	—	—	—	C-363
5	土師器 坏	表採	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/5	(14.0)	—	—	—	C-364
6	土師器 坏	Ⅱ区 Ⅰ・Ⅱ層	ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ	ヨコナデ	口縁部～体部 1/12	(15.8)	—	—	—	C-365
7	土師器 坏	Ⅵ区 Ⅰ・Ⅱ層	ヘラミガキ・黒色処理・底部に線刻あり	ヘラミガキ・黒色処理	底部のみ	—	5.2	—	—	C-366
8	土師器 坏	Ⅱ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/4	15.8	—	—	—	C-367
9	土師器 埦	Ⅵ区 Ⅰ・Ⅱ層	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	体部～底部	—	8.0	—	—	C-368
10	土師器 甕	Ⅴ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ 底部回転糸切り再調整なし	ロクロナデ	底部のみ	7.4	—	—	—	C-369
11	土師器 甕	表採	ヨコナデ・ヘラナデ	ヨコナデ・ナデ・ヘラナデ・ヘラケズリ	口縁部～体部1/2	21.2	—	—	78-4	C-370

第265図　Ⅰ・Ⅱ層出土遺物（1）



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	土師器 甕	Ⅶ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/3	21.2	—	—	—	C-371
2	土師器 甕	高橋国弘氏所有	ヨコナデ・ヘラミガキ・ハケメ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ヘラナデ	口縁～底部 1/1	14.1	6.0	18.6	—	高橋氏所有
3	赤焼土器 坏	Ⅷ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ 底部回転糸切り	ロクロナデ	口縁～底部 1/4	13.4	4.8	5.0	—	赤-12
4	須恵器 坏	Ⅱ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り・火だすきあり	ロクロナデ	口縁～底部 1/4	14.3	8.0	3.5	—	E-218
5	須恵器 坏	Ⅵ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り・再調整なし	ロクロナデ	口縁～底部 1/6	(14.6)	(10.0)	(3.9)	—	E-219
6	須恵器 坏	Ⅴ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ。底部回転ヘラ切り・手持ちヘラケズリ再調整	ロクロナデ	底部 1/2	7.2	—	—	—	E-220
7	須恵器 坏	Ⅴ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ 底部回転糸切り・再調整なし	ロクロナデ	体部下半～底部 1/2	—	6.6	—	—	E-221
8	須恵器 坏	Ⅱ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ。底部回転糸切り・回転ヘラケズリ	ロクロナデ	体部下半～底部 1/3	—	9.4	—	—	E-222
9	須恵器 蓋	Ⅵ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/8	(13.0)	—	—	—	E-223
10	須恵器 蓋	Ⅵ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ	ロクロナデ	ツマミ部分	—	—	—	—	E-224
11	須恵器 蓋	Ⅵ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ	ロクロナデ	ツマミ部分	—	—	—	—	E-225
12	須恵器 蓋	Ⅵ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁部 1/8	(13.0)	—	—	80-8	E-226
13	須恵器 長頸壺	Ⅵ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ。リングが付く	ロクロナデ。接合痕あり	頸部上半破片	—	—	—	80-9	E-227
14	須恵器 長頸壺	Ⅵ区 Ⅰ・Ⅱ層	ロクロナデ	ロクロナデ。接合痕あり	体部上半破片	—	—	—	—	E-228

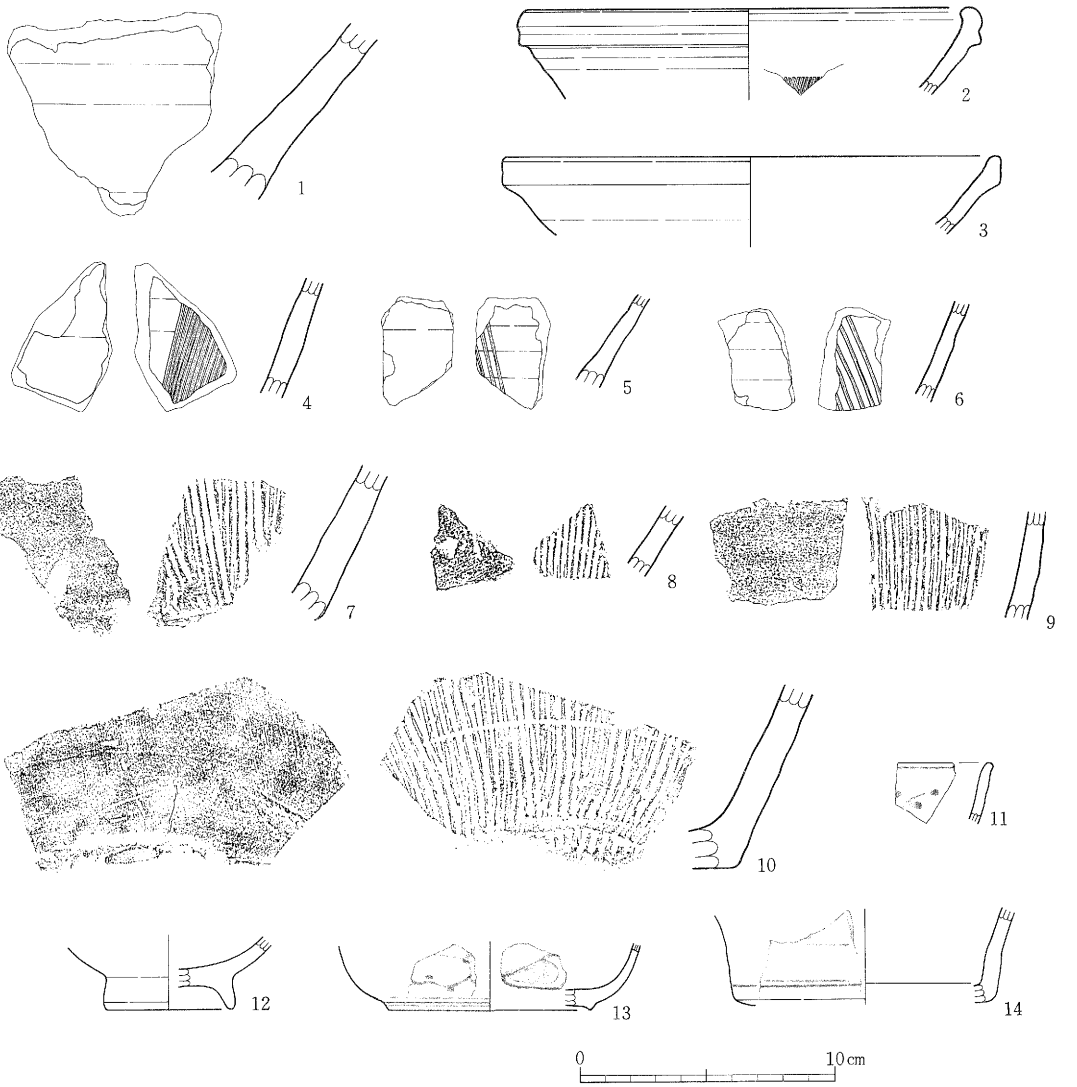
第266図 Ⅰ・Ⅱ層出土遺物（2）



番号	種別	層位	外面	内面	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	灰釉陶器 皿	VIII区 I・II層	ロクロナデ・施釉	ロクロナデ・施釉	口縁部破片	—	—	—	81-7	灰-12
2	灰釉陶器 皿	VIII区 I・II層	ロクロナデ・施釉	ロクロナデ・施釉	口縁部破片	—	—	—	—	灰-13

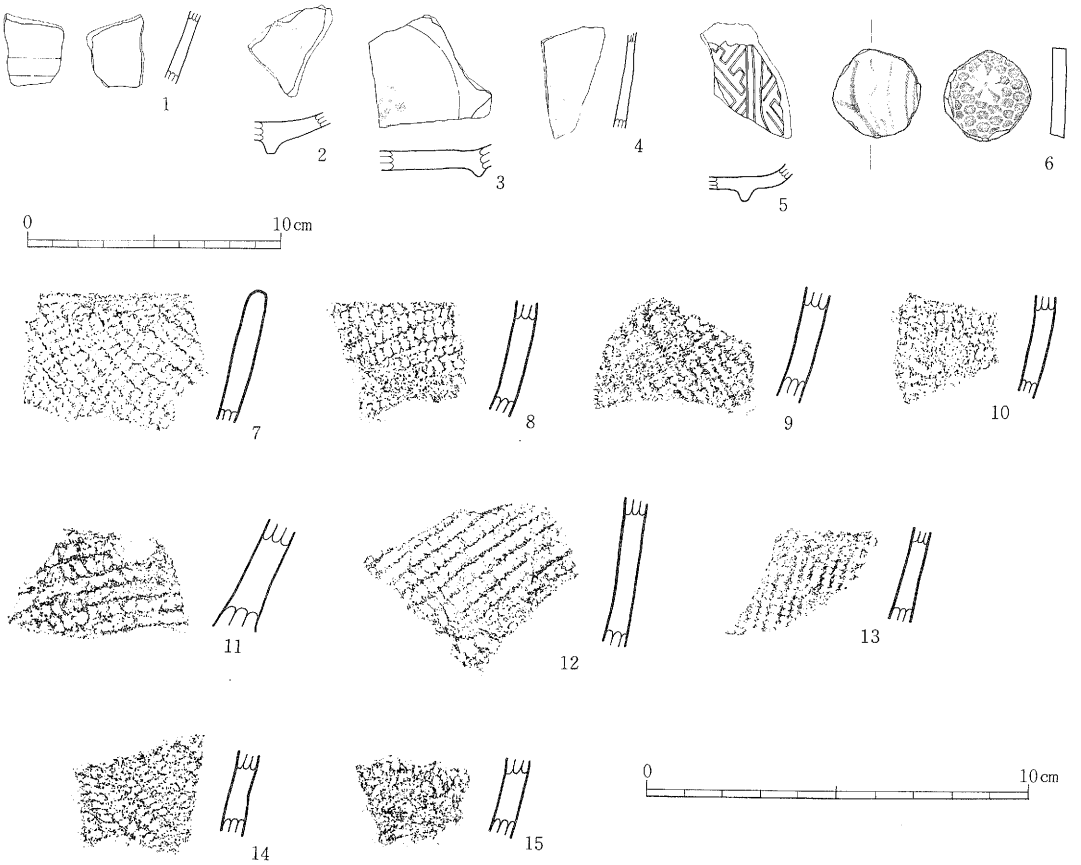
番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
3	土師質土器 皿	VI区 I・II層	内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。白針わずかに含む。	—	—	全体の 1/12	(11.0)	(7.0)	(2.3)	—	I-114
4	土師質土器 皿	VIII区 I・II層	内外面ともロクロナデ。外面体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ再調整。	—	—	全体の 1/12	(9.4)	(6.5)	(1.7)	—	I-115
5	土師質土器 皿	表採	内外面ともロクロナデ。白針含む。	—	—	口縁部 1/5	(5.2)	—	—	—	I-116
6	土師質土器 皿	表採	内外面ともロクロナデ。	—	—	全体の 1/8	(5.4)	(4.0)	(0.9)	—	I-117
7	土師質土器 皿	VI区 I・II層	内外面ともロクロナデ。底部は回転糸切り。	—	—	全体の 1/8	(5.0)	(2.8)	(0.8)	—	I-118
8	土師質土器 皿	IV区 I・II層	外面はヨコナデ、ナデ。内面はヨコナデ。白針わずかに含む。	—	—	口縁部 1/10	(12.0)	—	—	—	I-119
9	土師質土器 皿	IV区 I・II層	外面はヨコナデ、オサエ・ナデ。内面はヨコナデ。白針わずかに含む。灯明皿に使用。	—	—	口縁部～体部 1/12	(8.8)	—	—	—	I-120
10	陶器 皿	VIII区 I・II層	高台付。内外面ともロクロナデ。体部下端から高台部を除いて淡青色の釉。見込み蛇ノ目釉剝ぎ。	—	18C？	体部～底部 1/6	—	(6.0)	—	—	I-121
11	陶器 埦	VII区 I・II層	内外面ともロクロナデ。施釉(灰釉)。	相馬	幕末か明治	体部～底部 1/4	—	4.4	—	—	I-122
12	陶器 埦	VI区 I・II層	内外面ともロクロナデ。灰釉系の施釉。内面見込み部分に、馬の陽刻あり。	相馬	明治前半	底部のみ	—	3.7	—	—	I-123
13	陶器 香炉	VII区 I・II層	内外面とも鉄釉。口縁端部は二度掛け。	—	近世	口縁部破片	—	—	—	—	I-124
14	陶器 甕	VI区 I・II層	小型の甕。内外面ともロクロナデ。鉄釉。底部は回転糸切り。	—	近世	体部下半～底部 1/4	—	5.8	—	—	I-125
15	陶器 鉢	I区 I・II層	内外面ともナマコ釉。	堤	幕末かそれ以降	口縁部破片	—	—	—	—	I-126
16	土師質土器 鉢	II区 I・II層	内外面ともロクロナデ。	—	—	口縁部破片	—	—	—	—	I-127
17	陶器 鉢	V区 I・II層	内外面ともナマコ釉が掛かる。	堤	幕末かそれ以降	口縁部破片	—	—	—	—	I-128
18	土師質土器 鉢	VII区 I・II層	内外面ともロクロナデ。	—	近世以降	口縁部破片	—	—	—	—	I-129
19	陶器 鉢	IV区 I・II層	内外面ともヨコナデ。	常滑	14C？	口縁部破片	—	—	—	—	I-130
20	陶器 鉢	III区 I・II層	外面はヨコナデ・ヘラナデ。内面はヨコナデ。	常滑？	13～14C	口縁部破片	—	—	—	—	I-131
21	陶器 鉢	I区 II層	内外面ともロクロナデ。	在地 白石窯	13～14C	口縁部破片	—	—	—	—	I-132

第267図 Ⅰ・Ⅱ層出土遺物（3）



番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	陶器 鉢	VI区 I・II層	内外面ともロクロナデ。内面の下半部は使用により磨りへっている。	在地	13～14C	体部破片	—	—	—	—	I-133
2	陶器 擂鉢	I区 I・II層	内外面ともロクロナデ。鉄釉。内面に10本以上の単位の筋目あり。	—	近世以降	口縁部 1/8	(17.7)	—	—	—	I-134
3	陶器 鉢？	VIII区 I・II層	内外面ともロクロナデ。灰釉系の施釉。	堤？	—	口縁部 1/12	(19.6)	—	—	—	I-135
4	陶器 擂鉢	VI区 I・II層	内外面ともロクロナデ。内面全体と外面の一部に鉄釉。内面に11本以上単位の筋目あり。	—	17C頃	体部破片	—	—	—	—	I-136
5	陶器 擂鉢	II区 I・II層	内外面ともロクロナデ。鉄釉。内面に3本以上の単位の筋目あり。	—	17C以降	体部破片	—	—	—	—	I-137
6	陶器 擂鉢	VII区 I・II層	内外面ともロクロナデ。内面に5本以上単位の筋目あり。	—	近世	体部破片	—	—	—	—	I-138
7	陶器 擂鉢	VII区 I・II層	内外面ともロクロナデ。鉄釉。内面に6本以上単位の筋目あり。	—	近世	体部破片	—	—	—	—	I-139
8	陶器 擂鉢	III区 I・II層	内外面ともロクロナデ。鉄釉。内面に13本以上単位の筋目あり。	堤	近世	体部破片	—	—	—	—	I-140
9	陶器 鉢	VIII区 I・II層	内外面ともロクロナデ。内面は使用のためか磨りへっている。	在地 白石窯	13～14C	体部破片	—	—	—	—	I-141
10	瓦質土器 擂鉢	表採	外面はロクロナデ。内面には6本以上単位の筋目あり。	—	近世	体部～底部破片	—	—	—	—	I-142
11	染付 碗	VIII区 I・II層	外面に文様。	肥前	18 C	口縁部破片	—	—	—	85-19	J-15
12	青磁？ 碗	VI区 I・II層	—	肥前	18 C	体部～底部 1/8	—	(5.2)	—	—	J-16
13	染付 碗	VIII区 I・II層	内外面とも文様あり。	肥前	18 C	体部下半～底部 1/8	—	(8.0)	—	85-21	J-17
14	染付 香炉？	VIII区 I・II層	外面に文様。内面は無釉。	肥前	近世	体部破片	—	—	—	—	J-18

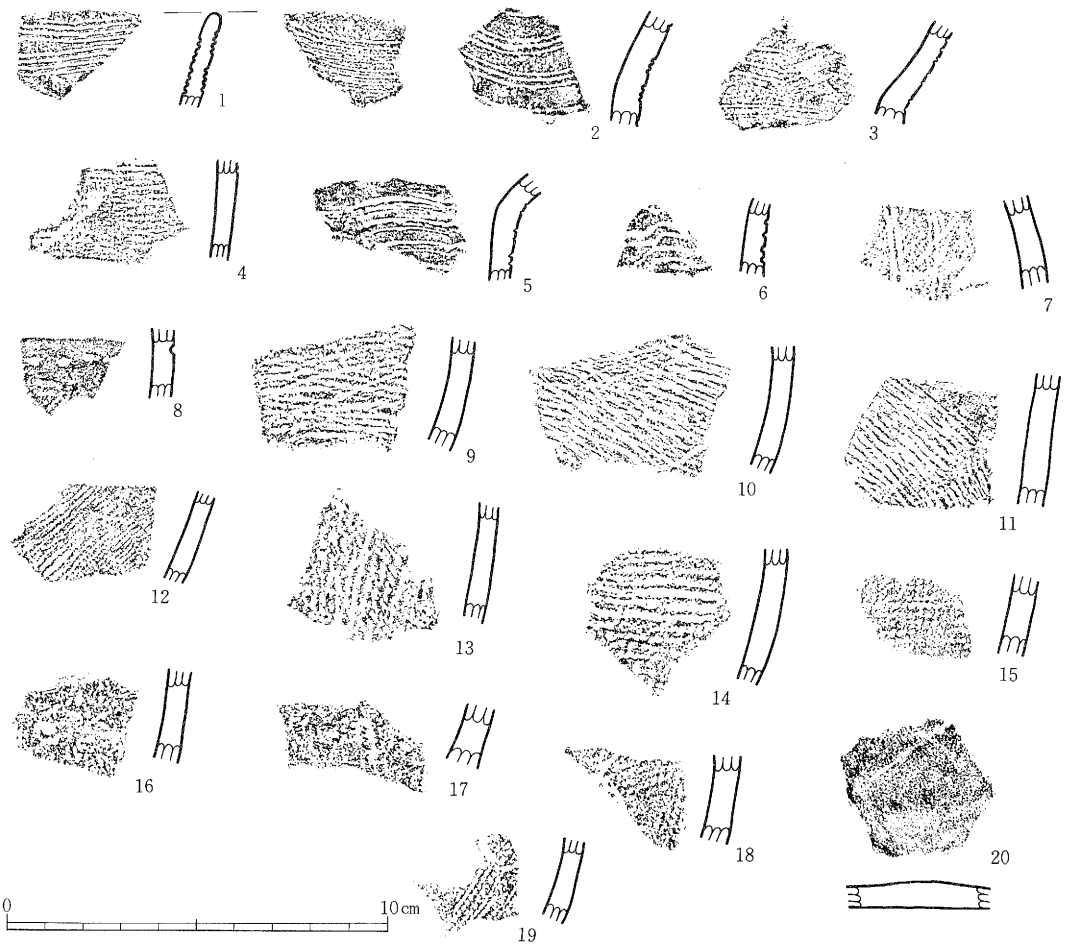
第268図　I・II層出土遺物（4）



番号	種別	層位	特徴	産地	年代	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	青磁 碗	VIII区 I・II層	内面のみ文様。	中国龍泉窯系	13C前半	体部破片	—	—	—	85-13	J-19
2	染付 皿	II区 I・II層	内面に文様。	肥前	17C？	体部下半～底部	—	—	—	—	J-20
3	染付 皿	VI区 I・II層	内面中央に五弁花の文様。見込みが蛇ノ目釉剝ぎ。	肥前	18 C	底部破片	—	—	—	85-24	J-21
4	染付 筒茶碗？	V区 I・II層	外面に文様あり。	肥前	近世	体部破片	—	—	—	—	J-22
5	白磁 手塩皿	I区 I・II層	小型の角皿。内面に型打による文様あり。	—	幕末	底部破片	—	—	—	—	J-23
6	染付 皿	VIII区 I・II層	内外面とも文様あり。円盤状に打ち欠いており、転用品と考えられる。	—	幕末？	体部破片	—	—	—	—	J-24

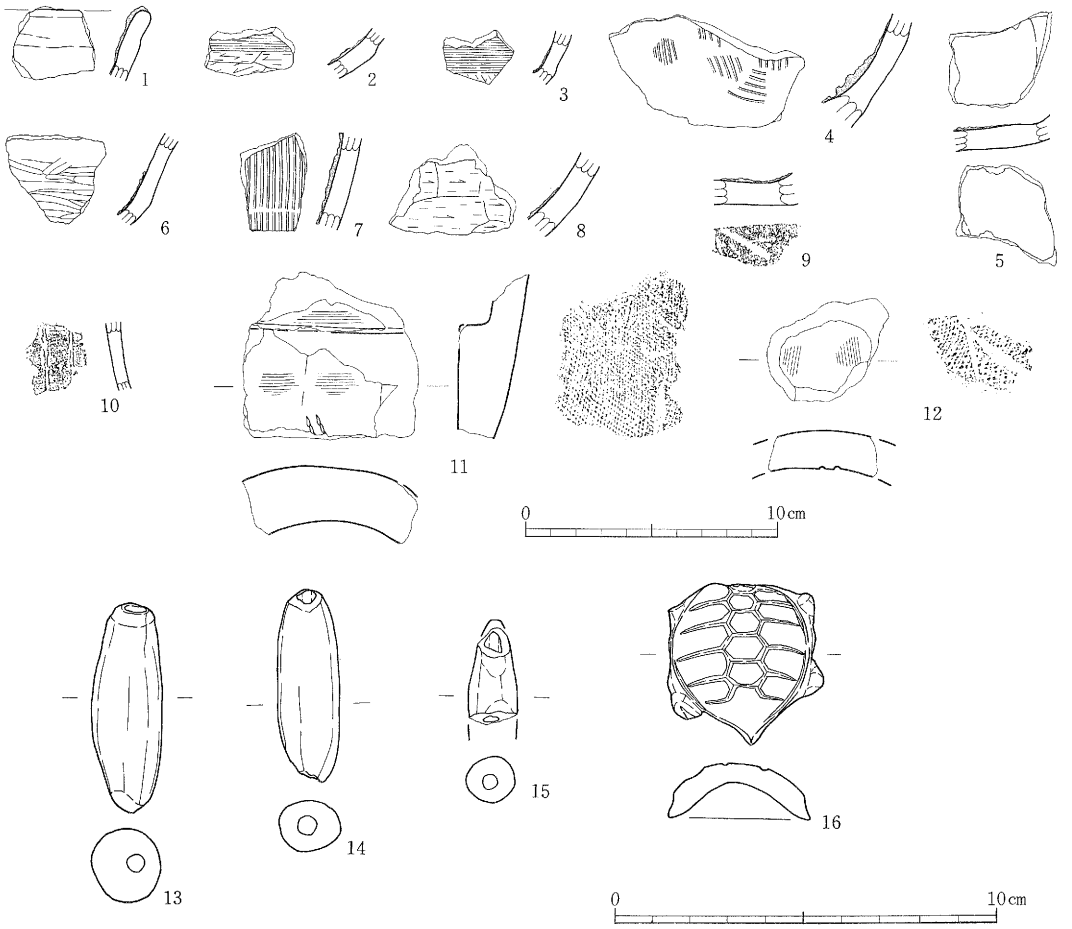
番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
7	縄文土器 深鉢	VIII区 I・II層	縄文 RL。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	87-3	地-98
8	縄文土器 深鉢	I区 I・II層	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	86-13	地-13
9	縄文土器 深鉢	VI区 I・II層	縄文 RL。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	—	地-70
10	縄文土器 深鉢	VI区 II層	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	—	地-69
11	縄文土器 深鉢	VIII区 I・II層	羽状縄文 LR、RL。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	87-4	地-99a
12	縄文土器 深鉢	VIII区 I・II層	羽状縄文 LR、RL。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	87-5	地-99b
13	縄文土器 深鉢	表採	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	87-8	地-112
14	縄文土器 深鉢	I区 I・II層	縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	—	地-14
15	縄文土器 深鉢	I区 I・II層	縄文 LR。	体部破片	—	—	—	—	地-15

第269図　Ⅰ・Ⅱ層出土遺物（5）



番号	種別	層位	特徴	残存	法量(cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	弥生土器 鉢	VII区 I・II層	内外面とも撚糸文 R。	口縁部破片	—	—	—	87-33	弥-32
2	弥生土器 鉢	表採	三本平行沈線による同心円文か渦巻文。内面はナデ。	体部破片	—	—	—	87-32	弥-34
3	弥生土器 壺	VI区 II層	二本平行沈線による連続山形文。内面はナデ。	口縁部破片	—	—	—	87-21	弥-17
4	弥生土器 壺	VI区 I・II層	二本平行沈線による文様と撚糸文 R。内面はナデ。	体部破片	—	—	—	87-25	弥-18
5	弥生土器 壺	VII区 I・II層	二本平行沈線による連孤文。内面はナデ。	体部破片	—	—	—	87-15	弥-31
6	弥生土器 壺	VI区 I・II層	二本平行沈線による波状文。	体部破片	—	—	—	87-23	弥-19
7	弥生土器 壺	II区 I・II層	三本平行沈線による同心円文か渦巻文。内面はナデ。	体部破片	—	—	—	87-19	弥-5
8	弥生土器 甕	VIII区 I・II層	外面は列点刺突文。縄文 LR。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	88-6	弥-38
9	弥生土器 甕？	VII区 I・II層	撚糸文 R。	体部破片	—	—	—	—	地-100
10	弥生土器 甕？	VII区 I・II層	撚糸文 R。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	88-15	地-72
11	弥生土器 甕？	VII区 I・II層	撚糸文 R。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	88-25	地-101
12	弥生土器 甕？	VI区 II・III層	撚糸文 R。内面ケズリ。	体部破片	—	—	—	—	地-67
13	弥生土器 甕？	VII区 I・II層	撚糸文 R。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	—	地-102
14	弥生土器 甕？	I区 I・II層	撚糸文 R。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	88-27	地-12
15	弥生土器 甕？	VI区 II層	撚糸文 R。	体部破片	—	—	—	—	地-68
16	弥生土器 甕？	V区 I・II層	撚糸文 R。内面ミガキ。	体部破片	—	—	—	—	地-39
17	弥生土器 甕？	VI区 I・II層	撚糸文 R。内面ヘラナデ。	体部破片	—	—	—	—	地-71
18	弥生土器 甕？	I・III区間(I区)I・II層	撚糸文 R。	体部破片	—	—	—	—	地-30
19	弥生土器 甕？	VI区 I・II層	撚糸文 R。内面ナデ。	体部破片	—	—	—	—	地-73
20	弥生土器 甕？	VI区 I・II層	底部外面に織物痕。	底部破片	—	—	—	—	弥-41

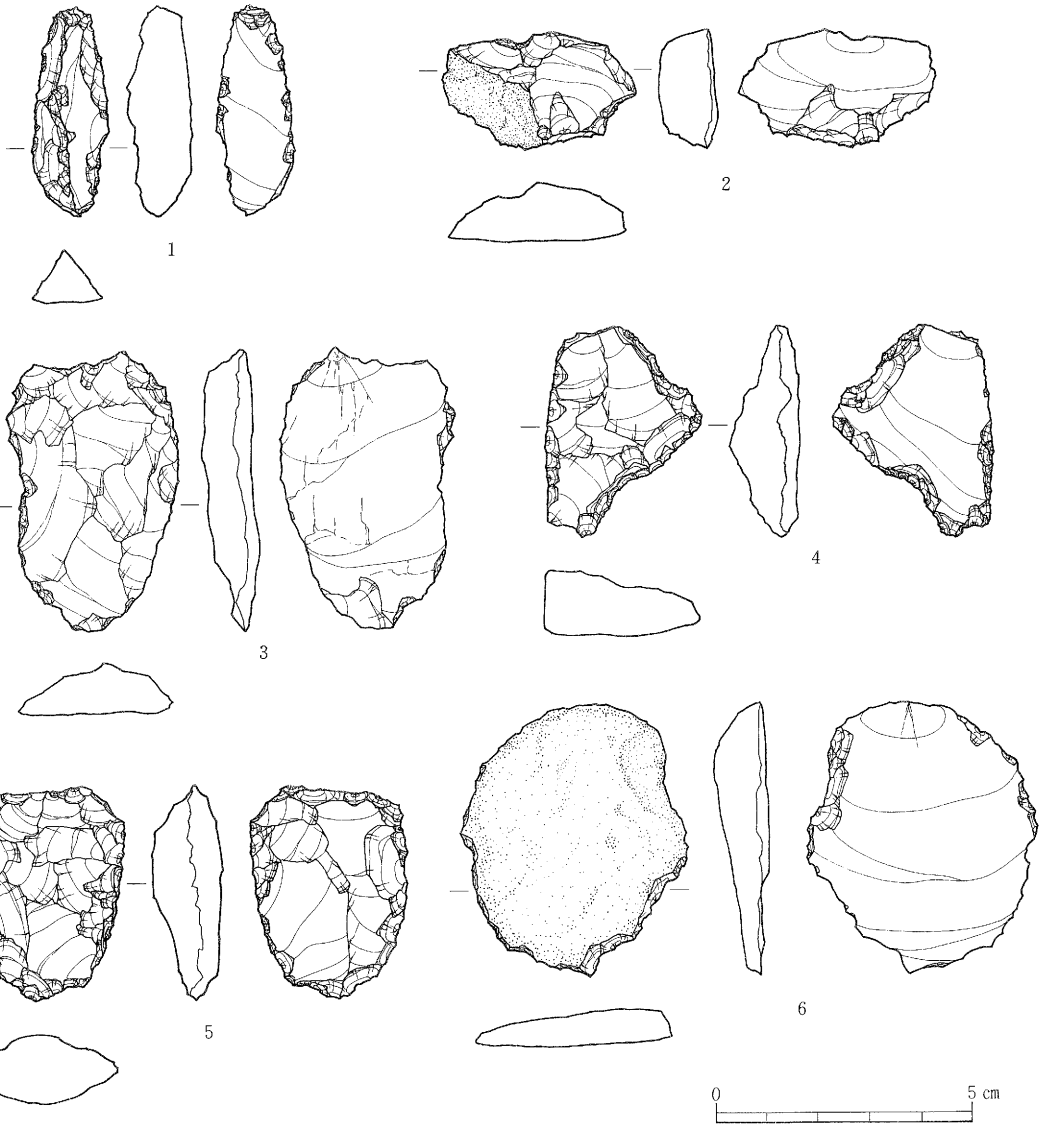
第270図　I・II層出土遺物（6）



番号	種別	層位	特徴	残存	法量 (cm) 口径	底径	器高	写真図版	登録番号
1	とりべ	VI区 I・II層	外面にかすかに稜がつく。外面はナデ。内面は溶解物が付着。器厚 0.8cm	口縁部破片	—	—	—	91-9	ト-50
2	とりべ	VI区 I・II層	外面に段があり、底部は丸底をなすと思われる。外面はヨコナデ・ヘラケズリ。内面は溶解物付着。器厚 0.7cm	体部～底部破片	—	—	—	89-12	ト-15
3	とりべ	VI区 I・II層	外面下方に段をもつ。底部は丸底をなすと思われる。外面はヨコナデ。内面は溶解物が付着。白針わずかに含む。器厚 0.6cm	体部破片	—	—	—	90-3	ト-32
4	とりべ	VI区 II層	外面はハケメ。内面は溶解物付着。白針わずかに含む。器厚 0.9cm	体部破片	—	—	—	90-16	ト-35
5	とりべ	VI区 II層	須恵器の蓋の転用と思われる。内外面ともロクロナデ。内面に溶解物付着。器厚 0.8cm	蓋の天井部破片	—	—	—	91-1	ト-47
6	とりべ	VI区 II層	外面下方に軽い稜がある。内外面ともヘラミガキ。内面に溶解物付着。白針わずかに含む。器厚 0.6cm	体部破片	—	—	—	90-18	ト-39
7	とりべ	VI区 II層	外面はハケメ。内面に溶解物付着。器厚 0.8cm	体部破片	—	—	—	90-14	ト-36
8	とりべ	VI区 II層	外面はヘラケズリ。内面に溶解物付着。器厚 0.9cm	体部破片	—	—	—	90-22	ト-41
9	とりべ	VI区 I・II層	底部外面に木葉痕。内面に溶解物付着。器厚 0.9cm	体部破片	—	—	—	91-6	ト-46

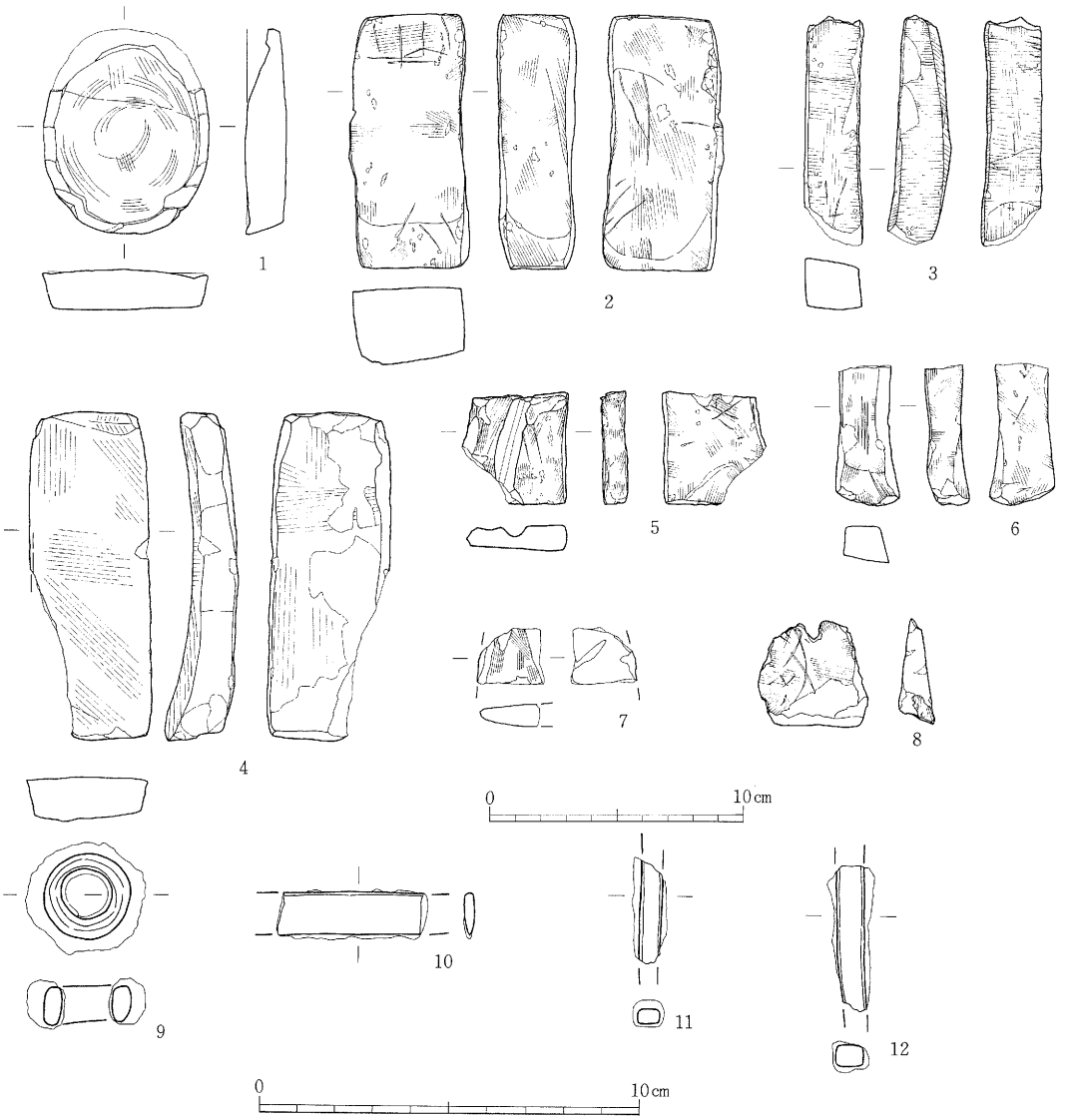
番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	孔径 (cm)	写真図版	登録番号
10	円面硯	III区 I・II層	台脚部破片。2本のヘラ書き沈線あり。	—	—	—	(4.6)	—	93-27	土-27
11	丸瓦	表採	玉縁付きの有段丸瓦。凸面は縄タタキ目・ロクロナデ。凹面は布目痕。	(6.6)	(6.3)	2.1	—	—	92-13	瓦-8
12	丸瓦	IV区 I・II層	凸面はナデ。凹面は布目痕。凹面にヘラ書きの文字か記号あり。	(4.0)	(4.3)	1.6	—	—	—	瓦-4
13	土錘	VI区 I・II層	ほぼ完形。外面はオサエ後ヘラミガキ。白針わずかに含む。	5.6	1.8	1.9	17.0	0.45	93-2	土-18
14	土錘	II区 I・II層	ほぼ完形。外面オサエ？	5.1	1.65	1.35	11.0	0.5	93-8	土-6
15	土錘	VIII区 I・II層	一端のみ。外面ヘラミガキ。	(2.55)	1.3	1.2	(3.1)	0.4	93-18	土-24
16	土人形（動物—亀）	IV区 I・II層	頭部欠損。外面は型押し。内面はナデ・オサエ。堤人形？	(4.3)	3.9	0.5	(16.2)	—	94-8	土-59

第271図　I・II層出土遺物（7）



番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
1	剥片石器	Ⅷ区 Ⅰ・Ⅱ層	縦長の剥片。左右の縁辺および稜部分に二次加工が加えられている。	4.15	1.6	0.98	5.6	珪質頁岩	95-6	石-14
2	剥片石器	Ⅳ区 Ⅰ・Ⅱ層	横長の剥片の上下縁辺に二次加工が加えられている。しかし丁寧な加工ではない。	2.4	3.85	1.2	11.8	鉄石英	—	石-9
3	微細剥離痕のある剥片	Ⅷ区 Ⅰ・Ⅱ層	縦長の剥片の両側縁に微細剥離痕が認められる。	5.6	3.5	1.0	20.0	珪質頁岩	95-12	石-19
4	剥片石器	表採	全体的に磨耗。 剥片の縁辺および稜に二次加工が施されている。	4.2	3.2	1.3	14.8	珪質頁岩	—	石-16
5	剥片石器	Ⅵ区 Ⅰ・Ⅱ層	主要剥離面がわずかに残る程全体的に二次加工が施され、ほぼ楕円形に作られている。髭状石器に含められるものと考えられる。	4.3	3.15	1.4	20.4	石英安山岩質凝灰岩	95-8	石-12
6	剥片石器	Ⅷ区 Ⅰ・Ⅱ層	縦長の剥片の側縁と下の縁辺に二次加工が施されている。	5.4	4.5	1.0	24.0	石英安山岩質凝灰岩	95-14	石-21

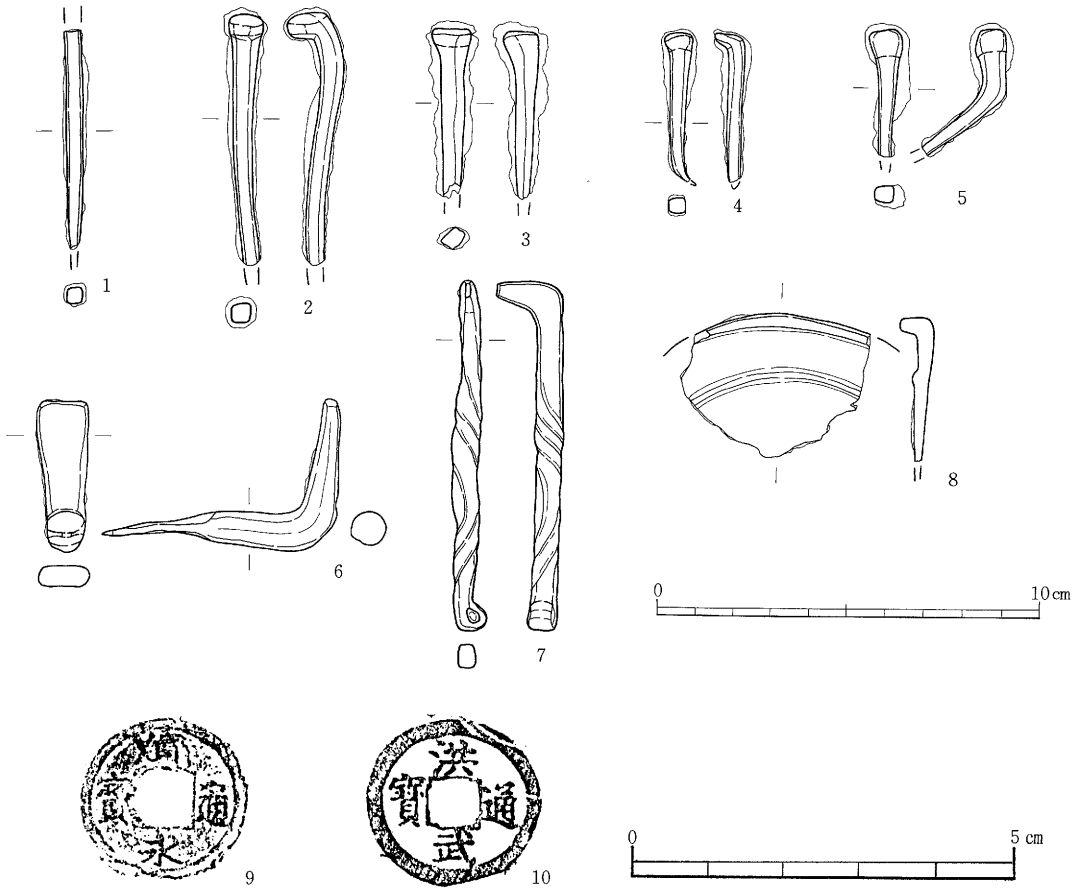
第272図　Ⅰ・Ⅱ層出土遺物（8）



番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	写真図版	登録番号
1	石槌	IV区 I・II層	縁帯部分が大部分欠損。四葉槌のタイプ。裏面は丁寧な作りである。	(8.2)	6.5	1.6	(105)	頁岩	96-3	石-29
2	砥石	VI区 I・II層	完形。方柱状。硬質で砂質シルト状の石材。気咆をわずかに含む。主要砥面は上下の2面である。1側面には研磨溝もある。	11	4.5	3.2	270	石英安山岩質凝灰岩	97-9	石-55
3	砥石	VIII区 I・II層	一端部欠損。方柱状。軟質でシルト質状。砥面は4面で、1方向にへこんでいる面がある。	(9.2)	2.3	2.1	(65)	石英安山岩質凝灰岩	97-20	石-71
4	砥石	VIII区 I・II層	一部欠損。偏平で長方形。硬質でシルト質状の石材。主要砥面は1面で、中央部でへこんでいる。	13	(4.7)	2.4	(190)	石英安山岩質凝灰岩	97-19	石-68
5	砥石	IV区 I・II層	一部欠損。偏平で方形。硬質でシルト状の石材。主要砥面は上下2面で、1面には研磨溝もある。	4.4	(4.1)	1.1	(24.4)	凝灰質頁岩	97-3	石-50
6	砥石	VIII区 I・II層	一部欠損。方柱状。硬質でシルト質状の石材。砥面は4面で、いずれの面も中央部がへこんでいる。	(5.6)	2.5	1.5	(30.8)	石英安山岩質凝灰岩	97-8	石-59
7	砥石	I区 I・II層	一部のみ。偏平、硬質で粘質状の石材。主要砥面は1面。	(2.2)	(2.7)	(0.8)	(4.9)	頁岩	—	石-47
8	砥石	VI区 I・II層	完形。破損した砥石の一部を再利用。硬質でシルト状の石材。砥面は1面。	4.4	4.4	1.4	24.8	凝灰岩頁岩	—	石-56

番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
9	鉄製品 金具?	VIII区 I・II層	環状	2.3	2.3	1.0	11	102-2	N-88
10	鉄製品 刀子の身	VIII区 I・II層	刀子の身の部分。両端欠損。	(3.6)	0.6	0.3	(4.6)	100-13	N-89
11	鉄製品 鉄鏃茎?	VI区 I・II層	両端欠損。断面が長方形をなす。	(2.6)	0.7	0.4	(2.6)	—	N-90
12	鉄製品 釘か鉄鏃の茎	VI区 I・II層	両端欠損。断面は長方形に近い。	(3.8)	0.7	0.6	(5.3)	100-37	N-91

第273図　I・II層出土遺物（9）



番号	種別	層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	写真図版	登録番号
1	鉄製品 釘か鏃	V区 I・II層	両端欠損。断面は方形に近い。	(5.7)	0.4	0.45	(7.4)	100-41	N-92
2	鉄製品 釘	II区 I・II層	先端欠損。断面が方形に近い角釘である。	(6.7)	0.5	0.5	(9.1)	100-24	N-93
3	鉄製品 釘	VII区 I・II層	先端欠損。断面方形の角釘である。	(4.4)	0.4	0.5	(4.9)	100-27	N-94
4	鉄製品 釘	VIII区 I・II層	ほぼ完形。断面が方形の角釘である。	4.1	0.4	0.4	4.0	100-39	N-95
5	鉄製品 釘	VI区 I・II層	先端欠損。断面が方形の角釘である。	(3.4)	0.5	0.5	(5.0)	100-23	N-96
6	鉄製品 不明	VII区 I・II層	完形。	4.0	1.4	0.6	27.2	102-11	N-97
7	鉄製品 不明	VI区 I・II層	完形。	9.3	0.5	0.6	13.6	102- 7	N-98
8	銅製品 銅鏡	VIII区 I・II層	一部のみ 文様は存在するものの磨滅のためはっきりしない。	(3.8)	(4.5)	0.4	(33.8)	102-17	N-99
9	銅製品 古銭	VII区 I・II層	寛永通宝	径 2.5	—	0.15	3.1	102-29	N-100
10	銅製品 古銭	VII区 I・II層	洪武通宝(明)。初鋳年洪武元年(1368年)	径 2.3	—	0.11	2.8	102-21	N-101

第274図　Ⅰ・Ⅱ層出土遺物（10）

VI. 自然科学的分析

1．中田南遺跡の地形学的背景

東北大学理学部　松本　秀明

中田南遺跡は仙台平野のほぼ中央部、名取川のかつての乱流地帯に位置する。平野形成の歴史は旧石器時代から現代も続く人類の歴史と年代が一致し、この間の地形変化は人間の生活環境に大きな影響をあたえてきた。本項では、仙台平野の地形学的な背景について概観した上で、地質ボーリング調査、空中写真判読にもとづき、中田南遺跡の地形学的な位置づけについて検討を行った。

Ⅰ．仙台平野の形成過程

(1) 仙台平野の沖積層

仙台平野は、多賀城市から山元町にいたる南北50km、東西10～15kmの沖積平野である。地盤高は名取川・広瀬川の合流点付近や内陸部の角田・大河原方面では部分的に10～20m に達するが、大部分は5 m以下であり極めて低平である。地下20m～60m の深部には、第三紀中新世や鮮新世などの固結基盤岩が存在し、その上位に未固結埋積堆積物が堆積する（第1図）。

埋積下部層　埋積下部層は、基盤岩直上に堆積する砂礫層であり、上下2枚の砂礫層とその間の粘土層からなる。下部の砂礫層は、風化のすすんだ直径数cm～十数cmの礫が主体であり、上部の砂礫層は、直径2～5 cmの比較的新鮮な小礫と粗粒砂からなる。両砂礫層はそれぞれ時代は異なるが河川中流から上流の河床の堆積物であり、堆積当時の海岸線は現在よりもはるかに沖合に位置していた。砂礫層に挟まれた粘土層は腐植物を多く含む陸成堆積物であるが、名取川に沿う地域では上下の砂礫層が一体となった堆積構造を示す。

上部砂礫層中には木片や有機物を挟在しており、仙台市苦竹地区の地下20m から産出された泥炭の^{14}C 年代[1]が33,310yBP (Takeuchi：1976)、地下鉄長町南駅工事現場地下10m (＋3.2m) から産出した有機質粘土が32,090yBP（松本：1988)、さらに同層上面に堆積する古土壌の^{14}C 年代が、仙台市下飯田地区の地下23m（－20m）で26,300yBP（仙台市・国際航業：1983）であることなどから、これらの砂礫層の大部分はおよそ26,000年前にはほぼ堆積が終了していたと考えられる。ただし、中田南遺跡を含む名取・広瀬両河川の合流点付近から内陸部においては、埋積下部層の堆積終了後の約7,000年前や約3,000年前頃にも河床堆積物としての砂礫層の堆積が継続していた（第2図)。

埋積中部層　埋積中部層は、堆積環境の異なる2枚の粘土層からなる。下部の粘土層は泥炭や腐植物を多量に混入する後背湿地堆積物であり、上部の粘土層は貝殻を混入する内湾底や潟湖底堆積物である。

埋積上部層　埋積上部層は、堆積環境の異なる2枚の砂層と最上部の泥炭質粘土層からなり、全体で20～30mの層厚をもつ。下部の砂層は、貝殻片を多量に含む汀線から浅海底の堆積物であり、上部の砂層は均質な砂粒から構成される砂丘堆積物である。最上部の粘土層は内陸側で埋積中部層下部の陸成堆積物に連続するが、平野表層部分は現在の後背湿地を構成する堆積物である。それぞれ沖積海成砂層、沖積風成砂層および沖積最上部層として分類されている。

沖積平野を構成する沖積層は、およそ18,000年前とされる最終氷期の海面最低下期以降の堆積物と定義づけられており、沖積層の堆積に先立つ海面低下期に堆積した砂礫層はこれと区別して沖積層基底礫層と呼ばれている(井関：1975)。仙台平野下に堆積する未固結堆積物のうち、埋積下部層を構成する砂礫層は沖積層基底礫層であり、沖積陸成粘土層以浅の沖積海成粘土層、沖積海成砂層、沖積風成砂層および沖積最上部層（第1図凡例参照）がいわゆる沖積層である。

(2)　仙台湾の氷河性海面変動と古地理の変遷

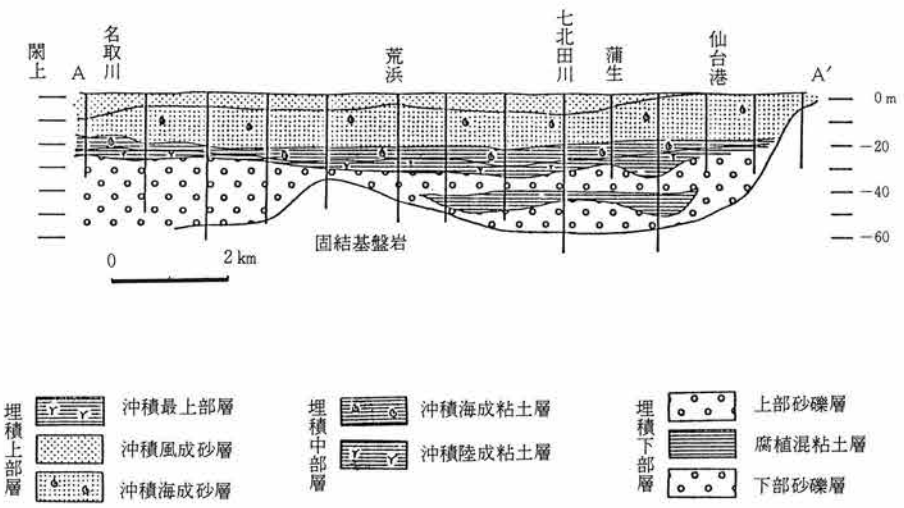
仙台湾岸に分布する沖積層から採取した多くの貝殻や泥炭の年代資料（小元・大内：1978、松本：1981、Saito et.al.：1989）をもとに、過去の海面変動は次のように復元されている（第3図)。最終氷期最盛期直後の16,000年前頃の海面は－95m付近にあり、その後急速に海面が上昇し、約9,300年前には－40m、約8,300年前には－30mを越える。この頃から海面の上昇は徐々に緩やかとなり、約7,500年前には－10m、約6,800年前には－5 m、約6,000年前には－3 m付近、そして約5,000年前には海面の上昇は一時的に停止し、最終氷期最盛期以降最高の＋1 m付近に達している。その後、海面は1～2 mの振幅で上下変動を繰り返しながら現在に至る。

沖積層の堆積状況と氷河性海面変化曲線をもとに、約8,000年前以降の仙台平野北半部の古地理変遷を復元すると以下の様になる（第4図)。

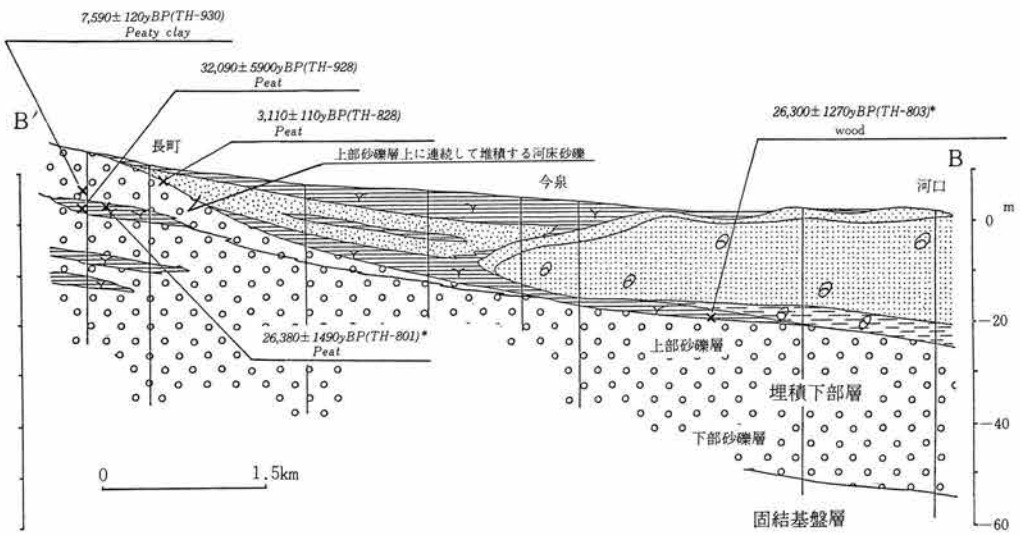
今からおよそ8,200年前には、海面の高さは－20mに到達した。海面の急速な上昇により海岸線は後退し、現在の七北田や名取川河口付近には潟湖やそれをとりまく湿地帯が広がり、陸側の砂礫の堆積範囲は急速に縮小している（第4図a)。

約7,500年前は、仙台平野において海が最も内陸に広がった時代である。海面の高さは－10m付近にあり、砂浜海岸が内陸へ侵入し、福田町地区から岩切地区にかけて広大な潟湖とそれを囲む湿地帯が広がっていた（第4図b)。

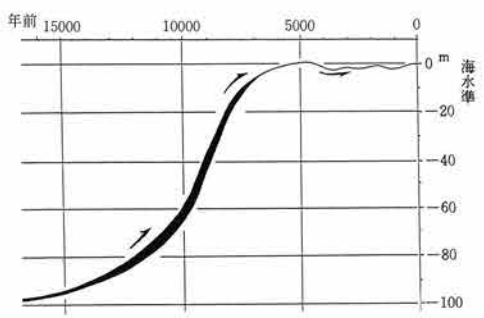
海水準が－5 mへ上昇する約6,700年前頃には、縮小し続けていた平野は海面の上昇速度の低下により徐々に拡大し、砂浜海岸も前進している(第4図c)。これ以降約5,000年前まで海面



第1図　仙台平野北半部地下の地層断面図
現在の海岸線直下の断面で断面位置は第5図参照



第2図　名取川に沿う地層断面図
松本(1988)を一部修正、
断面位置は第5図参照



第3図　仙台湾岸沖積平野に記録された氷河性海面変動

はゆっくりと上昇を続けるが、海岸線はさらに前進し、内陸部には沖積最上部陸成層が厚く堆積してゆく。とくに約5,000年前から現在にかけての時期には平野表面の微地形として認められている浜堤列、自然堤防、旧流路、後背湿地を形成しながら沖積平野は拡大した(第4図d、e、f)。

(3) 仙台平野北半部の微地形分布

仙台平野北半部の微地形分布は、現地調査および空中写真判読、堆積物の粒度分析等により、以下のように明らかにされている（第5図)。

自然堤防：広瀬川、名取川および七北田川の河道沿いに顕著に発達しており、一部は南小泉から十文字、霞の目方面へも分布が認められる。

旧流路：名取川、広瀬川の河道周辺に多く分布するほか、両河川合流点以西の長町、富沢方面にも特徴的に分布している。

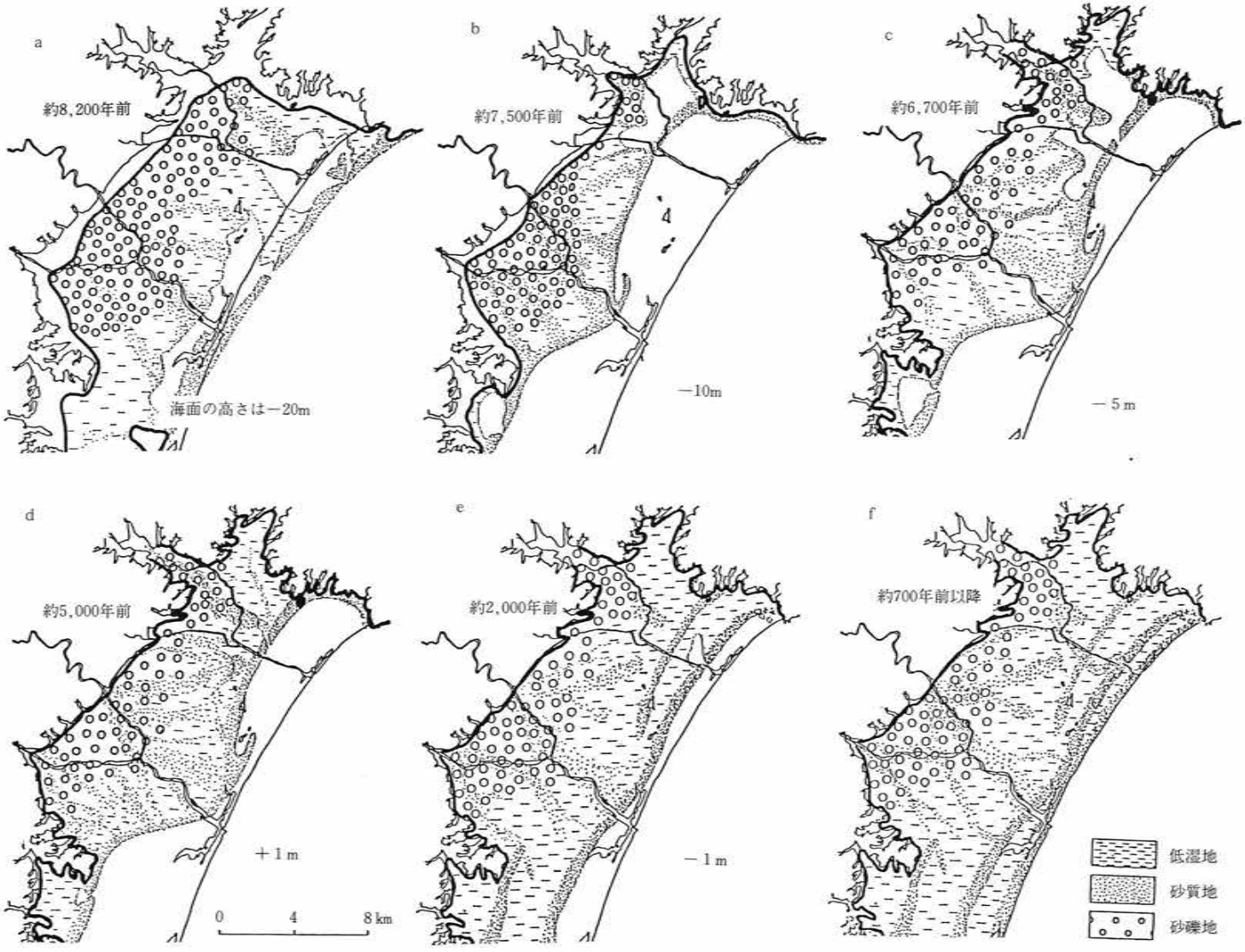
浜堤列：現在の海岸線に沿って形成されているもののほか、内陸部にも海岸線と平行に数条の分布を認めることができる。浜堤列は内陸側から現在の海岸線に向けて、第Ⅰ、第II、第III浜堤列に分類されており、およそ5,000年前の海岸線は第Ⅰ浜堤列の位置に、2,000年前頃の海岸線は第II浜堤列、そして約700年前頃から第III浜堤列の位置に海岸線が位置していたことが知られている（松本：1984)。

後背湿地：自然堤防や浜堤列などの砂質の微高地に囲まれた泥質堆積物からなる低湿地で、洪水時には長時間の冠水を余儀なくされる地帯である。

II. 中田南遺跡とその周辺の地形

(1) 旧流路と自然堤防

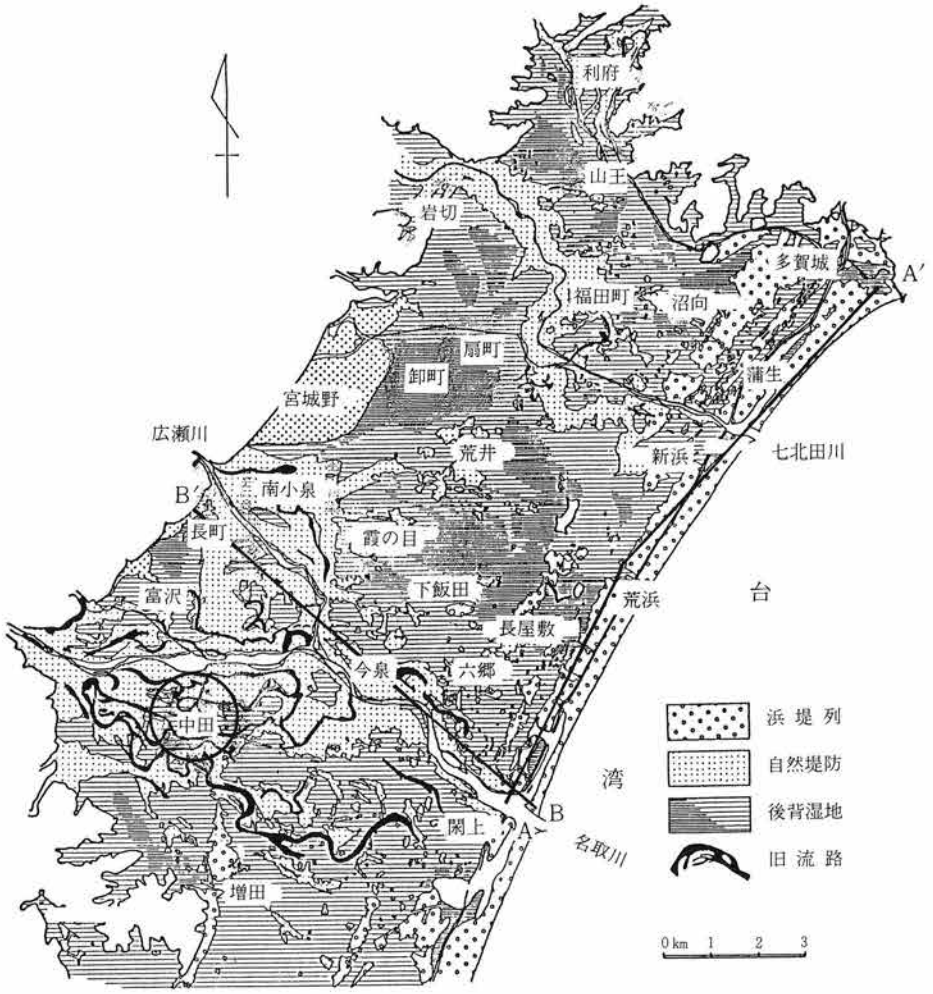
中田南遺跡は仙台平野北半部で自然堤防と旧流路が最も発達する名取川・広瀬川合流点付近の両河川乱流帯に位置する。名取川は、河口から約12km地点の富田付近を谷口として仙台平野に流入するが、富田から郡山にかけての地表の勾配は4／1,000前後で平野のなかでも勾配の急な扇状地の形態をもつ。また、支流の広瀬川は、名取川との合流点から約5km上流地点の河原町付近を扇頂とし、勾配4／1,000の扇状地の形態をもち、両河川のつくる扇状地は長町から郡山、四郎丸、沖野周辺で合流する形態をもつ。両河川は治水工事により河道が固定される以前は、付近一帯を自由に河道を替えながら蛇行し流れ下っていたことが容易に理解される（第5図)。これらの乱流地帯に残されたかつての流路が旧流路であり、洪水時に流路両岸に土砂を堆積させ自然堤防を形成した。これらの度重なる流路変遷により、旧流路は互いに交叉し、合流し、さらには自然堤防を形成する土砂の堆積により、それ以前の流路が埋積されるなどを繰り



第4図　仙台平野北半部の古地理変遷

返して現在に至る。乱流帯では細砂～シルト質の細流の洪水堆積物が間欠的に供給され、地盤高を急速に高めてきたものと考えられるが、中田南遺跡はその乱流帯上に位置している。

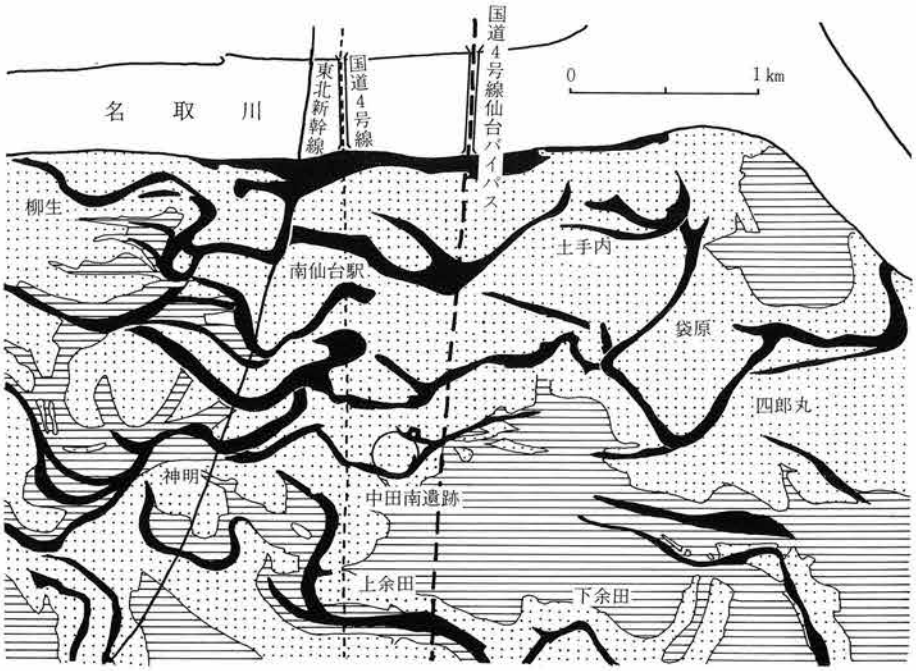
本発掘調査地域においても細砂～シルト質の堆積物の中に、数枚の粘土質堆積物が確認され、これらは、度重なる河道変遷の中で、河道が比較的近い場合に細砂～シルト質の堆積物が、河道が比較的遠い位置に存在した時期には粘土質の土砂が堆積物と考えられる。本調査において採取された2点の^{14}C年代試料(第7図)は現在測定中である。



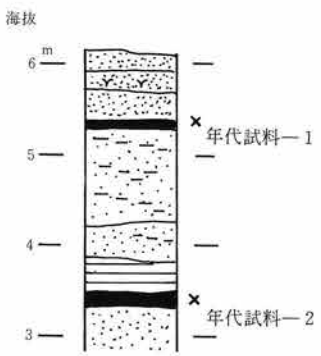
第5図　仙台平野北半部の微地形（松本、1991を一部修正）
○印は中田南遺跡の位置、A－A′およびB－B′は地層断面位置

⑵　本調査地最下位に認められる砂礫層

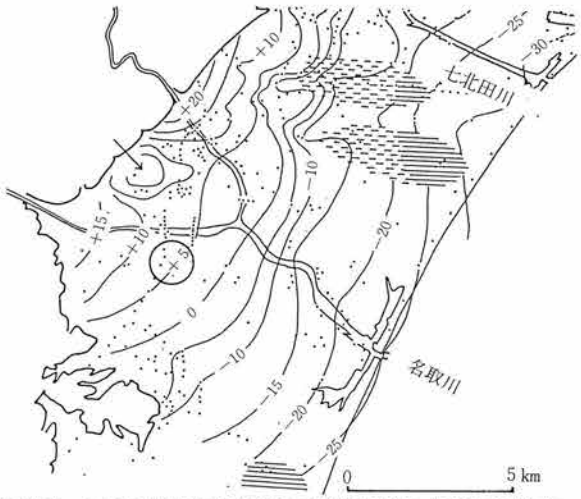
第８図は、中田南遺跡周辺についての地質ボーリング資料の解析から求められた埋積下部層上面高度分布である。名取川および広瀬川の谷口をそれぞれを扇頂とする合流扇状地状に埋積下部層が分布しており、本遺跡周辺の地下においては、海抜５ｍ前後に分布していることが示されている。



第６図　中田南遺跡周辺の旧流路と自然堤防
（凡例は第５図を参照）



第７図　^{14}Ｃ年代資料（Ⅷ区下層試掘Ａ）
年代試料１・２については
現在、測定中である。



第８図　中田南遺跡周辺地下の埋積下部層上面高度分布
○印：中田南遺跡、高度の単位はｍ（海面を基準）

本遺跡調査地においては、最下位に直径数cmの礫を主体とする砂礫層が確認(海抜4 m前後)されており、第8図から同砂礫層は仙台平野の基底礫層としての埋積下部層の上部砂礫層に連続する砂礫層であると考えられる。しかし、本遺跡で確認される砂礫層は、風化の度合いが小さく、比較的新鮮な堆積状態を示すことから、約26,000年前頃に堆積がほぼ終了した基底礫層上にその後も連続して堆積した河床堆積物と判断される（第2図参照)。堆積年代は7,500年前以降3,000年前頃ではないかと考えられる。

III. まとめ

以上から、中田南遺跡の地盤の成り立ちは次のようにまとめられる。およそ26,000年前、低海水準に対応した基底礫層が堆積し、その上に引き続き河床堆積物が約3,000年前頃まで連続して堆積した。その後は、名取川の本流が北方に移動することにより、本流河床礫の堆積は終了し、洪水堆積物により厚くおおわれ、洪水時の一時的あるいはやや長期的に機能する流路がしばしば形成されながら現在に至っているものと考えられる。

文　　献

井関弘太郎（1975)：「沖積層基底礫層について」『地学雑誌』81　247-264.

小元久仁夫・大内　定（1978)：「仙台平野の完新世海水準変化に関する資料」『地理学評論』51　158-175.

仙台市・国際航業（1983)：『昭和57年度仙台市地下水適正利用計画に係る基礎的研究その4』190頁.

松本秀明（1981)：「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」『地理学評論』54　77-25.

松本秀明（1984)：「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準変動」『地理学評論』57　370-738.

松本秀明（1988)：「仙台平野における沖積層基底の形態－埋没緩急と基底をなす砂礫層の分布・年代－」『昭和61－62年度科学研究費補助金研究成果報告書』53-58.

SAITO, Y. MATSUMOTO,E. and KASHIMA,K. (1988)：Sea Level of the Last Glaciation Maximum Based on In-Place Sediment on the Shelf off Sendai, Northeast Japan. The Quaternary Research, 28, 111-119.

TAKEUCHI,Sadako (1979)：Buried Terrace Under the Miyaginohara Coastal Plain, Miyagi Prefecture, Northeast Honsyu, Japan. Saito ho-on Kai Museum Research Bulletin, No.47, 1-6.

2．中田南遺跡の花粉分析

東北生活文化大学　守田　益宗

花粉分析試料について

仙台市中田地区から名取市増田地区にかけての名取川の自然堤防上には、多くの遺跡が存在する。中田南遺跡もこうした自然堤防上にある遺跡の一つで、名取市との境界付近の仙台市太白区中田７丁目に位置している。本遺跡からは、弥生時代～中世までの遺構・遺物が見つかっているが、なかでも奈良時代前半の竪穴式住居跡が20軒以上も認められ大規模集落の存在が推定されている。この住居跡のあった地層はたいへん有機物が少なく花粉分析には不適であった。そこで、その下層（IV層）中に挟在していた黒色土層の堆積時の植生環境を知るために花粉分析を行なった。

花粉分析用試料は、発掘区の下層試掘トレンチのVII区ＣおよびＤとVIII区Ｅのｅ−１層から各１試料とVII区Ｂのｃ、ｅ−1、１層およびVIII区Ａのｅ−1、１層から各１試料の計８試料を採取したが、本遺跡では有機物に富む堆積物は少なかった。試料の採取地点とその位置は第IV章第26図のとおりである。試料は、KOH-$ZnCl_2$-Acetolysis 法を用いて処理した。各試料については高木花粉（Tree Pollen）が 200粒以上に達するまで同定することを目標とし、その間に出現する全ての花粉・胞子を記録した。花粉・胞子の出現率は、高木花粉では高木花粉総数を、その他の花粉・胞子は高木花粉を除いた花粉・胞子の総数をそれぞれ基本数として百分率で求めた。高木花粉に含めた花粉は、表１・２に示したマツ属～シナノキ属までの諸属である。

結果および考察

検出された花粉・胞子は表１・２に示したように、高木花粉18種類、低木花粉10種類、草本花粉16種類、シダ胞子５種類、コケ胞子１種類である。また、明らかな二次堆積花粉であるペカン属とフウ属も検出された。しかし、いずれの試料でも花粉・胞子の含量が少なく、高木花粉の総数は200粒に満たず、花粉出現率の計算に十分な信頼が得られないため、森林を構成するような植物の様子は明らかにできない。

本来、このような花粉・胞子含量の少ない試料では、花粉・胞子の選択的な分解や堆積がおこっていることが多く、植生の復元にはあまり適していない。それでも、VIII区Ａのｅ−１層とVIII区Ｅのｅ−１層を除く試料では、高木花粉以外の花粉・胞子の総数が200粒を超えるので、通常の場合より確度は低いが、これらより遺跡近辺の高木以外の植生の様子がある程度は推定できる。すなわち、上記の２試料を除く全ての試料で、ハンノキ属は５％以下の低率であるが、単

条溝型シダ胞子は高率を占める。Ⅶ区DおよびCのe−1では、ヨモギ属以外のキク科が比較的高率であるが、その他の試料では低率である。イネ科、ヨモギ属はⅦ区B−c層を除き比較的多く認められる。

シダ胞子は一般に分解に強いといわれており、今回の試料でもこのようなことが強く結果に反映されて高率を示していると考えられる。他の花粉でも多かれ少なかれ同様なことが起こっているであろうが、そのような影響を考えても、ハンノキ属、イネ科、ヨモギ属、他のキク科は、やはり付近に生育していたであろう。ハンノキ属の出現率から判断して、これの湿地林が付近の後背湿地に広い面積を占めていた可能性は低い。本遺跡近辺の自然堤防上にはススキ、ヨモギ類、その他のキク科、シダの多い草地が、後背湿地にはヨシなどが広く生育していたと考えられる。この結果は、これまでの仙台平野の花粉分析結果と大きな矛盾はない(安田：1981、守田：1988など)。

引 用 文 献

守田益宗（1988）：「富沢遺跡（第28次調査）の花粉分析」『富沢遺跡第28次発掘調査報告書』仙台市教育委員会 97〜113.

安田喜憲（1981）：「仙台市六反田遺跡の泥土の花粉分析」『六反田遺跡発掘調査報告書』仙台市教育委員会・日本電信電話公社東北電気通信局 241〜251.

表1　花粉分析結果 (2)

学　　名	和　　名	VII区 D-e-1	VII区 C-e-1	VII区 B-c	VII区 B-e-1	VII区 B-1	VIII区 A-e-1	VIII区 A-1	VIII区 E-e-1
Pinus	マツ属	8.9%	5.9%	15.4%	8.0%	8.7%		12.1%	
Abies	モミ属		2.0%	1.3%				0.6%	
Picea	トウヒ属			2.6%		0.9%		0.6%	
Tsuga	ツガ属							0.6%	
Cryptomeria	スギ属	6.7%	3.9%	3.8%		6.1%		4.8%	
Pterocarya	サワグルミ属	4.4%	9.8%	2.6%	12.0%	3.5%	16.7%	0.6%	
Juglans	クルミ属	1.1%	7.8%	2.6%		0.9%		0.6%	
Betula	シラカンバ属	2.2%			4.0%	4.3%		4.8%	
Carpinus	クマシデ属	7.8%		1.3%		4.3%		1.8%	
Fagus crenata	ブナ	10.0%	13.7%	12.8%	20.0%	7.8%	16.7%	6.1%	
Quercus	コナラ亜属	28.9%	33.3%	33.3%	32.0%	28.7%	16.7%	28.5%	
Cyclobalanopsis	アカガシ亜属					0.9%		1.2%	
Castanea	クリ属	4.4%		3.8%	4.0%	3.5%		3.6%	
Ulmus-Zelkova	ニレ属・ケヤキ属	22.2%	21.6%	19.2%	12.0%	27.0%	33.3%	26.7%	
Celtis-Aphananthe	エノキ属・ムクノキ属					0.9%			
Acer	カエデ属	3.3%			4.0%	0.9%	16.7%	4.2%	
Aesculus	トチノキ属			1.3%		1.7%		1.2%	
Tilia	シナノキ属		2.0%		4.0%			1.8%	
Salix	ヤナギ属					0.2%			
Corylus	ハシバミ属	1.1%	0.6%	0.4%	2.1%	0.8%	2.0%	1.5%	
Alnus	ハンノキ亜属	4.2%	1.3%	2.9%	2.1%	4.2%	2.0%	3.9%	6.3%
Alnaster	ヤシャブシ亜属	0.6%	1.3%	3.3%	0.8%	1.0%	1.0%	0.8%	
Ilex	モチノキ属		0.6%	0.6%	0.4%	0.2%		0.3%	
Araliaceae	ウコギ科	0.4%		0.6%		0.2%		0.3%	
Ericaceae	ツツジ科		0.3%	0.6%		1.2%		0.8%	
Fraxinus	トネリコ属		0.3%	0.6%				0.2%	
Viburnum	ガマズミ属		0.3%						
Weigela	タニウツギ属							0.1%	
Gramineae	イネ科	22.1%	30.0%	2.6%	42.0%	15.8%	18.6%	12.3%	6.3%
Cyperaceae	カヤツリグサ科	0.6%			0.4%			0.4%	
Typha	ガマ属		0.9%			0.2%			
Urticaceae	イラクサ科	0.2%							
Persicaria	サナエタデ属				0.4%		1.0%	0.1%	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科・ヒユ科							0.3%	
Thalictrum	カラマツソウ属	0.6%	0.3%			0.6%		0.2%	
Leguminosae	マメ科	0.2%	0.9%					0.1%	
Impatiens	ツリフネソウ属	0.2%				0.2%		0.1%	
Lythrum	ミソハギ属		0.3%						
Epilobium	アカバナ属					0.2%			
Umbelliferae	セリ科	1.1%	0.6%	0.2%	1.2%	2.2%		0.8%	
Calystegia	ヒルガオ属		1.3%						
Campanula	ホタルブクロ属				0.4%				
Artemisia	ヨモギ属	13.0%	6.3%	3.5%	9.5%	14.4%	9.8%	9.6%	
other Compositae	他のキク科	15.7%	25.6%	1.6%	4.5%	2.2%	48.0%	4.5%	25.0%
1-lete type FS	単条溝型シダ胞子	37.4%	26.5%	68.4%	32.9%	53.3%	15.7%	61.5%	62.5%
3-lete type FS	三条溝型シダ胞子	2.6%	1.6%	13.6%	1.6%	2.8%	1.0%	2.0%	
Lycopodium	ヒカゲノカズラ属				0.4%		1.0%	0.1%	
Osmundaceae	ゼンマイ科	0.2%	0.9%	1.0%				0.1%	
Ophioglossaceae	ハナヤスリ科				1.2%	0.2%			
Anthocerotaceae	ツノゴケ科					0.2%			
Trees	高木花粉	13.6%	12.8%	13.1%	8.8%	17.7%	5.3%	14.1%	
Shrubs	低木花粉	5.0%	3.8%	7.4%	4.6%	6.0%	4.4%	6.5%	5.9%
Herbs	草本花粉	43.0%	52.9%	6.6%	49.8%	27.5%	69.3%	23.4%	29.4%
Ferns	シダ胞子	32.2%	23.2%	68.7%	30.9%	43.2%	15.8%	52.4%	58.8%
Unknown	不明	6.2%	7.3%	4.2%	6.0%	5.5%	5.3%	3.6%	5.9%
Carya	ペカン属								5.9%
Liquidamber	フウ属					0.2%			

表1　花粉分析結果 (1)

学　　名	和　　名	VII区 D-e-1	VII区 C-e-1	VII区 B-c	VII区 B-e-1	VII区 B-1	VIII区 A-e-1	VIII区 A-1	VIII区 E-e-1
Pinus	マツ属	8	3	12	2	10		20	
Abies	モミ属		1	1				1	
Picea	トウヒ属			2		1		1	
Tsuga	ツガ属							1	
Cryptomeria	スギ属	6	2	3		7		8	
Pterocarya	サワグルミ属	4	5	2	3	4	1	1	
Juglans	クルミ属	1	4	2		1		1	
Betula	シラカンバ属	2			1	5		8	
Carpinus	クマシデ属	7		1		5		3	
Fagus crenata	ブナ	9	7	10	5	9	1	10	
Quercus	コナラ亜属	26	17	26	8	33	1	47	
Cyclobalanopsis	アカガシ亜属					1		2	
Castanea	クリ属	4		3	1	4		6	
Ulmus-Zelkova	ニレ属・ケヤキ属	20	11	15	3	31	2	44	
Celtis-Aphananthe	エノキ属・ムクノキ属					1			
Acer	カエデ属	3			1	1	1	7	
Aesculus	トチノキ属			1		2		2	
Tilia	シナノキ属		1		1			3	
Salix	ヤナギ属					1			
Corylus	ハシバミ属	6	2	2	5	4	2	14	
Alnus	ハンノキ亜属	22	4	14	5	21	2	37	1
Alnaster	ヤシャブシ亜属	3	4	16	2	5	1	8	
Ilex	モチノキ属		2	3	1	1		3	
Araliaceae	ウコギ科	2		3		1		3	
Ericaceae	ツツジ科		1	3		6		8	
Fraxinus	トネリコ属		1	3				2	
Viburnum	ガマズミ属		1						
Weigela	タニウツギ属							1	
Gramineae	イネ科	117	95	13	102	79	19	118	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3			1			4	
Typha	ガマ属		3			1			
Urticaceae	イラクサ科	1							
Persicaria	サナエタデ属				1		1	1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科・ヒユ科							3	
Thalictrum	カラマツソウ属	3	1			3		2	
Leguminosae	マメ科	1	3					1	
Impatiens	ツリフネソウ属	1				1		1	
Lythrum	ミソハギ属		1						
Epilobium	アカバナ属					1			
Umbelliferae	セリ科	6	2	1	3	11		8	
Calystegia	ヒルガオ属		4						
Campanula	ホタルブクロ属				1				
Artemisia	ヨモギ属	69	20	17	23	72	10	92	
other Compositae	他のキク科	83	81	8	11	11	49	43	4
1-lete type FS	単条溝型シダ胞子	198	84	336	80	266	16	590	10
3-lete type FS	三条溝型シダ胞子	14	5	67	4	14	1	19	
Lycopodium	ヒカゲノカズラ属				1		1	1	
Osmundaceae	ゼンマイ科	1	3	5				1	
Ophioglossaceae	ハナヤスリ科				3	1			
Anthocerotaceae	ツノゴケ科					1			
Trees	高木花粉	90	51	78	25	115	6	165	
Shrubs	低木花粉	33	15	44	13	39	5	76	1
Herbs	草本花粉	284	210	39	142	179	79	273	5
Ferns	シダ胞子	213	92	408	88	281	18	611	10
Unknown	不明	41	29	25	17	36	6	42	1
Carya	ペカン属								1
Liquidamber	フウ属					1			

3．仙台市中田南遺跡出土材の樹種

木工舎「ゆい」　高橋　利彦

1．試料

試料は、中世のものとされる屋敷跡から検出された溝跡や井戸跡などから出土した木製品・加工材65点と、縄文時代以前のものとされる自然木５点の合計70点である。木製品・加工材の所属時期は中世前半・後半に２大別され、用途別の試料数では漆器・下駄・曲物・箸などの日用品が多く、用途不明の製品や加工材も含まれる。自然木は縄文時代以前のものとされるが詳細は明らかにされていない（表１・２）。

2．方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の３面の徒手切片を作製、ガム・クロラール(Gum Chloral) で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。No. 49は針葉樹の柾目の薄板を撚ったものであったため、端部の光を透過しそうな部分を直接封入しプレパラートとした。同時に顕微鏡写真図版（図版１～６）も作製した。なお作製したプレパラートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

3．結果

試料の中には劣化や変形が進んでいたため確実な同定ができず類似種としたものもあったが、以下の18種類［分類群(Taxon) をさす。ここでは科・属・節・種の異なった階級の分類単位を総称している。］に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお各 Taxon の科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物　木本Ⅰ・Ⅱ」(1989) にしたがい、一般的性質などについては「木の事典　第１巻～第17巻」(1979～1982)も参考にした。また、(　)のついた試料番号は類似種としたものを示している。

・モミ属の一種（*Abies* sp.）　マツ科　No. 36, (49), 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67.

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はないが、傷害樹脂道が認められることがある。放射仮道管はなく、放射柔細胞の末端壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型(Taxodioid)で１～４個。放射組織は単列、１～30細胞高。No. 49は上記のように柾目面しか観察できなかったため類似種としたがほぼ確実と考えている。

モミ属には、ウラジロモミ（*Abies homolepis*）・トドマツ（*A. sachalinensis*）・モミ（*A. firma*）・シラビソ（*A. veitchii*）・オオシラビソ（*A. mariesii*）の5種があり、トドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州（秋田・岩手県以南）・四国・九州の低地～山地に、ウラジロモミは本州中部（福島県以南）・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯に、オオシラビソは本州（中部地方以北）の亜高山帯に、シラビソは本州中部（福島県以南）・奈良県・四国に、トドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地～高山・寒冷地に生育する。材の解剖学的特徴のみでは区別できないが、試料はモミである可能性が高い。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易で、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・器具・家具・建築材など各種の用途が知られている。

・スギ（*Cryptomeria japonica*）　スギ科　No. 37, 41, 45, 50, 59.

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では現在ヒノキに次ぐ植林面積をもち、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

・アスナロ（*Thujopsis dolabrata*）　ヒノキ科　No. 34, (51).

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔は小さくヒノキ型（Cupressoid）～スギ型で1～6個。放射組織は単列、1～15細胞高。No. 51は柔細胞中に内容物が詰まっていて分野壁孔が十分観察できなかった。

アスナロは本州・四国・九州に分布する日本特産の常緑高木で、時に植栽される。北海道（渡島半島以南）・本州北部には変種ヒノキアスナロ（ヒバ）（*T. dolabrata* var. *hondai*）がある。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・ヒノキ科の一種（Cupressaceae sp.）　No. 40, 46.

上記アスナロやヒノキ属（*Chamaecyparis*）に似るが、組織の劣化や柔細胞中の内容物の存在によって確定できなかった。写真図版は割愛した。

・ヤナギ属の一種（*Salix* sp.）　ヤナギ属　No. 69, 70.

散孔材で、道管は年輪全体にほぼ一様に分布するが年輪界付近でやや管径を減少させる。道

管は横断面ではやや角張った楕円形、単独および2～3個が複合する。単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性、単列、1～15細胞高。年輪界はやや不明瞭。

ヤナギ属は国内に約35種が知られ、種間雑種も多く分類の困難な植物群である。属としては全国に分布し、時に植栽される落葉低木または高木である。ネコヤナギ（*Salix gracilistyla*）などのように水辺に生育する種が多いが、バッコヤナギ（*S. bakko*）、ノヤナギ（*S. subopposita*）などのように乾燥した立地に生育するものや、シライヤナギ（*S. shiraii*）、コマイワヤナギ（*S. rupifraga*）のように岩場に生育するものもある。材は一般に軽軟で、割裂性が大きく、保存性は低い。

・ブナ属の一種（*Fagus* sp.）　ブナ科　No. 1,2,3,4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14,15,16,17,18,19,20,39,57.

散孔材で管孔は単独または放射方向に2～3個が複合、横断面では多角形、管壁はやや薄く、分布密度は高い。道管は単穿孔および段（bar）数が10前後の階段穿孔をもち、壁孔は大型で対列状～階段状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性～異性III型、単列・数細胞高のものから複合組織まである。柔細胞は短接線状および散在状。年輪界は明瞭～やや不明瞭。

ブナ属にはブナ（*Fagus crenata*）とイヌブナ（*F. japonica*）の2種がある。ブナは北海道南西部（黒松内低地帯以南）・本州・四国・九州に、イヌブナは本州（岩手県以南）・四国・九州の主として太平洋側に分布する。イヌブナのほうがブナより低標高地から生育し、またブナのような大群落をつくることはない。ブナは日本の冷温帯落葉樹林を代表する樹木で、かつては東日本の山地に広く生育していた。材はやや重硬で、強度は大きいが加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。木地・器具・家具・薪炭材などの用途があったが、最近では各種の用途に用いられている。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* sp.）
ブナ科　No. 42,44.

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形～楕円形、小道管は管壁がやや薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、カシワ（*Quercus dentata*）・ミズナラ（*Q. crispula*）・コナラ（*Q. serrata*）・ナラガシワ（*Q. aliena*）といくつかの変・品種を含む。ミズナラ・カシワ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としては同属のクヌギ（*Q. acutissima*）に次ぐ優良材である。

・クリ（*Castanea crenata*）　ブナ科　No. 22, 23, 24, 25, 27, 33, 43, 52, 54, 55, 56.

環孔材で孔圏部は1～4列またはそれ以上、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単（～2）列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、椎木や海苔粗朶などの用途が知られている。

・エノキ属類似種（cf. *Celtis* sp.）　ニレ科　No. 58.

組織の変形が著しい。環孔材で小道管は塊状に複合する。道管は単穿孔をもつ。放射組織は異性で鞘細胞（sheath cell）が認められる。

エノキ属にはエゾエノキ（*Celtis jezoensis*）、エノキ（*C. sinensis* var. *japonica*）、コバノチョウセンエノキ（*C. leveillei*）、クワノハエノキ（*C. boninensis*）の4種がある。エゾエノキは北海道・本州・四国・九州に、エノキは本州・四国・九州に普通にみられる。コバノチョウセンエノキは本州（近畿地方以西）・四国・九州・琉球に、クワノハエノキは山口県・九州西部・琉球・小笠原に稀に生育する。エノキは東北地方にはやや少ないが、平地から丘陵地に普通にみられ、また神社や街道沿いに植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度はやや小さく、耐朽性も低く、材質的には劣る。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*）　ニレ科　No. 26, 30, 31, 35.

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線～斜方向の紋様をなす。大道管は管壁が厚く、横断面では円形～楕円形、単独、小道管は管壁はやや薄く、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小

道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1～10細胞幅、1～30細胞高であるが時に60細胞高を越える。しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにも達する。材はやや重硬で、強度は大きいが加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つに上げられる。

・ヤマグワ（*Morus australis*）　クワ科　No.28.

環孔材で孔圏部は1～5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は横断面では楕円形、単独または2～3個が複合、小道管は横断面では多角形で複合管孔となる。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性II～III型、1～6細胞幅、1～50細胞高。柔組織は周囲状～翼状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州・琉球の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、多くの園芸品種があり養蚕に利用されている。クワ属はヤマグワの他に4種が自生するが、西南日本に分布するケグワ（*M. cathayana*）を除くとその分布域はごく限られている。ヤマグワの材はやや重硬で強靭、加工はやや困難で、保存性は高い。装飾材や器具・家具材として用いられる。

・モクレン属の一種（*Magnolia* sp.）　モクレン科　No.29.

散孔材で管壁はやや薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は階段状～対列状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。放射組織は異性II型、1～2細胞幅、1～40細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界は明瞭。

モクレン属はホオノキ（*Magnolia obovata*）・コブシ（*M. praecocissima*）など5種が自生する。ホオノキ・コブシは北海道から九州の適潤～湿性地に生育するが、コブシは西日本にはやや少ない。ホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工は極めて容易で欠点が少ないことから、器具・建築・家具・建具材などのほか、指物・木地・下駄歯・刃物鞘など特殊な用途が知られている。また木炭は金・銀・銅・漆器の研磨に用いられた。コブシの材はホオノキに似るがやや硬く、ホオノキより劣るものとされホオノキに準じた使われ方をする。

・イスノキ（*Distylium racemosum*）　マンサク科　No.21.

散孔材で、ほとんど単独、横断面では多角形。道管は階段穿孔をもち、段数は10前後。放射

組織は異性II型、1～3細胞幅、1～10細胞高。柔組織は独立帯状または短接線状で目だつ。年輪界は不明瞭。

イスノキは本州（関東南部以西）・四国・九州・琉球の常緑樹林内に生育する常緑高木である。イスノキ属には他に小笠原に分布するシマイスノキ（*D. lepidotum*）がある。材は重硬で加工は困難、強度・耐朽性は大きい。家具・器具・建築材として用いられるほか、櫛としてはツゲに次ぐ良材とされている。

・ツタウルシ（*Rhus ambigua*）　ウルシ科　No. 68.

環孔材で、孔圏部は1～2列。管壁は厚く、横断面では楕円形、大道管は単独、小道管は放射方向に2～5個が複合または単独に配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性II型、1～7細胞幅、1～50細胞高で、その外形はいびつな紡錘形となる。柔組織は周囲状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

ツタウルシは北海道から九州の林内に生育する落葉つる生の木本である。

・アワブキ属の一種（*Meliosma* sp.）　アワブキ科　No. 38.

散孔材で、単独または2～4個が複合する。道管は単穿孔または段数が5前後の階段穿孔をもち、壁孔は小型で交互状に配列する。放射組織は大型で異性II型、1～3細胞幅、1～50細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。年輪界は不明瞭。

アワブキ属には、葉が単生するアワブキ（*M. myriantha*）などと羽状複生するフシノハアワブキ（*M. oldhamii*）などの5種がある。このうちアワブキは本州・四国・九州の山地に普通な落葉高木で、材は重硬であるが割裂性は大きく、薪にするほかは有用な用途は知られていない。

・ケンポナシ（*Hovenia dulcis*）　クロウメモドキ科　No. 32.

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。大道管は横断面では楕円形、単独、小道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独および放射方向に2～3個が複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III～II型、1～5細胞幅、1～50細胞高。柔組織は周囲状～翼状、散在状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

ケンポナシは北海道（奥尻島）・本州・四国・九州に自生する落葉高木で、時に植栽される。また、本州（主として西部）・四国にはケケンポナシ（*H. tomentella*）が自生する。材の重さ・硬さは中程度で、加工は容易、材質は良好である。このため建築装飾材・家具材として賞用され、器具・楽器・旋作・薪炭材などにも用いられる。

・ヤマウコギ（*Acanthopanax spinosus*） ウコギ科 No. 53.

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が斜～放射方向に複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、1～8細胞幅、数細胞高のものから広放射組織まである。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。

ヤマウコギは本州（岩手県以南）の山野に普通の落葉低木で、時に生け垣として栽培される。材は重硬であるが、小径であるため用途は特に知られていない。

・リョウブ（*Clethra barbinervis*） リョウブ科 No. 48.

散孔材で、横断面では角張った円形、単独でやや疎らに配列する。道管は階段穿孔をもち、段は多数、壁孔は交互状～階段状に配列する。放射組織は異性II型、1～4細胞幅、1～30細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。

リョウブは北海道（渡島半島）・本州・四国・九州の主として陽好地に生育する落葉小高木である。材はやや重硬で割裂しにくく、加工はやや困難、器具・施作・玩具・薪炭材などに用いられる。

・エゴノキ属の一種（*Styrax* sp.） エゴノキ科 No. 47.

散孔材で管壁は薄く、横断面では楕円形、2～4個が複合または単独で配列、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔をもち、段数は5～10、壁孔は小型で密に交互～対列状に配列、放射組織との間では篩状となる。放射組織は異性II型、1～3細胞幅、1～30細胞高。柔組織は短接線状および散在状。年輪界は不明瞭。

エゴノキ属にはエゴノキ（*Styrax japonica*）、ハクウンボク（*S. obassia*）、コハクウンボク（*S. shiraiana*）の3種がある。エゴノキは北海道（渡島）・本州・四国・九州・琉球に、ハクウンボクは北海道（北見・石狩以南）・本州・四国・九州に、コハクウンボクは本州（栃木県以南）・四国・九州に分布する落葉高木～低木である。材はやや重硬で割裂しにくく、加工はやや容易、旋作・器具・薪炭用などに用いられる。

以上の同定結果を推定されている用途・時代とともに一覧表で示す（表1）。

4．考　察

主な用途別の使用樹種を通覧すると、特定の用途に特定の樹種を用いている傾向が窺える（表2）。その中には現行の用材と共通するものや、材質的にみて妥当と判断できるものが多く、いわゆる「適材」を「適所」に選択的に用いているものが多いといえよう。

木製品・加工材の推定されている所属時期は上述のように中世前半・後半に2大別されているが（表1）、所属時期によって用材に何らかの傾向や変化があるようには見えない。したがって以下の議論では中世のものとして一括して扱うこととする。

なお、自然木については縄文時代以前とされるものの試料数も限られていることから上記の同定結果を報告することにとどめる。

漆器は椀14点、皿6点が調べられたがいずれもブナ属に同定された。ブナ属には上記のようにブナとイヌブナがあり解剖学的には区別できないが、現生種の生育の仕方や現行の用材からみてこれらはいずれもブナと判断してよいと思う。そうであれば、当時であっても遺跡のある名取低地内にブナが自生していたとは考えにくいことから、少なくとも遺跡の西方に位置する高館丘陵や青葉山丘陵以遠の高標高地に生育していたブナ材を用いたものであろう。試料の所属時期も合わせ考えると、現県境を越えた遠方から搬入された可能性もあり、その場合は製品の形で持ち込まれたものと思う。なお、本試料とほぼ同時代のものと考えられている漆器が名取川対岸下流部に位置する今泉城跡からも出土しており、用材としてブナ・ケヤキが認められている[1]（木村・内藤：1983）。

下駄は連歯5点、差歯本体1点・歯5点が調べられたが、作り方によって用材に違いが認められた。すなわち、連歯下駄はすべてクリであったが、差歯下駄はモクレン属、歯にはケヤキ（3点）・ヤマグワ・ケンポナシ（各1点）が用いられクリは認められなかった。この違いが試料数が限られていることによる見かけのものであるのか、製作技法上の用材選択の違いを示しているものなのかは直ちに判断できないが、興味ある事例として指摘しておきたい。

曲物とされるものは側板・蓋・底合わせて9点が調べられ、スギ（4点）・アスナロ・ヒノキ科（各2点）の針葉樹に加えて広葉樹のケヤキ（1点）も認められた。曲物は薄い剝ぎ板を円く巻き、合わせ目を桜の樹皮（樺皮）で綴じて側板とし、これに底板を取り付けた容器であるが、蓋は必ずしも必要とされるものではない。側板にはできるだけ薄い板を用いる必要があり、割裂性に優れるヒノキやスギが使われることが多く、通常は底にも同じ材を用いる。試料のほとんども一般的な用材と同様の針葉樹であった。さて、その蓋とされるNo.35は残存部の径約7cmの円盤で、中央に小孔が穿たれている。ほぼ完形をとどめているように見え、小孔には“つまみ”様のものが取り付けられていたのかも知れない。このような形状から蓋状のものと推測することに異論はないが、同じく曲物の蓋とされているNo.40やNo.50（ともに長楕円形のものの

一部が残存したもののように筆者には思える）とは形や大きさが異なり、それらには認められていない漆の塗膜も認められている。曲物の蓋が広葉樹製であってはいけないということではない[2]が、素木（しらき）の針葉樹の薄板の曲物[3]に漆塗りの厚い[4]蓋はいかにも不釣合いに思える。さらに、No.35が完形に近い径を保っているとするならば、それがかぶせられていた本体は径6cm前後の円筒形となろう。蓋を必要とするほどの容器となれば深さもある程度大きなものとなるはずである。曲物の深さはすなわち側板の幅となるが、底の取り付けも考慮して仮に6cm[5]とすると、長さ約20cm、幅6cmの板を曲げて綴じることになる。これは容易な作業ではない。側板の幅をより小さくすれば曲げは容易になるが、そうしてできた容器は深さ（高さ）が小さくなり、これに蓋を載せると蓋ばかりが目立った異様な容器になってしまうだろう。以上のように、使われている樹種とその形状からみて、No.35が推定されているように「曲物の」蓋であるのか、検討の余地があると思う。

箸は対象となった8点全てがモミ属に同定された。その形状からみて使い捨て、あるいはごく短い周期で更新されていった日用の消耗品であろう[6]。仕上がりも粗い印象であることから、自家製またはそれに準じた形で作られたものと思う。そうであれば材料・製品ともそれほど遠距離に運搬されるとは考えにくい。手近で容易に入手できる材料の中から、割裂性に優れ清浄感があり臭気も少ないモミが選ばれたものと思う。仙台市地域の潜在自然植生がモミを主要構成種とする森林と考えられていることから、その原木は、おそらく西方の丘陵やその斜面部に生育していたものと考えている。

この他試料は少ないものの、クリを用いた掘立柱、モミ属・スギ製の木簡・イスノキ製の櫛などもそれぞれの用途に求められる強度・加工性・耐朽性をもった材料を選択しているといえる。なお、イスノキは現生種の自然分布が関東以西の暖地とされることから製品が持ち込まれたものと思う。

〈注〉

1）椀7点はブナ5点（1点は江戸時代初期まで降る可能性もあるとされる）とケヤキ2点に、板物1点はケヤキに同定されている。

2）現在広葉樹製の曲物が製作されている例を筆者は寡聞にして知らない。出土品の報告でもスギ・ヒノキを中心とした針葉樹がほとんどで、わずかに静岡県浜松市伊場遺跡の古墳時代後期～平安時代後期のものとされる曲物側板1点がヤマグワに同定されている（残りの18点はヒノキに同定）例（山内：1978）と、福島県福島市御山千軒遺跡出土の平安時代前期とされる曲物底板・側板4点がケヤキおよびケヤキ？に同定［他の側板・底板・蓋76点はヒノキ・モミ・アスナロ・スギ・マツのいずれも針葉樹（？を含む）に同定］されている例（嶋倉：1983）を知るのみである（伊東ほか：1987、伊東：1990）。

3）現在では内面に朱漆を塗装した曲物（弁当箱など）も市販されているが、当時も同様の塗装が行われていた

ものか疑問である。さらにここでの出土品の中にはNo.35以外の漆塗の曲物部材は認められていないことから素木作りと考えた。

4）残存部の厚さの比較ではNo.35（0.9cm）はNo.40（1.1cm）より薄いが、平面形（径や長さ）に対する厚みの比でみると、No.35は少なくとも2倍以上“厚ぼったく”作られていることになる。

5）ここで仮定した6cmという容器の高さが決して十分なものでないことは、現在使われている湯呑やコーヒー・カップの大きさを計測すれば納得いただけるものと思う。

6）塗箸の製造は江戸時代初期から開始されたとされ、それ以前は（そして以後も）使い捨てが原則とされる（一色：1993）。ハレの箸は別として、当時日用の箸を現在の割箸のように使い捨てにしたとは即断できないが、少なくとも塗箸のように長期間使った（使えた）ものではないだろう。

引　用　文　献

平井信二（1979～1982）：『木の事典』第1巻～第17巻　かなえ書房

一色八郎（1993）：『箸の文化史（改訂版）』　御茶の水書房　237pp.

伊東隆夫・山口和穂・林　昭三・布谷知夫・島地　謙（1987）：「日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途」『木材研究・資料』第23号　42～210.

伊東隆夫（1990）：「日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途　II」『木材研究・資料』第26号　91～189.

木村中外・内藤俊彦（1983）：「今泉城跡から出土した木製品の素材　今泉城跡－名取川下流域における中世城館跡の調査－」『仙台市文化財調査報告書』第58集　206～207.　仙台市教育委員会

佐竹義輔・原　寛・亘理俊次・冨成忠夫（編）（1989）：『日本の野生植物　木本Ⅰ・II』平凡社　321・305pp.

嶋倉巳三郎（1983）：「御山千軒遺跡から出土した木質遺物－東北新幹線関連遺跡発掘調査報告VI　御山千軒遺跡」『福島県文化財調査報告書』第109集　付編　9～30　福島県教育委員会・日本国有鉄道

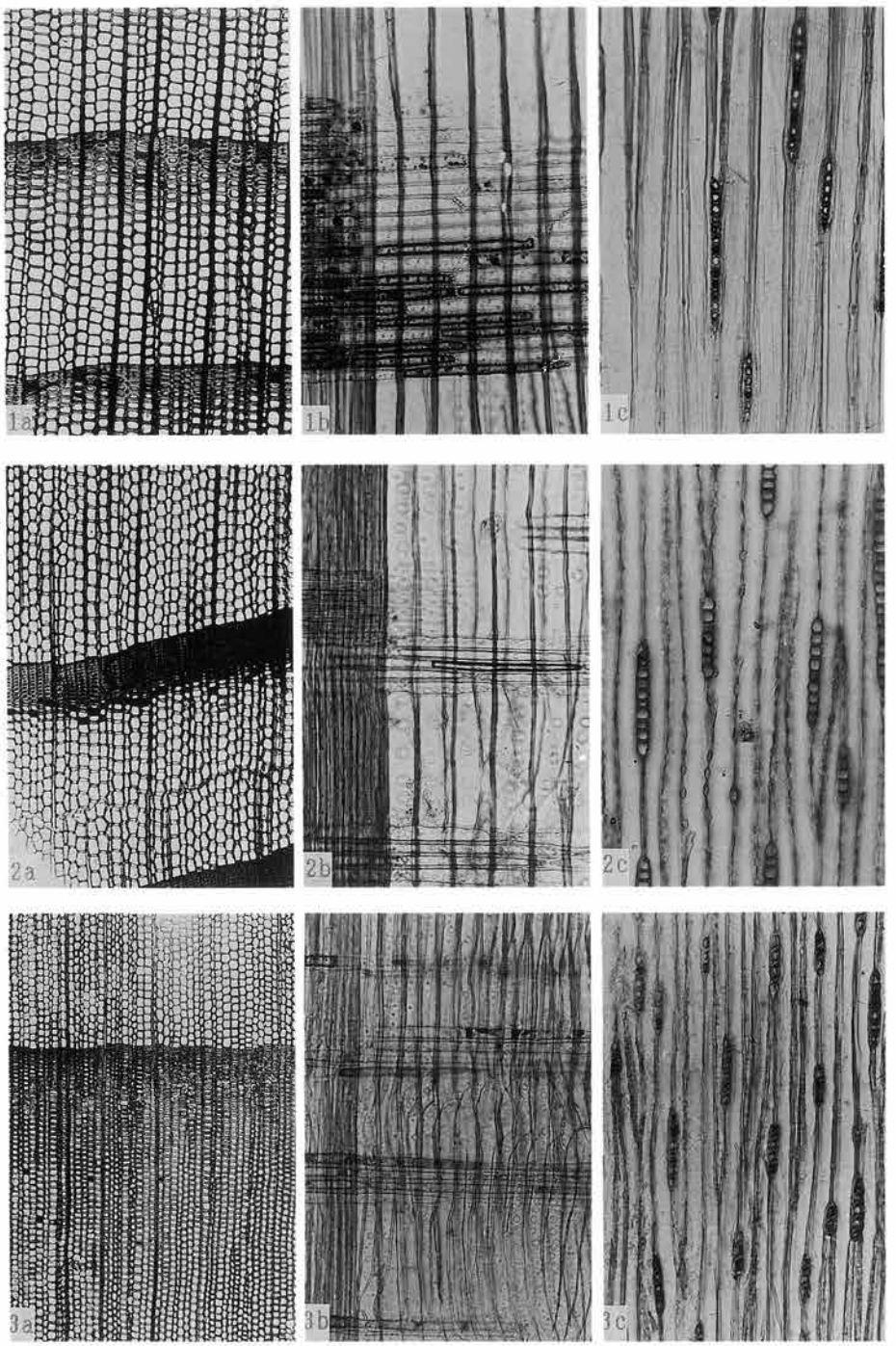
山内　文（1987）：「伊場遺跡出土木製品の材質鑑定－伊場遺跡　遺物編1」『伊場遺跡発掘調査報告書』第3冊　58～77.　浜松市教育委員会（原文を直接参照できなかったため同定結果は伊東ほか：1987によった）

表1　中田南遺跡出土材の樹種

試料番号	用途	時代	種名	試料番号	用途	時代	種名
1	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	36	木簡	中世後半	モミ属の一種
2	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	37	木簡	中世後半	スギ
3	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	38	木錘	中世後半	アワブキ
4	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	39	木錘	中世後半	ブナ属の一種
5	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	40	曲物蓋	中世後半	ヒノキ科の一種
6	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	41	曲物側板	中世後半	スギ
7	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	42	くさび形	中世後半	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
8	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	43	くさび形	中世後半	クリ
9	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	44	くさび形	中世後半	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
10	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	45	曲物側板	中世後半	スギ
11	漆塗皿	中世後半	ブナ属の一種	46	曲物側板	中世後半	ヒノキ科の一種
12	漆塗皿	中世後半	ブナ属の一種	47	舟形製品	中世後半	エゴノキ属の一種
13	漆塗皿	中世後半	ブナ属の一種	48	木錘	中世後半	リョウブ
14	漆塗皿	中世後半	ブナ属の一種	49	縄	中世前半	モミ属類似種
15	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	50	曲物蓋	中世後半	スギ
16	漆塗皿	中世後半	ブナ属の一種	51	曲物	中世後半	アスナロ類似種
17	漆塗小皿	中世後半	ブナ属の一種	52	不明	中世後半	クリ
18	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	53	串	中世前半	ヤマウコギ
19	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	54	柱根	中世後半	クリ
20	漆塗椀	中世後半	ブナ属の一種	55	柱根	中世後半	クリ
21	櫛	中世後半	イスノキ	56	柱根	中世後半	クリ
22	連歯下駄	中世後半	クリ	57	自然木	縄文以前	ブナ属の一種
23	連歯下駄	中世後半	クリ	58	自然木	縄文以前	エノキ属類似種
24	連歯下駄	中世後半	クリ	59	曲物底板	中世後半	スギ
25	連歯下駄	中世後半	クリ	60	箸	中世前半	モミ属の一種
26	下駄歯	中世後半	ケヤキ	61	箸	中世前半	モミ属の一種
27	連歯下駄	中世後半	クリ	62	箸	中世前半	モミ属の一種
28	下駄歯	中世後半	ヤマグワ	63	箸	中世前半	モミ属の一種
29	差歯下駄	中世後半	モクレン属の一種	64	箸	中世前半	モミ属の一種
30	下駄歯	中世後半	ケヤキ	65	箸	中世前半	モミ属の一種
31	下駄歯	中世後半	ケヤキ	66	箸	中世前半	モミ属の一種
32	下駄歯	中世後半	ケンポナシ	67	箸	中世前半	モミ属の一種
33	不明	中世後半	クリ	68	自然木	縄文以前	ツタウルシ
34	曲物底	中世後半	アスナロ	69	自然木	縄文以前	ヤナギ属の一種
35	曲物蓋	中世前半	ケヤキ	70	自然木	縄文以前	ヤナギ属の一種

表2　中田南遺跡試料の主な用途別樹種構成（類似種としたものも各樹種に含めた）

種類＼用途	漆器	下駄	曲物	箸	柱	木錘	木簡	その他	自然木	合計
モミ属				8			1	1		10
スギ			4				1			5
アスナロ			2							2
ヒノキ科			2							2
ヤナギ属									2	2
ブナ属	20					1			1	22
コナラ節								2		2
クリ		5			3			3		11
エノキ属類似種									1	1
ケヤキ		3	1							4
ヤマグワ		1								1
モクレン属		1								1
イスノキ								1		1
ツタウルシ									1	1
アワブキ						1				1
ケンポナシ		1								1
ヤマウコギ								1		1
リョウブ						1				1
エゴノキ属								1		1
合　計	20	11	9	8	3	3	2	9	5	70



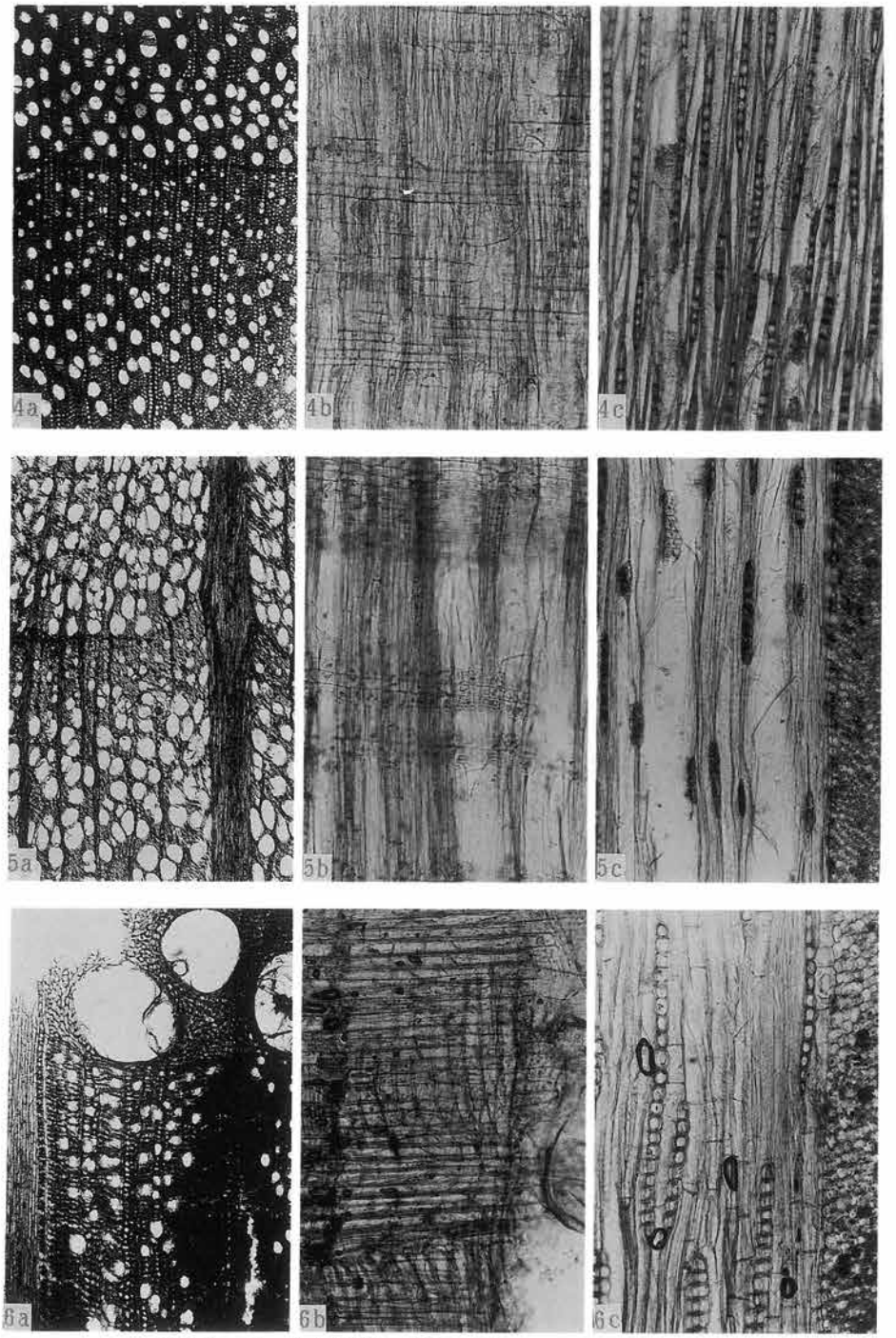
図版1　1．モミ属の一種　No.63

2．スギ　No.37

3．アスナロ　No.34

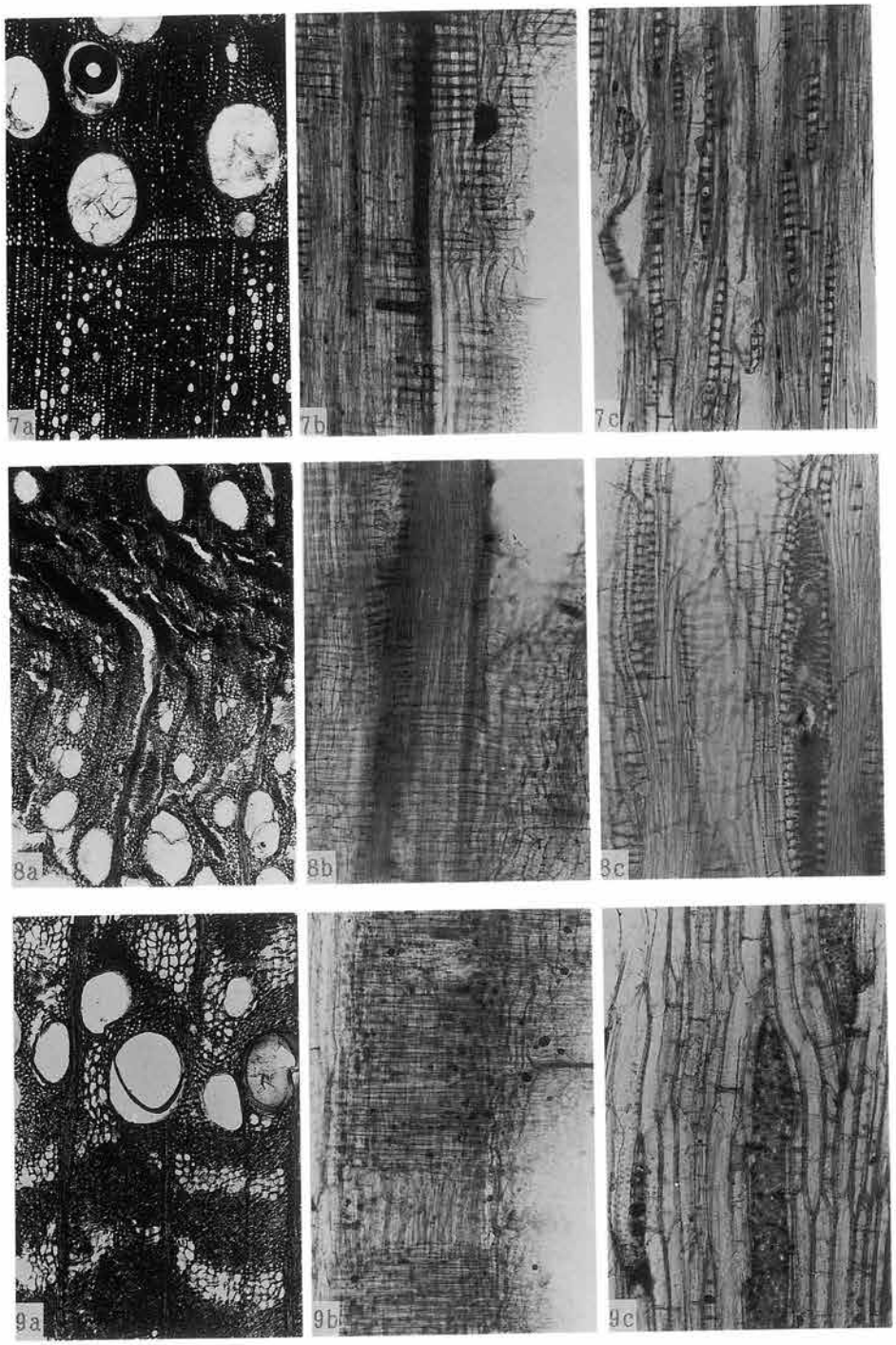
a：木口×40　b：柾目×100　c：板目×100

樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上、柾目では左から右



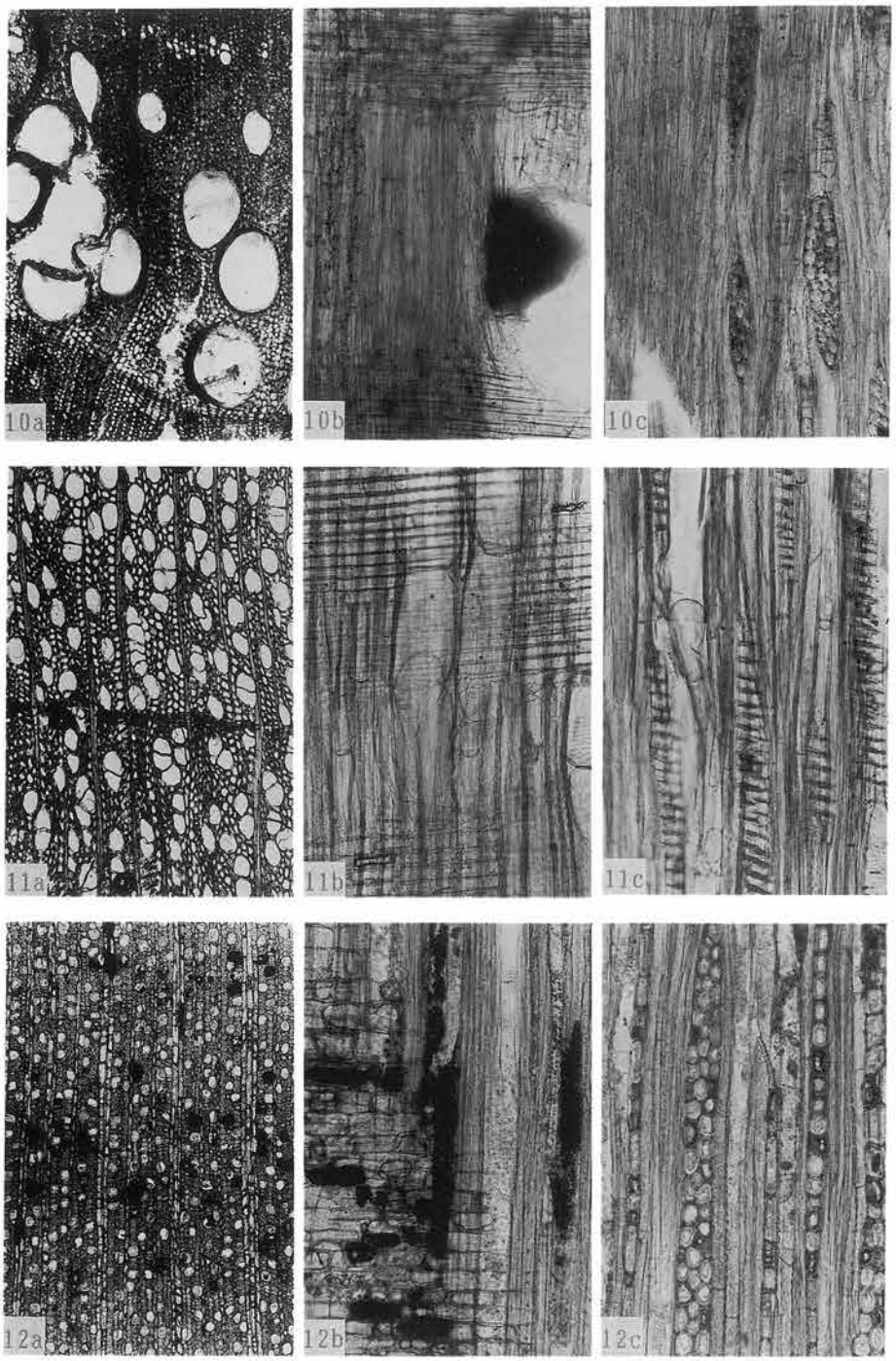
図版２　４．ヤナギ属の一種　No.70
５．ブナ属の一種　No. 8
６．コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種　No.44

a：木口×40　b：柾目×100　c：板目×100
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上、柾目では左から右



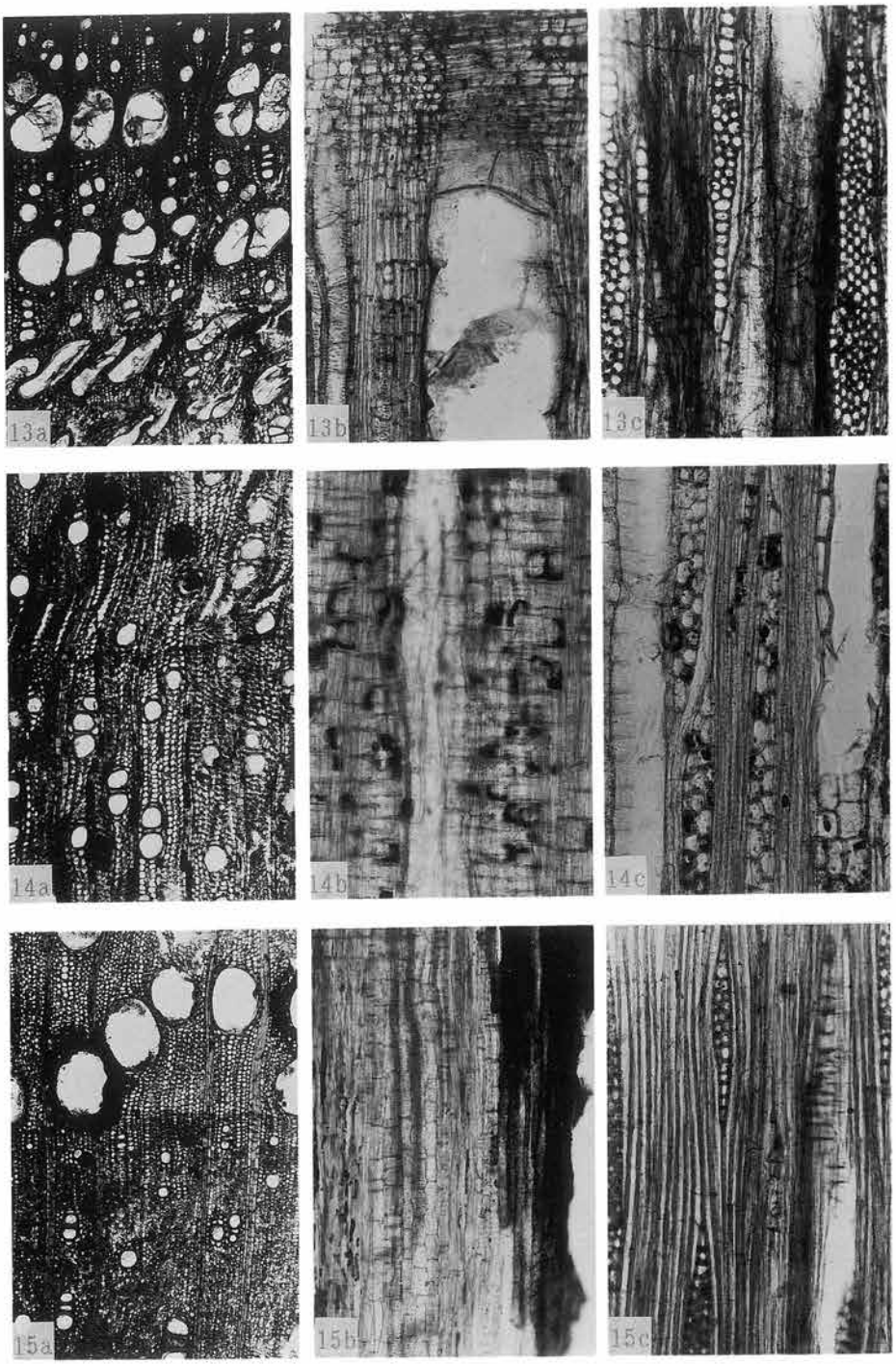
図版３　７．クリ　No.25
８．エノキ属類似種　No.58
９．ケヤキ　No.30

ａ：木口×40　ｂ：柾目×100　ｃ：板目×100
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上、柾目では左から右



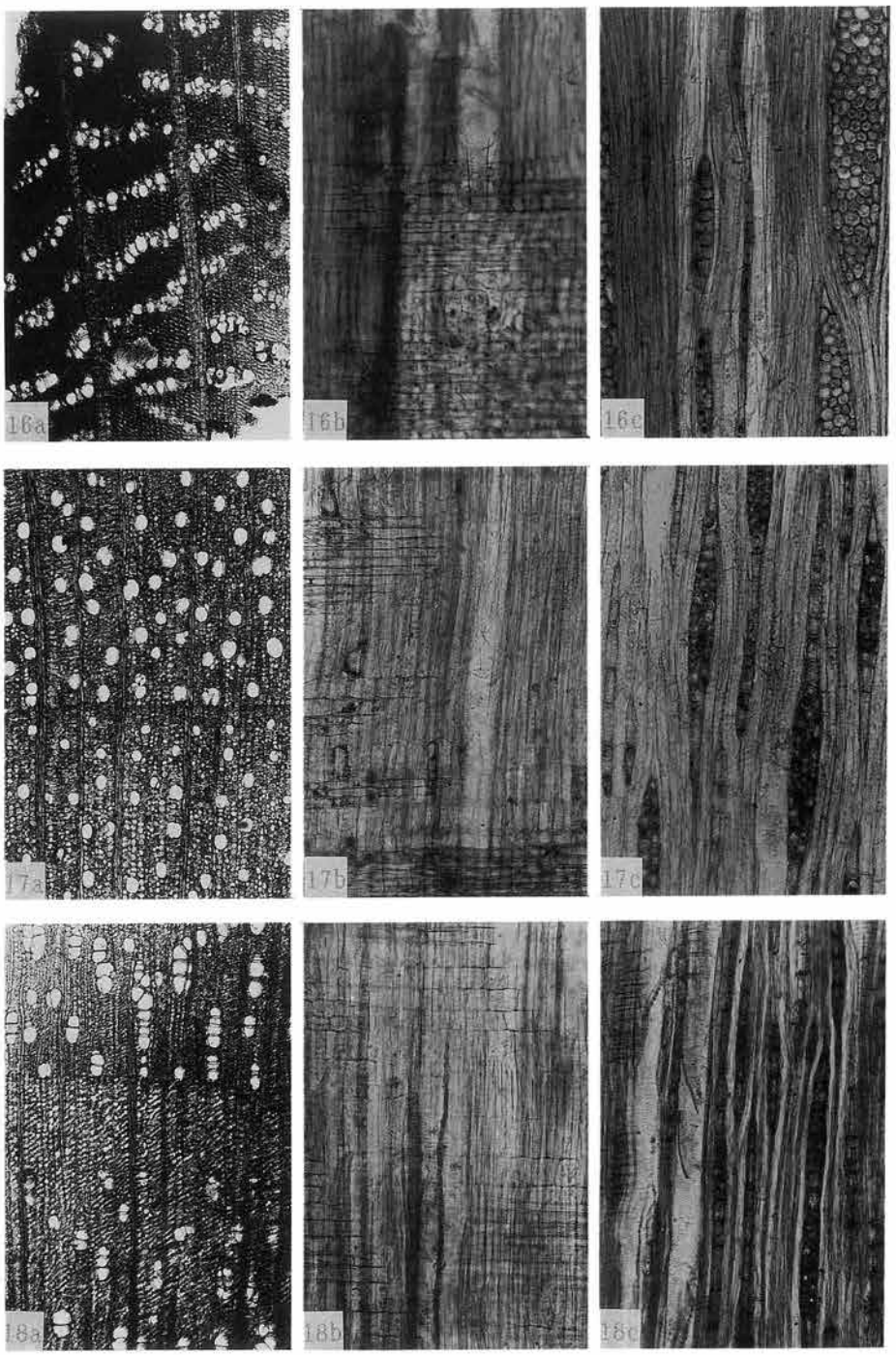
図版4　10．ヤマグワ　No.28
11．モクレン属の一種　No.29
12．イスノキ　No.21

a：木口×40　b：柾目×100　c：板目×100
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上、柾目では左から右



図版5　13．ツタウルシ　No.68
14．アワブキ　No.38
15．ケンポナシ　No.32

a：木口×40　b：柾目×100　c：板目×100
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上、柾目では左から右



図版6　16．ヤマウコギ　No.53
17．リョウブ　No.48
18．エゴノキ属の一種　No.47

a：木口×40　b：柾目×100　c：板目×100
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上、柾目では左から右

4．中田南遺跡出土の人骨と脊椎動物遺存体

獨協医科大学第一解剖学教室　茂原信生・芹澤雅夫

I）はじめに

中田南遺跡は仙台市太白区中田南７丁目地内にある遺跡で、仙台市教育委員会によって平成４年に発掘された。本報告で扱うのはおもに中世から出土した人骨と脊椎動物骨である。出土した人骨はすべて焼かれている。一方、獣骨は焼かれているものはほとんどなく、一部のカマドの堆積物からは焼かれた獣骨が出土している。獣骨の保存状態はよい。

II）出土人骨の特徴（表１，写真１）

１）第１号火葬墓（II区）

頭蓋骨片、下顎骨片、歯、橈骨片、指骨、大腿骨片などが出土している。重複する部分はない。全量はさほど多くない。また、一般に火葬骨では残りのよい四肢骨の骨幹部分が少ない。四肢骨体に波型の亀裂が見られるので、軟組織がついたまま火葬されたものであろう。部分的に不完全にしか灰化しておらず黒みがかった部分もあるので、さほど高温で火葬されたものではない。出土総重量は240グラムである。

頭蓋冠には比較的鋭い鋸歯状の縫合が明瞭に認められる。さほど高齢ではなかったと考えられる。下顎骨は左右の臼歯部歯槽が出土しているがどちらも第３大臼歯は脱落して歯槽が閉鎖している。とくに右は脱落してさほど時間が経過していないようである。上顎右第１大臼歯と思われる歯冠が残っている。咬耗はあまり進んでおらず、少なくとも頬側の咬頭の象牙質は露出していない。咬耗度はモルナー（1971）の３程度であったと思われる。他に大腿骨の後面が出土している。粗線はやや幅を持った稜をなしている。骨はさほど厚くない。

この個体は、重複する部分が見られないので一体分の可能性が高い。しかし総量は少ないので、骨壷に納められた後に残った部分の可能性がある。歯の萌出状況や橈骨の近位骨端が骨幹と癒合していることなどから判断して成人には達していたと思われるが、頭蓋骨の縫合や歯の磨耗があまり進んでいなかったことを考えると壮年程度と推測される。やや筋が発達しており、大臼歯歯冠も大きいので男性の可能性が高い。

２）第２号火葬墓（II区）

寛骨片と考えられるもの１点が出土している。腸骨稜の骨端が癒合しているので成人であろう。詳細は不明である。

3）第3号火葬墓（IV区）

頬骨片、側頭骨の錐体と下顎窩、歯根、第2頚椎、上腕骨片、脛骨片、指骨などが出土している。骨幹には波型の亀裂が認められるのでやはり軟組織がついたままで火葬されたものである。灰化の状態は第1号火葬墓のものよりもよい。出土総重量は440グラムである。

側頭骨の錐体は、普通の大きさである。頭蓋冠の骨はやや厚目である。歯根は下顎の第2あるいは第3大臼歯のものも含めて数点出土している。下顎犬歯の象牙質歯冠部の状態から考えるとあまり咬耗は進んでいたようには思えない。上腕骨の外側縁はよく発達して稜状にはり出している。太さは中程度である。右脛骨の栄養孔部では後面の鉛直線がよく発達しているようである。これらの特徴は筋が比較的発達していたことを示している。

この個体は成人であることはまちがいないが、さほど高齢ではないと思われる。性別は不明であるが、男性の可能性が高い。

4）それ以外の人骨

VII－SD78区の堆積土4、5層中から頬骨片、下顎骨片、歯が出土している。これらも焼かれたものである。総重量は15グラムである。

下顎骨は右の切歯から第2大臼歯にかけての歯槽である。この部分に抜歯はない。オトガイ孔は第1小臼歯と第2小臼歯の間に位置する。上顎の第2小臼歯は歯冠頬側半が残っており、やや咬耗している。これらの焼骨は同一個体かどうか、あるいは性別などの詳細は不明である。

III）出土獣骨の特徴（表2）

獣骨は焼かれたものはほとんどない。焼かれていないものは、水分の多い状態で埋まっていたことを示す藍鉄鉱（ビビアナイト）が付着しているものが多い。保存状態は良好である。出土したのは以下の2綱5目7科8種である。計測はDriesch（1976）にしたがった。

1）出土獣骨のリスト

鳥綱　Aves

コウノトリ目　Ciconiiformes

コウノトリ科　Ciconidae

コウノトリ　*Ciconia* sp.

キジ目　Galli

キジ科　Phasianidae

キジの一種　*Phasianus* sp.

哺乳綱　Mammalia

奇蹄目　Perissodactyla

ウマ科　Equidae

ウマ　*Equus* caballus

偶蹄目　Artiodactyla

イノシシ科　Suidae

イノシシ（あるいはブタ）　*Sus scrofa*

シカ科　Cervidae

ニホンジカ　*Cervus nippon*

ウシ科　Bovidae

ウシ　*Bos taurus*

食肉目　Carnivora

イヌ科　Canidae

イヌ　*Canis familiaris*

タヌキ　*Nyctereutes procyonoides*

2）種別にみた特徴

以下に出土した骨の特徴などについて動物種別に記載する。

鳥類（写真2－6，7）

コウノトリと思われるものの右中足骨と、キジの仲間のほぼ全身骨格が出土している。どちらも中世のものである。コウノトリと思われるものの中足骨は井戸の跡から出土している。近位部が欠けている。現生の翼長610㎜の標本（国立科学博物館蔵）とほぼ同大である。現生のものよりもやや近位部が太いようである。キジの仲間はほぼ全身の骨格が出土している。現生のヤマドリよりも大きく、コウライキジとほぼ同大である。

哺乳類

①ウマ（表3，写真3）

ウマは中世後半の地層からの出土が多い。歯、指骨、踵骨、上腕骨、ならびに骨盤などが出土している。

左上腕骨は完形である。遠位部の関節部およびその上部に解体痕と思われる切痕が多数観察される。内・外両面にあるがとくに内側が多い。食用に供されたものであろう。最大長（推定）は268㎜で、現生のトカラウマ（オス）の260.7㎜とほぼ同じ大きさで、御崎馬（284.2㎜）や木曽馬（293.3㎜）のオスよりも小さい（西中川・松元：1991）。寛骨はほぼ完全な形で出土している。骨端部分は食肉類、とくにイヌと思われる動物による咬痕が多数見られ、寛骨のうちでも噛みやすい端の部分は消失している。咬痕から判断すると噛んだのはさほど大型のイヌではない。坐骨体最小幅（SBI）は84.0㎜で日本の小型ウマであるトカラウマのオスの92.6㎜よりも小

さい。最大寛骨臼間幅（GBA）は 196.5㎜でやはりトカラウマのオスの200.4㎜よりも小さい。基節骨最大長（GL）は72㎜で、トカラウマとほぼ同じ大きさであり、中型の御崎馬や木曽馬よりも小さい。全体に渡ってイヌによると思われる咬痕がある。

出土した歯に重複は見られないが同一個体のものであるかどうかは不明である。歯の大きさは他に出土した四肢骨が小型馬相当の大きさであるのに反し、上顎歯はトカラウマよりも大きめである。小型馬の歯としては大きい。しかし、中型の御崎馬の歯よりはやや小さめである。

林田・山内（1957）の推定式を用いて上腕骨の最大長から計算された体高は 124.2cmである。木曽馬の体高133.54cmより小さく、トカラウマの110～120cmとほとんど変わらない。小型の馬である。仙台城三ノ丸から出土した近世（明治時代）の馬は、体高が 144cmで明らかに中田南遺跡の馬よりも大きい（茂原・馬場：1985）。

②イノシシ（あるいはブタ）

カマドの堆積物から焼かれた基節骨遠位部が出土している。詳細は不明である。

③ニホンジカ（写真２－５）

右大腿骨遠位部骨幹、脛骨遠位半、および仙椎が出土している。仙椎は癒合しておらず若い個体である。脛骨の遠位半は大きく頑丈である。遠位端最大径（Bd）は35.3㎜で現生ニホンジカの最大級のものと同大である。ちなみに獨協医科大学所蔵のもっとも大きなニホンジカオスの遠位端最大径は31.6㎜で、その最大長は282㎜である。この個体はそれよりさらに大きい。

③ウシ

上顎左第１大臼歯１本だけが出土している。咬耗が進んでおり老齢と思われる。歯の大きさは近遠心径が26.4㎜、頬舌径が24.3㎜である。

⑤イヌ（写真２－１～３）

出土した大腿骨、脛骨、中足骨に切痕や咬痕は見られない。大腿骨の遠位骨端幅が30.5㎜で、縄文時代犬（田柄貝塚犬；茂原他：1984）のオス（27.5㎜）やメス（25.9㎜）よりも大きく、また、仙台城三ノ丸（茂原・小野寺：1985）から出土した17世紀のイヌのオス（29.3㎜）よりもやや大きい。脛骨は最大長が 171.8㎜で縄文時代犬のオス（141.8㎜）や仙台城三ノ丸のイヌ（166㎜）よりもかなり大きく、この最大長から山内（1958）の推定式を用いて計算される体高は47cmである。長谷部（1952）の型区分によれば中大級のイヌに属している。頭蓋骨最大長が190～195㎜程度のイヌであろう。中世のイヌとしてはやや大きめである。

⑥タヌキ（写真２－４）

第12胸椎が出土している。焼かれておらず、また切痕なども見られない。

IV) まとめ

人骨は2体分とそれ以外の少量の骨片が出土している。これらは火葬されたもので、量的に、また残っている部分を見ても火葬された全骨格が残っているのではなく、火葬されて取り上げられた残りである可能性が高い。1号墓、3号墓ともにさほど高齢ではない成人の男性と考えられる。2号墓は成人であるが性別は不明である。

脊椎動物遺存体は焼かれたものはごく少ない。鳥類の2種と哺乳動物6種が同定された。ウマは小型馬、イヌは中大級の中世としてはやや大きめのイヌである。ウマの骨には解体痕やイヌによる咬痕が認められた。

本報告書をまとめるにあたり、当教室の櫻井秀雄氏に写真撮影をお願いした。心から感謝いたします。

V) 参考文献

Driesch, A. von den (1976)：A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Mus. Bull, 1：1～137.

長谷部言人 (1952)：犬骨．埋蔵文化財発掘調査報告第一号「吉胡貝塚」，文化財保護委員会，146～150.

林田重幸・山内忠平 (1957)：馬における骨長より体高の推定法．鹿児島大学農学部学術報告№6；146～156.

林田重幸 (1978)：日本在来馬の系統に関する研究．日本中央競馬会、Pp.180.

Molnar, S. (1971)：Human Tooth Wear, Tooth Function and Cultural Variability. Amer. J. Phys. Anthrop., 34：175～190.

西中川　駿(1991)：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究．平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書；Pp.197.

茂原信生・小野寺　覚 (1984)：田柄貝塚出土の犬骨について．人類学雑誌92(3)：187～210.

茂原信生・小野寺　覚 (1985)：仙台城三ノ丸跡出土の17世紀犬骨について．仙台市文化財調査報告書第76集，仙台市教育委員会；547～559.

茂原信生・馬場悠男 (1985)：仙台城三ノ丸跡出土の馬骨．仙台市文化財調査報告書第76集，仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書，547～567.

山内忠平 (1958)：犬における骨長より体高の推定法．鹿児島大学農学部学術報告，№7；125～131.

表1　中田南遺跡出土の人骨の部位別リスト

地区	遺構	層位	時代	骨名	部位	左右	上下	備考
Ⅶ SD 78		堆積土 4,5	中世	頬骨		右		
				下顎骨	I1-M2 歯槽	右		
				歯	P2	不明	上	やや咬耗している
				歯	M1 あるいは M2	左？	上	歯冠エナメル質脱落
Ⅱ	第1号火葬墓		中世？	頭蓋骨	上顎骨 P1-M1 歯槽	左		
				頭蓋骨	上顎骨前頭突起	右		
				頭蓋骨	頭蓋冠	不明		縫合あり（鋸歯状明瞭）
				下顎骨	M2-M3 歯槽	右		M3 生前脱落
				下顎骨	M2-M3 歯槽	左		M3 生前脱落
				下顎骨	下顎枝後縁部	左		関節頭から下顎角まで
				歯	M1	右	上	歯冠エナメル質頬側半（咬耗軽微）
				歯	M2	左	上	歯冠エナメル質脱落
				歯	歯根片			合計12片あまり
				橈骨	近位端	不明		骨頭は大きめ
				手指骨				2点
				大腿骨	粗線部	不明		
				大腿骨	粗線部	不明		幅5㎜ほどの稜を形成
				大腿骨	遠位関節面	不明		成人
Ⅱ	第2号火葬墓		中世？	寛骨片？		不明		寛骨片と考えられるもの
Ⅳ	第3号火葬墓		中世？	頭蓋骨	頬骨	左		頑丈ではない（25番よりきゃしゃ）
				頭蓋骨	頭蓋冠	不明		3片
				頭蓋骨	側頭骨錘体部	左右		
				頭蓋骨	側頭骨下顎窩	右		
				歯	歯根のみ			5点（下顎大臼歯を含む）
				椎骨	第2頚椎			前半部（歯突起）
				上腕骨	遠位骨幹	左		内側縁が発達
				上腕骨	遠位関節面	右		
				中手骨	第2	右		
				手指骨	基節骨			1点
				手指骨	中節骨			2点
				脛骨	脛骨粗面部	右		
				脛骨	後面栄養孔部	右		
				足指骨	基節骨			3点
				足指骨	末節骨（第一指）			1点

表2　中田南遺跡出土の動物骨および人骨の種別リスト

地区	遺構	層位	時代	種名	骨名	部位	左右	上下	状態	備考
Ⅶ SE 8	井戸跡	堆積土 3	中世後半	トリ	中足骨	近位部欠	右		F	コウノトリ？
Ⅷ SE 7		堆積土 5	中世後半	トリ	ほぼ全身骨格				C	キジの仲間
Ⅶ SD 61		堆積土 6	中世後半	イヌ	脛骨		左		C	
Ⅶ SD 61		堆積土 6	中世後半	イヌ	中足骨	II	右		C	
Ⅶ SD 61	南北セクション	堆積土 10	中世後半	イヌ	大腿骨	遠位半	右		F	成獣
Ⅵ	第1堀	堆積土 3,4	中世後半	タヌキ	椎骨	12胸椎			C	
Ⅲ SI 13	カマド	堆積土	古墳後期	イノシシ	基節骨	遠位端	不明		F 焼骨	あるいはブタ
Ⅶ SD 23		堆積土	中世前半	ウマ	歯	M3	左	上	F	破片，他の歯も含まれている
Ⅶ SD 23		堆積土 2	中世前半	ウマ	歯	P or M	左	上	F	破片
Ⅶ SD 59		堆積土 2	中世後半	ウマ	歯	M3	右	上	C	さほど高齢ではない
Ⅶ SD 59		堆積土 2	中世後半	ウマ	歯	P4	左	上	C	さほど高齢ではない
Ⅶ SD 59		堆積土 2	中世後半	ウマ	歯	M1	左	上	C	さほど高齢ではない
Ⅶ SD 61	南北セクション	堆積土 5	中世後半	ウマ	歯	M3	左	下	C	歯根部破損，さほど高齢ではない
Ⅶ SD 61		堆積土 6	中世後半	ウマ	歯	M1	右	下	C	咬耗かなり進んでいる
Ⅶ SD 61		堆積土 6	中世後半	ウマ	歯	P2	左	下	C	咬耗顕著
Ⅶ SD 61		堆積土 6	中世後半	ウマ	基節骨		不明		C	咬痕あり
Ⅶ SD 61		堆積土 6	中世後半	ウマ	踵骨		右		F	咬痕あり
Ⅶ SD 61	南北セクション	堆積土	中世後半	ウマ	上腕骨	骨幹	右		F	
Ⅶ SD 78		堆積土 9	中世後半	ウマ	上腕骨		左		C	切痕あり
Ⅶ SD 61	南北セクション	堆積土 10	中世後半	ウマ	寛骨		左右		C	成獣，咬痕多数あり
Ⅶ SD 59		堆積土 2	中世後半	ウシ	歯	M1	左	上	C	老齢か？
Ⅴ	第4堀	堆積土 3	中世後半	ニホンジカ	大腿骨	遠位骨幹	右		F	No11は大腿骨の破片であろう
Ⅵ	第4堀	堆積土 2	中世後半	ニホンジカ	脛骨	遠位半	左		F	藍鉄鉱あり
Ⅶ SD 61	南北セクション	堆積土 1,2	中世後半	ニホンジカ	椎骨	仙椎右半			F	若い個体
Ⅶ SD 78		堆積土 4,5	中世後半	ヒト					焼骨	
Ⅱ	第1号火葬墓		中世	ヒト					焼骨	
Ⅱ	第2号火葬墓		中世	ヒト					焼骨	
Ⅱ	第3号火葬墓		中世	ヒト					焼骨	

表3　仙台中田南遺跡出土の馬歯の計測値と比較資料（単位㎜）（歯冠エナメル質を計測した）

上顎歯

遺跡名・標本番号	時代	型	P2		P3		P4		M1		M2		M3		
			m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	
仙台中田南遺跡	中世	小型	—	—	—	—	29.0	27.3	27.4	27.4	—	—	25.9	22.1	
百間川沢田遺跡	中世		34.0	23.1	26.2	26.9	25.0	25.0	23.2	24.0	22.9	24.2	24.5	20.6	金子(1985)
上東遺跡(倉敷市)	古墳		30.5	14.7	26.5	16.0	25.0	16.0	24.0	16.0	25.0	13.0	27.0	12.0	林田・他(1974)
藤原京(第25次)	中世		36.0	23.2	28.0	25.0	27.4	24.8	24.6	25.6	26.6	23.8	24.0	21.2	土肥(1983)
トカラ馬	現生	小型	31	14	27	16	25	15.5	24	15	25	13	26	11	

下顎歯

遺跡名	時代	型	P2		P3		P4		M1		M2		M3		
			m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	
仙台中田南遺跡	中世		28.4	12.5	—	—	—	—	22.8	12.5	—	—	31.6	11.2	
埼玉県朝霞市根岸	土師期	中型	33.5	16.9	28.0	17.7	26.4	17.0	25.2	16.4	24.5	15.4	30.3	12.9	直良(1973)
大阪四条畷市古墳	古墳時代	中型	35.0	14.9	29.4	15.4	29.4	15.0	26.8	14.3	29.3	13.8	28.8	11.4	直良(1984)
神奈川県秦野市今泉	江戸末期						24.3	15.3	22.4	15.0	21.8	15.9	29.0	11.9	直良(1984)
トカラ馬(5歳)	現生	小型	27	14.7	25	15.5	23.5	16	22	14	22	14	26	12	林田(1978)
御崎馬(25歳？)	現生	中型	30	15	24	15	24	15	21	14	22	13	29.5	12	林田(1978)
御崎馬(3.5歳)	現生	中型	33	16.4	30.8	19.3	29.5	19	27	16	31	16.8			林田(1978)

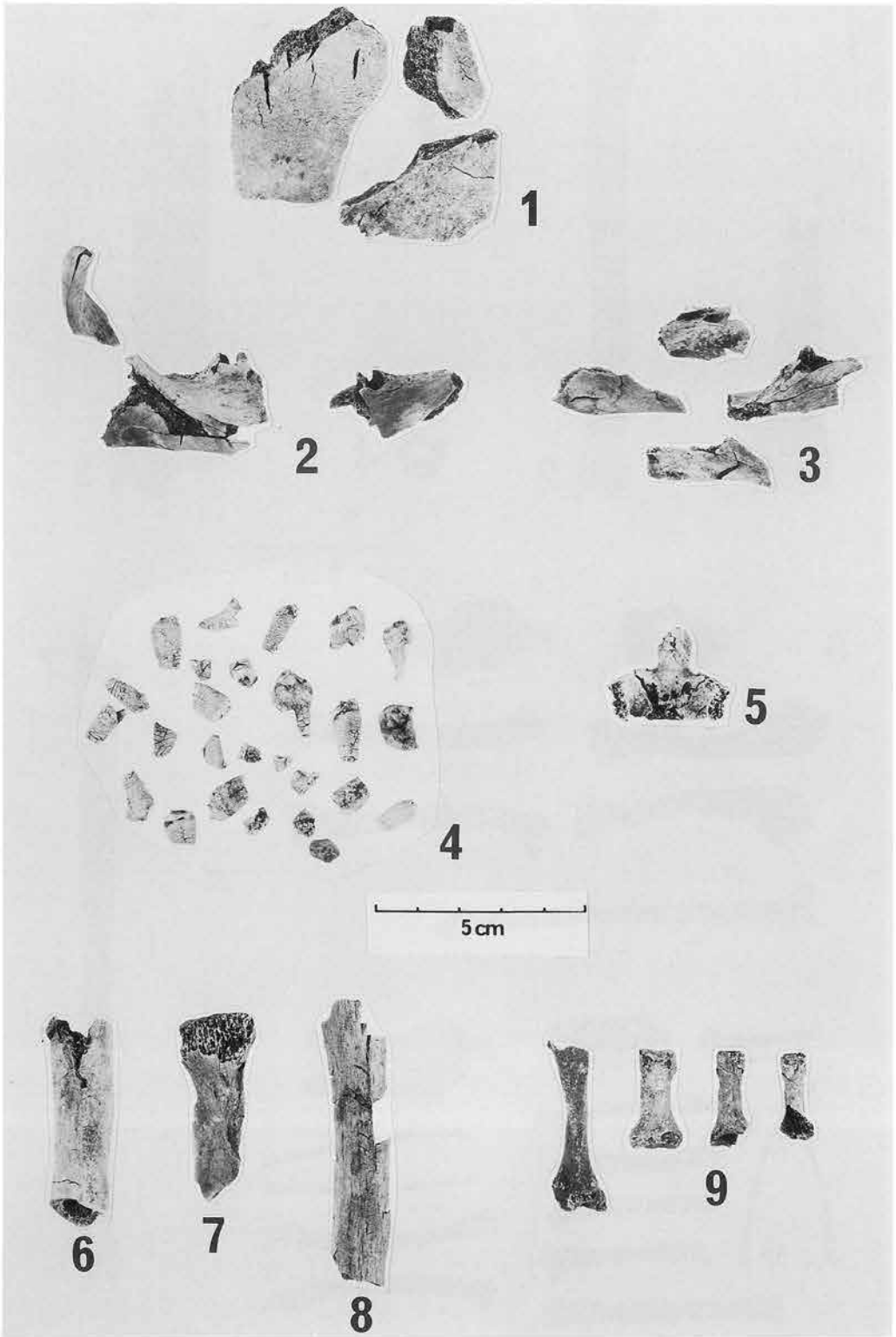


写真１：中田南遺跡出土の人骨

１：頭蓋骨片，２：下顎骨右半外側面，３：下顎骨片，４：歯の破片，５：第２頚椎（軸椎）歯突起，６上腕骨，７：橈骨近位端，８：大腿骨後面，９：指骨

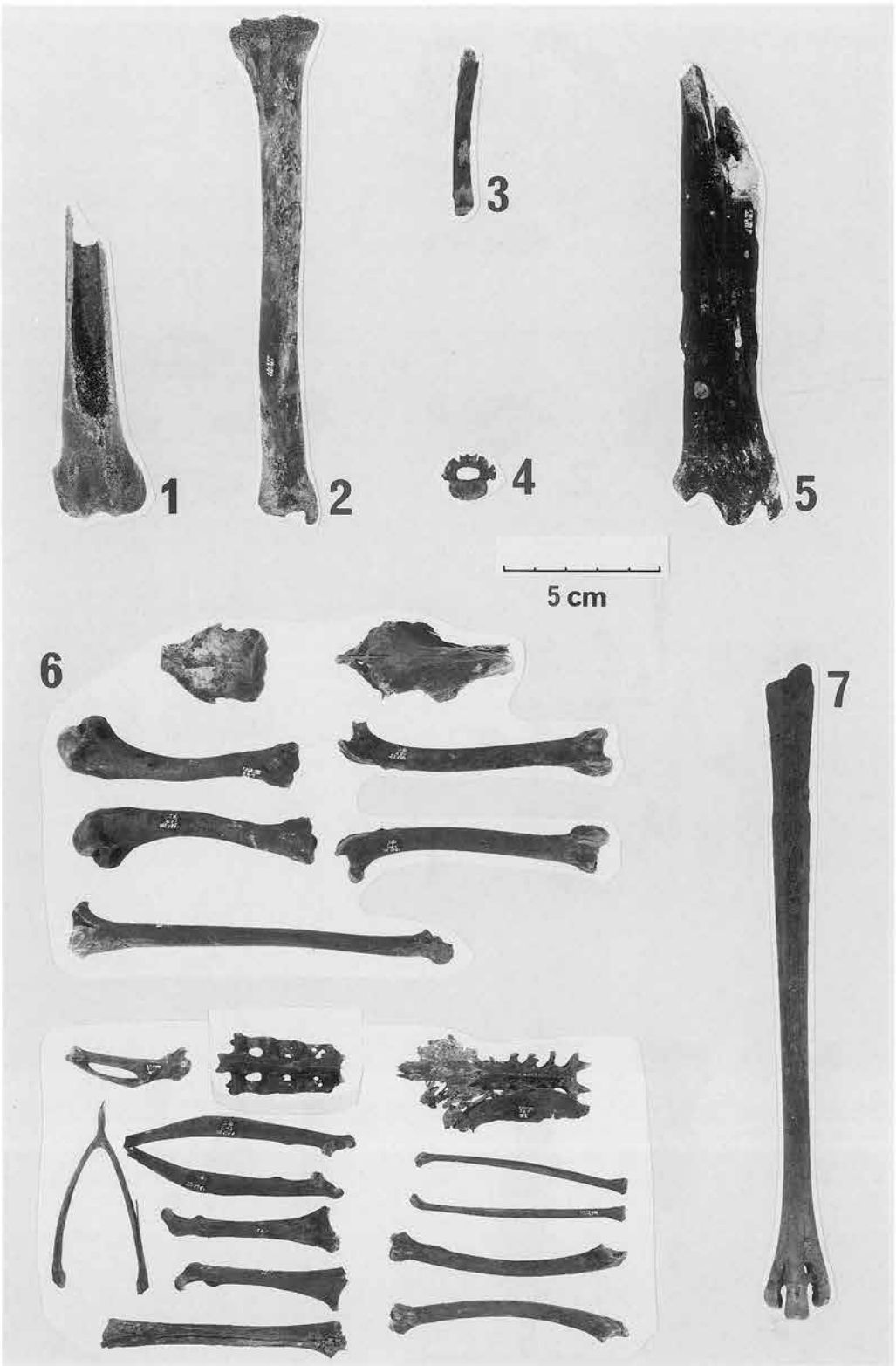


写真２：中田南遺跡出土の脊椎動物遺存体

１：イヌ大腿骨遠位部，２：イヌ右脛骨，３：イヌ中足骨，４：タヌキ胸椎，５：ニホンジカ脛骨，６：キジの仲間，７：コウノトリと思われる中足骨

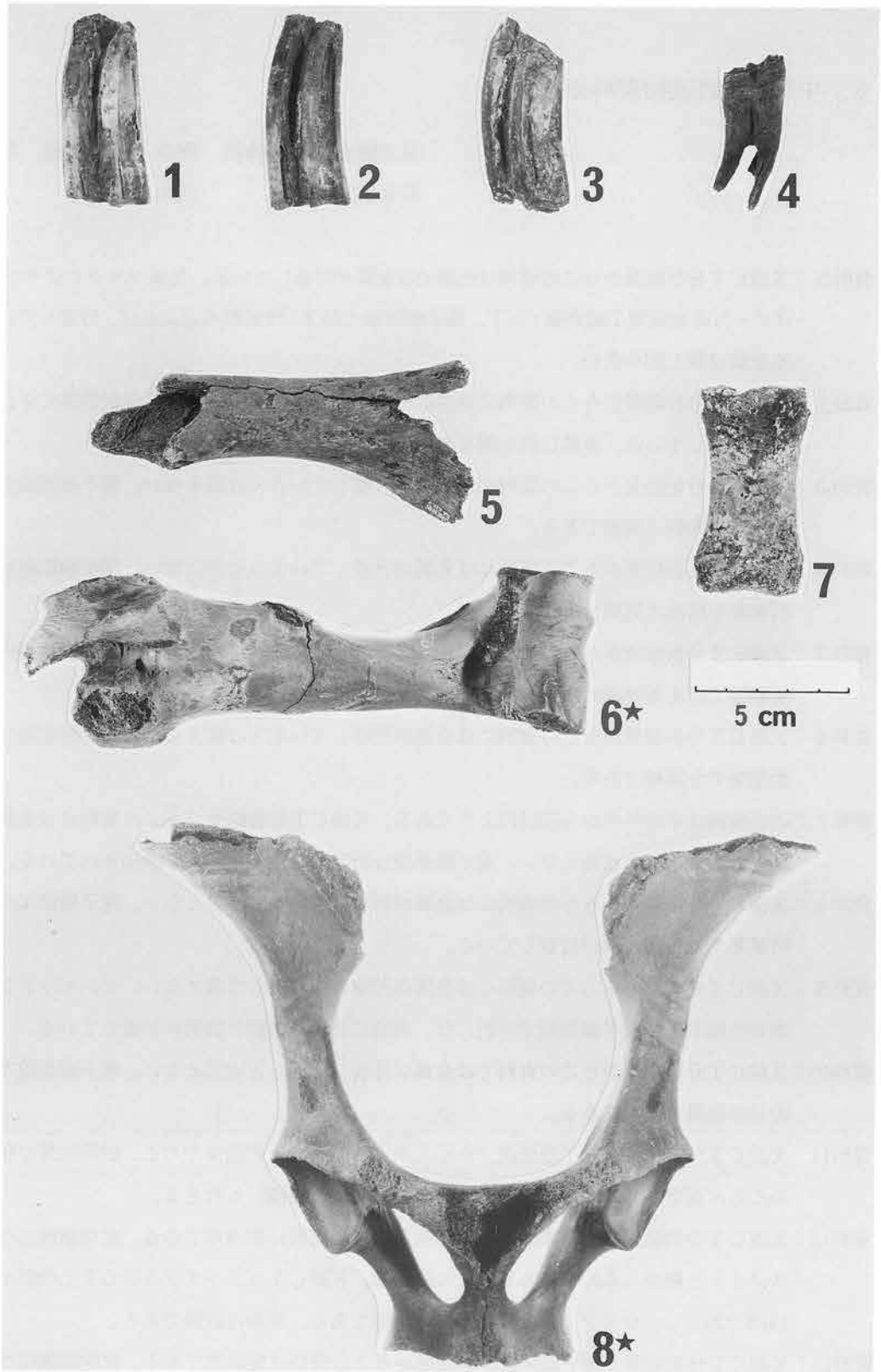


写真３：中田南遺跡出土のウマの歯と四肢骨

１：上顎左第４小臼歯，２：上顎左第１大臼歯，３：上顎右第３大臼歯，４：下顎右第１大臼歯，５：右上腕骨前面，６：左上腕骨前面，７：基節骨上面，８：寛骨前面

5．中田南遺跡遺物資料分析結果

国立歴史民俗博物館　田口　勇・斎藤　努
東京工業大学　　高塚秀治

資料１：Ｘ線ＣＴ分析結果からこの資料は土器には金属が付着している。Ｘ線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡（以下、電子顕微鏡と略す）分析結果によれば、付着している金属は鉄と銅を含む。

資料２：Ｘ線ＣＴ分析結果からこの資料には金属が付着している。電子顕微鏡分析結果によれば、付着している。金属は鉄と銅を含む。

資料３：Ｘ線ＣＴ分析結果からこの資料には金属が付着しているとは言えない。電子顕微鏡分析結果も同様の結果である。

資料４：Ｘ線ＣＴ分析結果からこの資料には金属が付着しているとは言えない。電子顕微鏡分析結果も同様の結果である。

資料５：Ｘ線ＣＴ分析結果からこの資料には金属が付着しているとは言えない。電子顕微鏡分析結果では土器表面には多少の銅とビスマスが検出されている。

資料６：Ｘ線ＣＴ分析結果からこの資料には金属が付着しているとは言えない。電子顕微鏡分析結果でも同様である。

資料７：この資料はその外見から羽口のようである。Ｘ線ＣＴ分析結果からこの資料には金属が付着しているとは言えない。電子顕微鏡分析結果では多少の銅が検出されている。

資料８：Ｘ線ＣＴ分析結果からこの資料には金属が付着しているとは言えない。電子顕微鏡分析結果では表面に鉄が付着している。

資料９：Ｘ線ＣＴ分析結果からこの資料には金属が付着しているとは言えない。ピンセットで表面を採取して電子顕微鏡で分析した。表面には多少の銅と硫黄が付着している。

資料10：Ｘ線ＣＴ分析結果からこの資料では金属が付着しているとは言えない。電子顕微鏡での分析結果も同様である。

資料11：Ｘ線ＣＴ分析結果と電子顕微鏡分析結果からこの資料は製鉄滓である。鉱物組織は鉄かんらん石である。鍛冶滓（鋳物滓を含む、以下、同様）と考える。

資料12：Ｘ線ＣＴ分析結果と電子顕微鏡分析結果からこの資料は製鉄滓である。鉱物組織はウスタイトと鉄かんらん石である。この資料は、Ｘ線ＣＴヒストグラムのＣＴ上端値が1400であるし、ウスタイトの存在から鍛冶滓である。原料は砂鉄である。

資料13：Ｘ線ＣＴ分析結果と電子顕微鏡分析結果からこの資料は製鉄滓である。鉱物組織はウ

スタイトと鉄かんらん石が主で、わずかなウルボスピネルがある。437頁の電子顕微鏡像では、この資料に存在するわずかなウルボスピネルを示す。この資料は、X線CTヒストグラムのCT上端値が1400であるし、ウスタイトの存在から鍛冶滓である。原料は砂鉄である。

資料14：X線CT分析結果と電子顕微鏡分析結果からこの資料は製鉄滓である。鉱物組織は鉄かんらん石とわずかなウルボスピネルである。原料は砂鉄である。この資料のX線CTヒストグラムのCT上端値は1350であり、製錬滓と考えられず、鍛冶滓であろう。

資料15：X線CT分析結果と電子顕微鏡分析結果からこの資料は製鉄滓大である。鉱物組織の主体は鉄かんらん石と細かいウスタイトで、鍛冶滓である。

資料16：X線CT分析結果と電子顕微鏡分析結果から炉壁である。

資料17：X線CT分析結果と電子顕微鏡分析結果からこの資料は鋳が大部分で、わずかな製鉄滓が付着している。鉱物組織の主体は鉄かんらん石である。鍛冶滓と考える。

資料18：X線CT分析結果と電子顕微鏡分析結果からこの資料は製鉄滓である。CT上端値は1400であり、鉱物組織はウスタイトと鉄かんらん石なので、鍛冶滓と判定できる。

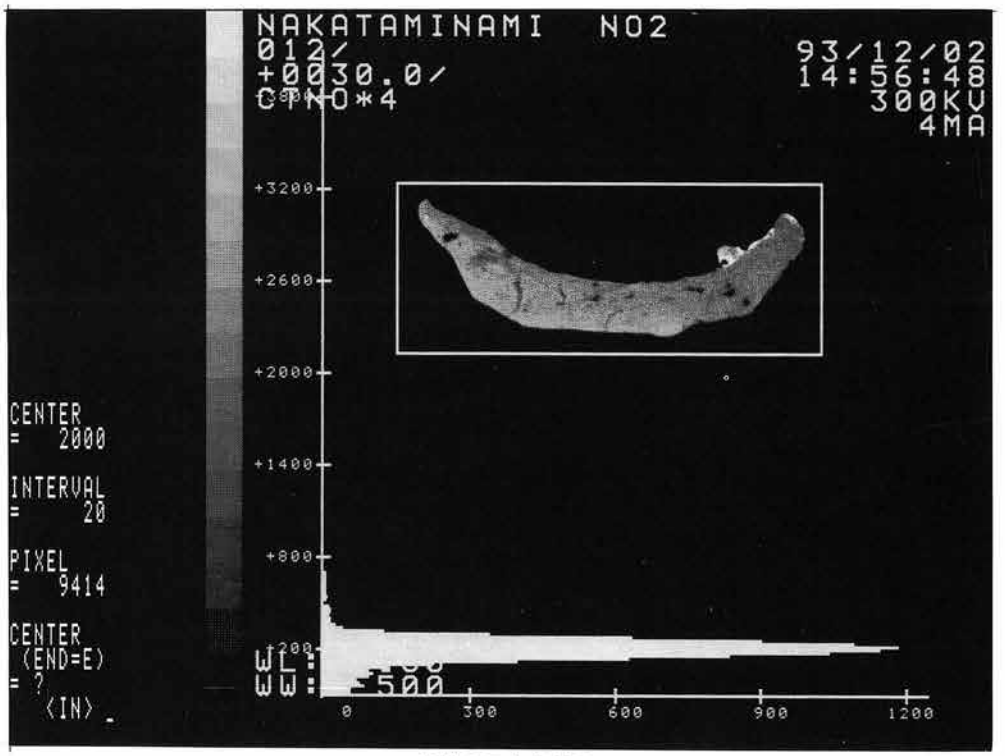
資料19：X線CT分析結果と電子顕微鏡分析結果からこの資料は製鉄滓である。鉱物組織は鉄かんらん石である。鍛冶滓と考える。

資料20：X線CT分析結果と電子顕微鏡分析結果からこの資料は製鉄滓である。鉱物組織は鉄かんらん石とウルボスピネルである。原料は砂鉄である。この資料のX線CT値ヒストグラムのCT上端値は1350であり、製錬滓と考えられず、鍛冶滓であろう。

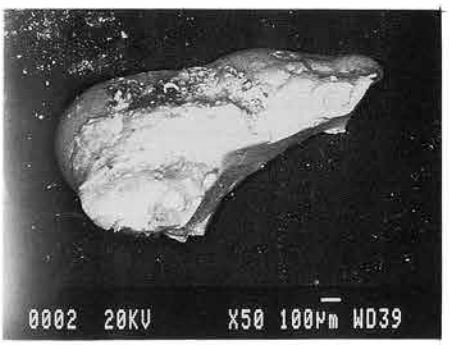
資料21：X線CT分析結果と電子顕微鏡分析結果からこの資料は製鉄滓である。鉱物組織は鉄かんらん石である。鍛冶滓と考える。

遺物資料一覧表

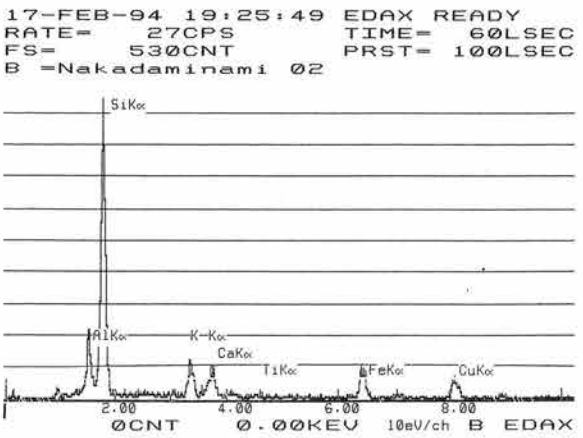
資料No.	種別（登録番号）	出土遺構層位	図版番号	資料No.	種別（登録番号）	出土遺構層位	図版番号
1	とりべ（ト－3）	第12号竪穴住居跡堆積土	第44図4 写真89－3	11	鉱滓	第4号竪穴住居跡堆2層	——
2	とりべ（ト－19）	第13号掘立柱建物跡Ｐ2柱痕跡	第89図3 写真89－1	12	鉱滓	第12号竪穴住居跡堆積土	——
3	とりべ（ト－17）	第20号ピット群Ｐ7堆3層	第112図8 写真89－15	13	鉱滓	鍛冶遺構土坑堆1・2層	——
4	とりべ（ト－22）	第17号竪穴住居跡住居掘り方埋土	第67図7 写真90－20	13	鉱滓	鍛冶遺構土坑堆6・7層	——
5	とりべ（ト－25）	第30号竪穴住居跡堆1層	写真90－21	15	鉱滓	鍛冶遺構土坑堆2層	——
6	とりべ（ト－55）	第32号竪穴住居跡堆積土	第75図6 写真90－23	16	鉱滓	鍛冶遺構土坑鍛冶炉堆1層	——
7	フイゴの羽口（土－36）	第11号竪穴住居跡堆積土	——	17	鉱滓	第27号竪穴住居跡住居掘り方埋土	——
8	フイゴの羽口（土－45）	第27号竪穴住居跡堆積土	——	18	鉱滓	第13号掘立柱建物跡Ｐ2柱痕跡	——
9	フイゴの羽口（土－41）	第1号堀跡堆2層	第170図5 写真94－7	19	鉱滓	第20号ピット群Ｐ7堆4層	——
10	フイゴの羽口（土－47）	第60号土坑底面	第153図8 写真94－1	20	鉱滓	第31号竪穴住居跡西半堆積土	——
				21	鉱滓	第32号竪穴住居跡堆2層	——



X線ＣＴ分析結果

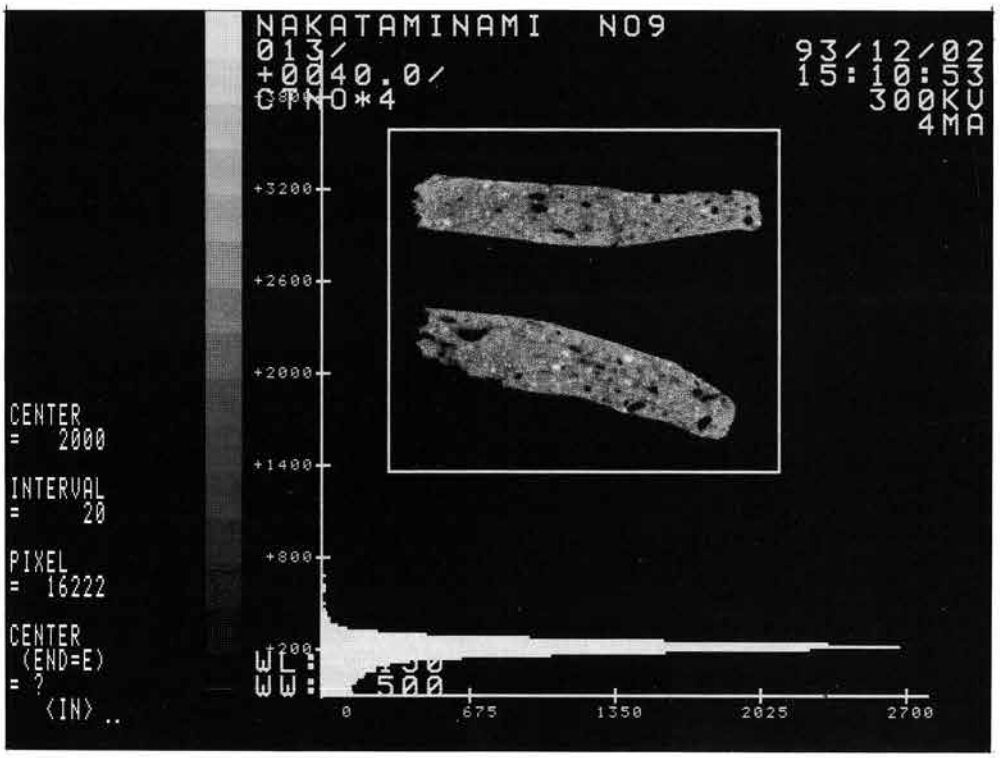


電子顕微鏡像



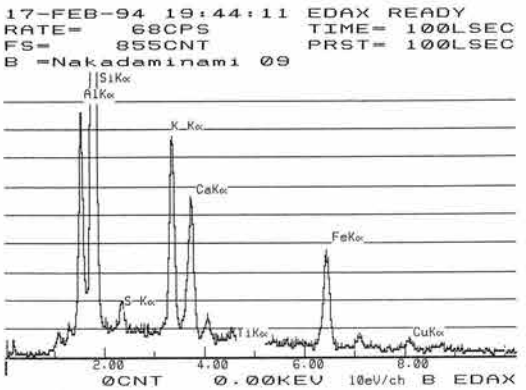
電子顕微鏡分析結果

資料 No.2



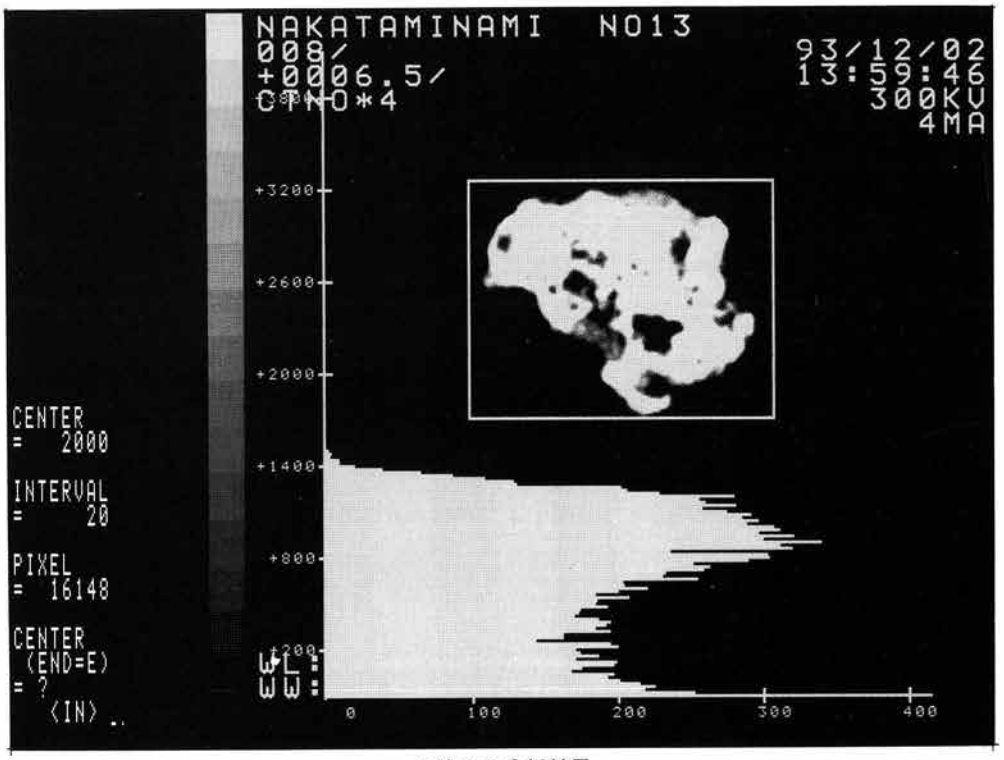
X線ＣＴ分析結果

電子顕微鏡像

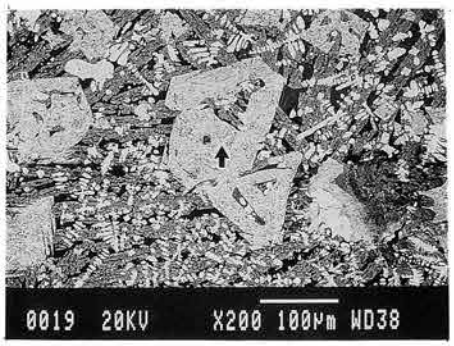


電子顕微鏡分析結果

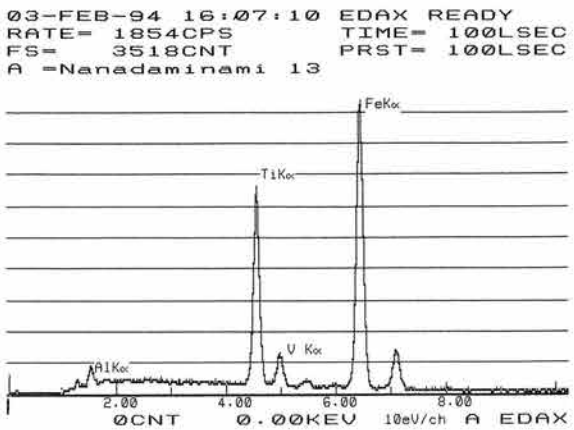
資料 No.9



X線ＣＴ分析結果



電子顕微鏡像



電子顕微鏡分析結果

資料 No.13

6．仙台市中田南遺跡より産した昆虫群集について

三重大学生物資源学部昆虫学研究室　森　勇一

Ⅰ．はじめに

日本のような湿潤な気候下で、しかも有機質に富む土壌中には外骨格がキチン質から成る昆虫の節片が多数保存されている。また昆虫は花粉や珪藻化石のような古生物資料にくらべ、死後の移動が少ないことから遺跡周辺の古環境の復元に有効である。筆者は、これまでに愛知県内外の遺跡の調査を通じて多くの昆虫化石を抽出し、古環境復元に役立つ指標性昆虫の特定と分析を行なってきた(森：1988、森：1989、森ほか：1990、森：1992、森ほか：1992、森ほか：1993)。小論では、中田南遺跡の遺物包含層中より保存良好な昆虫分析試料を得ることができたので、その概要を報告する。

Ⅱ．分析試料および昆虫化石群集

分析試料は中田南遺跡（92Ⅱ～Ⅷ区）の中世の屋敷地を区画する堀および溝・井戸中の堆積物（暗灰～灰黒色腐植質シルト層ないし粘土層）より採取されたものである。昆虫化石（昆虫遺体ともいう）の産出点数が必ずしも多くなく、しかも発掘調査時ならびに種子等の水洗選別作業の過程でとり上げられたものであるため、得られた昆虫化石の組成が当時の昆虫相を正しく反映しているとみることはできないが、屋敷地をめぐる古環境（とくに植生）を考えるうえで重要な資料を提供する。なお、本論に示した昆虫化石の点数はいずれも節片ないし破片数であり、生息していた昆虫の個体数ではない。検出された昆虫化石は、筆者採集の現生標本と1点ずつ比較のうえ同定した。主な出現種については、図版Ⅰ・Ⅱに示した。

産出した昆虫化石は、Ⅴ区SD37（10･11層）中より10点、Ⅶ区SD59（5～11層）中より1点、Ⅶ区SD61（7層）中より3点、Ⅷ区SD64（5～6層）中より4点、Ⅷ区SD65（3層）中より1点、Ⅷ区SD69（4層）中より28点、Ⅷ区SD69（5層）中より29点、Ⅷ区SD69（6層）中より11点、Ⅷ区SD69（5層）中より29点、Ⅷ区SD69（6層）中より11点、Ⅵ区第1号堀跡（7～16層）より4点、Ⅵ区第2号堀跡（11～15層）より9点、Ⅶ区第2号堀跡（6～10層）より3点、Ⅶ区第2号堀跡（下層）より3点、Ⅵ区第3号堀跡（8層）より3点、Ⅵ区第4号堀跡（5～6層）より12点、Ⅶ区SE8（3～6層）中より7点の、計127点であった。

発見された昆虫化石の70.9％（90点）は食植性昆虫で占められた（表1）。そのなかにはマメ科植物や果樹等の葉を食害し、畑作害虫としても知られるヒメコガネ *Anomala rufocuprea* が68点（53.5％）が含まれた。同じく畑作物を害する昆虫として、クワなどの葉上に多いクワハ

ムシ *Fleutiauxia armata* が5点認められた。屋敷地付近に存在した植生を考えるうえで有効な昆虫化石には、アカマツをはじめ針葉樹に多いクロコガネ *Holotrichia kiotoensis*（2点）、ノブドウなどブドウ属の葉を食べるアカガネサルハムシ *Acrothinium gaschkevitchii*（1点）、エノキやサクラの古木に多いタマムシ *Chrysochroa fulgidissima*（1点）などが検出された。また、中世における仙台市周辺の景観や古気候を推定するにあたり、アカスジキンカメムシ *Poecilocoris lewisi*（3点）およびアオドウガネ *Anomala albopilosa*（3点）の出現は注目に値する。アカスジキンカメムシは九州・四国および本州に分布する食葉性昆虫であるが、分布の中心は明らかに西に偏しており、暖温帯～中間温帯の常緑広葉樹林帯を特徴づける昆虫である。後者もまたミズキやフジ・ハゼノキなど多くの広葉樹につくが、主な生息地はアオドウガネ同様、暖温帯（～中間温帯）の常緑広葉樹林帯に顕著に認められる。

一方、水生昆虫は計28点認められ、うち食植性で止水域に多いセマルガムシ *Coelostoma stultum*（11点）、同じく食植性・止水性種のガムシ *Hydrophilus acuminatus*（7点）、食肉性・好止水性種のゲンゴロウ *Cybister japonicus*（3点）などが出現した。地表性歩行虫はオオヒラタシデムシ *Eusilpha japonica*（1点）、オオゴミムシ *Lesticus magnus*（1点）を含め、計9点であった。

III. 推定される古環境

発見された昆虫化石の点数が少なく、昆虫の組成から遺跡周辺の古環境に関する正確な情報を引き出すことは困難であるが、どの試料からもほぼ共通してヒメコガネを多産した。本種は本来、林縁の樹葉や二次林・草本植生に依存して生活していたものであるが、人間による自然改変に伴い人家の周りや農道などに植栽された果樹・畑作物、マメ科の草本など人為度の高いところに生育する植生を加害するようになった食葉性昆虫と考えられ、本種が人工改変の進行した鎌倉時代以降大増殖したことは愛知県内の多くの遺跡で確かめられている（森：1994ほか）。中田南遺跡におけるヒメコガネの多産も、こうした傾向を反映したものである可能性も考えられる。クワ類を食害するクワハムシや、ブドウ属に多いアカガネサルハムシの出現からは、屋敷地周辺に存在した植物はクワやブドウのような栽培植物であったことが推定される。

アカスジキンカメムシやアオドウガネなど暖温帯～中間温帯に多い昆虫化石の産出からは、当時の気候がやや温暖であったことが考えられ、また溝や堀中からセマルガムシやガムシなど食植性の水生昆虫が多数発見されたことにより、これらの水域は初夏から秋にかけて水草や藻などが繁殖する停滞した止水域であったことが考えられる。

文　　献

森　勇一（1988）：「勝川遺跡及びその周辺地域から産した昆虫化石と古環境」『愛知県埋蔵文化財センター年報（昭和62年度）』　118-137.

森　勇一（1989）：「昆虫化石から得られた愛知県勝川遺跡周辺の古環境」『考古学と自然科学』　21、57-71.

森　勇一・伊藤隆彦・中村俊夫（1990）：「西尾市岡島遺跡より発見された昆虫の年代とその古生態－岡島遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第14集　107-115.

森　勇一（1992）：「勝川遺跡群より産した昆虫化石と古環境－勝川遺跡IV」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第29集　77-92.

森　勇一・前田弘子・伊藤隆彦（1992）：「珪藻及び昆虫化石群集から得られた朝日遺跡の古環境変遷－朝日遺跡（自然科学編）」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第31集　71-131.

森　勇一・前田弘子（1993）：「珪藻及び昆虫化石群集から得られた岡島遺跡の古環境変遷－岡島遺跡II」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第43集　87-132.

森　勇一（1994）：「愛知県松河戸遺跡における地質学的諸問題－とくに松河戸火山灰と昆虫群集について－　松河戸遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』　第48集　37-54.

森本　桂ほか（1984・1985・1986）：『原色日本甲虫図鑑』Ⅰ～Ⅳ　保育社

中根猛彦（1975a）：『原色日本昆虫図鑑』上・下　保育社

中根猛彦（1975b）：『学研中高生図鑑・昆虫II（甲虫）』　学習研究社

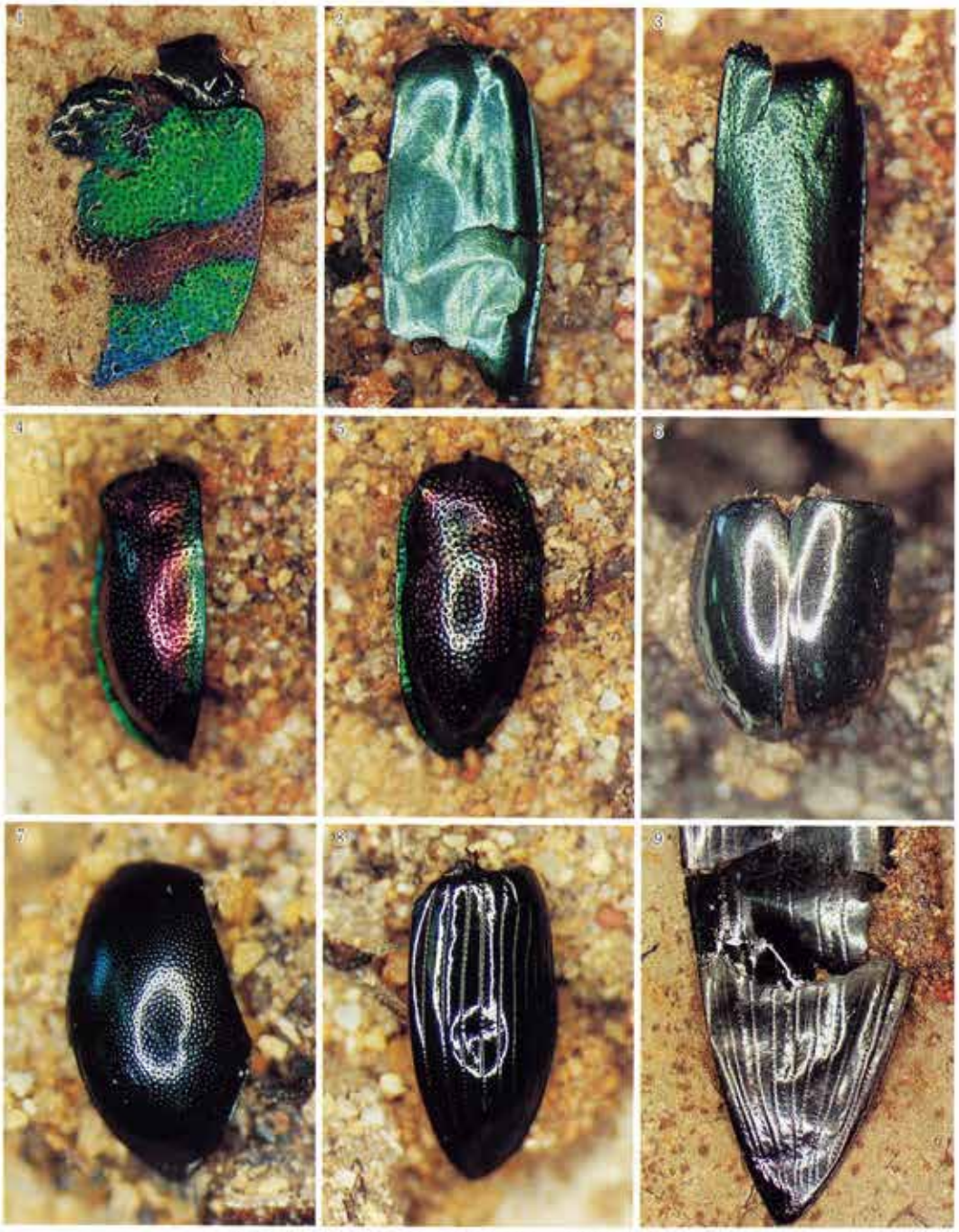
中根猛彦ほか（1978）：『原色昆虫大図鑑II（甲虫編）』　北隆館

表１　宮城県仙台市中田南遺跡における昆虫分析結果

No.	出土地区・遺構・層位	和　名	学　名	部　位	計 測 値	備考	生態	食性
1	Ⅴ区　SD 37　10・11 層	オオヒラタシデムシ	*Eusilpha japonica* (MOTSCHULSKY)	左鞘翅	L　14㎜	図版Ⅱ－６	地表性	食屍性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板	W　8㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板	W　9㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板	W　8㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板	W　9㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	左鞘翅	L　8㎜		好植性	食植性
		アオドウガネ	*Anomala albopilosa* HOPE	右鞘翅上半分	L　11㎜	図版Ⅱ－２	好植性	食植性
		タマムシ	*Chrysochroa fulgidissima* (SCHONHERR)	腹部腹板	W　9㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	腿脛節	腿節Ｌ　4㎜ 脛節Ｌ　3㎜	図版Ⅱ－５	好植性	食植性
		オオゴミムシ	*Lesticus magnus* (MOTSCHULSKY)	前胸背板	W　7㎜		地表性	雑食性
2	Ⅶ区　SD 59　5～11層	ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板	W　6㎜		好植性	食植性
3	Ⅶ区　SD 61　南北セ７層	ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板	W　7㎜	図版Ⅱ－７	好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板	L　4㎜		好植性	食植性
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (WALKER)	左右鞘翅	L　4㎜	図版Ⅰ－６	水　生	食植性
4	Ⅷ区　SD 64　5・６層	ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	左鞘翅	L　12㎜		好植性	食植性
		アオドウガネ	*Anomala albopilosa* HOPE	前胸背板	W　7㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　4㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　8㎜		好植性	食植性
5	Ⅷ区　SD 65　3層	タイコウチ	*Laccotrepes japonensis* SCOTT	ほぼ一体分	L　26㎜		水　生	食肉性
6	Ⅷ区　SD 69　4層	ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　1.5㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板片	L　3㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3㎜		好植性	食植性
		コガネムシ科	SCARABAEIDAE	鞘翅片	L　2.6㎜		好植性	食植性
		ヒメゲンゴロウ亜科	COLYMBETINAE	鞘翅片	L　2㎜		水　生	食肉性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板片	L　3㎜		好植性	食植性
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (WALKER)	鞘翅片	L　2.5㎜		水　生	食植性
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (WALKER)	右鞘翅	L　4㎜		水　生	食植性
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (WALKER)	鞘翅片	L　2㎜		水　生	食植性
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (WALKER)	右鞘翅	L　4㎜		水　生	食植性
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (WALKER)	右鞘翅	L　3㎜		水　生	食植性
		ヒメセマルガムシ	*Coelostoma orbiculare* (FABRICIUS)	左鞘翅	L　2.8㎜	図版Ⅰ－７	水　生	食植性
		サクラコガネ属	*Anomala* sp.	脛節	L　3㎜		好植性	食植性
		ゴミムシ科	HARPALIDAE	前胸背板	W　4㎜		地表性	雑食性
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (WALKER)	鞘翅片	L　3㎜		水　生	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3㎜		好植性	食植性
		マメガムシ	*Regimbartia attenuata* (FABRICIUS)	左鞘翅	L　4㎜		水　生	食植性
		ハムシ科	CHRYSOMELIDAE	鞘翅片	L　2㎜		好植性	食植性
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (WALKER)	鞘翅片	L　2㎜		水　生	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3㎜		好植性	食植性
7	Ⅷ区　SD 69　5層	セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (WALKER)	左鞘翅	L　4㎜		水　生	食植性
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (WALKER)	右鞘翅	L　4㎜		水　生	食植性
		セマルガムシ	*Coelostoma stultum* (WALKER)	鞘翅片	L　3㎜		水　生	食植性
		ゴミムシ科	HARPALIDAE	鞘翅片	L　3㎜		地表性	雑食性
		ハムシ科	CHRYSOMELIDAE	鞘翅片	L　3㎜		好植性	食植性
		ハムシ科	CHRYSOMELIDAE	鞘翅片	L　2㎜		好植性	食植性
		クワハムシ	*Fleutiauxia armata* (BALY)	鞘翅片	L　3㎜	図版Ⅰ－３	好植性	食植性
		ハムシ亜科	CHRYSOMELINAE	右鞘翅	L　2.4㎜		好植性	食植性
		オサムシ科	CARABIDAE	前胸背板	W　8㎜		地表性	雑食性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板	W　6㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板	W　5㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板片	L　3㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板片	L　4㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	小楯板	L　2㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　4㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　4㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　4㎜		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3㎜		好植性	食植性

No.	出土地区・遺構・層位	和　名	学　名	部　位	計 測 値	備考	生態	食性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2mm		好植性	食植性
8	Ⅷ区　SD 69　6層	ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　4mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2mm		好植性	食植性
		クワハムシ	*Fleutiauxia armata* (BALY)	右鞘翅	L　2mm	図版Ⅰ－2	好植性	食植性
		クワハムシ	*Fleutiauxia armata* (BALY)	右鞘翅	L　4mm		好植性	食植性
		ゲンゴロウ科	DYTISCIDAE	腿　節	L　4mm		水　生	食肉性
		マメガムシ	*Regimbartia attenuata* (FABRICIUS)	右鞘翅	L　4.2mm	図版Ⅰ－8	水　生	食植性
		クロコガネ	*Holotrichia kiotoensis* BRENSKE	鞘翅片	L　3.2mm		好植性	食植性
		クロコガネ	*Holotrichia kiotoensis* BRENSKE	鞘翅片	L　4mm	図版Ⅱ－9	好植性	食植性
		クワハムシ	*Fleutiauxia armata* (BALY)	左鞘翅	L　3.8mm		好植性	食植性
		クワハムシ	*Fleutiauxia armata* (BALY)	右鞘翅	L　4.2mm		好植性	食植性
9	Ⅵ区　第1掘跡　7～16層	ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板	W　8mm	図版Ⅱ－8	好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　7mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板	W　8mm		好植性	食植性
		アカガネサルハムシ	*Acrothinium gaschkevitchii* (MOTSCHULSKY)	左鞘翅	L　5.2mm	図版Ⅰ－4・5	好植性	食植性
10	Ⅵ区　第2掘跡　11～15層	ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	前胸背板	L　7mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	左鞘翅	L　10mm	図版Ⅱ－4	好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	右鞘翅	L　9mm	図版Ⅱ－3	好植性	食植性
		ガムシ	*Hydrophilus acuminatus* MOTSCHULSKY	左鞘翅片	L　22mm		水　生	食植性
		ガムシ	*Hydrophilus acuminatus* MOTSCHULSKY	右鞘翅片	L　18mm	図版Ⅰ－9	水　生	食植性
		ガムシ	*Hydrophilus acuminatus* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　15mm		水　生	食植性
		オサムシ科	CARABIDAE	右鞘翅下半部	L　12mm		地表性	雑食性
		アオドウガネ	*Anomala albopilosa* HOPE	右鞘翅	L　13mm	図版Ⅱ－1	好植性	食植性
		クロゲンゴロウ	*Cybister brevis* AUBE	後胸腹板	W　11mm		水　生	食肉性
11	Ⅶ区　第2掘跡　6～10層	ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	右鞘翅	L　9mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	右鞘翅	L　7mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　4mm		好植性	食植性
12	Ⅶ区　第2掘跡　下層	アカスジキンカメムシ	*Poecilocoris lewisi* DISTANT	前翅	L　7mm	図版Ⅰ－1	好植性	食植性
		アカスジキンカメムシ	*Poecilocoris lewisi* DISTANT	前胸背板	L　4mm		好植性	食植性
		アカスジキンカメムシ	*Poecilocoris lewisi* DISTANT	小楯板	L　2mm		好植性	食植性
13	Ⅵ区　第3掘跡　8層	ゲンゴロウ	*Cybister japonicus* SHARP	鞘翅片	L　3mm		水　生	食肉性
		ゲンゴロウ	*Cybister japonicus* SHARP	鞘翅片	L　4mm		水　生	食肉性
		ゲンゴロウ	*Cybister japonicus* SHARP	鞘翅片	L　14mm		水　生	食肉性
14	Ⅵ区　第4掘跡　5・6層	ガムシ	*Hydrophilus acuminatus* MOTSCHULSKY	左鞘翅	L　27mm		水　生	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　7mm		好植性	食植性
		ガムシ	*Hydrophilus acuminatus* MOTSCHULSKY	左鞘翅片	L　17mm		水　生	食植性
		ガムシ	*Hydrophilus acuminatus* MOTSCHULSKY	前胸背板	W　16mm		水　生	食植性
		ガムシ	*Hydrophilus acuminatus* MOTSCHULSKY	前胸背板片	W　12mm		水　生	食植性
		サクラコガネ属	*Anomala* sp.	腿脛節	腿節L　4mm 脛節L　3mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　4mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　5mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　6mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	左鞘翅	L　12mm		好植性	食植性
15	Ⅶ区　SE 8　3～6層	ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　7mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　4mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　3mm		好植性	食植性
		ヒメコガネ	*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY	鞘翅片	L　2mm		好植性	食植性
		ゴミムシ科	HARPALIDAE	左鞘翅	L　13mm		地表性	雑食性
		ゴミムシ科	HARPALIDAE	前胸背板	W　6.2mm		地表性	雑食性
		エンマコガネ属	*Onthophagus* sp.	中胸側板	L　3mm		地表性	食糞性

L：長さ　W：幅



図版Ⅰ　中田南遺跡産の昆虫化石の顕微鏡写真（1）

1．アカスジキンカメムシ　*Poecilocoris lewisi* DISTANT
　前　翅♀長さ7.0mm（標本12-1）
2．タワハムシ　*Flentiauxia armata* (BALY)
　右鞘翅　長さ4.0mm（標本8-5）
3．タワハムシ　*Flentiauxia armata* (BALY)
　右鞘翅上半部　長さ3.0mm（標本7-7）
4．アカガネサルハムシ　*Acrothinium gaschkevitchii* (MOTSCHULSKY)
　鞘翅片　長さ3.2mm（標本9-4）
5．アカガネサルハムシ　*Acrothinium gaschkevithii* (MOTSCHULSKY)
　鞘翅片　長さ3.2mm（標本9-4）
6．セマルガムシ　*Coelostoma stultum* (WALER)
　左右鞘翅　長さ4.0mm（標本3-3）
7．ヒメセマルガムシ　*Coelostoma orbiculare* (FABRICIUS)
　左右鞘翅　長さ2.8mm（標本6-14）
8．マメガムシ　*Regimbartia attenuate* (FABRICIUS)
　右鞘翅　長さ2.8mm（標本8-7）
9．ガムシ　*Hydrophilus acuminatus* MOTSCHULSKY
　右鞘翅　長さ18.0mm（標本10-5）

図版Ⅱ　中田南遺跡産の昆虫化石の顕微鏡写真（2）

1．アオドウガネ　*Anomala albopilosa* HOPE
　右鞘翅　長 13.0mm（標本10-8）
2．アオドウガネ　*Anomala albopilosa HOPE*
　右鞘翅上半部　長さ11.0mm（標本1-7）
3．ヒメコガネ　*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY
　右鞘翅　長さ9.0mm（標本10-3）
4．ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY
　左鞘翅　長さ10.0mm（標本10-2）
5．ヒメコガネ　*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY
　中腿脛節　腿節の長さ4.0mm（標本1-9）
6．オオヒラタシデムシ　*Eusilpha japonica* MOTSCHULSKY
　左鞘翅　長さ14.0mm（標本1-1）
7．ヒメコガネ　*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY
　前胸背板　幅7.0mm（標本3-1）
8．ヒメコガネ　*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY
　前胸背板　幅8.0mm（標本9-1）
9．クロコガネ　*Holotrichia kiotoensis* BRENSKE
　鞘翅片　長さ3.2mm（標本8-8）

Ⅶ. 遺物の検討

今回の調査で出土した遺物には、土器・陶器・磁器・とりべ・土製品・金属製品・石器・石製品・木製品などがある。また、その他に骨・植物遺体・昆虫遺体なども多くある。ここでは前者の人工遺物を種類ごとに取り上げ、各々の特徴をまとめた上で、その編年的位置や問題点などを検討していきたい。

1．縄文土器・弥生土器

縄文土器は38点、弥生土器は115点出土した。しかし、これらは全てⅠ・Ⅱ層や新しい遺構 の堆積土から出土した小破片であり、また、出土状況に規則性は認められなかった。

縄文土器は地文のみのものが大半で、その他の特徴をもつ土器は3点にすぎない。1点は深鉢の口縁部に小突起をもち、数条の沈線が施されるもので（第209図7）、大洞C_2式に属すると考えられる。他の2点は、1つは底部がわずかに丸底状をなす鉢で、体部下端に1条の沈線が施されている（第36図3）。これと類似する土器は仙台市赤生津遺跡（佐藤・熊谷：1990）などでも出土しており、大洞A′式に認められる特徴の1つである。また、他の1つは深鉢の口縁部が無文で、その端部に刻目が加えられて小波状をなすものである（第146図6）。

このような特徴の土器も前述の赤生津遺跡から大洞A′式とともに出土しており、この資料もまたこの時期に位置付けられよう。地文のみの土器では単節縄文と羽条縄文（LRとRL）が外面に施されている。時期を限定することはできないが、諸特徴から縄文時代の後期か晩期に属するものと考えられる。

弥生土器では文様をもつ土器は40点あり、地文のみのものは75点である。これらは小破片のため明瞭ではないが、鉢・蓋・壷・甕の器種が確認される。その中の甕を除く器種は文様施文の特徴から大きくA・Bの2つに分類される。

A類は1本施文具により、やや細目の沈線が描かれるもので、該当するのは第52図8の1の1点のみである。これは壷の肩の一部で、横に沈線が数条施されている。類似の土器は南小泉遺跡（伊東他：1978、須藤：1983）、西台畑遺跡（伊藤：1958）などで出土しており、中期中葉の桝形囲式に位置付けることができる。

B類は2～3本の平行施文具により細かい沈線が描かれるもので、文様には同心円文・渦巻文・山形文・連弧文などがある。実測資料の第64図5は壷の頸部に1条の突帯がめぐり、その突帯の下方に2本の平行施文具により文様が描かれている。また、第64図6は広口壷の口縁部で、2本平行施文具により連弧文などが描かれている。このような平行施文具による文様は、

従来から十三塚式の大きな特徴とされてきた（伊東：1957）ものであり、塩釜市崎山囲洞穴（伊東・伊藤：1965）や色麻町色麻古墳群（佐々木他：1985）などからこの時期の良好な資料が得られている。ただし、両遺跡の土器内容をみると、前者は2本平行施文具による文様、後者は3本平行施文具による文様がそれぞれ主体を占めている。しかしこの差異が時期差によるものかどうかは現段階ではまだ明確にされていない。中田南遺跡においても2本と3本施文具の土器が前述のように時期差を示すような出土状況は認められず、また、土器内容でも施文具以外に明確な差異は見い出せなかった。今後の検討課題としたい。

甕では頸部に列点施突文がめぐる土器が数点確認された。これはおそらく桝形囲式に属するものであろう。また、地文では撚糸文（R）が多く目立ち、その他に単節縄文、付加条縄文などがみられる。これらの土器も桝形囲式か十三塚式に属するものとみて良いであろう。

2．古代の土器

古代の土器には土師器・須恵器・赤焼土器・灰釉陶器がある。これらについては土器の特徴や出土状況などから、大まかに4つの段階の土器群に区分することができた。ただし、それぞれについては厳密な共伴関係を示す資料が量的に少なく、また、土器群相互の新旧関係についても明確にできる根拠は極めて少なかった。こうした不十分な点については古代の土器に関するこれまでの研究成果をふまえながら土器群を設定した。

（1）第Ⅰ群土器

古墳時代中期に相当する時期の土器を第Ⅰ群土器とした。第3号土坑出土の一括資料で、量的には極めて少なく、土師器坏2点と壷1点のみである。

坏は2点とも底部が丸底状をなすが、口縁部の立ち上がりが内側に屈曲するもの（第142図3）と、外側で屈曲するもの（第142図4）がみられる。器面調整は1点は内外面ともヨコナデ・ヘラケズリの後にヘラミガキが加えられ、他の1点も同様であるが、外面のみヘラミガキが省略されている。

壷は一部しか残存しないが、小形の壷とみられる（第142図5）。体部は球形をなすものと考えられ、口径に対し体部径がやや大きいタイプのものと推定される。器面調整は外面がハケメ・ヘラケズリ・ヘラミガキ、内面がヘラケズリ・ヘラナデである。

第Ⅰ群土器については他の土器群との新旧関係は認められなかった。この第Ⅰ群土器とおおむね共通した内容を持つ例には、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡（白鳥・加藤他：1974）、多賀城市山王遺跡（高倉他：1981）、大河原町台ノ山遺跡（阿部・千葉：1980）などの出土土器があり、いずれも南小泉式として位置づけられている。したがって第Ⅰ群土器も南小泉式に含められるも

のと考えられる。

南小泉式は氏家和典氏により、南小泉遺跡の出土資料を標式として、土師器編年の第二型式として設定された(氏家：1957)。この段階では南小泉式に後続する第三型式として引田式も設定されたが、その後の仙台市岩切鴻ノ巣遺跡出土土器の検討により、南小泉式から引田式を分離することは無理との判断から、引田式は南小泉式に包括されるべきものとの理解がなされてきた（白鳥・加藤他：1974)。そしてこれまで引田式を含めた南小泉式の細分化が検討されてきており、現在まで2段階（加藤：1989)、3段階（丹羽：1983）の細分案が出されている。しかし、最近では藤沢　敦氏から南小泉式から引田式を分離させ、独立した型式として再使用しようとの提唱がなされている(藤沢：1992)。本群土器は量的には少ないが、土器の特徴からみると、加藤氏の第2群、丹羽氏のB・C群、藤沢氏の「引田式」により近いものと考えられる。年代的には5世紀後半を中心としたものといえよう。

（2）第II群土器

古墳時代後期の、比較的限定された時期の土器を第II群土器とした。第5・13・16号住居跡から出土した土器群である。図示できた資料は土師器のみで、坏9点・壷1点・甕7点・甑1点・手づくね土器3点である。

土器の分類

土師器には坏・壷・甑・手づくね土器があり、次のような特徴がある。

坏：いずれも体・底部と口縁部との境に段や稜をもっている。口径と器高との関係、細部の器形から次のように分類される。

第1類：口径に対し器高が比較的小さいもの

A類－口縁部が直線的に外傾し、体・底部が丸底状のもの（1）

B類－口縁部が直立し、体・底部が丸底状のもの（2・3）

C類－丸底状の底部から口縁部へ内弯ぎみに立ち上がるもの（4）

外面の器面調整はいずれも段や稜から上はヨコナデ、下はヘラケズリのみかまたはその後にヘラミガキを丁寧に加えている。内面の器面調整はヘラミガキとナデのものがある。前者には黒色処理が施されている例もみられる。

第2類：口径に対し器高が比較的大きく、埦状をなすもの

A類－口縁部が直立ぎみに立ち上がり、体・底部が丸底状のもの（5・6）

B類－口縁部が内弯ぎみに立ち上がり、体・底部が丸底状のもの（7）

外面の器面調整は段・稜から上はヨコナデ、下はヘラケズリで、その後にヘラミガキが加えられるものもある。内面の器面調整はヨコナデ、ヘラナデやナデ、またはヘラミガキである。

壺：短い口縁部をもち、体部が球形のものである(11)。器面調整は外面の口縁部のみがヨコナデでその他は丁寧にヘラミガキが施されている。

甕：体部と口縁部の器形により、次のように分類される。

第1類：体部が長胴形のもの（12）であり、あるいは体部下半が膨らむ特徴のものとも考えられる。口縁部はゆるやかに外反しており、口縁端部はシャープな作りである。器面調整は外面がヨコナデ・ヘラケズリ、内面が丁寧なヘラミガキである。

第2類：体部が球形に近いもの

A類－口縁部が短く、屈曲しないで終わるもの（13）

B類－口縁部が屈曲するもの（14）

小形の甕である。器面調整に外面がヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ、内面がヘラナデ・ナデで、内面はその後に黒色処理が施されている例もみられる。

第3類：口縁部が外反し、体部が鉢状のもの（15）である。口縁部と体部との境は段になっている。器面調整は外面がヨコナデ・ハケメ、内面がヘラミガキである。内面の仕上げが極めて丁寧に行なわれている点からみれば甑の可能性が高いといえる。

甑：底部資料が1点あり、無底式のものである（16)。器面調整は外面がハケメ・ヘラミガキ、内面が不明である。

手づくね土器：器形により2つに分類される。

第1類：体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（8・9）

第2類：体部から口縁部にかけて直立ぎみに立ち上がるもの（10)

いずれも外面には積み上げ痕跡を残しており、器面調整は外面がナデかオサエ、内面がヘラナデかナデである。

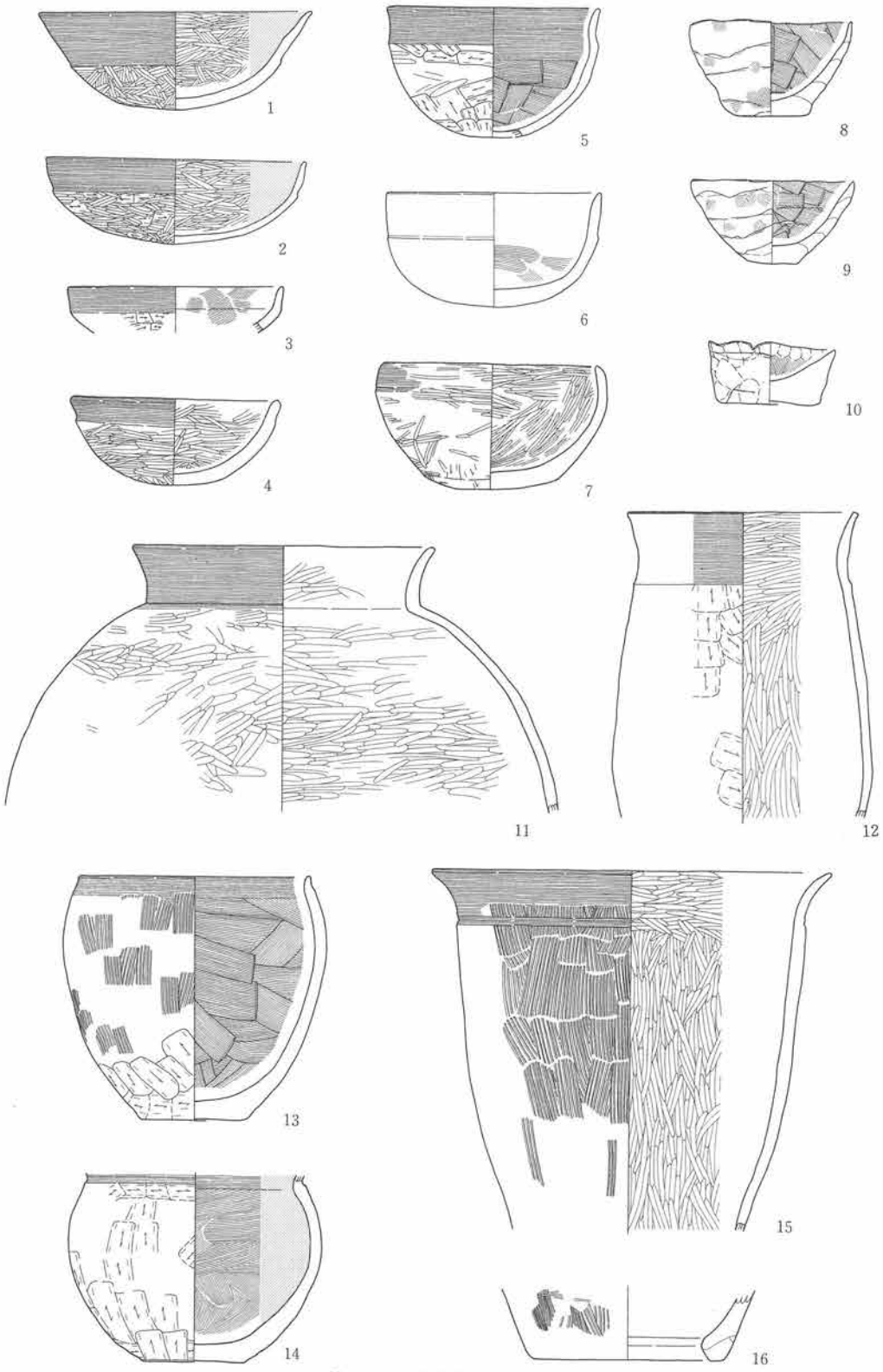
第II群土器は前述のように分類されたが、各住居跡ごとの出土土器をみていくと次のような土器から構成される。なお、アンダーラインの資料は堆積土出土のものである。これらは住居跡に伴うものとはいえないが住居跡の廃絶の時期に近いものといえる。このことは後述する第III・IV群土器でも同様である。

第5号竪穴住居跡－坏1A・1B・2A、甕1A・1B・2A・2B

第13号竪穴住居跡－坏2A、甑

第16号竪穴住居跡－坏1B・1C・2B、壺

これらの中で安定した共伴関係を示すのが、第5号住居跡の土器群であり、第II群土器の大部分を占めている。第13・16号住居跡については資料に乏しいものの、第5号住居跡の坏2Aおよび坏1B・2Bというお互いに共通する土器をそれぞれ含んでいる。したがってそれぞれの住



第275図　古代第Ⅱ群土器

居跡の出土土器は、広く把えれば、ほぼ同時期の土器と考えられ、土器構成のちがいは時期差にもとづくのではなく、同一時期の土器組成を互いに補完する関係にあるものと考えられる。なお、第5号住居跡は後述する第III群および第IV群土器を出土する第16号および17号掘立柱建物跡に切られており、この第II群土器は第III・IV群土器より古いことが明らかである。

第II群土器とほぼ同様の内容を持つものとしては、角田市住社遺跡の出土土器(志間：1958)、同じく角田市の田町裏遺跡の出土土器（志間：1965）があげられる。特に前者の資料は土師器編年の第四型式（住社式）の標式資料とされており（氏家：1957)、後者の田町裏遺跡の出土資料もこの型式に位置付けられている。

第II群土器と両遺跡出土土器との比較を若干行なうと、まず坏では1A類が住社遺跡に、1B類が田町裏遺跡に、2A類は両遺跡に認められる。また、2B類は角田市教委調査の住社遺跡出土資料（中村・斉藤：1991）の中に1A類と共に認められる。坏内面に黒色処理を施した土器については住社遺跡および田町裏遺跡でもわずかながら存在することが指摘されている。このように第II群土器の坏は両遺跡の出土資料と極めて共通した内容を持つものといえる。この他の壷・甕についてもほぼ同様の特徴を示している。ただし、甕の中で内面黒色処理が施される例はこれまで確認されていない。以上から第II群土器は住社式に位置付けられるものと考えられる。

ところで住社式か、それに近い位置付けがなされている資料には他に名生館遺跡のSI1217およびSK430出土土器（鈴木・高橋：1991)、小牛田町山前遺跡23号住居跡出土土器（加藤：1989)、山元町合戦原遺跡1号住居跡出土土器（岩見・佐藤：1991）などがある。これらの出土土器はたとえば坏では住社遺跡出土土器と同様に外面に段や稜が形成されるものがみられるものの、異なる特徴も多くあり、むしろ南小泉式の坏に類似する古い要素が多く認められている。このような土器様相の差異が時期差によるものとの観点から、加藤道男氏は住社式を2段階に区分し、山前遺跡出土土器を第1段階に、そして標式とされてきた住社遺跡跡出土土器を第2段階に位置付けている。その中で、第II群土器は住社遺跡跡出土土器にほぼ共通する内容を持つことから、住社式でも後半の第2段階にほぼ相当する時期のものと考えられる。年代については住社式の第1段階とされている合戦原遺跡第1号住居跡外周溝から出土した須恵器坏がTK47に比定され、またこれと類似する土器内容をもつ名生館遺跡のSK430でMT15に 類似する須恵器蓋が出土していることなどから、第1段階はおおむね6世紀前半頃に位置付けられる（岩見・佐藤：1991、鈴木・高橋：1991)。このようなことから、加藤氏の第2段階はおおむね6世紀後半頃に中心をおくものと推定され、本群土器も同じ頃のものと考えられる。第II群土器の坏1A類は口縁部が大きく外傾する特徴をもつ。こうした坏の特徴は次の栗囲式の時期になると、より普遍化する特徴である。また、坏1B類、2A類は関東地方で5世紀末から発達す

る須恵器模倣坏に近似する特徴をもつものといえる。

（3）第III群土器

古墳時代末から奈良時代前半にかけての時期の土器を第III群とした。第24号住居跡の出土土器が中心であるが、その他の住居跡からも多く出土しており、また、その他の遺構、基本層のⅠ～III層からも広範に出土している。土器には土師器・須恵器があるが、ここでは遺構出土で、比較的共伴関係が明らかな資料を中心に取り上げ、その他の遺構に伴わない資料については、この時期の土器組成を考える上で必要なものを取り上げた。

〔土師器〕

イ．ロクロ不使用の土師器

坏・高坏・盤・埦・鉢・甕・甑の器形がある。

坏：口径と器高との関係、外面の段や稜の有無、細部の器形などにより、次のように分類される。

第1類：口径に対し、器高が比較的小さいもの

A類－外面に段をもつもの

a類－体・底部が丸底状をなし、口縁部が外傾するもの（1～4）

b類－体・底部が丸底状をなし、口縁部が内弯するもの（5～7）

c類－体・底部が平底状をなし、盤に近い器形のもの（8）

法量には大小がみられる。外面の段の位置は中位か、下位にあるが、後者の方が比較的多い。器面調整は外面が段の上がヨコナデ、その下がヘラケズリである。内面はヘラミガキ、黒色処理のものが大部分であるが、中にはヨコナデで、黒色処理が施されない例もある。

B類－外面に稜をもつもの（9）である。ほぼ器形の中位に稜をもち、その外面上方はヨコナデ、下方はヘラケズリ、ヘラミガキ調整が行なわれている。ヘラケズリは極めてラフで、器面には凹凸がある。内面の調整はヘラミガキで、黒色処理の有無は不明である。

C類－外面に段や稜をもたないもの

a類－体・底部が丸底状をなし、口縁部にかけて内弯ぎみに立ち上がるもの（10～13）

b類－底部が平底に近く、体部から口縁部にかけて外傾するもの（14）

器面調整は外面がヨコナデ、ヘラケズリで、その後にヘラミガキが加えられる例もある。内面はヨコナデやヘラナデ調整のものと、ヘラミガキ調整のものがあり、後者は全て黒色処理が施されている。12は両面とも黒色処理されている。

第2類：口径に対し、器高が比較的大きいもの

A類－口縁部が直線的に外傾するもの（15・16）

B類－口縁部が内弯するもの（17）

A類は外面が上半ヨコナデ、下半ヘラケズリかヘラミガキ。内面はヨコナデ・ヘラミガキである。15は両面とも黒色処理されている。B類は外面がヘラケズリ・ヘラミガキ、内面がヘラミガキ・黒色処理である。

高坏：全体形がわかる例はなく、坏部と脚部にはそれぞれ次のような特徴がみられる。

（坏部）

第1類：外面に段をもち、体・底部が丸底状のもの（18）

第2類：体・底部が平底状のもの（19）

第1類は坏分類の1A類に、第2類は1Cb類に器形、器面調整ともほぼ共通しており、内面は黒色処理がされている。

（脚部）

第1類：柱状部に方形の透かしをもつもの（20・21）

第2類：柱状部に透かしをもたないもの（22）

器面調整は内外面とも柱状部がヘラケズリ、裾部がヨコナデである。

盤：1点のみである。外面の下端に段をもち、口縁部が直線的に外傾するものである（23）。器面調整は外面が段から上がヨコナデ、下がヘラケズリ、内面がヘラミガキ・黒色処理である。

埦：1点のみである。底部はわずかに平底状で、体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がっている（24）。器面調整は外面がヨコナデ・ヘラケズリ、内面がヘラミガキ・黒色処理である。

鉢：1点のみである。体部下半から底部は欠くが、体部上半は内弯ぎみに外傾し、口縁部で大きく外反するものである（25）。器面調整は外面がヨコナデ・ヘラケズリ・軽いヘラミガキ、内面がヘラミガキ・黒色処理である。

甕：体部・口縁部の器形により、次のように分類される。

第1類：体部が長くのびる、いわゆる長胴形のもの

A類－口縁部が大きく外反するもの（26）

B類－口縁部がわずかに外反するもの（27）

C類－口縁部が直立ぎみに立ち上がるもの（28）

最大位は口縁部にあり、口縁部と体部の境に段がかすかにつくものと、ゆるやかに移行するものがある。器面調整は口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は外面がハケメかヘラケズリ、内面が主にヘラナデである。

第2類－体部がわずかにふくらむもの

A類－口縁部が外反するもの（29・30）

B類－口縁部が直立ぎみのもの（31）

口径と体部径がほぼ等しい。底部はやや安定した作りである。口縁部と体部の境は軽い段をもつか、あるいはゆるやかに移行している。器面調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデのみか、あるいはその後にヘラミガキが加えられている。

第3類：体部が大きくふくらみ、球形に近い形状をなすもの（32・33）

最大径は体部中央にある。器面調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面がハケメかヘラケズリ、内面がヘラナデである。

第4類：体部が鉢状のもの（34）

最大径は口縁部にあり、口縁部と体部の境は軽い段である。器面調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部が外面ハケメ、内面がヘラナデである。

甑：全体形のわかる例はなく、底部資料のみである。これらはいずれも無底式のものである（35・36）。器面調整は外面がハケメ、内面がヘラミガキである。

ロ．ロクロ使用の土師器

坏が1点のみである。これは平底の坏で、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾する。底部は静止糸切り技法によって切り離され、その後に底面と体部下端に手持ちヘラケズリの再調整が加えられている。

〔須恵器〕坏・蓋・壺・甕などの器形が認められるが、全体形の知り得るものは少なく、ここでは坏と高台付坏を対象とする。

坏：いずれも外面に段をもち、体・底部が丸底状に近いものである。口縁部が直立ぎみのもの（第1類－38）と、口縁部が外傾するもの（第2類－39）に分けられる。第1類は底部切り離しは不明で、底部全面は回転ヘラケズリにより、また段付近は手持ちヘラケズリにより再調整されている。

高台付坏：1点のみである。坏部は器高が低い皿状をなし、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。高台は坏底部周縁より内側に、そして外方にふんばるように付けられている。底部切り離しは不明で、全面が回転ヘラケズリで再調整されている。

第Ⅲ群土器は前述したように竪穴住居跡を中心に出土した。中でも第24号住居跡からは床面および堆積土中から22点の図示資料が出土している。ここではその第24号住居跡出土資料を中心に取り上げ、量的には少ない他住居跡の資料との比較検討を行なう。主な住居跡の出土土器

をみると次のような土器から構成される。

第24号住居跡－土師器坏1Aa・1Ab・1Ac、高坏－坏部１・２、脚部１、盤、鉢、甕
1A・2A・３・４、甑、須恵器坏２

第２号住居跡－土師器坏1Ab・1Ca・、甕1B

第10号住居跡－土師器坏1Aa・1Ca、高坏－脚部２、甕2A

第11号住居跡－土師器1Aa・1B、須恵器高台付坏

第15号住居跡－土師器甕1A・2B・甑

第17号住居跡－土師器坏1Ca、ロクロ使用の土師器坏

第19号住居跡－土師器坏1Ab・1Ca・2A、甕1A

第20号住居跡－土師器坏1Ab、甕2A

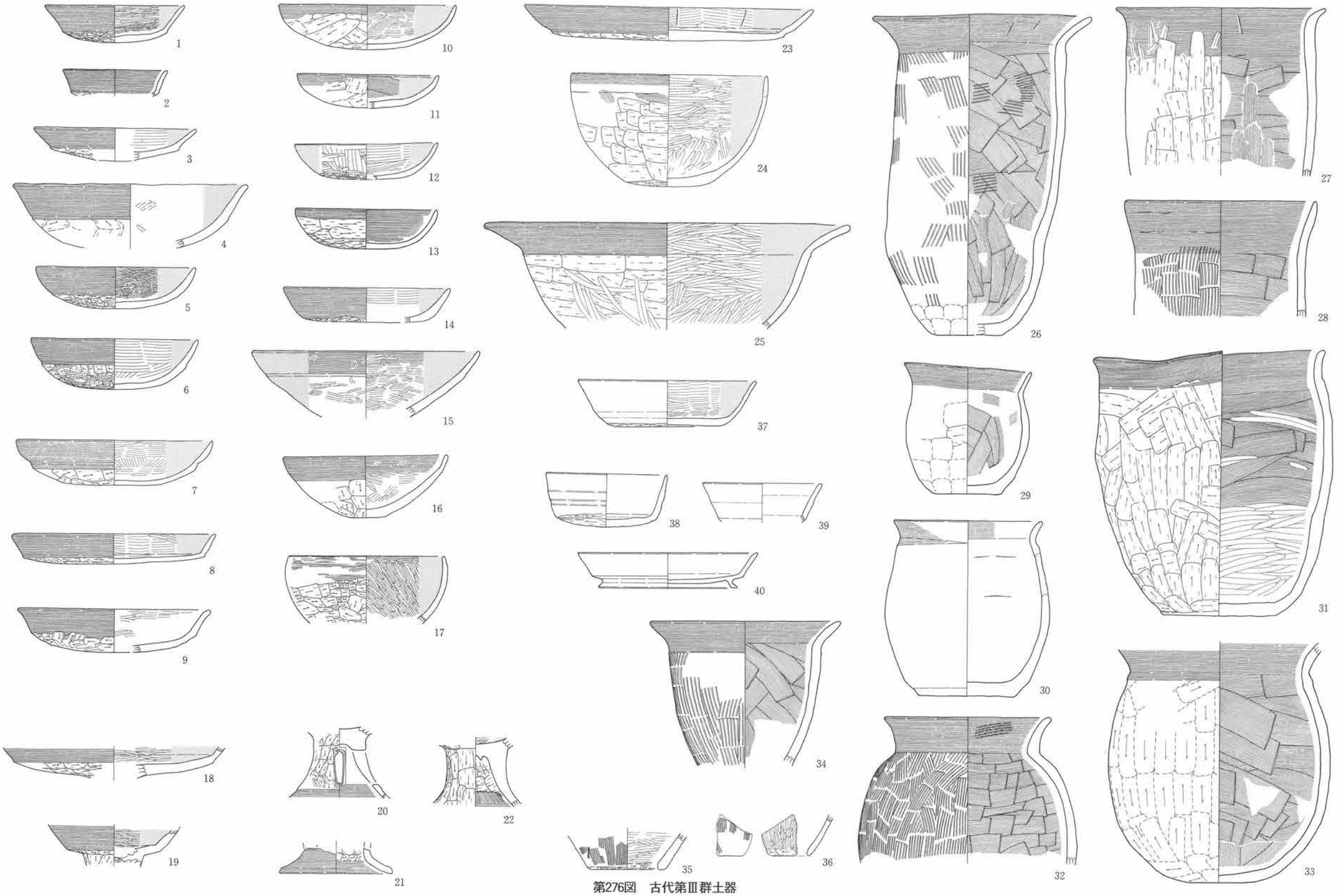
第21号住居跡－土師器坏1Ab・1Cb、甕1B・2A

第27号住居跡－土師器坏1Aa・1Ab、高坏－脚部１、甕３

第28号住居跡－土師器坏1Ab、甕1C・2A

第24号住居跡で欠落する土器には土師器坏1B・1Ca・1Cb・2A・2B、高坏－脚部２、甕1B・1C・2B、ロクロ使用の土師器坏、須恵器坏１、高台付坏がある。これらの土器の中には他の住居跡で第24号住居跡と共通する土器と一緒に出土しているものがある。それは土師器坏1B・1Ca・1Cb・2A、高坏－脚部２、甕1B・1C・2B、須恵器高台付坏である。またその他のロクロ使用の土師器坏は第17号住居跡の土師器坏1Caと共伴しているし、須恵器坏２は第４号住居跡で土師器坏1Aa・1Abなどと堆積土の同一層から出土している。以上から第III群土器の大半の土器は広く把えれば、ほぼ同時期の土器と考えられる。そして第24号住居跡の出土土器を中心とし、そこに欠落する土器については他の住居跡においてその組成が補完されるべき土器群と考えられる。ただし第III群土器を出土した住居跡には第14と15号住居跡や第11と12号住居跡のように遺構が重複し、新旧関係を示す例もあり、土器群自体の時間幅を多少長く考えておく必要がある。なお、第III群土器の遺構は各所で後述する第IV群土器を出土する遺構に切られており、この第III群土器が第IV群土器より古いことが明らかである。

第III群土器の主な特徴は、土師器では製作にロクロを使用せず、坏は体・底部が丸底状をなすものが大半で、外面に段や稜をもつものと段や稜をもたないものなどがある。前者の段や稜の位置は中位か下位のものが多く、中には平底に近いものもみられる。口縁部は内弯するものが多い。またこれらには内面が黒色処理されているものと、されていないものがあり、前者が多い。甕では口縁部と体部との境にわずかに段をもつものと、段をもたずゆるやかに移行するものがあり、特に後者が目立つ。また、体部外面の調整ではハケメだけでなくヘラケズリが最終調整として多用されているのも特徴の一つである。



第276図　古代第Ⅲ群土器

このような土師器と類似した特徴をもつものは高清水町観音沢遺跡の住居跡出土土器（加藤・阿部：1980）、志波姫町御駒堂遺跡第2群土器（小井川・小川：1982）、仙台市郡山遺跡第4段階の土器（木村・長島：1991）、多賀城市多賀城跡SI1791出土土器（丹羽・後藤・高野：1988）などに見受けられる。

観音沢遺跡では出土土器の坏の多くが本群の坏1Abに共通しており、また、段などをもたない坏1Caのタイプも伴っている。甕では口縁部から体部にかけて段や沈線のめぐるものが多くみられる点は本群と異なるが、その他の特徴は近似している。観音沢遺跡の土器は国分寺下層式でも古い要素が認められることから、国分寺下層式の前半に位置付けられ、8世紀前半に比定されている（加藤：1989）。

御駒堂遺跡では7世紀末から8世紀前半の出土土器が三群に分けられている。この内、本群に近似するのは8世紀前半に比定されている第2群土器である。ただし、この第2群土器は真間式の関東系土器を主体としており、さらに住居跡の構造などの面に関東地方の影響が強く認められることから、関東地方からの人々の移住によって生じたものと考えられている。これらの関東系土器に少量ではあるが在地の土器が共伴している。それらは本群の土師器坏1Aa・1Ab・1Ca、甕3などと共通していることから、本群土器と御駒堂遺跡の第2群土器はほぼ同時期の土器群と考えられる。ところで、御駒堂遺跡の該期の関東系土器とされている坏の中の、丸底で体部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がるIV1aii類は、本群の土師器坏1Caに器形的によく類似しており、中でも内面ヨコナデの13は全体の器面調整も極めて近似したものである。この土器については、関東地方の研究者から北武蔵地域の8世紀第1四半期ごろの土師器坏と特徴が共通しているとの教示を得ている[註1]。また、本群の坏1Caの内面黒色処理された土器はこうした関東系土器の影響を多分に受けて成立したものと推測される。

郡山遺跡の第4段階の土器はII期官衙に伴うものとされており、年代は7世紀末から8世紀初頭とされている。ここでは資料の多いII期官衙に伴う外郭大溝（SD35）の1層から出土した土器と比較すると、本群の土師器坏Aや高坏の特徴、須恵器坏1の特徴などはおおよそ共通しているが、異なる点も認められる。それは土師器坏の中でも本群の1Acや1Cbのような盤状や平底に近い坏や、1Caのような丸底で内弯する器形の坏があまりみられないことである。また、外郭大溝では関東系土器も共伴している。それは清水遺跡第V群土器・御駒堂遺跡第1群土器などの鬼高式後葉ないし真間式の初めに位置付けられる土器とも特徴が共通しており、年代は7世紀末から8世紀初頭ごろに比定されているものであり、本群の土師器坏1Caの中にみられるような関東系土器とは特徴を異にしている。これらのことから本群土器は郡山遺跡外郭大溝1層の土器よりやや新しい要素をもつものといえる。しかし、郡山遺跡の第4群土器を出土する遺構の中には本群土器に極めて類似する土器を出土する遺構も存在しており、本群土器がそ

の第4群土器よりも必ずしも新しい段階のものとはいえない。こうしたことからここでは本群土器を郡山遺跡の第IV段階でも新しい時期か、それ以降のものとしておきたい。

多賀城跡SI1791は政庁跡第Ⅰ期の築地の基礎によって整地されており、出土土器は多賀城創建以前の8世紀前葉に位置付けられている。これらの土器は土師器坏は外面に段をもつものが主体で、本群の1Aa・1Abに共通している。

以上、主に土師器を取り上げ、他の遺跡の出土土器との比較・検討を行なってきた。これらの検討から、本群土器は土師器編年の栗囲式の後半から国分寺下層式でも前半にかけての段階で、年代としては7世紀末から8世紀前半に位置付けられる。さらに年代をしぼるとすれば郡山遺跡第IV段階の土器や多賀城跡の8世紀前葉の出土土器との類似などから8世紀前葉に年代の中心をおいた土器群と考えることができる。次に若干、ロクロ使用の土師器坏についてふれておく。ロクロ使用の土師器坏は土師器坏1Caと共伴しており、明らかに本群に含まれるものである。底部切り離しが静止糸切りで、その後に回転ヘラケズリ・手持ちヘラケズリの再調整がされており、また、器形の面でも須恵器坏の影響を強く受けたものといえる。こうしたロクロ使用の土師器について、当該時期の類例を求めると利府町硯沢窯跡（宮城県教委：1987）や色麻町日の出山窯跡群（古川・太田：1993）があげられる。前者の例では当時の土師器坏を模倣したもの（坏a類）と、須恵器の特徴を土師器として製作したもの（坏b類）があり、いずれも須恵器の年代と同じく8世紀中葉に比定されている。これらの土師器は器形・調整とも本群の例とは大きく異なっている。むしろ近似するのは後者の例である。その日の出山窯跡群C地点では第14号住居跡から1点、ロクロで製作された土師器が出土している。これは本群例よりやや器高が低いものの、安定した底部をもち、体部から口縁部が直線的に外傾するもので、器形全体は極めて良く似ている。残念ながら回転ヘラケズリの再調整により底部切り離しは不明のようであるが、この土師器と同じ第1群土器とされている須恵器坏の底部切り離しではヘラ切りと静止糸切りの両者が存在する。そして、この第1群土器については土器の諸々の特徴から8世紀初頭の、多賀城創建以前の年代が与えられている。これまで底部の静止糸切りによる切り離し技法については、多賀城創建期の瓦が出土し、8世紀前半とされている日の出山窯跡群のA地点の窯跡の須恵器坏に主体的に認められてきた(岡田他：1970)。そして、多賀城創建以前で、8世紀初頭に位置付けられている長根窯跡の須恵器坏では静止糸切り技法は確認されていない（佐々木・桑原：1971)。しかし、日の出山窯跡群C地点では8世紀初頭でもこの技法の存在が確認されたことになる[註2]。このことは本群の年代ともほぼ合致し、8世紀前葉に静止糸切りによる切り離し技法を含めたロクロによる製作技法が土師器に用いられた例としてあげることができる[註3]。ただし、ロクロ使用の土師器坏の類例としてあげた両遺跡とも窯跡からの出土であり、須恵器製作に携わった工人などに関わる特殊なあり方と考えられている（宮城県教

委：1987)。本群例のような集落からの出土はまだ確認されておらず、その持つ意味については今後の課題といえる。

註1：1993年の11月に東国土器研究会の準備会が東北歴史資料館で行なわれたが、宮城県で出土している関東系土器の観察の際に、長谷川　厚・服部敬史・浅野晴樹・福田健司・服部実喜の各氏から教示を受けた。

註2：静止糸切り技法については福島県の善光寺9号窯跡などでも確認されており、8世紀の第1四半期までさかのぼって存在することが指摘されている（木本：1990)。

註3：静止糸切り技法が非ロクロの土師器に用いられた例もある。これは宮崎町東山遺跡SI432出土土器の中の関東系土器とされている1点であり、8世紀前半に位置付けられている（丹羽・村田：1992)。

（4）第IV群土器

平安時代でも主に前半期に相当する時期の土器を第IV群土器とした。土坑・溝跡を中心に、多くの遺構から出土している。また、基本層のI～III層からも広範に出土している。ここでは遺構に伴う資料を中心に取り上げたが、その他の出土土器でもこの群の土器組成を考える上で必要と思われる土器は取り上げた。

土器の分類

出土土器には土師器・赤焼土器・須恵器・灰釉陶器がある。

〔土師器〕土師器には坏・稜埦・甕・鉢がある。

坏：製作にロクロを使用し、内面をヘラミガキ・黒色処理している。これらは再調整のため底部切り離し技法が不明なるもの（第1類）と底部切り離しが回転ヘラ切りによるもの（第2類)、回転糸切りによるもの（第3類）とがある。さらにそれぞれは再調整の有無および種類によって細分される。また、器形は体部でふくらみ、内弯ぎみに外傾するもの（a類)、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（b類)、体部でふくらみ口縁部で外反するもの（c類）に分けられる。

第1類：再調整のため底部切り離しが不明のもの

A類－回転ヘラケズリの再調整があるもので、量的には極めて少ない。判明する器形はa類である（1)。再調整は体部下半まで及んでいる。内面のヘラミガキは細かく、横方向である。

B類－手持ちヘラケズリの再調整があるもので、器形にはa類（2）とb類（3）がある。2は底部が比較的安定しており、内面のヘラミガキは横方向である。3は全体的に分厚い作りのものである。

第2類：底部切り離しが回転ヘラ切りによるもの

A類－回転ヘラケズリの再調整があるもの（4）で，量的には少ない。再調整は体部下半まで及んでいる.

B類－手持ちヘラケズリの再調整があるもので、1点確認されたのみである。

第3類：底部切り離しが回転糸切りによるもの

A類－回転ヘラケズリの再調整があるもので、器形はa類である(5)。再調整は体部下半か下端まで及んでいる。内面のヘラミガキは口縁部から体部が横方向、底部は放射状である。

B類－手持ちヘラケズリの再調整があるもので、器形にはa類（6）とc類（7）がある。

再調整は体部まで及ぶものと底部のみのものとがある。内面のヘラミガキは口縁部から体部が横方向、底部が放射状である。

C類－再調整のないもので、土師器坏全体としては量が最も多い。器形にはa類(8)、b類(9)、c類（10・11）がある。内面のヘラミガキは口縁部から体部が横方向で、底部は放射状である。

稜埦：1点あり(12)、高台部分は欠けている。ほぼ中位に稜をもち口縁部はゆるやかに外反している。ロクロ調整後に内外面ともヘラミガキで磨かれており、内面については黒色処理がされているかどうかは明らかではない。

甕：製作にロクロを使用しないものと使用したものがあり、後者はさらに内面の黒色処理の有無、大きさで次のように分類される。

第1類：製作にロクロを使用していないもの（13)

口縁部から体部にかけてのものが1点ある。器面調整は内外面とも口縁部がヨコナデ、体部がハケメである。

第2類：製作にロクロを使用しているもの

A類－内面がヘラミガキ・黒色処理されているもの（14)

口径と体部径がほぼ同じである。体部外面はロクロ調整後、ヘラケズリが加えられている。

B類－内外面ともロクロ調整のもので、口径によりおおまかに分類される。

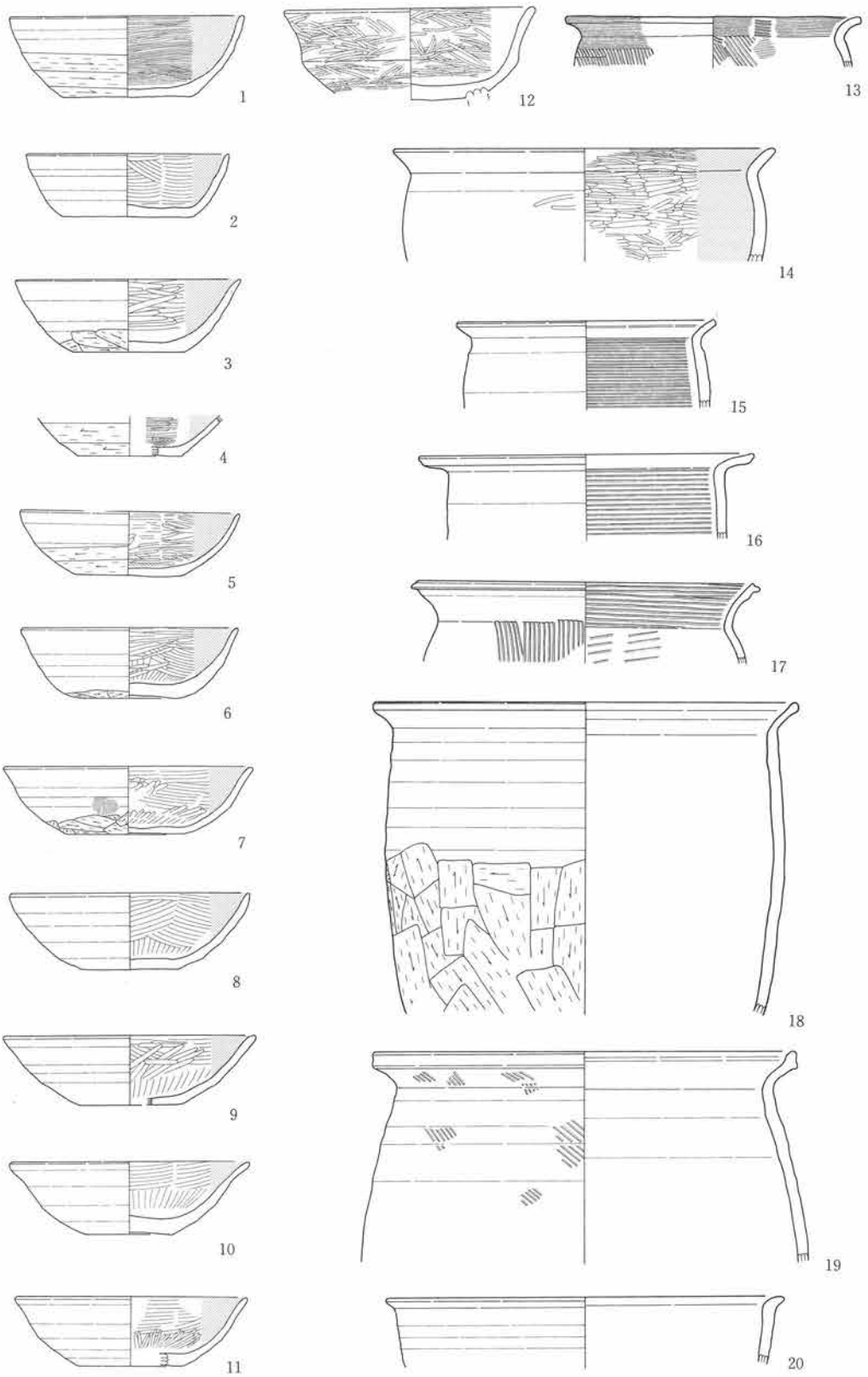
a類－口径が15cm前後のもの（15)

b類－口径が20cm前後のもの（16・17)

c類－口径が25cm前後のもの（18・19)

最大径が口縁部にあるものと、口径と体部径がほぼ同じものがみられる。また、口縁端部が上方につまみ出されて狭い縁帯状をなすものと、丸くおさまるものがある。調整では外面が平行タタキ後ロクロ調整されているものがみられる。また、回転によるハケメ調整(カキ目)、手持ちによるハケメ調整もあり、中でも前者は比較的多く確認される。c類の外面体部下半は多くはヘラケズリされている。

鉢：1点のみで、口縁部から体部上半にかけてのものである（20)。最大径は口縁部にある。



第277図　古代第Ⅳ群土器（土師器）

口縁部は短く、また、屈曲が弱く、わずかに外反している。

〔**赤焼土器**〕坏がある（1・2）。土師器や須恵器に比して、量的には極めて少なく、図示できたのは12点を数えるのみである。製作にロクロを使用し、底部切り離しは回転糸切り技法によるもので、その後の調整はみられない。器形には体部から口縁部にかけて直線的に外傾するものと、口縁部で外反するものがみられる。

〔**須恵器**〕須恵器には坏・双耳坏・埦・皿・盤・蓋・壷・甕・鉢などがある。

坏：坏には再調整のため底部切り離し技法が不明なもの（第1類）と底部切り離しが回転ヘラ切りによるもの（第2類）、回転糸切りによるもの（第3類）があり、さらにそれぞれ再調整の有無・種類によって細分される。また器形は体部でふくらみ、内弯ぎみに外傾するもの（a類）、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（b類）、体部でふくらみ、口縁部で外反するもの（c類）に分けられる。

第1類：再調整のため底部切り離しが不明のもの（3・4）

いずれも手持ちヘラケズリによって再調整が行われており、それが体部下半まで及ぶものもある。体部から口縁部にかけてやや直立ぎみに立ち上がるものと大きく開くものがある。

第2類：底部切り離しが回転ヘラ切りによるもの

A類－回転ヘラケズリの再調整があるもので、量的には少ない。

B類－手持ちヘラケズリの再調整があるものである。器形にはa、b（5）、c（6）の各類がある。再調整は体部下端まで及ぶものも多くみられる。

C類－再調整のないもので、器形にはb類（7・8）とc類（9）があり、量的には前者が多い。

第3類：底部切り離しが回転糸切りによるもの

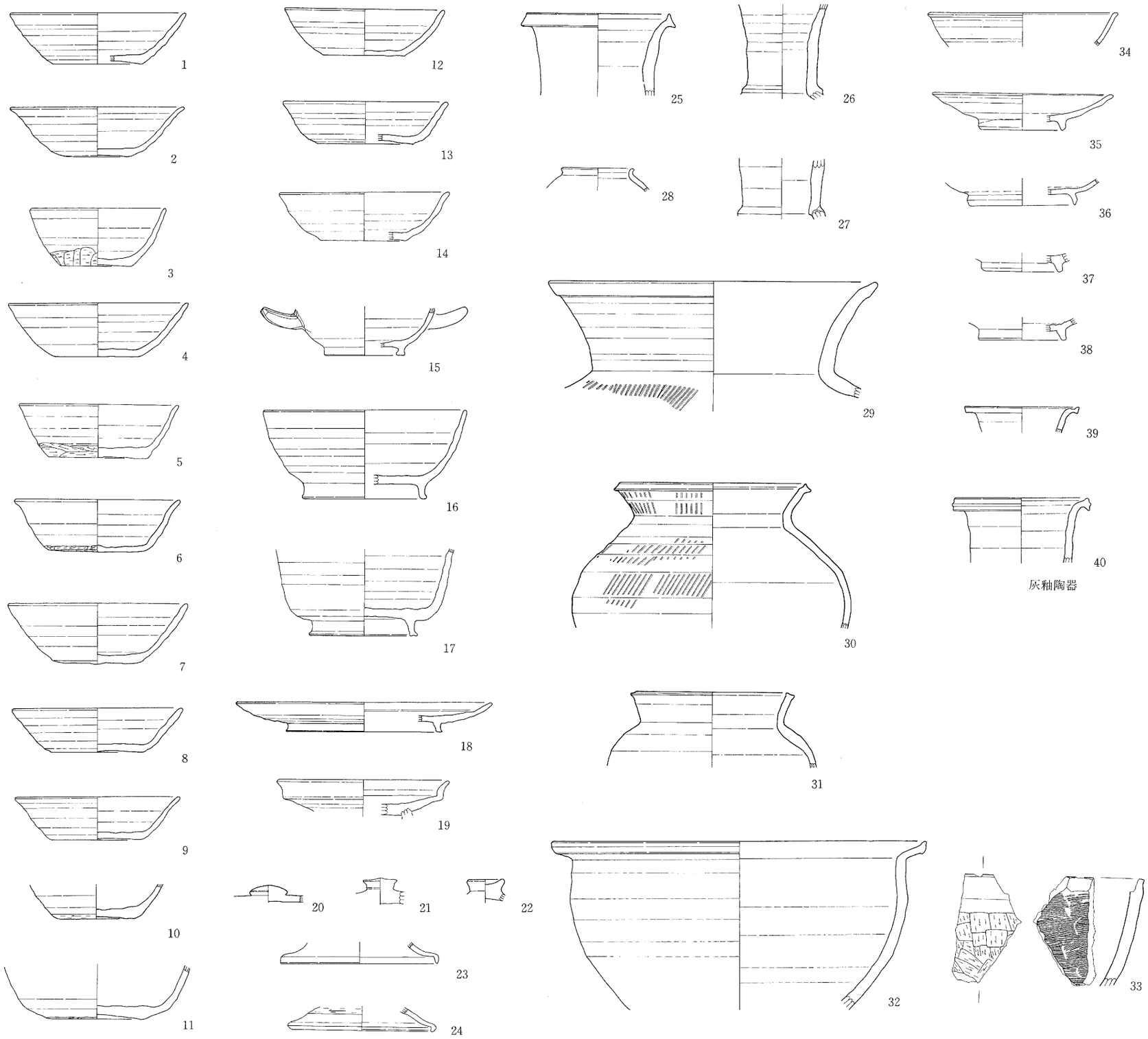
A類－回転ヘラケズリの再調整があるもの（10）で、量的には極めて少ない。

B類－手持ちヘラケズリの再調整があるもの（11）で、これも量的には少ないようである。

C類－再調整のないものがある。器形にはa（12）、b（13）、c（14）があり、その中ではbが最も多い。

双耳坏：1点のみ出土している(15)。口縁部と片方の耳を欠く。高台は低く、内側に張り出している。

埦：2点あり、いずれも高台が付く。体部から口縁部にかけての器形はやや内弯ぎみに立ち上がるもの（A－16）と直立ぎみに立ち上がるもの（B－17）がある。高台はともに外方にふん張る。



第278図　古代第Ⅳ群土器（赤焼土器・須恵器・灰釉陶器）

皿：1点あり（18)、高台が付く。内面の中位に軽い段をもつものである。

盤：2点ある(19)。高台部分を欠いている。坏部は体部が直線的に外傾し、口縁部で大きく屈曲して立ち上がっている。

蓋：全体が判明するものはない。つまみにはなだらかな凸状をなすもの(20)、わずかに凸状をなすもの（21)、凹状をなすものがある（22)。口縁部の端部にはほぼ垂直に折れ曲がるものと（23)、やや内側に折れ曲がるものがみられる（24)。

壺：長頸壷と短頸壷がある。いずれも全体形がわかる例はない。前者は口縁部分が10点前後確認されている。口縁端は上下につまみ出され、縁帯状をなす(25)。体部と口縁部の境にはリング状の突帯がめぐる例も多くみられる（26・27)。後者は2点確認された（28)。小形で口縁部は短く外反ぎみに直立する。

甕：大形のもの（第1類）と小形のもの（第2類）がある。前者は口縁部資料であるが器壁が分厚く、口縁部が外反して立ち上がるものである(27)。口縁端部は縁帯状をなす。後者は体部下半を欠く。体部が球形をなし、口縁部で屈曲して外反するものである（30・31)。その端部は狭い縁帯状をなす。大形、小形いずれも外面に平行タタキ目がみられる。

鉢：最大径が口縁部にあり、体部から口縁部にかけて屈曲するもの（第1類－32）と、そのまま立ち上がるもの（第2類－33）がある。いずれも量的には少ない。後者はロクロ調整後外面はヘラケズリ、内面はハケメが加えられている。

〔**灰釉陶器**〕確認された器種には埦・皿・長頸瓶がある。

埦：1点あり。口縁部資料である。器壁は薄く、体部はゆるやかに立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。

皿：ほぼ全体形のわかる例が1点ある。これは器壁が薄く、体部がゆるやかに立ち上がり、口縁端部がわずかに外反するもので、口径に対する器高は20%である。高台は三日月高台であるが、やや幅が広く、外側の稜が弱いものである。灰釉は刷毛塗りにより、内外面とも体部から上方に施釉されている。

この他にも埦か皿とみられる口縁部および底部資料が数点ある。その中の高台には典型的な三日月高台の器形をもつもの、外面の稜が弱く、端部が丸みをもつものがみられる。また、内面に重ね焼きの痕跡を示すものもみられた。

長頸瓶：口縁部資料が2点、その他に体部資料などが数点ある。口縁部資料の1点は器壁が極めて薄く、堅緻である。口縁部がやや開きながら立ち上がり、上方で強く外反し、端部が狭い縁帯をなす器形のものである(39)。他の1点は口縁部が直立して立ち上がり、上方でゆるやかに外反し、端部がやや広い縁帯をなす器形のものである（40)。

第Ⅳ群土器は前述のように各遺構から出土しているが、個々の出土量は極めて少なく、また土坑や溝跡の堆積土からの出土が大半であるため、住居跡床面出土のような厳密な共伴関係を示すものとはいえない。そのためここでは各遺構の堆積土出土土器でも大きく層が離れない資料については近い時期のものとして取り扱うこととした。このことをふまえ、上記の土器分類をもとに比較的出土量の多い遺構における出土土器の比較・検討をしてみると、主に土師器坏と須恵器坏の組成のあり方に相違がみられ、大きくA、Bの2群に細分することができた。A・B両群の主な遺構における出土土器の組合せは表の通りである。

A群には第40号土坑・第72号土坑・第52号溝跡・鍛冶遺構などの出土土器があり、次のような特徴がある。

①土師器・須恵器・灰釉陶器があり、中でも須恵器の量が比較的多く器種も多様である。

②組成としては土師器坏1A・1B・2A・2B・3A・3C、鉢、甕1・2A・2B、須恵器坏1・2A・2B・2C・3A・3B・3C、蓋、甕2・鉢1、灰釉陶器の長頸瓶がある。

③土師器坏は底部切り離しが再調整のため不明のもの、回転ヘラ切り、回転糸切りのものがみられ、その後に回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリの再調整がされるものと、無調整のものとがある。

④須恵器坏は2C類の、底部が回転ヘラ切りで切り離しされ、再調整がないものが主体を占め、その他に底部回転糸切り切り離しのものも伴っている。

B群には、第59号土坑・第82号土坑・第40号溝跡・第7号ピット群P20出土土器などがあり、次のような特徴がある。

①土師器・赤焼土器・須恵器があるが、赤焼土器・須恵器は量的に極めて少なく、土師器が主体である。

②組成としては土師器坏1B・2A・3B・3C、甕1・2A・2B、赤焼土器坏、須恵器坏2C・3B・3Cがある。

③土師器坏では底部切り離しが回転糸切りで、再調整のあるものと、再調整のない3C類があり、後者が主体を占める。また、その器形では口縁部が外反するc類が3C類の器形として一定の割合を占める。

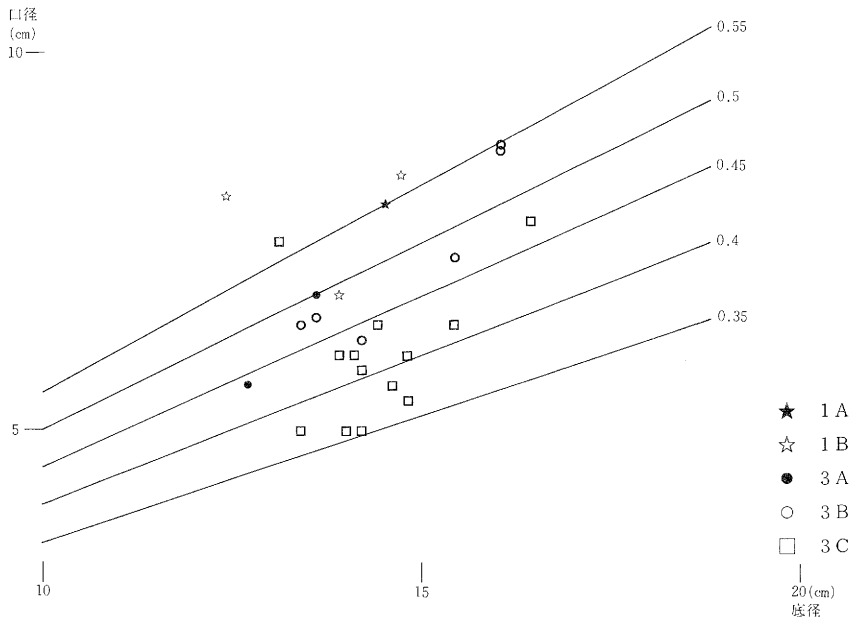
④わずかに伴う須恵器坏では、底部切り離しが回転ヘラ切りか回転糸切りで無調整のものがみられる。

なお、土師器甕では組成上、大きな違いはみられなかったが、技法上の相違点としてはA群では2B類の中に平行タタキ目や回転ハケメ（カキ目）などの須恵器的な技法とされる痕跡が多くあり、それがB群では認められないことがあげられる。

以上、A・B群それぞれの特徴と相違点を述べたが、次に遺構のあり方をみてみると、A・B両群の遺構の切り合い関係を示す例はなく、両群の前後関係については不明である。しかしながら両群の遺構はそれぞれ地点ごとにまとまりをもって分布する傾向がうかがわれる。たとえばA群の分布は主にII区西端部・V区全域・VI区中央部であり、B群のそれはIV区南端部・VI区西端部・VIII区南端部である。このように両群の遺構がそれぞれ分布を異としているのは、両群に時期差があることによるものと考えられる。

遺構別出土土器表

種別		土師器										赤焼土器	須恵器											灰釉
器種		坏							蓋			坏				坏				蓋	甕		鉢	長頸瓶
分類		1A	1B	2A	2B	3A	3B	3C	1	2A	2B		1	2A	2B	2C	3A	3B	3C		1	2	1	
A群	第40号土坑		1								4					4		2	1	1		2	1	1
	第72号土坑	1			1				1		1					6			3					
	第50号溝跡														1	2	1							
	第52号溝跡							2		1	2				1	3						1		
	鍛冶遺構					1							2			1								
B群	第59号土坑							2	1	1	1					1								
	第82号土坑							2			2													
	第40号溝跡		1					4																
	7G－P20						1	1			3	1												



第279図　土師器坏の口径・底径の分布

第IV群土器は土師器が製作にロクロを使用していることが特徴である。ロクロを使用して製作された土師器は東北地方における土師器の編年で表杉ノ入式とされており(氏家：1957)、第IV群土器の土師器も表杉ノ入式に位置付けられる。

表杉ノ入式については、最近の資料の増加に伴い、数々の細分が試みられている。その中で9世紀代を中心とした表杉ノ入式の前半期に関しては、丹羽　茂氏により、主に坏の製作技法や器形の変化などから宮前遺跡第20住→青木遺跡第21住→東山遺跡土器溜→家老内遺跡第2住の各出土土器による土器の変遷が把えられており、さらに安久東遺跡第2住へと続くとされている(丹羽：1983)。そして宮前遺跡は8世紀末から9世紀初頭、東山遺跡は9世紀中葉付近に年代が比定されている。

一方、須恵器坏については、岡田茂弘・桑原滋郎両氏により、底部の切り離し技法については回転ヘラ切りから回転糸切りへ、調整技法については再調整のあるものから調整のないものへ、口径と底径の比が大きいものから小さいものへと変遷する傾向のあることが指摘されている（岡田•桑原：1974)。また、こうした変遷は土師器坏でも同様の傾向を示すことがすでに指摘されている(桑原：1969)。このような中で、共伴関係をもつ土器全体を対象としてその変遷も検討されてきている。白鳥良一氏は多賀城跡出土の土器を共伴関係をもとに6群に分類し、その変遷を明らかにしている(白鳥：1980)。その中のC群は9世紀前半に、D群は9世紀後半にほぼ比定されるとしている。その大きな根拠としてC群については胆沢城跡出土土器との類似性を、D群については須恵器坏がヘラ切り主体のC群とは異なり、糸切り主体であることをあげている。最近、村田晃一氏は宮城県を中心とした平安時代の土器を共伴資料にもとづき8群に分けた細分案を提出しており、8世紀末から9世紀代の土器についてはその中の4つの群をあてはめている（村田：1992•1994)。基本的には丹羽氏の土師器変遷と同様のものと判断される。それに須恵器等を含めた豊富な共伴資料の提示をし、年代的な位置付けを行っているが、詳細な説明は省かれており正式な発表がまたれる。

次にこれらの研究成果をふまえて第IV群土器のA・B群の編年的位置を考えてみたい。

IV A群－土師器坏では底部切り離し後の再調整をもつものがまだ多くみられること、須恵器坏では底部切り離しが回転ヘラ切り主体であることなどから、多賀城跡のC群土器に相当するものと考えられる。また、土師器・須恵器ともに坏に回転糸切りの無調整のものも含まれていることなどから、青木遺跡21号住（小川：1980)・台ノ山遺跡8号住（阿部・千葉：1980)・南小泉遺跡3号住（渡部：1983)・多賀城跡SE2101B第III層（真山・丹羽：1991）などの出土土器とほぼ同様の内容をもつものといえる。これらの各遺跡の出土土器は村田氏の2群土器とされているもので、年代としては9世紀の第2四半期に位置付けがされている。このことからA群も9世紀の前葉から中葉にかけての土器群と考えることができる。土師器甕のタタキや回転ハ

ケメなどの調整の特徴は表杉ノ入式の初期の段階とされている上新田遺跡出土土器（小井川：1981）でも土師器の大形の甕などにこうした技法が使用されており、また、上記の南小泉遺跡3号住の甕の中にも少なからず見うけられる。平安時代でも古い段階にみられる特徴といえよう。

ところで、このA群には第40号土壙において灰釉陶器の長頸瓶が伴っている(39)。これは口縁部だけの資料であるが、井上喜久夫氏の教示によると器形や胎土などの特徴から、東濃産でありK－14窯式併行期の長頸瓶ではないかとのことである。ただし、東濃ではK－14窯式に相当する時期の窯はまだ発見されていないそうである。灰釉陶器の実年代についてはまだ定着していないが、K－14およびK－90窯式については消費遺跡における出土状況などから、前者は9世紀の第2四半期を中心とした年代、後者は9世紀後半を中心とした年代にそれぞれ落ち着きつつある（前川：1989・3、1989・8．10、井上：1992）。したがって、前述のA群の年代的位置付けとも一致しており、それが妥当なものであることを示している。

ⅣB群－土師器坏では底部切り離しが回転糸切りで、再調整のあるものよりもないものを主体とし、須恵器坏では回転ヘラ切り技法もわずかに残していることが特徴である。また、土師器坏の口径・底径の比をみると、A群に多い再調整をもつものは1：0.5前後、B群に多い3C類は1：0.4前後に多く、技法だけでなく、器形でもB類はA類よりも新しい要素をもつものといえる。こうした特徴からみると、B群はおおむね多賀城跡土器変遷のD群土器に含まれ、また、村田氏が4群土器の例としてあげている多賀城跡SK2113（真山・丹羽：1991）、同じく61次の10層（柳沢・進藤：1991）、家老内遺跡1・2号住（真山：1981）、二本松遺跡1住（平沢・小山田：1985）などの出土資料とおおよそ類似するものと考えられる。多賀城跡SK2113ではK－90窯式の灰釉陶器埦が、二本松遺跡ではK－14かまたはK－90窯式の灰釉陶器埦がそれぞれ出土しており、村田氏は4群土器を9世紀の第4四半期を中心とした年代に位置付けている。したがってB群もおおよそ9世紀後葉を中心とした土器群と考えることができる。土師器坏3C類のc類は体部が内弯し、口縁部が外反する、いわゆる「埦形坏」と呼ばれているものに近い器形をもつ（小川：1987）。この「埦形坏」については小川淳一氏は須恵器や土師器・赤焼土器などの器形や製作技法に施釉陶器埦の影響を受けて出現したものであることを指摘している。こうした「埦形坏」は家老内遺跡、二本松遺跡などの他に、9世紀第3四半期とされている（村田：1992）東山遺跡（真山：1981）でも認められており、小川氏は9世紀後半段階をその導入段階とみている(小川：1987)。須恵器坏のヘラ切り技法については以前から9世紀の前半頃でおおよそなくなり、その後は回転糸切りが主体となるとされてきた（岡田・桑原：1974、白鳥：1980)。五本松窯跡では須恵器坏B群の底部切り離しに回転糸切りと回転ヘラ切りがあり、前者が量的には主体を占めていることから、この群を回転ヘラ切り主体から回転糸切り主

体へ移行した段階と把えている(小川：1987)。このB群は9世紀の第3四半期ごろに位置付けられており、回転ヘラ切り技法が9世紀後半までは確実に残ることを示している。

次にIV群土器の中で、A・B両群の組成に含まれなかった土器について若干ふれておきたい。

土師器の稜埦は須恵器稜埦と形態的に類似する。須恵器稜埦は県内では伊治城跡SI04（氏家他：1977)、市川橋遺跡SK236（石川：1990)、上新田遺跡（小井川：1981）などで出土しており、その年代は伊治城跡・市川橋遺跡では8世紀後半代、上新田遺跡では8世紀末から9世紀初頭ごろ（村田：1994）とされている。また、須恵器稜埦を生産している会津若松市大戸窯跡では、 下限として8世紀末から9世紀前葉に比定されている上雨屋112号窯式までその存在が確認されている（石田：1992・1994)。そこに示されている資料は器形が本例に類似するものであり、また、9世紀前半とされている水入遺跡の出土例も本例と類似するものである。土師器の稜埦は出土例が乏しく、どの時期に伴うものかは明確でないが、須恵器稜埦の年代の下限がほぼ9世紀前半代であることからA群に近い時期のものとしておきたい。

次に須恵器の双耳坏であるが、 出土例としては伊治城跡のSI173（菊地：1991）の各遺構、多賀城跡SK981(氏家他：1978)などがあり、 8世紀後半から9世紀初頭までその存在が確認される。また、大戸窯では9世紀前葉から中葉とされる南原19号窯式まで生産されており、以上から本例もまたA群に近い時期のものと考えられる。

須恵器稜埦Aに類似するものは多賀城跡SE2101Bから出土している。これは、回転ヘラ切り主体の須恵器坏と伴っており、年代は9世紀前半とされている（真山・丹羽：1991)。したがってこれもA群に近い時期のものといえる。

須恵器埦Bと盤と数点の長頸壷・短頸壷については、他の須恵器と比較すると色調・胎土などに大きな相違がみられた（写真80－6・7・9・10)。それは

・色調が青灰色か緑灰色を呈し、外側の表面が灰釉陶器のような光沢（自然釉）をもっていること

・器壁を観察すると、表面と器壁内部の色調が大きく異なり、内部が褐色がかった色調を呈すること

・砂粒は含むものの胎土は極めて緻密で、表面には白色と黒色の小さな斑点が多く認められることなどである。会津若松市教委の石田明夫氏によると、こうした特徴は大戸窯製品によくみられるとのことである。

次に個々に大戸窯製品と器形面での比較をすると、埦Bは大戸窯の深杯A－1とされるものに全体の器形や高台の形態が極めて類似しており、体部と底部の境が明瞭で、高台はやや外方にふん張るものである。盤は高台部分を欠くが、口径は14.0cmと小形の盤に属し、口縁部が「く」の字状に外反するもので、大戸窯のIIIb類に含められる。こうした特徴は南原19号窯式

の段階に近いものである。長頸壷は口縁部中心の資料であるが、口縁部と体部との境にリング状の突帯をもつことが大きな特徴である。この特徴は大戸窯ではA'類とされているものであり、また口縁端部の形態は外側がやや下がるもので、大戸窯では③とされているものである。こうした特徴も南原19号窯式段階のものに共通するものである(石田：1994)。以上から、色調や胎土だけでなく、器形的な面でも大戸窯の資料と極めて類似しており、石田氏からは大戸窯製品とみてよいとの教示を受けた。また、年代としては主体は9世紀前葉から中葉にかけての南原19号窯式段階の時期のものとの教示を得ている。したがってこれらの資料はA群の時期に併行するものと考えられる。なお、大戸窯の製品は石田氏によると、多賀城跡や名生館跡などの官衙遺跡を中心に確認されており、それらには本資料と同様の年代のものが多いということである。また、器種としては長頸壷がほとんどで本資料の埦Bなどは極めて珍しいとのことである。

灰釉陶器には、A群の長頸瓶以外にも、埦・皿・長頸瓶など10数点がある。それらの大半は小破片資料であるが、井上喜久男氏によると埦は東濃産で(34)、光ヶ丘1号窯式(K－90窯式併行)で、その他はいずれも猿投産であり(35～38・40)、大半がK－90窯式でも後半のものであろうとのことである。このことはは皿の高台の形態が三日月高台に比べて、内側の内弯の度合いや外側の稜がやや弱い点からもいえる(斎藤：1989)。K－90窯式の実年代は前述したように9世紀後半を中心としたものになりつつあり、こうした年代観からするとこれらの灰釉陶器はB群に伴ったものと考えられる。

以上、古代のⅠ～Ⅳ群土器についてその編年的位置付けを行ったが、それらをまとめると次のようになる。

古代第Ⅰ群土器－古墳時代中期後半（南小泉式）　5世紀後半ごろ
古代第Ⅱ群土器－古墳時代後期（住社式）　6世紀後半ごろ
古代第Ⅲ群土器－古墳時代末～奈良時代前半（栗囲式～国分寺下層式）　7世紀末～8世紀前半－8世紀前葉中心
古代第ⅣA群土器－平安時代前半（表杉ノ入式）　9世紀前葉～中葉
古代第ⅣB群土器－平安時代前半（表杉ノ入式）　9世紀後半

このように中田南遺跡の古代の土器は大きく4つの群に分けられ、それぞれが限定された時期の土器であることが判明した。以下の古代関連の遺構、遺物については、基本的にこれらの古代ⅠからⅣの土器群を時期区分として使用していきたい。

3．　中世の陶器・磁器・土師質土器

（1）陶器・磁器

中世に属するとみられる陶器・磁器は遺構および遺構外の出土を含めると、総数77点を数える。その中の陶器は66点で器種には埦・鉢・甕・梅瓶などがある。また、磁器は11点あり、青磁と白磁がある。それらの産地別出土量をみたのが第　　図である。陶器では常滑産が最も多く、次に在地・瀬戸・渥美へと続いている。これらの陶器・磁器は大まかに３つの所属年代にまとめることができる。すなわち

中世Ⅰ期……中世前半の資料で、13世紀から14世紀前半を中心とした年代のもの

中世II期……中世後半でも古い段階の資料で、14世紀末から15世紀前半を中心とした年代のもの

中世III期……中世後半でも新しい段階の資料で、15世紀後半から16世紀を中心とした年代のもの

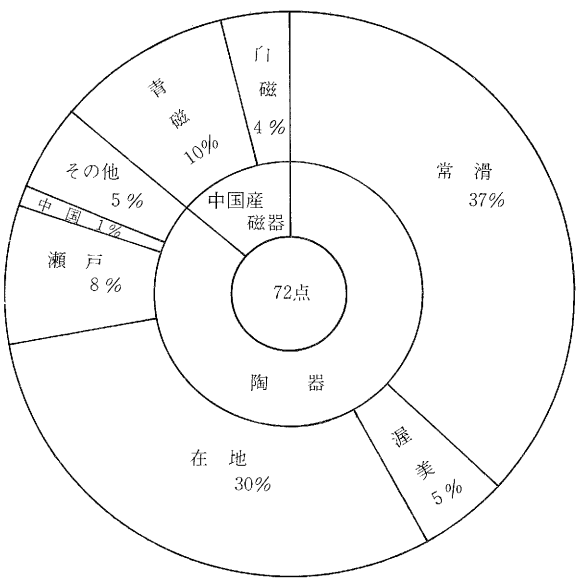
である。以下の中世関連の遺構・遺物の年代についてはこの区分を基本的には使用していきたい。

次に産地別にみていくと、常滑産は28点あり、その内訳は壷･甕類が25点、鉢が３点であり、前者が圧倒的に多い。また、それらの時期は明らかに中世Ⅰ期に比定されるものが９点ある。その他は時期を明確にはできなかった。壷の中には三筋壷とみられる破片も含まれている。

在地産は23点あり、その内訳は擂鉢を含めた鉢類が18点、壷・甕類が５点であり、常滑産とは異なり、鉢類が多いのが特徴である。それらの時期はほとんどが中世Ⅰ期に位置付けられるものである。在地産としたこれらには胎土などから白石窯の製品と考えられるものが多く含まれている。

瀬戸産は６点あり、その内訳は埦１点・天目茶埦３点・鉢１点・梅瓶１点である。時期はいずれも中世II・III期に比定されるものである。

渥美産は４点あり、いずれも壷・甕類である。中世Ⅰ期に比定されるものが２点あり、他は時期を明確にできなかった。



第280図　陶器・磁器産地別出土量

この他の陶器の中には中国産の壷が含まれている。これは底部資料で外面は露胎で、内面に褐灰色釉がかけられている。共伴資料から中世Ⅰ期のものと考えられる。

青磁は溝跡を中心に8点出土しており、器種では碗が6点・盤が1点確認された。いずれも中国の龍泉窯系の製品とみられ、時期は中世Ⅰ期に比定されるものである。

白磁は3点あり、碗と皿が確認された。いずれも中国産であり、碗と染付の皿の1点は中世Ⅲ期のものである。また、皿の1点は口冗のみが露胎のもので、中世Ⅰ期に比定されるものである。

（2）土師質土器

土師質土器には皿・埦・擂鉢がある。埦は1点あり、時期は特定できなかったが、中世Ⅲ期と推定される井戸跡から出土している。擂鉢は1点あり、中世後半から近世にかけてのものと考えられる。ここでは皿を取り上げて分類を行い、出土状況・組成・年代について検討してみたい。なお、この土師質土器の埦・皿は一般に「かわらけ」と呼ばれているものである。

皿には手づくねによるもの（Ⅰ類）とロクロで調整されたもの（Ⅱ類）があり、両者はさらに器形・製作技法・法量などで次のように分類される。

Ⅰ類：手づくねによるものである。器形により細分される。

1類－体部から口縁部にかけて2段の軽い稜をもち、口縁部がわずかに角ばるもの（1）。

Ⅰ・Ⅱ層から出土した1点がある。外面は稜の上はヨコナデで、その下はナデが認められる。内面はヨコナデである。

2類－体部から口縁部にかけて1段のわずかな稜をもつか、または稜をもたないもので、口縁端部は丸みをもつもの。さらに法量に大小がみられる。

A類－口径が12cm以上の大形のもの（2）

B類－口径が10cm以下の小形のもの（3）

井戸跡・土坑・溝跡などから少量出土しており、A・B類とも3点ずつの出土である。A・B類とも外面は稜の上はヨコナデ、その下は指頭によるオサエと軽いナデ調整であり、内面はヨコナデである。B類の1点は油煙が付着しており、灯明皿として使用されている。

Ⅱ類－ロクロ使用により調整されているものである。さらに再調整の有無により細分される。

1類－底部切り離しが不明で、回転ヘラケズリの再調整があるもの（8）

1点あり、Ⅰ・Ⅱ層から出土したものである。再調整は底部全面と体部下半に及んでいる。

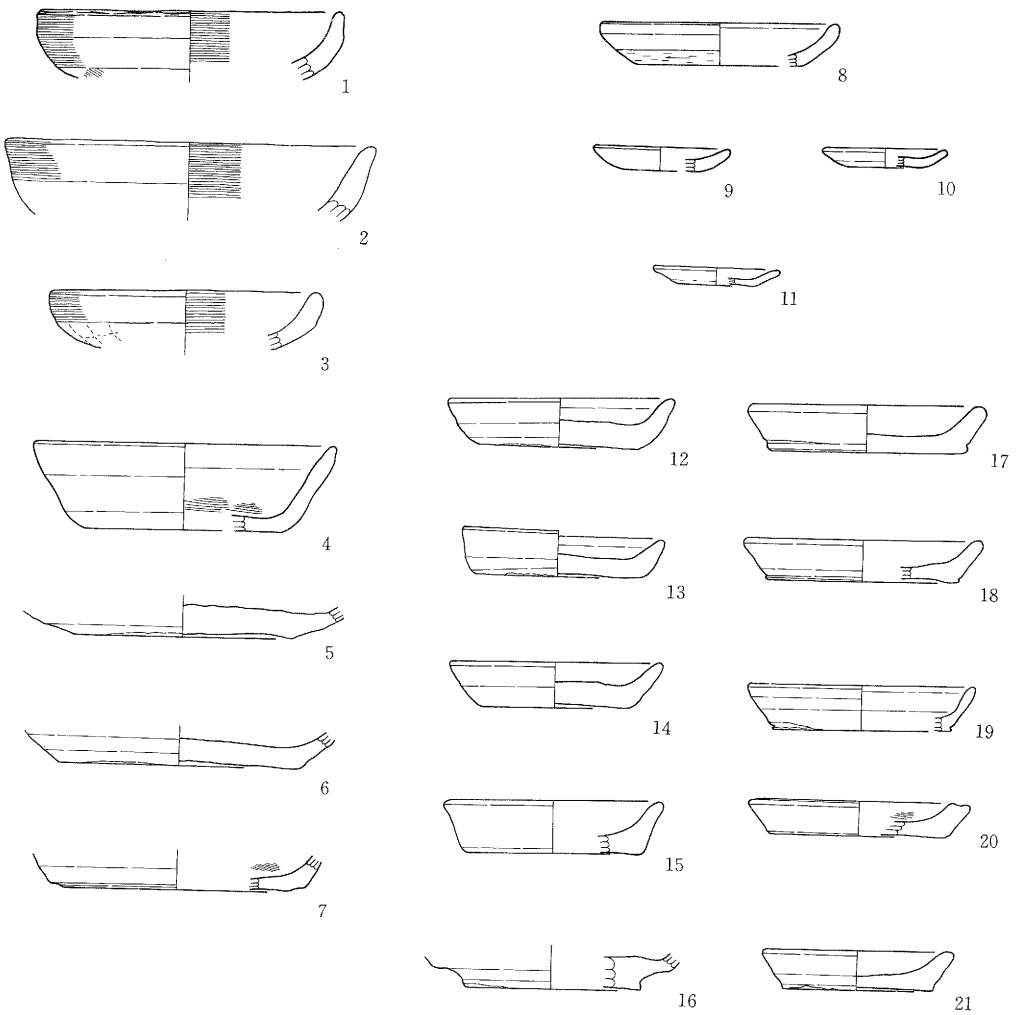
2類－底部切り離しが回転糸切りで、再調整がないもの。さらに法量により3つに細分される。

A類－口径が11cm以上の大形のもの（4～7）

B類－口径が８cm前後の中形のもの（12～21）

C類－口径が５cm前後の小形のもの（９～11）

２類はⅠ・Ⅱ類通して量的に最も多く、その中でもＢ類が多い。これらは竪穴遺構・井戸跡・土坑などから出土している。Ａ類は５点あり、その中で全体が知り得るものは２点ある。全体的に分厚く、器形はともに体部から口縁部にかけて直線的に外傾している。底径からこの類に想定される底部資料を含めると、底部が他の部分に比べて分厚いものと薄いものがある。前者は上げ底状をなしている。また、底部外面に板状圧痕が、内面の見込み部分には指ナデが認められるものが２点みられる。Ｂ類は全体形のほぼわかるものが10点ある。これらはいずれも口径と底径の差が小さく、体部から口縁部にかけて極めて短く立ち上がるのが特徴である。底部が他の部分に比べて分厚いタイプと薄いタイプがあり、前者の多くは口縁部が尖っており、後



第281図　土師質土器―皿

者では口縁端部が丸みをもつものと沈線状の凹みをもつものとがみられる。また、前者では底部が高台状に残される例がある(16)。また、底部外面に板状圧痕をもつものも少量認められた。C類は5点あり、いずれも遺構以外から出土したものである。これらは口径と底径の差が大きく、体部から口縁部にかけて大きく外傾か、外反して立ち上がる。器壁は薄く、胎土は堅緻で、ロクロ目もシャープなものが多い。

次に、土器の出土状況についてみてみたい。これらの土器が出土している遺構には第2号竪穴遺構・第3・4・5号井戸跡・第30号土坑などがある。この中の第5号井戸跡は量的に最も多く、大きく分けて3つの堆積土で出土している。また、この井戸跡は第2号竪穴遺構と重複しており、それよりも古いことがわかっている。それぞれの組成は次の通りである。

・第2号竪穴遺構－II2A・II2B　　・第3号井戸跡－II2A・II2B
・第5号井戸跡1～3層－II2A　　・第4号井戸跡－I 2
〃　6層－II2A・II2B　　・第30号井戸跡－I 2・II2B
〃　9層－II2B

第5号井戸跡の堆積土の各段階と第2号竪穴遺構はそれぞれ時間的な経過は存在するものの、全体としてII A・II Bを主体としており、組成に大きな相違は認められない。ただし、II 2B類の中で、底部が分厚いタイプが第5号井戸跡の下層ではみられ、その上層から第2号竪穴遺構ではみられないことが相違点としてあげられるが、量的に少ないため、これが土器群の変化として把握できるかどうかは不明である。I 2類とII2B類は第30号土坑で共伴しており、以上から広い把え方をすれば、I 2・II2A・II2Bの各類はおおよそ近い時期の土器群と考えることができる。なお、それぞれの比率は、I 2B－13%、II2A－26%、II2B－61%であり、手づくね土器とロクロ調整土器との比は、約1：9である。

次にこの土器群の年代について考えてみたい。これらの土器群と類似する土器は県内では仙台市山口遺跡10次の井戸跡（中富：1991）、多賀城跡政庁南門の南側で発見された遺構群（高野他：1983）、多賀城市新田遺跡SD1200（千葉他：1990）などで出土している。また県外では神奈川県鎌倉市の各遺跡で、豊富な出土例が報告されている。

山口遺跡では第3号井戸跡から少量ながら皿が出土しており、それらにはロクロ調整と手づくねのものがある。量的には前者が多く、いずれも大きさは本群のII2B類とほぼ同様である。また、器形では底部が分厚く、体部から口縁部にかけて短く立ち上がる点などの類似する要素はあるものの、本群よりは口径・底径の差が大きく、口縁端部が鋭く尖る点で異なっている。山口遺跡の資料は12世紀後半の青磁と共伴していることなどから、12世紀末ごろに位置付けがなされている。多賀城跡では北地区堆積層の6層とSK1373から資料がまとまって出土している。前者資料はいずれもロクロ調整のものである。本群のII2A・II2B類と大きさは共通するが、

器形は口径と底径の差が極めて大きく、立ち上がりが大きく外に開くもので、また、II2B類では底部が高台状に分厚く残されているのが特徴であり、本群とは大きく異なっている。後者資料はいずれもロクロ調整で、手づくねは含まれない。それらには本群のII2A・II2B類と器形が類似するものが多く含まれており、中でもII2B類は技法・器形ともほぼ共通している。年代は共伴する青磁や常滑の甕から13世紀後半頃に比定されており、また前者の堆積層のものは後者の遺構より層位的に古く、資料の諸特徴からも13世紀前半に比定されている(高野：1990)。新田遺跡の資料には、手づくねのＩＢ類、ロクロ調整のII2A・II2B類があり、ＩＢ類の量が本群より比較的多いようであるが、器形はＩB・II2B類とも類似するものである。ただし、新田遺構のIIＢ類は底部切り離しが全て静止糸切りであり、本群とは異なっている。新田遺跡の資料は13～14世紀前半のものと考えられている。隣県では福島県で土師質土器の変遷が把えられている(中山：1988)。これによると、本群と類似するものは第II期に位置付けられ、年代は13世紀から14世紀中頃とされている。この段階は糸切り底のものと手づくねのものが共存することが特徴とされ、また、板状圧痕の存在も指摘されている。

鎌倉の土師質土器については服部実喜氏の編年がある(服部：1984)。その中で手づくねのＩＢ類に最も近いものをさがせば第III期段階にあるが、器形的に若干異なる点もあり、ＩＢ類はよりやや粗雑な感じを受ける。また、ロクロ調整のIIＡ・IIＢ類は第III期段階のものに近いものであり、IIＡ類はIII期のIII群Ａに、IIＢ類はIII群Ｂに類似している。しかし、また本土器群には古い要素も認められる。IIＢ類の中の底部を高台状に残すのがそれであり、これは鎌倉のＩ～II期段階によくみられる特徴である。鎌倉の第II期は13世紀前半代、第III期は13世紀中葉から13世紀後半にそれぞれ年代が比定されている。そして、鎌倉では手づくね土器は次の第IV期には消滅すると考えられている。

本群土器と伴出している陶器・磁器には第２号竪穴遺構での12～13世紀の渥美産の壷か甕の13～14世紀の在地産の鉢などがあり、共伴資料からは本群土器は中世Ｉ期のものと考えることができる。そして多賀城跡のSK1373出土資料に極めて近似する特徴をもつこと、また鎌倉の第III期の土器群との類似などから本土器群の年代は中世Ｉ期の中でもおおむね13世紀後半ごろに位置付けられるものと考えられる。なお、本群に認められた底部の板状圧痕は鎌倉では第II期には出現している。

次に上記の土器群以外の資料について若干ふれておきたい。Ｉ1類は平安京跡・平泉町の柳之御所跡などから出土する手づくね土器の中で二段撫で技法の特徴をもつものにやや近い。この特徴は手づくね土器の中でも古い段階に多く、柳之御所跡では12世紀の中ごろの土器の基本的な特徴の１つとされている(松本：1993)。しかし、本例はこれらよりはかなり分厚く、成形や整形のあり方も粗雑なものになっており、同じ年代のものかどうかは明確ではない。

II1類は底部および体部下半に回転ヘラケズリの再調整があるものである。類例は乏しく、わずかに仙台市上古川遺跡（千葉：1980）を知り得たのみである。ここでは土師質土器皿約100点中、10数点に回転ヘラケズリが確認されている。それらの大きさ、器形には本例と近似するものが多く認められる。年代は近世以降とされており、本類も同様の年代のものと考えられる。

II2C類は口径が5cm前後で、高さが1cm前後の小形の皿である。大きさ・器形・技法などの点で、おおむね類似するものは、県内では前掲の上古川遺跡の他に、仙台城三ノ丸跡（結城・佐藤：1985)・北前遺跡（佐藤他：1982）などの出土資料である。年代は上古川遺跡は前述のように近世かそれ以降、仙台城三ノ丸跡ではIII期とされている18世紀初頭から19世紀初頭、北前遺跡は主に江戸時代後半に比定されていることから、本群は近世かそれ以降の年代のものと考えられる。

4．とりべ

とりべはるつぼと同様に鋳造用の土器であり、中でもとりべは片口の形態をなすのが特徴である。本遺構からは総数86点のとりべが出土したが、大半は小破片資料であり、全体形の知り得るものは極めて少ない。そのため、ここでは口縁部が片口かどうかが不明なものも含めてとりべとして扱っている。なお、とりべとして抽出したものは全て内面には著しい加熱の跡があり、金属に関わる溶解物が付着しているものである。

分類

とりべにはとりべ専用に製作されたとみられるものと土師器・須恵器の転用とみられるものがあり、次のように分類される。

A類：とりべ専用に製作されたとみられるもの（1～9）。

いずれも口径が10cm前後、器高が4cm前後の小形のものである。とりべの大部分はこの類に属するものと考えられる。これらには器厚の厚いもの（a類）と、器厚の薄いもの（b類）がある。

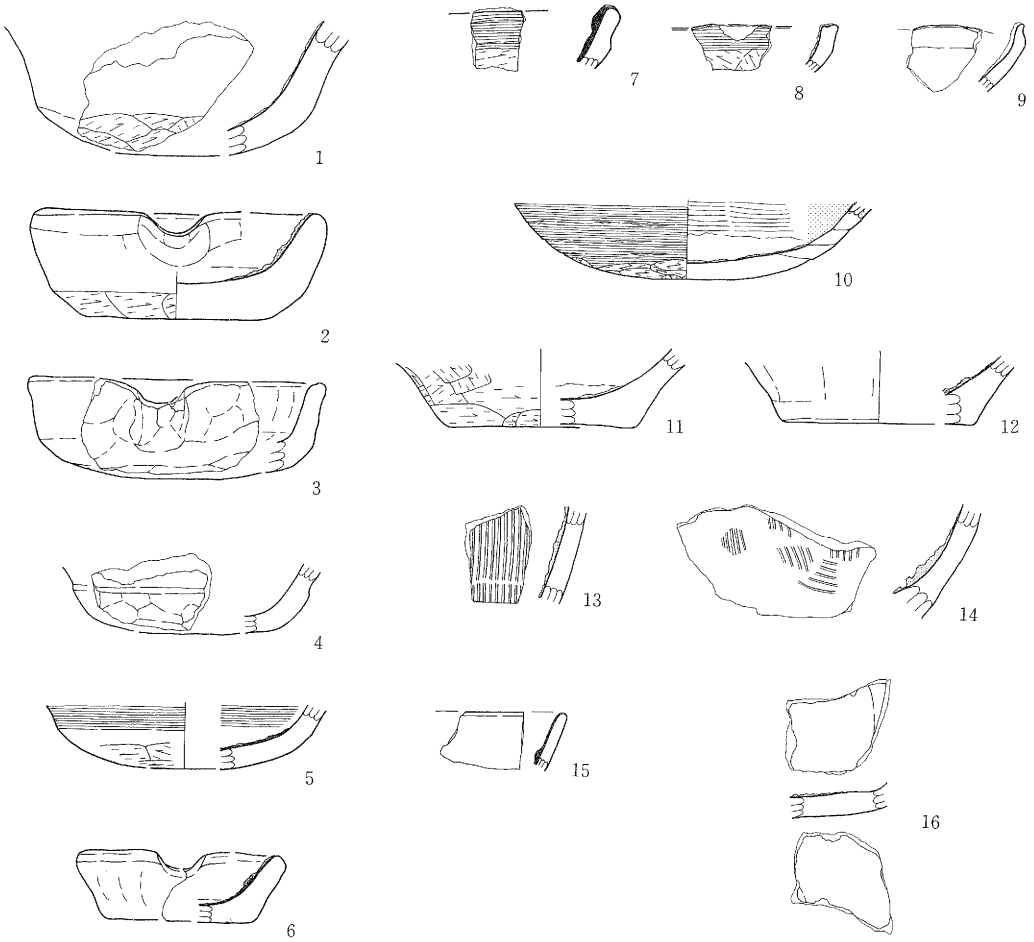
Aa類－2点あり、器厚は1.2cmと1.4cmである。前者は体・底部が丸底状をなすものとみられ、体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部は外反している。外面は稜の下方はヘラケズリである（1）。後者は片口になっている。底部は平底でそこからゆるやかに立ち上がっている。体部と口縁部との境に稜をもち、その下はヘラケズリである（2）。

Ab類－確実なのが20数点あり、Aa類より量的に多い。器厚は0.8mm前後である。体・底部が丸底状のもの（i）と底部が平底のもの（ii）があり、量的には前者が目立つ。体・底部が丸底状のものは、体部と口縁部の境に稜をもつものと段をもつものがあり、その稜や段の位置には下方に付くもの（3～5）と上方に付くものがみられる（7～9）。稜をもつ例は口縁部が

直立ぎみに立ち上がり、器面は全面が指頭によるオサエである(3)。段をもつ例では段の上方はヨコナデ、その下方はオサエやヘラケズリである。底部が平底の例は片口のもので、器形は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する(6)。外面はオサエである。なお、このAb類に含まれるものの中に外面が丁寧にヘラミガキ調整されている資料も少量認められた。

B類：土師器・須恵器を転用したもの（10～16)。

10数点確認された。これらには土師器では坏・甕、須恵器では坏・蓋などの器種がみられる。10は内面がヘラミガキ・黒色処理の土師器坏であり、内面の底部付近に溶解物の付着がある。11～14は土師器甕の主に底部付近であり、11・12はヘラケズリ、13・14はハケメの調整が認められる。内面の溶解物の付着は底部付近を中心としている。13は体部破片であり、あるいは甕を横にして使用された可能性も考えられる。15・16はそれぞれ須恵器の坏と蓋の一部である。蓋では内面中央付近に溶解物が付着している。



第282図　と　り　べ

出土状況と年代

とりべの中で遺構に確実に共伴する例はないが、遺構に近い時期を示すとみられるものがわずかながら認められた。それは下記の遺構から出土したとりべであり、その点数と分類項を示した。

・第11号住居跡（堆積土）－１点（Ab ｉ類）
・第12号住居跡（堆積土）－２点（内１点－Ab ii類）
・第27号住居跡（掘り方埋土）－２点（内１点－Ab ｉ類）
・第30号住居跡（堆積土）－１点
・第32号住居跡（堆積土）－１点（Ab類）
・第13号掘立柱建物跡（柱痕跡）－２点（内１点－Aa類）

これらの竪穴住居跡では、床面および堆積土などから出土している土器はいずれも前項の古代III期を主体としており、住居跡の時期もおおよそその段階のものと考えられる。また、第13号掘立柱建物跡では同じ柱穴の中からほぼ古代III期に含められる土師器坏が出土している。次にとりべの中のＢ類をみると、土師器はいずれも製作にロクロを使用しないものである。また、坏は体・底部が丸底状をなすもので、外面の底部のみヘラケズリ調整がされている。こうした特徴は第III群土器にもっとも近いものといえる。以上から前掲の遺構から出土したとりべのAa・Ab類も、また製作技法や器形的特徴が土師器と類似するとりべのＢ類もおおよそ古代III期に伴うものと考えられる。次に新しい遺構に混入したり、基本層から出土したとりべを含めて、それらの平面分布をみると、極めて限定された地点に集中していることがわかる（第283図）。

第283図　とりべの出土分布（調査区外の丸は遺構に伴わないもの）

すなわち、III区南端の第11・12号住居跡周辺、VI区第27・30号住居跡および第13号掘立柱建物跡周辺、Ⅷ区南端の第32号住居跡周辺である。このことは出土したとりべ全体がほぼ同時期のものであり、遺構外のとりべも前掲の遺構出土のとりべと密接に関連するものであったことを示すものと考えられる。

このように出土したとりべは古代III期に伴うもので、8世紀前葉を中心とした年代のものと考えられる。

このとりべについては、内面の付着物の分析結果が第VI章5に報告されている。それによると、6点の資料中、3点に金属が付着しており、その金属は2点が鉄と銅を、1点が銅とビスマスを含んでいる。分析者の田口　勇氏によると鉄の鋳造の場合は銅は検出されないが、銅の鋳造の場合は鉄、銅とも検出されるとのことである。また、後述するように、とりべと一緒に出土したフイゴの羽口の中には銅が検出されているものもあり、こうしたことから本遺跡出土のとりべは主に銅の鋳造に使用されたものと推測される。残念ながら今回の調査では銅に関わる鋳造関係の遺構は確認されなかったが、前述のようにとりべが比較的限定された地点で発見されていることから、それらの近辺に銅鋳造工房に関わる施設の存在が推定される。対象となった銅製品についても発見されなかったが、とりべがいずれも小形で、内面の溶解物の付着範囲も底面付近であるものが多いことから、小形の製品の製作に関わったものと考えられる。

古代でも7～8世紀の銅に関わる資料を次にみてみたい。とりべの類例は県内では現在のところ中田南遺跡以外は確認されていないが、るつぼが賀美郡衙跡に推定されている宮崎町東山遺跡から1点出土している（丹羽・村田：1992）。しかし、この資料は表土からの出土であり、またこのるつぼとも関連して鉄器や銅器の工房と考えられている住居跡は8世紀末頃のものである。東北地方では銅生産に関わる遺構は岩手県北上市の藤沢遺跡で発見されている。ここでは炉跡とみられる遺構周辺から、るつぼやフイゴの羽口が多数出土している。るつぼは専用として作られたものと転用されたものがあり、前者は手づくねによる粗雑な作りのものであり、器形面でも本資料とは大きく異なっている。この遺構は年代は8世紀末とされている（稲野・稲野：1989）。関東地方では穴沢義功氏によると、7～8世紀代の銅の鋳造に関わる資料は確認されていないとのことである。こうした銅の鋳造遺構および遺物は最近、奈良県の藤原京跡および飛鳥池、平城京跡などの都城周辺で発見されている。飛鳥池は調査により7世紀末から8世紀初頭にかけての藤原宮期における金属製品などの生産遺跡であったことが判明している（奈文研：1992）。その中の銅生産に関するものとしては、炉跡があり、遺物としては、るつぼ・とりべ・鋳型などがある。また、釘や針・銅線などの銅製品も多量に発見されている。 とりべは約200点出土しており、いずれも内面が火熱を受け、銅湯玉やカラミが付着しており、その状況は本資料と共通している。それらには片口のとりべと、土師器や須恵器を転用したものがあ

る。前者はさらに椀形の厚手のものと器形が土師器坏に似る薄手のものがあり、厚手のものは少なく、量的には薄手のものが多い。後者の転用品も多く出土している。飛鳥池のとりべは本資料と器形的には若干異なるものの、組成のあり方は同様のものである。[註] 平城京跡では右京八条一坊十三・十四坪の調査において、銅の鋳造資料が発見されている（奈文研：1989)。この中の十四坪では土坑群の周辺からるつぼ・フイゴの羽口・鉱滓などの遺物が多量に出土した。 るつぼは総数430点が出土し、土師器の甕などを転用したものがその大部分を占めている。これらはとりべとの区別が難しいとされており、中にはとりべとして使用されたものも存在したものと考えられる。銙帯金具の未製品等が出土していることなどから、小型製品の製作場と考えられ、官営の工房としての性格が推定されている。時期は奈良時代前半とされており、本資料の年代と近い時期のものである。

このように7世紀末から8世紀前葉という古い段階の銅鋳造に関わる資料は西日本ではわずかに存在するものの、東日本においては極めて少ないのが現状である。その点で本遺跡におけるとりべを主とした鋳造資料の発見は銅生産の実態を考える上で、重要な意義をもつものといえる。

註：飛鳥池出土の銅鋳造資料については飛鳥藤原宮跡発掘調査部の西口寿生氏のご好意でその一部を観察させていただいた。

5．土製品

土製品には土錘・円面硯・フイゴの羽口・瓦塔片とみられる資料があり、その他に土人形・研磨痕のある土器や陶器片などがある。

土錘－竪穴住居跡や土坑・溝跡などの遺構と基本層から25点出土しているが、破損品が多く完形に近いものは13点である。これらは大きさ・形態により次のように分類される。

1類：大形のものである。孔径は1.5～2㎝である。

A類－両端が角ばるもの（1)。2点出土している。

B類－両端が丸みをもつもの（2)。2点出土している。

2類：小形のものである。長さは4～7㎝、径は2㎝前後で、重さは1点が30ｇを超すが、その他は5～18ｇである。また、孔径は5㎜前後である。

A類－両端がやや角ばるもの（3)。1点のみである。

B類－全体が紡錘状に近い形態のもの（4・5)。18点出土しており、量的には最も多い。

これらの内、1A類は古代IV期の土器が出土する第21号溝跡から、2A類は古代III期の土器が出土する第2号住居跡から、2B類は第II・III・IV期の土器が出土する遺構からそれぞれ出土し

ている。1A・2A類とも資料が少なく、一時期に限定できるかどうかは明確ではないが、2B類は古代II～IV期の段階で、古墳時代から平安時代ごろのものと考えられる。

円面硯－第20号ピット群と基本層から出土している。前者は2つのピットから同一個体の破片が出土したものである(6)。脚部下半のみが残存しており、脚部径は18.8cmと復元される。方形の透かしをもち、外面にはヘラによる線刻が2本施されている。その線刻の一部にはヘラ描きの文字が認められる。脚部下端付近には突帯がめぐっている。

この円面硯が出土した第20号ピット群からはこの他に回転ヘラ切りの須恵器などが出土している。また、付近には古代IV期の土器が出土する土坑や溝跡が数多く存在することなどから、この円面硯は平安時代に属する可能性が高いものと考えられる。

フイゴの羽口－竪穴住居跡・土坑・溝跡などの遺構と基本層から30点出土しているが大半は小破片資料であり、残存の良好なものは2点のみである（7・8)。この2点は長さが15cm以上、直径が7～8cmの円筒形をしており、孔径は約3cmである。先端は焼けただれ、溶解物が付着している。この中の1点の表面からは第VI章5に報告されている分析結果によると、銅と硫黄が検出されている。また、その他の小破片資料の中で、とりべが出土している第11号および第27号住居跡出土の羽口では、前者は銅が、後者は鉄が検出されている。フイゴの羽口は鍛冶遺構からも検出されている。そこから出土した鉱滓は分析資料のいずれも製鉄滓であることが報告されている。以上からフイゴの羽口には鉄生産に関わったものが主体をなすと考えられるが、中には銅生産に関わったものも含まれていることがわかる。これらの羽口は主に古代III・IV期の遺構から出土している。

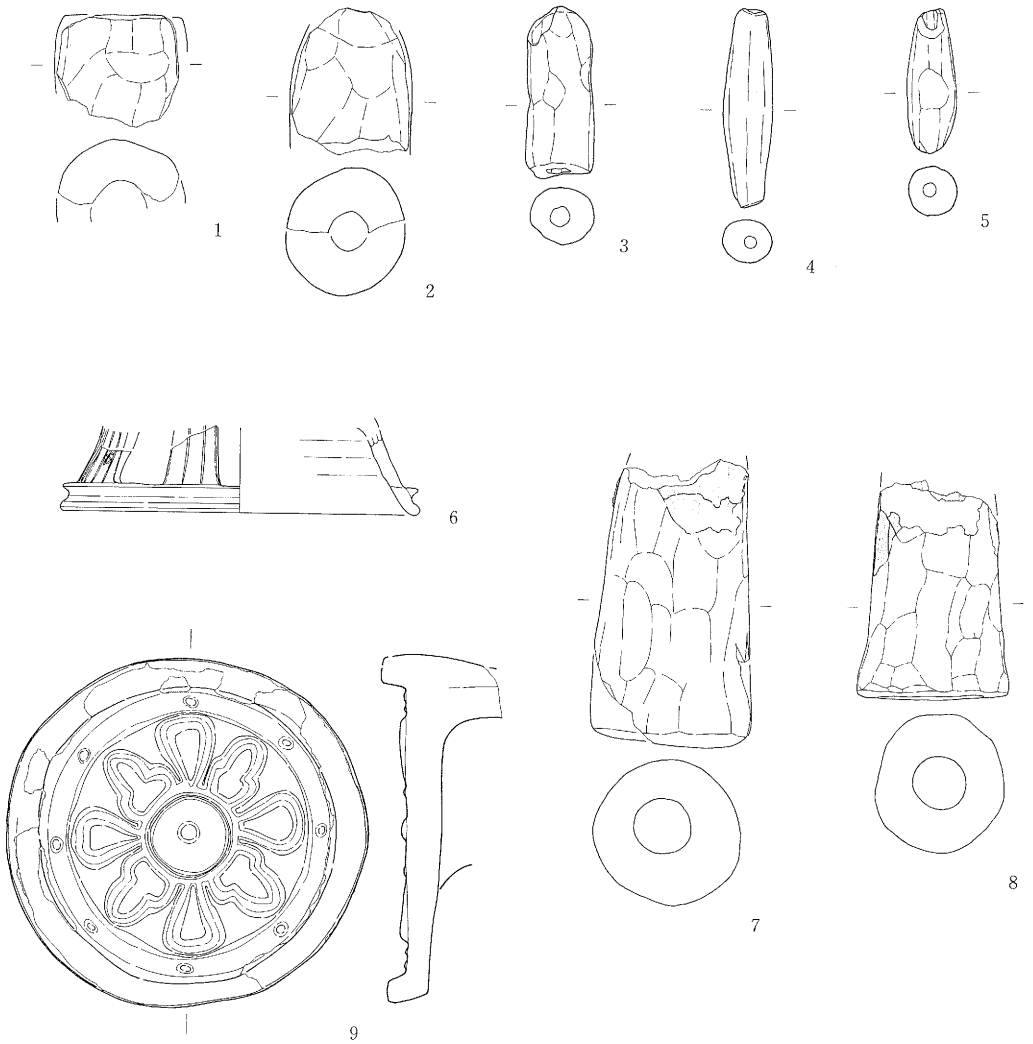
瓦塔－瓦塔の一部ではないかと考えられる資料は2点ある。ともに胎土は極めて堅緻で、色調は橙色か赤褐色を呈している。両面には型押しによるとみられる隆起帯がみられる。これらの資料と多賀城廃寺跡から出土した瓦塔（氏家他：1975）と比較してみたが、色調・胎土ともよく類似する部分もあり、部位については1点は開口部の片側部分と推定された。しかし瓦塔には型押しによる文様の例はあまり確認されていないこともあり、2点とも瓦塔と判断できるところまでは明確にはできなかった。1点は古代III期の掘立柱建物跡から、他の1点は古代IV期の溝跡から出土したもので、とりわけ前者は8世紀前葉を中心とした年代のものと考えられ、もし瓦塔だとすれば年代的に極めて古い資料となろう。なお、多賀城廃寺跡の瓦塔は多賀城創建期の可能性が考えられている。[註] 関東地方では瓦塔の出土例は多いが、その中で年代的に最も古い例としては千葉県長熊廃寺跡の瓦塔があり、これは8世紀前半のものとされている(永沼：1987)。

註：進藤秋輝氏のご教示による。

6．　瓦

瓦は5点あり、1点は第2号堀跡から、他は遺構外からの出土である。軒丸瓦が1点、他は丸瓦の一部である。

軒丸瓦は瓦当文様が8葉の宝相華文であり、中房部・花弁部およびその周囲に配された8個の珠文から成る（9）。宝相華文軒丸瓦は多賀城跡（宮城県教委・多賀城跡調査研：1982)、多賀城廃寺跡（宮城県教委•多賀城町：1970)、陸奥国分寺跡（宮城県教委：1961）などから出土しており、多賀城跡の425と陸奥国分寺跡の第4類と共通する。これは多賀城跡では、第 IV期第1小期の瓦とされているものであり、9世紀後半頃を中心とした時期に製作されたものと考えられている。この瓦は試掘Dトレンチで確認された住居跡付近から発見されたものであり、



第284図　土錘・円面硯・フイゴの羽口・瓦

付近からは古代IV B 期の土器などが出土している。

丸瓦の中には１点だけ第２堀跡から出土した燻し瓦がある。これは凸面にナデ、凹面に布目痕をもと、広端縁の凹面側が面取りされているものである。こうした特徴の瓦は仙台市今泉遺跡では３類とされている（佐藤：1983）もので、時期は中世後半から近世初頭を中心に考えられている。なお、法隆寺出土の古瓦では、燻し瓦は室町期以降に出現するものとされ、以上から、この資料は中世後半から近世初めにかけてのものと考えられる。また、布目瓦は江戸時代前期の17世紀までは残るものとされている（小林・佐川：1989）。

７．金属製品

〔鉄製品〕

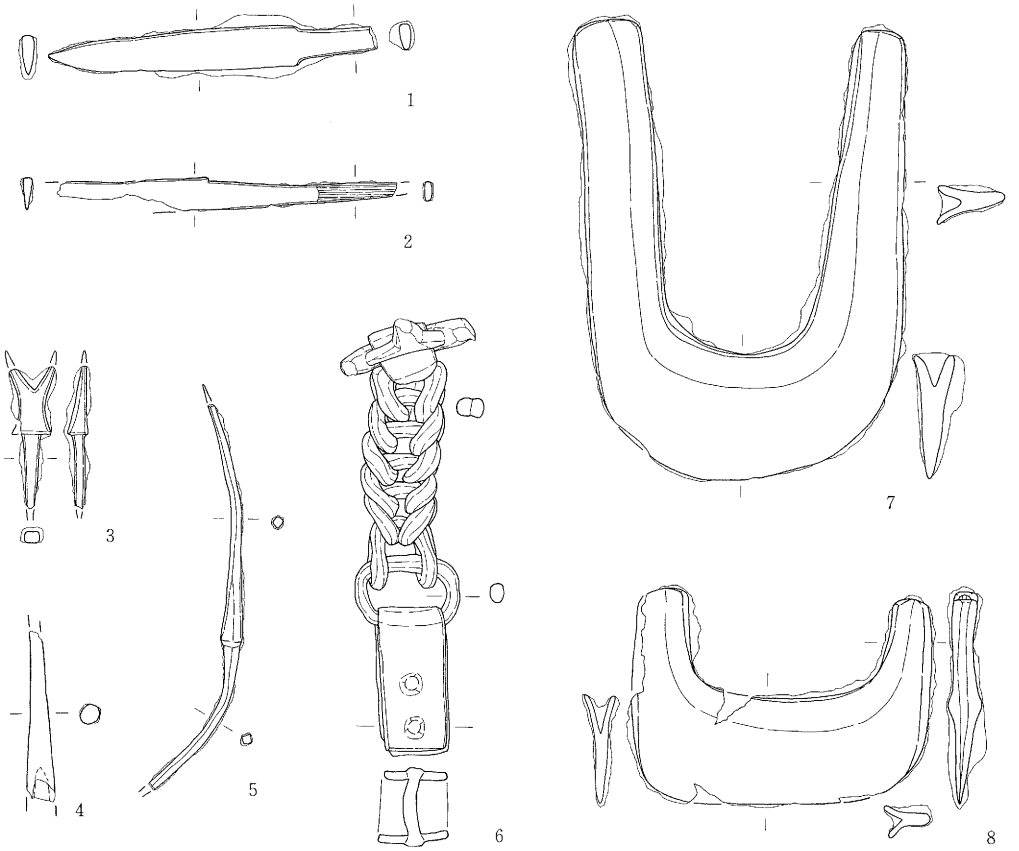
鉄製品には刀子・鉄鏃・馬具・鋤鍬先・鎌・釘・各種金具など80数点ある。しかしほとんどが破損品であり、また錆化のため原形を失っているものが多い。

刀子－16点ある。完形品はないが、多くは小刀子と推定される。刀身部分が７点、刀身から茎部の部分が６点、茎部分が３点である。刀身が完存するのは基本層III層出土の１点のみで、長さは8.6cm である（１）。 茎部には目釘穴の確認できるもの、木質部が残存しているものもある（２）。これらの刀子には、古代III期段階の住居跡からの４点、同じくIV期段階の土坑などからの２点、中世Ｉ期段階の竪穴遺構からの１点があり、それぞれ古墳末から奈良時代、平安時代、鎌倉時代ごろのものと考えられる。しかし、これらには形態上の大きな相違はみられなかった。

鉄鏃－可能性のあるものを含めて12点ある。その中には雁股式のものが１点（３）、先細形のものが５点含まれている。さらに後者では１点は鏃身の途中まで中空となるものであり（４）、鏃身の断面は円形である。その他の４点は鏃身・茎部とも断面が方形をなすもので、全体的に極めて細身である（５）。雁股式の鉄鏃は中世Ｉ期の溝跡から出土しており、鎌倉時代ごろのものと考えられる。また、先細形のものでは古代IV期段階と中世後半の遺構に伴った可能性のあるものが１点ずつ存在するが、明確ではない。

馬具－第54号土坑から１点出土している（６）。これは壷鐙の鐙靼（みずお）の部分とみられる。鋲具と鎖、そしてU字形金具からなり、それぞれは筒状の金具と環状の金具で連結されている。鋲具は逆金も付いている。鎖は兵庫鎖で、輪を折り曲げて組合せ、６段の鎖を重ねており、自在に動けるような造りにしている。次にこの馬具の年代であるが、出土した土坑からはこの他に土師器・須恵器の破片資料が数点出土しただけで、土器に図示できるものはなかった。この中の土師器片にはロクロで製作されたものも含まれている。また、この土坑は最終的には柱穴の掘り方ではないかと考えられ、周囲から検出された古代IV期段階の多数の土坑・ピットと関連するもの

と推測される。こうしたことから、この馬具は古代Ⅳ期段階に伴い、9世紀ごろのものと考えられる。馬具の中でも鐙の出土例は県内では極めて少なく、古墳や横穴墓から2～3例があるのみである。付近では仙台市大年寺山横穴群の第10号横穴の2点の出土例がある。これらは本資料と同じく鐙の鐙靼の部分であり、鋲具・兵庫鎖やU字形金具から成っている。兵庫鎖は造りは類似するが、鎖は3連で、1連の金具は非常に長いものである。また、鎖を鋲具やU字形金具に直接つなぐなど、本資料とは異なる点がみられる。この資料は6世紀末から7世紀初頭ごろとされている。平安時代の鐙の出土例は県内では確認できなかった。斉藤　弘氏によると、東日本でも出土例は極めて少なく、東京都日野市落川遺跡など数例を数えるにすぎないとのことである。落川遺跡では2点の鐙の鐙靼部分が出土している（日野市落川遺跡調査会：1991）。鎖部分は本資料と似ているようであるが、銹化のため詳しいことは不明である。年代は11世紀を中心としたものである。本資料と類似する例は正倉院に伝わる馬具の中に見いだすことができる（日本中央競馬会：1991）。特に兵庫鎖から鋲具にかけての鐙靼の特徴は極めて近似しており、兵庫鎖の造りも共通している。ただし、正倉院の馬具の兵庫鎖は本資料よりも非常に長いもので、より自在性のあるものである（第5・6号鞍－日本中央競馬会：1991）。こうした兵庫



第285図　刀子・鉄鏃・馬具・鋤鍬先

鎖の鐙鞍は古墳時代の特徴を受けたものであり、奈良時代の馬具の特徴の１つとされている。そして、平安時代でも10世紀以降になると、壷の形態の変化（壷鐙→半舌鐙・舌長鐙）とともに、鐙鞍は鍛接で固定化されたものになるとされている（伊勢神宮や手向山神社の例－日本中央競馬会：1991)。本資料はそうした鐙に変化する過渡期にあたり、古い形態的要素を残したものと考えることができる。

鋤鍬先－第40号土坑と第11号溝跡から出土した２点がある。前者例は「U」字形をしており、刃先は丸味をもち、両側線は平行で長い(７)。挿入部は断面が同じくV字形に近い。後者例は刃先はほぼ平坦で、両側線は平行で、短い(８)。挿入部は断面がV字形をなす。時期は前者例は古代IV期の平安時代、後者例は中世Ⅰ期の鎌倉時代のものと考えられる。

鎌－２点あり、ともに破損資料である。１点は基部資料であり基端部を短く折り曲げているものである。２点とも中世Ⅰ期段階の遺構から出土している。

釘－約20点ある。いずれも角釘で、頭部はわずかに片方に折れ曲がっている。中世段階の遺構から出土したものが多い。

〔銅製品〕

銅製品には鏡と古銭がある。鏡は破損品である。磨滅が著しく、鏡背の文様ははっきりしないが１重の圏線が認められる。縁は直角式のものである。古銭は16点あり、その中の６点は付着したまま出土した。文字の判読できたものは９点あり、その内８点が中国銭(北宋銭－７点、明銭－１点）である。北宋銭のほとんどは中世の遺構から出土している。

８．石器・石製品

石器・石製品には、打製石器・磨製石器・砥石・石硯・石臼・石製模造品・石帯・磨面や敲打痕をもつ礫などがある。

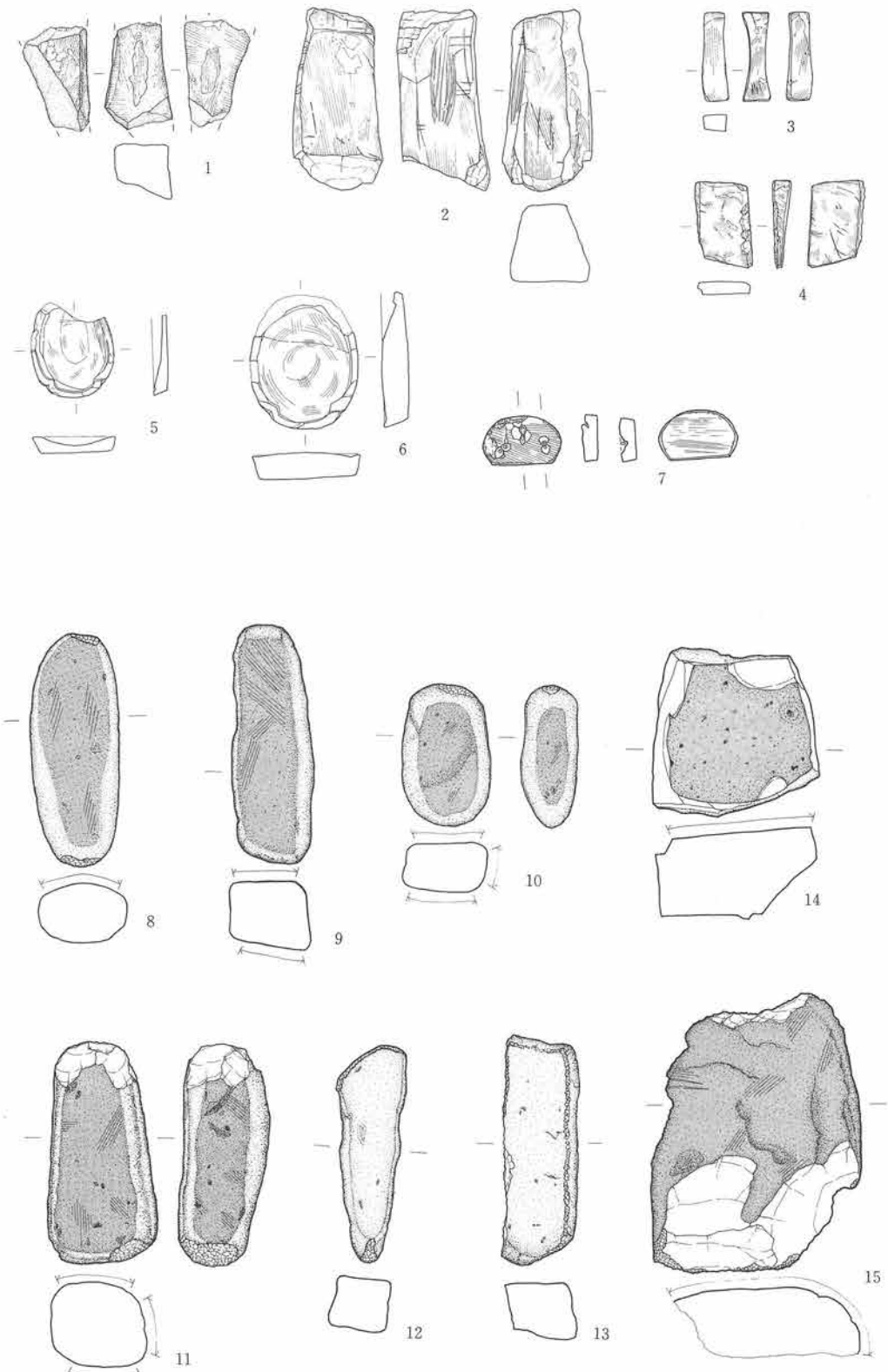
打製石器－石鏃３点・石錐１点・石匙１点・剝片石器12点・石核３点・微細剝離痕や光沢をもつ剝片３点がある。これらの石器は縄文・弥生時代に一般的なものであり、今回の調査で土器が出土している縄文時代晩期か弥生時代中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

磨製石器－石庖丁とノミ形石斧がある。いずれも弥生時代特有の石器であり、土器の出土している中期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

砥石－39点あるがこれらは石材の目の粗さにより、大きく３つに区分される。

第１類：石材の目が砂質状のもの(１)。３点あり、石質はいずれも砂岩である。その中の２点は小形で、形状が不定形のものである。３点とも中世後半段階の遺構から出土している。

第２類：石材の目がシルト質状のもの（２・３)。砥石の大半がこの類のものである。これらの石質をみると厳密な区分ではないが、大まかに軟質のものと硬質のものに分けられるようであ



第286図　砥石・石硯・石帯・磨面や敲打痕をもつ礫

る。前者の石質は全て石英安山岩質凝灰岩で、後者の石質は石英安山質凝灰岩を主として、わずかに凝灰岩質頁岩が含まれている。しかし、両者の砥石の形状・砥面などには相違はみられない。形状には方柱状のもの、扁平状のもの、不定形のものがあり、主な砥面は方柱状のものは4面前後、扁平状のものは2面前後が多い。大きさには大小あり、長さが10cm前後のものと、5 cm前後のものが多くみられる。砥石の表面には砥面の他に線状痕や研磨溝をもつものもある。以上の砥石は、主に古代IV期段階と中世II・III期段階の遺構から出土しており、特に後者の出土例が多い。また、硬質のものは中世後半段階に限られるようである。

第3類：石材の目が粘土質状のもの(4)。4点あり、石質は1点が凝灰質頁岩で、他は頁岩である。完存する2点は形状が扁平状のものと不定形のもので、中世II・III期段階の遺構から出土している。

以上の砥石の多くは中世II・III期段階のものであり、第1・2・3類を含んでいる。中でも量的には2類が多く、砥石の中心的な役割を担ったものと考えられる。石材の特徴から、主に第1類は荒砥として、第2類は仕上げ砥か中砥として、第3類は仕上げ砥として使用されたものと推測される。

石硯－2点あり、いずれも四葉硯と称されている楕円硯である(5・6)。ともに一部を欠くが、内面は良く使い込まれている。裏面は平坦であり、断面形は逆台形をなす。石材は粘板岩と頁岩である。石硯の1点は第13号ピット群のピット堆積土から出土したものである。この付近からは中世I期段階の竪穴遺跡や井戸跡などが発見されており、この時期のものである可能性が高いと推測される。これらの石硯は形態的特徴をみると、水野和雄氏の編年（水野：1985）の楕円硯II Ac類と一致しており、鎌倉市の遺跡などで多く出土しているタイプである。水野氏はおなじ四葉硯で裏面が凹んでいる楕円硯II Ab類を中国製とし、II Ac類をそれを模した日本製硯と考えている。そしてその製作年代を13世紀代から14世紀前半に中心をおくものと考えられているようである。

石臼－5点あるが、いずれも破損品である。その中で茶臼の下臼の一部とみられるのが2点ある。1点は第8号井戸状遺構から出土したもので、上面には臼目の溝が残っている。この遺構の最下層からは15世紀前後の天目茶碗が出土しており、本資料もそれに近い年代のものと考えられる。他の4点の石臼も中世II・III期段階の堀跡ないしは溝跡の堆積土から出土している。

石製模造品－1点、剣形のものが出土している。しかし遺構に伴ったものとは考えられず、おそらく古代I期段階のものと推測される。

石帯－1点、溝跡から出土している(7)。丸鞆であり、表面は良く研磨され光沢を帯び、裏面には3カ所に糸穴が穿孔されている。石帯は仙台市内では南小泉遺跡などの出土例がある。南小泉遺跡の石帯は大理石製の巡方であり、共伴する土器から9世紀前葉から中葉のものと考え

られる（渡部：1983）。本資料も古代IV期段階の9世紀ごろのものと考えられる。

磨面および敲打痕をもつ礫－総数75点ある。その内訳は磨面をもつ礫61点、磨面と敲打痕の両方をもつ礫10点、敲打痕をもつ礫4点である。これらには自然の礫をそのまま使用するもの（A類）と、周囲全体か一部を粗く打ち割って使用するもの（B類）がある。A類は球状の礫、円棒状の礫、扁平の礫、角ばった礫など形状はさまざまであり、また大きさもまちまちである（8～13）。B類には円礫を打ち割ったもの、扁平な礫を打ち割ったものなどがある（14・15）。磨面はこれらのより平坦に近い面に多く確認され、1面のみ、上下2面、側面を含めて4面などの磨面数がみられるが、上下2面の例が多いようである。また、敲打痕は主に円棒状の礫の一端か両端に多く確認される。石質は安山岩が5割、石英安山岩が3割を占めており、比較的堅い石材が利用されている。砂岩系は1割にも満たなかった。なお、B類の大形の礫の中には磨面にスス状の黒い付着物をもつものもみられた。次に時期であるが、これらの資料の大半は古代II・III・IV期段階、中世I期、II・III期段階の各遺構から出土している。それぞれの数量は次の通りである。古代II期－1点、古代III期－16点、古代IV期－20点、中世I期－8点、中世II・III期－22点。古代II期段階を除く各段階の遺構からは一定量の資料が出土しており、全てを古い時期の資料が混入したとは考えにくいことから、これらの多くはそれぞれの段階の時期のものと考えられる。すなわち同様の特徴をもつこれらの礫が古代から中世にかけての長い期間にわたって存在したことを示している。ただし、古代III期段階ではA類を主体としており、古代IV期段階以降にB類が多くなるという時期的な違いがわずかに認められる。これらの使用痕のある礫の具体的な機能については、今後の調査における出土状況の吟味・使用痕分析・民俗事例などを含めて総合的に検討されるべきであり、今後の課題としたい。

9．木製品

木製品には漆器・曲物・箸・下駄・櫛・木錘・舟形・木簡などがある。

漆器－漆器は第8号井戸状遺構から15点、第1号堀跡から1点、第61号溝跡から4点、第78号溝跡から1点の計21点が出土している。器種には椀と皿があり、器形的特徴により次のように分類される。なお、内外面の彩色は便宜的に、ア－内面茶褐色、外面黒色、イ－内外面とも黒色、ウ－内外面とも赤色の3つに分類した。

椀－椀にはやや浅めの椀（A類）とやや深めの椀（B類）がある。

A類：高台部からなだらかな曲線で、内弯ぎみに立ち上がるもの（1・2）と体部がわずかに屈曲して立ち上がるもの（3・4）がある。高台部は器壁が薄く、高台は浅く、断面四角形に削り出されている。彩色はアが3点、イが1点であり、イは外面に赤色漆により草花文などの文様が描かれている。

B類－高台部からゆるやかな曲線で内弯ぎみに立ち上がるもので、A類よりは立ち上がりはやや急である。高台部の特徴により2つに分けられる。

a：高台部は器壁が薄く、高台はやや高く段面四角形で、わずかに外方に向うように削り出されている（5・6）。彩色はアであり、外面には赤色漆による草花文が描かれている。

b：高台部は高く、また器壁が極めて厚く、高台は断面四角形で、低めに削り出されている（7・8）。彩色はアとイがあり、アは外面には赤色漆により草花文とみられる文様が描かれている。

皿－口径により3つに分けられる。

A類－口径が9.2cmの小皿である（9）。体部でわずかに屈曲して直線的に立ち上がる器形である。高台部の器壁は極めて薄く、高台は断面四角形である。彩色はウで、高台内中央には赤色漆による菱形様の文様がある。

B類－口径が13cm前後のものである（10・11）。高台部からゆるやかに内弯して立ち上がる。高台は断面四角形である。彩色は2点ともアで、文様は認められない。

C類－口径が16cm以上の皿である（12）。漆膜は全面剝離しており、外面には木地仕上げ段階の削り痕が認められる。器形は高台部からなだらかに内弯して立ち上がり、外方に大きく開く。高台は断面四角形である。

なお漆器には高台部外面に「一」・「二」・「大」の線刻が施されているものが8例確認された。その線刻には明らかに漆を塗る前のものと、漆の塗られた後のものがある。漆器の樹種については第IV章3に報告されているように、同定資料はいずれもブナ属である。

各遺構ごとの出土している漆器は次の通りである。

第8号井戸状遺構－椀Aア・イ、Baア、皿Bア・C

第1号堀跡－椀Bbア

第61号溝跡－椀Aア、Bbイ、皿Aウ

この中で、第1号堀跡と第61号溝跡では椀Bb類という、高台部が高く分厚い作りの、極めて特徴的な椀を共有しており、年代的に近いものといえる。したがって漆器は第8号井戸状遺構のものと第1号堀跡および第61号溝跡のものの、大きく2つの段階のものに分けられる。第8号井戸状遺構は後述するように、中世II期に属し年代は14世紀末から15世紀前半を中心としたものと考えられる。また、第1号堀跡・第61号溝跡は中世III期に属し、15世紀後半から16世紀頃の年代が考えられる。したがって、それぞれの漆器も中世II期、および中世III期に近いものと考えられる。

宮城県内で中世の漆器が出土している遺跡は10数遺跡を数えるが、まとまった出土例は極めて少ない。それらの漆器を大まかに、13～14世紀頃、15世紀頃、16世紀頃の3つの時期に分け

て、本資料と比較してみたい。

13～14世紀頃の漆器の出土例には、観音沢遺跡の漆器がある（加藤・阿部：1980）。ここでは3点の椀が出土しているが、いずれも破損品である。高台部の器壁は薄く、高台は、三角形ないし四角形に削出されており、高台が極めて低いのが特徴といえる。彩色は2点は内外面黒色漆であり、1点は内面中央に赤色漆のスタンプによる文様が描かれている。こうした高台部の特徴やスタンプによる文様は鎌倉市内の遺跡出土の漆器によく認められる特徴であり（斎木他：1993など）、また、草戸千軒遺跡出土漆器ではⅠ～Ⅱ期と編年されている13世紀後半から14世紀代頃の漆器によくみられる特徴である（下津間：1991）。

15世紀を中心とした時期の漆器の出土例には今泉遺跡の漆器10点がある（佐藤：1983）。これらは今泉遺跡III期の遺構に伴ったもので、器形や高台部の特徴などは本資料の中世II期の漆器によく類似したものである。彩色はいずれも外面黒色漆、内面赤色漆で、外面に赤色漆による文様が描かれている。本資料と類似する漆器は草戸千軒遺跡ではIII期とされているものであり、年代は15世紀前半に比定されている（下津間：1991）。

16世紀頃の漆器の出土例には下草古城跡の漆器9点がある。その大半は椀であり、本資料のようにA・B両類のタイプがあり、高台部には極めて高く、厚いものが多く含まれている。また彩色は内面赤色漆、外面黒色漆が主体を占めるが、その他に内外面黒色塗、内外面赤色漆のものもみられる。これらの特徴は本資料の中世III期の漆器に基本的には類似したものといえる。しかし、高台は本資料よりもさらに高く、分厚いものになっており、また、その高台外面がわずかに外反するなどの違いが認められる。こうした高台が高く、外反するような漆器は仙台城三の丸跡の出土漆器椀の中に散見され（結城・佐藤：1985）、より新しい要素と考えられる。こうしたことから本資料は下草古城跡の漆器よりもやや古い時期のものと推定されよう。本資料の皿や下草古城跡漆器には内外面赤色漆の彩色をもつものが含まれている。こうした内外面赤漆の漆器は今泉遺跡SK37（篠原他：1980）から9点がまとまって出土しており、16世紀から17世紀初頭の年代が与えられている。本資料の中世III期の漆器は、16世紀中頃から17世紀初頭頃の年代である下草古城跡例よりも古い要素が認められること、草戸千軒遺跡ではIV期とされ、15世紀後半から16世紀前半に比定されている漆器に類似していることなどから、その頃の年代のものと考えられる。

以上のように、県内出土の中世段階の漆器はまだ量的には少ないものの、器形や彩色・文様などの面で、大まかながら時期的な違い、および変化が認められる。こうした漆器の変遷は大わくでは草戸千軒遺跡出土漆器や能登半島などの出土漆器でも同様の傾向を示しており（下津間：1991、四柳：1987）、広域的な漆器編年が可能であることを推察させるものである。

曲物－曲物は蓋板3点、底板2点、側板4点の9点があるが、破損品が多い。蓋板の1点は中

世前半段階、その他は全て中世II・III期段階の遺構から出土している。

箸－中世I期段階の井戸跡から26点出土した。いずれも白木の箸で、完存品は5点だけで、大半は折れている。長さは21～25cmで、いずれも中央部が太く両端が細く削られている。断面は円形か楕円形か長方形を呈する。樹種は同定資料全てがモミ属の一種である。この時期の箸は県内では他に新田遺跡（千葉他：1990）、観音沢遺跡（加藤・阿部：1980）などから出土している。

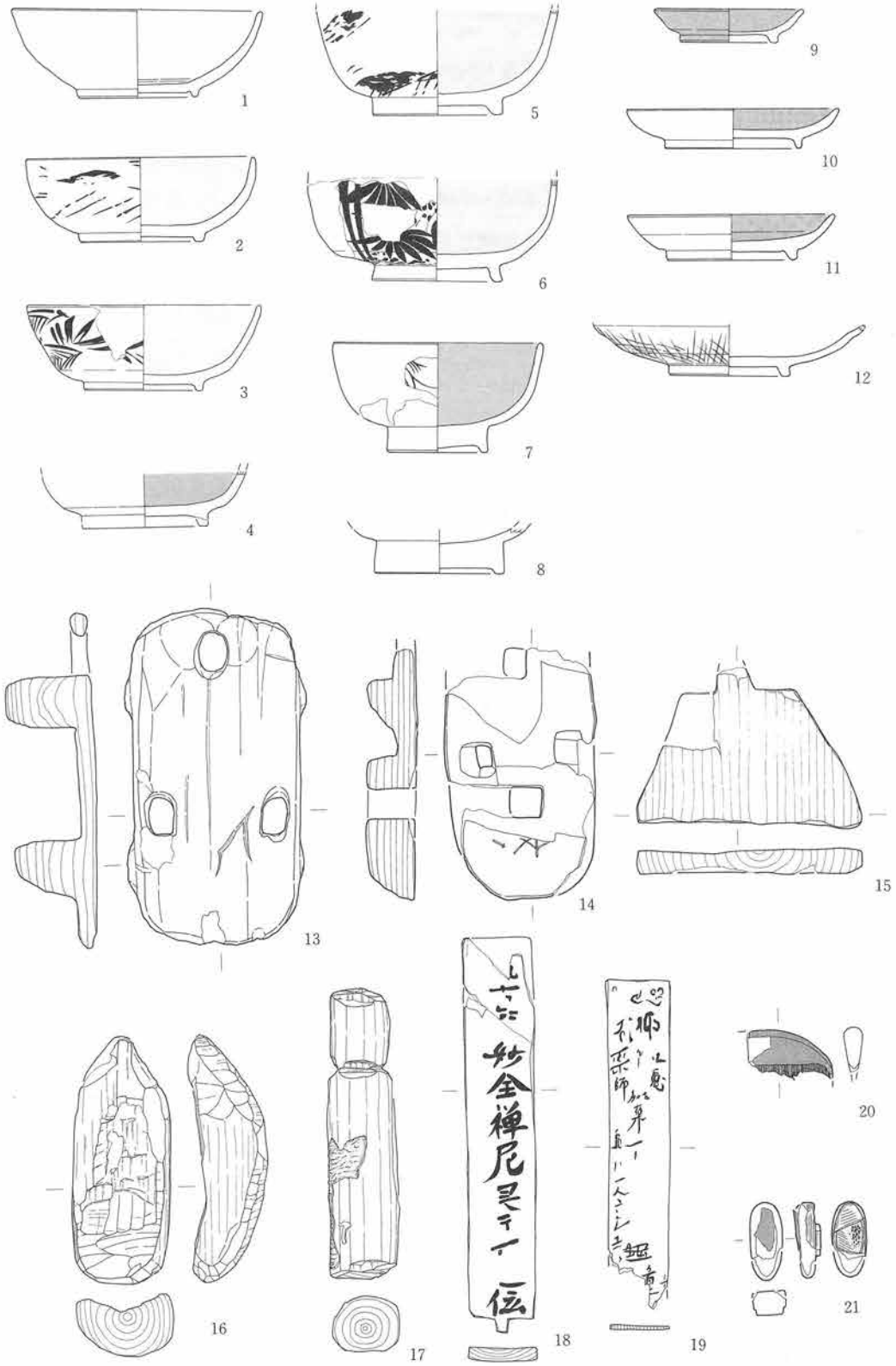
下駄－下駄には連歯下駄と差歯下駄がある。連歯下駄は5点出ており、内1点は鼻緒穴がなく未製品と考えられるものである。いずれも台部は幅がやや広く、小判型をなすものである(13)。歯部は台部の幅とはほぼ同じで垂直におりている。前歯より後歯が著しく磨耗している例が多い。これらは全てクリ材である。差歯下駄はいずれも露卯差歯下駄で、台部が1点、歯部が5点出土している。台部は長円形の形状のもので、台裏には溝と枘穴が認められる(14)。歯部はいずれも台形状をなしている（15)。樹種はモクレン属の一種・ケヤキ・ケンポナシ・ヤマグワがあり、連歯下駄とは異なり多様な樹種となっている。下駄の中で、連歯下駄の2点は中世II期段階、その他は中世III期段階の遺構から出土している。

櫛－中世III期段階の遺構から1点出土している。横櫛の一部で、櫛目以外の部分には黒色漆が塗布されている（20)。

木錘・舟形・木簡－中世II期段階の井戸状遺構から出土したものである。木錘は3点あり、いずれも円棒状をなし、上端近くに溝がめぐる形態のものである(17)。この形態は、渡辺　誠氏の形態分類によるITd型に相当し、氏によるとこのITd型は平安時代から近世まであり、中世後半からやや増加しているとのことである。(渡辺：1981・1990)。樹種はリョウブ・ブナ属の一種・アワブキの3種である。舟形は1点あり、芯持材を素材として、全体的に粗く加工されたものである(16)。樹種はエゴノキ属の一種である。木簡は2点あり、判読できる文字から1点は位牌（18)、他の1点は呪符と考えられる（19)。前者は長方形の板目材で、下端には差し込み用の突起が付く。樹種はモミ属の一種である。呪符木簡は複数の種字と薬師如来などの文字が判読される。樹種はスギである。

10. 鹿角製品

中世III期段階の溝跡から1点出土している(21)。わずかに一部を欠くが、楕円形状のもので、一面は平坦面で黒色漆が塗布されており、他の一面は中央部が凸状になっている。これとよく類似した形態のものは草戸千軒遺跡から1点出土しており、刀装具の柄頭とされている（広島県草戸千軒町調査研：1993)。これは本資料と同じく鹿角製で、表面には漆が塗布されているものである。



第287図　漆器・下駄・舟形・木錘・木簡・櫛・鹿角製品

Ⅷ. 遺構の特徴と年代

今回の調査で発見された遺構には、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・竪穴遺構・井戸跡・火葬墓・鍛冶遺構・土坑・堀跡・溝跡・溝状遺構・小溝状遺構群・円形周溝などがあり、その他に遺構ではないが河川跡がある。ここでは各遺構ごとに年代的位置付けを行い、それぞれの特徴や問題点について概括的にふれてみたい。

1．竪穴住居跡

住居跡は37軒ある。いずれの住居跡からも土器の出土量は少なく、中でも住居跡床面や細部出土の時期決定資料は極めて少ない。しかしながら前述したように堆積土や掘り方埋土出土の土器も住居跡の年代に近い時期のものと考えられる。このことは住居跡出土土器がおおよそ古代Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期に限定され、それぞれの時期の時間的な差が大きく、各時期の住居跡間に長い中断が考えられることなどからも、住居跡の年代推定はほぼ妥当なものといえる。各住居跡の年代は次の通りである。

古代Ⅱ期－第５・13・16号住居跡

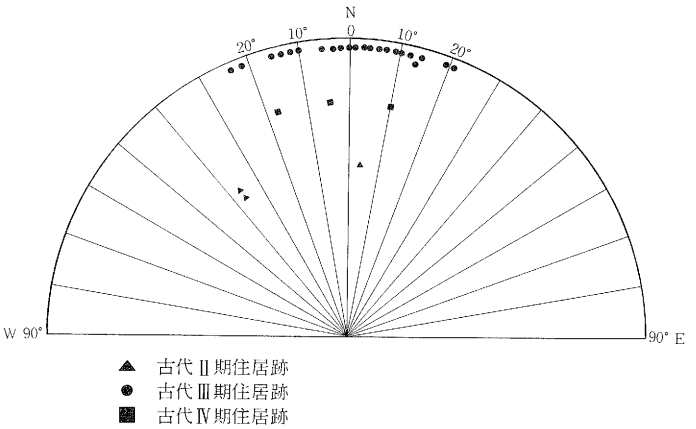
古代Ⅲ期－第１～４・９～12・14・15・17～22・24・27・28・30～32・34号住居跡

古代Ⅳ期－第８・36・38号住居跡

また、その他の住居跡では出土土器の時期決定はできなかったが、非ロクロの土師器片が出土している点から、第６・７・33号住居跡は古代Ⅱ期かⅢ期の可能性が考えられる。

古代Ⅱ期の住居跡は３軒検出されたが、それぞれ散在する分布状況を示している。その中の完掘された２軒は住居の方向・規模がほぼ一致し、柱穴・周溝・貯蔵穴ピットのあり方なども共通するものである。

古代Ⅲ期の住居跡は23軒検出されたが、これはあくまで今回の調査区内での軒数であり、未調査部分に予想される住居跡も含めると、極めて密度の高い分布を示している。中でもⅡ区東端からⅤ区西半部、Ⅲ区南端、Ⅵ区の約1000㎡の調査区内には16軒の住居



第288図　竪穴住居跡の方向

跡が集中して分布している。こうした状況を考えると、今回の対象区域で100軒を超す、この時期の住居跡の存在も推測できよう。23軒の住居跡はいずれも平面形が隅丸方形に近いものである。その南北軸の住居方向ではややばらつきはあるものの、おおむね真北方向を中心としている傾向がうかがえる。住居規模が明らかなものは9軒あり、1辺が5～6 mの長さで、面積が25m²前後のやや大型の住居と、1辺が3～4 mの長さで面積が8～15m²の小型の住居がある。柱穴では住居内に4個の主柱穴が検出されたものと、全く柱穴が検出されなかったものがみられ、特に規模的に小型の住居跡に後者が多いようである。周溝では全周するものと、一部にみられるもの、あるいは全く確認されないものもある。カマドは確認された大部分の住居では北辺の中央部を中心に付設されている。いずれも住居内に側壁で画された燃焼部をもち、そこから住居外にトンネル状に煙道部が張り出すものである。貯蔵穴状ピットが確認された住居跡は7軒あり、いずれもカマドに向って右側に掘りこまれたものである。

竪穴住居跡一覧表

項目 / 住居跡名	平面形	方向	規模（推定） 長軸×短軸(m)	規模（推定） 面積(m²)	柱穴	周溝	カマド	その他の施設	年代
第1号竪穴住居跡	(方形)	N－7°－E	3.96 ×(1.06)	(3.09)	不明	全周	確認されず	確認されず	(古代III)
第2号竪穴住居跡	隅丸方形	N－13.5°－W	5.20 × 5.10	15.54	4個	ほぼ全周	北辺中央にあり・焼け面のみ	貯蔵穴状ピットあり	古代III
第3号竪穴住居跡	隅丸方形	N－5.5°－E	3.58 × 3.52	11.6	なし	全周	確認されず	なし	(古代III)
第4号竪穴住居跡	隅丸方形	N－24°－W	7.94 ×(6.16)	(27.40)	(4個)・壁柱穴	ほぼ全周	確認されず	確認されず	(古代III)
第5号竪穴住居跡	方形	N－37°－W	5.34 × 5.30	26.39	(4個)・壁柱穴	ほぼ全周	北西辺ほぼ中央にあり・燃焼部	貯蔵穴状ピットあり	古代II
第6号竪穴住居跡	(隅丸方形)	N－10°－W	(2.40)×(1.40)	(1.63)	不明・壁柱穴？	全周	確認されず	確認されず	古代IIかIII
第7号竪穴住居跡	(隅丸方形)	N－0°	4.32 ×(1.60)	(5.88)	不明	なし	確認されず	確認されず	古代IIかIII
第8号竪穴住居跡	隅丸方形	N－10.5°－E	4.50 ×(1.10)	(4.55)	壁柱穴	ほぼ全周	不明	確認されず	(古代IV)
第9号竪穴住居跡	隅丸方形	N－21°－E	4.04 ×(2.40)	(8.02)	なし	なし	確認されず	確認されず	(古代III)
第10号竪穴住居跡	隅丸方形	N－11.5°－W	4.40 ×(3.16)	(8.50)	(4個)	なし	北辺中央部にあり・煙道部	貯蔵穴状ピットあり	古代III
第11号竪穴住居跡	長方形	N－3°－E	3.30 × 2.90	7.96	なし	全周	北辺の東寄りにあり・燃焼部と煙道部	貯蔵穴状ピットあり	古代III
第12号竪穴住居跡	(方形)	N－36°－E	5.30 ×(1.80)	(8.45)	不明	全周	確認されず	確認されず	(古代III)
第13号竪穴住居跡	(長方形)	N－4°－E	5.00 × 3.34	14.0	不明	ほぼ全周	北辺のほぼ中央にあり・燃焼部と煙道部	確認されず	古代II
第14号竪穴住居跡	(方形)	N－10°－E	(2.30)×(1.90)	(4.08)	なし	ほぼ全周	確認されず	確認されず	(古代III)
第15号竪穴住居跡	(隅丸方形)	N－13.5°－E	4.20 ×(2.60)	(6.94)	(4個)	全周	確認されず	確認されず	(古代III)
第16号竪穴住居跡	方形	N－37°－W	4.90 × 4.70	19.67	(4個)	ほぼ全周	北西辺中央にあれ・燃焼部と煙道部	貯蔵穴状ピットあり	古代II
第17号竪穴住居跡	隅丸方形	N－12°－E	4.00 ×(1.48)	(5.72)	不明	一部	確認されず	確認されず	古代III
第18号竪穴住居跡	隅丸方形	N－2.5°－W	5.06 × 5.04	21.4	4個	ほぼ全周	北辺の東寄りにあり・燃焼部	貯蔵穴状ピットあり	古代III
第19号竪穴住居跡	(隅丸方形)	N－0°(ほぼ真北)	(3.94)×(1.02)	(0.74)	不明	一部	北辺のほぼ中央にあり・燃焼部と煙道部	確認されず	古代III
第20号竪穴住居跡	隅丸方形	N－21.5°－W	5.20 × 4.80	23.54	4個	ほぼ全周	確認されず	貯蔵穴状ピットあり	古代III
第21号竪穴住居跡	長方形	N－1.5°－W	4.30 × 3.68	13.20	(4個)	ほぼ全周	北辺中央部にあり・燃焼部と煙道部	確認されず	古代III
第22号竪穴住居跡	(方形)	N－20°－E	(2.68)×(2.28)	(4.87)	(4個？)	ほぼ全周	確認されず	確認されず	古代III
第24号竪穴住居跡	隅丸長方形	N－0.5°－E	5.72 × 5.14	24.78	4個	ほぼ全周	北辺部ほぼ中央・燃焼部	貯蔵穴状ピットあり	古代III
第25号竪穴住居跡	(不整方形)	N－13.5°－E	(3.20)×(1.13)	(2.72)	(4個)	なし	焼け面のみ	確認されず	－
第26号竪穴住居跡	(隅丸方形)	真北よりやや東	(2.85)×(0.9)	(1.60)	不明	なし	確認されず	確認されず	－
第27号竪穴住居跡	(隅丸方形)	N－12.5°－E	(3.0) ×(2.74)	(6.90)	不明	不明	確認されず	確認されず	(古代III)
第28号竪穴住居跡	(隅丸方形)	N－5.5°－W	(3.52)×(1.36)	(2.31)	不明	ほぼ全周	北辺りほぼ中央にあり・燃焼部のみ	貯蔵穴状ピットあり	(古代III)
第29号竪穴住居跡	(方形)	真北	(3.90)×(1.68)	(3.08)	(4個？)	ほぼ全周	北辺のほぼ中央にあり・燃焼部と煙道部	確認されず	－
第30号竪穴住居跡	(隅丸方形)	N－2.5°－E	5.84 ×(3.70)	(15.26)	(4個)	全周	確認されず	確認されず	(古代III)
第31号竪穴住居跡	隅丸長方形	N－9.5°－E	5.98 × 4.80	29.17	(4個)	不明	確認されず	確認されず	(古代III)
第32号竪穴住居跡	隅丸方形	N－15.5°－W	5.94 × 5.70	26.31	(4個)	ほぼ全周	北辺のやや西寄りにあり・燃焼部	確認されず	古代III
第33号竪穴住居跡	(隅丸方形)	N－5.5°－E	(2.66)×(1.5)	(2.68)	不明	一部	確認されず	確認されず	古代IIかIII
第34号竪穴住居跡	(隅丸方形)	N－10°－W	3.02 ×(1.88)	(3.17)	不明	ほぼ全周	確認されず	確認されず	(古代III)
第35号竪穴住居跡	(隅丸方形)	N－8.5°－W	2.94 ×(1.80)	(2.76)	なし	ほぼ全周	確認されず	確認されず	－
第36号竪穴住居跡	隅丸方形	N－18°－W	4.78 × 4.60	20.40	4個・壁柱穴	ほぼ全周	北辺のやや東寄りにあったと推定される	確認されず	古代IVA
第37号竪穴住居跡	(方形)	N－9°－W	(3.22)×(2.30)	(3.98)	なし	全周	確認されず	確認されず	－
第38号竪穴住居跡	(隅丸方形)	N－4.5°－W	(3.38)×(1.60)	(2.57)	不明	ほぼ全周	北辺の中央にあり・燃焼部と煙道部	確認されず	古代IVA

古代IV期の住居跡は3軒あり、その中の2軒は近接して検出された。住居の方向も近いものであり、同時に存在した可能性もある。また出土土器の中に回転ヘラ切りの須恵器坏が含まれることから、時期はIV A期に近いものであることも推定される。ほぼ全体が判明した1軒は平面形が隅丸方形、面積が約20m²であり柱穴は4個の主柱穴の他に、16個の壁柱穴も検出されている。カマドは北辺のやや東寄りにあり、周溝は全周している。

2．掘立柱建物跡

31棟の建物跡が検出された。しかし、時期の判明するものは極めて少なく、大半の建物跡からは遺物が伴出しなかった。そのため年代決定にあたっては、柱穴の規模・他遺構との重複関係や方向性、および平面的な位置関係、また掘り方埋土や柱痕跡堆積土の特徴などを検討しながら、以下にのべる理由から大まかに次のように年代を把えた。なお、建物跡の柱穴は掘り方の形態や大きさなどで大きく4区分できる。Aは柱穴掘り方が長方形の布掘り状のものであり、その中には2個の柱痕跡が認められる。Bは柱穴掘り方が長方形で、長短辺とも1m以上の大きさをもつものである。Cは柱穴掘り方が方形か円形を基調とし、50～80cmを中心とした大きさをもつものである。Dは柱穴掘り方が円形で、30～40cmを中心とした大きさのものである。後述するように特にBは古代III期の、A・Cは古代IV期の、Dは中世の建物跡にそれぞれ特徴的な柱穴のようである。

古代III期－第13・16号建物跡

第13号建物跡は1個の柱痕跡からこの時期の土器ととりべが出土しており、それらが建物跡に近い時期の資料と考えられること、また、柱穴の1個が古代IV期の遺構に切られていることなどからこの段階とした。第16号建物跡は複数の柱穴の掘り方からこの時期の土器が出土していること、重複関係では古代II期の住居跡を切っており、後述する古代IV期の建物跡に切られていることなどからこの段階とした。2棟とも建物の南北方向がほぼ真北であり、この段階の住居跡の傾向と一致している。また第16号建物跡は、2間四方の方形の建物と考えられ、その掘り方は長方形で、長軸・短軸とも1辺が1mを超すBタイプの柱穴である点で注目されるものである。こうした形態と規模をもつ柱穴は主に官衙遺跡の建物跡に一般的であり、それらと極めて類似するものである。

古代IV期－第3・15・17・23号建物跡

いずれの建物跡も掘り方からこの時期の土器が出土していることや他遺構との重複関係などからこの時期にした。これらの建物跡はいずれも建物の南北方向がほぼ真北であり、古代III期と同様に真北方向に対する強い指向性がうかがわれる。建物跡の柱穴はAかCタイプである。II区西端部の第17号建物跡は南北が2間、東西が2間かそれ以上の総柱の建物であり、柱穴の

中にAタイプのものを2個含んでいる。なお、付近には同時期の第3号建物跡・第9～11号土坑・第14溝跡があり、これらは方向性や位置などに規則性がみられることから同時に存在した可能性が考えられる。

中世－第5～12・18・21・22・24～31号建物跡

これらの建物跡はいずれも伴出資料はなく、遺物からの年代決定はできなかったが、古代の遺構を切っている建物跡がみられること、同様の特徴を示す周辺のピットから中世の資料が出土していること、中世段階の堀跡や溝跡と方向性や位置などの面で規則性がみられることなどから中世の段階の建物跡とした。建物跡の柱穴はいずれもDタイプを主体としている。また、建物の方向性は古代の建物跡と異なり、真北方向に対する指向性は特に認められない。建物跡の中でさらに詳しい年代を推定できるものとしては、周辺の堀跡や溝跡との関連から第22・31号建物跡は中世IIかIII期、第18・21・24～30号建物跡は中世III期の段階のものと推定される。前者は後述する中世II期の区画B内、および同じくIII期の区画D内にあるもので、両遺構は重複し、時期差が存在する。また、後者は中世III期の区画A・C内にあるもので、特に区画A内の第24～30号建物跡は、第4号堀跡と方向性や位置などから極めて密接な関連が考えられるものである。なお、これらの建物跡にも重複があり、建物にいくつかの変遷が存在したことがわかる。

この他の建物跡では、第14・19・20号建物跡が重複関係などから古代の、第1・2・4号建物跡は柱穴の特徴から中世の段階のものと推測されるが、明確ではない。

掘立柱建物跡一覧表

項目／掘立柱建物跡名	規模・形態	方向	年代	項目／掘立柱建物跡名	規模・形態	方向	年代
第1号掘立柱建物跡	桁行3間・梁行2間の側柱	N－6°－E	中世？	第17号掘立柱建物跡	南北2間・東西2間かそれ以上の総柱	N－7°－E	古代ⅣA
第2号掘立柱建物跡	桁行2間以上・梁行2間の側柱	N－2.5°－E	中世？	第18号掘立柱建物跡	東西3間・南北1間かそれ以上の総柱	N－10°－E	中　世
第3号掘立柱建物跡	桁行2間・梁行2間の方形の側柱	N－5.5°－E	古代Ⅳ	第19号掘立柱建物跡	桁行2間・梁行1間のほぼ方形の側柱	N－17°－E	古　代
第4号掘立柱建物跡	桁行5間・梁行1間以上の側柱、1間の突出し部	N－66.5°－W	中世？	第20号掘立柱建物跡	桁行3間・梁行2間の側柱	北側柱列：N－81°－W 東側柱列：N－9.5°－E	古　代
第5号掘立柱建物跡	桁行1間以上・梁行3間の側柱	N－6.5°－E	中　世				
第6号掘立柱建物跡	桁行2間かそれ以上・梁行2間かそれ以上	N－21.5°－E	中　世	第21号掘立柱建物跡	東西4間・南北2間かそれ以上の側柱	N－17°－E	中　世
第7号掘立柱建物跡	桁行2間かそれ以上・梁行2間の総柱	N－2°－E	中　世	第22号掘立柱建物跡	東西2間かそれ以上・南北3間の総柱	N－1.5°－W	中　世
第8号掘立柱建物跡	桁行3間・梁行1間以上、仕切りあり	N－64°－W	中　世	第23号掘立柱建物跡	東西1間かそれ以上・南北1間かそれ以上	N－0.5°－E	古代Ⅳ
第9号掘立柱建物跡	桁行3間・梁行1間かそれ以上の側柱	N－71.5°－W	中　世	第24号掘立柱建物跡	東西1間かそれ以上・南北3間、仕切りあり	N－13°－E	中　世
第10号掘立柱建物跡	桁行3間かそれ以上・梁行2間の総柱	N－35°－E	中　世	第25号掘立柱建物跡	桁行3間かそれ以上・梁行2間の総柱、1間庇	N－10.5°－E	中　世
第11号掘立柱建物跡	桁行1間以上・梁行1間側柱、1間の庇か突き出し部	N－28°－E	中　世	第26号掘立柱建物跡	東西2間かそれ以上・南北3間の総柱	N－13°－E	中　世
第12号掘立柱建物跡	桁行2間かそれ以上・梁行2間の総柱	N－23°－E	中　世	第27号掘立柱建物跡	東西2間かそれ以上・南北3間、仕切りあり	N－10.5°－E	中　世
第13号掘立柱建物跡	東西4間かそれ以上・南北2間かそれ以上の側柱	N－2.5°－E	古代Ⅲ	第28号掘立柱建物跡	東西1間かそれ以上・南北2間の側柱・1間の庇	N－15°－E	中　世
第14号掘立柱建物跡	桁行3間・梁行2間の側柱、1間の庇	N－88.5°－E	古　代	第29号掘立柱建物跡	東西1間かそれ以上・南北3間の側柱・1間の庇	N－11.5°－E	中　世
第15号掘立柱建物跡	桁行2間・梁行1間の側柱	N－4.5°－W	古代ⅣA	第30号掘立柱建物跡	東西1間かそれ以上・南北3間の側柱	N－11°－E	中　世
第16号掘立柱建物跡	南北2間・東西2間の方形の側柱	磁北真北方向	古代Ⅲ	第31号掘立柱建物跡	東西1間かそれ以上・南北5間かそれ以上の側柱	N－3°－E	中　世

3．竪穴遺構

竪穴遺構としたものは3基ある。その中の第1・3号竪穴遺構は平面形が方形を基調としたもので、1辺が2 m前後の大きさのものであり、明確な柱穴は確認されなかった。出土土器や重複関係から古代IV期かそれ以降と考えられる。第2号竪穴遺構は、平面形が不定の長方形をなし、壁の立ち上がりは極めてゆるやかなものである。この遺構からも明確な柱穴は確認されなかった。出土遺物から中世Ⅰ期に属するものと考えられる。

4．井戸跡

明らかな井戸跡は7基あり、他の1基は断定できなかったため、井戸状遺構とした。井戸跡はいずれも平面形が円形か不整円形である。断面形では全体が円筒形のものと、下部が円筒形で上部が大きく開くものの2つのタイプがあり、規模では比較的前者は小さく、後者は大きい。井戸枠はいずれからも検出されていないことから、大半は素掘りの井戸と考えられる。出土遺物から年代が決定できるのは、第3・4・5号井戸跡で、中世Ⅰ期段階のものと考えられる。また、第6・7号井戸跡は出土土器や位置などから、中世III期の段階と推定される。第8号井戸状遺構は主に堆積土上部から木製品を中心とした多量の遺物が出土しており、埋没過程でゴミ捨て場として利用されたものと考えられる。堆積土の最下層から出土した天目茶垸により、年代は中世II期頃に位置付けられる。

5．火葬墓

3基検出されたが、いずれの遺構からも時期決定のための伴出遺物はなかった。ただし、基本層のIII層中で確認面されたものや、壁面観察によりIIIa層から掘り込まれた可能性のあるものがあることから、これらの火葬墓は大まかに中世段階の遺構と推定される。出土した人骨は分析結果により、いずれも火葬骨と判断され、それらを出土した土坑を一括して火葬墓としたが、これらの土坑は形態や焼け面の有無から2つに区分される。第1・2号火葬墓は焼け面をもたない楕円形の土坑であり、近接して検出された。いずれからも副葬遺物は確認されていないが、火葬墓の可能性が高いものといえる。第3号火葬墓は一部に凸字形の張り出しをもつもので、そこを中心に壁面が火熱を受けていた。こうした特徴は群馬県白石大御堂遺跡(綿貫他：1991）において火葬跡と分類されている遺構にやや類似している。しかし、ここでは本遺構の遺存状況が極めて悪かったことから断定はさけ、火葬墓だけでなく火葬跡の可能性もあることを指摘しておくだけにとどめたい。

6．鍛冶遺構

1基検出された。これは鍛冶炉とそれに付属する作業場とみられる土坑からなっている。

土坑からはフイゴの羽口と多量の鉱滓が出土しており、また土壌中からは鍛造剝片も検出されている。鉱滓は分析結果では、いずれも製鉄滓であることが判明している。年代は出土土器から古代IV A 期のものと考えられる。

土 坑 一 覧 表

項目／土坑名	平面形	方向	規模（推定） 長軸×短軸(m)	深さ(cm)	断面形	年代	項目／土坑名	平面形	方向	規模（推定） 長軸×短軸(m)	深さ(cm)	断面形	年代
第1号土坑	不整楕円形	N－63.5°－W	1.54 × 0.70	18	皿状	—	第53号土坑	隅丸長方形	N－75°－W	1.07 × 0.77	44	「U」字形	(古代IV)
第2号土坑	楕円形	N－70°－W	1.46 × 0.91	44	「U」字形	—	第54号土坑	長方形	N－81°－W	1.02 × 0.83	65	逆台形	古代IV
第3号土坑	楕円形	N－16°－E	0.70 × 0.57	24	「U」字形	古代Ⅰ	第55号土坑	(円形か楕円形)	—	(1.28)×(0.32)	19	(「U」字形)	—
第4号土坑	楕円形	N－34.5°－W	1.42 × 0.96	19	皿状	—	第56号土坑	(円形か楕円形)	—	(1.54)×(0.88)	26	皿状	—
第5号土坑	円形	—	〈径〉約 1.40		「U」字形	—	第57号土坑	(長方形)	N－13.5°－E	(1.54)×(1.2)	74	逆台形	—
第6号土坑	隅丸長方形	N－11.5°－E	0.79 × 0.49	23	逆台形	—	第58号土坑	(方形)	N－41.5°－E	0.89 × 0.70	25	逆台形	古代IV A
第7号土坑	長方形	N－17.5°－E	1.80 × 0.30	12.5	「U」字形	—	第59号土坑	(方形)	N－67.5°－W	(1.60)×(0.40)	35	不定	古代IV B
第8号土坑	楕円形	N－2.5°－E	0.90 × 0.45	36	「U」字形	(古代IV)	第60号土坑	(円形か楕円形)	—	(2.28)×(1.06)	30	(「U」字形)	—
第9号土坑	隅丸長方形	N－82°－W	2.72 × 1.32	68	「U」字形	古代IV A	第61号土坑	円形	—	〈径〉 2.36	73	逆台形	—
第10号土坑	不整楕円形	N－2.5°－E	2.10 × 1.28	44	皿状	古代IV A	第62号土坑	(円形か楕円形)	—	(0.78)×(0.34)	28	逆台形	—
第11号土坑	不整隅丸長方形	N－15.5°－E	2.02 × 1.02	37	逆台形	古代IV A	第63号土坑	(楕円形)	N－84°－W	1.09 ×(0.34)	10	皿状	—
第12号土坑	楕円形	N－73°－W	1.80 × 1.10	59	「U」字形	(古代IV)	第64号土坑	隅丸方形	N－12.5°－E	1.24 × 0.84	41	長方形	—
第13号土坑	楕円形	N－8.5°－W	0.90 × 0.74	15	皿状	古代IV	第65号土坑	円形	—	〈径〉 1.08	30	逆台形	—
第14号土坑	隅丸長方形	N－78°－W	0.84 × 0.68	29	長方形	—	第66号土坑	円形	—	〈径〉 0.84	37	逆台形	—
第15号土坑	不整楕円形	N－11°－E	1.20 × 0.45	62	皿状	—	第67号土坑	(楕円形)	N－41°－W	(1.8)× (1.16)	27	不定	—
第16号土坑	隅丸方形	N－11.5°－E	0.98 × 0.76	36	逆台形	—	第68号土坑	円形	—	〈径〉 0.66	14	逆台形	—
第17号土坑	楕円形	N－86.5°－E	1.26 × 0.88	103	「U」字形	—	第69号土坑	円形	—	〈径〉 1.06	28	逆台形	—
第18号土坑	楕円形	N－19°－E	1.52 × 0.86	16	皿状	—	第70号土坑	円形	—	〈径〉 0.53	53	「U」字形	—
第19号土坑	楕円形	N－7°－W	1.34 × 0.80	42	「U」字形	古代IV	第71号土坑	楕円形	N－76°－W	1.70 × 1.32	29	不定	古代IV B
第20号土坑	楕円形	N－11°－E	1.10 ×(0.05)	16	(逆台形)	—	第72号土坑	不整楕円形	N－41.5°－E	2.10 × 1.58	55	逆台形	古代IV A
第21号土坑	(円形)	—	〈径〉 1.08	38	長方形	—	第73号土坑	不整楕円形	N－85°－E	1.40 × 0.80	37.5	「U」字形	古代IV
第22号土坑A	不整楕円形	N－44°－W	(1.1) × 0.76	65	逆台形	—	第74号土坑	(円形か楕円形)	—	(0.72)×(0.68)	41	逆台形	—
第22号土坑B	(円形)	—	〈径〉 (1.1)	49	逆台形	—	第75号土坑	(円形)	—	〈径〉 0.96	14	皿状	—
第23号土坑	円形	—	〈径〉 0.98	10	逆台形	—	第76号土坑	不整円形	N－90°－E	1.54 × 1.16	33	「U」字形	—
第24号土坑	不整円形	—	〈径〉 (1.3)	59	逆台形	—	第77号土坑	(長方形)	N－82°－W	1.16 × 0.76	91	逆台形	—
第25号土坑	楕円形	N－9°－W	1.02 × 0.82	18	皿状	—	第78号土坑	円形	—	〈径〉 0.82	12	皿状	—
第26号土坑	不整長方形	N－72°－W	1.16 × 0.70	76	逆台形	—	第79号土坑	不整楕円形	N－68°－E	3.24 × 1.38	28	逆台形	古代IV
第27号土坑	不整楕円形	N－56°－W	1.36 × 0.70	61	「U」字形	—	第80号土坑	(円形か楕円形)	—	0.90 ×(0.52)	23	「U」字形	古代IV B
第28号土坑	楕円形	N－76°－W	1.72 × 0.90	10	皿状	—	第81号土坑	円形	—	〈径〉 0.80	21	「U」字形	古代IV
第29号土坑	円形	—	〈径〉 0.76	18	皿状	—	第82号土坑	円形	—	〈径〉 0.82	25	逆台形	古代IV B
第30号土坑	不整楕円形	N－10.5°－W	0.96 × 0.64	35.4	「U」字形	中世	第83号土坑	楕円形	N－84°－E	0.78 × 0.62	23	「U」字形	古代IV
第31号土坑	不整楕円形	N－6°－W	1.68 × 0.60	13	皿状	—	第84号土坑	楕円形	N－27°－E	2.1 × 1.18	95	逆台形	—
第32号土坑	円形	—	〈径〉0.88～0.98	約20	「U」字形	—	第85号土坑	隅丸長方形	N－90°－E	1.26 × 0.67	62	逆台形	古代IV
第33号土坑	不整楕円形	N－17°－W	(1.14)×(1.0)	51	「U」字形	古代IV A	第86号土坑	(長方形)	N－90°－E	1.49 × 0.80	40	逆台形	古代IV A
第34号土坑	不明	—	(1.34)×(0.18)	(29)	「U」字形	古代IV A	第87号土坑	(不整円形)	—	1.52 ×(0.72)	50	不定	—
第35号土坑	円形	—	〈径〉 1.40	107	逆台形	古代IV B	第88号土坑	(楕円形)	N－5.5°－E	(1.40)× 0.70	27	不定	古代IV
第36号土坑	不整楕円形	N－11.5°－E	(1.76)× 1.28	18	皿状	古代IV	第89号土坑	円形	—	〈径〉約 1.20	47	不定	—
第37号土坑	不整楕円形	N－15.5°－W	0.98 × 0.76	35	逆台形	古代IV A	第90号土坑	円形	—	〈径〉 1.18	139	逆台形	—
第38号土坑	(円形)	—	〈径〉 (0.98)	15	「U」字形	—	第91号土坑	楕円形	N－24°－E	1.93 × 0.66	17	皿状	—
第39号土坑	(方形)	ほぼ真北	(2.26)×(0.54)	53	—	—	第92号土坑	不整長方形	N－76°－W	1.03 × 0.65	14	不定	—
第40号土坑	不整円形	—	〈径〉 2.46	71	「U」字形	古代IV A	第93号土坑	円形	—	〈径〉約 1.45	89	逆台形	—
第41号土坑	不明	—	(0.84)×(0.15)	19	逆台形	—	第94号土坑	隅丸長方形	N－68°－E	1.16 × 0.84	23	不定	古代IV B
第42号土坑	円形	—	〈径〉 1.32	34	不定	古代IV	第95号土坑	円形	—	〈径〉約 0.90	17	不定	—
第43号土坑	円形	—	〈径〉 (1.40)	31	皿状	古代IV B	第96号土坑	(円形)	—	〈径〉 2.14	81	不整形	古代IV
第44号土坑	(楕円形)		(0.70)× 0.64	20	「U」字形	—	第97号土坑	(楕円形)	N－52.5°－E	0.94 ×(0.90)	23	逆台形	古代IV
第45号土坑	隅丸方形	N－5°－E	1.07 × 1.07	23.5	逆台形	—	第98号土坑	円形	—	〈径〉約 1.0	32	「U」字形	古代IV
第46号土坑	不整楕円形	N－15.5°－W	1.08 × 0.58	17	「U」字形	古代IV B	第99号土坑	不整形	—	1.80 ×(1.20)	50	不定	古代IV A
第47号土坑	長方形	N－78°－W	1.03 × 0.62	21	逆台形	(古代IV)	第100号土坑	不整楕円形	N－21°－E	1.49 × 1.24	18	逆台形	古代IV B
第48号土坑	楕円形	N－40°－W	1.26 × 0.57	27	「U」字形	(古代IV)	第101号土坑	(楕円形)	N－83.5°－W	(1.04)× 0.80	23	皿状	—
第49号土坑	(不整長方形)	N－18°－W	1.62 × 0.98	45	逆台形	(古代IV)	第102号土坑	円形	—	〈径〉 0.84	28	「U」字形	—
第50号土坑	楕円形	N－14°－E	0.90 × 0.76	36	逆台形	(古代IV)	第103号土坑	楕円形	N－31°－W	1.33 × 0.46	19	「U」字形	—
第51号土坑	(楕円形)	—	(0.82)×(0.58)	14	不定	(古代IV)	第104号土坑	楕円形	N－25°－W	1.07 × 0.48	17	「U」字形	—
第52号土坑	方形	N－15°－E	1.18 × 1.18	84	「U」字形	古代IV	第105号土坑	不整楕円形	N－47°－W	1.24 × 0.52	14	逆台形	—

7．土坑

土坑は105基検出された。これらは形状・方向・大きさ・堆積土の状況などにおいて極めて多様性があり、大きく類別することはできなかった。したがって土坑の性格も多様であることが考えられる。年代がほぼ明らかにできた土坑は、古代Ⅰ期－１基、古代Ⅳ期－44基、中世Ⅰ期－１基である。このことから検出された土坑の大部分は平安時代のものである可能性が高いと考えられる。これらの中には古代ⅣＡ・ⅣＢの両期のものが含まれている。

8．堀跡

堀跡とした遺構は上幅が４～５ｍの規模をもち、規則性をもって長く走行しているもので、４条検出された。この中の第１・２・４号堀跡については、第Ⅴ章の各遺構のところで述べたように、方向性がほぼ一致すること、配置に規則性がみられることなどから、同時に存在し、機能していたものと考えられる。また、第４号堀跡に連続する第61・77号溝跡を含めて全体をみると、これらは組合いながらほぼ方形に巡っており、それにより複数の区画が形成されていることがわかる。堀跡の規模や形状は第１・２号堀跡とも共通しており、上幅が約５ｍ、深さは約２ｍ前後で、断面は逆台形をなしている。また、いずれも堆積土の最下部には水成とみられる砂層が堆積している。第４号堀跡は上幅が４ｍ、深さが１ｍ前後であり、第１・２号堀跡よりもやや規模が小さいが、後世に芦田として利用された際に上部が削平された可能性も考えられる。堀の形状では南と北辺は他と異なり、堀の南側に小さな溝が平行して走っている。これらの堀跡の年代については伴出遺物が極めて少ないため、明確ではないが、ここでは第１号堀跡において堆積土の下部から15世紀後半から16世紀ごろの白磁と漆器が出土していること、第２号堀跡において堆積土中位から14～15世紀の瀬戸産梅瓶などが出土していること、また、これらの堀跡と一連の第61・77号堀跡において、堆積土の上～中位から、15～16世紀の瓦質摺鉢・漆器などが出土していること、そして後述する第３号堀跡を切っていることなどから、中世Ⅲ期の15世紀後半から16世紀ごろに位置付けておきたい。

第３号堀跡は第Ⅴ章の遺構のところでのべたように、第59・62号溝跡などと一連のものと考えられる。こうしたことから第３号堀跡と溝跡もまた、組合いながらほぼ方形に巡り、複数の区画を成すものと考えられる。これらの堀跡および溝跡は上幅が３～４ｍ、深さが約１ｍ強の規模であり、他の堀跡よりも若干規模が小さいものといえる。これらの遺構からは中世前半の陶器・磁器が多く出土しているが、その他に中世後半の摺鉢や茶臼などの石臼がわずかながら出土している。また、これらは前述した中世Ⅲ期の堀跡に切られていることから、それらよりも古い。さらに、同じく中世Ⅲ期の溝跡に切られている中世Ⅱ期段階の第８号井戸状遺構が位置的な面から関連性が考えられることなどから、第３号堀跡は大まかに中世Ⅱ期段階のものと

推測される。

9．溝跡

溝跡は総数77条が検出された。その中で出土遺物・重複関係・他遺構との関連などから、年代が推定されたのは、古代IV期－24条、中世Ⅰ期－７条、中世II期－４条、中世III期－９条などである。古代IV期はA・B両期の遺構を含んでおり、ほぼ全域に分布している。これらの中には、第16・21号溝跡のように、上幅が２ｍ以上、深さが70cm前後の規模をもち、途中から直角に近い角度で屈曲するものがある。同時期の他遺構との関連は不明だが、ある範囲を区画する性格の溝である可能性が考えられる。

溝跡一覧表

項目／溝跡名	平面形	方向	長さ(m)	規模(推定)(m) 上端幅	規模(推定)(m) 下端幅	深さ(cm)	断面形	年代
第１号溝跡	ほぼ直線的	N－70°－W	(42.3)	0.90	—	42	「U」字形	古代IV
第２号溝跡	ほぼ直線的	N－82.5°－W	(13.6)	1.2	0.6	37	「U」字形	古代IV
第3a号溝跡	直線的	N－14.5°－E	(4.84)	1.68	0.76	38	皿状	中世III
第3b号溝跡	ほぼ直線的	N－10.5°－E	(6.0)	4.64	2.5	100	皿状	中世III
第４号溝跡	ほぼ直線的	N－18°－W	(7.0)	0.50	0.28	30	逆台形	—
第５号溝跡	ほぼ直線的	N－33.5°－W	(8.0)	0.46	0.28	18	逆台形	—
第６号溝跡	ほぼ直線的	N－60.5°－E	(5.3)	0.64	0.48	15	逆台形	—
第７号溝跡	ほぼ直線的	N－22.5°－E	(5.72)	0.80	0.40	35	逆台形	—
第８号溝跡	直線的	N－22.5°－E	(5.8)	0.80	0.40	38	逆台形	—
第９号溝跡	直線的 途中でカーブ	N－76.5°－W	(21.3)	0.86	0.40	40	逆台形	—
第10号溝跡	ほぼ直線的	N－24.5°－E	(6.0)	0.94	0.28	40	皿状	古代IV
第11号溝跡	(方形状)	N－74.5°－W	(26.0)	2.50	1.40	81	「U」字形	中世Ⅰ
第12号溝跡	ほぼ直線的	N－18°－E	(6.0)	3.6	0.80	70～120	「U」字形	中世Ⅰ
第13号溝跡	直線状に交叉	N－19°－E	7.84	0.73	0.25	23	皿状	—
		N－76°－W	(5.76)	1.35	0.77	14		
第14号溝跡	直線的	N－17.5°－E	(5.92)	0.82	0.42	27	直方形	古代IVA
第15号溝跡	直線的	N－30°－E	(3.76)	0.80	0.53	29	「U」字形	—
第16号溝跡	A：直線的	N－81°－W	(32.0)	2.00	0.40	50～70	逆台形	古代IV
	B：直線的	N－81°－W	(7.4)	1.2	0.40	50～60	逆台形	
	C：直線的	N－10°－E	(2.7)	0.88	0.23	19	皿状	
第17号溝跡	ほぼ直線的	N－13°－E	(6.20)	1.13	0.24	40	「U」字形	古代IV
第18号溝跡	ほぼ直線的	N－23°－E	(6.0)	2.10	0.40	110	「V」字形	中世Ⅰ
第19号溝跡	直線的	N－86°－W	(28.0)	0.65	0.37	26	逆台形	—
第20号溝跡	ほぼ直線的	N－22°－E	(21.0)	1.82	0.33	87	「V」字形	中世Ⅰ
		N－69°－W						
第21号溝跡	直線的 途中で分岐	N－10.5°－E	(14.7)	2.40	0.40	75	「U」字形	古代IV
第22号溝跡	ほぼ直線的	N－70.5°－W	(6.0)	1.63	0.38	81	「U」字形	中世Ⅰ
第23号溝跡	ほぼ直線的	N－68°－W	(6.0)	2.35	1.01	100	逆台形	中世Ⅰ
第24号溝跡	ほぼ直線的	N－51°－E	(4.80)	0.99	0.27	65	逆台形	古代IVB
第25号溝跡	ほぼ直線的	N－80°－W	(6.0)	1.20	0.45	18	皿状	—
第26号溝跡	直線的	N－16°－E	(15.0)	1.30	0.47	29	皿状	—
第27号溝跡	ほぼ直線的	N－75°－W	(6.0)	0.83	0.36	12	皿状	—
第28号溝跡	ほぼ直線的	N－68.5°－E	(31.6)	2.23	1.04	20	皿状	—
第29号溝跡	ほぼ直線的	N－41°－W	(2.8)	0.89	0.40	18	「U」字形	古代IV
第30号溝跡	ほぼ直線的	N－44°－W	(2.88)	0.66	0.36	41	「U」字形	—
第31号溝跡	直線的	N－41°－W	(9.0)	1.08	0.24	52	「U」字形	古代IVB
第32号溝跡	ほぼ直線的	N－39°－W	(9.0)	1.02	0.34	36	「U」字形	—
第33号溝跡	ほぼ直線的	N－89.5°－E	(25.28)	0.72	0.48	15	「U」字形	古代IV
第34号溝跡	ほぼ直線的	N－11°－E	(6.12)	0.74	0.50	14	「U」字形	古代IV
第35号溝跡	直線的	N－89.5°－W	(6.12)	1.14	0.32	57	逆台形	—
第36号溝跡	直線的	N－15.5°－W	(7.08)	1.08	0.51	13	皿状	—

項目／溝跡名	平面形	方向	長さ(m)	規模(推定)(m) 上端幅	規模(推定)(m) 下端幅	深さ(cm)	断面形	年代
第37号溝跡	(ほぼ直線的)	N－16°－E	(5.92)	4.68	0.60	160	「U」字形	中世III
第38号溝跡	ほぼ直線的	N－74°－E	4.7	0.70	0.41	10	逆台形	—
第39号溝跡	ほぼ直線的	N－11°－W	(5.60)	0.86	0.63	15	逆台形	—
第40号溝跡	直線に近い	N－89°－W	(6.00)	1.24	0.36	64	「U」字形	古代IVB
第41号溝跡	ほぼ直線的	N－69°－W	(5.88)	1.76	0.64	71	「U」字形	中世Ⅰ
第42号溝跡	ほぼ直線的	N－72°－W	(6.04)	0.84	0.32	31	「U」字形	—
第43号溝跡	直線的	N－75°－W	(6.0)	0.40	0.14	8	丸底状	—
第44号溝跡	ほぼ直線的	N－80.5°－W	(5.92)	0.66	0.31	21	「U」字形	—
第45号溝跡	直線的	N－78°－W	(8.20)	0.51	0.34	6	「U」字形	—
第46号溝跡	直線的	N－13.5°－E	(4.20)	0.88	0.44	27	「U」字形	古代IV
第47号溝跡	直線的	N－89°－E	(5.08)	0.67	0.48	12	逆台形	古代IV
第48号溝跡	直線的	N－84°－E	6.52	1.21	0.33	32	丸底状	古代IVA
第49号溝跡	直線状	N－12°－E	(3.50)	0.64	0.44	7	皿状	—
第50号溝跡	不整な形状	—	(5.6)	2.12	—	48	逆台形	古代IVA
第51号溝跡	直線状	N－29°－E	(2.32)	0.57	0.27	25	「U」字形	古代IV
第52号溝跡	直線的	N－0.5°－E	(4.12)	1.20	0.31	62	「U」字形	古代IVA
第53号溝跡	ほぼ直線的	N－1.5°－E	(4.12)	0.49	0.24	22	「U」字形	古代IVB
第54号溝跡	ほぼ直交	N－54°－W	(3.66)	1.83	0.40	56	皿状	—
第55号溝跡	直線的	N－17.5°－E	(5.80)	0.84	0.32	29	皿状	—
第56号溝跡	ほぼ直線的	N－38°－W	(12.4)	0.96	0.46	25	丸底状	—
第57号溝跡	直線的	N－20°－E	(14.0)	1.47	0.45	54	「U」字形	中世III
第58号溝跡	直線的	N－76°－E	(16.0)	0.95	0.57	20	不定	中世
第59号溝跡	ほぼ直線的	N－16.5°－E	(5.12)	3.60	0.47	115	逆台形	中世II
第60号溝跡	直線的	N－31.5°－W	(8.20)	0.62	0.20	22	「U」字形	中世II～III
第61号溝跡	東西：カーブ	—	(29.5)	(4.0)	—	180	逆台形	中世III
	南北：直線的	N－5.5°－E	(9.0)	3.40	0.70	100		
第62号溝跡	ほぼ直線的	N－7.5°－E	(18.0)	2.60	0.70	92	逆台形	中世II
第63号溝跡	ほぼ直線的	N－12.5°－E	(10.5)	1.27	0.23	52	逆台形	—
第64号溝跡	直線的	真北方向	(24.5)	3.30	1.0	123	逆台形	中世II
第65号溝跡	ほぼ直線的	N－84°－W	(17.4)	3.44	0.64	100	逆台形	中世II
第66号溝跡	ほぼ直線的	N－13°－E	18.30	0.53	0.25	16	「U」字形	中世III
第68号溝跡	ほぼ直線的	N－40°－W	(9.30)	0.80	0.40	27	「U」字形	古代IV
第69号溝跡	直線的	N－72.5°－W	(7.44)	2.16	0.52	142	「U」字形	中世III
第70号溝跡	直線的	N－14.5°－W	(10.12)	1.20	0.52	50	逆台形	—
第71号溝跡	ほぼ直線的	N－41.5°－W	(6.36)	0.48	0.32	39	逆台形	古代IVB
第72号溝跡	直線的	N－55.5°－W	(5.24)	0.76	0.47	21	不定	—
第73号溝跡	直線的	N－64°－W	(5.36)	0.71	0.59	15	逆台形	—
第74号溝跡	直線的	N－74.5°－W	(8.80)	1.48	0.57	57	皿状	古代IV
第75号溝跡	ほぼ直線的	N－36°－W	(10.84)	0.68	0.44	18	「U」字形	—
第76号溝跡	ほぼ直線的	N－10°－W	(14.60)	0.78	0.64	26	「U」字形	古代IV
第77号溝跡	直線的	真北方向に直交	(17.80)	2.40	0.60	60～116	「U」字形	中世III
第78号溝跡	ややカーブ	真北方向に直交	(11.0)	1.42	0.49	54	逆台形	中世III

中世Ⅰ期の溝跡には、第18・20・23号溝跡のように同一の溝であることが確認され、それが方形にめぐり、１区画を成すものがあり、また、第11号溝跡も同様のものと推定される。これらの溝は上幅が２ｍから2.5m、深さが１ｍ前後の規模をもち、断面はＶ字形かＵ字形をなしている。

中世Ⅱ期およびⅢ期の溝跡の大部分は同段階の堀跡と関連するものであり、規模や形状などはそれぞれの堀跡に近いものである。

10. 溝状遺構

溝状遺構としたものは、溝跡と比較して規模が小さく、形状が不規則なものであるが、厳密な基準ではない。遺構の遺存状態によるところも大きく、その点では性格や機能の面で溝跡と同様のものも含まれているものといえる。総数51状検出され、その中で出土遺物などから年代が推定できるものは、古代Ⅳ期が10条、中世Ⅲ期が１条だけである。

11. 小溝状遺構群

10ヵ所で小溝状遺構群が検出されている。その中で最も広範にまとまりをもって検出されたのが第９号小溝状遺構群である。ここではほぼ直交する二方向の小溝が分布を異にして、比較的等間隔に整然と並んでおり、一連のものと考えられる。こうした同一方向で等間隔に並ぶ規

溝状遺構一覧表

項目／溝状遺構名	平面形	方向	長さ(m)	規模(推定)(m) 上端幅	規模(推定)(m) 下端幅	深さ(cm)	断面形	年代
第１号溝状遺構	直線的	N－18°－E	(4.26)	0.66	0.30	17.5	逆台形	—
第２号溝状遺構	ゆるやかな弧状	—	(9.2)	0.52	0.36	10	逆台形	—
第３号溝状遺構	ほぼ直線的	N－14.5°－E	(1.84)	0.26	0.16	8	逆台形	—
第４号溝状遺構	ほぼ直線的	N－15°－E	(4.60)	0.48	0.28	16	「U」字形	—
第５号溝状遺構	直線状	N－18°－E	(5.32)	0.34	0.16	7	皿状	—
第６号溝状遺構	ほぼ直線的	N－82.5°－W	(2.60)	0.52	0.29	22	不整な四角状	—
第７号溝状遺構	ほぼ直線的	N－76.5°－W	(2.50)	0.40	0.18	51	「U」字形	—
第８号溝状遺構	ほぼ直線的	N－9°－E	(2.60)	0.40	0.21	12	逆台形	—
第９号溝状遺構	ほぼ直線的	N－80°－W	8.94	0.37	0.21	16	「U」字形	—
第10号溝状遺構	ほぼ直線的	真北方向と直交	(2.92)	0.34	0.20	16	「U」字形	—
第11号溝状遺構	ほぼ直線的	N－1.5°－E	(1.08)	0.34	0.22	9	不定形	—
第12号溝状遺構	ほぼ直線的	N－16°－E	(5.04)	0.46	0.32	13	不定形	—
第13号溝状遺構	ほぼ直線状	N－30°－E	(3.30)	0.44	0.29	14	逆台形	—
第14号溝状遺構	直線的	N－76°－W	4.60	0.40	0.27	20	逆台形	—
第15号溝状遺構	直線的	N－1°－W	(9.4)	1.30	0.63	20	皿状	—
第16号溝状遺構	直線状	N－70°－W	(2.16)	0.87	0.32	40	「U」字形	古代Ⅳ
第17号溝状遺構	(直線状)	N－11.5°－E	(4.68)	0.57	0.45	8	皿状	—
第18号溝状遺構	直線状	N－5°－W	(1.76)	0.37	0.20	9	「U」字形	—
第19号溝状遺構	(直線的)	N－3.5°－W	(0.96)	0.40	0.16	34	「U」字形	—
第20号溝状遺構	直線的	N－88°－W	(4.0)	0.49	0.26	30	「U」字形	古代Ⅳ
第21号溝状遺構	(直線状)	N－88°－W	(2.04)	0.40	0.23	20	「U」字形	古代Ⅳ
第22号溝状遺構	直線的	N－1°－E	2.16	0.51	0.32	20	直角ぎみ	古代Ⅳ
第23号溝状遺構	直線状	N－1°－E	(1.48)	0.48	0.22	8	逆台形	古代Ⅳ
第24号溝状遺構	直線的	N－14.5°－E	(4.76)	0.60	0.44	18	丸底状	古代ⅣA
第25号溝状遺構	(直線状)	真北に近い	(0.96)	0.32	0.22	4	逆台形	古代ⅣA
第26号溝状遺構	直線的	N－83°－W	(2.0)	0.38	0.20	12	丸底状	古代ⅣA
第27号溝状遺構	直線状	N－81°－W	(1.68)	0.58	0.39	10	逆台形	—
第28号溝状遺構	長方形の土坑状	N－3°－W	(1.48)	0.48	0.30	21	「U」字形	—
第29号溝状遺構	直線的	N－3°－W	(2.96)	0.48	0.31	15	「U」字形	古代ⅣB
第30号溝状遺構	—	不明	(0.64)	0.52	0.40	24	不定形	—
第31号溝状遺構	直線的	N－80.5°－E	2.36	0.36	0.21	4	皿状	—
第32号溝状遺構	直線状	N－7.5°－W	(2.32)	0.32	0.22	8	丸底状	—
第33号溝状遺構	直線状	N－80.5°－E	(1.56)	0.72	0.40	11	不定形	—
第34号溝状遺構	直線的	N－75.5°－E	(6.40)	0.52	0.36	10	逆台形	—
第35号溝状遺構	直線的	N－18°－E	3.32	0.64	0.40	25	「U」字形	中世Ⅲ
第36号溝状遺構	直線的	N－78°－W	4.52	0.22	0.16	5	不定形	—
第37号溝状遺構	直線的	N－78.5°－W	(3.76)	0.24	0.14	6	皿状	古代ⅣA
第38号溝状遺構	直線的	N－80.5°－W	3.24	0.35	0.26	7	不定形	—
第39号溝状遺構	直線的	N－78.5°－W	5.20	0.48	0.25	22	逆台形	—
第40号溝状遺構	直線的	N－74.5°－E	3.64	0.34	0.21	12	逆台形	—
第41号溝状遺構	直線的	N－76°－E	(7.0)	0.28	0.16	10	「U」字形	—
第42号溝状遺構	弧状	—	(9.08)	0.47	0.30	23	逆台形	—
第43号溝状遺構	(直線的)	N－60°－W	(1.64)	0.40	0.16	22	「U」字形	—
第44号溝状遺構	直線的	N－12.5°－W	6.60	0.36	0.26	16	逆台形	—
第45号溝状遺構	直線的	N－71°－W	(5.20)	0.53	0.29	8	皿状	—
第46号溝状遺構	直線的	N－71°－W	(5.0)	0.80	0.44	8	皿状	—
第47号溝状遺構	直線状	N－37°－W	(2.80)	0.40	0.28	6	皿状	—
第48号溝状遺構	直線的	N－72°－E	(3.38)	0.39	0.17	6	「U」字形	—
第49号溝状遺構	直線的	N－43°－E	(4.70)	0.26	0.13	12	「U」字形	—
第50号溝状遺構	直線状	東西方向に近い	(1.60)	1.0	0.40	23	不定形	—
第51号溝状遺構	直線状	真北方向	(1.56)	0.88	0.64	11	皿状	—

則性はこの他に、第１・８号小溝状遺構群でも多少見受けられる。このような特徴をもつ遺構は最近、各地で発見されており、畠跡としての理解がなされてきている。年代は出土遺物と重複関係などから第１号が古代III期以前、その他は主に古代IV期を中心としたものと推定される。

12. 円形周溝

１基検出されたが、幅40～50cmの溝が径5.5m に円形にめぐることが推定される。溝内からは土師器が１点出土している。これは古代III期の土師器坏2A 類としたものに類似していることから、遺構の年代も古代III期と考えられる。性格については明確にはできなかった。

13. 河川跡

VII区両端部からIX区にかけて河川跡の一部が確認された。この中のVII区では南に傾斜する壁面直上の堆積土から、古代IV期の土師器坏が出土している。また、堆積土の上部には10世紀前半頃に降下したとみられる灰白色火山灰が認められることから、検出された河川跡は９世紀ごろに形成され、その後、短期間の内に埋没したものと考えられる。なお、中世III期の堀跡はこの堆積土を切って造られている。

IX. まとめ－遺跡の構成

中田南遺跡は名取川下流域南岸の自然堤防上に立地している。調査の結果、調査区のほぼ全域から各種の遺構・遺物が多数発見された。それらは縄文時代から中世にわたる広範な時期のものであり、中田南遺跡が長い歴史的経過の中で形成されてきたことを示している。遺跡の一部の調査での知見ではあるが、中田南遺跡を舞台とした歴史的な活動は大きく9段階に分けて理解することができる。以下に今回の調査成果をふまえ、それぞれの段階の遺跡の特性を概括的に述べてみたい。

1．縄文時代

縄文時代のものとしては、縄文土器と石器がある。縄文土器で明確に時期が判明したのは、縄文時代晩期中葉の大洞C_2式と晩期終末の大洞A′式である。これらの資料は遺構に伴わず、少量の出土ではあるけれども、他所から移動してきたものとは考えられないことから、遺跡内での生活の痕跡を示すものと考えられる。すなわち、中田南遺跡の歴史が遅くとも縄文時代晩期中葉には開始されていたことが知られる。なお、縄文時代の生活面であるが、基本層のIV層からは全く遺物は発見されず、縄文時代の資料は全て上層からの出土である。また、第VI章1の報告にもあるように、IV層は砂やシルトなどの洪水堆積物から成っており、それらにより活発な自然堤防の形成が行われた段階の堆積層と考えられ、このIV層の形成により、その後の生活環境が成立したものと考えられる。したがって、縄文時代の生活面はIV層よりも上層に存在したものと推測される。

2．弥生時代

弥生時代のものとしては、弥生土器・石器がある。弥生土器には中期中葉の桝形囲式と中期後葉の十三塚式があり、後者は量的に非常に多く出土している。弥生時代に特徴的な石器にはノミ形石斧や石庖丁があるが、量的には少ない。以上の遺物は調査区の南半部を中心に広範に分布しており、遺構は発見されなかったものの、ここに弥生時代の人々の集落が形成されていたことを知ることができる。遺跡の東側には低湿地が延々と広がっており、当時の水田耕地も、そのあたりに求められそうである。周辺では安久東遺跡（土岐山：1980）、清水遺跡（丹羽他：1981）などの弥生時代の遺跡が同じく自然堤防上に立地して分布している。弥生時代になると、安定した地形環境の形成に伴い、水田可耕地を求めて沖積地の各地に集落が出現したものと考えられる。中田南遺跡は弥生時代でも中期の後半を中心とした時期であり、農耕社会の発展の

中で形成された農耕集落の一つと考えることができよう。

3．古代Ⅰ期（古墳時代中期）

古代Ⅰ期のものとしては土坑が1基とその中から出土した土師器数点がある。また、遺構からの出土ではないが、石製模造品もこの時期のものと推測される。資料としては極めて少ないが、この時期にもここが生活の場として利用されたことを知ることができる。名取川下流域の南岸部でも遺跡周辺では、古墳時代中期の遺跡はこれまでほとんど知られておらず、また、この時期の古墳もまだ確認されていない。今回の調査により、この時期の集落の存在がわずかながら明らかにされたものといえる。

4．古代II期（古墳時代後期）

古代II期の遺構としては竪穴住居跡3軒があり、遺物としては土師器・土錘・鉄製品・磨面をもつ礫がある。竪穴住居跡は散在して分布しているが、その中の2軒は住居の方向や規模・構造がほぼ一致しており、同時に存在していた可能性が高い。周辺における当該期の遺跡には、名取市清水遺跡がありここでは竪穴住居が2軒検出されている。こうした竪穴住居が当時の中心的な居住形態であったことが考えられ、ここでも数軒の竪穴住居により集落が形成されていたものと推測される。

5．古代III期（古墳時代末－奈良時代前半）

古代III期の遺構としては、竪穴住居跡が23軒、掘立柱建物跡が2棟などがある。また、遺物としては土師器・須恵器・とりべ・土製品（土錘・フイゴの羽口など）・鉄製品（刀子など）・石製品（磨面や敲打痕をもつ礫など）がある。この時期の集落の特徴としては次の①～⑤のことがあげられる。

①遺構の中でも竪穴住居跡は調査区のほぼ全域に分布しており、調査対象区域では100軒を越す住居跡の存在が推測される。また、約100m西方の国道四号線沿いからも当該期の遺物が発見されていることから、この集落跡は少なくとも東西約300m、南北100mの広範な広がりをもつことが考えられる。つまり、この時期に集落の急激な拡大・発展があったことが指摘できる。

②数は少ないが掘立柱建物跡が含まれており、その中でも注目されるのが第16号建物跡である。これは2間四方の方形の建物と想定されるが、その柱穴掘り方は長方形のプランをもち、1辺1m以上の極めて大きい規模をもつものである。

③竪穴住居跡・掘立柱建物跡とも南北方向がおおむね真北を向く傾向があり、方向に規則性が認められる。

④遺物の中で特に注目されるのが、とりべやフイゴの羽口などの銅鋳造に関わる資料の存在である。鋳造遺構は発見されなかったが、集落内に銅鋳造工房に関わる施設が存在し、そこで銅製品の生産が行なわれていたことを示すものと考えられる。
⑤土師器の中には関東系土器やロクロで製作された土器が含まれている。

次にこの集落の性格についてふれてみたい。集落の年代は古墳時代末から奈良時代前半の中でも8世紀前葉を中心とした時期であり、古代II期の集落との間に大きな中断が存在する。したがって、①のように、この時期になると竪穴住居跡などが高密度に分布し、集落が広範に広がる現象はこの集落が短期間の内に出現したことを物語るものといえる。つまり自然発生的な集落というよりは、極めて計画的に形成された集落であったことが考えられる。このことは②の住居や建物方向において真北に対する指向性がうかがえることからもいえることであり、集落が一定の規制のもとに形成されたことを知ることができる。こうした真北への指向性は中田南遺跡の南西約1kmに所在する清水遺跡における奈良～平安時代前半の住居跡でも指摘されており、ここでは条里地割との関連が考えられている。本遺跡周辺では古代の水田跡は確認例は少なく、畦畔の方向性については明確ではないが、名取川北岸の富沢遺跡では奈良時代の条里型土地割の水田が確認されている（平間：1991）。また、遺跡付近では上余田・下余田・一ノ坪などの条里との関わりが推測される地名が残されていることなどからも、周辺における条里地割の存在は十分考えられることであり、本遺跡の集落の方向性もこうした条里地割と密接に関連していたものと思われる。この集落を性格づける特徴として他に②と④がある。建物跡は数少ないが、1つは柱穴の規模の面で古代の官衙遺跡の建物跡とも類似するものである。この建物跡は調査区の西端にあり、こうした規模をもつ建物跡があるいはさらに西方に分布している可能性も推測される。しかしながら調査区内においては集落を構成する主体は竪穴住居跡である。そして、この住居跡や建物跡が密集する地域において銅鋳造に関わる資料が多く出土していることから、これらの中には銅鋳造の工房か、あるいはその工人に関わる住居が多く含まれているものと考えられる。

このように、この時期の集落は短期間の中で出現した計画的な大集落であり、その中には掘立柱建物跡や銅鋳造に関わる施設を含んでいる。掘立柱建物跡についてはその中に官衙風のものも認められるものの、官衙的な配置や区画施設は確認されていないことや、住居が竪穴住居主体であること、また遺物の面などからも、行政的な機能を持った郡衙などのような大規模な施設とは考えられないであろう。しかしながら銅鋳造に関わる工房では、この時期の例は東日本ではほとんどなく、この集落が一般的な集落ではないことを十分に示している。当時の金属器生産はまだその実態は明らかではないが、主に国家的な統制のもとで行なわれたことが考えられており、この集落における銅鋳造も公的な組織の中で計画的に営まれた可能性が高いもの

といえる。すなわち、この集落は性格の一面として、地方官衙の組織の中で、主として銅製品の生産に関わる役割を果たしていたものと推測される。集落の時期が8世紀前葉を中心としている点からいえば、郡山遺跡のII期官衙や多賀城などが関わりをもつものと考えられる。しかし、郡山遺跡や多賀城などの地方官衙からは地理的に遠く、その付属工房や官人層の居宅とは考えがたい。こうしたことからここでは集落の居住者として、地方官衙に密接な関係をもつ在地有力者層を想定しておきたい。

なお、この集落は継続性がなく、急激に衰退したものと考えられ、ごく限定された時期にその使命を果たしたものといえる。

6．古代IV期（平安時代前半）

古代IV期の遺構としては竪穴住居跡・掘立柱建物跡・鍛冶遺構・土坑・溝跡などがあり、遺物としては土師器・須恵器・赤焼土器・灰釉陶器・土製品（土錘・円面硯・フイゴの羽口など）・瓦・鉄製品（刀子・鉄鏃・馬具・鋤鍬先など）・石製品（砥石・石帯・磨面や敲打痕をもつ礫など）がある。これらの遺構・遺物は前述のように、大きくA・B期の2つの時期を含んでいる。しかし、細分時期の明確に判断できないものも多くあり、ここでは大きくIV期の集落として把えて全体的な特徴を述べたい。

①遺構は調査区全域に分布するが、A・B期それぞれの遺構は地点ごとにまとまりをもって分布する傾向があり、時期により集落の占地のあり方に変化がみられる。。

②IV期は竪穴住居跡や掘立柱建物跡などによって集落が構成されている。建物跡は4棟のみが明確にこの時期と判断されたが、これらの建物跡の付近からは同規模の柱穴とみられるピットが多数検出されており、他にも多くの建物跡の存在が想定される。このことから、この時期では竪穴住居と掘立柱建物が併存していたものと考えられる。また、これらの住居や建物の方向では古代III期の集落と同様に真北に対する指向性を示しており、条里地割などの強い規制のもとに配置されている可能性が考えられる。

③鍛冶遺構が1基検出された。また遺物でもフイゴの羽口や鉄滓が遺構周辺から出土しており、集落内において鉄製品の生産が行なわれていたものと考えられる。

④溝跡の中には2 m以上の幅をもち、直線的に走行するものもあり、集落がこうした溝によっていくつかに区分されていた可能性が考えられる。

⑤遺物の中で注目されるのは、A期の土器では須恵器の出土比率の高さであり、その中には大戸窯製品とみられる須恵器も一定量含まれていることである。また、A・B期通してわずかではあるが猿投産や東濃産の灰釉陶器も含まれている。その他の遺物では円面硯や馬具・石帯などの出土が注目される。

⑥この時期の河川跡が遺跡の南側で検出された。集落はこの河川によって南が限られていたものと考えられる。

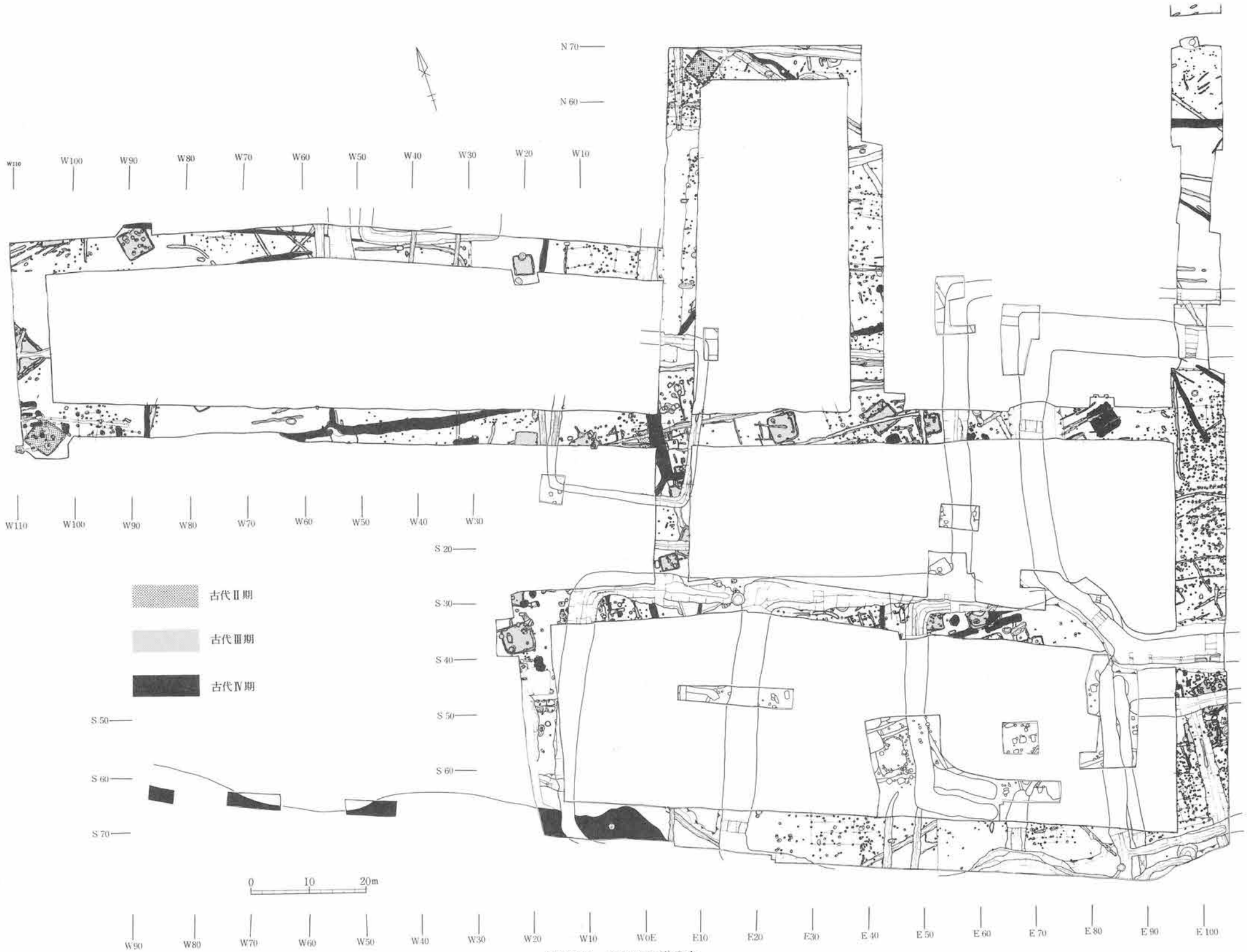
次に集落の性格であるが、この時期の集落は9世紀の前葉以降に急激に出現し、拡大した集落で、古代III期と同様に計画的に形成された集落とみることができよう。そして10世紀以降には継続せず、ほぼ9世紀代でその集落の使命を終えたものと考えられる。また、②～⑤の特徴からみると一般の集落とは異なった様相を示しており、円面硯などの遺物の面からいえば、官人層の存在も推測される。しかし、建物の配置が不規則なことや、竪穴住居が併存することなどから、官衙的な施設とは考えにくい。このようなことからここでは集落の居住者として、古代III期の集落と同様に、地方官衙と関わりをもった在地有力者層を想定しておきたい。この集落が営まれた9世紀代は、最近の多賀城跡およびその周辺の調査によると、城内の整備とともに城外でも方格地割りが行なわれ、都市的な整備がなされていることが明らかにされている(菅原：1994)。その方格地割り内の遺構はおおむね10世紀前半頃には廃絶するものが多いようである。こうした城内外の盛衰とこの集落の消長は時期的にほぼ一致しており、集落の出現および消滅に関しては多賀城内外の動向とも何らかの関連があったことが推測されよう。

7．中世Ⅰ期（鎌倉時代）

この時期の遺構には竪穴遺構・井戸跡・土坑・溝跡などがあり、遺物には陶器・磁器・土師質土器・鉄製品（刀子・鉄鏃・鎌・釘など）・石製品（石硯・磨面や敲打痕をもつ礫）・木製品（曲物・箸など）・縄などがある。

この段階の遺構群は平面的に大きく3つに区分される。1つは調査区北端で近接して検出された竪穴遺構や数基の井戸跡などであり、この中には同時に併存していたものもあるものと考えられる。これらの遺構群の区画施設は明確にはできなかったが、位置などから南北方向の第12号溝跡や東西方向の第41号溝跡がその可能性として考えられる。これらの溝は幅が2～3 mで、深さが1 m前後の規模をもつ。また、付近に分布するIII・IV区の掘立柱建物跡はいずれも時期は明らかにできなかったが、近くのピットからはこの段階の遺物が出土していることから、建物跡にはこの時期のものも含まれていることも考えられる。こうしたことから推測すると、ここでは溝で区画されたその内部に建物や井戸などが配置されている状況が想定される（区画1）。その規模は南北方向で50m以上となる。

また、この段階の遺構として注目されるのが、溝によって囲まれた方形区画であり、2箇所で確認された。区画2は南辺だけの検出であるが、溝は幅2.5m、深さ80cmの規模をもち、その中は東西が20m前後の区画になるものと考えられる。区画内の遺構については全く不明である。区画3は溝が方形に全周することがほぼ確認された。溝は幅2 m前後、深さ1 m前後の規



第289図　古代の遺構分布

模で、断面はＶ字形に近いものである。区画は南北が約26m、東西が約23mであり、わずかに南北に長い方形区画である。区画内からはこの時期の明確な遺構は検出されていない。なお、区画３の溝跡は区画１の南辺に想定された溝跡を切っており、区画３は区画１よりも時期が新しい。

次にこれらの性格であるが、区画１については建物や井戸などが配置されている状況から屋敷跡と考えられる。そして井戸跡の近くから検出された竪穴遺構は位置や形態などから、作業場か倉庫ではないかと推定される。この屋敷地の住人としては、屋敷地の規模が比較的大きいと推定されることから一般的な農民層とは考えられない。また、区画内の遺構からは、特に土師質土器皿が比較的まとまって出土しており、武士的な性格も推測されることから、ここでは村落内の有力な農民層か土豪層を想定しておきたい。区画２・３については規模的に類似しており、両者は同様の性格が推定される。しかし区画内からは生活に関わる遺構は確認されておらず、屋敷跡かどうかは明らかではない。仏堂や神社などの可能性もあり、これらの区画の性格づけについては今後の課題といえる。

中世Ⅰ期は13世紀から14世紀頃の時期と考えられたが、さらに土師質土器皿の特徴からみるとその中でも13世紀後半頃を中心とした年代が考えられる。この鎌倉時代後半頃になると、名取郡はそれまでの和田氏・三浦氏の支配から北条氏の得宗領となり、そして郡内の郷や村には北条氏の被官が地頭代職として補任され、その支配にあたったものと考えられている（豊田・遠藤・入間田：1970、入間田：1978）。その地頭代職として知られているのが、曽我氏と片穂氏であり、曽我氏は土師塚郷と四郎丸郷、片穂氏は平岡郷のそれぞれ地頭代職に任じられている（前掲文献）。中田南遺跡のある近世の前田村の地域の地頭代職は明らかではないが、同じように北条氏の被官が支配にあたったものと推測される。しかし、これらの地頭代は全国各地に複数の所領を持っており、そのため現地には「又代官」と称する家臣が置かれていたようである（前掲文献）。中世Ⅰ期の屋敷跡は、このような北条氏の得宗領が飛躍的に拡大する時期に出現しており、また北条氏の滅亡する14世紀前葉頃には廃絶したものと考えられる。すなわち北条氏の東北地方における動向と無関係ではないことがうがわれ、屋敷地の住人がその北条氏の支配と何らかの関わりを持っていたことが推測される。なお、遺跡周辺には板碑が数多く分布しているが、その大半は中世Ⅰ期の時期のものである。この屋敷の住人もこうした板碑の造立に関わっていた可能性も考えられよう。

８．中世Ⅱ期（室町時代）

この時期の遺構には井戸状遺構・堀跡・溝跡などがあり、遺物には陶器・石製品（砥石・石臼・磨面や敲打痕をもつ礫）・古銭・木製品（漆器・曲物・木錘・下駄・櫛・舟形・木簡など）

がある。

堀と溝は組合いながらほぼ方形に巡っており、それによって囲まれた区画が少なくとも2つは確認される。区画①・②は1条の溝を共有しており、堀や溝は幅が3～4 m、深さが約1 m強の規模をもっている。土塁は検出されていないものの、堀や溝の規模からみると区画とともに防御的な機能もうかがわれる。区画①は内部が一辺32m四方の方形をなし、さらに南側に延びている。区画内は大半が未調査であり、この段階の遺構は確認されなかったが、建物跡の存在は十分に想定される。区画②は南北が約30m、東西が18m確認され、さらに調査区外に延びる。区画内からは井戸状遺構や掘立柱建物跡が検出されているが、後者についてはこの段階のものかどうかは明確ではない。なお、区画①・②ともそれ以前の同時期の溝跡と重複しており、いくつかの変遷が認められる。

この両区画については、建物跡の存在が考えられることからいずれも屋敷跡と考えられる。ただし区画①の規模が小さいことから、両区画が一連の屋敷地である可能性も考えられる。住人としては、区画している堀や溝の規模が比較的大きく防御性もうかがえること、遺物としては天目茶垸や茶臼があり、また漆器の出土が豊富であることなどから、村落内の有力農民層を想定しておきたい。

9．中世III期（室町時代）

この時期の遺構には掘立柱建物跡・井戸跡・堀跡・溝跡などがあり、遺物には陶器・磁器・石製品（砥石・磨面や敲打痕をもつ礫）・古銭・木製品（漆器・下駄など）・鹿角製品などがある。

堀跡は主に調査区の南東部に分布している。それらは組合いながら方形に巡っており、そのことにより連続した方形区画が形成されている。調査区内では少なくとも4区画が確認される。区画Aは堀が幅4 m、深さが1 m前後の規模をもつもので、その西・北側ではさらに外側に溝が平行して巡っている。堀で囲まれた区画は西半部のみが確認され、南北が約50mの長さをもち、東西は32m以上であるが、調査区から東へ15m程の地点で芹田と同じように地形が一段低くなっている状況からみると、東西の長さも50m前後になるものと推測される。すなわち50m四方の平坦面となり、南西隅がやや変形するもののほぼ方形区画をなすことが考えられる。区画内からは掘立柱建物跡や井戸跡が検出されている。建物跡は区画の中央からやや北側にかけて重複しながら多数検出されており、また組み合わなかった柱穴も極めて高い密度で分布していることから、このあたりに母屋などの中心的な建物が配置され、数回の建て替えがあったものと考えられる。

区画Bは最も西側の区画である。堀は幅5 m、深さ約2 mの大規模なもので、東辺の堀は区

画Cと共有している。区画は南北が43m前後、東西が26mであり、南北に長い長方形をなす。区画内のほとんどが未調査区であり、遺構は確認されなかった。

区画Cは連続する4区画の中心にあり、堀は区画Bと同じように幅が約5 m、深さが約2 mの大規模なものである。西辺および東辺の堀は隣接する区画と共有している。区画の大きさは南北が50m前後、東西が60m前後であり、わずかに東西方向に長い長方形をなす。区画内の一部からは掘立柱建物跡が検出されている。

区画Dは調査区の南東隅にあり、さらに東に広がるようである。北と西を区画する堀や溝は隣接する区画とそれぞれ共有しており、規模は幅が4～5 m、深さは約1 mである。南辺の溝はそれらよりも規模が小さく、幅は2.6m、深さは約1 mである。区画の大きさは南北が30m前後、東西は20m以上であるが、調査区の東約15mで地形が一段下がる状況から、東西は35m前後になるものと推測される。区画内からは掘立柱建物跡が検出されている。

区画A～Dは方形か長方形の区画をなし、Bを除く区画内からは建物跡が検出されていることなどからいずれの区画も堀で囲まれた屋敷跡と考えられる。そして区画Bの南東隅や区画Cの北東隅などにみられるような堀や溝が途切れるか細く浅くなる部分や、区画Aの西と北側にみられる細長い部分は、屋敷地につながる出入口や通路ではないかと考えられる。なお、第VI章6の報告にあるように第4号堀跡堆積土中からはクワなどの栽培植物に関係する昆虫が検出されている。屋敷地の内部かあるいは周辺にクワなどの畑地の存在が考えられる。また、特に区画Aの周囲では遺構が極めて希薄であることから、土塁や屋敷林の存在も想定されよう。

これらの屋敷地の住人については、屋敷地の広さやそれをとり囲む堀の規模が大きく防御的な機能も考慮されていること、出土遺物の中に天目茶垸や茶臼が含まれていることなどから、一般農民でなく、村落の中の有力な農民層と考えられる。これらの屋敷地は区画内の規模からみると、一辺が50～60mで面積が2500～3000㎡にも及ぶ規模の大きい区画A・Cと、面積が1000㎡程度の規模が小さい区画B・Dの大小2つに分けられる。この規模の相違が階層差や従属関係によるものかどうかは遺物の面からは明らかではない。しかし、同様の堀や溝を巡らしている点からみると、ほぼ対等関係にあった人々の集落でないかと推測される。なお、この集落の南には古代III期の河川が埋没した後に、やや流路を南に変えた河川が流れていたものと推測される。その河川が、区画B～Dの南辺の位置や形状に影響を与えたことが推定される。また、この河川は当時の名取郡を二分（北方郷と南方郷）する重要な境界となっていたとの考えもある。

遺跡の立地する自然堤防からみると、これらの屋敷地は南東部にあたる。調査区内では、この時期の溝跡がI・IV区でも確認されていることや、この付近の航空写真や現況をみると遺跡周辺にも区画Aのような堀状の凹地で囲まれた方形の微高地が多くみられることなどから、当

時は区画A～Dのような屋敷が点在し、村落を形成してしていたものと推測される。近年、中世の居館跡や集落跡に関する調査事例が増加しており、この中には今回の屋敷跡のように屋敷地が単独ではなく連続して群を成すような集落跡の存在も明らかにされてきている（中井：1991）。

中世II期の集落は14世紀末から15世紀前半頃に、中世III期の集落は15世紀後半から16世紀頃に形成されている。この15～16世紀の名取郡地方はそれまでの南北朝の動乱期を経て、15世紀初めには伊達氏の政治的な影響下に入ったものと考えられている(羽下：1989)。その後、伊達氏はその家臣団を郡内各地に配置して農民支配を強化し、16世紀前半頃には名取郡を含む宮城県南部の地域は完全に伊達氏の領域に組み込まれたようである（前掲文献)。中世II・III期の集落は伊達氏が名取郡を支配領域に組み込む過程で出現し、存続しており、こうした伊達氏の動向と何らかの関わりをもった集落であったことがうかがわれる。

中世III期の集落は16世紀代にはほぼ廃絶したものと推測される。そして第4号堀跡の堆積土最上部からは近世前半の陶器・磁器が出土していることから、近世前半頃にはおおむね堀は埋没したものと考えられる。なお、享保9年（1724）に作成された「名取郡前田村絵図」（中田の歴史編集委員会：1991）をみると調査区の範囲は田と畑になっており、屋敷は全く認められない。

註：例としては大阪府泉佐野市上町遺跡などがある。この遺跡は15世紀を中心とした集落跡であるが、ここでは13の方形区画が群を成して発見されており、その屋敷地の規模は一辺が15～45mである（岡本：1991)。

第290図　中世の遺構分布

引用・参考文献（五十音順）

阿部博志・千葉宗久（1980）：「台ノ山遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書II」『宮城県文化財報告書』第62集　宮城県教育委員会
石黒伸一朗（1986）：「仙台市柳生の板碑－柳生」『仙台市文化財調査報告書』第95集　仙台市教育委員会
石川俊英（1990）：「市川橋遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第21集　多賀城市埋蔵文化財センター
石田明夫（1992）：「会津大戸窯跡群」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸窯検討のための「会津シンポジウム」資料
石田明夫（1994）：「会津大戸窯－遺物編」『会津若松市文化財調査報告書』第37号　会津若松市教育委員会
伊藤玄三（1958）：「仙台市西台畑出土の弥生式土器」『考古学雑誌』第44巻第1号　日本考古学会
伊東・結城・工藤（1978）：「南小泉遺跡－範囲確認調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第13集　仙台市教育委員会
伊東信雄（1957）：「弥生式文化時代」『宮城県史』第1巻　宮城県
伊東信雄・伊藤玄三（1965）：「崎山囲洞穴調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第8集　宮城県教育委員会
井上喜久夫（1992）：『尾張陶磁』　ニュー・サイエンス社
今泉隆雄（1988）：「陸奥国の建国と郡山遺跡」『図説宮城県の歴史』
入間田宣夫（1991）：「平地の城と村」『中世みちのくの城館』放送による東北大学開放講座第3回資料
入間田宣夫（1978）：「鎌倉幕府と奥羽両国」『中世奥羽の世界』
岩見和泰・佐藤憲幸（1991）：「合戦原遺跡－合戦原遺跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第140集 宮城県教育委員会
稲野裕介・稲野彰子（1989）：「藤沢遺跡－1988年度」『北上市文化財調査報告書』第54集　北上市教育委員会
羽下徳彦（1989）：「伊達氏の進出－中世」『仙台の歴史』　宝文堂
氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会
氏家和典他（1975）：「多賀城跡－昭和50年度発掘調査概報」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1975　宮城県教育委員会　宮城県多賀城跡調査研究所
氏家和典他（1978）：「伊治城跡Ⅰ」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第3冊　宮城県多賀城跡調査研究所
氏家和典他（1978）：「多賀城跡」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1978　宮城県多賀城跡調査研究所
恵美昌之他（1988）：「大門山遺跡発掘調査報告書」『名取市文化財調査報告書』第22集　名取市教育委員会
岡田茂弘他（1970）：「日の出山窯跡群」『宮城県文化財調査報告書』第22集　宮城県教育委員会
岡田茂弘・桑原滋郎（1974）：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ　宮城県多賀城跡調査研究所
岡本圭司（1991）：「上町遺跡の発掘調査」『関西近世考古学研究Ⅰ』　大阪・関西近世考古学研究会
小川淳一（1980）：「青木遺跡－東北自動車道遺跡発掘調査報告書IV」『宮城県文化財調査報告書』第71集　宮城県教育委員会
小川淳一（1987）：「五本松遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第99集　仙台市教育委員会
小川　出他（1986）：「今熊野遺跡II」『宮城県文化財調査報告書』第114集　宮城県教育委員会
加藤道男・阿部博志（1980）：「観音沢遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書IV」『宮城県文化財調査報告書』第72集　宮城県教育委員会
加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』Ⅱ　寧楽社
菊地逸夫（1991）：「伊治城跡－平成2年度発掘調査概報」『築館町文化財調査報告書』第3集　築館町教育委員会
木村浩二・長島榮一（1989）：「文化財レポート　仙台市郡山遺跡その後」『日本歴史』10月号
木村浩二・長島榮一（1991）：「郡山遺跡発掘調査の成果－変遷と性格」『第17回古代官衙遺跡検討会資料』
木本元治（1990）：「南東北地方における歴史時代の須恵器編年Ⅰ」『考古学古代史論攷』　伊東信雄先生追悼論文集刊行会
桑原滋郎（1969）：「ロクロ土師器坏について」『歴史』第39輯　東北史学会
経済企画庁（1967）：「仙台－地形・表層地質・土壌」『土地分類基本調査』
小井川和夫（1980）：「金剛寺貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第78集　宮城県教育委員会
小井川和夫（1981）：「上新田遺－長者原貝塚・上新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第78集　宮城県教育委員会
小井川和夫・小川淳一（1982）：「御駒堂遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書VI」『宮城県文化財調査報告書』第83集　宮城県教育委員会
小牛田町教委（1976）：「山前遺跡」
小林謙一・佐川政敏（1989）：「平安時代～近世の軒丸瓦－法隆寺出土古瓦の調査概報（2）」『法隆寺昭和資財帳調査概報⑩－伊珂留我』
斎藤孝正（1989）：「灰釉陶器の研究II－猿投窯第Ⅴ期椀・皿類の型式編年」『名古屋大学文学部研究論集』104　史学35
佐々木和博他（1985）：「色麻町香ノ木遺跡・色麻古墳群」『宮城県文化財調査報告書』第103集　宮城県教育委員会
佐々木茂楨・桑原滋郎（1971）：「長根窯跡」　涌谷町教育委員会

佐藤甲二・青沼一民（1984）：「後河原遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第71集　仙台市教育委員会
佐藤好一・熊谷幹男（1990）：「赤生津遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第139集　仙台市教育委員会
佐藤　洋（1983）：「今泉城跡－名取川下流域における中世城館跡の調査」『仙台市文化財調査報告書』第58集　仙台市教育委員会
佐藤　洋他（1982）：「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第36集　仙台市教育委員会
紫桃正隆（1974）：『史料　仙台領内古城・館』第四巻　宝文堂
篠原信彦他（1980）：「今泉城跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第24集　仙台市教育委員会
志間泰治（1958）：「宮城県角田町住社発見の竪穴住居跡とその考察」『考古学雑誌』第43巻第４号　日本考古学会
志間泰治（1965）：「田町裏遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第８集　宮城県教育委員会
下津間康夫（1991）：「草戸千軒町遺跡出土漆器類観察ノート－椀・皿類の編年試案」『草戸千軒』№216（第19巻第３号）草戸千軒町遺跡調査研究所
白鳥良一・加藤道男他（1974）：「岩切鴻ノ巣遺跡－東北新幹線関係遺跡報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第35集　宮城県教育委員会
白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡調査研究所
進藤・佐藤・菊地（1990）：「大年寺山横穴群」『宮城県文化財調査報告書』第136集　宮城県教育委員会
菅原弘樹（1994）：「方格地割と遺跡の性格」『第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
鈴木勝彦・髙橋誠明（1991）：「名生館官衙遺跡Ⅺ」『古川市文化財調査報告書』第10集　古川市教育委員会
須田良平（1993）：「下草古城跡－下草古城跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第154集　宮城県教育委員会
須藤　隆（1983）：「東北地方の初期弥生土器」『考古学雑誌』第68巻第３号
高倉敏明他（1981）：「山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第２集　多賀城市教育委員会
高野芳宏（1983）：「多賀城跡」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1983　宮城県多賀城跡調査研究所
高野芳宏（1990）：「宮城県における９～13世紀の土器」『土器からみた中世社会の成立』シンポジウム資料
地質調査所（1986）：「仙台地域の地質」『地域地質研究報告』
千葉孝弥他（1990）：「新田遺跡－第４・11次調査報告」『多賀城市文化財調査報告書』第23集　多賀城市埋蔵文化財センター
千葉宗久（1980）：「上古川遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第65集　宮城県教育委員会
土岐山　武（1980）：「安久東遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第72集　宮城県教育委員会
豊田・遠藤・入間田（1970）：「東北地方における北条氏の所領」『日本文化研究所研究報告』別巻第７集　東北大学日本文化研究所
中井　均（1991）：「中世の居館・寺そして村落－西国を中心として」『中世の城と考古学』新人物往来社
中田の歴史編集委員会（1991）：『中田の歴史』
中富　洋（1991）：「山口遺跡第10次発掘調査－山口遺跡第９次・10次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第151集　仙台市教育委員会
中村方彦・斎藤彰裕（1991）：「住社遺跡－住社遺跡・荒町遺跡・寺前遺跡・田町裏遺跡」『角田市文化財調査報告書』第７集　角田市教育委員会
中山雅弘（1988）：「福島県における中世土器の様相」『東国土器研究』第１号　東国土器研究会
名取市（1977）：『名取市史』　名取市史編纂委員会
名取市教委（1992）：「熊野大館跡現地説明会資料」
名取市教委（1988）：「名取市金石史料Ⅰ（板碑編）」『名取市文化財調査報告書』第20集　名取市教育委員会
奈良国立文化財研究所（1989）：『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』
奈良国立文化財研究所（1992）：『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』22
永沼律朗（1987）：『佐倉市長熊廃寺跡確認調査報告書』　千葉県教育委員会
日本中央競馬会（1991）：『日本馬具大鑑』第二巻古代下　日本馬具大鑑編集委員会
丹羽・小野寺・阿部（1981）：「清水遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第77集　宮城県教育委員会
丹羽　茂（1983）：「宮前遺跡－朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集　宮城県教育委員会
丹羽・後藤・高野（1988）：「多賀城跡」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1988　宮城県多賀城跡調査研究所
丹羽　茂・村田晃一（1992）：「東山遺跡Ⅵ」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第17冊　宮城県多賀城跡調査研究所
服部実喜（1984）：「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置づけについて」『神奈川考古』第19号　神奈川考古同人会
日野市落川遺跡調査会（1986）：『日野市落川遺跡調査概報Ⅳ』
日野市落川遺跡調査会（1987）：『日野市落川遺跡調査概報Ⅴ』

平沢英二郎・小山田正男（1985）：「二本松遺跡－二本松遺跡・河原田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第112集 宮城県教育委員会
平間亮輔（1991）：「富沢遺跡－第35次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第150集 仙台市教育委員会
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所（1993）：『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅰ－北部地域北半部の調査』
藤沢 敦（1992）：「引田式再論」『歴史』第79輯 東北史学会
古川一明・太田 肇（1993）：「日の出山窯跡群」『色麻町文化財調査報告書』第1集 色麻町教育委員会
前川 要（1989・3）：「平安時代における日本出土の施釉陶磁器研究の現状と課題」『歴史時代土器研究』第5・6号 歴史時代土器研究同人会
前川 要（1989・8）：「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究（上）」『古代文化』8 古代学協会
前川 要（1989・10）：「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究（下）」『古代文化』10 古代学協会
松本建速（1993）：「柳之御所出土のかわらけ編年試案」『紀要』XIII 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
松本秀明（1981）：「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」『地理学評論』第52集第2号
松本秀明（1984）：「沖積平野の形成過程からみた過去一万年間の海岸線変化」『宮城の研究』1
真山 悟（1981）：「東山遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集 宮城県教育委員会
真山 悟（1981）：「家老内遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集 宮城県教育委員会
真山 悟・丹羽 茂（1991）：「多賀城跡」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1991 宮城県多賀城跡調査研究所
水野和雄（1985）：「日本石硯考－出土品を中心として」『考古学雑誌』第70巻第4号 日本考古学会
宮教大考古研（1975）：「名取川水系遺跡分布調査予報」『宮教考古』第6号
宮城県教委（1961）：『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』 陸奥国分寺調査委員会
宮城県教委（1987）：「硯沢・大沢窯跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第116集
宮城県教委・多賀城町（1970）：「多賀城跡調査報告Ⅰ－多賀城廃寺跡」 吉川弘文館
宮城県教委・多賀城跡調査研（1982）：『多賀城跡－政庁跡 本文編』
村田晃一（1992）：「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸窯検討のための「会津シンポジウム」資料
村田晃一（1994）：「土器からみた官衙の終末－東北地方の場合」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』第3回東日本埋蔵文化財研究会資料第Ⅰ分冊
安田喜憲（1978）：「仙台湾周辺における後氷期の地形変化・海水準変動と人類の居住－上深沢遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第52集 宮城県教育委員会
柳沢和明・進藤秋輝（1991）：「多賀城跡」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1991 宮城県多賀城跡調査研究所
結城慎一・佐藤 洋（1985）：「仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第76集 仙台市教育委員会
四柳嘉章（1987）：「中・近世漆器の編年」『西川島－能登における中世村落の発掘調査』 穴水町教育委員会
渡部弘美（1983）：「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第55集 仙台市教育委員会
渡辺 誠（1981）：「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』第66巻第4号 日本考古学会
渡辺 誠（1990）：「ツチノコについて－岸遺跡」『いわき市埋蔵文化財調査報告書』第27冊
綿貫鋭次郎他（1991）：「白石大御堂遺跡－園池を伴う中世寺院址の調査」『群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告』第122集 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

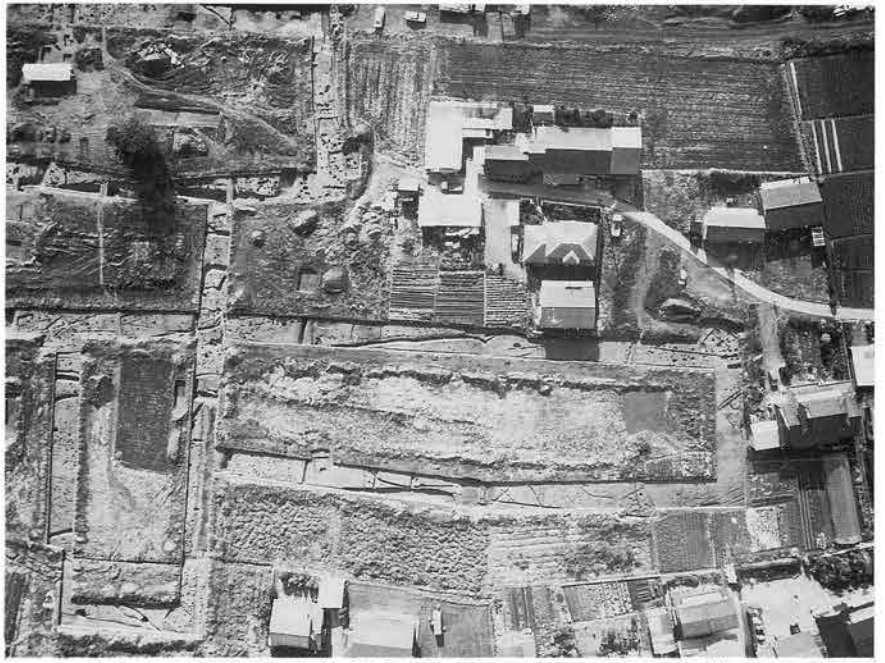
写　真　図　版

写真１　中田南遺跡周辺の空中写真（昭和36年撮影―国土地理院）

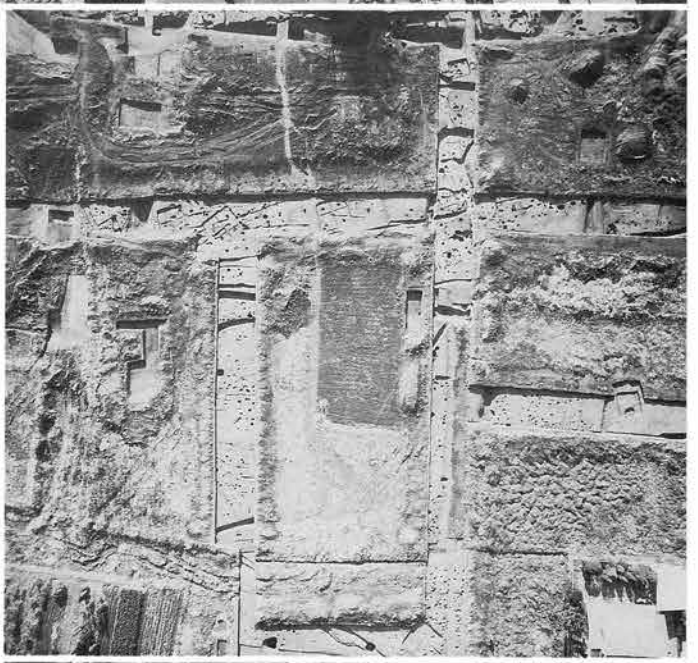
写真２　遺跡全景（南東側上空から）

写真３　遺跡全景（西側上空から）

1．Ⅰ～Ⅶ区全景
（北から）



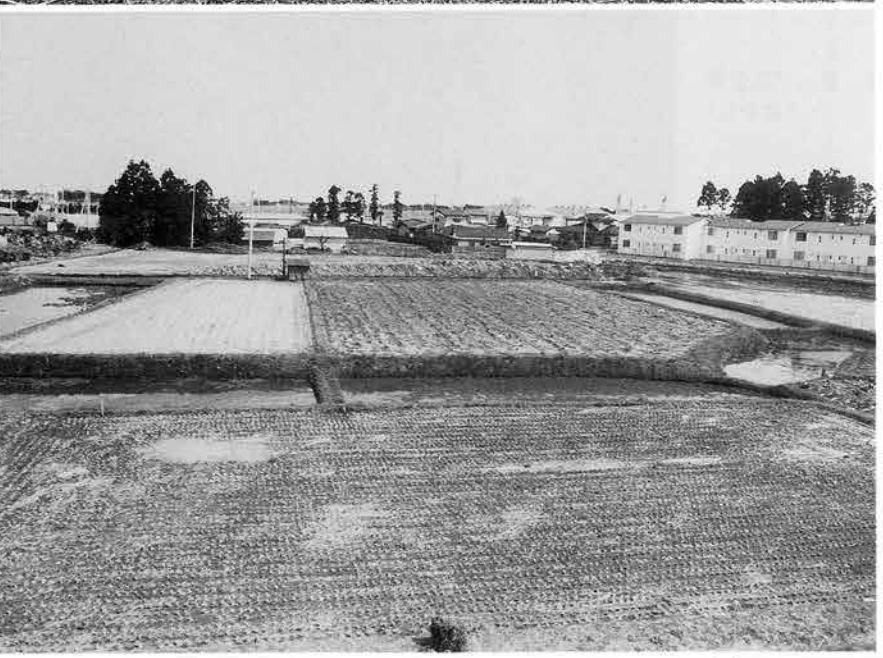
2．Ⅲ～Ⅴ区全景
（北から）



3．Ⅲ～Ⅷ区全景
（北から）

写真4　調査区全区

1．調査前の状況
（西から）



2．芹田に方形に囲まれた畑地（西から）

写真５　遺跡の現況

3．２の西側細部（北から）

4．２の北側細部（西から）

1．遺跡の南側でみられる方形状の微高地（南西から）

2．遺跡の南側にみられる方形状の微高地（南西から）

3．遺跡東側の屋敷内にある板碑

4．遺跡内の守氏の屋敷に祀られている馬頭観世音（明治２年）

5．前田館跡内にある板碑（弘安２年―1274年）

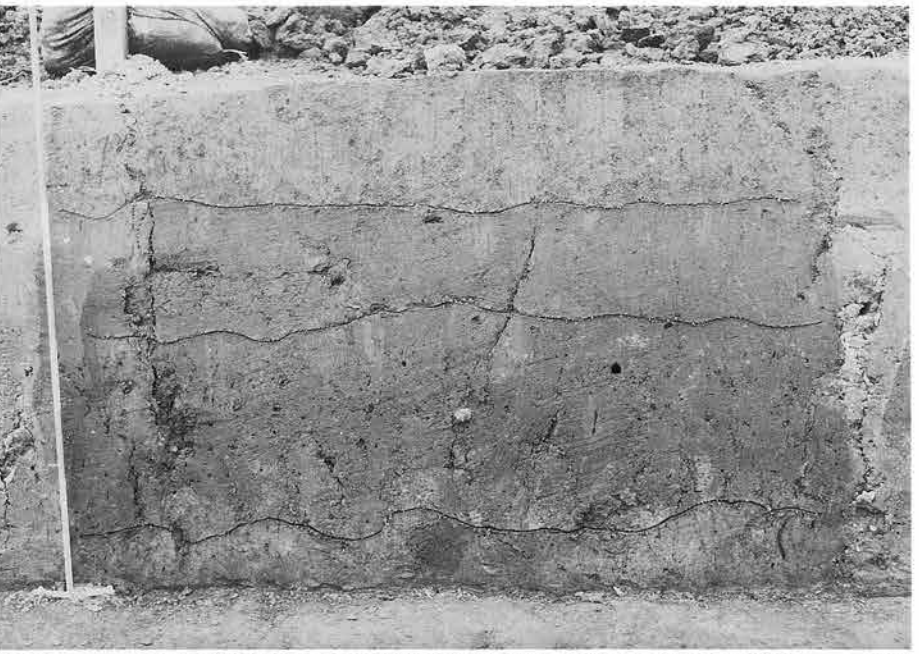
6．遺跡南側の屋敷内にある板碑

7．遺跡の北約50m の畦畔上にある板碑

8．遺跡の南約400m の屋敷内にある板碑

写真６　遺跡の週辺

1．Ⅰ区No.8南壁
（ＳＤ８とＳＤ９）



2．Ⅷ区No.9西壁

3．下層試掘Ｆトレンチ南壁

写真７　基本層序セクション

1．下層試掘Ａトレンチ
南壁

2．下層試掘Ｂトレンチ
西壁

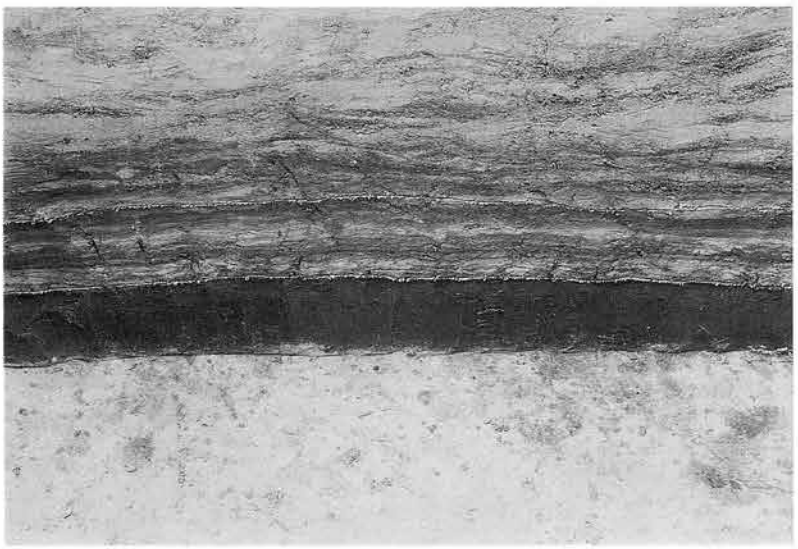


写真８　下層セクション（1）

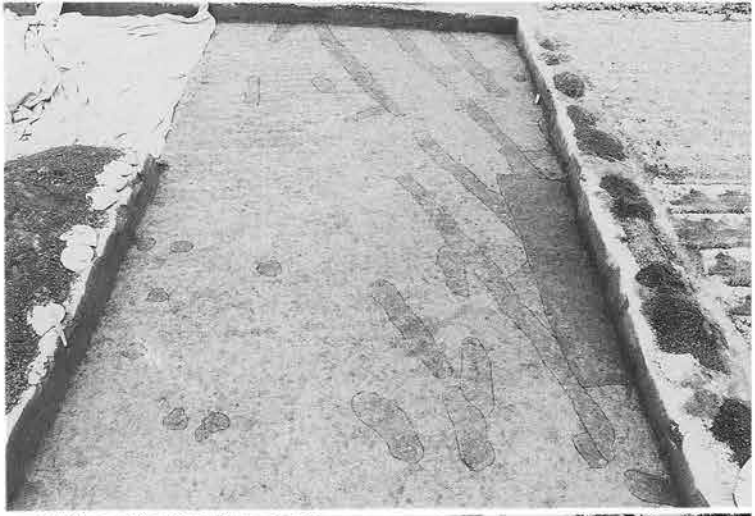
1．下層試掘Eトレンチ南壁

2．同上トレンチ樹木片
出土状況（Ⅳ J層）

3．下層試掘Gトレンチ北壁

写真9　下層セクション（2）

1．Ⅰ区西端部
（東から）

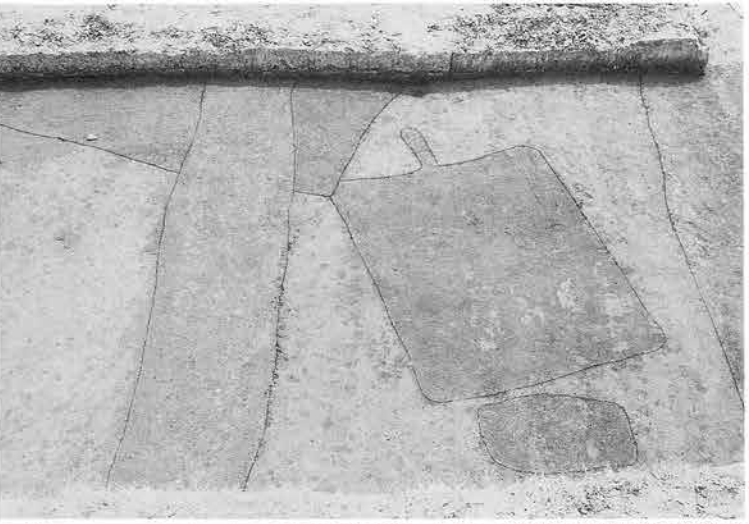


2．Ⅱ区西端部
（東から）

3．Ⅱ区中央部（東から）

4．Ⅲ区南端部（北から）

写真10　遺構確認状況（1）



1．Ⅲ区南端部（西から）

2．Ⅲ区北端部（南東から）

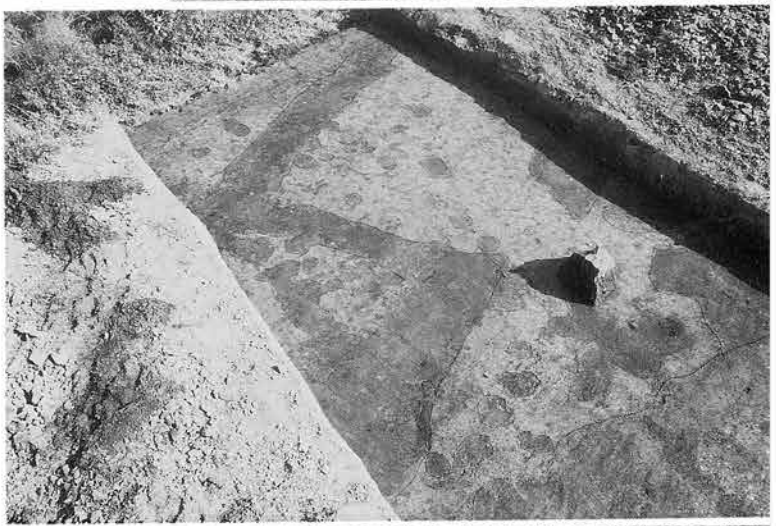
3．Ⅲ区南端部の完掘状況（南から）

4．Ⅳ区北側調査区（西から）

写真11　遺構確認状況（2）

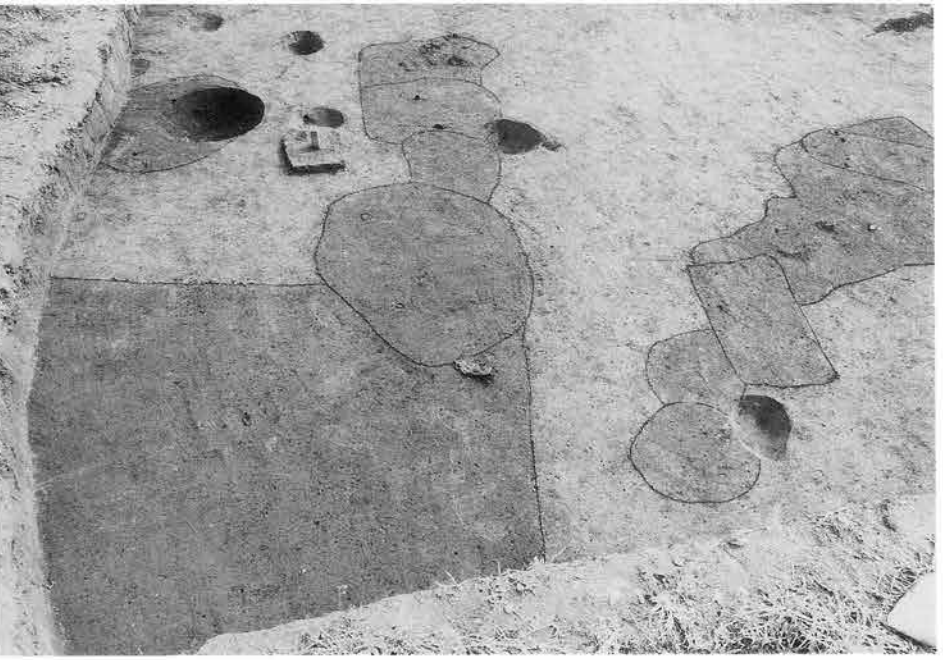
1．Ⅳ区南端部
（南から）

2．Ⅴ区東部
（北西から）



3．Ⅴ区東部完掘状況（北から）

写真12　遺構確認状況（3）



1．Ⅵ区西端部（西から）

2．Ⅵ区中央部（東から）

3．Ⅶ区西端部（東から）

写真13　遺構確認状況（4）

1．Ⅶ区東半部
（西から）

2．Ⅶ区東半部完掘
状況（西から）

3．Ⅶ区南端部（南から）

写真14　遺構確認
状況（5）

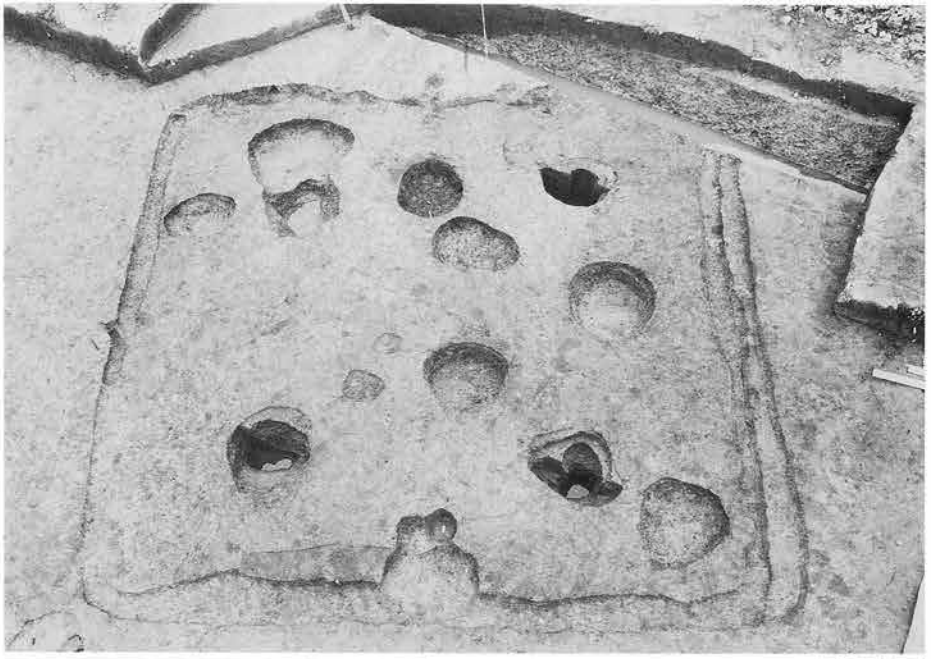
1．Ⅶ区南端部
（南から）

2．Ⅶ区南端部完掘
状況）（北から）

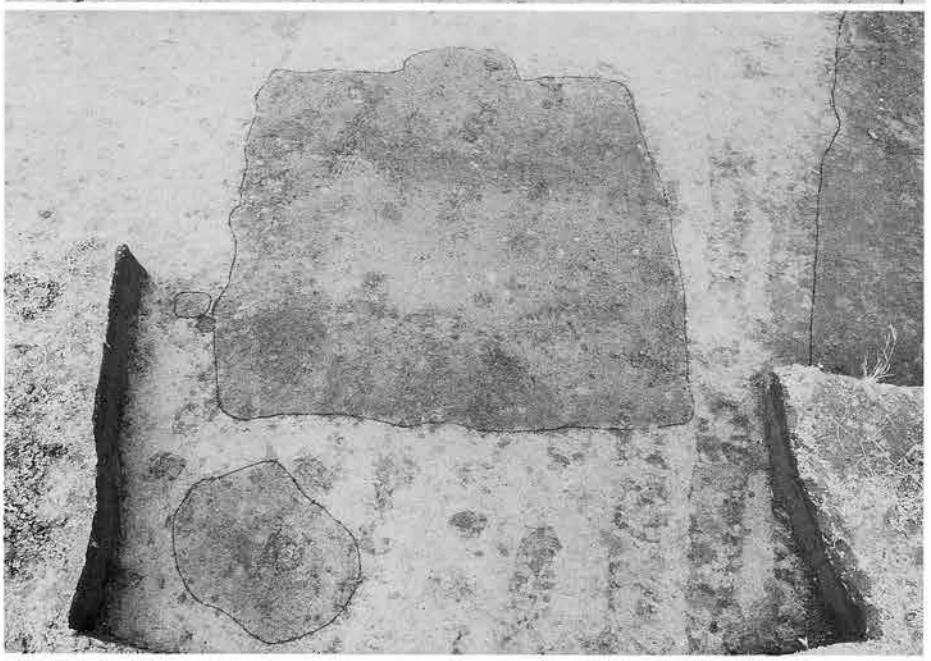
3．Ⅶ区中央部
（南から）

写真15　遺構確認
状況（6）

1．第２号竪穴住居跡
（南東から）

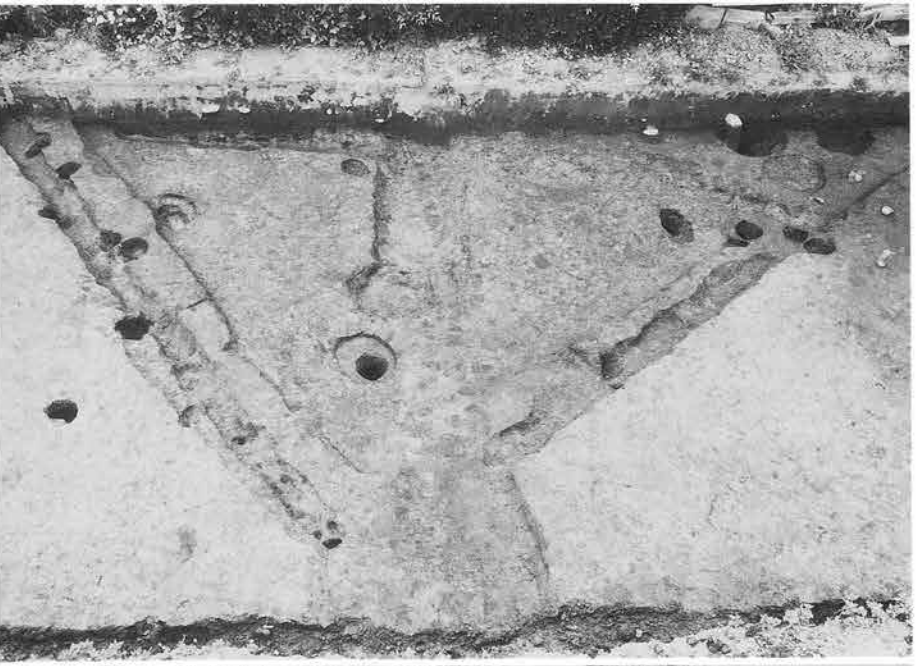


2．第３号竪穴住居跡
確認状況（南から）

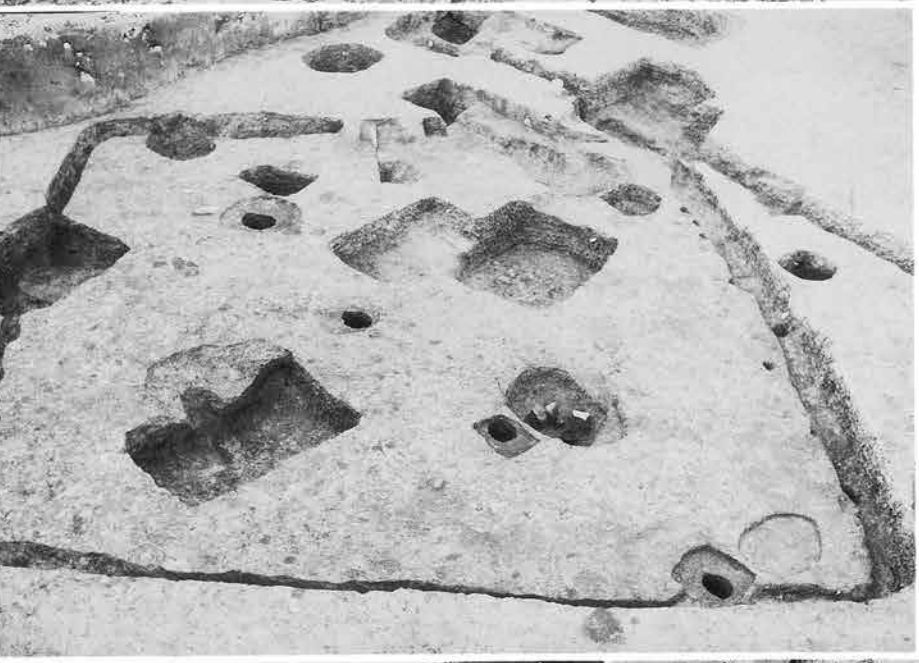


3．第３号竪穴住居跡
（南から）

写真16　竪穴住居跡（１）



1．第４号竪穴住居跡
（南東から）



2．第５号竪穴住居跡
（南東から）

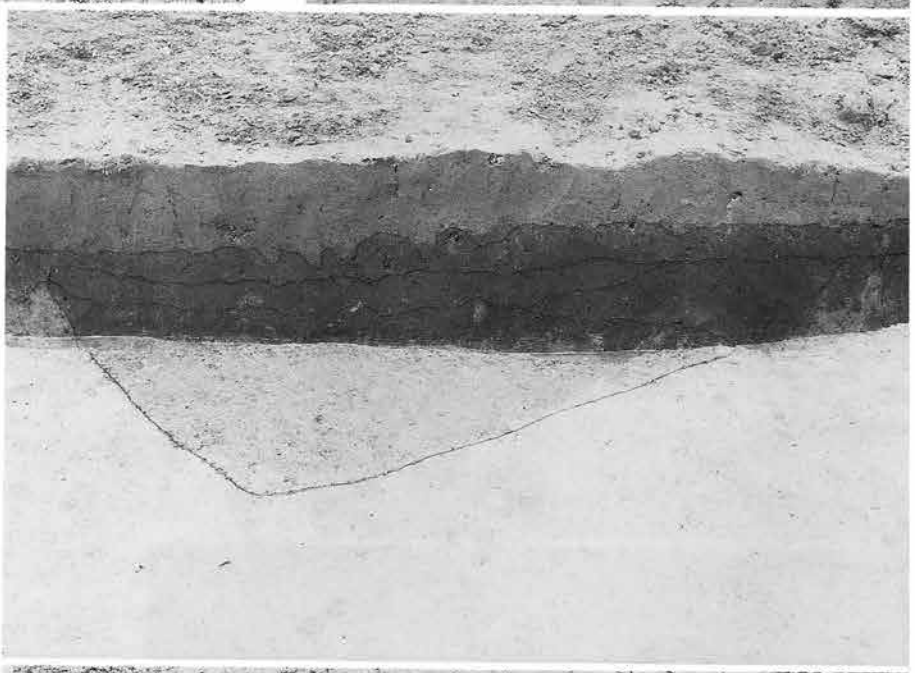
3．第５号竪穴住居跡カマド細部（東から）

4．第５号竪穴住居跡周溝細部
（東から）

写真17　竪穴住居跡（２）

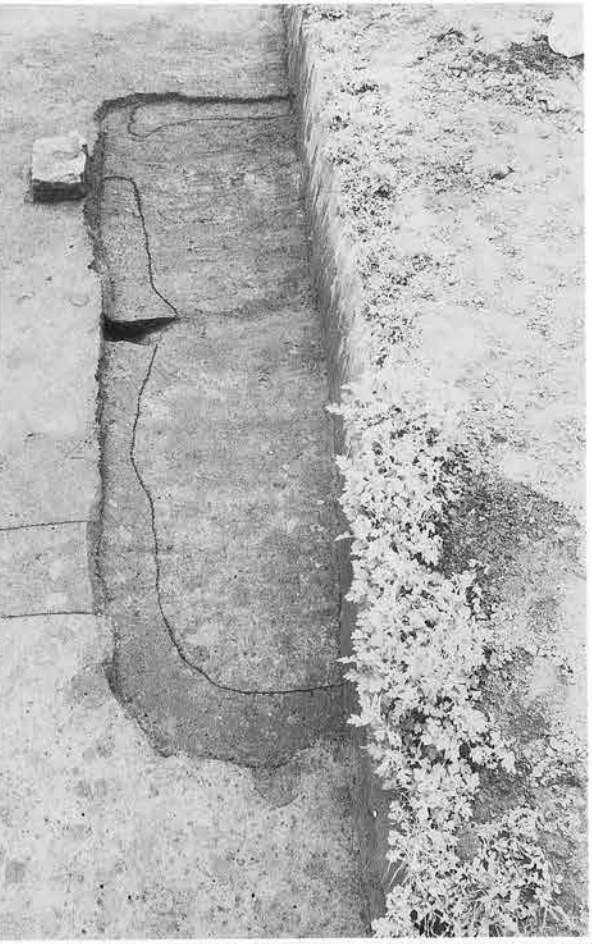
1　2．第５号竪穴住居跡
土器出土状況

3．第６号竪穴住居跡
確認状況（南から）

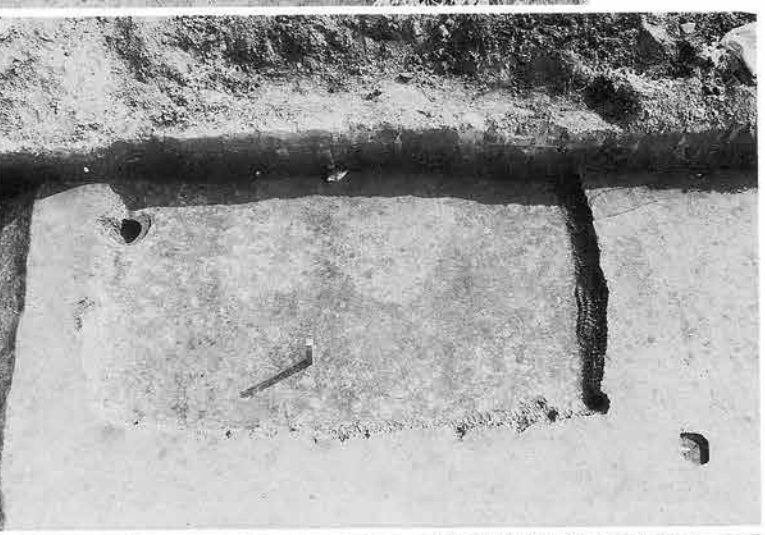


4．第７号竪穴住居跡
（北から）

写真18　竪穴住居跡（３）



1．第８号竪穴住居跡
周溝確認状況
（西から）



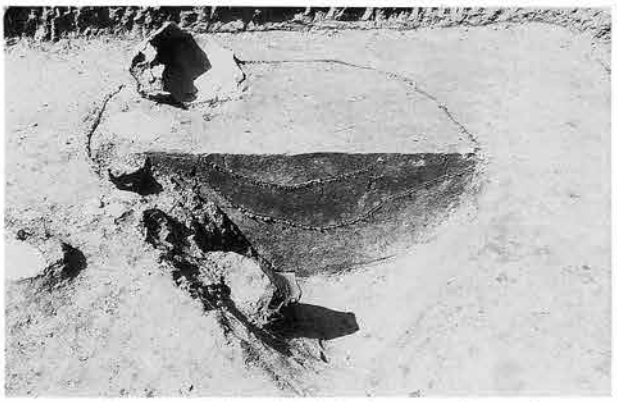
2．第９号竪穴住居跡
（北から）

3．第９号竪穴住居跡
住居掘り方
（北から）

写真19　竪穴住居跡（４）

1．第10号竪穴住居跡
（南東から）

2．第11号竪穴住居跡
（東から）



3．第10号竪穴住居跡貯蔵穴状ピット（南から）

4．第11号竪穴住居跡カマド側壁内出土土器（南東から）

写真20　竪穴住居跡（5）

1．第12号竪穴住居跡
（東から）

2．第13号竪穴住居跡
（南から）

3．第13号竪穴住居跡土器の出土状況（南西から）

4．第15号竪穴住居跡Ｐ１土器出土状況（南から）

写真21　竪穴住居跡（6）

1．第16号竪穴住居跡
（南東から）

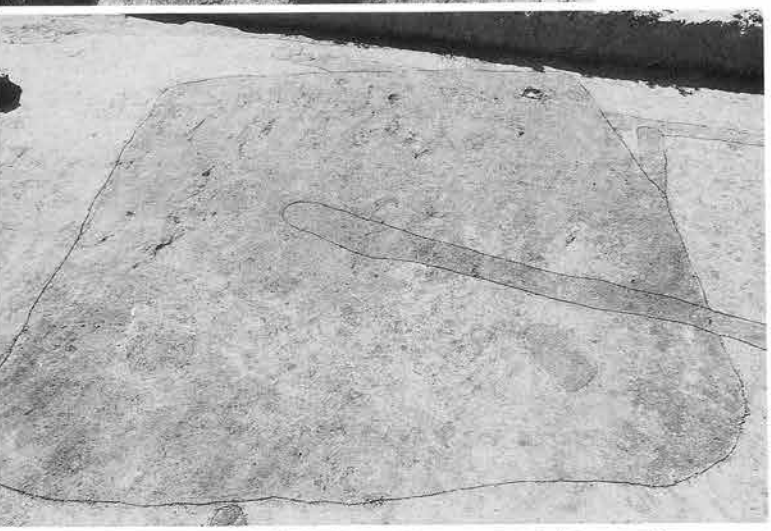
2．同上カマド細部
（南東から）

3．同上　土器出土状況

4．同上　土器出土状況

写真22　竪穴住居跡（7）

1．第17号竪穴住居跡
（東から）

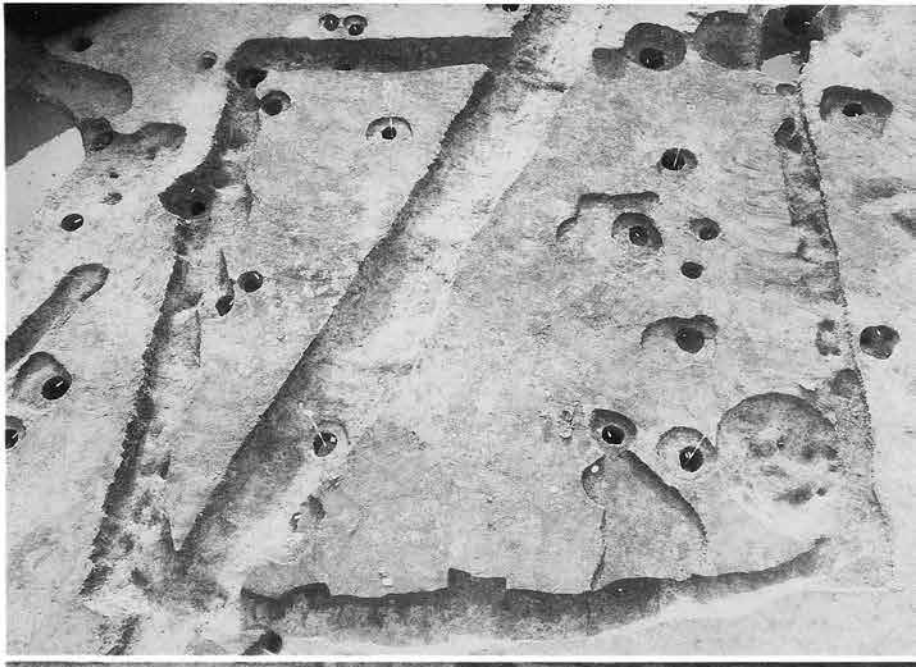


2．第18号竪穴住居跡
確認状況（北から）

3．第18号竪穴住居跡
（南から）

写真23　竪穴住居跡（8）

1．第20号竪穴住居跡
（北東から）



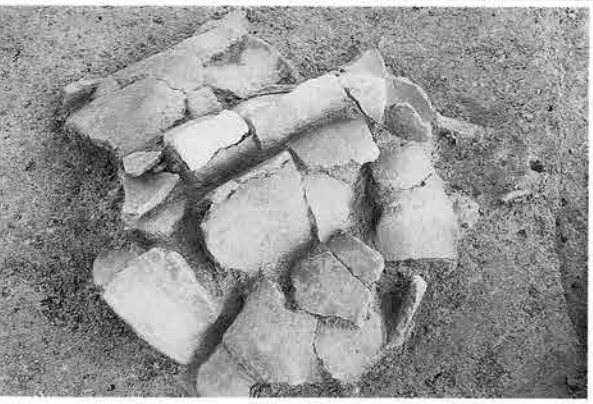
2．第21号竪穴住居跡
（南から）

3．同上　土器出
土状況

写真24　竪穴住居跡（9）

1．第24号竪穴住居跡
（南から）

2．同上　カマド細部

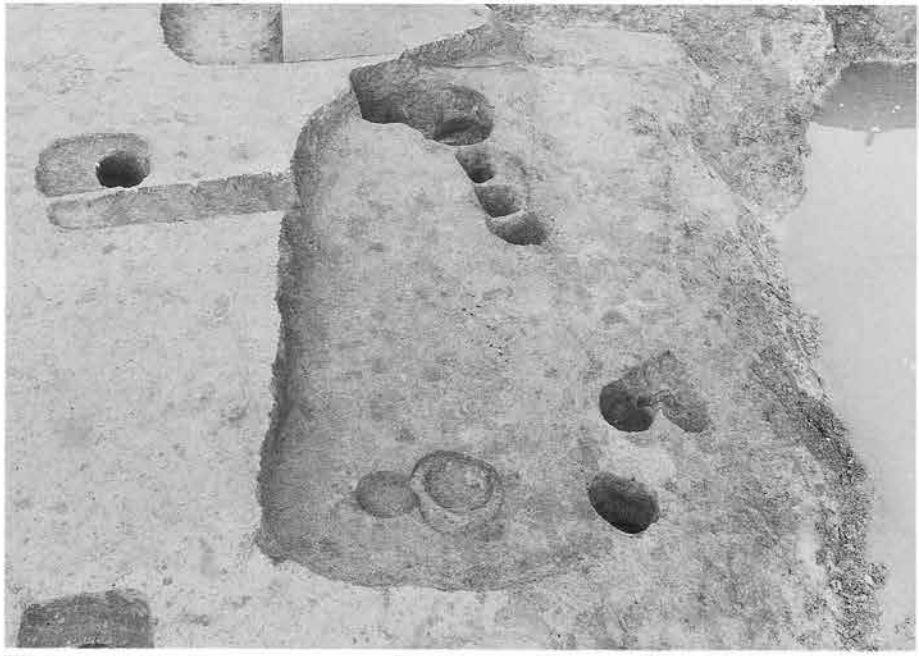


3．同上　土器出土状況

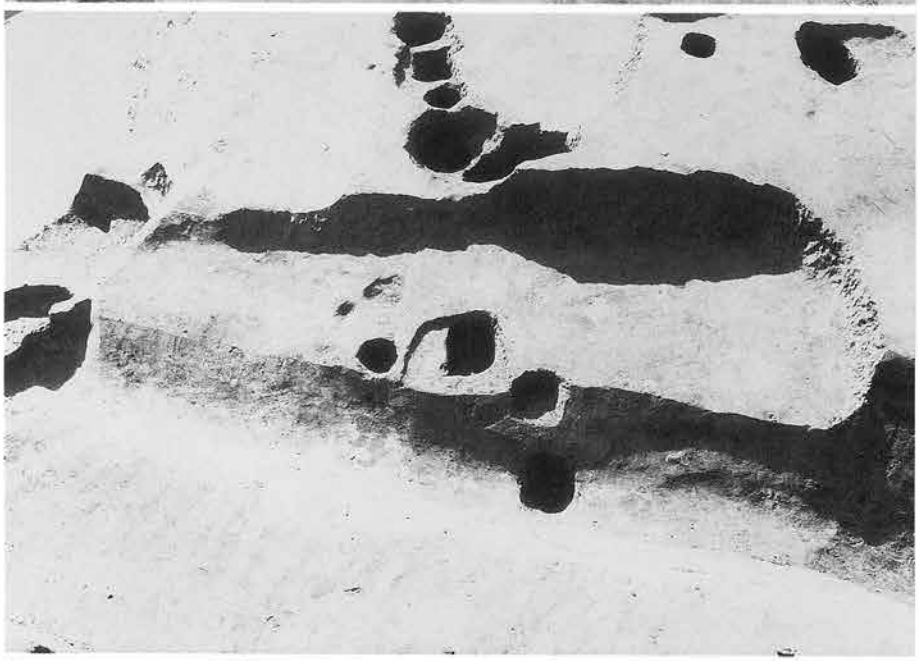
4．同上　土器出土状況

写真25　竪穴住居跡（10）

1．第25号竪穴住居跡
（南から）



2．第26号竪穴住居跡
（北から）



3．第27号竪穴住居跡
（南から）

写真26　竪穴住居跡（11）

1．第28号竪穴住居跡
（南から）

2．同上　カマド側壁
土器出土状況
（東から）

3．第29号竪穴住居跡
（南から）

写真27　竪穴住居跡（12）

1．第30号竪穴住居跡
（南から）

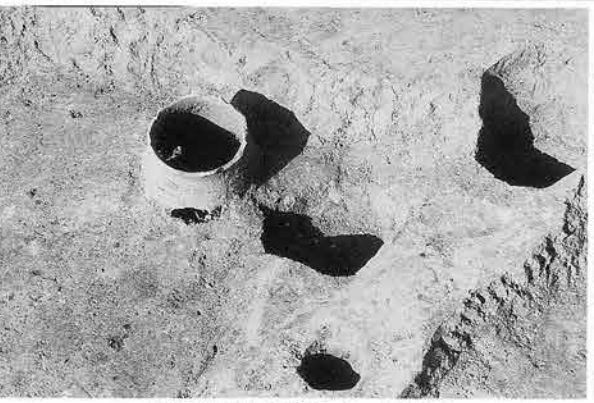
2．第31号竪穴住居跡
（東から）

3．第32号竪穴住居跡
（東から）

写真28　竪穴住居跡（13）

1．第33号竪穴住居跡
（東から）

2．第35号竪穴住居跡
（東から）



3．第32号竪穴住居跡カマド細部

4．第32号竪穴住居跡土器出土状況

写真29　竪穴住居跡（14）

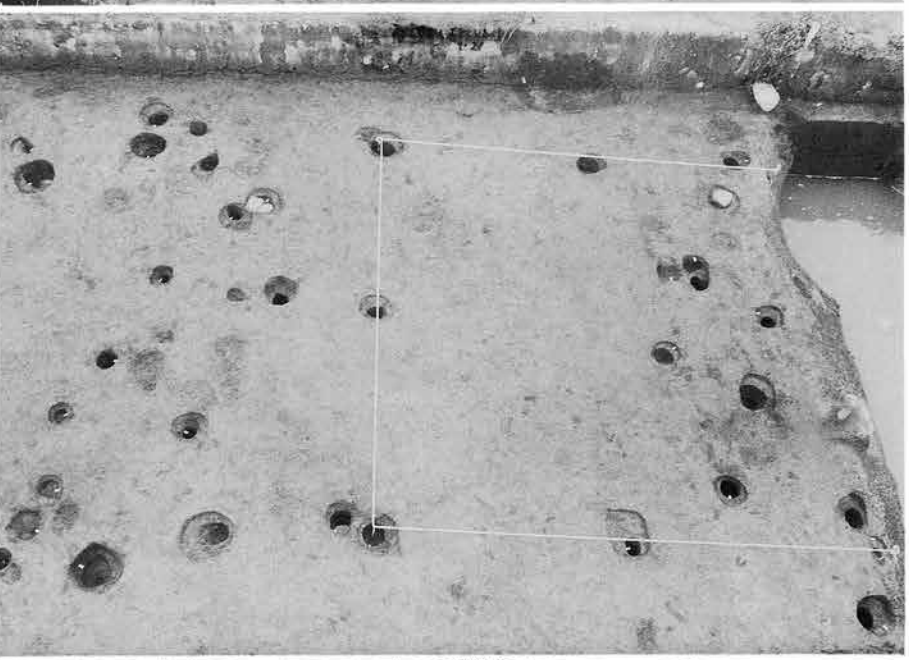
1．第36号竪穴住居跡
確認状況（南から）

2．同上完掘状況
（南東から）

3．第37号竪穴住居跡
（南西から）

写真30　竪穴住居跡

1．第1号掘立柱建物跡
（南から）

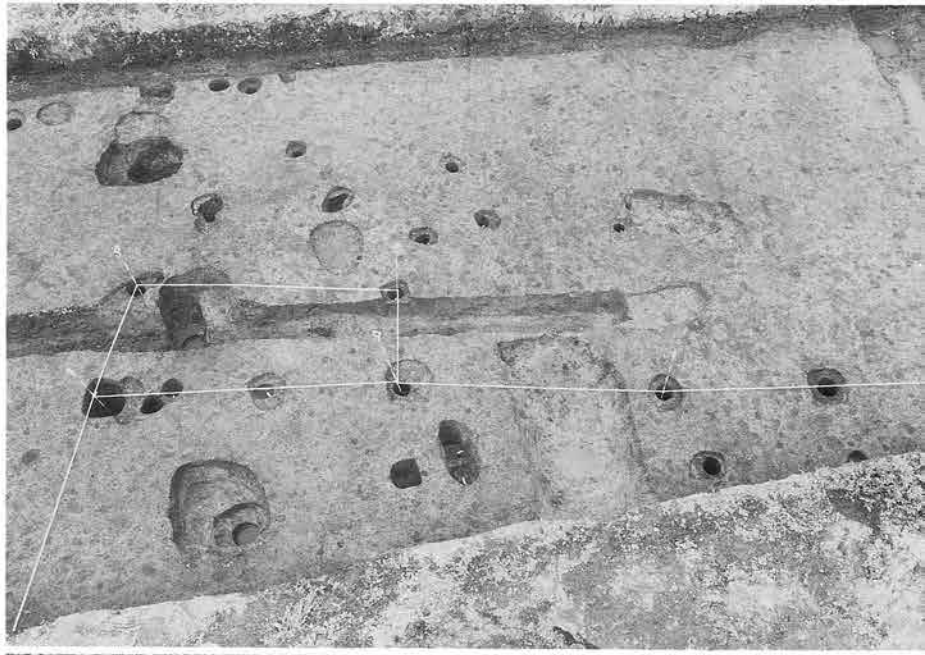


2．第2号掘立柱建物跡
（南から）

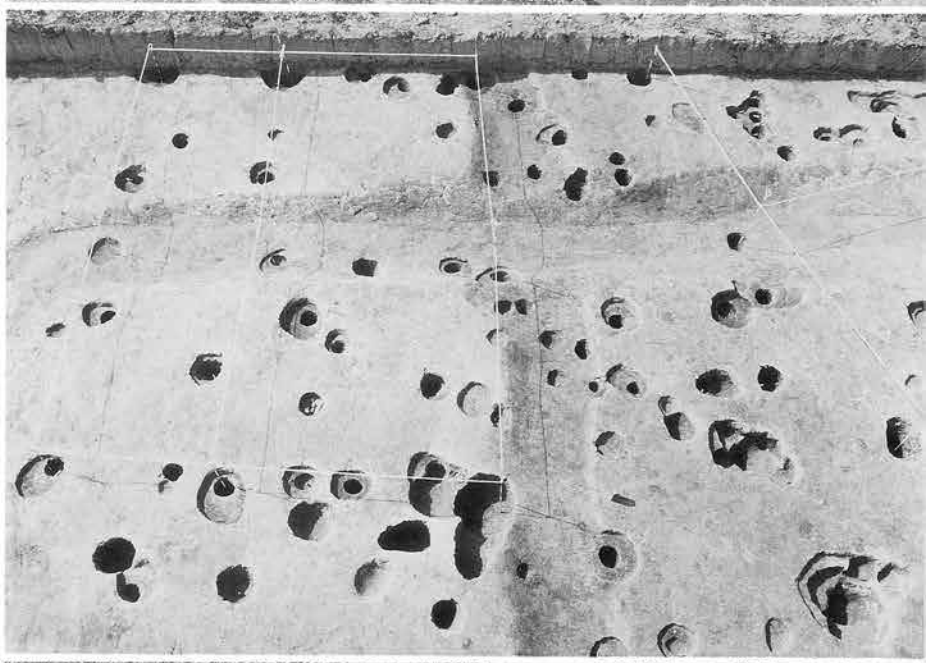
3．第3号掘立柱建物跡
（南から）

写真31　掘立柱建物跡（1）

1．第４号掘立柱建物跡
（南から）



2．第６号掘立柱建物跡
（東から）

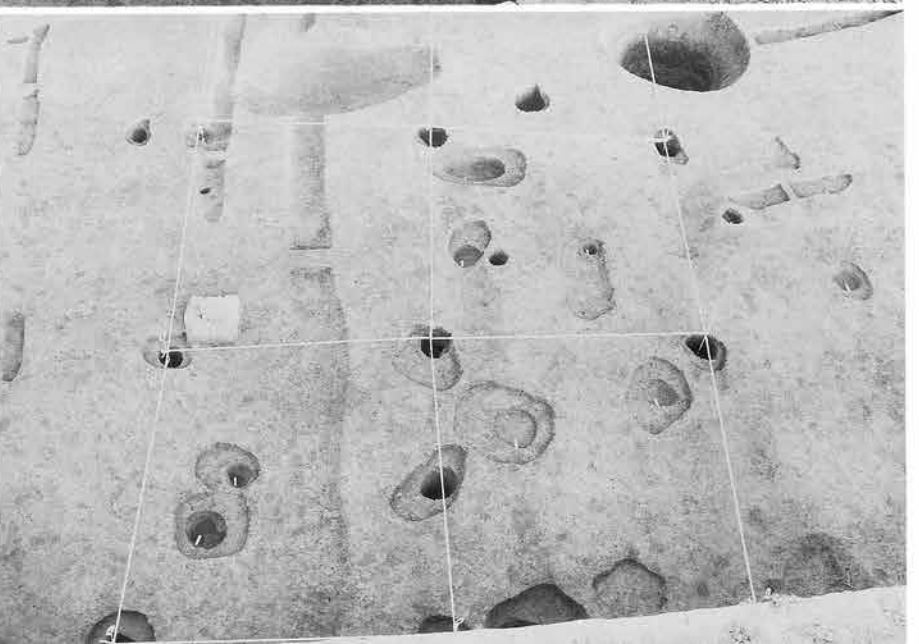


3．第７号掘立柱建物跡
（東から）

写真32　掘立柱建物跡（２）

1．第９号掘立柱建物跡
（南から）

2．第11号掘立柱建物跡
（西から）



3．第12号掘立柱建物跡

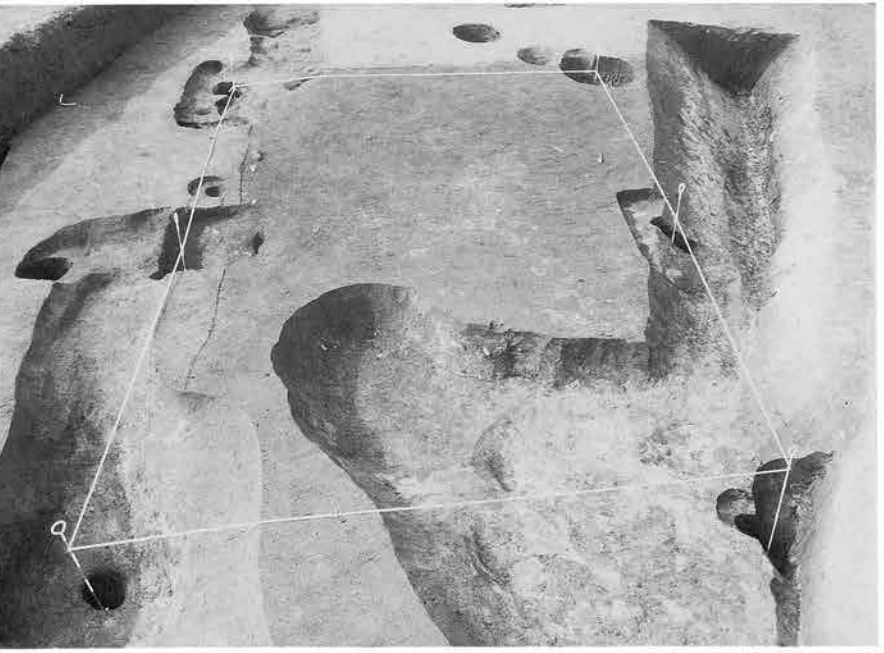
写真33　掘立柱建物跡（３）

1．第13号掘立柱建物跡
Ｐ２出土とリベ

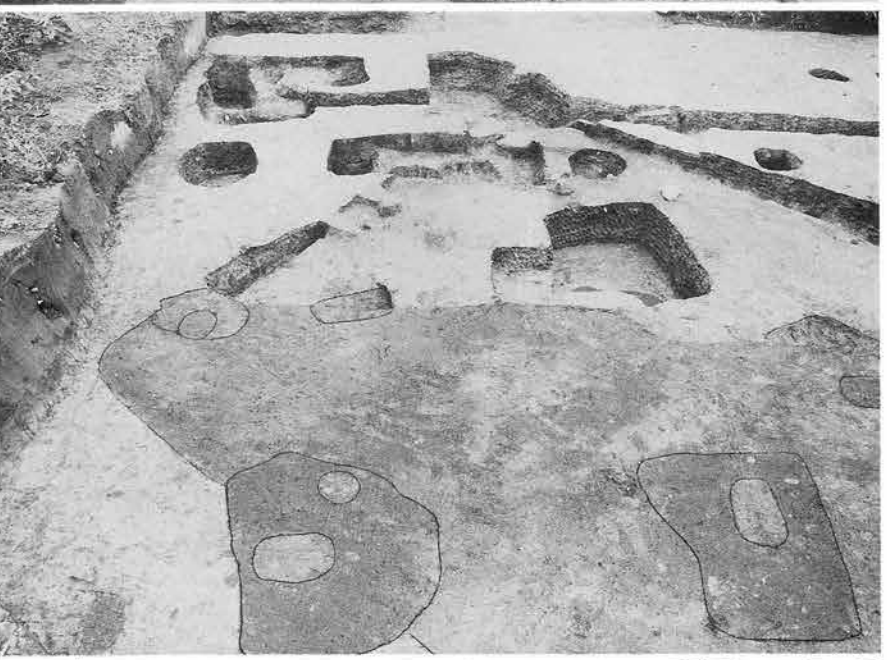
2．同上　Ｐ２出土木片

3．第14号掘立柱建物跡
（南から）

写真34　掘立柱建物跡（４）



1．第15号掘立柱建物跡
（東から）

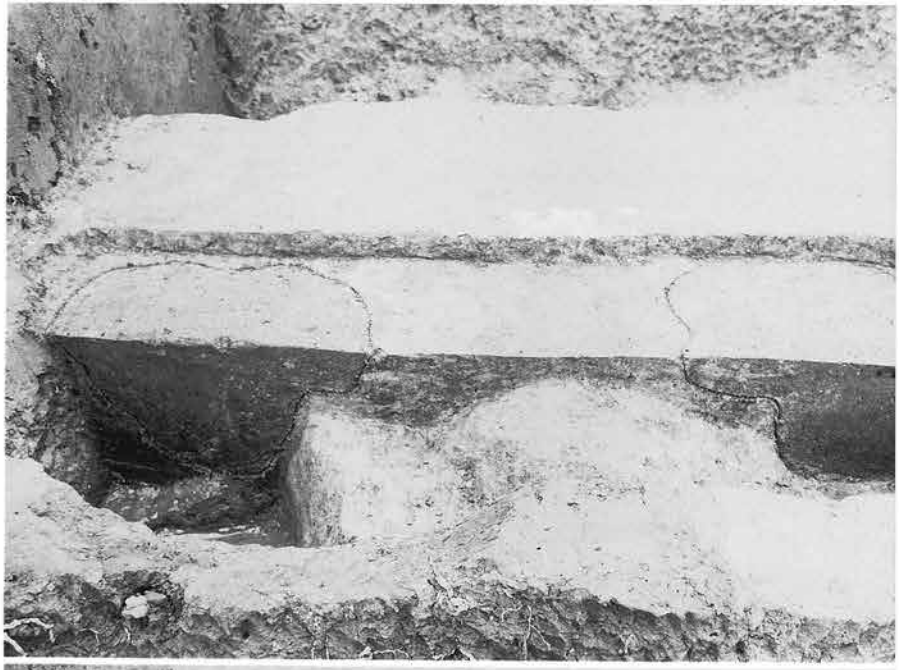


2．第16号掘立柱建物跡
確認状況（南から）

3．第16・17号掘立柱
建物跡（南から）

写真35　掘立柱建物跡（5）

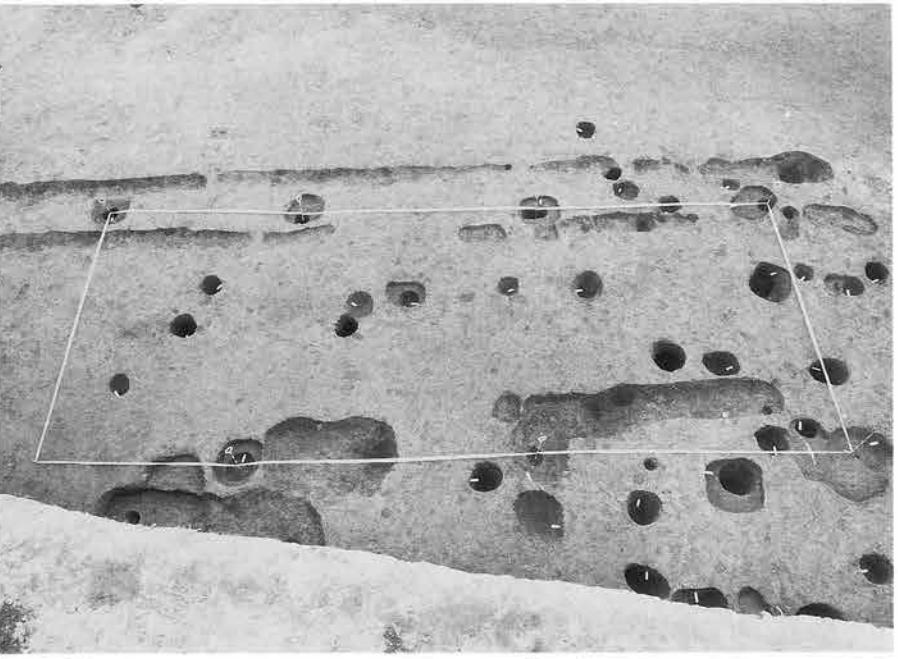
1．第17号掘立柱建物跡
　Ｐ１セクション（南から）



2．同上　Ｐ１完掘状況

3．同上　Ｐ４完掘状況

写真36　掘立柱建物跡（６）



1．第18号掘立柱建物跡
（北から）

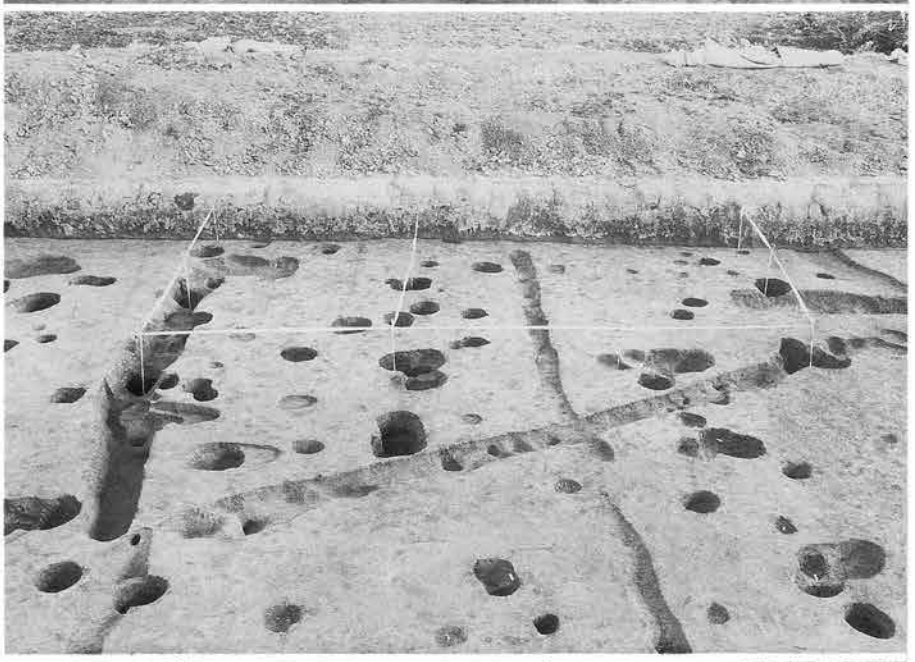
2．第19号掘立柱建物跡
（南から）

3．第20号掘立柱建物跡

写真37　掘立柱建物跡（7）

1．第21号掘立柱建物跡
（南から）
—その後、一部変更

2．第24号掘立柱建物跡
（西から）



3．第25号掘立柱建物跡
（西から）

写真38　掘立柱建物跡（8）

1．第2号ピット群（西から）

2．第7号ピット群（東から）

3．第9ピット群（東から）

4．第10ピット群（東から）

写真39　ピット群（1）

1．第15号ピット群（南から）

2．第15号ピット群（北から）

3．第13号ピット群（東から）

写真40　ピット群（2）

1．第16号ピット群
（南から）

2．第23号ピット群確認
状況（東から）

3．第26号ピット群
（南から）

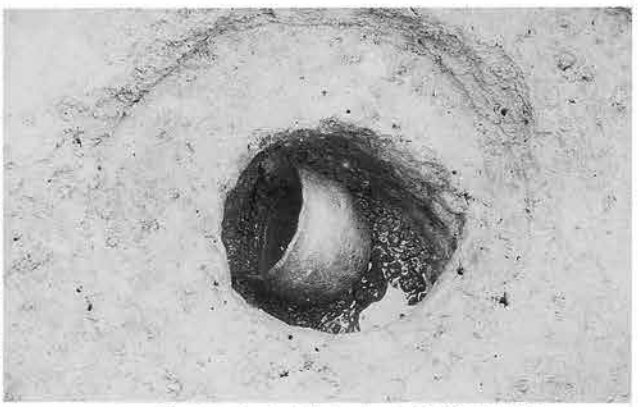
写真41　ピット群（3）

1．第27号ピット群（北から）

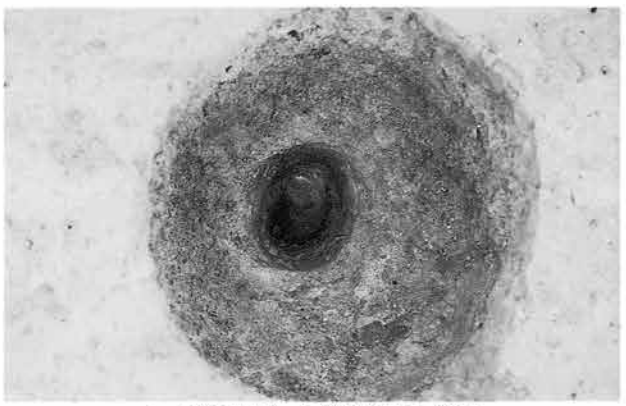
2．第4号ピット群ピット内土器出土状況

3．第7号ピット群ピット内土器出土状況

4．第13号ピット群ピット内礫出土状況



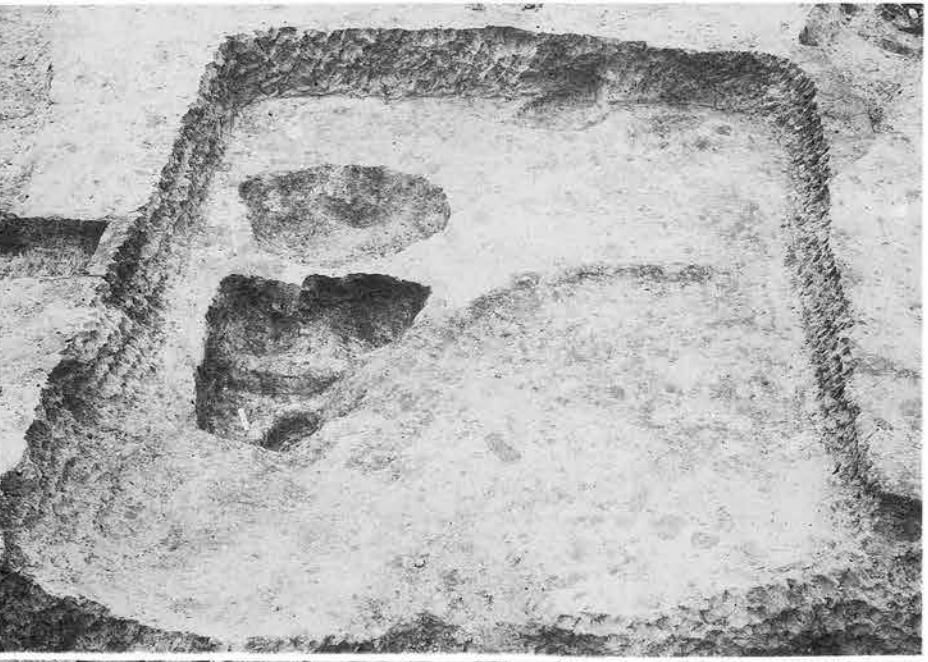
5．第16号ピット群ピット内土器出土状況



6．第26号ピット群柱根出土状況

7．第25号ピット群柱根出土状況

写真42　ピット群（4）



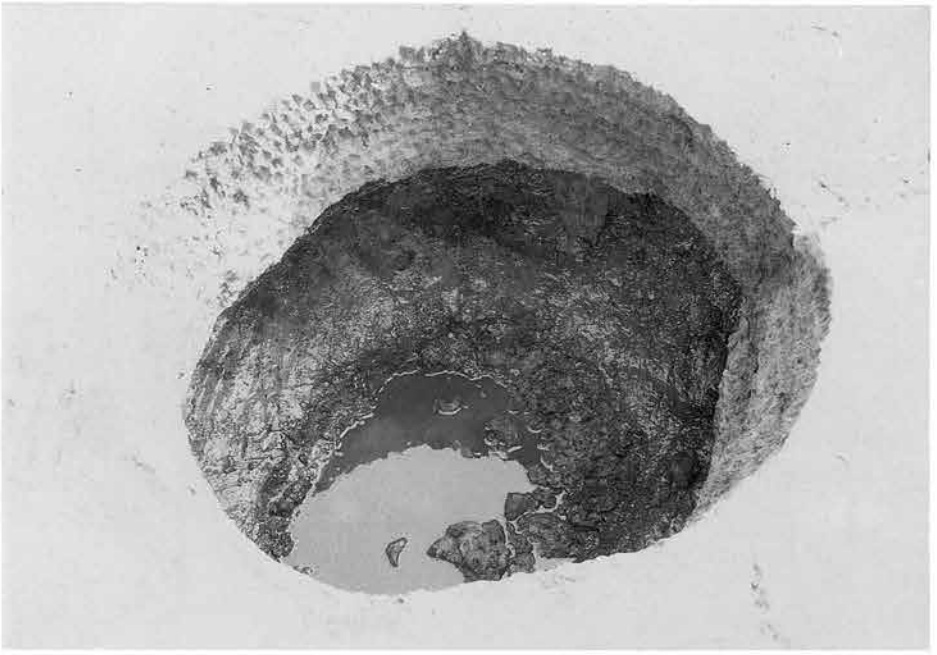
1．第1号竪穴遺構
（西から）

2．第2号竪穴遺構
（南東から）

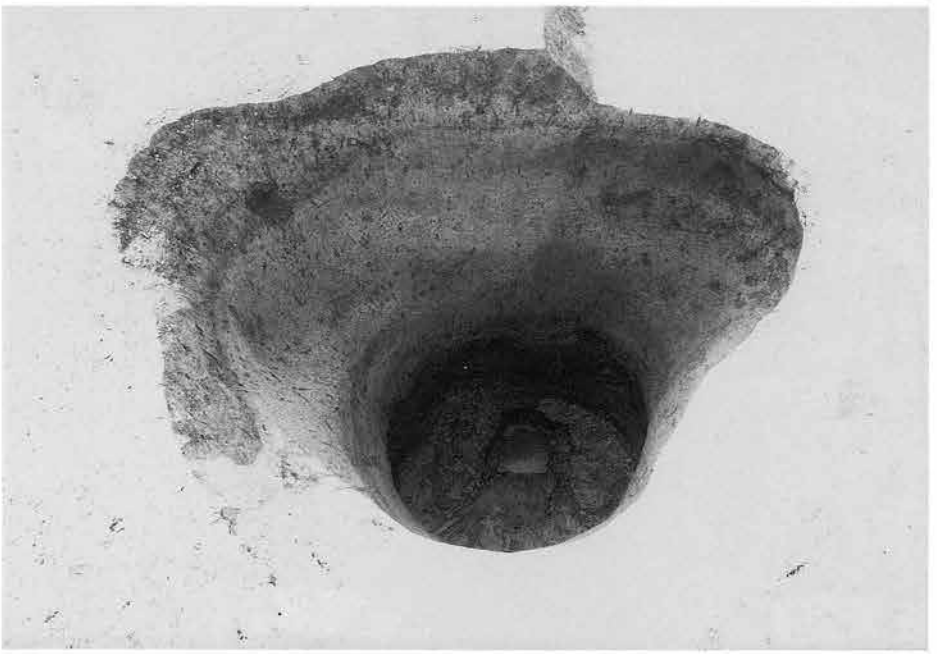
3．第3号竪穴遺構
（南から）

写真43　竪穴遺構

1．第1号井戸跡
（北から）



2．第3号井戸跡
（東から）



3．第5号井戸跡
（西から）

写真44　井戸跡（1）

1．第5号井戸跡
セクション
（北西から）

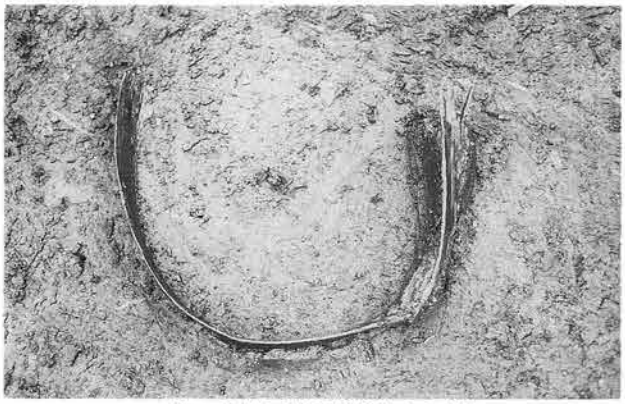
2．第7号井戸跡
セクション
（北から）

3．第8号井戸状遺構
（南東から）

写真45　井戸跡（2）

1．第5号井戸跡木製品出土状況

2．第5号井戸跡縄出土状況



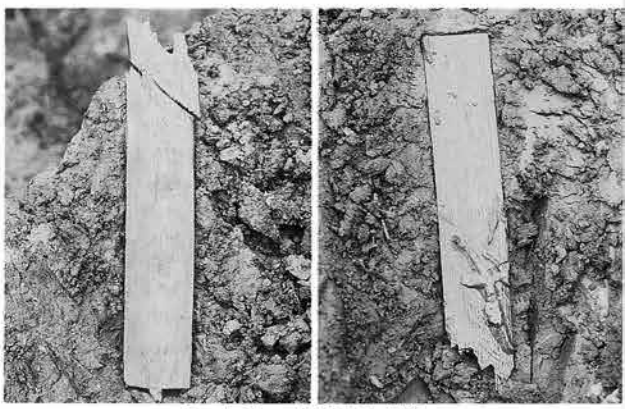
3．第8号井戸状遺構曲物出土状況

4．第8号井戸状遺構下駄出土状況

5．同上　漆器出土状況

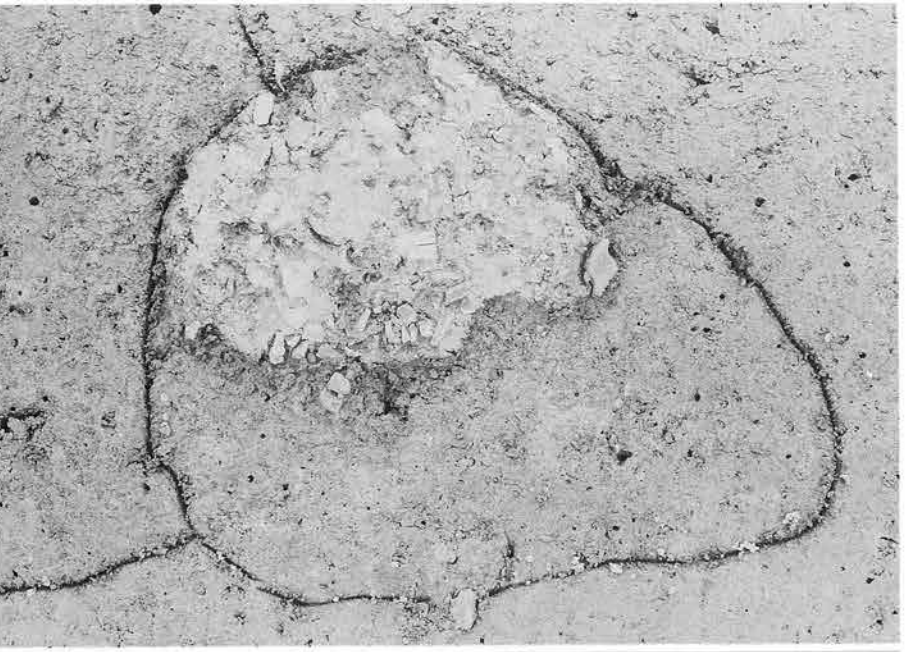
6．同上　漆器出土状況

7．同上　漆器出土状況



8．同上　木簡出土状況

写真46　井戸跡（3）



1．第1号火葬墓
（西から）

2．第2号火葬墓
（西から）

3．第3火葬墓骨片
出土状況（東から）

写真47　火葬墓

1．第3号火葬墓
（東から）

2．鍛冶遺構鍛冶炉
（北から）

3．鍛冶遺構土坑
（北から）

写真48　火葬墓・鍛冶遺構

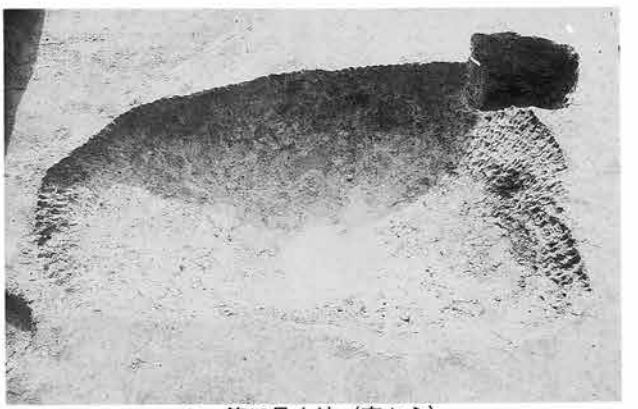
1．第2号土坑（南から）

2．第3号土坑土器出土状況（東から）

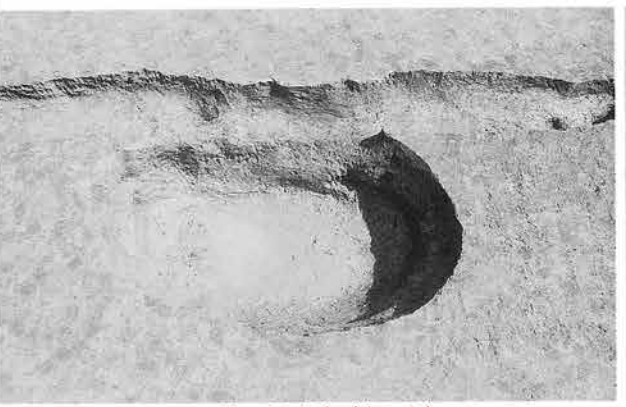
3．第4号土坑（北東から）

4．第6号土坑（南から）

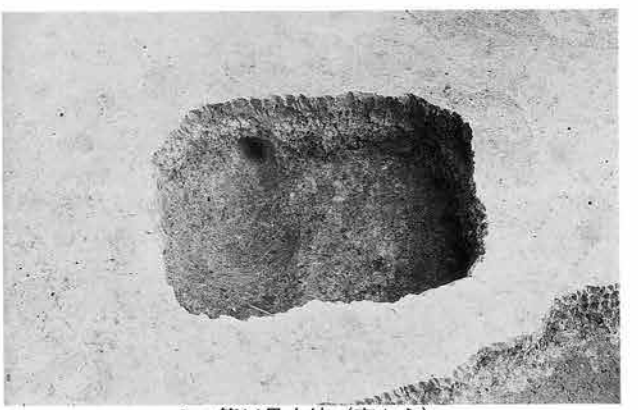
5．第9号土坑（北から）



6．第10号土坑（東から）

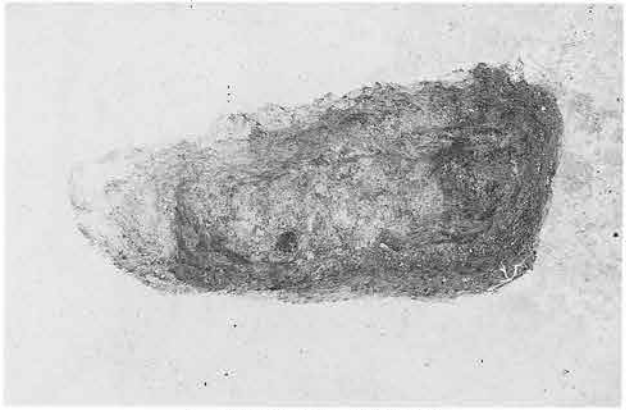


7．第12号土坑（南から）



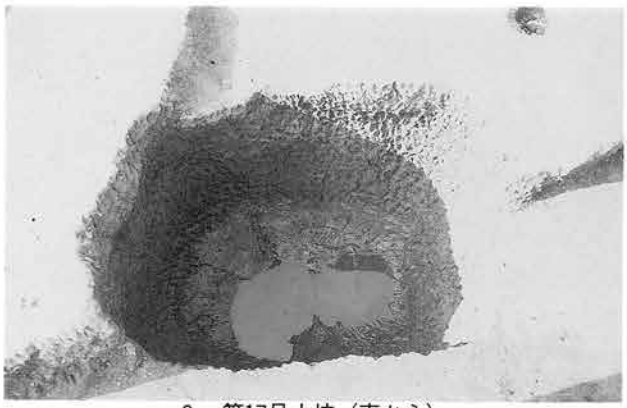
8．第14号土坑（南から）

写真49　土　　坑（1）

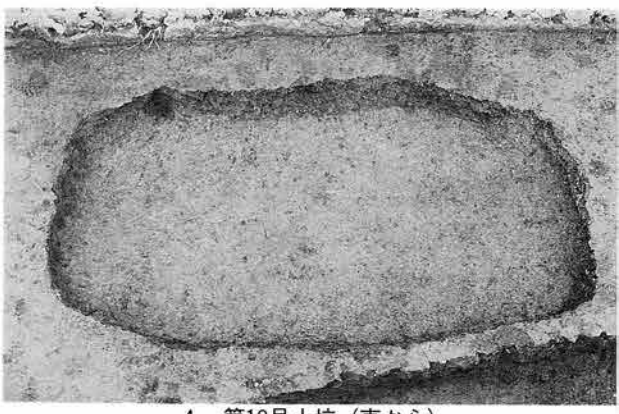


1．第15号土坑（東から）

2．第16号土坑（南から）

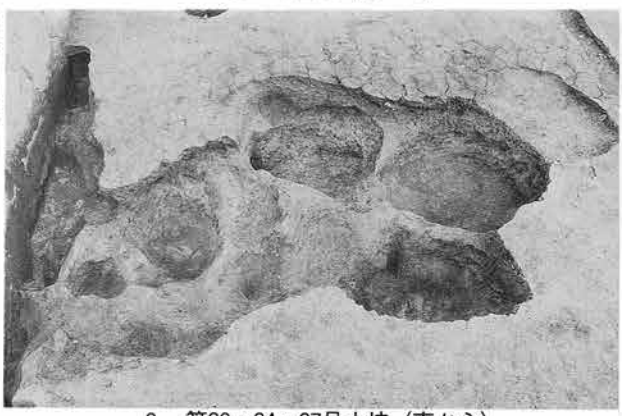


3．第17号土坑（東から）



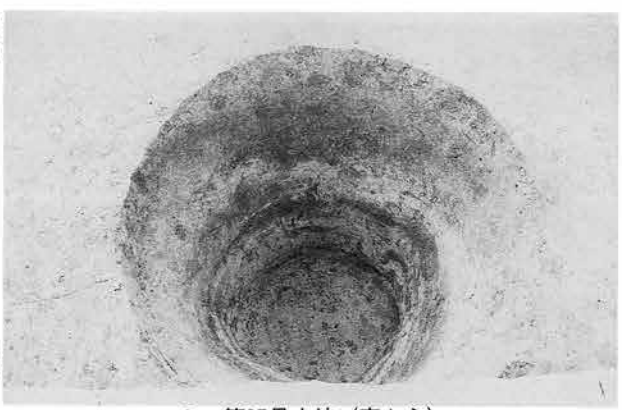
4．第18号土坑（東から）

5．第21号土坑（東から）



6．第22・24・27号土坑（南から）

7．第26号土坑（北から）

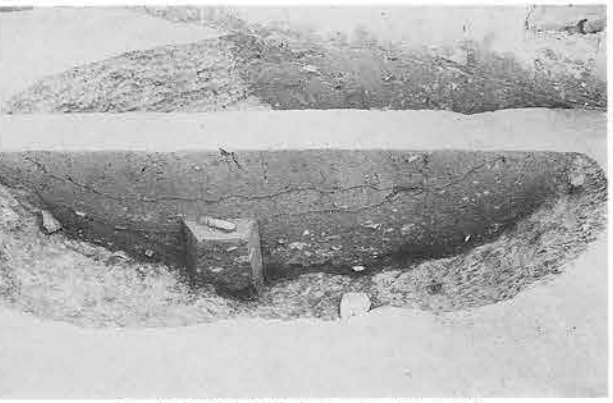


8．第35号土坑（東から）

写真50　土　　坑（2）

1．第36号土坑（南から）

2．第37号土坑（西から）

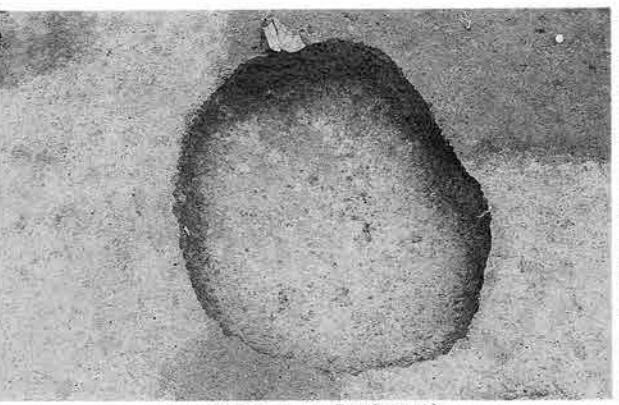


3．第40号土坑セクション（北から）

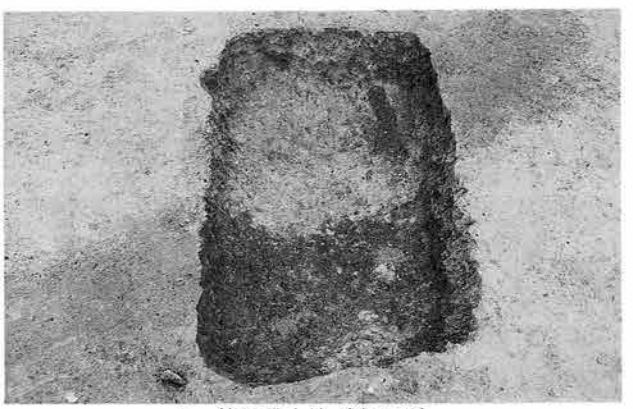
4．第40号土坑（東から）

5．第40号土坑鉄製品出土状況（北から）

6．第42号土坑（南東から）

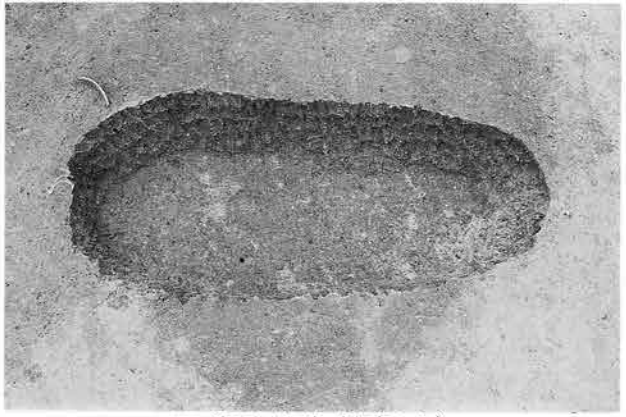


7．第43号土坑（南東から）

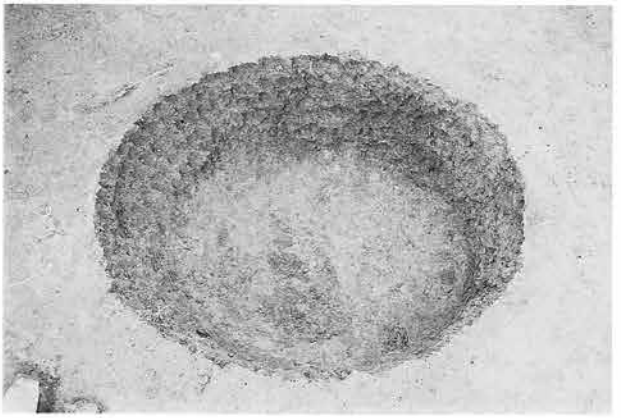


8．第47号土坑（東から）

写真51　土　　坑（3）

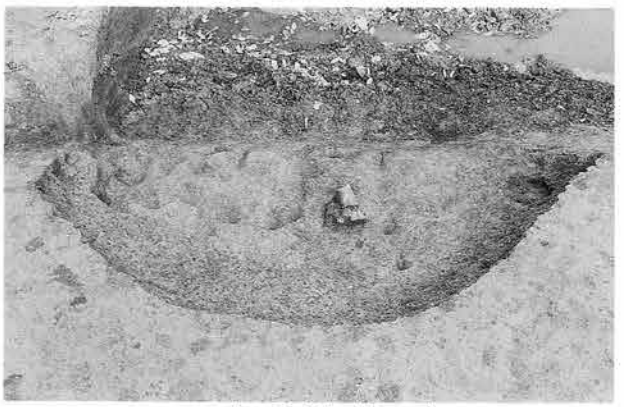


1．第48号土坑（南東から）



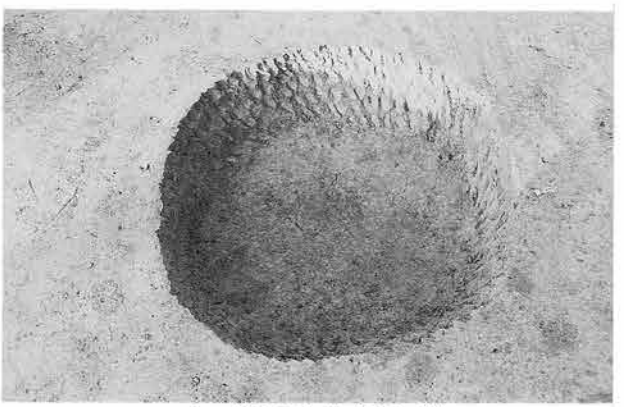
2．第50号土坑（東から）

3．第59号土坑土器出土状況（南から）



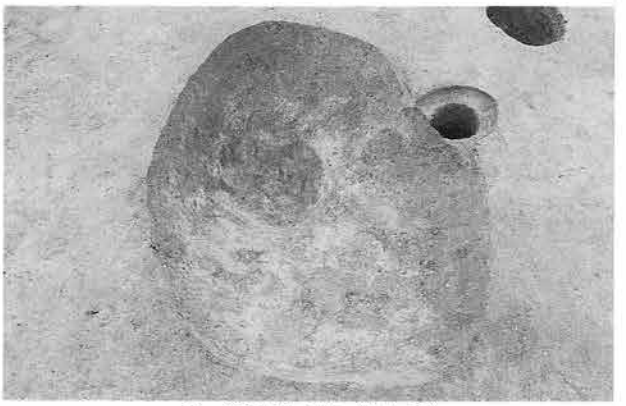
4．第60号土坑（南から）

5．第61号土坑（西から）



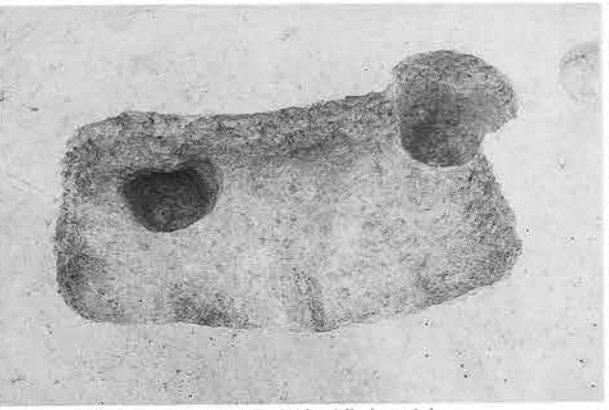
6．第81号土坑（南から）

7．第90号土坑（南から）

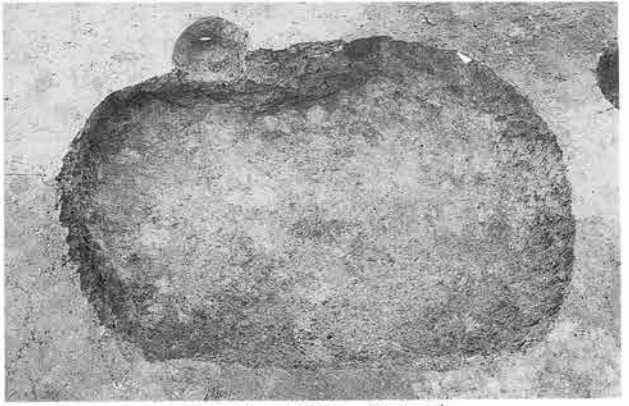


8．第91号土坑（北から）

写真52　土　　坑（4）

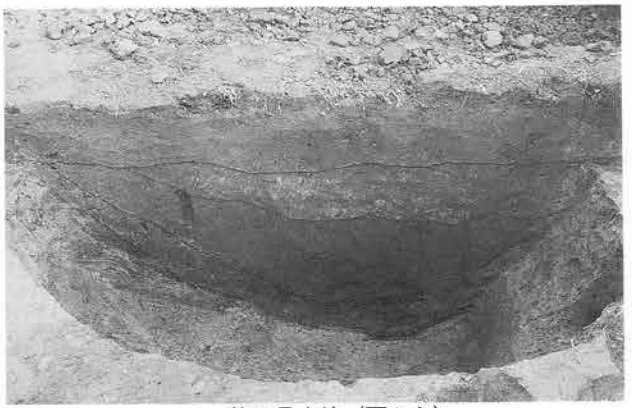


1．第93号土坑（北東から）



2．第94号土坑（北から）

3．第95号土坑（北から）



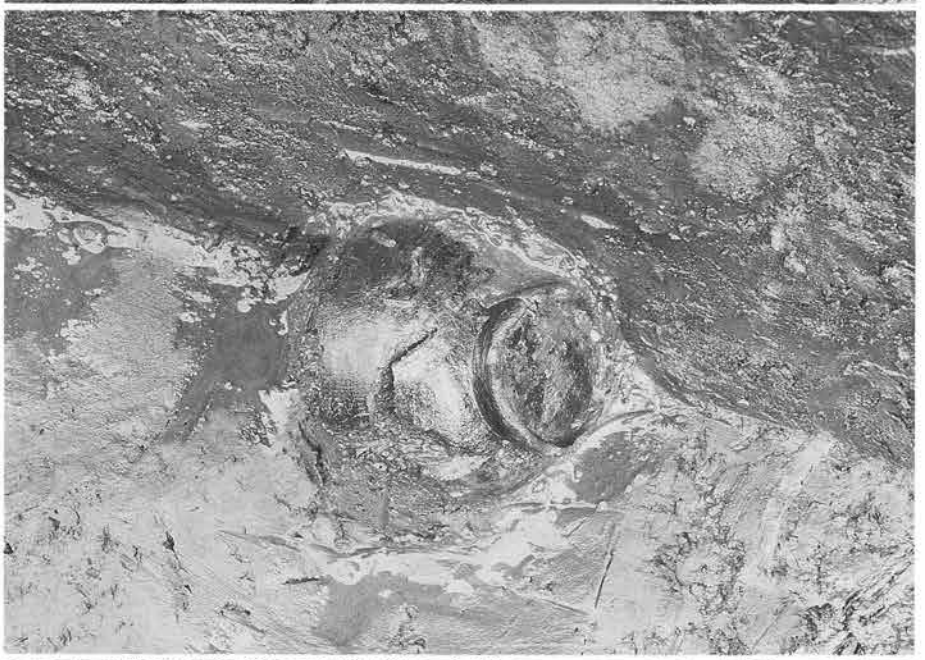
4．第96号土坑（西から）

5．第1号堀跡（西から）

写真53　土坑（5）　堀跡（1）

1．第1号堀跡
セクション
（東から）

2．第1号堀跡
漆器出土状況



3．第2号堀跡
セクション
（南から）

写真54　堀跡（2）

1．第2号堀跡—Ⅵ区（西から）

2．第3号堀跡—Ⅵ区（西から）

3．第3号堀跡セクション（北から）

写真55　堀　　跡（3）

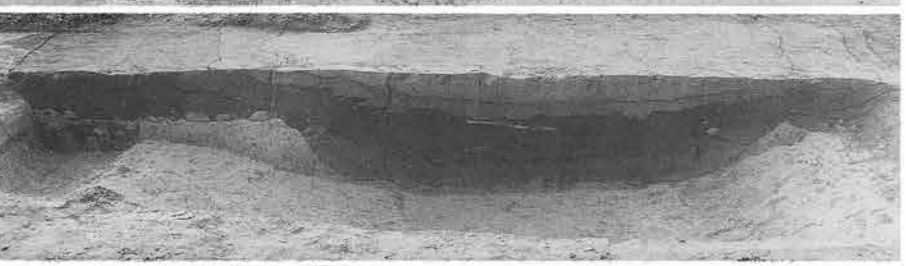
1．第２号(左)・第３号(右)堀跡セクション（西から）

2．第４堀跡―Ⅵ区確認状況
（西から）

写真56　堀　　跡（４）

1．第４号堀跡
—Ⅴ区確認状況
（南から）

2．第４号堀跡—Ⅴ区
（東から）



3．第４堀跡—Ⅷ区
北側セクション（No.４）
（東から）

4．第４号堀跡—Ⅷ区
南側セクション（No.２）
（東から）

写真57　堀　　跡（５）

1．第1・3・4・5・6号溝跡（西から）

2．第6号溝跡（南西から）

3．第8号溝跡（南から）

写真58　溝　　跡（1）

1．第7号溝跡（南から）

2．第7・8・9・11号溝跡（東から）

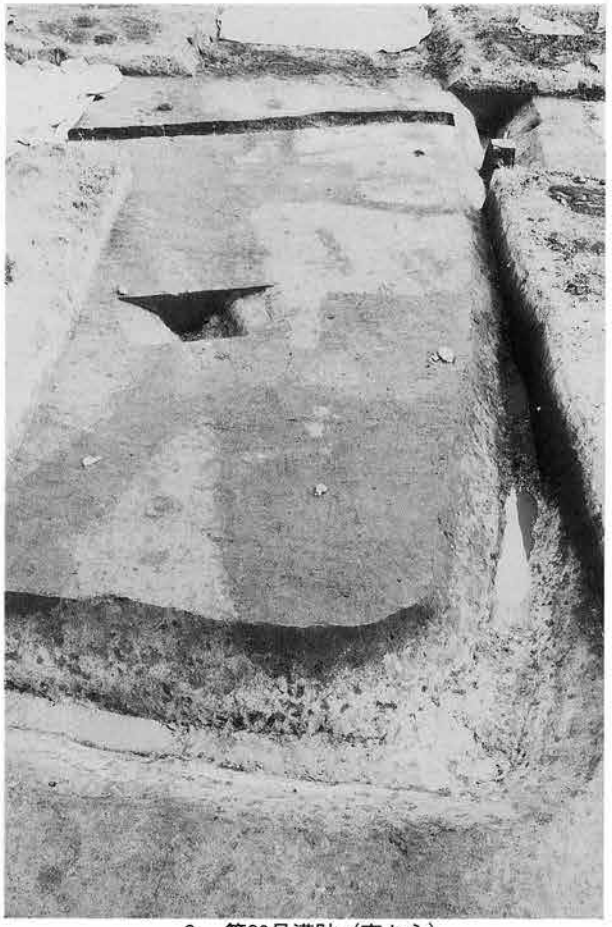
3．第11号溝跡（西から）

4．第16号溝跡（西から）

写真59　溝　　跡（2）

1．第12号溝跡（南から）

2．第17号溝跡（南から）



3．第20号溝跡（南から）

写真60　溝　　跡（3）

1．第18号溝跡（南から）

2．第21号溝跡（南から）

3．第22号溝跡（西から）

4．第23号溝跡（東から）

写真61　溝　　跡（4）

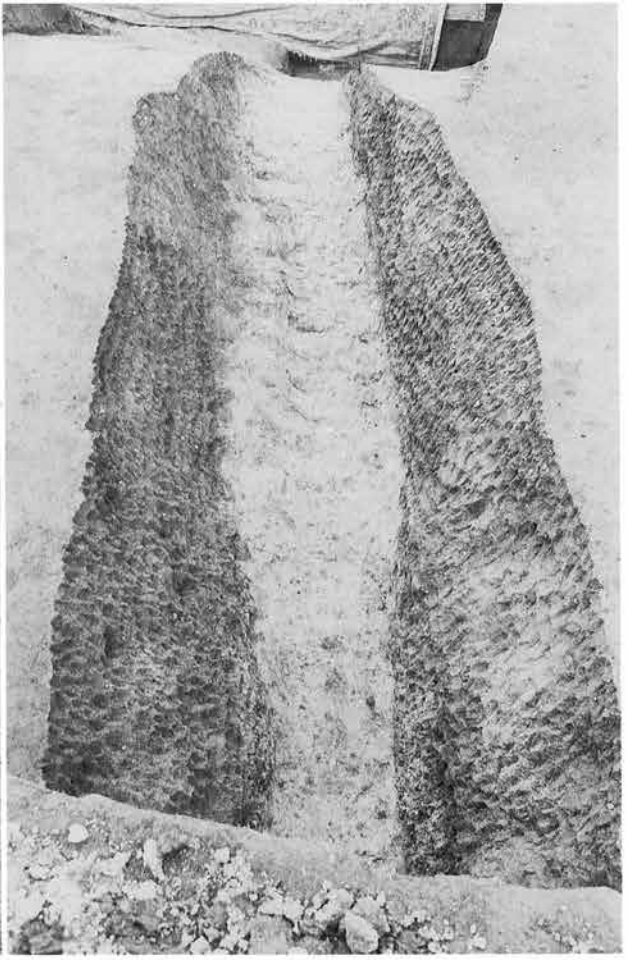
1．第33号溝跡（東から）

2．第35号溝跡（西から）

3．第37号溝跡（北から）

写真62　溝　　跡（5）

1．第31・32号溝跡（南東から）



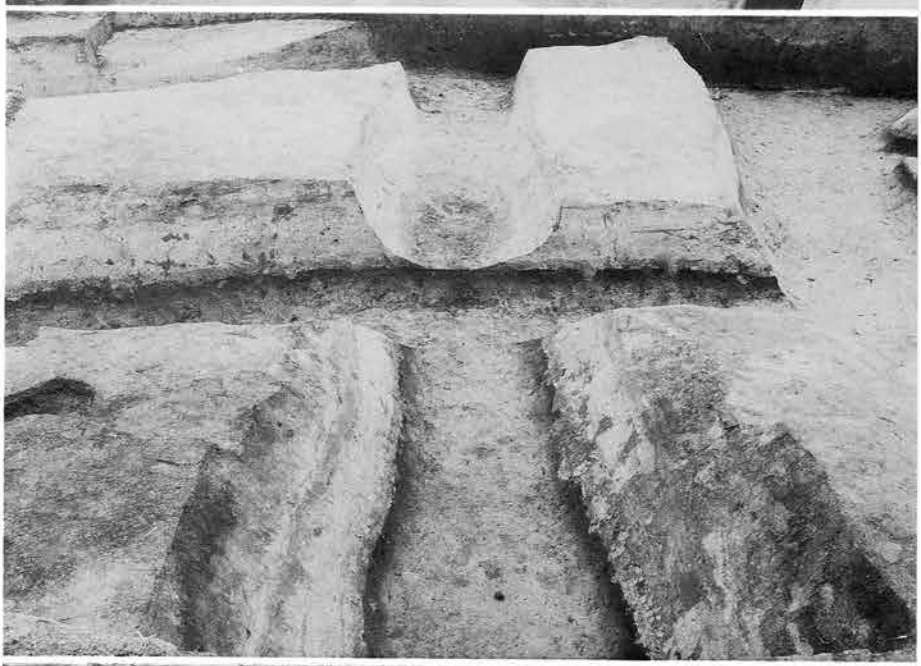
2．第52号溝跡（南から）

3．第59号溝跡（北から）

写真63　溝　　跡（6）

1．第61号溝跡調査
状況（北東から）

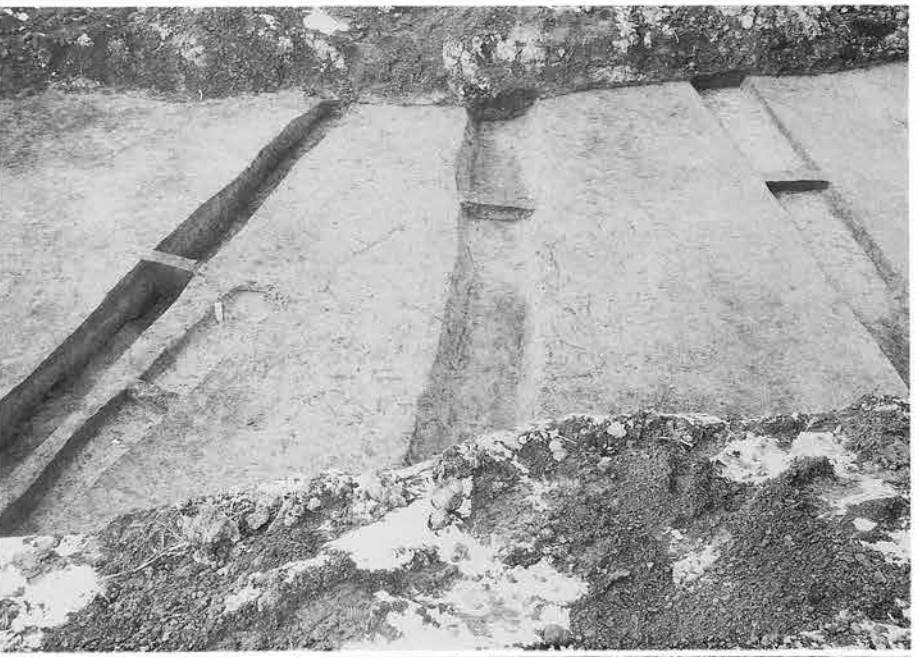
2．第62号溝跡
（北から）



3．第64号溝跡
（南から）

写真64　溝　　跡（7）

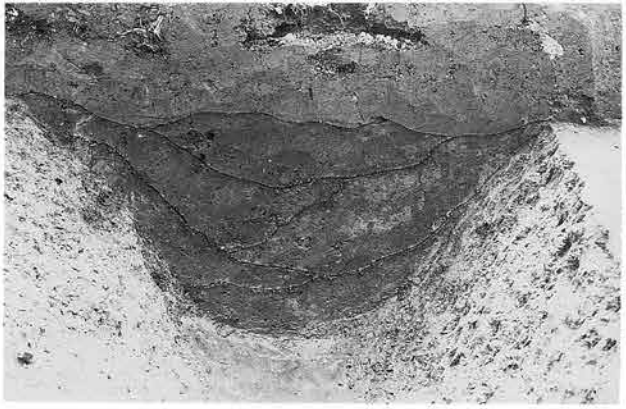
1．第65号溝跡
（西から）



2．第71・72・73号
溝跡（東から）

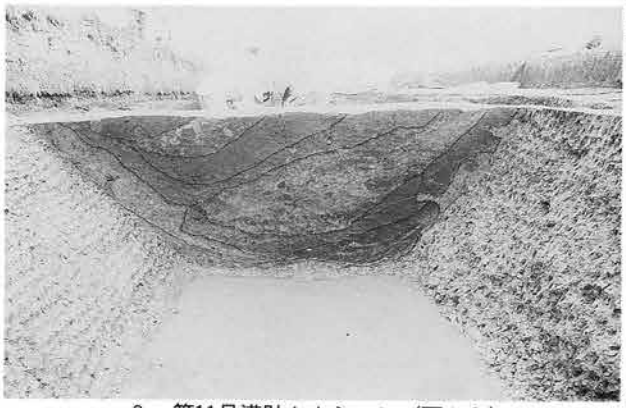
3．第77・78号溝跡
（西から）

写真65　溝　　跡（8）



1．第1号溝跡セクション（西から）

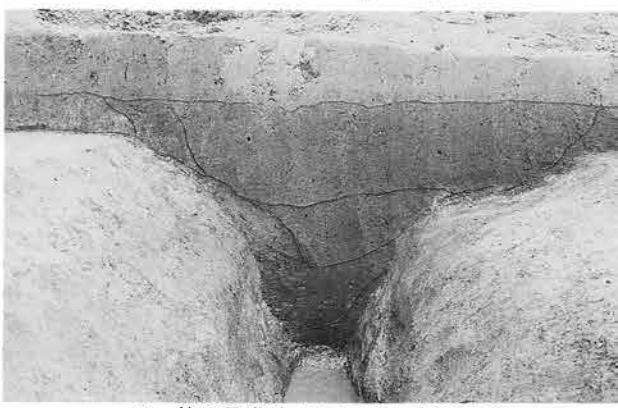
2．第3ｂ溝跡セクション（南から）



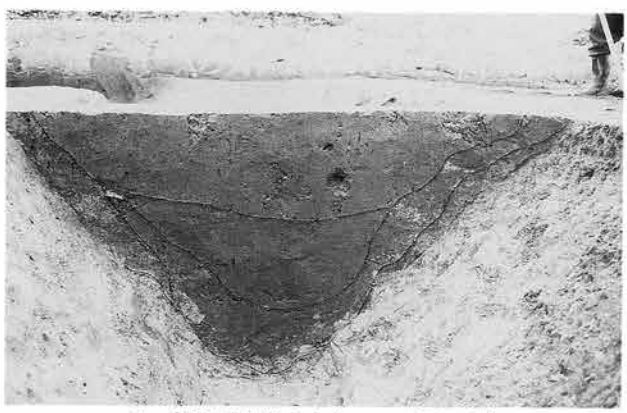
3．第11号溝跡セクション（西から）

4．第13号溝跡（東から）

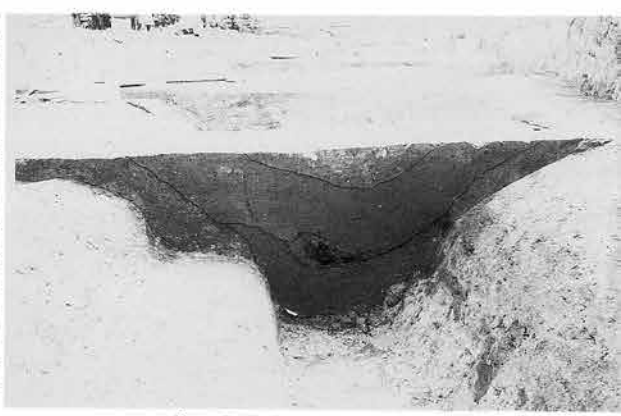
5．第16号溝跡セクション（西から）



6．第18号溝跡セクション（北から）



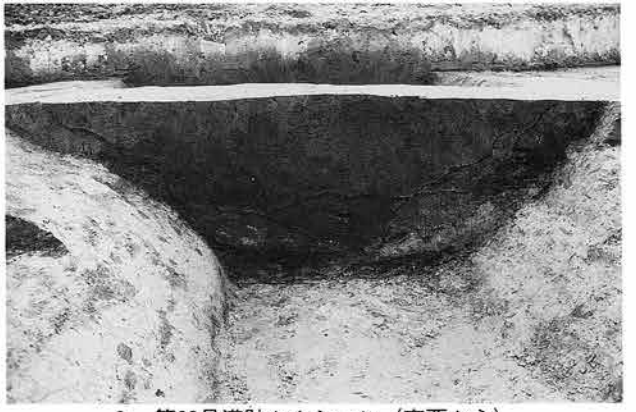
7．第20号溝跡セクション（西から）



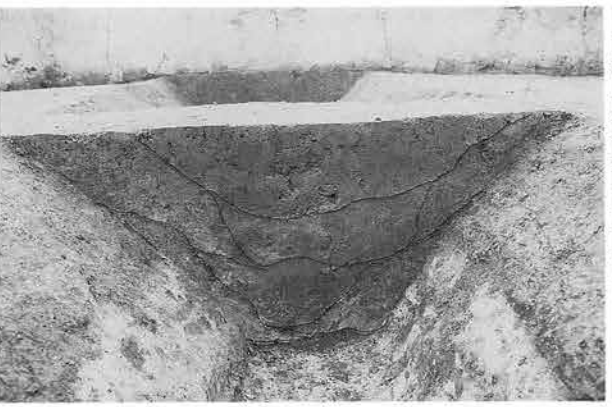
8．第21号溝跡セクション（北から）

写真66　溝　　跡（9）

1．第22号溝跡セクション（東から）

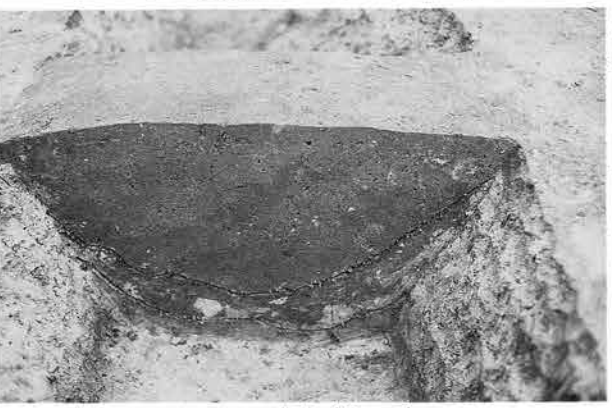


2．第23号溝跡セクション（南西から）



3．第35号溝跡セクション（西から）

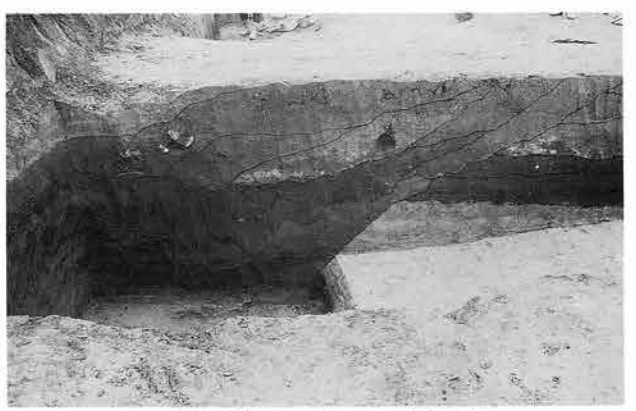
4．第37号溝跡セクション（北から）



5．第51号溝跡（北から）

6．第57号溝跡（北から）

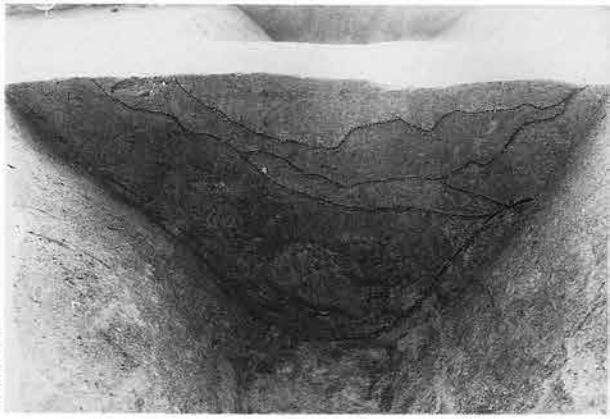
7．第59号溝跡セクション（南から）



8．第61号溝跡セクション（東から）

写真67　溝　　跡（10）

1．第62号溝跡セクション（南から）



2．第63号溝跡セクション（北から）

3．第64号溝跡セクション（南から）

4．第69号溝跡セクション（西から）

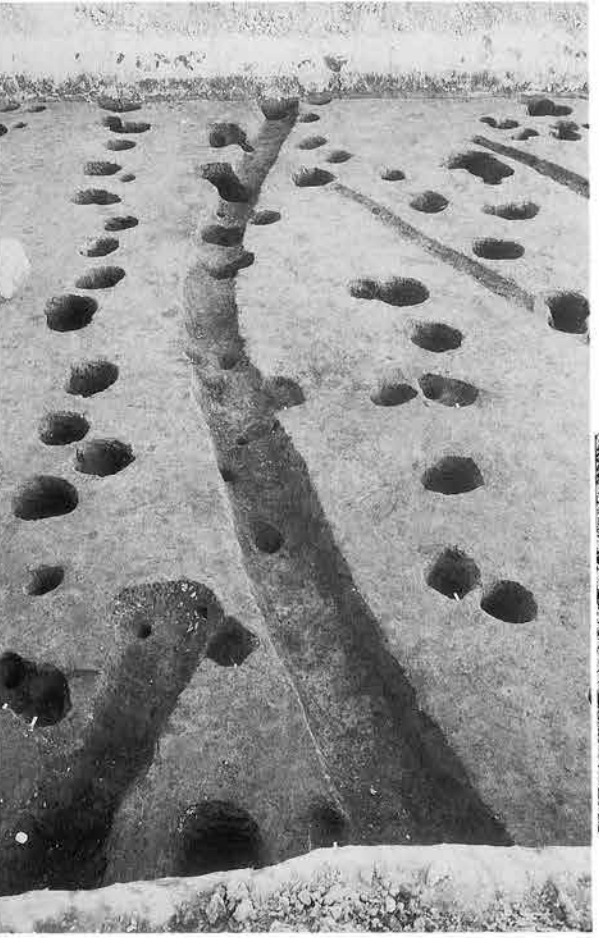
5．第70号溝跡セクション（南東から）

6．第74号溝跡セクション（東から）

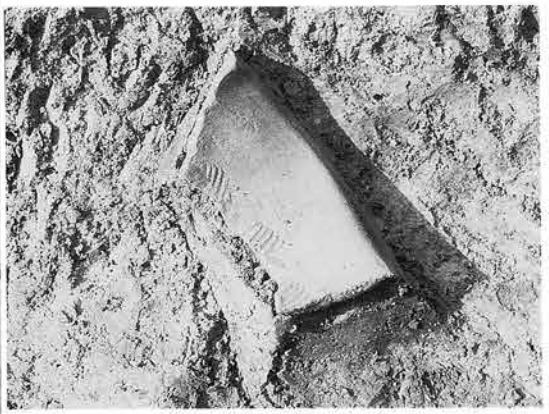
7．第61号溝跡骨出土状況

8．第77号溝跡下駄出土状況

写真68　溝　　跡（11）



1．第42号溝状遺構
（西から）



2．第35号溝状遺構土器出土状況

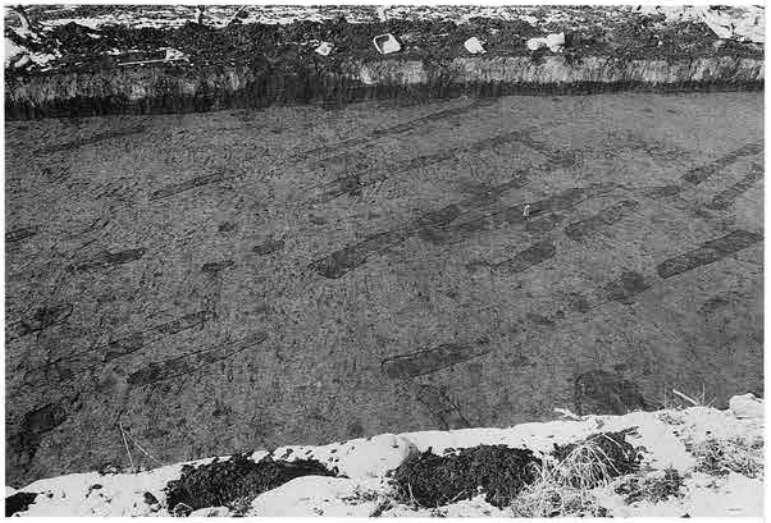
3．第３号性格不明遺構
（南から）

4．埋葬馬骨
（西から）

写真69　溝状遺構など

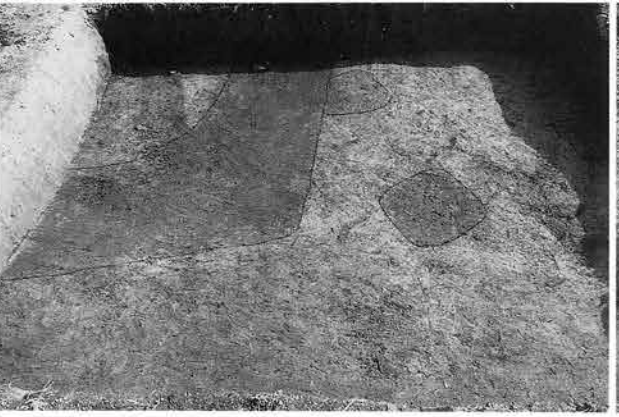
1．確認状況
（南東から）

2．確認状況
（南東から）



3．完掘状況
（南から）

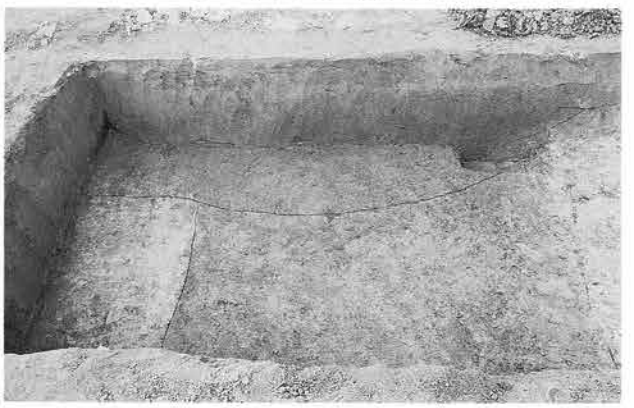
写真70　第９号小溝状遺構群



1．Aトレンチ（西から）

2．Bトレンチ（東から）

3．D(H・I・J)トレンチ（南から）

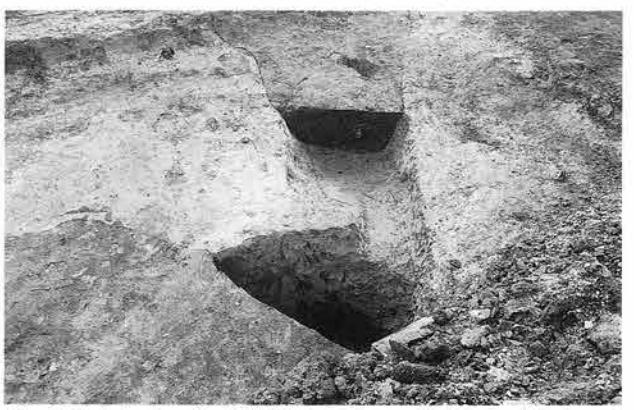


4．Eトレンチ（東から）

5．Fトレンチ（北から）

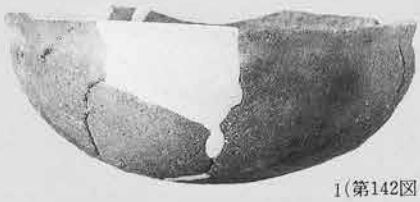
6．Gトレンチ（北から）

7．Mトレンチ（南から）



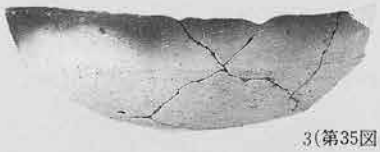
8．Mトレンチ―第4号堀跡とSD61の接続部分（北東から）

写真71　試掘トレンチ



1(第142図4)

2(第142図3)



3(第35図1)

4(第35図3)

5(第35図2)

6(第94図1)

7(第52図1)

8(第52図2)

9(第52図1)

10(第43図1)

11(第59図1)

12(第62図4)

13(第62図1)

14(第43図2)

写真72　土師器（1）一坏

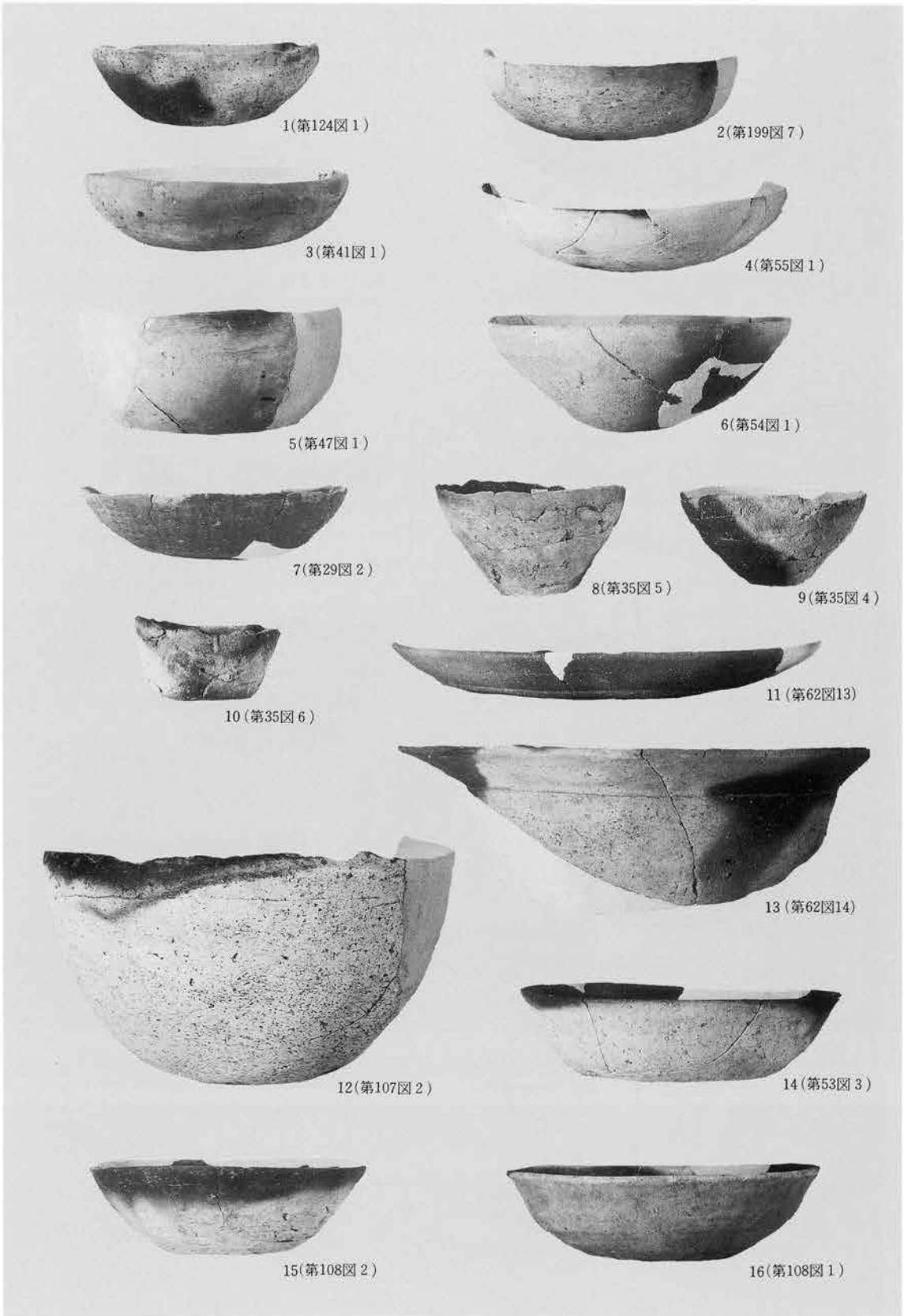


写真73　土師器（2）一坏・手づくね土器・埦・鉢

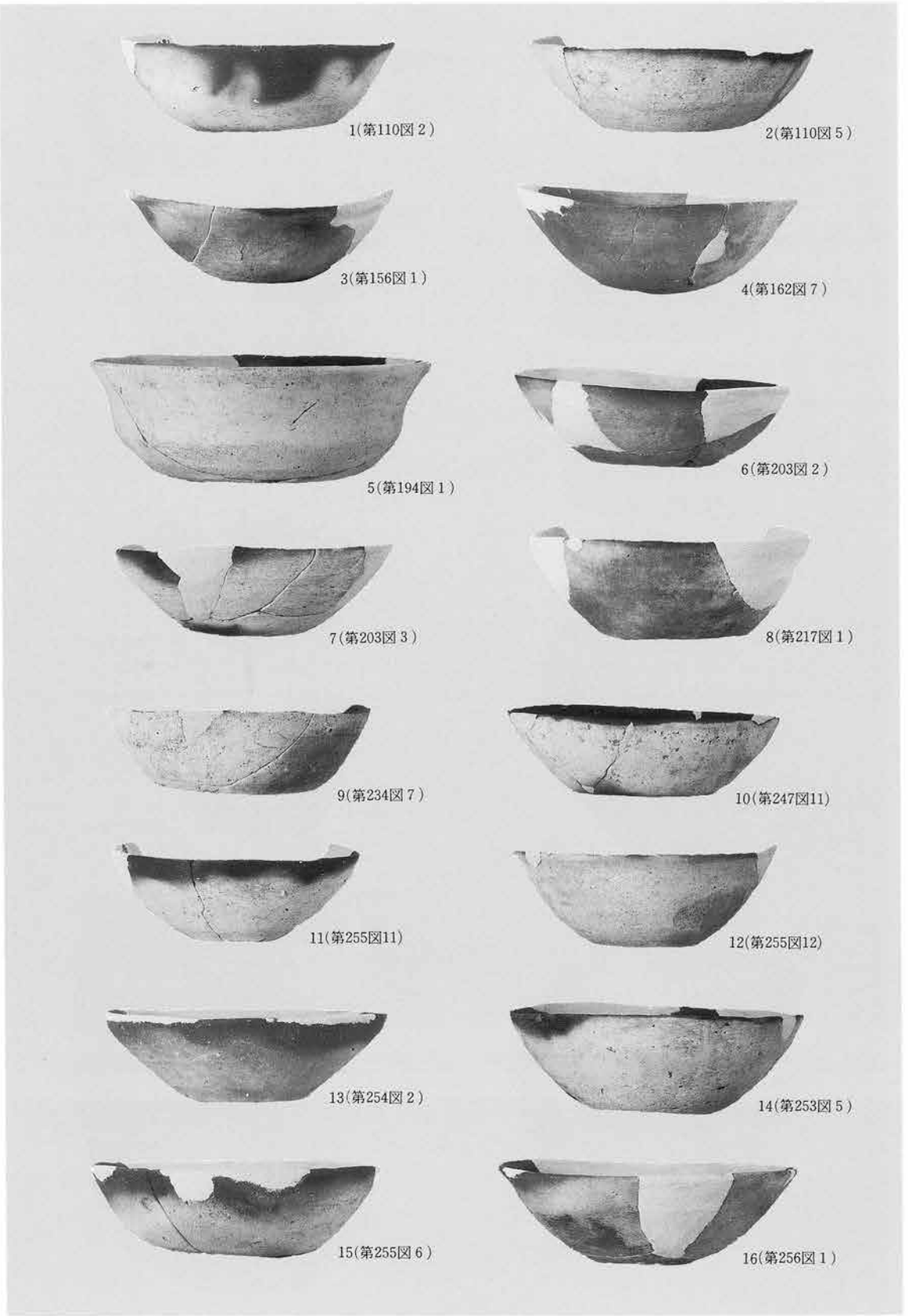

1(第110図2)
2(第110図5)
3(第156図1)
4(第162図7)
5(第194図1)
6(第203図2)
7(第203図3)
8(第217図1)
9(第234図7)
10(第247図11)
11(第255図11)
12(第255図12)
13(第254図2)
14(第253図5)
15(第255図6)
16(第256図1)

写真74　土師器（3）一坏

1(第41図４)

2(第62図11)

3(第109図７)

4(第29図４)

5(第29図５)

6(第32図９)

8(第36図２)

7(第36図１)

10(第47図３)

9(第41図５)

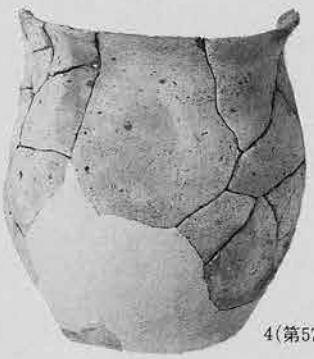
11(第49図１)

写真75　土師器（４）一高坏・甕

1(第49図2)

2(第49図3)

3(第52図6)



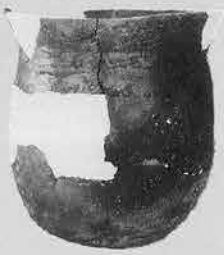
4(第57図7)

5(第59図8)

6(第60図4)

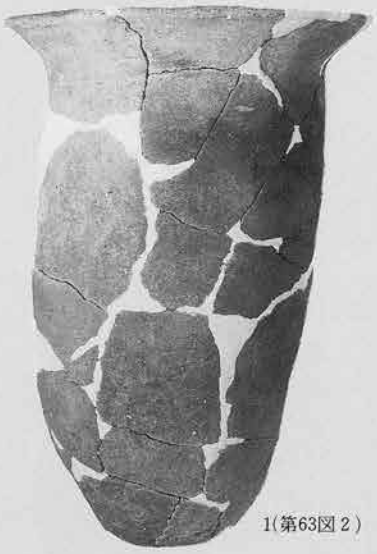
7(第63図3)

8(第63図4)



9(第64図2)

写真76　土師器（5）一甕



1(第63図２)

2(第63図１)

3(第64図１)

4(第68図３)

6(第75図１)

5(第71図２)

7(第75図２)

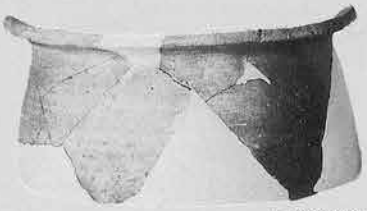
写真77　土師器（６）一甕

1(第75図４)

2(第114図１)

3(第190図２)

4(第265図11)



5(第210図１)

6(第257図１)

7(第32図13)

8(第43図４)

9(第79図４)

10(第81図１)

11(第138図３)

12(第143図１)

13(第148図８)

写真78　土師器（７）一甕、赤焼土器・須恵器（１）

1(第158図８)

2(第158図９)

3(第158図10)

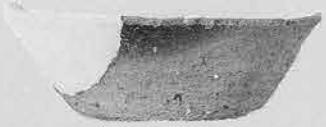
4(第160図１)

5(第160図２)

6(第160図３)

7(第189図７)

8(第189図６)



9(第206図２)

10(第217図３)

11(第225図６)

12(第257図８)

13(第257図７)

14(第258図10)

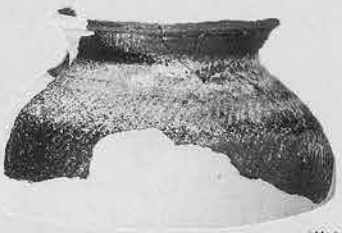
写真79　須恵器（２）一坏

1(第258図４)

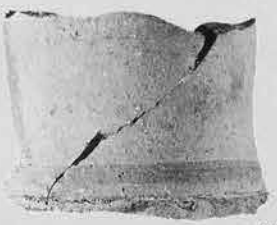
2(第258図３)

3(第257図６)

4(第258図１)



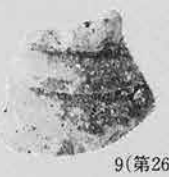
5(第208図９)



6(第183図10)

8(第266図12)

7(第193図３)



9(第266図13)

7の拡大

10(第216図２)

写真80　須恵器（３）一坏

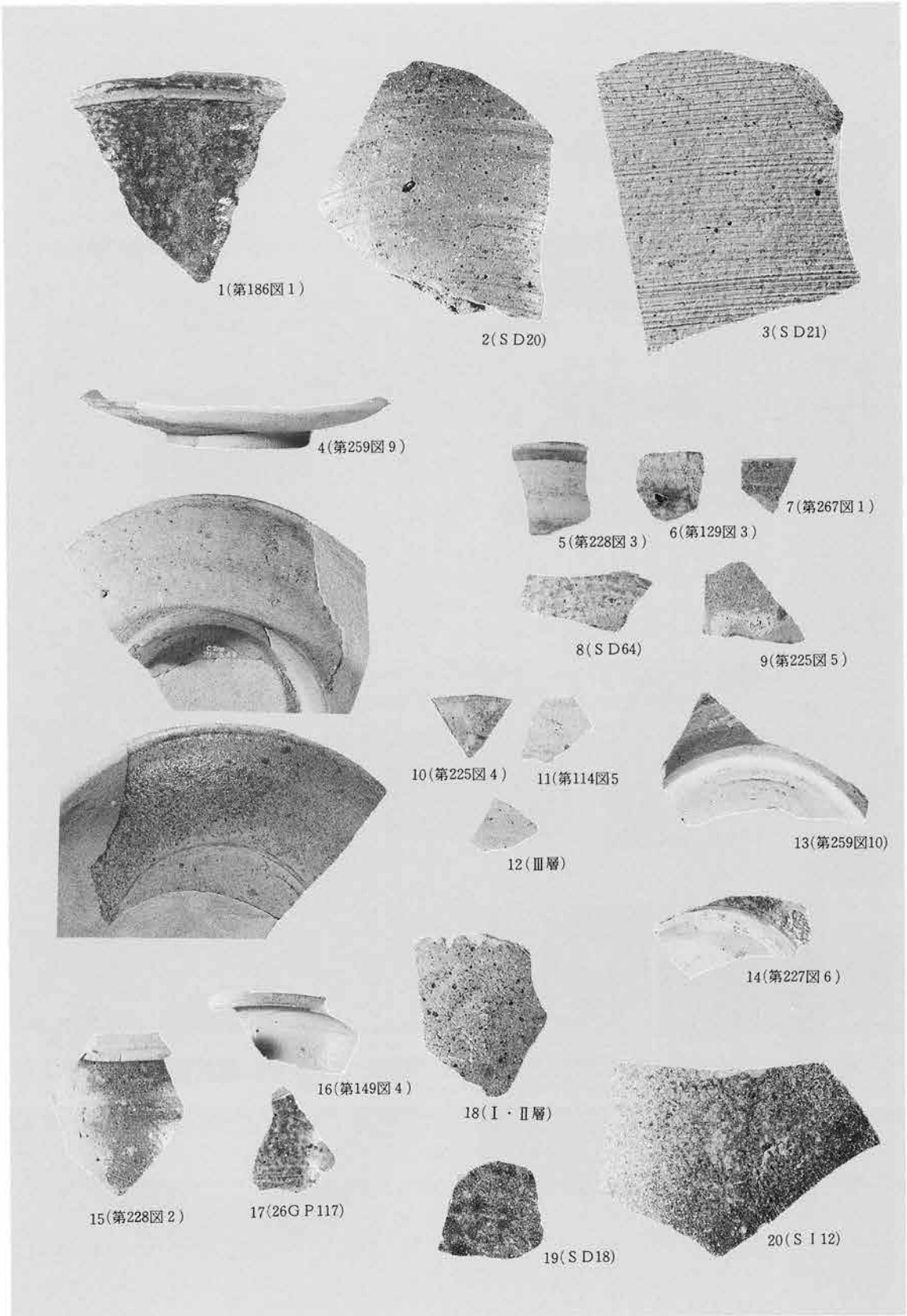


写真81　須恵器（4）・灰釉陶器

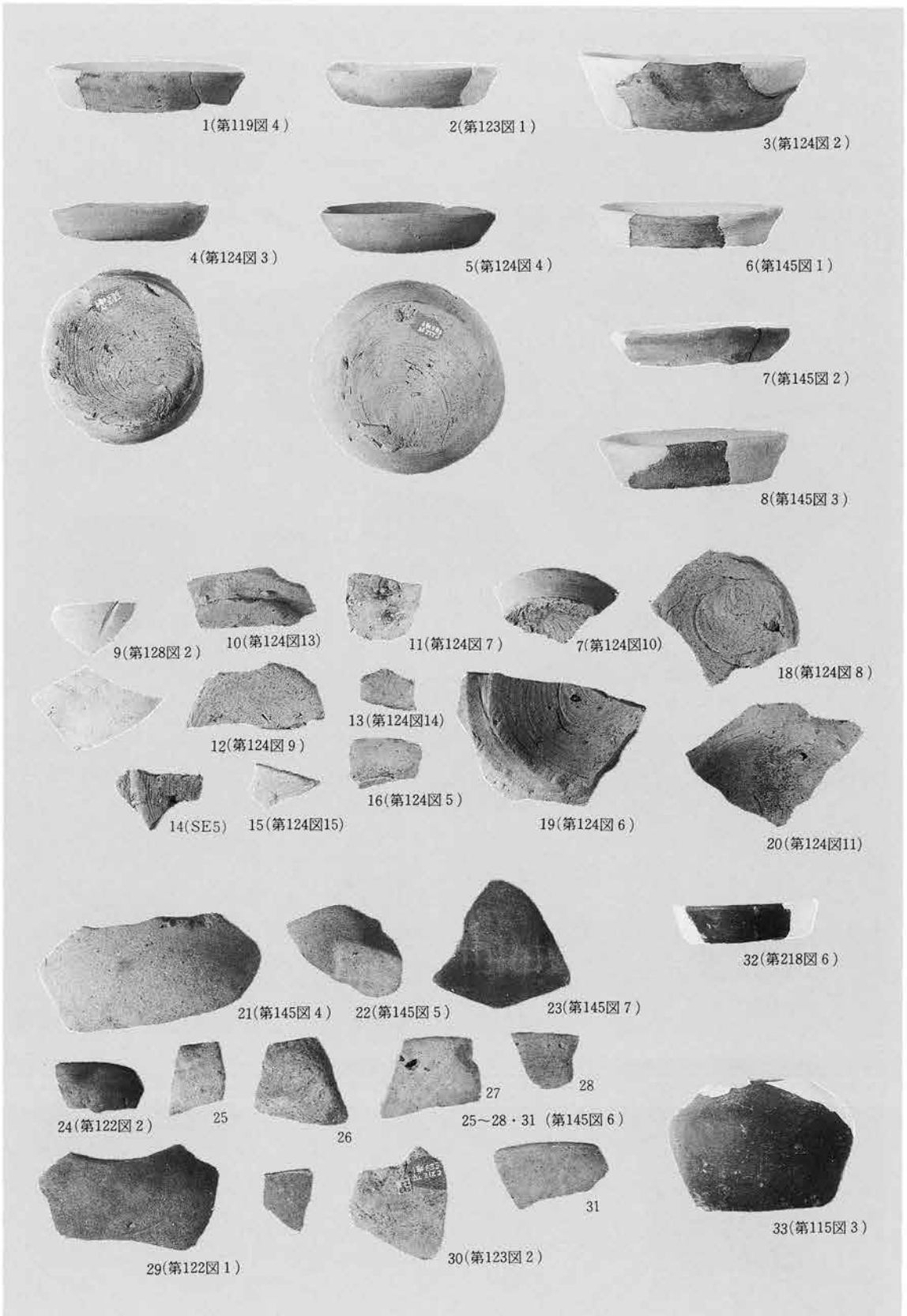


写真82　土師質土器など

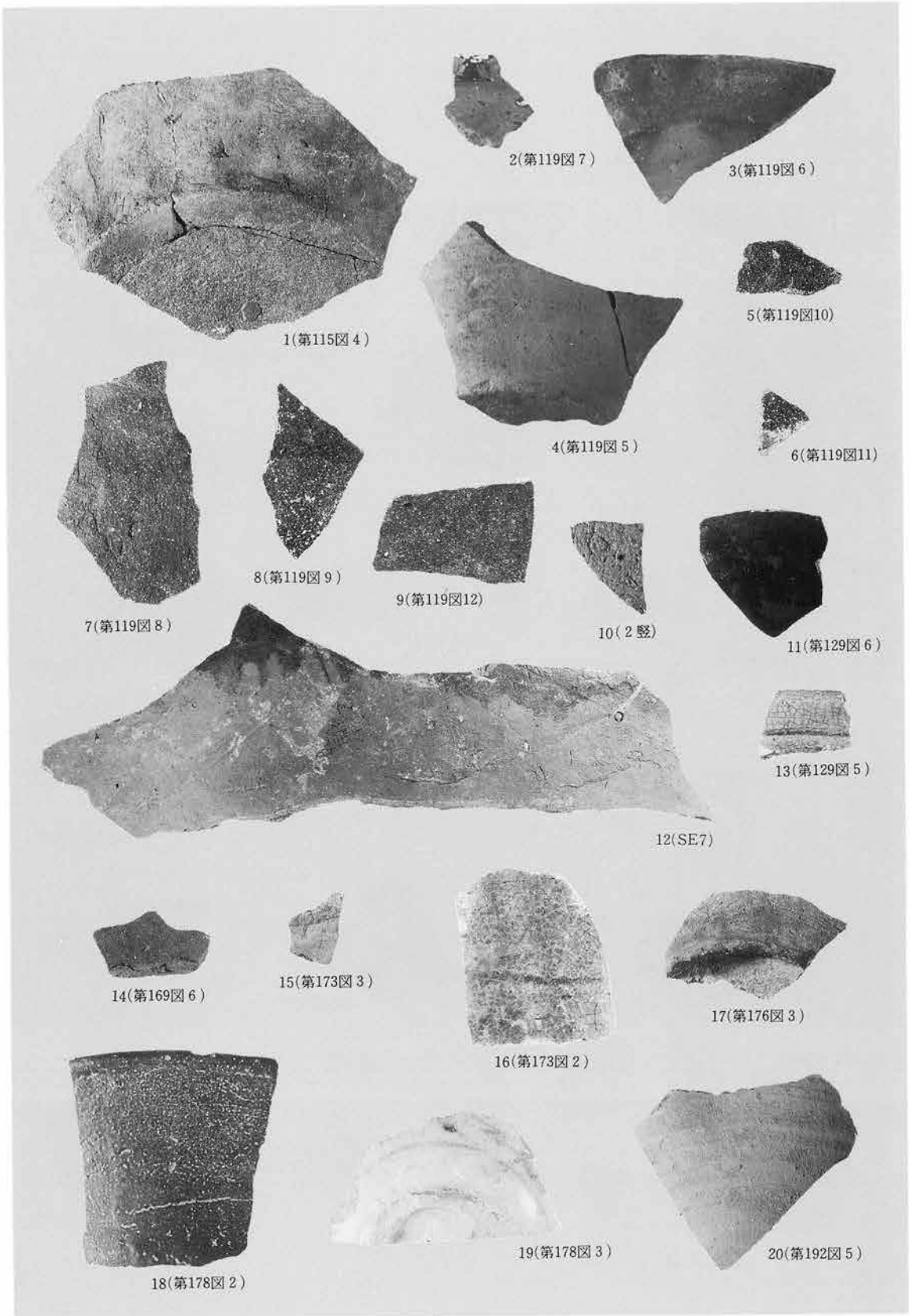

1(第115図 4)
2(第119図 7)
3(第119図 6)
4(第119図 5)
5(第119図10)
6(第119図11)
7(第119図 8)
8(第119図 9)
9(第119図12)
10(2 竪)
11(第129図 6)
12(SE7)
13(第129図 5)
14(第169図 6)
15(第173図 3)
16(第173図 2)
17(第176図 3)
18(第178図 2)
19(第178図 3)
20(第192図 5)

写真83　陶器（1）

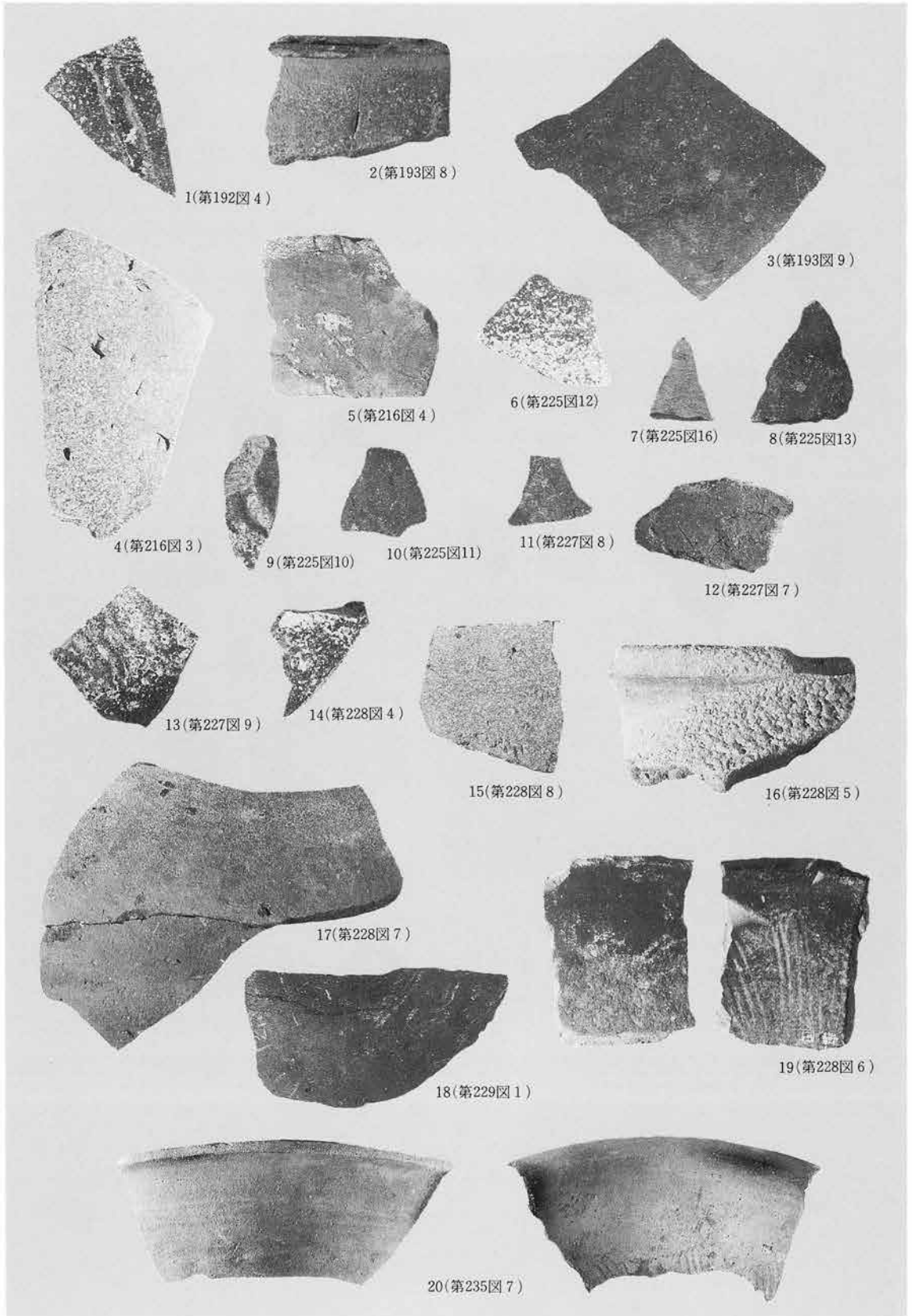

1(第192図4)
2(第193図8)
3(第193図9)
4(第216図3)
5(第216図4)
6(第225図12)
7(第225図16)
8(第225図13)
9(第225図10)
10(第225図11)
11(第227図8)
12(第227図7)
13(第227図9)
14(第228図4)
15(第228図8)
16(第228図5)
17(第228図7)
18(第229図1)
19(第228図6)
20(第235図7)

写真84　陶　　器（2）

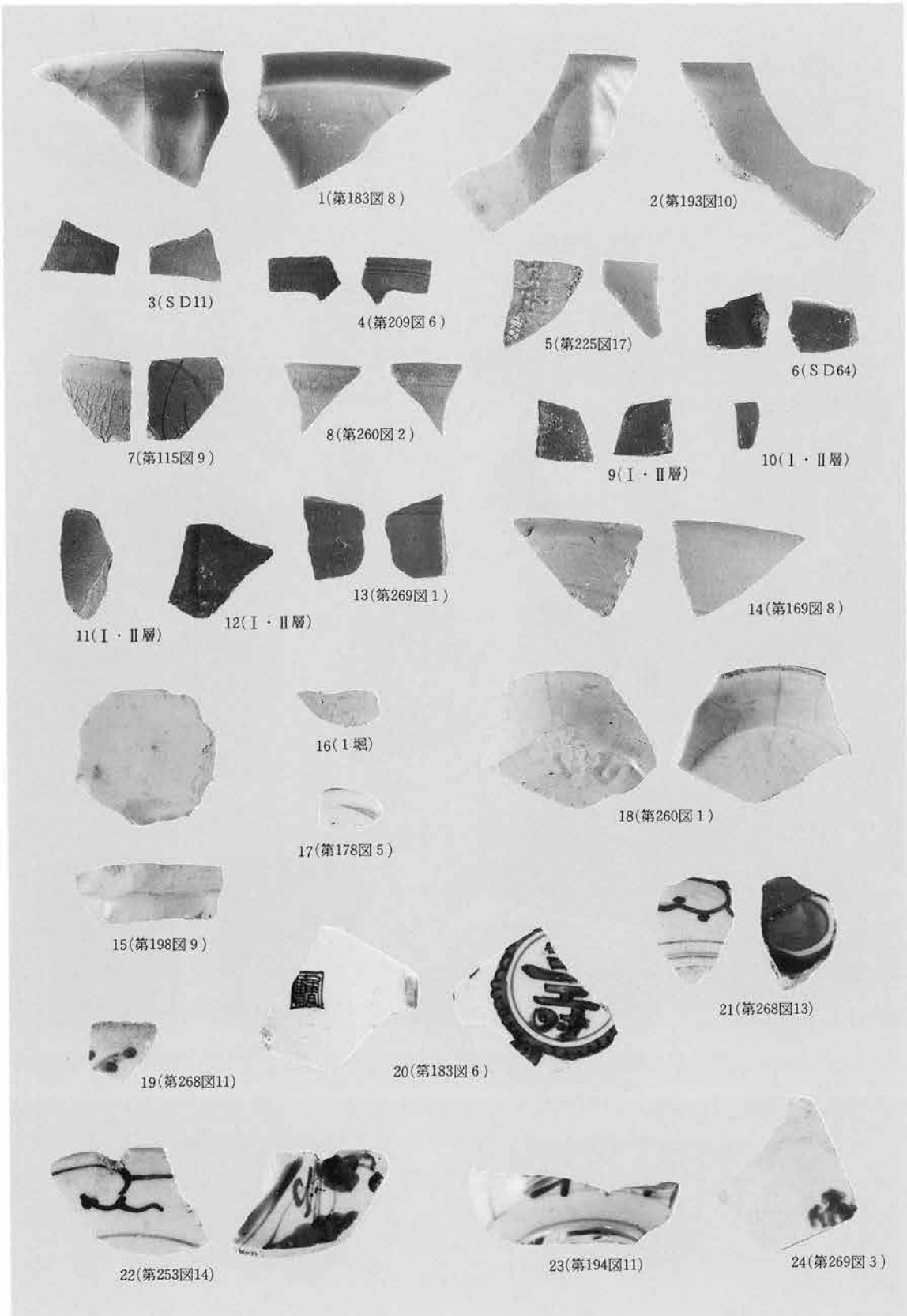

1(第183図8)
2(第193図10)
3(SD11)
4(第209図6)
5(第225図17)
6(SD64)
7(第115図9)
8(第260図2)
9(Ⅰ・Ⅱ層)
10(Ⅰ・Ⅱ層)
11(Ⅰ・Ⅱ層)
12(Ⅰ・Ⅱ層)
13(第269図1)
14(第169図8)
16(1堀)
17(第178図5)
18(第260図1)
15(第198図9)
19(第268図11)
20(第183図6)
21(第268図13)
22(第253図14)
23(第194図11)
24(第269図3)

写真85　磁　器

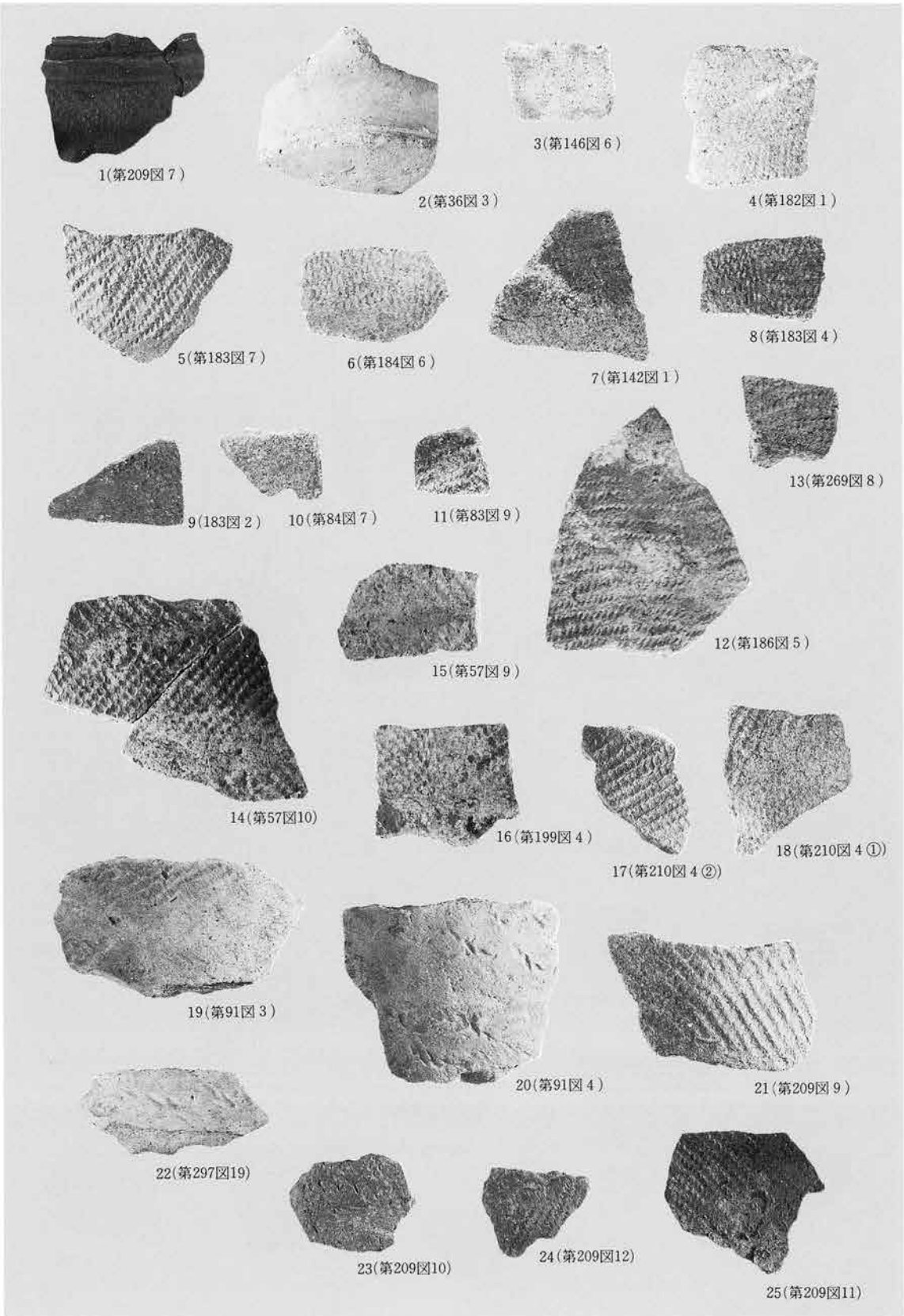

1(第209図 7)
2(第36図 3)
3(第146図 6)
4(第182図 1)
5(第183図 7)
6(第184図 6)
7(第142図 1)
8(第183図 4)
9(183図 2)
10(第84図 7)
11(第83図 9)
12(第186図 5)
13(第269図 8)
14(第57図10)
15(第57図 9)
16(第199図 4)
17(第210図 4 ②)
18(第210図 4 ①)
19(第91図 3)
20(第91図 4)
21(第209図 9)
22(第297図19)
23(第209図10)
24(第209図12)
25(第209図11)

写真86　縄文土器（1）

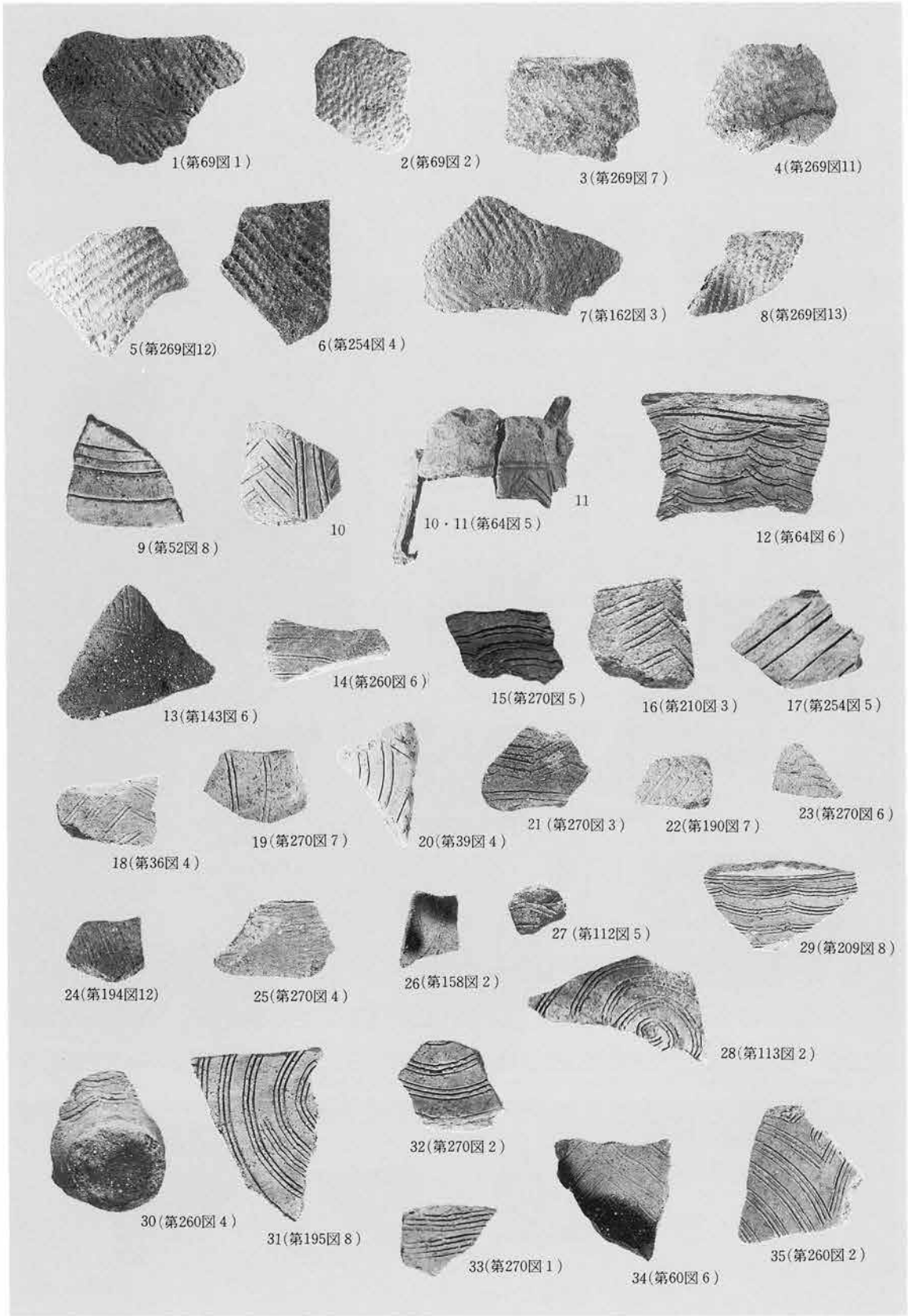


写真87　縄文土器（2）・弥生土器（1）

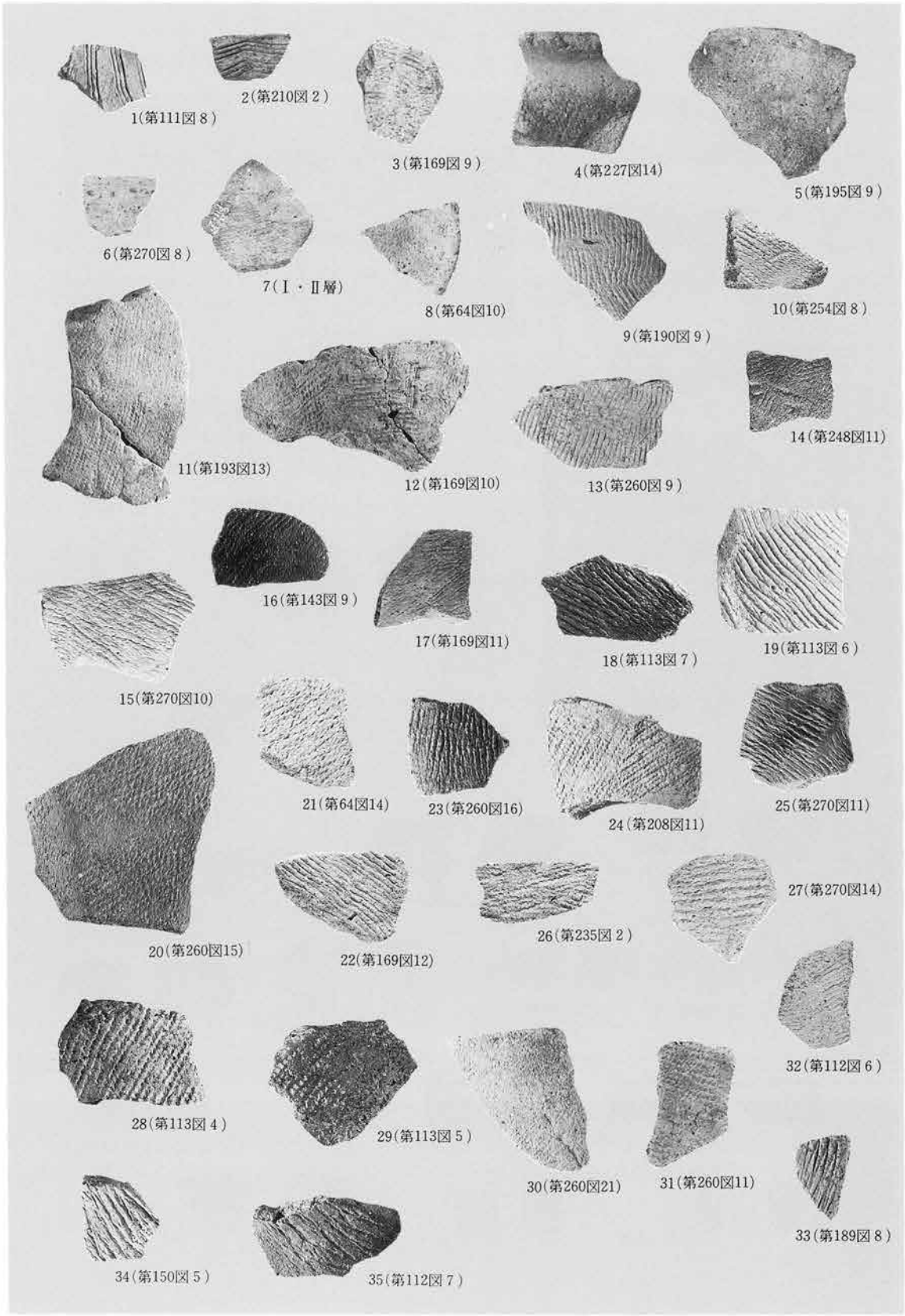

1(第111図8)
2(第210図2)
3(第169図9)
4(第227図14)
5(第195図9)
6(第270図8)
7(Ⅰ・Ⅱ層)
8(第64図10)
9(第190図9)
10(第254図8)
11(第193図13)
12(第169図10)
13(第260図9)
14(第248図11)
15(第270図10)
16(第143図9)
17(第169図11)
18(第113図7)
19(第113図6)
20(第260図15)
21(第64図14)
23(第260図16)
24(第208図11)
25(第270図11)
22(第169図12)
26(第235図2)
27(第270図14)
28(第113図4)
29(第113図5)
30(第260図21)
31(第260図11)
32(第112図6)
33(第189図8)
34(第150図5)
35(第112図7)

写真88　弥生土器（2）

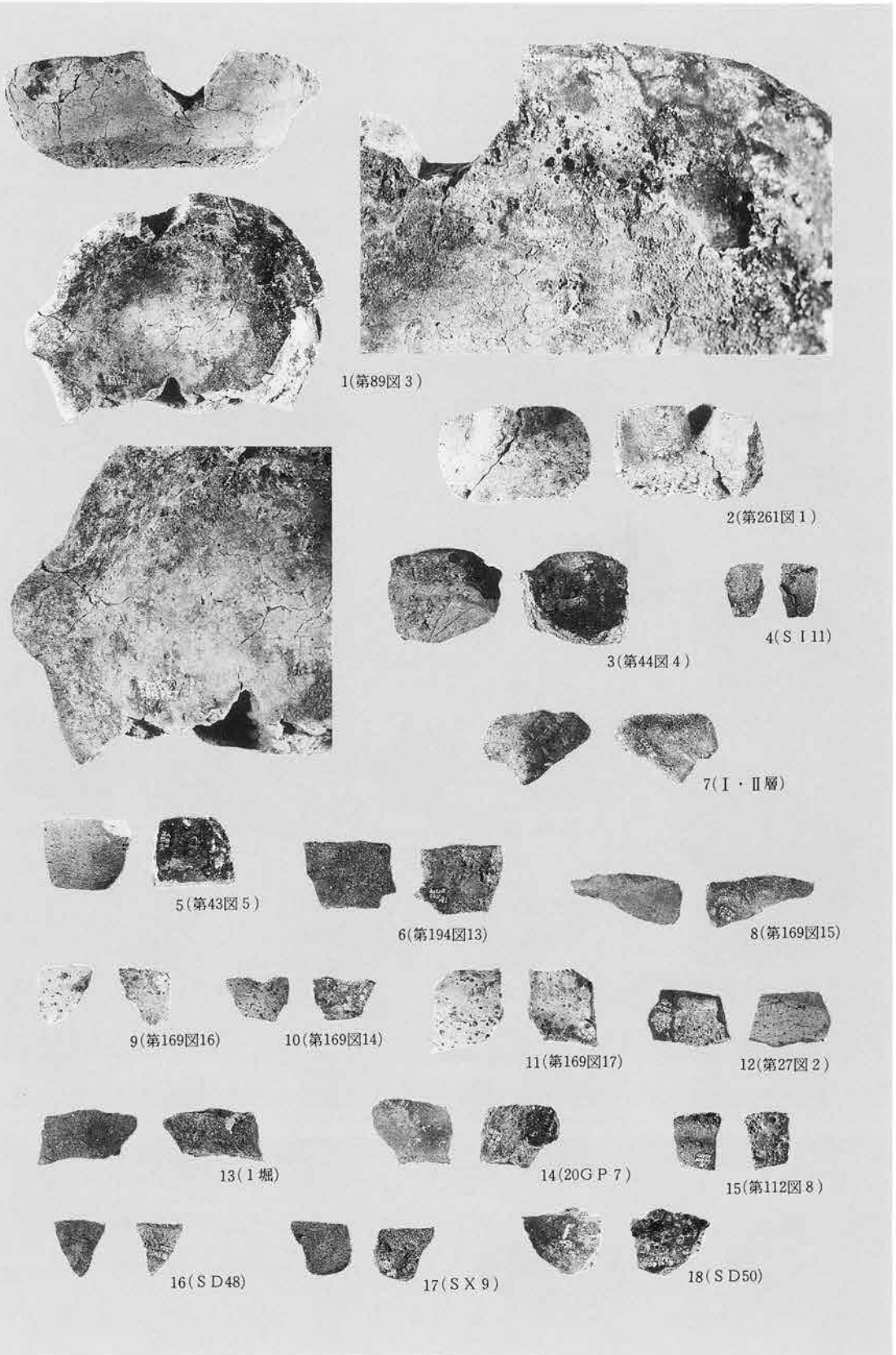

1(第89図３)
2(第261図１)
3(第44図４)
4(S I 11)
5(第43図５)
6(第194図13)
7(I・II層)
8(第169図15)
9(第169図16)
10(第169図14)
11(第169図17)
12(第27図２)
13(１堀)
14(20G P 7)
15(第112図８)
16(S D48)
17(S X 9)
18(S D50)

写真89　と り べ（1）

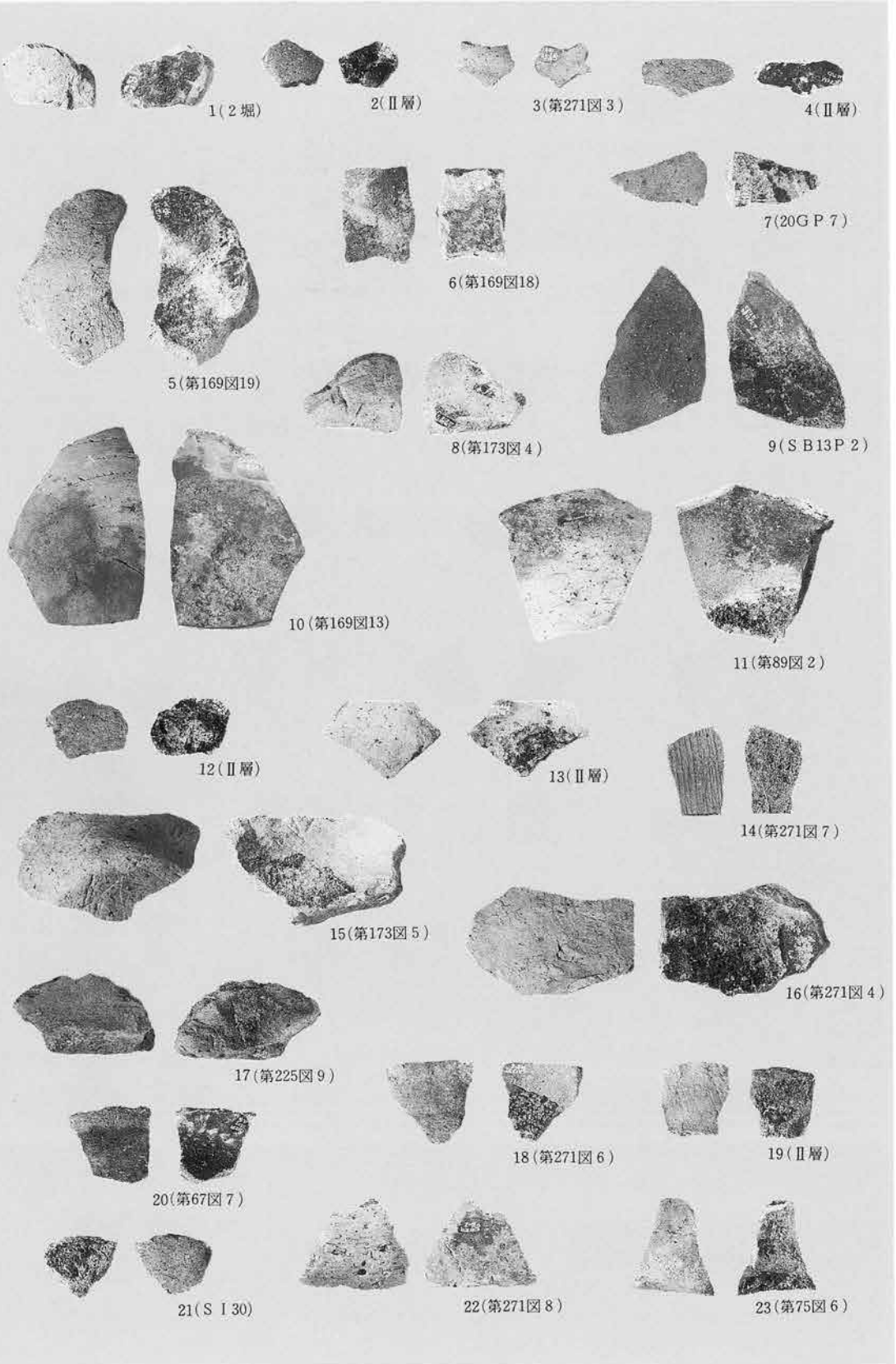

1(2堀)
2(Ⅱ層)
3(第271図3)
4(Ⅱ層)
7(20GP7)
6(第169図18)
5(第169図19)
8(第173図4)
9(SB13P2)
10(第169図13)
11(第89図2)
12(Ⅱ層)
13(Ⅱ層)
14(第271図7)
15(第173図5)
16(第271図4)
17(第225図9)
18(第271図6)
19(Ⅱ層)
20(第67図7)
21(SI30)
22(第271図8)
23(第75図6)

写真90　とりべ（2）

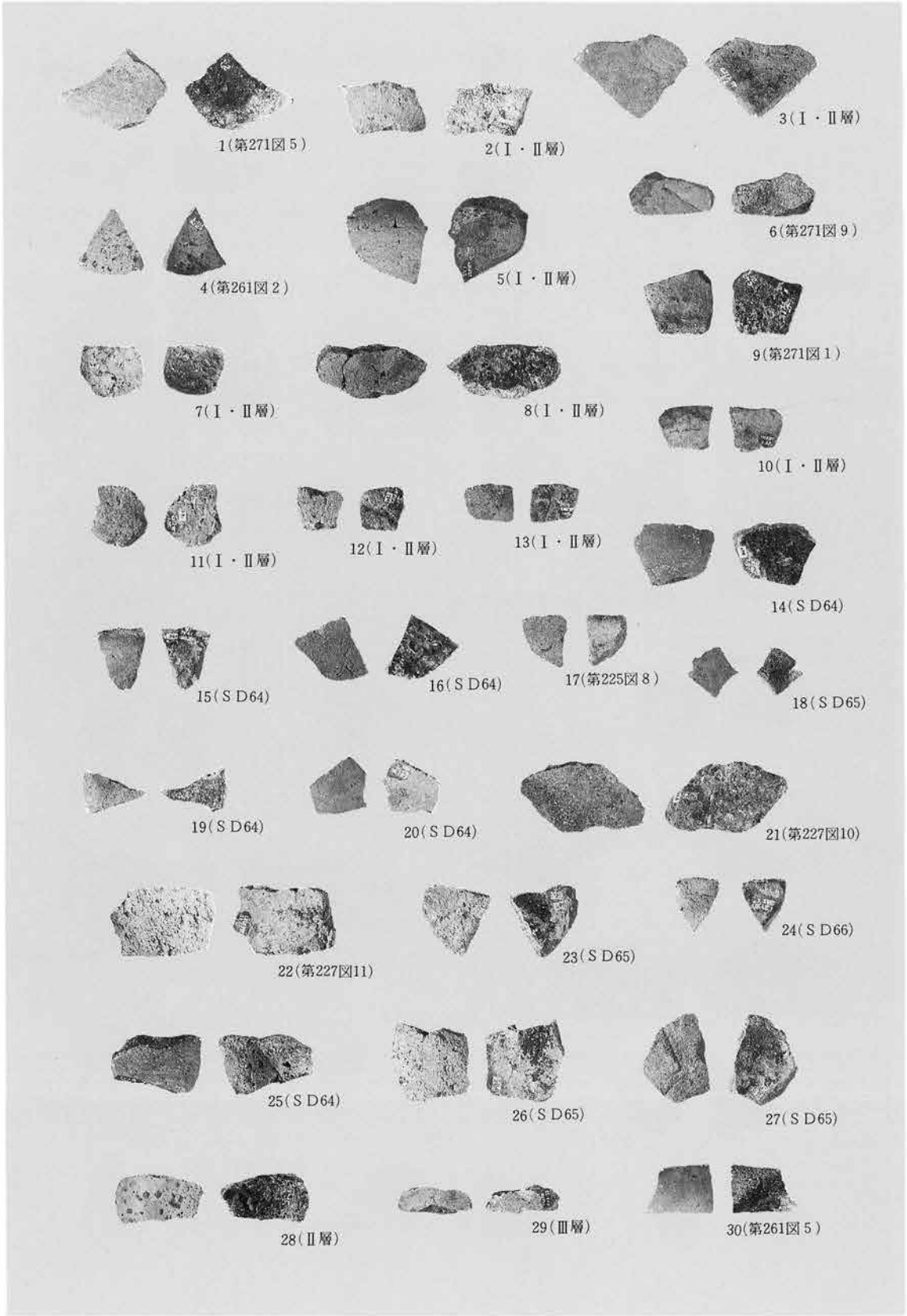

1(第271図5)
2(Ⅰ・Ⅱ層)
3(Ⅰ・Ⅱ層)
4(第261図2)
5(Ⅰ・Ⅱ層)
6(第271図9)
7(Ⅰ・Ⅱ層)
8(Ⅰ・Ⅱ層)
9(第271図1)
10(Ⅰ・Ⅱ層)
11(Ⅰ・Ⅱ層)
12(Ⅰ・Ⅱ層)
13(Ⅰ・Ⅱ層)
14(SD64)
15(SD64)
16(SD64)
17(第225図8)
18(SD65)
19(SD64)
20(SD64)
21(第227図10)
22(第227図11)
23(SD65)
24(SD66)
25(SD64)
26(SD65)
27(SD65)
28(Ⅱ層)
29(Ⅲ層)
30(第261図5)

写真91　と り べ（3）

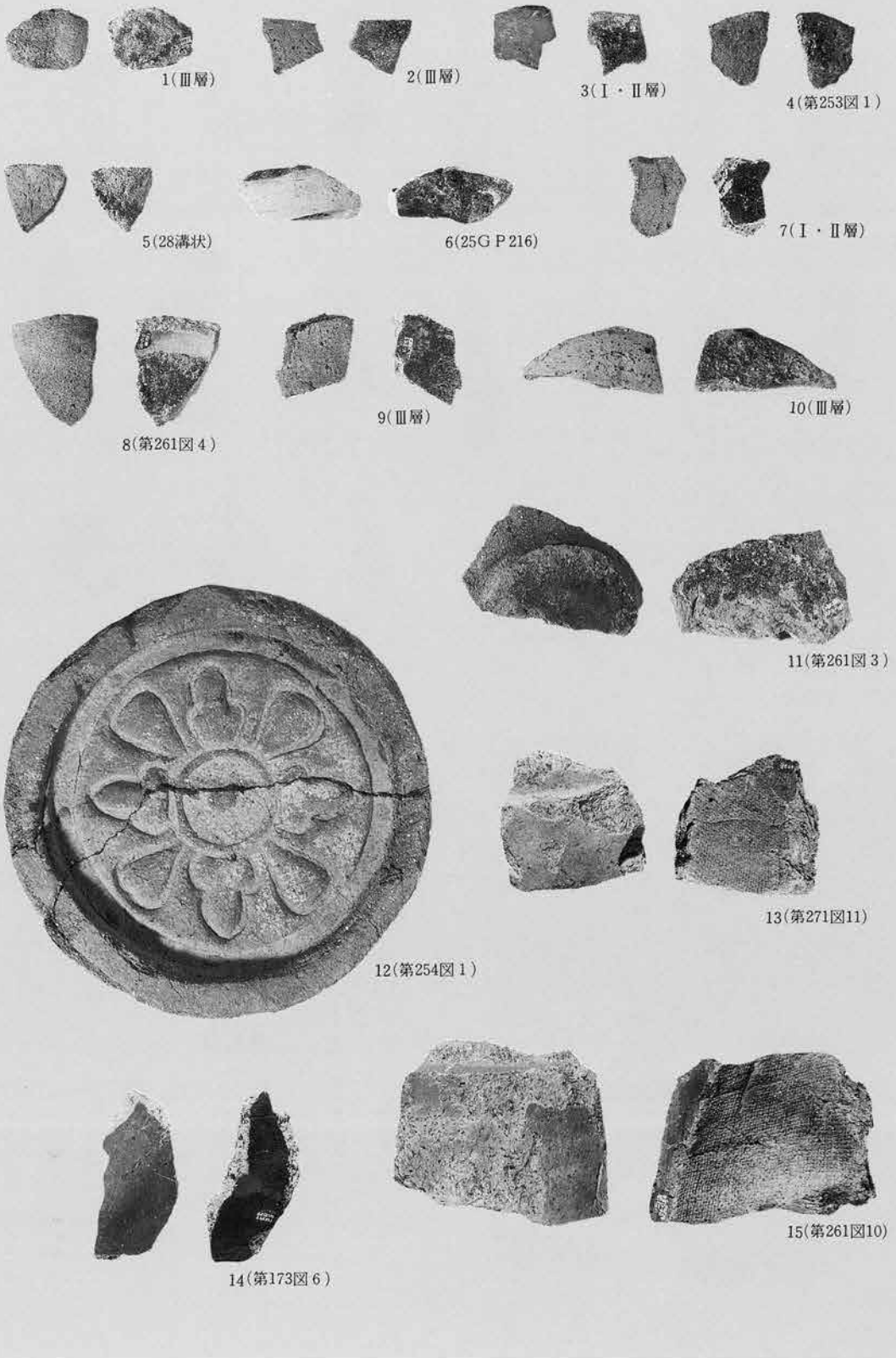

1(Ⅲ層)
2(Ⅲ層)
3(Ⅰ・Ⅱ層)
4(第253図1)
5(28溝状)
6(25G P216)
7(Ⅰ・Ⅱ層)
8(第261図4)
9(Ⅲ層)
10(Ⅲ層)
11(第261図3)
12(第254図1)
13(第271図11)
14(第173図6)
15(第261図10)

写真92　とりべ（4）・瓦

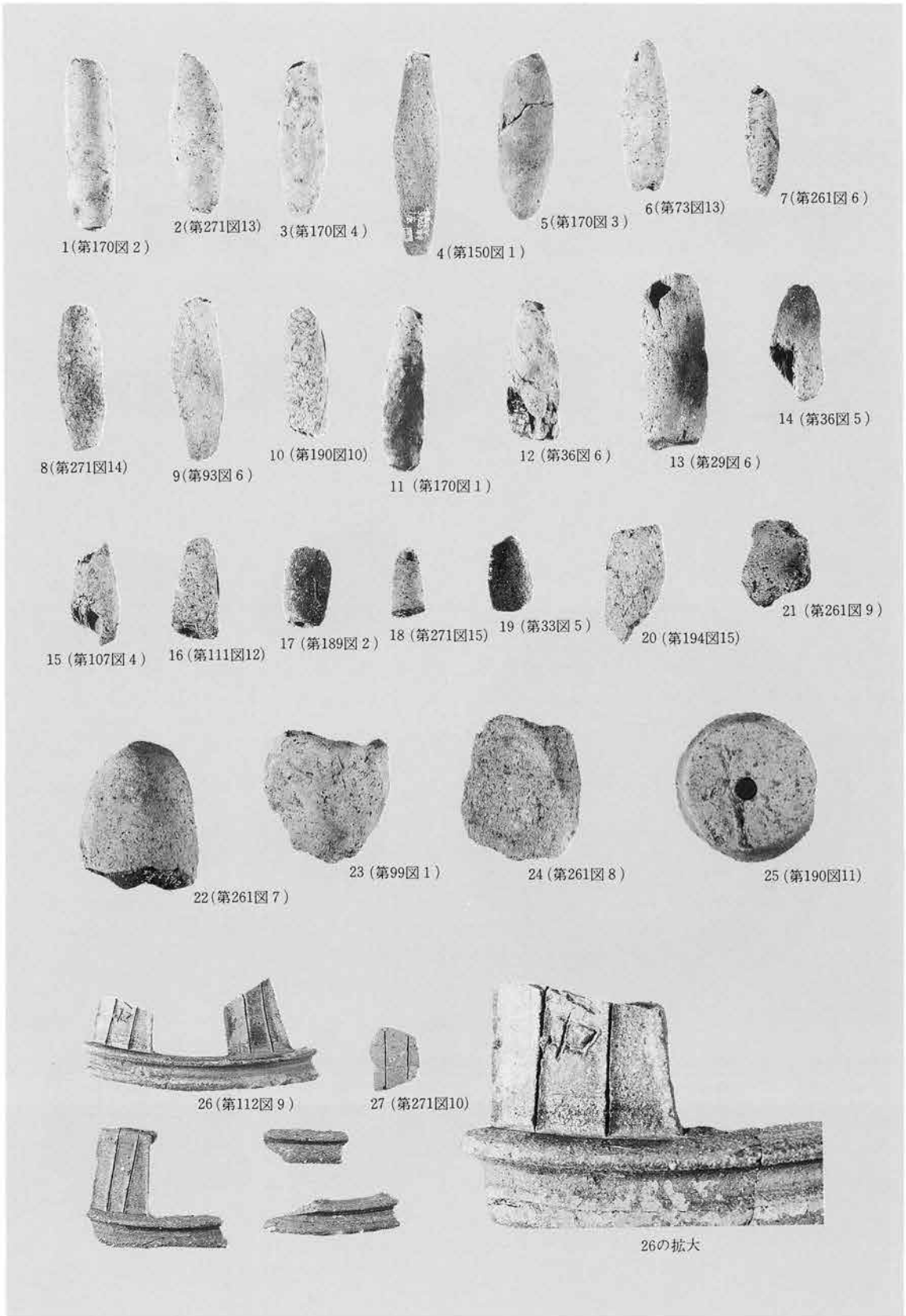


写真93　土製品（1）ー土錘・紡錘車・円面硯

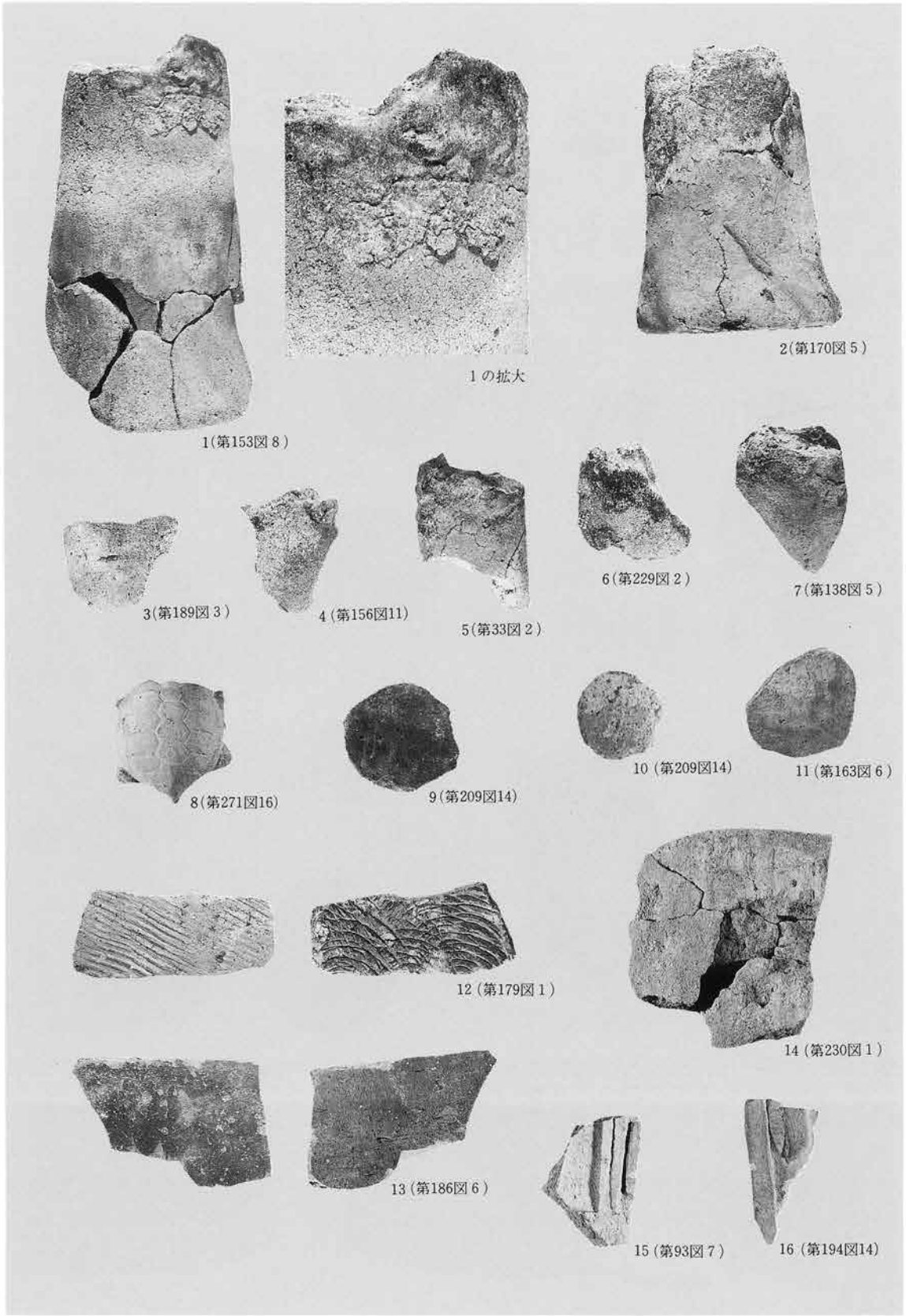


写真94　土製品（2）ーフィゴの羽口・その他

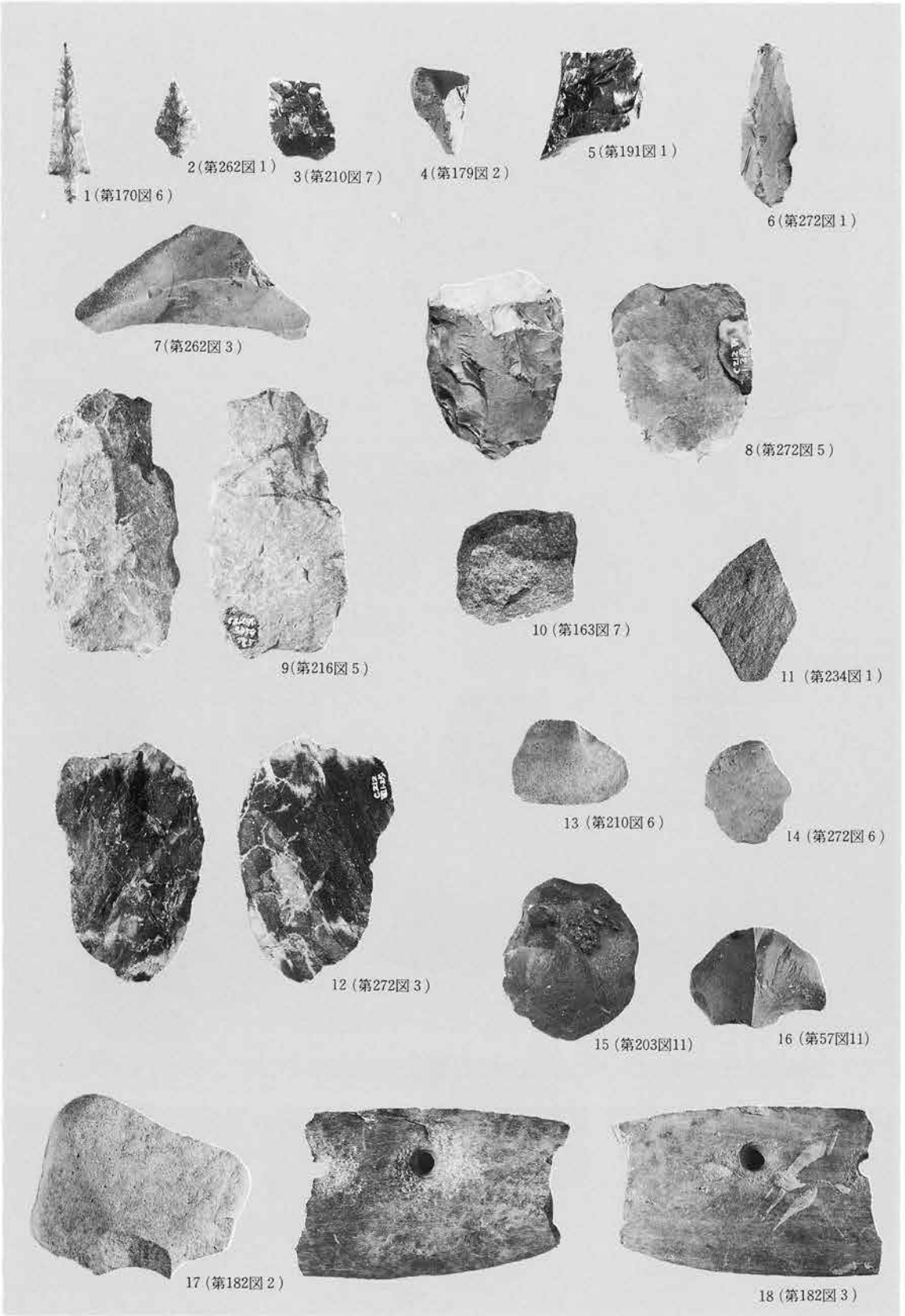


写真95　石器・石製品（１）－石鏃・剝片石器・石核・石庖丁など

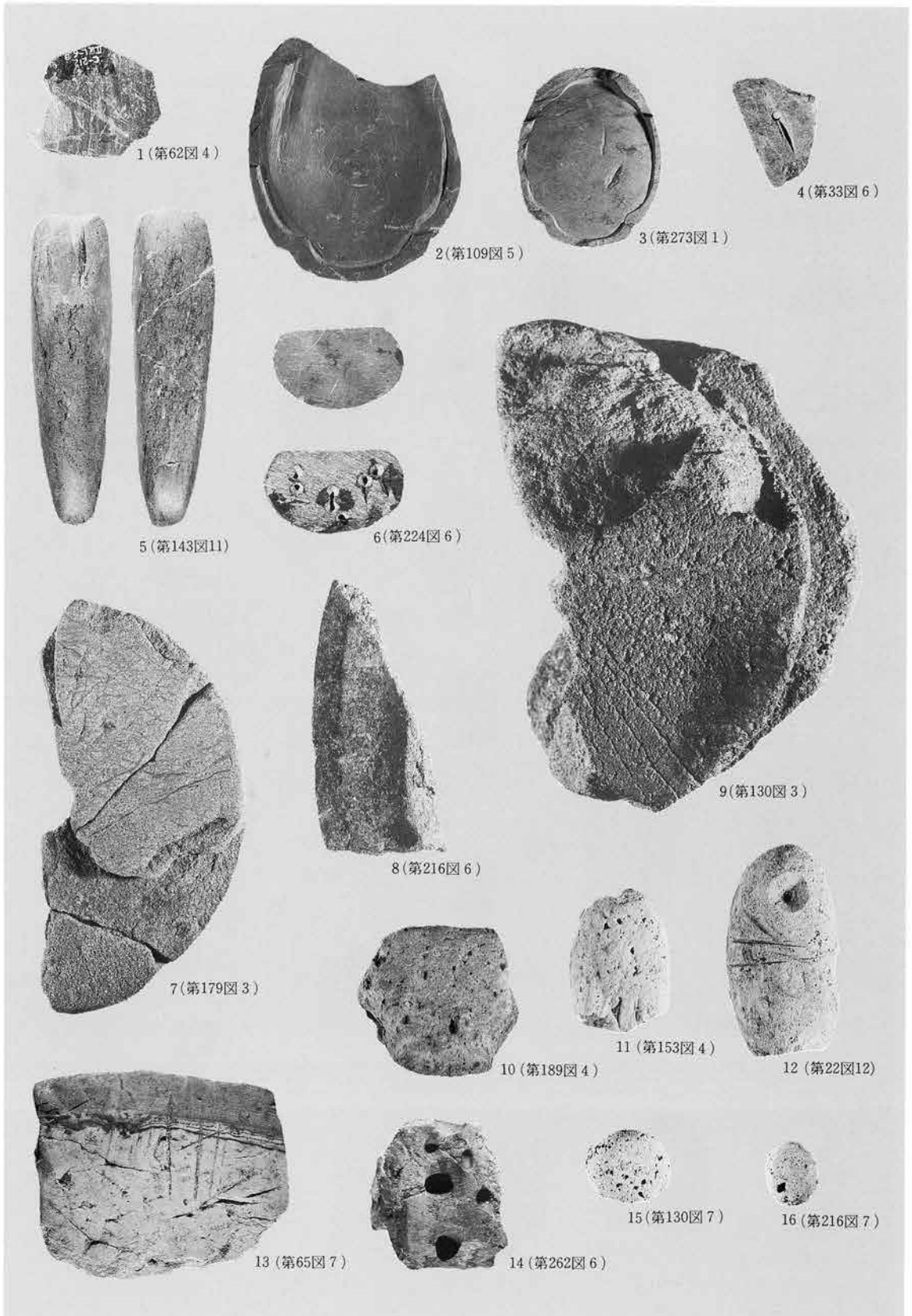


写真96　石器・石製品（２）ー石斧・石硯・茶臼など

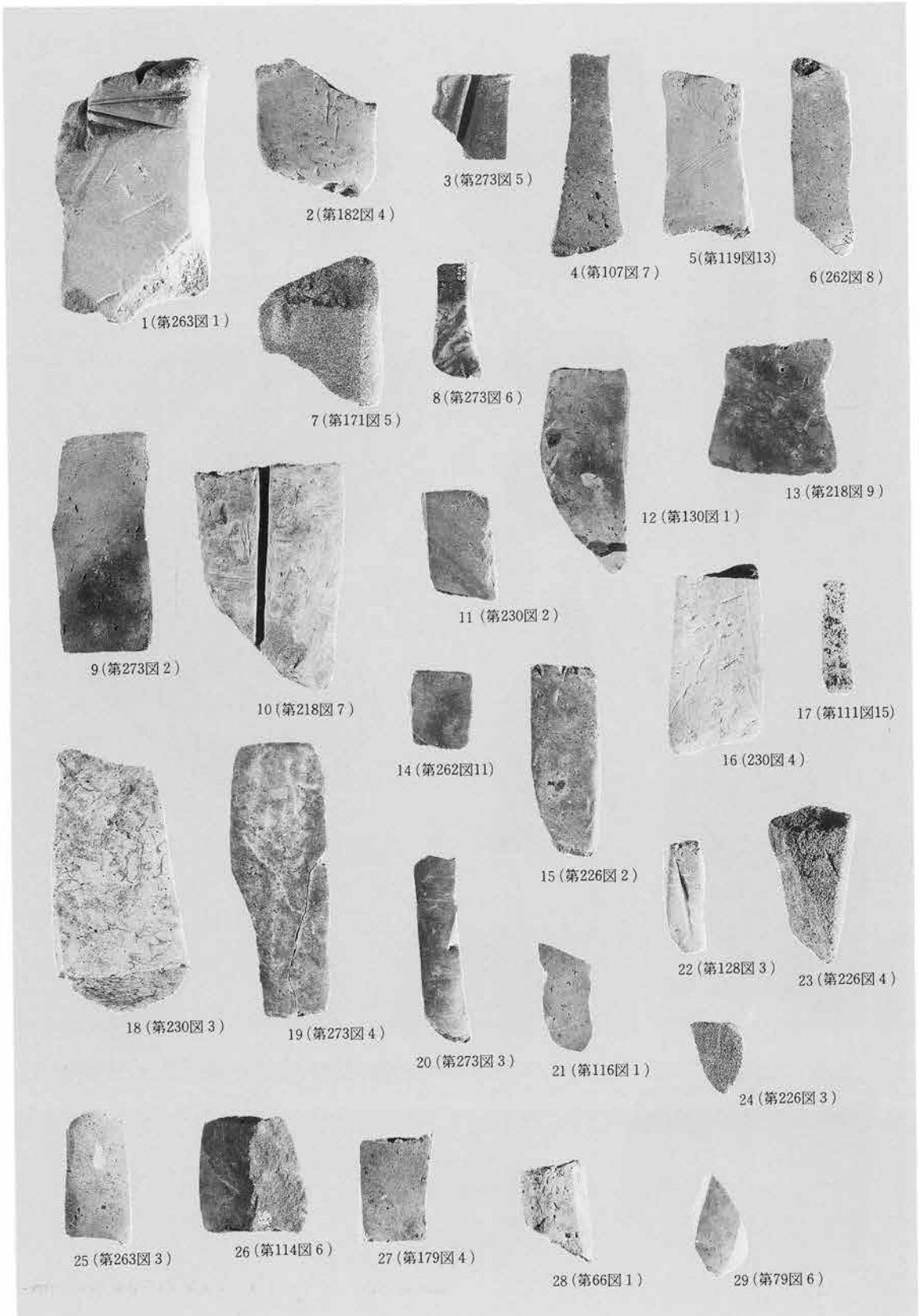


写真97　石器・石製品（３）一砥石

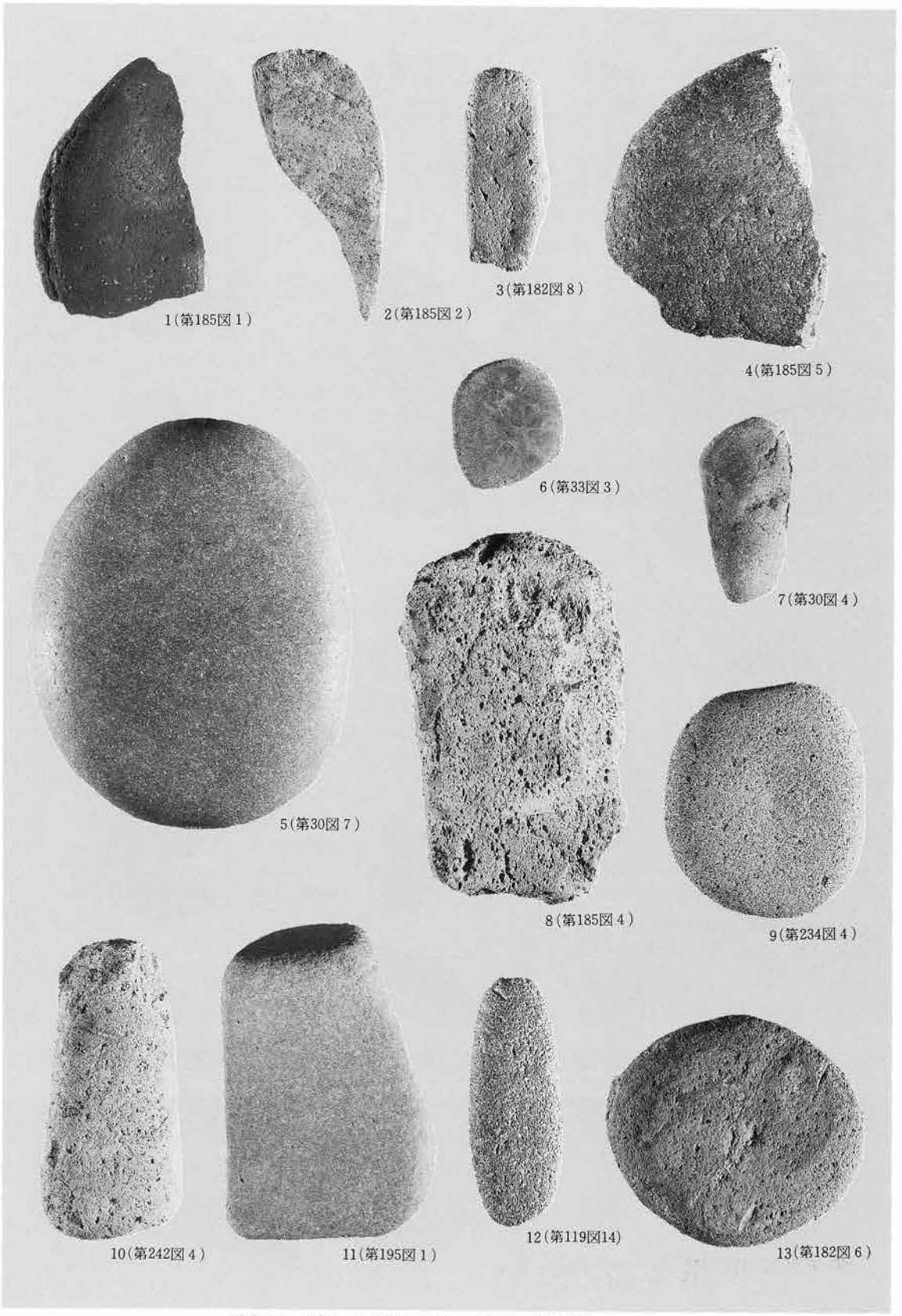


写真98　石器・石製品（4）一磨面・敲打痕をもつ礫

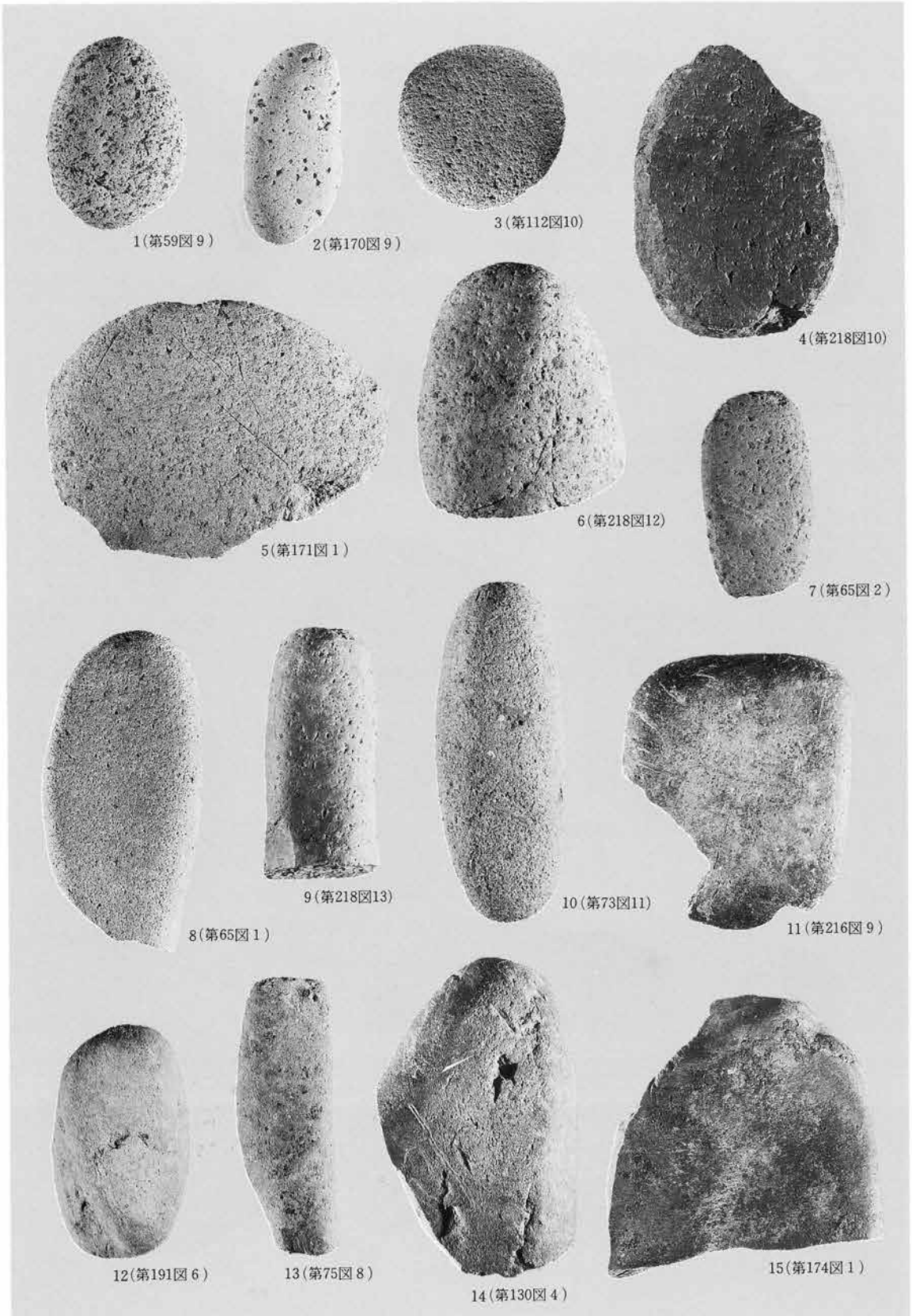


写真99　石器・石製品（5）一磨面・敲打痕をもつ礫

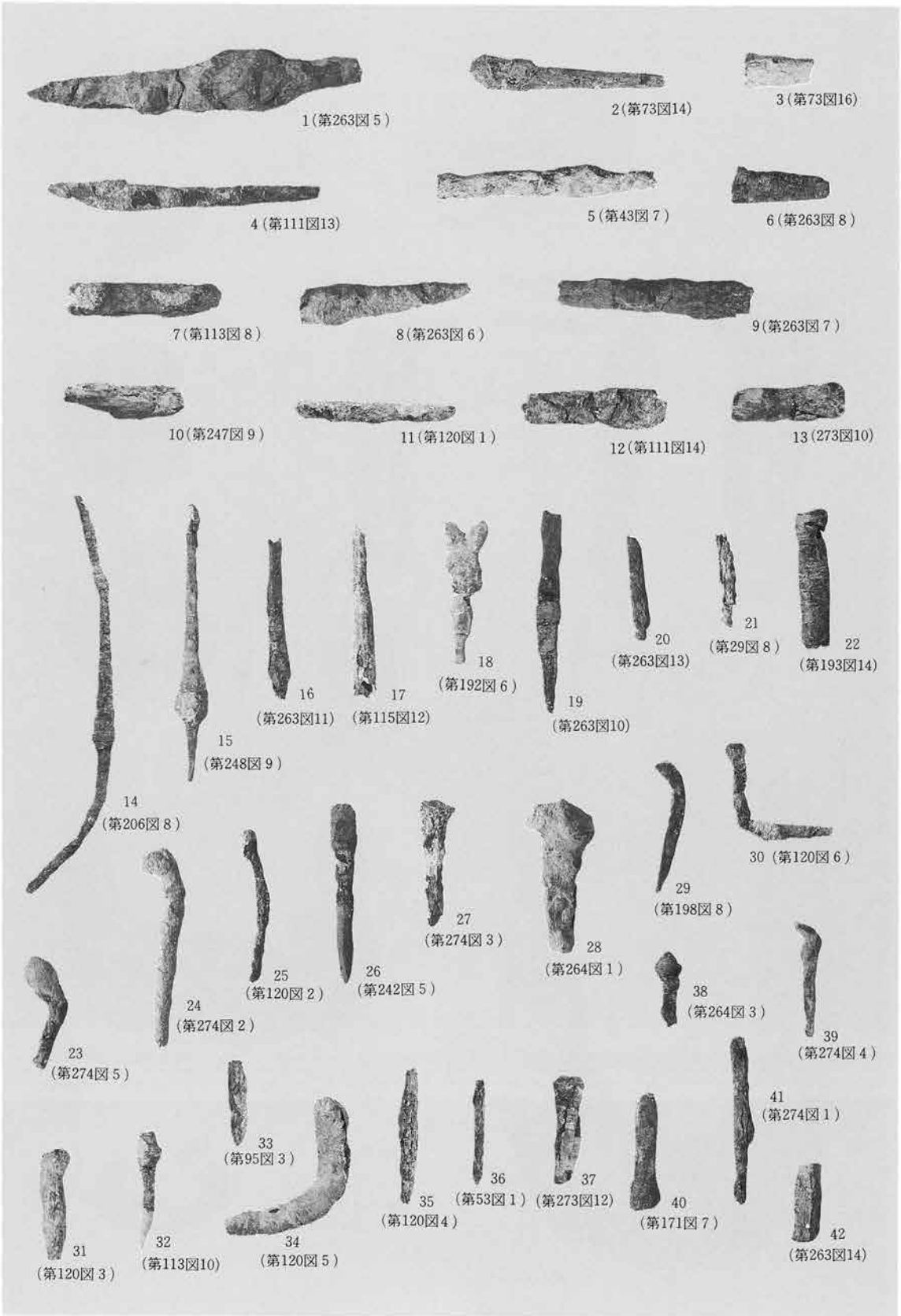


写真100　鉄製品（1）一刀子・鉄鏃・釘

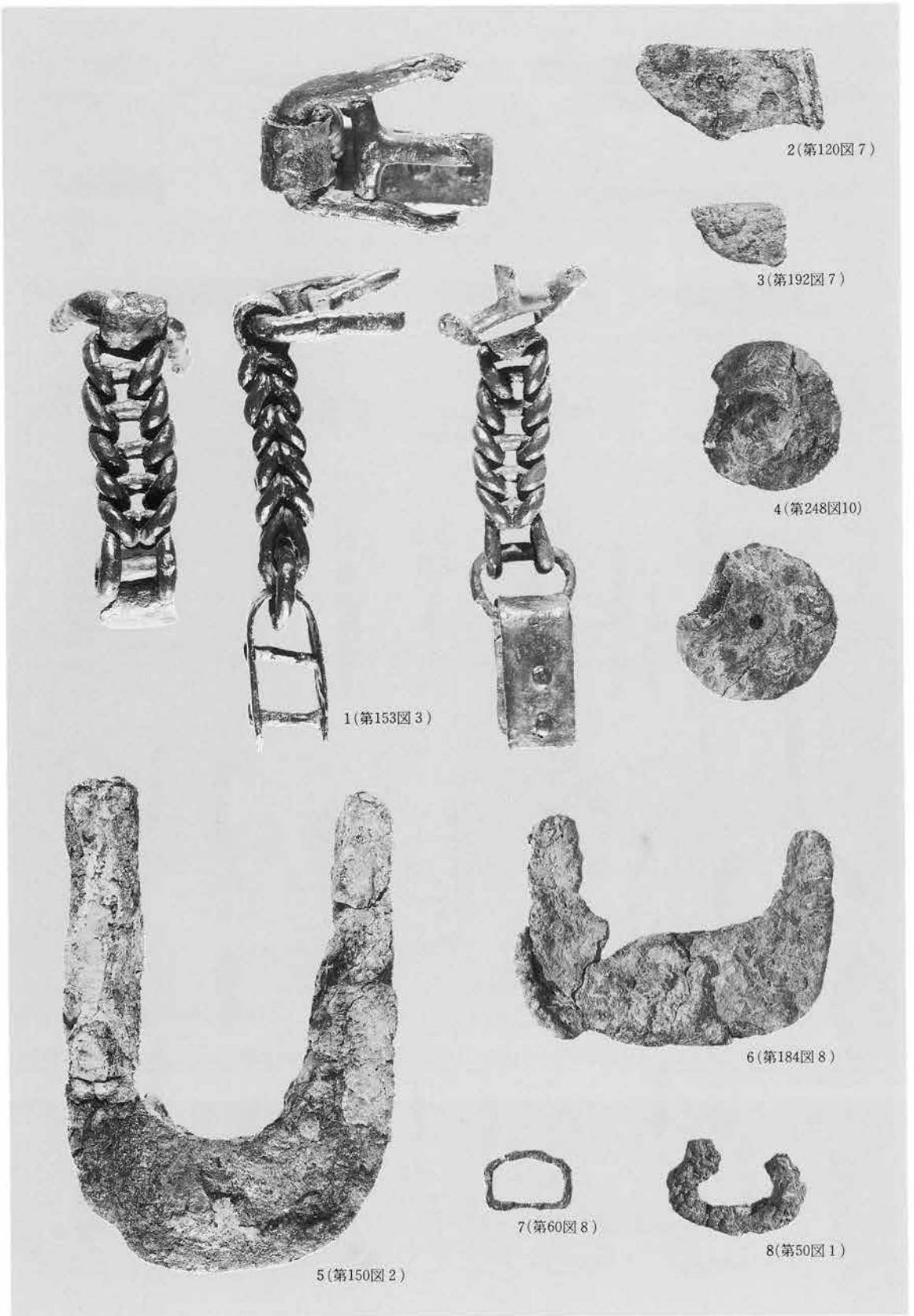


写真101　鉄製品（2）―鐙・鋤鍬先・鎌・金具など

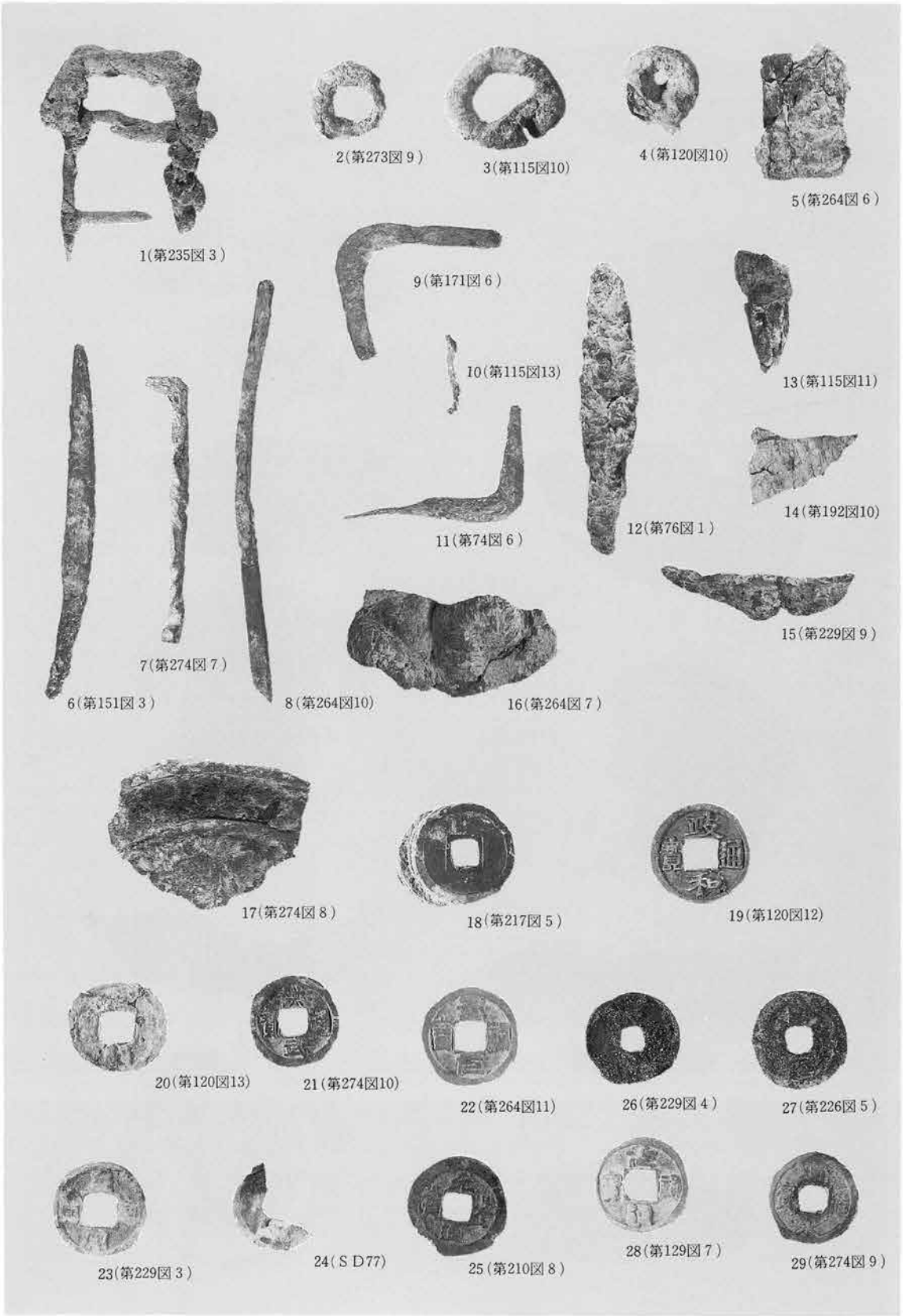


写真102　鉄製品（3）一金具・不明鉄製品・銅鏡・古銭など

1(第171図８)

3(第131図７)

2(第131図１)

4(第131図８)

6(第131図３)

5(第131図５)

7(第132図１)

8(第131図２)

9(第132図７)

写真103　木製品（１）一漆器

1（第131図４）

2（第132図６）

3（第131図６）

4（第132図２）

5（第132図５）

6（第219図３）

7（第219図１）

写真104　木製品（２）一漆器

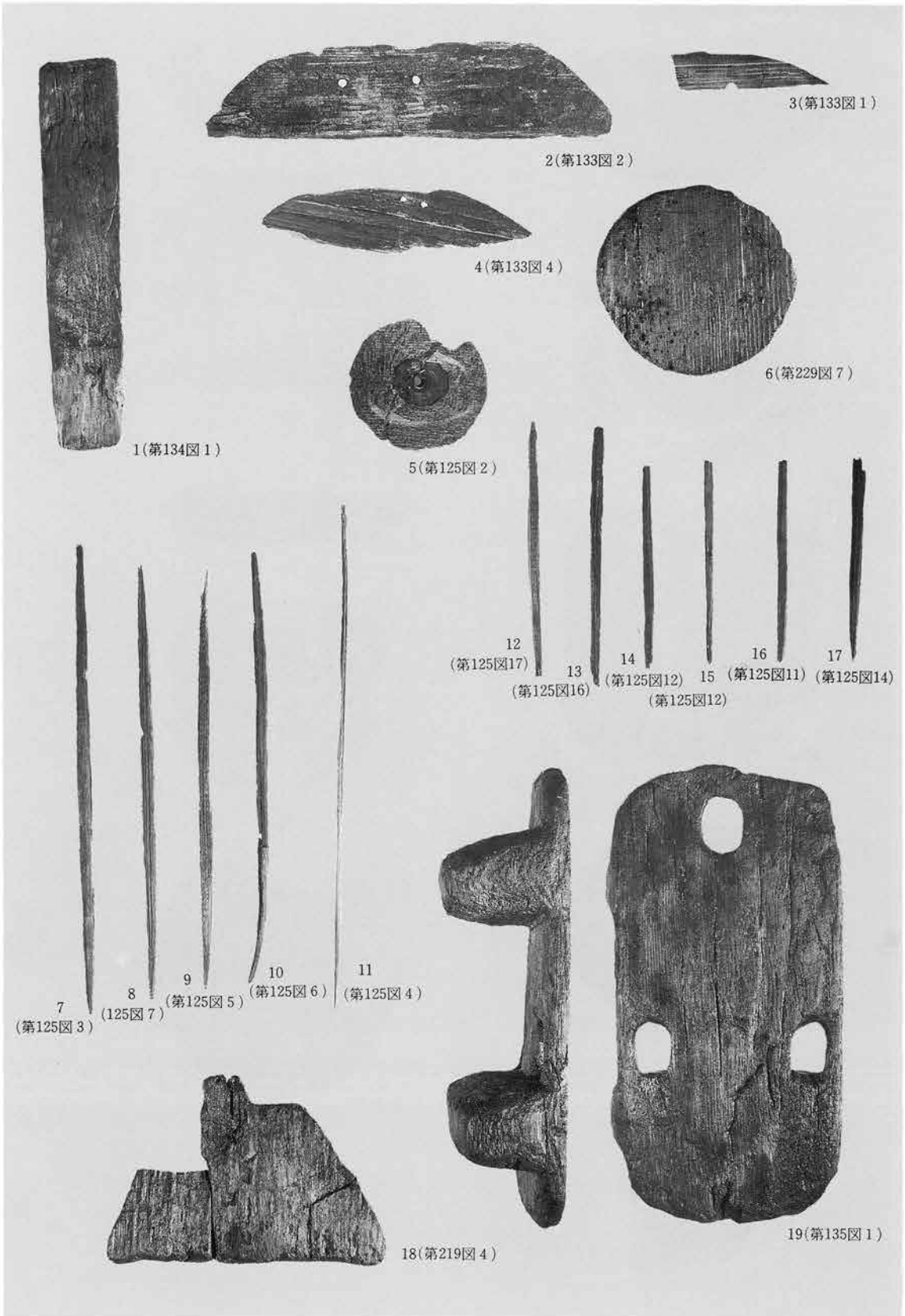
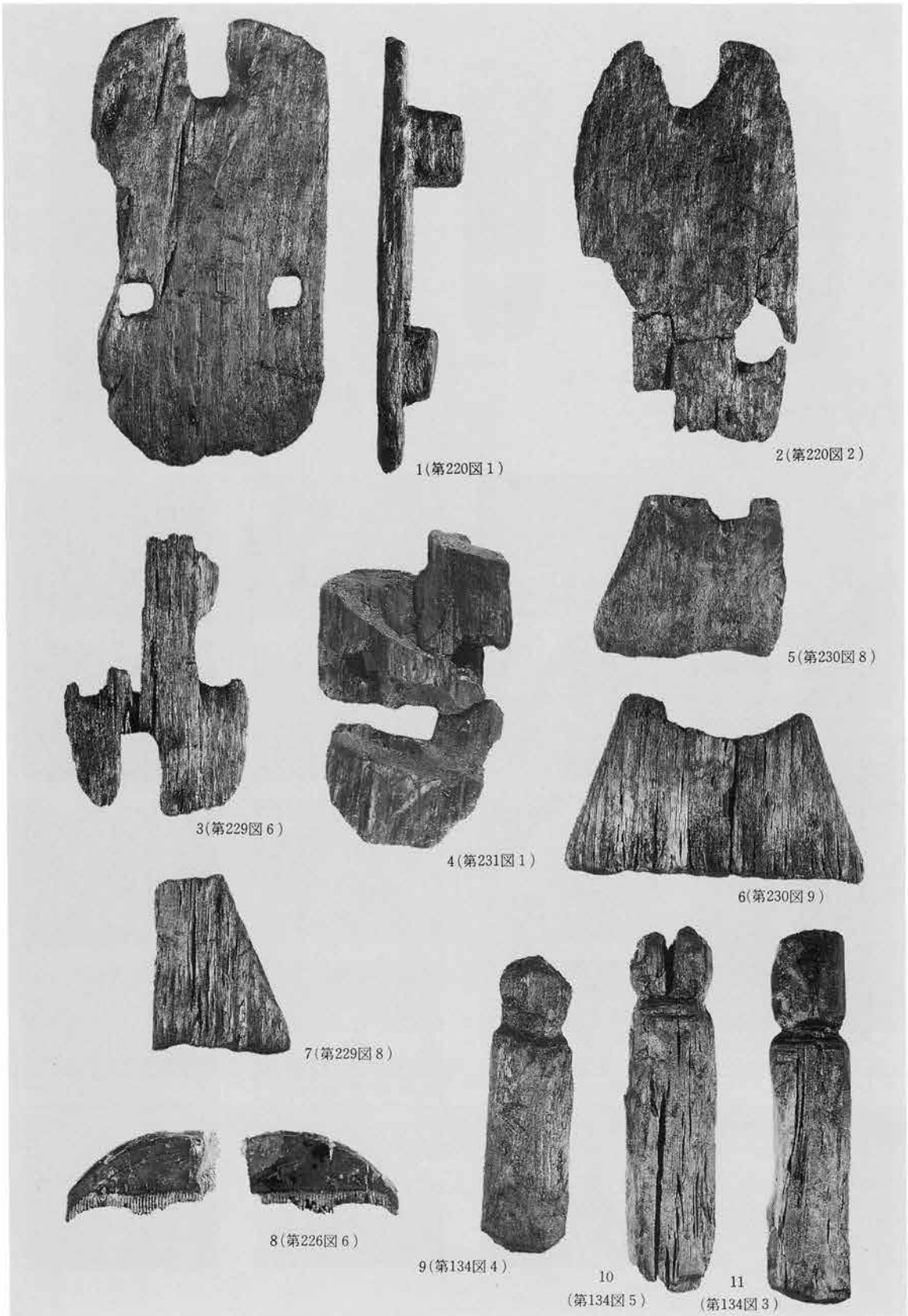


写真105　木製品（3）一曲物・箸・下駄



1(第220図1)
2(第220図2)
3(第229図6)
4(第231図1)
5(第230図8)
6(第230図9)
7(第229図8)
8(第226図6)
9(第134図4)
10
(第134図5)
11
(第134図3)

写真106　木製品（4）一下駄・櫛・木錘

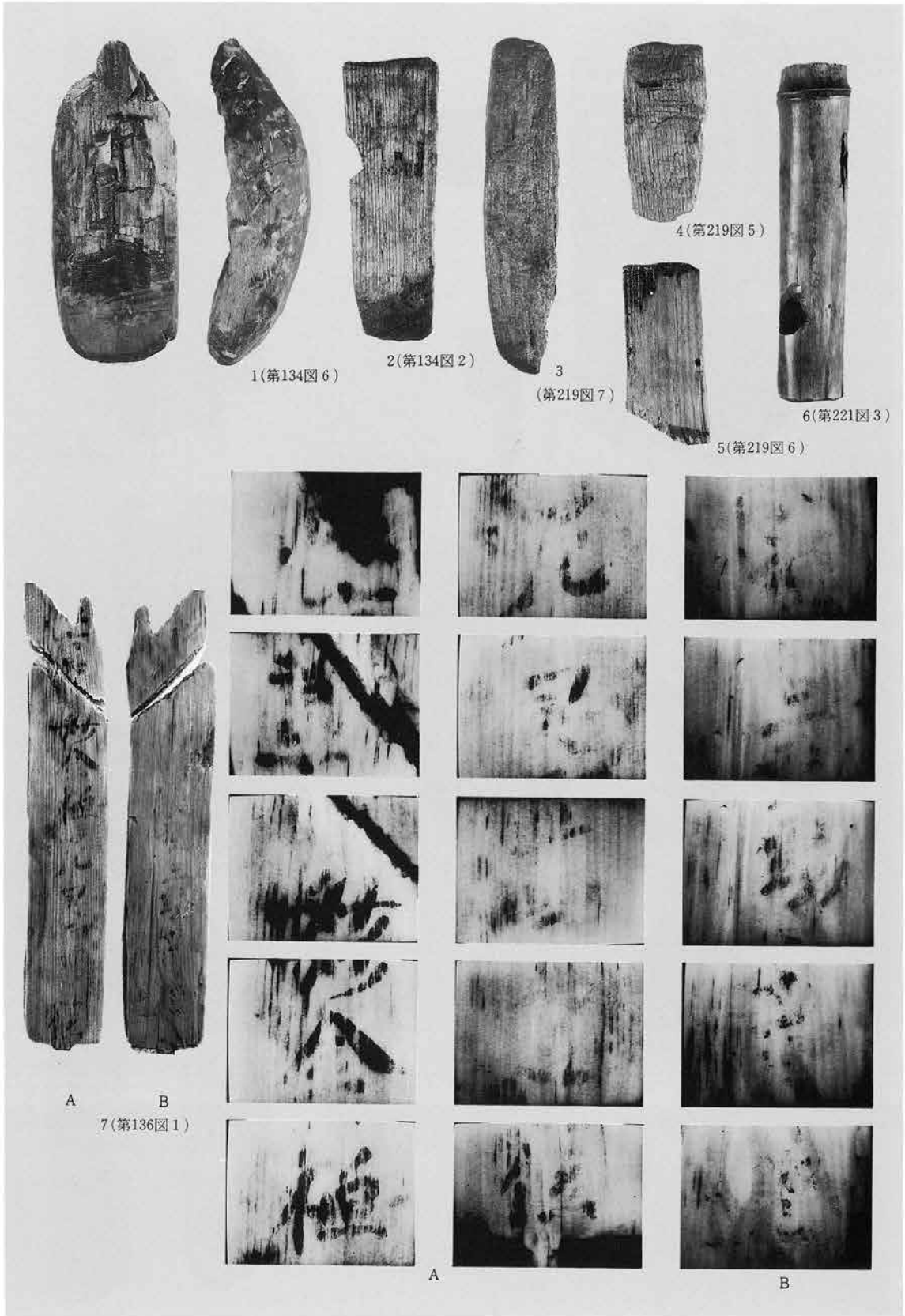
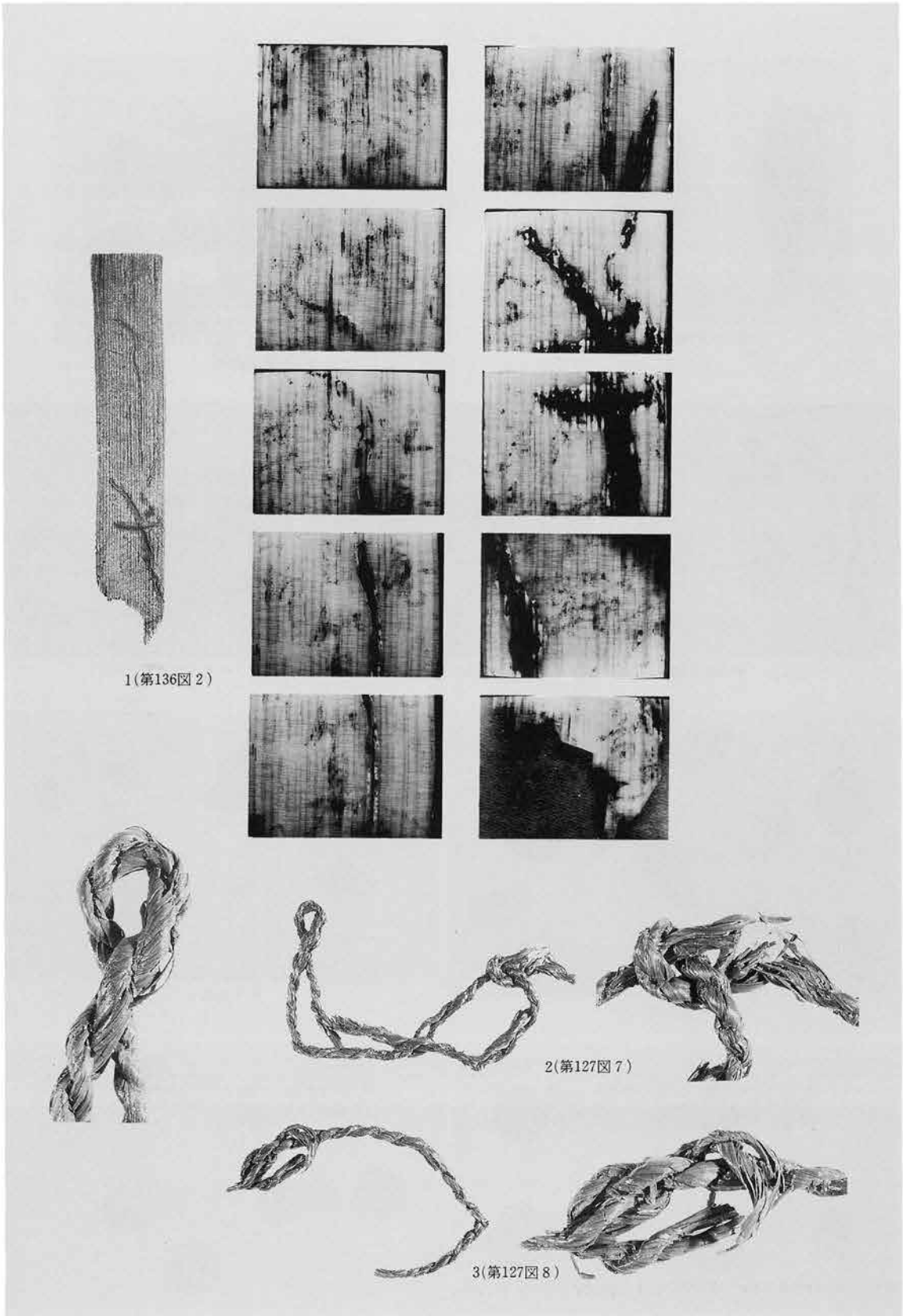


写真107　木製品（5）一舟形・木簡など



1(第136図２)

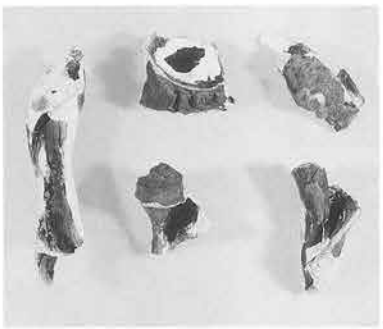
2(第127図７)

3(第127図８)

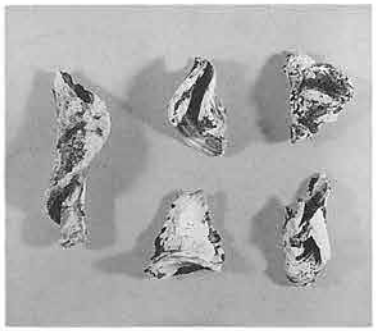
写真108　木製品（６）一木簡・縄

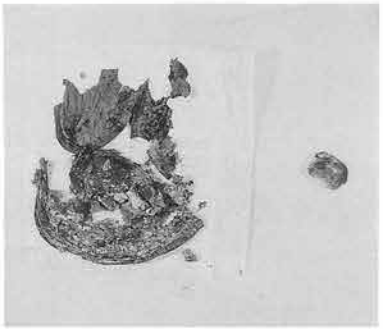
1(第229図10)

2(鍛冶遺構)



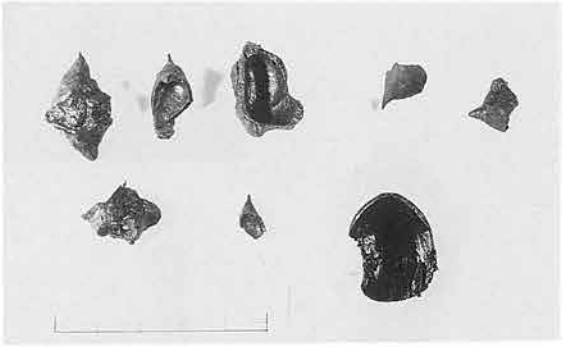
3(SE7堆2、SD78堆4・5、4堀堆3)





4(SE8堆2・3)

5(SE8堆2)



6(2堀堆3)

7(4堀堆1)

8(4堀堆2)

写真109　鹿角製品・鉄滓・貝・植物遺体

文化財課職員録

課長　白鳥　良一

〔管理係〕

係長　菅原　澄雄
主任　村上　道子
主事　福井　健司
主事　庄司　厚
主事　齋藤　英治
主事　佐藤　寿江

〔調査第一係〕

係長　田中　則和
主任　木村　浩二
教諭　佐藤　好一
主任　吉岡　恭平
主事　金森　安孝
教諭　小川　淳一
主事　工藤　哲司
主事　主浜　光朗
主事　斎野　裕彦
主事　長島　榮一
教諭　稲葉　俊一
教諭　菅原　裕樹
主事　渡部　紀
教諭　川名　秀一
教諭　熊谷　裕行

〔調査第二係〕

係長　結城　慎一
主任　篠原　信彦
教諭　太田　昭夫
主任　佐藤　洋
主事　佐藤　甲二
主事　渡部　弘美
主事　工藤信一郎
主事　荒井　格
主事　中富　洋
主事　平間　亮輔
教諭　五十嵐康洋
教諭　神成　浩志
教諭　赤澤　靖章
教諭　竹田　幸司
主事　佐藤　淳

仙台市文化財調査報告書第182集

中田南遺跡

1994（平成6）年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3－7－1
仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱東北プリント
仙台市青葉区立町24-24　TEL 263-1166

中田南遺跡遺構配置
全　体　図（1：400）

中田南遺跡遺構配置
全体図（1：400）

N0S－E100 { X＝－201314.672
Y＝＋5158.933

N0S－W80 { X＝－201266.831
Y＝＋4985.407

0 10 20m